長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　134

長野市

ISHIKAWAJORI　　HASETSURUSAKI

石川条里遺跡　長谷鶴前遺跡群

一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４

―長野市内１―

２０２４．３

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター

石川条里遺跡　遠景（西南から）　（2016年7月）

長谷鶴前遺跡群　遠景（南から）　（2017年9月）

石川条里遺跡　3b・4a区弥生時代の水田跡（東から）

石川条里遺跡　7b・8区弥生時代の畦畔　芯材出土状況（東上方から）

石川条里遺跡　11c区平安時代の水田跡（北西が上）

長谷鶴前遺跡群　2区平安時代の水田跡（南から）

長谷鶴前遺跡群　SC01道路跡（北から）

長谷鶴前遺跡群　ST01長谷窯工房跡（西から）

石川条里遺跡　鍬形兜前立（SD191出土）

長谷鶴前遺跡群　上：三方の側板　下：三方仮復元（SD40出土）

長谷鶴前遺跡群　陶器（素焼き）

長谷鶴前遺跡群　陶器（本焼き）

例　言

1　本書は、長野県長野市に所在する、石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）改築工事に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。受委託契約については第 1 章を参照願いたい。なお、同一契約内で実施した塩崎遺跡群（2013～2017 年度調査）の発掘調査報告書は、別途刊行予定である。

3　遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』33～36・38 で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

4　本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000）・国土地理院電子地形図 25000『稲荷山』『信濃松代』『信濃中条』『長野』、長野市都市計画図（1：2,500）『91-３』『01-１』をもとに作成した。

5　本書で取り扱っている国土座標は国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準としている。座標値は日本測地系を用いている。

6　発掘調査・整理作業にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託または御指導・御協力を得た（敬称略）。

○業務委託

花粉分析　：株式会社古環境研究所（石川条里遺跡　2018・2019 年度）
　株式会社古環境研究所（長谷鶴前遺跡群　2017・2018 年度）
珪藻分析　：株式会社古環境研究所（石川条里遺跡　2018・2019 年度）
プラント・オパール分析：株式会社古環境研究所（石川条里遺跡　2015～2019 年度）
　株式会社古環境研究所（長谷鶴前遺跡群　2018 年度）
放射性炭素年代測定：株式会社パレオ・ラボ（石川条里遺跡　2015 年度）
　株式会社古環境研究所（石川条里遺跡　2016・2018・2019 年度）
　株式会社加速器分析研究所（長谷鶴前遺跡群　2017 年度）
　株式会社古環境研究所（長谷鶴前遺跡群　2018 年度）
樹種同定　：株式会社古環境研究所（石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群　2020 年度）
　株式会社パレオ・ラボ（石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群　2022 年度）
土壌分析　：信州大学理学部特任教授　保柳康一（石川条里遺跡　2019・2021 年度）
　信州大学理学部特任教授　保柳康一（長谷鶴前遺跡群　2018 年度）
元素マッピング分析：株式会社パレオ・ラボ（石川条里遺跡　2022 年度）
赤外分光分析　：株式会社パレオ・ラボ（石川条里遺跡　2023 年度）
遺物実測・トレース：株式会社アルカ（石川条里遺跡　2021 年度）
Ｘ線透過撮影　：長野県立歴史館（石川条里遺跡　2021 年度）
応急的保存処理　：株式会社文化財ユニオン（長谷鶴前遺跡群　2023 年度）

遺物写真撮影　　：信毎書籍印刷株式会社（長谷鶴前遺跡群　2019・2022 年度）
信毎書籍印刷株式会社（石川条里遺跡　2022 年）

○調査指導

遺跡調査指導　　：信州大学理学部特任教授　保柳康一（2017 年度）
元愛知県陶磁美術館副館長　仲野泰裕（長谷鶴前遺跡群　2017 年度）

遺物調査指導　　：元愛知県陶磁美術館副館長　仲野泰裕（長谷鶴前遺跡群　2018・2019 年度）

人骨・出土骨鑑定　：京都大学名誉教授　茂原信生
獨協医科大学医学部解剖学講座献体事務室事務長　櫻井秀雄
総合研究大学院大学准教授　本郷一美
（長谷鶴前遺跡群　2018、石川条里遺跡　2020～2023 年度）
日本大学松戸歯学部准教授　五十嵐由里子（石川条里遺跡　2020～2023 年度）

7　発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の機関・諸氏に御指導・御協力いただいた。お名前を記して感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。

〔機関〕愛知県陶磁美術館　一里塚本業窯　瀬戸蔵ミュージアム　長野県立歴史館　長野市埋蔵文化財センター　長野市立博物館　松代陶苑

〔個人〕飯島哲也　市澤英利　岩井　理　岩渕　寛　小林正春　風間栄一　笹澤　浩　白沢勝彦

8　発掘作業・整理作業の担当者等は第１章第２節４に記載した。

9　本書の執筆担当分担は、以下のとおりである。

執筆分担

第１章　西香子

第２章　市川隆之

第３章　第１節　市川、第２節　市川・風間真起子、第３節　風間、第４節　市川

第４章　第１節　市川、第２節　市川・風間、第３節　柴田洋孝・風間、第４節　市川・馬場伸一郎

第５章　第１節　風間

第６章　第１節　市川、第２節　柴田・市川、第３節　市川

校閲　調査部長　川崎保

なお、第５章第２節は五十嵐由里子先生・茂原信生先生・櫻井秀雄先生・本郷一美先生より、第３節は保柳康一先生より玉稿を賜った。

10　本書に添付した DVD には、以下の内容を収録した。

報告書 PDF、遺物一覧表、自然科学分析報告書他

凡　例

1　遺構番号は、遺構種ごとに付番してある。発掘調査で欠番としたもの、整理作業において遺構と認定しなかったために欠番としたものがある。

2　遺構番号は、本報告書の本文・図版・写真すべてに共通する。

3　本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。

（1）遺構実測図

掘立柱建物跡・柵列（1：80、1：100)、水田跡（1：400、1：500、1：1000)、
畦畔（1：40、1：60、1：100)、溝跡（1：40、1：150、1：200、1：250、1：400)、
墓跡（1：20)、井戸跡（1：60)

（2）遺物実測図

土器・陶器・磁器・瓦（1：4)、土製品（1：2、1：3、1：4)、ガラス製品（1：3）
石器・石製品（2：3、1：3、1：6)、金属製品（2：3、1：2、1：3）
木製品（1：4、1：6、1：8、1：12)、窯道具（1：3、1：4）

（3）遺物写真

原則として遺物実測図と概ね共通であるが、任意縮尺にしているものがある。

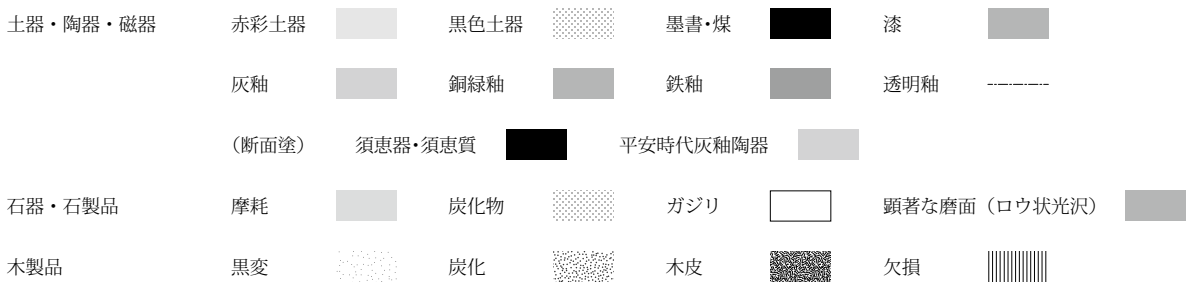
4　遺物の器種名は、過去の長野県埋蔵文化財センター報告書などを参考にして一般的と思われる名称を用いた。

5　基本層序および遺構埋土、土器の色調、粒径の区分等は「新版　標準土色帖」に準拠した。

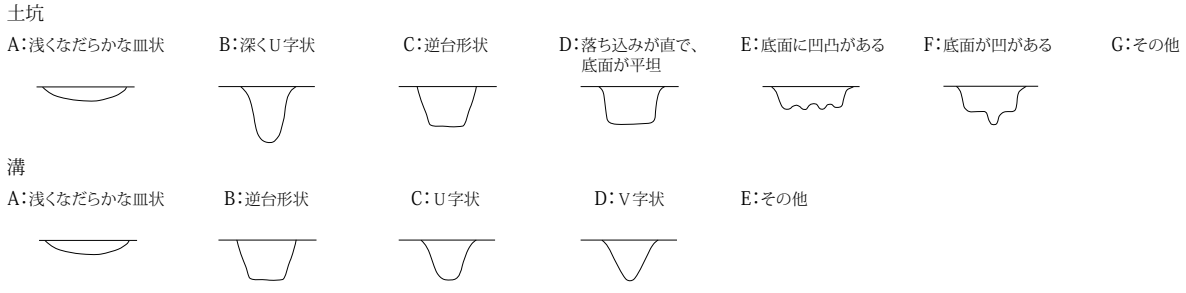
6　実測図中のスクリーントーン等の凡例は、以下のとおりである。

遺構図

遺物図



土坑・溝断面分類記号



7　本報告書の遺構分布図で、SK は遺構番号のみの表記とした。その他の遺構については、遺構記号（SC・SD 等）も表記した。

8　本報告書の本文・表で、遺構重複について、（新）は記述遺構より新しい遺構、（旧）は記述遺構より古い遺構のことを示す。

9　本報告書の本文で、畦畔等の遺構から横たわった状態で出土した木材を「横木」と表記した。

10　本報告書の本文で、放射性炭素年代測定の表記は、原則として ^{14}C 年代（年 BP）を使用した。

目　　次

巻頭写真
例　言
凡　例
目　次
図版目次
写真図版目次

第１章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至る経過
　　１　事業の概要…… 1
　　２　これまでの調査（埋蔵文化財発掘調査の状況と履歴）…… 1
　　３　保護措置の調整…… 1
　　４　行政手続きの経過…… 1
　第２節　発掘調査の経過
　　１　発掘作業の経過…… 7
　　２　整理等作業の経過…… 8
　　３　普及啓発活動…… 9
　　４　発掘作業と整理作業の体制……11
　　５　作業日誌抄録……13

第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境……19
　第２節　歴史的環境……21

第３章　石川条里遺跡
　第１節　遺跡の概要……29
　第２節　調査の概要
　　１　調査の方法……32
　　２　基本層序……39
　第３節　遺構
　　１　弥生時代の遺構……50
　　（１）概要　（２）水田跡　（３）溝跡　（４）遺物集中
　　２　古墳時代の遺構……59
　　（１）概要　（２）水田跡　（３）土坑　（４）溝跡　（５）遺物集中
　　３　古代の遺構……62

（1）概要　（2）水田跡　（3）土坑　（4）溝跡
4　中近世の遺構……71
（1）概要　（2）掘立柱建物跡　（3）柵列跡　（4）井戸跡・土坑　（5）墓跡
（6）溝跡　（7）天地返し跡

第4節　遺物
1　土器・陶器・磁器……78
（1）弥生時代の土器　（2）古墳時代の土器　（3）古代の土器
（4）中近世の土器・陶器・磁器
2　土製品……98
3　石器・石製品……99
4　金属製品……102
5　木製品……104

第4章　長谷鶴前遺跡群
第1節　遺跡の概要……111
第2節　調査の概要
1　調査の方法……112
2　基本層序……115
第3節　遺構
1　中世（第4調査面）の遺構……121
（1）概要　（2）水田跡　（3）居館堀跡　（4）道路跡　（5）溝跡　（6）集石遺構
2　中世～近世（第3調査面）の遺構……123
（1）概要　（2）居館堀跡　（3）道路跡・溝跡　（4）掘立柱建物跡
（5）井戸跡・土坑　（6）集石遺構　（7）畝状遺構
3　近世末～近代（第1調査面・第2調査面）の遺構……128
（1）概要　（2）長谷窯工房跡　（3）土坑　（4）暗渠・溝跡
第4節　遺物
1　中世の遺物……131
（1）土器・陶器　（2）土製品　（3）石製品　（4）木製品・漆製品
2　近世・近代の遺物……135
（1）長谷窯関連遺物　（2）その他遺物

第5章　自然科学分析
第1節　分析の目的……143
第2節　出土骨
1　石川条里遺跡出土人骨……145
2　石川条里遺跡出土動物骨……153
第3節　石川条里遺跡の古環境解析……163

第６章　総括
　第１節　石川条里遺跡
　　１　弥生時代～平安時代の水田面・遺構出土土器の年代…… 173
　　２　弥生時代中期後半水田跡…… 181
　　３　平安時代条里型水田跡…… 186
　　４　１区の中世前期居住遺構の変遷…… 194
　　５　近世遺構の変遷…… 198
　第２節　長谷鶴前遺跡群
　　１　居館跡の変遷…… 203
　　２　長谷窯…… 208
　第３節　石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群の変遷…… 215

引用・参考文献…… 221
付表…… 225

遺構図版・遺物図版
写真図版
報告書抄録
添付 DVD

挿図目次

第１図　坂城更埴バイパス位置図…… 4
第２図　調査区略図……19
第３図　遺跡位置図……20
第４図　周辺遺跡分布図……24
第５図　遺跡範囲・調査範囲図……30
第６図　調査範囲・グリッド設定図、グリッドの呼称……33
第７図　石川条里遺跡　年度別調査範囲図……34
第８図　石川条里遺跡　基本層序……44
第９図　基本層序（詳細図１）……45
第 10 図 基本層序（詳細図２）……46
第 11 図 基本層序（詳細図３）……47
第 12 図 基本層序（詳細図４）……48
第 13 図 基本層序（詳細図５）……49
第 14 図 飛鳥～奈良時代土器の焼物種別組成…85
第 15 図 飛鳥～奈良時代土器の器種別組成……85
第 16 図 平安時代前期土器の焼物種別組成……88
第 17 図 平安時代前期土器の器種別組成……88
第 18 図 中世前期擂鉢の産地別組成……91
第 19 図 近世擂鉢の産地別組成……96
第 20 図 近世焼物の器種別組成……96
第 21 図 石川条里遺跡出土の田下駄の分類…106
第 22 図 田下駄の法量……106
第 23 図 建築部材・不明木製品の法量……109
第 24 図 長谷鶴前遺跡群　年度別調査範囲図……113
第 25 図 長谷鶴前遺跡群　基本層序……120
第 26 図 三方模式図……134
第 27 図 分析試料採取位置図……143
第 28 図 石川条里遺跡出土の人骨（歯）……152
第 29 図 石川条里遺跡出土の動物骨１……159
第 30 図 石川条里遺跡出土の動物骨２……160
第 31 図 石川条里遺跡出土の動物骨３……161
第 32 図 石川条里遺跡出土の動物骨４……162
第 33 図 試料採取……163
第 34 図 分析装置１……164
第 35 図 分析装置２……165
第 36 図 石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群における試料採取地点……166
第 37 図 石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群周辺の地質図……166
第 38 図 長谷鶴前遺跡群地点⑦深掘りトレンチにおける土層累重と分析結果……168
第 39 図 地点⑦深掘りトレンチの試料から産出した珪藻遺骸……169
第 40 図 西暦 888 年仁和洪水砂層の分布……170
第 41 図 古墳時代土器の器種別組成（石川条里遺跡・榎田遺跡）……175
第 42 図 遺跡の条里地割図……187
第 43 図 遺跡周辺の条里地割図……191
第 44 図 １区居住遺構の変遷（Ⅰ段階）……195
第 45 図 １区居住遺構の変遷（Ⅱ段階）……195
第 46 図 須恵質擂鉢とカワラケの形態……196
第 47 図 中世前期の掘立柱建物跡規模（松本市内）……197
第 48 図 中世後期の掘立柱建物跡規模（松本市内）……197
第 49 図 中世の大型掘立柱建物跡……197
第 50 図 近世用水模式図（１区、２区）……199
第 51 図 近世用水模式図（3a 区、3b・4a 区）……200
第 52 図 近世用水模式図（５区、7a 区）……201
第 53 図 居館跡の変遷図……205
第 54 図 内耳鍋の口縁形態……207

挿表目次

第１表　石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群　受委託契約の経過（含塩崎遺跡群）…… 3
第２表　石川条里遺跡　調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）…… 5
第３表　長谷鶴前遺跡群　調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）…… 5
第４表　石川条里遺跡　埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）…… 6
第５表　長谷鶴前遺跡群　埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）…… 6
第６表　周辺遺跡一覧……25
第７表　石川条里遺跡の時期別遺構検出数……29
第８表　石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群の発掘調査履歴……31
第９表　石川条里遺跡の基本土層遺構検出面と各地区調査面との対応……35
第10表 弥生時代遺構の地区別検出数……50
第11表 古墳時代遺構の地区別検出数……59
第12表 石川条里遺跡　古代遺構の地区別検出数……62
第13表 長谷鶴前遺跡群　古代遺構の地区別検出数……62
第14表 中近世遺構の地区別検出数……71
第15表 弥生時代中期後半土器の地区別出土破片数……78
第16表 弥生時代後期土器の地区別出土破片数……80
第17表 古墳時代土器の地区別出土破片数……82
第18表 古代土器の地区別出土破片数……85
第19表 飛鳥～奈良時代土器の地区別出土破片数……85
第20表 平安時代前期土器の地区別出土破片数……88
第21表 中世焼物の地区別出土破片数１……92
第22表 中世焼物の地区別出土破片数２……92
第23表 近世焼物の地区別出土破片数……96
第24表 長谷鶴前遺跡群の時期別遺構検出数……111
第25表 道路跡（SC01等）に関連する溝跡の地区別変遷……124
第26表 その他自然科学分析一覧……144
第27表 石川条里遺跡の出土人骨一覧……145
第28表 SM001歯の計測値……146
第29表 SM002歯の計測値……147
第30表 SM003歯の計測値（乳歯）……148
第31表 SM003歯の計測値（永久歯）……148
第32表 SM004歯の計測値……149
第33表 石川条里遺跡から出土したイヌ……156
第34表 石川条里遺跡から出土したウマ……156
第35表 石川条里遺跡から出土したウシ……157
第36表 石川条里遺跡から出土したイノシシ……157
第37表 石川条里遺跡から出土した不明破片……157
第38表 石川条里遺跡から出土したイヌの計測値……157
第39表 石川条里遺跡から出土したウマの計測値……158
第40表 地点⑦深掘りトレンチの試料から産出した珪藻遺骸……168
第41表 古墳時代土器の器種別破片数……175
第42表 ２区南部溝跡の重複関係……204

図版目次

【石川条里遺跡】
図版１　弥生時代の遺構配置図
図版２　弥生時代の遺構分布図１
図版３　弥生時代の遺構分布図２
図版４　弥生時代の遺構分布図３
図版５　3b・4a 区第２水田
図版６　3b・4a 区第２水田等高線図
図版７　7a 区第３水田、7b・８区水田跡
図版８　7a 区第３水田、7b・８区水田跡等高線図
図版９　7b・８区 SC061　芯材出土状況
図版 10　7b・８区 SC063　芯材出土状況
図版 11　９区 SC115、10 区 SC105、11c 区 SC101 芯材出土状況
図版 12　11a 区 SC089　芯材出土状況
図版 13　古墳時代の遺構配置図
図版 14　古墳時代の遺構分布図１
図版 15　古墳時代の遺構分布図２
図版 16　古墳時代の遺構分布図３
図版 17　3b・4a 区古墳時代の水田跡
図版 18　９区 SC106・107　杭列
図版 19　９区 SC106・107　杭列・芯材出土状況
図版 20　SX002　遺物出土状況
図版 21　古代の遺構配置図
図版 22　古代の遺構分布図１
図版 23　古代の遺構分布図２
図版 24　古代の遺構分布図３
図版 25　古代の遺構分布図４
図版 26　古代の遺構分布図５
図版 27　10 区・11 区第１水田等高線図
図版 28　12 区第１水田・長谷鶴前遺跡群第１水田等高線図
図版 29　11c 区 SC094・096・097・098、12a 区 SC081　洪水復旧痕跡
図版 30　11b 区 SC058　芯材出土状況
図版 31　11c 区 SC092　芯材出土状況
図版 32　11c 区 SC093・095　芯材出土状況
図版 33　12a 区 SC081・086　芯材出土状況
図版 34　長谷鶴前遺跡群１区 SC04・SC11　芯材出土状況
図版 35　古代の土坑・溝跡１
図版 36　古代の溝跡２
図版 37　中近世の遺構配置図
図版 38　中近世の遺構分布図１
図版 39　中近世の遺構分布図２
図版 40　中近世の遺構分布図３
図版 41　中近世の遺構分布図４
図版 42　中近世の遺構分布図５
図版 43　中近世の遺構分布図６
図版 44　中近世の遺構分布図７
図版 45　中近世の遺構分布図８
図版 46　中近世の遺構分布図９
図版 47　中近世の遺構分布図 10
図版 48　１区中近世の遺構分布図１
図版 49　１区中近世の遺構分布図２
図版 50　１区中近世の遺構分布図３
図版 51　１区中近世の遺構分布図４
図版 52　ST001（１）　掘立柱建物跡
図版 53　ST001（２）　掘立柱建物跡
図版 54　ST002　掘立柱建物跡
図版 55　ST003・004　掘立柱建物跡
図版 56　ST005・006　掘立柱建物跡
図版 57　SA001・003・004　柵列
図版 58　SA002・005　柵列
図版 59　中近世の井戸跡１
図版 60　中近世の井戸跡２
図版 61　中近世の井戸跡３
図版 62　中近世の井戸跡４
図版 63　中近世の井戸跡５
図版 64　中近世の井戸跡６
図版 65　中近世の井戸跡７
図版 66　中近世の井戸跡８
図版 67　中近世の井戸跡９

図版 68　中近世の井戸跡 10
図版 69　中近世の井戸跡 11
図版 70　中近世の土坑１
図版 71　中近世の土坑２
図版 72　SM001・002　墓跡
図版 73　SM003・004・005　墓跡
図版 74　中近世の溝跡１
図版 75　中近世の溝跡２
図版 76　中近世の溝跡３
図版 77　中近世の溝跡４
図版 78　中近世の溝跡５
図版 79　中近世の溝跡６
図版 80　12c 区　SD191　居館堀跡
図版 81　12c 区　SD188　塩崎用水
図版 82　12c 区断面図（１）
図版 83　12c 区断面図（２）
図版 84　弥生時代の土器１
図版 85　弥生時代の土器２・古墳時代の土器１
図版 86　古墳時代の土器２
図版 87　古墳時代の土器３
図版 88　古代の土器１
図版 89　古代の土器２
図版 90　古代の土器３
図版 91　中近世の土器・陶器・磁器１
図版 92　中近世の土器・陶器・磁器２
図版 93　中近世の土器・陶器・磁器３
図版 94　土製品・玉類
図版 95　石器１
図版 96　石器２
図版 97　石器３
図版 98　石器４
図版 99　石器５・石製品
図版 100　金属製品１　鉄製品
図版 101　金属製品２　銅製品
図版 102　金属製品３　銅製品
図版 103　弥生時代の木製品１
図版 104　弥生時代の木製品２
図版 105　古墳時代の木製品１
図版 106　古墳時代の木製品２
図版 107　古墳時代の木製品３
図版 108　古墳時代の木製品４
図版 109　古墳時代の木製品５
図版 110　古墳時代の木製品６
図版 111　古墳時代の木製品７
図版 112　古墳時代の木製品８
図版 113　古墳時代の木製品９
図版 114　古墳時代の木製品 10
図版 115　平安時代の木製品１
図版 116　平安時代の木製品２
図版 117　平安時代の木製品３
図版 118　平安時代の木製品４
図版 119　平安時代の木製品５
図版 120　平安時代の木製品６
図版 121　平安時代の木製品７
図版 122　平安時代の木製品８
図版 123　平安時代の木製品９
図版 124　平安時代の木製品 10
図版 125　平安時代の木製品 11
図版 126　平安時代の木製品 12
図版 127　平安時代の木製品 13
図版 128　平安時代の木製品 14
図版 129　平安時代の木製品 15
図版 130　平安時代の木製品 16
図版 131　平安時代の木製品 17
図版 132　平安時代の木製品 18・中近世の木製品
【長谷鶴前遺跡群】
図版 133　第４調査面　遺構配置図
図版 134　第４調査面　遺構分布図１
図版 135　第４調査面　遺構分布図２
図版 136　第４調査面　遺構分布図３
図版 137　SD59　居館堀跡、SC20　道路跡１
図版 138　SC20　道路跡２
図版 139　SH06　集石遺構、中世の溝跡
図版 140　第３調査面　遺構配置図
図版 141　第３調査面　遺構分布図１
図版 142　第３調査面　遺構分布図２
図版 143　第３調査面　遺構分布図３
図版 144　SD40　居館堀跡１、SH04　集石遺構
図版 145　SD40　居館堀跡２
図版 146　SD40　居館堀跡３

図版 147　SC01　道路跡１、道路跡関連の溝跡１
図版 148　SC01　道路跡２、道路跡関連の溝跡２
図版 149　SC01　道路跡３、道路跡関連の溝跡３
図版 150　道路跡関連の溝跡４
図版 151　道路跡関連の溝跡５、２区南壁道路跡
図版 152　中世の井戸跡１
図版 153　中世の井戸跡２、ST03　掘立柱建物跡
図版 154　第１調査面・第２調査面　遺構配置図
図版 155　第１調査面・第２調査面　遺構分布図１
図版 156　第１調査面・第２調査面　遺構分布図２
図版 157　第１調査面・第２調査面　遺構分布図３
図版 158　ST01　長谷窯工房跡１
図版 159　ST01　長谷窯工房跡２
図版 160　ST01　長谷窯工房跡３
図版 161　長谷窯関連遺物出土状況
図版 162　近代の土坑
図版 163　近代の溝跡
図版 164　中世の土器
図版 165　中世の土製品、石器・石製品
図版 166　中世の木製品１
図版 167　中世の木製品２
図版 168　中世の木製品３
図版 169　中世の木製品４
図版 170　長谷窯関連遺物１　陶器
図版 171　長谷窯関連遺物２　陶器
図版 172　長谷窯関連遺物３　陶器
図版 173　長谷窯関連遺物４　陶器
図版 174　長谷窯関連遺物５　陶器
図版 175　長谷窯関連遺物６　陶器
図版 176　長谷窯関連遺物７　陶器
図版 177　長谷窯関連遺物８　陶器
図版 178　長谷窯関連遺物９　陶器
図版 179　長谷窯関連遺物 10　陶器
図版 180　長谷窯関連遺物 11　陶器
図版 181　長谷窯関連遺物 12　陶器
図版 182　長谷窯関連遺物 13　素焼き製品
図版 183　長谷窯関連遺物 14　素焼き製品
図版 184　長谷窯関連遺物 15　素焼き製品
図版 185　長谷窯関連遺物 16　窯道具
図版 186　長谷窯関連遺物 17　窯道具
図版 187　長谷窯関連遺物 18　窯道具
図版 188　長谷窯関連遺物 19　窯道具
図版 189　長谷窯関連遺物 20　窯道具
図版 190　長谷窯関連遺物 21　窯道具
図版 191　近代の磁器１
図版 192　近代の磁器２、陶器
図版 193　近代の瓦１
図版 194　近代の瓦２
図版 195　近代の瓦３
図版 196　近代の石器・石製品
図版 197　近代の金属製品、ガラス製品

写真図版目次

【石川条里遺跡】
PL１　弥生時代の遺構１
PL２　弥生時代の遺構２
PL３　古墳時代の遺構
PL４　古代の遺構１
PL５　古代の遺構２
PL６　古代の遺構３
PL７　古代の遺構４
PL８　古代の遺構５
PL９　古代の遺構６
PL10　中近世の遺構１
PL11　中近世の遺構２
PL12　中近世の遺構３
PL13　中近世の遺構４
PL14　中近世の遺構５
PL15　中近世の遺構６
PL16　中近世の遺構７
PL17　中近世の遺構８
PL18　中近世の遺構９
PL19　中近世の遺構 10
PL20　中近世の遺構 11
PL21　中近世の遺構 12
PL22　中近世の遺構 13
PL23　中近世の遺構 14
PL24　中近世の遺構 15
PL25　中近世の遺構 16
PL26　中近世の遺構 17
PL27　弥生時代の土器
PL28　古墳時代の土器
PL29　古代の土器１
PL30　古代の土器２
PL31　中近世の土器・陶器・磁器１
PL32　中近世の土器・陶器・磁器２
PL33　中近世の土器・陶器・磁器３
PL34　土製品、玉類
PL35　石器１
PL36　石器２
PL37　石器３・石製品
PL38　金属製品１
PL39　金属製品２
PL40　弥生時代の木製品１
PL41　弥生時代の木製品２
PL42　古墳時代の木製品１
PL43　古墳時代の木製品２
PL44　古墳時代の木製品３
PL45　古墳時代の木製品４
PL46　古墳時代の木製品５
PL47　古墳時代の木製品６
PL48　古墳時代の木製品７
PL49　古墳時代の木製品８
PL50　古墳時代の木製品９
PL51　平安時代の木製品１
PL52　平安時代の木製品２
PL53　平安時代の木製品３
PL54　平安時代の木製品４
PL55　平安時代の木製品５
PL56　平安時代の木製品６
PL57　平安時代の木製品７
PL58　平安時代の木製品８
PL59　平安時代の木製品９
PL60　平安時代の木製品 10
PL61　平安時代の木製品 11
PL62　平安時代の木製品 12
PL63　平安時代の木製品 13
PL64　平安時代の木製品 14
PL65　平安時代の木製品 15
PL66　中近世の木製品
【長谷鶴前遺跡群】
PL67　第４調査面の遺構
PL68　第３調査面の遺構１
PL69　第３調査面の遺構２
PL70　第３調査面の遺構３

PL71　第３調査面の遺構４
PL72　第１・２調査面の遺構１
PL73　第１・２調査面の遺構２
PL74　中世の土器、土製品、石器・石製品
PL75　中世の木製品１
PL76　中世の木製品２
PL77　中世の木製品３
PL78　長谷窯関連遺物１
PL79　長谷窯関連遺物２
PL80　長谷窯関連遺物３
PL81　長谷窯関連遺物４
PL82　長谷窯関連遺物５
PL83　長谷窯関連遺物６
PL84　長谷窯関連遺物７
PL85　長谷窯関連遺物８
PL86　長谷窯関連遺物９
PL87　ロクロ台石、瓦
PL88　石器・石製品、近代の陶器、金属製品

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至る経過

１　事業の概要

国道 18 号坂城更埴バイパス（以下「坂更 BP」という。）改築工事は、国土交通省関東地方整備局長野国道事務所（以下「長野国道」という。）が実施する埴科郡坂城町南条から千曲市大字屋代に至る延長 19.2㎞のバイパス事業で、現道に存在する粟佐交差点（千曲市）、杭瀬下交差点（同）をはじめとする交通混雑の緩和及び交通事故の減少を目的に進められている。

現在、千曲市大字八幡から同市大字稲荷山までの延長 3.0㎞区間が開通しており、千曲市大字稲荷山から長野市篠ノ井塩崎の延長 2.6㎞区間を坂更 BP（延伸）として整備を進めている。工事は、2026 年供用開始を目指して現在も継続している（第１図）。

２　これまでの調査（埋蔵文化財発掘調査の状況と履歴）

石川条里遺跡は、長野県北部の長野市南部に所在し、千曲川左岸の後背低地に立地する水田遺跡である。これまでに、長野県教育委員会（以下「県教委」という。）、長野市教育委員会（以下「市教委」という。）、長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）により複数回調査が行われている。中でも中央自動車道長野線工事に伴って 1988～1991 年度に埋文センターが行った調査では、小微高地からみつかった古墳時代の祭祀行為に関連する遺構や、出土した同時期の多量の木製遺物等が特に注目された。

長谷鶴前遺跡群は、長野市南部、前述の石川条里遺跡西側に所在し、千曲川左岸の山々が形成する崖錐地の傾斜地と低湿地に立地する集落遺跡である。これまでに、1987～1989 年度に県教委、市教委、埋文センターにより調査が行われ、調査結果から当該地の生産域と生活域の境界を明らかにする上で重要な遺跡とされた。なお調査履歴の詳細については第３章第１節に記した。

３　保護措置の調整

2010（平成 22）年 11 月、県教委・市教委は坂更 BP 改築工事に係る埋蔵文化財の保護について、長野国道と調整を行い、当該事業に係る塩崎遺跡群、石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群の保護措置は記録保存調査とした。2011（平成 23）年９月に埋文センターを加えた四者協議により、当該事業に伴う発掘調査は、長野国道が埋文センターへ委託して実施することで合意した。

４　行政手続きの経過

長野国道は文化財保護法第 94 条に基づき、2013（平成 25）年３月１日付け国関整長国工第 184 号で、県教委あてに「土木工事のための埋蔵文化財発掘の通知」を提出した。これを受けて県教委は同年３月５日付け 24 教文第８-385 号で埋蔵文化財の発掘を実施するよう勧告するとともに、事前に、埋文センターと協議するよう通知した。埋文センターは、県教委を交えて長野国道と協議を行い、以下のとおり協定を締結することにした。

なお、この協定は 2022（令和４）年３月４日に変更し、第６条の発掘調査の期間を令和７年度まで、第７条の概算総額を 1,868,650,757 円としている。

埋文センターは、文化財保護法第 92 条に基づき発掘届を年度ごと県教委に提出し、協定第８条に基づいて長野国道と契約を締結し、13 年に亘る事業を実施することとなった。

一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書

一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査（以下「発掘調査」という。）の実施について、国土交通省関東地方整備局（以下「甲」という。）と長野県教育委員会（以下「乙」という。）と一般財団法人長野県文化振興事業団（以下「丙」という。）とは、次のとおり協定を締結する。

（目的）
第１条　この協定は、事業に伴う埋蔵文化財の取扱い及び発掘調査の実施方法等について定めることを目的とする。

（適用区間）
第２条　この協定を適用する区間は、長野県長野市塩崎の位置図に示す区間とする。

（発掘調査の体制）
第３条　甲は丙に、前条の適用区間の発掘調査を委託する。
２　丙は、発掘調査を実施する組織を速やかに編成し、別添実施計画書に基づき発掘調査を実施する。

（発掘調査の指導）
第４条　乙は、丙が行う発掘調査内容・方法に対し、検査、指導、監督にあたるものとし、問題があった場合は改善を求めることができる。

（発掘調査場所及び対象面積）
第５条　発掘調査の実施場所及び対象面積は別添年度別計算書のとおりとする。
２　前項に予定する発掘調査の実施場所及び対象面積に変動ある場合は、甲乙丙協議して定める。

（発掘調査の期間）
第６条　丙は平成 29 年３月 31 日までに現場における全体の発掘作業を終了し、平成 36 年３月 31 日までに出土品及び図面・写真等の記録類の整理作業と報告書の作成を完了する。
２　発掘作業の着手順序及び範囲は、甲乙丙協議して定める。

（発掘調査の費用）
第７条　この調査に要する費用は、別添年度別計算書のとおり概算総額 1,671,309,150 円とし、甲が負担する。
２　前項の費用は、工事区間内で新たに埋蔵文化財を発見した場合及び物価賃金の変動等により増減が生じた場合には、甲乙丙協議して変更する。

（発掘調査の契約及び経費の支払方法）
第８条　甲と丙は、前条第１項に定めた概算額の範囲内において、年度ごとの発掘調査について別途契約する。
２　前条第１項の費用は、前項の契約に基づいて各年度ごとに作業の進ちょくに応じて支払う。

（報告書の提出）
第９条　丙は、業務が完了した時は、調査報告書を甲と乙に提出する。
２　丙は、各年度の発掘調査に係る業務実績報告書を、年度ごとに甲と乙に提出する。

（出土品及び記録類の取り扱い）
第 10 条　発掘された出土品に係る処置については、丙が法令の定めるところにより行う。
２　甲及び丙は、出土品についての権利を放棄する。
３　乙は、報告書刊行後、出土品及び記録類を保管する。

（著作権の帰属及び譲渡）
第 11 条　発掘調査に係る図面・写真等の記録類及び調査報告書の著作権は、乙に帰属するものとし、著作権法上、丙に著作権が生じた場合でも、丙は著作権を乙に無償で譲渡する。

（協定の変更）
第 12 条　この協定を変更する必要が生じたときは、甲乙丙協議して定める。

（協定の有効期限）
第 13 条　この協定の有効期限は、協定の締結の日から第６条の発掘調査が完了し、委託金の精算行為が完了した日までとする。

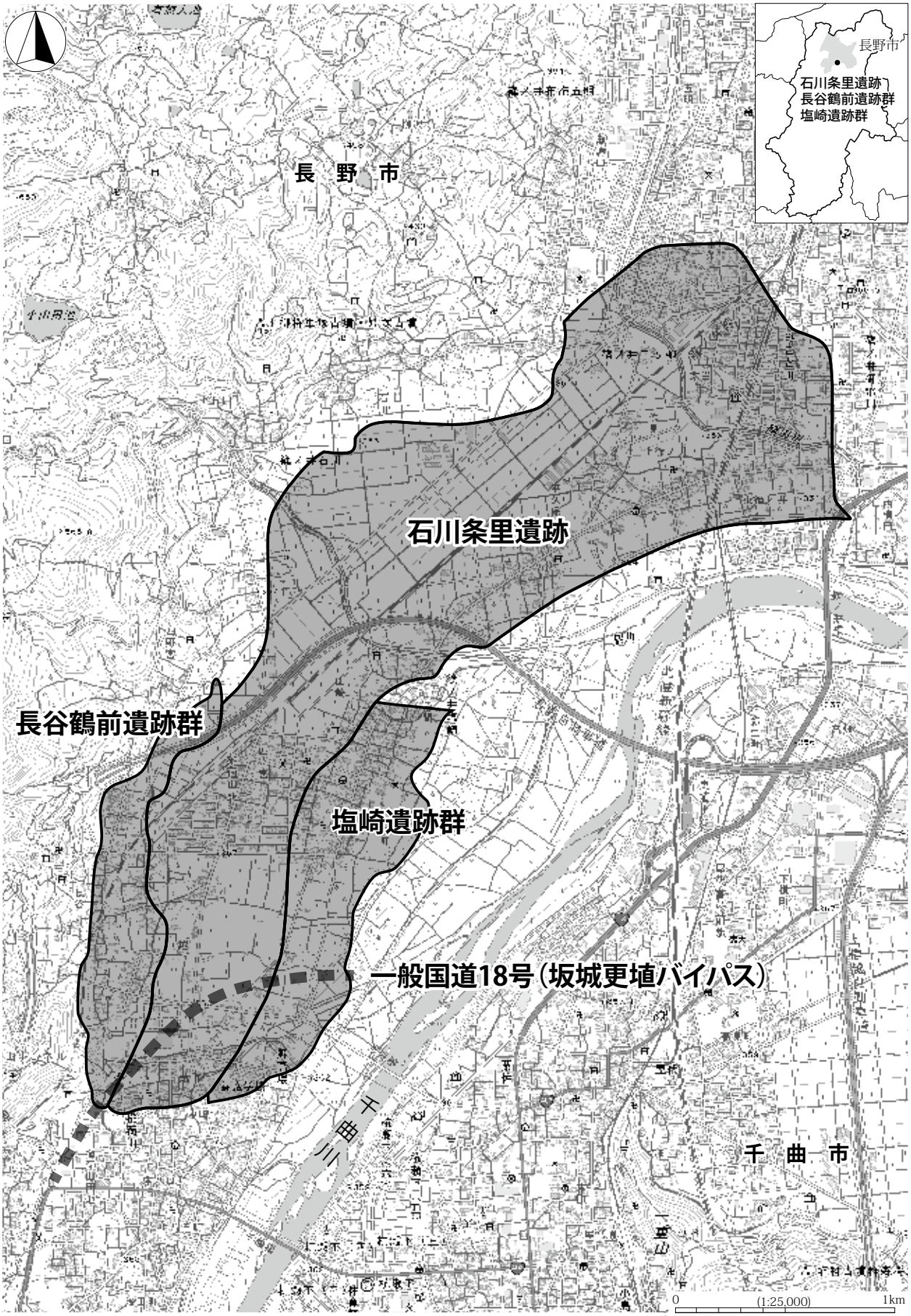
（その他）
第 14 条　この協定に定めのない事項又は疑義を生じた事項については、その都度、甲乙丙が協議して処理する。

この協定締結の証として本書３通を作成し、甲乙丙記名押印のうえ、各々１通を保有する。
平成 25 年　３月 29 日

甲　国土交通省関東地方整備局長
森　北　佳　昭
乙　長野県教育委員会教育長
山　口　利　幸
丙　財団法人長野県文化振興事業団理事長
和　田　恭　良

第１表　石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群　受委託契約の経過（含塩崎遺跡群）

年　度	当　初		第１回変更		精　算		備　考
	契約日	金　額	契約日	増減額	完了日	金　額	
H25（2013）	2013. 4. 1	158,424,000	2014. 3. 5	91,455,000 −66,969,000	2014. 3.31	91,455,000	塩崎遺跡群発掘調査
H26（2014）	2014. 4. 1	216,540,000	2015. 3.13	200,981,000 −15,559,000	2015. 3.31	200,981,000	塩崎遺跡群発掘調査
H27（2015）	2015. 4. 9	271,551,000			2016. 3.31	271,551,000	塩崎遺跡群発掘調査、石川条里遺跡確認調査
H28（2016）	2016. 4. 1	250,528,000	2017. 2.16	272,751,000 22,223,000	2017. 3.31	272,751,000	塩崎遺跡群・石川条里遺跡発掘調査
H29（2017）	2017. 4. 3	254,589,000	2018. 2. 8	244,663,200 −9,925,800	2018. 3.30	244,663,200	塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群発掘調査、塩崎遺跡群整理等作業
H30（2018）	2018. 4. 2	229,419,000	2019. 2. 5	202,734,000 −26,685,000	2019. 3.19	202,734,000	石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群発掘調査、塩崎遺跡群整理等作業
H31（2019）	2019. 4. 1	219,600,000	2020. 2.21	202,596,991 −17,003,009	2020. 3.24	202,596,991	石川条里遺跡発掘調査、塩崎遺跡群・長谷鶴前遺跡群整理等作業
R 2（2020）	2020. 4. 1	99,869,000	2021. 2. 3	94,849,409 −5,019,591	2021. 3.19	94,849,409	塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群整理等作業
R 3（2021）	2021. 4. 1	96,208,750	2022. 2. 9	93,547,907 −2,660,843	2022. 3.16	93,547,907	塩崎遺跡群発掘調査、塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群整理等作業
R 4（2022）	2022. 4. 1	79,598,750	2023. 1.27	53,459,296 −26,139,454	2023. 3.16	53,459,296	塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群整理等作業
R 5（2023）	2023. 4. 1	78,610,000	2024. 1.31	61,645,062 −16,964,938	2024. 3.29	61,645,062	塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群整理等作業
計						1,790,233,865	



国土地理院電子地形図25000『稲荷山』『信濃松代』を使用

第１図　坂城更埴バイパス位置図　（１：25,000）

第２表　石川条里遺跡　調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第 92 条関係）

年月日	文書番号	施行者	文　書　名	あて先	備　　考
2015.10.16	27 長埋第 1-5 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	47,000㎡（当初）
2015.10.27	27 教文第 6-7 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2015.12.04	27 長埋第 4-9 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	415㎡
2016.03.04	27 長埋第 1-11 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	12,000㎡
2016.03.18	27 教文第 6-12 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2017.01.16	28 長埋第 12-11 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	16,000㎡
2017.03.03	28 長埋第 9-12 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	5,000㎡
2017.03.13	28 教文第 6-14 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2017.12.25	29 長埋第 4-7 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	5,500㎡
2018.03.02	29 長埋第 1-5 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	13,500㎡
2018.03.12	29 教文第 6-9 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2018.12.27	30 長埋第 5-4 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	13,500㎡
2019.03.01	30 長埋第 2-5 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	12,500㎡
2019.03.12	30 教文第 6-8 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2019.12.26	元長埋第 4-4 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	12,100㎡
2021.02.25	２長埋第 1-11 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	400㎡
2021.03.12	２教文第 6-14 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2021.06.09	３長埋第 4-1 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	400㎡

第３表　長谷鶴前遺跡群　調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第 92 条関係）

年月日	文書番号	施行者	文　書　名	あて先	備　　考
2017.03.03	28 長埋第 9-13 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	8,500㎡
2017.03.13	28 教文第 6-15 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2017.12.25	29 長埋第 4-6 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	7,200㎡
2018.03.02	29 長埋第 1-6 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	1,300㎡
2018.03.12	29 教文第 6-10 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2018.12.12	30 長埋第 5-3 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	1,300㎡

第４表　石川条里遺跡　埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第 102・105・108 条関係）

年月日	文書番号	施行者	文　書　名	あて先	備　　考
2015.12.04	27 長埋第 2-8 号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器１箱
2015.12.15	27 埋第 197 号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2015.12.28	27 教文第 560 号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2016.06.08 に県帰属
2017.01.17	28 長埋第 10-11 号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・陶磁器・石製品・金属製品・木製品・骨他 29 箱
2017.03.31	28 埋第 247 号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2017.04.05	29 教文第 18 号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2017.07.19 に県帰属
2017.12.25	29 長埋第 2-7 号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・陶磁器・石製品・金属製品４箱
2018.01.17	29 埋第 181 号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2018.01.22	29 教文第 678 号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2018.06.27 に県帰属
2018.12.27	30 長埋第 3-5 号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・陶磁器・ガラス小玉・木製品 16 箱
2019.01.16	30 埋第 205 号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2019.01.21	30 教文第 619 号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2019.06.28 に県帰属
2019.12.26	元長埋第 2-4 号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・陶磁器・石器・木製品・玉類 31 箱
2020.01.15	元埋第 237-3 号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2020.01.23	元教文第 551 号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2020.06.27 に県帰属
2021.06.09	３長埋第 2-1 号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・陶磁器・石製品・木製品・金属製品３箱
2021.06.24	３埋第 79-3 号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2021.06.29	３教文第 181 号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2021.12.11 に県帰属

第５表　長谷鶴前遺跡群　埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第 102・105・108 条関係）

年月日	文書番号	施行者	文　書　名	あて先	備　　考
2017.12.25	29 長埋第 2-6 号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・陶磁器・窯道具・木製品・石製品・金属製品・獣骨 108 箱
2018.01.17	29 埋第 180 号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2018.01.22	29 教文第 677 号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2018.06.27 に県帰属
2018.12.12	30 長埋第 3-3 号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・木製品・獣骨 42 箱
2019.01.16	30 埋第 204 号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2019.01.21	30 教文第 618 号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2019.06.14 に県帰属

第２節　発掘調査の経過

１　発掘作業の経過

2015（平成 27）年度

石川条里遺跡は、市教委により、千曲川左岸の後背湿地に広がる生産遺跡として登録される。本事業における調査地区は、遺跡の南端部にあたり、本年度は、次年度の調査開始に先駆け確認調査を行った。調査範囲内に６本のトレンチを設定し、遺構・遺物の状況を確認した。

洪水砂層や泥炭層に覆われた明確な水田は確認できなかったが現耕作土の下に水田土壌と考えられる層が複数堆積していた。また、西側トレンチでは、溝跡や井戸の可能性がある土坑等が検出された。検出面からは、弥生時代～平安時代の土器片が出土しており、遺構の時期を示唆している。

2016（平成 28）年度

石川条里遺跡の本格的な調査が開始となる。堆積状況等から弥生時代後期以前、古墳時代～奈良時代、平安時代前期末の３時期の水田跡の存在が想定されていたが、弥生時代と古墳時代～平安時代の水田遺構は検出したものの、平安時代前期末の洪水砂層の堆積がなかったため、その時期の水田跡は検出できなかった。一方、鎌倉時代後期には微高地上に掘立柱建物群を主体とする３×７間の大型掘立柱建物跡や井戸跡等を含む集落域が形成されていたことが判明した。

2017（平成 29）年度

石川条里遺跡では、前年に引き続き中近世以降の居住遺構、平安時代と古墳時代の水田遺構、弥生時代の水田遺構を検出した。弥生時代の水田跡は一筆の面積が５～25㎡と一定しないが、北西側にある微高地から東側へ傾斜する地形に合わせた畦畔の構築状況等を把握できた。

長谷鶴前遺跡群は、市教委により、弥生時代～平安時代の集落遺跡として登録される。本事業における調査地区は、遺跡の南端部にあたり、本年度から発掘作業を開始した。

遺跡からは、平安時代の洪水砂層に覆われた水田跡、中世の居館の堀跡や道路跡、近代の陶器製作工房跡等を検出した。特に、明治時代に操業していた長谷焼に関連する工房跡からは、全国的にも珍しい貴重な事例のロクロ台石が据えられた状態で出土している。

2018（平成 30）年度

石川条里遺跡では、水田の時期的変遷と分布域の消長を把握することを目標として作業を行い、弥生時代と平安時代の水田遺構を確認した。平安時代の大畦畔には芯材として木材が埋設され、田下駄や建築部材等が含まれていた。弥生時代の大畦畔の中からは、芯材と共に水田の時期を裏付ける資料である弥生時代中期から後期の土器が出土している。

長谷鶴前遺跡群では、調査範囲の北東側から平安時代の水田跡を検出した。また、前年度調査した中世の道路跡や堀跡の西側から、更に古い時期の道路跡と堀跡を検出し、居館が作り替えられていたことが判明した。

本年度で、長谷鶴前遺跡群発掘作業は完了した。

2019（平成 31、令和元）年度

石川条里遺跡では、南側に隣接する長谷鶴前遺跡群の調査成果も合わせて、自然堤防外側の後背湿地の土地利用を明らかにすることを目標として作業を行い、古墳時代の水田遺構や杭列、遺物集中、平安時代以降の水田跡や溝跡等を検出した。なお、前年度に確認した弥生時代の水田跡は水田面を被覆する泥炭層

の遺存状態が悪く、検出できなかった。また、古墳時代前期の水田遺構からは、小形丸底土器や高坏、ミニチュア土器等の遺物がまとまってみつかり、その周辺からは管玉と勾玉も出土している。中央自動車道長野線建設に伴う調査では、当該期の祭祀遺構が確認されているため、祭祀遺物の出土状況を注視・研究する必要があることが判明した。

2021（令和３）年度

石川条里遺跡では、平安時代の水田跡や中世の堀跡や土塁跡、近世の水田跡等の遺構を検出した。

平安時代の水田跡上層には30㎝程度の洪水砂層が堆積しており、洪水後に地形環境が大きく変わったことが考えられる。中世の堀跡からは折り曲げられた鍬形兜前立一対が出土している。また、現塩崎用水の直下からは、明暦堰や新堰の一部と思われる溝跡も確認できた。

本年度で、石川条里遺跡の発掘作業は完了した。

２　整理等作業の経過

2018（平成 30）年度

長谷鶴前遺跡群の本格整理作業を開始した。主な作業は出土遺物の接合と復元作業で、近代の工房跡から出土した大量の焼き物を中心に実施した。工房跡から出土した焼き物には素焼きと釉薬をかけた本焼きのものがあり、焼成工程が２段階に分かれていた状況が判明した。

2019（平成 31、令和元）年度

長谷鶴前遺跡群の遺物実測及び遺構・遺物実測図のデジタルトレース作業を行った。また、中世の居館の堀跡から出土した箱状の木製品が三方であると判明した。

2020（令和２）年度

石川条里遺跡の本格整理作業を開始した。

石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群とも主な作業は、出土木製品の実測図作成及び報告書掲載用の遺物写真撮影である。また、樹種同定等の自然科学分析業務委託を行った。木製品の出土遺構の時期は弥生時代から中近世であり、なかでも平安時代の畦畔の芯材に 37 点の田下駄が出土していた事は注目される。

2021（令和３）年度

石川条里遺跡では、金属製品の応急的保存処理、出土遺物の分類・図化・トレース、遺構図のトレース作業を行った。金属製品の応急的保存処理は県立歴史館の施設を利用して行い、クリーニング作業を終了した。

長谷鶴前遺跡群では、遺物整理・遺構整理をほぼ終了し、報告書掲載に向けて資料の体裁を整える等の作業を進めた。

2022（令和４）年度

石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群とも主な作業は、遺物の写真撮影、報告書掲載図版や観察表の作成、原稿執筆等を実施した。特に、検出遺構の帰属時期の確認や、千曲川洪水砂の被覆状況等遺跡形成に関わる土層図や遺構分布図の作成を行い、弥生時代中期後半から中近世に至るまでの土地利用の状況や水田跡の変遷を明らかにした。

2023（令和５）年度

石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群とも主な作業は、報告書の原稿執筆・編集作業、原稿や図版の校正及び印刷製本を行い、発掘調査報告書を刊行した。刊行した報告書を関係各所へ配布すると共に、資料移管に備えて、記録類や遺物の整理収納をして移管台帳等を作成した。

３　普及啓発活動

埋文センターは発掘調査の開始から終了までの間、様々な場面で埋蔵文化財に対する理解を深めてもらう機会を設けている。石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群でも、発掘作業中に行う発掘調査現場の公開や発掘体験等の速報性を重視した活動、整理作業時に行う展示会や講演会といった調査成果の報告等の活動を行ってきた。その活動内容は以下のとおりである。

（１）遺跡説明会および発掘体験等

2016.05.20	南相木村立南相木小学校、北相木村立北相木小学校見学受入れ（石川条里遺跡）	29 名
2016.06.01	長野市立広徳中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3 名
2016.07.05～07	現地説明会実施（石川条里遺跡）	151 名
2016.07.06	長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	7 名
2016.07.26	長野市立川中島中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	4 名
2016.07.27	長野市立篠ノ井東中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3 名
2016.08.09	「体験発掘モニターツアー」発掘体験受入れ（石川条里遺跡）	20 名
2016.08.30～09.02	国立長野工業高等専門学校インターンシップ生受入れ（石川条里遺跡）	5 名
2016.10.12	長野市立犀陵中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	5 名
2016.10.13	長野市立松代中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	5 名
2016.10.18	長野県小諸高等学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	20 名
2016.11.04	長野市立通明小学校発掘体験受入れ（石川条里遺跡）	32 名
2016.11.21	長野市立塩崎小学校見学受入れ（石川条里遺跡）	43 名
2017.07.05	長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3 名
2017.07.10	長野市立川中島中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群）	5 名
2017.07.19	長野市立広徳中学校職場体験受入れ（長谷鶴前遺跡群）	1 名
2017.07.20	長野市立篠ノ井東中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群）	5 名
2017.09.30	現地説明会実施（長谷鶴前遺跡群）	100 名
2017.10.17	長野県小諸高等学校就業体験受入れ（石川条里遺跡）	22 名
2017.10.26	長野市立大岡中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	1 名
2018.08.28	長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	5 名
2018.10.11	長野市立川中島中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3 名
2018.11.23	現地説明会実施（石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群）	130 名
2019.07.13	現地説明会実施（石川条里遺跡）	70 名
2019.07.17	長野市立篠ノ井東中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3 名
	長野市立川中島中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3 名
2019.08.19	金沢学院大学インターンシップ生受入れ（石川条里遺跡）	1 名
2019.08.21	長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3 名
2019.10.24	長野県小諸高等学校就業体験受入れ（石川条里遺跡）	10 名

（２）展示会および講演会等

2017.02.18～02.24	『掘るしん in しののい 2017』で出土品展示（石川条里遺跡）	埋文センター	199 名
2018.02.18	川柳文化講演会・郷土歴史講演会で『平成 29 年度坂城更埴バイパス改築工事に伴う発掘調査報告～弥生時代から幕末明治時代まで～』を報告し、出土品展示（長谷鶴前遺跡群）	長野市篠ノ井公民館川柳分館	65 名
2018.03.17～06.03	巡回展『長野県の遺跡発掘 2018』で出土品展示（長谷鶴前遺跡群）	長野県立歴史館	8,485 名
2018.07.13～08.02	〃	長野県伊那文化会館	492 名
2018.08.11～09.17	〃	塩尻市立平出博物館	1,406 名
2018.09.29～11.25	〃	浅間縄文ミュージアム	1,455 名
2019.02.14～02.22	『掘るしん in しののい 2019』で出土品展示	埋文センター	270 名
2019.03.16～06.23	2019 年長野県立歴史館巡回展『長野県の考古学―時代を映す“匠”の技』で出土品展示	長野県立歴史館	12,975 名
2019.07.27～09.16	〃	塩尻市立平出博物館	1,545 名
2019.10.27～11.10	〃	飯田市美術博物館	2,449 名
2022.03.19～06.12	『掘るしん 2022』で出土品展示（石川条里遺跡）	長野県立歴史館	3,427 名

（３）調査概要等の発行

2016.05.10～07.19　「発掘だより」通巻№11～15（石川条里遺跡）
2017.03.24　「発掘調査の概要　石川条里遺跡」『年報』33
2017.05.10～09.15　「発掘だより」通巻№16～18
2018.02.02　「最新調査成果から４　明治時代の長谷窯の工房跡発見」『信州の遺跡』第12号（長谷鶴前遺跡群）
2018.03.23　「発掘調査の概要　石川条里遺跡」『年報』34
2018.03.23　「発掘調査の概要　長谷鶴前遺跡群」『年報』34
2018.05.15～11.05　「発掘だより」通巻№19～21
2019.03.22　「発掘調査の概要　石川条里遺跡」『年報』35
2019.03.22　「発掘調査の概要　長谷鶴前遺跡群」「整理等作業の概要　長谷鶴前遺跡群」『年報』35
2019.05.31～2020.01.14「発掘だより」通巻№22・23（石川条里遺跡）
2020.03.23　「発掘調査の概要　石川条里遺跡」『年報』36
2020.03.23　「整理等作業の概要　長谷鶴前遺跡群」「調査研究ノート　長谷のかめやき―長谷焼調査の覚書―」『年報』36
2020.08.03　「特集　埋文展示室から　長野市石川条里遺跡出土―古墳時代の小型丸底土器―」『信州の遺跡』第15号
2021.03.23　「整理等作業の概要　石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群」『年報』37
2021.07　「江戸時代の「塩崎用水」」『季刊考古学』156号（石川条里遺跡）
2021.08.06　「珍しきもの　三方」『信州の遺跡』第17号（長谷鶴前遺跡群）
2022.03.25　「発掘作業の概要　石川条里遺跡」「整理等作業の概要　塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群」『年報』38
2022.07.30　「珍しきもの　兜の立物「鍬形」」『信州の遺跡』第19号（石川条里遺跡）
2023.03.17　「整理等作業の概要　石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群」『年報』39
2024.03.15　「整理等作業の概要　石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群」『年報』40

（４）その他

埋文センター公式ホームページに調査情報を掲載。

川柳文化講演会・郷土歴史講演会　出土品展示（2018年）

巡回展『長野県の遺跡発掘2018』出土品展示（2018年）

４　発掘作業と整理作業の体制

本報告書に掲載した遺跡の発掘調査にかかわる作業体制（作業員を含む）は以下のとおりである。

2015（平成 27）年度　石川条里遺跡

所　　長：	会津敏男	副 所 長：	多城　哲	調査部長：	平林　彰	担当課長：	川崎　保
調査担当：	廣瀬昭弘	太田光春					
作 業 員：	池田豊一	風間三次	久保寛志	小林博美	塩入孝幸		

2016（平成 28）年度　石川条里遺跡

所　　長：	会津敏男	副 所 長：	竹内　誠	調査部長：	平林　彰	担当課長：	川崎　保
調査担当：	市川隆之	鶴田典昭	綿田弘実	藤原直人	石丸敦史	柴田洋孝	廣瀬昭弘
	飯島公子	風間真起子	杉木有紗	大久保邦彦			
作 業 員：	青山珠実	朝日奈富士子	朝日奈茉樹	新井明子	荒井初彦	池田豊一	石黒章一
	上原美千代	宇賀村節子	岡村敏孔	岡村美喜子	風間三次	春日久子	加藤周子
	神林貴子	北村マユミ	久保寛志	倉科千文	小島美香	小島光夫	児玉径子
	小林和夫	小林とも子	小林奈美江	小林　博	小林博美	近藤由枝	佐藤重夫
	塩入孝幸	島田茂子	下平光秋	瀬在節雄	田村多恵子	田村　哲	戸塚　篤
	冨澤修二	中沢輝行	西沢雅彦	野中敏彦	野中久代	原　恵美	半田純子
	深澤優子	福田　茂	福田三智子	堀篭香奈子	増田千加代	町田隆三	松本光正
	三沢真由美	南澤建一	南澤憲吾	宮尾千幸	宮崎勝夫	宮下　豊	宮原昭彦
	村田きよ子	森下晃治	森山茂隆				

2017（平成 29）年度　石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群

所　　長：	会津敏男	副 所 長：	関崎修二	調査部長：	平林　彰	担当課長：	櫻井秀雄
調査担当：	（石川条里）	河西克造	廣瀬昭弘	風間真起子	小林伸子		
	（長谷鶴前）	近藤尚義	柴田洋孝	市川隆之	風間真起子	小林伸子	
作 業 員：	青山珠実	朝日奈富士子	朝日奈茉樹	新井明子	荒井初彦	池田豊一	石黒章一
	宇賀村節子	岡村敏孔	岡村美喜子	風間三次	春日久子	加藤周子	北村マユミ
	久保寛志	倉科千文	小島美香	小島光夫	児玉径子	小林和夫	小林とも子
	小林奈美江	小林　博	小林博美	近藤由枝	佐藤重夫	塩入孝幸	島田茂子
	瀬在節雄	田村多恵子	田村　哲	戸塚　篤	冨澤修二	中澤輝行	西沢雅彦
	野中敏彦	野中久代	半田純子	福田　茂	増田千加代	町田隆三	南澤憲吾
	峯村知佳	宮尾千幸	宮崎勝夫	宮原昭彦	森下晃治	森山茂隆	

2018（平成 30）年度　石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群

所　　長：	会津敏男	副 所 長：	関崎修二	調査部長：	平林　彰	担当課長：	櫻井秀雄
調査担当：	（石川条里）	河西克造	廣瀬昭弘	風間真起子			
	（長谷鶴前）	柴田洋孝	市川隆之				
作 業 員：	青山珠実	朝日奈富士子	新井明子	荒井初彦	宇賀村節子	岡村敏孔	風間三次
	春日久子	北村マユミ	久保寛志	倉科千文	小島美香	小島光夫	児玉径子
	小林とも子	小林奈美江	小林博美	近藤由枝	塩入孝幸	島田茂子	瀬在節雄
	田村多恵子	田村　哲	西沢雅彦	野中久代	半田純子	福田　茂	増田千加代
	町田隆三	南澤憲吾	峯村知佳	宮尾千幸	宮原昭彦	森下晃治	森山茂隆

山本希一　（発掘作業）
小林　愛　清水正夫　田中富子　中村恵美　（整理作業）

2019（令和元）年度　石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群

所　　長：　原田秀一　副 所 長：　関崎修二　調査部長：　平林　彰　担当課長：　櫻井秀雄
調査担当：　（石川条里）河西克造　村井大海　廣瀬昭弘　風間真起子　伊藤　愛
（長谷鶴前）柴田洋孝
作 業 員：　青山珠実　朝日奈富士子　新井明子　荒井初彦　池田豊一　宇賀村節子　岡村敏孔
風間三次　春日久子　北村マユミ　久保寛志　小島美香　小島光夫　小林とも子
小林奈美江　小林博美　近藤由枝　塩入孝幸　島田茂子　瀬在節雄　祖山克彦
田村多恵子　田村　哲　西沢雅彦　野中久代　半田純子　福田　茂　増田千加代
南澤憲吾　宮原昭彦　森下晃治　森山茂隆　（発掘作業）
朝日奈富士子　荒井君江　石田和子　井澤広行　伊藤由美　岩原英治　大澤正明
柄澤登紀子　窪田　順　小林　愛　酒井実姫　清水栄子　清水正夫　白井弓子
田中富子　中村智恵子　西村はるみ　原　恵美　樋口典子　平林昌子　堀内慎一
南澤憲吾　宮澤理恵子　山下千幸　吉田　稔　（整理作業）

2020（令和２）年度　石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群（整理作業）

所　　長：　原田秀一　副 所 長：　山田秀樹　調査部長：　川崎　保　担当課長：　櫻井秀雄
調査担当：　市川隆之　馬場伸一郎　大竹憲昭　風間真起子
作 業 員：　赤川雅俊　荒井君江　石田和子　岩原英治　大澤正明　柄澤登紀子　小林　愛
清水栄子　清水正夫　白井弓子　田中富子　樋口典子　平林昌子　宮澤理恵子
宮下亜衣香

2021（令和３）年度　石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群

所　　長：　原田秀一　副 所 長：　山田秀樹　調査部長：　川崎　保　担当課長：　西　香子
調査担当：　市川隆之　馬場伸一郎　大竹憲昭　風間真起子
作 業 員：　久保寛志　小島光夫　小林博美　塩入孝幸　寺澤政俊　（発掘作業）
石田和子　大澤正明　柄澤登紀子　清宮利花　窪田　順　小林　愛　清水秋子
清水栄子　清水陽向　白井弓子　相馬麻織　田中富子　中村恵美　中村智恵子
樋口典子　平林昌子　宮澤理恵子　宮下亜衣香　吉田　稔　（整理作業）

2022（令和４）年度　石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群（整理作業）

所　　長：　原田秀一　副 所 長：　山田秀樹　調査部長：　川崎　保　担当課長：　西　香子
調査担当：　杉木有紗　市川隆之　風間真起子
作 業 員：　荒井君江　石田和子　柄澤登紀子　窪田　順　小久保輝　小林　愛　清水秋子
清水栄子　白井弓子　相馬麻織　中村智恵子　樋口典子　宮澤理恵子　宮本和真
吉田　稔

2023（令和５）年度　石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群（整理作業）

所　　長：　原田秀一　副 所 長：　草間ちづる　調査部長：　川崎　保　担当課長：　柳澤　亮
調査担当：　市川隆之　風間真起子
作 業 員：　荒井君江　石田和子　窪田　順　小林　愛　是枝敦子　塩野入奈菜美　清水栄子
白井弓子　相馬麻織　樋口典子　堀内慎一　宮澤理恵子　吉田　稔

５　作業日誌抄録

2015（平成 27）年度

石川条里遺跡

４月 １日	長野国道と受委託契約を締結
11 月16 日	確認調査開始
11 月30 日	確認調査終了
12 月１日	整理作業員基礎整理作業開始
１月 12 日	科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定、プラントオパール分析）
３月 ４日	科学分析業務委託完了（放射性炭素年代測定、プラントオパール分析）
３月 18 日	整理作業員基礎整理作業終了 本年度委託契約終了
３月 31 日	基礎整理作業終了

2016（平成 28）年度

石川条里遺跡

４月 １日	長野国道と受委託契約を締結
４月12 日	発掘作業開始
４月18 日	長野国道と本年度調査について協議
４月25 日	測量業務委託契約
５月12 日	長野国道、県教委、市教委と本年度調査について協議
５月20 日	南相木村立南相木小学校、北相木村立北相木小学校見学受入れ
５月23 日	長野国道、県教委と支障物件等について協議
６月 １日	長野市立広徳中学校職場体験受入れ
６月 ７日	洪水砂層下に平安時代前期の大畦畔確認
６月15 日	長野国道と調査環境について協議 長野県考古学会長小林正春氏見学
６月16 日	千曲市教育委員会平林大樹氏見学
６月22 日	長野国道と調査環境について協議
６月29 日	長野国道、塩崎上町地区区長ほか 12 名来跡
７月 １日	長野国道、県教委、塩崎地区区長会長、塩崎上町地区区長と支障物件等について協議 須坂市教育委員会田中一穂氏ほか４名見学
７月 ５日	現地説明会実施（～７日）
７月 ６日	長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ
７月 ８日	長野県立歴史館館長笹本正治氏、文献資料課長中野亮一氏見学
７月11 日	長野国道、県教委と調査工程について協議
７月26 日	長野市立川中島中学校職場体験受入れ
７月27 日	長野市立篠ノ井東中学校職場体験受入れ、篠ノ井有線取材対応
８月 ４日	長野国道と調査環境について協議
８月 ９日	「体験発掘モニターツアー」発掘体験受入れ
８月22 日	長野国道と増工、次年度調査について協議
８月30 日	国立長野工業専門学校インターンシップ生受入れ（～９月２日）
９月 ６日	長野国道と支障物件等について協議
９月 ８日	塩崎地区区長会長と支障物件等について協議
９月12 日	市教委風間栄一氏・鈴木時夫氏見学
９月16 日	中世の火葬施設より銭貨、数珠玉５点出土
９月26 日	長野国道と支障物件等について協議 科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定、プラントオパール分析）
10 月 ３日	長野国道によるＵ字溝用水撤去作業・仮設用水移設立会（～14 日）
10 月12 日	長野市立犀陵中学校職場体験受入れ
10 月13 日	長野市立松代中学校職場体験受入れ
10 月18 日	長野県小諸高等学校職場体験受入れ
10 月19 日	県教委上田典男氏視察
10 月24 日	長野国道と次年度調査について協議
11 月 ４日	長野市立通明小学校発掘体験受入れ 大阪大学大学院生ジョセフ・ライアン氏見学
11 月 ７日	中国寧夏国土資源庁視察団５名見学
11 月10 日	長野国道、長野テクトロン株式会社と調査環境について協議
11 月18 日	県文化財保護審議委員笹澤浩氏見学
11 月21 日	長野市立塩崎小学校５年生見学
11 月22 日	篠ノ井歴史の会 27 名見学
11 月25 日	長野国道、長野市管財課、道路課、消防局と支障物件、次年度調査について協議
11 月28 日	石川条里遺跡２区北埋戻し開始 科学分析業務委託完了（放射性炭素年代測定、プラントオパール分析）
12 月 ７日	長野国道、県教委、市教委と次年度調査について協議
12 月22 日	発掘作業終了
１月 ４日	整理作業員基礎整理作業開始
１月23 日	科学分析業務委託契約（プラントオパール分析）
１月25 日	長野国道、株式会社サンタキザワと支障物件について協議
２月18 日	「掘るしん in しののい」展示会展示（～24 日）
３月 ２日	測量業務委託完了
３月16 日	本年度委託契約終了 整理作業員基礎整理作業終了
３月22 日	科学分析業務委託完了（プラントオパール分析）
３月31 日	基礎整理作業終了

2017（平成 29）年度

石川条里遺跡

４月 １日　長野国道と受委託契約を締結
４月13 日　長野国道と支障物件等について協議
　　発掘作業開始
４月26 日　測量業務委託契約
５月12 日　信州大学理学部特任教授保柳康一氏による土壌の堆積状況についての指導
７月 ４日　長野国道、県教委、市教委と支障物件、調査工程等について協議
７月 ５日　長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ
７月10 日　長野市立川中島中学校職場体験受入れ
７月20 日　長野市立篠ノ井東中学校職場体験受入れ
10 月13 日　国土交通省による現存井戸撤去工事立会い
10 月17 日　長野県小諸高等学校就業体験受入れ
10 月26 日　長野市立大岡中学校職場体験受入れ
11 月 ７日　科学分析業務委託契約（プラントオパール分析）
　　測量委託業者による空中写真撮影
11 月10 日　長野国道、県教委、市教委と支障物件、調査工程等について協議
11 月13 日　県教委谷和隆氏視察
12 月 １日　整理作業員基礎整理作業開始
12 月 ８日　発掘作業終了
12 月18 日　長野国道、県教委と引き渡しについて協議
２月 ７日　測量委託完了
３月 １日　科学分析業務委託完了（プラントオパール分析）
３月 ９日　測量業務委託完了
３月16 日　整理作業員基礎整理作業終了
　　本年度委託契約終了
３月31 日　基礎整理作業終了

石川条里遺跡　遺構検出作業

長谷鶴前遺跡群

４月 １日　長野国道と受委託契約を締結
４月13 日　発掘作業開始
４月21 日　市教委風間栄一氏調査指導
４月26 日　測量業務委託契約
４月27 日　委託測量・基準点設置
５月12 日　信州大学理学部特任教授保柳康一氏による土壌の堆積状況についての指導
５月30 日　科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定）
６月 ７日　県文化財保護審議会委員市澤英利氏調査指導
６月13 日　元愛知陶磁美術館副館長仲野泰裕氏による近世の遺構・遺物についての指導
　　県文化財保護審議会委員笹澤浩氏、総合情報課長大竹憲昭氏、県立歴史館文献資料課長中野亮一氏見学
６月14 日　県文化財保護審議会委員市澤英利氏調査指導
６月20 日　窯道具の円錐ピンの型出土
６月27 日　科学分析業務委託完了（放射性炭素年代測定）
７月10 日　長野市立川中島中学校職場体験受入れ
　　信州大学理学部特任教授保柳康一氏、学生４名見学
７月19 日　長野市立広徳中学校職場体験受入れ
７月20 日　長野市立篠ノ井東中学校職場体験受入れ
９月20 日　元愛知陶磁美術館副館長仲野泰裕氏による近世の遺構・遺物の調査方法についての指導
９月26 日　長野市民新聞社・篠ノ井有線放送取材対応
９月30 日　現地説明会実施
　　長野ケーブルテレビ取材
10 月24 日　信州大学理学部特任教授保柳康一氏による低湿地の土層堆積についての指導
11 月 ６日　測量委託業者による第２回空中写真撮影
11 月13 日　県教委谷和隆氏視察
11 月15 日　県文化財保護審議会委員市澤英利氏視察
11 月26 日　科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定）
　　科学分析業務委託契約（花粉分析）
11 月28 日　整理作業員基礎整理作業開始
12 月 １日　測量業務委託完了
12 月15 日　発掘作業終了
２月18 日　長野市篠ノ井公民館川柳分館で調査成果報告会・展示　65 名
３月 ９日　科学分析業務完了（放射性炭素年代測定）
３月15 日　科学分析業務完了（花粉分析）
３月16 日　整理作業員基礎整理作業終了
　　本年度委託契約終了
３月17 日　巡回展『長野県の遺跡発掘 2018』展示品展示（～６月３日）
３月30 日　基礎整理作業終了

2018（平成 30）年度

石川条里遺跡

４月 １日　長野国道と受委託契約を締結
４月 ５日　発掘作業開始
４月19日　長野国道と石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群に係る市道埋設物の取り扱い等について協議
５月10日　測量業務委託契約
６月22日　須坂市教育委員会三ツ井芳恵氏ほか１名見学
６月25日　科学分析業務委託契約（プラントオパール分析）
７月 ３日　科学分析業務委託試料採取（プラントオパール分析）
８月 ８日　東海大学生１名、同志社大学生１名見学受入れ
８月16日　科学分析業務委託完了（プラントオパール分析）
８月28日　長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ
９月 ５日　長野国道、国立長野工業高等専門学校生、東海大学生、國學院大學生見学
10月11日　長野市立川中島中学校職場体験受入れ
10月17日　測量委託業者による空中写真撮影
11月23日　現地説明会実施
11月26日　長野県立歴史館近藤尚義氏見学
11月27日　長野市立塩崎小学校見学
11月29日　須坂市教委田中一穂氏ほか２名見学
12月 ３日　測量委託業者による空中写真撮影
12月12日　高森町教委岩田義雄氏見学
12月17日　科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定、花粉・珪藻・プラントオパール分析）
12月18日　科学分析業務委託打合せ（花粉・珪藻・プラントオパール分析）
12月26日　坂更 BP に係る保護協議、調査地引き渡し（長野国道、県教委、市教委）協議
　　発掘作業終了
１月 ７日　整理作業員基礎整理作業開始
２月14日　『掘るしん in しののい 2019』で出土品展示 270 名
３月 ８日　測量業務委託完了
３月14日　科学分析業務委託完了（放射性炭素年代測定、花粉・珪藻・プラントオパール分析）
３月15日　整理作業員基礎整理作業終了
　　本年度委託契約終了
３月16日　2019 年長野県立歴史館巡回展『長野県の考古学―時代を映す“匠”の技』で出土品展示（～６月 23 日）
３月29日　基礎整理作業終了

長谷鶴前遺跡群

４月 １日　長野国道と受委託契約を締結
４月 ５日　発掘作業開始
４月19日　長野国道と石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群に係る市道埋設物の取り扱い等について協議
４月24日　畦畔から芯材と推測される木材出土
５月10日　測量業務委託契約
５月18日　測量委託業者による空中写真撮影
５月21日　信州大学理学部特任教授保柳康一氏による科学分析試料採取
６月25日　整理作業員本格整理作業開始
７月 ２日　信州大学理学部特任教授保柳康一氏と委託研究契約（土壌分析）
10月11日　長野市立川中島中学校職場体験受入れ
　　科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定・花粉分析）
11月23日　現地説明会実施
11月26日　県立歴史館近藤尚義氏視察
11月27日　長野市立塩崎小学校見学
11月29日　須坂市教委田中一穂氏ほか２名見学
12月 ３日　整理作業員基礎整理作業開始
12月10日　発掘作業終了
12月12日　科学分析業務委託完了（放射性炭素年代測定・花粉分析）
12月17日　科学分析業務委託契約（プラントオパール分析）
12月26日　坂更 BP に係る保護協議、調査地引き渡し（長野国道、県教委、市教委）協議
２月14日　『掘るしん in しののい 2019』で出土品展示（～２月 22 日）
２月19日　京都大学名誉教授茂原信生氏ほか２氏による出土骨鑑定指導（～２月 21 日）
２月28日　信州大学理学部特任教授保柳康一氏による委託研究完了（土壌分析）
３月 ５日　元愛知陶磁美術館副館長仲野泰裕氏による近代窯関係資料の整理指導（～６日）
３月 ８日　測量業務委託完了
３月14日　科学分析業務委託完了（プラントオパール分析）
３月15日　整理作業員基礎整理作業、本格整理作業終了
　　本年度委託契約終了
３月16日　2019 年長野県立歴史館巡回展『長野県の考古学―時代を映す“匠”の技』で出土品展示（～6月23日）
３月29日　基礎整理作業、本格整理作業終了

石川条里遺跡　デジタル測量システムを用いた測量

長谷鶴前遺跡群　現地説明会

2019（平成 31）年度

石川条里遺跡

４月 １日　長野国道と受委託契約を締結
４月12 日　発掘作業開始
４月25 日　測量業務委託契約
５月 ７日　長野国道と発掘調査開始に伴う協議
５月 ８日　測量委託業者による空中写真撮影
６月27 日　長野県総合教育センターの研修会受入れ
７月 １日　信州大学理学部特任教授保柳康一氏と委託研究契約（土壌分析）
７月10 日　測量委託業者による空中写真撮影
７月13 日　現地説明会実施
７月17 日　長野市立篠ノ井東中学校、同川中島中学校職場体験受入れ
７月24 日　信州大学理学部特任教授保柳康一氏による科学分析試料採取（～25 日）
８月 ８日　長野国道の親子見学会受入れ
８月19 日　金沢学院大学インターンシップ生受入れ
８月21 日　長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ
９月 ４日　長野県文化振興事業団事務局長視察
10 月 ７日　篠ノ井歴史の会見学受入れ
10 月24 日　長野県小諸高等学校就業体験受入れ
11 月22 日　信州大学理学部特任教授保柳康一氏による科学分析試料採取
12 月 ２日　整理作業員基礎整理作業開始
12 月13 日　発掘作業終了
　科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定、プラントオパール・花粉・珪藻分析）
12 月24 日　長野国道と本年度調査区の引き渡しについて協議
２月28 日　信州大学理学部特任教授保柳康一氏による委託研究完了（土壌分析）
３月 ６日　測量業務委託完了
３月13 日　科学分析業務委託完了（放射性炭素年代測定、プラントオパール・花粉・珪藻分析）
３月19 日　整理作業員基礎整理作業完了
　本年度委託契約終了
３月27 日　基礎整理作業終了

長谷鶴前遺跡群

４月 １日　長野国道と受委託契約を締結
　本格整理作業開始
４月 ３日　整理作業員本格整理作業開始
10 月18 日　長野市有限会社松代　松代陶苑で近代窯業関連資料調査
12 月17 日　遺物写真撮影業務委託契約
２月 ４日　愛知県愛知陶磁美術館ほかで近代窯業関連資料調査（～５日）
３月 ４日　元愛知陶磁美術館副館長仲野泰裕氏による近世窯及び関連遺物の整理指導（～５日）
３月13 日　遺物写真撮影業務委託完了
３月19 日　整理作業員本格整理作業終了
　本年度委託契約終了
３月31 日　本格整理作業終了

石川条里遺跡　科学分析試料採取

長谷鶴前遺跡群　ロクロ台石の写真撮影

2020（令和２）年度

石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡

４月 １日　長野国道と受委託契約を締結
　　本格整理作業開始
４月 ６日　整理作業員本格整理作業開始
６月 ４日　遺物写真撮影業務委託契約
７月 ３日　遺物写真撮影業務委託完了
９月25日　科学分析業務委託契約（樹種同定）
10月21日　京都大学名誉教授茂原信生氏ほか２氏による出土骨鑑定指導（～23 日）
３月10日　京都大学名誉教授茂原信生氏ほか２氏による出土骨鑑定指導（～12 日まで）
３月11日　科学分析委託業務完了（樹種同定）
３月19日　整理作業員本格整理作業終了
　　本年度委託契約終了
３月31日　本格整理作業終了

石川条里遺跡　木製品の実測

2021（令和３）年度

石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡

４月 １日　長野国道と受委託契約を締結
　　本格整理作業開始
４月 ６日　整理作業員本格整理作業開始
４月15日　発掘作業開始（石川条里遺跡）
４月20日　測量業務委託契約（石川条里遺跡）
４月22日　長野国道、県教委と調査区内支障物件等について協議
５月20日　鍬形兜前立出土（石川条里遺跡）
５月26日　測量委託業者による空中写真撮影（石川条里遺跡）
　　長野市立更北中学校見学（石川条里遺跡）
６月 １日　信州大学理学部特任教授保柳康一氏と科学分析業務委託契約（土壌分析）（石川条里遺跡）
６月 ７日　発掘作業終了（石川条里遺跡）
　　基礎整理作業開始（石川条里遺跡）
６月29日　Ｘ線透過撮影（石川条里遺跡）（～７月 21 日）
６月30日　基礎整理作業終了（石川条里遺跡）
７月16日　測量業務委託完了（石川条里遺跡）
10月 ７日　遺物実測・トレース業務委託契約（石器）
11月18日　長野国道と契約・協定について協議
12月 ７日　京都大学名誉教授茂原信生氏ほか２氏による出土骨鑑定指導（～９日）
３月 ７日　京都大学名誉教授茂原信生氏ほか２氏による出土骨鑑定指導（～９日）
３月 ９日　遺物実測・トレース業務委託完了（石器）
３月18日　整理作業員本格整理作業終了
３月19日　『掘るしん 2022』で出土品展示（～６月 12 日）
３月31日　信州大学理学部特任教授保柳康一氏による科学分析業務委託完了（土壌分析）（石川条里遺跡）
　　本格整理作業終了
　　本年度委託契約終了

2022（令和４）年度

石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡

４月 １日　長野国道と受委託契約を締結
　　本格整理作業開始
４月 ６日　整理作業員本格整理作業開始
８月29日　京都大学名誉教授茂原信生氏ほか２氏による出土骨鑑定指導（～８月 31 日）
10月 ７日　遺物写真撮影業務委託契約
12月16日　遺物写真撮影業務委託完了
１月19日　科学分析業務委託契約（元素マッピング分析）
　　科学分析業務委託完了（元素マッピング分析）
３月17日　整理作業員本格整理作業終了
　　本年度委託契約終了
３月31日　本格整理作業終了

2023（令和５）年度

石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡

４月 １日　長野国道と受委託契約を締結
　　本格整理作業開始
４月 ６日　整理作業員本格整理作業開始
５月30日　京都大学名誉教授茂原信生氏ほか２氏による出土骨鑑定指導（～６月１日）
10月17日　遺物応急的保存処理業務委託契約
３月15日　報告書刊行
３月25日　遺物応急的保存処理業務委託完了
３月29日　本年度委託契約終了

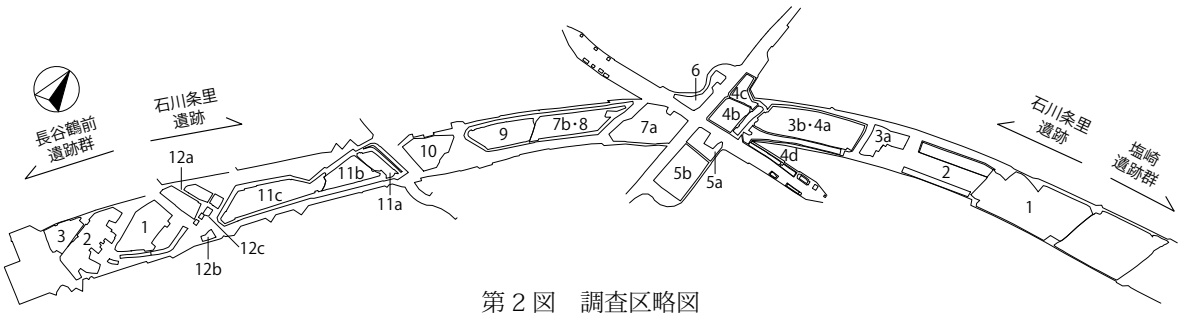
第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

遺跡の立地：石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群は長野市南部の千曲川左岸の塩崎地区に所在する。南から流れ下った千曲川は長野盆地に入って塩崎地区北部周辺で北側からの犀川扇状地に押されて大きく北東方向に流れを変える。この千曲川に沿って塩崎遺跡群が立地する自然堤防、石川条里遺跡が立地する後背低地、長谷鶴前遺跡群が立地する篠山山麓の崖錐地形や小規模な扇状地が並列する。石川条里遺跡の立地する後背低地は千曲川沿いの自然堤防に沿って南西―北東方向に細長く弧状に延びる。後背低地内は一様に低い地形ではなく、北側の聖川周辺は低く、南側の低地は高く島状の小微高地が点在する。これは後背低地南端が千曲川の蛇行する攻撃面にあたり、そこにちょうど千曲川支流の佐野川が合流して段丘が途切れて低いため、破堤洪水等により形成されたと思われる直線的な洪水性土砂が後背低地南部へ流れ込みやすく、それらによって形成された砂堆（シュートバー）とみられる。

調査区の地形：今回、石川条里遺跡南部の後背低地を横断するように調査したが、その現地表面は自然堤防寄りの１区、２区周辺が最も低く、緩やかに東側へ傾斜する。発掘調査では、調査区内は微視的に東端部、中央部、西部３つの地形環境に分けられることが判明した。東端部１区の最下部は自然堤防端部にかかるが、そこから西の 7a 区周辺までの中央部が後背低地の比較的低い部分にあたり、ここは千曲川の砂層等の比較的粒径の粗い堆積物が堆積する傾向が認められ、地下水位が低く木質遺物や泥炭層が残りにくい状況であった。また、とくに 3b・4a 区西側では、島状の僅かに高い微高地が所々にみられ、２区周辺も基本土層Ⅵ層の堆積で僅かに高い地形に変わっており、地形変化が著しい場所であったとみられる。西部 7b・８区～10 区は、遺跡西方の谷から平地に向かって形成される扇状地先端が千曲川の堆積層分布と接触する部分にあたり、弥生時代水田層より下層には山から運ばれた粗い砂質堆積物が認められた。地下水位が高く木質遺物も遺存し、泥炭層も発達する。また、11 区～長谷鶴前遺跡群は山地と扇状地に挟まれた窪地で、千曲川堆積層も扇状地の堆積物も少なく弥生時代中期後半の水田層相当層より下層は泥炭層が発達する。

洪水と干害：遺跡の所在する塩崎地区は、近世において千曲川洪水と干害に悩まされたことが知られる。洪水は千曲川に隣接することによるが、干害は塩崎地区内に取水源となる中小河川が少ないためである。塩崎地区西側の篠山は長野盆地西遠断層群の南端延長先にあたるためか、山麓には長い谷があまり発達せず小規模な沢しかない。北部には西側山地から流れ下る聖川があるが、上流域が隣接した石川地区にあるため、塩崎地区での取水がままならなかったものといえる。



第２図　調査区略図

国土地理院電子地形図25000『稲荷山』『信濃松代』『信濃中条』『長野』を使用

第３図　遺跡位置図（１：50,000）

第２節　歴史的環境

同心円的な景観：石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群の所在する長野市南部塩崎地区は、長野県内でも有数の弥生～古墳時代の遺跡密集地域として知られる。後背低地の水田遺跡である石川条里遺跡を中心に、自然堤防上に塩崎遺跡群、篠ノ井遺跡群、山手の崖錐地形に長谷鶴前遺跡群等の弥生時代～平安時代の広大な集落遺跡が取り巻く。その背後の山地や山麓には前方後円墳の川柳将軍塚古墳、中郷古墳、前方後方墳の姫塚古墳、大型円墳の越将軍塚古墳、渡来系の馬具を出土した飯綱社古墳をはじめ、後期古墳も数多く分布し、自然堤防上の千曲川脇では篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群で古墳時代中期の円墳周溝が確認された。このように塩崎地区では水田遺跡である石川条里遺跡を中心に、広大な集落遺跡群が取り巻き、さらに古墳時代ではその外側の山地や自然堤防端部に墓域が広がる同心円的な景観が形成されている。石川条里遺跡が中心にあることから、この景観は稲作中心の弥生時代以後に形づくられたといえる。なお、先立つ縄文遺跡は西側山地内に点在し、低地では石川条里遺跡（中央自動車道長野線、以下「高速道地点」という。）で縄文前期の遺跡が確認されたのみであるが、千曲川対岸の屋代遺跡群のような川沿いの低地に立地する縄文遺跡が厚い堆積土に覆われている可能性がある。

弥生時代～古墳時代の様相：これまでの調査で、千曲川沿岸地帯の弥生時代～古墳時代の遺跡は全期を通じて遺跡が密集・継続しておらず、時期によって粗密がある。縄文晩期には本格的な人間活動が篠ノ井遺跡群で確認され、弥生時代の直前には現地形の自然堤防が形成されたと捉えられている。なお、この自然堤防上の篠ノ井遺跡群では縄文時代晩期の土器棺墓が確認され、篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群内でも弥生時代前期末頃の土器が点在して出土している。なかでも塩崎遺跡群では中期初頭までの土器棺再葬墓、貯蔵穴と共に遠賀川系の土器が一定量出土した。また、篠ノ井遺跡群では人骨集積遺構、長谷鶴前遺跡群内の鶴萩七尋岩陰遺跡では土器棺再葬墓とみられる条痕文系壺が出土した。弥生時代中期中葉では塩崎遺跡群でかつて伊勢宮式と呼ばれた土器群と共に、少数の竪穴建物跡や数多くの木棺墓群がみつかっている。つづく栗林１式期頃には塩崎遺跡群、篠ノ井遺跡群等で集落跡が捉えられている。栗林２式期は不明瞭ながら、栗林３式期頃の集落跡は塩崎遺跡群に分布し、石川条里遺跡で確認された水田関連遺構で最も古いものが弥生時代中期後半にあたる。また、既出資料ながら塩崎遺跡群では平形銅剣の先端部も発見されている。続く弥生時代後期前半の集落遺構は塩崎遺跡群のみであるが、弥生時代後期では篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群、長谷鶴前遺跡群等で遺構が広範囲に分布し、篠ノ井遺跡群では環濠集落と隣接して周溝墓群や鉄剣・鉄釧を出土した墓坑等が分布し、新幹線地点では数多くの円形周溝墓が集中する様相が確認される。また、当該期では北陸系の土器が流入していることが複数の遺跡で確認され、石川条里遺跡の高速道地点では弥生時代後期の水田跡が広範囲に確認されている。

古墳時代前期も同様に篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群で集落跡、石川条里遺跡高速道地点では当該期の水田跡が確認されている。また、高速道地点の石川条里遺跡北部の微高地では古墳時代前期後半頃とみられる幅10ｍの溝跡に囲繞された居館跡、栁下地点でも居館跡とみられる遺構が確認された。ほぼ同時期の川柳将軍塚古墳との関連も注目される。古墳時代中期は塩崎遺跡群で集落跡が点在し、塩崎遺跡群、篠ノ井遺跡群では古墳周溝も確認されるが、集落跡の密度は低く、これに続く古墳時代後期の集落跡や水田遺構は確認されていない。ところが、古墳時代後期末頃から再び集落跡が篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群等で広範囲に認められる。

古代の様相：その後奈良時代中頃に一旦不明瞭となるが、これは長野盆地一帯で一般的な傾向のようである。一方では長谷鶴前遺跡群等のような短期かつ小規模な集落跡の存在も確認されている。隣接する石川条里遺跡では当該期の水田遺構は不明瞭だが、遺物は出土しているので水田利用はあったとみられる。なお、篠ノ井遺跡群東端付近の現国道近くでは、奈良時代の平行する北西方向に延びる溝跡が確認されているが、当時国府が所在したとされる上田方面から千曲川を渡河した場所にあたる東山道支道の道路側溝の可能性がある。また、隣接した石川地区には石川条里遺跡北辺に接して古代寺院の上石川廃寺跡が所在する。

平安時代は石川条里遺跡に条里型水田がみられ、それを取り巻いて篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群、長谷鶴前遺跡群等で大規模な集落跡がみつかっており、篠ノ井遺跡群では瓦塔、仏像を型取った塼も出土している。石川条里遺跡の条里型水田は 888（仁和４）年とされる洪水で埋没し、その洪水直後には溝跡等が確認され水田復旧も試みられているようだが、集落跡は塩崎地区では確認されていない。11 世紀頃の土器等は自然堤防を中心に少量確認され、石川条里遺跡内でも新たな用水掘削も捉えられている。なお、平安時代には松本へ国府が移転し、越後国府と信濃国府を繋ぐ東山道支道が千曲川左岸に移ったとされるが、今のところ当該期の確実な遺構は見つかっていない。

中世～近世の様相：中世の遺跡では、遺存状態が悪く詳細不明ながら篠ノ井遺跡群等で井戸跡が確認され、現集落と重なった自然堤防上に集落跡が分布する可能性がある。また、平安時代末～鎌倉時代にかけて現代の道や土地境と同方位の溝跡が確認され、自然堤防部分も条里と異なる土地区画整備が施工されて耕地化が進んだとみられる。中世後期では石川条里遺跡の水田内の微高地に１辺 50m 四方の居館跡、今回の調査では長谷鶴前遺跡群南端で居館跡が確認されている。戦国時代の山城は塩崎城跡、塩崎城見山砦跡、塩崎新城（赤沢城跡）がある。当地域南に隣接する千曲市稲荷山にも上杉景勝が造ったとされる稲荷山城があったとされる。

また、遺跡ではないが、中世に遡る寺院として長谷寺、康楽寺がある。長谷寺は背後の山から 1151（仁平元）年に銘経筒が出土し、諏訪円忠寄進状にもその名がみえて平安時代末期から鎌倉時代には存在したことが知られる。伝承では長谷寺を建てた白助の屋敷跡と呼ばれる平坦地が篠山山中にあり、もともと観音信仰による山寺であった可能性がある。康楽寺は親鸞と行動を共にした西仏坊が東御市（旧東部町）に開いた寺が 16 世紀前半に当地に移転してきたとされる。武田信玄が越後に侵攻する際に野伏を出すように依頼した文書がある。また、石山合戦では北信で最も大量の兵糧米を本願寺へ送っていることも知られる。室町時代の紙本着色親鸞上人伝絵を伝え、江戸時代は「絵解の家」とも呼ばれた。これ以外に塩崎地区北側の石川地区の丘陵上に作見寺という寺があったとされ、その山麓に平安時代とされる石造多層塔が残されているが関係は不明である。

文献資料から見た塩崎地区：文献資料を交えて当地域の中世以後の様相を若干補っておく。平安時代に施工された条里型地割の水田は更級郡の石川条里遺跡、埴科郡の更埴条里遺跡、高井郡内の川田条里遺跡等で認められているが、いずれも同方位の同じ半折区画方法で、類似時期に信濃国府主導で施工されている可能性がある。発掘調査では９世紀末の洪水埋没以後の 11 世紀に再開発されると推定されるが、これ以後所領関係の変遷は不明瞭である。『吾妻鏡』には、1186（文治２）年の未納荘園として四ノ宮荘・石川荘が挙げられており、石川条里遺跡内は二つの荘園に分割されていたようである。このうち塩崎にあたる四ノ宮荘には鎌倉時代に地頭として諏訪氏一族（神氏）の四宮氏がいた。四宮氏は北条氏滅亡以後の 1335（建武２）年に中先代の乱に関連して船山守護所を襲った四宮川原の戦いに敗れ、以後は同じ諏訪氏

一族ながら室町幕府と結びついた諏訪円忠が地頭となる。その諏訪円忠は 1346（貞和２）年、四ノ宮荘北条を天龍寺へ寄進する目録を作成し、そこに水田の面積や現地名と対応する地名がみえる。ただ、石川条里遺跡南部の地名はなく調査区周辺の当該期の様相は不明である。また、この諏訪円忠の書状では一部守護小笠原氏関係の所領があったことが知られ、その関連からか信濃国内で諏訪大社造営の費用負担を割り当てた諏訪御符礼古書に、四ノ宮の頭役武士として 1459（長録３）年、小笠原氏配下とみられる「赤沢対馬代官千田源康信」の名がみえる。これ以後は赤沢氏の名はみえず、千田氏は 1469（応仁３）年にも記載されるが、1480（文明 12）年、四ノ宮では初代として桑原六郎次郎が現れ、家屋を新築したため御符の受け入れを延期したことが記される。この桑原氏は 1485（文明 17）年には塩崎貞光を名乗っているが、1479（文明 11）年まで四ノ宮の頭役で藤原幸光・藤原対馬守幸光・桑原対馬幸光等として記載される同じ「桑原」を冠する人物と同族なのか不明な点が多い。詳細は不明であるが、散在する所領を代官が監理していたが、地域的結合が強まる動きのなかで遠隔地所領が維持できなくなり、各地の土豪や代官が独立や新たな地域の関係を構築し、あるいは所領の争いが増えた変化を反映しているとみられる。これ以後、当地域は武田氏、織田氏、上杉氏の支配下となるが、塩崎氏は上杉氏支配時代に屋代氏と共に徳川氏に通じて反抗したが敗れて出奔し、当地域では清水氏等の土豪の名がみえるようになる。清水氏は配下の武士と共に塩崎衆と呼ばれ、やがて上杉氏の移封に従って転出するが、一族の一部は地元に残ったようである。

なお、当地域で行われた大きな戦闘として、1181（治承５）年、あるいは 1182（寿永元）年の木曽義仲と城氏の横田川原の合戦、1400（応永７）年の守護小笠原長秀の善光寺からの帰路を在地国人等が襲った大塔合戦がある。この時に塩崎城の名がみえ、その直後の幕府直轄領時代に細川氏が入国した際に 1403（応永 10）年に塩崎新城（赤沢城跡）に国人が立てこもった記録がある。戦国時代では、1564（永禄７）年、武田氏と上杉氏の川中島の合戦第５次戦では武田方が塩崎城に立て籠もっているが、にらみ合いが続いて大きな戦闘にはならなかったようである。また、『川中島戦記次第上杉家之記』では上杉方の中条氏が護衛した荷駄隊を塩崎の農民が襲っていることが記される。当地域は近世に善光寺街道が通過していたように、中信地域から善光寺へむかう道が東信から続く道と接続する交通の要所にあり、そこは各地域の勢力が接触した軍事的な要衝の地でもあったとみられる。

江戸時代には塩崎地区は幕府領となるが、千曲川に接するために千曲川氾濫と、中小河川がないために干害に悩まされた。特に干害は甚大な被害をもたらし、その対策として猪平、川越池等の溜池の構築や千曲川取水の明暦用水、塩崎用水が構築された。ただ、明暦用水も洪水で取水口が破壊されて途絶し、耕作地は荒れる一方ながら、人口は増え続けて次第に困窮し、18 世紀中頃には騒動も起こっている。こうしたなかで、次第に商品作物の栽培も増加し、幕末に千曲川堤防と塩崎用水が完成したことで、現在みえるような水田が広がる景観になったのだろう。

国土地理院電子地形図25000『稲荷山』『信濃松代』『信濃中条』『長野』を使用

第４図　周辺遺跡分布図（１：50,000）

第６表　周辺遺跡一覧

地図番号　１～156　長野市
地図番号 157～407　千曲市

地図番号	遺跡名	所在地	遺跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世	近代
1	**石川条里遺跡**	**篠ノ井**	**E-①**		○	○	○	○	○	○
2	石川方田遺跡群	篠ノ井	E-②		○	○	○			
3	**長谷鶴前遺跡群**	**篠ノ井**	**E-③**		○	○	○			
4	**塩崎遺跡群**	**篠ノ井**	**E-④**		○	○	○			
5	篠ノ井遺跡群	篠ノ井	E-⑤	○	○	○	○	○		
6	横田遺跡群	篠ノ井	E-⑥		○	○	○			
7	上石川遺跡	篠ノ井	E-011		○	○				
8	南宮遺跡	篠ノ井・川中島	E-032				○			
9	将軍塚古墳	篠ノ井	E-104			○				
10	腰村古墳群（３基）	篠ノ井	E-106			○				
11	腰村１号墳(腰村前方後円墳)	篠ノ井	E-106-1			○				
12	境内古墳群（３基）	篠ノ井	E-107			○				
13	境内１号墳(中尾山古墳)	篠ノ井	E-107-1			○				
14	境内２号墳(湯沢尻古墳)	篠ノ井	E-107-2			○				
15	上大久保１号墳	篠ノ井	E-110-01			○				
16	布施塚古墳群（３基）	篠ノ井	E-112			○				
17	布施塚１号墳	篠ノ井	E-112-1			○				
18	布施塚２号墳	篠ノ井	E-112-2			○				
19	布施塚３号墳	篠ノ井	E-112-3			○				
20	海道北山古墳	篠ノ井	E-113			○				
21	姫塚古墳	篠ノ井	E-118			○				
22	川柳将軍塚古墳	篠ノ井	E-119			○				
23	飯綱社古墳	篠ノ井	E-120			○				
24	大田和古墳群（３基）	篠ノ井	E-121			○				
25	宮下古墳群（２基）	篠ノ井	E-122			○				
26	鐙坂古墳群（６基）	篠ノ井	E-125			○				
27	囲内古墳(丸山４号古墳)	篠ノ井	E-127			○				
28	池の上古墳(池ノ上古墳)	篠ノ井	E-128			○				
29	中郷古墳(中郷神社古墳)	篠ノ井	E-130			○				
30	薬師山古墳群（７基）	篠ノ井	E-132			○				
31	将軍山古墳	篠ノ井	E-133			○				
32	鶴萩古墳	篠ノ井	E-137			○				
33	越将軍塚古墳	篠ノ井	E-141			○				
34	宮之前１号古墳	篠ノ井	E-142			○				
35	宮之前２号古墳	篠ノ井	E-143			○				
36	169 横田城跡	篠ノ井	史跡 - 市 01					○		
37	須立城跡	篠ノ井	E-201					○		
38	有旅城跡(伝茶臼山陣跡)	篠ノ井	E-202					○		
39	小松原城跡	篠ノ井	E-203					○		
40	篠の城跡(篠ノ城跡)	篠ノ井	E-204					○		
41	大塔城跡(大当館跡)	篠ノ井	E-205					○		
42	二ツ柳城跡	篠ノ井	E-206					○		
43	石川城跡	篠ノ井	E-207					○		
44	塩崎城跡	篠ノ井	E-208					○		
45	見山砦跡	篠ノ井	E-209					○		
46	塩崎新城(赤沢城跡)	篠ノ井	E-210					○		
47	布施城跡	篠ノ井	E-211					○		
48	横田城跡(会館跡)	篠ノ井	E-212					○		
49	小森館跡	篠ノ井	E-214					○		
50	宴の城跡	篠ノ井	E-215					○		
51	有旅の城山	篠ノ井	E-216					○		
52	有旅古城跡	篠ノ井	E-217					○		
53	湯の入神社城跡	篠ノ井	E-219					○		
54	宮の下遺跡	信更町	D-051	○		○	○			
55	藤塚古墳群（５基）	信更町	D-103			○				

地図番号	遺跡名	所在地	遺跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世	近代
56	藤塚１号墳?	信更町	D-103-1			○				
57	藤塚２号墳?	信更町	D-103-2			○				
58	藤塚３号墳?	信更町	D-103-3			○				
59	藤塚４号墳?	信更町	D-103-4			○				
60	藤塚５号墳?	信更町	D-103-5			○				
61	白山塚古墳	信更町	D-104			○				
62	赤田大塚古墳群（２基）	信更町	D-105			○				
63	赤田大塚古墳(不自然)	信更町	D-105-1			○				
64	赤田２号墳	信更町	D-105-2			○				
65	田野口大塚古墳群（４基）	信更町	D-106			○				
66	田野口大塚古墳(前方後方墳)	信更町	D-106-1			○				
67	西の城・東の城跡	篠ノ井	D-209				○			
68	新山城跡	篠ノ井	D-222					○		
69	田牧居帰遺跡	川中島	H-005				○			
70	上九反遺跡	稲里町	H-008			○	○			
71	内後館跡	川中島	H-201					○		
72	於下館跡	川中島	H-202					○		
73	清野古墳群	松代町	F-101			○				
74	伝妻女山陣跡	松代町	F-212					○		
75	上手沖遺跡	信更町	E-002	○						
76	湯沢尻遺跡	篠ノ井	E-003	○	○					
77	光林寺裏遺跡	篠ノ井	E-004		○					
78	寺内遺跡	篠ノ井	E-005	○	○		○			
79	新田遺跡	篠ノ井	E-006	○			○			
80	宮下遺跡	篠ノ井	E-007				○			
81	湯の入上遺跡	篠ノ井	E-008		○					
82	上石川廃寺跡	篠ノ井	E-012				○			
83	伊勢宮遺跡	篠ノ井	E-013		○	○	○			
84	松節遺跡	篠ノ井	E-014		○	○	○			
85	町屋敷遺跡	篠ノ井	E-015		○	○	○			
86	中条遺跡	篠ノ井	E-016		○	○	○			
87	一本木遺跡	篠ノ井	E-017		○	○	○			
88	散畑屋敷遺跡	篠ノ井	E-018		○	○	○			
89	河越池遺跡	篠ノ井	E-019		○		○			
90	上見林遺跡	篠ノ井	E-020	○		○	○			
91	下見林遺跡	篠ノ井	E-021				○			
92	クネ下遺跡	篠ノ井	E-022		○	○	○			
93	中郷遺跡	篠ノ井	E-023				○			
94	観音下遺跡	篠ノ井	E-025	○						
95	戸部之間遺跡	篠ノ井	E-026		○	○	○			
96	立町遺跡	篠ノ井	E-027				○			
97	会下遺跡	篠ノ井	E-028				○			
98	下辺遺跡	篠ノ井	E-029		○					
99	猪平遺跡	篠ノ井	E-030	○			○			
100	富士宮遺跡	篠ノ井	E-031		○	○	○			
101	築地遺跡	川中島	E-033				○			
102	殿屋敷遺跡	篠ノ井	E-035		○	○	○	○		
103	篠ノ井南条遺跡	川中島	E-036				○	○		
104	山田遺跡	篠ノ井	E-037	○	○	○				
105	東組遺跡	篠ノ井	E-038			○				
106	大久保遺跡	篠ノ井	E-039	○						
107	十二中山遺跡	篠ノ井	E-041	○						
108	東横田遺跡	篠ノ井	E-043			○				
109	北石津古墳	篠ノ井	E-101			○				
110	六部塚古墳	篠ノ井	E-102			○				

地図番号　1～156　長野市
地図番号 157～407　千曲市

地図番号	遺跡名	所在地	遺跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世	近代
111	駕籠石古墳	篠ノ井	E-103			○				
112	南石津古墳	篠ノ井	E-105			○				
113	岡田裏古墳	篠ノ井	E-108			○				
114	寺内古墳	篠ノ井	E-109			○				
115	上大久保古墳群	篠ノ井	E-110			○				
116	大平古墳群	篠ノ井	E-111			○				
117	柳沢古墳群	篠ノ井	E-114			○				
118	山畑新田古墳群	篠ノ井	E-115			○				
119	藤塚古墳	篠ノ井	E-116			○				
120	湯の入古墳群	篠ノ井	E-117			○				
121	(石川)城古墳	篠ノ井	E-123			○				
122	虚空蔵平古墳群	篠ノ井	E-124			○				
123	丸山古墳群	篠ノ井	E-126			○				
124	八ツ塚古墳群	篠ノ井	E-129			○				
125	八幡宮古墳	篠ノ井	E-131			○				
126	大伯母古墳	篠ノ井	E-134			○				
127	小日向古墳	篠ノ井	E-135			○				
128	秋葉山古墳	篠ノ井	E-136			○				
129	平古墳	篠ノ井	E-138			○				
130	城山古墳	篠ノ井	E-139			○				
131	東谷古墳	篠ノ井	E-140			○				
132	王塚遺跡	篠ノ井	E-144			○				
133	八石古墳	篠ノ井	E-145			○				
134	四十二古墳	篠ノ井	E-148			○				
135	茶臼砦跡	篠ノ井	E-218					○		
136	横田砦跡	篠ノ井	E-220					○		
137	四ノ宮氏館跡	篠ノ井	E-221					○		
138	寺屋敷遺跡	篠ノ井	D-047				○			
139	卒塔原遺跡	篠ノ井	D-048	○						
140	山田屋敷遺跡	篠ノ井	D-049	○			○			
141	薬山遺跡	信更町	D-050				○			
142	小山田池遺跡	篠ノ井	D-052	○	○					
143	戸口遺跡	信更町	D-059				○			
144	大塚遺跡	信更町	D-079	○						
145	小山田藤塚古墳	篠ノ井	D-108			○				
146	五輪塚	川中島	H-001					○		
147	於下遺跡	川中島	H-006					○		
148	長峰遺跡	川中島	H-007					○		
149	合戦場遺跡	川中島	H-009			○				
150	広田城跡(昌龍寺)	稲里町	H-204					○		
151	藤牧城跡(東昌寺)	稲里町	H-205					○		
152	富部氏館跡	川中島	H-206						○	
153	鍛冶屋敷跡	川中島	H-207						○	
154	四ツ屋祭祀遺跡	松代町	F-001			○				
155	道島廃寺跡	松代町	F-002				○	○		
156	四ツ屋遺跡	松代町	F-003		○	○	○			
157	大峡Ａ古墳	倉科・生萱	8-1		○					
158	大峡Ｂ古墳	倉科・生萱	8-2			○				
159	石杭古墳・石杭Ａ古墳	倉科	9-1・2			○				
160	田端Ａ古墳	倉科	10-1			○				
161	田端Ｂ古墳	倉科	10-2			○				
162	田端Ｃ古墳	倉科	10-3			○				
163	倉科将軍塚古墳	倉科・生萱	11			○				
164	倉科２号古墳	倉科・生萱	11-1			○				
165	倉科３号古墳	倉科・生萱	11-2			○				

地図番号	遺跡名	所在地	遺跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世	近代
166	白塚古墳	森	12			○				
167	森北山遺跡	森	13	○	○	○	○			
168	県山古墳	森	14			○				
169	中ノ宮遺跡	森	15		○	○				
170	旧森小学校遺跡	森	16			○	○			
171	岡森遺跡	森	17		○	○	○			
172	岡地古墳	森	18			○				
173	森将軍塚古墳	森	19			○				
174	森２号古墳	森	20			○				
175	森３号古墳	森	20-1			○				
176	森４号古墳	森	20-2			○				
177	森５号古墳	森	20-3			○				
178	森６号古墳	森	20-4			○				
179	森７号古墳	森	20-5			○				
180	森８号古墳	森	20-6			○				
181	森９号古墳	森	20-7			○				
182	森 10 号古墳	森	20-8			○				
183	森 11 号古墳	森	20-9			○				
184	森 12 号古墳	森	20-10			○				
185	森 13 号古墳	森	20-11			○				
186	森 14 号古墳	森	20-12			○				
187	大岩古墳	寂蒔	21-1			○				
188	寂蒔Ａ古墳	寂蒔	21-2			○				
189	寂蒔Ｂ古墳	寂蒔	21-3			○				
190	寂蒔Ｃ古墳	寂蒔	21-4			○				
191	寂蒔Ｄ古墳	寂蒔	21-5			○				
192	法正寺遺跡	寂蒔	22			○	○			
193	西王子遺跡	寂蒔	23			○	○			
194	土井合遺跡	桜堂	24			○				
195	打沢古墳	打沢	25-1			○				
196	姫塚古墳	打沢	25-2			○				
197	打沢Ａ古墳	打沢	25-3			○				
198	打沢Ｂ古墳	打沢	25-4			○				
199	打沢Ｃ古墳	打沢	25-5			○				
200	打沢Ｄ古墳	打沢	25-6			○				
201	有明山将軍塚古墳	小島	26			○				
202	東山神社古墳	小島	27-1			○				
203	お坊塚古墳	小島	27-2			○				
204	粟佐遺跡群	粟佐	28		○	○	○	○		
205	五輪堂遺跡	粟佐	28-1		○	○	○			
206	南沖遺跡	粟佐	28-2			○	○			
207	宮西遺跡	粟佐	28-3			○	○			
208	粟佐神社遺跡	粟佐	28-4			○	○			
209	南村遺跡	粟佐	28-5			○	○			
210	戸崎遺跡	粟佐	28-6			○	○			
211	接待遺跡	粟佐	28-7			○	○			
212	巾下遺跡	粟佐	28-8				○			
213	諏訪宮遺跡	粟佐	28-9			○	○	○		
214	琵琶尻遺跡	粟佐	28-10			○	○			
215	北村遺跡	粟佐	28-11		○	○	○			
216	北村浦畑遺跡	粟佐	28-12		○	○	○			
217	宮裏遺跡	屋代	28-13		○	○	○			
218	中田島遺跡	屋代	28-14			○	○			
219	東沖遺跡	杭瀬下	28-15			○	○			
220	琵琶島遺跡	小島	28-16				○			

地図番号　１～156　長野市
地図番号 157～407　千曲市

地図番号	遺跡名	所在地	遺跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世	近代
221	更埴条里水田址	雨宮	29		○	○	○	○		
222	屋代清水遺跡	屋代	29-1	○	○	○	○	○		
223	町田遺跡	雨宮	30		○	○	○			
224	屋代遺跡群	屋代	31	○	○	○	○	○		
225	大塚遺跡	屋代	31-1			○	○	○		
226	地之目遺跡	屋代	31-2				○			
227	一丁田尻遺跡	屋代	31-3				○	○		
228	馬口遺跡	屋代	31-4			○	○			
229	荒井遺跡	屋代	31-5		○	○	○	○		
230	松ヶ崎遺跡	屋代	31-6		○	○	○	○		
231	城ノ内遺跡	屋代	31-7	○	○	○	○	○		
232	古道遺跡	屋代	31-8			○	○			
233	一丁田遺跡	屋代	31-9			○	○	○		
234	竜王遺跡	屋代	31-10		○	○	○			
235	生仁遺跡	雨宮	31-11	○	○	○	○	○		
236	生仁館跡	雨宮	31-12				○			
237	大境遺跡	屋代	31-13	○	○	○	○	○		
238	下条遺跡	雨宮	31-14		○	○	○	○		
239	灰塚遺跡	雨宮	31-15		○	○	○	○		
240	屋代寺跡	雨宮	31-16				○			
241	窪河原遺跡	雨宮	31-17		○	○	○	○	○	
242	北野遺跡	雨宮	31-18		○	○	○			
243	北中原遺跡	屋代	31-19				○			
244	大宮遺跡	雨宮	31-20		○	○	○			
245	町浦遺跡	雨宮	31-21	○	○	○	○	○		
246	郷津遺跡	屋代	31-22		○	○	○			
247	島遺跡	生萱	32-1		○	○	○			
248	道前遺跡	生萱	32-2		○	○	○			
249	生萱北山古墳群	生萱	33			○				
250	唐崎遺跡	雨宮	34		○	○	○			
251	土口謡坂遺跡	土口	35		○	○	○			
252	日ノ尾遺跡	土口	36		○	○	○	○		
253	日ノ尾古墳	土口	37			○				
254	老ノ塚古墳	土口	38			○				
255	土口遺跡	土口	39	○	○	○	○			
256	古大穴神社古墳	土口	40			○				
257	土口将軍塚古墳	土口	41			○				
258	五量眼塚古墳	土口	42			○				
259	堂平Ａ～Ｈ古墳	土口	43-1～8				○			
260	坂山古墳	生萱	44			○				
261	坪山古墳	八幡	54			○				
262	吉野塚古墳	八幡	55			○				
263	上人塚古墳	八幡	56			○				
264	八幡丸山古墳	八幡	57			○				
265	糠塚古墳	八幡	58			○				
266	矢先山下古墳	八幡	59			○				
267	矢先山古墳	八幡	60			○				
268	矢先山経塚	八幡	61				○			
269	矢先山遺跡	八幡	61-1	○	○	○				
270	山ノ神古墳	八幡	62			○				
271	こがの峯古墳群	八幡	63			○				
272	塚ノ口古墳	桑原	69			○				
273	返町遺跡	桑原	71-1				○		○	
274	後安遺跡	桑原	71-2				○			
275	宮沖遺跡	桑原	71-3				○			

地図番号	遺跡名	所在地	遺跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世	近代
276	湯屋遺跡	桑原	71-4		○	○	○			
277	駒清水遺跡	桑原	71-5				○			
278	小坂西遺跡	桑原	72	○	○	○	○	○		
279	遠見塚古墳	桑原	73			○				
280	元町遺跡	桑原	74	○	○	○	○			
281	小坂城跡	桑原	75					○		
282	塚穴古墳	稲荷山	76			○				
283	一本松古墳	稲荷山	77			○				
284	湯ノ崎遺跡	稲荷山	78		○	○	○	○		
285	東谷古墳	稲荷山	79		○					
286	湯ノ崎古墳群	稲荷山	80			○				
287	八幡遺跡群	八幡	85		○	○	○	○	○	
288	大伝寺遺跡	八幡	85-1				○	○		
289	成沢遺跡	八幡	85-2				○			
290	中道遺跡	八幡	85-3				○			
291	北堀遺跡	八幡	85-4				○			
292	御頭免遺跡	八幡	85-5				○			
293	稲村遺跡	八幡	85-6				○		○	
294	青木遺跡	八幡	85-7		○	○	○	○		
295	外くね遺跡	八幡	85-8				○			
296	六反田遺跡	八幡	85-9		○	○	○			
297	横まくり遺跡	八幡	85-10		○	○	○			
298	志川遺跡	八幡	85-11				○			
299	真光寺遺跡?	八幡	85-12	○			○			
300	北なめり石遺跡	八幡	85-13			○	○			
301	田端遺跡	八幡	85-14				○			
302	北稲付遺跡	八幡	85-15			○				
303	社宮司遺跡	八幡	85-16				○			
304	大道遺跡	八幡	85-17			○	○			
305	赤坂遺跡	八幡	86	○		○	○			
306	東中曽根遺跡	八幡	89			○	○			
307	稲荷山城跡	稲荷山	91					○		
308	検見塚古墳	桑原	92			○				
309	小坂塚古墳	桑原	93			○				
310	小坂東遺跡	桑原	94		○	○	○			
311	治田池遺跡	稲荷山	95	○	○	○	○			
312	野高場遺跡	稲荷山	96		○	○	○			
313	町屋敷遺跡	稲荷山	97				○			
314	柳下遺跡	八幡	102				○			
315	峯遺跡	八幡	103			○	○			
316	宮川遺跡	八幡	104		○	○	○			
317	峯謡坂遺跡	八幡	105		○	○	○			
318	西中曽根遺跡	八幡	106		○	○	○			
319	舞台遺跡	八幡	107		○	○	○			
320	姨捨遺跡	八幡	108			○	○			
321	杉ノ木古墳	八幡	109			○				
322	姨捨塚穴古墳	八幡	110			○				
323	坪山Ａ遺跡	八幡	111	○	○	○	○			
324	坪山Ｂ遺跡	八幡	112	○	○	○	○			
325	丸山遺跡	八幡	114					○		
326	下吉野Ｂ遺跡	八幡	116				○			
327	下吉野Ｃ遺跡	八幡	117		○	○	○	○		
328	下吉野Ｃ-1 遺跡	八幡	117-1					○		
329	下吉野Ｃ-2 遺跡	八幡	117-2				○	○		
330	東條遺跡	八幡	118		○	○	○	○		

地図番号　1 ～ 156　長野市
地図番号 157 ～ 407　千曲市

地図番号	遺跡名	所在地	遺跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世	近代
331	外西川原遺跡	八幡	119		○	○	○	○		
332	石原Ａ遺跡	八幡	120	○			○	○		
333	石原Ｂ遺跡	八幡	121				○			
334	元町焼窯址	桑原	131							○
335	堂河原遺跡	杭瀬下	140				○		○	
336	田中沖遺跡	杭瀬下	141		○	○	○			
337	来光塚遺跡	新田	142				○			
338	西上川原遺跡	新田	143				○			
339	有明山旗塚群	打沢	144					○		
340	新田遺跡	森	145						○	
341	南上平古墳	森	146			○				
342	清水製鉄址	森	147	○	○	○	○			
343	清水製鉄１号古墳	森	147-1			○				
344	過上池遺跡	過上池	148		○	○	○			
345	屋代口遺跡	森	149				○			
346	鷲尾城跡	倉科	150					○		
347	南棄水遺跡	倉科	152		○	○	○			
348	稲玉遺跡	倉科	153		○	○	○			
349	倉科古屋遺跡	倉科	154		○	○	○			
350	鳥居町遺跡	倉科	155			○	○			
351	倉科北山遺跡	倉科	156				○			
352	原経塚	倉科	157					○		
353	十二様祭祀跡	倉科	158						○	
354	南正徳遺跡	倉科	160				○			
355	虚空蔵山Ａ古墳	桜堂	164-1			○				
356	虚空蔵山Ｂ古墳	桜堂	164-2			○				
357	大岩遺跡	寂蒔	165	○						
358	大峡遺跡	倉科	166			○	○			
359	小島窪田遺跡	小島	167				○			
360	武台遺跡	小島	168				○			
361	水引遺跡	桜堂	169				○			
362	欠口遺跡	桜堂	170				○			
363	桜堂西沖遺跡	桜堂	171			○				
364	桜田遺跡	桜堂	172			○	○			
365	大坈遺跡	打沢	173		○	○	○			
366	大築山遺跡	打沢	174				○			
367	中島遺跡	鋳物師屋	175			○	○			
368	花岡遺跡	鋳物師屋	176		○					
369	鋳物師屋清水遺跡	鋳物師屋	177				○			
370	鋳物師屋遺跡	鋳物師屋	178		○	○	○			
371	舟山遺跡	寂蒔	179			○	○			
372	天木下遺跡	寂蒔	180			○	○			
373	高河原遺跡	寂蒔	181				○			
374	一重山御岳神社古墳	屋代	182			○				
375	屋代城跡	屋代	183					○		
376	大穴遺跡	森	184	○	○	○	○			
377	大穴古墳（１号～６号）	森	184-1 ～ 6				○			
378	横田島遺跡	雨宮	185			○	○			
379	鳥見山古墳	生萱	186			○				
380	朝日城跡	土口・生萱	187					○		
381	権現山古墳	生萱	188			○				
382	天城城跡	土口・生萱	189					○		
383	本誓寺遺跡	生萱	190		○	○	○			
384	生萱石原遺跡	生萱	191		○	○	○			
385	土口北山Ａ～Ｇ古墳	土口	193-1 ～ 7				○			

地図番号	遺跡名	所在地	遺跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世	近代
386	土口北山旗塚群	土口	194					○		
387	堂平大塚古墳	土口	195			○				
388	万年堂古墳	土口	196			○				
389	土口東遺跡	土口	197			○	○			
390	万年堂遺跡	土口	198			○	○			
391	堂平遺跡	土口	199				○			
392	埜遺跡	土口	200			○	○			
393	土口北山遺跡	土口	201					○		
394	土口北山製鉄址	土口	202				○	○		
395	八刃遺跡	土口	203					○		
396	西久保瓦窯址	八幡	204						○	
397	西久保遺跡	八幡	205				○			
398	小島遺跡	桜堂	206		○	○	○			
399	寺山遺跡	桑原	208				○			
400	白石遺跡	八幡	209			○	○			
401	大峰経塚	森	210				○	○		
402	生萱水田址	生萱	211-1				○	○	○	
403	倉科水田址	倉科	211-2				○	○	○	
401	県山城跡	森	212					○		
405	武水別神社遺跡	八幡	213					○	○	
406	松田館跡	八幡	214					○	○	
407	南殿入古窯址	森	215				○			

遺跡番号は所在する長野市・千曲市の遺跡地図の番号を示す

第３章　石川条里遺跡

第１節　遺跡の概要

石川条里遺跡は長野市南部の篠ノ井塩崎・石川・二ツ柳地区に及ぶ千曲川左岸の後背低地に立地する広大な水田遺跡である。ここにはかつて地表面に条里遺構を思わせる畦区画が認められ、古代条里の名残として「篠ノ井条里」（森嶋ほか 1978）、あるいは良好に残る石川地区の名を冠して「石川条里」ともよばれていた。条里遺構の発掘調査を 1961 年に先立って行った更埴条里遺跡では、地表面下に埋没した古代水田跡が確認され、地表の畦区画は古代条里そのものではないことが判明しており、そのためか 1982 年から行った市教委による発掘調査の報告書では「石川条里的遺構」と呼称されている。この発掘調査では平安時代洪水砂層に埋もれた水田跡が確認され、畦区画は方位を合わせた長地区画と推定された。また、条里水田下層で古墳時代の水田跡が確認されたこともあったためか、1989 年の市教委４次調査報告書では水田遺跡「石川条里遺跡」の名称に変更されている。

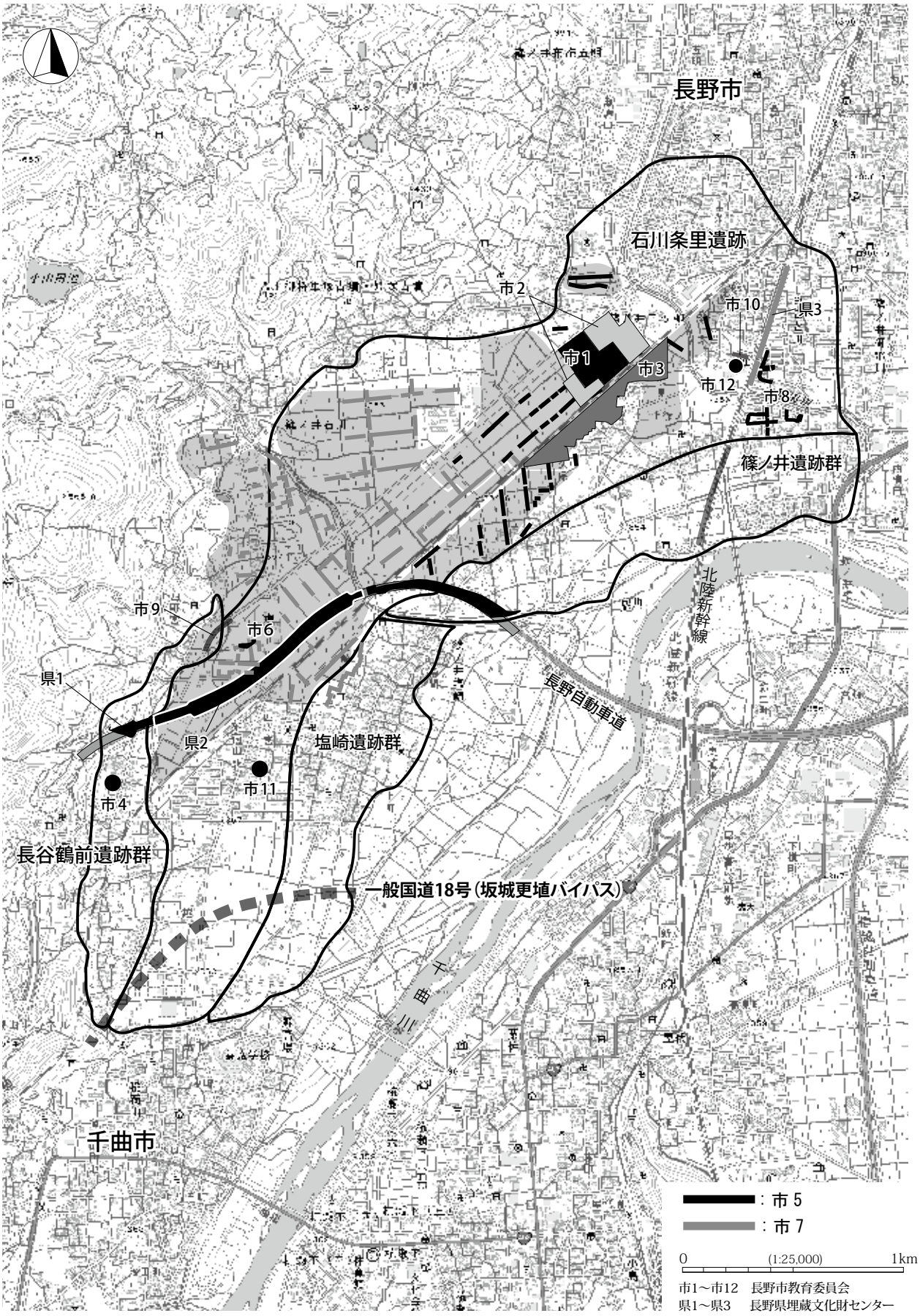
石川条里遺跡の範囲は現在、地表面に条里地割を残す石川・塩崎地区北部のみならず、後背低地を含む広域にわたると捉えられている。古代水田遺構の範囲は、東側は自然堤防まで、長野新幹線整備関連の調査によってしなの鉄道東側にまで広がる可能性が明らかにされ、西側は 1994 年報告の市教委８次調査、埋文センターの中央自動車道長野線整備の調査で山手の長谷鶴前遺跡群の集落域との境が確認された。南側範囲については調査歴がないが、直線的に画される長野市・千曲市境までとされている。

また、遺跡の性格は後背低地に立地する弥生時代～中近世の水田遺跡とされているが、高速道地点の発掘調査（1988～1991 年）では、石川条里遺跡の中央西側付近では島状微高地が点在することが判明し、その一つでは古墳時代前期の祭祀遺跡か居館跡・特殊な居住遺構、さらに下層では縄文時代前期の集落跡がみつかった。この島状微高地は高速道地点より南側に点在するとみられ、稲荷山駅南方地点での市教委 11 次調査では平安時代の畑跡と古墳時代の集落跡がみつかっている。このように基本的に水田遺跡ではあるが、小規模な島状微高地では、異なる土地利用が行われる複雑な様相もある。

これまでの市教委、埋文センターの調査は、第５図に示したようにいずれも石川条里遺跡の中央付近から北部の調査が中心であり、今回の発掘調査対象となった石川条里遺跡の南部では、近隣の調査例がない中での本格的な発掘調査となった。本調査で検出した時期別の遺構数は、以下の第７表のとおりである。

第７表　石川条里遺跡の時期別遺構検出数

遺跡名／時代	掘立柱建物跡（ST）	柵列（SA）	水田跡		土坑（SK）	墓跡（SM）	溝跡（SD）	天地返し跡（SL）	遺物集中（SQ, SX）
			水田	畦畔（SC）					
弥生時代			2	23			8		1
古墳時代				26	15		3		1
古代			1	53	8		29		
中近世	6	5		1	454	5	146	4	
合計	6棟	5条	3面	103条	477基	5基	186条	4面	2 基



国土地理院電子地形図25000『稲荷山』『信濃松代』を使用

第５図　遺跡範囲・調査範囲図（1：25,000）

第８表　石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群の発掘調査履歴

番号：第５図に対応

番号	遺跡名	地点名	調査年	文献
市１	石川条里遺跡		1982 年	長野市教育委員会 1983『浅川扇状地遺跡群　迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』長野市の埋蔵文化財第 13 集
市２	石川条里遺跡		1983 年	長野市教育委員会 1984『石川条里的遺構・上駒沢遺跡』長野市の埋蔵文化財第 14 集
市３	石川条里遺跡		1984 年	長野市教育委員会 1985『石川条里的遺構（３）(付・上駒沢遺跡)』長野市の埋蔵文化財第 16 集
市４	長谷鶴前遺跡群	中部電力㈱送電用鉄塔	1988 年	長野市教育委員会 1989『鶴前遺跡・塩崎城跡』長野市の埋蔵文化財第 33 集
市５	石川条里遺跡		1988 年	長野市教育委員会 1989『石川条里遺跡（４)』長野市の埋蔵文化財第 34 集
市６	石川条里遺跡	石川条里遺跡消防塩崎分署	1990 年	長野市教育委員会 1991『塩崎遺跡群（６）・石川条里遺跡（５)』長野市の埋蔵文化財第 39 集
市７	石川条里遺跡	篠ノ井西部地区県営圃場	1987～91 年	長野市教育委員会 1992『石川条里遺跡（６)』長野市の埋蔵文化財第 45 集
市８	石川条里遺跡	県営住宅みこと川団地	1987～91 年	長野市教育委員会 1993『石川条里遺跡（７）長野市北野土地区画整理事業』長野市の埋蔵文化財第 57 集
市９	石川条里遺跡	宮之前	1993 年	長野市教育委員会 1994『石川条里遺跡（８)』長野市の埋蔵文化財第 66 集
市 10	石川条里遺跡	市道篠ノ井南 64 号線	1994 年	長野市教育委員会 1995『塩崎遺跡群（８）・石川条里遺跡（９)』長野市の埋蔵文化財第 72 集
市 11	石川条里遺跡	灰塚団地	2002 年	長野市教育委員会 2003『浅川扇状地遺跡群浅川端遺跡（２）・安茂里遺跡群差出遺跡・三合塚西古墳・石川条里遺跡（10)』長野市の埋蔵文化財第 102 集
市 12	石川条里遺跡	特別養護老人ホーム桜荘	2005 年	長野市教育委員会 2005『石川条里遺跡（11）・本村東沖遺跡（３）・上長畑遺跡』長野市の埋蔵文化財第 111 集
県１	長谷鶴前遺跡群	中央自動車道長野線	1988～89 年	長野県埋蔵文化財センター 1994『鶴前遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 17
県２	石川条里遺跡	中央自動車道長野線	1988～91 年	長野県埋蔵文化財センター 1997『石川条里遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 26
県３	石川条里遺跡	北陸新幹線	1993～95 年	長野県埋蔵文化財センター 1998『石川条里遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 33

第２節　調査の概要

１　調査の方法

（１）発掘調査の方法

ア．調査区とグリッドの設定

調査は県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センターが統一的に調査を行うために作成した「発掘調査の方針と手順」に則して実施した。

遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は、石川条里遺跡（ＩＳＨＩＫＡＷＡ　ＪＯＲＩ）「ＢＩＫＢ」である。遺跡記号は、調査記録の便宜を図るため、遺跡名を大文字アルファベット３文字または４文字で表したもので、１文字目の「Ｂ」は長野県内を 10 分割した長野市・千曲市・上水内郡・埴科郡の地区を示し、２文字目と３文字目は遺跡名のローマ字表記の２文字を選択したものである。石川条里遺跡は、長野県埋蔵文化財センターで２度調査が行われており、1998～1991 年の調査（中央自動車道長野線）では「ＢＩＳ」、1993～1995 年の調査（北陸新幹線）では「ＭＩＳ」といずれも３文字の表記であったため、４文字目を加えて、過去の調査と区別した。遺跡記号は各種記録類や遺物の注記等に用いている。

調査区・グリッドの設定と略称　［第５図］

国土地理院の平面直角座標系の原点（長野県第Ⅷ系、Ｘ＝0.0000　Ｙ＝0.0000）を基準に、200 の倍数値を選んで測量基準線を設け、本遺跡に隣接する長谷鶴前遺跡群・塩崎遺跡群を含む調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定した。なお、座標値は日本測地系である。

「大々地区」は、200×200ｍの区画で 16 地区を設定し、北西から南東へローマ数字で表記した。

「大地区」は、大々地区を 40×40ｍの 25 区画に分割し、北西から南東へＡ～Ｙまでのアルファベットで表記した。

「中地区」は、大地区を８×８ｍの 25 区画に分割し、北西から南東へ 01～25 のアラビア数字で表記し、調査では中地区を遺構測量等の基準単位とした。

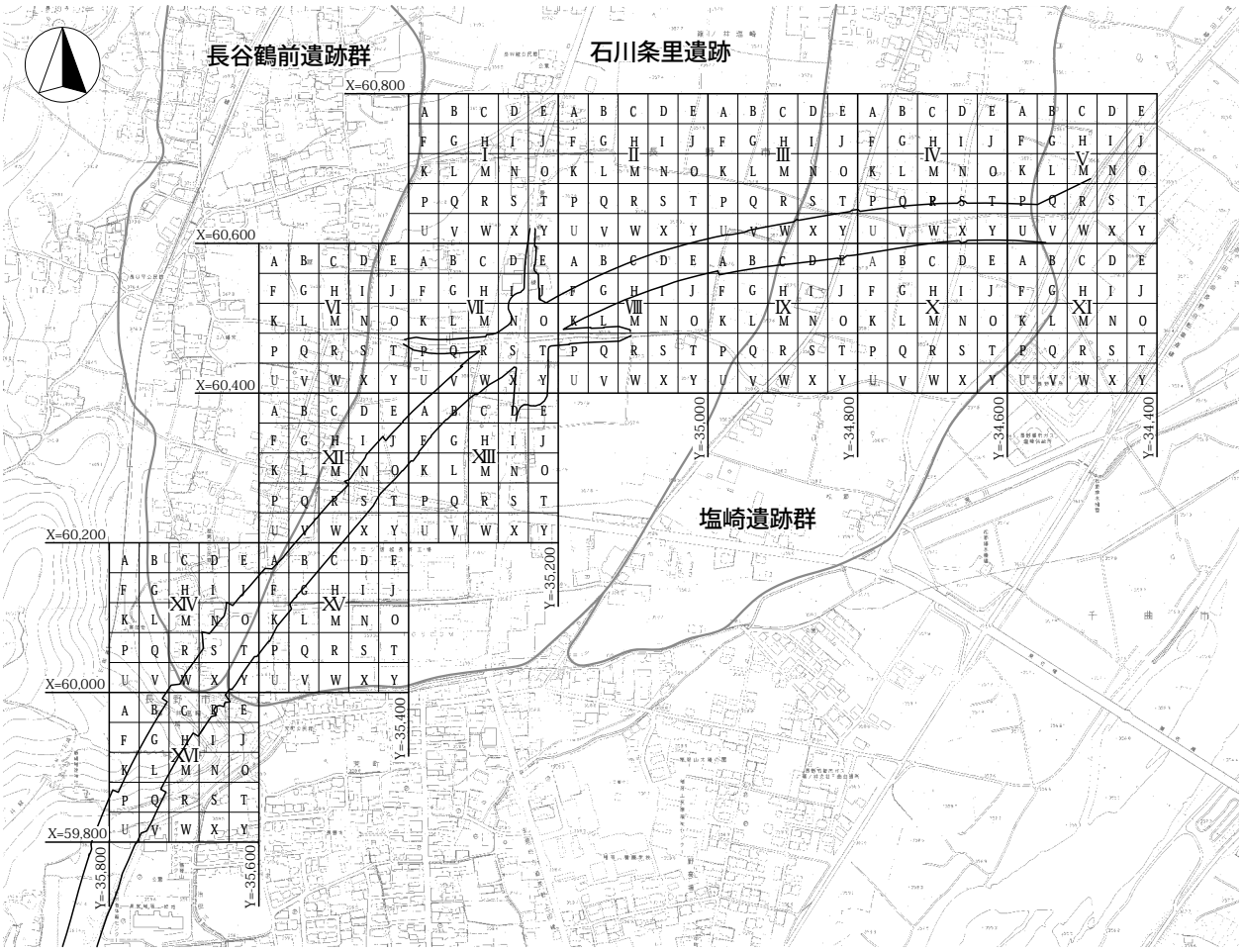
また、グリッド設定は、遺構検出を開始する段階で業務委託により行った。

調査範囲と調査区　［第６図］

調査範囲は広範囲に及ぶため、市道・県道を境に、東から西へ１区から 12 区までの 12 地区を設定し、地区内を細分化する場合は、小文字アルファベットを付した。農道や用水の切り回し等、地区内の一部を調査する場合には、地区名末尾に方角を付し、トレンチ調査の場合には地区名に枝番を付した。また、12 地区をまたいだ調査の場合は、「3b・4a 区」「7b・８区」のように地区名を併記した。

イ．土の掘削と遺構の検出　［第６図］

はじめに重機によるトレンチ掘削を行い、土層堆積状況や遺構検出面の確認を行った。次に重機で表土を掘削し、前述のようにグリッドを設定して、人力で遺構検出を行った。本遺跡では、遺構調査面を２～４面確認したので、上位の調査面の調査が終了した後、下位の調査面までの間層を重機により掘削する、という手順で調査を行った。狭小地区では安全上の理由と、また土層堆積状況や遺存状況等から判断して、トレンチ調査にとどめた場合がある。遺構検出の際、出土した遺物は包含された層位名、またはグリッド



大々地区（200×200m グリッド）：Ⅰ・Ⅱ…XVI

国土地理院地形図25000『稲荷山』を使用

A	B	C	D	E	
F	G	H	I	J	
K	L	M	N	O	大大地区 200m
P	Q	R	S	T	
U	V	W	X	Y	大地区 40m

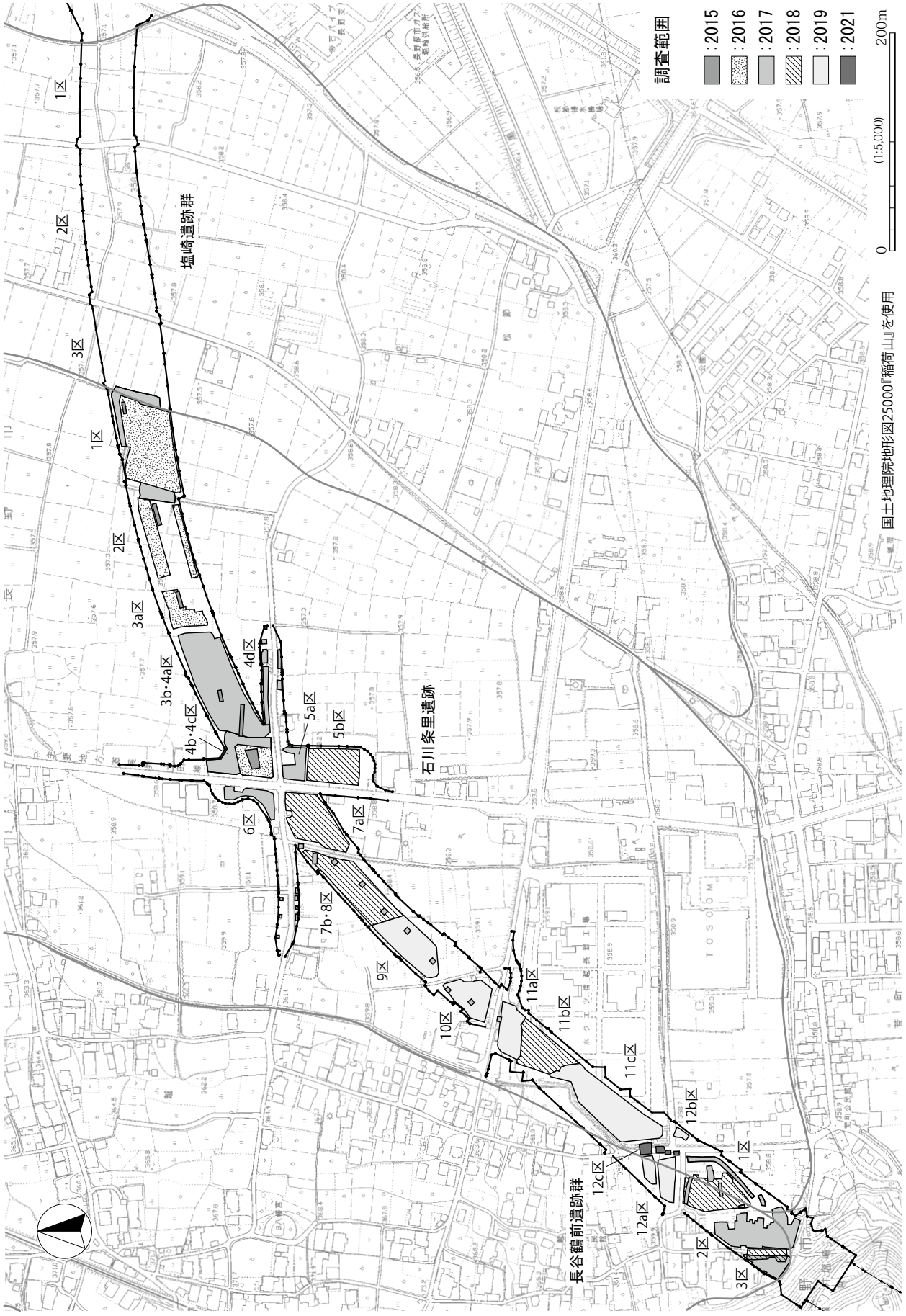
大地区（40×40m グリッド）：A・B・C…Y

01	02	03	04	05	
06	07	08	09	10	
11	12	13	14	15	大地区 40m
16	17	18	19	20	
21	22	23	24	25	中地区 8m

中地区（8×8m グリッド）：1・2・3…25

グリッドの呼称例
8mグリッドの記載例
：ⅦS17

第６図　調査範囲・グリッド設定図、グリッドの呼称（１：10,000）



第７図　石川条里遺跡　年度別調査範囲図（１：5,000）

名、あるいは帰属遺構名を付して取り上げた。

基本土層の遺構検出面と各地区での調査面との対応

調査範囲が広範囲で土層堆積状況に相違があること、また調査が複数年度に渡ることから、調査時に各地区の調査面を統一することは困難であったため、整理作業時にその対応関係を検討し、基本土層の遺構検出面を設定した。この基本土層の遺構検出面は、序数に「検出面」を付して表記する。基本土層の遺構検出面は、第１検出面（平安時代の水田跡）、第２検出面（古代～中世の遺構）、第３検出面（古墳時代の遺構）、第４検出面（弥生時代の遺構）の４面である。

一方、各地区での調査時の遺構検出面は、序数に「調査面」を付して表記する。基本土層の遺構検出面と、各地区での調査面との対応は以下の第９表のようになる。なお、長谷鶴前遺跡群の第５調査面にあたる平安時代の水田跡検出面は、本遺跡で検出した平安時代の水田跡の広がりの一部と捉え、本章３節で報告することとしたため、第９表に加えてある。

各年度の概要は以下のとおりである。

2015（平成 27）年度

次年度調査予定の１区～４区の範囲で、６か所でトレンチ掘削による確認調査を行った。

2016（平成 28）年度

１区～４区の範囲の調査を実施した。トレンチ調査を行った１区では、中世遺構検出面が確認できたため、そのまま全面調査へ移行した。調査面の設定は、第１調査面を中世遺構の検出面、洪水砂層下を第２調査面、その下層を第３調査面とした。秋に２区で地層確認用トレンチを掘削した時点で、出土土器から、洪水砂層の時期は古墳時代であることが判明し、１区～４区では平安時代の洪水砂層（以下、「平安洪水砂層」という。）の堆積がみられないことを確認した。また、２区の地層確認用トレンチでは、弥生時代の遺構検出面を確認し、これを第４調査面とした。3b・4a 区では、時間的な制約から第１調査面のみの調査にとどめ、２面以下の調査については次年度へ持ち越しとした。なお、自然堤防端部に位置する１区で弥生時代の遺構検出面の有無を確認するため、第４調査面・第５調査面を設定して調査を行ったが、遺構の確認はできなかった。

第９表　石川条里遺跡の基本土層遺構検出面と各地区調査面との対応

１調：第１調査面を示す。

<table>
<tr><th>地区
基本土層</th><th>1</th><th>2</th><th>3a</th><th>3b・
4a, 4d</th><th>4b, 4c</th><th>5</th><th>6</th><th>7a</th><th>7b・8</th><th>9</th><th>10</th><th>11</th><th>12a,
12b</th><th>12c</th></tr>
<tr><td>第１検出面
（Ⅳ層上面）
平安時代の水田跡</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>１調</td><td>１調</td><td>１調</td><td>２調</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第２検出面
（Ⅴ層上面）
古代～中近世の遺構</td><td rowspan="2">１調
２調
３調</td><td rowspan="2">１調
２調
３調</td><td rowspan="2">１調
２調
３調</td><td>１調
２調</td><td rowspan="2">１調
２調</td><td rowspan="2">１調</td><td rowspan="2">１調</td><td rowspan="2">１調</td><td rowspan="2">１調</td><td rowspan="2">１調</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">１調
（Ⅱ層）</td></tr>
<tr><td>第３検出面
（Ⅴ２・４層）
古墳時代の遺構</td><td>３調</td><td></td><td>２調</td><td></td><td></td><td rowspan="2">２調</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第４検出面
（Ⅷ層）
弥生時代の遺構</td><td></td><td>４調</td><td></td><td>４調</td><td></td><td>２調</td><td></td><td>２調</td><td>２調</td><td>２調</td><td>２調</td><td>２調</td><td></td></tr>
</table>

※中近世の遺構の検出は、Ⅲ層（平安時代の洪水砂層）の堆積のない９区以東ではⅤ層上面、10 区以西では平安時代の水田検出面で行った。12c 区のみ中世の盛土があるため、近世の遺構検出面がⅡ層中となる。（本節第２項基本土層に詳細を記した。）

2017（平成 29）年度

3b・4a 区と 4d 区での調査面の設定については昨年度を踏襲し、第４調査面では泥炭層に薄く被覆された弥生時代の水田跡を検出した。４区～６区の他の調査区では、土層の堆積状況等から、２面調査や１面調査にとどめ、２面調査の場合は、第１調査面を古代～中近世の遺構検出面、第２調査面を弥生時代の遺構検出面と設定した。また、本遺跡に隣接する長谷鶴前遺跡群の２区第５調査面で、平安洪水砂層に被覆された水田跡を検出した。次年度調査予定の７区～11 区の範囲で、９か所でトレンチ掘削による確認調査を行った。

2018（平成 30）年度

5b 区、7a 区、7b・8 区、11b 区調査では、昨年度に引き続き、調査面は２面調査とし、第１調査面を平安時代の水田跡検出面または古代～中近世の遺構検出面、第２調査面を弥生時代の遺構検出面と設定した。11b 区の第１調査面では遺存状態が悪いものの、平安洪水砂層の堆積があった。また、12 区に隣接する長谷鶴前遺跡群１区第５調査面では、平安洪水砂層が厚く堆積した水田跡を検出した。11 区を除く調査区の第１調査面では、古代～中近世の遺構を検出した。7a 区第２調査面では、泥炭に被覆された弥生時代の水田跡を検出、7b・８区でも泥炭層に一部被覆された弥生時代の水田跡に伴う畦畔を検出した。

2019（平成 31）年度

９区～11 区の範囲では２面調査とし、昨年度の調査面を踏襲した。12a 区、12b 区では、１面調査にとどめた。平安洪水砂層の堆積する 10 区～12 区は平安時代の水田跡検出面を第１調査面とし、長谷鶴前遺跡群から広がる水田跡を検出した。平安洪水砂層の堆積しない９区では、古代～中近世の遺構検出面を第１調査面とした。第２調査面については、10 区、11a 区、11b 区では、弥生時代の水田層を被覆する泥炭層の堆積がなく、水田面が遺存していなかったため、水田跡に伴う芯材を出土した大畦畔基部のみの部分的な調査を行った。９区では、多数の杭列と古墳時代の遺物を出土する遺構を検出した。

2021（令和３）年度

市道下の 12c 区の調査を実施し、近世の道路跡が検出されたことから、第１調査面を中近世の遺構検出面とし、平安洪水砂層下の平安時代の水田検出面を第２調査面とした。

ウ．遺構調査

埋文センターで定める以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名とした。なお遺構調査を進めた結果、登録時の性格と異なる遺構となった場合も、出土遺物の登録等との整合性を図るため、原則的に当初登録番号を変更していない。

SA：SB よりも平面形が小さな掘り込みや石が列として配置するもの。【柵列】
SB：２ｍを目安とし、それ以上の大きさの方形・円形・楕円形の掘り込み。【竪穴建物跡・竪穴状遺構】
SC：連続する固い面や帯状の盛り土や SD に挟まれる帯状の面。【畦畔】
SD：帯状の掘り込み。【溝跡・自然流路他】
SK：単独、もしくはほかの掘り込みとの関係がない２ｍより小さな掘り込み。【土坑】
SL：複数の帯状の掘り込みや盛り上がりが規則的に配列し、ひとつの面を形成しているもの。【水田面、天地返し跡】
SM：方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛り上がり。【木棺墓・土坑墓】
SQ：遺物が面的に集中するもの。【土器等の廃棄場】
ST：SB より小さな掘り込みや石が一定間隔で方形、円形に配置するもの。【掘立柱建物跡】
SX：以上に記した以外のもの。

遺構精査は、土坑・墓（SK・SM）については、検出面での遺構の形状を確認後に半裁し、土層断面の記録後に完掘し、プラン全体を記録した。溝跡（SD）は、検出面での遺構の形状を確認後にサブトレンチで断面の形状や深さを確認、土層断面の記録後に完掘し、全体を記録した。水田跡（SL）は、前年度の確認調査やサンプルによるプラント・オパール分析、年度当初のトレンチ調査から、水田層の存在と広がり・遺存状況等を確認してから、面的調査を行った。埋没水田跡は、水田面の認定、被覆層の種類と厚さ、畦畔・田面の遺存状況等、連続耕作水田跡は畦畔の遺存状況等を確認し、全体を記録した。畦畔（SC）は、検出面での形状を確認後にサブトレンチで、断面の形状や高まり、芯材の有無を確認し、土層断面の記録後、必要に応じて解体を行い、芯材を露出させて記録した。畦畔の認定は、①畦畔状（帯状）の高まりが直線的にのびるもの、②田面全域に凹凸が分布するなかで、凹凸が存在しない帯状部分が直線的に認められたもの、③高まりが認められず、酸化鉄集積密集部が直線的な帯状をなすもの（上位層の酸化鉄集積・溶脱による転写で、本来耕作された土層より下層に残存した畦畔痕跡)、④高まりはないが直線的にのび方向性をもつ杭列・芯材等で区画が想定できるもの、の４つの観点のいずれかに合致するかどうかを判断基準とした。

遺物は遺構ごとに層位を分けて取り上げ、出土地点の必要なものには遺構ごとの遺物番号を付して取り上げた。

なお、調査区土層断面からは、科学分析を行うことを目的に土壌サンプルを採取し、プラント・オパール分析、花粉分析、土壌分析等を実施した。畦畔跡から出土した芯材からもサンプルを採取し、放射性炭素年代測定（ＡＭＳ）・樹種同定を実施した。墓等からの出土骨については、専門家による鑑定指導を受けた。

エ．記録作成

遺構の記録は、調査研究員の指導のもと発掘作業員が行った。前述の測量基準杭を用いた電子平板測量を基準としたが、一部業務委託による単点測量も併用した。中地区（８×８ｍ）単位に図面用紙に記録した割付平面図と、必要に応じて個別の遺構ごとの図面用紙に記録した個別図を作成した。土層断面図は図面用紙に記録した。遺構図は１/20 の縮尺を基本とし、必要に応じて１/10 の縮尺で測量した。また、トレンチ配置図、調査範囲図、地形測量図も電子平板により作成した。

遺構の記録写真は、６×７リバーサル・モノクローム、フルサイズ１眼レフデジタルカメラを併用し、撮影は調査研究員が行った。また、調査区全体等の空中写真撮影は、業務委託によって、６×７リバーサル・モノクローム、フルサイズ１眼レフデジタルカメラで実施した。デジタル写真データの保存形式は、JPEG と RAW とした。

（２）整理作業等の方法

ア．整理作業

遺物の整理

ブラシを用いた水洗作業後、取り上げ袋ごとに台帳登録をした。土器・土製品・石器・石製品は微細な資料を除き、全て注記した。金属製品・木製品はラベルを添付した。遺跡名は遺跡記号 BIKB、出土地点は以下の表記を用いた。

検出面：検　第２検出面：２検　表土：表　かく乱：カク　表採・排土：Ｚ　トレンチ：Ｔ　壁：カベ
拡張区：カクチョウ　埋土：フ　水田層：水田　微高地：ビコウチ

土器は、遺構別、グリッド別に分類し、遺構の時期決定等資料化が必要なものを抽出し、管理台帳を作

成した。土製品・石器・石製品・木製品は、器種分類し報告書掲載資料を抽出し、管理台帳を作成した。金属製品は、発掘調査後はシリカゲルを入れた密閉容器に保管し、長野県立歴史館においてＸ線透過写真を撮影し、その後に報告書掲載遺物を抽出し管理台帳を作成し、保存処理を実施した。遺物の実測は手実測を基本とし、石器・石製品の一部は業務委託により行った。

出土骨は、土砂取りや水洗・乾燥後、鑑定指導を受け、必要な資料については写真撮影を行った。

遺構図の整理

原図は、記載内容を点検・修正しながら整理し、台帳に登録した。全体図、個別遺構図はこれらをもとに作成し、Adobe Illustrator CC を用いてデジタルトレースを行った。

写真の整理

発掘作業で撮影したフィルム写真およびデジタル写真は、撮影台帳を作成し、撮影日、撮影番号と内容を記した。写真データの RAW 形式データは、Adobe Bridge と Photoshop Camera Raw を使用して、グレーカードを移し込んだ画像をもとにホワイトバランスを補正し、TIFF 形式に現像している。その後、JPEG 形式・TIFF 形式・RAW 形式のデータ別に、撮影番号順にポータブルハードディスクと DVD に記録した。

イ．報告書の作成と資料収納

報告書の作成

本格的な編集作業は 2022 年度（令和４年度）から着手した。報告書の作成にあたり、編集会議を 2023 年９月 13 日に行った。報告書は、埋蔵文化財関係機関、大学、地域の図書館等に配布する。

資料収納

遺物は、材質・種類ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けた上で、出土遺構・地区等の地点別にテンバコに収納し、最終的な収納用テンバコ番号を付与し、遺物収納台帳を作成した。

写真は、遺構・遺物写真ともに整理段階で作成したアルバムと台帳をテンバコに収納した。

遺構割付図・断面図等の実測図面は、通し番号（図面番号）を付けて図面台帳に登録し、図面ファイルに収納した。また、遺構・遺物のデジタルデータはポータブルハードディスクに保存した。

２　基本層序

（１）土層の概要

今回の調査は、石川条里遺跡南部を千曲川と直交方向に自然堤防の塩崎遺跡群に接する１区から後背低地に立地する石川条里遺跡を横断し、調査区西端は崖錐地形に立地する長谷鶴前遺跡に接するまでの範囲を調査対象としている。対象地の遺跡地形は後背低地を中心とするが、調査区中央部の 7a 区～10 区は西側山麓に発達した小河川由来の扇状地堆積物が下層にある扇状地端部にあたり、やや高い地形となる。ここを境に東側の 5b 区や６区以東は後背低地最低部２区に向かって緩やかに傾斜し、西側も 11 区から長谷鶴前遺跡群１区へむかって傾斜する。西側調査区は平安時代洪水砂層を除くと千曲川堆積土が少なく、粒径も細かい土質傾向だが、東側の後背低地の低い場所を中心に千曲川から供給された洪水土が埋積し、時代と共に地表面が顕著に上昇している。なお、長谷鶴前遺跡群２区、３区の山際のやや高い地形は、中世後期以後の雨水等による山側から運ばれた堆積土増加と人為的造成土によるもので、平安時代までは石川条里遺跡から土層が連続する低地であることが確認できた。

遺跡内の土層は、千曲川の氾濫等で供給された土砂を基調とし、腐植土・泥炭層、あるいは水田層等の２次的に変質した土層が重なって構成される。上記地形と関連し、調査区西側扇状地端部にあたる 7a 区前後を境に様相が異なる。調査区東側の１区～7a 区の後背低地の低い場所では、千曲川由来の洪水堆積層が厚く堆積し、細砂やシルト等のやや粒径が粗い土で構成される。また、東に向って地下水位が低くなるため、東端ほど泥炭質ではなく腐植土層となる傾向がある。一方、調査区西側の 7b 区以西では堆積土層が薄く粒径も細かい粘土質で、扇状地端部にあって地下水位も高く泥炭層が発達する傾向となる。風化岩石由来の粗粒砂を多く含む土層が局所的にみられ、土層全体にも粗粒砂が混在する。

石川条里遺跡南部の土層については事前情報が少なく、発掘調査時には各地区で基本土層を把握し、調査を進める中で土層の追加や土層番号の振り直しを行った。整理作業時には各地区の土層の対比関係を再検討し、本遺跡の基本土層としてⅠ層からⅨ層を新たに振り直した。基本層序図（第８～13 図）では遺構検出を行ったⅣ～Ⅷ層に、調査時の各調査区での基本土層名・土層注記を併記している。

以下に各層の性状を記す。

Ⅰ層　黄灰色～褐灰色シルト質埴壌土層

表土層で、グライ化したシルト基調の現代の水田耕作土層。一部に工場や道路の盛り土が上位に存在する。５区以西は、山手から運搬された粗粒砂が混在する。

Ⅱ層　灰黄褐色シルト質壌土～褐灰色軽埴土層

Ⅰ層とⅢ層（Ⅲ層が確認できない地点ではⅣ層）の中間の土層群を一括した。千曲川の洪水で供給されたと思われる細砂やシルトを基調とするが、洪水堆積土層は残存せず、すべて耕作等で攪拌されて場所ごとに異なる様相を示す。そのため広域に連続した土層としては捉えきれなかった。土質の傾向は、7a 区以東の調査区東側ではシルト・砂質が強く、腐植化した黒味を帯びた暗褐色～灰黄褐色を呈する。調査区西側 7b 区～12 区前後は山からの粒粗砂を混じりながらも粒子の細かい粘質の強い土質を基調とし、西側ほど粘りも締まりも強まって 10 区～12 区では粘性が強い灰色の重埴土傾向の土質となる。

本層群中には、局所的に特徴的な土層が認められた。近世に構築された猪平池から引かれた用水の脇にあたる調査区 10 区、11 区では、本層上部に山から供給された粗粒砂が厚く何層も重なっていた。また、西端部の 12a 区、12c 区では中世居館跡に伴う造成土、近世末の水田の埋め立て土層等の人為的盛土層等がある。さらに、長谷鶴前遺跡群から本遺跡５区までの範囲ではⅢ層（平安時代の洪水砂層）直上に腐植土

層が断片的に残存していた。本土層群には平安時代後期以前の土器も混在するが、中近世の焼物を含み、中近世遺構埋土はⅡ層が基調となる。

Ⅲ層　にぶい黄褐色～褐灰色シルト・細砂層（平安時代の洪水砂層）

シルト～細粒砂基調の平安時代前期の洪水堆積砂層。

本層は千曲川の洪水による堆積土層で、第２検出面の条里型水田面を被覆する。土質は細砂～シルトで、粒径は保柳氏の分析（第５章第３節）により、土層上部ほど粒径が細かくなる正級化構造と捉えられた。長谷鶴前遺跡群～11 区では下部に粘土ブロック（擬礫）が混じり、かなり流速の早い洪水で形成された土層とみられる。本層は調査区南西端部付近の長谷鶴前遺跡群～11 区・12 区に厚く、10 区で薄くなり、９区で断片的な残存のみとなる。それ以東で本層は認められず、１区、２区等の東端では溝跡埋土の一部のみ残存する。本層は同じ千曲川の洪水堆積土層であるⅥ層と異なり、地形的には高い調査区南西端に厚く分布するが、調査区の南東側にある千曲川の蛇行部から流れの早い洪水が直線的に氾濫を起こして調査区南西部に堆積した土層と推測される。長谷鶴前遺跡群の本層が被覆する水田面から平安時代前期末の完形の須恵器坏が出土し、平安時代前期末の長野盆地南部にみられる所謂「仁和の洪水」土層に対比しうる。

Ⅳ層　黒褐色シルト質埴壌土～重埴土層（奈良・平安時代の耕土層）

遺跡内の広域に分布する古墳時代末以後～平安時代後期の耕作土層。黒味を帯びた腐植土を基調とし、西端の長谷鶴前遺跡群は若干グライ化する。下層の古墳時代前期末のＶ層以後に植物が繁茂して形成された土壌が母材とみられる。

本層は調査区全域に分布するが、９区～長谷鶴前遺跡群ではⅢ層に被覆された条里型水田耕作土層にあたり、本層以上に平安時代前期の土器が含まれる。しかし、Ⅲ層洪水土層の被覆がない調査区東側の１区～４区では本層から平安時代後期の土師器も出土し、平安時代後期まで耕作された可能性がある。その中間の５区～８区は平安時代後期の土器の出土がなく、平安時代後期の耕作の有無は明らかにしえなかった。また、Ⅲ層に被覆された長谷鶴前遺跡群１区Ⅳ層では、シルトや泥炭層に覆われた平安時代に耕作されずに古い水田のまま残存したとみられる区画があり、4c 区～7b・８区でも本層を埋土とする奈良時代の溝跡がＶ層上面で検出された。本層と土質・色調の共通する様相から同一層と捉えたが、少なくともＶ層以後の奈良時代前後から耕作土として利用され、上面がⅢ層に被覆される９区～長谷鶴前遺跡群では平安時代前期まで、Ⅲ層の被覆がない 7b・８区以東では平安時代後期まで耕作されたと推測される。

なお、９区ではⅣ層下にⅣ層とＶ層の中間の色調のⅣ層類似土層が局所的にあり、その下部で古墳時代前期末の水田遺構（畦畔）が検出された。

Ⅴ層　灰白色シルト質壌土～褐灰色軽埴土・細砂層（古墳時代の耕土層）

Ⅳ層下にある灰白色～褐灰色を呈する土層群をＶ層と括った。本層は調査区東側の１区～7a 区では数枚の細砂ブロックを混じる層や、灰白色や褐灰色のシルト質壌土に分層されるが、7b 区以西では細砂は混じらず１～２枚の灰色の強い褐灰色～灰黄褐色の粘性の強い軽埴土に集約されている。

調査区東側の１区～7a 区では本層がＶ-1 層灰白色シルト質壌土、Ｖ-2 層褐灰色埴壌土～軽埴土、Ｖ-3 層橙色細砂混シルト質埴壌土、Ｖ-4 層埴壌土～褐灰色軽埴土の４層に分層された。Ｖ-1 層は灰白色シルト主体の特徴的な土層で、１～5b 区まで広域に認められる。粒径が均一で洪水性堆積土層とも考えたが、１区～3a 区では、下面Ｖ-2 層上面で本層が被覆する明確な畦畔は確認されなかった。また、Ｖ-3 層は細

砂や細砂ブロックが混じる。3b・4a 区では層厚が厚いことからⅤ-3・4 層で面的調査を実施した。そこでは古墳時代前期の土器を伴うⅤ-4 層が高まる畦畔（SC038）を検出し、Ⅴ層は古墳時代前期末を含む水田層と判明した。Ⅴ-3 層に含まれる砂層ブロックは、耕作の攪拌によるものと考えられるが、２区以東は明瞭な水田遺構は確認できず、水田か、あるいは畑かは明らかにできなかった。また、本層群中の砂層を埋土とした SD100 が１区で検出され、出土土器は古墳時代前期末の所産であるが、Ⅴ-3 層とは直接の連続性が捉えられず同一層の洪水砂層とは断定できなかった。

調査区西側の 7a 区では、3b・4a 区のⅤ-3・Ⅴ-4 層がⅤ-2 層下部で途切れるため、7b・８区以西ではⅤ-2 層がⅤ-3・4 層を含んで連続耕作されたとみられる。そのため 7b・８区以西では、7a 区以東のⅤ-2・3・4 層に帰属する遺構も同一面で検出している可能性がある。また、7b・８区ではⅤ-2 層直下のⅦ層直上で弥生時代後期の畦畔の基部（SC061・065・069）が検出された。このことから本層は弥生時代後期の水田耕作土層を含み、古墳時代前期まで耕作されたと考えられる。調査区西端の 11 区～長谷鶴前遺跡群でも本層と思われる土層があり、11 区では SC089 が検出された。芯材３点の放射性炭素年代測定分析（2019 年度）では、1810±20、1760±20、1780±20 年 BP と、弥生時代後期～古墳時代前期の年代を示したが、出土土器からは弥生時代中期後半～後期の可能性があり、西端部での本層の連続性は明らかにしえなかった。

Ⅵ層　黄褐色シルト・褐灰色シルト層（弥生時代後期前半の洪水土層）

Ⅴ層直下にある比較的厚いシルト～細砂の洪水土層である。

後背低地の地形的に低い調査区東側の２区～7a 区のみに分布し、扇状地端部付近の地形的にやや高い 7b・８区より西側には分布しない。土質は２区南西部が細砂、3b・4a 区はシルトである。地点毎に粒径が異なるが、途中に耕作土層や腐植土層は挟まないことから、堆積時の流速の違いから粒径の違いが生じたと捉え、洪水性堆積土層として一括した。２区北壁の本層中から吉田式期の壺が出土し、本層は弥生後期前半を含む時期とみられ、千曲川左岸下流に位置する長野市松原遺跡（県埋文 2000）の弥生後期前半の洪水土層に対比しうる可能性がある。

Ⅶ層　泥炭・黄白色シルト層

Ⅵ層直下に位置する層厚数㎝の泥炭層や黒褐色泥炭質粘土を基調とし、きめ細かい灰色シルトの薄層を縞状に含む。灰色シルトは若干腐植化し、酸化鉄の集積がみられるところもある。本層はⅧ層水田を被覆し、Ⅷ層水田耕作放棄後に草が繁茂する湿地性環境下で、洪水土層が薄く流入・堆積した土層群とみられる。

本層は２区～7a 区周辺まで連続して分布するが、7b 区～10 区東側で上層Ⅴ層に削平されて断片的な残存となる。西側の 10 区～長谷鶴前遺跡群でⅧ層と類似した土層上に同様の泥炭層や黒色粘土層が認められたが、Ⅶ層は一旦途切れる上に上面にⅥ層の被覆もないため、Ⅷ層自体が連続耕作されている可能性もあり、両者が同時期の同一層かは断定できなかった。

本層に伴うと断定できた土器はないが、7b・８区の泥炭層の炭化物３点の放射性炭素年代測定分析（2018 年度）では 1940±20・2030±20・1970±20 年 BP の年代が得られ、弥生時代中期末～後期初頭の時期とされた。Ⅷ層水田面はこれを若干遡る時期とみられ、出土土器との年代には矛盾がない。

Ⅷ層　灰色～黒褐色重埴土層（弥生時代中期後半の水田層）

泥炭粒を混在する粘土層で、4b 区、5b 区～９区では２枚に分層され、Ⅷ層上層をⅧ-1 層、下層をⅧ-2

層とした。このⅧ層下のⅨ層上部に母材とみられる泥炭質粘土層があり、本層も黒味を帯びる。

Ⅷ-1 層の上面はⅦ層（泥炭・シルト層）に被覆され、Ⅷ-1 層上面で畦畔が検出されたことから水田耕作土層と捉えられる。ただし、長谷鶴前遺跡群～12 区にもⅧ-1 層と類似土層が認められたが、面的に水田遺構の検出は行っておらず、プラント・オパール分析等も実施していないため、水田利用の有無は確認できていない。また、3b・4a 区、5b 区・９区に分布するⅧ-2 層のプラント・オパール分析（2019 年度）ではイネのプラント・オパールが高密度で検出され、Ⅷ-2 層も水田耕作土層とみられる。Ⅷ-1 層から栗林２式後半～３式とみられる土器が出土し、９区のⅧ-2 層から栗林１式とみられる土器が出土した。このことから本葬が弥生時代中期後半の水田土層と捉えられる。本層下は自然堆積層とみられるⅨ層となり、弥生時代中期後半より古い遺構・遺物は認められなかった。

Ⅸ層　黒色～褐色泥炭層・泥炭質土層・灰色粘土層（弥生時代中期後半以前の自然堆積土層）

本層は泥炭と千曲川洪水土、西側山地からの沢で運搬された風化岩石由来の粗粒砂層の互層で、遺構・遺物の検出もなく、水田化以前の自然堆積層として括った。その様相は地点ごとに異なる。調査区西側の 4c 区～長谷鶴前遺跡群付近では薄い泥炭層と灰白色粘土・シルト層が互層に堆積し、山際の長谷遺跡群では最下部に樹木片が多く混在する泥炭層がみられる。一方、調査区東側の 4b 区以東は比較的層厚がある粘土層や泥炭質が弱い黒褐色腐植土層が交互にみられる。本層以下は遺構・遺物の検出もないため調査終了面とした。９区と 11 区では本層内に砂層が確認され、９区では沢とみられる窪みも確認されたことから西側山地から流れ下る沢がかつて存在した可能性がある。これが弥生時代以後の水田の主要水源になっていたと推察する。また最底部までは確認していないが、長谷鶴前遺跡群の泥炭層の放射性炭素年代測定（2017・2018 年度）では 3500±30～2772±24 年 BP と、縄文時代後期～晩期の年代が得られている。

（２）遺構の検出面

調査区内は場所により堆積土層の様相が異なって調査面や遺構検出土層も一様ではないが、本遺跡での遺構検出面は、第１検出面（平安時代の水田面）、第２検出面（平安時代～中近世の遺構）、第３検出面（古墳時代の遺構）、第４検出面（弥生時代中期後半の遺構）を設定した。

第１検出面　平安時代の水田跡（Ⅳ層上面）

本遺跡 10 区～12 区と長谷鶴前遺跡群１区～３区では、Ⅲ層（平安時代の洪水砂層）に被覆されたⅣ層（耕土層）上面で平安時代の水田面を調査した。これが第１検出面にあたる。洪水砂層に被覆された同一時期の水田面ながら、長谷鶴前遺跡群１区では平安時代に耕作されずに古墳時代末～奈良時代の水田面が泥炭層に覆われた状態で残存する区画が検出された。この区画内の泥炭層は局所的な堆積で、改めて別の検出面番号は付していない。なお、調査時では、10 区～12a・12b 区では本検出面が第１調査面で、隣接する長谷鶴前遺跡群では第５調査面にあたるが、整理時に石川条里遺跡第２検出面にまとめた。

第２検出面　平安時代～中近世の遺構（Ⅴ層上面）

Ⅲ層の被覆がない１区～８区ではⅤ層上面を第２検出面とした。１区～7a 区でⅣ層を僅かに残したⅤ-1 層上面、Ⅴ-1 層がない 7b・８区～９区ではⅤ-2 層上面で、Ⅳ層より上層から掘りこまれる中近世遺構、Ⅳ層耕作でⅤ層境に残された平安時代水田畦畔基部を検出した。なお、９区周辺では上層Ⅳ層とⅤ層中間色調の土層がⅣ層直下に１層あり、その下面のⅤ-2 層上面で古墳時代前期末の畦畔の高まりが検出されている。

この第２検出面は最初に調査着手した調査区東側ではⅢ層が分布せず、Ⅳ層の年代も捉えられなかったため、中近世遺構が明瞭に捉えられたⅤ層上面で設定したものである。後に 11 区や長谷鶴前遺跡群でⅢ層とⅣ層が確認され、Ⅴ層が古墳時代の土層であることが判明した。なお、本来Ⅴ層より上層にある条里型区画に一致する SD046 や SC029 はⅤ-1 層下の検出だが、SD046 は近世溝跡が重複していたため存在がわからず下面で検出したもので、SC029 は畦畔自体ではなく下層に浸透した酸化鉄集積の有無により検出している。また、12c 区の中世居館跡にかかる遺構は盛土を伴いⅡ層中で検出している。

第３検出面　古墳時代の遺構（Ⅴ-2・3・4 層）

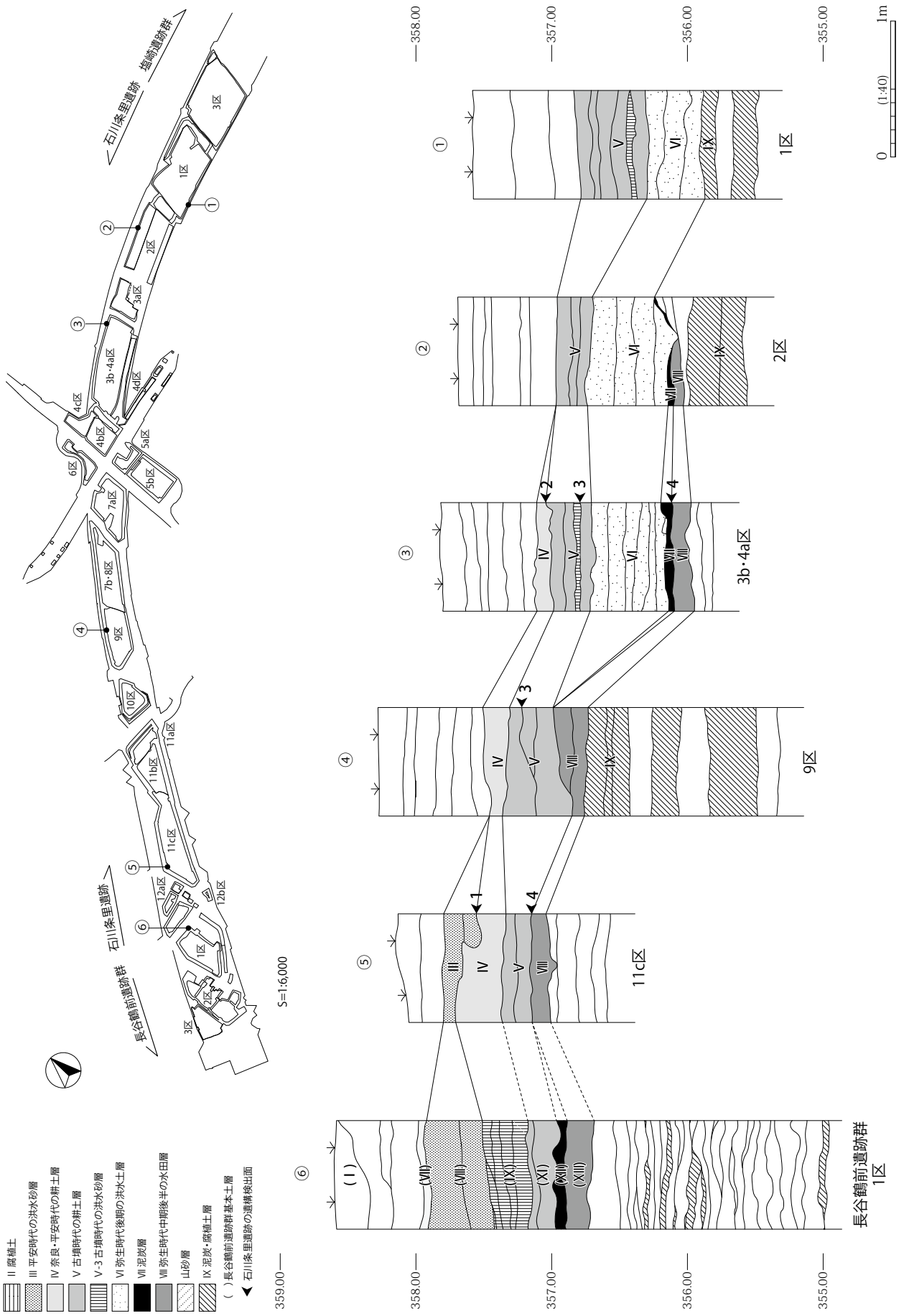
調査区東側の１区～4b 区で砂層ブロックを多く混じるⅤ-3 層が分布し、特に厚く残存する 3a 区、3b・4a 区では古墳時代の水田跡をⅤ-3 層上面で検出した。これが第３検出面にあたる。砂層被覆の水田面が良好に遺存すると期待されたが、砂層は耕作で攪拌されており、耕作されずに残された畦畔の基部、土器集中を検出した。Ⅴ層が細分された東側調査区の１区～3a 区ではⅤ-1 層を除去したⅤ-2 層上面やⅤ-4 層等でも遺構検出を試みたが、溝跡や帯状の酸化鉄集積を検出したものの、確実に各Ⅴ層に帰属すると捉えられた遺構はない。一方、Ⅴ-3 層が分布しない 7b・８区以西の西側調査区ではⅤ-2 層上面の第１検出面でのみ古墳時代の遺構を調査した。そのなかで９区のみⅣ層とⅤ層の中間的な色調の土層が局所的にあり、その下のⅤ-2 層上面で畦畔とみられる高まりが認められた。また、7b・８区では弥生時代後期の土器を出土した畦畔（SC061・065）はⅤ層最下部のⅦ層境で認められ、Ⅴ層は弥生時代後期の耕作土層も含むと捉えられる。

11 区～長谷鶴前遺跡群ではⅤ層中では被覆土層もないため面的調査を実施せず、トレンチ等で木芯の畦畔が確認された地点のみ遺構周囲を拡幅調査した。そのなかで 11 区 SC089 の芯材はⅤ層の可能性がある土層で検出し、出土木材の放射性炭素年代測定も弥生時代後期～古墳時代とされた。しかし、出土土器から弥生時代中期後半～後期の可能性もあり、11 区～長谷鶴前遺跡群のⅤ層の様相は明らかとならなかった。

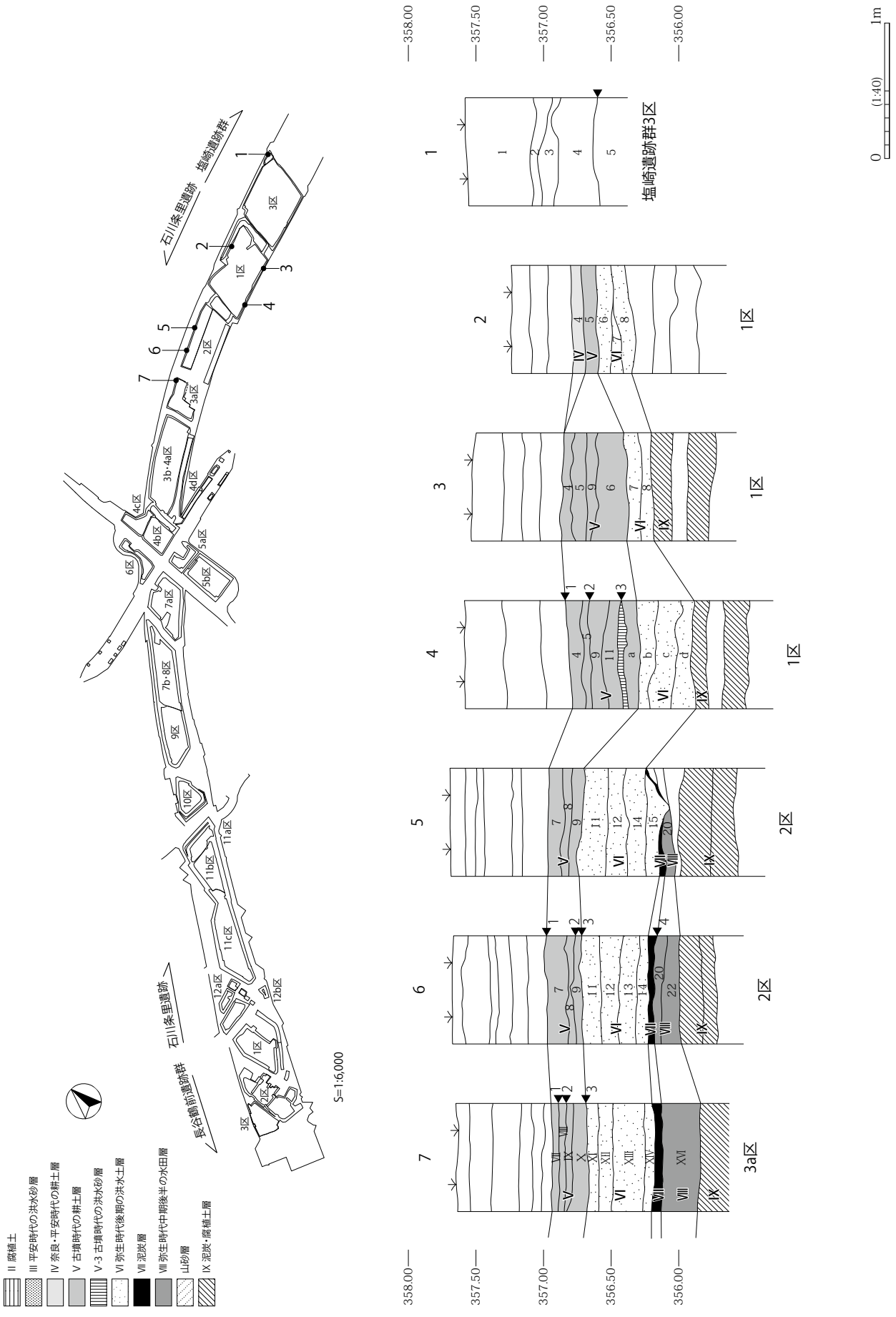
第４検出面　弥生時代中期後半の遺構（Ⅶ層）

薄い泥炭と黄灰白色シルトから成るⅦ層に被覆された水田面で、２区～7a 区では被覆する泥炭層下面で畦畔を検出した。調査段階では２区、3b・4a 区の第４調査面、7a 区以西の第２調査面にあたる。上層は褐灰色・黄灰褐色を呈する千曲川由来の堆積層で、その下部に位置する特徴的な泥炭層であるため、２区以西でほぼ同一の面を確認したが、7b・８区以西では泥炭の被覆が薄く、10 区まで遺構の検出がない。7b・８区以西では木質遺物の残存は良く、大畦畔等を耕作土の土質の違いや芯材により検出した。２区～7a 区までは比較的細かい水田が捉えられたが、7b・８区以西では大畦畔のみの検出である。

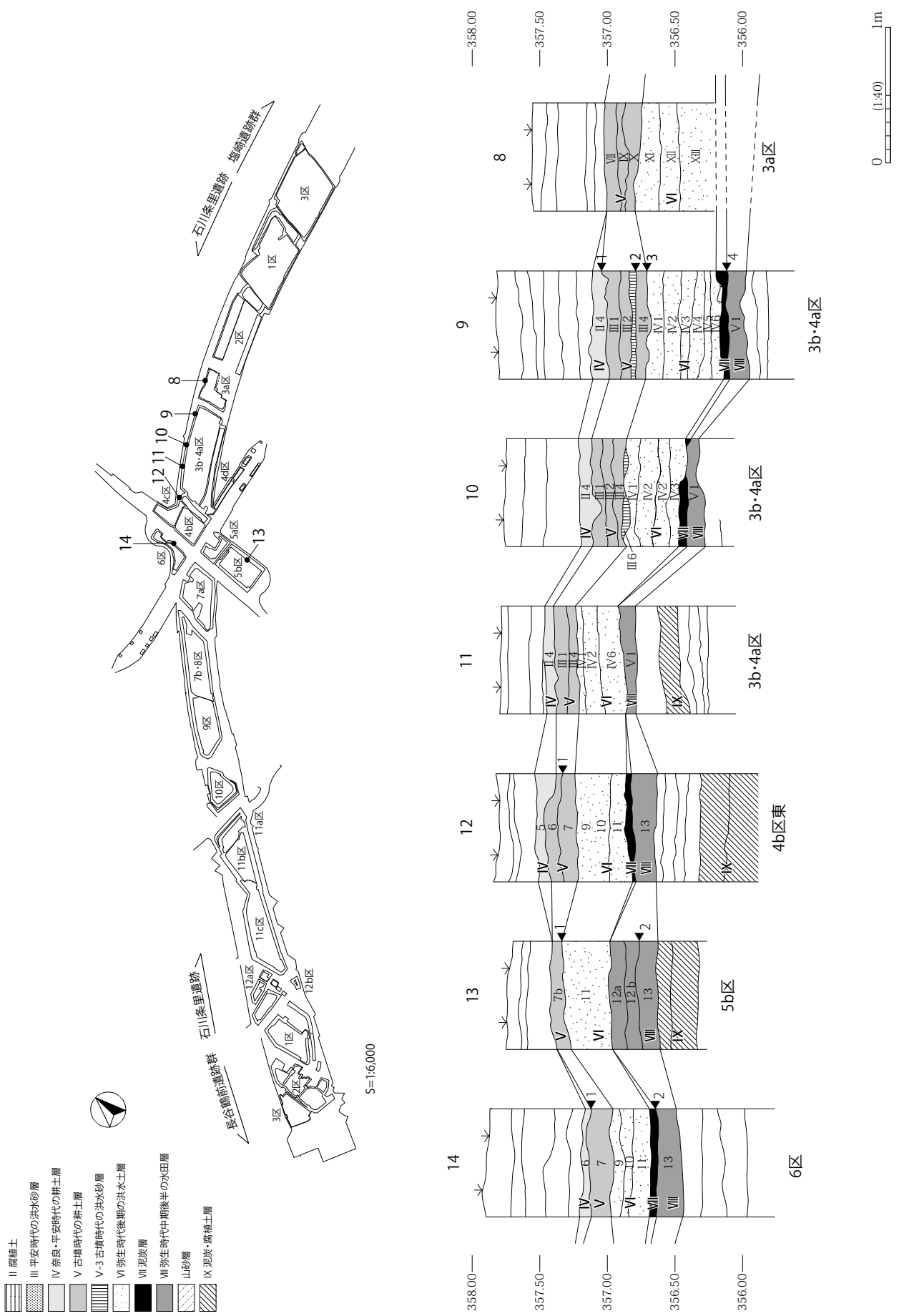
この第４検出面より下層の基本土層Ⅸ層では、各調査区でトレンチによる土層と遺構・遺物の有無を確認したが、遺構、遺物の検出がなく第４検出面を最終調査面とした。



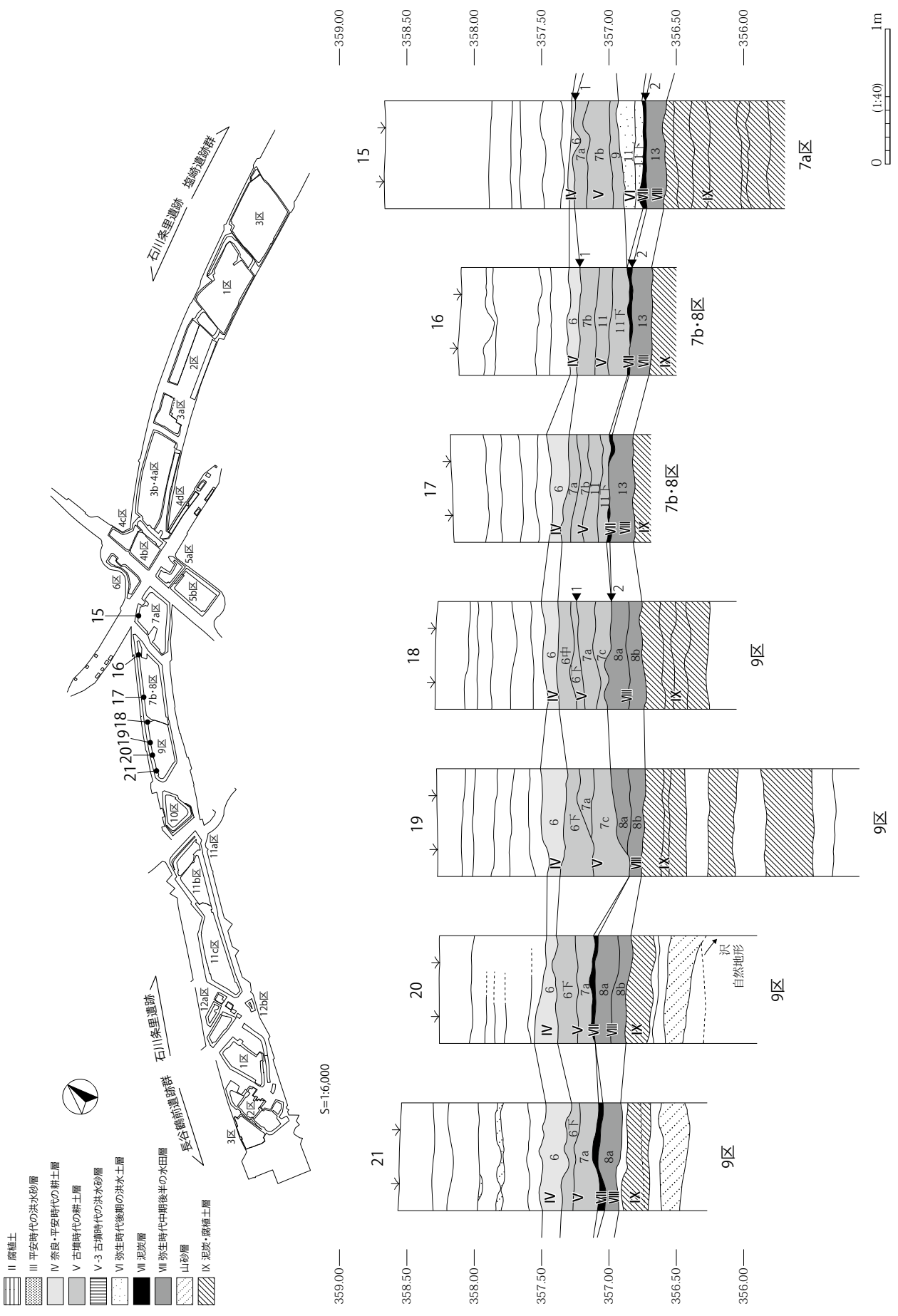
第８図　石川条里遺跡　基本層序



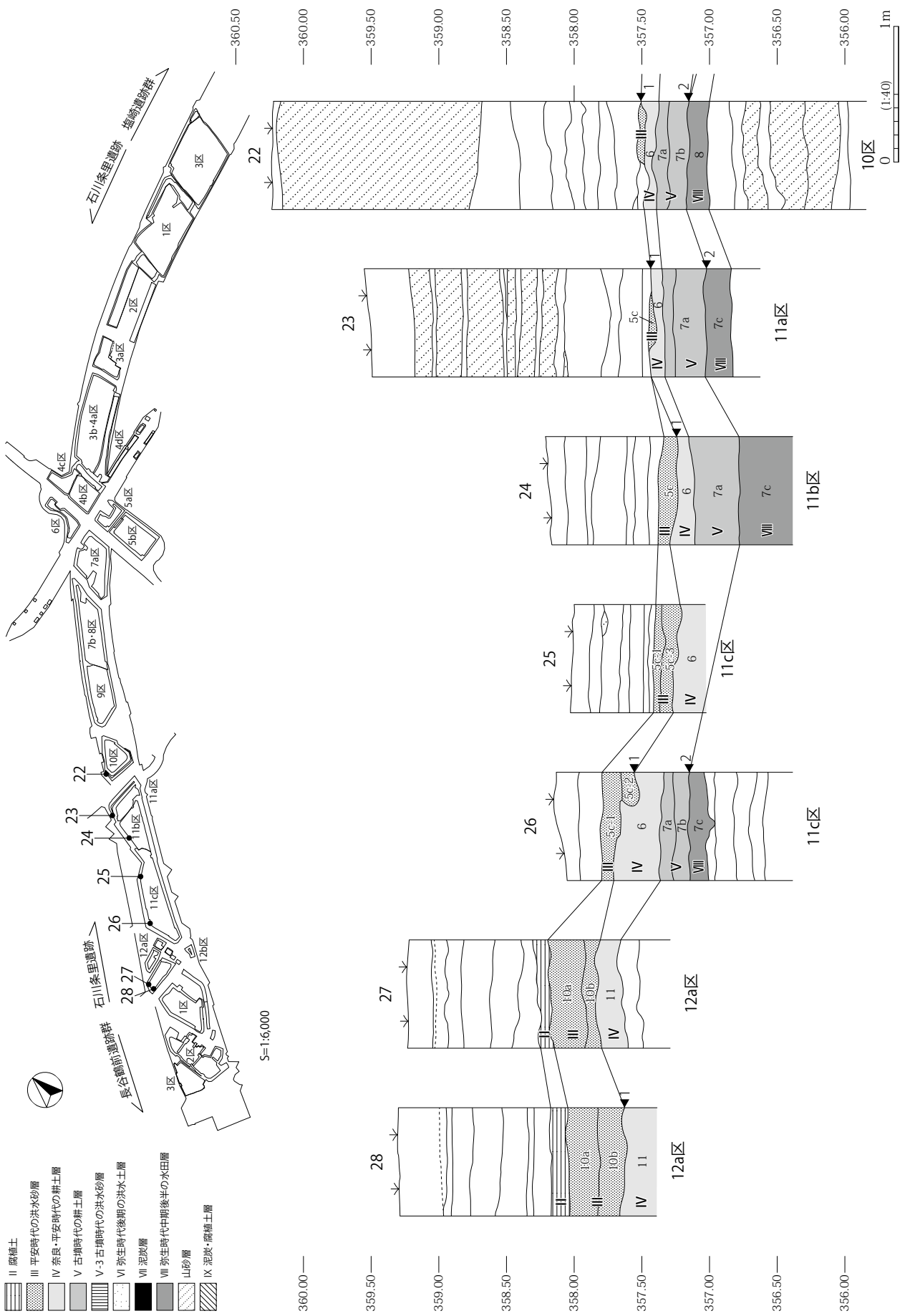
第９図　基本層序（詳細図１）



第 10 図　基本層序（詳細図２）



第 11 図　基本層序（詳細図３）



第 12 図　基本層序（詳細図４）

塩崎遺跡群3区

1　褐灰色土(10YR5/1)　ｼﾙﾄ。
2　黒褐色土(10YR2/3)　ｼﾙﾄ。
3　黒褐色土(10YR2/2)　ｼﾙﾄ。
4　黒色土(10YR2/1)　ｼﾙﾄ。
5　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　砂質。

1区

北壁
4　黒褐色土(10YR3/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
5　黄灰色土(10YR6/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
6　黄褐色土(10YR5/4)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
7　褐灰色土(10YR5/1)　粘質埴壌土。
8　暗灰黄色土(10YR5/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
南壁
4　灰白色土(10YR7/1)　ｼﾙﾄ。
5　明褐色土(7.5YR5/6)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
6　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘質埴壌土。細砂混。
7　褐灰色土(10YR5/1)　粘質埴壌土。細砂少混。
8　褐灰色土(10YR4/1)　軽埴土。
9　にぶい黄橙色土(10YR６/4)　砂質ｼﾙﾄ。粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
11　褐灰色土(10YR5/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。砂混。
a　褐灰色土(10YR6/1)　粘質埴壌土。
b　にぶい黄橙色土(10YR6/4)　ｼﾙﾄ質埴壌土。細砂混。
c　褐灰色土(10YR5/1)　粘質埴壌土。
d　にぶい黄褐色土(7.5YR4/3)　ｼﾙﾄ質埴壌土。

2区

7　褐灰色土(10YR6/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
8　黄褐色土(10YR5/6)　ｼﾙﾄ質埴壌土。細砂ﾌﾞﾛｯｸ多混。
9　灰色土(N5/1)　粘質埴壌土。
11　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ｼﾙﾄ。
12　にぶい黄橙色土(10YR6/4)　ｼﾙﾄ。
13　褐灰色土(10YR5/1)　ｼﾙﾄ。
14　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ。
15　灰黄褐色土(10YR5/2)　粘質埴壌土。
19　泥炭層。
20　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(7.5Y3/1)　粘土。
22　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　粘土。

3a区

Ⅶ　灰黄褐色土(10YR4/2)　細砂混。
Ⅷ　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘質土。細砂少混。
Ⅸ　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　細砂・粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
Ⅹ　灰黄褐色土(10YR5/2)　細砂少混。
ⅩⅠ　褐色土(10YR4/4)　細砂少混。
ⅩⅡ　褐色土(10YR4/4)　粘質土。粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
ⅩⅢ　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘土ﾌﾞﾛｯｸ中混。細砂中混。
ⅩⅣ　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘質土。粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
ⅩⅤ　暗褐色土(10YR2/3)　粘質土。粘土ﾌﾞﾛｯｸ中混。
ⅩⅥ　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘質土。粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。細砂少混。

3b・4a区

Ⅱ4　黒褐色土(10YR3/1)　軽埴土。
Ⅲ1　灰黄褐色土(10YR6/2)　ｼﾙﾄ。
Ⅲ2　褐灰色土(10YR5/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
Ⅲ4　褐灰色土(10YR4/1)　埴壌土。
Ⅲ6　洪水砂。
Ⅳ1　灰黄褐色土～にぶい黄褐色土(10YR6/2～6/4)　ｼﾙﾄ。細砂混。
Ⅳ2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　軽埴土。
Ⅳ2'　にぶい黄褐色土(10YR6/4)　粘土。
Ⅳ3　にぶい黄褐色土～黄褐色(土10YR5/4～5/6)　ｼﾙﾄ。
Ⅳ4　浅橙色土(7.5YR8/4)　粘土。
Ⅳ5　明橙色土(7.5YR5/6)　軽埴土。
Ⅳ6　記載なし
Ⅴ1　明黄褐色土(2.5Y6/6)　細砂。

4b区東

5　黒褐色土(10YR3/2)　ｼﾙﾄ。
6　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。
7　褐色土(10YR4/4)　細砂層。
9　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　灰色ｼﾙﾄ。
10　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質粘土。
11　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　砂層。
12　黒色土(10YR2/1)　ｼﾙﾄ質粘土。
13　褐灰色土(10YR4/1)　粘土。

5b区

東壁
7b　褐灰色土(10YR4/1)　砂質ｼﾙﾄ。
11　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ。
12a　黒褐色土(10YR3/2)　ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
12b　黒色土(10YR2/1)　ｼﾙﾄ。泥炭層基調。
13　暗褐色土(10YR2/3)　ｼﾙﾄ。泥炭粒混。

6区

6　黒褐色土(10YR3/2)　ｼﾙﾄ層。
7　褐灰色土(10YR5/1)　ｼﾙﾄ層。
9　褐灰色土(10YR4/1)　粘土・ｼﾙﾄ層。
10　褐灰色土(10YR5/1)　粘土・ｼﾙﾄ層。
11　褐灰色土(10YR4/1)　粘土・ｼﾙﾄ層。
12　黒色土(10YR1.7/1)　粘土質ｼﾙﾄ層。
13　黒褐色土(10YR3/1)　粘土層。

7a区

6　暗褐色土(10YR3/2)　ｼﾙﾄ。
7a　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。
7b　灰黄褐色土(10YR5/2)　ｼﾙﾄ。
9　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。
11　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ。
11下　褐灰色土(10YR5/1)　粘土に近いｼﾙﾄ。
12　黒色土(10YR1.7/1)　泥炭が土壌化。
13　褐灰色土(10YR4/1)　粘土。

7b・8区

6　黒色土(10YR2/1)　ｼﾙﾄ。
7a　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。
7b　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。
11　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ。
11下　褐灰色土(10YR5/1)　ｼﾙﾄ。泥炭ﾌﾞﾛｯｸ・細粒砂混。
12　黒色土(10YR1.7/1)　泥炭層。
13　黒褐色土(10YR3/1)　ｼﾙﾄ。

9区

6　黒色土(10YR2/1)　ｼﾙﾄ。
6中　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。
6下　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。細砂混。
7a　褐灰色土(10YR5/1)　ｼﾙﾄ。
7c　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。
8a　黒褐色土(10YR3/1)　ｼﾙﾄ。泥炭粒少混。
8b　黒褐色土(10YR3/1)　ｼﾙﾄ。泥炭多混。

10区

5c-1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。
6　黒褐色土(10YR2/1)　ｼﾙﾄ。
7a　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。粗砂粒混。
7b　黒褐色土　ｼﾙﾄ。
8　黒色土(10YR1.7/1)　ｼﾙﾄ。

11a区

5c　褐灰色土(10YR4/1)　細粒砂。
6　黒色土(10YR2/1)　ｼﾙﾄ。
7a　黒褐色土(10YR3/2)　ｼﾙﾄ。
7c　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。

11b区

5c　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂層。ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
6　黒色土(10YR2/1)　粘土。
7a　黒褐色土(10YR3/2)　ｼﾙﾄ。
7c　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。

11c区

5c-1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂層。細粒砂。
5c-2　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂層。中粒砂。ｼﾙﾄ混。
5c-3　灰黄褐色土(10YR6/2)　砂層。中粒砂。ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
6　黒色土(10YR1.7/1)　ｼﾙﾄ。
7a　黒褐色土(10YR3/2)　ｼﾙﾄ。
7b　黒褐色土(10YR3/1)　ｼﾙﾄ。
7c　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。

12a区

8　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。
10a　褐灰色土(10YR4/1)　砂層。
10b　黒褐色土(10YR3/1)　中粒砂。
11　黒色土(10YR2/1)　ｼﾙﾄ。

第 13 図　基本層序（詳細図５）

第３節　遺構

本節の土層名は、原則的に第２節にある基本土層を使用し、部分的に堆積する土層の記載の場合には、調査時の呼称である各地区の基本土層名を（　）付きで表記した。

１　弥生時代の遺構

（１）概要　［第 10 表・図版 1］

弥生時代の遺構の検出面は、Ⅷ層上面【第４検出面】であり、２区～11 区の範囲に分布する。その種類と検出数は、水田跡（水田２面・畦畔 23 条）・水田跡に伴う溝跡８条・土器集中１基であり、以下の第 10 表に地区別検出数を示した。

遺構の時期は、ほとんどが弥生時代中期後半と考えられるが、7b・８区の畦畔の一部と９区の溝跡は弥生時代後期の可能性が高い。Ⅷ層（弥生時代中期後半の水田層）は、調査区北壁の土層断面観察により、２区～11 区の広い範囲で確認した。このうち 7a 区までの東側の調査区では、水田面をⅦ層（泥炭層）が薄く被覆し、7b・８区西側以西では被覆しない（図版１）。Ⅶ層の被覆する２区～7a 区では、水田面が遺存する水田跡を検出した。3b・4a 区第２水田、7a 区第３水田等、小畦畔により区画された小区画水田であったと考えられる。これらの小区画水田は、3b・4a 区北西側に位置する南北方向の帯状微高地を挟み、等高線に沿って区画されていた。また、この微高地の南西側縁辺部にあたる 5b 区では、等高線に沿う大畦畔を検出した。

一方、Ⅶ層が被覆しない西側調査区の 7b・８区以西では、Ⅴ層（古墳時代の耕土層）下で、芯材を埋設する大畦畔基部のみを検出した。これらの大畦畔は 50～70m 間隔で、正方位に斜行した同方向を向いているため、大畦畔により区画される大区画水田であったと考えられる。連続耕作により、水田面が遺存していないことから、大区画内を区画する小畦畔の確認はできなかった。また、西側調査区では、東側調査区で確認できたⅥ層（弥生時代後期前半の洪水土層）の堆積がみられないため、7b・８区では、弥生時代中期後半の畦畔と弥生時代後期の畦畔をほぼ同一面で検出した。弥生時代後期の水田跡の確認は、局所的であり、その全容は不明である。

弥生時代中期後半の本遺跡の地形は、山側の 12 区から後背低地の最低点である２区へ向かって、概ね西から東へ傾斜する。千曲川の自然堤防上には集落域（塩崎遺跡群）が広がり、１区はその自然堤防端部に位置するため、水田域の東端は２区であったと考えられる。用水とみられる溝跡はほとんど確認されていないが、主水源は西側崖錐地形先端部の湧水か西側の沢等の小河川とみられ、畦越しに灌漑を行ったものと考えられる。

弥生時代後期の本遺跡の地形は、２区と 3a 区にⅥ層が比較的厚く堆積したため、3b・4a 区が若干低くなる。水田域は 3b・4a 区～９区の範囲内であったと考えられるが、3b・4a 区には南北方向の帯状微高地があるため、微高地以西の 4b 区～９区の比較的狭い範囲に限られた可能性がある。

第 10 表　弥生時代遺構の地区別検出数

遺構名＼地区名		1	2	3a	3b･4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b･8	9	10	11	12	合計
水田跡	水田				1				1						２面
	畦畔（SC）		3		4		3			9	1	1	2		23 条
溝跡（SD）			5		2						1				８条
土器集中（SQ）							1								１基

（２）水田跡

水田跡は２区から 11 区の範囲で検出した。畦畔による区画の確認が可能なものには、第２水田（3b・4a 区）、第３水田（7a 区）のように、水田名を付した。以下、地区別に水田跡の概要を記す。水田跡に伴う畦畔については、大畦畔と芯材を伴う畦畔のみ個別に記載した。

なお、弥生時代中期後半の水田跡については、第６章第１節２に詳細を記した。

２区　［遺構：図版１・２・PL1、土器：図版 84・PL27］

第４調査面は、Ⅶ層が被覆するが、その堆積は調査区東側に向かって薄くなり、東端には堆積しない。Ⅶ層下の洪水粘土層（20 層）が水田面を被覆し、洪水粘土層を除去したⅧ層上面で、ほぼ平行する褐灰色粘土の帯状部分３条を検出した。高まりは僅かであった。他調査区との土層対比から畦畔と判断し、SC108・109・110 とした。また検出した溝跡 SD093・094・101・102・103 の５条は、全て掘削された溝跡ではなく、湿地の窪地に滞水した自然の痕跡と判断した。遺物は、調査区北壁土層断面のⅥ層最下部から弥生時代後期前半の壺（22）が出土した。Ⅷ層のプラント・オパール分析（2016 年度）はイネのプラント・オパールが 7,200 個 /g と高い値で検出され、水田耕作土の可能性が高いと考える。Ⅵ層最下部の出土土器と検出層位から、時期は弥生中期後半と判断した。

3b・4a 区　［土器：図版 84］

第４調査面は、Ⅶ層に薄く被覆される。調査区北西側の微高地と、その裾部に広がる小畦畔で区画された水田跡を検出した。当初は検出した畦畔ごとに登録を行っていたが、調査区のほぼ全域で小畦畔が検出されたため、整理の段階でそれらを一括して「第２水田」として登録した。微高地上からは、甕（15）が出土した。

第２水田　［遺構：図版１・２・５・６・PL1］

位置：3b・4a 区ⅧF14・15・19・20・23・24・25、ⅧG06・07・11・12・13・16・17・18・21・22・23、ⅧK03・04・05・08・09・10、ⅧL01 グリッド。

水田被覆層と水田面の状況：Ⅶ層が薄く堆積し、水田面が遺存する。

検出：Ⅷ層上面。調査区北西側に位置する微高地の裾部で、等高線に沿う北東―南西方向に、Ⅷ-1 層が帯状にのび、延長線上の北壁土層断面で畦畔状に高まることを確認した。Ⅷ-1 層は水田土壌化しており、水田耕作土と判断した。帯状部分では、Ⅷ-1 層上面に無数に確認できる足跡と考えられる窪みが希薄であり、畦畔と考えた。平面精査により、微高地裾部に平行、もしくは直交する畦畔を複数検出した。

水田域（広がりと傾斜）：水田域は前述の微高地裾部に広がる。微高地裾部は、本来は検出した範囲より更に東側に広がっていたと推測するが、西側は調査区外となり不明である。地形は微高地から水田域に向かって緩やかに傾斜し、水田層上面は 3b・4a 区西側から 4d 区東に向かって傾斜する。

構造：**畦畔の構造**　小畦畔のみの検出である。等高線に沿う微高地の裾部に平行か、直交方向に構築される。**水田区画の方法**　微高地裾部を水田区画の基準とし、微高地裾部と平行方向または直交方向に延びる畦畔により、水田区画が形成される。平行方向の畦畔を構築して区画を形成した後、直行方向に畦畔を構築して区画を仕切ったと考える。**水田の枚数・面積**　水田の枚数は合計 46 枚。規模と形状のわかる区画が 10 枚、畦畔が四周しないが規模と形状を推定できる区画が 36 枚である。水田一筆の面積は５～25㎡である。**水利形態**　水路を確認していない。水田域内の高所に水路を設置し、畔越しに灌漑を行ったものと推察する。**水田土壌**　Ⅷ-1 層はグライ化した粘土に近いシルト層で、酸化鉄が斑紋状に集積する。泥炭を含

み、やや暗い。Ⅷ-1 層上面と下面には細かな起伏が見られる。Ⅷ-1 層上面には足跡と思われる窪みが分布するが、下面に窪みは見られない。Ⅷ-1 層の厚さは 10～20㎝、3b・4a 区中央部から西側が厚い傾向がある。調査区北西側の微高地から水田域にかけての部分がやや厚い。

遺物：弥生時代中期後半から後期にかけての土器片が、水田検出面から少量出土。

科学分析：プラント・オパール分析（2017 年度）によると、北壁の土層断面のⅧ-1 層でイネのプラント・オパールが畦畔部分 6,700 個 /g、田面部分 4,300 個 /g 検出され、水田耕作土の可能性が高いと考える。Ⅷ-1 層の畦畔直下にⅧ-2 層の畦畔状の高まりを確認し、Ⅷ-2 層からも 5,900 個 /g 検出されていることから、Ⅷ-2 層はⅧ-1 層に先行した水田層と考える。

水田の時期：出土土器と検出層位から、弥生時代中期後半と判断した。

5b 区　［遺構：図版 1・3・PL1、土器：図版 84・PL27］

第２調査面では、調査区中央から西側にかけてⅦ層が薄く堆積していた。調査区西側ではかく乱が激しく、北壁付近で大畦畔 SC059 を検出したのみである。東側では西側にはない腐植土層（12b 層）が堆積し、甕（18・19）が出土した。その直上の黒褐色土層（12a 層）では、弥生時代中期後半の土器片がまとまって出土した SQ001 を検出した。水田層を被覆するⅦ層が黒褐色土層上にも部分的に堆積することから、時期差はあまりないものと考えられる。調査時には東側部分を 3b・4a 区で検出した微高地西端部にあたると考えたが、東壁で大畦畔状の高まりが確認できたことから、この一帯まで水田域が広がっていたものと推察した。整理作業時に腐植土層・泥炭層の堆積のない帯状部分を大畦畔と判断し、SC113 として登録を行った。また、SC059 と並行する腐植土層・泥炭層の堆積のない帯状部分についても同様に、SC114 として登録を行った。この 5b 区では下層Ⅷ-2 層でも畦状の高まりが確認されており、SQ001 を含む土層（12a 層）まで、弥生中期後半の中で２～３期の改変の可能性が推察される。

SC059　［遺構：図版 1・3・PL1］

位置：5b 区ⅦT21 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。調査区北壁の土層断面観察で、Ⅶ層が堆積しないⅧ-1 層の高まりを確認した。5b 区西側はかく乱が著しく、調査区北側で、高まりがわずかに残る範囲を検出した。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－20°－Ｅ。長さ 2.0m、上端幅約 3.0m、下端幅 3.5m、調査区北壁で高さ 20～25㎝。　**構造**：連続耕作により、畦畔基部のみ遺存。規模から大畦畔と考える。　**科学分析**：プラント・オパール分析（2018 年度）では、SC059 上部・中部・下部でイネのプラント・オパールが 10,300 個・5,600 個・8,800 個 /g、水田面で 7,100・4,400 個 /g と非常に高い値で検出され、水田耕作が行われていたと考える。畦畔で特に値が高いことから、稲藁が構築時の補強材として使用されたか、維持管理用として畦畔上部に敷設された可能性が考えられる。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

SC113　［遺構：図版 1・3］

位置：5b 区ⅧY12・13 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。腐植土（12b 層）中で、高まりのないⅧ層の帯状部分を検出し、延長線上にあたる調査区東壁断面では高まりを確認した。整理作業の段階で調査記録の照合作業から判断し、SC 登録を行った。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－27°－Ｗ。長さ 6.8m、幅 3.8m、調査区東壁で高さ 12㎝。　**構造**：西端は SC114 に接続。規模から大畦畔と考える。　**科学分析**：調査区東壁でのプラント・オパール分析（2018 年度）では、イネのプラント・オパールが 1,900 個 /g とやや低い。水田耕作は周辺で行われていただけであったか、行われていたとしても持続的ではなかった可能性があ

る。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

SC114　［遺構：図版１・3］

位置：5b 区Ⅷ Y02・03・07・12・16・17・21・22 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。Ⅶ層、腐植土（12b 層）で、高まりのほとんどないⅧ層の帯状部分を検出した。整理作業の段階で調査記録の照合作業から判断し、SC 登録を行った。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－16°－Ｅ。長さ 37.4m、幅 6.0m。　**構造**：中央部の東側は SC113 に接続。規模から大畦畔と考える。SC059 と２条が並走していた可能性がある。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

7a 区

第２調査面をⅦ層が被覆しており、全域から小畦畔で区画された水田跡を検出した。調査時には SL015 として遺物を取り上げたが、SL とは本来は SC 等によって区画された面を示すものであり、既に平安時代の水田跡ではその定義通りに SL を登録していた。そのため、SL 名は水田跡全体を示す遺構番号として相応しくないと判断し、整理作業時に「第３水田」へ登録変更を行った。この他の遺構は検出されていない。

第３水田　［遺構：図版１・3・7・8・PL1、土器：図版 84］

位 置：7a 区ⅦR14・15・18・19・20・23・24・25、ⅦS11・12・13・16・17・18・21・22・23、ⅦW03・04・05・09・10・14・15、ⅦX01・02・03・06・07 グリッド。

水田被覆層と水田面の状況：Ⅷ層上面に厚さ５～10㎝のⅦ層が堆積する。Ⅶ層は標高の低い調査区南東で最も泥炭化し、調査区西側ではシルト化してⅧ層との区別が困難であった。Ⅷ層上面には細かな起伏はあるが、足跡のような窪みは確認できなかった。

検出：Ⅷ層上面。Ⅶ層中に、調査区南東隅から西側に向かうⅧ層の帯状部分を確認した。Ⅶ層を掘り下げてⅧ層が高まる畦畔を検出したが、高まりはわずかなため、田面との境界が不明瞭な部分もあった。帯状部分の先行トレンチでの横断面確認により、Ⅷ層が明瞭に高まることを確認した。田面については、Ⅷ層の高まりをⅦ層が被覆し、畦畔が接続して一定範囲を囲み、水田一筆を形成することを確認した。

水田域（広がり・傾斜）：水田層分布範囲と畦畔の分布から、調査区全域が水田域と考える。調査区内の地形は北西から南東に向かって傾斜する。

構造：**畦畔の構造**　小畦畔のみの検出である。**水田区画の方法**　調査区内の地形は北西から南東に向かって傾斜し、南北畦畔は傾斜にほぼ平行に、東西畦畔は傾斜に直交方向に延びる。水田一筆の形状は基本的には長方形で、細長いものもある。これは区画途中である可能性もある。遺存状況が悪く、畦畔の構築順序は不明である。**水田の枚数と面積**　合計 32 枚確認。規模が確認できた区画が１枚、畦畔が四周しないが水田区画の存在が推定できた区画が 31 枚である。水田一筆の面積は、水田規模が確認できた区画が約 28㎡、推定した区画が約 21～31.5㎡である。**水利形態**　水路は確認していない。3b・4a 区同様に畦越しに灌漑を行ったと想定すると、水田面の傾斜から、北西から南東に方向に行ったものと考える。微高地東側縁辺部の 3b・4a 区とは異なる方向に、畔越し灌漑されていた可能性がある。**水田土壌**　暗灰色粘土でグライ化し、粘りと締りが強い。酸化鉄が斑状に集積する。厚さ６～15㎝、調査区東側で厚く西側で薄い。

遺物：検出面から、弥生時代中期後半の甕（14）が出土。

科学分析：調査区北壁の土層断面Ⅷ層でのプラント・オパール分析（2018 年度）では、イネのプラント・オパールが 7,700 個 /g と高い値で検出され、水田土壌化していることから水田耕作土と考える。

水田の時期：出土土器と検出層位から、弥生時代中期後半と判断した。

7b・８区

第２調査面の調査区中央から東側部分では、厚さ５～10㎝のⅦ層が部分的に水田層を被覆する。一方、西側では極めて薄く、確認できない地点もあった。また、Ⅶ層の土質は調査区東側では泥炭化し、西側ではシルト質が強い。調査区東側では高まりが遺存し芯材を埋設した畦畔基部８条、西側では芯材のみ確認できた１条を検出した。地形は北東から南東へ傾斜する。調査区北壁の土層断面でのプラント・オパール分析（2018 年度）では、イネのプラント・オパールがⅧ層で 5,100 個 /g と高い値で検出され、水田耕作土層の可能性が高い。

調査区東側の畦畔の時期は、調査時には全て同一時期と捉えたが、整理作業時における土層対比や出土土器の検討から、弥生時代中期後半と弥生時代後期とに分かれる可能性がでてきた。Ⅶ層の堆積がある SC063 からは弥生時代中期前半の土器が芯材付近から出土したのに対し、Ⅶ層の堆積が無く畦畔盛土（灰色粘土）を確認した SC061 からは弥生時代後期の土器が出土した。SC065 からも弥生後期の土器が出土し、SC069 でもⅦ層の堆積が無く SC061 同様の畦畔盛土を確認したことから、SC061・065・069 の３条の畦畔は弥生時代後期の可能性が高いと判断した。また、これらの３条の畦畔と接続する SC062 も弥生時代後期の可能性が高いと考えた。

SC061　［遺構：図版１・３・７・８・９・PL2、土器：図版 85、木製品：図版 103・PL40］

位置：7b・８区ⅦV17・18・23・24 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。Ⅷ層中に、酸化鉄が集積する帯状の高まりを確認し、帯状部分中央部では主軸方向に延びる芯材が出土した。北壁土層断面でも高まりを確認したため、畦畔と判断した。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－42°－Ｗ。長さ 18.5m、幅 1.1～2.4m、検出面で高さ 0.10m、調査区北壁で高さ 15㎝。　**構造**：南側は SC062・069 と接続し、北側は調査区外へ延びる。SC066、SC069 の交差地点の幅が広い。断面にはⅦ層の被覆がみられず、Ⅷ層上に畦畔盛土と考えられる灰色粘土（図版９-1 層）を確認した。等高線に沿う方向に構築され、規模と芯材の埋設から大畦畔と考える。　**芯材出土状況**：盛土から木材が横たわった状態（以下「横木」という。）で多数出土した。ほぼ自然木である。SC066 脇では、杭（８・９ほか）を打設して横木が固定される。SC062・069 接続部分にも横木が杭（６・７ほか）で固定される。　**遺物**：弥生時代後期の甕（25）・壺（24）が芯材とともに出土。　**時期**：検出層位と出土土器から、弥生時代後期と判断した。

SC062　［遺構：図版１・３・７・８・９・PL2、木製品：図版 103・104・PL40・41］

位置：7b・８区ⅦV24・25 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。Ⅶ層中にⅧ層が帯状に高まり、帯状部分中央部で主軸方向に延びる木材を確認。SC061 と接続し、芯材を埋設した畦畔と判断した。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－35°－Ｅ。長さ 7.3m、幅 1.1～1.5m、検出面から高さ５㎝。　**構造**：幅は北側がやや狭く、SC061・069 との交差地点で幅が広くなる。南西側は SC061・069、北東側は SC065 と接続、SC061 の直交方向に延びる。等高線の直交方向に構築され、規模から大畦畔と考える。　**芯材出土状況**：埋設頻度は比較的少ない。南西側の SC061・069 との接続地点、中央部で芯材が埋設され、打設した杭（11～14 ほか）で固定される。　**遺物**：芯材の他はなし。　**時期**：接続する SC061・065・069 と同じく、弥生時代後期の可能性が高い。

SC063［遺構：図版１・３・７・８・10・PL2、土器：図版 84・PL27、木製品：図版 103・104・PL41］

位置：7b・８区ⅦV14・15・20 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。Ⅶ層中に酸化鉄集積がやや多いⅧ層が帯状に高まることを確認した。高まりの直上にはⅦ層が堆積せず、両裾に堆積する。帯状部分は、薄いⅦ層から露出したⅧ層上面の田面と同様の土質で、SC061 と平行し、畦畔と考えた。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－39°－Ｗ。長さ 15m、幅 1.0～1.5m、SC064 との接続部分で高さ５㎝、調査区東壁で高さ 10㎝。**構造**：北側が SC064、南側は SC068 と接続、SC064 との接続部分の幅が広い。等高線に沿う方向に構築され、規模と芯材の埋設から大畦畔と考える。　**芯材出土状況**：全域にわたり埋設され、SC064 との接続地点周辺は非常に密に埋設されている。２ｍを超える横木が重ねて設置され、杭（15・16 ほか）で固定されている。　**遺物**：弥生時代中期後半の土器の甕（6）、壺（４・５）が、芯材周辺から出土。芯材とともに埋設されたと考える。SC064 との接続部付近から、甕（７～９）が出土。　**時期**：出土土器から弥生時代中期後半と判断した。

SC064［遺構：図版１・３・７・８・10・PL2、土器：図版 84］

位置：7b・８区ⅦV09・10 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。Ⅶ層中にⅧ層が帯状に高まり、酸化鉄の集積がやや多い状況を確認した。SC063 と接続するため、畦畔と考えた。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－35°－Ｅ。長さ 5.8m、幅 1.1～1.6m、検出面から高さ５㎝。　**構造**：南西側が SC063 と接続、SC063 との接続部分の幅が広い。等高線に直交する方向に構築され、規模から大畦畔と考える。　**芯材出土状況**：SC063 との接続部分で芯材が出土。埋設方向から SC063 に伴うと考える。　**遺物**：SC063・064 交差地点付近から、弥生時代中期後半の甕（７～９）・壺・高坏または鉢の破片が出土。　**時期**：出土土器と検出層位から、弥生時代中期後半と判断した。

SC065［遺構：図版１・３・７・８・９・PL2、土器：図版 85、木製品：図版 104・PL41］

位置：7b・８区ⅦV20・25 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。Ⅶ層中にⅧ層が帯状に高まり、酸化鉄の集積がやや多い状況を確認した。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－80°－Ｗ。長さ 2.0m、幅 1.9～2.5m、検出面から高さ５㎝、調査区東壁で高さ 10㎝。　**構造**：北西側が SC062 と接続し、東側は調査区外へ延びる。等高線に沿う方向に構築され、規模から大畦畔と考える。　**芯材出土状況**：SC062 との接続部分付近で、横木が杭（14・17 ほか）に固定される。　**遺物**：弥生時代後期の甕（26）が出土。　**時期**：出土土器から弥生時代後期と判断した。

SC066［遺構：図版１・３・７・８・PL2］

位置：7b・８区ⅦV13・14・18 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。部分的に白色シルトが堆積する中、Ⅷ層の高まりが帯状に延びるのを確認した。調査区北壁では高まり直上にⅦ層が堆積しており、帯状部分を畦畔と考えた。　**重複**：（新）SC061。　**規模**：方位はＮ－20°－Ｅ。長さ 8.1m、幅 0.5～0.7m、調査区北壁で高さ 10㎝。　**構造**：やや蛇行し、北側がやや幅が広い。等高線に直交する方向に構築され、規模から大畦畔と考える。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

SC067［遺構：図版１・３・７・８、木製品：図版 104・PL41］

位置：7b・８区ⅩⅢA20 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。Ⅷ層中に、北西―南東方向に延びる木杭と横木を確認した。南壁の土層断面ではⅧ層が高まり、高まりの両端にⅦ層の堆積を確認した。平面精査では畦畔の高まりやプランは確認できなかった。　**重複**：なし。　**規模**：芯材の方位Ｎ－48°－Ｗ。芯材の検出

範囲長さ 3.0m、幅 0.6m。調査区南壁で高さ 10㎝。　**構造**：詳細は不明。南側は調査区外へ延びる。等高線に沿う方向に構築されたと推察する。　**芯材出土状況**：自然木の横木と杭（18・19）が出土。　**遺物**：芯材の他はなし。　**時期**：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

SC068　［遺構：図版１・３・７・８・10・PL2］

位置：7b・８区Ⅶ V20 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。Ⅶ層中に、酸化鉄が集積するⅧ層の帯状の高まりを確認した。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－20°－Ｅ。長さ 4.6m、幅 0.5～0.8m、検出面から高さ５㎝。**構造**：やや蛇行する。北東側は SC063 と接続。等高線に直交する方向に構築され、規模から大畦畔と考える。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

SC069　［遺構：図版１・３・７・８・９・PL2、木製品：図版 103・PL41］

位置：7b・８区Ⅶ V24、ⅩⅢB04 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。酸化鉄が集積する帯状のわずかな高まりを確認した。SC061 と接続し、芯材と考えられる木材が出土したことから畦畔と判断した。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－10°－Ｅ。長さ 4.1m、幅 2.5～2.7m。　**構造**：平面形はやや弓状。北東側は SC061 と接続、南側は調査区外へ延びる。断面にはⅦ層がみられず、畦畔盛土と考えられる灰色粘土を確認した。等高線に直交する方向に構築され、規模から大畦畔と考える。　**芯材出土状況**：SC061 との接続地点で芯材が出土。横木が杭（10 ほか）で固定される。　**遺物**：芯材の他はなし。　**時期**：Ⅶ層が被覆せず、接続する SC061 同様の畦畔盛土が確認できたことから、SC061 と同時期の弥生時代後期と判断した。

９区

北壁の土層断面ではⅦ層の堆積はなく、連続耕作により、水田面は遺存しないものと推察される。第２調査面での古墳時代の畦畔 SC106 の調査時に、下層から出土した芯材と土器について検討し、整理作業時に畦畔 SC115 として登録を行った。Ⅷ-2 層に帰属する畦畔としては、調査を行った唯一の畦畔である。

SC115　［遺構：図版１・３・11、土器：図版 84・PL27］

位置：９区ⅧA21・22 グリッド。　**検出**：Ⅴ層下層での古墳時代の畦畔 SC106 の出土芯材調査時に、下層Ⅷ-2 層（8b 層）から芯材と土器片が出土し、整理作業時に SC115 として登録した。延長線上にあたる調査区北壁の土層断面では、連続耕作によりⅧ-2 層の高まりが確認できないため、本跡の正確な範囲は不明である。　**重複**：（新）SC106。　**規模**：芯材が出土した方位Ｎ－50°－Ｗ。長軸 5.7m、短軸 1.6m。**構造**：古墳時代の SC106 下のため掘下げが困難であり、詳細は不明。北壁・南壁では、SC115 の帰属するⅧ-2 層直上層であるⅧ-1 層で、畦畔状の高まりを確認している。　**遺物**：弥生時代中期後半の甕（13）が出土。　**科学分析**：調査区北壁の土層断面のプラント・オパール分析（2019 年度）では、イネのプラント・オパールがⅧ-1 層（8a 層）で 9,800 個 /g、SC115 の帰属するⅧ-2 層（8b 層）で 6,900 個 /g と共に高い値で検出され、水田耕作土と考えられる。　**時期**：出土土器と検出層位から、弥生時代中期後半と判断した。

10 区～ 11 区

Ⅶ層は被覆しない。連続耕作により水田面は遺存しておらず、芯材を埋設した畦畔基部を３条検出したのみである。Ⅳ層（奈良・平安時代の耕土層）上面での調査時に、下層のⅧ層から芯材が露出したが、Ⅳ層は粘土に近いシルトで掘下げが困難であり、畦畔の平面プランの正確な把握には至らなかった。畦畔の規

模や芯材の埋設状況から、10区SC105・11a区SC089・11c区SC101の３条は大畦畔と考える。方位も同様で正方位から斜行しており、Ⅷ層には同方向を基準とした水田大区画が存在したものと推察する。

SC089　［遺構：図版1・4・12・PL2、土器：図版84・PL27］

位置：11a区ⅩⅡR14・15・20、ⅩⅡS16・17グリッド。　**検出**：11b区調査時に調査区北東隅を掘削した際、北壁でⅧ層から木材が露出し、隣接する11a区へ延びることを確認。11a区調査時に調査区南東隅で木材が南東―北西方向に出土した。調査区西壁の土層断面でⅧ層の高まりを確認した。　**規模**：方位Ｎ－55°－Ｗ、上端幅0.4～0.8m、下端幅1.1～1.3m、検出面から高さ10㎝。　**構造**：わずかな高まりを確認したが、プランの詳細は不明である。規模と芯材の埋設から、大畦畔と考える。　**芯材出土状況**：主軸方向の芯材を３か所で確認した。中央部では自然木、建築部材と考えられる横木が杭で固定される。東側では横木を埋設、南東隅では長い木材の周囲に細かい自然木を埋設し、横木の外側に杭が設置される。芯材の一部はⅧ層に入り込む。　**遺物**：壺形鉢（10）、有孔鉢（11）が出土。　**科学分析**：隣接する11b区北壁のプラント・オパール分析（2018年度）では、Ⅷ層はイネのプラント・オパールが6,600個/g検出され、水田耕作土層と考える。放射性炭素年代測定（2019年度）では、３点の芯材の^{14}Ｃ年代は1,810±20年BP、1,780±20年BP、1,760±20年BPで、弥生時代後期～古墳時代前期の年代を示した。　**時期**：芯材の年代測定では弥生時代後期以降の年代を示したが、検出土層と出土土器から、SC101・105同様に弥生時代中期前半の可能性が高いと判断した。

SC101　［遺構：図版1・4・11・PL2、土器：図版84、石器：図版95・PL35、木製品：図版103・PL40］

位置：11c区ⅩⅡV25、B05、ⅤO01グリッド。　**検出**：平安時代の水田跡の調査時に、Ⅳ層下層のⅧ層から木材が露出し、Ⅷ層のわずかな高まりを確認した。先行トレンチの土層断面観察により、大畦畔と考えられる規模の高まりを確認、出土木材は大畦畔に埋設した芯材と判断した。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－45°－Ｗ。長さ9.0m、上端幅0.4～0.6m、下端幅0.9～1.2m、検出面から高さ10㎝。　**構造**：Ⅳ層からの掘り下げと精査が困難で、平面プランの確認ができなかったが、規模と芯材の埋設から、大畦畔と考える。　**芯材出土状況**：主軸方向に長さ１～３ｍの横木を重ね、杭が打設される。横木には自然木の他、建築部材（５）がある。芯材の多くはⅧ層に入り込む。　**遺物**：横木周辺から弥生時代中期後半の土器の甕（12）、南側から打製石斧（４）が出土。　**科学分析**：11c区北壁西側のプラント・オパール分析（2019年度）では、イネのプラント・オパールがⅧ層で10,300個/gという非常に高い数値で検出され、水田耕作土層と考える。放射性炭素年代（2019年度）では、３点の芯材の^{14}Ｃ年代は2,280±24年BP、2,210±20年BP、2,150±20年BPで、全て弥生時代中期の年代を示した。弥生時代中期に伐採された木材を芯材に用いたと考える。　**時期**：検出土層と芯材の年代測定値から、弥生時代中期後半と判断した。

SC105　［遺構：図版1・4・11・PL2、石器：図版97・98・PL36・37］

位置：10区ⅩⅡR15・20、S16・17グリッド。　**検出**：Ⅴ層下層から芯材が出土し、Ⅷ層のわずかな高まりを検出した。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－40°－Ｗ。上端幅0.7m、下端幅1.2～1.7m、検出面から高さ10㎝。　**構造**：Ⅷ層直上のⅤ層シルトは粘土に近く掘り下げが困難で、平面プランの確認ができなかった。規模と芯材の埋設から、大畦畔と考える。　**芯材出土状況**：自然木の横木等が主軸方向に散在的に埋設される。芯材の多くはⅧ層に入り込む。　**遺物**：盛土内部から、時期不明の甕と壺の破片が出土。南東隅芯材近くから砥石（28）、西側から凹石（23）が出土。　**科学分析**：放射性炭素年代測定（2019年度）では、３点の芯材の^{14}Ｃ年代はそれぞれ2,470±20年BP、2,190±20年BP、2,150±20年BPで、全

て弥生時代中期の年代を示した。　**時期**：検出土層と芯材の年代測定値から、弥生時代中期後半と判断した。

（３）溝跡

SD112　［遺構：図版１・２・５］

位置：3b・4a 区ⅥF24 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。第２水田北側で細長い帯状の落ち込みを検出し、先行トレンチにより断面の掘り込みを確認した。　**重複**：なし。　**埋土**：単層。褐灰色シルト質粘土。砂、炭化物が混入する。　**規模**：方位Ｎ－32°－Ｗ。長さ 3.99m、幅 0.31m、深さ 0.20m。　**構造**：北端は調査区外へ延びる。断面は緩やかな擂鉢状。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

SD113　［遺構：図版１・２・５］

位置：4d 区ⅧK23 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。　**重複**：なし。　**埋土**：上層は灰黄褐シルト、中層は炭化物片が多量に混入する黒褐色シルト質粘土、下層は黒色泥炭層で未分解の植物片が水平に堆積する。こうした状態から溝跡の底面が湿地化する時期があったことが推察される。　**規模**：方位Ｎ－２°－Ｗ。長さ 2.72m、幅 1.97m、深さ 0.18m。　**構造**：ほぼ直線で、南北両端が調査区外に延びる。立ち上がりは緩やかに傾斜し、底面はほぼ平坦で細かな凹凸がある。東側はテラス状の平坦地となり、幅が広くなる。SD113 東側には足跡等の窪みが分布し、西側には分布しない。検出面は西から東に傾斜し、SD113 は地形変換点に位置する。調査区西側の微高地と東側の水田域の境界に構築された溝跡と考えられる。**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

SD187　［遺構：図版１・３・PL2、土器：図版 85・PL27］

位置：９区ⅫE25、ⅫJ05・09・10・13・14、ⅩⅢA21、ⅩⅢF01 グリッド。　**検出**：Ⅴ層下面。　**重複**：（新）SK905。　**埋土**：単層。　**規模**：方位Ｎ－43°－Ｅ、南西から北東に傾斜。長さ 25.62m、幅 1.02m、深さ 0.11m。　**構造**：緩く湾曲し、両端とも調査区外に延びる。断面は浅くなだらかな皿状。　**遺物**：弥生時代後期の甕（23）、その他土器片、木材小片がわずかに出土。　**時期**：出土土器から弥生時代後期と考える。

（４）遺物集中

SQ001　［遺構：図版１・３・PL2、土器：図版 84・PL27］

位置：ⅦY13 グリッド。　**検出**：Ⅴ層下面調査時に、東西方向にトレンチを掘削した際に、土器がまとまって出土した。トレンチを拡張して、黒褐色土（12a 層）を精査して遺物を検出した。土器周辺には、焼土・炭化物・硬化面等は確認されなかった。　**重複**：なし。　**規模**：土器の出土範囲は南北 1.7m、東西 3.2m。　**構造**：掘り込み等は伴わない。Ⅷ層に堆積する腐植土層直上層の黒褐色土層（12a 層）に包含される土器と考える。Ⅷ層、黒褐色土層とも、Ⅶ層で被覆されていることから、埋没時期は同じ頃と考えられる。　**遺物**：弥生時代中期後半の甕（１・２・３）が黒褐色土（12a 層）中から出土。南西側では正位でつぶれた状態で出土、南東側のものは摩滅が激しかった。　**時期**：出土土器から弥生時代中期後半と判断した。

２　古墳時代の遺構

（１）概要　［第 11 表・図版 13］

古墳時代の遺構の検出面は、基本土層Ⅴ層-2～4 層【第３検出面】であり、遺構の分布は１区から 4b 区までの範囲と６区、９区である。遺構の種類と検出数は、水田跡（畦畔 26 条）・溝跡３条・土坑 15 基・遺物集中１基である。以下の第 11 表に、地区別検出数を示した。

遺構の時期は古墳時代前期と判断した。調査区北壁の土層断面観察からは、Ⅴ層（古墳時代の耕土層）が１区～11 区の広い範囲で確認できたが、連続耕作により遺構の遺存状態は悪く、水田跡に伴うと考えられる畦畔等を断片的に検出したのみである。東側の 3b・4a 区以東ではⅤ層が３～４枚に分層でき、古墳時代の畦畔は主にⅤ-4 層上面で検出した。一方、西側の 7b・８区～９区では連続耕作によりⅤ-2 層以下の分層できず、畦畔はⅤ-2 層上面で検出した。7b・８区で弥生時代後期の水田跡に伴う畦畔がⅦ層上層で検出されたことから、Ⅴ層最下層は弥生時代後期の水田層も含むと考えられる。

図版 13 に示したように、１区から 4b 区までの範囲で、Ⅴ-3 層（古墳時代の洪水砂層）が部分的に堆積する。堆積が比較的厚かった 3b・4a 区で大畦畔や小畦畔の一部を検出し、畦畔脇からは土器がまとまって出土した。5b 区では土器片が多量に出土したものの、遺構の確認はできなかった。９区で杭列と芯材を伴う並走する２条の大畦畔基部 SC106・107 を検出した。この SC106 と重複する遺物集中 SX002 からは、小型丸底土器や高坏といった土師器、玉類等の祭祀に関わると考えられる遺物が出土した。

（２）水田跡

3b・4a 区

Ⅴ-3 層の堆積は東側では 10㎝程度で、西側では希薄で堆積がない部分もあった。連続耕作により水田面や畦畔の高まりは遺存しない。洪水砂を埋土とする窪みが面的に分布する中で、窪みの分布がなく酸化鉄の集積する大畦畔２条を検出した。その他に小畦畔９条を断片的に検出したが、これらの畦畔が全て同時期に存在したかは不明である。このうち大畦畔については、以下に個別に記述する。

SC038　［遺構：図版 13・15・17・PL3、土器：図版 85・PL28］

位置：3b・4a 区ⅧG06・07、12・13・18・19・20 グリッド。　**検出**：Ⅴ-4 層上面。Ⅴ-3 層で薄く被覆されていた。この砂層を埋土とする窪みが無数に分布する中、窪みが全く無いⅤ-4 層の帯状部分を確認し、調査区北壁の土層断面観察でもわずかな高まりを確認した。北東側中央部に酸化鉄が多く集積する。また、Ⅴ-4 層下面の調査面で本跡とほぼ同じ位置に酸化鉄集積が密集する帯状部分を確認したが、本跡の酸化鉄が下位まで浸透したものと考え、同一の遺構と判断した。畦畔中央部に伴う水路下部に集積した酸化鉄を検出した可能性を考えた。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－61°－Ｗ。長さ 35.6m、幅 2.0～2.4m。**構造**：南東隅で SC032 とほぼ直交方向に接続し、水田区画を形成していた可能性がある。　**遺物**：南東側の畦畔脇から、土師器甕（39～41）がまとまって出土。　**時期**：出土土器から古墳時代前期と判断した。

第 11 表　古墳時代遺構の地区別検出数

遺構名＼地区	1	2	3a	3b･4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b･8	9	10	11	12	合計
水田跡　畦畔（SC）	4	1	7	11	1					2				26 条
溝跡（SD）	1	1			1									３条
土坑（SK）				14			1							15 基
遺物集中										1				１基

SC043　［遺構：図版 13・15・17・PL3］

位置：Ⅷ F18・19・22・23、K02・03・07・08・11・12 グリッド。　**検出**：Ⅴ-4 層上面。酸化鉄集積が帯状に集積し、わずかなⅤ-4 層の高まりの両側にⅤ-3 層が薄く堆積する。　**重複**：（新）SD107・SK549・SK550。　**規模**：方位Ｎ－30°－Ｗ。長さ 39.7m、幅 2.5～2.8m。　**構造**：北側で SC042 に接続する。SC038 とほぼ直交方向にのび、SC032・SC038 とともに大区画が形成された可能性がある。　**出土遺物**：畦畔の検出時に甕片が出土。　**時期**：検出層位と遺構配置から、古墳時代前期と判断した。

９区

第１調査面のⅤ層上面で杭頭を数本検出し、第２調査面のⅤ層中（7c 層上面）では４条の杭列を検出した。杭の総数は 120 本を超える。発掘段階では、第２調査面出土の杭は、第１調査面検出の畦畔番号で取り上げている。整理段階で、杭列は上層の畦畔には伴わず、Ⅴ層に存在した古墳時代の畦畔に伴うと判断した。そのため、遺物が出土した古墳時代の畦畔を調査時段階の SC106・107 とし、遺物の出土のない上層の古代の畦畔の遺構番号を SC119・120 へ変更した。

SC106　［遺構：図版 13・16・18・19・PL3、木製品：図版 106～110・112～114・PL43～50］

位置：９区ⅩⅢA17・21・22・23 グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面の古代の畦畔 SC119 調査時に、Ⅴ層上層で杭頭を数本検出した。掘り下げを行い、Ⅷ層上面で杭列を２条検出した。杭頭の多くは、Ⅴ層下層・Ⅷ層中で検出した。高まりの確認はできなかったが、芯材が出土し、杭列を伴う畦畔と判断した。整理作業の段階で、上層で検出した SC119（調査時には SC106）と分離した。　**重複**：（新）SX002。　**杭列**：２条の杭列の間隔は約２ｍ。丸木材・割材が使用される。東側杭列は 20 本程度の疎らな杭列である（26・27・37・52・55・65・70 ほか）。方位Ｎ－61°－Ｗ。長さ 20.0m、杭の間隔は１ｍ～４ｍ。西側杭列は 60 本程度の非常に密な杭列である（29・36・45・53・64・68・163・166 ほか）。方位Ｎ－58°－Ｗ。長さ 19.8m、杭の間隔は 0.5～１ｍで、SX002 北側では４ｍ内に 20 本以上の杭が密集する（31・42・47・54・58・67・71 ほか）。杭列の間にも、SX002 付近で 10 本程度検出した。　**構造**：SC107 西側に約６ｍの間隔で並走する。規模から大畦畔基部と考える。大畦畔２条の間に水路が敷設されていた可能性を考えたが、溝跡は確認できなかった。　**芯材出土状況**：主にⅤ層下層から出土し、一部はⅧ層中に入る。ほぼ自然木で、一部にエブリ（PL-159）・建築部材等が出土した。南側に多く埋設されていた。　**遺物**：芯材の他はなし。　**時期**：検出土層と遺構の重複関係から、古墳時代前期と判断した。

SC107　［遺構：図版 13・16・18・19・PL3、木製品：図版 106～112・PL43～47・50］

位置：９区ⅩⅢA17・18・23・24 グリッド。　**検出**：Ⅴ層土中の古代の畦畔 SC120 調査時に、Ⅴ層下層で杭頭を数本検出、掘り下げを行い、Ⅷ層上面で杭列を２条検出した。杭頭の多くは、Ⅴ層下層・Ⅷ-1 層中で検出した。東側の１条は短く、杭の本数も少ない。盛土の確認はできなかったが、芯材が出土し、杭列を伴う畦畔と判断した。整理作業の段階で、上層で検出した SC120（調査時には SC107）と分離した。**重複**：なし。　**杭列**：２条の杭列の間隔は約２ｍ。丸木材・割材が使用される。東側杭列は 10 本程度のやや疎な杭列である（57・60・62・63・164 ほか）。方位Ｎ－65°－Ｗ、長さ 7.0m。杭の間隔は１～２ｍ。西側杭列は 30 本程度のやや疎な杭列である（28・30・32・34・35・38～41・43・44・46・48～51・61 ほか）。方位Ｎ－65°－Ｗ、長さ 19.4m。杭の間隔は１～２ｍで、数本まとまる部分もある。　**構造**：SC106 東側に約６ｍの間隔で並走する。規模から大畦畔基部と考える。畦畔２条の間に水路が敷設されていた可能性を

考えたが、溝跡は確認できなかった。　**芯材出土状況**：木材の小片が少量出土。　**遺物**：芯材の他はなし。　**時期**：検出土層から古墳時代前期と判断した。

（３）土坑　［付表５・遺構：図版 13・15・17］

古墳時代の可能性が考えられる土坑は、3b・4a 区の第３・第４調査面で 14 基、６区第２調査面で１基検出した。3b・4a 区の土坑の一部は第４調査面で検出したが、出土遺物から古墳時代の遺構と判断し、本来は第３調査面に帰属するものと判断した。第４節の掲載遺物を出土した土坑は、巻末の土坑一覧表に記した。

（４）溝跡　［付表6］

SD073　［遺構：図版 13・14］

位置：２区ⅧD14。　**検出**：Ⅴ層下面。帯状の褐灰色土を検出、先行トレンチにより落ち込みを確認した。　**重複**：なし。　**埋土**：単層。灰黄褐色粘土層、砂混じり。　**規模**：方位Ｎ－21°－Ｅ。長さ 4.51m、幅 0.64m、深さ 0.06m。　**構造**：北側は調査区外まで延びる。断面形は皿状。　**遺物**：なし。　**時期**：出土層位から、古墳時代前期と判断した。

SD100　［遺構：図版 13・14・PL3、土器：図版 87 図・PL29、玉類：図版 94・PL34］

位置：１区ⅢV25・ⅢW21。　**検出**：Ⅴ-3 層下面。洪水砂の堆積の中、先行トレンチでの土層断面観察により砂質土の帯状の堆積を確認し、本跡を検出した。　**重複**：（新）SA004。　**埋土**：上層は洪水砂が堆積。中層は黒褐色粘質土、下層は灰黄褐色シルト、最下層は黒褐色粘質土。　**規模**：主軸方位Ｎ－45°－Ｗ。南東から北西へ傾斜。長さ 7.80m、幅約 3.18m、深さ約 0.39㎝。　**構造**：人為的な掘削ではなく、緩やかに傾斜した自然流路に洪水砂が堆積したものと推察する。出土土器が他地区と比べて年代的に新しい。本跡は微高地端部に位置し、Ⅴ層の堆積が薄いため、本来の構築面は検出土層よりも上層であった可能性が高い。　**遺物**：土師器の坏とみられる土器（90）・土師器高坏（92）・同小型壺（93）・同壺（94）と、黒色土器坏（91）、須恵器甕（95）、管玉（１）、勾玉（２）が出土。　**時期**：出土土器から古墳時代前期末と判断した。

（５）遺物集中

SX002　［遺構：図版 13・16・20・PL3、土器：図版 86・PL28、土製品・玉類：図版 94・PL34、石器：図版 95・PL35、木製品：図版 105・PL42］

位置：９区ⅩⅢA22・23 グリッド。　**検出**：Ⅷ層上面。SC106 に伴う芯材・杭列の検出時に、灰色シルトの落ち込みを２か所確認し、北側を SX002a、南側を SX002b とした。　**重複**：（旧）SC106。　**埋土**：**a**　複層。上層はⅤ層下層（7c 層）基調のシルト、Ⅷ-1 層ブロックと被覆泥炭層が混じる。中層はシルト層で砂が混じる。下層は黒褐色シルト層で砂が多く混じる。**b**　単層。a 上層に同じ。　**規模**：**a**　主軸方位Ｎ－35°－Ｅ。長軸 5.0m、短軸 3.4m、深さ 0.22m。**b**　残存長で長軸 4.8m、短軸 2.5m、深さ 0.98m。　**構造**：**a**　細かく屈曲する不整なＬ字形。側面、底面には細かな凹凸がある。底部中央へ緩やかに傾斜、底部中央が窪む。**b**　細かく屈曲する方形状。下端から中央部へ緩やかに傾斜。ａ・ｂとも人為的な掘り込みの可能性が高く、埋土は共通性があり、本来は一連の遺構であったと考える。底面精査時に、SC106 に伴う杭列（25・27・55・70 ほか）を検出した。本跡構築時に杭の先端を削平したものと考える。　**遺物**：**a**　木製鍬（20・21）、棒状木製品（22）、建築部材（23）等の木材が出土。中央部南西側の木

材集中の周辺から、土師器高坏（56～58）、同小型丸底土器（59～64）、同小型壺（65～67）、同甕（68・69）、同壺（70・71）がまとまって出土。小型丸底土器は、逆位で底面中央部から出土した。埋土からミニチュア土器（12）と小玉（10）が、本跡周辺のⅤ層下層（7c 層）から管玉（６～８）と勾玉（２）が出土。祭祀で用いた土器や石製品、木材等を廃棄した可能性が考えられる。 **b**　打製大型刃器（７）、木材が出土。

時期：出土土器から古墳時代前期と判断した。

３　古代の遺構

（１）概要　［第 12・13 表・図版 21］

古代の遺構の検出面は、Ⅲ層（平安時代の洪水砂層）が堆積しない１区から９区ではⅤ層上面【第２検出面】であり、Ⅲ層が堆積する 10 区から 12 区ではⅣ層上面【第１検出面】である。遺構の分布は、５区、６区を除く調査区に広く分布する。その種類と数量は、水田跡（水田１面・畦畔 53 条）と土坑８基・溝跡 29 条である。第 12 表に、遺構の地区別検出数を示した。

また本項では、隣接する長谷鶴前遺跡群で検出された古代の水田跡についても、本遺跡で検出された水田跡の広がりの一部として捉え、合わせて掲載することとした。古代の遺構の検出面は、長谷鶴前遺跡群の第５調査面の平安時代の洪水砂層下であり、これは本遺跡の第１検出面であるⅣ層上面に対応する。検出した遺構の種類と数量は、水田跡（水田１面・畦畔 16 条）である。第 13 表に、遺構の地区別検出数を示した。

Ⅳ層は調査区全域で確認できた。遺構の時期は、条里型地割施工前と以後とに分かれる。条里型地割施工前の遺構は、１区～９区の範囲で溝跡や畦畔の痕跡等を断片的に検出したのみであり、その全容の把握には至らなかった。また、長谷鶴前遺跡群１区でも、平安時代の洪水砂層下の泥炭層に被覆された状態で、条里型地割とは方向が異なる畦畔を検出したが、詳細な時期については不明である。

条里型地割施工以後の遺構は、Ⅲ層が堆積する遺構と、Ⅲ層の堆積がない遺構とがある。Ⅲ層の堆積は図版 21 に示したように、10 区西側～12 区、更に隣接する長谷鶴前遺跡群１区、２区の範囲に渡る。これらの調査区ではⅢ層下から水田跡を検出し、特に 11c 区以西では洪水砂層が厚く堆積していたため、水田面が良好な状態で遺存していた。畦畔の方向は、10 区と 11 区では条里型地割と同じであるが、12 区から山側の長谷鶴前遺跡群にかけては、条里型地割と異なるものも混じる。水田跡の時期は、Ⅲ層の年代から平安時代の前期と考えられる。

一方、Ⅲ層の堆積がみられなかった石川条里遺跡東側の１区～９区の範囲では、連続耕作により水田面は遺存せず、条里型地割と同方向の畦畔基部の痕跡や畦畔に伴うと考えられる溝跡を、部分的に検出した

第 12 表　石川条里遺跡　古代遺構の地区別検出数

遺構名＼地区		1	2	3a	3b･4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b･8	9	10	11	12	合計
水田跡	水田											1			1 面
	畦畔（SC）	7	2		9				1	3	2	2	18	9	53 条
溝跡（SD）		6	1	1	7	2			1	11					29 条
土坑（SK）		1	3									2	2		８基

第 13 表　長谷鶴前遺跡群　古代遺構の地区別検出数

遺構名＼地区		1	2	3	合計
水田跡	水田	1			1 面
	畦畔（SC）	9	7		16 条

のみである。遺構の配置から、条里型地割の坪境にあたる南北大畦畔としてSC001（２区）、南北大畦畔に伴う溝跡としてSD095（１区）、SD046（２区）、SD104（3b・4a区）、SD064（4b区）、坪境にあたる東西大畦畔としてSC029・030（１区）、SC054（7a区）、SC058（11b区）が考えられる。水田跡の時期は、Ⅲ層が被覆しないために平安時代の前期に限定できない。１区～４区の範囲では、平安時代後期の土器が出土することから、平安時代後期まで耕作が続いたものと推察される。

条里型水田の範囲は、長谷鶴前遺跡群からSD95（１区）まで広がっていたと考えられる。なお、条里型水田跡については、第６章第１節３に詳細を記した。

（２）水田跡

１区～９区

１区～９区の範囲では、Ⅲ層が堆積せず、水田面や畦畔の高まりは遺存していなかった。畦畔基部やその下部構造、もしくは畦畔に伴うと考えられる溝跡を検出したのみである。正方位に載る条里型地割と同方向の畦畔は、１区～4b区までの範囲と7a区に分布する。このうち、条里型地割の坪境にあたる大畦畔と考えられるものと、９区で検出した正方位に斜行する条里型地割施工前と考えられる大畦畔について、個別に記述する。

１区

SC029　［遺構：図版21・22］

位置：１区ⅢV23・24・25、ⅢW21。　**検出**：Ⅴ層土中。輪郭がやや不明瞭な灰色粘質土の帯状の高まりを確認した。下部から、畦畔に直交する方向に並列し、埋土が砂の短い溝跡数条を検出した。２区SC001下部で検出した波板状遺構と同様であることから、大畦畔下部と考えた。　**重複**：（新）SK356、SD056。**規模**：方位Ｎ－85°－Ｅ。長さ23.2m（延長線上のSC030まで含めると62.9m）、幅1.4～2.0m、検出面から高さ６㎝。　**構造**：西側延長線上にあるSC030と本来は同一畦畔であり、東側延長線上には南北大畦畔に伴うSD095に接続する溜池状遺構SK356があることから、ここまでは水田化されていたと考える。２区SC001と１区SD095はほぼ109m間隔で、条里型地割の坪境にあたる南北大畦畔の位置であり、SC029は南北大畦畔へ接続する東西大畦畔と推察する。下部の波板状遺構は、大畦畔の基礎施設の可能性がある。　**遺物**：なし。　**時期**：検出土層と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

SC030（下部）　［遺構：図版21・22］

位置：１区ⅢU25、V21～23。　**検出**：Ⅴ層下層。２か所で、還元化した土層が落ち込む短い溝跡が数条並列するものを検出した。２区SC001下部や１区SC029下部で検出した波板状遺構と同様に、大畦畔跡下部の基礎施設と考えた。　**重複**：なし。　**埋土**：洪水性堆積物を基調とする。　**規模**：溝跡の長さ0.4～1.1m、幅0.2～0.34m、深さ0.04～0.1m。溝跡の検出範囲は、西側が長さ4.5m、東側が長さ4.3m。**構造**：溝跡の掘り込みは斜めで底面は平坦、断面形は逆台形。西側に７条、東側に５条並列する。東側延長線上の類似遺構を伴うSC029と本来は同一の畦畔であり、配置から条里型地割の坪境にあたる東西大畦畔と考える。　**遺物**：なし。　**時期**：検出土層と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

２区

SC001　［遺構：図版21・22］

位置：２区ⅧE04・09・14グリッド。　**検出**：Ⅴ層下層（９層上面）。帯状の輪郭を確認し、規模と位置か

ら大畦畔と想定した。高まりは確認できなかった。また、Ⅴ層下面で畦畔跡に直交する方向に並列する溝跡を検出、帯状範囲に一致することから、大畦畔下部の基礎施設と考えた。　**埋土**：溝跡の上層は灰黄褐色シルト質植壌土、下層は黒褐色土ブロックが混じる埋め戻し土。　**重複**：（新）SD023・024・025・SD046。　**規模**：方位Ｎ－５°－Ｅ。長さ 10.6m、幅 3.9m。　**構造**：下部の溝跡の平面形は不整形、掘り込みは凹凸が顕著で、底面はほぼ平坦。13 条並行する。北端は調査区外へ延び、南端も未調査域に延びる。道路遺構の基礎施設と考えられる波板状遺構に類似し、SC029・030 でも同様の遺構を検出した。1 区 SD095 とほぼ 109m 間隔で、条里型地割の坪境にあたる南北大畦畔と考える。　**遺物**：なし。　**時期**：検出土層と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

7a 区

SC054　［遺構：図版 21・24］

位置：7a 区ⅦS12・13 グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。酸化鉄の集積したⅤ層上面で、色調が異なる灰色化した酸化鉄の集積が少ない帯状部分が、東西方向に延びるのを確認した。調査区東壁の土層断面でⅣ層のわずかな高まりを確認した。　**重複**：なし。　**規模**：主軸方位Ｎ－92°－Ｅ。長さ 11.0m、幅 0.60～0.80m。　**構造**：遺構配置から、条里型地割の坪境にあたる東西大畦畔と考える。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

９区

SC119　［遺構：図版 21・24］

位置：９区ⅩⅢA17・21・22・23 グリッド。　**検出**：Ⅴ層土中（7a 層上面）で、Ⅳ層が遺存する帯状範囲を２条確認した。高まりは遺存していなかった。発掘調査時に本遺構を SC106 とし、下層から出土した杭列も同一遺構として取り上げたが、整理作業時に杭列は下層の古墳時代の畦畔に伴うと判断した。そのため、SC106 は下層の畦畔を指す遺構番号とし、遺物出土のない本遺構を SC119 へ変更した。　**重複**：なし。　**規模**：方位はＮ－60°－Ｗ。長さ 16.2m、幅 1.1～1.8m。　**構造**：SC120 が西側に 2.2～4.0ｍの間隔で並走する。Ⅳ層の範囲を捉えたのみで、詳細は不明である。規模から大畦畔基部と考える。古墳時代畦畔 SC106 とほぼ同じ位置であり、９区西側は谷地形になることから、地形的条件から同じ場所に構築された可能性がある。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位と遺構配置から、奈良時代の可能性が考えられる。

SC120　［遺構：図版 21・24］

位置：９区ⅩⅢA17・18・23・24 グリッド。　**検出**：Ⅴ層土中（7a 層上面）で、Ⅳ層が遺存する帯状範囲を２条確認した。高まりは遺存していなかった。発掘調査時に本遺構を SC107 とし、下層から出土した杭列も同一遺構として取り上げたが、整理作業時に杭列は下層の古墳時代の畦畔に伴うと判断した。そのため、SC107 は下層の畦畔を指す遺構番号とし、遺物出土のない本遺構を SC120 へ変更した。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－60°－Ｗ。長さ 12.3m、幅 1.1～4.1m。　**構造**：中央部は幅が狭く、北西側で幅が広くなる。SC119 が東側に 2.2～4.0ｍの間隔で並走する。Ⅳ層の範囲を捉えたのみで、詳細は不明である。規模から大畦畔の基部と考える。古墳時代 SC107 とほぼ同じ位置であり、９区西側は谷地形になることから、地形的条件から同じ場所に構築された可能性がある。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位と遺構配置から、奈良時代の可能性が考えられる。

10区～12区

Ⅲ層が堆積する10区～12区では、広範囲に渡って水田面の遺存する水田跡を検出し、整理作業時に第１水田として登録した。水田跡は隣接する長谷鶴前遺跡群まで広がる。芯材が出土した畦畔については、個別に記載する。

第１水田　［遺構：図版21・25・26・27・28、PL4・6］

位置：10区ⅩⅡN10・13～15・18～20・23～25グリッド、11区ⅩⅡR15・20・25、ⅩⅡS13・16・18・21・22、ⅩⅡV25、ⅩⅡW05・07～10・13・16・17・21・22グリッド、ⅩⅤA20・25、ⅩⅤB03～05・07～24、ⅩⅤC01・02・06、ⅩⅤF04・05・09・10・14・15・19・20・24・25、ⅩⅤG01～03・06・07・11・12・16、12区ⅩⅣJ19・20・24・25、ⅩⅣO02～05・09・10、ⅩⅤF12・13・16～18・21、ⅩⅤK01・09・14グリッド。

水田被覆層：Ⅲ層は12a区が厚く、東側に向かって次第に薄くなり、11b区以東ではわずかしか確認できず、10区東側では確認できない。砂層上層は細粒砂でラミナが発達し、下層は中粒砂で灰色シルトブロックが混入する。11c区の畦畔脇には、部分的に灰色シルトブロックが多量に混入する。下層の洪水砂が堆積した当初は畦畔裾部や水田面を覆う程度であったが、その後に上層の洪水砂が堆積したことにより、水田が完全に埋没した可能性がある。12a区南の東壁の土層断面観察では、下層の洪水砂の直上は薄い黒色シルト層、その上に上層の洪水砂が堆積していることから、一回の洪水砂で水田が埋没したのではなく、時間差で少なくとも２回押し寄せた洪水砂により埋没したものと考えられる。

検出：Ⅳ層上面。Ⅲ層を掘り下げ、畦畔の高まりと水田面を検出した。Ⅲ層がわずかな10区と11a区では、足跡とみられるⅢ層を埋土とする窪みがない帯状部分を畦畔と判断した。

水田面の状況：畦畔に囲まれた水田面は、11c区で15面（SL21～35）、12a区で３面（SL16～18）を確認した。水田面は大きく３種類の様相を呈した。①ほぼ平坦。洪水砂下層を埋土とする足跡と考えられる窪みが多く分布する（12a区、11c区東側）。②凹凸が著しい。洪水砂下層と上層を埋土とする足跡と考えられる窪みがあるが、少ない（12a区、11c区西側）。③平坦。このうち③は水田耕作がされていなかった可能性がある。現在の水田耕作を参考にすると、①が田植え直後頃、②は耕起を示すと考えられる。

構造：**畦畔の認定**　以下の２つがある。①被覆砂層が厚く堆積する場所で、Ⅳ層が帯状に立体的に高まるもの。畦畔上には足跡が分布しない（11c区、12a区）。②被覆砂層の堆積がわずかで、足跡等の窪みが分布しないⅣ層が帯状に延びるもの。高まりはないか、わずかに遺存する程度。水田耕作時には高まりがあったため、帯状部分に足の踏み込みがなかったと考えた（10区、11a区）。①は水田が砂層で被覆される直前の畦畔、②の築造時期は限定できないが砂層の被覆まで存在した畦畔基部と考える。**畦畔の構造**　大畦畔と小畦畔は水田層を盛り上げて構築している。断面形は、12a区と11c区西側では台形・半円形で遺存状態が良く、11c区中央では凹凸のある崩れた形となり、11c区東側ではわずかな高まり、11a区と10区では高まりはない。11c区で、小畦畔の高まりが途切れる箇所（SC093・095間）を確認したが、そこからも芯材が出土した。小畦畔は毎年造り直されており、埋没段階では畦畔が築造されていなかったが、以前に畦畔が築造されていた時期があったことを示すものと考える。**水田区画の方法**　Ⅲ層の堆積が厚い11c区～12a区では、明瞭な水田区画を確認した。11c区では、畦畔は正方位の方向に延びる。水田一筆は、正方形に近い区画、短冊型の区画等があり、畦畔は約20mを基準に配置され、約20m四方の水田区画を形成する。11c区SC094・095のように、20m四方の水田区画内部を更に東西方向に細分された場所もある。12a区では、正方位の方向に載る畦畔はSC081（南北大畦畔）のみで、他は正方位に斜行し、約20mの基準線に位置しない。畦畔は正方位を意識して構築されたが、山側では地形の制約から正方位に延

びない畦畔が構築されたと考える。**水田区画の枚数と面積**　形状と規模が推測できる水田区画として 11c 区 SL027 がある。SL027 は東西長５～６ｍ、南北長 19～20m、面積約 100㎡であり、半折区画を南北２等分、東西４等分したものに相当する。**水利形態**　水口は 11c 区では SC095・098 南端と、SC091 南端・092 北端の２か所が確認でき、水田面のレベルから北西から南東への水回しを想定する。12a 区では SC083・084 交点付近と SC083 南端の２か所で確認した。SL016・017 から SL018 へ、北東から南西への水回しを想定する。用水は確認できなかった。地形的に高い場所に水路を設け、畦越し灌漑で滞水させた可能性や、西側の山側から流水する水を使った可能性がある。**水田土壌**　Ⅳ層は黒褐色シルト層である。西側の 12a 区は黒褐色化が著しく、東側の 10 区は黒褐色化が減じる傾向である。水田層には斑状に酸化鉄が集積していたが、12a 区ではやや少ない傾向である。厚さは南側の 12a 区で 15～20㎝、東側に向かって薄くなり、10 区西側では 10㎝に満たない。**水田の型**　3b・4a 区等、県道東側の水田層は暗灰色で酸化鉄が集積し、乾田と考える。西側に向かって水田層は黒褐色化し、12a 区では泥炭層を粒状に含む土壌となり、湿地であった場所を水田域としたか、湿地に近い環境下の水田であったと推測する。なお、プラント・オパール分析（2019 年度）では、11c 区と 12a 区のⅣ層はヨシ属が卓越し、水生植物が繁茂する湿地環境であったとの結果が出ている。

畦畔の復旧　［遺構：図版 29・PL6］：11c 区・12a 区の畦畔に、畦畔直上に土坑または溝状の落ち込みを確認した。埋土は黒褐色シルトで洪水砂が混入しないため、埋没から掘削までには時間差があり、被覆砂層直上に水田層が形成される段階で掘削したと考える。

芯材出土状況：畦畔の接続地点を中心に、芯材が出土している。

遺物：SC079 畦畔内から須恵器蓋（140）出土。Ⅳ層・畦畔内・被覆砂層から、土器が出土。

科学分析：Ⅳ層のプラント・オパール分析では、イネのプラント・オパールが 11b 区東壁（６層）で 3,700 個 /g（2018 年度）、11c 区西壁（６層）で 11,300 個 /g（2019 年度）、12a 区南の南壁（11 層）で 3,400 個 /g（2019 年度）と高い値で検出されており、水田耕作土と考える。

水田の時期：水田層・畦畔の出土土器と検出土層から、平安時代前期と判断した。

11 区

SC058　［遺構：図版 21・25・27・30・PL4、土器：図版 88・PL29、木製品：図版 115・116・121・122・124・130・131・PL51・52・56・57・59・64・65］

位置：11b 区ⅩⅡW08・09・10 グリッド。　**検出**：Ⅳ層上面。Ⅳ層水田面は調査区東側中央が窪み、窪みに向かって傾斜する。窪み部分の先行トレンチで、Ⅳ層がわずかに高まることを確認したが、不明瞭で凹凸が多かった。水田面では、砂を埋土とする足跡と考えられる窪みを無数に確認した。高まりの上面では足跡は確認できず、高まりの裾付近で歩行列を確認した。高まりに沿って、東西方向に多量の芯材を検出し、更に畦畔西側部分で高まりに直交する南北方向の芯材も検出した。　**重複**：（新）なし。　**規模**：方位Ｎ－85°－Ｅ。長さ 12m、幅 1.0～1.2m、検出面から高さ 10㎝。　**構造**：西側で南北方向の芯材と交差し、東西両端は調査区外へ延びる。上面には細かな凹凸があり、高まりは中央部付近しか遺存しない。畦畔が削平された後に、洪水砂層で埋没した可能性がある。芯材の埋設と規模、遺構配置から、条里型地割の坪境に位置する東西大畦畔と考える。　**芯材出土状況**：東西畦畔内部から多量の芯材が出土。横木は田下駄（72～74・76・77・80～84）、角材（112・113）、建築部材（121～123）等の木製品、自然木等である。杭は余り打設されていない（148 など）。南北畦畔からも田下駄（75・78・79）、板材等が出土。　**遺物**：芯材脇から須恵器坏Ａ（118）が出土したが、混入と考えられる。　**時期**：検出層位と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

SC091［遺構：図版 21・25・27・31］

位置：11c 区ＸＶA20・25、ＸＶB21、ＸＶF05・10、ＸＶG01・06 グリッド。　**検出**：Ⅳ層上面。Ⅲ層の中で、畦畔状の高まりを検出、砂層を掘下げて畦畔を露出させた。　**重複**：なし。　**規模**：方位はＮ－４°－Ｗ。長さ 21.8m、上端幅 0.5m、下端幅 0.8m、検出面から高さ 17㎝。　**構造**：東西方向の SC093 と交差、北端は調査区外へ延び、南端は SC092 と接続せず開口し、水口と考えられる。断面形は整った台形。遺構配置から、半折区画の南北畦畔と考える。　**芯材出土状況**：南側 SC093 との開口部付から木材が出土。**遺物**：芯材の他はなし。　**時期**：検出層位から、平安時代前期と判断した。

SC092［遺構：図版 21・25・27・31、木製品：図版 117・118・123・125・PL53・54・58・59・60］

位置：11c 区ＸＶG06・11・16 グリッド。　**検出**：Ⅳ層上面。Ⅲ層の中で、畦畔状のⅣ層の高まりを検出、砂層を掘下げて畦畔を露出させた。　**重複**：なし。　**規模**：方位はＮ－５°－Ｗ。長さ 11.7m、上端幅 0.7m、下端幅 0.9m、検出面から高さ６㎝。　**構造**：南端は調査区外へ延びる。畦畔上面に凹凸があり、崩れている。SC091 南端とは接続せずに開口し、水口として機能したと考えられ、北西から南東方向への水回しを想定する。遺構配置から、半折区画の南北畦畔と考える。　**芯材出土状況**：芯材が多量に埋設される。南側には枝状の材が多く、中央から北側にかけては田下駄（89～93）や建築部材（126～128）等、板材が多く出土。　**遺物**：芯材の他はなし。　**時期**：検出層位から、平安時代前期と判断した。

SC093［遺構：図版 21・25・27・32 図・PL4・5、土器：図版 89、木製品：図版 126・PL60］

位置：11c 区ＸＶA25・ＸＶB21・22 グリッド。　**検出**：Ⅳ層上面。Ⅲ層の中で、畦畔状のⅣ層の高まりを検出、砂層を掘下げて畦畔を露出させた。　**重複**：なし。　**規模**：方位はＮ－86°－Ｅ。長さ 14.7m、上端幅 0.7m、下端幅 0.9m、検出面から高さ 10㎝。　**構造**：西端は調査区外へ延びる。畦畔上面には凹凸が目立ち、崩れている。SC091・094 に接続する。遺構配置から、半折区画の東西小畦畔と推察する。**芯材出土状況**：Ⅳ層から芯材が出土した。一部に建築部材（129）があるが、多くは板材や木端等の薄く脆いものが埋設される。　**遺物**：「万（富）」の字が書かれた墨書土器須恵器坏Ａ（143）が出土。　**時期**：出土土器と検出層位から、平安時代前期と判断した。

SC095［遺構：図版 21・25・27・32・PL5］

位置：11c 区ＸＶB12・17・22・23 グリッド。　**検出**：Ⅳ層上面。Ⅲ層の中で、畦畔状のⅣ層の高まりを検出、砂層を掘下げて畦畔を露出させた。　**重複**：なし。　**規模**：方位はＮ－６°－Ｗ。長さ 20.8m、上端幅 0.6m、下端幅 1.0m、検出面から高さ 13㎝。　**構造**：Ｌ字形に屈曲し、北端は調査区外へ延びる。畦畔上面には凹凸が認められ、断面形は崩れている。SC093 東端（SL025 南東隅）は SC095 と接続せずに開口していることから、水口として機能したものと推察する。北西から南東方向への水回しが想定できる。遺構配置から、半折区画を東西に４等分する南北小畦畔と考える。　**芯材出土状況**：SC093 側の開口部付近に芯材が多く出土。　**遺物**：芯材の他はなし。　**時期**：検出層位から、平安時代前期と判断した。

12 区

SC081［遺構：図版 21・26・28・29・33・PL6、土器：図版 89、木製品：図版 117・121・123・125・130・PL53・56・58・59・64］

位置：12a 区北ＸＶF16 グリッド。　**検出**：Ⅳ層上面。調査区北壁の土層断面で、Ⅳ層の高まりを確認し

た。Ⅲ層上面をやや掘り下げた段階で礫と木材が出土、砂層を掘り下げて、高まりを露出させた。盛土上部は削平され、部分的にⅢ層が堆積する状況であった。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－４°－Ｗ。長さ 5.5m、上端幅 0.6～0.7m、下端幅 1.0～1.4m、検出面から高さ５～30㎝。　**構造**：畦畔上面には円形の窪みが分布、細かな起伏がみられた。畦畔側面には凹凸が見られ、畦畔上端が蛇行する。北側は調査区外へ延び、南側で SC082 と接続する。遺構配置、規模から、半折区画の南北大畦畔と考える。　**芯材出土状況**：畦畔盛土内、Ⅳ層内から芯材が出土。SC082 との接続地点付近に多く、畦畔主軸方向に建築部材（124・125）、田下駄（85～87）等の横木を重ねて埋設する。杭による固定はなかった。　**遺物**：南壁に接続する部分から須恵器坏Ｂ（141）が出土。　**時期**：出土土器と検出層位から、平安時代前期と判断した。

SC086　［遺構：図版 21・26・28・33・PL6、木製品：図版 117・121・130・PL53・56・57・64］

位置：12a 区南ⅩⅣO05・06・10、ⅤK01 グリッド。　**検出**：Ⅳ層上面。調査区南壁でⅣ層の高まりを確認、断面が台形状を呈しておらず畦畔か不明であったが、南側から芯材が出土したため畦畔と判断した。Ｓ字に蛇行する部分を検出し、当初はＳ字全体を畦畔と考えたが、隣接する 12c 区の調査で中世の居館堀跡 SD191 を検出したことにより、Ｓ字部分の東側半分は SD191 堀跡の埋土であったことが判明した。**重複**：（新）SD191。　**規模**：方位Ｎ－60°－Ｗ。長さ 6.2m、上端幅 0.6～0.9m、下端幅 2.0～2.5m、検出面から高さ 21㎝。　**構造**：緩く湾曲し、南端は調査外へ延びる。山側に位置し、正方位に斜行しており、条里型地割と非条里型地割とが混在する場所であると考える。　**芯材出土状況**：南側から、田下駄（88）等少量の横木が出土。　**遺物**：芯材の他はなし。　**時期**：検出層位から、平安時代前期と判断した。

長谷鶴前遺跡群

長谷鶴前遺跡群１区・２区では、平安時代の洪水砂層下から石川条里遺跡から広がる水田跡を検出し、整理作業時に第１水田として登録を行った。厚い洪水砂層に被覆された水田跡では、正方位に載る条里型地割と同方向の畦畔 SC04・11・16 を検出した。畦畔の芯材は、石川条里遺跡の第１水田と同様にいずれも条里型地割と同方向の畦畔の接続部付近から出土した。また、１区東側では洪水砂層下に泥炭層が堆積しており、洪水以前から耕作が放棄されていたことが判明した。泥炭層下からは、正方位に斜行する条里型地割とは方向が異なる畦畔 SC013～15・17～19 を検出し、いずれも畦畔の高まりが遺存していた。重複関係からは条里型地割方向の畦畔よりも SC13～15 が古く、更にそれよりも SC17～19 が古いと考えられるが、詳細な時期については不明である。

第１水田　［遺構：図版 21・26・28・PL7、土器：図版 89・PL30］

位置：１区ⅩⅣS12・13・17・18・22～25、X02～04・07・08・12～14・16～20・22～25 グリッド、２区ⅩⅣO16・17・21・22、T01・02・06・07・11・16・21 グリッド。

水田被覆層：１区、２区とも、石川条里遺跡の基本土層Ⅲ層が厚く堆積する。また、１区東側では、洪水砂層直下に堆積した泥炭層が畦畔を被覆していることから、洪水以前から耕作が放棄されていた可能性が高い。

検出：石川条里遺跡の基本土層Ⅳ層上面。Ⅲ層を掘り下げ、畦畔の高まりと水田面を検出した。１区東側では砂層直下の泥炭層下からも畦畔を検出した。

水田面の状況：水田面はほぼ平坦である。

構造：**畦畔の認定**　石川条里遺跡の第１水田の畦畔の認定①と同様である。**畦畔の構造**　石川条里遺跡の第１水田の 11c 区、12a 区と同様である。断面形は台形・半円形で遺存状態は非常に良い。**水田区画の方**

法　洪水砂層直下の畦畔は正方位に延びる。１区では、正方位に延びる畦畔 SC11 の下に正方位に斜行する畦畔 SC14・15 が重複する。**水田区画の枚数と面積**　形状と規模が判明した区画はない。**水利形態**　１区の SC13 と SC14 の間、SC04 と SC16 の間が接続せずに開口しており、水口として機能していたと考える。用水は検出していない。**水田土壌**　水田層は黒褐色粘土層である。

芯材出土状況：条里型地割と同方向の畦畔である SC04、SC11 の接続地点を中心に、芯材が出土している。

遺物：SC11 畦畔内から須恵器坏（145）、須恵器壺（146）が芯材とともに出土。水田面からは出土なし。

科学分析：水田層のプラント・オパール分析は行っていない。放射性炭素年代測定（2017 年度）では、平安時代の水田層の測定は行っていないいが、１区東側の平安時代の洪水砂層直下の泥炭層の泥炭の ^{14}C 年代は 1,350±20 年 BP、1,340±20 年 BP、1,290±20 年 BP を示した。

水田の時期：畦畔の出土土器と検出土層から、平安時代前期と判断した。

１区

SC11　［遺構：図版 21・26・28・34・PL7、土器：図版 89・PL30、木製品：図版 120・127～129・131・132・PL55・56・61～63・65・66］

地区：１区ⅩⅣO12・16・17・21・22、ⅩⅣT01・02・06・07・11・16・21 グリッド。　**検出**：長谷鶴前遺跡群の第５調査面で、石川条里遺跡Ⅳ層上面にあたる。Ⅲ層中に、畦畔状のⅣ層の高まりを検出した。洪水砂層を掘り下げ、畦畔を露出させた。　**重複**：（旧）SC14。　**規模**：方位Ｎ－３°－Ｅ。長さ 48.2ｍ、上端幅 1.5ｍ、下端幅 2.7ｍ、検出面から高さ西側 23㎝、東側は平坦。　**構造**：北端は調査区外へ延びる。南端は SC04 と接続する。規模から、条里型地割の南北大畦畔と考える。　**芯材出土状況**：SC14 との重複地点付近で、畦畔盛土から木材が露出している状況が確認された。田下駄（101～104）、建築部材（132～134）、曲物（150・151）、杭等の木製品、細い枝状の自然木が多数出土。畦畔の主軸に沿って埋設されたものが多い。畦畔に直交する一部の木材は、SC15 に帰属する可能性もある。　**遺物**：須恵器坏（145）、須恵器壺（146）が芯材と共に出土。　**時期**：検出層位と出土土器から、平安時代前期と判断した。

SC14　［遺構：図版 21・26・28・34］

位置：１区ⅩⅣT02・06・07・11・12 グリッド。　**検出**：長谷鶴前遺跡群の第５調査面で、石川条里遺跡でのⅣ層上面にあたる。Ⅲ層中に、畦畔状のⅣ層の高まりを検出した。Ⅲ層を除去して畦畔を露出させた。　**重複**：（新）SC11。　**規模**：方位Ｎ－20°－Ｅ。長さ 15.0ｍ、上端幅 2.4ｍ、下端幅 2.8ｍ、検出面から高さ 15㎝。　**構造**：南側で SC015 と接続、南端は調査区外へ延びる。北側延長線上にある SC13 とは接続せず、開口することから、水口として機能していたと想定する。遺構配置と規模から、非条里型地割の大畦畔跡と考える。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から平安時代前期と判断した。

２区

SC04　［遺構：図版 21・26・28・34・PL7、木製品：図版 118～119・126・127・130・131・PL54・55・60・61・64・65］

位置：１区ⅩⅣT16・17・21・22 グリッド、２区ⅩⅣS22・23・24・25 グリッド。　**検出**：長谷鶴前遺跡群の第５調査面で、石川条里遺跡Ⅳ層上面にあたる。Ⅲ層中に、畦畔状のⅣ層の高まりを検出した。Ⅲ層を除去して畦畔を露出させた。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－85°－Ｅ。長さ 45.6ｍ、上端幅 0.6ｍ、下端幅 11.5ｍ、検出面から高さ 15㎝。　**構造**：１区で南北大畦畔 SC ０11 に接続、東西両端は調査区外へ延びる。遺構配置と規模から、条里型地割の東西大畦畔と考える。　**芯材出土状況**：田下駄（95～100）、建築部材（130・131）、丸木杭（145・146）等の木製品が出土。　**遺物**：芯材の他はなし。　**時期**：検出層

位から平安時代前期と判断した。

（３）土坑　［遺構：付表5］

SK356　［遺構：図版21・22・35・PL8、土器：図版89、土製品：図版94・PL34、石製品：図版99・PL37］

位置：１区ⅢW17・22。　**検出**：Ⅴ層土中。不整形な砂質土の落ち込みを検出した。　**埋土**：上層は黄灰色シルト、細砂混。中層は褐灰色細砂質シルト。下層は灰黄色細砂。　**重複**：（新）SD087。　**規模**：長軸3.20m、短軸1.75m、深さ0.06～0.13m。　**構造**：平面形は不整な半円形、底面には凹凸がある。南東部で、条里型地割の坪境にあたる南北大畦畔に伴う用水と考えられるSD095と重複する。同時期に存在した溜池状遺構の可能性がある。　**遺物**：土器の種類・量ともに多い。須恵器坏Ａ（147・148）、同坏Ｂ、同甕（151、壺150）、同蓋が出土。黒色土器坏Ａ（149）、同埦、同高坏、同鉢、土師器甕、同小型甕が出土。土錘（９～11）、石錘（37）が出土。　**時期**：出土土器と検出層位、遺構の配置から、平安時代前期と判断した。

（４）溝跡　［遺構：付表6・図版35・PL8・9］

古代の溝跡は、巻末の溝跡一覧表に掲載した。そのうち、7b・８区の溝跡については、出土遺物と遺構の配置から時期を判断したものの、7a区と7b・８区境に位置する旧明暦用水跡と並行（または直交）方向であり、近世の可能性も残る。また一覧に掲載した溝跡の中で、条里型地割の坪境にあたる大畦畔に伴うと考えられる溝跡については、以下に個別に記述した。

SD046　［遺構：図版21・23・35・PL8］

位置：２区ⅧE04・09・14。　**検出**：Ⅴ層下層。褐灰色土の帯状の落込みを検出した。　**埋土**：砂の単層。　**重複**：（旧）SC001。（新）SD023・024・025。　**規模**：方位Ｎ－３°－Ｗ。北北西から南南東へ傾斜。長さ9.71m、幅0.57m、深さ0.03～0.08m。　**構造**：平面形は直線、断面形は浅い皿状。条里型地割の坪境南北大畦畔にあたる２区SC001に伴う溝跡と考える。　**遺物**：須恵器坏Ｂまたは壺、黒色土器坏Ａ、黒色土器と考えられる埦が出土。　**時期**：出土土器と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

SD064　［遺構：図版21・23・35・PL8、図版89］

位置：4b区ⅦO07・08・12・13・18・23、ⅦT03。　**検出**：Ⅴ層土中。やや褐色の濃い帯状の落ち込みを、南北方向に確認した。　**埋土**：複層。最上層は砂が混じる。　**重複**：（旧）SD066。（新）SK510・535。**規模**：方位Ｎ－５°－Ｗ。北北西から南南東へ傾斜。長さ42.57m、幅0.9～1.92m、深さ0.2～0.3m。　**構造**：平面形は直線、断面形は浅い皿状である。南北両端は調査区外に延びる。２区SC001から約109mの間隔で3b・4a区SD104、SD104からSD064までも約109mと、ほぼ１町分である。遺構配置から、条里型地割の坪境にあたる南北大畦畔に伴う溝跡と考える。　**遺物**：土師器または黒色土器坏Ａ（158）、須恵器坏Ａ（159～165）、同長頸壺（166）が出土。　**時期**：出土土器と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

SD095　［遺構：図版21・23・35・PL8］

位置：１区ⅢW22・ⅨC02・07。　**検出**：Ⅴ-3層下面。やや褐色の帯状の落込みを検出した。　**埋土**：単層。褐色土に黄褐色土が混じる。　**重複**：（新）SD085・086・087・092。　**規模**：方位Ｎ－５°－Ｗ。南から北へ傾斜。長さ12.59m、幅0.35～0.55m、深さ0.03～0.10m。　**構造**：平面形はほぼ直線。断面は浅い皿状。２区SC001から東へ約109mで、ほぼ１町分である。条里型地割の坪境にあたる東西大畦畔

SC029 に直交する。畦畔自体の高まりは遺存していなかったが、SD095 は坪境の南北大畦畔に伴う用水で、溜池状遺構の SK356 と同時期に存在したと考える。　**遺物**：黒色土器坏または埦が出土。　**時期**：出土土器と検出層位、遺構配置から平安時代前期と判断した。

SD104　［遺構：図版 21・23・35 図・PL9、土器：図版 89］

位置：3b・4a 区ⅧH01・06・11・16 グリッド。　**検出**：Ⅴ-3 層下面。帯状の落ち込みを検出した。　**重複**：（旧）SD105。（新）SD028・032。　**埋土**：複層。中層に部分的に砂が入る。　**規模**：方位Ｎ－４°－Ｗ。北から南へ傾斜。長さ 25.94m、幅 1.29m、深さ 0.23m。　**構造**：平面形はほぼ直線、断面形は逆台形。２区 SC001 から西へ約 109m で、ほぼ１町分である。畦畔自体の高まりは遺存していなかったが、条里型地割の坪境にあたる南北大畦畔に伴う用水の可能性がある。　**遺物**：須恵器坏Ａ（156）、黒色土器坏（157）、土師器甕が出土。　**時期**：出土土器と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

４　中近世の遺構

（１）概要　［第 14 表・図版 37］

中近世の遺構の検出面は、Ⅲ層の堆積のない９区以東では基本土層Ⅴ層上面【第２検出面】、Ⅲ層の堆積がある 10 区以西では平安時代の水田跡検出したⅣ層上面【第１検出面】、12c 区では近世盛土を伴うためにⅡ層中であった。その分布は全調査区に渡り、種類と数量は掘立柱建物跡６棟・柵列５条・水田跡（水田面１面・畦畔１条）・天地返し跡４面・土坑 454 基（井戸跡 69 基含む）・墓跡５基・溝跡 146 条（居館堀跡１条含む）である。以下の第 14 表に地区別の検出数を示した。

中世と考えられる遺構は１区に集中し、大型の ST001 を含む掘立柱建物跡、柵列、区画溝跡や井戸跡、柱穴跡や無数のピットがある。長谷鶴前遺跡群に隣接する 12 区では、中世の居館堀跡 SD191 を検出した。その他では、天水を溜めたと考えられる小規模な浅い井戸跡がある。これらは 3b・4a 区以西に点在し、特に 4b 区、4c 区に集中する。中世の水田跡は検出していない。なお、１区の中世遺構については第６章第１節４に、12 区の居館堀跡については第６章第２節１に詳細を記した。近世の遺構は用水跡が中心である。中世の区画溝や堀跡を除く溝跡は、ほぼ近世の用水跡に関連するものと考えられる。千曲川から引水した江戸時代中期の明暦用水系、後期の塩崎用水系の他にも、江戸時代に　造成された西側山地の猪平（いのたいら）溜池や沢水から引水したとみられる。その他では、１区で柵列、3b・4a 区で墓跡、12 区のコンクリートで護岸される前の塩崎用水 SD188 脇で道路跡 SC111 と水田面 SL036 を検出した。近世末以降の遺構では、１区、２区で天地返し跡 SL001 等を検出した。

第 14 表　中近世遺構の地区別検出数

遺構名＼地区		1	2	3a	3b･4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b･8	9	10	11	12	合計
掘立柱建物跡（ST）		6													6 棟
柵列（SA）		5													5 条
水田跡	水田面（SL）													1	1 面
	畦畔（SC）													1	1 条
天地返し（SL）		4													4 面
土坑（SK）		348	10	1	6	52		4	21		8		2		454 基
墓跡（SM）					5										5 基
溝跡（SD）		47	4	5	36	16	10		6		1	2	14	5	146 条

（２）掘立柱建物跡　［付表１］

掘立柱建物跡は、１区でのみ６棟検出した。建物跡全体を検出できたものは、大型の掘立柱建物跡ST001（桁行７間×梁行３間）の他に、ST002（桁行３間×梁行２間）、ST005（桁行３間×梁行２間）である。ST003とST006は、それぞれ柱穴１列ずつの検出であり、ST004は調査年度が２年に渡り、調査用排水トレンチの掘削により柱穴の一部が失われている。

ST001　［遺構：図版37・38・49・51・52・53・PL10・11、土器：図版91・PL31、金属製品：図版100・PL38］

位置：１区ⅢV22・23、ⅨB02・03グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。黄褐色土の多数の円形の落込みを確認し、その中から規模や配置により本遺構を抽出した。　**重複**：（新）SD019。　**埋土**：にぶい黄褐色土。焼土・炭化物が混じる。柱痕が方形ものもある。　**規模**：主軸方位Ｎ－82°－Ｗ。桁行13.51m、梁行5.53m。柱穴直径0.31～0.75m、深さ0.08～0.55m。　**構造**：桁行７間、梁行３間の総柱式建物。柱間寸法は桁行1.62m～2.01m、梁行1.73～1.96m。柱穴25基、柱穴が欠落する箇所がある。柱穴の平面形は円形・方形。柱穴の規模は、梁行の東側６列が大きい。礎板石は20基に設置され、東側６列では40～50㎝大と大きく、特に東から２列目のP4・21では特に大きく60㎝を超える。一方、西側のP13・14・25では、30㎝程度とやや小さい。また、P1・2では小礫が出土したが、１点のみのため、根固めの礫かは不明である。P3・15からは礫が出土しなかった。　**遺物**：P2から青磁碗（207）、P4から釘（１）、P5・17から不明土師器片、P11から焼成粘土塊、P12からカワラケが出土。　**時期**：出土土器と検出層位、遺構配置から中世前期と判断した。区画溝SD009と同時期に存在した可能性が考えられる。

ST002　［遺構：図版37・38・49・51・54・PL11］

位置：１区ⅨB01・06グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。SD009埋土中とSL002底面から、炭片や焼土粒の混じる円形の落ち込みを複数確認した。規模や配置から掘立柱建物跡の柱穴と考えた。　**重複**：（旧）SD009。（新）SL002。　**埋土**：黄褐色土に焼土・炭化物が混じる。P6・9には柱痕が遺る。　**規模**：主軸方位Ｎ－５°－Ｅ。長軸6.30m、短軸4.04m。柱穴直径0.35～0.41m、深さ0.19～0.36m。　**構造**：桁行３間、梁行２間の総柱式建物。柱間寸法は桁行1.55～2.52m、南北両端がやや広く、梁行1.81～2.03 m。P2・5・11を除く柱穴には礎板石が据えられる。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位と遺構配置から、中世前期と判断した。

ST003　［遺構：図版37・38・49・55］

位置：１区ⅢV23グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。褐色の隅丸方形・方形の落ち込みを複数確認した。規模や配置から掘立柱建物跡と考えた。　**重複**：（新）SD019。　**埋土**：褐灰色土に黄褐色土ブロックが混じる埋め土。P2・3は柱抜取痕を確認し、P4で柱材と考えられる木材が21㎝ほど垂直に残存する。　**規模**：主軸方位Ｎ－76°－Ｗ。長さ4.41m。柱穴直径0.20～0.26m、深さ0.25～0.50m。　**構造**：柱穴一列のみ検出した。調査区内では東西３間分。柱間寸法1.40m。柱穴の平面形は隅丸方形・方形。断面は直立に立ち上がる。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位と遺構配置から、中世前期と判断した。

ST004　［遺構：図版37・38・48・49・55・PL11］

位置：１区ⅢW16・17グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。にぶい黄褐色土の円形の落ち込みを複数確認し、規模や配置から掘立柱建物跡と判断した。　**重複**：なし。　**埋土**：にぶい黄褐色シルト質植壌土を基調、

黒褐色土、灰白色シルトブロックが混じる。柱痕はP1・4・6で確認し、柱穴底面に柱が沈下した痕跡が認められた。　**規模**：主軸方Ｎ－78°－Ｗ。長軸9.33m、短軸4.35m。柱穴の直径0.20m、深さは南側0.10m、北側0.21～0.32m。　**構造**：調査用排水トレンチの掘削により柱穴の一部が失われている。北西部が調査区外で詳細は不明であるが、桁行４間、梁行１間の側柱式建物と推察する。梁行は中間に１間入る可能性があるが、柱穴は検出できていない。柱間寸法は2.24～2.50m、両端がやや広い。柱穴の平面形は円形・方形、断面形はＵ字形。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位と遺構配置から、中世前期と判断した。

ST005　［遺構：図版37・38・48・49・56・PL11、土器：図版91・PL31］

位置：１区ⅢW16・17グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。SD001北辺の南側に並行して、円形の鈍い黄褐色土の落ち込みが複数検出された。規模と配置から掘立柱建物跡と判断した。　**重複**：（旧）SD001。　**埋土**：灰黄褐色シルト質植壌土を基調、地山の灰白色シルト、明褐色シルトブロックが混じる。柱痕は灰黄褐色シルト質植壌土。柱痕はP5・8で確認。　**規模**：主軸方位Ｎ－73°－Ｗ。桁行7.33m、梁行4.30m。柱穴の直径0.29m、深さ0.11～0.32m。　**構造**：桁行３間、梁行２間の側柱式建物。柱間寸法は桁行2.30～2.52m、梁行2.11～2.20m。平面形は円形・方形、断面形はＵ字形。P4・6の底面で小礫を検出した。**遺物**：P5から須恵質擂鉢（208）が出土。　**時期**：出土土器と検出層位、遺構配置から、中世前期と判断した。SD080・088・074の区画溝と同時期の可能性が考えられる。

ST006　［遺構：図版37・38・49・56・PL11］

位置：１区ⅢV24・25グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。暗褐色の円形の落込みを確認し、規模と配置から掘立柱建物跡と考えた。　**重複**：（不明）SD010。　**埋土**：埋め土。P3は柱抜き取り痕であると推察する。**規模**：主軸Ｎ－70°－Ｗ。東西方向の長さ5.60m。柱穴の直径約30㎝、深さ12～８㎝。　**構造**：東西方向３間分のみ検出、周囲で同様な土坑は確認できなかった。柱間寸法は1.71～2.00m、P2～4は礎板石が据えられていた。柱穴の平面形は円形、楕円形、断面形は底面がやや平坦な逆台形。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位、遺構配置から中世前期と判断した。

（３）柵列跡　［付表2］

柵列跡は１区で５条検出した。近世の溝を切るSA001・003の時期は近世以降、また近世の溝跡SD023を挟んで主軸が若干振れるSA002とその延長と考えられるSA005は近世と判断した。遺構の配置から、近世の用水跡に伴う杭列の可能性が考えられる。

SA001　［遺構：図版37・38・51・57・PL12］

位置：１区ⅨA09・10グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。直線状に並ぶ黄褐色土の円形の落ち込み５基を確認した。　**重複**：（旧）SD020。　**埋土**：単層。にぶい黄褐色土。　**規模**：方位Ｎ－87°－Ｗ。長さ4.24m。ピット直径0.20～0.25m、深さ0.12㎝～0.23m。　**構造**：ピット５基が直線的に配列。芯々距離1.10～1.42m。ピット平面形は円形・方形、断面形はＵ字形。　**遺物**：なし。　**時期**：遺構の重複から近世以降と判断した。

SA002　［遺構：図版37・38・39・51・58・PL12］

位置：１区ⅨA09・14・18・19グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。　**重複**：（旧）SD088。　**埋土**：単層。**規模**：方位Ｎ－13°－Ｅ。長さ19.39m。ピットの直径0.15～0.27m、深さ0.07～0.23m。　**構造**：ピット

19 基が直線的に配列。芯々距離は 0.51～2.80m。ピットの平面形は隅丸方形・方形、断面形は底面が平坦な逆台形が多い。　**遺物**：なし。　**時期**：遺構の重複と遺構配置から、近世と判断した。

SA003　［遺構：図版 37・38・48・57・PL12］

位置：１区ⅢW19・23・24 グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。SD091 近世溝跡中に、直線状に並ぶ砂質土の円形の落ち込みを複数確認した。　**重複**：（旧）SD091。　**埋土**：単層、灰黄褐色～黄褐色砂質土。　**規模**：方位Ｎ－20°－Ｅ。長さ 8.72m。ピットの直径 0.12～0.18m、深さ 0.10～0.18m。　**構造**：ピット 24 基が直線的に配列。芯々距離は 0.50～1.21ｍと不規則。ピットの平面形は円形、断面計はＵ字形。　**遺物**：なし。　**時期**：遺構の重複と埋土から、近世と判断した。

SA004　［遺構：図版 37・38・49・57・PL12］

位置：１区ⅢV25、ⅢW21 グリッド。　**検出**：Ⅴ-3 層下面。SD100 調査中に、灰白色細砂の円形の落ち込みを複数検出した。礫が出土し、直線的に配置することから、柵列と判断した。　**重複**：（旧）SD100。　**埋土**：灰白色細砂層に褐灰粘質土がブロック状に混じる。　**規模**：方位Ｎ－72°－Ｗ。長さ 7.20ｍ、ピットの直径 0.20～0.60m、深さ 0.05～0.15m。　**構造**：ピット 13 基がやや蛇行。芯々距離 0.63～0.66m。ピット平面形は楕円形・不整円形、断面形はＵ字形。礫は P7・8・10 で出土。ピットの配置から、他の柵列同様に本来は第１調査面に帰属すると考える。　**遺物**：なし。　**時期**：他の柵列同様に、近世以降の可能性があると推察する。

SA005　［遺構：図版 37・38・51・58］

位置：１区ⅧU20・24・25、ⅨA04・09 グリッド。　**検出**：SA002 延長線上の SK を、整理時に抽出して登録した。　**重複**：なし。　**規模**：方位Ｎ－11°－Ｅ。長さ 19.88m。ピットの直径 0.16～0.34m、深さ 0.09～0.50m。　**構造**：ピット 11 基が直線的に配列。芯々距離は 1.24～2.30m。ピット平面形は円形、断面形はＵ字～逆台形。SA002 と同一の柵列と判断した。　**遺物**：なし。　**時期**：遺構配置から、SA002 同様に近世以降と判断した。

（４）井戸跡・土坑　［遺構：付表５・図版 37～45・48～51・59～71・PL12～20］

井戸跡は、その可能性があるものを含め、69 基検出した。１区の中世の居住区画内では特に集中し、素掘りで円形の井戸跡 SK002～279 と石組１基 SK080 を検出し、中世焼物や銭貨等が出土した。その他に、耕作用のものと想定される小規模な素掘りで浅い井戸跡 SK507～908 を 3b・4a 区以西、特に 4b 区、4c 区で多く検出した。これらの平面形は、円形の他に SK552・558 のように長方形に近いものもみられ、出土遺物はわずかであった。井戸跡の他には、溜池状遺構と考えられる大型長方形土坑 SK001・012（１区）、柱穴跡と考えられる SK 群（１区）の一部から、中世焼物が出土した。検出した多数の土坑や無数のピット群の中には、柵列や掘立柱建物跡の柱穴跡が含まれる可能性が高いと考えられるが、個々の遺構の判別には至らなかった。井戸跡やその他の土坑の時期については、出土遺物等から中世前期の可能性が高いと判断した。なお、巻末の土坑一覧表には、個別図を掲載した土坑と第４節の掲載遺物を出土した土坑を記載した。

（５）墓跡　［付表３］

墓跡は 3b・4a 区で５基検出した。全ての墓跡から人骨が出土し、出土人骨の鑑定指導をうけた。鑑定

結果の詳細については第５章第２節１に記した。SM001・002・004は木棺墓と考えられ、北頭位で西向きの屈葬であった。SM002では木棺の痕跡が一部残存していた。SM003は小規模であり、出土した乳歯から、幼児が埋葬されたと考えられる。火葬墓SM005は、火葬骨を集めて近世の溝跡へ埋めた火葬墓と考えられ、時期は近世と考えられる。墓跡は全て3b・4a区に集中しているため、SM001～004の時期についても、SM005同様に近世の可能性が高いと判断した。

SM001　［遺構：図版37・41・72・PL21、骨：第27・28表・第28図］

位置：3b・4a区ⅧF14・19グリッド。　**検出**：Ⅴ層上層。灰色粘土上面に鉄分沈着範囲を確認し、その範囲中でにぶい黄褐色土の長方形の落ち込みを検出した。掘り下げにより人骨が出土、土坑墓と考えた。　**重複**：なし。　**埋土**：上層はにぶい黄褐色土、褐色ブロック少量含む。下層はにぶい黄褐色土、褐色ブロック含む。　**規模**：主軸方位Ｎ－11°－Ｅ。長軸0.70m、短軸0.52m、深さ0.29m。　**構造**：平面形は長方形、掘り込みはほぼ垂直で底面は平坦である。木棺の痕跡は確認できなかったが、SM002と同様の木棺墓であったと推測する。　**遺物**：人骨１体分出土。北頭位、顔は西を向く。仰臥屈葬。両腕は土坑壁に沿い、右足が左足の上に重なっていた。　**時期**：検出層位と遺構配置から、近世と判断した。

SM002　［遺構：図版37・41・72・PL21、骨：第27・29表・第28図］

位置：3b・4a区ⅧF22グリッド。　**検出**：Ⅴ層上層。にぶい黄褐色土の長方形の落ち込みを検出、掘り下げにより人骨が出土し、墓跡と考えた。人骨の周囲と直下で、木棺の痕跡を検出した。一部木質が残存する。　**重複**：なし。　**埋土**：上層はにぶい黄褐色土、灰白色粘土ブロックを含む。下層は灰黄褐色土の埋め戻し土。最下層は褐灰色土、木棺が腐食した部分に粘質土が入り込む。　**規模**：掘方の主軸方位Ｎ－７°－Ｅ。長軸1.18m、短軸0.84m、深さ0.40m。木棺の痕跡の範囲は長軸0.96m、短軸0.52m、深さ0.24m。　**構造**：掘方の平面形は長方形、西辺は直線的で東辺がやや膨らむ。木棺を埋める際に、部分的に拡張したものと考える。ほぼ垂直に近い掘り込みで、底面は平坦である。木棺は側板に角材４本を渡し、底板を載せたものと推察する。　**遺物**：人骨１体分出土。北頭位、体は西を向く。横臥屈葬と推察する。右腕は体の前面に、左腕は体に沿うように検出した。副葬品なし。混入と考えられる中世カワラケ、内耳鍋がわずかに出土。　**時期**：検出層位と遺構配置から、近世と判断した。

SM003　［遺構：図版37・41・73・PL21、骨：第27・30・31表・第28図］

位置：3b・4a区ⅧF22グリッド。　**検出**：Ⅴ層上層。灰色粘土上面に、にぶい黄褐色土の長方形の落ち込みを検出。歯、人骨片を確認し、土坑墓と考えた。　**重複**：なし。　**埋土**：上層は黄褐色土、炭化物・灰白色粘土ブロック微量含む。下層は灰黄褐色土、灰白色粘土ブロック含む。　**規模**：主軸方位Ｎ－２°－Ｗ。長軸0.58m、短軸0.46m、深さ0.13m。　**構造**：北側はやや広がるが、本来の平面形は長方形とみられる。断面形状は逆台形、底面にはやや起伏がある。木棺の痕跡はなし。　**遺物**：下層から歯、人骨片が少量出土。鑑定の結果、乳歯であることが判明し、２歳程度の幼児が埋葬されたと考えられる。副葬品なし。　**時期**：検出層位と遺構配置から、近世と判断した。

SM004　［遺構：図版37・41・73・PL21、骨：第27・32表・第28図］

位置：3b・4a区ⅦG21グリッド。　**検出**：Ⅴ層上層。褐灰色土の長方形の落ち込みを検出した。規模・形状ともにSM001・002と同様であり、土坑墓と考えた。掘り下げにより、人骨が出土した。　**重複**：なし。　**埋土**：上層は褐灰色シルト、炭化物をわずかに含む。中層はにぶい黄褐色シルト、炭化物を中央部

に含む。人骨の直上層。黄褐色土ブロック含む。下層は灰黄褐色シルト、灰白色粘土ブロック多量に含む。人骨出土層。　**規模**：主軸方位Ｎ－８°－Ｗ。長軸 2.10m、短軸 1.30m、深さ 0.70m。　**構造**：平面形は長方形、ほぼ垂直な掘り込みで底面は平坦である。木棺の痕跡は確認できなかったが、人骨直上層は炭化物がやや多く混入し、木棺墓であったと考える。　**遺物**：下層から人骨、歯が出土、遺存状態は悪い。北頭位。頭骨は西北隅、西向きで屈葬されたものと推察する。副葬品なし。　**時期**：検出層位と遺構配置から、近世と判断した。

SM005　［遺構：図版 37・41・73・PL21、玉類：図版 94・PL34、金属製品：図版 102・PL39、骨：第 27 表］

位置：3b・4a 区ⅧK14 グリッド。　**検出**：Ⅴ層上層。SD043 埋土中に焼骨片・焼土粒が散布するのを確認し、火葬墓と考えた。　**重複**：（旧）SD043。　**埋土**：上層はにぶい黄橙色植壌土、焼土粒少量含む。中層は褐灰色植壌、焼土粒・炭粒混、焼骨片を含む。下層はにぶい黄褐色植壌土で焼土ブロック、焼土粒を含む。　**規模**：主軸方位Ｎ－５°－Ｗ。焼土と骨の散布範囲の長軸 0.95m、短軸 0.55m、深さ 0.08～0.10m。　**構造**：斜めに掘り込みが入り、底面は凹凸がある。焼土ブロック・焼骨片の出土のみで、直接被熱を受けた箇所は確認できない。明確な掘り込みが確認できなかったことから、SD043 を埋め戻す際に周辺の火葬の残骸を入れたものと考える。　**遺物**：焼骨片少量。副葬品の数珠玉５点（11～15）、銭貨１点（40）が中層から下層上部にかけて出土。　**時期**：遺構の重複関係と検出層位から、近世と判断した。

（６）溝跡　［遺構：付表 6・図版 37～51・74～83・PL22～26］

溝跡のなかで、中世の溝跡と判断できるものは１区の区画溝と 12 区の居館堀跡関連の溝跡のみで、その他のほとんどの溝跡が近世の用水に関連すると考えられる。なお、SD171～179（7b・８区）は、出土遺物や周辺遺構との関係から奈良時代の溝跡と判断したが、7a 区との境に位置する旧明暦用水と並行・直交であるため、近世の可能性も残される。また SD183・184（10 区）は掘り込みから平安時代以後とみられ、近世に築造された猪平池から下る現在の用水に隣接あるいは直交することから、近世の用水と考えた。SD152・153・159・166（11 区）については、平安時代の畦畔に重複あるいは隣接することから、平安時代まで遡る可能性も残される。巻末の溝跡一覧表には、弥生時代から古代までの時期と判断できないものについては、中近世として掲載した。

12c 区の中世の居館堀跡 SD191 と、江戸時代の塩崎用水 SD188 については、以下に個別に記載した。なお、近世の用水については第６章第１節５、居館跡については第６章第２節１に詳細を記した。

SD188【塩崎用水】　［遺構：図版 37・47・81・82・PL26、土器：図版 93・PL33、木製品：図版 132・PL66］

位置：12c 区ⅩⅣO05・10、ⅩⅤF13・18、ⅩⅤK01・06 グリッド。　**検出**：12c 区北の北壁断面にて、溝状の落ち込みを検出した。　**重複**：（旧）SD189・190・191。　**埋土**：複層。　**規模**：主軸方位Ｎ－４°－Ｗ。長さ 5.86m、深さ 1.44m。　**構造**：南北端は調査区外へ延びる。断面形は逆台形状。現在の塩崎用水直下に位置し、1826 年に開削された「塩崎用水」であると考えられる。SD189・190 は塩崎用水の改修前の用水跡。SD189 西側は道路跡 SC111 へ接続、本跡の掘削時に西側の水田跡 SL036 を埋め立てている（図版 82-15 層）。　**遺物**：磁器碗（326）、陶器皿（327・328）が出土した。　**時期**：検出層位と遺構配置から、近世と判断した。

SD191【居館堀跡】　［遺構：図版 37・47・80・82・83・PL26、土器：図版 92・PL31、金属製品：図版 101・PL38］

位置：12c 区ⅩⅣO05・10、ⅩⅤF13・18、ⅩⅤK01・06 グリッド。　**検出**：12c 区北の調査区北壁断面に

て、SD188・189 下部に溝状の落ち込みを検出した。12c 区南１トレンチ西壁で北側の立ち上がりを、12c 区南２トレンチ西壁で南側の立ち上がりを検出、規模から屈曲する堀跡の一部と考えた。また隣接する 12a 区南で検出した SC086 東側部分についても、整理作業時に SD191 埋土の一部に含まれると判断した。**重複**：（旧）SD192。（新）SD188・189・190。　**埋土**：複層。最下層は薄い細砂層が堆積。溝底では流水があったものと考える。　**規模**：12c 区北 主軸方位Ｎ－４°－Ｗ。長さ 5.86m。12c 区南 幅 8.29m、深さ 1.44m。12a 区南を含めた復元南北長 26.44m、復元東西長 21.07m。　**構造**：12c 区内で逆Ｌ字形に屈曲、東側の立ち上がりは調査区外。断面形は逆台形状。方形居館を区画する堀跡であり、長谷鶴前遺跡群第３調査面検出の SD40 とほぼ同規模と推察する。SD192 は改修前の堀跡。堀の埋立て後に道路が造成された（図版 83-15・18 層が道路側溝、13・14・16・17 層が道路盛土を示す）。　**遺物**：埋土からカワラケ（253）、最下層から内耳鍋と「く」の字に折り曲げた鍬形兜前立（26）が出土した。　**時期**：出土遺物から中世後期と判断した。

（７）天地返し跡　［付表４・図版 37～39・48～51］

天地返しは、深耕し、耕地の表土と下層土を入れ替えることであり、土地改良の一方法である。検出された SL001～003（１区、２区）は比較的深い溝跡が平行に密に並ぶことから、天地返しの痕跡であると考えられる。SL014（１区東）はやや浅いが、規則正しく並び、同様の遺構と推察する。一部の天地返し跡から出土した陶磁器から、時期は近世末以降であり、検出した遺構では一番新しいと考えられる。天地返し跡については、巻末の遺構一覧表に記載した。

第４節　遺物

１　土器・陶器・磁器

掲載遺物については巻末の土器一覧表に、非掲載遺物については添付 DVD に一覧表を収録した。なお、弥生時代から古代までの出土土器の編年的位置については、第６章第１節１に記した。

なお、本節の土層名は、原則的に第２節にある基本土層を使用し、部分的に堆積する土層の記載の場合には、調査時の呼称である各地区の基本土層名を（　）付きで表記した。

（１）弥生時代の土器　［付表 7］

①弥生時代中期後半の土器　［第 15 表・図版 84-1～21・PL27］

弥生時代中期後半と認定した土器は、調査区東端の自然堤防端部の１区で少量、3b・4a 区、5b 区、7b・８区、９区、11c 区、また 12 区からも僅かに出土している。土器の出土分布状況は第 15 表に示したとおり比較的広範囲にわたり、西側地区に偏る傾向がある。水田跡が検出された東側の２区、3b・4a 区ではほとんど出土していないが、調査範囲が狭いことと、弥生時代後期前半頃のⅥ層洪水土層に覆われて、上層に土器が混入しにくかったことによると考えられる。

弥生時代中期後半の可能性のあるものを含めた土器破片数は 498 片で、内訳は当該期の遺構出土 441 片・検出面出土 43 片、他時代の遺構出土６片・検出面出土８片であるが、櫛描波状文甕、赤彩された壺・鉢・高坏類については、弥生時代後期の土器を含む可能性がある。弥生時代中期後半と認定できた土器は、Ⅷ層水田面やその他遺構出土が中心である。確認できた最古の土器は、弥生時代中期後半の栗林式土器である。弥生時代中期後半以前とみられる土器は、９区北壁でⅧ層よりも下層から底部小片が出土したが、年代等の詳細は明らかにできなかった。他に詳細な時期不明の壺・甕体部片も多く出土したが、小片で摩滅したものが多い。

比較的遺存良好な出土例は、大畦畔上面出土 SQ001 の甕（１～３）、SC115 畦畔内出土の甕（13）がある。なお、出土土器は遺構出土土器を中心に図化し、弥生時代中期後半の可能性を含む土器を含め、接合前破片総数 487 片のうち 414 片（85.0%）、石膏を含めた総重量 4,906ｇのうち 4,538ｇ（92.5%）を図示した。

出土土器の器種の内訳は以下のとおりである。甕は 374 片で、内訳は櫛描羽状文甕 292 片、櫛描波状文 76 片、文様不明６片で、コの字重ね文の甕は出土していない。遺構出土の甕片数で多いものは、SQ001 から 178 片、SC063 から 33 片で、いずれも小片で個体数自体は少ない。他の遺構出土例は、１遺構あたり 20 片以下である。甕の器形が判明する個体は僅かだが、口縁が短く強く湾曲外反し、胴中位が膨らむ縦長の器形が確認できる。口縁部の文様は摩滅して詳細不明だが、キザミや押圧文を施すものは認められず、口唇部に縄文施文のみのものが確認できる。頸部の櫛描簾状文は有るものと無いものがある。体部文

第 15 表　弥生時代中期後半土器の地区別出土破片数

地区 / 出土地点	1	2	3a	3b･4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b･8	9	10	11	12	合計
遺　構	0	0	0	0	0	232	0	0	181	8	0	20	0	441 片
他時代遺構	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	6 片
検出面他	6	0	0	10	0	14	0	12	0	3	0	5	1	51 片
地区別小計	7	0	0	10	0	246	0	12	181	16	0	25	1	498 片

様は櫛描羽状文が圧倒的に多く、縦羽状文（図版 84）が主体であるが、その崩れた形態とみられる横走櫛描文を縦位に並列するもの（図版 84）がある。縦位櫛描直線文で区画する波状文の甕は確認されなかった。

壺は 106 片で、そのうち文様が認められる土器や同個体とみられる破片は 95 片である。SC063 出土が 72 片で、出土個体数は少ない。摩滅して文様が不明なものも多いが、頸部を平行する沈線で区画し、その間に縄文を施文するものが認められる。文様のある体部片自体が少ないが、文様が認められるものには、縄文地文に連続弧状沈線を施すものがある。文様がないものは、器形から弥生時代中期後半の壺と判断した。上記以外の器種は僅かで、内外面赤彩の鉢１片、壺形鉢１個体、有孔鉢１個体がある。赤彩の鉢、壺形鉢は弥生時代後期のものと類似器形である。このように水田域出土土器は甕が主体で、他の器種が少ない様相が窺える。出土した甕は煮沸のために持ち込んだとは考えにくく、祭祀等に用いられたものだろうか。

5b 区

Ⅷ層水田層（13 層）、その上層の腐植土層（12b 層）、さらに上層の SQ001 を含む土層（12a 層）で弥生中期後半の土器が出土しているため、２～３時期の改変の可能性が考えられる。

SQ001　［図版 84・PL27］：甕（１～３）が出土した。２・３は粗い櫛描の斜走・横走櫛描文が縦位に並列する甕で、縦羽状文が崩れた文様とみられる。３は頸部に櫛描簾状文を施す。いずれも全体的に摩滅して文様の遺存状態は悪い。

Ⅷ層上層　［図版 84・PL27］：腐植土層（12b 層）から櫛描波状文甕（18）と頸部簾状文・体部縦羽状文とみられる櫛描文甕（19）が、その上層（12a 層）とⅤ層との境界付近から頸部櫛描簾状文・体部縦羽状文甕（20）と壺体部（21）が出土した。

Ⅷ層水田層　［図版 84］：赤彩鉢または高坏（16）が出土した。Ⅷ-2 層から出土した壺（17）は、縄文施文が口唇部に認められないが、外反する口縁形態で口径がやや狭いことから弥生時代中期後半の壺と考えた。

7b・８区

SC063　［図版 84・PL27］：畦畔内から弥生時代中期後半の櫛描羽状文甕、櫛描波状文甕、壺が出土した。摩滅した小片で個体数は少ない。櫛描羽状文甕はいずれも縦羽状文であり、頸部櫛描簾状文を有するものと無いものがある。櫛描波状文甕（６）は、口唇部の文様は不明である。体部の波状文は間隔をあけて平行するように描かれ、類似個体は SC063・064 出土品にある。壺（４）は頸部に僅かに縄文が残存するが、口唇部の縄文の有無は不明である。壺（５）は摩滅して縄文地文の有無は不明である。

SC063・064 接続地点　［図版 84・PL27］：SC063 出土の土器と同一個体と思われる破片がある。赤彩の鉢・高坏と櫛描羽状文甕、櫛描波状文甕、壺が出土した。櫛描羽状文甕（７～９）はすべて縦羽状文であり、頸部に櫛描簾状文のあるものと、ないものがある。櫛描波状文甕は体部 1/8 遺存片が最大で、小片のみである。壺は口縁 1/8 遺存のものが１片あったが、その他の破片でも文様は確認できなかった。

7a 区　［図版 84］

第３水田：櫛描波状文甕（14）は、波状文が重なることなく施され弥生時代中期後半と考えた。

９区

SC115　［図版 84・PL27］：甕（13）が出土した。13 は体部上半に櫛描横羽状文を施す。

10 区

SC105：時期不明の壺２片、甕２片のみ出土した。

11 区

SC089　［図版 84・PL27］：畦畔内の芯材調査時に周辺から出土した土器を含み、３個体にまとまる。赤彩壺形鉢（10）は体部下半 4/8～底部 8/8 が遺存する。倒卵形の器形で、底面を除く外面全面と体部内面上部が赤彩され、内面はミガキ調整されている。口縁部～体部上半を欠損する。この器種は弥生時代後期に多いが、長野市松原遺跡では弥生時代中期後半の遺構出土例があり、本例も弥生時代中期後半～弥生時代後期のものとみられる。有孔鉢（11）は口縁 3/8～底部 8/8 遺存する。緩やかに「く」字に折る口縁で、やや縦長の器体となる。底部に小孔が開けられたあまり類例をみない器形で、時期の詳細も不明である。壺体部１片は、やや湾曲する体部片で内面ハケ調整、外面ミガキ調整されて文様はない。
SC101　［図版 84］：芯材の掘り出し作業時に出土した。櫛描羽状文甕、内外面をミガキ調整する甕体部下半片がある。甕（12）の甕体部下半～底部片のみ図示した。

水田面：Ⅷ層水田跡検出面では出土した 251 片のうち、弥生時代中期後半かその可能性があると思われる土器片は 30 片に過ぎない。3b・4a 区、5b 区、4d 区、7a 区、９区、11a 区で出土した。
検出面　［図版 84］：3b・4a 区から出土した甕（15）は、受口口縁で体部は櫛描波状文を施すとみられる。

②弥生時代後期の土器　［第 16 表・図版 84-22・85-23～35、PL27］

出土した弥生時代後期土器は、いわゆる吉田式と箱清水式に該当する。吉田式土器は、２区の基本土層Ⅵ層（洪水土層）出土の 22、９区の古墳時代前期と考えられる SX002 から出土した壺口縁（27）がある。それ以外は箱清水式土器で、ほとんどが他時代の遺構や土層に混入して出土し、水田遺構からの出土は僅かであった。このなかで、古墳時代前期水田層と弥生時代中期後半の水田面の中間に残存し、弥生時代後期土器のみが出土した SC061・065 と、弥生時代後期と中期後半の土器のみが出土した SD187 は、弥生時代後期の遺構と考えた。

弥生時代後期と認定した土器片は合計 430 片で、当該期の遺構出土 16 片、他時代の遺構混入品 133 片、検出面、調査区壁面、出土地点不明等が 281 片である。破片が多く、櫛描波状文甕や赤彩の壺・鉢・高坏片は弥生時代中期後半の土器との識別が不十分であるが、弥生時代後期と認定した土器片の地区別出土数を集計すると第 16 表のようになる。１区出土片が 246 片（31.7％）と最多で、続いて 3b・4a 区～５区の範囲で 87 片（18.9％）、7b・８区と９区で 40 片（8.7％）と続く。２区Ⅵ層出土 54 片はほぼ１個体にまとまり、3a 区、６区、７区、10 区以西は出土がないか僅かである。弥生時代後期土器の破片数は少なく、ほぼ９区以東の出土に限られる。

第 16 表　弥生時代後期土器の地区別出土破片数

地区 / 出土地点	1	2	3a	3b･4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b･8	9	10	11	12	合計
遺　構	0	0	0	0	0	0	0	0	14	2	0	0	0	16 片
他時代遺構	96	1	0	4	9	0	0	0	0	23	0	0	0	133 片
検出面他	150	54	2	32	1	41	0	0	0	1	0	0	0	281 片
地区別小計	246	55	2	36	10	41	0	0	14	26	0	0	0	430 片

7b・８区

SC061・065［図版 85］：SC061 から赤彩壺（24）、櫛描波状文甕（25）が出土した。24 は体部下半の屈曲部片だが、体部上半の接合部で剥落して体部上半の形状は不明である。SC061 と接続する SC065 からは甕（26）のみ出土した。文様は摩滅するが、僅かに櫛描波状文が確認できる。口縁が短く屈曲しないとみられ、弥生時代後期の土器と捉えた。

９区

SD187［図版 85・PL27］：弥生時代後期甕（23）、弥生時代中期後半の壺が出土した。23 は体部に櫛描波状文と頸部に櫛描簾状文が確認でき、波状文は密に重なるように施される。頸部の屈曲が弱く、口縁が延びると想定され、弥生時代後期の甕と捉えた。

Ⅵ層［図版 84・PL27］：壺（22）は２区調査区北壁Ⅵ層中からまとまって出土した。口縁と底部は欠損していたが、ほぼ１個体とみられる。土器片は摩滅して遺存状態が不良のため、体部上部のみ図示した。頸部に細い沈線の鋸歯文が描かれ、吉田式とみられる。この土器を洪水堆積土層のⅥ層年代の根拠とした。

他時代の遺構・検出面他［図版 85・PL27］：１区では弥生時代後期の土器が 246 片が出土し、器種内訳は壺 154 片（62.6％）、甕 53 片（21.6％）、高坏 16 片（6.5％）、鉢または高坏 20 片（8.1％）、鉢２片、蓋１片である。土器の組成は壺が多く、集落遺跡出土とあまり変わらないように思われる。高坏（30～33）を図示した。33 は表面が剥落しているが、外側へ反る形態から高坏とみた。赤彩の有無は不明である。第１～３調査面から出土した弥生後期の土器は、全て混入品とみられる。第４調査面では弥生時代後期の赤彩壺１片と赤彩鉢高坏片４片、第５調査面では 79 片の弥生後期土器が出土したが、第４・５調査面では遺構は検出されていない。

２区では 54 片、3a 区では古墳時代前期水田面から２片が出土した。3b・4a 区で 36 片、5b 区で 41 片、4b 区と 4c 区は調査面積が狭く僅か 10 片である。3b・4a 区～５区の弥生時代後期土器の器種は、壺 27 片（31.1％）、甕 37 片（42.5％）、高坏９片（10.3％）、鉢または高坏 14 片（16.1％）となる。１区の組成と比べると、鉢高坏の比率が少ない点は同様だが、壺が少なく甕が多い。他時代の検出面出土 74 片、遺構出土 13 片は、すべて混入と考えた。

６区～7a 区では出土がなく、7b・８区、９区で 40 片出土した。古墳時代の SX002（９区）から出土した甕２片、壺 21 片のうち、壺（27）と櫛描波状文を施す甕（28、29）を図示した。27 は口唇部が内湾するように屈曲し、弥生時代後期でも前半に近い所産とみられる。内面は摩滅し赤彩の有無は不明である。甕は摩滅するが波状文を口縁まで重ね、28 は口唇部が僅かに内湾するが、29 は外反する。この 7b・８区～９区の全出土土器は壺 23 片、甕 17 片で、壺と甕がほぼ同率である。

（２）古墳時代の土器［第 17 表・付表 7］

概要：基本土層Ⅴ層群内や、当核層の上面、中位面を検出面とする遺構を中心に、古墳時代前期後半頃の土器が出土した。Ⅴ層は本遺跡１区～長谷鶴前遺跡群まで分布し、当該期の土器片も１区～12 区までの広域で出土する。破片ばかりで全体形が窺える資料は僅かであり、器種と時期の断定が難しいため、可能性がある破片も器種数に含めて分類集計した。甕の体部片は弥生時代中期後半・後期のものと時期の識別が困難であり、文様のないハケ調整・ナデ調整の球胴とみられる破片を古墳時代前期とし、判断できない場合は時期不明とした。壺の体部片も同様に、弥生時代中期後半のものとの識別が不十分であり、判断できない場合は時期不明とした。高坏の口縁片は小型丸底土器、器台、鉢との識別が不十分で、判断できな

第 17 表　古墳時代土器の地区別出土破片数

出土地点＼地区	1	2	3a	3b･4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b･8	9	10	11	12	合計
遺　　構	55	0	0	262	0	0	1	0	0	228	0	0	0	546 片
他時代遺構	49	0	0	41	26	23	0	1	5	0	0	22	2	169 片
検出面他	147	75	13	299	43	810	4	7	62	269	0	1	3	1735 片
地区別小計	253	75	13	602	69	833	5	8	67	497	0	23	5	2450 片

い場合は小型丸底土器・鉢・高坏と併記した。識別作業の結果、器台は僅かで、器種の主体は柱状脚高坏、小型丸底土器、甕、壺、小型壺であり、黒色土器坏はⅤ層中の１区 SD100 からの出土のみである。Ⅴ層の古墳時代水田跡は、古墳時代前期後半～中期にかかる頃とみられるが、本遺跡内のⅤ層の水田跡に係る１時期を古墳時代前期と呼称する。古墳時代前期～中期と考えられる地区別出土破片数は以下の第 17 表のとおりである。

調査区全域で土器が出土し、調査面積や調査状況の違いがあるものの、出土破片数の多い地区は１区、3b・4a 区、5b 区、９区等である。１区は自然堤防端部にあたり集落域に近く、そのうち SD100 からは 55 片が出土し、１区出土土器の約２割に相当する。3b・4a 区は水田域で、大畦畔 SC038 脇から甕数個体 226 片が出土し、3b・4a 区出土土器の４割近くを占める。5b 区は土器片が多量に出土したため、トレンチを人力で掘り下げたところ、出土土器の点数は多いが、遺構の確認はできず、破片も細片が多いために接合個体もなかった。９区では SX002 から 228 片が出土し、９区出土土器のほぼ半数に相当する。

このように、古墳時代前期の土器の出土分布は広域であり、人間の活動範囲の広さが窺え、その中で土器出土量の多い地区では土器を多出する遺構が存在し、土器を集中して用いた行為があったことを推察させる。SX002 のように小型丸底土器を多用する例や、SC038 脇の甕・小型壺が多い例等の状況から、使用器種が異なる行為が行われていたと推察されるが、具体的な内容は明らかにしえなかった。

以下、地区別に出土土器の様相について記す。

１区

SD100　［図版 87・PL29］：古墳時代前期末～中期とみられる土器は 55 片出土し、器種の内訳は甕８片、壺２片、小型壺８片、高坏５片、坏 32 片である。内湾口縁の土師器坏（90）、口縁端部を折るように外反させた内面黒色坏（91）、裾が広がる柱状脚高坏の脚部（92）、小型壺の体部片（93）を図示した。91 は体部片を欠損するが、同一片とみられる破片を合わせて図示した。柱状脚高杯の脚部裾がかなり開く形態であることや、黒色土器坏と土師器坏を含む点で、本跡は他地区の水田面出土土器よりも後出する時期とみられる。

Ⅴ層検出面他　［図版 87］：第１調査面の中近世遺構から 49 片、第１～５調査面から 145 片、出土地点不明４片が出土した。これらの土器の器種別の出土量は甕 147 片、台付甕１片、壺 16 片、小型壺 11 片、小型丸底土器３片、高坏 19 片、坏１片で、圧倒的に甕が主体で、それ以外の器種は少ない。第５調査面出土の坏片は SD100 出土の 91 と同一個体とみられる。79・80 は柱状脚高坏とみられる。

２区　［図版 87］

Ⅴ層検出面：Ⅴ-2・3 層から合計 75 片が出土した。Ⅴ-3 層から高坏（83）、器台（84）が出土した。

3b・4a 区

SC038　［図版 85・PL28］：畦畔脇から完形土器が複数出土し、合計 226 片を数える。甕（39～41）がほと

んどを占める。何れも遺存状態が悪く調整の詳細は不明である。39・40 は口縁部が「く」字状に屈曲し、39 は胴部が球胴となる。41 は小型壺の体部下半～底部片である。

SC043：畦畔の検出時に出土した土器はハケ調整の甕体部片３片のみである。

SK549［図版 85・PL28］：柱状脚高坏の脚部（43）が出土した。

Ⅴ層検出面［図版 85・PL28］：第１調査面で 61 片出土され、その内訳は甕 41 片、壺５片、小型壺７片、小型丸底土器４片、高坏４片である。Ⅴ-3 層では SC038 脇出土土器以外に甕 40 片、小型壺 11 片、高坏 14 片、鉢とみられる土器２片がある。なお、Ⅴ-1 層で検出した窪地地形ともみられる SK547 から、小型壺（42）が出土した。１個体単独の特異な出土状況である。

4b 区、4c 区

SD071：甕１片、小型壺１片が出土した。詳細な時期は不明である。

検出面・他時代遺構混入品［図版 87］：Ⅴ-1 層上面で甕 20 片、壺１片、小型壺 12 片、器台とみられる土器１片、小型丸底土器２片が出土した。比較的遺存状態が良い小型壺（87）を図示した。Ⅴ-2 層から甕７片、高坏とみられる土器１片が出土した。

5b 区

出土量が多いが、破片のみで遺構に伴うと判断できた土器はない。

他時代遺構混入品：23 片出土した。

Ⅴ層検出面他［図版 87・PL28］：合計 810 片出土した。第１調査面からは 268 片が出土し、器種の内訳は甕 216 片、小型壺７片、高坏 33 片、小型丸底土器 12 片である。Ⅴ-2 層からは 434 片出土し、甕 305 片、壺９片、小型壺 18 片、小型丸底土器 34 片、高坏 67 片、鉢とみられる土器１片がある。高坏（72～75）、内外面ミガキ調整の鉢とみられる底部片（76）、有段口縁壺（78）がある。76 は甕の底部片の可能性もある。出土地点不明の土器は甕１片、高坏１片、小型丸底土器４片がある。

SQ001 混入品：甕 91 片、壺２片、小型壺１片、高坏２片、小型丸底土器５片がある。SQ001 は弥生中期後半の土器集中であるが、Ⅴ層底面と接触するため、境界付近の土器が混入した可能性がある。

7b・８区

Ⅴ層検出面［図版 86］：合計は 62 片と破片数は多いが、個体数は多くはない。小型壺（49）、甕、器台とみられる土器が出土した。

９区

SX002［図版 86・PL28］：古墳時代前期とみられる土器が 228 片である。器種の内訳は、甕 71 片、壺 15 片、小型壺 72 片、小型丸底土器 53 片、高坏 17 片となる。小型丸底土器の破片数の多さは他調査区に比べて突出し、これは９区検出面出土の土器も同様であることから９区特有の様相とみられる。図示したのは高坏（56～58）、小型丸底土器（59～64）、小型壺（65・66・67）、甕（68・69）、壺（70・71）である。高坏（56）は低脚でミニチュア土器の可能性があり、57 は柱状脚高坏の脚部、58 は裾広がりの高坏または器台の脚部とみられる。高坏は９個体である。小型壺は口縁が直線的に延び、体部は 66 が球胴、65 は胴下半の腰部が屈曲する器形である。小型壺は３個体のみで個体数は少ない。甕底部（68）と甕体部（69）は、甕破片数の半分以上にあたる。口縁片を欠く壺体部（70）と壺（71）は、壺破片数の大部分を占める。SX002 は破片数が多く、水田面出土土器とは異なり大破片を含むが、完形になるものはない。

Ⅴ層検出面［図版 86・PL28］：古墳時代の水田耕作土となる第１調査面の検出時の出土土器で、古墳時代前

期頃とみられる土器は 268 片である。器種の内訳は、甕 124 片、壺 19 片、小型壺３片、小型丸底土器 54 片、高坏９片、器台とみられる土器３片である。SX002 を含め、本調査区のみ土器組成比率では小型丸底土器が圧倒的に多い。小型丸底土器（50～52）、柱状脚高坏接合部（53）、折り返し口縁と思われる壺（54）、甕口縁部（55）が出土した。SX002 と類似した組成であり、SX002 で出土した土器を用いた行為が複数行われていたか、本来 SX002 に関係する土器が周辺に散在していた可能性がある。

（３）古代の土器　［第 18 表・付表 7］

概要：古代の土器は、洪水砂層の被覆がない１区～９区ではⅤ層上面にあたる第１調査面や検出遺構から出土した。一方、Ⅲ層（平安時代の洪水砂層）が分布する石川条里遺跡 10 区～長谷鶴前遺跡群では、Ⅲ層、Ⅳ層（奈良・平安時代の耕土層）水田面及び畦畔内から出土した。この他に上層Ⅰ・Ⅱ層や中近世遺構からも出土している。なお、１区～４区の第１調査面ではⅣ層が若干残っていたため、そこから土器が出土したが、５区～９区はⅣ層を完全に除去したために出土した土器は少ない。この１区～９区の第１調査面にあたるⅤ層は古墳時代前期末と捉えたが、その上面で奈良時代の溝跡がみつかっていることから、Ⅳ層は飛鳥時代～平安時代土器を包含する土層と考えられる。また、Ⅲ層の被覆がない１区～7a 区では、Ⅳ層から平安時代後期の土器も出土している。

出土した古代の土器には、飛鳥時代～奈良時代、平安時代前期、平安時代後期の３時期が認められたが、摩滅して詳細な時期が不明の土器も多い。ある程度年代が判明する土器を、飛鳥時代～奈良時代、平安時代前期、平安時代後期の３時期に区分して記述する。また、７世紀代は飛鳥時代と呼称し、時期不明の場合は「奈良・平安時代」と表記した。

焼物種・器種の分類：古代の土器の焼物種・器種の分類と呼称は、中央自動車道長野線関連の松本地域の調査総論編（小平 1990）、上信越自動車道関連の屋代遺跡群・更埴条里遺跡の古代土器報告（鳥羽 1999）に準ずる。ただし、松本市内総論編では、平安時代前期末にみられる焼成不良で黒斑がある灰白色の須恵器を軟質須恵器として１種の焼物種としたが、小片では通常の焼成不良な須恵器との識別ができないため、本項では須恵器に一括した。また、摩滅のために焼物種が黒色土器か土師器か不明の場合は、黒色に見えない場合もミガキ調整があるロクロ調整土器はその特徴から黒色土器と判断した。

時期区分と表記：出土した土器は破片が多く、遺構毎の出土量も少ないため、個々の破片で年代を決めざるを得なかった。従来の編年を慣用しつつ選別・接合時に仮分類し、図化した土器の一部について口径・高さ等の法量等の型式的検討から年代を絞り込んだ[1]。土器の時期区分と時期表記は、松本平の古代土器編年（以下「松本平編年」とする。）を基本とし、それを基にした更埴条里遺跡・屋代遺跡群の古代土器編年（以下「更埴・屋代編年」とする。）も参照した。

古代の土器の年代決定の目安は、飛鳥時代～奈良時代は非ロクロ調整の黒色土器および土師器、底部ヘラ切・ナデ調整の須恵器坏、平安時代前期はロクロ調整の黒色土器や底部回転糸切の小径の底部の須恵器坏Ａ・Ｂ、灰釉陶器、平安時代後期は土師器の小型坏等とした。

底部回転糸切の須恵器坏Ａやロクロ調整黒色土器坏Ａについては、奈良時代中葉でも前半には出現し、平安時代前期まで存続するとされるが、今回の分類・接合作業では破片での法量の計測までは行っていないため、量的に主体となる平安時代前期とした。そのため、時期や器種を誤認したものを含む可能性がある。また、型式的な検討による年代は生産年代にあたり、実態の消費時間幅は考慮していないため、土器から推定した遺構年代も若干の時間幅を含む。

地区別出土分布：古代の土器の地区別出土破片数を集計したのが第 18 表で、各時代の古代土器出土分布

第 18 表　古代土器の地区別出土破片数

出土地点＼地区	1	2	3a	3b･4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b･8	9	10	11	12	合計
飛鳥～奈良時代	19	10	1	1	20	12	0	6	42	11	0	5	0	127 片
平安時代前期	232	13	1	90	80	10	10	12	0	7	3	42	13	513 片
平安時代後期	5	2	0	16	0	3	5	11	0	0	0	0	0	42 片
時期不明	167	10	0	17	17	14	1	8	6	2	4	2	6	254 片
地区別小計	423	35	2	124	117	39	16	37	48	20	7	49	19	936 片

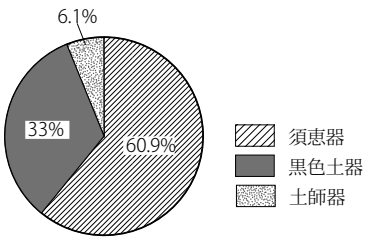
は地区ごとに若干異なる傾向がみられる。飛鳥時代～奈良時代前半は、１区と７区～11 区の西側調査区での出土が多く、特に 7b・８区は１区より奈良時代土器の出土破片数が多い。また、１区は７世紀代の土器も含み、他地区より若干長い時間幅の土器を含む可能性がある。平安時代前期は 10 区～12 区から長谷鶴前遺跡群にかけてのⅣ層水田面やⅢ層の他、Ⅴ-1 層以上の第１調査面や検出遺構から、少量ながらも広域にみられる。特に１区と 3b・4a 区～4d 区の出土量が多いが、これは平安時代以後の遺構が多く混入土器も多いことと、調査面積の広さによると思われる。１区は微高地域端部の集落域に近く、集落域周辺の活動が土器量の多さに反映しているのかもしれない。平安時代後期は識別できたものは僅かだが、１区～7a 区第１調査面のⅣ～Ⅴ層上面の検出面や遺構から採取された。この時期の土器が１区～7a 区に偏るのは、Ⅲ層の被覆がなく、平安時代後期までⅣ層が連続して利用された可能性があることが、理由としてあげられる。また、西側調査区では重機を用いた掘削作業等でⅢ層上面以上、中でも 7b・８区と９区ではⅣ層以上を完全に除去して調査しているため、土器の出土数が少なかったことも影響していよう。

①飛鳥時代～奈良時代の土器　［第 19 表・第 14・15 図・図版 88・PL29］

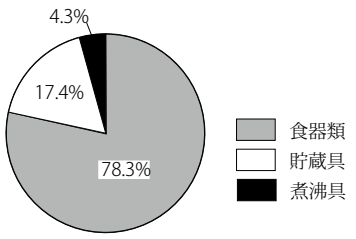
当該期の土器はⅣ層を中心に、Ⅳ層以上、Ⅴ-1 層の第１調査面から出土した。２区、3a 区、５区ではⅤ-2 層上面から出土した土器が僅かにあるが、上層で見逃した遺構の埋土や微高地際の堆積層が薄く重なる部分からの混入とみられる。この飛鳥時代～奈良時代や、その可能性がある破片は 127 片出土した。６区、10 区、12 区では出土せず、３区、４区は僅かで、１区と 7b・８区以西の西側調査区でやや多い（第 19 表）。１区と 7b・８区周辺では、条里型地割前とみられる条里と異方位の溝跡が検出されており、

第 19 表　飛鳥～奈良時代土器の地区別出土破片数

出土地点＼地区	1	2	3a	3b･4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b･8	9	10	11	12	合計
遺　　構	3	0	0	0	15	0	0	5	37	0	0	0	0	60 片
他時代遺構	11	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	19 片
検出面他	5	4	1	1	5	12	0	1	5	11	0	3	0	46 片
地区別小計	19	10	1	1	20	12	0	6	42	11	0	5	0	127 片



第 14 図　飛鳥～奈良時代土器の焼物種別組成



第 15 図　飛鳥～奈良時代土器の器種別組成

こうした遺構と関連する土器とみられる。

焼物種別の内訳は、黒色土器 38 片（33.0％）、須恵器 70 片（60.9％）、土師器７片（6.1％）である（第 14 図）。黒色土器の内訳は、坏 35 片、非ロクロ調整の鉢類と考えられる１片、高坏２片である。黒色土器坏のうち、SD169 の 110 は平安時代前期とも考えたが、出土遺構の他土器の特徴から奈良時代に含めた。110 以外で奈良時代の可能性があるロクロ調整黒色土器は抽出できていない。須恵器は、坏Ａ 25 片、坏Ｂ 15 片、蓋６片、高坏１片、盤２片、蓋坏蓋２片、甕 12 片、壺・長頸壺５片、鼈１片、横瓶１片である。土師器は、坏類１片、甕５片、壺と考えられる１片である。年代幅のあるなかでの比較だが、圧倒的に須恵器が主体といえる。器種別組成の内訳は、食器類 90 片（78.3％）、貯蔵具 20 片（17.4％）、煮沸具５片（4.3％）である（第 15 図）。食器類は、黒色土器の坏、高坏、鉢、土師器坏と、須恵器の坏Ａ、坏Ｂ、蓋、高坏、盤・蓋坏蓋、鉢である。貯蔵具は、須恵器の壺類、甕、鼈、横瓶と、土師器壺と考えられる破片である。煮沸具は土師器甕である。食器類の比率が高く、平安時代前期より多様な器種がみられる。また、９区、11 区では須恵器坏が完形に近い状態で出土したが、出土背景は明らかにできなかった。以下に、地区別に出土土器の様相を記した。

１区

SD127　［図版 88］：黒色土器坏（98）が出土した。

検出面他［図版 88・PL29］：検出面から須恵器坏Ａ（120）、須恵器壺（119）が出土した。他時代遺構混入品では、SD025 から須恵器蓋（96）、SD085 から須恵器細頸壺（97）、SD009 から須恵器高坏（100）が出土した。96 は蓋坏の蓋とみられ、頂部境に低い突帯が付き、その上脇が沈線状となる。100 は高坏の裾部で、裾が広がり端部を折るように造作し、脚に透かしが入る。

２区

他時代遺構混入品　［図版 88］：SC001 下部から須恵器坏Ｂと考えられる破片（117）が出土した。

4b 区

SD066　［図版 88］・PL29：須恵器坏Ａが２個体分出土した。101・102 のいずれも底部回転糸切である。101 は焼成不良で底径も小さいことから、平安時代前期の混入品の可能性もある。102 は盤状の坏である。外面には重ね焼きの明瞭な火襷が残る。回転糸切坏の時期別の内底径の検討（鳥羽 1999）を参照すると、奈良時代の３（または４）期頃に該当する。

検出面　［図版 88］：出土地点不明の黒色土器高坏（99）が出土した。

５区

検出面他　［図版 88］：Ⅴ-2 層検出面から須恵器坏Ａ（121）、須恵器皿（122）が出土した。

7a 区

SD142　［図版 88・PL29］：奈良・平安時代須恵器坏（103）、平安時代後期の可能性もある土師器坏（104）が出土した。104 は摩滅するが、明褐色のロクロ調整の土器で僅かに残存する底部に回転糸切とも思われる痕跡がある。

検出面他　［図版 88］：須恵器甕Ｅ１片（123）が出土した。

7b・８区

SD169［図版 88・PL29］：須恵器蓋（105）、須恵器坏Ａ（106・107）、須恵器坏Ｂ（108）、非ロクロ調整黒色土器坏（109）、ロクロ調整黒色土器坏（110）、須恵器盤（111）、奈良・平安時代須恵器甕（112）が出土した。110 は底部外面を手持ちヘラ削りされ、やや丸みを帯びる。ロクロ調整黒色土器坏は更埴・屋代編年では８世紀前半の２期末～３期から存在するとされ、他の出土土器の年代からもここに掲載した。112 は底部片で、窯床に固定する際に底部に置かれた須恵器蓋が融着する。

SD170［図版 88・PL29］：須恵器坏Ａ（113）、須恵器坏Ｂ（114）、飛鳥時代～奈良時代の非ロクロ調整黒色土器坏（115）、須恵器長頸壺口縁（116）が出土した。

検出面他：SD169 を被覆する調査区壁断面の山砂層から須恵器蓋（124）、須恵器坏Ｂ（125）が出土した。

９区

検出面［図版 88・PL29］：第１調査面から須恵器甕Ｅ（127）が出土した。127 は体部下半が直線的で、口唇部は折り返しや幅広の面取りはない。甕Ｅはバリエーションも多く県内では型式検討があまり行われていないが、奈良時代～平安時代前期まで存在する。奈良時代前半では器高がやや低く体部下半が丸みを帯びる器形が多いが、平安時代前期では体部下半がやや直線的で器高が高くなる傾向がみられ、127 も平安時代に下る可能性もある。底部ヘラ切りでナデ調整の坏Ａ（126）の須恵器など、比較的奈良時代の出土品が多いことから、127 もここに掲載することとした。

11 区

他時代遺構混入品他［図版 88・PL29］：SC058 内から底部ナデ調整の須恵器坏Ａ（118）と、Ⅳ層中から底部ナデ調整の須恵器坏Ａ（128）が出土した。118 は完形に近く、条里型水田の畦畔内から解体調査時に出土した。奈良時代の２期頃とみられ、条里型水田は平安時代前期と捉えられているため、畦畔には伴うものではないと考えられる。

長谷鶴前遺跡群

水田面：１区では、条里型水田内に耕作されずに古い水田面がそのまま残ったとみられる区画があるが、出土土器は小片で時期は明らかにできなかった。

他時代遺構混入品他：２区、３区の中近世土層や遺構から、須恵器甕７片、ロクロ調整壺３片、碗と思われる破片１片、坏口縁１片が出土した。碗は古墳時代の可能性もある。

②平安時代前期の土器［第 20 表・第 16・17 図・図版 89・90・PL30］

平安時代前期の土器は、基本土層Ⅳ層を中心にⅠ～Ⅳ層やⅣ層前後の遺構から出土した。遺構内でまとまって出土した例は少なく、SK356（１区）、SD064（4b 区）等の一部では比較的多かった。完形品は長谷鶴前遺跡群の洪水砂層被覆Ⅳ層水田面上で出土したもの等があるが、他はほぼ破片である。

土器は調査区全域で 513 片出土した。焼物種の内訳は、黒色土器が 276 片（53.0％）、須恵器が 159 片（30.5％）、土師器が 35 片（6.5％）、黒色土器または土師器は 25 片（4.8％）、灰釉陶器が 27 片、他に緑釉陶器椀と考えられる破片１片がある（第 16 図）。器種別の出土破片数は、黒色土器は坏Ａ 161 片、埦９片、坏または埦 105 片、皿１片、須恵器は坏Ａ 138 片、坏Ｂ３片、坏ＡまたはＢが８片、蓋２片、長頸壺４片、四耳壺１片、甕３片、土師器は甕 20 片、小型甕 14 片である。煮沸具の甕は体部をケズリ調整する北信型の砲弾形甕で、小型甕はロクロ調整のものである。黒色土器または土師器の器種は坏Ａ、埦、坏または埦

がある。灰釉陶器は椀 14 片、皿５片、瓶類８片が出土した。破片の識別が不十分なものは、須恵器と黒色土器坏Ａの奈良時代と平安時代前期との時期識別、底部以外の黒色土器埦・皿の器種識別があげられる。埦・皿は、灰釉陶器が黒色土器より多い集計結果であるが、これは灰釉陶器片が小片でも識別しやすいのに対し、黒色土器は底部以外での器種識別が難しいことから、実態を反映していない可能性がある。また、須恵器甕は内面に青海波文を残すもの以外は平安時代と括ったため、これも時期識別が不十分である。

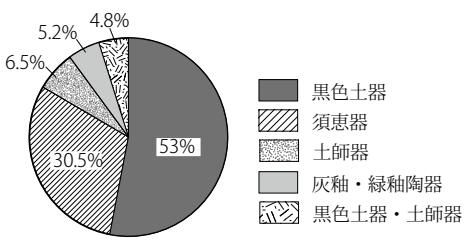
器種別組成は、食器類が合計 474 片（90.8％）にあたり、なかでも坏Ａは食器類の 65.8％を占めて、少量の埦・坏Ｂ・蓋が加わる組成となる（第 17 図）。坏Ａ 304 片（須恵器、黒色土器、黒色土器または土師器）、須恵器坏Ｂ３片、埦 32 片（黒色土器、土師器または黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器）、須恵器蓋２片、皿６片（黒色土器、灰釉陶器）である。これ以外は黒色土器坏または埦 119 片と須恵器坏Ａ・Ｂ８片がある。貯蔵具は 13 片（2.6％）で、須恵器の甕、長頸瓶、四耳壺と灰釉陶器瓶類である。煮沸具は 34 片（6.6％）で、土師器甕、小型甕しかない。石川条里遺跡高速道地点でも、奈良や平安時代後期土器を含む可能性があるが、出土総数 1,187 片のうち食器類は 878 片（74.0％）、なかでも坏Ａは 475 片で食器類の 54.1％を占めた。数値は異なるが、水田域出土土器は食器主体で、なかでも坏Ａが多い点は今回の調査地点と同様である。

完形や口縁～底部まで残る大きな破片は、長谷鶴前遺跡群のⅣ層水田面上から須恵器坏Ａ（139）、黒色土器片口鉢Ａ（138）、９区の水田層内から須恵器坏Ａ（129）がある。類例は周辺では、市教委が調査した石川条里遺跡で坏が 10 枚重なって畦畔脇で出土した例（市教委 1984）、石川条里遺跡高速道地点での集中出土例（埋文センター 1997）があり、甕類や貯蔵具の単独例として、水口近くの畦畔脇から須恵器甕が出土した更埴条里遺跡例（県教委 1968）、畦畔脇から灰釉陶器小椀２点、皿８点、椀３点、壺１点、長頸瓶１点が出土した例や、灰釉陶器皿４点、椀３点、短頸壺１点、小瓶１点、黒色土器坏３点、埦１点と須恵器四耳壺が出土した例が知られる（千曲市教育委員会 2012）。いずれも洪水直前の水田面に残され、使用時の状態か畦畔脇に片付けたものかは不明だが、今回出土した土器同様の出土例であり、器種別組成は上記のような出土例が反映されたものとみられる。

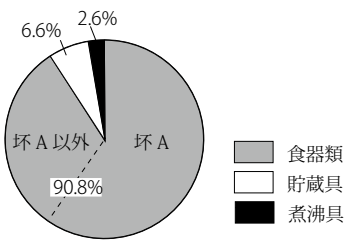
ちなみに、出土数の少ない須恵器・灰釉陶器貯蔵具や煮沸具の甕だが、中近世の用水等から出土したものは流水で移動した可能性があるものの、１区で 35 片（須恵器甕、同長頸壺、同四耳壺、灰釉陶器瓶類、土師器甕、同小型甕）、２区で須恵器長頸壺１片、3b・4a 区で土師器甕１片、4b 区、4c 区で４片（須恵器甕、同長頸壺、灰釉陶器瓶、土師器甕）、５区で灰釉陶器瓶１片、7a 区で土師器甕１片、11 区で３片

第 20 表　平安時代前期土器の地区別出土破片数

地区 / 出土地点	1	2	3a	3b･4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b･8	9	10	11	12	合計
遺　　構	43	3	0	33	30	0	0	0	0	0	0	9	3	121 片
他時代遺構	68	8	0	17	6	3	0	0	0	3	0	19	5	129 片
検出面他	121	2	1	40	44	7	10	12	0	4	3	14	5	242 片
地区別小計	232	13	1	90	80	10	10	12	0	7	3	42	13	513 片



第 16 図　平安時代前期土器の焼物種別組成



第 17 図　平安時代前期土器の器種別組成

（須恵器甕、土師器甕）、12 区で２片（灰釉陶器瓶、土師器小型甕）と各地区に散っている。そのなかで微高地域に近い１区、水田内の微高地周辺 4b 区、4c 区、５区、7a 区周辺に多い傾向はある。

平安時代前期土器の様相は、Ⅲ層被覆水田面を検出した地区（10 区～12 区・長谷鶴前遺跡群）、Ⅲ層が堆積しない地区（１～９区）に分けて、以下に記述する。

10 区～ 12 区、長谷鶴前遺跡群（Ⅲ層が堆積する地区）

Ⅲ層　［図版 89・PL30］：11c 区で須恵器坏Ａ（130）が出土した。

Ⅳ層水田面　［図版 89・PL30］：10 区で奈良・平安時代の須恵器坏Ｂ（133）、土師器または黒色土器埦（134）、11 区で平安時代前期の黒色土器坏Ａ（135・136）、12a 区で黒色土器坏（137）が出土した。長谷鶴前遺跡群では、摩滅した黒色土器とみられる鉢（138）、完形に近い土器が水田面で出土し、やや軟質の焼成不良の須恵器坏（139）が出土した。139 は外面に墨書が認められるが、文字は判読できなかった。

畦畔内　［図版 89・PL30］：畦畔検出時や畦畔内芯材解体時に出土した土器である。12a 区で、SC079 から須恵器蓋（140）、SC081 から奈良・平安時代不明の須恵器坏Ｂ（141）が出土した。11c 区で、SC090 から奈良・平安時代の須恵器蓋（142）、SC093 から体部外面に「万（富）」の墨書がある須恵器坏Ａ（143）が出土し、SC099 から平安時代前期の黒色土器坏（144）が出土した。長谷鶴前遺跡群の SC11 から、須恵器坏Ｂ（145）、須恵器壺（146）が出土した。145 は底部外面全体に回転ヘラ削りされる。松本平編年、更埴・屋代編年の７期より前とみられるが、詳細は不明である。146 は肩部に把手が付く長頸壺とみられる。

他時代遺構他　［図版 89］：SD152（11 区）から黒色土器坏Ａ（131・132）が出土した。出土地不明の須恵器坏Ａ（199）が出土した。

１区～９区（Ⅲ層が堆積しない地区）

１区

SK356　［図版 89］：須恵器坏Ａ（147・148）、黒色土器坏Ａ（149）、奈良・平安時代の須恵器長頸壺（150）、同甕（151）が出土した。焼物種の組成は松本平、更埴・屋代編年の７期前後の様相とみられるが、破片ばかりで本遺構に伴う土器とは言い切れない。

他時代遺構混入品　［図版 90］：奈良・平安時代の土器は須恵器蓋（167）、須恵器坏Ｂ（169）がある。平安時代前期の土器は黒色土器坏Ａ（168・173）、須恵器坏Ｂ（170）がある。SD130 の黒色土器Ⅲ（171）、SD131 の須恵器坏Ａ（172）が出土した。

検出面他　［図版 90・PL30］：検出面や壁から、須恵器坏Ａ（177・178）、須恵器蓋（179）、須恵器坏Ｂ（180・181）、須恵器甕（187）が出土した。黒色土器坏Ａ（182・183）、土師器または黒色土器埦（184）、灰釉陶器椀（185）、灰釉陶器Ⅲ（186）が出土した。182・183 は底部外面中央に直径２～３㎝の回転糸切痕を残す。185・186 の灰釉陶器はハケ塗りとみられる。

２区

検出面他：Ⅴ-2 層上面から須恵器坏Ｂ（188）が出土した。底部外面全面を回転ヘラ削りされる。
SD023 から須恵器坏Ｂ（174）が出土した。

3b・4a 区

SD104（・028・032）　［図版 89・90・PL30］：いずれも小片だが、平安時代前期以後の土器は含まない。SD028 の黒色土器または土師器不明埦（152）、SD032 の須恵器坏Ａ（153・154・155）が出土した。153・

154 には墨書があるが、文字は不明である。SD104 から須恵器坏（156）、黒色土器坏（157）が出土した。須恵器は焼成不良品が多く、松本平編年８期にかかる可能性がある。

検出面他：調査面積が広く出土土器も多い。出土地点不明の黒色土器坏（189）、須恵器坏Ａ（190）を図示した。190 は口唇部に煤が付着、底部外面は回転糸切である。

4b 区、4c 区

SD064　［図版 89・PL30］：土師器または黒色土器坏Ａ（158）、須恵器坏Ａ（159～165）、長頸壺口縁片（166）が出土した。158 はミガキ調整された黒色土器の可能性がある。164・165 の底部は回転糸切である。他に時期不明の壺・甕片等が出土した。平安時代前期土器は、須恵器坏Ａ主体で、松本平編年６期の土器が主体とみられるが、灰釉陶器椀片が出土していて、これに伴う場合、遺構の時期は同７・８期に下る可能性も考えられるが、近世陶器も混入していることから、灰釉陶器片も混入品と推察する。

検出面他　［図版 90・PL30］：第１調査面から、須恵器坏Ａ（191）、黒色土器が坏Ａ 14 片、埦１片、坏または埦７片、土師器または黒色土器が坏または埦６片、須恵器が坏Ａ６片・長頸壺１片、灰釉陶器が椀４片・長頸瓶１片、奈良平安時代須恵器は坏 11 片、蓋１片、長頸壺２片、甕３片が出土した。いずれも小片で、２片同一個体とみられる灰釉陶器椀（192）と須恵器長頸壺（193）を図示した。192 は体部下半を回転ヘラ削りし、高台は三日月形である。Ⅴ-2 層上面検出面から黒色土器坏または埦３片、Ⅴ-4 層上面の古墳時代前期水田検出面から黒色土器坏Ａ１片が出土した。これらは上層で検出しえなかった遺構に関連する土器とみられる。

５区～９区　［図版 89・90・PL30］

検出面他：５区壁から灰釉陶器瓶（194）、６区第１調査面から黒色土器坏Ａ（195）、須恵器坏Ａ（196）が出土した。7a 区第１調査面から須恵器坏Ａ（197・198）が出土した。198 には「山」にみえる墨書があるが詳細不明である。7b・８区北壁の山砂層から奈良平安時代の須恵器坏Ｂ 125 が出土した。９区の SD185 から黒色土器坏または埦（176）が出土した。口径 10㎝前後とかなり小型で、高台を欠損する。小埦にみえるが、同法量の須恵器坏Ｂが平安時代前期の６期にあることから、坏Ｂ模倣の黒色土器埦と考える。調査区壁Ⅳ層から、須恵器坏Ａ（129）が出土した。

③平安時代後期の土器　［図版 90・PL30］

調査区東側１～7a 区Ⅳ層、中近世遺構から小型坏類を中心に当該期の土器 42 片が散在する。小型坏以外の器種の土器は識別できなかった。

3b・4a 区　［図版 90・PL30］

Ⅳ層：SL009 から出土した土師器小型坏（200）、SL010 から出土した土師器小型坏（201）は、どちらもロクロ調整で底部は回転糸切である。SL011 から土師器小型坏が出土した。

他時代遺構・検出面他　［図版 88・90・PL29・30］：２区第１調査面から小型坏（202）、3b・4a 区第１調査面から土師器小型坏（203）、５区壁から土師器小型坏（204）、５区第１調査面から小型坏（205）が出土した。６区第１調査面から小型坏（206）が出土した。明褐色で粗い砂を少量混じる胎土で比較的器壁は薄い。摩滅するがロクロ調整でミガキ調整は認められない。底部外面は回転糸切とも思われるが残存部が僅かで詳細不明である。

（４）中近世の土器・陶器・磁器　［付表８］

①中世の焼物　［第 21・22 表・第 18 図・図版 91・92・PL31］

概要：調査区全体で出土した 12～16 世紀までの中世焼物には、長野県北部域で生産されたとみられる在地産焼物と、珠洲・常滑・山茶碗系・中津川等の国内陶器窯製品、青磁・白磁等の中国からもたらされた輸入磁器がある。在地産焼物には酸化炎焼成土器と、還元炎焼成須恵質の焼物があり、前者には砂粒の少ない胎土でロクロ調整のカワラケや香炉と、砂を多く含む胎土でハケ調整と回転台ナデ調整の内耳鍋・擂鉢がある。なお、擂鉢には酸化炎焼成土器と須恵質のものがあるので、前者を土器擂鉢、後者を須恵質擂鉢と呼称する。この両者は還元炎焼成から酸化炎焼成への変化が推定される同系統の焼物とみられ、製作方法は内耳鍋とも同じ系統とみられる。

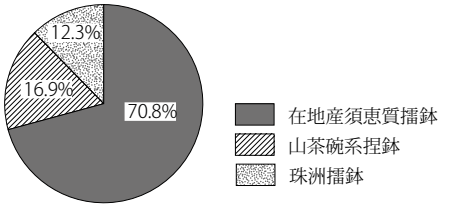
出土した中世焼物の破片数は 388 片である。焼物種別の内訳は以下の通りである。在地産の低温焼成土器はロクロカワラケ 141 片、手づくねカワラケ２片、内耳鍋 103 片、土器香炉２片、土器擂鉢２片、火鉢類 15 片がある。また、在地産土器火鉢の実態については、その実態が明らかではないために時期は断定できないが、やや酸化炎焼成の厚手で雑な造りの破片を在地産の中世の所産、瓦質の内湾器形は近世と考えた。

陶器には瀬戸美濃、珠洲、常滑、中津川窯産のものがある。瀬戸美濃窯産（以下「瀬戸美濃」という。）は、古瀬戸が５片、大窯製品が３片出土した。古瀬戸の器種は卸皿、四耳壺、鉢、平碗があり、大窯製品の器種は丸皿、丸碗がある。珠洲窯産（以下「珠洲」という。）は 25 片出土し、器種は擂鉢、壺、甕とみられる破片がある。山茶碗系陶器は 13 片出土し、器種は捏鉢、碗がある。また、常滑窯産（以下「常滑」という。）の甕とみられる破片、中津川窯産（以下「中津川」という。）の壺、甕、産地不明瓷器系壺がある。

擂鉢は焼物種が複数あり、その内訳は珠洲８片、山茶碗系捏鉢 11 片、在地産須恵質擂鉢 46 片、土器擂鉢２片である。出土擂鉢の 97％が土器以外の擂鉢であり、中世前期の所産とみられる。産地別組成は珠洲擂鉢 12.3％、山茶碗系捏鉢 16.9％、在地産須恵質擂鉢 70.8％となり、在地産須恵質擂鉢を主体として、搬入品の珠洲と山茶碗系捏鉢が少量加わる構成とみられる（第 18 図）。在地産須恵質擂鉢の口縁形態は珠洲擂鉢に類似し、バリエーションがあることから年代幅があることを窺わせる。珠洲模倣品ともみられるが、他の出土焼物年代との比較から、珠洲製品の口縁形態の年代とは対応していない。中世後期の擂鉢は在地産の土器擂鉢のみで、古瀬戸・瀬戸美濃大窯製品、越前等の国産陶器擂鉢は出土していない。

磁器は中国産磁器のみで、白磁Ⅳ類碗１片、同安窯系青磁碗１片、龍泉窯系無文青磁碗２片、龍泉窯系画花文青磁碗１片、龍泉窯系蓮弁文青磁碗 14 片、口ハゲ白磁皿１片である。圧倒的に中世前期のものが多く、中世後期のものは白磁皿１片、雷文青磁碗１片、細線蓮弁文青磁碗１片、青磁皿１片のみである。

地区別出土分布：調査区では遺構数や調査面積の違いがあり、中世焼物の出土破片数が調査区毎に異なる（第 21 表）。１区 240 片、２区５片、3a 区４片、3b・4a（4d）区 58 片、4b 区、4c 区２片、5b 区６片、６区２片、7a 区２片、7b・８区、９区はなく、10 区は近世の可能性もある火鉢片 11 片、11 区２片、12 区で 56 片採取された。また、遺構出土の 293 片のうち、掘立柱建物跡、区画溝等の居住遺構が検出された１区が最も多く 61.7％を占め、近世溝跡への混入品が多い 3b・4a 区で 15.0％、中世居館跡のある 12 区で 14.5％と続く。それ以外の地区では 10 片以下がほとんどで、出土遺物か



第 18 図　中世前期擂鉢の産地別組成

第 21 表　中世焼物の地区別出土破片数１

地区 / 出土地点	1	2	3a	3b･4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b･8	9	10	11	12	合計
遺　　構	162	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	17	181 片
他時代遺構	53	4	4	44	0	3	0	1	0	0	0	0	3	112 片
検出面他	25	1	0	14	1	3	2	1	0	0	11	1	36	95 片
地区別小計	240	5	4	58	2	6	2	2	0	0	11	2	56	388 片

第 22 表　中世焼物の地区別出土破片数２

地区 / 出土地点	1	2	3a	3b･4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b･8	9	10	11	12	合計
須恵質擂鉢（中世前期）	44	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	46 片
内耳鍋（中世後期）	14	1	2	31	0	5	1	0	0	0	0	1	47	102 片
その他	182	4	2	26	2	1	0	2	0	0	11	1	9	240 片
地区別小計	240	5	4	58	2	6	2	2	0	0	11	2	56	388 片

ら中世遺構と断定しうるものも僅かしかないという特性がある。

出土した在地産雑器のうち、須恵質擂鉢は中世前期（13 世紀後半～14 世紀）を、内耳鍋は中世後期（15～16 世紀）を、それぞれ代表する土器といえる。出土した須恵質擂鉢と内耳鍋の破片数を地区別に示した（第 22 表）。中世前期の須恵質擂鉢は１区に集中し、3b・4a 区～５区、６区周辺でも少量出土している。その分布は居住遺構のある１区と円形の浅い井戸跡が分布する 3b・4a 区、4b 区、4c 区周辺に重なるが、同様の遺構が確認された９区では中世焼物の出土がない。中世後期の内耳鍋は調査区全体に散在し、そのなかで居館跡がある 12 区からの出土がやや多い傾向がある。

以下に、地区別に出土土器の様相を記す。

１区

地区別出土数 240 片のうち、遺構出土は 215 片である。中世前期の土器が中心である。中世後期のものは少量で、近世遺構の混入か検出面のみの出土である。焼物種別の内訳は、中国産青磁碗（同安窯系青磁碗、龍泉窯系蓮弁文青磁碗、画花文青磁碗、無文青磁碗、中世後期の細線蓮弁文青磁碗）、中国産白磁皿（口ハゲ皿）、古瀬戸（卸皿、平碗、鉢、四耳壺とみられる破片）、珠洲（擂鉢、壺・甕、壺）、常滑（甕）、中津川（壺、甕）、山茶碗系（山茶碗、捏鉢）、産地不明瓷器系陶器壺、ロクロカワラケ、手づくねカワラケ、須恵質擂鉢、土器擂鉢、土器火鉢、内耳鍋である。

土坑　［図版 91・PL31］：SK001 から、須恵質擂鉢の断面が方形の口縁部（209）、底部（210）が出土した。SK012 から須恵質擂鉢で口縁内端部が尖る断面が三角形の口縁部（214）、山茶碗（215）、珠洲壺の体部（216）が出土した。SK041 から出土した珠洲擂鉢（220）は、内面が使用で摩耗し、底部外面に静止糸切痕を残す。

井戸跡　［図版 91・PL31］：SK002 から須恵質擂鉢（211）が出土した。211 は口唇部と口縁外面を面取する。焼成は良く、卸目は残存片には認められない。SK003 から出土した須恵質擂鉢（212）は、口縁方形の断面だが若干肥厚する。SK010 からカワラケ口縁（213）、SK017 から龍泉窯系蓮弁文青磁碗（217）、SK020 から山茶碗系捏鉢（218）が出土した。SK062 から同安窯系青磁（223）、須恵質擂鉢（224・225）が出土した。SK094 からロクロカワラケ（228）、須恵質擂鉢（229）が出土した。SK196 から須恵質擂鉢（234）、SK270 から須恵質擂鉢（237）、SK276 から須恵質擂鉢（238）が出土した。SK080 からロクロカワラケ（221）、中

津川壺（222）が出土した。

中世の可能性がある柱穴跡　［図版 91・PL31］：SA005 からロクロカワラケ（226）、SK091 からロクロカワラケ（227）、SK155 から須恵質擂鉢（230）、SK177 から須恵質擂鉢（231）、SK178 から須恵質擂鉢（232）、SK188 から龍泉窯系蓮弁文青磁碗（233）、SK246 から画花文青磁碗（235）、SK249 から龍泉窯系蓮弁文青磁碗（236）が出土した。柱穴跡出土中世遺物の時期は、素掘井戸跡から出土した焼物と重なり、中世前期（13 世紀後半頃～14 世紀前半）にあたる。

ST001　［図版 91・PL31］：P2 から龍泉窯系青磁碗体部（207）が出土した。

ST005　［図版 91・PL31］：須恵質擂鉢体部（208）が出土した。

溝跡　［図版 91-240、241、243～245、図版 92-246～249、251、252・PL31］：SD001 から出土した手づくねカワラケ（240）は口唇部に面取りが認められる。ロクロカワラケ（241）は口縁が内湾する形態である。その他に、須恵質擂鉢は断面方形の口縁部片（243）と底部片（244）、底部とみられる珠洲壺・甕（245）が出土した。SD002 から龍泉窯系蓮弁文青磁碗（246）、古瀬戸卸皿（247）が出土した。247 は灰釉単味のハケ塗りの底部片で前期様式とみられる。時期はほぼ 13 世紀後半の中世前期所産とみられる。SD009 からは内面に煤が付着したロクロカワラケ底部（248）、無文の龍泉窯系青磁碗（249）、須恵質擂鉢口縁部片（251）と体部片、珠洲擂鉢の底部（252）が出土した。251 は若干口縁内端部が突出する。252 は静止糸切で卸目は細かく、珠洲Ⅱ・Ⅲ期の所産とみられる。

近世遺構混入品　［図版 92・PL32］：SD020 から出土した須恵質擂鉢（256）は、内湾気味で内端部が三角気味に尖る口縁の小片で周囲を研磨している。SD023 からは古瀬戸鉢（258）、内耳鍋（259）、古瀬戸四耳壺（261）、珠洲擂鉢（262）、須恵質擂鉢（263・264）、中津川甕（265）、火鉢とみられる破片（266）が出土した。258 は外底回転ヘラ削で、薄い灰釉単味を外面にハケ塗りする底部片で古瀬戸後期Ⅰ・Ⅱ様式と考えられる。内耳鍋は２片あり、259 は底部である。261 は灰釉単味施釉の口縁小片で古瀬戸前期様式である。263 は口縁端部を水平にする方形の断面口縁である。265 はＬ字型に屈曲する口縁で端部は欠損する。266 はやや底径が大きく、内外面回転台ナデ調整で外底に棒状圧痕がある。調理具とは考えにくく、火鉢の可能性がある。SD125 からは須恵質擂鉢（274）、山茶碗系捏鉢（275）が出土した。274 は口縁端部が内側に突出して口唇部を水平とするが、本来は内端部が飛び出た三角形の断面口縁であった可能性がある。体部外面タテハケ調整の後、口縁回転台ヨコナデされる。焼成は良く、還元焼成である。275 は小片で、口縁は肥厚し口唇部に沈線１条が入る。SD126 からは須恵質擂鉢（276）が出土した。SD080 からロクロカワラケ（273）が出土した。

検出面他出土の焼物　［図版 92・PL32］：珠洲擂鉢（277）と龍泉窯系青磁碗（278）が出土した。

２区

近世溝跡混入品・検出面他出土の焼物　［図版 92・PL32］：SD023 から大窯製品の丸皿（257）、内耳鍋（260）が出土した。

3b・4a 区、4d 区

第１調査面の遺構から 44 片、その他検出面を含めて合計 58 片出土し、中世後期の所産が多い。焼物種・器種の内訳は須恵質擂鉢、内耳鍋、ロクロカワラケ、土器香炉、珠洲甕、白磁皿、青磁皿で、溝跡出

土が大部分である。

近世溝跡混入品　［図版 92・PL31・32］：SD033 から土器香炉（267）、SD056 から口縁が内湾する青磁皿（268）が出土した。SD065 からロクロカワラケの小型品（269・270）、大型品（271）、内耳鍋底部（272）等が出土した。

検出面他出土の焼物　［図版 92］：白磁Ⅳ類碗の口縁（279）が出土した。白磁碗と類似時期（12 世紀前後）の搬入焼物は他になく、それ以外は中世後期の焼物が多い。

11 区　［図版 91・PL31］

SK1103 からロクロカワラケ（239）が出土した。

12 区

中世居館堀跡　［図版 92・PL31・32］：SD191 からロクロカワラケ（253）、SD192 から内耳鍋（254・255）が出土した。254 は体部片、255 は内湾気味に口縁上部がやや肥厚する形態である。

②近世の焼物　［第 23 表・第 19・20 図・図版 93・PL32・33］

概要：近世焼物は調査区全域から、当該期の遺構出土 233 片、他時代の遺構混入品 10 片、検出面他 138 片の合計 381 片出土した。遺構出土のうち、溝跡出土が 220 片（遺構出土数の 90.5％）、近代の天地返しとみられる遺構から７片、墓跡から１片、土坑から混入の可能性があるものを含め８片、平安時代水田の耕土混入品１片である。水田用水とみられる溝跡からの出土が、圧倒的に多い。近世焼物には土器、陶器、磁器があるが、近似する時期の焼物のみで構成される一括資料と捉えられたものはなく、幅のある時期の焼物が混在して出土している。このことは当該地点が居住域ではなく、出土した焼物は用水の水流等で運ばれた破片が多いことによるのかもしれない。

低温焼成の焼物で、当地域で生産されたと考えられるものを在地産土器と呼称した。在地産土器は 19 片で、七輪の目皿とみられる破片、火鉢類、ホウロクがある。なお、火鉢類は燻焼で内湾する器体を近世の所産とした。当地域における近世火鉢の様相が明らかにされていないため、中世とした火鉢も近世の可能性は否定できない。この他に黒灰色の燻瓦の桟瓦が 47 片あり、近世焼物の 12.3％を占めるが、選択的に採取したもので出土したもの全てではない。

陶器には、唐津、波佐見（・平戸）、京焼系、瀬戸美濃窯産の搬入品と、在地窯産の製品がある。

唐津窯産陶器（以下「唐津」という。）は 44 片出土し、器種はルリ釉輪ハゲ皿、砂目積の皿や溝縁皿、肥前陶磁（盛峰雄 2000）Ⅱ～Ⅳ・Ⅴ期の擂鉢、同Ⅱ～Ⅲ期の碗、小碗、呉器手碗、鉢である。擂鉢は瀬戸美濃製品より多く、Ⅱ期と思われる破片が１片あるが、Ⅲ期以後は安定的に一定量みられる。Ⅱ期とみられる白色破片は小片で断定できないが、無釉で太い卸目が密に施される。

波佐見（・平戸）窯産陶器は暗灰色胎土の炻器質の染付陶器で４片あり、碗、小碗、仏飯具がある。仏飯具は暗灰色ながらやや白色を呈し、焼成不良の伊万里にもみえる。京焼系陶器７片は碗、合子、徳利があるが、近世末以後のものとみられる。

瀬戸美濃窯産陶器（以下「瀬戸美濃陶器」という。）は 127 片採取され、碗・皿類を主体として仏飯具、擂鉢、香炉、僅かに鬢水入れ等の器種がある。皿は、志野丸皿とその可能性がある皿、志野織部丸皿、輪ハゲ皿、掛分皿、型打皿、呉須絵皿（透明釉他灰釉）がある。碗は該当製品の 70.1％を占める。なかでも細かい貫入の入る淡青緑色の灰釉を施す碗が 54 片あり、最も多い。内湾ぎみの器形で底部の畳付以外を全面施釉する。他は志野碗、天目茶碗、外体部下半を露胎とする灰釉碗、陶器染付碗（透明釉を含む）、

上絵付碗、鉄釉に灰釉流し掛けする碗、体部が鉄釉で口縁灰釉を掛ける尾呂茶碗、炻器質の染付碗、渋紙手の碗、全面施釉される鉄釉碗、体部下半～底部を露胎とする鉄釉碗がある。小碗 11 片は鉄釉と灰釉がある。上記以外は少数だが、鉢、鬢水入、徳利、香炉、仏飯具、擂鉢、蓋がある。全体的に調理具・貯蔵具類が少なく、食器が主体の組成である。

遺跡出土の瀬戸美濃陶器は、瀬戸製品とは若干様相が異なり、美濃製品が主体とも思われる。近世瀬戸・美濃登窯製品編年表（藤沢 1987～1989）を参照すると、第１段階（17 世紀初頭～後半）は志野皿、輪ハゲ皿、灰釉流し掛け鉄釉碗、志野丸碗、天目茶碗、擂鉢の一部、第２段階（17 世紀末～18 世紀中頃）は尾呂茶碗や摺絵皿・型打皿、体部下半を露胎とする碗類等、第３段階（18 世紀後半～19 世紀中頃）は灰釉施釉の丸碗類や染付陶器の碗皿類等が多くある。本遺跡では第３段階の所産が主体とみられ、第２段階にあたる 18 世紀後半の所産も少量ながらある。これは明暦用水廃絶から塩崎用水開削までの期間にあたる。近世の用水については、第６章第１節５で詳細を記した。

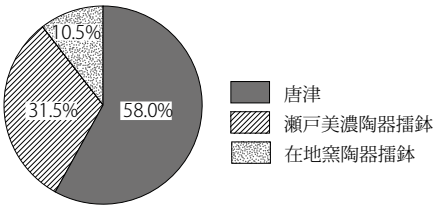
在地窯製品は７片出土し、遺跡周辺の松代焼系統の窯である長谷焼、元町焼等の製品とみられる。火入、擂鉢、徳利、壺、鉢がある。上記以外の産地不明窯製品 13 片は、近現代を含み器種・産地は不明なものが多い。植木鉢、近在窯製品の可能性がある厚い鉄釉を掛けた土瓶、近代とみられる急須蓋、合子、鉢とみられる破片、蓋、碗、小型壺、現代とみられる化粧瓶、焼締急須がある。これ以外に器種・焼物種不明の破片がある。

磁器には、伊万里、瀬戸美濃窯産がある。伊万里窯産磁器（以下「伊万里」という。）は 68 片出土し、肥前陶磁Ⅱ期（盛峰雄 2000）とみられる碗２片と皿５片、Ⅲ期とみられる破片２片があるが、大部分はⅣ・Ⅴ期の所産とみられる。器種は小型食器類が主体で、碗 43 片、筒形碗１片、小碗・小杯７片、蓋２片、皿 11 片、瓶類３片、紅皿１片である。瀬戸美濃窯産磁器（以下「瀬戸美濃磁器」という。）は 45 片出土し、近代・現代のものも含む。碗 29 片、皿３片、大皿とみられる１片、小碗４片、徳利１片、急須１片、瓶類５片、把手１片である。このなかには手描線描、近代に入る型紙摺、銅版転写がある。なお、徳利は鉄釉を掛けた白色磁器質の胎土・焼成のやや厚手のもので、瀬戸美濃製品ではない可能性がある。

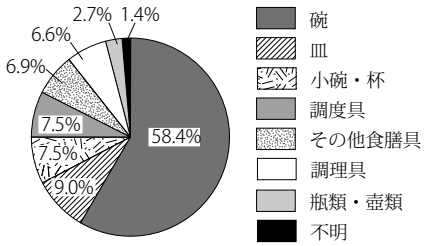
産地別組成：17 世紀前半の焼物の出土量は少ないが、瀬戸美濃陶器と少量の唐津碗・皿等がみられ、17 世紀後半以後に擂鉢等の調理具の主体は唐津擂鉢が主体となる。併せて唐津の御器手碗・ルリ釉輪ハゲ皿、伊万里や波佐見が加わり、さらに瀬戸美濃陶器が加わる組成とみられる。18 世紀末以後は唐津・伊万里等に加え、瀬戸美濃陶器の食器が増加して焼物総量がかなり増える。近世末～近代になると食器類は瀬戸美濃磁器が主流になり、併せて在地窯産陶器が加わるようだ。在地土器は年代の詳細を明らかにしえなかったが、一貫してホウロク・火鉢類を中心に一定量存在する可能性がある。

水田域なので擂鉢自体の出土数は多くはないが、上記の搬入品の様相を擂鉢でみると、出土した擂鉢は唐津 11 片（57.9％）、瀬戸美濃陶器６片（31.5％）、在地窯産陶器２片（10.5％）の 19 片で唐津が主体を占める（第 19 図）。そのうち瀬戸美濃陶器２片は 17 世紀前半の可能性がある。唐津は 17 世紀前半の肥前陶磁Ⅱ期とみられる１片、17 世紀後半頃の同Ⅲ期６片、18～19 世紀前半の同Ⅳ・Ⅴ期４片がある。残る瀬戸美濃陶器４片は時期の詳細がわからないが、在地窯産陶器は 19 世紀以後とみられる。このように擂鉢は中世後期には陶器がほとんどみられないなかで、近世に入るとまず瀬戸美濃陶器、追って唐津が 17 世紀前半頃に入りはじめて後半に増大していく様相が知られる。近世末には再び瀬戸美濃陶器も少量ながら加わるとみられ、近世末～近代になると在地窯産陶器の擂鉢が加わるといった変遷とみられる。

器種別組成：瓦を除く焼物 334 片の器種別組成を示す（第 20 図）。これによると碗が 195 片（58.4％）と圧倒的に多く、皿 30 片（9.0％）、小碗と杯 25 片（7.5％）で、これらの小型食膳具で全体の 74.9％を占める。



第 19 図　近世擂鉢の産地別組成



第 20 図　近世焼物の器種別組成

第 23 表　近世焼物の地区別出土破片数

出土地点＼地区	1	2	3a	3b･4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b･8	9	10	11	12	合計
遺構	98	46	3	43	0	9	0	4	0	0	0	0	30	233 片
他時代遺構	6	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	10 片
検出面他	66	11	5	16	0	10	0	0	0	2	0	0	28	138 片
地区別小計	170	57	8	60	1	19	0	4	0	2	0	0	60	381 片

その他では、鉢、徳利、蓋、土瓶、急須、合子などが 6.9%、瓶類・壺類は 2.7%である。調理具は、擂鉢、ホウロクで 6.6%、調度具は火鉢、火入、七輪、仏具香炉と仏飯具、化粧関係の鬢水入、紅皿で 7.5%、他は不明片である。食器が主体で、調理具他が非常に少ない器種構成である。

地区別出土状況：破片数は、遺構数の違いや調査面積の違いもあって一様に比較できないが、１区 170 片、２区 57 片、3a 区８片、3b・4a 区 60 片、4b 区、4c 区１片、5b 区 19 片、7a 区４片、９区２片、12 区 60 片である。６区、7b・８区、10 区、11 区等の西側地区では出土していない。時期別の出土傾向は、調査区東西両端の１区と 12 区に 17 世紀前半のものがやや多く、3b・4a 区も僅かにある。17 世紀後半以後は１区～4b 区まで散在し、特に 18 世紀末以後は焼物の破片数もかなり多い。これらの近世焼物は溝跡からの出土が多く、遺構出土の約 90%、全体の 58%を占める。その溝跡の多くは用水とみられ、上記の出土破片数が多い地区は溝跡の検出数も多い。

以下に、地区別に出土土器の様相を記す。

１区

遺構出土 101 片、検出面 66 片、合計 167 片が出土し、調査区全体で出土した近世焼物の 43.8%を占める。

近世溝跡　［図版 93・PL32・33］：SD023 から、伊万里は皿（286）、唐津は呉器手碗底部（282）と砂目積の皿底部（287）と溝縁皿（288）が出土した。瀬戸美濃陶器は灰釉流し掛け鉄釉碗の底部（281）と口縁（283）、２区出土の灰釉丸碗底部（284・285）、やや紫がかった錆釉の擂鉢（289）が出土した。瀬戸美濃磁器は小碗（280）、その他に燻瓦（290）が出土した。

SD085 からは、伊万里の碗底部（317）が出土した。18 世紀末以降のものとみられる。SD086 からは、仏飯具の杯部～底部（319）が出土した。やや白味を帯びる暗灰色胎土で波佐見とみられるが、焼成不良の伊万里の可能性もある。瀬戸美濃陶器は、剥落しているが上絵付とみられる碗（318）が出土した。SD85・86 の出土品は 18 世紀末以後のものとみられる。SD092 からは、伊万里皿底部（320）が出土した。17 世紀前半のものとみられる。SD125 からは、在地土器の火鉢口縁（321）、唐津の呉器手碗底部（322）が出土した。SD129 からは、外体部下半露胎の鉄釉碗（323）が出土した。

天地返し跡　［図版 93・PL33］：SL001 から、瀬戸美濃陶器の鬢水入（330）が出土した。

検出面他出土の焼物　［図版 93・PL33］：土製円盤（333）は伊万里小碗の周囲を打ち欠いたもので、時期的

には肥前陶磁Ⅲ～Ⅴ期にあたる。

2区

近世溝跡　［図版 93・PL32・33］：SD024 から、伊万里は皿の高台に砂が付着する口縁～底部（293）と底部（291）、輪状に釉を剥いだ皿底部（292）が出土した。唐津の擂鉢底部片（296）は露胎に細かい卸目を密に施す。瀬戸美濃磁器は手描染付碗（294）と型紙摺碗底部（295）、その他に在地産土器火鉢（297）が出土した。

他時代遺構混入品・検出面他出土の焼物：第１調査面から瀬戸美濃陶器の鉄釉・灰釉掛け分け皿（334）が出土した。

3a 区

近世溝跡　［図版 93・PL32］：SD034 から、瀬戸美濃陶器は畳付以外全面施釉する灰釉丸碗底部（299）、蛇目高台で全面鉄釉を施し、畳付の釉を拭き取る鉄釉碗底部（300）と体部が出土した。18 世紀末以後の所産である。

3b・4a 区、4d 区

近世溝跡　［図版 93・PL32・33］：SD033 から無釉で細い卸目が密に入る唐津擂鉢（298）が出土した。SD037 から唐津の鉄釉碗底部（301）、呉器手碗底部（302）が出土した。18 世紀末以後～近代の所産である。SD043 から瀬戸美濃陶器の筒形の香炉（303）が出土した。17 世紀後半～18 世紀の所産と推察する。SD056 から唐津碗口縁部～底部（304）が出土した。胎土は明褐色で、釉は白濁する。口縁端部は外反し、体部上部にヘラで面取りするようなケズリがところどころにある。SD057 出土の伊万里蓋（305）は高台状摘まみから体部で、外面は無文、内面は松竹梅文を描く。他に、瀬戸美濃陶器灰釉丸碗の高台内無釉底部（306）、唐津呉器手碗底部（307）が出土した。SD058 のうち SD058a から出土した瀬戸美濃陶器の灰釉小碗（308）は、口縁～体部下半が露胎となる底部である。鉄釉碗の底部（309）は、高台内まで施釉された畳付の釉を拭き取る。灰釉丸碗の底部（311）は、高台畳付を除き全面施釉される。他に下部を露胎とする体部片もある。伊万里は碗底部（310）、唐津はルリ釉輪ハゲ皿底部（312）、京焼上絵付の合子口縁～底部（313）が出土した。312 が 18 世紀前半頃とやや古いが、18 世紀末以後の焼物を含む。SD063 西側残存部分の SD063a から、瀬戸美濃陶器の呉須による摺絵皿口縁～底部（316）、唐津の呉器手碗が出土した。また、埋土一括では唐津の呉器手碗底部（315）、検出時に出土した瀬戸美濃陶器の底部外面無釉の小碗底部（314）が出土した。

他時代遺構混入品　［図版 92・PL33］：平安時代水田跡検出時に伊万里の小碗底部（331）が出土した。

検出面他出土の焼物　［図版 92］：第１調査面は平安時代耕作土層Ⅳ層下部から古墳時代前期水田耕作土・洪水土層Ⅴ層上面にあたり、出土した近世焼物は本来該当期の遺構に属するものであったと考える。また、壁断面のⅡ層から 14 片が出土し、唐津小碗の口縁（335）がある。

5b 区

近世溝跡　［図版 93・PL33］：SD148 から伊万里碗２片が出土した。体部下半～底部（324）は、高台外面から高台内面は無釉で体部上半にダミ筆を押し当てたような文様がある。時期の詳細は不明だが、17 世紀中頃の肥前Ⅱ期の所産と考えられる。SD167 から銅緑釉流し掛け唐津呉器手碗（325）が出土した。

検出面他出土の焼物　［図版 93］：古墳時代前期水田層上面の検出時に 10 片出土したが、本来は近世遺構に

属すると考える。瀬戸美濃陶器灰釉丸碗は（336）が出土した。

12区

12c区で塩崎用水と現市道下の旧道跡、近世の水田跡を調査し、比較的多くの近世焼物が採取された。

近世溝跡［図版93・PL33］：現コンクリート擁壁構造以前の塩崎用水と推定されるSD188の上層埋め戻し土は重機で掘削し、下層は層位別に取り上げた。埋土から近世末～近代を中心とした焼物が24片出土した。23層から瀬戸美濃磁器の染付小碗口縁～底部（326）、瀬戸美濃陶器の染付皿口縁～底部（328）が出土した。いずれもほぼ18世紀末～近代の所産で、塩崎用水のつくられた年代と重なる。26層から瀬戸美濃陶器の鉄釉で文様を描く志野織部丸皿（327）が出土した。

12c区北水田耕土下層（図版82-22・23層）［図版92・PL33］：近世水田耕土下層から、唐津とみられる透明釉をかけた精製胎の碗（337）が出土した。この碗１片のみでは断定が難しいが、居館跡は近世以後に水田化された可能性がある。

中世溝跡混入品［図版93・PL33］：SD193屈曲部に入れたトレンチ壁精査時に陶器１片が出土した。確実にSD193帰属と断定できないが、精製胎土の唐津陶器碗（332）で、口縁は玉縁状で外面に松と思われる絵柄を粗いハケで描く。釉は透明釉で薄い。

12c区水田上層埋め土（図版82-15層）［図版93・PL33］：塩崎用水（SD188）開削時に、近世の水田面SL036を埋め立てたと考えられる土である。15片出土し、伊万里碗の口縁部（338）と唐津の擂鉢（339）を図化した。339は玉縁で焼き締めの口縁部のみ鉄釉を掛け、肥前Ⅲ期である。下層の耕作土より古い陶磁器が比較的多く含まれる。

12c区水田耕作土層（図版82-20層）：埋め立て土下位の水田耕土層から５片出土した。燻瓦が出土したことから、近世末頃の水田跡と考える。

２　土製品［付表9・図版94-土製品１～14・PL34］

（１）弥生時代中期後半の土製品

ミニチュア土器の小片がSC105（10区）から１点出土した。図示していないが、外反する口縁の端部を欠損し、緩やかなＳ字を描く器形で甕を模したとみられる。外体部上半に斜方向と体部中央に横方向の沈線１条が施される。外面はハケ調整の後ナデ調整で、内面は輪積痕を残す。

（２）古墳時代前期の土製品［図版94・PL34］

ミニチュア土器２点のうち１点（12）を図示した。12は小型丸底土器を多出したSX002出土で、本品も小型丸底土器を模したものとみられる。他１点は5b区Ⅴ層中（7b層）から採取された底部片１片で、底部径２㎝前後で体部は欠損する。

（３）平安時代の土製品［図版94・PL34］

SK356（１区）から土錘３点が出土した（９～11）。いずれも直径2.7～3.1㎝、長さ5.8～6.8㎝の筒形土錘で、直径0.8～1.0㎝の棒に粘土を巻き付けナデ調整している。色調は明褐色～にぶい黄橙色と多様だが形状は類似する。重量は９が45ｇ、10が63ｇ、11が50ｇ以上で後述する中世の土錘（１～８）より重い。

（４）中世の土製品　［図版 94・PL34］

土錘、焼成粘土塊がある。土錘（１～８）は１区の近世溝跡や中世 SK062・177 等から散在的に出土した。直径 1.2～2.6㎝、長さ 4.6～5.9㎝の細身の紡錘形土錘で、直径４～５㎜の細い棒に粘土板を巻き付けてナデ整形している。重量は完形品で 11～27ｇと平安時代の土錘（９～11）の半分以下の重量である。平安時代の土錘と形態が異なることと出土遺構から中世に属すると考えた。

焼成粘土塊は、１区の中世遺構では、SD1009（８片 49ｇ）、SK001（３片 11ｇ）・012（16 片 95ｇ）・014（４片 36ｇ）・021（４片 18ｇ）・094（５片 40ｇ）・119（１片 13ｇ）・188（１片 11ｇ）、近世遺構では、SD001（１片３ｇ）、SD007（２片 14ｇ）、SL001（５片 36ｇ）、SL002（４片 22ｇ）、１面検出面（４片 16ｇ）、調査区壁（２片 11ｇ）から出土した。3b・4a 区でも SD061（１片８ｇ）から出土した。粘土塊は焼成温度が低く軟質で、部分的に平坦面が残るものも僅かにあるが、全体的に摩滅した不定形な塊である。酸化鉄の風化粒子等の砂粒や直径５㎜前後の粘土粒を少量含むが、粒子は細かく内部に砂（すさ）が混じり込む。土壁等の構造物の一部とみられる。

（５）近世の土製品　［図版 94・PL34］

土製円盤と近世遺構出土の鞴羽口がある。土製円盤（13）は SD086（近世）から出土したもので弥生土器片周囲を研磨して楕円形に整えている。14 は燻瓦の周囲を打ち欠き円形に整えた円盤である。鞴羽口は SD037 と 3b・4a 区出土地点の２点である。いずれも小片で図示していないが、本体が溶けて発泡した先端部の破片とみられる。近世遺構出土だが、中世の可能性もある。

３　石器・石製品　［付表 10・11・図版 94-玉類１～15・図版 95～99・PL34～37］

（１）縄文時代の石器　［図版 96・PL35］

3b・4a 区の近世溝跡から、縄文時代とみられる蛇紋岩製の定角式磨製石斧（14）が出土した。刃部は欠損し、全体的に酸化鉄が付着する。重量は 127.3ｇを計る。

（２）弥生時代中期後半の石器・石製品　［図版 95～97・99・PL35～37］

基本土層Ⅶ・Ⅷ層や遺構、他時代混入品ながら剥片石器や定形的な形態から弥生時代中期後半とみられる石器をまとめて記述する。なお、１区から比較的多くの石器が出土しているが、当該期では自然堤防端部にあたるため、水田域の出土ではない。なお、巻末の石器・石製品一覧表には、図版非掲載のものも含め、出土した全ての石器・石製品を掲載した。

小型打製剥片石器類　打製石鏃、削器、RF、UF がある。打製石鏃（１）は１区Ⅴ層最下部で１点のみ出土した。黒曜石製凸基鏃で、基部先端を欠損する。削器（12）は同検出面から黒曜石製１点が出土した。縦長剥片の１側辺に剥離調整を施し、もう片側側縁は未調整で微細な剥離痕が残る。RF は２点、UF は２点した。

大型打製剥片石器類　打製石斧、打製大型刃器がある。打製石斧は３点出土し、すべて図示した（３～５）。いずれも基部片で大きさからいわゆる石鍬とみられる。３は１区近世溝跡の出土。安山岩製で板状角礫か亜角礫の側縁を粗く剥離調整したもので、側縁は摩耗する。４は 11c 区Ⅷ層水田畦跡の出土。角礫か亜角礫とみられる安山岩製で、上下面に自然面が残る。側縁に剥離調整を施し、その片側縁の一部は細かい敲打で剥離が潰されている。５は古墳時代前期の水田畦内土坑の出土。結晶が少ない安山岩製で、剥離表面に僅かな黒味を帯びる沈着物があるが、それが剥がれた灰白色の新鮮な面が多いことから、かなり

表面は剥落しているとみられる。粗い剥離調整が認められる。

打製大型刃器は７点出土し、すべて図示した（６～12）。長三角断面形の大型剥片を素材とし、鋭角の側縁に不規則な微細剥離痕が認められるものが多い。８のみ刃部を剥離調整するが、多くは剥片の側縁そのまま刃部とし６・９は巾広の背側を剥離調整する。完形に近い７と 11 以外は破片だが、刃器の形状は直線に近い楕円か木葉形が６・７・９、先端がとがる三角形が８・10 で、12 もその可能性があり、11 は柄が作り出されている。使用痕跡は微細な剥離痕以外に、11 にロウ状光沢痕が認められた。なお、６の擦痕は新鮮で調査時のガジリ痕と思われる。石材は８・11 が頁岩、７・10・12 が珪質泥岩、６が緑色凝灰岩、９がやや硬質の砂岩である。出土地点と層位は、７が古墳時代前期畦畔内 SX002、10・11 が弥生時代中期後半Ⅷ層水田（3b・4a 区）、他は１区、3b・4a 区、7b・８区、９区と広範囲で点在し、古墳時代前期Ⅴ層上面の検出面、近世遺構の混入である。

磨製石器　石包丁と磨製石斧がある。石包丁は２点小片が出土した。磨製石斧は太型蛤刃石斧が１区で１点出土した（13）。緑色岩製で刃部は斜めにすり減り、刃部側６㎝ほどは丁寧な研磨痕を残すが、基部側の表面が荒れ、特に中央付近の側縁は帯状にすり減る。重量は 520.5ｇを計る。

礫石器　敲石、置砥石、磨石がある。敲打痕のある礫石器９点を全て礫敲石としてまとめ、６点を図示した（19～24）。21・23 は扁平円礫の広面に敲打痕を残すタイプで、他に２区Ⅷ層水田面出土品がある。21 は側縁部、２区Ⅷ層水田面出土品には端部にも敲打痕がある。19・22・24 は細長い棒状円礫や楕円円礫の先端部に敲打痕を残すタイプである。20 は 21 と同様に扁平円礫側縁に敲打痕がある。これらは形態による時期の特定はできないが、23・24 と２区Ⅷ層水田出土品がⅧ層弥生時代中期後半水田土層から出土している。他はすべて１面の近世溝跡から出土している。20・21 は近世溝跡 SD061 の出土であり、一部は近世の可能性も残る。本遺跡は地山に礫を含まない地域に立地するため、敲石として水田内で使用されたものではなく、礫として持ち込まれた可能性がある。なお、19 と 24 は、敲打痕は大きく粗い痕跡のため、力を入れて敲いたとみられる。なかでも 24 は敲打痕周辺が剥落している。また、広面を用いる 23 と２区Ⅷ層出土品も敲打面がかなり深く抉れており、強い力で敲かれた痕跡といえる。一方、20・22 は敲打痕が細かく、敲打面も比較的平坦であるため、弱い力で細かく敲いた痕跡と考える。敲打面は 20 で 1.5 × 4 ㎝、22 で 1.5× 1 ㎝と狭く極めて部分的である。石材は 22 が淡緑色の硬砂岩で、23 は安山岩を用いる。

石皿　Ⅷ層水田の SC105（10 区）から１点出土した（28）。隣接する集落遺跡の塩崎遺跡群で類例があり、石皿として水田内で使用されたものではなく、礫として持ち込まれた可能性がある。粒子が粗い砂岩製で板状亜角礫の広面上下を研磨面とし、中央へ傾斜する。両面中央に半球状の窪みと周囲に敲打痕がある。窪みは径３㎜前後で内面は比較的平滑であり、破損後に敲打作業の台石に転用したとみられる。

磨石　Ⅷ層水田 SC063（7b・８区）から１点出土した。形態の似る円礫は１区１面遺構から多数出土しているが、明確に当該期の磨石と断定できるものはなく、中世の石製品で触れている。SC063 出土品は白色流紋岩円礫の上下広面に５× 6 ㎝程度の平滑な研磨面が認められる。

剥片類　黒曜石剥片 12 点と珪質頁岩剥片２点、チャートの方形気味の円礫片角部の剥片１点が出土した。小片の鉄石英片２点出土した。

その他　石器未成品と思われるものがある（15・16）。15 はやや緑がかった玄武岩質岩石で扁平円礫片の縁辺を剥離調整して鋭角とし、その後細かい敲打整形を加える。中央部に敲打による浅い窪みが上下面にあり、形状と調整方法から環状石斧未成品と考えた。SD100（１区）出土で混入とみられる。また、16 は珪質泥岩の円礫端部を打ち欠いた破片で、破断面の長側縁に僅かな剥離調整、片側短側辺を斜めに鋭角に整える剥離調整を加えている。扁平片刃石斧と類似した形状で、その未成品と考えた。

（３）古墳時代前期の石製品　［図版 94-玉類１～10・98・PL34・36］

当該期と考えられる石製品に玉類がある。また、当該期と断定はできないが、当該期の遺構から台石、砥石の可能性がある堆積岩片、加工痕を残す軽石製品が出土した。

玉類　SD100（１区）からメノウ製勾玉（１）と緑色凝灰岩製管玉（３）、１区Ⅴ-2 層検出面から緑色凝灰岩製管玉（４）、4b 区Ⅴ層から緑色凝灰岩製管玉（５）、９区１面古墳水田層から緑色凝灰岩製管玉３点（６～８）、青灰色の滑石に近い不明石材の勾玉（２）、類似した滑石製の小玉（10）が出土した。９区では比較的近接して出土したが、それ以外は単体や数点が散在的に出土し、緑色凝灰岩製管玉（３）には酸化鉄が付着し摩耗が著しい。これ以外に 5b 区から紺色のガラス小玉（９）が出土した。

台石　SC044（4b 区）から台石と思われる安山岩製の扁平な大型円礫片が出土した（25）。上面は平滑で僅かな浅い溝状の窪みが数条認められ、裏面は平滑ながら小さな剥落が著しい。板状の河原礫を素材として周囲は打ち欠き整形している。表面の平滑面は河川の流水や砂粒で研磨された可能性もある。

（４）奈良・平安時代の石製品　［図版 99・PL37］

当該期と断定できた石製品はなく、当該期の遺構から石錘、砥石と思われる石片が出土した。

石錘　SK356（１区）から出土した（37）。楕円の扁平円礫側縁の相対する短軸側縁に打撃によるＶ字形の抉れと相対する剥離面があり、それと直交する長軸頂部の相対する位置に敲打と思われる弱く浅い窪みがある。上下の広面は比較的平滑で研磨されており、形状から石錘と考えたが、平安時代のものとも言い切れず、運び込まれた円礫内に混入していた可能性もある。

（５）中世の石製品　［図版 97～99・PL36・37］

中世と考えられる石製品は石擂鉢等の製品、中世後期に多用される多孔質安山岩製品と、中世と断定できないが中世遺構出土の凹石、加工跡のある軽石製品、円礫、研磨礫、台石とみられる礫にも触れる。

石擂鉢　SD023・065・129（近世）と１区１面検出面出土の４点で、いずれも多孔質安山岩製である。図示をした 35 は内面が比較的平滑で、外面に整形時の斫（はつ）り痕が認められる。SD065 出土品は口縁部近くの外側面破片であり、SD023 出土品は内面にノミによる整形痕を残す未成品の可能性がある。１区１面採取品は口唇部を水平に整形した口縁部の小片である。

砥石　中世遺構の SK001（１区）から凝灰岩製（29）、SK002 から砂岩製砥石（30）、SD009 から泥岩製で研磨面の裏面が剥落した破片１片が出土した。29 は凝灰岩製の板状砥石、30 は粗い砂岩製板状の砥石で、上面は研磨で幅広く浅いＵ字形に窪み、裏面と側面も研磨されるが、研磨が弱く斫（はつ）り痕が残る。類似した砥石に近世溝跡出土の 31 があり、片側面は研磨され、もう片側面は自然面を残す。板状の砥石で、広面研磨面は浅いＵ字形に窪む。33 は１区１面検出面採取で、やや砂岩質の泥岩製で先端が三角の板状砥石で、側面も面取状に研磨されて断面形は多角形となる。ねじれた曲面を描く研磨面もあり、手持砥石とみられる。これらと類似する泥岩製砥石や幅広の板状砂岩製砥石は中世の可能性がある。泥岩製砥石は薄い板状か板状剥落片で、32 と他３点がある。

磨石　１点出土した（27）。27 は多孔質安山岩製で横断面は三角形を呈し、広面と側縁すべてが研磨された鰹節形である。磨石というより手持ち砥石に類するものかもしれない。

凹石　１区の中世遺構から２点出土した（17・18）。17 は多孔質安山岩製で円礫中央に深く研磨された凹みがあり、凹みの反対面中央に敲打痕を残す。18 も安山岩製円礫の上面が浅く研磨された凹面となり、凹みのある反対面中央に僅かな敲打痕がある。

加工痕のある軽石　中世に限定しえないが、金属による削痕や研磨痕を残す軽石製品が 3b・4a 区、4b 区、

5b 区等の調査区中央の微高地や隣接地から採取された。

その他　時期は中世以前の可能性も考えられるが、１区中世遺構を中心に拳大前後の円礫や台石とみられる礫が多く出土した。一部に研磨によるともみられる平滑面がある。石川条里遺跡は地山に礫がなく、出土する礫は遺跡外から運び込まれたと考えられる。円礫は長軸５～10㎝、短軸５～７㎝前後、厚さは３㎝前後の扁平円礫と５～７㎝前後の卵型円礫が 25 点採取された。石材は安山岩 19 点、黒色多孔質安山岩が４点、硬砂岩が２点である。台石とみられる平滑面を残す板状の大型礫には SK001（26）がある。26 はやや光沢のある平滑面があるが板状円礫で、流水等で摩滅した自然面の可能性もある。側面は僅かに自然面を残すが、それ以外は割られており、図示した裏面から側面の破断面に炭化物が付着する。

（６）近世の石製品　［図版 94-玉類 11～15・99・PL34・37］

近世遺構出土の石製品は数珠玉、石臼、砥石、火打石があり、他に近世と断定できないが碁石１点がある。

数珠玉　SM005 から５点出土した（11～15）。直径は 5.8～7.8㎜と幅があり、水晶製で扁平なソロバン玉形に近い断面形で中央の稜は丸味があって不明瞭で、上下面は平坦である。中央に直径１㎜の穿孔がある。５点と出土数が少なく、調査時の見逃しや後代耕作で喪失した可能性もあり、少数のみで綴られたものか、数珠の一部を入れたものかは不明である。

石臼　１点のみ出土した（36）。安山岩製上臼で上面と外面の一部に炭化物が付着する。

砥石　34 の他に、SD024・058・061・167（近世）から各１点の合計５点出土した。34 は青味がかった砂岩製の方形柱状砥石で、側面に鋸の切断痕と思われる痕跡があり近世と判断した。

火打ち石と思われる石　石英３点、玉髄１点が出土した。

碁石（38）　白色の直径２㎝前後の扁平な円形のもので、貝製品の可能性もある。検出面出土で詳細な時期は不明である。

４　金属製品　［付表 12・図版 100～102・PL38・39］

金属製品は中世・近世遺構出土を中心に１区、3a 区、3b・4a 区、4b 区、12c 区から出土した。図示した鉄製品のなかで中世遺構出土が１～７・14～16・21～24、近世遺構出土が８～11・17～19・25、遺構外出土が 12・13・20 である。１区は中世・近世遺構が重なり近世遺構出土品にも中世の混入品が含まれると思われるが、その識別はできなかった。ただし、１区以外は近世遺構出土の金属製品は僅かなので１区の近世遺構出土品には中世の混入品がかなり含まれる可能性がある。

鉄製品　［図版 100・PL38］：釘は断面方形で頂部を扁平にたたき延ばして折り返す形態で、１区を中心に SD034（3a 区）、4b 区検出面から各１点の合計 13 点出土した（１～13）。SK012 から３点出土した以外は１遺構１点ずつの出土である。使用後に廃棄されたためか、湾曲や欠損するものが多い。全体形が窺える３が長さ 5.4㎝、10 が 7.4㎝以上を測り、少なくとも２種の規格が確認できる。

締め金具とみられる鉄製品は２点ある（14・15）。14 は板状で、15 は上端の厚さが４㎜で下端では厚さ２㎜と先端が細くなる棒状材で釘を転用した可能性がある。これらは卵型に湾曲し、いずれも内面長軸 1.8㎝前後、短軸 1.2㎝前後を測る類似した形状のため、刀子の鞘等の締め金具と考えた。鉄鏃は可能性があるものを含め５点出土した（16～20）。16 は篦被関がなく両端が尖る形状ながら鏨根鏃とみられ、17 は篦被関から茎部周辺の破片で頸部以上を欠損する。19 は雁又鏃で、18、20 は細く尖る形状から鉄鏃の茎

部の破片とみられる。鉄鍋は 12c 区北 SD190 と１区 SK156（21）から各１点ずつの２点出土し、21 は口唇部が三角に肥厚し、口縁は外反ぎみでクランク状に折れる。12c 区北出土品は湾曲する板状鉄製品で鍋の底部小片とみられる。刀子とみられる細長い板状鉄製品は７点出土し、４点図示した（22～25）。22 は腐蝕でかなり薄くなっており、23 は断面形が若干片側に湾曲する形状で刀子ではない可能性もある。また、24 は幅が広い刃部片で、25 は刀子柄とみられる。図示しなかった細長い板状鉄片は SK012・SD001・SL001 から各１点ずつ出土し、いずれも幅 2.3～2.8㎝で遺存長は３㎝前後、厚さ１～２㎜の大きさで遺存状態が悪く刀子と断定できない。

銅製品　［図版 102・PL38］：銅製品は８点あり、キセル３点を除いた５点を図示した（26～29）。このうち鍬形兜前立は別に後述する。28（中世 SD017）は幅５㎜、長さ 2.9㎜の直線的な板状銅製品である。断面は薄い若干かまぼこ形で器種は不明である。27（7a 区近世 SD138）は銅製飾り金具である。二つに折り曲げられた状態で出土したが、掲載した復元模式図のように折れを延ばすと薄く緩やかに湾曲した板状器物を覆う飾り金具とみられる。短辺端部は雲形に切り込まれ、少し内側に入った中央に孔が１つある。孔は折り曲げられた部分にかかって変形し、猪目か不明である。反対側の短辺は欠損する。側縁長辺は対象器物を覆うように短く折り曲げられる。表面には腐蝕や剥落、酸化鉄の付着で不鮮明だが、細線で縁取りされた内側に魚子文が細かく打たれる。29 は近世道路跡 SC111（12c 区北）出土で、刀子か小柄の鞘とみられ、銅板２枚をあわせて断面形は長三角を呈し、途中で折られて上部は欠損する。

鍬形兜前立　［図版 101・PL38］

出土状況　26（外）・26（内）は 12c 区北中世堀跡 SD191 出土の鍬形兜前立である。図上段の 26（外）を外側とし、下段の 26（内）を内側に入れて基部を揃えて同形のまま重ねて折り曲げられた状態で出土した。

形状　鍬形の左右の一対とみられ、いずれも広い弧を描く側が外側とみられるが表裏面は不明である。この鍬形は厚さ１～1.2㎜の銅板を用い、緩やかに弧を描く細長い板状の基部から幅広く両端を尖らせたM字形に広がる先端に続く。先端中央の切り込み近くに猪目の透かしを施す。基部は関をつくり、細くなった基部に３孔が縦に並んで開けられている。２点ともに孔の下端からの位置は上・下端孔はほぼ一致するが、２番目の孔は 26（外）と 26（内）で若干ずれ、26（内）のほうが下端に寄る。また、直線的に３孔が並ぶが基部側縁と平行せず、下端孔は弧を描く外側の幅が狭く、弧の内側がやや広くなっている。例えば、26（外）の左図では下端孔縁まで左端から 1.1㎝、右端から 0.9㎝を測り、26（内）の左図では下端孔縁まで左端から 0.8㎝、右端から 1.3㎝を測る。

材質　元素マッピング分析（2022 年）の結果、金・水銀が全面に確認され、基部を含めた表裏全面に金アマルガムによる鍍金がされていたことが判明した。

装着状況と廃棄状況　折り曲げられた鍬形を復元すると長さは 22.2㎝前後と推測される。上述の孔は鍬形台への装着のためのものとみられ、そこから表裏が判明する可能性があるとみられる。また、具体的な装着方法は明らかにできなかったが、２番目の孔は 26（外）と 26（内）で位置がずれるのは、当初のものではなかった可能性がある。仮に鍬形台へ下側孔の広い側が上にくるように装着したとすれば、弧を描く側が外側なので 26（表）の左図のみえている鍬形先端部が、向かって右側鍬形の裏面側にあたり、同様に 26（内）の左図のみえている基部が向かって左側鍬形の表面となる。つまり、出土時は向かって右側鍬形の表面と向かって左側鍬形のそれぞれ表面をあわせて（裏面を上にして）折り曲げた状態と推測される。

銭貨　［図版 102・PL39］：中世の北宋銭は１区を中心に 12 点出土し、SK001 から祥符通寶（30）、SK004・

269 から元豊通寶各１点（31・36）、SK005 から元祐通寶（32）、SK041 から元祐通寶（33・34）、SK055 から咸平元寶（35）、SK273 から皇宋通寶（37）が出土した。また、中世溝跡 SD009 から天禧通寶（38）が出土し、近世遺構の混入品では１区 SD080 から祥符通寶（39）、SM005（3b・4a 区）から天聖元寶の破片（40）が出土している。これ以外に中世渡来銭の可能性がある銭貨が SK011、SL013 から出土したが腐植と摩滅で文字は判読できない（48・49）。１区からは出土地点不明で聖宋元寶（41）が出土している。中世後期の洪武通寶、永楽通寶は出土していない。

近世銭貨は寛永通寶５点と、天保通寶（42）が出土した。SD087（１区）、4b 区出土地点不明以外は 12c 区で出土した。寛永通寶は裏面に青海波文を刻む真鍮四文銭（45）、裏面が無文のもの（43・44・46・47）がある。45 は直径 2.8㎝と最大を計るが、他は 43 が直径 2.1㎝で最も小さく、44・46・47 が直径 2.2～2.4㎝を測る。

鉄滓：合計 13 点出土した。集中出土はみられないが、１区と 3b・4a、5b 区中心に出土し、4b 区では鞴羽口も出土しており、周辺で鍛冶業が行われた可能性がある。時期は中世以後としかわからない。

５　木製品　［付表 13・図版 103～132・PL40～66］

地下水位が高い石川条里遺跡 7b・８区～12 区や長谷鶴前遺跡群等の扇状地先端付近にあたる西側調査区では水田の畦畔内芯材の木製品が遺存し、弥生時代中期後半～後期、古墳時代前期末、平安時代前期の杭や建築部材・農具類が出土した。また、石川条里遺跡１区や 12c 区の中世・近世遺構からも曲物等の木製品が出土した。以下には、石川条里遺跡出土木製品と水田域が連続する長谷鶴前遺跡群の平安時代木製品を時期別に報告する。なお、長谷鶴前遺跡群の中近世の遺構出土木製品は第４章第４節に掲載した。

（１）弥生時代中期後半～弥生時代後期の木製品　［図版 103・104・PL40・41］

SC061～063・065・067・089・101 の畦畔内芯材として木製品が出土した。これらの畦畔のなかで、7b・８区のⅧ-1 層上面検出の SC061・062・065 は、上層の弥生時代後期の畦畔基部の残存とみられるため、7b・８区の第２調査面検出遺構の木製品には、弥生時代中期後半と弥生時代後期の所産が混在する可能性がある。

農具　農具と思われるものは１・２がある。１は周囲の側縁を欠損する板材破片で、広面に部分的な削り痕が認められる。残存形状から曲柄鍬の破片と考えたが断定できない。２は図左の側縁上端と下端を欠損し、中央部と右側縁が残存する板状製品である。斜めに削られた右側縁上部側が柄装着部とみられ、形状から曲柄又鍬と思われる。樹種は１がクリ、２がコナラ属クヌギ節である。

建築部材　３～５があり、３が板材、４は先端がやや斜めのほぞ状に削り出される材である。５は先端が半円状に抉られ、その周囲も削って整えた角材状の木製品で、丸い材と組み合わせる部材とみられる。広面は割り面で右図の右縁際に若干盛り上がる部位があるが、割面の凹凸とみられる。樹種は３がモミ属、４がコナラ属コナラ節、５がサワラである。

杭　６～19 を図示した。10・18・19 は芯持丸木材の杭である。18 は側縁周囲も削られ、農具柄か建築部材の転用品とみられる。他は割材の杭だが、７・８・17 は杭先端以外の側縁にも削り加工が認められるため、建築部材等の転用品と思われる。SC061・062・065・067 出土杭の加工痕は、摩滅し詳細不明のも

のも多いが、７・13・17・18の先端の加工痕は刃先痕が隠れる刃先痕Ａ（宮原1988）とみられ、杭先端加工は金属器による可能性がある。それ以外の出土木製品は加工痕が不明瞭か、僅かな残存で加工工具（石器・金属器）の識別はできなかったが、先端部を欠損する16以外の大部分は先端部が鋭角で、削りの単位も長いものも多く、金属器による可能性は高い。樹種はモミ属が僅かに含まれるが、広葉樹主体で古墳時代前期末と同様である。樹種は６がヤマグワ、７・12・15～19がコナラ属クヌギ節、８がモミ属、９～11・13・14がクリである。

（２）古墳時代前期末の木製品　［図版105～114・PL42～50］

９区を中心に調査第１面のSC106・107、SX002等から出土した。畦畔内の芯材は横材の遺存が悪く少ないため、杭を中心に掲載した。

農具　20・21・159の３点出土した。20は直柄横鍬で泥除けを装着する紐孔をもつ。類例は榎田遺跡にあり、形態・規格、出土遺構の時期も類似する。21は曲柄二又鍬の片側刃部先端片とみられる。上部外側縁側に圧痕と思われる窪みが認められる。159は出土時に刃部に２か所逆Ｖ字形の削り込みをもつエブリと捉えられた板状製品で、遺存不良で取り上げ時に砕片に割れたため写真のみ掲載した。残存部に柄の装着孔は認められない（PL42）。エブリは石川条里遺跡高速道地点では古墳時代前期以後には出土していないが、榎田遺跡に類例がある。樹種は20・21がコナラ属クヌギ節、159がエノキ属である。

建築部材　22～24を図示した。22は孔のある板材で両端は腐食し欠損する。23は周囲を削り整形された円柱状木製品で１端は水平、反対端部は斜めに削られる。柱材の転用品の可能性がある。24は端部が斜めに削られる細い板材で、広面の長側縁に沿って小円孔が認められた。孔は側縁に沿って並ぶようにみえるが、斜めで貫通せず、方向もばらばらで端部のケズリ面にも認められる。埋没時のアシ・ヨシ等の地下茎や昆虫の活動による痕跡の疑いがある。樹種は22がモミ属、23がカヤ、24がカエデ属である。

杭　多数出土したが、調査時に加工痕が明瞭で遺存良好なものを選択し、さらに整理作業で選択し25～71を図示した。杭には芯持丸木材と割材が用いられる。割材は表皮が残存せず、元材の断面形が正円とは限らないが、割材の外面が弧を描くものが多いことから丸木に近い材を用いたと推定される。そこで割材外面から元材の推定直径を出し、芯持丸木材直径との比較をした。芯持丸木材の直径は3.5～11cmであるのに対し、割材の推定直径は9.0～23.6cmの範囲である。割材の推定直径は９～14cmが多く、14cm以上では16cm前後と19～23cm前後にやや集中する傾向があるが、散在的な分布である。このうち直径９～11cmが芯持丸木材の直径と割材の推定直径とが重なる領域であり、元材の推定直径がおよそ10cm前後より大きなものは割材、それ以下は芯持丸木材のまま用いられる傾向が窺える。

また、杭先端以外の側面等に加工痕を残すものがあることから、建築部材の杭への転用が考えられる。53は先端部がほぞ状で、70も同じく先端がほぞ状で側面も削られる。67・68・71は杭先端から側面に及ぶ削りが認められ、大きさを勘案すると柱材の可能性がある。59は炭化し、側面に段状の窪みがあることから横架材と考える。47も燃えた際の窪みの疑いもあるが、形状は類似し横架材の可能性がある。側面が削られる29や外面が深く削られる49、周囲が丁寧に削られる64は建築部材の転用と推測する。なお、47・53・59・65は一部炭化し、杭に転用される以前に火を受けていることからも、杭用に切り出した材ではなく建築部材等を杭に転用している状況が窺える。

本遺跡出土の芯持丸木杭・割材の杭に転用された建築部材について、同じ長野市内の調査遺構で、芯持丸木材建築材の直径が報告されている石川条里遺跡高速道地点、川田条里遺跡、榎田遺跡の出土例を参考

に推察する。３遺跡の報告で、芯持丸木材建築材とされる部材は垂木と柱材、僅かに梁材・小屋組材・横架材がある。出土例が多い垂木には直径４～９㎝、柱材には直径９～22㎝の丸木材がある。本遺跡出土品と比較すると、垂木材の直径値には本遺跡の芯持丸木材がほぼ一致し、柱材の直径値には割材の推定直径が重なることから、本遺跡出土の直径3.5～11㎝の芯持丸木材は垂木を、推定直径9.0～23.6㎝の割材は柱材を転用した可能性が考えられる。なお、樹種は33がサワラ、42がカツラ、52がケンポナシ属、26・29がヤマグワ、25・32・40・41・46・47・49・58・65・71がコナラ属コナラ節、31・35・36・45がコナラ属クヌギ節、30・34・38・56・57・60・62・63・66・69・70がクリ、27・28・37・39・43・48・50・55・61・64がモミ属、44・51・53・54・59・67・68がカヤである。モミ属・カヤは建築部材の樹種と共通する。このうち芯持丸木材はカツラ・モミ属全てと、25・29・31・35・45・57・65・71である。

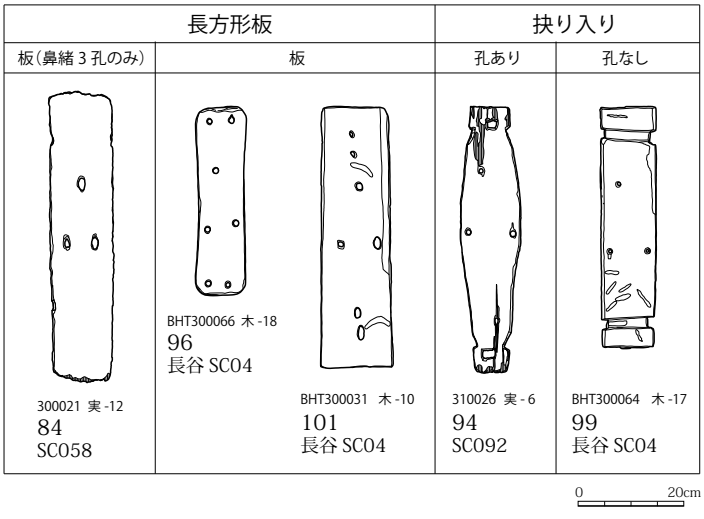
（３）平安時代の木製品　［図版115～132・PL51～66］

水田面が良好に遺存した石川条里遺跡11区、12区と長谷鶴前遺跡群１区で木製品が数多く出土した。大部分は畦畔内の芯材に用いられたもので、水田面では長谷鶴前遺跡群１区東部の耕作放棄地とみられる泥炭堆積地点から田下駄が若干出土している。芯材は畦畔の一部に集中的に入れられ、その年代は条里型地割内であることから、条里型地割施行以後～９世紀末の洪水被覆までのおよそ９世紀代が主体である。ただし、長谷鶴前遺跡群SC11芯材は一部が非耕作域の古い畦畔SC15に向かって延びていて、平安時代以前のSC15に伴う芯材も含む可能性がある。

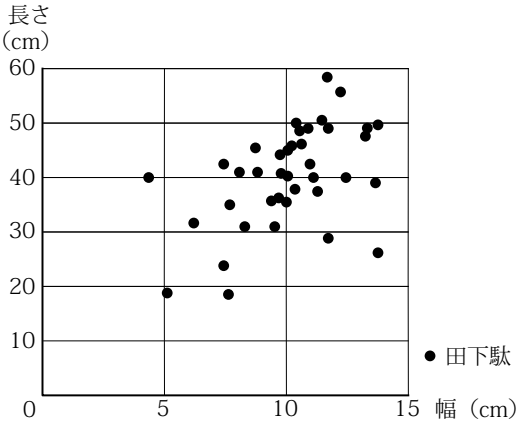
木製品の樹種はサワラやモミ属等の針葉樹が中心で、異なる畦畔の内芯材でも同樹種が多い傾向が認められる。多く針葉樹が選択的に用いられているとみられる。芯材に転用されたさまざまな器種の木製品に同樹種が認められ、このことは樹種による製品の器種認定が難しいことも示している。また、杭やみかん割の放射状割材が少なく、板材が多い点は古墳時代以前の木製品と異なる特徴とみられる。

農具　田下駄（72～107）がある。破片であるが、108～111も後述する抉り込みや孔が認められるので田下駄の可能性がある。田下駄は平安時代前期水田跡の畦畔内から出土したものが大部分で、106・107は耕作放棄地となっていた長谷鶴前遺跡群東部の水田面から出土した。

形状は縦長の長方形板の中央に鼻緒孔３孔を配し、両短辺端に枠材を固定した、あるいは紐を掛けたとみられる孔や抉りの加工をもつ。平面形は長方形のものと、長方形の長側縁両端に抉り加工をもつ細身



第21図　石川条里遺跡出土の田下駄の分類



第22図　田下駄の法量

のものに大別され、長方形は角のある形状が多いが、隅を斜めや丸く整える形状（80・95・96・99・102・105・107）もある。こうした全体形の長方形と長側面端部に抉り加工をもつ平面形の違いに加え、両短辺の中央縦もしくは四隅に配される孔の有無や配置から、第21図に示した４タイプに分類できる。

大きさは第22図にあるように、長さ約35～59㎝、幅約９～14㎝前後で、なかでも長さ約35～50㎝、幅９～12㎝が中心である。このなかで長辺両端に孔や側面の抉りを持たない鼻緒孔のみのタイプ（83・84）は約55・58㎝と長い傾向がある。また、幅13～14㎝の幅広の田下駄（102）には曲物底板転用品が含まれる。鼻緒孔は中央より若干先端側に寄って３孔配置されるが、その位置は足を置いた際に踵周辺が板の中央に位置するように設定されている。鼻緒孔は、直径１㎝前後の円形孔から長軸６㎝前後の楕円形のものまであるが、後者は腐食や使用時の摩耗で拡大した可能性がある。穿孔工具痕等は摩滅し不明である。

平面形が長方形で鼻緒孔３孔のみのタイプは３点がある（83・84・90）。このタイプは比較的長辺が長い傾向があり、部分的に遺存する76・79も鼻緒孔の位置から長さ60㎝前後と推定され、このタイプとみられる。84の側縁には相対位置に若干窪みがあり、紐等を掛けた圧痕の可能性がある。

平面形が長方形で短辺両端隅に孔をもつタイプは12点がある（75・80・82・91・95・96・99・100～102・104・105）。106・107・111もその可能性がある。このタイプは隅近くに各１孔ずつ計４孔配置するものが多く、各隅に近接して２孔ずつ並列するタイプ（82・95）や短辺両端中央に縦に孔が並列するタイプもある（100）。また、102は孔間を繋ぐような窪みがあり、いずれも短辺端２孔を繋ぐように紐が掛けられていた痕跡とみられる。105も孔を横断するように同様の窪みがある。107は短辺の片端両脇に２孔と１孔が相対する位置し、反対端部に孔はみられない。長辺側縁端部に抉りをもち、隅孔がないタイプは６点がある（86・87・89・94・97・98）。109・110もその可能性があるが、110は抉りの反対側が削られており、田下駄を別器種に転用したか、田下駄以外の器種の可能性も残る。97・98は端部に横断するように溝を彫り込み、反対面に未貫通のほぞ穴があることから、類似した転用材を用いた左右セットとみられる。裏面の溝は輪かんじき形田下駄の横材をはめ込む造作か、側板をはめ込む溝をもつ桝形木製品等を転用した痕跡と考えられる。ただし、桝形木製品としてもほぞ穴は外面に位置するので内側の把手をはめ込むほぞ穴とはみられない。

長辺側端部に抉りをもち、四隅に孔をもつタイプは３点ある（85・92・93）。85は孔２孔がややずれて並び、輪かんじき型の枠材か横材を固定する紐孔かもしれない。92・93は端部中央に孔１孔のみあり、92は片側のみ、93は両端にある。形状の類似から左右のセットとみられるかもしれない。

上記のタイプのなかで長方形の鼻緒孔のみの田下駄は、組み合わせる他部材の有無は不明だが、両端に孔や抉りのある田下駄は環状の枝材等を組み合わせた輪かんじき形田下駄とみられる。今回の調査では確認できなかったが、高速道地点では輪かんじき形田下駄の枠材の可能性がある木製品として、横材ともみられる両端側縁に抉りをもつ細い板状の有頭状木製品と、弓状木製品の直径２㎝以下の湾曲した枝材が報告されている。長さ40～60㎝有頭状木製品、長さ120㎝前後弓状木製品は、本遺跡の田下駄サイズで想定される円形枠材とすれば数値はほぼ一致する。

破片で出土したために形状が不明なものは、10点ある。（72～74・77～79・81・88・103・108）。74は鼻緒孔近くに紐を括る孔か抉りか不明な造作がある。

また、転用材の田下駄は上述の97・98以外に、端部に側板付設の段差のある101、線条痕のある102、樋状の104がある。101は曲物底板から俎板の転用、102は端部が若干丸味あるので曲物類の底板等の転用と考えられる。転用の痕跡のない田下駄も、木芯部を含まない直径40㎝以上の木材から切り出した板材を素材としていること、建築部材と共通する樹種（サワラ・モミ）が含まれること、93・83のように表面が削られていること等から建築部材転用の可能性が高い。

建築部材　他材と組み合わせるほぞ穴やほぞ、側面に抉り込みの欠込等の部材を組むための加工がある比較的大きめの材を建築部材と捉えた（116・118～120・127・130・132～134）。完形に近いのは 133・134 の２点のみで、多くは部分的破片だが、部材を組むための加工のある材のなかで遺存長が最も短い 116 がおよそ長さ 60㎝であり、目安として 60㎝以上の破片は建築部材の可能性を考えた。

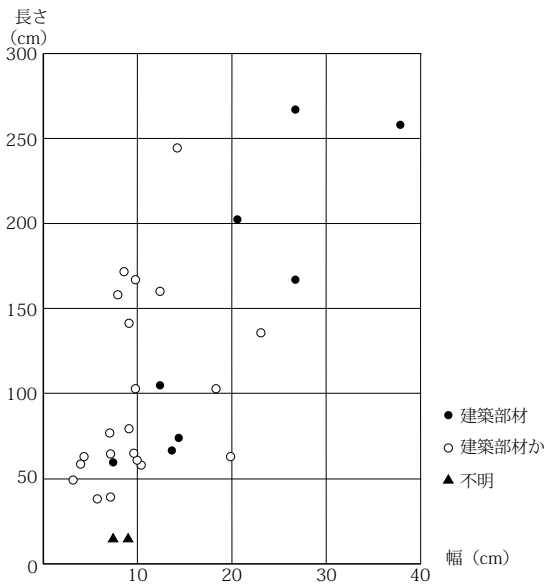
以下に個別の所見を記述する。116 はほぞを削り出し、狭い側縁に欠込とみられる浅い抉り加工がある角材で、118・119 は端部に１孔ほぞ穴が開く板材である。120 は２孔並列する枘穴が約 40㎝間隔であけられている。両端が遺存せず全長は不明で、ほぞ穴は大きくその間隔が狭いが、横架材とみられる 132 と同様に、横架材の可能性がある。横架材とすれば、屋根の小屋組内の二重梁等の上下の異なる材を繋ぐ中間材か、直径（幅）40㎝の材で先端のほぞ２本もつ材と接続する材と考えられる。127 は側縁に欠込がある横架材と考える。130 は図左の左側面に浅いほぞ穴４孔と右側面に３孔もつ角材である。図の左側面に 40～50㎝間隔、右側面に 78㎝間隔のほぞ穴を穿ち、図の正面上方にほぞ穴１孔がある。ほぞ穴は何れも未貫通で、長さ５～６㎝、厚さ３～５㎝の大きさで細材を差し込む造作とみられる。ほぞ穴の配置からＴ字形に３方向へ延びる材を組み合わせる材とみられるが、横架材か縦材かは不明である。132 は側面に若干丸みのある欠込、広面に 54㎝間隔の方形ほぞ穴が２孔あり、横架材とみられる。他に直径 1.5㎝ほどの斜めに入る小円孔が認められるが、孔は斜め方向に未貫通で配置も不規則で廃棄後の昆虫やアシ・ヨシ等の地下茎による痕跡の可能性がある。上記の建築部材で複数のほぞ穴が認められる材のほぞ穴間隔は、120 が 40㎝、130 が 40～50㎝と 78㎝、132 が 54㎝、間隔といずれも狭い。133・134 は両端が尖った長い板材で、同じ SC11 内で近接して出土し、形状も規模も類似する。いずれも片側端部を欠損するが、残存端部は三角に尖らせ長さは 2.2～2.5ｍほどである。なお、133 は先端が欠損する周囲に孔状の窪みがみられるが孔とは断定できない。２枚セットとも断定できないが、規模から建築部材とみられる。類例は榎田遺跡で矢板等に加工した壁板と報告された木製品３点がある。本遺跡の 133・134 と長さ幅も類似し、類例が複数あることから本来からこの形状の製品である可能性がある。

建築部材の可能性のある不明材　上記以外に板状、角材状の加工痕は判然としない木製品が多く出土した。端部を欠損するため本来の長さは不明で、60㎝を下回るものもあるが、建築部材と類似する長さのものもあり、樹種はサワラ・モミ属等の建築部材と同種を用いる。建築部材を分割、もしくは転用した材の可能性がある。用材は芯持丸木半截材が１点と、割面からなる板状・角材がある。芯持丸木の半截材 123 は直径 5.5～６㎝前後の丸木材を半截し、表皮側に節が抜けたとみられる孔がある。樹種は広葉樹のコナラ属で割面からなる板材・角材と異なる。次に割面からなる板状・角材だが、サワラ・モミ等の針葉樹を多用し、割面は比較的凹凸がないものの加工痕が少ない。

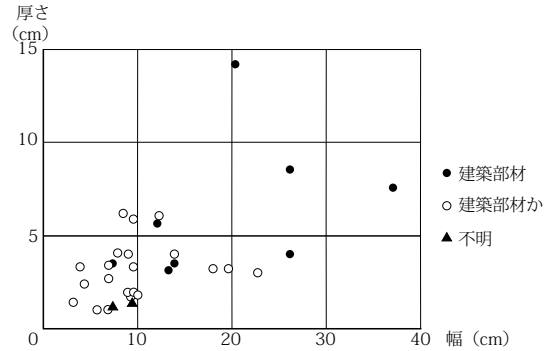
建築部材の厚さについて榎田遺跡では建築部材板材の厚さは建物内の加重の掛かり方に関連すると推測されている（伊藤 1999）。本遺跡出土材でも用途を考察するために、建築部材やその可能性がある部材の断面形状の厚さを中心に幅―厚さ、幅―長さの比較を試みた（第 23 図－２）。幅―厚さの比較（第 23 図－１）では、厚さは 1.0～1.9㎝、2.4㎝、2.7～4.1㎝、5.6～6.1㎝前後に集中域が認められる。

厚さ 1.0～1.9㎝の不明材は７点が該当する（117・112・135・136・138～140）。このグループは遺存幅 3.3（112）～10.3㎝（139）で幅平均値は幅 7.8㎝である。遺存長は 36.7（138）～78.5㎝（135）で、平均遺存長は 54.7㎝を測る。形状は 112 が角材、他は板状である。厚さ 2.4㎝の材は１点（114）で、幅 4.4㎝、遺存長は 62.0㎝の角材状材である。これらの材には部材同士を組むための加工はない。厚さ３～4.1㎝前後の材は、14 点が該当する（113・115・116・118～122・124・126・128・131・134・137）。建築部材（116・118・124）が

含まれるグループである。幅は削り等の加工痕がないため本来の規模が不明なものばかりだが、遺存幅3.9（115）～26.5㎝（134）まであり平均幅は15.1㎝である。遺存長は57.1（115）～266.0㎝（134）まであり、平均遺存長は114.2㎝と長い。その遺存幅・長さ平均値は厚さ1.0～1.9㎝・2.4㎝の材平均値の約２倍にあたる。なお、113は断面三角だが、本来の形状か不明である。また、121は端部と中央付近に列状小孔があり、糸の綛を巻き取る綛（かせ）かけと報告されるものに類似するが、石川条里遺跡高速道地点出土例と比較すると、孔間隔や配置が異なることに加え、中央に軸孔がないので本例の全長は遺存長の２倍以上の130㎝以上と推測され、大きすぎると思われる。従って、小孔は植物地下茎による浸食によるもので、この木製品は綛（かせ）かけではないと判断した。



1　幅と長さ分布



2　厚さと幅分布

第23図　建築部材・不明木製品の法量

厚さ5.6～6.1㎝の材は６点が該当する（125・127・129・130・132・133）。このうち127・130・132・133を建築部材と捉えた。これらの建築部材を含めた幅は12.2（127）～37.5㎝（133）まであり、平均は19.2㎝である。遺存長は103.5（127）～258.5㎝（133）で平均177.9㎝である。全体的に幅広で長いものが多く、断面形状は長方形の角材状、板状がある。上述した丸木半截の123もこのサイズには含まれる。125は端部に僅かに低く削り込まれたような削りがあり、枘穴か欠込の可能性がある。また、129は芯が空洞にみえるが腐植によるとみられる。

上記の建築部材やその可能性がある木製品の厚さ比較では、厚さに比例して幅が広く長い大型材となる傾向が認められ、厚いものほど残りやすい傾向を現すともみられる。また、一定の厚さに集中域が認められ同じ材を分割した可能性もあるが、榎田遺跡の古墳時代建築材では加重のかかる部位の材は厚い傾向と捉えられている（伊藤1999）。これに従えば建築部材の厚さは、用いられる部位の違いを現すと考えられる。榎田遺跡の分類では壁板材は厚さ平均1.7㎝、床板・台輪は厚さ平均4.3㎝とされ、本遺跡例を対比すると上記の幅１～２㎝前後が壁板材、幅３～４㎝前後が床板とみられる。厚さ5.6～6.1㎝は該当するものがないが、床材や軸組に係る部材となるだろうか。

これらの建築部材やその可能性のある材は集落の建物廃材を利用したと思われるが、これまで県内の平安時代集落遺跡では柱穴がないものや礎石のある竪穴建物跡、多様な掘立柱建物跡が知られ、東北では平地建物跡（土台建物跡）も確認されている。多用な構造の建物跡が想定されているが、建築部材の出土例が少なく比較検討しにくく、本遺跡の出土建築部材も具体的な建物種や部位を明らかにできなかった。ただ、出土した建築部材やその可能性がある木製品は板状材が多く、その樹種は針葉樹に偏る傾向がある。これは板状材を多く必要としたため、板材が取りやすい針葉樹を多用した結果で、このことから柱を用いず、板壁で屋根を支えるような板材を多用する建築の廃材を用いた可能性も考えられる。

杭　143～148 を図示した。先端を尖らせた棒状材を杭としたが、今回の調査でみつかった平安時代の畦畔では杭の打設は少なく、出土時に打設されていたのは 148 のみである。他は畦畔内の横材に混在して出土した。直径は３.0～6.5㎝で、本来の長さは不明ながら遺存長は約 23～163㎝。木取は 144・147 が割材、他は枝材・芯持丸木である。147 は放射状のみかん割で、144 は更にその両端を割った柾目材である。146・147 は遺存長が長く建物の壁塀等の木舞かもしれない。

容器類　曲物底板とみられる 149～152 がある。平面形は楕円形（149・150）、円形（151・152）の２種がある。149 は端部にカキゾコとみられる段差があり、線条痕もあることから俎板に転用されたとみられる。150 は縁に沿って段差をつくるカキゾコの曲物底板 1/4 ほどの破片で、周囲に紐綴の孔が並び、使用された樹皮が僅かに残存する。破損した端部内側にも孔があるが、カキゾコを伴わず側板を綴るものではなく転用時か修復時の孔と思われる。線条痕があることから最終的に俎板に転用されている。151 は段差のないクレゾコとみられるが、樹皮紐孔や目釘がみられず、蓋かもしれない。152 は側板を固定する段差を作り出すカキゾコで、側板固定の目釘は認められず、中央を通る中軸線と直交方向の４カ所の縁に側板固定のためとみられる小孔がある。また、線条痕と中央に蓋のつまみを設置する孔とも思われる孔があることから曲物底板から俎板・蓋へ転用したものと考える。このように転用品が多く、田下駄 101 も曲物底板の転用とみられる。

（４）中世・近世の木製品　［図版 132-153～156・PL66］

中世・近世の木製品は１区の井戸跡および 12c 区の溝跡から出土した。容器類（153・154・156）のうち、153 は曲物側板で、若干重ねを含む側板を２枚重ね、相対する位置にそれぞれ樹皮で綴る。内面には曲げのための浅い切り込みが無数ある。154・156 はクレゾコの曲物底板とみられる。いずれも目釘はないが、156 は側面わきに小孔が認められる。155 は 156 と共に、近世末の塩崎用水より下部の溝跡 SD189 から出土した漆器椀で、内面に赤漆が塗られ、外面の漆膜は剥落するが、僅かな残片から黒漆に赤漆で文様を描いていたとみられる。

第４章　長谷鶴前遺跡群

第１節　遺跡の概要

長谷鶴前遺跡群は篠山山麓に形成された崖錐地形や扇状地に立地する遺跡で、東側は石川条里遺跡と接する。かつては鶴前遺跡、立町遺跡、戸部間遺跡、会下平遺跡、観音下遺跡等の小規模な遺跡が点在していたが、現在は市教委により長谷鶴前遺跡群としてそれらを大きく括られている。遺跡の時期は地点別に異なるが、縄文時代～中世の遺跡があり、これまでに鶴前遺跡、鶴萩七尋岩陰遺跡等のほか、本遺跡群と一部重なる地点が石川条里遺跡宮前地点として調査されている。

鶴前遺跡では弥生時代後期、奈良時代、平安時代の集落跡が確認され、石川条里遺跡の宮前地点でも弥生時代後期の竪穴建物跡が確認されている。これにより本遺跡群北部は水田遺跡の石川条里遺跡を臨む山際に立地する集落遺跡であることが明らかにされている。また、本遺跡南部には八幡宮古墳、東谷古墳等の後期古墳が含まれるとともに、隣接する山麓の上方にはいくつかの古墳群が存在する。また、鶴萩七尋岩陰遺跡では古墳時代に葬送の地として利用されていることが発掘調査で確認されている。

今回調査対象地は本遺跡群南部に位置し、調査歴がなく、遺跡の様相は不明な点があった。今回の調査によって遺跡群南端部については、平安時代までは低地が山際まで続き、中世後期には開発が進み居住が始まると共に、山手からの堆積土が増加し、さらに人為的造成が加わって低地より若干高い地形に変化していたことが判明した。

また、今回の調査では幕末から明治時代に存在したといわれていた長谷焼の工房跡も確認することができた。検出した遺構の種類と数量は、以下の第 24 表に示した。このうち、第５調査面については、石川条里遺跡の水田跡の広がりの一部と捉え、第３章で本遺跡群についても記している。

第 24 表　長谷鶴前遺跡群の時期別遺構検出数

遺構名 ＼ 時期	掘立柱建物跡 工房跡（ST）	水田跡		道路跡（SC）	居館堀跡（SD）	溝　跡（SD）	土　坑（SK）	集石遺構（SH）	畝状遺構（SL）
		水　田	畦　畔（SC）						
平安時代　（第５調査面）		1	16						
中世　（第４調査面）			2	1	1	3		1	
中世～近世　（第３調査面）	1			1	1	37	282	1	1
近世末～近代（第１・２調査面）	1					11	107		
合　計	２棟	１面	18 条	２条	２条	51 条	389 基	２基	１面

第２節　調査の概要

１　調査の方法

（１）発掘調査の方法

ア．調査区とグリッドの設定

調査は県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センターが統一的に調査を行うために作成した「発掘調査の方針と手順」に則して実施した。

遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は、長谷鶴前遺跡群（ＨＡＳＥ　ＴＳＵＲＵＳＡＫＩ）「ＢＨＴ」である。遺跡記号は、調査記録の便宜を図るため、遺跡名を大文字アルファベット３文字で表したもので、１文字目の「Ｂ」は長野県内を 10 分割した長野市・千曲市・上水内郡・埴科郡の地区を示し、２文字目、３文字目は遺跡名のローマ字表記の２文字を選択したものである。

調査区・グリッドの設定と略称　［第５図］

グリッドの設定については、第３章第２節１に記した。調査区は市道を境に、東から西へ１区から３区までの３地区を設定した。2018（平成 30）年度に調査を実施した２区の市道下については、２区（市道下）とした。なお、長野市の遺跡範囲では１区、２区が石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群の境界にあたるが、2016（平成 28）年度の長野国道との協議により、長谷鶴前遺跡群として調査を実施することとした。また２区南東部は長野市の遺跡範囲からは外れるが、遺構を検出したため、2017（平成 29）年度の協議により、遺跡範囲外についても調査区を拡張して調査を行うこととした。

イ．表土の掘削と遺構の検出　［第 24 図］

はじめに重機によりトレンチを掘削し、土層堆積状況、遺構検出面の確認を行った。次に重機で表土を掘削し、前述のようにグリッドを設定して、人力で遺構検出を行った。本遺跡では、遺構調査面を５面確認したので、上位の調査面の調査が終了した後、下位の調査面までの間層を重機により掘削する、という手順で調査を行った。遺構検出の際、出土した遺物は包含された層位名、またはグリッド名、あるいは帰属遺構名を付して取り上げた。

本遺跡の遺構調査面は５面を数える。各面で検出した遺構の時期としては、第１調査面は近代遺構（３区陶器製作工房跡）、第２調査面は近世末から近代の遺構（２区）、第３調査面は中世の整地上面（２区道路跡・側溝跡）、第４調査面は整地層下面（２区中世の水田跡）、第５調査面は平安時代の水田跡である。

なお、３区の陶器製作工房跡は、幕末から明治時代にかけて長谷地区で営まれた「長谷焼」（『塩崎村史』1971）を生産した窯跡に伴うと考えられるため、本書では長谷窯工房跡という呼称を用いた（柴田 2020）。年度別の調査の概略は以下のとおりである。

2017（平成 29）年度

山側の３区で、幕末から明治時代にかけて操業していた長谷窯の工房跡を検出した（第１調査面）。並行して、２区の近世末から近代の遺構（第２調査面）と道路跡とその側溝（第３調査面）、中世の水田跡（第４調査面）、平安時代の水田跡（第５調査面）の調査を行った。また、１区は地元で「蓮田」と呼ばれる低湿地で、出水が激しかったため、トレンチ掘削による確認調査のみを実施し、第５調査面で平安時代の水田跡が遺存することを確認した。

長野市都市計画図（1：2500）『91-3』『01-1』を使用

第 24 図　長谷鶴前遺跡群　年度別調査範囲図

2018（平成 30）年度

１区の第５調査面の調査で、平安時代の洪水砂層の下から、泥炭層に被覆された水田跡を検出した。２区（市道下）の調査では、２区の第３調査面～第５調査面に対応する調査面を設定し、遺構検出を行った。検出した遺構のうち、第５調査面の平安時代の水田跡については、石川条里遺跡で検出した水田跡の広がりの一部として捉え、本遺跡に関する遺構等の所見は第３章第２節に記した。

ウ．遺構調査

遺構名については、第３章第２節１に記したもの以外に本遺跡で用いた記号を記す。

SH：石が面的に出土するもの。

集石遺構（SH）は、検出面で平面形状を確認後にサブトレンチで断面の形状や集石の厚さを確認し、土層断面の記録後に、全体を記録した。

遺物は遺構ごとに層位を分けて取り上げ、出土地点の必要なものには遺構ごとの遺物番号を付して取り上げた。終了した調査面は、下層の遺構・遺物の有無を確認するため、重機による深掘りを行った。なお、調査区土層断面からは、科学分析を行うことを目的に土壌サンプルを採取し、プラント・オパール分析、花粉分析、放射性炭素年代測定（AMS）、土壌分析などを実施等した。溝跡等からの出土骨については、専門家による鑑定指導を受けた。

エ．記録作成

第３章第２節１と同様である。

（２）整理作業等の方法

ア．整理作業

遺物の整理

ブラシを用いた水洗作業後、取り上げ袋ごとに台帳登録をした。土器・陶器・磁器・土製品は微細な資料を除き、全て注記した。石器・石製品・木製品は管理カード（またはラベル）を添付した。遺跡名は遺跡記号 BHT、出土地点は以下の表記を用いた。

検出面：検　第２検出面：２面　表土：表　表採・排土：Ｚ　トレンチ：Ｔ　かく乱：カク　壁：カベ　埋土：フ

土器・陶器・磁器は、遺構別、グリッド別に分類し、遺構の時期決定など資料化が必要なものを抽出し、管理台帳を作成した。土製品・石器・石製品・木製品は、器種分類し報告書掲載遺物を抽出し、管理台帳を作成した。金属製品は、発掘調査後はシリカゲルを入れた密閉容器に保管し、その後報告書掲載資料を抽出し管理台帳を作成した上で、応急的保存処理を実施した。遺物の実測は手実測により行った。

出土骨は、土砂取りや水洗・乾燥後、鑑定指導を受け、必要な資料については写真撮影を行った。

遺構図・写真の整理

第３章第２節１と同様である。

イ．報告書の作成と資料収納

第３章第２節１に記した。

２　基本層序

（１）土層の概要

今回の調査では遺跡周辺の土層や遺構の既存情報がないため、調査区内の土層と遺構面を把握するトレンチ掘削から着手した。トレンチ調査の過程で複数の遺構面が確認され、その都度トレンチを追加掘削しながら土層を把握し、全体の様相が把握できたのは調査の終盤となった。また、下部土層は石川条里遺跡から続くことが判明したこともあり、整理作業で改めて基本土層をまとめなおした。

長谷鶴前遺跡群の土層概要は、最下部に低湿地性の泥炭・灰白色粘土層互層のＸⅤ層（ＸⅣ層）があり、その上に石川条里遺跡から続く弥生時代中期後半～平安時代の水田土壌・洪水砂層（ＸⅢ～Ⅷ層）、中世水田層Ⅶ層が重なる。山際を中心にⅦ層上部には、山側から供給された堆積土Ⅵ層、居館跡関連の造成土層Ⅴ層、さらに近世以後の山から供給された堆積土層や造成土層、腐植土層のⅠ～Ⅳ層が続く。Ⅶ層以下の土層は石川条里遺跡から続く湿地性の低地に堆積した土層群だが、Ⅵ層以後は千曲川系堆積物がみられなくなると共に、山からの供給された土層が増え、併せて人為的な整地層も加わっている。

上記の土層の様相から長谷鶴前遺跡群の現地形は山際の崖錐地形と認められるが、元々は崖錐地形に伴う堆積土層は山際の狭い範囲にとどまり、大部分が千曲川から供給された堆積土層と湿地性の泥炭層が山際まで連続していたと捉えられる。その後、山からの供給された暗褐色・黒褐色の腐植土層基調の土層群や崩落土の堆積、整地土層が加わることで山際が広く高くなり、現在みるような地形に変化し、併せて居住に関わる人間の活動に伴う造成土層や遺構が認められるようになる変遷と推測される。この土層の様相が大きく変わる境界が、第４調査面被覆土層のⅥ層、続く整地土層のⅤ層で室町時代後半頃にあたる。

なお、本遺跡１区、２区と３区下層低地内の土層は隣接する石川条里遺跡と共通するが、２区と３区の上層は本遺跡群独自の土層となるため、石川条里遺跡と異なる土層番号を付した。また、Ⅰ～Ⅵ層では複数地区にわたる整地層Ⅴ層や山からの崩落土とみられるⅢ・Ⅵ層は基本土層として捉えたが、これ以外にごく狭い範囲に分布する局所的な山から供給された堆積土層がある。これらの土層は溝跡埋土やその周辺にのみ分布する土層で基本土層に含めていない。さらにⅢ・Ⅵ層は調査区全体に均一に堆積しておらず、山際に厚く低地側は薄く、薄いところでは腐植化や上下の黒褐色層土粒が混じって黒味を帯びて上下層との識別が難しい地点もあった。特にⅢ層の黄褐色土は３区山際では明瞭だが、３区中央および２区側や市道下の調査区では黒味を帯びてⅡ・Ⅳ層との識別が難しく、中間的様相の土層も枝番号を付して分層している。また、第３調査面上面に厚い集積層がみられたが、大部分は還元傾向の土層が多く、掘削直後は灰色にみえても、しばらく空気に触れると表面が酸化して当初の色調と異なる状況もあり、同一層でも色調の表記に地点毎にばらつきを生じている。

以下に各層の詳細記す。

（２）基本土層

Ⅰ層

表土層を一括した。調査前では１区が蓮田、２区が宅地、３区が畑に利用され、場所毎に土質が異なる。１区は低地で水田の褐灰色のグライ化した軽埴土で、調査区東側の南北市道脇には現代の盛土がある。２区、３区は黒～暗褐色の粗砂を混在する埴壌土を基調とし、２区には更に宅地に係る造成土が載る。

Ⅱ層　黒褐色～暗褐色土層　腐植土層（第１調査面）

遺跡背後の山から供給された流紋岩・凝灰岩由来の粗粒砂（山砂）を混じる腐植土層を基調とし、２区では層厚を減じながら一定の層厚で連続し、２区端部付近で途切れる。３区のみ長谷窯工房廃絶以後の

陶器・素焼・窯道具類を混在する盛土層（Ⅱ-1 層)、その下に窯業関連の工房跡とその整地土層群（Ⅱ-2 層）に大別され、Ⅱ-2 層はさらに庭部分と建物基礎部分では細かく細分されたが、長谷窯工房に伴うⅡ-2 層については後述する。

Ⅲ層　にぶい黄褐色～褐色土層　山からの崩落土層（第２調査面）

山砂の多く混じる黄褐色土層で、３区北側のⅣ層上面で検出した畑跡を埋めている。層厚は３区北西側が厚く３区中央へ向かって層厚を減じていることから北西山側からの堆積土とみられる。２区も一定の層厚で認められ、本土層上面が第２調査面にあたる。２区ではⅢ層が畝状の SL01 を埋めているように捉えられたものの、東端ほど層が厚い傾向を示し、２区はⅢ層を２次的に整地した土層の可能性がある。

Ⅳ層　黒褐色～褐灰色層　腐植土層

Ⅳ層は腐植土基調で、２区、３区のⅢ層とⅤ層中世後期整地層の中間に堆積し、北側ほど厚い。３区中央付近や２区南部では、上層のⅢ層が薄く黒味を帯びることに加え、Ⅱ層とⅣ層が近接してⅡ～Ⅳ層が識別しにくかった。また、本層は単一層ではなく３区北等では上部が近世とみられる畑耕作土、２区では中世以後の道路整地土層やその側溝とみられる遺構、山からの崩落土や流水で運ばれた部分的な堆積土層を挟む。本層は２区、３区の第３調査面の中世後期の居館跡の廃絶以後から近世の耕地利用までの長い時間幅を含み、本土層中には局所的な山から供給された自然堆積層や人為的整地層が含まれる。

自然堆積層では、山側から供給されたとみられる灰白色シルト層、粗い山砂層（にぶい黄色等)、細砂とシルト（灰オリーブ色）の互層堆積等がある。いずれも狭い範囲に堆積し、雨水等によって運搬された土層とみられる。灰白色シルト層は背後の山地を構成する凝灰岩等を中心とする岩石由来の細粒堆積物とみられ、流速の遅い雨水等の水流で運ばれた土層とみられる。居館堀跡 SD40 埋土内に４枚認められ、その SD40 西端付近やその南辺際のⅤ層上面、２区中央の南北方向の SD49・50 等溝跡埋土等の調査区北西側にも分布する。２区や３区南部の山際には認められない。このうち、SD40 最下層の灰白色シルト層は SD40 南壁側にも続いており、SD40 南縁外側に分布する土層と関連するとみられる。また、SD40 を切る SD63 等の埋土中の灰白色シルト質粘土層は SD40 埋土の灰白色シルトに由来する２次的な堆積土層かもしれない。山砂層は、背後の山を構成する流紋岩等の岩石由来の粗粒砂を中心とし、やや激しい降雨等で山地表面が直接削られて溝跡等の低い場所に流入した土層とみられる。調査区南西部山際の SD038 や SD29 周辺、SD40 埋土上層に認められた。また、細砂とシルトの互層堆積は３区南東部の２区（市道下）部分で認められたが、この土層は南西山側から北東方向へ押し出した堆積土とみられ、３区南壁付近の山砂層の堆積地点に近いため、類似時期に堆積した可能性がある。これ以外に２区では整地土層中にも山砂層を挟んで数枚のシルトや細砂層が認められた。

人為的な整地層は道路跡 SC01 周辺（２区第３調査面上）や２区中央東寄りの低地境に局所的に認められた。道路跡 SC01 は SD40 埋没以後に北側に延長されたとみられるが、２区南壁の土層観察では西側に整地土を伴って造り替えられていると捉えられた。また、調査初年の平成 29 年度調査では２区北側で SC01 の造り替えに伴う側溝とみられる SD11～14・21・24・27・28 等をⅢ層上面の第２調査面で検出したが、SC01 がⅣ層の整地層を伴う盛り上がる遺構であることからも、第２調査面ではⅢ層遺構と誤認した可能性があり、整理時にⅣ層中の遺構と捉えなおした。

Ⅴ層　にぶい黄褐色～灰色粘質土層　中世の整地層（第３調査面）

２区南部から２区中央、３区北側に分布する風化凝灰岩片の混じる堅く締まった土層である。淘汰の

悪さと堅緻さから人為的に盛られた整地土層とみられる。２区では上層からの浸透した酸化鉄が本土層上面付近に集積し、２区の低地寄りではグライ化し灰色傾向となる。本整地層は道路跡 SC01 に伴う側溝 SD25・32 は整地層を伴って造り変えされており、複数回の整地面が含まれる。

Ⅵ層　灰色シルト・黒オリーブ色シルト質粘土・灰オリーブ色灰色山砂層　山からの崩落土層

第４調査面を被覆する山側から供給された自然堆積層で、山際の３区南側は山砂主体で厚く堆積し、低地側２区ではシルト質粘土層が数㎝ほどの層厚で広がり、２区途中で薄く途切れる。山際は上部ほど粒径の粗い山砂が主体で、低地側ほど微細粒になる傾向がある。南西側の山からの崩落土や降雨で山地が削平されて流入した土とみられ、本土層の上面はⅤ層の整地で埋められている。

Ⅶ層　オリーブ黒色～灰色粘土層　中世の耕土層・腐植土層（第４調査面）

第４調査面の２区水田跡耕土、２区（市道下）の道路跡や３区北部の屋敷地造成土等の第４調査面遺構の基調となる土層である。水田耕作土層は粘りの強い締まった粘土層で、灰黄褐色を帯びる土層と分層できた箇所がある。水田以外では、山際の道路跡 SC20 や SD39 に伴う屋敷地付近の地形的に高い箇所では僅かに山砂の混じる、粘りがあまり強くない腐植土系の黒味を帯びた土層となる。なお、水田耕作土層は石川条里遺跡の基本土層Ⅱ層に該当する。

Ⅷ層　褐灰色黄灰色細砂層　平安時代の洪水砂層

第５調査面の水田跡を被覆する細砂～シルトの洪水堆積層で、１区南部では下部に粘土ブロックの擬礫が混在する。石川条里遺跡Ⅳ層にあたり、石川条里遺跡 10 区まで連続して分布する。水田面上では完形の須恵器坏Ａや黒色土器鉢が出土し、平安時代前期末の洪水砂層と捉えられた。

Ⅸ層　黒色～黒褐色泥炭層

第５調査面の水田面直上を被覆する泥炭層。平安時代の条里型水田上面に堆積した薄い黒色泥炭層と、条里区画内に耕作されずに古い耕地のまま残存した非条里型水田上面に堆積した厚い黒褐色泥炭層を一括した。両者は、被覆する水田面の区画方法の違いから土層の形成開始時期と形成時間幅が異なるとみられるが、土質が類似して識別できないところもある。また、最終的にⅧ層に被覆され埋没時期は同じと捉えられることからも同一層として括った。

Ｘ層　黒～黒濁色粘土層　平安時代の耕土層（第５調査面）

平安時代の洪水砂層に被覆された水田跡の耕作土層にあたる。色調から腐植土や泥炭層由来の土層とみられ、１区の非条里型区画内では平安時代以前の旧耕土の残存とみられる黒色粘土層や灰色粘土層に分層された。石川条里遺跡のⅤ層に該当し、長谷鶴前遺跡群１区の非条里型区画の畦畔は条里型地割施工以前の平安時代以前とみられることから、石川条里遺跡と同様に古墳時代末～平安時代の耕土層と捉えられる。

ＸＩ層　灰白～灰黄褐色粘土層

上記のＸ層の下に位置し、色調や土質から石川条里遺跡Ⅴ層の古墳時代前期末の水田跡耕作土層に連続すると捉えられる土層。検出遺構はないが、本層上面の層理面には上層Ｘ層の凹凸があり、本土層の下部層理面もやや凹凸が目立つことから水田耕作による踏み込み痕の可能性がある。水田耕作土層とみられる。

ＸⅡ層　灰色粘土・黒色泥炭質土層

本遺跡における層順と、石川条里遺跡の弥生時代中期後半水田跡を被覆する泥炭層・灰白色シルト層（Ⅶ層）に特徴が類似することから、対応する土層とみられる。

ＸⅢ層　灰色粘土層

層順と上部をⅫ層泥炭質土層に覆われることから石川条里遺跡の弥生時代中期後半の水田耕作土層（Ⅷ層）に対応する土層とみられる。遺構及び遺物出土はなく詳細な土層年代は不明で、調査時には石川条里遺跡から連続した土層と捉えておらず、自然堆積層と想定していた。よってプラント・オパール分析等の分析や面的調査は実施していないので厳格には、本地点での水田耕作の存在には可能性にとどまる。

ＸⅣ層　黒色粘土層

ＸⅤ層の泥炭層・泥炭質土層・灰白色シルト層の互層群の最上部に位置し、やや層厚のある腐植土基調の粘土層。層下端の層理面は平坦で、踏み込みは認められない。水田土壌と確定できていないが、下層のＸⅤ層より厚い層厚の違いから別層として捉えた。３区の山際や１区では比較的厚いが、場所によっては層厚が薄くなってＸⅤ層との識別がしにくいところがある。上層ＸⅢ層との層境は比較的細かい凹凸がみられるものの、ＸⅤ層との下層境は平坦で自然堆積層の可能性がある。土層および堆積状況の類似から石川条里遺跡のⅨ層の一部とみられる。

ＸⅤ層　泥炭・灰白色粘土・黒色粘土等の湿地性自然堆積層

ＸⅣ層以下の泥炭、泥炭質粘土、灰白色粘土が縞状に堆積する土層群。１枚の土層層厚は10㎝前後と薄く、３区では最下部に樹木片を混じる比較的厚い泥炭層が認められた。遺構及び遺物出土は、なく、湿地性の自然堆積層とみられる。土層および堆積状況の類似から石川条里遺跡のⅨ層にあたるとみられ、放射性炭素年代測定では縄文時代後期～晩期の年代が得られている。

（３）整地層

前述の基本土層のうち、整地層と確認できたⅡ層（長谷窯工房跡 ST01 関連）とⅤ層（中世の居館跡他、問題）について遺構等の関係性等について記す。

長谷窯工房跡に係る第１調査面整地層　灰黄褐色～褐色土層

３区で確認された。範囲が限定的であることに加え、多様な土層が含まれ単一土層としてまとめにくいことから、基本土層番号を付けせず、基本土層Ⅱ層内の土層として括った。整地層は大きく長谷窯工房廃絶以後の畑地に転用した段階（Ⅱ-1 層）と、長谷窯工房操業段階（Ⅱ-2 層）に分けられる。Ⅱ-2 層は、ST01 を横断するＡトレンチ断面の観察から、①前庭部整地、② ST01 整地、③北側石列（石積）の順序が捉えられ、石列下部付近で前庭部整地土層が一旦止まっており、ST01 付近を掘り込んでいると捉えられた。当初から ST01 の位置が設定されており、ST01 と前庭部を含めて同一時期に造成されたと捉えられる。

工房廃絶以後の整地土層（Ⅱ-1 層）

３区は調査前では畑地で、工房跡はこの畑地Ⅰ層直下のⅡ-1 層（暗褐色土層）を除去して検出した。調査当初に入れたトレンチ断面ではⅡ-1 層直下の西側山際には若干還元化した褐灰色土層が一段高く分布するように認められたが、工房廃絶以後の整地土層の一部か、操業時の施設の基礎の土層か断定できな

かった。この褐灰色土層を含むⅡ-1 層は背後の山を構成する凝灰岩や流紋岩由来の石英粒や、長谷焼の陶器小片が混在する。Ⅱ-1 層下にあるⅡ-2 層褐灰色土層との層理面がほぼ水平であり、少なくともこの土層以下は前庭部の整地土層と捉えた。

工房跡関連整地土層（Ⅱ-2 層）

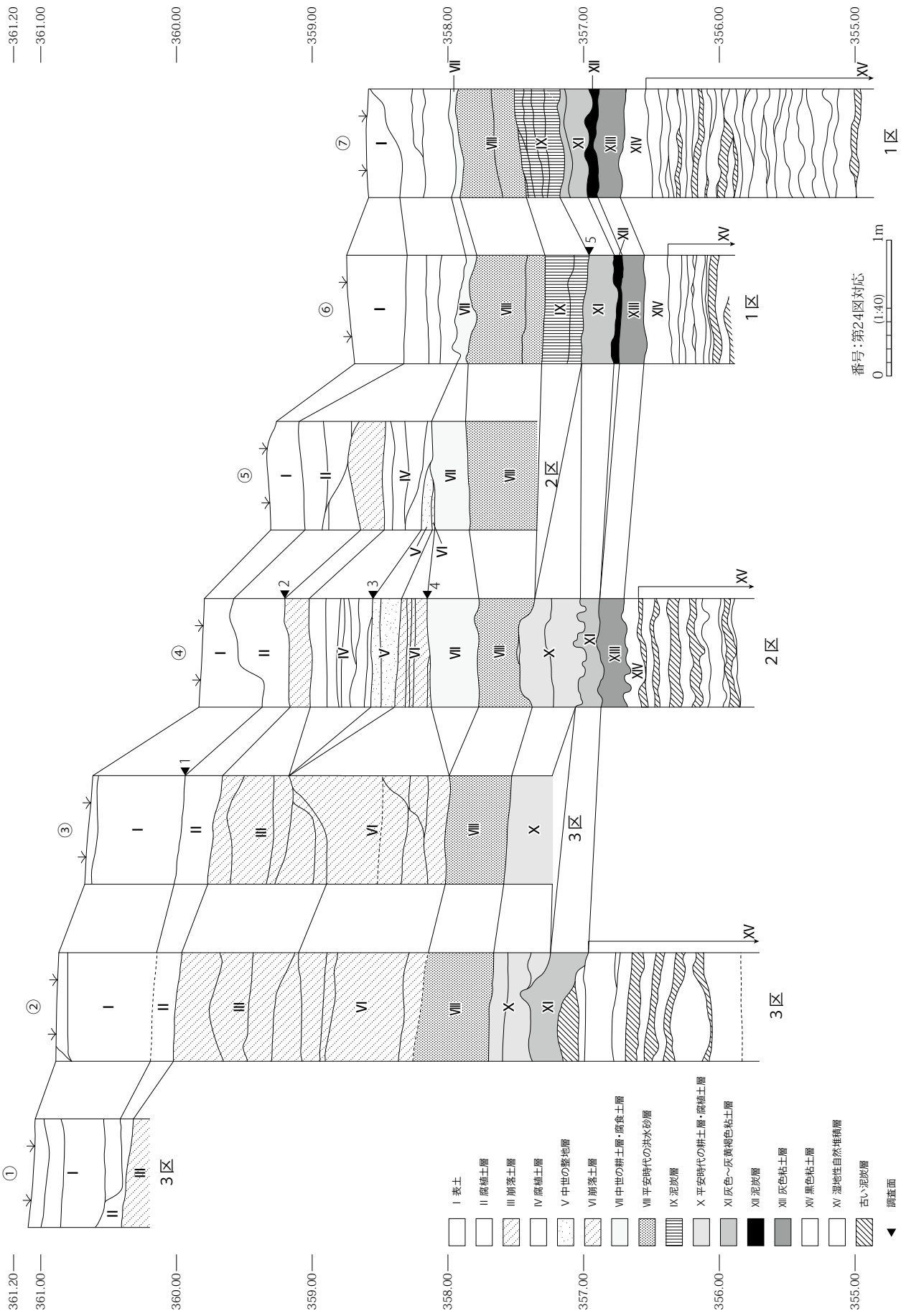
前庭部整地土層：ST01 周辺は細かく分層されたが、前庭部の大部分については詳細を捉え切れなかった。前庭部は３区中央で西側山側を削り、中央東寄りの低い場所に褐灰色土層と黄灰色土を用いて盛り土して平坦としている。３区西側は褐灰色土層を台状に盛り土したように認められる部分があるが、Ⅱ-1 層中の工房廃絶以後の盛り土作業過程中の整地土層か、工房時の施設の基礎の土層かは明らかにしえなかった。また、ST01 脇付近は黄褐色土で整地されている。

ST01 整地層：ST01 を中心に建物裏手山際までを平坦にすると共に工房の基礎をかたちづくる整地層で、ST01 北側石列（石積）を境として、検出時の高さで北側の前庭部から 40㎝前後高く平坦に造成されている。ST01 北辺の前庭側の石積、ロクロ台石は ST01 整地後に設置している。ST01 整地範囲内に入れたトレンチの土層の断面観察から、ST01 周辺は工房構築以前に存在したⅡ層や山際斜面を掘り込み、山際から順次前庭側へ盛土する、一連の作業で造成されたことが捉えられた。

その整地は、山側斜面を削平した上に ST01 裏手山側から黒褐色を基調とするⅡ層を盛り込んで裏手部分を造成したのち、ST01 にあたる範囲を礫層や山砂層、その次ににぶい黄褐色土～黄橙色ブロック土の混じる土層を山手の南側から前庭部側へ順次盛った後、その整地上面を灰黄褐色～褐灰色の山砂混じりのやや還元化した締まった土で整えている。また、ST01 の南の山側には ST01 前庭部側の石列と平行する拳大礫が集中する土層が帯状に認められ、暗渠排水と類似した方法による雨水や山からの流水を遮断する造作とも考えられたが、詳細は明らかにしえなかった。ST01 整地層上面検出面では締まった土間状と認められ、焼物材料の灰白色粘土や灰、素焼き焼物片が混じることからも生活面に近い部分が残存したとみられる。

中世の第３調査面整地層（Ⅴ層）

２区第３調査面では堀跡 SD40 で区画された居館跡や道路跡 SC01 に伴うとみられる整地土層が確認された。このⅤ層は、北端は SD40、東端は SC01 を境に大幅に層厚を減じながら一定の層厚で２区東端付近まで認められ、SD40 南側にあたる２区南部から３区の山手を中心に分布する。層厚は２区南側や３区山手側が薄く、２区西側から中央は厚く盛られている。この整地土層の分布範囲から SD40 で区画された居館跡に関連する整地とみられ、特に SC01 周辺との関係から、居館入口付近の造成に伴うものとみられる。Ⅴ層中を縦断するトレンチを入れておらず、造成方法は捉えていないが、一部２区（市道下）では数層に分層され、その分層の様相から南西側から順次北側へ盛土されたと捉えられる。また、SC01 に伴う側溝の断面観察から、SD25・30・32 ではⅤ層上面から掘りこまれる SD25a・30a・32a と中位から掘りこまれる SD25b・30b・32b が認められ、最低２回は側溝の掘り直しを伴う整地が行われているとみられる。調査区南壁の土層観察から道路跡とみられる高まりが重なっていると確認され、SC01 は居館跡廃絶以後のⅣ層中でも西側に場所を移して維持されていたとみられる。



第 25 図　長谷鶴前遺跡群　基本層序

第３節　遺構

１　中世（第４調査面）の遺構

（１）概要

２区では、中世後期（15 世紀後半）に山からの崩落土を盛土整地していて（Ⅴ層）、このⅤ層下にあたる中世の水田跡検出面（Ⅶ層上面）を第４調査面とした。第４調査面で検出した遺構、もしくは第４調査面に帰属すると考えられる遺構は、水田跡（畦畔２条）、道路跡１条、居館堀跡１条、溝跡３条、集石遺構１基である。検出した遺構の一部は、崩落土の堆積により埋没していた。２区（市道下）で検出した居館堀跡 SD59 は、第３調査面で検出した SD40 の改修前のものと考えられる。この SD59 に沿い、調査区を南北に縦断する道路跡 SC20、堀跡に接続する集石遺構 SH06 を検出した。SC20 は２区南側で北西方向へ分岐するが、３区ではその延長を検出することができず、延長線上の西壁で確認したのみである。

（２）水田跡

２区全体で水田面が遺存する水田跡に伴う小畦畔を２条検出したが、水田区画が不明のため、水田名は付していない。畦畔の西側では、山からの崩落土が水田面に堆積していた。畦畔の遺存状態は南側が良く、北側に向かって悪くなる。水田面は平坦で起伏は少なく、畦畔の周囲には畦畔と平行する足跡を確認した。プラント・オパール分析（2018 年度）では、イネのプラント・オパールが水田面で 3,600 個 /g の高い値で検出され、水田耕作土層の可能性が高いと考えられる。なお、この時期の水田跡は、隣接する石川条里遺跡では検出されていない。

SC02　［遺構：図版 133・135・PL67］

位置：２区ⅩⅣS22・23、X02・03・07・08 グリッド。　**検出**：Ⅶ層上面。SC03 北側の延長上で検出したが、高まりは僅かである。　**重複**：（新）SD40。　**規模**：方位Ｎ－１°－Ｗ。長さ 14.2m、幅 0.5～0.6m。　**構造**：北側は調査区外へ延びる。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から中世後期と判断した。

SC03　［遺構：図版 133・135・136・PL67］

位置：２区 X07・08・12・13・17・18・22・23、D02 グリッド。　**検出**：Ⅶ層上面。南北方向に伸びた黒色の畦畔状の高まりを面的に検出した。４トレンチ北壁断面では、Ⅵ層に薄く被覆された畦畔状の高まりを確認した。　**重複**：なし　**規模**：方位Ｎ－０°－Ｅ。長さ 31.6m、南端から北に 2.5m地点で分岐、西方向へ 2.2m。幅 0.4～0.6m、４トレンチ北壁で高さ 20㎝。　**構造**：断面形は南側では逆台形状。北側に向かって遺存状態が悪くなる。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から中世後期と判断した。

（３）居館堀跡

居館堀跡は、第４調査面の SD59、第３調査面の SD40、更に隣接する石川条里遺跡 SD191（12c 区）がある。第４調査面では SD59 により、屋敷地と付設された道路跡 SC20 とが区画されていたと考えられる。山からの崩落土により SD59 が埋没した後は、盛土整地が行われ、SD40 へ改修したとみられる。また、石川条里遺跡の SD191 は更にその後のものと推察する。居館の変遷については、第６章第２節１に詳細を記した。

SD59　［遺構：図版 133・134・137・PL67、土器：図版 164・PL74、木製品：図版 168・169・PL76・77］

位置：２区（市道下）ⅩⅣW05・06・10・11 グリッド。　**検出**：Ⅶ層上面。南北方向に延びる、山砂の混じる帯状の落ち込みを検出した。　**重複**：（新）SD40。　**埋土**：上層は崩落土が混じる。中層は灰色粘質土、下層は黒褐色粘質土。下層下部は泥炭で常時滞水状態であったと推察する。　**規模**：方位Ｎ－３°－Ｅ。南から北へ傾斜。長さ 9.52m、幅 2.55m、深さ 1.15m。　**構造**：南端では土橋と、西南端では SH06 と接続、北端は調査区外へ延びる。平面形はほぼ直線で、道路跡 SC20 と並走する。断面形はＶ字状。屋敷地の東側を区画する堀跡で、第３調査面の SD40 改修前の堀跡と考える。　**遺物**：埋土からカワラケ（２）、内耳鍋、種実が出土。埋土下層からシカ骨一体分が出土。最下層から田下駄（２）、蓋（７）、板材（８）、曲物の破片と考えられる木製品（９～15）が出土。　**時期**：検出層位と出土土器から、中世後期と判断した。

（４）道路跡

SC20　［遺構：図版 133・134・137・138・PL67］

位置：２区（市道下）ⅩⅣW20、X01・06・11・16・21 グリッド。　**検出**：先行トレンチで黒色土を確認し、平面精査により、Ⅶ層上面で調査区を縦断する黒色土が土手状に高まるのを検出した。分岐の延長線上にあたる３区では高まりは確認できなかったが、黒色土の範囲（図版 134 点線部分）を確認した。　**重複**：（新）SK247・250。　**規模**：方位Ｎ－３°－Ｅ。長さ 27.2m、最大幅 2.8m、高さ 0.5m。　**構造**：SD59 南端付近で西方向へ分岐、SH06 へ接続する。調査区南端で北西方向へ分岐。道路北側に向かって低くなる。北端は調査区外へ延びる。水田土壌での沈みこみ防止のため、土手状に土を盛っているものと推察する。規模が大きいことと、土手中央部に轍状の窪みが存在することから、道路跡と判断した。　**科学分析**：プラント・オパール分析（2018 年度）では、イネのプラント・オパールが土手上面から 4,800 個/g の高い値で検出され、構築時に水田土壌か稲藁が使用された可能性が考えられる。　**遺物**：南端から須恵器甕が出土。　**時期**：検出層位から中世後期と判断した。

（５）溝跡

SD42　［遺構：図版 133・134・139・PL67］

位置：３区ⅩⅣW13・14・19 グリッド。　**検出**：Ⅶ層上面。黒褐色砂質土の蛇行する帯状の落ち込みを検出した。　**重複**：なし。　**埋土**：複層。シルトの混じる砂。　**規模**：方位Ｎ－39°－Ｗ、Ｎ－23°－Ｅ、南東から北西に傾斜。長さ 11.79m、最大幅 1.68m、深さ 0.12m。　**構造**：西端・南端は調査区外へ延びる。平面形はやや蛇行し、湾曲する。断面形は逆台形状。SC20 から北西に分岐する道路の側溝と推察する。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から中世後期と判断した。

SD47　［遺構：図版 133・135・139・PL67］

位置：２区ⅩⅣS-25 グリッド。　**検出**：Ⅹ層上面。平安時代の水田に伴う畦畔 SC04 を切る落ち込みを検出した。調査区北壁断面の土層観察から、Ⅶ層からの掘り込みを確認し、本来はⅦ層上面に帰属する遺構と考える。　**重複**：なし。　**埋土**：複層。底面には細砂が堆積する。流水によると推察される。　**規模**：方位Ｎ－８°－Ｗ、南から北へ傾斜。長さ 4.41m、最大幅 0.87m、深さ 0.39m。　**構造**：南北両端は調査区外へ延びる。平面形は直線、断面形はＵ字状。水田に伴う用水と考える。　**遺物**：埋土から内耳鍋が出土。　**時期**：検出層位と出土土器から、中世後期と判断した。

SD55　［遺構：図版 133・135・139・PL67］

位置：２区ⅩⅣX-04・09 グリッド。　**検出**：Ⅶ層上面。湾曲する帯状の落ち込みを検出した。　**重複**：なし。　**埋土**：粘土の単層。検出面の水田土壌に似る。　**規模**：方位Ｎ－66°－W、方位Ｎ－16°－W、北西から南東方向へ傾斜。長さ 5.82m、最大幅 1.13m、深さ 0.16m。　**構造**：北端・東端は調査区外へ延びる。平面形は湾曲し、断面形は浅い皿状。水田に伴う用水と推察する。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から中世後期と判断した。

（６）集石遺構

SH06　［遺構：図版 133・134・139・PL67］

位置：２区（市道下）ⅩⅣW10 グリッド。　**検出**：Ⅶ層上面。道路跡 SC20 から西側へ続く土橋を確認し、土橋の西側延長部に帯状に延びる集石を検出した。　**重複**：（新）SK254。　**埋土**：黄褐色重埴土の上に礫、その上に山砂の混じる粘土。上層に盛土は確認できなかった。　**規模**：方位Ｎ－85°－Ｅ。礫を確認した範囲長軸方向 4.4m、短軸方向は 1.8m、水田面から礫頂部まで高さ 0.4m。　**構造**：集石の東側は SC20 に接続、北東部分は SD59 西南端に接続する。内部は 15～20㎝程度の小礫が充填され、粘土で裏込めされる。南側では人頭大の礫２列の面を揃えて２段に積むが、北側では面は揃っていない。屋敷地南端を区画する施設で、盛土造成時に構築された基礎部分と考える。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から中世後期と判断した。

２　中世～近世（第３調査面）の遺構

（１）概要

２区では中世後期（15 世紀後半）に山からの崩落土を盛土整地していて、その整地層（Ⅴ層）上面が第３調査面である。第３調査面で検出した遺構、もしくは第３調査面に帰属すると考えられる遺構は、居館堀跡１条、道路跡１条、溝跡 37 条、集石遺構１基、掘立柱建物跡１棟、井戸跡８基、その他の土坑 274 基、畝状遺構１面である。

２区北側では、Ｌ字形に屈曲する居館堀跡 SD40 を検出した。これは、第４調査面で検出した SD059 の改修後の堀跡と考えられる。堀跡南側では、SD25・30・32 等を伴う道路跡 SC01 を検出した。溝跡は道路の側溝であり、居館入口付近の整地に伴って、SC01 も造成されたものと考えられる。側溝跡の掘り込みからは、少なくとも２回の整地が行われ、それに伴って溝跡の改修が行われたことが分かる。北側の SD24・33・36 等の側溝跡は、堀の埋め立て後に北側へ延長された SC01 に伴うものである。

また、Ⅴ層上面で底部付近のみを検出した SD11・27・28 等は、Ⅴ層よりも上のⅢ層・Ⅳ層から掘り込まれていることから、SC01 廃絶後の道路に伴う側溝と考えられる。SC01 西側の調査区南壁では、複数の整地面をⅤ層よりも上層で検出した。SC01 廃絶後に利用された道路跡であり、SD27・28 等に対応する可能性がある。このように側溝の改修が繰り返されながら道路は西側へと移り行き、近世まで継続して使用されていたことが推察される。現在の市道は、その更に西側にあたる。

なお、掘立柱建物跡、井戸跡、その他の土坑については、遺構の重複から、SC01 よりも新しい遺構と考えられる。

（２）居館堀跡

SD40　［遺構：図版 140～142・144～146・PL68、土器：図版 164・PL74、石製品：図版 165・PL74、木製品：図版 166～168・PL75・76］

位置：２区ⅩⅣS12・13・17・22、X02、２区（市道下）W05、X01 グリッド。　**検出**：第４調査面掘削時に、東西方向に伸び、北へ折れるＬ字形の溝状の落ち込みを確認した。調査区北壁土層断面の観察から、本来の掘り込み面は第３調査面と確認した。　**重複**：（旧）SD59、SC02。（新）SD24・36・63・64。　**埋土**：上層は黄褐色山砂層、中層は灰白色粘土層、下層は黒色～黒褐色粘土層で常時滞水状態であり、中・下層は自然堆積土と考える。　**規模**：南北方向Ｎ－１°－Ｅで南から北へ傾斜、東西方向Ｎ－０°－Ｗ。長さ 37.59m。南北長 23m、東西長 16m。幅は東辺北端で 4.0m、南辺西部で 4.40m、深さ 0.80～0.98m。隣接する現在の宅地区画から推測した規模は、一辺約 50m。　**構造**：Ｌ字形に屈曲し、北端と西端は調査区外へ延びる。断面形状は外側に緩やかに広がる逆台形、底面はほぼ平坦。屋敷地を方形に巡る堀跡の南辺と東辺の一部で、居館堀跡と考える。　**遺物**：埋土からカワラケ（４）、古瀬戸天目茶碗（９）、内耳鍋（13・22）、凹石（５）、五輪塔未成品（６）、加工石（９）、木製品の三方（１）、曲物（４・６）、連歯下駄（３）、ウマ骨が出土。　**時期**：出土土器と検出層位から、中世後期と考える。

（３）道路跡・溝跡　［遺構：付表 12・第 25 表・図版 140～143・147～151・PL69・70］

道路跡は、第３調査面の平面精査で確認した SC01 と、SC01 西側の２区南壁の土層断面で確認した道路跡（２区南壁道路跡）がある。SC01 はⅤ層が整地された時期の側溝を伴う道路跡であり、SD40 に区画された方形居館に伴って、中世後期に造成されたと考えられる。一方、２区南壁道路跡は、更に新しい道路跡と考えられ、時期は中世末～近世と推察される。

検出された多数の溝跡は、全て道路跡に伴うと判断した。溝跡の時期は、SC01 に伴うものと、その後の道路に伴うと考えられるものがある。図版 147 には、道路跡 SC01 に伴う溝跡、もしくは同様の時期と考えられる溝跡を掲載した。東西両端に掘削された溝跡 SD25・30・32 等は道路側溝跡と考えられ、直交方向に浅く広がる SD029・041 は SC01 の排水溝と推察される。北側の SD24・33・36 等は、堀の埋め立て後に、SC01 が北側へ延長された際の側溝跡と考えられる。これらの溝跡がⅤ層を掘り込むのに対し、上層のⅢ層・Ⅳ層を掘り込む新しい溝跡も確認されている。図版 151 の SD11・27・28 等は、SC01 廃絶後の道路に伴うと推察される。これらの側溝跡は、時期を問わず、ほぼ全てが南から北、西から東へ向かって傾斜している。

第 25 表　道路跡（SC01 等）に関連する溝跡の地区別変遷

<table>
<tr><td>地　　区</td><td colspan="2">３区
２区（市道下）</td><td colspan="2">２区　北側部分</td><td colspan="2">２区　中央部分</td><td colspan="2">２区　南側</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>溝跡の性格
時　期</td><td colspan="2">側溝跡</td><td colspan="2">側溝跡</td><td colspan="2">側溝跡</td><td colspan="2">側溝跡</td><td colspan="2">排水溝跡</td></tr>
<tr><td></td><td>北　側</td><td>南　側</td><td>西　側</td><td>東　側</td><td>西　側</td><td>東　側</td><td>西　側</td><td>東　側</td><td>西　側</td><td>東　側</td></tr>
<tr><td>SC01 延長前</td><td colspan="4">SD40（居館堀跡）</td><td rowspan="2">SD25b
↓
SD25a＝SD49</td><td rowspan="2">SD32b＝SD51
↓
SD32a＝SD50</td><td rowspan="2">SD30b
↓
SD30a</td><td rowspan="2">SD34
↓
SD32b
↓
SD32a</td><td rowspan="2">SD38ab
↓
SD29</td><td rowspan="2">SD41b
↓
SD41a</td></tr>
<tr><td>SC01 延長後
（SD40 の埋立後）</td><td rowspan="2">SD57
↓
SD39</td><td rowspan="2">SD65
↓
SD45</td><td rowspan="2">SD64
↓
SD33
↓
SD36</td><td rowspan="2">SD63
↓
SD24</td></tr>
<tr><td>SC01 廃絶後
（２区南壁道路跡）</td><td>SD11・13・14</td><td>SD12・21</td><td>SD27・46</td><td>SD28</td><td></td><td></td></tr>
</table>

道路跡は、以下に個別に記載する。溝跡は巻末の溝跡一覧表に掲載し、地区別の変遷の概略は第 25 表に示した。また、道路跡と溝跡の変遷の詳細については、第６章第２節１に記した。

SC01　［遺構：図版 140・142・143・147～149・PL68・69、土器：図版 164］

位置：２区ⅩⅣX02・03・07・08・09・12・13・17・18・19・22・23 グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。４トレンチ南側で、重機での掘削が困難なほど硬化した面を検出した。この硬化面両側に南北方向に並走する帯状の落ち込み（SD30・32）を検出したため、道路跡とその側溝跡と考えた。４トレンチ以北では、道路面はそれほど硬化しておらず、やや不明瞭であった。本跡側溝と考えられる溝跡は、南側の SD30・32・34、中央部の SD25・49～51、北側の SD24・33・36 がある。　**重複**：（新）ST03、SD11、SK120。　**規模**：方位Ｎ－７°－Ｗ。全長 49.5m。調査区南壁から北へ長さ 17.5m、やや東寄りに緩く屈曲して 18.2m、更に西よりに緩く屈曲して 20.0ｍを計る。側溝の芯々距離は南側 SD30―SD32 間で 3.4m、中央部 SD25―SD32 間で 3.6m、北側 SD24―SD36 間で 3.0m。路面幅は南側 2.4m、中央部 2.3m、北側幅 1.6ｍである。　**構造**：調査区の南側と４トレンチの土層断面で、少なくとも２面の硬化面を確認した。２区中央から３区東側にかけて、山からの崩落土を盛土整地しており、この整地土上にある改修前の路面は、砂礫・シルト・粘土の混じる灰黄褐色土である。並走する溝跡にも改修の痕跡があることから、路面と側溝の改修が行われたと考えられる。また、堀跡 SD40 の埋め立て後に SD24・33・36 が掘削されていることから、道路が北側へ少なくとも 17m延長されたと考えられる。　**遺物**：内耳鍋（10）、カワラケ、剥片が出土。**時期**：出土土器と検出層位から、中世後期と判断した。

２区南壁道路跡　［遺構：図版 151・PL69］

位置：２区ⅩⅣD02・03 グリッド。　**検出**：SC01 西側の調査区南壁の土層断面で、Ⅴ層上面の上に更に盛土整地面を４面確認した。平面では確認できていない。　**重複**：なし。　**規模**：調査区南壁での路面幅は２ｍ程度。　**構造**：盛土整地面はやや硬化し、同じ場所で継続的に道路が造成されたと考えられる。南壁部分では側溝を伴わないが、SD27・28 等の道路側溝跡の延長線上に位置し、検出層位もほぼ一致することから、同一の道路跡であった可能性が高い。その場合、側溝は居住域のみに部分的に掘削されたものと想定できる。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から中世末～近世と判断した。

（４）掘立柱建物跡　［付表 16］

柱穴１列のみの ST03 を検出した。道路跡 SC01 と重複し、SC01 よりも新しいと考えられる。同様に SC01 と重複する井戸跡や柱穴と考えられる２区中央の土坑の分布から、SC01 廃絶後に居住域となった時期があると推察される。

ST03　［遺構：図版 140・143・153・PL70］

位置：２区ⅩⅣX12 グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。東西方向に配置する灰黄褐色土の方形の落ち込み４基を検出した。その他のピットは確認できなかったが、４トレンチの掘削時に失われた可能性もあり、規模から竪穴建物跡の柱穴と考えた。　**重複**：（旧）SD25ab、SC01。　**埋土**：複層。P1・2 は斜方に堆積。P3・4 は自然堆積。　**規模**：方位Ｎ－90°－Ｅ。長さ 6.97m。ピット直径は 0.52～0.75m、深さは 0.47～0.71m。柱間寸法は、2.01～2.27ｍで中央がやや狭い。　**構造**：東西３間のみの検出で、詳細は不明。**遺物**：P2 埋土から礫がまとまって出土。　**時期**：重複関係、検出層位から、中世後期と判断した。

（５）井戸跡・土坑　［遺構：付表 14・図版 152・153］

井戸跡は８基検出した。SK170 が道路跡 SC01 と重複していることから、これらの井戸跡は SC01 よりも新しいと考える。２区調査区中央に集中するその他の土坑の中には、柵列や掘立柱建物跡の柱穴が含まれる可能性があるが、個々の遺構の判別には至らなかった。井戸跡や土坑の分布から、この一帯が SC01 廃絶後に居住域となった時期があると推察される。なお、井戸跡と第４節に掲載した遺物が出土した土坑については、巻末の土坑一覧表に記載した。

SK170　［遺構：図版 140・143・152・PL70］

位置：２区ⅩⅣX18 グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。不整円形の落ち込みを確認した。　**重複**：（旧）SC01、SD32ab。　**埋土**：上層より砂層、粘土層、砂質粘土層、砂層、シルト質砂層。　**規模**：直径 1.50m。深さ 0.80m まで掘削したが、湧水が著しく掘削を断念した。　**構造**：平面形は不整円形、断面は逆台形。上部は漏斗状に開く。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位と遺構の重複から、中世後期と判断した。

SK171　［遺構：図版 140・141・152・PL70］

位置：３区ⅩⅣW14 グリッド。　**検出**：Ⅵ層中。円形の落ち込みを検出した。　**重複**：なし。　**埋土**：複層。下部は粘土層。　**規模**：直径 1.52m、深さ 0.88m。　**構造**：平面形は円形、断面は逆台形。上部が漏斗状に開く。　**遺物**：上層から木片、カワラケ、下層から礫が少量出土。　**時期**：検出層位と遺構の重複から、中世後期と判断した。

SK214　［遺構：図版 140・142・152・PL71］

位置：２区ⅩⅣX23 グリッド。　**検出**：Ⅶ層上面。不整円形の落ち込みを検出した。本来の遺構掘り込み面は、他の井戸跡と同様にⅤ層上面と推察する。　**重複**：（旧）SD34。　**埋土**：上層は褐灰色粘質土、下層は砂質粘土層。50㎝以上の礫が複数混じる。　**規模**：直径 1.44m、深さ 0.62m。　**構造**：平面形は不整円形、断面形状は逆台形。　**遺物**：なし。　**時期**：他の井戸跡と同様に、中世後期と判断した。

SK215　［遺構：図版 140・142・152・PL71、木製品：図版 168・169・PL76］

位置：２区ⅩⅣS24 グリッド。　**検出**：Ⅷ層中。円形の落ち込みを検出した。本来の遺構掘り込み面は、他の井戸跡と同様にⅤ層上面と考える。　**重複**：なし。　**埋土**：粘土。最下層は拳大から 50㎝大の礫が混じる。上層は埋め戻されたと推察する。　**規模**：直径 1.25m、深さ 0.50m。　**構造**：平面形は円形。東側にテラス状の段差がある。断面形は逆台形。　**遺物**：埋土から内耳鍋、カワラケ、曲物（５）、最下層から籠状製品（17）が出土。　**時期**：出土土器と検出層位から、中世後期と判断した。

SK244　［遺構：図版 140・141・152・PL71］

位置：２区（市道下）ⅩⅣX10・11 グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。不整楕円形の落ち込みを確認。　**重複関係**：なし。　**埋土**：複層。下層は砂礫、最下層はシルト。形状：直径 1.43m、深さ 1.03m。　**構造**：平面形は上部が不整円形で、下部は方形。壁面には凹凸がある。南東側壁面が外側へ張り出す。　**遺物**：埋土から内耳鍋、カワラケが出土。　**時期**：出土土器と検出層位から、中世後期と判断した。

SK247　［遺構：図版 140・141・152・PL71、土器：図版 164］

位置：２区（市道下）ⅩⅣX11 グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。円形の落ち込みと礫の集中を確認。　**重**

複：（旧）SC20。　**埋土**：上部は砂の混じる粘質土、下層は砂礫。　**規模**：直径 1.03m。深さ１ｍまで掘削、湧水が著しく掘削を停止した。　**構造**：平面形は円形、壁面は検出面から垂直に落ち込み、底面は平坦。石組の井戸跡。礫の一部が崩落し、埋土に混入していた。　**遺物**：埋土下層から、カワラケ（７）、内耳鍋が出土。　**時期**：出土土器と検出層位から、中世後期と判断した。

SK254　［遺構：図版 140・141・153・PL71］

位置：２区（市道下）ＸⅣX10 グリッド。　**検出**：Ⅳ層中。灰色粘土の円形の落ち込みを確認。　**重複**：（旧）SH06。　**埋土**：複層。中層～下層は山砂とシルトブロックが混じった埋め戻し土。形状：直径 0.96ｍ、深さ 0.34m。　**構造**：断面形は逆台形、底面にはやや起伏がある。　**遺物**：なし。　**時期**：検出層位から中世後期と判断した。

SH05　［遺構：図版 140・141・153・PL71、土器：図版 164・PL74］

位置：３区ＸⅣW14 グリッド。　**検出**：Ⅵ層中。礫が集中する方形の落ち込みを確認。　**重複**：なし。　**埋土**：複層。主に砂、根太木付近は粘土。　**規模**：直径 1.27m、深さは 0.60m。　**構造**：平面形は隅丸方形、断面形は逆台形。崩落した礫がまとまって出土しており、石組の井戸跡の可能性がある。底面付近では井桁状に組まれた角材に杭が打設される。角材は石組の根太木と考えられる。　**遺物**：埋土から内耳鍋（14）が出土。　**時期**：出土土器と検出層位から、中世後期と判断した。

（６）集石遺構

SH04　［遺構：図版 140・142・144、土器：図版 164・PL74］

位置：２区ＸⅣS22・23 グリッド。　**検出**：Ⅴ層上面。SD24 の調査時に、SD24 に隣接する礫集中を確認した。　**重複**：（新）SD24。　**埋土**：礫上外面前後は山砂が多く混じる黄灰色粘土。SH04 に伴う盛土。上層の暗黄灰色～暗褐色粘土は、SH04 以後の盛土。　**規模**：方位Ｎ－０°－Ｗ。長さ約 5.6m、幅 0.8～1.0ｍ。　**構造**：北端は重機掘削により不明。集石範囲の平面形はほぼ長方形で、直径 10～20㎝の礫が１段に並ぶ。堀脇の道路（未検出）の基礎部分の可能性も考えられる。　**遺物**：香炉（11）が出土。　**時期**：検出層位と遺構の重複から、中世後期と判断した。

（７）畝状遺構　［付表 17・図版 140・142・143］

検出された SL01（２区）は、比較的浅く蛇行した溝跡が並行することから、畑跡の可能性が考えられる。出土土器と検出層位から、中世後期～近世と判断した。畝状遺構については、巻末の遺構一覧表に記載した。

３　近世末～近代（第１調査面・第２調査面）の遺構

（１）概要

近世末～近代の遺構は、２区第２調査面で暗渠２条、溝跡５条、土坑 91 基を検出し、３区第１調査面で工房跡１棟、土坑 16 基、溝２条、第２調査面で溝跡２条を検出した。検出面は、２区がⅢ層（崩落土）上面、３区がⅡ層（腐植土）上面の工房整地面である。工房跡 ST01 は、1867（慶応３）年から 1896（明治 29）年にかけて操業した長谷焼を生産した窯（以下「長谷窯」という。）の陶器製作工房跡と考えられる。工房跡周辺からは、未製品（素焼き）や焼き損じ品等も含めた陶器製品が多量に出土し、その他に小物等の素焼き製品とその型、窯道具等の関連遺物が出土している。なお、陶器の窯跡は３区西側の山の斜面に位置していたと推定されるが、今回の調査範囲外にあたり、その正式な位置は不明である。

（２）長谷窯工房跡

３区南側は長谷窯推定地の東側であり、窯の工房跡があったという記録が残る。『塩崎村史』（塩崎村史編集員編 1971）の「第五編　長谷焼　三．窯と職人」によれば、『明治 26 年６月建坪取調簿』には窯に南面した場所に「間口九間（約 16.3m）・奥行二間三尺（約 4.5m）の職場」があったという。今回の調査ではロクロ台石を検出し、記録にある窯の工房跡であることを確認した。なお、長谷窯については第６章第２節２に詳細を記した。

ST01　［遺構：図版 154・155・158～162・PL72・73、陶器：図版 170～181・PL78～82、素焼き製品：図版 182～184・PL83・84、窯道具：図版 185～190 図・PL85・86］

位置：３区ⅩⅣW18・19・20 グリッド。

検出：Ⅱ層上面（整地面）。東西方向に並列する方形で中央にほぞ穴がある巨石を設置したピット２基を検出した。巨石は類例から、陶器製作工房に伴うロクロ台石と判断した。ロクロ台石の周辺を面的に掘り下げたところ、長方形にほぼ一周する石列を検出した。検出した石列は、前述の『塩崎村史』に記載された職場の位置、規模ともにほぼ一致することから、長谷窯の陶器製作工房跡と判断した。窯の廃業後、農地転用のために造成が行われたためか、土置き場・職人小屋等の関連施設は確認できなかった。

重複：（新）かく乱。

規模：方位Ｎ－87°－Ｗ。東西方向（間口）16.66m、南北方向（奥行）4.78m。

構造：３区の第１調査面は工房整地面にあたる。整地面は工房部分（ST01）と前庭部分（ST01 北側）に分けられる。Ａトレンチの土層断面観察によると、造成順はまず前庭部を整地し、次に建物基礎部分を掘り込んでから盛土整地した後、石列を設置している。建物跡の間口は東西方向に長く、出入口は北西隅と考えられ、ロクロ台石２基は南壁（山側）に沿って東西方向 1.9mの間隔で配置されていたと考えられる。ロクロ台石の設置された作業場東側の空間は、倉庫等として活用されていた可能性があるが、利用状況のわかる痕跡は確認できなかった。北側が前庭部にあたる。東側整地面では粘土が多く分布し、土置き場か釉薬の調合等が行われていた可能性が考えられる。

ロクロ台石　２基が 1.9m間隔で元位置を保って検出された。西側の P1 台石は南北長 48㎝、東西長 49㎝、厚さ 17㎝、重さ 92.6kg。P1 の掘方は東西長 0.65m、南北長 0.65m、深さ 0.3m。東側の P2 台石は南北長 40㎝・東西長 66㎝・厚さ 25㎝、重さ 69.9kg。P2 掘方は東西長 1.03m、南北長 0.73m、深さ 0.35m。P1・P2 共に掘方底部に栗石を敷き、白色粘土の上に台石が設置され、固定される。P2 は台石周囲にも粘土を充填する。使用方法としては、台石のほぞ穴にロクロ軸を差し込み、軸周囲に木材小片を詰めて固定し、軸上に回転台を置いて使用していたと考えられるが、ロクロ軸・回転台とも出土していないため、詳細は

不明である。ピット間の芯々距離は2.5mで、２名で作業するために適した間隔と考える。P1の台石の方が大きい点は、製作した陶器の大きさを反映したものと推察する。

石列　南西から北東に向かう傾斜地に立地。北辺は標高が低く、30～50㎝ほどのやや大きな礫を石垣状に積む。外側にあたる北面は礫の平坦面が並べられ、内側は10～20㎝の小礫が裏込めされる。南辺は幅0.62～0.86mで小礫が帯状に集中し、西端付近の一部がかく乱に切られる。西辺は石積幅0.37m。山側の傾斜地に設置された数条の石列と接続する。東辺はかく乱の影響から、残存状況が悪い。

出入口施設　SK115（図版162・PL73）が工房跡の北辺の西側隅に位置し、工房跡の北壁と想定される北側を除き、三方を礫に囲まれた形状から、出入口施設と推察する。長径1.24m、短径0.94m、深さ0.22m。平面形は不整楕円形、断面形は浅い皿状である。

遺物：工房跡周辺からは、窯関連の遺物が大量に出土した。主には陶器の素焼き313kg、施釉本焼き製品43kg、窯道具85kg等がある。図版161に示したように、窯跡推定地（調査区外）とされる斜面直下のⅩⅣW18グリッドでは特に遺物が集中していた。陶器製品（25～185）では、甕・鉢・壺・鍋・釜・植木鉢・灯明皿・秉燭（ひょうそく）等が出土した。素焼き製品（１～49）には、人形、玩具等の小物やその型、またコンロ、火鉢、土管等がある。窯道具（１～129）には、窯詰めの際に製品を載せた輪トチ、焼台、棚板や匣鉢（さや）、円錐ピン、団子トチ等が出土した。

時期：長谷窯の操業期間（1867～1896年）と判断した。

（３）土坑　［付表14、図版154～157］

３区の土坑のうち、長谷窯工房跡と関連する土坑と考えられるものを個別記載する。巻末の土坑一覧表には、個別図を掲載した土坑と第４節に掲載した遺物を出土した土坑を記した。２区南側に集中する土坑は、近世末以降のものと考えられるが、土坑の性格は不明である。また、２区中央部の土坑は、第３調査面の土坑と位置が重なるため、本来は第３調査面に帰属する可能性がある。

SK111　［遺構：図版154・155・162・PL73、陶器：図版175・PL80］

位置：３区ⅩⅣW25グリッド。　**検出**：Ⅱ層上面。黄褐色土の円形の落ち込みを検出した。　**重複**：（新）かく乱。　**埋土**：土坑、甕内部とも黄褐色砂層。　**規模**：直径0.99m、深さ0.87m。　**構造**：平面形は不整円形、断面形はU字形。　**遺物**：素焼の特大甕（77）が正位で出土。工房跡に伴うと考えられるが、用途は不明である。　**時期**：長谷窯の操業期間内（1867～1896年）と考えられる。

SK112　［遺構：図版154・155・162・PL73、陶器：図版175、瓦：図版195・PL87］

位置：３区ⅩⅣW25グリッド。　**検出**：Ⅱ層上面。黄褐色土の円形の落ち込みを検出した。　**埋土**：甕の設置面には粘土が混じる砂層、甕内部は黄褐色砂層。　**重複**：（新）かく乱。　**規模**：直径0.74m、深さ0.60m。　**構造**：平面形は円形であったと推察する。断面形は逆台形。　**遺物**：素焼の特大甕（76）が正位で出土。瓦（11）、ガラス片が埋土から出土。工房跡に伴うと考えられるが、用途は不明である。

時期：長谷窯の操業期間内（1867～1896年）と考えられる。

SK114　［遺構：図版154・155・162・PL73、陶器：図版174・179・PL79・81］

位置：３区ⅩⅣW18グリッド。　**検出**：Ⅱ層上面。１トレンチ掘削中に、焼物片の集中箇所を確認し、円形の落ち込みを検出した。　**埋土**：土坑は黄褐色砂質土、甕内部は黄褐色砂層。　**重複**：なし。　**規模**：直径0.59m、深さは0.33m。　**構造**：平面形は円形。断面形は逆台形。　**遺物**：素焼の大型の甕

(71) が正位で出土。埋土から急須蓋（147）が出土。工房跡に伴うと考えられるが、用途は不明である。
時期：長谷窯の操業期間内（1867～1896 年）と考えられる。

（４）暗渠・溝跡　［付表 15］

暗渠２条と、３区第２調査面で検出した溝跡２条を個別記載する。長谷窯の操業期間よりも著しく新しい時期のものは、かく乱とし、その他の溝跡は巻末の溝跡一覧表に掲載した。

SD01　［遺構：図版 154・157・163・PL73］

位置：２区ⅩⅣX17・18・23 グリッド。　**検出**：Ⅲ層上面。東西方向に並ぶ帯状の礫を検出した。板状の蓋石が整然と並べられ、下部には角礫が面を揃えられていた。　**重複**：なし。　**埋土**：３層。中層の粘質土層と下層のシルト層は、滞水による影響と推察する。　**規模**：方位Ｎ－80°－Ｗ、西北西から東南東へ傾斜。長さ 14.14m。根固めを含めた石の幅 0.45m、溝の幅 0.6m、深さ 0.19m。　**構造**：側壁の石は平坦面をそろえて並べられ、外側の根固めに破砕した礫を詰める。形態から暗渠と考える。　**遺物**：なし。構築材は長谷窯で使用された煉瓦を再利用している。　**時期**：長谷窯の操業期間（1867～1896 年）に近い時期と推察する。

SD26　［遺構：図版 154・157・163・PL73］

位置：２区ⅩⅣX22・23 グリッド。　**検出**：Ⅳ層下層。東西方向に並ぶ帯状の礫を検出した。SD25・32 の埋没後に構築されている。　**重複**：なし。　**埋土**：上層は粘土、中・下層は砂を含む暗オリーブ褐色土。　**規模**：方位Ｎ－78°－Ｅ、西から東へ傾斜。礫範囲は東西 9.70m、南北 0.92 m。水路の深さ 0.09m。調査区西側壁面に礫を確認、本来は調査区外まで延びる。　**構造**：平面形は直線。蓋石には 30～60㎝の比較的平らな礫を使用。側壁には 10～15㎝の小礫を使用して面を揃えてある。形態から暗渠と考える。
遺物：内耳鍋・カワラケを出土。　**時期**：構造から近世以降と判断した。

SD43　［遺構：図版 154・163・PL73］

位置：３区ⅩⅣW14・19・20 グリッド。　**検出**：Ⅵ層中。並行する２条の帯状の落ち込みを検出した。
重複：なし。　**埋土**：複層。上下層ともシルト。　**規模**：方位Ｎ－30°－Ｗ、南東から北西へ傾斜。長さ 14.70m 幅 0.65m、深さ 0.24m。　**構造**：西北端は調査区外まで延びる。平面形はほぼ直線、断面形はＵ字状。　**遺物**：埋土から、器種不明の素焼き陶器片が出土した。　**時期**：出土遺物から近代と判断した。

SD44　［遺構：図版 154・163・PL73］

位置：３区ⅩⅣW9・14・15・20 グリッド。　**検出**：Ⅵ層中。並行する２条の帯状の落ち込みを検出した。　**重複**：なし。　**埋土**：不明。　**規模**：方位Ｎ－23°－Ｗ、南南東から北北西へ傾斜。長さ 15.07m 幅 0.76m、深さ 0.19m。　**構造**：西北端は調査区外まで延びる。平面形はほぼ直線、断面形は逆台形状。
遺物：埋土から器種不明の素焼き陶器片が出土した。　**時期**：出土遺物から近代と判断した。

第４節　遺物

１　中世の遺物

（１）土器・陶器　［付表 18・図版 164・PL74］

概要：中世焼物は総数 979 片採取され、在地産の内耳鍋（717 片）と同カワラケ（248 片）が全体量の 98.6％を占める。在地産の土器では、他に土器香炉（11）、内耳鍋と同胎土で火鉢と考えられるもの（10）、瓦質擂鉢と考えられる破片がある。陶磁器は、珠洲（壺・甕）、古瀬戸（天目茶碗（９）、古瀬戸中後期様式の瓶子と考えられる破片、大窯丸碗と考えられる破片、大窯皿と考えられる破片）、中国産磁器（内湾小型白磁皿、雷文青磁碗、青磁瓶類と考えられる破片）がある。

各調査面の出土数は、３区第１調査面（近代の遺構検出面）14 片、第２調査面（近世末～近代の遺構検出面）313 片、第３調査面（中世後期～近世の遺構検出面）504 片、第４調査面（中世後期の遺構検出面）８片、第５調査面（平安時代の水田跡検出面）２片、出土層位不明のもの 138 片である。このうち、第３調査面の内訳は中世の遺構出土 434 片、検出面出土 59 片であり、第４調査面の内訳は中世の遺構出土４片、検出面出土４片である。第４調査面で出土した内耳鍋は４片と数が少なく小片のため、第４調査面の時期に伴うとは断定はできない。第３調査面からの出土量が最も多く、第４調査面での出土が少ない点は、主体となる内耳鍋の出現時期が、両調査面の境の時期に重なっていることを示していると考えられる。在地産の土器について若干触れる。

カワラケ：出土破片数が多いが、軟質で摩滅しやすいためか全体形を窺えるものは少ない。口径は８～９㎝と 10㎝前後の２種があり、１片のみ口径不明ながら 12㎝を越えるもの（８）がある。内面に煤等が付着し、灯明皿の使用を窺わせるもの（４）もある。調整はロクロを用い、底部外面には回転糸切を残す。胎土は灰白色～灰褐色を呈する比較的精良な胎土で、口縁形態は僅かに端部が外反するもの（５）と内湾気味のもの（６）がある。明褐色を呈するものも僅かにあるが、破片のために器形は不明である。

内耳鍋：出土破片数は多いが、全体形が窺える資料は少ない。器形は平底で体部が直線的に立ち上がる、いわゆる桶形でその上部に複数種類の形態の口縁がつく。調整は底部外面が平坦で、離れ砂と考えられる川砂が付着する。体部は粘土紐輪積の後、ハケ等の板状工具で調整し、口縁部と底部脇が回転台によるナデ調整される。内面の耳は２か所とみられる。焼成は黒灰色の瓦質焼成（12）を除き、すべて明褐色の酸化炎焼成である。口縁形態は、頸部が屈曲して直線的に斜めに延びる外反形態（13・17・24）、頸部で湾曲して口縁が内湾する形態（15・16・21・23）、やや内湾しながら内面の凹凸が顕著に認められ、口縁部が長いもの（14）がある。このなかで、外反形態は居館堀跡 SD40 から、内湾形態は２区南部の道路跡 SC01 に伴う側溝跡から、内面に凹凸が顕著に残る形態は井戸跡 SH05、北部の道路側溝跡 SD24、SK137 等から出土した。なお、23 は近世遺構の混入品の可能性がある。

その他　胎土から、近在で製作されたと考えられる土器が少量ある。SD59 から瓦質焼成擂鉢と考えられる破片、SC01 から火鉢類と考えられる土器（10）、SH04 から土器香炉（11）が出土した。

遺構の種類別に焼物の様相を記す。

居館堀跡　［図版 164・PL74］：第４調査面の SD59 から、カワラケ、内耳鍋、瓦質の擂鉢と思われる破片が出土している。カワラケは灰白色の精良な胎土のものである。第３調査面の SD40 から、カワラケ（４）、

内耳鍋（13・22）、古瀬戸天目茶碗（９）が出土した。４は底部内面を横ナデし、煤が付着する。22の口縁は若干崩れた外反形態である。９は古瀬戸後期様式Ⅰ・Ⅱ期（藤沢良祐1991）とみられる。

中世道路跡　［図版164］：SC01から火鉢と考えられる大型の皿型土器（10）、カワラケ、内耳鍋が出土した。10は余り類例をみないが、内湾する厚手の皿形の器形である。内耳鍋と同じ胎土で、回転台を使ったナデ調整が施され、口唇部端部は内傾して面取りされる。煤の付着はなく、火鉢とは断定はできない。カワラケは明灰褐色の比較的精良な胎土である。

中世～近世の道路側溝跡等　［図版164・PL74］：SD11から内耳鍋、SD12からカワラケ、内耳鍋が、SD14から内耳鍋、カワラケが出土した。SD24から内耳鍋、カワラケ、古瀬戸大窯皿と考えられる破片が出土した。内耳鍋の口縁形態は、外反形態と考えられる破片、直立気味で内面に凹凸を残す形態、短く外反する形態がある。カワラケは明灰褐色・灰白色の比較的精良な胎土が多い。大窯製品はごく小片で、器形等の詳細は不明である。SD29からカワラケ、内耳鍋が出土した。内耳鍋は158片出土し、一遺構からの出土数としては最多で、複数個体分がある。口縁は内湾形態のものと、不明のものがある。SD32aから内湾形態の口縁片（16）、SD34から外反形態の口縁の内耳鍋口縁片（17）が出土した。SD36から内耳鍋の口縁片が出土し、口縁はいずれも内湾形態である（15・21）。SD39からカワラケ、内耳鍋が出土した。カワラケは灰褐色・灰白色の精良胎土のものである。SD41から内耳鍋が出土した。SD45からカワラケ、外反形態の内耳鍋口縁片（24）が出土した。SD47から外反形態の内耳鍋口縁片、SD48から外反形態の可能性がある内耳鍋口縁片が出土した。SD49から内耳鍋８片が出土し、口縁は外反形態のものがある。SD50から瓦質内耳鍋（12）が出土し、他に口縁部を欠損する酸化炎焼成の内耳鍋が出土した。SD60から、内耳鍋が出土した。

集石遺構SH04から、土器香炉（11）と内耳鍋とが出土した。11はカワラケと同じ精良胎土を用い、ロクロ調整される。

柱穴跡と考えられる土坑　［図版164］：SK136から内耳鍋、SK137から内面に凹凸を顕著に残す内耳鍋口縁片、SK139から内耳鍋が出土した。２区中央の土坑では、SK120から内湾ぎみの口縁のカワラケ（６）、内耳鍋が出土した。SK157から内耳鍋、SK164から外反口縁の内耳鍋口縁片、２区（市道下）SK245からカワラケが出土した。

井戸跡　［図版164・PL74］：２区SK215からカワラケ、内耳鍋が出土した。３区SK171の上部からカワラケが出土した。３区SH05から内耳鍋口縁（14）が出土した。14は口縁内面に凹凸を顕著に残す形態である。SK244からカワラケ、内耳鍋が出土した。内耳鍋の口縁は内湾形態で、上部は板状工具でナデ調整されて平坦となる。SK250からカワラケ、内耳鍋が出土した。内耳鍋は外反形態のものがある。SK247からカワラケ、内耳鍋が出土した。カワラケ１片は灰白色の精良な胎土である。

第３・４調査面（中世～近世）：第３調査面では、カワラケ20片、内耳鍋39片と比較的多くの焼物が出土した。カワラケには、口縁に煤が付着する破片がある。内耳鍋の口縁形態は、外反形態13片、内湾形態１片、内面に凹凸を顕著に残す直立気味のもの１片に分かれる。灰白色と灰褐色の比較的精良な胎土のものがある。第４調査面ではカワラケ２片、内耳鍋３片のみの出土である。カワラケは、第３調査面以上で出土した明褐色の胎土のものと異なる胎土であり、小片で形態は不明である。内耳鍋はいずれも酸化炎焼成の体・底部小片で、底部は平底である。第４調査面の土器片は僅かな小片のみしかなく、本調査面に伴うと断定はできない。

他時代の遺構・調査面［図版 164］：第２調査面からは、２区南部の SK020・022・042 から内耳鍋、SK046・047・051 からカワラケと内耳鍋、SK065・075 から内耳鍋、SK073 からカワラケが出土した。SK064 からは、内耳鍋内湾形態の口縁（23）が出土した。第５調査面からは、２区（市道下）で混入とみられる内耳鍋が出土した。SL01（２区）からカワラケ、内耳鍋が出土した。SX45（２区）からカワラケ、内耳鍋が出土した。カワラケは１遺構の出土量としては多い。

（２）土製品［付表 18・図版 165・PL74］

SK202 から鋳型と思われる土製品（25）が出土した。遺存厚４㎝強を測る推定径 16㎝弱の円錐形で、全体の 1/3 ほどが遺存する。全体的に摩耗し下部を欠損する。内面側には外反気味に広がる推定径４㎝弱の円錐形面、その上端に幅 1.8㎝ほどの環状水平面が形づくられる。さらにその端部は１～２㎜ほどの段差から幅１㎝ほどの縁に続く。内面中央の円錐形部分と上端の水平面は平滑で黒色に変色している。断面には厚さ３㎝の粗砂混じりの空隙も多い粘土で鉢形の芯を作り、砂を多く混じる土を上面に塗って鋳型面がつくられている。表面色調は橙色で、鋳型面の下部は暗青灰色を呈する。被熱している点から何らかの金属製品の鋳型とみられるが、詳細は不明である。

（３）石製品［付表 19・図版 165・PL74］

中世の遺構出土品や中世と考えられる石製品について記述する。使用石材別には、遺跡背後の山に産出する粗い結晶を含む流紋岩の加工品と、黒色多孔質安山岩を用いる凹石、軽石を用いる凹石がある。これ以外に図示していないが、遺構外出土の金属器で削った軽石加工品がある。また、道路側溝 SD34 出土の凝灰岩製砥石は端面が鋸で切断されていて、近世の可能性があるため近世近代の項に掲載している。

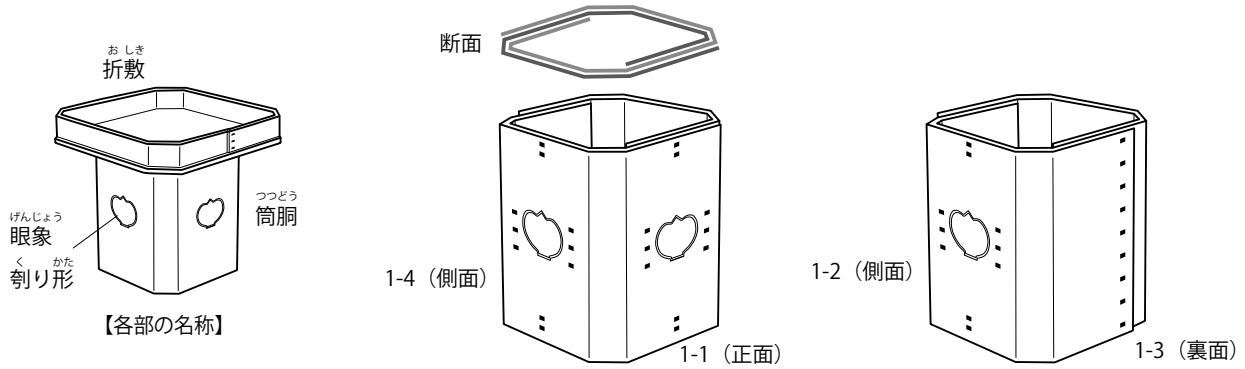
凹石：１は安山岩製、２・３は軽石製である。４は黒色多孔質安山岩製でやや大型であり、凹みの部分はタガネ状工具で点状に敲打し、側面等はノミ状工具で成形する。凹みの深さは 10.2㎝である。５は安山岩製で、側面等はノミ状工具で成形する。凹みの深さは 3.9㎝で、凹みを形成する途中の未成品と思われる。

五輪塔未成品：６は黒色の多孔質安山岩製の五輪塔の未成品と考えられるものである。ノミ状工具で側面等を成形する。五輪塔の水輪もしくは風輪部分に相当すると思われる。７～９は流紋岩製の加工石で、７は上下面を比較的平坦とし、側面は敲打により円形を意識して成形したと考えられる。側面は火を受けて炭化物が付着する。８・９は SD40 から出土した。８は１端面を平坦とし、それ以外の側面は球状を意識したと考えられる粗い敲打を加える。形は整っておらず、製品を目的としたものかどうかも不明である。９は同じく球状を意識した破片と考えられる。

（４）木製品・漆製品［付表 21・図版 166～169 図・PL75～77］

木製品は、中世堀跡 SD40 から５点（１・３・４・６・16）、SD59 から 10 点（２・７～15）、SK215 から２点（５・17）が出土した。いずれも調度具類や容器類と思われる小型品である。

三方［図版 166、167・PL75、76］：１は折敷部を欠損し、出土時は筒胴部の側板が長方形に組まれた状態で出土した。出土状態を維持したまま周囲の土ごと取り上げ、整理時に室内で掘り出したところ側板はそれぞれ腐食し分離していた。側板は横幅が長いものと短いものがあるが、長いものは両端の少し離れたところに縦位の切り込みがあり、本来は角に狭い面取り状とする平面八角形の可能性がある（第 26 図）。短い側板（1-3）は透かし彫りの刳り形がないため裏面とみられ、反対側（1-1）が正面と考えられる。出土状態のような平面長方形とすれば短辺側が正面となるが長辺の側板が角の面取り状の部分を含む八角形ならば、ほぼ１辺が均等幅となる。裏面（1-3）のみは縦位に連続して樹皮で綴られ、他の１-1・2・4 は刳



第 26 図　三方模式図

り形の上下と左右２～３か所のみ綴られる。折敷を固定するための綴り孔の有無は不明だが、裏面の１-3 上端に綴り孔があり、これが該当する可能性がある。１-1・2 上端の綴り孔も折敷を固定する機能を併せ持つものだろうか。１-4 は上端の綴り孔が不明である。角は浅い切れ込みを入れて折り曲げられているとみられるが、各側板で１-1・3 の短い側板が３枚重ね、長辺の１-2・4 が２枚重ねに樹皮で綴られ、刳り形は透かし彫とせず木地の上にみえる形となっている。短辺が３枚綴り、長辺が２枚綴りで、板の端部が内面のいずれも向かって左前にみえるので、おそらく２枚の１周と 1/4 弱の板を渦巻状に重ねて樹皮で綴ると考えられる。

その他　［図版 168・169・PL76・77］：４・５は柄杓か小型曲物の底板と思われる。４は底板に綴り孔が底板の相対する位置に２孔ずつあるが、側板と直交する位置になるため側板を固定するものとみられる。３は綴り孔や側板を固定する目釘はない。６は曲物底板と考えられるが、平面には孔が規則的に直線上に穿孔されており、甑とも思われるが詳細不明である。側面には側板を固定したと考えられる目釘が一部残存する。７は中央に孔１孔があり、蓋と考えられる。半分欠損するが、破断面に目釘が残り、もう１枚接合していた可能性がある。上面に刃物痕があり俎板に転用されたとみられる。９～11・13 は柾目の薄板で、曲げ物側板か折敷片か台と考えられる。12 は板目の板材で表面に刃物の線条痕が多く残る俎板の破片と考えられる。15 は半円形の断面形で栓か、材固定のための楔片と考えられる。14 は小角材で用途は不明、８も板材だが、用途は不明である。３は連歯下駄で１本の材から削りだされている。後左側の破片で鼻緒孔が１孔残る。16 は板目板材で、図の下側が両側側縁を削り込み、把手状となる。器種は不明ながら刃物の線条痕が無数にあり、俎板に使われている。２は不明板材で、図の左側側辺部は欠損する。図の上端は比較的直線的ながら、下端は緩やかな弧を描いて鋭角に削られる。孔が側縁端部と欠損側縁にあり、遺存する側縁の上下２か所に切り込みがある。孔が鼻緒孔で、側縁の切り込みが縄をかけるものとすれば、田下駄とも思われるが、断定はできない。17 は放射状のタテ方向の材に横材を編み込んだ籠状のもので、近接して棒状の材が出土した。両者が繋がった状態で出土していないが、関連する部材ならば箕のような製品になる可能性がある。

漆製品　［PL77］：１点のみ出土した（18）。内外面と供に赤漆を塗布し、文様はない。同様の漆器は近県の新潟県、石川県では 16 世紀以後に現れるとされており、本遺跡出土の漆器も年代的な矛盾はない。

２　近世・近代の遺物

（１）長谷窯関連遺物

概要：３区第１調査面で検出したST01では陶器製作のロクロ台石（ロクロ心石）２点が設置された状態で発見され、工房跡として注目された。その周囲からは、窯道具のほか、陶器とその焼き損じ品等が多数出土し、中には陶器素焼きの破片に部分的な施釉を行い、焼き上がりの色調を確認したテストピースも含まれる。また、人形などの小物やその型などの素焼き製品も出土した。そのような遺構と遺物の構成から、一帯は1867（慶応３）年から1896（明治29）年頃まで宮崎清右衛門の敷地内で開業・操業された「長谷焼」に関連する工房跡と考えられる（塩崎村史編集委員編1971）。出土陶器は素焼きと施釉本焼きで構成され、出土点数は素焼きが著しく多く、施釉本焼きが少数である。このことは施釉本焼きが出荷されたことを示しているのであろう。窯跡は未発見であるが、ST01の至近に窯が存在したと考えられ、ここでは長谷窯の製品として取り扱うことにする。なお、掲載した遺物の一覧表と非掲載の遺物も含めたグリッド別出土量の集計表は、添付DVDに収録した。

陶器製品（長谷焼）［図版170～181・PL78～82］

素焼きの陶器製品には、碗類・鉢類・水注類・壺類・甕類・鍋類・釜類・筒形容器類・皿類（蓋を含む）・秉燭（ひょうそく）類等がある。中でもサイズ別に規格化された製品が一定量ある鉢類と甕類は「長谷焼」の主要製品と考えられる。そのほか、釜類（小型の羽釜）、筒形容器類の一部（火入れ）、蓋の一部、灯明皿およびその蓋、秉燭類に関しても素焼きの出土が目立つ。

陶器の分類と観察

陶器の分類は、本遺跡とほぼ同じ時代に操業された埼玉県飯能市の飯能焼原窯跡出土品の分類（富元1999）を参照し、①焼物種（素焼き・施釉本焼き）、②器類（碗類・鉢類・甕類等）、③器種（鉢・擂鉢等）③器形（特大・大・中・小等）に注目して行い、外面・内面の成形方法を観察した。また、本焼きでは釉薬種・絵付け手法の観察も行った。その観察結果の詳細は、添付DVDの遺物観察表に収録している。

以下に、器類・器種・器形ごとに概要を記す。

碗類（25）

出土量は非常に少ない。25は素焼きで底部から体部にかけて緩く内湾し、口縁部へはほぼ直立して立ち上がる。口縁は平口縁で反りはない。

鉢類―鉢

底部から口縁部にかけて緩く内湾し、口唇が若干外反する。小型・中型・大型・特大型のほか、丸形がある。器形も多様で、主力な生産品の一つと考えられる。

丸形（26～28・126）：26～28は素焼き、126は本焼きである。口径が６㎝前後、器高３㎝前後、底径３～４㎝のもので、底部に回転糸切り痕を残す浅い器形である。外面底部を除き、鉄釉施釉する。本器形は餌猪口（えちょこ）の可能性もある。

小型（29・127～130）：29は素焼き、127～130は本焼きである。口径が11～13㎝、底径が６㎝前後、器高が６～７㎝のものが該当する。底部は付け高台で、畳付きの幅は0.5㎝程度である。体部に片口が付くのが一般的で、口縁は外折り返しの玉縁である。ロクロ成形で、表面・内面ともナデ整形される。127は鉄釉施釉、128・129は透明釉もしくは藁灰釉に加え口縁部に銅緑釉を施釉したもの、130は透明釉と藁灰釉を施釉したものである。なお、藁灰釉には銅が混ざり、銅緑釉気味の色調を帯びることもある。

中型（30～32・131）：30～32 は素焼き、131 は本焼きである。口径が 17～18㎝、底径が７㎝前後、器高が 12㎝前後のものが中型に該当する。底部は付け高台で、口縁部は外折り返しの玉縁。ロクロ成形で、表面・内面ともナデ整形。本焼きは、外面・内面とも藁灰釉と銅緑釉の混合釉で、高台に施釉は及ばない。畳付きの幅は５㎜前後である。

大型（33・132・133）：33 は素焼き、132・133 は本焼きである。口径が 24㎝前後、底径が９㎝前後、器高が 13㎝前後のものが該当する。底部は付け高台で、畳付きの幅は約１㎝である。口縁は外折り返しの玉縁となる。ロクロ成形で、表面・内面ともナデにより整形される。132 は藁灰釉を体部に、銅緑釉を口縁部付近に施釉したもの、133 は藁灰釉と銅緑釉の混合釉を施釉したものである。なお、133 の内面の底には重ね焼きの際に円錐ピン（ハリ）を使用した目跡が残る

特大型（34・35・134～136）：34・35 は素焼き、134～136 は本焼きである。口径が 29～35㎝、底径が 19～20㎝、器高が 16㎝程度のものが該当する。「こね鉢」とも呼ばれる。135 は復元底径が 13.8㎝で、大型と特大型の中間的サイズである。底部が付け高台で、畳付きの幅は３㎝前後と幅広い。口縁は外折り返しの玉縁である。ロクロ成形で、表面・内面ともナデにより整形される。施釉は、外面・内面とも藁灰釉を施釉しているもの（135）、さらに口縁部に銅緑釉を施釉しているもの（134）、鉄釉施釉（136）がある。135 と 136 の内面の底には重ね焼きの際に円錐ピン（ハリ）を使用した目跡が残る。

鉢類―擂鉢

底部から口縁部にかけてハの字状に広がり、内面に櫛目をもつ器類である。小型・大型の別があり、長谷窯では一定量の生産が行われたと考えられる。

小型（36・137～140）：36 は素焼き、137～140 は本焼きである。口径が 26㎝前後、底径が 12～15㎝前後、器高 13㎝前後のものが該当する。底部は付け高台で畳付きの幅が 1.5㎝前後である。36・138 の口縁部は段をもち帯状に肥厚する。ただし、138 は畳付きの幅が 3.2㎝と幅広い。いずれも鉄釉施釉で、畳付きの幅にかかわらず鉄釉の発色は一致する。137 の底部内面と外面、畳付きの部分に重ね焼きを示す砂ドチ（擦りドチ）が認められる。140 は小型の摺鉢の見込み部分に砂トチ痕跡が明瞭に残る。重ね焼きの融着品である。

大型（37～42）：全て素焼きである。口径が 33～35㎝、底径が 18㎝前後、器高が 16～19㎝のものが該当する。底部は付け高台で、畳付きの幅が２㎝前後である。小型とは異なり、口縁部は外へ折り返す。見込みの範囲となる内面櫛目が非常に幅広く、また深い器形である。37 は口縁形状及び器壁の厚さから大型に該当すると推定される。ただし、内面の櫛目が、通常の縦方向に加え、横方向一条が確認でき、特異な例である。38 は外面胴部に墨書がある。本焼きの良好な例は確認できない。

徳利類（141・142）

液体容器で、把手・注口を持たない器類が該当する。出土点数はわずかである。141 は鶴首形の徳利類で、器高は 15㎝前後、口縁は外側に折り返し玉縁となる。ロクロ成形で外面と内面口縁部付近に銅緑釉を施釉する。142 も鶴首形と思われ、器高は７㎝前後の小型で、平底である。ロクロ成形で、外面は鉄釉の施釉後に頸部から胴部上半にかけて銅緑釉の掛け流しが認められる。徳利類の素焼きで良好例は確認できない。

水注類

液体容器で、把手・注口を持つ器類が該当する。土瓶・急須とその蓋、水注に分類する。

土瓶（43・44・143）：底部は碁笥底（ごけぞこ）で、削り調整をしている。また底部脇に土を丸めた三つ足が付く。素焼きの 43 が該当するが、三つ足の位置は若干上方よりであるため、機能的な三つ足ではなく、形骸化している。体部はロクロ成形である。44 は土瓶の注口部と推定した焼締め製品で、注口の内部はロクロ線が明瞭で、注口の先端は平滑である。本焼きは、急須の可能性もあるが、大きさから 143 を土瓶の注口部破片と考えた。体部と注口部の間の穿孔は 14 か所あり、注口の先端を平滑に切り、鉄釉が施釉される。

土瓶蓋（145・146）：つまみと脚（返り）がある。口径（脚径）６㎝前後、最大径（笠径）が８㎝前後、器高が３㎝前後である。笠部が山なり形のもの（145）は、脚部は内に傾き、つまみは球形である。笠部が山形のもの（146）は、脚部は直立し、つまみは宝珠形である。笠・つまみ・脚部いずれもロクロ成形で、外面は藁灰釉と銅緑釉、もしくはその混合釉を施釉する。

急須（144）：注口部の破片である。体部の注口部の間の穿孔は３か所ある。外面に銅緑釉、内面に透明釉を施釉する。良好な素焼きの例は確認できない。

急須蓋（46～49・147～150）：46～49 は素焼き、147～150 は本焼きである。つまみと笠をもち、46～48 は山形笠、49 は平笠でかぶせ蓋、147 は鍵状笠で落とし蓋である。46～48 は最大径６～８㎝、底径３～４㎝、器高２㎝前後で、器高の差で細分が可能になるかもしれない。ロクロによりナデ出されたつまみをもつ。なお、46・47 の底部には回転糸切り痕が残るが、48 の底部はヘラケズリ調整である。47 は湯気通しの穴を１か所通す。49 は灰白色の胎土で前出の蓋とは明らかに異なる。つまみが欠け、笠の外縁に沈線が１条巡る。

山形笠の本焼きは 148～150 が該当し、148・149 は外面に鉄釉、150 は銅緑釉である。147 は鍵状笠で、口縁を外に折り曲げることでかえりを作り出す。149・150 は湯気通しの穴を１か所通す。器体はロクロ成形で、底部裏面は回転糸切、148・149 はさらにナデ整形される。内面は露胎のままだが、外面は鉄釉が施釉される。急須本体の本焼きの良好例が認められないものの、素焼きの山形笠の急須蓋が一定量認められることから、急須生産の存在が考えられる。

小水注（45）：頸部がすぼまる狭い口縁部に加え、胴長の器形の肩部に注ぎ口をもつ。口縁は外側に折り返し肥厚させる。ロクロ成形で、底部中心部が成形により若干上げ底となる。器高は 12㎝程度である。本焼きの良好例は確認できない。

壺類

壺の本体とその蓋に分類する。

壺（50～53）：一般的な壺は、胴が丸く、頸がすぼまり、口が広がる容器だが、本遺跡出土の壺は頸が短い短頸壺である。50～53 は素焼きで、52 は口径６㎝前後の狭口、50・51 は口径 13㎝前後の広口の２者がある。器高は推定 15㎝程度である。胴部はロクロ成形で、底部は付け高台でロクロナデ整形する。本焼きの良好例は確認できない。

壺蓋（54）：火消し壺の蓋で、焼成が瓦質である。落とし蓋の形で、つまみと笠をもつ。底部に回転糸切り痕が残り、つまみは粘土塊を貼り付け、ロクロ成形で宝珠形となる。内面はロクロ成形だが、外面はロクロ成形の後にハケで整形する。

甕類

口径と器高が概ね同じか、もしくは器高が大きく、口縁部を折り返す器類である。小型から特大型の４種に器形分類でき、主要生産品の一つである。

小型（55～61・151～154）：55～61 は素焼き、151～154 は本焼きである。本焼きは口径が５～６㎝、底径

が４㎝前後、器高が７㎝前後である。底部は平底のほか、上げ底の 57・60・154 も存在する。底部からわずかに直立して胴部中央にかけて膨らみ、折り返し口縁をもつ。151～154 はロクロ成形で、表面・内面側ともナデ整形する。鉄釉が施釉される。

中型（62～66・155・156）：62～66 は素焼き、155・156 は本焼きである。素焼製品は口径が 23～25㎝、底径が 15～16㎝前後、器高が 30㎝前後である。素焼き・本焼きとも完形品がないため全体形は不明だが、155 は鉄釉が施釉される。底部は付け高台で、折り返し口縁をもつ。ロクロ成形で、表面・内面ともナデ整形する。

大型（67～72・157）：67～72 は素焼き、157 は本焼きである。素焼製品は口径が 31～35㎝、底径が 18～23㎝、器高が 35～40㎝である。底部は付け高台で、高台幅は３～５㎝程度である。折り返し口縁をもつ。ロクロ成形で、表面・内面ともナデ整形する。157 は鉄釉と灰釉掛け流しの施釉である。SK114 では 71 の素焼き大型甕が埋められていた。

特大型（73～79・158・159）：73～79 は素焼き、158・159 は本焼きである。素焼製品は口径が 65～75㎝、底径が 25～32㎝、器高が 70㎝前後である。底部は平底もしくは底部中央がやや上げ底となる。口縁を肥厚させ鍔状に作り出す。ロクロ成形だが、大型のため底部・胴部・口縁部と別々に粘土帯を作り、それぞれを接ぎ合わせている。その接合痕が胴部内面に残る。ロクロ成形後の表面はナデ整形だが、内面は板状工具で整形した痕がある。78・79 には鍔状口縁もしくは胴部上半に「○」印の押印がある。「○」印の数は容量（○印１個＝１斗＝10 升）を示す。158・159 は鉄釉を施釉する。SK111 では 77、SK112 では 76 の素焼き特大型甕が埋められていた。

鍋類

鍋の本体とその蓋に分類されるが、本遺跡では鍋蓋のみ出土した。

鍋蓋（80・160）：80 は素焼きで、山なり形の笠と輪高台のつまみをもち、つまみの底は回転糸切り痕をナデ消している。端部のおさえの部分はロクロ引きで水平方向に引き出す。返しは剥落するが、粘土を貼り付け、ロクロナデにより成形したと思われる。160 は本焼きで、山なり形の笠部の表面に幅４㎝前後の幅で飛び鉋技法（製品をロクロで回転させながら、工具の刃先を使い、連続した削り目をつける技法）が認められる。つまみは扁平で、端部は水平方向に引き出される。表面は笠部のつまみに近い部分と端部に鉄釉を施釉し、内面は端部以外に鉄釉を施釉する。

釜類―羽釜

底部から口縁部へ内湾しながら直立し、体部中央に鍔をもつ器種である。小型と大型の２種がある。

小型（83～87）：素焼きである。器高が５㎝程度で、体部中央に幅２㎝程度の鍔をもつ。「豆羽釜」とも呼ばれる。同型の素焼きが一定量確認できる。底部は回転糸切り離しで、鍔は体部へ後付けされ、ロクロナデ整形される。羽釜の破片である 86・87 の外面・内面には各種釉薬が部分的に施釉されており、施釉試験に使用されたものと思われる（柴田 2020）。

大型（161）：本焼きである。器高 24㎝前後で、体部中央の鍔を含めた最大径は 32㎝前後と大型である。ロクロナデ整形される。鉛を用いた透明釉で、焼成温度がさほど高くない状態で本焼きする。素焼きは確認できない。

筒形容器類

植木鉢（88～91・162～166）：88～91 は素焼き、162～166 は本焼きである。底部から口縁に向かってほぼ

直線的に立ち上がるものが多いが166のように曲線を描く器形もある。本焼きは口径が17～19cm、素焼き90の底径は８cm前後である。口縁はヨコナデにより外反する。162～164の外面と内面には口端から縦幅2.5cmから５cmの範囲に鉄釉を掛け流す。165は底部破片で、銅緑釉を施釉する。91は素焼きの底部分であろう。

火入れ（81・82・167～169）：81・82は素焼き、167～169は本焼きである。底部は碁笥底で、底部の屈曲部から口縁まで直立する。素焼きの器壁は４㎜と薄い。81は体部内面のロクロ目が顕著である。82の体部下半はロクロケズリで斜めに面取りする。本焼きは口径が９～10cm、底径が８cm前後、器高が９cm前後で、口縁部は内へ折り返す玉縁である。施釉は、外面は口縁から体部下半の屈曲部まで透明釉で外面・内面の口縁部に藁灰釉と銅緑釉の混合釉を掛けるもの167、体部に藁灰釉、口縁部に銅緑釉を施釉するもの168がある。体部の内面は基本的に施釉しない。169は内外面の調整や施釉は167・168と共通するが、高台が付け高台である点、底径が12.4cmと大きい点が異なる。対応する素焼きが確認できないが、ここでは火入れと推定しておく。

火鉢（170）：火鉢の脚部破片である。上部には燃焼部となる体部が存在する。幅広の高台があり、表面は銅緑釉を施釉する。

その他の蓋

組み合う容器が判然としない蓋を一括する。

縁が素縁のもの（171・172）：171は表面に銅緑釉を施釉する。172は粘土紐によるつまみと丸みのある笠部をもつ。外面には銅緑釉、内面には透明釉を施釉する。

縁が合わせ口の返し・鍔をもつもの（98～104・173）：一般的に器高の高い山なりの笠の頂点に扁平のつまみが付く器形（山なり笠）で、98～104は素焼き、173は本焼きである。素焼きの口径は11cm前後に集中する傾向があるもの（98～102）、若干小型のもの（103）、やや大きめのもの（104）がある。笠が高い山なりとなるため、つまみを含めた器高が５cm前後と高い。173はロクロ成形で、つまみの周囲に銅緑釉を、笠から鍔にかけては藁灰釉を施釉する。恐らく壺・甕類の蓋であろう。

皿類

本遺跡では、灯明皿とその蓋の２種が出土した。

灯明皿（114～118・181）：114～118は素焼き、181は本焼きである。口径８cm前後・底径４cm前後で底部外面に回転糸切り痕を残す下皿部と、口径８cm前後で受けがある坏部を、粘土塊のロクロ成形で接合する。坏部は１か所を幅広くU字状に切り取り、油通しとする。181は坏部の外面・内面と、脚部に鉄釉の施釉が認められる。器形に大・小が存在する可能性がある。

灯明皿蓋（105～113・174～180）：105～113は素焼き、174～180は本焼きである。規格化された製品であることが明瞭で、素焼きの口径は６cm前後、鍔を含む最大径が８cm前後、器高が３cm前後で、本焼きは口径が５～６cm、鍔を含む最大径が７～８cm、器高が３cm前後である。焼成による収縮の程度は９割から９割５分にほぼ収まるものと推察する。笠の端部１か所をU字形にカットし、粘土粒による貼り付けつまみをもつ。ロクロ成形で、鉄釉を施釉する。灯明皿とその蓋は素焼き・本焼きとも多数出土し、主たる生産品の一つであったと考えられる。

秉燭（ひょうそく）**類**

大きく内側に内湾する坏部と坏部内面底に芯立部、そして坏部を支える台部からなる。底部中央には秉

燭を台に固定する穿孔があり、外面に回転糸切り痕を残す。芯立部は板状粘土を切り出し、内面底に貼り付ける。大きさや形状等から３種に分かれる。

大型（119）：素焼きである。台部底径が８㎝前後、器高が推定 12㎝前後である。

坏部の深い小型（120・182・183）：120 は素焼き、182・183 は本焼きである。台部底径が４㎝前後、器高が５～６㎝、芯立部が３㎝前後である。

坏部の浅い小型（121・122・184）：121・122 は素焼き、184 は本焼きである。台部底径が４㎝前後、器高が４㎝前後、芯立部が２㎝前後である。なお、123～125 は坏部が欠損するため、器形が不明である。

その他の器類（90・92～97・185）

90 は内抉りの削り出し輪高台である。本遺跡で数多く出土した素焼きの鉢類・壺類には認められない底部成形の手法である。92～94・96・97 は、鉢類・壺類のいずれかの底部で、付け高台でロクロナデ整形する。95 はヘラケズリにより台部を作り出し、185 は直径３㎝弱の内部空洞の棒状脚に、外反する坏部をもつ。坏部の底部外面には回転糸切り痕が残る。透明釉を施釉する。

②素焼き製品（小物・型・その他）［図版 182～184・PL83、84］

陶器の素焼きと同様に焼かれ、そのまま製品とされたとみられる土器を素焼き製品と呼称する。

型（１～14）：１・２は小型もしくは中型の円錐ピンの型、３は中型、４は大型の型と考えられる。５は特大型円錐ピン（図版 185-38）のように先端が丸みを帯びるものの型であろう。６は七福神の恵比寿で、７は不明瞭である。８は亀形の型である。11 は急須・注口の型である。９・10 の型のモチーフは不明で、13・14 は容器の型であろうか。12 は直方体の粘土の型と思われる。

小物（15～35）：人形は 15 のほか、16 が七福神の大黒天、17 が鬼面、18 が福助、19 が弁財天をモチーフとする。21 は動物（招き猫か）、22 は亀、23 は梅花、25 は家屋、24 は器物をモチーフとしたものであろう。24 は低温度で溶ける銅緑釉の試し焼きと思われる釉薬が付着する。26 の人形は墨で顔が描かれる。27～29 はヘラケズリもしくはナデで直方体に整形した製品であるが、用途は不明である。30 は表面に鉄釉が付着する製品だが、用途は不明である。ロクロの軸受であろうか。31 は把手付の碗を象る玩具、32 は陽刻による螺旋状意匠のある製品と思われる。33～35 のさまざまな形状の製品の詳細は不明である。

その他（36～49）：36～39 の詳細は不明である。40 は土器の火鉢の口縁部で、的矢のスタンプが押される。41 は土器の火鉢で、火消し壺の脚と思われる。42 は灰落とし、43～45・47 はコンロで、44 の内面にはススが付着する。46 はコンロ台である。48・49 は土管で、布巻の後ヘラケズリで仕上げる。48 には「一寸」という刻印がある。これらの胎土は長谷焼と似ているために長谷窯関連遺物としたが、自家用か、あるいは他の窯業産地で生産された可能性も考えられる。

③窯道具　［図版 185～190・PL85、86］

窯詰めの道具である匣鉢（さや）・円錐ピン・トチ・焼台・台脚・棚板・煉瓦が出土した。

匣鉢（１～６）：262 片出土した。窯内で灰や火炎から製品を防ぐ容器で、重ねて使用する。匣鉢の口径は 20～23㎝前後、底径は 18～22㎝、器高は 17㎝前後である。１の内面底には藁灰釉と円錐ピンの目跡が残り、２の内面底には本焼きの高台跡が残る。６は体部に３か所の穿孔がある。

円錐ピン（７～38）：540 点出土した。焼き物を重ね焼きする際に、焼き物と焼き物の接着防止のため挟み使用する道具で、大きさ別に次の４種類に分けられる。直径 1.2㎝以上 1.5㎝未満の小型（７～19）、直径 1.5㎝以上２㎝未満の中型（20・21）、直径２㎝以上３㎝未満の大型（22～36）、直径 3.5㎝以上の特大型

（37・38）である。小型が178点（33.0％）、中型が32点（5.9％）、大型が327点（60.6％）、特大型が３点（0.5％）出土し、大型の割合が大きい。ピン先に藁灰釉や鉄釉など釉薬の付着が認められるものがある。

団子トチ（39～43）：焼き物を重ね焼きする際に焼き物と焼き物の接着防止のため、口縁部に挟み使用する道具である。

輪トチ（44～79）：輪トチには２種類あり、手捏ねで環状に成形したもの（44～50）、円形で両面を回転糸切りで切断し、側面をナデ整形したもの（51～79）がある。大きさは直径５～７㎝未満の小型、７㎝以上～10㎝未満の中型、直径10㎝以上の大型がある。また、実測図に破線で示したように、多数の輪トチに輪高台の製品を焼成した痕跡が残り、66には片面もしくは両面にある。また、67は釉薬の跡が残る。こうした痕跡から、小型は灯明皿・秉燭、中型は小型の鉢、大型は中～大型の鉢・壺などの製作の際に使用したと考えられる。数量は、小型76片、中型148片、大型27片であった。

方形トチ（80・81）：方形トチは２片出土した。いずれも周囲をナデ整形したものである。

焼台（82～115）：焼台は307片出土した。脚の長さは、２㎝未満の短脚のもの（82）、２㎝以上５㎝未満の中脚のもの（83～85・88～105）、５㎝以上の長脚のもの（106～111）があり、短脚と中脚はさらに台座の大きさで数種類に分かれる。台座面は回転糸切りで形成され、縁はヘラケズリで成形される。台は付け高台でナデ整形される。台座には、輪高台跡や陶器の底部破片や釉薬の付着のほか、焼成による変色が認められる。102は比較的大型の焼台で、中型の甕類などを載せたと考えられる。115は手捏ねの焼台と思われる。大型の甕類の焼成には、台座の直径が25㎝前後ある特大の（112～114）が使用されたと考えられる。脚部は輪積みにより成形し、脚の周囲に孔を設ける。114の台座には輪高台跡が認められる。

その他窯道具（116～119）：116と117は焼台と同じ機能をもち、118は窯道具の蓋、119は匣鉢と同様の機能をもつものと思われる。

棚板（120～122）：長方形で焼き物の焼成台として使用されたものである。121には焼き物の設置痕跡があり、122には輪高台跡が認められる。

煉瓦（123～129）：窯の構築材の他、棚板のように使用されていたと考えられる。ほとんどが火を受け、一部には焼き物を置いたとみられる高台の輪郭が残る。

（２）その他遺物

①陶器・磁器　［図版191、192・PL88］

本遺跡では、瀬戸・美濃産、伊万里産のほか、益子焼もしくは笠間焼と思われる他の窯業産地で生産された陶磁器が出土した。

磁器では、186～202は瀬戸・美濃産である。器種は茶碗・皿・鉢・湯呑・盃・徳利・蓋・仏飯具・栓がある。呉須絵は手書き・型紙摺り・銅版転写・ゴム印の手法があり、そのほかに色絵上絵付けがある。191は色絵上絵付けの皿で、蛇ノ目凹形高台をもち、口縁形が輪花である。192は色絵上絵付けの皿で、高台は輪高台で、裏底銘に「塩崎学校前赤沢商店」とある。197はクロム青磁の湯呑である。203は伊万里産の磁器である。口縁形が輪花で、呉須絵は手書き、高台は蛇ノ目凹形高台である。口縁に錆釉（口サビ）を塗布し、蛇ノ目凹形高台の透明釉はがしが認められる。幕末の肥前陶磁Ⅴ期に相当する（大橋1989）。204は色絵上絵付けの湯呑で、裏底銘に「九谷」がある。産地は不明である。

陶器では、205が笠間焼と推定される片口鉢、206が笠間焼もしくは益子焼と推定される鉢である。206の口縁部には菊文様を貼り付ける。207は常滑と思われる急須で体部に海草を掛けて焼成した「藻掛け」が確認できる。208は土瓶蓋で、笠部は山形、脚は直立、つまみは扁平形である。白色釉に鉄釉による文様を加えている。209は蓋で口端が水平になり、つまみの先端部に印花を押圧され、灰釉が施釉される。

207～209 の産地は不明である。なお、一覧表は添付 DVD に収録した。

②瓦　［図版 193～195・PL87］

１・２は桟瓦である。左上部と右下部に切り込みがあり、切込桟とも呼ばれる。１には刻印「ヤマキ」がある。３～７は平瓦で、四角形の板を凹方向に曲げた形状を成す。並平とも呼ばれる。６には刻印「三」がある。７は丸瓦の可能性もある。８～11 は軒平瓦の瓦当で、８・９には刻印「三」があり、11 には刻印「ヤマキ」がある。９・10 には唐草文、10 には流水と紅葉文を陽刻する。12 は軒丸瓦の瓦当で、連珠三巴文を陽刻する。13 は丸瓦で、並丸とも呼ばれる。14 は破風の上部に葺かれる袖瓦で、螻羽（けらば）とも呼ばれる。15 の詳細は不明である。なお、一覧表は添付 DVD に収録した。

③石製品・石器　［図版 196・PL87、88］

10 は硯、11～15 は凝灰岩製の砥石である。12・13 には端部に鋸による切断痕が認められる。16 は安山岩製の砥石である。いずれも断面が方形状で、２面から４面を砥面として使用する。17・18 はロクロ台石だが、規格と石材がやや異なる。17 は ST01 の P1 で出土したロクロ台石で、長さ 48㎝・幅 49㎝・厚さ 17㎝の平面方形で、中央に 16×15.4㎝の方形の穿孔がある。重量は約 69.9㎏を測る。上面と孔内を丁寧にタガネ状工具で整形するが、側面と裏面は粗い敲打により打欠く。石材は石英を少し含む安山岩製である。18 は ST01 の P2 で出土したロクロ台石で、長さ 63.2㎝・幅 40.4㎝・厚さ 23.2㎝で、重量は約 92.6㎏を測る。平面形はやや不整形の長方形で、中央に 10×12㎝の方形の孔を穿孔する。孔の壁はタガネ状工具で整形されるが若干斜めで、上面では 11.5×10㎝の方形だが、下端で９×７㎝を測る。加工方法は 17 と同様で、表面と中央の孔内のみ細かいタガネ状工具で整形し、側面と裏面は粗い敲打による整形とする。石材は石英結晶を多く含む流紋岩製である。

上記以外に図示していないが、近世～近代と思われる石製品には頁岩製石板９点、滑石製石墨１点、石板片の周囲を研磨した「おはじき」とみられる円形石板がある。他に火打ち石とみられる打撃で割れた石核もしくは砕片とみられる石英４点、チャート 16 点、鉄石英１点、玉髄３点、黒曜石１点がある。また、当該期のものか不明ながら凝灰岩製砥石破片が図示以外に４点、泥岩製砥石片が１点遺構外から出土した。縄文時代の石器と思われる打製石鏃（PL88-19～24）、二次加工剥片（PL88-25）、敲石（PL88-26）も出土している。

④金属製品　［付表 20・図版 197・PL88］

１・２は煙管の吸口、３は煙管の雁首である。４は鉄製の楔、５～７は鉄釘である。銭貨としては、寛永通寶（８・９・11）、文久永寶（10）、皇宋通寶（12）、洪武通寶（13）、明治 21 年の一銭銅貨（14）、明治 19 年の半銭銅貨（15）、明治 41 年の十銭銀貨（16）、明治 16 年の一厘銅貨（17）がある。

⑤ガラス製品　［図版 197］

18 は茶色のワイン瓶である。19 は白色の化粧瓶で、エンボスによる銘「SANKO」がある。20 は無色のインク瓶で、エンボスによる銘「トンボ印」がある。21 は無色の薬品瓶である。なお、一覧表は添付 DVD に収録した。

第５章　自然科学分析

第１節　分析の目的

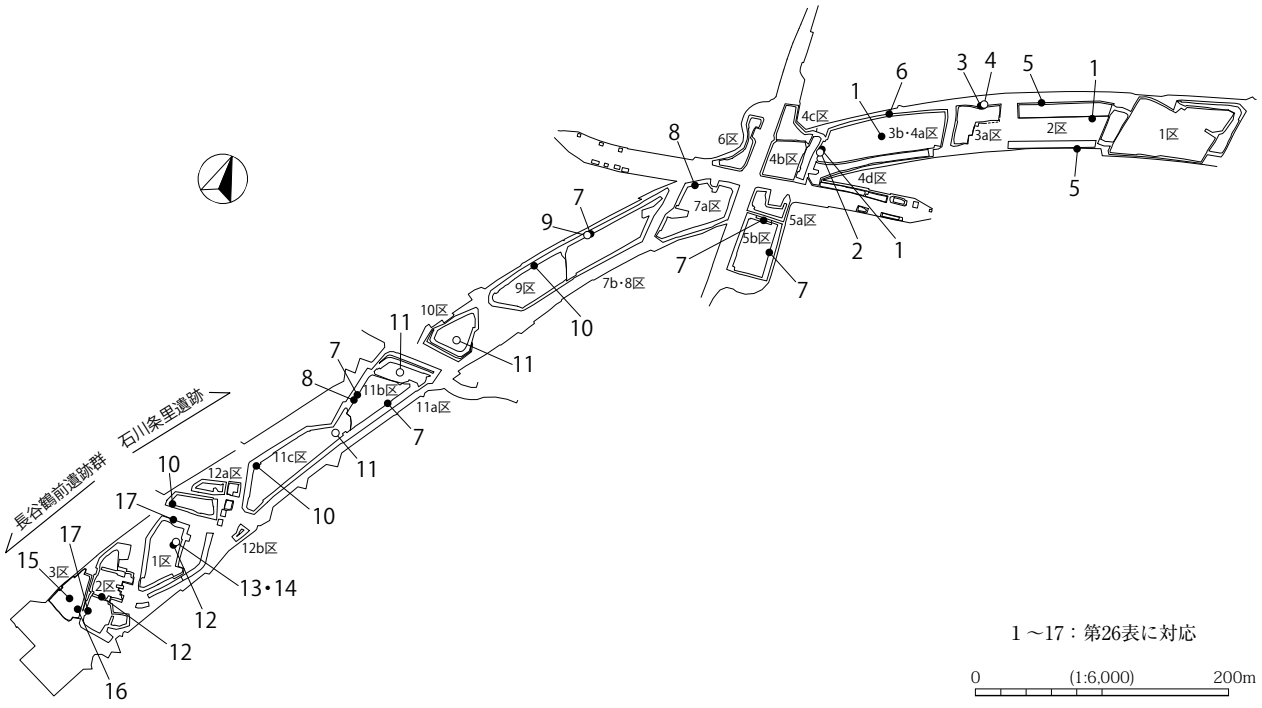
今回の発掘調査では、千曲川下流域の長野盆地南端に広がる後背湿地に広がる石川条里遺跡とその西側に接する山麓の崖錐地形上に立地する長谷鶴前遺跡群を対象とした。石川条里遺跡は弥生時代～平安時代の水田跡を重層的に検出し、長谷鶴前遺跡群では石川条里遺跡から続く水田跡のほか、中世居館跡、近代窯業工房跡等の多様な遺構を確認した。

こうした考古学的な成果を自然科学的な見地から検証かつ補完し、遺跡の総合的理解に寄与する目的として、自然科学分析を行った。

なお埋文センターでは自然科学分析を実施できないため、専門的な研究者に研究委託をした他、分析業者等に業務を委託した。

第２節１には五十嵐由里子氏（日本大学松戸歯学部准教授）ほか３氏による石川条里遺跡の近世墓跡等から出土した人骨の分析結果、同節２には本郷一美氏（総合研究大学院大学先導科学研究科准教授）ほか３氏による同遺跡出土動物骨の分析結果、第３節には保柳康一氏（信州大学理学部特任教授）による同遺跡の古環境分析結果を報告いただいた。それ以外の分析項目については第 26 表に概要をまとめている。また考古学的所見との比較検討については、各遺跡の遺構や遺物の所見（第３章・第４章）で触れるとともに、第６章の考察に反映させている。

なお、それぞれの分析結果や方法の詳細は、添付 DVD に分析報告書の原本を収録したので、参照していただきたい。



第 27 図　分析試料採取位置図

第 26 表　その他自然科学分析一覧

番号	遺跡名	年度	分析対象	地区	分析目的	分析点数	分析項目				分析機関
							花粉	珪藻	プラント・オパール	年代測定	
1	石川条里遺跡	2015	調査区壁断面から採取した土壌	2T（２区）、４・5T（3b・4a 区）	水田としての利用など土地利用の古環境を推定する。	18 点			○		株式会社古環境研究所
2	石川条里遺跡	2015	調査区壁断面から採取した植物片	5T（3b・4a 区）	水田層下層泥炭層から、水田層の年代を考察する。	３点				○	株式会社パレオ・ラボ
3	石川条里遺跡	2016	調査区壁断面から採取した土壌	3a 区	水田など土地利用の古環境を推定する。	３点			○		株式会社古環境研究所
4	石川条里遺跡	2016	調査区壁断面から採取した炭化材	3a 区	水田跡で確認されたシルト層の年代を明らかにする。	３点				○	株式会社古環境研究所
5	石川条里遺跡	2016	調査区壁断面から採取した土壌	２区	水田など土地利用の古環境を推定する。	10 点			○		株式会社古環境研究所
6	石川条里遺跡	2017	調査区壁断面、遺構から採取した土壌	3b・4a 区	弥生時代における水田稲作を推定する。	５点			○		株式会社古環境研究所
7	石川条里遺跡	2018	調査区壁断面から採取した土壌	5b 区、7b・８区、11b 区	弥生時代からの遺跡の古環境を捉える。	52 点	○	○	○		株式会社古環境研究所
8	石川条里遺跡	2018	調査区壁断面から採取した土壌	7a 区、11 区	水田層と推測される土層を確認し、調査面を確定する。	17 点			○		株式会社古環境研究所
9	石川条里遺跡	2018	調査区壁断面泥炭層（Ⅶ層）から採取した炭化物	7b・８区	水田跡の時期を裏付ける資料を得る。	３点				○	株式会社古環境研究所
10	石川条里遺跡	2019	調査区壁断面から採取した土壌	９　区、11c 区、12a 区	弥生時代から現在にいたる遺跡の古環境を捉える。	66 点	○	○	○		株式会社古環境研究所
11	石川条里遺跡	2019	遺構から採取した木材	10 区 SC105、11a 区 SC089、11c 区 SC101 出土芯材	畦畔の時期を裏付ける資料を得る。	９点				○	株式会社古環境研究所
12	長谷鶴前遺跡群	2017	調査区壁断面から採取した土壌	４・6T（１区）	低湿地の形成過程など、遺跡の古環境を捉える。	28 点	○				株式会社古環境研究所
13	長谷鶴前遺跡群	2017	調査区壁断面から採取した土壌と木片	6T（１区）	湿地における堆積土壌の年代を明らかにする。	７点				○	株式会社加速器分析研究所
14	長谷鶴前遺跡群	2017	調査区壁断面から採取した土壌と植物片	6T（１区）	低湿地の形成過程など、遺跡の古環境を捉える。	９点				○	株式会社加速器分析研究所
15	長谷鶴前遺跡群	2018	調査区壁断面から採取した土壌	１区、２区、３区	土壌や植物の構成の変化を明らかにする。	40 点	○				株式会社古環境研究所
16	長谷鶴前遺跡群	2018	遺構から採取された土壌	２区（市道下）SC20 他	水田土壌や畦畔と推測される遺構が水田跡か確認する。	９点			○		株式会社古環境研究所
17	長谷鶴前遺跡群	2018	調査区壁断面から採取した植物片	１区、２区、３区	泥炭層の堆積状況の確認と土壌変化の時期を明らかにする。	15 点				○	株式会社古環境研究所
18	石川条里遺跡 長谷鶴前遺跡群	2020	遺構から出土した木製品		出土木製品の利用財や周辺環境等を推定する。	265 点 28 点	樹種同定				株式会社古環境研究所
19	石川条里遺跡 長谷鶴前遺跡群	2022	遺構から出土した木製品		出土木製品の利用財や周辺環境等を推定する。	２点 ７点	樹種同定				株式会社パレオ・ラボ
20	石川条里遺跡	2022	遺構から出土した金属製品	12c 区 SD191 出土	鍍金などの加飾が行われていたのか確認する。	２点	元素マッピング				株式会社パレオ・ラボ
21	石川条里遺跡	2023	遺構から出土した土器	7b・８区出土	須恵器の内面付着物を確認する。	１点	赤外分光分析				株式会社パレオ・ラボ

第２節　出土骨

１　石川条里遺跡出土人骨

日本大学松戸歯学部准教授　五十嵐由里子
京都大学名誉教授　茂原信生
獨協医科大学医学部解剖学講座献体事務室事務長　櫻井秀雄
総合研究大学院大学先導科学研究科准教授　本郷一美

（１）はじめに

石川条里遺跡は長野市にある遺跡で、一般国道 18 号坂城更埴バイパス改築事業に伴い、2016～2021 年度にかけて、長野県埋蔵文化財センターによって調査された遺跡である。本報告は、その際に出土した人骨についての報告である。

石川条里遺跡から出土した人骨 15 点は、全て近世の遺構から出土した（第 27 表）。このうち、埋葬施設からの出土は 11 点で、土坑墓 SM001～005 から出土している。その他の 4 点は、溝跡 SD061・065 から出土しているが、他遺構から混入したものと考えられる。骨の保存状態は全体的に悪く、形は確認できるものの形態は観察できない。歯の残りはよく、主に歯冠がかたまって出土している。これは埋葬された頭骨に歯が植立した状況で遺存していたことを示している。歯の形態に関しては、基本的な形態以外に認められた特徴を記載する。

第 27 表　石川条里遺跡の出土人骨一覧

管理番号	写真番号	出土地点			取上番号	記　載	性　別	年　齢
		地　区	遺構・地点	遺構の時期				
1	第 28 図－１	3b･4a 区	SM001	近世		歯 25 本	不明	20 歳以上
2	―	3b･4a 区	SM001	近世		四肢骨片	不明	不明
3	―	3b･4a 区	SM001	近世		四肢骨片	不明	不明
4	第 28 図－２	3b･4a 区	SM002	近世		歯 27 本	不明	13 歳以上
5	―	3b･4a 区	SM002	近世		四肢骨　頭蓋骨	不明	不明
59	第 28 図－３	3b･4a 区	SM003	近世		歯 14 本	不明	２歳程度
8	第 28 図－４	3b･4a 区	SM004	近世	№１	歯 24 本	不明	13 歳以上
9	―	3b･4a 区	SM004	近世	№２	四肢骨片	不明	不明
10	―	3b･4a 区	SM004	近世	№３		不明	不明
6	―	3b･4a 区	SM005	近世		焼骨片　ヒト	不明	不明
7	―	3b･4a 区	SM005	近世		焼骨片　ヒト	不明	不明
39	―	3b･4a 区	SD061	近世		頭蓋骨片 10 点	不明	不明
40 －１	―	3b･4a 区	SD061	近世		頭蓋冠破片２点	不明	不明
40 －２	―	3b･4a 区	SD061	近世		頭蓋冠破片２点	不明	不明
42	―	3b･4a 区	SD065	近世		四肢骨片	不明	不明

（２）出土した人骨の記録

①　近世の土坑墓から出土した人骨

SM001

１　［第 28 表・第 28 図-1］

頭蓋骨の位置に歯が残る。他は観察不能。歯は 25 本が残る。歯根部（象牙質）がわずかに残っているがおもに歯冠（エナメル質）が残る。上顎第３大臼歯が萌出しているので、20 歳以上と推定できる。性別は不明である。

残存歯は以下の通りである。

M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2
		M1	P2	P1		I2	I1	I1	I2		P1	P2	M1	

歯の計測値は以下の通りである。

第 28 表　SM001 歯の計測値

右	M3		M2		M1		P2		P1		C		I2		I1	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎	9.12	9.97	9.4	11.45	10.09	11.69	6.5	8.88	7.53	9.86	7.29	−	6.58	5.78	8.48	7.32
下顎					10.77	10.91	6.66	7.42	7.37	7.88			6.07	6.24	5.57	5.71

左	I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎	8.7	7.62	6.98	8.28	7.61	8.09	7.22	9.19	6.49	8.64	10.2	11.7	9.35	11.5		
下顎	5.48	5.99	−	6.42			7.68	7.97	6.93	7.64	11.4	10.64				

歯の特徴は以下の通りである。残存歯全てにエナメル質減形成が認められる。

上顎右側　中切歯：シャベル型切歯である。軽度の副シャベル型切歯である。基底結節部に斜切痕がある。

上顎右側　側切歯：咬耗が進んでいるので判断は難しいが、シャベル型切歯であると思われる。弱い副シャベル型切歯である。基底結節の近心に斜切痕がある。

上顎右側　第三大臼歯：咬合面の輪郭は円形に近いが、咬頭は４つある。

上顎左側　中切歯：シャベル型切歯である。軽度の副シャベル型切歯である。

上顎左側　側切歯：シャベル型切歯である。遠心辺縁隆線の発達が良い。弱い副シャベル型切歯である。

下顎右側　第一小臼歯：遠心面にも摩耗が見られる。

下顎右側　第二小臼歯：舌側副咬頭が発達していて咬合面の溝はブラックの分類によるＹ型である。近心面と遠心面にも摩耗が見られる。

下顎右側　第一大臼歯：近心面と遠心面にも摩耗が見られる。

下顎左側　第二小臼歯：舌側副咬頭が発達していて咬合面の溝はブラックの分類によるＹ型である。遠心面にも摩耗が見られる。

下顎左側　第一大臼歯：近心面と遠心面にも摩耗が見られる。

２

20㎝ほどの四肢骨骨幹。断面の輪郭から考えて橈骨か。

３

太い四肢骨骨幹。大腿骨であろう。右大腿骨遠位部か。かなり太い。

SM002

４　［第 29 表・第 28 図-2］

頭蓋骨である。保存は悪く骨自体は確認できないが、頭蓋骨があることは分かる。片隅に歯が多数まとまって出土している。これと反対側が後頭骨の部分である。右を下にしているか。上下顎第２大臼歯が萌出しているので、13 歳以上と推定できる。性別は不明である。

残存歯は以下の通りである。

M2	M1		P1		I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	
M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3

歯の計測値は以下の通りである。

第 29 表　SM002 歯の計測値

右	M3		M2		M1		P2		P1		C		I2		I1	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎			9.28	11.27	11.04	11.59			7.03	9.4			7.04	6.59	8.38	7.29
下顎			10.44	10.15	−	10.93	6.99	8.01	7.02	7.63	6.61	7.09	5.89	6.29	5.43	5.8

左	I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎	8.62	7.19	5.73	5.76	7.21	8.27	7.16	9.48	6.59	9.34	11.4	12	9.48	11.1		
下顎	5.57	5.99	5.96	6.15	6.85	7.66	7.12	7.95	7.2	7.92	11	10.88	10.9	10.3	9.53	8.94

歯の特徴は以下の通りである。

上顎右側　中切歯：歯冠長が長い。シャベル型切歯である。基底結節はあまり発達していないがその近心に斜切痕がある。切歯結節（マメロン）が残っている。

上顎右側　側切歯：歯冠長が長い。シャベル型切歯である。基底結節の発達が弱い。切歯結節（マメロン）が残っている。

上顎右側　第一大臼歯：比較的咬耗が進んでいる。近心舌側咬頭の舌側面にごく弱い（溝が見える程度の）カラベリー結節が見られる。近心面にも遠心面にも咬耗がある。

上顎右側　第二大臼歯：近心面にも咬耗がある。

上顎左側　中切歯：歯冠長が長い。シャベル型切歯である。基底結節はあまり発達していない。切歯結節（マメロン）が残っている。

上顎左側　側切歯：歯冠長が長い。シャベル型切歯である。基底結節の発達が弱い。切歯結節（マメロン）は残っていない。

上顎残存歯全てに比較的強いエナメル質減形成が見られる。

下顎右側　第二小臼歯：咬合面の溝はブラックの分類のＵ型である。近心面にも遠心面にも咬耗がある。

下顎右側　第一大臼歯：遠心頬側咬頭の遠心部と遠心咬頭がう蝕により欠損している。近心面にも咬耗がある。

下顎右側　第二大臼歯：４咬頭である。咬合面の溝は＋型である。咬合面中心部にう蝕による円形の欠損がある。

下顎左側　第二小臼歯：咬合面の溝はブラックの分類のＵ型である。

下顎左側　第一大臼歯：５咬頭である。咬合面の溝は＋型である。咬合面中心部にう蝕による円形の欠損がある。

下顎左側　第二大臼歯：４咬頭である。咬合面の溝は＋型である。咬合面中心部にう蝕による円形の欠損がある。
下顎左側　第三大臼歯：５咬頭である。
下顎左側第三大臼歯以外の下顎残存歯全てにエナメル質減形成が見られる。

５

20㎝ほどの四肢骨が２本やや交叉している。細い骨ではないので大腿骨か脛骨付近と思う。詳細不明。ヒトだろうと思うが確定できない。

SM003

59　［第 30・31 表・第 28 図-3］

歯が 14 点と破片が残っている。歯根は残っていない。乳歯列である。M1 は他の乳歯と色が異なり石灰化が不十分で未萌出と思われる。上顎の永久歯 I1 があるが、左右とも歯冠の先端１/３ほどが形成されているに過ぎない。これも乳歯とは色が異なる。歯冠の形成状態から考えて約２歳と推定できる。性別は不明である。

残存歯は以下の通りである。

dp2　dp1	dc　dp1　dp2
dp2　dp1　dc	dc　dp2

（I1）	（I1）
（M1）	（M1）

歯の計測値は以下の通りである。

第 30 表　SM003 歯の計測値（乳歯）

右	dp2		dp1		dc		di2		di1	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎	9.35	10.33	7.57	8.91						
下顎	10.2	9.3	−	−	5.9	5.4				

左	di1		di2		dc		dp1		dp2	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎					7.02	6.12	7.27	8.88	9.3	10.4
下顎					5.8	−			10.2	9.0

第 31 表　SM003 歯の計測値（永久歯）

右	M3		M2		M1		P2		P1		C		I2		I1	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎															8.85	−
下顎					10.51	10.20										

左	I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎	8.91	−														
下顎											10.4	10.03		10.6		

乳歯の特徴は以下の通りである。

上顎右側　第一乳臼歯：２咬頭タイプである。

上顎右側　第二乳臼歯：近心舌側咬頭の遠心副隆線と遠心頬側咬頭の中心咬合面隆線が連続して斜走隆線を形成している。遠心頬側咬頭の中心隆線と中心溝の間に発達の弱いメタコニュールが認められる。近心辺縁隆線上にプロトコニュールが認められる。

上顎左側　第一乳臼歯：２咬頭タイプである。遠心辺縁隆線上の中心溝より舌側寄りに結節が認められる。

上顎左側　第二乳臼歯：近心舌側咬頭の遠心副隆線と遠心頬側咬頭の中心咬合面隆線が連続して斜走隆線を形成しているようにも見えるが、遠心頬側咬頭の中心隆線と中心溝の間に明瞭なメタコニュールが認められる。近心辺縁隆線上に明瞭なプロトコニュールが認められる。

下顎右側　第二乳臼歯：第６咬頭が認められる。屈曲隆線が認められる。

下顎左側　第二乳臼歯：第６咬頭が認められる。屈曲隆線が認められる。

永久歯は形成途中であるが以下のような特徴が認められる。

上顎右側　中切歯：シャベル型切歯である。副シャベル型切歯ではない。

上顎左側　中切歯：シャベル型切歯である。副シャベル型切歯ではない。

下顎右側　第一大臼歯：咬合面の溝は＋型である。近心舌側咬頭の近心副隆線が遠心方向に屈曲している。近心舌側咬頭の中心咬合面隆線が中心溝まで伸びず、中心咬合面隆線と中心溝の間に隆線状の隆起が一つ認められる。

下顎左側　第一大臼歯：咬合面の溝は＋型である。近心舌側咬頭の中心咬合面隆線が中心溝まで伸びず、中心咬合面隆線と中心溝の間に隆線状の隆起が二つ認められる。

SM004

8　［第 32 表・第 28図-4］

歯がまとまって出土している。上下顎第２大臼歯が萌出しているので、13 歳以上と推定できる。性別は不明である。

残存歯は以下の通りである。

	M1		P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M2
M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M2

歯の計測値は以下の通りである。

第 32 表　SM004 歯の計測値

右	M3		M2		M1		P2		P1		C		I2		I1	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎					9.77	12.2			7.44	10.43	8.24	9.42	6.91	6.59	9.12	7.73
下顎			11.22	10.58	11.44	10.99	6.89	8.78	7.24	8.33	6.62	8.66	6.54	6.68	5.84	6.07

左	I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎	9.54	8.03	6.77	6.13	7.7	9.19	7.37	10.01	6.3	9.49			9.5	12		
下顎	5.82	6.03	6.52	6.97	6.89	8.59	7.15	8.87	7.19	8.54			11.6	10.6		

歯の特徴は以下の通りである。

上顎右側　中切歯：シャベル型切歯、軽度の副シャベル型切歯である。基底結節の発達が弱い。

上顎右側　側切歯：シャベル型切歯、軽度の副シャベル型切歯である。基底結節部とその近心に斜切痕が２本認められる。

上顎右側　第一小臼歯：遠心面にも咬耗がある。

上顎右側　第一大臼歯：近心咬頭近心面がう蝕により一部欠損している。

上顎左側　中切歯：シャベル型切歯である。軽度の副シャベル型切歯である。基底結節の遠心に斜切痕がある。

上顎左側　側切歯：シャベル型切歯である。軽度の副シャベル型切歯である。基底結節の遠心に斜切痕がある。

上顎左側　第一小臼歯：遠心面にも咬耗がある。

上顎左側　第一小臼歯：近心面にも遠心面にも咬耗がある。

上顎左側　第二大臼歯：近心面にも咬耗がある。上顎の残存歯では、上顎左側第二大臼歯以外　エナメル質減形成が見られる。

下顎右側　犬歯：近心面にも遠心面にも咬耗がある。

下顎右側　第一小臼歯：近心面にも遠心面にも咬耗がある。

下顎右側　第二小臼歯：中心結節が見られる。そのため咬合面の溝は不明瞭であるが、舌側副咬頭が発達しているためブラックの分類によるＹ型であると思われる。近心面にも遠心面にも咬耗がある。

下顎右側　第一大臼歯：遠心咬頭が発達している。そのため、咬合面の溝はＹ型であるが＋型に近い。近心面にも遠心面にも咬耗がある。

下顎右側　第二大臼歯：５咬頭である。咬合面の溝は＋型である。近心面にも咬耗がある。

下顎左側　第一小臼歯：上顎第一小臼歯に似ている形態。頬舌径が比較的大きいことが影響していると考えられる。近心面にも遠心面にも咬耗がある。

下顎左側　第二小臼歯：咬合面の溝はブラックの分類のＵ型である。近心面にも遠心面にも咬耗がある。

下顎左側　第二大臼歯：４咬頭である。咬合面の溝は＋型である。近心面にも咬耗がある。

下顎右側の中切歯、側切歯、犬歯、下顎左側の中切歯、側切歯、犬歯　エナメル質減形成が見られる。

９

四肢骨片。不明。

10

細片で不明。

SM005

６

焼骨片。人骨だと考えられる。右距骨蹲踞面部を含む小片。

７

焼骨片。四肢骨片に鱗状の亀裂がある。生で火葬されたもの。上腕骨の遠位骨幹部か。(脛骨か橈骨か。)

② 混入と考えられる人骨

SD061

39

頭蓋骨片が 10 点ほどである。前頭骨の左グラベラ部（眉間部）が残る。眉弓はわずかに膨らんでいる。骨はやや薄い。子供ではないと考えられる。性別は不明である。成人とすれば女性的な骨である。

40－１

頭蓋骨片である。頭蓋冠の破片が２点残っている。部位の詳細は不明である。骨の厚さはやや薄めである。

40－２

頭蓋冠の破片が２点ある。骨の厚さは普通である。

SD065

42

数㎝ほどの四肢骨片があるがどの部分かは不明である。

（３）石川条里遺跡出土人骨の特徴

頭蓋骨や長管骨は計測可能な個体がなく、歯だけが計測可能であった。歯の計測値を現代人と比較すると、上下顎中切歯のサイズが現代人よりも大きい傾向にあった。中でも SM004 個体は、上下顎中切歯のサイズが他のどの時代の平均値よりも大きかった。他の歯種の計測値はおおむね現代人よりも小さかった。

非計測項目に関しては、全ての個体で上顎中切歯がシャベル型切歯であった。

SM003 個体の乳歯には、メタコニュール、プロトコニュール、屈曲隆線といった特殊な形質が認められた。

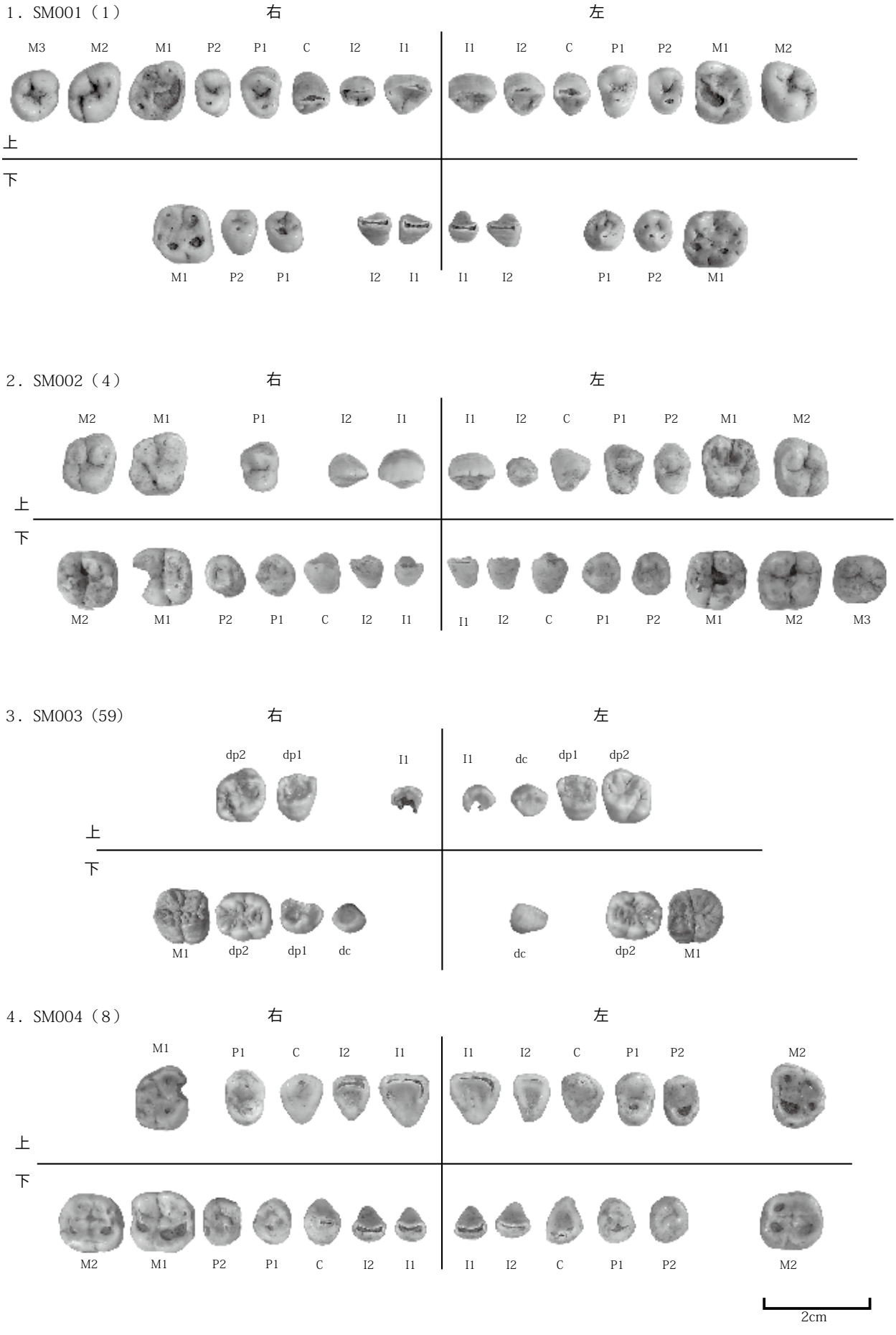
SM001・SM002・SM004 の歯にはエナメル質減形成が認められた。咬耗量が少ないことから比較的低年齢と考えられる SM002 個体に、特に強いエナメル質減形成が認められた。エナメル質減形成が認められる個体は、その歯の形成時期に何らかの栄養障害に見舞われたことが推定される。

参考文献

藤田恒太郎 1949「歯の計測規準について」『人類学雑誌』61 巻１号１－６．一般社団法人日本人類学会

藤田恒太郎 1995『歯の解剖学　第 22 版』金原出版

杉山乗也・黒須一夫 1964「乳歯の計測基準について」『小児歯科学雑誌』２巻１号　p.1-8　日本小児歯科学会



第 28 図　石川条里遺跡出土の人骨（歯）

２　石川条里遺跡出土動物骨

総合研究大学院大学先導科学研究科准教授　本郷一美
獨協医科大学医学部解剖学講座献体事務室事務長　櫻井秀雄
京都大学名誉教授　茂原信生
日本大学松戸歯学部准教授　五十嵐由里子

（１）はじめに

石川条里遺跡は長野市南部、篠ノ井塩崎の千曲川左岸の後背湿地に位置する。一般国道 18 号坂城更埴バイパス改築事業に伴い、2016～2021 年度に長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われた。石川条里遺跡は、塩崎遺跡群の生活を支えた水田跡と考えられ、千曲川の洪水土砂で埋もれた遺跡である。

調査で出土した動物遺存体は、１点の種・部位不明の大型動物の骨（67）が古代の層から出土している以外は、全てが中世、近世の溝跡または土坑から出土したものである。動物骨の同定に際しては、獨協医科大学所蔵および総合研究大学院大学所蔵の現生標本と比較した。動物骨は 54 点出土し、うち 36 点が同定された。骨の保存状態が比較的よいものと、脆く破損したものが混在する。

哺乳類は以下の４種が同定された。
哺乳綱　Mammalia
食肉目　Carnivora
イヌ科　Canidae
イヌ　*Canis familiaris*

奇蹄目　Perissodactyla
ウマ科　Equidae
ウマ　*Equus caballus*

偶蹄目　Artiodactyla
ウシ科　Bovidae
ウシ　Bos taurus
イノシシ科　Suidae
イノシシ　*Sus scrofa*

（２）同定と計測の結果

同定された部位を種ごとに表に示した（第 33～36 表）。動物種と部位が不明の破片は第 37 表に示した。種が同定された骨のうち計測ができるものは、デジタルノギスを用いて計測した。ウマの計測は Eisenmann の方法（Eisenmann 1986）に、馬以外の種の計測は Driech の方法（Driech 1978）に準拠して行った。

①　イヌ　［第 33・38 表・第 29図-1・2］

イヌの骨は３点出土しており、中世の溝跡 SD009a の埋土から出土した上顎骨破片（左右）は、同一個体のものである。犬歯（歯槽のみ）から第２大臼歯まで永久歯が生えそろっており、第３大臼歯は欠損している。第２前臼歯に軽度の磨耗がみられ、成犬と思われる。右上顎歯の計測値を第 38 表に示した。

②　ウマ　［第 34・39 表・第 30～32 図］

ウマは出土点数でもっとも多数を占めた種である。27 点の骨がウマと同定された。さらに種不明の大型動物骨の破片のうち、ウマの骨と同じ地点から出土し、同一骨に由来するとみられるものを含めると 35 点になる。このうち 17 点は東西に長く走る中世の溝跡 SD009a から出土し、骨 11～16、骨 19～22 は溝の東部でそれぞれ比較的まとまって検出された。このうち近接して出土した骨 11・12・13・16 は右前肢の中手骨、基節骨、中節骨で、一頭のウマの前肢とみられる。

ウマの骨のうち、四肢骨 11 点、上顎歯２点が計測可能だった（第 39 表）。このうちほぼ完形の脛骨（51）の最大長は約 330㎜で、林田・山内の推定式（林田・山内 1957）を用いると、体高は 125㎝弱である。近位端に癒合線が残ることから、成長が完了すればおそらく体高が 125㎝を少し超える大きさになる個体だったと推定される。長野県内の西近津遺跡群、北裏遺跡群等などから出土したウマは、御崎馬等小型の現生在来馬と似た体格で体高 110～120㎝と推定されるが、それより若干大きなウマがいたようである。そのほか中手骨、橈骨などの計測値から体高推定を行うと（西中川他 1991・2020）、（松井 2008）、110㎝前後の小型のものもあり、ウマの大きさには幅があったとみられる。

骨端が残存している四肢骨は８点出土しており、全て癒合していた。この中には３歳半ごろに癒合が完了する大腿骨遠位端と上腕骨近位端が含まれており、成獣の骨といえる。約３歳半で癒合する脛骨の近位端にまだ癒合線が残る、つまり癒合が終了する直前の年齢のものが２点出土しているので、比較的若い成獣も含まれていたことがわかる。なお骨端癒合時期による年齢推定は Habermehl の方法（Habermehl l961）に基づく。未癒合の四肢骨骨端は確認されず、出土した歯の中には乳歯がなかったことから、石川条里遺跡で出土したウマの中には幼獣・若獣が含まれていなかったとみられる。ただし、未癒合の骨端部は損傷されやすいので、保存が悪く確認できなかった可能性もある。２点の上顎歯の歯冠高にもとづく年齢（西中川 1991）は、SD023 出土の大臼歯が６～７歳の成獣、10 区 5b 層出土の第４前臼歯または第１大臼歯が３～４歳のやや若い成獣のものと推定され、四肢骨による年齢推定結果と整合する。距骨１点の後面（踵骨の関節部）に病変（骨増殖）がみられた。

③　ウシ　［第 35 表・第 29図-4～6］

ウシと同定された骨は５点で、大腿骨、寛骨、中節骨、歯の破片である。ウシの骨と同一地点から出土した種不明の大型動物骨の上腕骨破片が１点、上記寛骨の一部と思われる種不明の大型動物の四肢骨破片が１点出土しており、これらを含めると計７点である。計測が可能な部位は中節骨１点だった。この骨は縦に切断されており、Dp（近位端前後径）概測値を表未萌出の臼歯の破片が見つかっており、比較的若い個体が含まれていたようである。

④　イノシシ　［第 36 表・第 29図-3］

中世の井戸跡 SK094 の埋土から脛骨の近位骨幹１点のみが出土した。この井戸跡からはイノシシのほか、ウマ、ウシの頭部、寛骨、下肢の骨の破片が出土したが、まとまった部位ではなく、バラバラの骨が井戸内に投げ込まれて廃棄されたものとみられる。

（３）まとめ

石川条里遺跡から出土した動物遺存体は家畜の骨が大部分を占め、野生動物はイノシシ１点のみだった。水田の遺構を中心とする発掘区から出土した動物骨ということもあるが、中世・近世に積極的に狩猟を行っていた様子はみられない。最も多く出土したウマは現生の在来種に近い体格の小型のウマである。ウマ、ウシとも成獣の骨が多いが、ウシは未萌出の臼歯の破片が見つかっており、ウマも３～４歳の比較的若い個体も含まれていたようである。

参考文献

Driesch, A. von den 1976, A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin 1. Peabody Museum, Harvard University, Cambridge.

Eisenmann, V. 1986, Comparative osteology of modern and fossil horses, half-asses, and asses. In Meadow R. H. & Uerpmann, H.-P（eds.）Equids in the Ancient World, pp.67-116.Wiesbaden: Dr.Ludwig Reichert Verlag.

Habermehl, K.-H. 1961, Die Alterbestimmung bei Haustieren, Pelztieren und beim jagdbaren Wild. Berlin-Hamburg: Paul Paren.

林田重幸，山内忠平 1957「ウマにおける骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部術報告』６号　p.146-156　鹿児島大学農学部

松井　章 2008『動物考古学』京都大学学術出版会

西中川駿，松元光春 1991「遺跡出土骨同定のための基礎的研究．西中川駿（編）」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』（平成２年度文部科学省科学研究費補助金　一般Ｂ　成果報告書）p.164-188　鹿児島大学

西中川駿・立松弘・塗木千穂子・真木康之・廣田桂一・松元光春 2020「ウマの骨計測値から骨長の推定法―体高推定への応用」『動物考古学』37：21-30 日本動物考古学会

Silver, I.A. 1969, The ageing of domestic animals. In Science in Archaeology, 2nd edition, edited by D. Brothwell and E.S. Higgs, pp. 283-302. Thames and Hudson, London.

第 33 表　石川条里遺跡から出土したイヌ

写真図版	管理番号	地区	出土地点	時期	層位	取上番号	部位	破片の状態	左右	歯の磨耗	備　　考
29 － 1	30	30	SD009a	中世		№２	上顎骨	P1-M2	右	P2　軽い摩耗	M3 なし
29 － 2	31	31	SD009a	中世			上顎骨	犬歯歯槽、P1-2	左	P2　軽い摩耗	30 と同一
—	62	62	SL002・SD009a	中近世			下顎骨		左		切歯部分破片あり

第 34 表　石川条里遺跡から出土したウマ

写真図版	管理番号	地区	出土地点	時期	層位	取上番号	種	部位	破片の状態	左右	癒　合		備　　考
											近位	遠位	
31 － 4	11	1	SD009a	中世		№４	ウマ	基節骨	ほぼ完形	右	癒合		前肢
31 － 3	12	1	SD009a	中世		№５	ウマ	中手骨	遠位　半分	右			中足？
31 － 5	13	1	SD009a	中世		№６	ウマ	中節骨	完形	右？	癒合		前肢
32 － 4	14	1	SD009a	中世		№７	ウマ	距骨	完形	右			
—	15	1	SD009a	中世		№８	不明	不明	関節面　小破片				中手／足近位端の可能性
—	16	1	SD009a	中世		№９	ウマ	中手骨 II	近位	右			
—	19	1	SD009a	中世		№12	中－大型	不明	破片				№11 と近接して出土し、11 の破片の一部の可能性がある。
—	20	1	SD009a	中世		№13	ウマ	大腿骨	遠位端	右		癒合	軸椎　近位の可能性も
31 － 6	21	1	SD009a	中世		№14	ウマ	末節骨	関節部を含む破片	右			
31 － 1	22	1	SD009a	中世		№15	ウマ	橈骨・尺骨	ほぼ完形	右			上腕骨遠位端も一部あり
32 － 3	23	1	SD009a	中世		№17	ウマ	中足骨	骨幹　前面				前後につぶれている。両骨端破損。与那国標本よりやや大型。
—	24	1	SD009a	中世		№19	ウマ？	肩甲骨	関節窩破片、後縁部	右			
30 － 5	25	1	SD009a	中世			ウマ	下顎骨	縫合部				
—	26	1	SD009a	中世			ウマ	歯	エナメル破片				
30 － 8	27	1	SD009a	中世		№18	ウマ	上腕骨	近位端、骨幹	左	癒合		
—	28	1	SD009a	中世			大型	種子骨					ウマ？
31 － 2	29	1	SD009a	中世		№１	ウマ	橈骨	骨幹	左	癒合		
—	32	1	SD019	近世		№１	大型	不明	破片				肩甲骨？
32 － 1	33	1	SD019	近世		№２	ウマ	寛骨	寛骨臼含む坐骨	左			
30 － 3	34	1	SD023	近世		№１	ウマ	上顎歯	M1/2	右			
—	35	1	SD023	近世		№２	ウマ	基節骨	遠位端	右			前肢？
—	37	3b･4a	SD061	近世		№１	中型	上顎骨？	破片				
30 － 4	38	3b･4a	SD061	近世		№２	ウマ	上顎歯	M3 破片	左			
30 － 1	45	1	SD080	中世			ウマ	上顎歯	I3	右			
30 － 7	46	1	SD081	中世		№１	ウマ	上腕骨	骨幹	右			
—	47	1	SD081	中世	埋土		大型	四肢骨	骨幹				橈骨？
—	48	1	SD081	中世		№２	大型	不明					土と一体で保存状態が悪い。四肢骨骨幹部または肩甲骨の可能性
—	49	1	SD089	近世		№１	ウマ	脛骨	近位骨幹	左	癒合線		51 と同一
—	50	1	SD089	近世		№２	不明	不明	破片				スポンジ質部分
32 － 2	51	1	SD081	中世	埋土		ウマ	脛骨	ほぼ完形	左	癒合線	癒合	
—	52	1	SK003	中世		№１	ウマ？	手根骨					第３手根骨？
30 － 6	53	1	SK004	中世	検出面	№１	ウマ	側頭骨	頬骨弓	左			
32 － 5	58-1	1	SK094	中世			ウマ	距骨	完形	左			後面（踵骨関節部）骨増殖あり
—	60	1	SK200	中世			ウマ	上顎歯	I2 破片	右			
30 － 2	66	10	—	—	5b 層		ウマ	上顎歯	P4 または M1	右			焼けている。エナメル質のみ。

第 35 表　石川条里遺跡から出土したウシ

写真図版	管理番号	地区	出土地点	時期	層位	取上番号	種	部位	破片の状　態	左右	癒　合		備　　考
											近位	遠位	
—	17	1	SD009a	中世		№10	ウシ	中節骨			癒合		縦に切断、Dp（近位端前後径）概測：35.1㎜
29 － 5	18	1	SD009a	中世		№11	ウシ	大腿骨	骨頭破片、骨幹	左	癒合		18 は 17 の破片
—	36	3b･4a	SD060	近世			ウシ	歯	破片				未萌出の臼歯
29 － 6	43	1	SD080	中世		№1	ウシ	大腿骨	骨幹	左		癒合？	
—	44	1	SD080	中世		№3	中－大型	四肢骨骨幹	破片				上腕骨遠位骨幹
29 － 4	56	1	SK074	中世	1層		ウシ	寛骨	寛骨臼を含む腸骨骨幹	右			大きい
—	57	1	SK094	中世	1層		大型	寛骨	寛骨臼破片				

第 36 表　石川条里遺跡から出土したイノシシ

写真図版	管理番号	地区	出土地点	時期	層位	取上番号	部位	破片の状態	左右
29 － 3	58 － 2	1	SK094	中世			脛骨	近位骨幹	左

第 37 表　石川条里遺跡から出土した不明破片

写真図版	管理番号	地区	出土地点	時期	層位	取上番号	種	部位	破片の状態	備　　考
—	41	3b･4a	SD041	近世		№1	大型	四肢骨	骨幹	脛骨？ほぼ完形
—	42	3b･4a	SD065	近世	2層埋土		大型	肩甲骨？	破片	
—	54	1	SK004	中世		№2	不明	不明		
—	55	1	SK004	中世	北側埋土	№3	不明	不明	破片	2点。1点は肩甲骨破片。
—	61	1	SK341	中世			ウシ科またはシカ科	歯	エナメル破片	
—	63	3b･4a	SD039	近世			不明	不明	破片	焼骨　白
—	64	1	SK012	中世		№1	不明	不明	破片	朱色の土がついた破片あり
—	67	1	SK356	古代			大型	不明		

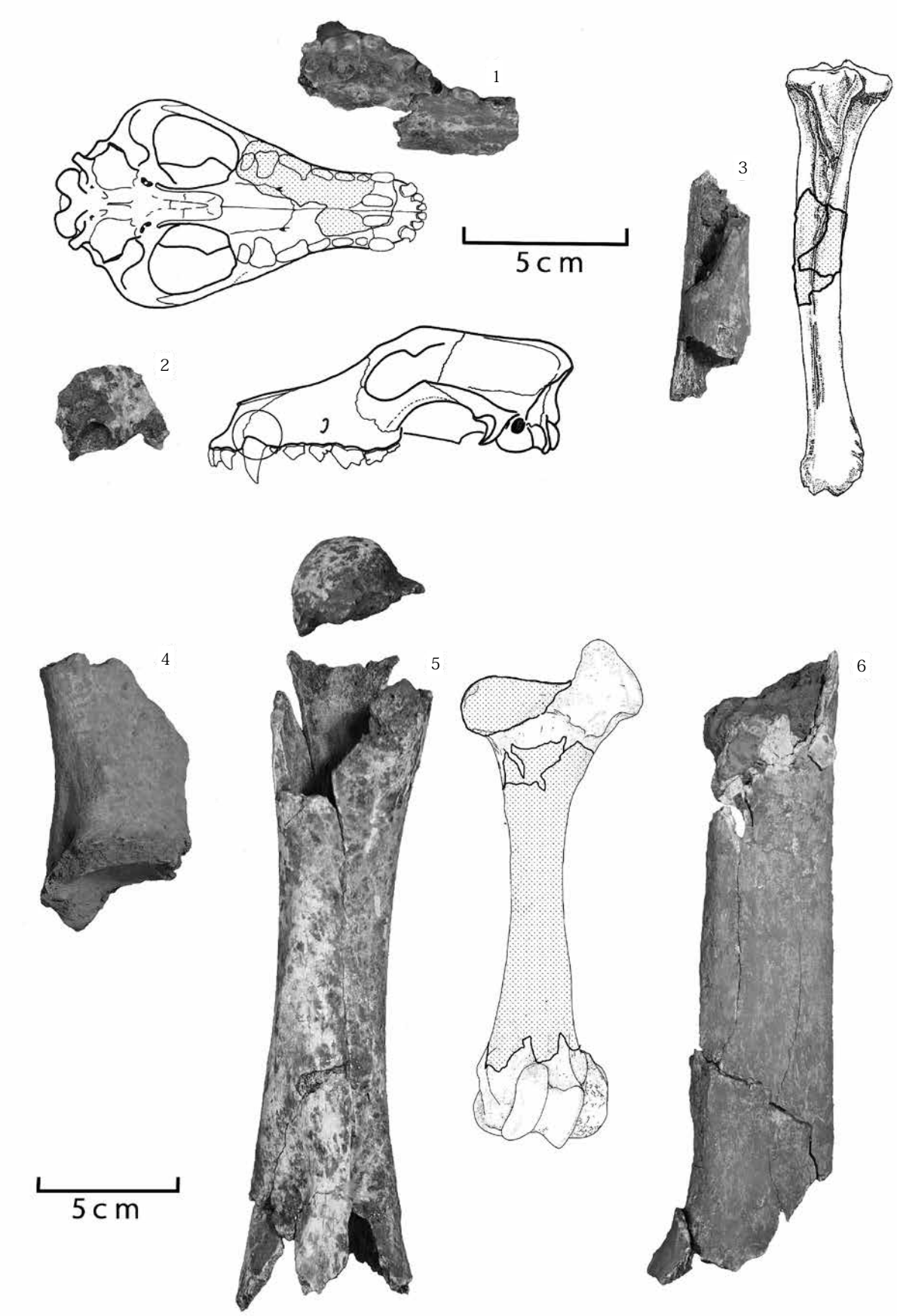
第 38 表　石川条里遺跡から出土したイヌの計測値

shutudo		計測値（㎜）	出土遺構	取上番号	管理番号
上顎歯	歯列最大長	60.8	SD009a	№2	30
	前臼歯列最大長	28.4			
	第４前臼歯幅（頬舌径）	8.2			
	第４前臼歯最大長	16.9			
	第１大臼歯幅（頬舌径）	13.7			
	第１大臼歯最大長	11.8			
	第２大臼歯幅（頬舌径）	9			
	第２大臼歯最大長	6.4			
下顎歯	第４前臼歯幅（頬舌径）	6.6	SL002・SD009a		62
	第４前臼歯最大長	15.8			

第 39 表　石川条里遺跡から出土したウマの計測値

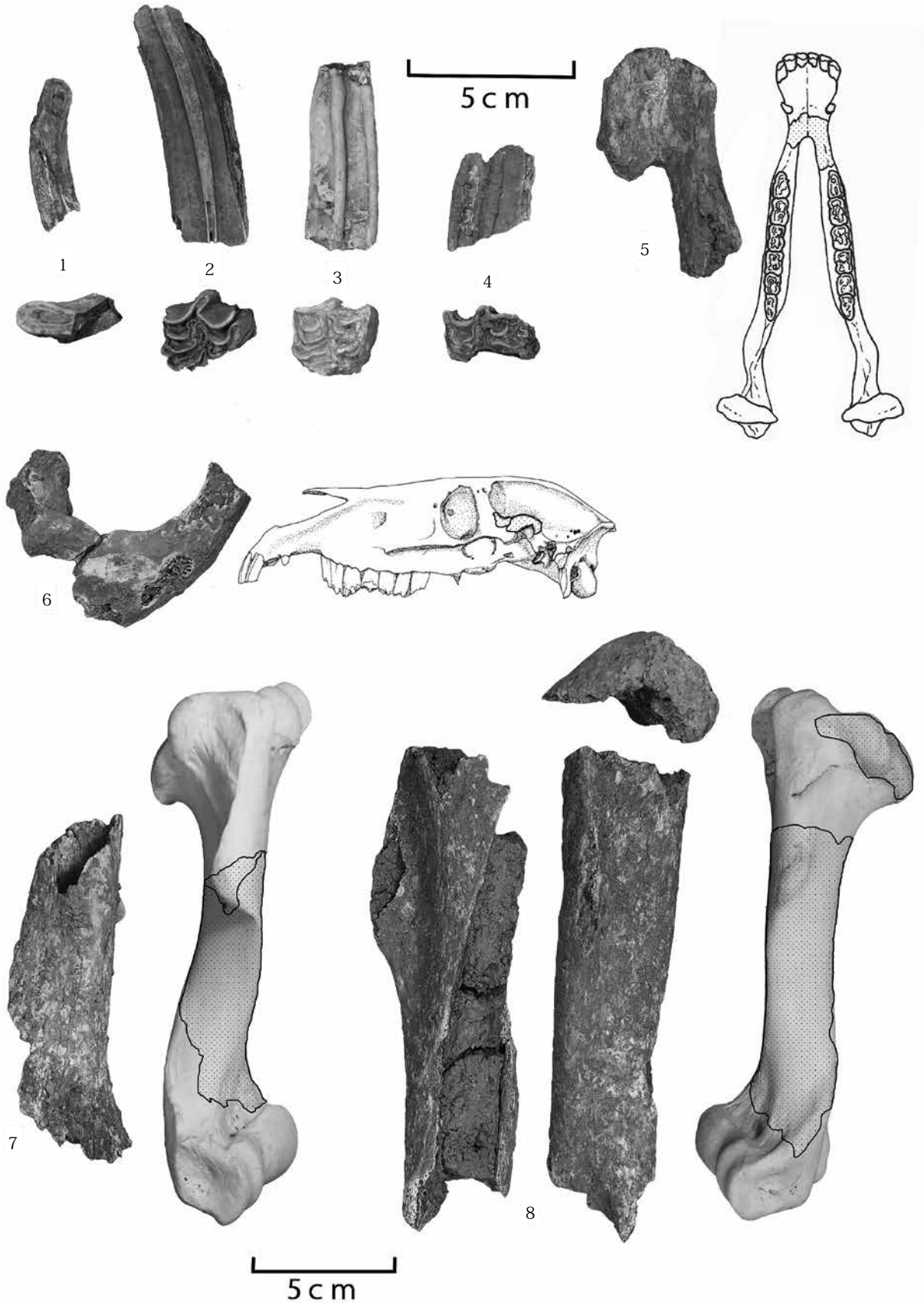
計測点の定義　数字は Eisenmann（1986）による計測番号。アルファベットは Driesch（1978）による略称。（　）の数字は概測

部　　位		計測値（㎜）	備　考	出土遺構	管理番号
上顎歯 M1/2　右	エナメル高	50.3		SD023	34
	エナメル最大長	21.1			
	エナメル幅（頬舌径）	20.8			
上顎歯 P4/M1　右	エナメル高	(73.1)		10 区 5b 層	66
	エナメル最大長	(23.4)			
	エナメル幅（頬舌径）	(21.5)			
上腕骨　左	骨頭　前後径	(57.5)		SD009a	27
橈骨　右	骨幹長（関節部は近位・遠位とも欠損、概測）	(290.0)		SD009a	22
	3（骨幹最小幅）SD	31.4			
橈骨　左	4（近位端幅）Bp	62.5		SD009a	29
	3（骨幹最小幅）SD	41.3			
中手骨　右	3（骨幹最小幅）SD	28.9	11、13 と同一個体	SD009a	12
	10（遠位端骨幹　幅）	43			
	11（遠位端関節面　幅）Bd	44			
	13′（遠位端　滑車外側最小前後径）	26			
	14（14 遠位端最大前後径）Dd	28.3			
基節骨（前肢）　右	3（最小幅）SD	(29.0)	12、13 と同一個体	SD009a	11
	4（近位端幅）Bp	(46.5)			
	5（近位端前後径）Dp	34.6			
中節骨（前肢）右	2（前面　長）	38.5	11、12 と同一個体	SD009a	13
	3（最小幅）SD	(37.2)			
	4（近位端幅）Dp	(39.7)			
	5（近位端前後径）Dp	(22.3)			
	6（遠位端関節面　幅）Bd	(41.0)			
基節骨　（前肢？）右	6（遠位端骨幹部幅）	37.5		SD023	35
	8（基節骨背面筋付着部　最小長）	19.6			
	12（内側遠位端～粗面）	16.4			
	14（遠位端関節面幅）	39.2			
末節骨　右	6（高さ）HP	30.0		SD009a	21
脛骨　左	7（遠位端　幅）Bd	58.8		SD081	51
	8（遠位端前後径）Dd	38.4			
	3（骨幹最少幅）SD	35.3			
	1（最大長）GL	(330.0)			
距骨　右	1（最大長）GH	54.3		SD009a	14
	2（滑車　内側長）LmT	51.5			
	3（最大幅）GB	26.0			
	3′関節面最大幅	40.6			
	4（滑車　中央の幅）	59.7			
	5（遠位関節面　幅）BFd	48.8			
	6（遠位関節面　前後径）	31.8			
	7（内側　前後径）	36.3			
距骨　左	1（最大長）GH	60.6	病変あり（骨増殖）	SK094	58－1
	2（滑車　内側長）LmT	58.2			
	3（最大幅）GB	29.5			
	3′関節面最大幅	43.5			
	4（滑車　中央の幅）	60.3			
	5（遠位関節面　幅）BFd	50.2			
	6（遠位関節面　前後径）	33.3			
	7（内側　前後径）	45.7			



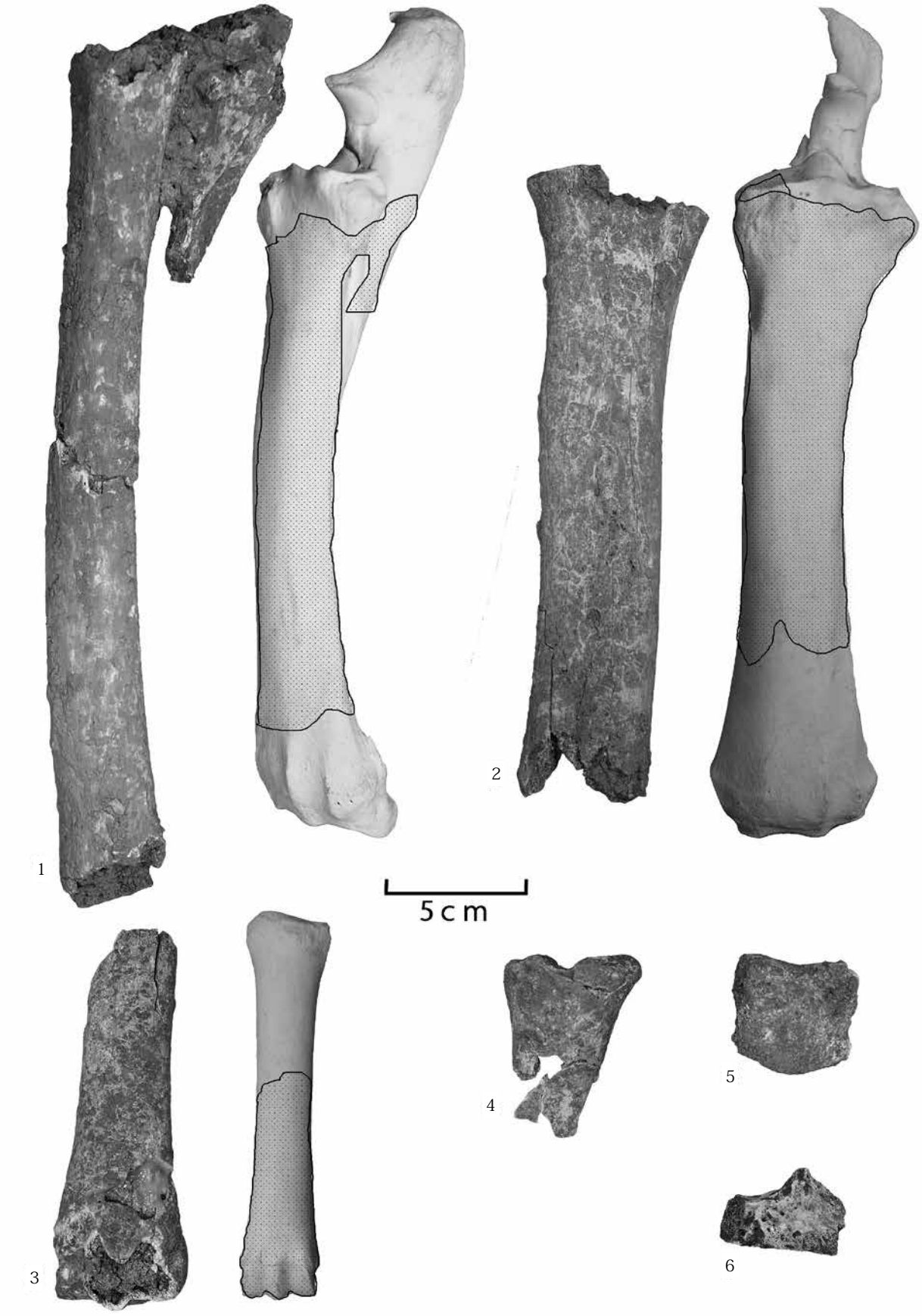
1．イヌ右上顎骨（30）　2．イヌ左上顎骨（31）　3．イノシシ左脛骨骨幹（58-2）　4．ウシ右寛骨臼（56）
5．ウシ左大腿骨骨頭と骨幹（18）　6．ウシ左大腿骨骨幹（43）

第 29 図　石川条里遺跡出土の動物骨 1



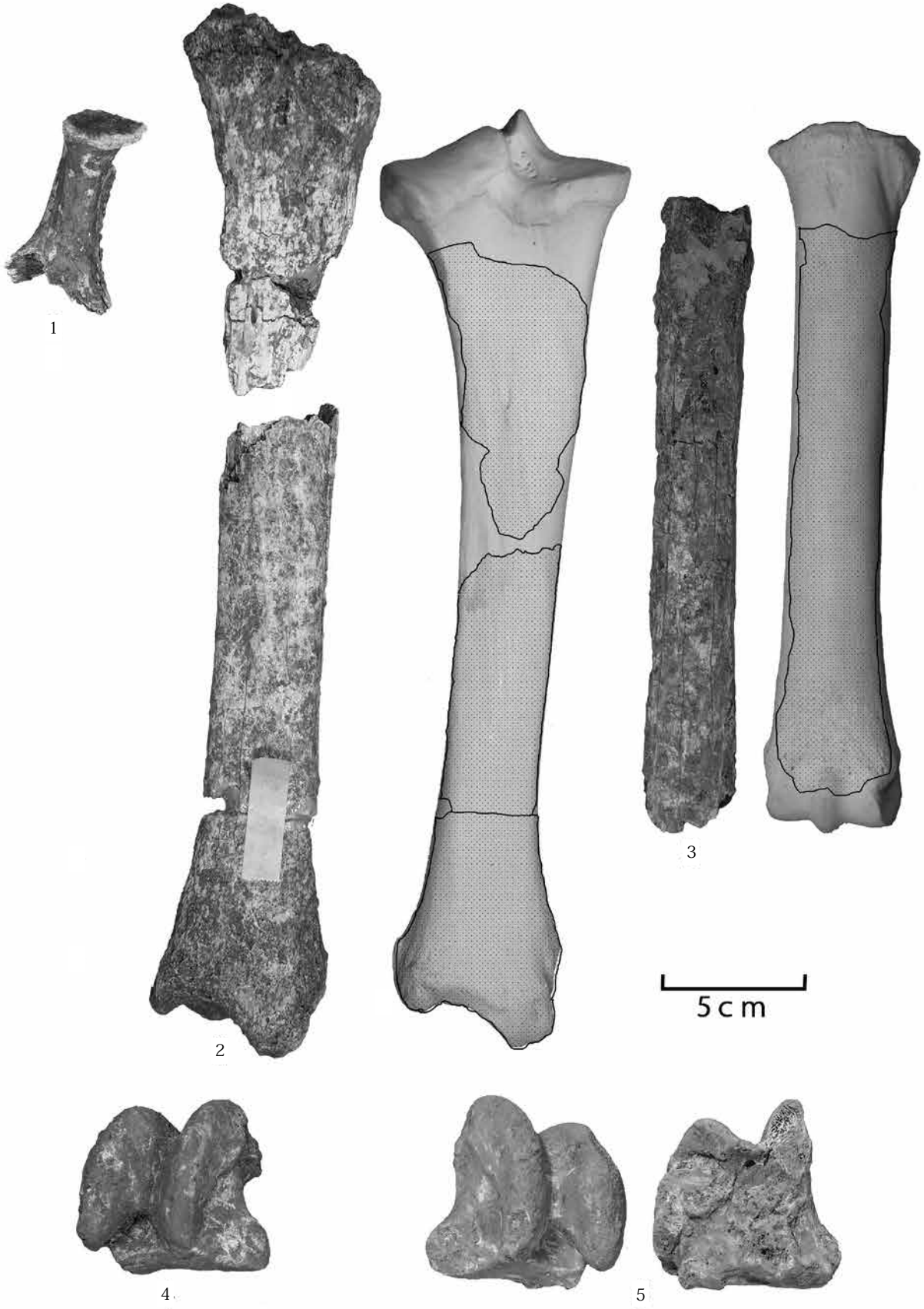
1．ウマ右上顎歯Ｉ３（45）　2．ウマ右上顎歯Ｐ４またはＭ１（66）　3．ウマ右上顎歯Ｍ１またはＭ２（34）
4．ウマ左上顎歯Ｍ３（38）　5．ウマ下顎縫合部（25）　6．ウマ左頬骨弓（53）　7．ウマ右上腕骨骨幹（46）
8．ウマ左上腕骨骨頭と骨幹（27）

第 30 図　石川条里遺跡出土の動物骨２



1．ウマ右橈骨および尺骨近位骨幹（22）　2．ウマ左橈骨（29）　3．ウマ右中手骨（12）　4．ウマ基節骨（11）
5．ウマ中節骨（13）　6．ウマ末節骨（21）

第 31 図　石川条里遺跡出土の動物骨３



1．ウマ左坐骨（33）　2．ウマ左脛骨（51）　3．ウマ中足骨（左右不明）（23）
4．ウマ右距骨（14）　5．ウマ左距骨（関節面に病辺）（58-1）

第 32 図　石川条里遺跡出土の動物骨 4

第３節　石川条里遺跡の古環境解析

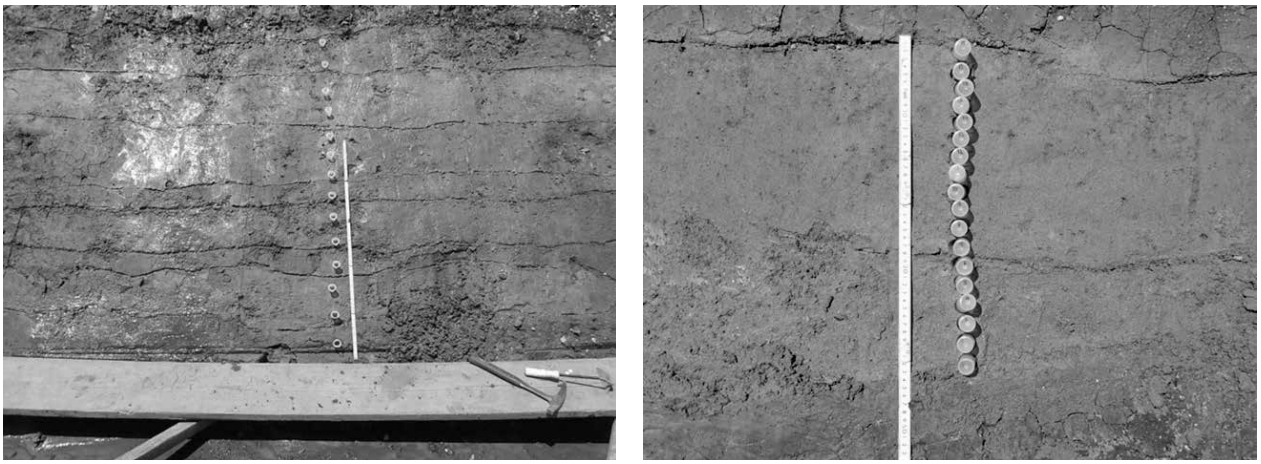
信州大学理学部特任教授　保柳康一

１　はじめに

長野盆地は千曲川とそれに流入する支流からもたらされた堆積物で埋積されている。長野、山梨、埼玉３県にまたがる甲武信ヶ岳に源流をもつ千曲川は長野県内を縦断した後に新潟県に入り信濃川と名称を変え日本海に注ぐ流路延長 367㎞、流域面積 11,900㎢を持つ河川である。2019 年 10 月関東地方西部を通過した台風による豪雨によって、長野盆地でも複数の堤防が決壊し大きな被害をもたらした。このような千曲川の洪水は歴史記録に数多く残されているが、文書としての最も古い記録は平安時代の西暦 888 年の仁和洪水である（河内 1983）。一方、長野盆地は縄文時代以降の遺跡が数多く見出されており古くから人間活動が活発で、それらの遺跡の発掘によって文書が残される前の生活や被った災害について知ることが出来る。千曲川流域では弥生時代以降の水田遺跡が多く見つかっており、このことから早くから稲作地域として土地利用されていたことが分かる。一方、この水田遺跡を覆う泥炭層や洪水を起源とすると思われる砂層も発見されている。これら自然の堆積物と人類の手が入った水田土壌等を科学的に分析することで、人類の活動の基盤となった当時の古環境を知ることが可能になる。特に、千曲川流域では歴史記録にも残されている西暦 888 年の洪水によると考えられる砂層が広く条里的水田遺跡を覆って見出される。この小論では石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群の堆積物の記載と試料の粒度分析、有機化学分析、珪藻化石分析から過去約 3,000 年間の環境変遷と地層中に記録された巨大洪水災害について考察した。

２　研究手法

長野盆地南部の石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群において、発掘現場内の壁面や深掘りトレンチの土層断面から、次の要領で分析用の試料を採取した。まず、地層の積み重なりや深掘りのトレンチの土層の累重とその特徴を記録し、分析用の試料を各土層もしくは等間隔（１㎝から 10㎝間隔）で 20ccプラスティックシリンダー（泥質層）、もしくは５ccバイアル（砂層）を壁面に打ち込むことで採取した（第 33 図）。また、２ｍのハンディージオスライサーを用いて、発掘現場外の土層が撹乱されていない場所において柱状試料を採取して、ここから同様の採取間隔で分析用試料を分取した。なお、時代の決定には、泥



第 33 図　試料採取 （左）20ccシリンダーによる泥質試料採取 （右）５ccバイアルによる砂質試料採取

炭層や砂層中の木片などの放射性炭素（^{14}C）年代を参考にした。採取した試料について、砂層についてはレーザー回析粒度分析器によって粒度のみを測定、泥質層については粒度分析に加えて、全有機炭素量（TOC）、全イオウ量（TS）、全窒素量（TN）および安定炭素同位体比（$\delta^{13}C_{org}$）などの化学分析を行なった。さらに一部の試料について、含まれる珪藻遺骸を抽出し、珪藻種の鑑定によって生息環境を考察した。

（１）粒度分析

試料の下処理：試料１～２ｇを５ccビーカーに入れ純水と少量の10％のH_2O_2を加えよく攪拌する。H_2O_2は有機物の分解・除去のために用いる。測定直前にこのビーカーを１分間程度超音波洗浄器に入れ試料を分散させる。

測定　［第34図－左］：測定にはレーザー解析散乱型粒度分析装置（ベックマン・コールター社、LS13 320）を用いる。ビーカー中の水に分散させた試料を全て試料投入口から装置に入れる。装置の循環水により試料は測定用セルに送られ、レーザー光とタングステン光を透過させ、レーザー解析散乱とフウランホーファー解析理論に基づいて粒径を測定する。測定範囲は、0.04㎛から2000㎛（２㎜）である。

（２）全イオウ量（TS）分析

試料の下処理：充分に乾燥させた泥質試料をメノウ乳鉢で粉末化する。粉末試料を約4.0～5.0ｇ分取し、アルミリングに入れ手動油圧ポンプで30～40MPaの圧力を加え、測定用のペレットを形成する。

測定　［第34図－右］：測定には（株）リガクの卓上型エネルギー分散蛍光Ｘ線分析装置EDXL300を使用する。この装置は試料にＸ線を照射し、試料の含有成分から発生するそれぞれの元素特有の蛍光Ｘ線の強度を検出器で測定することにより、試料中に含まれる各元素量を測定するものである。

EDXL300を起動し、Ｘ線をONにしてエージングをおこない、MCA較正を行なった後にファンダメンタル・パラメーター（FP）アプリケーションを作成する。FPアプリケーション作成の後、装置内の試料交換機に作成したペレットをセットし、FP法による測定を行なう。測定結果はwt％で出力される。

第34図　分析装置１　（左）レーザー解析散乱型粒度分析装置（ベックマン・コ―ルター社　LS13 320）
（右）卓上型エネルギー分散蛍光Ｘ線分析装置（リガク社EDXL300）

（３）全有機炭素（TOC）・全窒素量（TN）分析

試料の下処理：充分に乾燥させた泥試料をメノウ乳鉢で粉末化する。粉末試料600㎎程度をスクリュー管に入れ、濃度６Ｎに希釈したHClを試料が浸るまで加える。100℃以下に設定したホットプレート上で蒸発乾固させて無機炭素（炭酸塩）を除去する。乾固したら試料が浸るまで蒸留水を加え、再び乾固させるという作業を１日３回、２週間繰り返し充分にHClを取り除く。

測定　［第35図－左］：測定にはサーモフィッシャーサイエンティフィック社の元素分析装置Flash 2000を使用する。この装置は試料を完全燃焼分解することにより、CO_2・N_2ガスを発生させ、試料中のＣ・Ｎの含有量を定量的に測定するものである。測定前に、標準試料５試料を燃焼させ検量線をひき、その検

量線をもとにＣ・Ｎの wt％をもとめる。標準試料は Antipirine（Ｃ：70.19％、Ｎ：14.88％）を使用した。

20.00～60.00㎎程度の試料をスズ箔に包み、900℃で６分間燃焼させＣ・Ｎの wt％を測定する。14 試料ごとに標準試料を測定し、標準誤差の変動とバックグラウンドの確認をおこなう。

（４）安定炭素同位体比（$\delta^{13}C_{org}$）・窒素同位体比（$\delta^{15}N$）分析

試料の下処理：充分に乾燥させた泥試料をメノウ乳鉢で粉末化する。その際、試料中に含まれる材などは取り除く。

測定［第 35 図－右］：測定にはサーモフィッシャーサイエンティフィック社の元素分析計（Flash EA 1112）と安定同位体比質量分析計（Delta V, Advantage）を使用した。元素分析計で完全に燃焼させることにより発生した CO_2・N_2 のガスを He ガスで安定同位体比質量分析計に送り、試料中のＣ・Ｎそれぞれの同位体比を測定する。安定炭素同位体比の測定値は、サウスカロライナ州 PeeDee 層から産出するベレムナイト化石の $CaCO_3$ の値を基準として算出される（‰ vs.PDB，ここでは‰ vs.VPDB）。測定の際の標準試料は Atoropine（$\delta^{13}C = -20.8$‰，$\delta 15N = -3.0$‰）もしくは Glycine（$\delta^{13}C$：-32.3‰，$\delta^{15}N$：-1.12‰）、L-Alanine（$\delta^{13}C$：-19.6‰，$\delta^{15}N$：4.99‰）、L-Alanine（$\delta^{13}C$：-19.6‰，$\delta^{15}N$：9.97‰）、L-Histidine（$\delta^{13}C$：-11.4‰，$\delta^{15}N$：-7.58‰）を使用した。試料中に含まれる全有機炭素（TOC）量に応じて 1.00～7.00㎎程度を秤量しスズ箔に包み $\delta^{13}C_{org}$ と $\delta^{15}N$ の同位体比を測定する。８～12 試料ごとに標準試料を測定し、測定誤差の変動とバックグラウンドの確認をおこなった。

第 35 図　分析装置２　（左）CHN 元素分析装置（サーモフィッシャーサイエンティフィック社　Flash2000）
（右）元素分析装置（サーモフィッシャーサイエンティフィック社　Flash EA 1112）と質量分析装置（Delta V, Advantage）の組合せによる安定炭素同位体測定装置

（５）珪藻分析

懸濁液作成：泥質試料を乾燥機で 60～70℃で 12 時間乾燥させ、乾燥した試料を約 0.5ｇ計量する。試料を 200㎖ビーカーに入れ、イオン交換水を少量注ぎ泥化させる。さらにイオン交換水を 100㎖になるまで注ぎ懸濁し、15 秒放置した後に、ビーカーの底から懸濁液を吸い上げる。

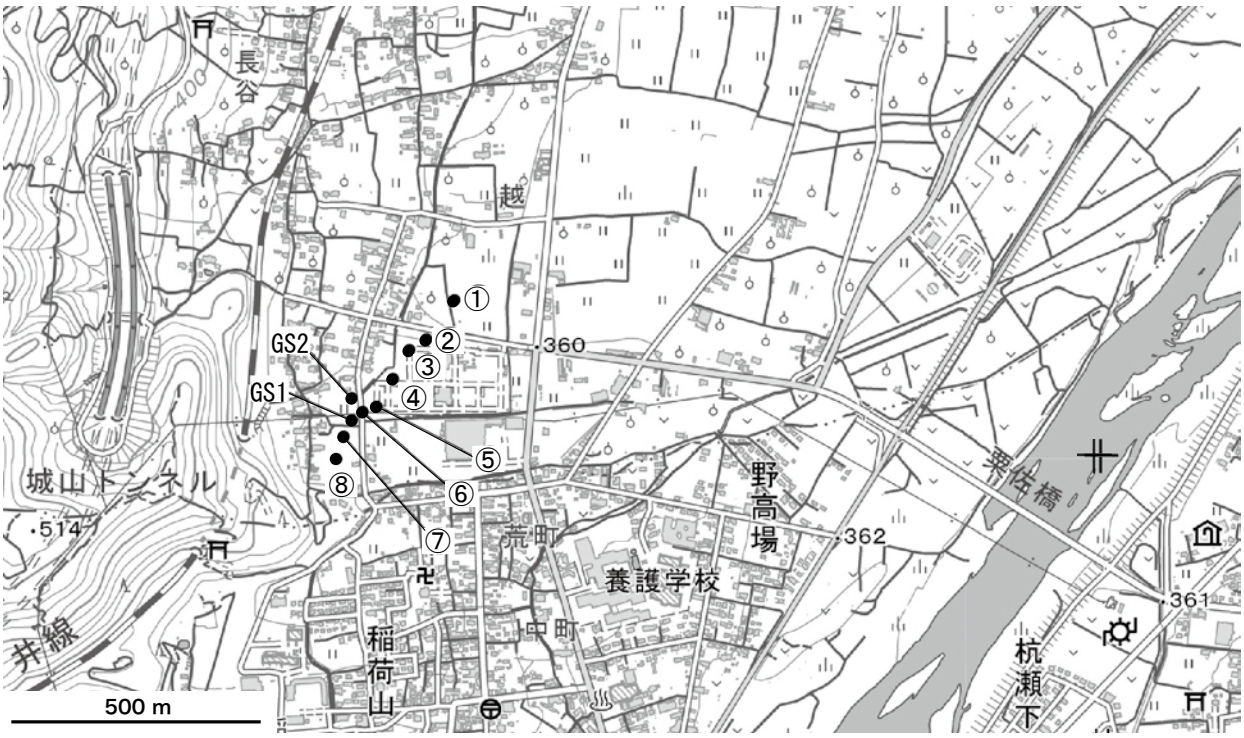
プレパラート作成：50～60℃に熱したホットプレート上に並べられたカバーガラス上に懸濁液を滴下し乾燥させる。乾燥後 120℃に温度をあげ、マウントメディアを１滴加えて発泡がおさまるまで待つ。発泡がおさまったら、スライドガラス上に気泡が入らないようにカバーガラスをかけ封入する。

鏡下観察：観察にはオリンパス社の生物顕微鏡 BX50F を使用する。種の同定は 1,000 倍でおこない、解像度を上げるためにイマージョンオイルを点着する。

３　石川条里遺跡の地形学的・地質学的立地

石川条里遺跡及びその南に隣接する長谷鶴前遺跡群は、長野市南端の千曲川左岸に位置している（第 36

図)。千曲川の河道の左岸に形成された自然堤防の西側の氾濫原低地上に形成された水田遺跡で、東側の塩崎遺跡群が自然堤防上の住居跡等から構成されるのに対して、氾濫原低地を水田とて利用していたことが示されている。氾濫原は西側の山地に接するところまで広がっている（第 36 図)。この山地は新第三紀後期中新世（600 万年前）の海底火山噴出物である裾花凝灰岩層からなり（第 37 図)、石川条里遺跡の存在する氾濫原低地とは長野盆地西縁断層によって接している。断層は西の山地側が上昇する逆断層で、断層上および東側に隣接する氾濫原は沈降傾向で現在では湿地もしくは水田が広がっている。なお、この断層は 1847 年に善光寺地震を起こした活断層であり、この活断層系は 800～2500 年の周期で地震を起こしていると考えられている。



第 36 図　石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群における試料採取地点①～⑧、GS1～2（地理院地図を利用）

千曲川沿いの自然堤防堆積物（ｎ）
氾濫源堆積物（ｂ）
裾花凝灰岩（Sl）

第 37 図　石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群周辺の地質図（加藤・赤羽 1986）

４　分析結果

（１）長谷鶴前遺跡群における深掘りトレンチ

石川条里遺跡の南に隣接する長谷鶴前遺跡群の地点⑦（第 36 図）において、地表下約４ｍの深掘りトレンチの壁面土層を記録するとともに分析用の試料を採取した。一方、最上部は地表下 50㎝に位置する砂層の頂部まではそれまでの発掘調査の掘削で失われているので、砂層頂部を基準（０㎝）として土層の積み重なりを底部（386㎝）まで記録し、試料の分析をおこなった（第 38 図）。

上部砂層０～100㎝（Ｘ層）：中粒砂から極細粒砂からなる厚さ約１ｍの砂層。基底部が中粒砂、最上部が極細粒砂であるが、砂層底面から 20～50㎝付近に未固結泥のブロック状の塊（以下、「偽礫」という）が並ぶ層準があり、この部分で平均粒径が減少している（第 38 図）。珪藻分析では深度 83㎝（第 38 図Ｎ５）から 30 個体程度が観察された。*Cymbella* 属（②・③）、*Achnanthes lanceolata f. rhombica*（④・⑤）、*Gommphonema* 属（⑥～⑪）、*Stauroneis* 属（⑫）、*Pinnularia* 属（⑬～⑰）、*Gommphoneis* 属（⑱～⑳）、*Neidium* 属（㉑）など多様な珪藻が同程度の割合で産出した。この砂層に含まれていた木片の ^{14}Ｃ暦年較正年代１σのうち最大確率を示す年代は 862calAD～896calAD を示す。

上部 100～120㎝（XII、XIII 層）：根痕を含む黒色の泥炭層。TOC 値は 10％前後と高く、窒素の含有量も相対的に高い。泥炭層の ^{14}Ｃ暦年較正年代は、下部で西暦 550～600 年、上部で 650 年～700 年である

上部 120～200㎝（XIV～XVIII 層）：ほぼ均質の明灰色の泥層であるが、最上部のみ漸移的にやや暗い色調の灰色、暗灰色となる。また、白色層が残されている部分もあるが、攪拌され側方に連続せず、明灰色の泥層と区別がつかなくなる。粒度は全体的にシルトで上部では細粒ないし中粒の砂が挟在する。この区間では TS、TOC、TN はいずれも低い値で安定している。$\delta^{13}C_{org}$ は -26～-27‰の間で安定した値を示す。ただ、１か所のみ -35‰より低い値を示している。一方、δ^{15}Ｎは０～－２‰の間で変動しており、下部の方がやや低い値を示している。この部分からは ^{14}Ｃ年代は得られていない。また、珪藻殻の産出もなかった。

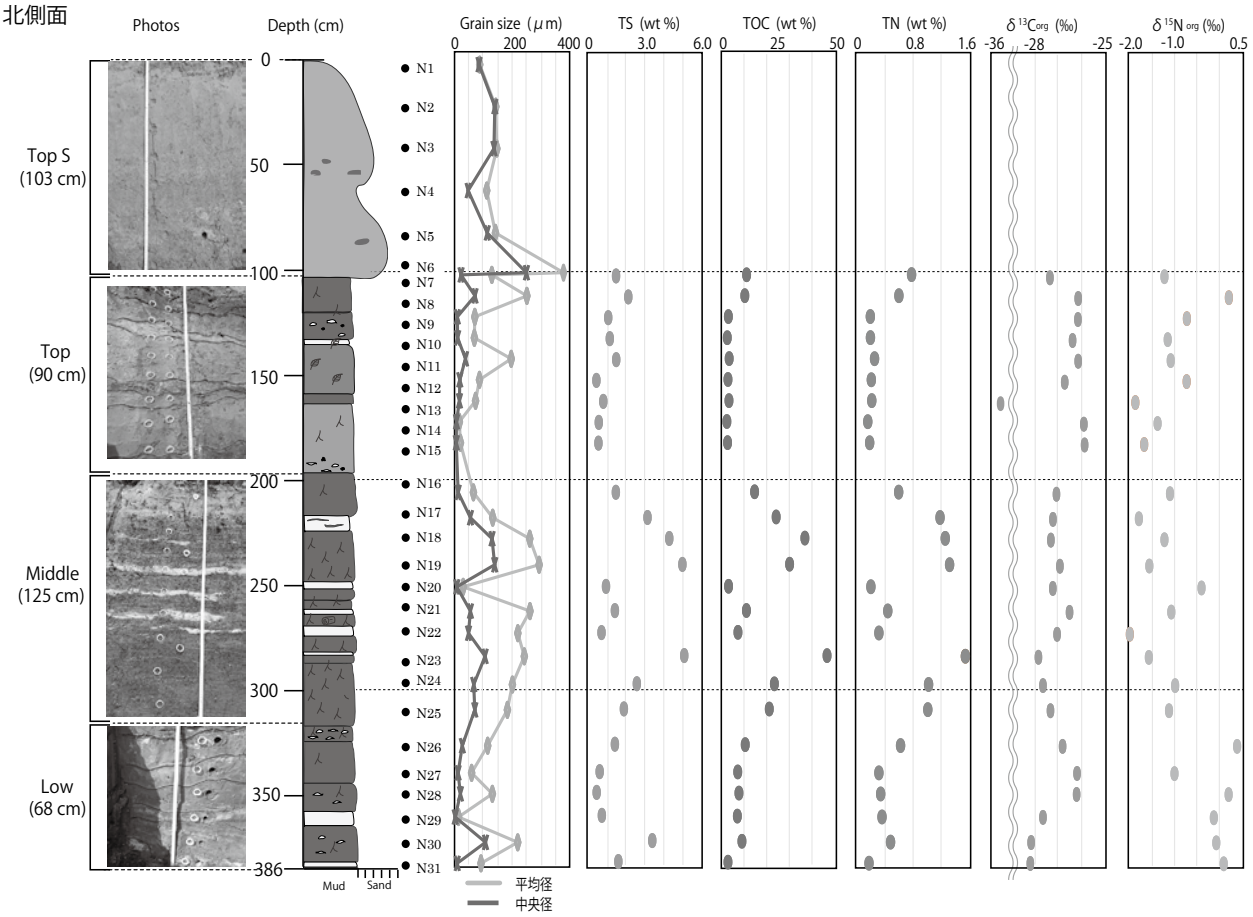
中部 200～325㎝（XIX～XXI 層）：凝灰質のシルトからなる薄層（１～３㎝）の白色層を挟む黒色泥炭層である。泥炭層から得られた ^{14}Ｃ暦年較正年代は紀元前 1000 年前後に集中する。TS、TOC、TN いずれも高い値を示すことが多い。$\delta^{13}C_{org}$ は -27‰前後を示す。珪藻殻は２つの試料からは産出せず、６試料から 10～20 個体ほど産出、深度 300㎝前後の２試料からはそれぞれ 80 個体以上と 50 個体程度の産出を観察した。主要な産出種は *Cymbella aspera*（②・③）と *Pinnularia gentilis*（⑭）の２種で、*Achnanthes lanceolata f. rhombica*（④・⑤）、*Cyclotella bodanica*（①）、*Stauroneis phoenicentron*（⑫）、*Gomphonema parvulum*（⑧・⑨）、*Neidium iridis*（㉑）などが伴う。

下部 325～386㎝：不連続な白色薄層を挟む灰色泥層。TOC、TN は上位の泥炭層より低い値で安定している。$\delta^{13}C_{org}$ は -26～-27‰、δ^{15}Ｎは０‰前後で相対的に他より高い値を示す。珪藻殻の産出はこの区間では他の区間より多く、その種類も多い。*Achnanthes lanceolata f. rhombica*（④・⑤）、*Pinnularia gentilis*（⑭）、*Stauroneis phoenicentron*（⑫）、*Eunotia implicata*（㉖）などが産出する。なお、深度 350㎝（Ｎ 28）からは今回の分析で最も多い 100 個体以上が観察され、*Meridion circulare*（㉓）の産出が特徴的である。また、多様な *Eunotia* 属（㉔～㉖）の産出によっても特徴づけられる。

（２）砂層の分布

地点⑦における泥炭層を覆う砂層は、石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群において広く平安時代の水田跡を覆って分布し、連続した砂層であることが分かる（第 40 図）。

分布：平安期の水田跡を覆う砂層は、第 36 図の北東部の①および②の２地点以外の③～⑥地点と⑦、⑧地点、それにハンディージオスライサーで約 1.5ｍ試料を採取した GS1 と GS2 で確認された。③～⑥地

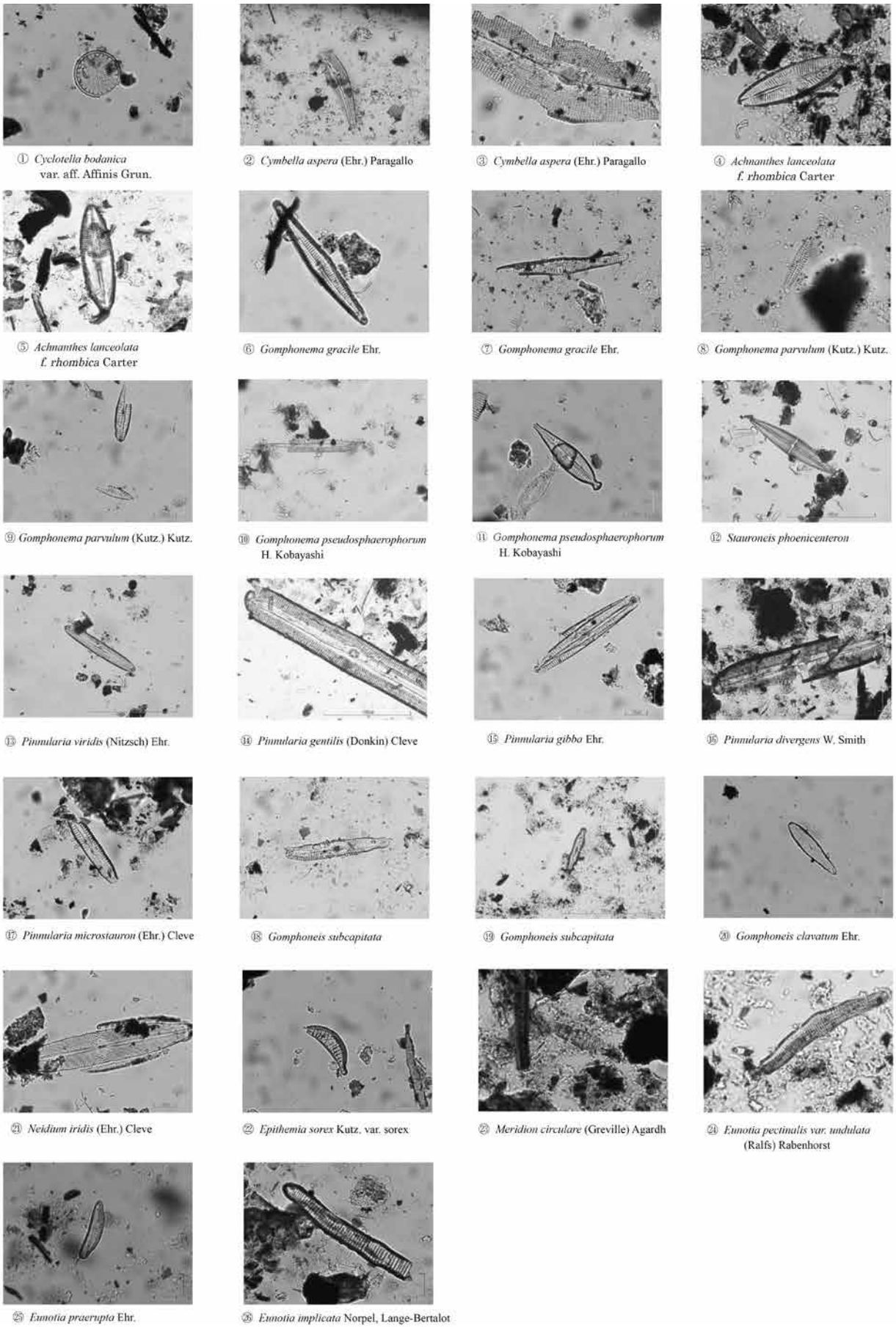


第 38 図　長谷鶴前遺跡群地点⑦深掘りトレンチにおける土層累重と分析結果

第 40 表　地点⑦深掘りトレンチの試料から産出した珪藻遺骸

属　　名	属名＋種名	カタカナ表記	環境指標	番号
Cyclotella（キクロテラ）属	*Cyclotella bodanica*	キクロテラ ボダニカ	湖沼[*1]	①
Cymbella（キンベラ）属	*Cymbella aspera*	キンベラ アスペラ	沼沢湿地[*2]	②, ③
Achnanthes（アクナンテス）属	*Achnanthes lanceolata f. rhombica*	アクナンテス ランセオラータ エフ ロンビカ		④, ⑤
Gomphonema（ゴンフォネマ）属	*Gomphonema gracile*	ゴンフォネマ グラシル	沼沢湿地[*2]	⑥, ⑦
	Gomphonema parvulum	ゴンフォネマ パービュルム	広域[*3]	⑧, ⑨
	Gomphonema pseudosphaerophorum	ゴンフォネマ プシュードスファエロフォーラム		⑩, ⑪
Stauroneis（スタウロネイス）属	*Stauroneis phoenicenteron*	スタウロネイス フォエニセンテロン	沼沢湿地[*2]	⑫
Pinnularia（ピンヌラリア）属	*Pinnularia viridis*	ピンヌラリア ビリディス	泥炭地[*4]	⑬
	Pinnularia gentilis	ピンヌラリア ジェンティリス	沼沢湿地[*2]	⑭
	Pinnularia gibba	ピンヌラリア ギバ	沼沢湿地[*2]	⑮
	Pinnularia divergens	ピンヌラリア ダイヴァージェンス		⑯
	Pinnularia microstauron	ピンヌラリア ミクロスタウロン		⑰
Gomphoneis（ゴンフォネイス）属	*Gomphoneis subcapitata*	ゴンフォネイス サブカピタータ		⑱, ⑲
	Gomphoneis clavatum	ゴンフォネイス クラヴァタム		⑳
Neidium（ネイディウム）属	*Neidium iridis*	ネイディウム イリディス	沼沢湿地[*2]	㉑
Epithemia（エピテミア）属	*Epithemia sorex*	エピテミア ソレックス		㉒
Meridion（メリディオン）属	*Meridion circulare*	メリディオン サーキキュラレ	河川[*2]	㉓
Eunotia（ユーノチア）属	*Eunotia pectinalis*	ユーノチア ペクティナリス	泥炭地[*4]	㉔
	Eunotia praerupta	ユーノチア プラエルプタ	泥炭地[*4]	㉕
	Eunotia implicata Norpel	ユーノチア インプリカータ		㉖

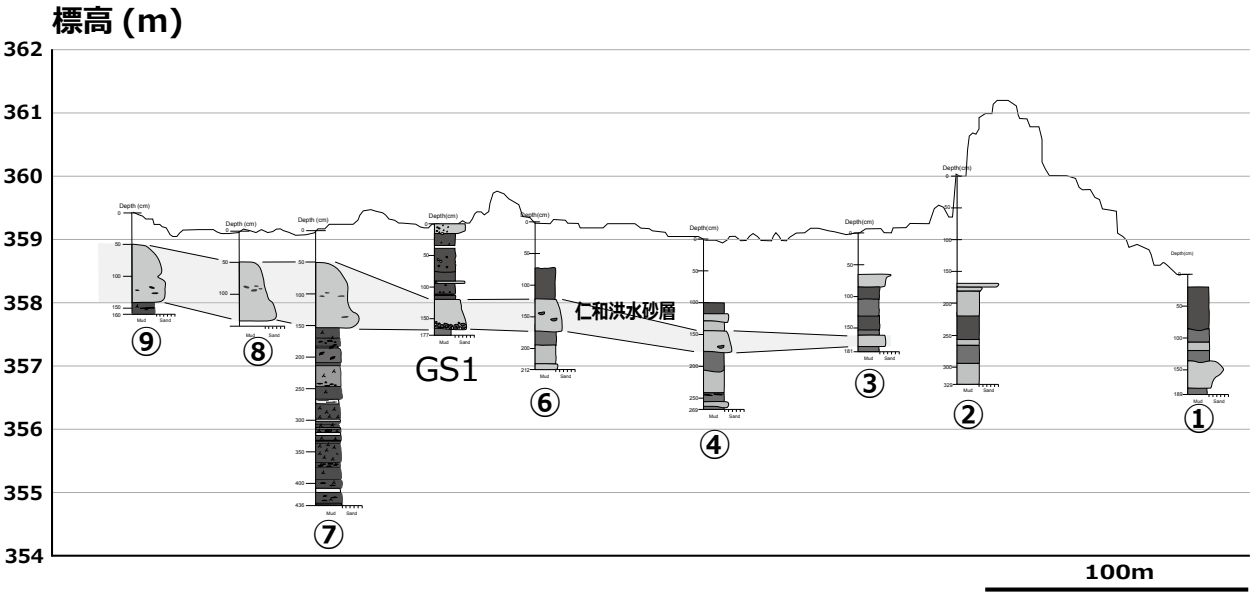
[*1] 原口，2001；[*2] 安藤，1990；[*3] 西村ほか，2012；[*4] 鹿島，1986



第 39 図　地点⑦深掘りトレンチの試料から産出した珪藻遺骸（番号①～㉖は第 40 表参照）
各写真の横幅は②④⑦⑫⑬⑭⑯⑲は 200㎛、他は 100㎛。

点と GS1、GS2 は石川条里遺跡内になり、⑦、⑧地点は長谷鶴前遺跡群内である。砂層の厚さは、南部の長谷鶴前遺跡群内の⑦、⑧では最大約１ｍあるが、北に向かって薄くなり地点⑥では約 30㎝となる。それより北ではこの連続する砂層の分布はない。また、砂層が存在する標高的は南側がやや高く長谷鶴前遺跡群内では砂層の上面が 358.5m、石川条里遺跡南部では 358m、分布の北限では 357.5ｍと徐々に標高を下げている。

特徴：この砂層の特徴は層の下部から上部に向かって、砂粒の大きさが減少する正級化構造を示すことである。砂層の粒径は下部で中粒砂（径 0.5～0.25㎜）、上部では細粒砂（径 0.25～0.125㎜）もしくは極細粒砂（径 0.125～0.064㎜）まで連続的に砂層上位に向かって粒径が小さくなる。粒度分析結果からは、南部の砂層の中部で細かくなるが、下部もしくは中部に泥の偽礫を含んでいるため、分析試料採取時に泥質部も採取されるため平均粒径が小さくなっているためである。偽礫は、下位や側面の自然堤防の泥等を流れが削って、流れの中に取り込むもので、河道底面の流れ、洪水流、海底を流れる混濁流などの強い流れによって運搬され堆積した砂層にしばしば観察される。この偽礫による砂層中部での粒径の減少を考慮すると、いずれの地点の砂層も１回の正級化構造を示す砂層であるとみなされる。



第 40 図　西暦 888 年仁和洪水砂層の分布

５　考察

（１）砂層の起源

一般的に砂粒を主体とする堆積物は、有機炭素など有機物起源の元素や珪藻化石（珪藻殻）を含むこともほとんどない。しかし、今回の分析では長谷鶴前遺跡群（地点⑦）の砂層下部（砂層底面から約 20㎝）の試料から、保存の良い多種の珪藻遺骸が産出した。これは砂層の下部から中部に含まれている泥の偽礫中に含まれていた珪藻遺骸が検出されたことによる。砂の運搬にはある程度の速さ（一般には 20㎝ / 秒以上）の水流が必要で、河川氾濫原には洪水流で運搬されてくる。砂層に含まれていた珪藻遺骸は湿地、沼沢地、水田に生息する種であり（第 40 表）、洪水流がこれらの環境の泥層を巻き込みながら流下してきたことを示している。また、平安時代の条里遺跡を埋積することと木片の ^{14}C 年代とから、仁和洪水により堆積したものである結論づけられる。仁和洪水は、西暦 888 年（仁和４年）に千曲川上流の八ヶ岳山麓に形成された天然ダムが決壊して洪水が発生し長野盆地まで達したもので、千曲川上流に分布する大月川岩屑流堆積物の地質学的考察と古文書記録（類聚三代格、日本紀略、扶桑略記）に基づき明らかにされた

(河内 1983)。このことから、上田盆地、長野盆地の平安期の遺跡や水田跡を覆う砂層は、その際の洪水によりもたらされたものであると解釈されている（川崎 2000)。

一般的に洪水砂層は層の下位から上位に向かって粒径が粗くなる逆級化構造をもつ。それは洪水初期に先ず細粒な粒子が河道から氾濫原に溢れだし、続いて洪水最盛期により粗粒な粒子が氾濫原にもたらされ逆級化構造を形成し、氾濫最盛期を過ぎると水位の下がった河道に戻っていくので流速が遅くなる際に形成される粒度の減少、すなわち正級化構造は形成されない（Iseya 1989)。しかし、今回見出された平安期の水田を覆う砂層は正級化構造のみが観察される。正級化構造は、流速の減少や静水中での砂粒の沈降によって形成されるため、正級化構造を持つ理由は洪水流が河道へ戻ることなく、そのまま氾濫原に水が滞留し砂を堆積させたことを示している。石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群の洪水砂層は、細粒物質が氾濫原にもたらされる洪水の初期ステージを欠いて、最盛期の強い流れの洪水流がいきなりこの地を襲い水塊が形成され、そこで砂層が堆積したためと考えることができる。南部に分布する砂層のみが偽礫を含むことは、南部で洪水流の勢いが極めて強かったことを示す。水流は北に向かって減衰したことを示しており、このことから、砂は南側からこの地域に流れ込んだ洪水流によりもたらされたと考えられる。その流れは地点③と②の間の西の山地側から張り出した小さな尾根状の高まりによって止められ、その北の地点①②には到達しなかった可能性が高い。なお、長谷鶴前遺跡群の南側には山地の尾根が張り出していることを考慮すると、この流れは千曲川方向の北東へ向かう洪水流から分岐して、南東側からこの地に流入したと考えられる。

一方、千曲川右岸の千曲市屋代の地之目遺跡の水田跡を覆う厚さ約２ｍの仁和洪水砂層は、最下部付近で逆級化構造、その上位に２サイクルの正級化構造を示す。これは溢れだし初期から氾濫最盛期に向かう粒径の増大と２度の洪水流の到達を示していると考えられる（保柳・亀谷 2022)。このように千曲川の右岸と左岸では、仁和洪水の到達回数が違うと思われる。地之目遺跡等にみられる千曲川左岸側の１回目の洪水は右岸側には到達しておらず、２回目の洪水のみ右岸の石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群を襲ったと考えることができる。また、その流れは１回目が河川水位の上昇により自然堤防から溢れ出し、洪水水位が上昇し、その後に全面決壊によって強い洪水流が到達したのに対して、２回目は上流から津波のような洪水流が氾濫原全体を流れ下ったと考えられる。これは仁和洪水が天然ダム決壊による洪水であり、１回目の洪水は千曲川上流の天然ダムの一部が壊れることにより、千曲川水位が上昇し、自然堤防の一部から洪水が発生したのに対して、２回目の洪水は上流の天然ダムの全面崩壊によって、佐久、上田、長野盆地全体を覆うように上流から洪水流が流下したのではないだろうか。この洪水が豪雨などによる河川増水ではなく、天然ダム決壊という特殊な原因を持つ為かもしれない。

（２）環境変遷

縄文後期から縄文晩期：長谷鶴前遺跡群地点⑦の深掘りトレンチ下部の灰色泥層からは年代を示す遺物および ^{14}C 年代が求められていないので正確な年代を知ることはできない。しかし、その上位の中部の泥炭層の ^{14}C 年代が紀元前 1000 年前後の縄文晩期を示すので、この泥層はそれより以前である。縄文時代の気候は 1000～2000 年の周期で温暖期と寒冷期を繰り返したとされ（Kawahata et al. 2009)、したがってこの下部の泥層は温暖な気候であった縄文後期の紀元前 2000 年頃に千曲川と西側山地からの小河川の氾濫によって形成された氾濫原上の水域で堆積したと考えられる。この層からは、沼沢湿地、河川などの環境を示す珪藻遺骸が多数見出されることからもこのような環境を推定することができる。

その上位中部の泥炭層は、人為的な攪拌がなされていない。白色の薄層は凝灰岩起源の細粒な砕屑物から構成されており、湿地には西側の裾花凝灰岩からなる山地から洪水などにより水が供給されており、運ばれた細粒の凝灰岩砕屑物が白色薄層として残されたと考えられる。また、一般には淡水には硫黄は含

まれないが、この層準で検出される硫黄も凝灰岩起源であると思われる。紀元前 1000 年の縄文時代晩期は寒冷な気候が続いたとされ（Kawahata et al. 2009）、そのことによって泥炭層が形成されたと考えられる。珪藻遺骸も泥炭地、沼沢湿地、湖沼を示す種が出ており、湿原が広がり寒冷な気候によって泥炭が堆積していったと考えられる。

弥生時代から平安時代：泥炭層を覆う均質な明灰色泥層は、人為的に撹乱されている。すなわち耕作されることで、TOC、TN、TS の値は低く保たれている。水田遺跡をつくる層準で、その時期はこの地で稲作が始まった紀元前 500 年（Crema et al. 2022）の弥生時代から平安時代におよぶと考えられる。ただ、深掘りトレンチでは、上部で泥炭層が形成されており、泥炭層の示す西暦 600 年前後には、水田は縮小して湿地となっており、稲作に使われていなかったと思われる。その理由としては西暦 500～700 年は寒冷な時代であるとされ（吉野 2009；Kawahata et al. 2017）、寒冷化によって人口の減少や水田維持の困難さによって、長野盆地では多くの水田の耕作放棄によって湿原化し、有機物保存に適した寒冷気候が泥炭層を形成したと考えられる。

仁和洪水後：今回データとして示していないが、仁和洪水砂層直上の泥層には湖沼等といった止水域の珪藻化石が含まれ、洪水後に一時的に水域が出来たことを示す。しかし、珪藻遺骸が含まれるのは砂層直上から採取した試料のみで、その上位の泥層は珪藻遺骸を含まない TOC、TN、TS の低い安定した値を示す人的撹乱によって均質化された水田耕作土である。このように、西暦 888 年の後、この地域は比較的早く水田として再び利用されるようになったと思われる。

６　まとめ

寒冷期の縄文晩期が終わり紀元前 700 年以降の温暖化によって弥生時代以降稲作地域は拡大した。しかし、今回の検討から長野盆地南部では西暦 500 年から 700 年の寒冷化によって一時水田の多くは放棄され、広く泥炭層が形成された。その後、西暦 700 年以降の温暖期になると急速に水田が広がるが、888 年の洪水により大きな被害を受ける。しかし、多くの遺跡からは復旧の跡が認められ、中世温暖期とされるこの時期は水田や住居の復興が比較的速やかにおこなわれたと思われる。歴史文書にはこの後も千曲川による洪水記録があるが、この地域の遺跡では、塩崎遺跡群の水路跡に残された戌の満水（1742 年）の砂層のみで、多くの場所で人間活動による洪水災害後の復興が砂層の存在を失わせている。

参考文献

安藤一男 1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 巻２号　p.73-88　東北地理学会
Crema, E. R., et al. 2022, Bayesian analyses of direct radiocarbon dates reveal geographic variations in the rate of rice farming dispersal in prehistoric Japan. Science advances, 8, eadc9171.
原口和夫 2001「余呉湖の珪藻」『Diatom』17 巻　p.141-148　日本珪藻学会
保柳康一・亀谷兼人 2022「仁和洪水（西暦 888 年）砂層の堆積学的研究からみた千曲川洪水と土地利用の関係」日本地質学会第 129 年学術大会　［T13, O-6］
Iseya, F.1989, Mechanism of Inverse grading of suspended load deposits. Sedimentary facies in active plate margin, 113-129, Terra Pub., Tokyo
鹿島　薫 1986「沖積層中の珪藻遺骸群集の推移と完新世の古環境変遷」『地質学評論』59 巻７号　p.383-403　公益社団法人日本地理学会
河内晋平 1983「八ヶ岳大月川岩屑流」『地質学雑誌』89 巻３号　p.173-182　日本地質学会
Kawahata, H., et al. 2009, Changes of environments and human activity at the Sannai-Maruyama ruins on Japan during the mid-Holocene Hypsithermal climatic interval. Quaternary Science Reviews, 28, 964-974.
Kawahata, H., et al. 2017, Climatic change and its influence on human society in western Japan during the Holocene. Quaternary International, 440, 102-117.
川崎　保 2000「仁和の洪水砂層と大月川岩屑なだれ」『長野県埋蔵文化財センター紀要』８号　p.39-49
西村公助、渡邊晴香 2012『中川遺跡発掘調査報告』p.27-39　財団法人大阪市博物館教会大阪文化財研究所
吉野正敏 2009「４～10 世紀における気候変動と人間活動」『地学雑誌』vol.118　p.1221-1236　公益社団法人東京地学協会

第６章　総括

第１節　石川条里遺跡

１　弥生時代～平安時代の水田面・遺構出土土器の年代

（１）弥生時代中期後半の土器の年代　［図版 84］

今回の調査で確認された最も古いⅧ層水田面や畦跡、土器集中等から栗林式土器が出土した。栗林式土器は長野県北半に分布する弥生時代中期後半の土器で、畿内Ⅲ様式後半～Ⅳ様式に併行する長い期間を含む。ここではこれまでの栗林式土器編年に照らして本遺跡出土土器の時期を絞り込みたい。

栗林式土器は笹澤浩による大別以後（笹澤浩 1976）、長野盆地での高速道等の大規模開発に伴う資料増加に伴い、細分編年案がいくつか示されるようになった。栗林式土器の編年案は、古段階・中段階（古・新）・新段階の４段階とする寺島孝典案（寺島 1993）から、それを継承し新たに壺の文様帯の検討から栗林式１式・２式（古・新）・３式の４段階とする贄田明案（贄田 2000）と石川日出志案（石川 2002）、さらに１式を細分し１式（古・新）・２式（古・新）・３式の５段階とした寺島による再案（寺島 1999）、１式（古・新）・２式（古・中・新）・３式の６段階の馬場伸一郎案（馬場 2008）がある。これ以外に笹澤正史は上越市吹上遺跡出土の栗林式土器を小松式土器との共伴関係を捉え、吹上遺跡１期古段階（古相・新相）・中・新段階の３（４）段階を栗林１式、吹上遺跡Ⅱ期古段階を栗林２式古段階、２期中・新段階を栗林２式新段階に対応させている（笹澤正史 2013）。笹澤正史は栗林式土器自体を細分したものではないが、従来の栗林１式がより細分しうる可能性を示している。また、鈴木正博は松原遺跡出土土器を 10 段階に変遷を捉えられるとしている（鈴木 2014）。このように周辺地域の研究はより細分化する傾向にあるが、県内では十分な検証を行えておらず、今回出土した土器も破片が多いため、あまり細かい編年・変遷案との対比は難しいと予想される。ここでは現時点での県内で最も細分しえている栗林５、６段階案と比較する。また、今回出土した土器は甕が多いため、贄田・石川の示した壺の文様帯によって土器年代を捉えることは難しく、各編年で示された甕の様相を比較する。

今回、Ⅷ層-1 層水田の検出面や関連遺構から出土した甕は、２・３のように胴部中位が膨らむ器形で、なかには６のように口縁より胴部径のほうが大きいものもある。口唇部はキザミや押圧文は認められず、20 のような縄文が施文されるものがある。また、体部に櫛描文が施され、文様は７～９の縦羽状文と６のような波状文が主体である。櫛描文は胴部下半まで施文され、なかには縦羽状文の崩れた文様とみられる横走・斜走櫛描文を縦位に並列させる２・３がある。頸部に 15・18・20 のように簾状文を有するものがあり、19 は摩滅するが頸部は波状文で、体部はタテ羽状文とみられる。波状文では縦位の櫛描直線文を加えるものや、胴部下半に刺突文を加える例はみられなかった。

これらの特徴から、今回石川条里遺跡で出土したⅧ-1 層の土器年代は、寺島・贄田・石川編年の栗林２式の新段階以後で、馬場編年では栗林２式新段階以後に当てられると思われる。栗林３式まで含むかどうかは甕のみでは判断が難しく、３式の壺頸部に特徴的にみられるとされる簾状文風の沈線文は壺の破片自体が少なく確認できなかった。少ない土器からの判断ながら、Ⅷ-1 層の時期は栗林２式の新段階を中心とするとみられるが、３式を含む可能性も考えておきたい。

下層のⅧ-2 層の出土土器は僅かで、図示したのは甕（13）と壺（17）のみである。13 は今回出土した土器で数少ない櫛描横羽状文甕で、文様は胴部最大径部分の上半にとどまる。しかも櫛描横羽状文の下端には横位の櫛描横線文があり、類似文様は塩崎遺跡群の栗林１式とみられる胴部中位の刺突文に重ねて引かれる例がある。この二つの特徴から 13 は、栗林１式と思われる。17 は折り返し口縁にもみえる口縁片だが、口唇部に縄文施文はない。形態は古墳時代前期の土師器壺口縁にも類するが、出土層位はⅧ-2 層なので混入品ではないとみられるが、詳細は不明である。

以上から、Ⅷ層水田年代はⅧ-2 層が栗林１式、Ⅷ-1 層が栗林２式新段階（～３式）にかかる頃とみられる。また、本遺跡Ⅷ-1 層の年代より若干古いが近似時期と思われる中野市川久保遺跡では、水田面の脇及びその隣接する微高地上で壺・甕を中心に完形土器が集中的に数か所に分かれて出土した。そのあり方は本遺跡の SQ001 と類似すると思われる。

なお、SC089 から赤彩された壺形の鉢（10）と甕形の有孔鉢（11）が出土した。SC089 の芯材の放射性炭素年代測定は弥生時代後期～古墳時代の年代だが、10 は弥生時代後期以前の松原遺跡等の栗林式土器にもみられ、11 は類例が少ないが屈曲口縁と倒卵形の胴部形から栗林式の可能性を考えた。SC089 は土器と放射性炭素年代測定値が一致していないが、出土土器から弥生時代中期後半の可能性もある。

（２）弥生時代後期土器の年代　［図版 84・85］

今回の調査で出土した弥生時代後期土器は、長野県北部に分布する吉田式土器（笹澤浩 1970）、箱清水式土器（桐原 1957）に該当する。これらの土器は畿内Ⅴ様式に併行するとされていたが、近年、箱清水式後半期には北陸、東海地方の土器が共伴することが明らかになり、その対比から箱清水式土器後半期は庄内期にかかるとされる。弥生時代後期は比較的長い時間幅だが、編年の細分検討も進んできている。

吉田式土器は標識遺跡の吉田グランド遺跡の調査により資料が増え、頸部に特徴的な鋸歯文も栗林式に系譜が求められる可能性が指摘される（千野 2001）。また、箱清水式土器は変化が乏しいなかで高坏の形態変化を捉えた青木和明の検討（青木和 1984）を端緒に、千野浩や青木一男が細分案（千野 1989、青木一 1999）を提示している。千野・青木一男は吉田式土器と箱清水式土器に様式的画期を捉えず、青木一男は栗林式土器から長野県東北部域で展開する同じ系統の連続する土器群としてまとめて段階区分した。今回は青木一男編年の６段階区分と比較する。

なお、馬場伸一郎は青木一男１・２段階を吉田式土器、３・４期を箱清水式土器前半、５・６段階を箱清水式土器後半に対比し、これまでの調査で分析された放射性炭素年代測定値を暦年較正曲線 IntCal20 の較正年代で整理しなおした（馬場 2020）。そこで、青木一男の２段階が１世紀を中心とする前後の時期、箱清水式土器開始の３段階が１世紀中頃～２世紀初め頃、４段階がおよそ２世紀、５・６段階が２世紀中頃から３世紀前半との年代観を示した。現時点では１段階と栗林との境がやや不鮮明に思われるが、２段階までの吉田式土器がやや短く、箱清水式土器の成立が１世紀中頃まで遡るという従来よりもやや遡った年代観で、終末も３世紀前半までを含む長い時間幅となっている。

今回出土した土器のなかで層位的にも古い土器はⅥ層出土の壺（22）で、ヘラ描沈線の鋸歯文を施す吉田式に該当する。受け口口縁の壺（27）も類似時期の所産で、青木一男編年の１・２段階とみられる。Ⅵ層が分布しない西部地区 SC061・065 出土の甕（25・26）は摩滅して文様は不鮮明で口縁を欠損するが、頸部屈曲が弱く、胴部が球胴化していないことから３・４段階だろうか。SC061 出土の壺 24 は体部下半片で腰部が、折れて稜線を形成するので３段階以後とみられるが、破片のため上部の形状が不明で絞り込めない。SD187 出土の甕（23）は頸部の屈曲が弱く、３・４段階頃とみられる。SC061・065 に位置的に近い９区の古墳時代前期遺構である SX002 出土土器（27～29）のうち、壺 27 は受口状口縁で赤彩の有無

は判然としないが１・２段階頃とみられる。また、甕 28・29 は口縁まで残存する数少ない例で、口縁まで波状文が施される。このうち 28 は口縁端部が若干内湾する。端部が内湾する口縁は１～３段階と６段階にみられるが、口縁まで波状文を充填するので３段階以後ではある。９区のⅧ層水田検出面出土の甕(35) は頸部周辺の破片とみられる。頸部の屈曲が弱い点は３・４期頃だろうか。高坏・鉢類は１区出土の 30～33 を図示した。１区は塩崎遺跡群に近い地点でもあり、集落域に対応した弥生時代後期の幅広い時期を含む可能性がある。高坏 30～33、赤彩鉢 34 は時期の詳細は不明である。

以上、僅かな破片を材料に年代を検討したが、Ⅵ層やそれ以上の土層に僅かに１・２段階の土器が含まれるが、調査区西側の水田関連遺構出土土器は３・４段階頃で、箱清水式土器の前半期とみられる。馬場の示した年代観に照らすと１世紀中頃から２世紀となる。

（３）古墳時代土器の年代　［図版 85～87］

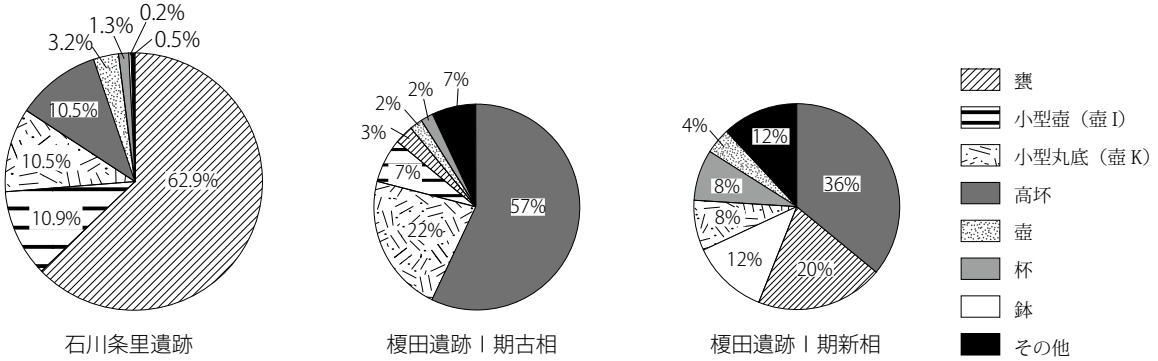
今回の調査ではⅤ層を中心に古墳時代の水田遺構が確認された。１区～4b 区にかけてはⅤ層が分層されたが、土器の形態差から見て、出土土器に年代幅はあまりないとみられる。これまでの周辺域での土器研究に照らして、今回の調査で出土した土器の年代を考える。

今回の調査では検出遺構は少ないながら、土器は広範囲で出土し、当該期にあたる土器の器種は甕、壺、高坏、小型壺、小型丸底土器、高坏、器台、坏（または鉢）がある。その器種構成は、第 41 表のとおりである。

器種別破片数は個体数ではないため、厳密な器種組成とは言い難いが、おおよその傾向を知る材料となる。その比率は甕 62.9%、台付甕 0.1%、壺 3.2%、小型壺 10.9%、小型丸底 10.5%、高坏 10.5%、器台 0.3%、坏 1.3%、鉢と考えられる土器 0.2%、器種不明の破片 0.1% である。集落遺跡の竪穴建物跡出土土器の器種構成のデータはあまりないが、榎田遺跡では一部の竪穴建物跡出土土器の器種比率が紹介されている。集計方法が異なる上に本遺跡では水田跡全体の年代幅があって、直接比較しにくいが、参考に類似時期の古墳時代中期～後期１期の例と比較すると（第 41 図）、榎田遺跡のⅠ期古相で高坏 57%、壺Ⅰ（小

第 41 表　古墳時代土器の器種別破片数

	甕	台付甕	壺	小型壺	小型丸底	高坏	器台	坏	鉢か	その他
遺構	387	0	23	138	78	53	2	32	0	2
検出面他	1154	1	55	130	179	205	5	1	5	0
合計（2450 片）	1541	1	78	268	257	258	7	33	5	2



第 41 図　古墳時代土器の器種別組成（石川条里遺跡・榎田遺跡）

型壺）７％、壺Ｋ（小型丸底）22％、甕３％で他の壺類や他器種の比率は記述されていない。新相で坏８％、鉢 12％、高坏 36％、壺Ｋ（小型丸底）８％、甕 20％で他器種の比率は不明である。高坏・小型丸底の占める比率が時期を追って減少する傾向ながら、Ⅰ期では比率が 50％以上を占めている。本遺跡では高坏等の供繕具が少なく、逆に甕が多い器種構成なので、やはり集落遺跡の組成とは異なる。この様相を土器出土状況に照らすと、甕の破片数の多さは、大畦畔 SC038 脇で甕や小型壺が出土したような用例が該当するとみられる。その一方で９区のみ小型丸底土器が多い特異な状況があるが、ここでは祭祀に関連するとみられる SX002 が検出された。

次に年代を遺跡出土土器の特徴から整理する。甕は破片ばかりで器形全体が窺えるのは 39 のみだが、球胴で口縁が「く」字形に屈曲する形態とみられる。口縁端部が外側に屈曲する 40・45・55・82、やや直立気味の 39 等のように若干口縁形態差がみられる。壺は小片ばかりで、年代を知る手がかりは有段口縁（78）と折り返し口縁片（54）のみである。78 は破片からの推定ながらやや口径が大きいが、明瞭に屈曲してあまり崩れていない。やや古い様相にみえる。高坏は全体形が窺えたものは１点もないが、口縁は坏部途中で折れる 72・79・80 のような形態で、脚は柱状ながら 57・74・75 のようにやや膨らみながら比較的長いものや、脚中位が膨らみ短い 47 の例がある。また、73 のような脚中位に円孔穿孔するものがあり、脚下端は折れて広がる 43・83 のような形態が知られる。これ以外に器台か高坏脚部かが判然としないが、直線的に開く 58 がある。小型丸底土器は 52・61・64 のような球胴形や、46・60・62・89 のような断面が算盤玉形の扁平胴部に「く」字形に折れる口縁が付くものがあるが、口縁が長く胴部より大きく開く形態のものはない。小型壺も球胴形の 42・66 等のほか、腰部がやや屈曲する扁平胴の 65 もある。

これ以外の器種は僅かな出土である。器台は 84 があり、58 も器台脚の可能性がある。自然堤防寄りの１・２区と微高地を含む 4a 区周辺から出土した。また、坏は水田域から出土したものはなく１区 SD100 出土の黒色処理される 91 のみである。水田域からの出土はないのは坏類が出現する以前の時期が水田時期の中心とみられる。

以上のように甕は「く」字口縁で球胴、壺は有段と折り返し口縁、高坏は柱状脚高坏か裾広がりで、坏類が僅かながら認められる点、小型丸底土器は扁平なものがある等の特徴は年代を考える上で注目される。坏類が僅かで器台もあまり含まれない点、小型丸底土器は扁平なものと球胴がみられる点、高坏は柱状脚の屈折高坏である特徴を当地域周辺で類似した土器編年に対比させると、本村東沖遺跡の２・３段階（千野 1993）、更埴条里遺跡・屋代遺跡群の屋代古墳４期（鳥羽 1998）、榎田遺跡のⅠ期（廣田 1999）に対比しうると思われる。屋代遺跡群の古墳４期と榎田遺跡Ⅰ期は坏類が出現する新相と、坏を伴わない古相に分けられているが、坏類の出土が僅かである点は古相中心の時期と思われる。ただし、器台や台付甕、明瞭に折れる有段口縁壺など古い様相の土器も僅かにあり、若干遡る時期を含む可能性がある。

当該期の年代だが、屋代遺跡群では屋代・古墳５期に須恵器 TK208 型式、TK23 型式が伴うとされ（鳥羽 1998）、近年の須恵器編年の年代から５世紀前半の時期（白石 2006）とされている。従って、それに先立つ本遺跡のⅤ層を中心とする水田跡は５世紀前半頃が中心で、若干遡る時期を含むとみられる。

（４）古代土器の年代

本遺跡ではⅣ層を中心として古墳時代末～奈良時代、平安時代前期、平安時代後期の３時期の土器が出土した。これまでに示されている古代土器編年と対比しながら３時期の土器年代を検討したい。

その前に、今回の水田遺跡出土土器を従来の編年案に照らす上で少し注意点があるので触れておく。これまでの古代土器編年は集落遺跡の竪穴建物跡等に同時か近似時期に廃棄されたとみられる土器の器種・焼物種等の組み合わせの特徴を捉えて段階設定されている。そこでは個別の土器型式はあまり触れられて

いないが、それは生産時期が異なる土器が混在することを前提としていることがある。例えば、須恵器坏底部の切り離し技法はヘラ切から回転糸切への変化が知られるが、生産地の窯跡では僅かな混在はあっても、基本的に窯毎に両者は併存しないと捉えられている（中島 1997）。しかし、消費地である集落遺跡では両者が混在し、その比率の違いが時間差と捉えられている。また、灰釉陶器も生産地で設定されている複数型式のものが消費地で混在することも知られる。消費地では生産年代の異なる複数型式の土器が混在した状態のまま、使用の様式と仮定して「組み合わせ」の在り様を時期差と捉えていると思われる。本遺跡のような破片で散在的に出土した状況では、従来の編年のように組み合わせからの検討は難しく、１片ずつ型式的に生産年代を検討せざるをえない。従って、破片から捉えられた年代は使用・廃棄までの時間幅を考慮しない生産年代に寄った年代といえる。また、従来の編年では一部に須恵器・土師器坏類の法量や部位の計測値から型式的に捉える試み（原 1989・小平 1990・澤谷 1998・鳥羽 1999）もあるが、すべての土器で型式検討は行われておらず、しかも破片では型式が特定できない等、実際には年代比定で苦慮するものも多い。ここでは幅のある年代でしか捉えられなかったことを断っておく。

なお、これまで公表されている古代土器編年案として中央自動車道長野線に伴う吉田川西遺跡での検討（原 1989）、続く松本市内遺跡での小平編年（小平 1990）、遺跡周辺では長野市篠ノ井遺跡群（西山 1997）（以下「篠ノ井編年」という。）、更埴条里遺跡・屋代遺跡群（鳥羽 1999）を参照した。長野市周辺の古代土器検討も松本平の古代土器編年を基にしており、年代観は研究状況の違いから若干違うが、各編年の時期区分はほぼ対応している。ただし、松本平と善光寺平では地域差もあり、須恵器坏Ｂの出土量や法量分化の状況、非ロクロ調整坏類の消滅時期、ロクロ調整黒色土器や黒色土器埦・皿の出現時期、灰釉陶器椀・皿等の出土量と焼物種内の比率等に若干差異もある。

①　古墳時代末～奈良時代の土器の年代　［図版 88～90］

古墳時代末の土器は１区近世遺構混入の須恵器坏蓋（96）、同細頸壺（97）、同高坏（100）があり、図示していないが２区出土の同廻口縁もここに含まれる可能性がある。他に土師器または黒色土器があるが、詳細な時期が捉えきれないため、年代が捉えやすい須恵器を中心に時期を検討する。なお、長野県下では須恵器生産は中野市茶臼峯窯跡９号窯址等で、７世紀前半に始まる可能性が指摘されている（笹澤・原田 1977）が、資料が限られるため東海地方の猿投須恵器編年（城ケ谷 2015）を参考にした。96 は口径が 10.5 ㎝強と推測され、天井部と口縁境に稜を残し、口縁は若干広がり、猿投窯Ⅲ-1 期頃とみられる。100 の高坏は透かしをもち、猿投Ⅲ-3 期では透かしがないとされ、それ以前のものと思われる。ただし、中野市牛出古窯遺跡 SW03（中島 1997）では８世紀の透かしのある高坏脚がみられ、100 は８世紀の可能性も残る。細頸壺は前段階の猿投Ⅱ-4 期に出現するとされ、97 は猿投Ⅱ-4 期以後と考えられる。上記に取り上げた１区の古墳時代末の土器は猿投窯Ⅲ-1・2 期頃と併行し、年代は７世紀第２四半期～中葉が中心とみられる。この時期と断定しえた遺構はない。

奈良時代の土器は、非ロクロ調整黒色土器坏・高坏、ロクロ調整黒色土器坏Ａ、須恵器は坏Ａ・坏Ｂ、皿、長頸壺、甕Ａ・Ｅ、蓋等がある。4b 区、7b・８区溝跡、10 区～12 区等の西側調査区で多く出土し、SD169 から複数片の土器が出土したが他は散在的な出土であり、比較的限定された時期の土器の組み合わせが捉えられた出土例はない。また、遺構では 7b・８区の SD172 と SD175・176、SD172 と SD173 が重複しているが、各遺構方位はほぼ類似して溝跡端部の位置も重なる等から関連した遺構と思われる。ある程度の活動時間幅があったと推測される。

まず、非ロクロ調整の黒色土器坏・高坏だが、混入を除く遺構出土品では１区 SD127 の 98、7b・８区 SD169 の 109、SD170 の 115 を図示し、他にも 7a 区 SD142 等から出土している。非ロクロ調整土器は篠

ノ井編年、松本平編年では４期（８世紀後半）頃に消滅、更埴・屋代編年では３・４期（８世紀中葉～後半）頃にも稀に存在すると捉えられている。これらの土器は３・４期を下限とするが、比較的破片数はあるので２期（７世紀末～８世紀初頭）前後を含む可能性がある。また、ロクロ調整黒色土器坏Ａは松本平編年では４期以後に出現するとされるが、更埴・屋代編年ではロクロ調整黒色土器坏が２期末～３期の屋代遺跡群 SK4622、３期の新幹線更埴条里遺跡 SB5054 から出土し、出現は３期に遡る可能性が指摘されている。今回、SD169 からロクロ調整黒色土器（110）が出土したが、松本平編年に照らせば４期だが、更埴・屋代編年に照らせば３期に遡る可能性もあることとなる。なお、7a 区 SD142 からロクロ調整とみられる土師器坏（104）が出土した。かなり表面は摩耗していて、平安時代後期の土師器とも考えたが、奈良時代のロクロ調整土器の可能性も残る。

次に須恵器坏だが、調査区西側出土の底部はヘラ切りでナデ調整の坏で図示したのは SD170 の 113、SC058（平安時代畦畔下部）の 118、９区の 126、11b 区の 128 がある。口縁部がわずかに外反するやや深い器形である。須恵器坏の器形変遷は丸底口縁外反器形→底径が広く平底の箱型形態（盤状）→底径が小さい逆台形へとされるが、上記の４点は盤状とは言い切れず更埴・屋代編年２・３期頃のものと類似する。一方、SD066 出土の 102 は盤状器形で底部は回転糸切で、更埴・屋代編年の須恵器坏Ａ内底径の変遷に照らせば、本例が 8.6㎝なので３・４期に該当する。更埴・屋代編年では２期末～５期（８世紀初頭～９世紀初頭）までは須恵器坏に火襷が明瞭に認められる傾向が指摘されており、この点は出土品にもみられるので矛盾ない。この 102 は条里型地割の溝跡 SD064 と重複する SD066 からの出土で条里型水田の施工上限年代を示すとみられる。

須恵器坏Ｂでは高台の内端が接地する例はなく、外端接地高台かまたは方形高台であるため、更埴・屋代３期以後とみられる。坏Ｂは多種の法量のものがみられるが、松本平編年では坏Ｂの法量分化は３期頃から始まり、４・５期に最分化し６期（９世紀前半）に法量種が減り、７期（９世紀中葉～後半）に坏Ｂ自体が消滅するとされる。なかでも口径 15～16㎝・器高６㎝強とみられる 125 や 180 のような須恵器坏Ｂは、４期以後に明確になるとされる。更埴・屋代編年では、この法量の坏Ｂは古代１期に既に出現するとしているが、中野市高丘古窯址群では須恵器坏Ａの底部ヘラ切段階ではこの法量よりも大型のものがあるものの、該当する法量はやや不明瞭に思われる。松本平編年と更埴・屋代編年では若干齟齬があるが、更埴・屋代編年では坏Ｂ自体の出土量が少ないことや、上述した本遺跡の高台形態からすれば、３・４期のものと捉えられる可能性がある。

須恵器の無台皿（107）や、外反口縁の長頸壺（116）は、中野市の高丘丘陵古窯群では須恵器坏Ａ底部ヘラ切のみ出土する窯跡（中島 1997）にみられ、須恵器無台皿は８世紀中頃まで口径がかなり縮小しながらも残存する。107 は底径からすると８世紀前半の可能性がある。ただし、これらの土器も松本平編年での集落遺跡出土資料では、いずれも４期まで出土例がある。また、盤（111）は、中野市高丘丘陵では８世紀前半頃に生産量が多いようだが、集落遺跡では皿部が「く」字形に明瞭に折れる形態は、やや遅れてやはり４期頃まで残存する可能性は残る。

以上のように、わずかな土器からの検討で詳細な年代は詰め切れなかったが、本遺跡出土の奈良時代土器は松本平編年、更埴・屋代編年での２～４期の枠のなかに収まるとみられる。時期幅も広いが、消費地では古い土器も新しい時期に残ることを考慮すれば、ロクロ調整黒色土器の坏や回転糸切須恵器坏Ａ、深身の須恵器坏Ｂがあることから、調査区西側は３・４期頃（８世紀中葉頃～後半）に耕作されたともみられる。ただし、非ロクロ黒色土器坏が多いことや、須恵器坏Ａの形態から２・３期頃（８世紀初頭～前半頃）の特徴のある土器が一定量存在する。特に非ロクロ黒色土器坏は脆弱で長期に残存しないと思われ、２期前後の時期にも耕作等があったとみられる。7b・８区の奈良時代遺構は SD174 を切る SD176・175、

SD172 と SD173 の重複があり、少なくとも２時期の変遷が想定しうる。この変遷と対応すると考えられる８世紀前半の非ロクロ調整の黒色土器や底部ナデ調整須恵器坏Ａは SD083、127、105、142（174）、170 で出土し、後出するロクロ調整黒色土器坏Ａは SD169 から、底部回転糸切の須恵器坏は SD066 から出土している。上記以外の SD173・175・176・177 も関連するとみられるが出土遺物がなく時期の詳細は不明である。長谷鶴前遺跡群１区では条里区画内に未耕作地として残された古い水田内に異方位の大畦畔２条が重なっており、ここでも２時期の水田改変が推定されるが、7b・８区の溝跡の変遷と対応するかは土器が小片のみで不明である。

実年代は更埴・屋代編年では２－３期境が A.D. 735 年頃、４期の年代は資料に恵まれず不明ながら８世紀後半、４－５期の境は A.D. 794 年頃とする。これに従えば本遺跡土器は８世紀前半から８世紀後半にかかる時期まで含むこととなる。これまでの長野盆地の水田遺構調査では、川田条里遺跡の７世紀後半～８世紀前半とされる水田以後は水田様相が不明であるが、本遺跡例は８世紀中頃から平安時代の条里出現までの間の水田遺構の可能性があることとなる。

②　平安時代前期の土器の年代　［図版 89］

平安時代前期と捉えられた土器は基本土層Ⅲ～Ⅳ層およびⅣ層関連遺構、Ⅰ・Ⅱ層から破片で出土したものがほとんどで良好な一括資料はない。焼物種はロクロ調整黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器があり、食器では黒色土器・須恵器の坏が中心で、黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器の埦（椀）・皿が少量ある。須恵器・黒色土器坏Ａの底部切り離し技法は回転糸切がほとんどで、黒色土器坏では一部に手持ち・回転ヘラ削りがある。灰釉陶器は灰釉ハケ塗りで、体部下半をヘラ削りして高台は三日月形もしくは斜めに面取りするもので、美濃の灰釉陶器編年の光ケ丘１号窯式（田口 1982）に該当する。上記のようなロクロ調整の黒色土器を主体とし、須恵器も準じる量があり、わずかに灰釉陶器が少量ある焼物種組成の特徴や、須恵器坏は逆台形の器形が主体で焼成不良のものも多いことや、灰釉陶器の型式から、出土した土器は松本平編年、更埴・屋代編年６・７期（９世紀前半～後半）が中心とみられる。松本平編年、更埴・屋代編年９～12 期（10 世紀）にあたる土器はみられなかった。

検出遺構は条里型地割の水田や、それに係る遺構が検出され、平安時代の特徴的な洪水砂層Ⅲ層の堆積もある時期であり、以下には層別・遺構別に出土土器の年代を検討する。

Ⅲ層・Ⅲ層被覆Ⅳ層上面出土土器の年代

10 区～12 区、長谷鶴前遺跡群では洪水砂層Ⅲ層に被覆された水田面が遺存していた。Ⅲ層からは須恵器坏Ａ、黒色土器坏Ａ、黒色土器坏・埦、土師器甕片が採取され、Ⅲ層が被覆する水田面の検出では黒色土器坏Ａ、黒色土器坏・埦、黒色土器埦、奈良平安時代須恵器坏Ｂ片、同壺、同甕片が採取された。破片がほとんどだが、食器の焼物種別比率は黒色土器坏Ａが 64.3%、坏・埦不明 11.9%、埦 2.4%、鉢 2.4%、須恵器は坏Ａ 9.5%、坏Ｂが 9.5%である。黒色土器が食器の 81%、須恵器が同 19%で、比率からみると更埴・屋代編年７期末頃の様相にあたる。灰釉陶器や８期（９世紀後半～末）に少量伴うとされる土師器は確認できなかったが、採取破片数が少ないので全く存在しないとは言い切れない。水田面に伴う可能性が高い完形土器は長谷鶴前遺跡群水田面出土の焼成不良な灰白色須恵器坏（139）と体部が比較的張った形の黒色土器鉢（138）がある。139 はいわゆる軟質須恵器とみられ、黒色土器鉢は年代の詳細は不明だが、体部がやや膨らむ点は後出する型式的特徴と思われ、８期にかかる可能性がある。

以上から、Ⅲ層洪水砂層や水田面出土土器は７期（９世紀中頃～後半）の様相が強く表れているが、138・139 から洪水砂層Ⅲ層は更埴・屋代編年の８期頃（９世紀末頃）を含む。

条里型地割に係る遺構出土土器の年代

条里型地割に則る遺構は、Ⅲ層被覆水田面の畦畔跡、Ⅲ層被覆がない地区での条里坪境にあたる位置で検出された溝跡がある。

まず、洪水砂層Ⅲ層に被覆された条里型地割が認められた石川条里遺跡 10～12 区・長谷鶴前遺跡群の畦畔内出土土器は、わずか 17 片のみである。須恵器坏Ａが 17.6％、同坏Ｂが 11.8％、同坏Ａ・Ｂ不明が 5.9％、同蓋 11.8％で、黒色土器坏Ａが 41.1％、坏・埦不明 11.8％である。黒色土器が主体となる焼物種組成から松本平編年７期頃の様相とみられる。当該期では須恵器坏Ｂや蓋は激減するとされるが、若干存在するので遡る時期の土器を含むとみられる。そのなかで須恵器坏Ａ（118）２片は底部ナデ調整の奈良時代の所産で、隣接する長谷鶴前遺跡群では条里型地割施工前の水田が存在したとみられるので、118 は先行水田に伴う土器と思われる。また、大型の破片である長谷鶴前遺跡群 SC11 出土の須恵器坏Ｂ（145）は外底を全面回転ヘラ削りし、高台は外端接地で高台端面がくぼむ。類似形態は更埴・屋代編年の３～６期（８世紀中葉頃～９世紀前半）頃にあり、やや古い所産とみられるが詳細な時期は不明である。

次に、Ⅲ層被覆がない石川条里遺跡１区～９区の条里型地割の坪境想定位置で検出された溝跡出土土器である。このうち、埋土にⅢ層由来か砂層が確認された溝跡として１区 SD095 と２区 SD046 がある。

SD095 は先端に SK356 が位置し、両者は関連遺構とみられる。SD095 からは黒色土器坏または埦１片、SK356 からは黒色土器坏Ａ 17 片、同埦１片、須恵器坏Ａ 18 片、土師器小型甕１片、同甕２片、灰釉陶器瓶３片が出土した。他に、奈良時代との識別ができなかった須恵器甕６片、同壺８片、同坏Ｂ１片、同蓋１片、奈良時代以前の非ロクロ黒色土器類がある。SK356 出土の食器焼物種組成比率は黒色土器と須恵器がほぼ半数の松本平編年７期前後の特徴で、灰釉陶器瓶類、黒色土器埦が含まれる点も整合的である。土師器坏類は確認できていない。

SC001 に係る SD046 とその下部から黒色土器坏Ａ２片、埦１片、奈良時代坏Ｂ３片、坏Ｂか壺類の体部１片が出土した。黒色土器坏が主体で、埦もあり、松本平編年７～８期とみられる。なお、大畦畔 SC001 下部出土の須恵器杯Ｂ（117）は、外反口縁で奈良時代と捉えた。

砂層被覆がない坪境に一致する溝跡では、3b 区 SD104 から須恵器坏と黒色土器坏が出土し、須恵器坏はかなり焼成が悪く松本平編年８期に下る可能性がある。4b 区 SD064 では須恵器杯Ａ（159～165）と黒色土器とみられる杯Ａの（158）、長頸壺（166）を図示した。須恵器坏Ａが主体で黒色土器坏類が少量ある組成で、須恵器は確認できるところですべて回転糸切である。須恵器の比率が高く、須恵器坏Ａ底部はすべて回転糸切であること、SD064 須恵器坏内底径は６㎝前後なので鳥羽氏の編年検討（鳥羽 1999）に従えば更埴・屋代編年６～８期にあたる。数値にばらつきが少ない点から６・７期に絞られ、須恵器の比率の高さから更に６期に絞られる可能性がある。ただし、出土土器からは５・６期の差異を識別できず５期に遡るのかもしれない。

以上、条里型地割に一致する遺構の出土土器では、やや古い様相を示す SD064 が松本平編年６期に遡る可能性があるが、おおむね７期を前後する時期の土器が中心とみられる。Ⅲ層被覆がない坪境で検出された溝跡の出土土器は SD064 の他は古い様相がなく、条里型地割施工時のままではなく耕作中は開口していたか、耕作と類似時期に構築されたとみられる。

出土土器は７期前後が主体ながら、条里型水田の下限時期は水田を被覆する洪水砂層Ⅲ層が８期頃と推定されるので下限は８期にかかるとみられる。上限年代は６期まで含まれる可能性があるが、５期に遡るかは明確にしえなかった。

なお、条里型地割にのる遺構出土土器には SC058 の 118、SC001 の 117 等の奈良時代土器も混在するが、奈良時代土器のみで占められることはなく、7a 区では条里型地割坪境の SC054 と奈良時代 SD142 が検出

されたように耕作が重なったためとみられる。

以上から、今回の調査では厳密な年代を詰め切れていないが、条里型地割に係る遺構出土土器は松本平編年６期に遡り、耕作は７期が中心で、洪水は８期とみられる。洪水以後の土器は平安時代後期まで抽出できたものがなく、継続する耕作はなかった可能性がある。

③　平安時代後期の土器の年代　［図版 90］

平安時代後期の土器は土師器小型坏（200～206）と他に時期判断に迷った土師器坏（104）がある。小型坏は口径 10㎝前後だが、201・203 のやや深身のものと 200・202・204～206 の浅い皿形がある。これまでの古代土器編年検討では土師器坏類は時代が下ると共に小型化し、松本平編年 12 期（10 世紀後半）頃に大小２法量に分化し、以後は小型坏が器高を減じていく型式変化とされる。本遺跡出土の浅い皿形の小型坏類は器高２㎝前後で松本平編年 14・15 期（11 世紀前半～後半）頃に該当するとみられる。また、深身の小型坏（201・203）は器高 3.2㎝前後でそれより遡る 13 期（10 世紀末～11 世紀初頭）頃とみられる。

これらの土器の実年代だが、松本平編年 15 期（小平 1990）は吉田西遺跡 SB31 段階に対比されているが、吉田川西遺跡 SB31 段階（原 1989）には柱状高台坏が伴う等の松本平編年 15 期とは内容に違いがある。吉田川西遺跡 SB31 段階に伴った山茶碗の谷迫間２号窯式の年代は 12 世紀前半～中頃とされ、松本平編年 15 期は柱状高台坏を含まないので、吉田川西遺跡 SB31 段階より古いそれ以前とみられる。さらに、松本平編年では 11～13 期に虎渓山１号窯式・丸石２号窯式、14 期に美濃灰釉陶器の丸石２号窯式・明和 27 号窯式、15 期に明和 27 号窯式・西坂１号窯式が伴うとされ、近年の灰釉陶器編年年代（斎藤 1994）に照らすと松本平編年 11～13 期（10 世紀後半～11 世紀初頭）が 1000 年を前後する時期、14 期が 11 世紀中頃、15 期が 11 世紀後半～12 世紀初頭とみられる。従って、本遺跡の平安時代後期土器の年代は 11 世紀前後の時期と、11 世紀後半～12 世紀初頭にあたる。石川条里遺跡高速道地点でも類似時期の土器を伴う溝跡が検出されており、類似時期に当地域で再開発が行われたものと考えられる。

２　弥生時代中期後半水田跡

本遺跡の水田跡と類似時期の長野県内例では、長野市川田条里遺跡のＤ区第６水田面がある。水田跡の年代は若干下る弥生時代後期前半と報告されるが、弥生時代中期後半の土器もかなり出土している。今回の調査で捉えられた水田面は放棄された状態なので、検出遺構がすべて同時に存在していた確証はないが、非常に広域に水田遺構が分布する。川田条里遺跡（Ｄ区第６水田面）自体も時期が異なる水田面を含む可能性が指摘されているが、広域にわたる水田跡である点は本遺跡と類似する（埋文センター 2000）。こうした当該期の水田跡の特徴や変遷を踏まえ、本遺跡の水田跡について、検討したい。

（１）長野県における弥生時代中期後半の稲作研究

弥生時代は稲作の開始された時代というイメージから、長野県でも稲作の定着・展開についてはさまざまな観点から検討されている。長野県の弥生時代は植物採取・狩猟など多角的な生業もありつつ、稲作・畑作を含めた植物栽培が地域差を持って受容され、段階的に発展したという点は大方異論ないと思われる。

レプリカ法による検討：近年、土器に残る種実圧痕を対象としたレプリカ法による研究は、縄文時代晩期終末～弥生時代中期の農耕の様相を明らかにしている。それによると長野県内では縄文晩期終末頃の種実圧痕ではアワ・キビの畑作物を中心として籾が僅かに確認できるという（遠藤 2012、中沢 2014）。日本へは稲作と畑作がセットで伝播しながらも、長野県では縄文晩期終末期には畑を選択的に採用したとされる。

それが弥生時代中期中葉の松本市境窪遺跡で籾圧痕数が、それ以前より増えることが明らかにされたことから、弥生時代中期中葉段階が稲作普及定着時期の目安といえそうである（設楽・守屋・佐々木・百原・那須 2019、設楽・守屋・佐々木 2019）。

石器研究による検討：弥生時代中期の稲作の発展については、水田造成にかかわる木材加工や収穫具である大陸系磨製石器群の普及時期に関する検討でも示されている。大陸系磨製石器のなかで伐採用石斧は早くから存在が知られるが、セットで一定量揃うのが栗林２式期（町田 1992）、あるいは出現期に注目すると中期中葉松本市境窪遺跡段階とされる（杉山 2010）。また、弥生時代の石器組成は県内で地域差があり、打製石器耕起具・収穫具を残す畑作中心の長野県南部、大陸系磨製石器を受容し稲作中心の長野県北部という地域差も捉えられ、その後北部は鉄器流通をめぐって大きく変動していくとされている。さらに長野県の稲作は古くから東海系条痕文土器の出土から、東海からの普及を前提に考えられてきたが、本格化する北部の稲作技術は地理的に遠い東海ではなく、北陸からという指摘もある（町田 1994）。ただし、長野県北部でも土器種実圧痕検討から、弥生時代中期後半の栗林期以後でも畑作と稲作が併存していることも明らかにされており、北部＝稲作のみという単純な図式にはならないようである（馬場・遠藤 2017）。

水田跡の検出：稲作の証拠となる水田跡は、現時点で長野県北部域に弥生時代中期後半の栗林期頃のものがある。洪水砂層や、泥炭層に被覆された水田跡がなく、溝跡のみの断片的な確認例が多いが、中野市柳沢遺跡（埋文センター 2012）、同川久保遺跡（埋文センター 2013）、長野市川田条里遺跡（埋文センター 2000）、同石川条里遺跡高速道地点（埋文センター 1997）、千曲市屋代遺跡群（埋文センター 1998）等がある。この他に溝跡のみの長野市北之脇遺跡（埋文センター 1999）、自然流路利用の中野市七瀬遺跡（埋文センター 1994）等も加えられる。このなかで最古例が屋代遺跡群の栗林１式期とされる。川田条里遺跡Ｂ区第８調査面も弥生時代後期前半の土器に混在して栗林１式の土器が出土し、当該期からの水田耕作の可能性を示唆する。それ以外の遺跡は栗林２式か、２式後半か３式にかかる頃とみられる。

弥生時代中期後半以前では、千曲市更埴条里遺跡で水田跡の確認はないが、流路内から弥生時代中期中葉の土器と石包丁が出土し、プラント・オパール分析から稲作の可能性が捉えられている。また、石川条里遺跡高速道地点、川田条里遺跡ともに縄文晩期の遺物出土がみられ、土器の種実圧痕の検討でも弥生時代前期後半で籾圧痕が僅かに認められている（中沢 2014）。長野市塩崎遺跡群では東海系の弥生時代前期末頃の土器出土等もあり、稲作の継続性はないにしろ稲作開始年代は遡る可能性も残るが、詳細を明らかにできる段階ではない。

長野県の稲作定着時期は、籾圧痕土器の増加や大陸系磨製石器普及、水田跡の存在から想定される弥生時代中期後半の栗林期が確実で、それが中期中葉段階に遡る可能性があるというところが現段階の理解といえるだろう。

上記の弥生時代中期後半水田跡は狭い範囲の検出にとどまる例が多いが、土の畦畔のみならず、芯材を入れた畦畔の構築、用水の敷設や畦越配水、堰を用いる水利システム等の後代の水田遺跡にみられる基本的技術は揃っているといえる。中期後半の水田跡検出例が狭い理由は、広域に堆積する洪水砂層がなく水田遺構がみつかりにくいこともあるが、基本的に小規模範囲の水田と捉えられている（臼居 2002・河西 2000）。また、多くの遺跡で検出される用水跡は、用水からオーバーフローした堆積物で用水周囲が遺存したためでもあるが、石川条里遺跡や川田条里遺跡では後代の弥生時代後期水田跡は水田域の広さに比して用水が少なく、中期後半の水田跡は溝跡の検出例が多く、このことが中期後半水田の特徴とみられる。例えば川久保遺跡は、狭いながらも長い溝跡で斑尾川方面から千曲川縁の低地まで引水し、その先端の千曲川沿いの低地を水田とする。また、川田条里遺跡（Ｄ３区 SD10～13）は、堰付近から数本の用水が分岐し、各用水がそれぞれ水田群や水田を灌水していたとみられる。これらの例から、当該期の水田は水田

耕作の適所まで用水で引水し、その用水で灌水できる狭い範囲を水田域としていたことがわかる。その用水単独例が川久保遺跡や柳沢遺跡、分岐して複数の水田群が分散して存在するのが石川条里遺跡や川田条里遺跡である。

弥生時代中期後半に用水を多用する水田が営まれた背景は、洪水等による堆積土が少なく微妙な高低差が残る当該期の地形環境にあるとみられる。

（２）石川条里遺跡における弥生中期後半の水田跡について

層序と検出状況　水田跡はⅧ-1層を耕作土層とし、上面は耕作放棄後に堆積した泥炭層Ⅶ層に覆われていた。２区、3b・4a区、7a区では、薄い泥炭層上面で検出作業を行い、盛り上がる下層の耕作土層が帯状に検出できた部分を畦畔と認定した。泥炭被覆が僅かな7b・８区～11区北部は古墳時代水田耕作土層Ⅴ層下～Ⅷ層上面で大畦畔基部のみ検出した。

最下層の水田層　3b・4a区、5b区のⅧ-1層下層にあるⅧ-2層でプラント・オパールが確認され、９区ではⅧ-1層下層で木芯畦畔と土器が出土した。水田面は遺存しないが、Ⅷ-1層下のⅧ-2層を耕作土層とする水田跡が存在したとみられる。Ⅷ-2層より下の土層では水田遺構の検出はない。

水田の年代　Ⅷ-1層水田年代だが、２区では上部にあるⅥ層から弥生時代後期前半の土器22（図版84・PL27）が出土したことからⅧ層は弥生時代後期前半以前で、上限は９区のⅧ-2層出土の土器（13）から弥生時代中期後半前半を遡らないとみられる。また、Ⅷ-1層水田に係る出土土器では3b・4a区の微高地付近出土土器（15）（図版84・PL27）やⅧ-1層上面のSQ001出土土器（１～３）、7b・８区のⅧ-1層上面付近検出のSC063・064出土土器（４～６）があり、これらの土器は弥生時代中期後半の栗林式土器に該当する。10区以西の西側調査区で検出された大畦畔では、SC101から弥生時代中期後半の土器、SC089から弥生時代中期後半～後期と思われる土器が僅かに出土した。SC089は出土木製品の放射性炭素年代測定では弥生時代後期～古墳時代とされたが、弥生時代後期土器と断定できる土器がなく、弥生時代中期後半の土器の可能性があることからも弥生時代中期後半の可能性を考えた。上記のⅧ層に係る出土土器の時期は、第６章１節１にまとめたので参照されたいが、これらの土器からⅧ-1層水田の時期は弥生時代中期後半でも後半～末頃で、Ⅷ-2層は９区Ⅷ-2層出土の土器（13）から、弥生時代中期後半でも前半期とみられる。

水田の範囲　Ⅷ-1層水田跡に係る水田遺構は、２区～11区までの東西約520m以上×南北400m以上の範囲に分布し、この範囲が水田域とみられる。水田遺構分布域の西外側の石川条里遺跡12区～長谷鶴前遺跡群３区まではⅧ層上面の泥炭層が再び認められるが、プラント・オパール分析は実施せず、水田遺構の有無も確認していないため水田域が広がるかは不明である。県内の弥生時代中期後半の水田域は比較的狭いとされ、今回みつかったⅧ-1層水田はかなり広く弥生時代後期の水田規模に近いと思われる。近似時期の可能性がある川田条里遺跡のＤ区第６水田面も比較的水田域が広く、弥生時代中期後半の後半～末頃に水田が広域化している可能性がある。なお、下層のⅧ-2層の水田範囲は、プラント・オパール分析を実施した3b・4a区～９区は水田域と認められるが、それ以上の広がりは不明である。

水田への主水源　水田遺構は後背低地の最低部より西側に分布し、その遺構分布と地形から、この水田の主水源は西側の崖錐地形先端部湧水か、西からの沢等の小河川とみられる。

水田の形態　Ⅷ-1層水田では、２区、3b・4a区、7a区で泥炭層に被覆された小畦畔による小区画水田が検出され、泥炭層被覆が僅かな西側調査区を中心に５区SC113・114、7b・８区SC063・064（066・068）、10区SC105、11区SC089・101等の大畦畔が検出された。7b・８区～11区の大畦畔は50～70m間隔に位置する。西側調査区では小区画水田が確認されていないが、小区画水田畦畔の検出は泥炭層の残存状態に左右され、泥炭層が薄く検出できなかったもので、大畦畔区画内でも小区画水田としていたと推測される。

２区、3b・4a 区、7a 区の小区画水田は、一筆が８㎡（２×４ｍ）～28㎡（４×７ｍ）前後で、畦畔は等高線方向に長く連続し、その畦畔間を直交方向の短い畦畔で区切って等高線方向を長辺とするものが多い。また、大畦畔の区画が西側地区に偏るのは東側調査区では木質遺物が遺存せず、大畦畔が検出しにくいこともあるが、Ⅷ-1 層水田の構造に関わる可能性がある。

水田の構造　上記からⅧ-1 層水田は 7b・８区～11 区の西側調査区では大畦畔の区画内に小区画水田を配し、２区～7a 区の調査区東側は小区画を中心に配置される様相とみられる。県内では小区画水田を大畦畔の区画で括る例は弥生時代後期水田にあり、広域に及ぶ水田では大畦畔区画の設置が不可分とみられるが弥生時代中期後半水田では溝に伴う畦畔を杭等で補強した例はあるが大畦畔の区画は判然としない。そのなかで、Ⅷ-1 層水田は西側調査区に大畦畔の区画が偏り、全体に大畦畔区画があるわけではないのでⅧ-1 層水田の大畦畔区画の意味が問題である。そこで、大畦畔の区画規模に何等かの区画の役割が表現されていると予想し、石川条里遺跡高速道地点、川田条里遺跡の弥生時代後期水田例と比較してみたい。

大畦畔区画の比較　芯材のみの検出で同時存在といえないものや、方形でない区画もあるが、石川条里遺跡高速道地点の弥生時代後期大畦畔区画は 12-２・３区で凡 20～30m 間隔×48m 以上、14 区で 32×28m 以上と８ｍ？×36m 以上、15 区・16 区で 16m×16m 以上がある。川田条里遺跡の弥生時代中期後半末～後期初頭のＡ３・４区第６水田は、すべて同時存在ではない可能性も指摘されるが、44×30m 以上、中間は未調査で不明ながら 94 ？×40m 以上、杭列間で 80m×40m 以上、Ｂ２区第７水田で鍵手に折れる溝跡と直線的な溝跡間 34・60×30m 以上、同第８水田面で 35×40m 以上、Ｄ区第７面水田で 57・60×13m 以上である。Ｄ区８面第６水田は複数面を含む可能性が指摘されるが、大畦畔位置が継承されたとすれば、その大畦畔との距離 50×30m 以上、50m×37m 以上、80m 以上×33m 以上とみられる。大畦畔の区画全体が判明した事例は僅かで、傾斜方向の区画間隔しかわからない例が多いが、弥生時代後期水田の大畦畔区画は一辺８ｍや 16m の狭いものから、１辺 80m を超えるものまである。そのなかで石川条里遺跡高速道地点では一辺 20～50m 前後が多く、川田条里遺跡は 30～60m 前後が多い。これらの大畦畔の区画内を小区画水田としているが、内部の小区画水田畦は直線的に通り、同一規格によるとみられることから、ひとつの耕作単位とみられよう。

上記数値を今回の調査区西側の大畦畔間隔と比較すると、本遺跡例は石川条里遺跡、川田条里遺跡の大畦畔区画規模に重なるが比較的大きい部類となる。大畦畔区画が耕作単位を表すとすれば、東側調査区に大畦畔区画がない理由が問題となるが、推測ながらⅧ-1 層水田の大畦畔の区画規模が大きいことを考え合わせると、当水田跡は小さな耕作単位の集合ではなく、水田域全体をまとめて集団で耕作されたため耕作単位の括りがあまり必要とされていなかったのかもしれない。つまり、本遺跡の大畦畔は耕作単位というより耕作条件により設置されたとも考えられる。すなわち、水源に近い西側調査区では内部の小区画水田の畦越配水の都合から地形変換点のような場所に大畦畔区画が必要だったか、湿地内の作業道が必要とされた等の理由である。また、調査区東側に大畦畔区画がないのは、水源から遠い末端で灌水限界に近く、単一水源では水量が不安定で耕作が継続できない場合もあったためかもしれない。

（３）長野県における弥生時代水田跡の様相

上記の様相を踏まえ、長野県の水田変遷のなかで今回のⅧ-1 層水田の位置付けを考えてみたい。

弥生時代水田跡が小区画水田であることはすでに指摘されているが、井上智博は小区画水田の集合体を水田ブロック、用水や井堰を共通する水田ブロック群を灌漑ユニット、複数灌漑ユニットの集合を水田ゾーンという単位で捉えて水田構造を読み解き、その変遷を捉える視点を示している（井上 2002）。これを元に近畿地方の水田形態の変遷を、大庭重信（大庭 2013）の論考を元に井上（井上 2020）が整理して

いる。それによると弥生時代前期中頃は単線水路による個別灌漑で独立性の高い水田ブロックが分散するⅠａ類、弥生時代前期後葉では、連続した複数水田ブロックを配水する灌漑ユニットのⅠｂ類、弥生時代前期後半～中期では幹線水路を中心に複数水田ブロックからなる独立性の強い灌漑ユニットが構成されるⅡａ類、弥生時代中期後葉には、その灌漑ブロック末端のユニット間で余水のやり取りが交差するⅡｂ類へ変化し、この段階でユニット内を傾斜直交方向の大畦畔で区切る形態がみられるという。さらに、弥生時代後期には分岐型幹線水路により一定範囲に整然と均等な水田ブロック・灌漑ユニットが計画的に配置されて広域水田ゾーンが形成されるⅢ類への変遷と捉えられている。このなかで弥生時代後期水田を弥生水田の到達点として画期と捉え、それが古墳時代前期水田に引き継がれるとする（井上 2002、大庭 2013）。また、Ⅲ類水田の出現は、従来からの技術による技術的飛躍を伴わないもので、水田経営の在り方の変化（井上 2002）、あるいは労働力編成や水利を統括調整する指導力をもった首長の出現によると想定されている（大庭 2013）。

近畿での水田変遷を単純に当てはめられないが、先に挙げた長野県内の弥生時代中期後半の水田調査例をこの分類と対比すると、小規模用水で引水する狭い水田の柳沢遺跡や川久保遺跡例がⅠｂ類、堰で分水する川田条里遺跡Ｄ３区例がⅡａ類で、長野県では両者が併存するとみられる。一方、石川条里遺跡や川田条里遺跡の弥生時代後期水田は、大畦畔区画を整然と並べて複数水源からの灌漑で広域水田としている点や、石川条里遺跡の SD3004 のような幹線用水がみとめられる点からⅢ類に該当しよう。

今回の調査のⅧ-1 層水田跡は、大規模用水の引水によらず、限られた水源に頼るもので、検出遺構が断片的で灌漑ユニットは不明瞭だが、大畦畔の区画がそれに該当するかもしれない。また、水田末端には大畦畔区画がないので、配水が交差するⅡｂ類とみえる。大畦畔区画を耕作単位と考えれば広域水田化を志向したⅢ類に準じる形態ともみられるが、用水はあまり検出されておらず水田域全体の耕作条件を均等化する志向があまり感じられず、Ⅲ類までは達していないと思われる。

このようにみると、長野県に伝播した当初の水田形態はⅠ類かⅡａ類で、弥生時代中期後半期に各地の水田立地地形や当時の社会状況に応じ、このⅠ・Ⅱａ類がさまざまなバリエーションをもちつつ併存したようである。そのなかで今回の調査したⅧ-1 層水田のような単一水源ながら比較的広域を水田とする志向のⅡｂ類水田が、弥生時代中期後半末頃に展開したとみられる。ただ、広域に及ぶ水田化志向が地域内で独自に展開したものか、新たな情報や技術導入によるものかは明らかにしえない。

今回のⅧ-1 層水田の大畦畔区画は耕作単位とせず、水田環境による側面が強いと推測しているが、弥生・古墳水田の水田区画・水利単位に社会関係や単位とする説がいくつかある。広瀬和夫は水利関係から水源の河川共有集団、堰共有集団、水口共有集団の３つ単位で捉える視点を示し（広瀬 1988）、滝沢誠も広瀬の説を支持し小区画畦畔は耕作都合によるもの、大畦畔区画が耕作単位、水利を共有する大畦畔区画群が経営単位とし、祭祀は大畦畔毎に行われる例が多いとも指摘する（滝沢 1999）。

（４）今後の課題

今回検出された水田跡調査では明らかにしえなかったことも多いが、本遺跡の弥生時代中期後半Ⅷ-1 層水田跡は、弥生時代中期後半でも後半か末頃のもので、広域を水田域としながら用水が少なく大畦畔区画で分節したなかを畦越配水する水田と捉えた。その姿は個別用水を多用した狭い独立性の強い弥生時代中期後半の水田とは異なり、大畦畔区画が並列して広域を水田域とするもので、弥生時代後期水田に展開する稲作の増大化傾向の過程の１つの様相と考える。

ただし、本遺跡の場合は複数水源を利用せず、水源が限られるなかでの水田経営とみられ、水田域拡大にも限界があったとみられる。さらに、Ⅷ-1 層水田の大畦畔区画は、耕作単位というより水田環境によ

る可能性を考え、耕作は家族等の小集団の集合というよりムラ全体のような広い集団によるものとも推測した。その場合、水田形態が類似する弥生時代後期のⅢ類水田に展開する水田としても、大畦畔区画の意味の変化を伴う可能性はある。この点も詳細は明らかにしえず、今後の課題である。また、本遺跡では先立つⅧ-2層水田跡は断片的で、本遺跡でのⅧ-1層水田への展開の様相は具体的に捉えられなかった。

なお、この水田跡は泥炭被覆がみられるように耕作放棄されていたとみられる。弥生時代水田は固定的なものでなく、地形環境変化に合わせて耕地を放棄、耕地を移動する場合があると捉えられており（井上2020）、本遺跡の場合も条件が合わなくなれば放棄され、別の場所に水田を造成したことは十分考えられる。本遺跡では放棄前の厚い洪水土被覆が認められないので水田放棄の直接的原因は洪水とはいえず、放棄された原因として考えられるのは水源の問題がある。水源は西側の山の沢水か湧水と想定したが、その水源の水量減少等で広域に灌水ができなくなったのかもしれない。

3　平安時代条里型水田跡

今回の調査では平安時代前期の水田跡・遺構が広域で確認された。その概要は以下の通り。

・洪水砂層に被覆された石川条里遺跡10区～12区・長谷鶴前遺跡群にかけては平安時代前期の水田面、洪水砂層の被覆がない地区では溝跡・畦畔等の遺構が断片的に確認された。遺構は方位を合わせたものが多く、溝・畦畔は約一町（109m）間隔で、11区では内部に半折区画が認められたことから基本的に広域にわたる条里型水田とみられる。
・洪水砂層に被覆された水田面と同時期とみられる石川条里遺跡12a区や長谷鶴前遺跡群1区の水田面では、条里型地割と共に、条里型地割と同方位の畦畔区画ながら半折区画がない異質な区画や異方位の畦畔区画（以下「非条里型区画」という。）が部分的に混在することが捉えられた。
・水田を被覆する洪水砂層の時期は砂層中や砂層被覆水田面出土土器から平安時代前期末の9世紀とみられ、888（仁和4）年のいわゆる「仁和の洪水」に該当すると思われる。

上記の水田区画について、詳細な様相を洪水砂層で被覆された石川条里遺跡10区～12区・長谷鶴前遺跡群の水田面で検討し、次に広域の施工規格の様相について周辺域を含めて検討する。

（1）石川条里遺跡10区～12区・長谷鶴前遺跡群の様相　［第42図］

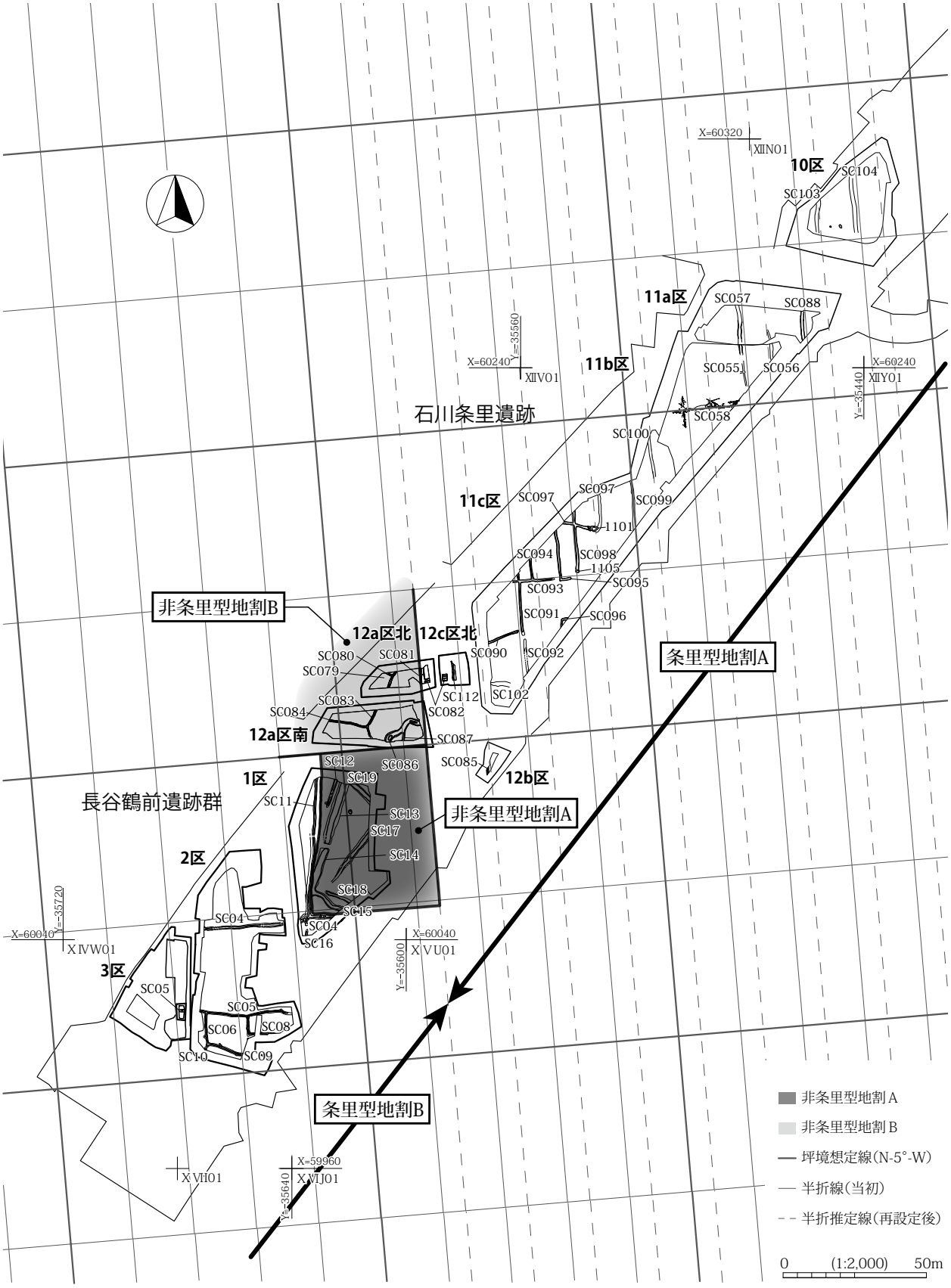
当該地区の水田面は平安時代前期洪水砂層に被覆されていたために良好に遺存し、高速道地点で確認された条里型水田跡と同方位の畦畔で区画される「条里型区画」と、それと異なる方位の畦畔で区画される「非条里型区画」が混在して認められた。

「条里型区画」はさらに石川条里遺跡10区、11区の半折区画がある区画（条里型区画Ａ）と、長谷鶴前遺跡群1区西・南にかけての半折区画がない区画（条里型区画Ｂ）に分けられる。「非条里型区画」は、泥炭層に覆われた古い耕地のまま放棄されていたとみられる長谷鶴前遺跡群1区東側地点（非条里型区画Ａ）と、条里と異なる方位の細い小畦畔で区画された12a区西側（非条里型区画Ｂ）に分けられる。

条里型区画Ａ

範囲：石川条里遺跡10区・11区を中心とし、西境は12a区SC081となる。南境は12b区SC085まで含むと思われ、北境は遺構残存範囲までしかわからない。東境は調査区外に延びて不明である。

畦畔配置：方位を合わせた畦畔で構成され、長期に維持されたとみられる木芯の畦畔―SC058とその南北部、（SC081・093・095、092、100）と、SC097南延長上部分を含む。SC058とその南北部分（SC095・093）は、それぞれ南北・東西畦畔の交点付近に木芯が埋設され、東西・南北畦畔が同時に存在したと捉



第 42 図　遺跡の条里地割図

えられる。SC081 以外の南北方向の木芯畦畔を含む畦畔（SC055-058）南北部（SC099-098-091・092）は、東西方向の間隔が畦畔中央値で約 20m 間隔、SC091-112 間で約 25m を測る。また、南北方向は東西畦畔の SC058 と SC093 が距離 57m を測る。これらの畦畔間隔は条里の半折区画の東西５区画（短辺約 21.8m）×南北２区画（長辺約 54.5m）の数値と厳密に一致しないが近似し、上記 SC055～SC112 まで５枚分の距離も約 105m で一町（約 109m）に近い。これらの半折区画は石川条里遺跡高速道地点と同様に坪内を南北２分割×東西５分割とする。

特徴：上記数値と水田配置から、条里型区画Ａは高速道地点と同じ半折区画とみられる。ただし、非条里型区画との境になる SC081 と SC097・100 は、長期に維持されたとみられる木芯畦畔ながら推定坪境内の半折区画の位置にないが、SC081-097 の間隔が約 64m で半折区画短辺約３枚分、SC097-100 間が約 20m で半折区画１枚の短辺に近い。木芯畦畔 SC100 と 058 南北部間が約 12m 前後を測るが、SC055-058 の南北部-099-098-091・092 の半折区画に、東へ 12m ずれた SC081-097-100 の半折区画が二重に重なるようにみえる。これらの東側に 12m ずれた畦畔は SC100～SC081 間の狭い範囲に認められ、東端部まで続かない。何らかの理由である時期に 12m 東にずらした半折区画が一部に設定された可能性がある。一旦耕作中断後の再耕作でずれたか、環境に由来する耕作の都合によるものだろうか。また、条里型区画Ａ内にはＬ字形の畦畔で囲った SC096・097 の変則的区画がある。出現背景は不明だが、半折区画が意味を喪失し、耕作の都合で改変されたものかもしれない。なお、半折区画を括る坪の大畦畔の区画は後述する。

条里型区画Ｂ

範囲：長谷鶴前遺跡群１区～３区の非条里型区画Ａ・Ｂ西側の山際に分布する。北側は現東西市道下に想定される大畦畔（後述）で非条里型区画Ｂと画されるとみられ、東側は南北方向の長谷鶴前遺跡群 SC11 と東西方向の SC04 で非条里型区画Ａと画すが、その南東側の延長先は調査域から外れ不明である。

畦畔配置：条里と類似方向の畦畔で構成され、SC04 と 11・16 が十字に交差し長く続いて大きな区画を形づくる。内部の小畦畔は南部に SC05・06・08～10 による小水田区画が東西に並ぶ以外はない。この東西の小区間は東西に長い半折区画を思わせるが、南北に長い半折区画を基本とする石川条里遺跡内では異質である。また、SC11・04 には小畦畔の接続がなく、一筆 45m 以上×想定 60m の区画で、SC04 と SC05 の短辺間隔も幅約 29m で半折区画短辺より広い。

特徴：条里型区画Ｂは条里区画Ａ類似方位の畦畔で構成されるが半折区画は認められない。長谷鶴前遺跡群 SC04 は北側の石川条里遺跡 SC093 との距離約 115m で、一町強の距離ではあるが近似値で条里の坪区画の整合性は保持しているとみられる。このことから半折区画がない条里型水田と考えられる。

非条里型区画Ａ

範囲：長谷鶴前遺跡群１区東側に分布し、北境は現市道下に想定される条里の東西大畦畔と推測され、東境は石川条里遺跡条里型区画畦畔 SC058 までと思われるが、未調査域にかかって不明である。西境は条里型区画Ｂの長谷鶴前遺跡群 SC11、南限は SC04 に画され、周囲は条里型区画畦畔に囲まれる。

畦畔配置：厚い泥炭層に被覆された SC12～15 と SC17・18 の条里区画と方位の異なる大畦畔が近接して検出された。

特徴：SC12～14 は条里型区画Ｂの SC11 に切られ、ここのみ厚い泥炭層に覆われることから条里区画施行時以後も耕作せずに古い耕作放棄地のまま残された場所とみられる。

非条里型区画Ｂ

範囲：石川条里遺跡 12a 区にみられる。南限は現市道下に想定される東西大畦畔で非条里型区画Ａに接するとみられ、東境は条里型区画Ａの SC081 に画される。北と西側は調査区外へ延びる。

畦畔配置：非条里型区画Ａの長谷鶴前遺跡群 SC12・13 と類似か直交方向の畦畔から構成される。

特徴：畦畔は方位に合わせた条里型区画とは異なり、非条里型区画Ａに似るが、畦畔は細く水田面は厚い泥炭層被覆がない。また、SC083 は重なって洪水砂層上面から掘りこまれる溝跡が確認され、類例は条里型区画Ａの石川条里遺跡 11 区にある。洪水以前の畦畔の上面に洪水以後の溝跡が重なるのは、洪水以後も畦畔位置が意識されていたものと思われ、この非条里区画Ｂは洪水直前まで耕作されていたと推測される。条里型水田施工以後に局所的に半折区画でない区画の地形に合わせた耕作地があった可能性がある。

こうした条里区画内に異なる区画が併存する背景は、調査地が湧水の多い耕作条件が悪い場所で、放棄地（非条里型区画Ａ）が残存し、狭い範囲の断続的な耕作が個別に行われたため、条里型区画Ａの 12m のずれや、条里型区画Ｂのような半折区画のない広い区画、地形に合わせた非条里型区画Ｂの区画を生じたと思われる。ただし、非条里型区画も条里型区画の畦畔で周囲を画され、基本的には坪境等条里型区画内にあって、坪区画は内部の耕作の有無にかかわらず全域に施工された可能性がある。

（２）石川条里遺跡の坪区画の大畦畔設定

今回の調査地点である石川条里遺跡南部域では、高速道地点等の発掘調査で明らかになった北部域同様に平安時代前期の条里型地割が捉えられた。そこで、調査区内の坪境の大畦畔位置を比定し、石川条里遺跡北部との条里設定規格の関係を検討する。

石川条里遺跡 12 区、長谷鶴前遺跡群の大畦畔

北部域（石川条里遺跡高速道地点）では、半折区画 10 枚を括る坪境大畦畔が広域に同一基軸で設定されていると捉えられている。南部域では畦畔の規模や構造の違いは見出しにくいが、半折区画の存在はそれを括る「坪」の大畦の存在が想定できる。

まず、東西大畦畔が東西方向に長く貫く条里型地割に一致する畦畔とすると、坪境の東西大畦畔は石川条里遺跡 SC058・093、長谷鶴前遺跡群 SC04 の３本が候補に挙げられる。石川条里遺跡 SC058-093 間の距離約 57m、SC093―長谷鶴前遺跡群 SC04 間の距離約 115m で、SC058-093 間の距離の約２倍となる。これは一町（約 109m）より長いが、近似値で規則的配置といえる。また、SC093―長谷鶴前遺跡群 SC04 中間に東西方向の現代の市道があるが、その下は未調査ながら非条里型区画Ａ・Ｂの境界にあたり、両者を画する東西畦畔の存在が想定できる。上記の畦畔は規則的に配置され、いずれかが坪内を南北に二分する半折区画か坪境に該当しよう。

南北大畦畔だが、東西畦畔以上に畦畔の規模・構造に差がない上に条数も多く、その認定が難しい。しかも条里型区画Ａでは半折区画が約 12m ずれて二重に重なるともみられ、特定を困難にしている。そのなかで非条里型区画との境界をなす畦畔、あるいは木芯等をもつ長期維持を目的とした構造の畦畔、水田内を長く貫く畦畔等の特徴的な畦畔か、その一町に近い距離の組み合わせの候補は次のものがある。

①非条里型区画Ｂとの条里型区画Ａ西境の石川条里遺跡 SC081。東側一町先に対応する畦畔はない。

② SC112 と東側約一町先の SC057。

③畦畔内で完形須恵器杯が出土した木芯東西大畦畔 SC058 の南北部。調査区内に一町間隔の対応する畦畔はないが、本畦畔より西側に半折短辺 12m 東へずれる畦畔が分布する。

④長谷鶴前遺跡群 SC11・16 と東 117m 先の石川条里遺跡 SC099 か 104m 先の SC097。

⑤ SC091 と 087。

石川条里遺跡①・②・③・⑤は条里型区画Ａ内だが、①の SC081 と④の SC097 は 12m ずれた半折区画畦畔ともみられ、部分的な存在で広域を貫く坪境畦畔とはみられない。また、③の SC058 南北部に対応する西側一町の場所は、非条里型区画Ｂ内の SC087 があるが、SC087 は短く北側へ延びないので大畦畔とは認めがたい。さらに、SC058 のみで須恵器の完形杯が出土し、特別な畦畔にもみえるが、須恵器は奈

良時代の所産で想定条里施工時期より古いもので伴うとは断定できない。④の長谷鶴前遺跡群 SC11 は唯一条里型区画Ｂにあるが、方位がやや斜めで厳密には条里区画に載らず、現市道下に想定した東西大畦畔との想定交点と SC099 の間隔も 117ｍと長い。先に東西大畦畔では条里型区画Ａと条里型区画Ｂ内の異なる区画場所を貫くとみられ、南北大畦畔も同様ならば④長谷鶴前遺跡群 SC11 と間隔は長いが石川条里遺跡 SC099 は候補の一つではある。これに加えて②石川条里遺跡 SC112・SC057、⑤石川条里遺跡 SC091・087 が残る。以上の候補については、後に遺跡全体の坪区画のなかで検証したい。

１区～7a 区の坪境の遺構と石川条里遺跡全体の条里型区画

上記の 10 区～12 区以外では洪水砂層の被覆がなく、出土遺物から平安時代前期とみられる条里型区画と同方位の溝跡として石川条里遺跡 SD095（１区）、SD046（２区）、SD104（3b・4a 区）、SD064（4b 区、4c 区）等が検出された。平安時代洪水直前に存在したとは断定できないが、これらは約一町前後の間隔で東西に並列し、このうち、SD095 と SD046 は埋土が砂層であった。一方、東西大畦畔は SD095（１区）北端が SK356 で止まる周辺の直交方向に検出された SC029、その約一町南側に位置する畦畔基部 7a 区 SC054 があるが、これが東西大畦畔に該当する可能性がある。これらの遺構と高速道地点の報告書（埋文センター 1997「石川条里遺跡」）に記載された検出大畦畔と周辺地域の大畦畔想定位置を地図上で重ねてみた（第 43 図）。

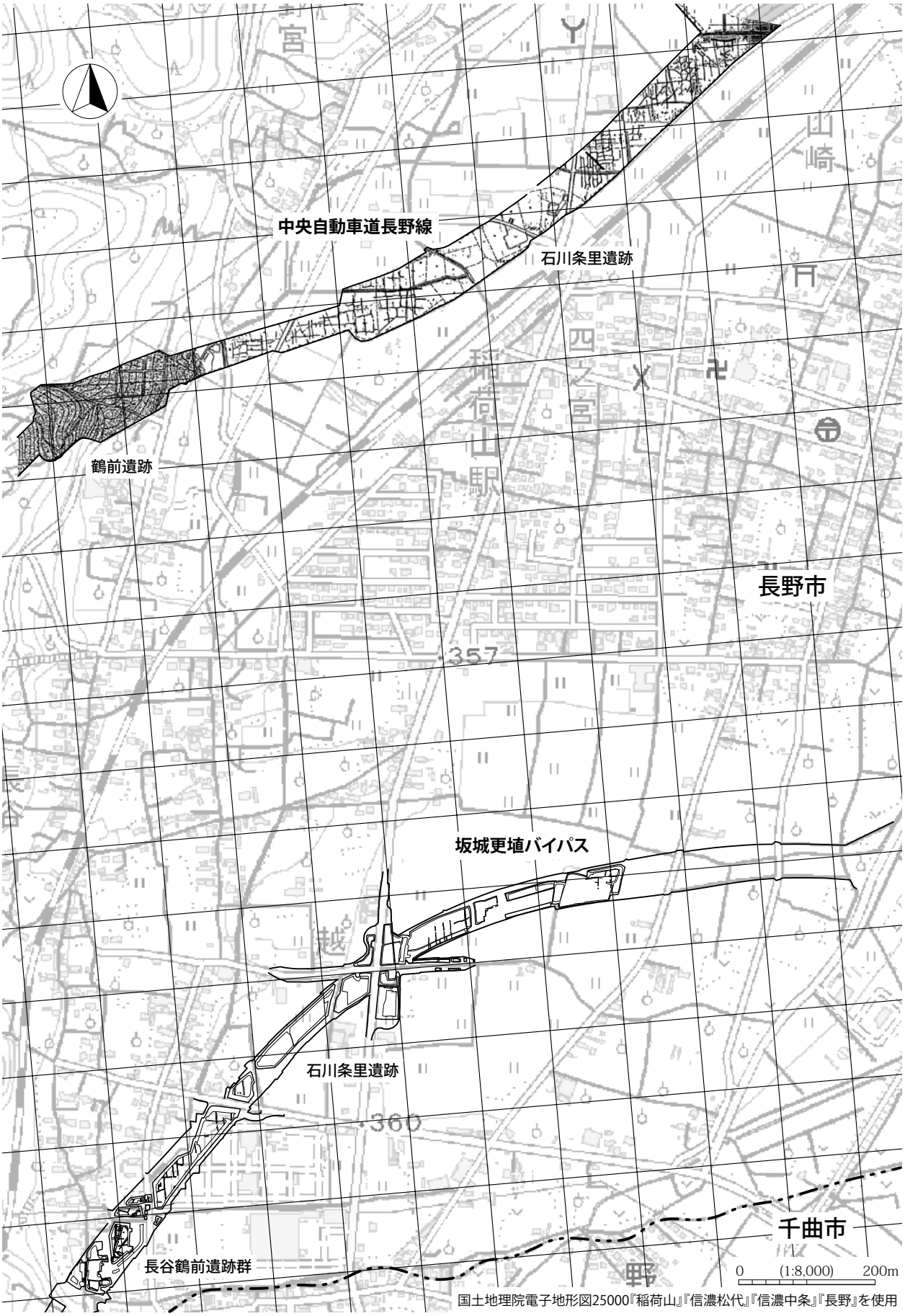
高速道地点の報告書では周辺を含めた条里坪区画想定ラインが掲載されているが、それを１°前後さらに西へ傾けると今回の調査区の大畦畔と高速道地点の南北大畦畔位置はほぼ同じライン上に載る（第 43 図）。例えば、今回の調査地点 SD104（3b・4a 区）の北延長先 880ｍに高速道地点４区 SC025、今回の調査地点の SD064（4b 区、4c 区）の北延長先約 860ｍに高速道地点２区 SC011 が位置する。このことから石川条里遺跡北部から南部まで同一基軸の区画が設定されている可能性が窺える。この大畦畔位置の想定から、石川条里遺跡 10 区～12 区・長谷鶴前遺跡群の南北大畦畔が SC099 と、ややずれるが長谷鶴前遺跡群 SC11・16 に該当し、石川条里遺跡 11 区の SC112・SC057、SC091・087 は半折区画畦畔とできよう。東西大畦畔は、先にみた１°前後振った方位の高速道地点東西大畦畔から約一町間隔で想定すると、石川条里遺跡 SC029（１区）、SC054（7a 区）、SC058（11 区）、長谷鶴前遺跡群と石川条里遺跡境の現市道位置に重なる。

以上から、高速道調査で想定された大畦畔方位から約１°前後西側に振った方位が、今回の調査地点を含む広範囲に及ぶも同じ条里型区画の基軸に相当すると推定したい。北信地域の平安時代前期の条里型地割は区画を方位にあわせる共通点があるが、１㎞を越える広域を同一規格で均等に区画するには、共通して測量できる方位にあわせることが有効だったのだろう。また、坪区画６×６個を括る条・里区画の畦畔が含まれている可能性があるが、特に目立つ違いはなく不明である。なお、今回の調査地点の SD095（１区）北延長先は高速道地点では微高地にあたるためか対応遺構がなく、高速道地点１区 SC003 の南延長先は今回の 7b・８区東端付近にあたるが該当位置に遺構の検出はない。

ちなみに、この条里区画東西坪境の想定ラインでは現行政境界と一致するものがある。石川条里 12a 区南の現市道下に想定される大畦畔の一町南が現千曲市稲荷山・長野市塩崎境界で、北部も長野市内の石川・塩崎地区境界が条里型区画の東西ラインと若干ずれるが近い場所である。現代の行政区画がどこまで遡るかは不明ながら、条里型区画の坪の位置が平安時代以後も地境として意識されていた可能性はある。

（３）条里型水田以前の水田跡

律令「田令」には「田は長さ 30 歩、広さ 12 歩で１段、10 段で町とし、段の租稲は２束２把とする」とある。これが条里水田だが、金田章弘氏は条里に伴う条里呼称法が墾田永代私財法（743 年）以後に認



第 43 図　遺跡周辺の条里地割図

められるため、条里地割・条里呼称法のみを「条里プラン」と呼んで、班田収授法に伴わないものとした（金田 1985）。今回の調査を含め、石川条里遺跡では律令「田令」に一致する条里型水田が確認されているが、今回の調査における条里型水田出現時期とそれ以前の水田様相を整理する。

長野県北部域での条里型水田跡は、長野市石川条里遺跡（更級郡）、川田条里遺跡（高井郡）、更埴条里・屋代遺跡群（埴科郡）で確認されている。何れも洪水砂層に被覆されたもので、これらの遺跡では条里型地割出現時期と、それ以前の水田についての知見が得られている。

各遺跡の条里型水田より下層の古い水田検出例として川田条里遺跡では７世紀後半～８世紀前半の 15～85ｍ間隔の大畦畔区画内を１辺２～４ｍの小区画水田を並べる古墳時代後期水田に類似した水田跡が捉えられた。屋代遺跡群では更埴・屋代編年１～２期（７世紀後半～８世紀初頭）の３～５面水田跡で狭い水田区画がみつかり、８世紀前半までは条里型水田がないとみられる。一方、石川条里遺跡高速道地点では、平安時代前期条里型水田内に異方位の畦畔があり、その一つ SC3005 の下層で畦畔基部 SC3005B、さらに平安時代前期水田畦畔下で溝跡（SD3002）が検出され、SC3005 と SD3002 は約 220ｍ間隔で、ほぼ二町分の間隔で平行する。その時期は条里型水田以前のものとみられ、SD3002 出土須恵器が小片で時期の詳細は不明だが、付近の SC3001・3002 から奈良時代（８世紀）の須恵器杯Ｂが出土している。SC3005・SD3002 が平安条里型水田内に取り込まれているので、条里施工直前に近い頃の可能性がある。

一方、正方位の条里型水田施工時期は、石川条里遺跡高速道地点では畦畔 SC3001 内の出土土器や祭祀遺物から９世紀前半～中頃、更埴条里・屋代遺跡群では条里区画に一致する集落内の遺構や、集落遺構と水田遺構の重複から８世紀末～９世紀初頭に施工開始され、９世紀前半に完成と捉えている。後者は、年代根拠とした遺構が集落に近い水田域か集落内で、水田域中央部の所見ではないが、少なくとも９世紀前半頃に条里型水田が存在したとする点は一致する。また、川田条里遺跡ではＢ区３面の奈良時代水田跡上層にあたる２面水田跡で、一部に半折区画がある水田跡が捉えられている。この２面に伴う SD103 出土土器は、須恵器杯中心で黒色土器が少なく、皿・埦や灰釉陶器が含まれないことから平安時代前期の松本平編年５・６期（８世紀末～９世紀前半）頃とみられる。川田条里遺跡Ｂ区２面水田跡は石川条里遺跡と同様に、条里型半折区画と異方位の畦畔が重なり、SD103 自体も条里ラインに一致しない。こうした条里区画と異方位の畦畔が重なる状況は平安時代前期に認められた可能性がある。この異方位の畦畔は地形に合わせたものとされるが、条里区画と異方位の畦畔・溝跡の時間差や年代の違いは捉えられていない。

上記から、少なくとも８世紀前半に条里型水田はなく、８世紀末～９世紀初頭から９世紀前半の間に広域条里型水田が出現したというのが現時点の理解だろう。その中間の８世紀後半の様相は不明で、石川条里遺跡高速道地点のような地形に合わせた部分的な条里型水田が若干先行して存在した可能性が残ると考えておきたい。

今回の調査で捉えられた条里型水田の施工時期

条里型地割の施工年代は、条里型地割に一致する遺構出土土器の時期、条里型地割と異なる方位の遺構重複での出土土器の比較が材料となる。ここでは松本平編年に基づき考察する。まず、条里型地割に係る遺構出土土器だが、本節１に掲載したように SD064 が６期（９世紀前半）に遡る可能性が捉えられたが、他の遺構出土土器は７期（９世紀中葉～後半）を中心とするとみられた。このことから６・７期が条里型地割の水田耕作の中心時期と捉えられる。

条里型地割と異なる方位の遺構重複の出土土器の比較だが、7a 区で条里型地割に一致する SC054 と異方位の SD142 が近接して検出され、SD142 の北延長先とみられる SD066 は 4b 区、4c 区で条里型地割坪境にあたる SD064 とも重複する。SC054 は出土遺物がないが、SD064 からは須恵器坏Ａが複数出土し、６期（９世紀前半）に遡る可能性が捉えられた。一方、SD142 の北側延長先とみられる SD066 から３・

４期（８世紀中葉～８世紀後半）に比定される須恵器坏Ａ（102）が出土している。また、隣接地区 7b・８区の条里型地割と異なる方位となる SD169 からロクロ調整黒色土器（102）が出土し、これも３・４期の可能性がある。これらの重複関係と、条里型地割の水田関係遺構出土土器から、条里型地割施工時期は３・４期以後で、６期以前の間と推測される。つまり年代は８世紀後半～９世紀前半の間となる。

条里型地割施工時期については屋代遺跡群・更埴条里遺跡では５期（８世紀末～９世紀初頭）に遡る可能性が指摘されているが、今回の調査では明確に捉えられなかった。それは今回の調査で得られた土器が少なく、しかも破片中心で検討材料が僅かしかない限界による。しかも、年代を比較しうる従来の古代土器編年は廃絶時の組み合わせを重視したもので、破片や個別土器では比定しにくいところもある。そのため、条里型水田の上限年代となる奈良時代水田もその下限時期は３・４期というやや曖昧な年代幅でしか捉えられず、条里型地割の遺構出土土器に５期のものが含まれていても、５期と６期の土器の差異が僅かで識別することも困難であり、５期に遡る可能性も否定はできていない。

石川条里遺跡の奈良時代水田跡

今回の調査では平安時代の条里型地割出現以前とみられる奈良時代頃の遺構として１区、4b 区、4c 区、7a 区、7b・８区、９区でⅤ層上面検出の溝跡や、長谷鶴前遺跡群１区の非条里型区画Ａの耕作放棄地に残存した古い水田跡がある。長谷鶴前遺跡群１区の非条里型区画Ａの水田跡では軸方向がＮ－38°－ＥのSC17、Ｎ－18°－Ｅの SC13・14、17 の大畦畔が検出され、異なる方位の大畦畔が近接することから大畦畔西側を水田とする SC17 → 13・14 への２段階の変遷が推測できる。その出土土器は小片のみで古墳時代前期～平安時代前期の間の時期としかわかっていない。

3a 区～4b 区、7a 区、7b・８区、９区の奈良時代の溝跡だが、SD105（3b・4a 区）、SD066（4b 区）、SD142（7a 区）、SD174（7b・８区）等は緩やかに湾曲し、地形に合わせたものとみられる。その曲線的な SD174 を切って直線的な溝跡 SD175・176、それに平行する SD171、173・177、174、179 が検出された。SD171・173・174・179 のすべてが同時存在する確証はないが、位置関係から関連する溝跡とみられる。これらの溝の走行方位は平安時代前期の条里と異なり、畦畔ともみられる酸化鉄集積 SC117・118 が SD173-177 と直交して方形の水田区画を形づくると見受けられる。平行する溝跡の間隔は SD171 と 173・177 間が 24m前後、SD173・177 から SD175・176 中央までが 40m前後、175・176 中央から SD179 間が約 18mで、厳密には均等ではないが、これらの平行溝跡から計画的な水田区画が設定されたと見受けられる。また、SD142 延長先とみられる SD066 は 3b・4a 区、4b 区で SD071、106、107 と共に 28×58 mの長方形の区画を形づくる。これも SD171、173・177、174、179 等と平行・直交しており、関連する可能性がある。

類似した奈良時代の区画例としては、川田条里遺跡の７世紀後半～８世紀前半のＡ区３面、Ｂ区３面水田跡では大畦畔区画 15～80m前後のなかに小区画水田を配置する作業過程で 15～35m間隔の中区画と呼称される畦畔の設定が想定されている。本遺跡の SD171・173・174・179 の間隔はこの中区画の間隔にも近いともみえるが、川田条里遺跡では中区画は小区画水田を配置する作業過程の畦以上の意味付けは捉えられていない。類似した小区画の古墳時代後期水田でも中区画の存在は指摘されており、奈良時代に特有の区画とも言い切れない。本遺跡の上記の平行する溝跡の区画は計画的に設定されているとは捉えられるが、間隔の数値は平安時代の条里型地割の半折区画に近いが、規格が同じとは断定できない。

本遺跡の奈良時代遺構の年代だが、調査区西側では２期（７世紀末～８世紀初頭）頃の土器も含まれ、この時期から耕作されていたとみられるが、溝跡では SD066 から須恵器坏（102）、SD169 からロクロ調整黒色土器坏（110）が出土し、３・４期（８世紀中葉～後半）と捉えられる。

以上の検討から、今回の調査では 7b・８区の西側調査区を中心に３・４期頃の水田遺構が認められた。その水田域は長谷鶴前遺跡群１区の条里型地割内の非耕作地に残された畦畔を含めると、長谷鶴前遺跡群から水路とみられる SD169・170 に接続する SD172・142（066）周辺の 3b・4a 区周辺までは水田域とみられる。東端の１区の溝跡は用水とも断定できず、東端の１区、２区まで水田域となるかは不明である。これらの溝跡は石川条里遺跡高速道地点の条里型区画内に取り込まれている条里型地割以前の畦畔・溝跡のＮ－45°－Ｗとも方位が異なり、高速道地点とは離れた別の水田とみられる。奈良時代では条里のような広域水田はなく、沢水等の水源に頼る狭い水田域が分散していたと思われる。また、長谷鶴前遺跡群の SC13・14、17（１区）の重複の在り方は畦畔西側（山手側）を水田域とし、畦畔東側は耕作しなかったため古い大畦畔が残ったともみられ、奈良時代でも灌水範囲全面を耕作していなかった可能性もある。

今回の調査では詳細を明らかにしえなかったが、８世紀後半の水田関連遺構が確認できたと思われ、当該期の水田遺構は長野盆地内ではあまり見つかっていないため、貴重な資料を加えられたと思われる。

４　１区の中世前期居住遺構の変遷

１区で検出された中世前期の居住遺構は自然堤防側の塩崎遺跡群３区までの広がりは不明であるが、２区まで分布せず１区内に限定される。掘立柱建物跡の認定が不十分で居住遺構の詳細は捉えきれていないが、井戸跡や溝跡の重複関係から数段階の変遷が推測された。ここでは溝跡の重複関係を整理し、居住遺構の変遷を探ってみたい。なお、中世後期の 12 区居館跡は長谷鶴前遺跡群の居館跡と共に変遷に触れたのでそちらを参照されたい。

１区の中世溝跡はいずれも区画溝とみられ、東西に調査区を縦断する SD009 に関連する溝跡群と、SD009 南側に 10m 離れて並行する SD080・088 とその東延長先 SD074 の溝跡群に分けられる。SD009 関連溝跡には、それに接続するコ字形の溝跡 SD001（・002）と SD010 がある。SD088 は調査時に近世の SD023 を切る近世以後の溝跡とされたが、SD023 の位置は現代の畦に継承され、SD080・088・074 の位置は継承されていないため、SD023 が現代に続く後出する溝跡と考えられる。また、SD080 は ST002 の東辺に一致し ST002 に関連する遺構とみられることから、SD088 と SD023 の重複関係は見誤りで、SD088 は中世と考えた。SD088・074 を中世とすれば、ST002 が SD009 を切る関係から SD009・001・010 の区画段階から SD088・080・074 区画への段階へと変遷すると推測できる。ここでは SD009 を中心とする区画段階をⅠ段階、SD008・080・074 区画をⅡ段階と仮定して、その様相を概観したい。

Ⅰ段階［第 44 図］：この段階は SD009 関連溝跡群の時期である。SD010 を SD001 が切ることから、Ia 段階（SD009b と SD010 区画）と Ib 段階（SD009a と SD001 区画）の新旧２時期に細分しうる。

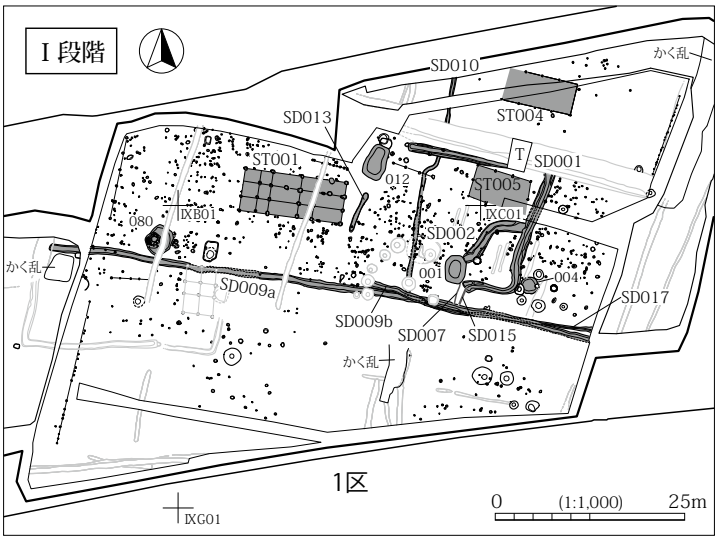
SD001 に付属する枝溝 SD002 は、SD001 以前の可能性があり、Ib 段階内での改変も想定しうる。

SD010 は SD001 北辺と重なる付近で鍵手に折れ、SD001 北辺と同じ土地境を意識しているとみられる。このことから、Ⅰ段階では SD001 北辺周辺の土地境を北辺、SD009 を南辺とする南北 24m×東西 80mほどの東西に長い区画が中央にあり、その北と南側を別の区画とする北・中央・南の３区画が捉えられる。さらに Ia 段階では SD010 により北・中央区画が東西に分割されていたとみられる。

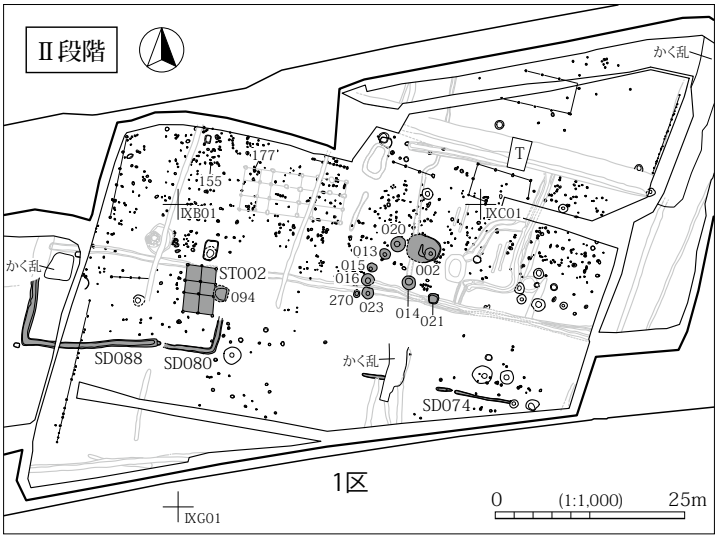
Ia 段階の溝跡以外の遺構は、SK001・004 の北側に分布する柱穴跡の一部には Ib 期の SD001 に切られるものがあるので、中央東側に掘立柱建物跡が存在した可能性がある。また、SD010 により分割される北区画東側には ST004、中央区画東側には ST005 が位置し、南区画東側にも柱穴跡が分布する。この段階にこれらの掘立柱建物跡が伴う明確な根拠はないが、北・中央・南区画東側の各区画に類似規模の掘立

柱建物跡が位置するようにみえる。また、SD001 が切る SK001・004 はⅠ段階ではあるが、SD002 と併存する Ib 段階でもありうるので Ia 段階に限定できない。

Ib 段階は、中央区画東側に SD001 と SD009a により１辺８×10ｍの区画が出現し、類似形態の SK001 と SK012 が区画南東端と北西端にある。これらは関連遺構とみられる。その区画西側にある唯一の大型掘立建物跡 ST001 はその区画に重ならず隣接し、唯一の石組井戸跡 SK080 と共に、この段階の遺構の可能性がある。ST004・005 等の掘立柱建物跡が Ia 段階とすれば、Ia 段階は東側に類似規模の掘立柱建物跡が並列していたが、Ib 段階に中央区画西側裏手に SD001（・002）・009a が囲む空間と大型掘立柱建物跡 ST001 等からなる特殊な空間が出現していると捉えられる。



第 44 図　１区居住遺構の変遷（Ⅰ段階）

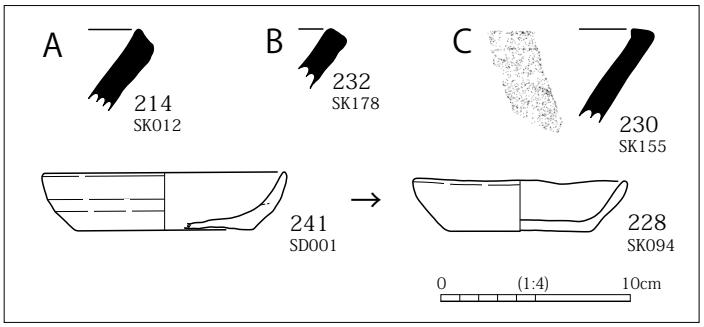


第 45 図　１区居住遺構の変遷（Ⅱ段階）

Ⅱ段階　［第 45 図］：SD080・088・074 の段階で、SD009 区画が南側に移設されたものと捉えられる。本段階に伴う遺構は SD080 北側延長先にある ST002、後述する須恵質擂鉢の C 形態から SK155、177 を含む柱穴跡、カワラケの形態から SK094 が該当する可能性がある。また、SD009 を切る SK002 を含む SK023・016・015・013・014・020・270・021 の井戸跡が該当する可能性がある。これらの井戸跡はⅠ段階の SD001 区画内にあって同時存在しないとみられ、Ib 段階以後の遺構とできる。Ⅱ段階は遺構の分布が西側に寄ると共に、Ia 段階の中央区画が南側へ拡大し、北・中央・南区画の３区画が崩れたとみられる。遺構は Ib 段階と捉えた ST001 を中心とする中央西側の空間が、拡大したとみられる。

各段階の年代

１区の居住遺構からはロクロカワラケと在地産須恵質擂鉢が多く出土していることから、これをもとに年代を考えてみたい。在地産須恵質擂鉢の口縁形態には第 46 図の種類が認められた。各形態の前後関係が捉えられた出土状況はないが、卸目を施し須恵質の還元炎焼成である点から珠洲焼がモデルと考えられ、類似時期の珠洲Ⅳ期擂鉢の変遷から、ＢからＣへの変遷が推測される。形態的特徴からＣからＡへの変遷は想定しにくいため、Ａ：内端部をつまみ上げる口縁形態→Ｂ：方形の口縁形態→Ｃ：口唇部を水平とする形態変化と推測する。石川条里遺跡高速道地点ではＣ形態に瓦質のものがあるので、焼成不良品が多くなる傾向もみられる。Ａ形態は SK012・062、SD009、Ｂ形態は SK001・003・178、SD001・009、Ｃ形態



第 46 図　須恵質擂鉢とカワラケの形態

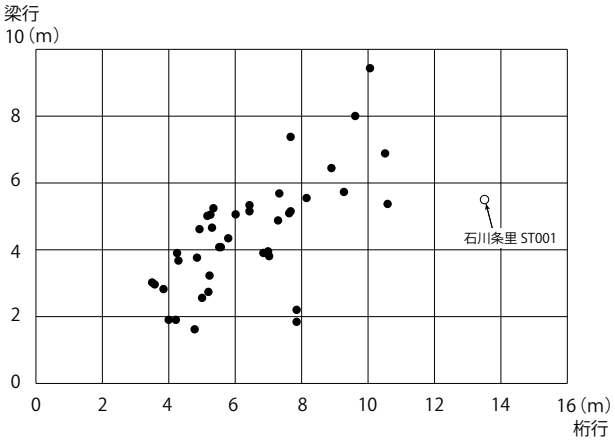
はSK002・155から出土し、SK177出土品も該当する可能性がある。須恵質擂鉢を総合的にみると、新しいＣ形態はⅡ段階遺構から出土しⅡ段階の時期のもので、Ａ・Ｂ形態はⅡ段階遺構への混入もあるが、Ⅰ段階遺構から出土しⅠ段階の時期といえよう。

また、カワラケはSD001から内湾形態（241）が出土し、Ⅱ段階のSK094から内湾しない形態（228）が出土している。カワラケが内湾形態から内湾が崩れる段階への型式変化とするならばⅠ段階とⅡ段階にある程度の時間差が考えられる。

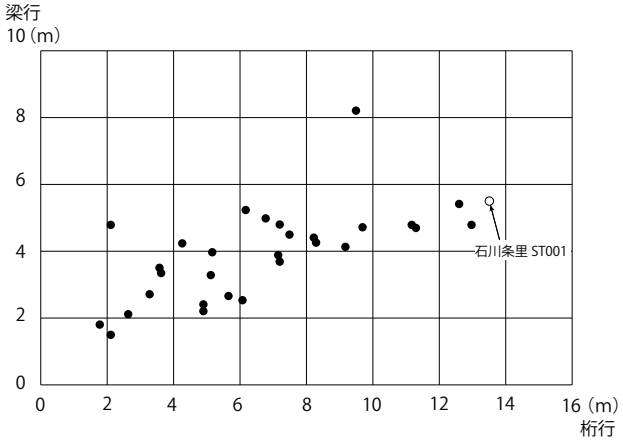
実年代を考えると、僅かな手がかりながら在地産須恵質擂鉢が模倣した可能性がある珠洲焼と同じ変化とすれば、吉岡康暢の編年（吉岡 1994）では各段階の口縁形態のバリエーションが含まれるものの、Ｂ形態は方形口縁中心の$Ⅳ_1$（～$Ⅳ_2$）期（1280 ～ 1310（～ 1350）年）、Ｃ形態は水平口縁中心の$Ⅳ_2$（～$Ⅳ_3$）期（1320～1350（～1370）年）に当てられよう。つまり、Ⅰ段階は13世紀末～14世紀前半、Ⅱ期が14世紀中葉を前後する時期と推測される。擂鉢の先行Ａ形態はさらに遡る時期と推測され、Ia段階は13世紀後半を含むかもしれない。ただし、Ib期SK012から出土した古瀬戸平碗は後期様式Ⅰ段階（1360～）の所産の可能性があり、これを重視すればIb期が14世紀後半に下る可能性がある。その場合、Ia期が13世紀後～14世紀前半、Ib期が14世紀中頃～後半、Ⅱ期が14世紀後半以後から内耳土器の出現以前までの間となる。しかしながら古瀬戸平碗は破片１点のみで混入の可能性も否定できず、小片ゆえに中期様式に遡る可能性もあって型式比定に課題も残る。そのため現段階では出土破片数が多い須恵質擂鉢の推定年代を基準としておく。

石組井戸跡について

１区では石組井戸跡SK080が１基確認された。県内の石組井戸跡は近世や中世後期に、井戸上部に僅かに石組を伴う例が知られており、本遺跡例のような石組井戸跡が中世前期にあまりないことから当初は近世とも考えた。しかし、出土遺物には近世陶磁器が認められず、周辺では隣接地区の千曲市東條遺跡で事例があることから中世とした。東條遺跡では中世前期（13世紀後半～14世紀）と、（15～16世紀の中世後期）と２時期がある。中世前期とされる井戸跡はSK844、1123で、検出面からの深さが約90、160㎝と浅くSK1123の平面は方形である。これ以外の多くは内耳鍋や石鉢、石臼等を出土し中世後期と報告される。中世後期例の平面形は１ｍ強の円形を呈し、深さは検出面から220～280ｍを測り、中世前期より明らかに深い。これらのなかには出土木質遺物の放射性炭素年代測定で近世年代を示すものがあり、すべてが中世に帰属するわけではない可能性もあるが、中世に石組井戸跡が存在しないとは言い切れない。今回の石組井戸跡は下部を板で囲み、上部１ｍ前後のみ石積とするもので、その形態から中世の可能性は高いとみられる。また、東條遺跡では石組井戸が掘立建物跡に付随して１基ずつ存在すると捉えられており、今回の石組井戸跡もST001に付随するものと考えた。石組井戸を考える場合、関連する石積技術の問題として長野県における中世石積の出現時期に関する問題がある。松本市殿村遺跡では中世石積の出現は14世紀頃とみられ、本遺跡例も同じく14世紀と考える。



第 47 図　中世前期の掘立柱建物跡規模（松本市内）



第 48 図　中世後期の掘立柱建物跡規模（松本市内）

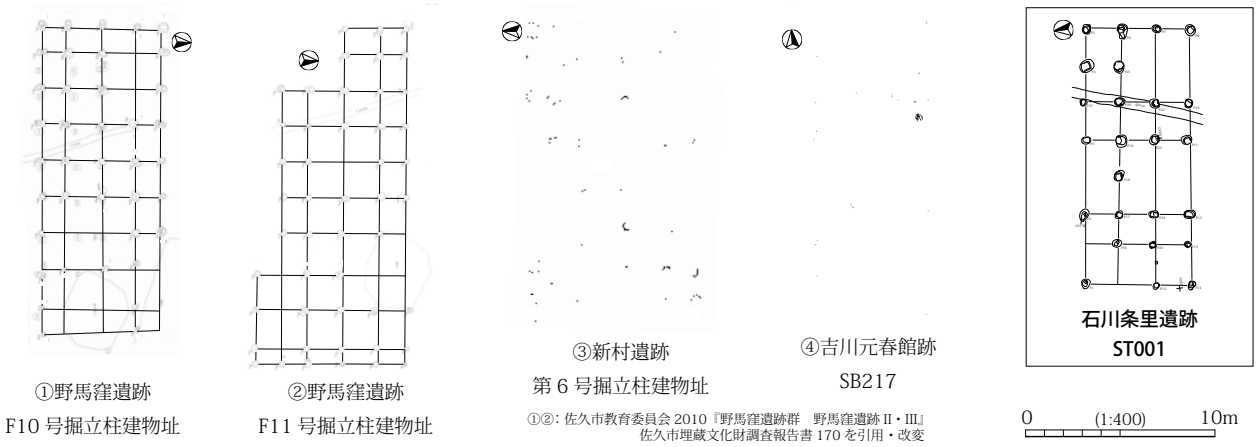
大型掘立建物跡について

今回の調査区内で大型掘立柱建物跡 ST001 が検出された。ST001 は長方形で梁行 3 間（約 5.6m）×桁行 7 間（約 13.4m）桁行 17.5m、梁行 5.5m。面積約 75㎡と大規模で、内部は所々柱穴跡が欠落する。服部による南関東の掘立柱建物跡の建物規模（服部 2001）と比較すると、中世前期・後期を通してもかなり規模が大きなクラスに入る。一方、近世農家とすれば規模的に大きな部類ではあるが、特別突出した大型建物ではない（箱崎 2001）。規模から近世農民家屋の可能性も考えたが、近世遺物の出土がないこと、上面が近世 SD023 と関連する区画溝 SD019 に切られることから帰属する時代を中世と考えた。

1 区では他に ST005 梁行 2 間（4.3m）×桁行 3 間（7.3m）、ST004 梁行 1 間（4.4m）×桁行 4 間（約 9.3m）があるが、ST001 は本遺跡内でも突出した大きさで内部に柱を持ち、他とは明らかに異なる性格の建物構造と想定しうる。

県内では、松本平の総論編で中央自動車道長野線にかかる掘立柱建物跡の規模の一覧を作成しており（野村 1990）、それをグラフ化して比較すると、中世前期では突出して大型であるが、中世後期では大型ながら類似規模の建物跡は認められる（第 47 図・第 48 図）。

また、野村の報告以後の県内でみつかった中世前期の大型掘立柱建物跡例では、中世前期の居館跡とされる佐久市野馬窪Ⅱ・Ⅲ遺跡の大型掘立柱建物跡 F10（第 49 図－①）は梁行 4 間（7.6m）×桁行 9 間（約 18.8m）、同 F11（第 49 図－②）は梁行 4 間（約 7.7m）×桁行 10 間（約 20.6m）である。両端の柱間距離が短く庇が付く可能性があり、内部には所々柱穴がない空間を含む。また、13 世紀後半～14 世紀の松本市新村遺跡第 6 号掘立柱建物址（第 49 図－③）は、総柱で梁行 2 間×桁行 5 間の建物跡に四面庇―北側に



①②：佐久市教育委員会 2010『野馬窪遺跡群　野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 170 を引用・改変

第 49 図　中世の大型掘立柱建物跡

孫庇をつけ、それらを含めると梁行５間（11.2m）×桁行７間（14.5m）の規模である。野馬窪Ⅱ・Ⅲ遺跡例と新村遺跡例では建物形態が違い、野馬窪遺跡例は建替えがあり、新村遺跡は建替えがない。

これらの例と比較すると、本遺跡例は規模的には他例より小型で、形態は異なるが規模は新村遺跡に近く、建替えがみられない点も類似する。建物規模は居住者の性格を表すとすれば、野馬窪遺跡よりも下位だが、新村遺跡例に近い居住者像を想定できよう、庇の有無や内部に柱穴跡がない空間を含む建物形態の違いをどのように捉えられるかは明らかにしえなかった。

県外例として類似した柱配置の建物跡として16世紀の広島県吉川元春館跡建物跡SB217（第49図－④）の存在を知った。年代も地域も全く異なり、単純に比較できるものではないが、SB217は梁行３間（5.78m）×桁行８間（15.22m）で内部柱が規則的にない空間がある。柱配置は本遺跡ST001に似ている。注目されるのは溝で囲まれた9.4×7.8mの斜面地を削って平場とする遺構SX211がSB217に近接して位置する点で、SX211は鉄滓等が出土し鍛冶を行った可能性が指摘されている。SB217とSX211の関係は同時か、SB217より先行するとされる。SB217とSX211が同時存在するなら、関連する施設とも考えられ、本遺跡のST01もSD01で囲繞された空間とセットで、通常の居住の家屋ではなく生産と関連した施設の可能性も出てくる。現時点では検証する材料が不足しており、あくまでも推測にとどまる。

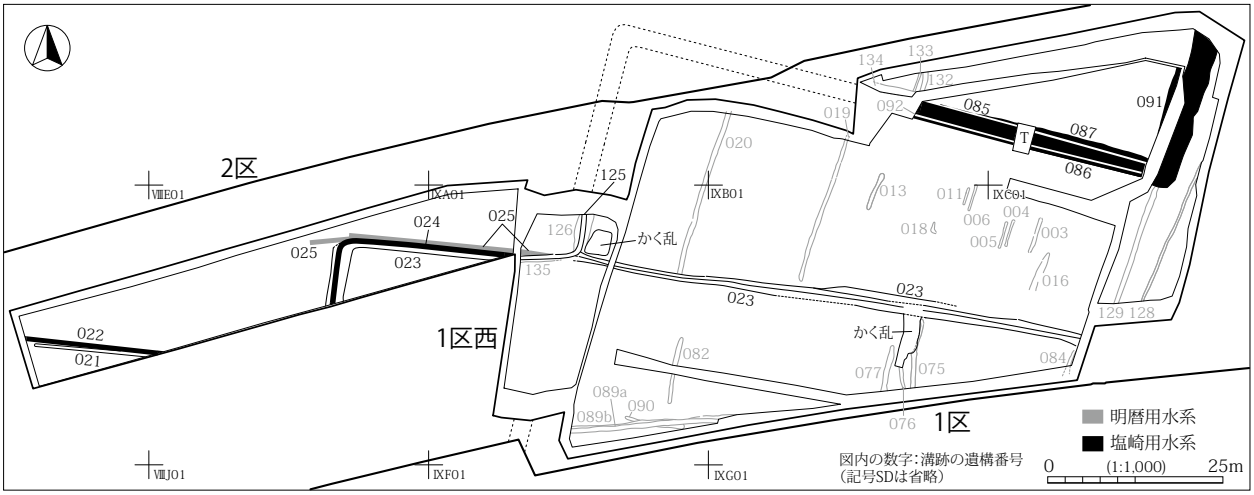
５　近世遺構の変遷

近世遺構は１区～7a区で用水跡とみられる多数の溝跡、3b・4a区で墓跡、7b・８区～11区で点在する土坑や溝跡が検出された。これらの遺構から調査区内が基本的に水田域として利用され、一時的に墓が造られる乾燥期があったと推測される。

遺跡の所在する長野市篠ノ井塩崎地区は、近世に干害が頻発したため水源確保が課題とされ、千曲川取水用水として1656（明暦２）年に明暦用水、1826（文政９）年に塩崎用水が開鑿されている。また、1680（延宝８）年には、遺跡背後の篠山山中の猪平に溜池（猪平池）が構築されている。これ以外に小規模な用水開鑿もあったようだが、現代まで塩崎用水と猪平池は主要水源として利用されている。明暦用水は1654（承応３）年の大干害により構築されたが、取水口は1723（享保８）年の洪水で壊され放棄されたとされる。近世末に取水口を上流に移動して灌水範囲を広げて新たに開鑿されたのが塩崎用水である（塩崎村史刊行会1071『塩崎村史』）。各用水の灌水範囲だが、明暦用水は7a区と7b・８区の間の用水の場所にあったと伝えられるが、その東側の低い側が灌水範囲とみられ、塩崎用水は地形から12c区以東の１区～11区が灌水範囲と推測される。12c区のSD188・189は塩崎用水に合致するものと考えられる。また、この塩崎用水から分岐して明暦用水を経由して１区西辺から北辺をめぐる幹線枝用水となる溝跡が、SD085・086にあたるだろう。各用水の灌水推定範囲から長谷鶴前遺跡群～12c区以西または11区が猪平池系の用水、7b・８区～11区が猪平池または塩崎用水、１区～7b・８区が明暦用水または塩崎用水を主水源と推測され、１区～7a区で数多く検出された溝跡は明暦用水と塩崎用水の２時期に分けられる可能性がある。

明暦用水系の灌水範囲では、明暦用水取水口が破壊された1723（享保８）年から塩崎用水の開鑿される1826（文政９）年までは、用水機能が低下した状態にあったとみられる。塩崎村誌によると、塩崎では宝暦年間（1751～1764）に水田経営不能で捨て地願い提出等もあり、最も収米高が減っている。そのなかで人口は増加の一途をたどり、困窮して騒動も起こったとされる。

以下には文献に残る用水の様相を踏まえ、調査区内で検出された溝跡の変遷を整理する。



第 50 図　近世用水模式図（１区、２区）

１区、２区の溝跡の変遷［第 50 図］

１区、２区の近世溝跡は中世 SD009 と同方位か直交方位で、土地区画は平安時代前期の条里型区画を継承せずに、中世段階の区画を継承している。１区、２区の溝跡は１区北西部の重複関係から次のような変遷が想定される。

１区西辺から１区北西部で東へ折れる現用水に重なって検出された SD085・086 は現用水に継承される用水跡とみられ、その溝跡が１区北西部で西側２区から流れて北に折れる SD125（→ 024）を切っている。SD125 は、同じく北へ折れ１区を縦断する溝跡 SD023 を切る。

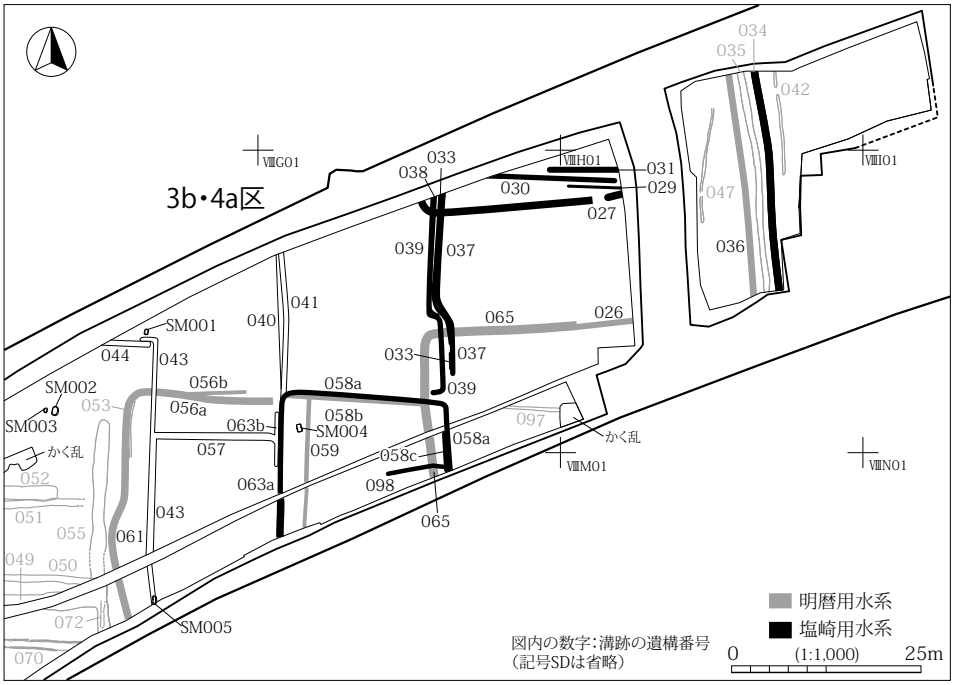
上記から SD025・１区 SD023 → 125（→ 024）→ 085・086 →現用水の変遷が考えられるが、なお SD025 は SD125 に切られるが、SD023 との前後関係は不明である。概要をまとめると１区を縦断する SD023 が古段階、２区から東流した SD023 が１区北西部で鍵手に北へ折れる SD125（→ 024）が中段階、２区を経由せず１区西辺に沿って北流する現用水に重なる SD085・086 が新段階の、大きく３段階の変遷が追える。

２区では SD021・022 と SD125（２区 023）・024 が２本ずつで対応し、SD021-SD125（２区 SD023）、SD022-024 がそれぞれ同一溝跡とみられる。それぞれ１区の中段階以後とみられる。

出土焼物様相としては、SD023 は埋土下層から 17 世紀の瀬戸美濃陶器擂鉢（289）、唐津砂目積皿（287）等が出土している。また、SD024 は伊万里Ⅴ期の紅皿、瀬戸美濃磁器碗（294・295）、産地不明の土瓶や植木鉢等の近代製品まで出土し、SD024 以後の溝跡は塩崎用水に関連するとみられる。SD025 は古代の焼物のみで時期は不明である。SD023 は用水跡と断定できないため、１区、２区で用水跡が確認できるのは塩崎用水開鑿以後といえる。２区から流れる SD025 は、SD125 より古いものの、SD023 の接続部分が SD125 に切られていて SD023 との関係が不明で、出土遺物もなく年代的な位置づけがわからなかった。

3a 区～4b 区の溝跡の変遷　［第 51 図］

3a 区以西では近世溝跡も平安時代の条里型地割と同方位で分布する。3a 区では隣接して重複せず南北方位に並走する SD034～036・042 が検出され、SD034 から近世末の高台畳付のみ露胎の全面御深井釉丸碗（299）が出土し、SD034 は近世末の塩崎用水以後のものとみられる。SD036 は中世大窯丸碗、内耳鍋片等のみで近世焼物は出土せず、隣接 3b・4a 区の SD061 も内耳鍋片等しか出土していないため、隣接する SD034 より古い明暦用水系用水の可能性があり、少なくとも２段階の変遷が捉えられる。その両脇の浅く細い SD042、047 は個別水田に伴う溝跡とみられるが、近世遺物出土がなく時期は不明である。



第51図　近世用水模式図（3a区、3b・4a区）

3b・4a区～4b区の第1調査面では3b・4a区中央付近でSD056・061 → SD58a・063の重複が捉えられ、ここでも古段階と新段階の2時期の変遷が推測される。SD063・058aに接続するSD043・044・057は同時存在とみられ、SD058aの東辺と類似位置にあるSD065を切るSD033・037～039、SD033・037～039北東にあるSD027～031も同様とみられる。SD057はSD059に接続せず、SD056の延長先にあるSD058bに接続すると推定される。また、SD058b東端はSD065に接続すること等から、SD061・058b・059・065が古い溝跡群とみられる。SD040・041は、SD063a・058aに切られるが、その位置的にはSD063aの北延長上にあたることから、同じ土地区画を踏襲するSD043・044・057・(063b)・040・041を中段階として、これ以後にSD058aが造り直されたものと考える。水田か畦畔の造成痕とみられるSD052・055・121の時期は不明である。

上記をまとめると、次のようになる。

古段階―SD056・061・059・058b・065（026）
中段階―SD040・041・043・044・057・(063b)
新段階―SD029～033・037～039・058a・063a・098

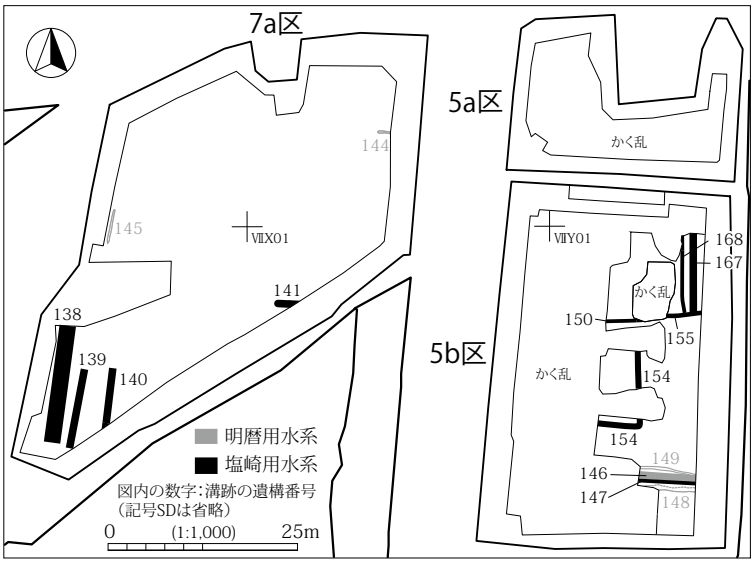
なお、墓跡はSM005がSD043上部に構築されていることから、溝跡の中段階から新段階の間とみられる。他のSM001はSD043の屈曲部付近でSD061の北延長線上、SM002・003はSD063の西延長線上にあり、SM004はSD063・059・058に囲まれた中に位置する。屈曲する溝跡の延長線上も何等かの土地区画があったとすれば、SM001～004は古段階前後とみられる。

出土遺物をみると、古段階はSD056から唐津碗があるのみで、他は弥生～中世土器しかない。また、中段階のSD040・041は中世の土器までしかなく、SD043から瀬戸美濃陶器の灰釉丸碗、同香炉（303）（美濃連房Ⅱ～Ⅲ期頃）がある。SD063は新段階の陶器も含むが唐津呉器手碗（315）や瀬戸美濃陶器摺絵Ⅲ（316）や灰釉丸碗片が出土した。新段階の溝跡は唐津Ⅳ・Ⅴ期擂鉢、18世紀末～19世紀前半とみられる灰釉丸碗、京焼系合子等の近世末以後の焼物があり、塩崎用水開鑿以後のものとみられる。

5b・7a区の溝跡　［第52図］

5b区では中央に東西方向のSD155と接続する南北方向のSD167・168、南部に東西方向のSD146～149、単独で接続関連が不明のL字形溝跡SD154が近世溝跡とみられる。東西溝跡が優位で、僅かにそこ

から派生する南北方向の溝跡が接続する。重複関係はSD146→147で、147が最も新しく、149は重複関係が不明である。SD155がSD167・168を切るとされたが、接続関係からみると関連する溝跡とみられる。遺物はSD167から図示したもの以外に全面施釉御深井釉の丸碗、SD147から肥前Ⅴ期とみられる伊万里碗、SD148から伊万里碗（324）、SD146から唐津碗、呉器手碗が出土し、SD146は明暦用水の可能性がある。SD150・167・168、SD147は近世末に比定され塩崎用水系の用水跡とみられる。



第52図　近世用水模式図（５区、7a区）

5b区では、明暦用水系用水の可能性があるのはSD146のみで、塩崎用水開鑿以後に用水が多く造られ、それぞれ改修や掘り直しされた可能性がある。

7a区は7b・８区との間に旧明暦用水跡とされる用水があり、これと並行してSD138～140、145が検出された。直交する東西のSD141は断片的な残存ながら、5b区SD150（・155）の延長線上に位置し、同一溝跡とみられる。遺物はSD138から中世カワラケが出土したのみで、時期は詳細不明であるが、SD141は塩崎用水系用水の可能性があり、SD138～140がその延長線上に位置する可能性があるため、SD138～140にも塩崎用水系用水が含まれるとみられる。

7b・８区以西の溝跡

旧明暦用水跡の位置とされる7a区、7b・８区以西で近世溝跡と断定できるものは12c区の塩崎用水跡のSD188～190、SC111西脇の溝状落ち込みしかない。11区１面で南北方向のSD156～158、162～165とやや離れた同方位のSD151が検出されたが、平安時代以前の出土遺物しかなく近世と断定できなかった。11区のSD162～165は隣接して並走し北から南へ傾斜する。断面形から耕作痕とされ、平安時代の条里方向とは異なる方位で平安時代以後のものではある。SD151も同方位で類似時期の可能性がある。これ以外のSD152・153と161・166は平安時代の条里型区画と同方位で、あまり時間が経過していない時期のものとみられる。SD159は部分的に条里と同方位の部分を含み、これと同じながら複数溝跡が重複した可能性がある。出土遺物がないため詳細な時期は不明だが、SD151は南側が低く、北から南へ水が流れた可能性がある。塩崎用水とは逆なので用水跡とすれば猪平池、あるいは西側の沢水を引水した用水から分岐したものとみられる。

12c区ではSD188・189・190はコンクリート護岸の現塩崎用水に変わる前の溝跡とみられる。これ以外に近世道路跡SC111脇の水田端部に溝状の落ち込みが検出されたが、これは北から南側へ低く傾斜し、塩崎用水と逆方向なので猪平池の用水を利用したものとみられる。

以上から、近世では7a区以東に近世用水が数多く検出されたが、その範囲は明暦用水の故地より東側の低地側にあたるので、千曲川系用水と関連する溝跡と捉えられる。それぞれ明暦用水系と塩崎用水系に分けられる可能性があり、3b・4a区では各段階の溝跡が若干ずれて位置するので、明暦用水が途絶し、

塩崎用水開鑿に併せて再掘削されたものと考えられる。

明暦用水系用水は3a区のSD036までが比較的明瞭であるが、２区以東については詳細を明らかにできず、２区のSD025がその可能性を残すものの、１区では明確なものがない。一方SD023等の区画溝跡が検出されていることから、明暦用水は１区まで灌水せず塩崎用水系用水跡によって、１区まで灌水されたものと理解している。塩崎用水通水以後も数度の用水跡改変が認められる。

3b・4a区の中段階とした溝跡群の位置づけであるが、出土陶磁器からすると塩崎用水以前で、明暦系用水かそれ以後とみられる。方向や形態は明暦用水系と思われる古段階のSD056・058b・059・061・065（026）とは異なり、より北側へ延長していると共に、幅が狭く浅い特徴がある。このことから明暦用水系の古段階の用水跡を直接継承せず、明暦用水廃絶以後に新たに猪平池等の水源か、別の沢水を引水した用水跡としたい。なお結果的にはこの用水もSM005等が溝跡内に構築される等の状況をみる。継続維持できずに最終的に放棄されたとみられる。また、墓跡がこの中段階の区画に沿って位置するとみられることから、この時期には一帯が乾燥していたともみられる。

第２節　長谷鶴前遺跡群

１　居館跡の変遷

（１）遺構の変遷

長谷鶴前遺跡群１区、２区では、全く予想しなかった中世の居館跡や道路跡が発見された。また、隣接する石川条里遺跡 12c 区でも居館堀跡が検出された。いずれも居館跡内部の様相は把握できなかったが、周囲を含めて造成を伴いながら造り替えられていることが判明した。そこで、中世居館跡の変遷をまとめる。

長谷鶴前遺跡群の変遷

長谷鶴前遺跡群では平安時代前期には山からの崩落土も僅かであったようで、山際の崖錐地形際まで平坦な地形に水田が広がっている。それは中世前期まで継続したとみられるが、中世後期になると山からの供給土が増加してくるなかで、盛土整地を行って屋敷地や居館、道路が造成されていく。その過程をⅠ～Ⅲの３つの段階に整理してみる。最終段階のⅢ段階はさらにＡ・Ｂの２期に細分できる。

Ⅰ段階［第 53 図上段左］：中世後期遺構は整地土層を挟んだ第４調査面と第３調査面に分かれるが、盛土整地以前の第４調査面遺構をⅠ段階と捉える。第４調査面は大部分が水田で、山際に調査区内を横断する道路跡 SC20、その脇に屋敷地とみられる平坦地一か所が構築されている。平坦地では建物遺構は確認されなかったが、東側道側は SD59 で画し、南は水田域から一段高く SH06 を配して溝による区画はない。この４面は南西山側からの粗粒山砂を主体とする土砂堆積により、南西部山際付近の道路跡・水田域が埋没していく。

Ⅱ段階［第 53 図上段右］：第４調査面が土砂で堆積以後に１区・２区の山手側は水田を埋めて盛土整地され、その上面が第３調査面にあたる。この調査面では居館堀跡 SD40 が検出されている。また、その埋土上層では道路跡に伴う側溝とみられる溝跡が重なって検出された。このことから第３調査面検出遺構は SD40 の段階と、廃絶以後の２時期に区分でき、前者をⅡ段階、廃絶以後をⅢ段階とする。この第３調査面盛土整地は調査２区南部から SD40 南岸まで分布し、２区南部で検出された SC01 は整地土層上面が盛り上がっており、SD40 同様に盛土整地時に２区南部の道路跡 SC01 も構築されたと捉えられる。

Ⅱ段階にあたる SD40 は幅約８ｍのＬ字形の堀跡で、北端は調査区外に延びて規模は不明ながら、その南辺が隣接する現個人宅敷南地境に一致することから、その宅地範囲を居館跡範囲とすると、１辺約 50ｍの方形居館を囲む堀跡と推測される。SC01 はこの居館へ入る道路跡とみられるが、SD40 南辺に堀が途切れる土橋には直接繋がらずに SD40 南東隅へ続いていて、居館跡へ入るには SC01 から堀沿いに折れて入ったと推測される。SC01 には２区南部では西側側溝 SD25a・25b・30a・30b、東側側溝 SD32a（50）・32b（51）・34 が伴い、さらに SD25・30 中間で、SD34 北端等の途切れたところに直交する、傾斜方向の排水用とみられる溝跡 SD29・38a・38b、41a・41b が位置する。

SD25・30・32・38・41 は掘り直しが確認され、新段階を a、旧段階を b と捉えた。また、分割調査したため同一溝跡に別番号を付したものがあり、SD50 は SD32a、SD51 は SD32b の同一溝跡とみられる。この側溝は次のⅢ段階のものも含む可能性があるので、少し検討しておきたい。溝跡は途切れる地点と直

第42表　2区南部溝跡の重複関係

遺跡の位置		道路跡 SC01 西側			道路跡 SC01 東側		
段階＼遺跡の性格		排水溝	側溝（南）	側溝（北）	側溝（西）	側溝（東）	排水溝
Ⅱ	ア	SD38	SD30b	SD25b		（SD34）	SD41b
ⅢA	イ	↓	SD30a	SD25a	SD32b＝SD51		
	ウ	↓	↓	↓	SD32a＝SD50		
	エ	（SD29）	↓	↓	？		SD41a

交溝跡が重なる地点が合致したり、先端が接する場合は、同時存在と想定し、重複関係の調査所見から2区南部の溝跡の切り合い関係を整理すると第42表の通りとなる。

第42表の変遷では西側側溝は長期に継続維持され、東側側溝が造り替えられていく様相がみえてくる。このなかでSD41に係る重複関係は、調査所見でSD41b→SD32b→SD32a→SD41aとされた。溝跡が一旦廃絶して、また同所に掘り直されることがあるのか認定に躊躇されるが、調査所見のままだとア～エの4段階に細分できる。ただし、SD41aとSD32aの重複関係が見誤りで逆であった場合は、エの段階はなくなる。また、SD30a・30bの間にSC01上面に再度盛土する改修が行われ、SD34も上面に整地土が盛られているので、この時に廃絶した可能性がある。そうであるならば、アとイ～エ段階の間には、道路を盛り直しながらSD34を廃絶してSD32を東側側溝として北側へ延長した大きな画期があるとみられる。ウ段階は側溝の掘り直しで推移し、最後にエ段階でSD41が再度掘り直されたことになる。このなかで古いア段階は居館跡時代のⅡ段階にあたるが、イ～エ段階は、後述する出土内耳鍋の形態比較からはⅢ段階に含まれる可能性がある。なお、SH04はSD40東岸にあり、当期に存在した可能性がある。

Ⅲ段階　調査3面検出遺構のなかで居館堀跡SD40廃絶以後の段階と捉える。この段階は更に遺構重複から数段階に分けられるが、遺跡全体の改築なのか、個別遺構の改修なのか判然としないところもある。また、2区北部は道路の改修が頻繁に行われている。2区北部の遺構を中心に検討すると、SD40埋土上面では、SC01側溝の延長先とみられるSD24・33・36・63・64等の溝跡が検出された。SD40廃絶以後に、道路が北側へ延長されたと捉えられる。側溝は類似場所に何条も重複し、絶えず改修を繰り返し、それが顕著に行われた2区北部では、Ⅱ段階のSC01を継承し、そのまま北へ直線的に延長された段階のAと、道路が当初のSC01の位置からずれて西側のSD40埋土中央側へ移るB段階に分けられる。

ⅢA段階　［第53図中段左］：SD40埋土上層検出のSD63は、SD24・33・36等のすべての溝跡に切られ、SD40廃絶以後の溝跡で最も古い遺構と捉えられる。SD63の西延長先付近にあるSD45・57とは接続しないが、位置関係から関連する可能性は高い。ただ、溝跡幅はSD63が広く掘り直しされた可能性もある。このSD63東岸にある帯状集石遺構SH04はSD24に切られ、ⅢB段階以前ではあるが、SD40に伴うものか、SD63に伴う道路跡の基礎部分の残存かは判断できなかった。当該期の2区南部の様相は、後述するようにSD32から内湾形内耳鍋が出土し、Ⅱ段階SD40からはその先行型式の外反形態の内耳鍋のみ出土したことから、2区南部のイ～エ段階は当該期の可能性がある。SC01の直線的な北側延長先にSD63・SH04が位置する関係からもSC01が当該期まで維持されたとみられる。ただし、2区北部と南部の対応関係は把握しきれていない。この段階はSD40廃絶以後に2区南部ではSC01が同じ場所で維持さ

第 53 図　居館跡の変遷図

れ、２区北部ではSC01がそのまま直線的に延長された段階と捉える。

Ⅲ B段階　［第53図下段］：上記SD45・57を切るSD65は、南東延長先にあるSD48との位置関係から連続した溝跡とみられ、SD45・57-63同様に西側山地から低地側へ延びることから、造り替えの関係とみられる。ただし、SD65-48は大きく南へ屈折しており、道路跡がSD40埋土中央の西側への移動に伴って、SD48による新しい区画が造られた可能性がある。なお、SD49は第３調査面の下層でSD48と共に追加調査したものだが、SD25aの延長先にあたり、Ⅲ A段階の可能性がある。ただ、SD48・29の前後関係は捉え切れていない。２区北側ではその道路側溝とみられるSD24・33・36が類似場所に重なり、道路は改修を繰り返しながら維持されたとみられるが、いずれも浅く小規模である。この時期の２区南部の様相は不明だが、調査区南壁断面では側溝を伴わない道路跡が３面SC01西側にⅣ層上面まで継続して重なって認められ、道路跡が全体的に西側へ移転したことが知られる。この道路跡はやがて現市道下部分へさらに移転したとみられる。２区中央では浅い溝跡SD27・28が検出されているが、これも当該期の側溝の残骸とみられる。なお、SD63と64は直接重複しないが、SD63の上層にあるSD33・36とSD64がほぼ重複位置にあってSD64→SD36→SD33への変遷が想定される。SD36がSD63を切る位置関係にあることからすれば、SD64はSD63より後出すると推測される。

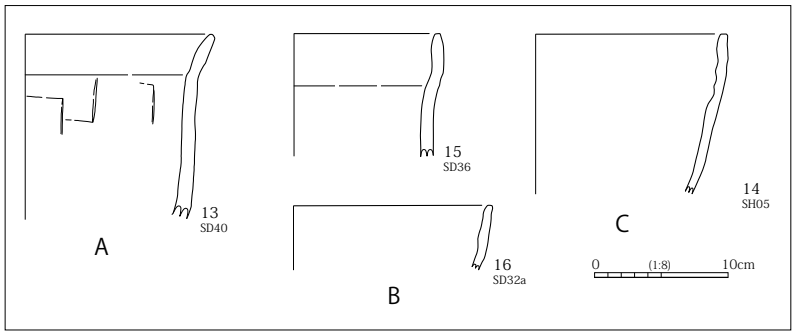
また、３面の２区中央西寄りの地点でST03を含む柱穴跡が集中的に検出された。その一部は類似場所の４面でも検出されたが、４面では浅い僅かな残存で、本来は３面以上の遺構と思われる。このなかで、ST03はSC01を切り、少なくともSC01廃絶以後のⅢ B段階以後とみられる。これらの居住遺構の時期だが、柱穴跡分布西限は現市道下部分付近で、道路が現市道部分へ移転した時期とも思われるが、２区中央北部ではSD48の区画範囲内に柱穴跡分布が収まるようにみえ、その南のST03を含む柱穴跡の分布も溝跡SD46・27・28を東限とする範囲で一旦収まるようにもみえる。このSD46・27・28が屋敷地と道路を画する溝跡とみられるならば、道路SC01に後続する道路跡が存在した段階とみられる。そして、この時に居住地周辺のみ東側へ道が膨らんで、SD48東側へ続く可能性がある。この時の居住遺構に係る遺構とみられるSH05、SK137からは後述する内耳鍋Cが出土し、SD24でも類似内耳鍋が出土しているのでSD24と類似時期の本段階に含められる可能性がある。

②　石川条里遺跡の居館跡変遷　［第53図中段右］

石川条里遺跡12a区を取り巻くように12c区で堀跡SD191が検出された。SD191は12c区の南北方向の現市道直下に塩崎用水と重なって位置し、その南端は現南北市道が長谷鶴前遺跡群との境となる東西現市道と交差する場所で西側へ折れている。12a区は近世に水田化されていたこともあり、調査時には居館跡の存在は認識されなかったが、南東隅の平安時代水田面で一段高い長楕円形の一角が検出されたが、これが堀跡先端とみられる。幅は南辺の屈曲部付近で８ｍ強を測り、断面形は逆台形で、長谷鶴前遺跡群のSD40とほぼ同規模、同形状である。堀跡南辺が重なる現東西市道は調査区外西側で不自然にクランク状に屈曲し、これが居館跡南西隅とみられる。ここまで凡そ50ｍほどを測り、長谷鶴前遺跡群の居館跡と同規模と推測される。居館跡内部の様相は不明だが、SD191下部で細いSD192を検出している。少なくともSD192→191へ造り替えられている。ただし、SD192は屈曲した南辺の下部のトレンチでは確認できず、SD192が居館跡堀に先行する溝跡かどうかはわからない。

（２）長谷鶴前遺跡群と石川条里遺跡の居館跡変遷と年代

長谷鶴前遺跡群では中世後期から居住が本格化し、Ⅰ段階に水田内に道路SC20を付設し、道側を



第 54 図　内耳鍋の口縁形態

SD59 で区画する屋敷を造成したが山からの崩落土で埋没し、Ⅱ段階で周辺を含めた盛土整地を行い、道路跡 SC01 を設けて堀 SD40 で区画された居館跡が出現している。それがⅢ段階で堀跡が廃絶し、変わって道路が北側へ延長されるが、２区南部の道路跡の延長にあって当初の道路位置を維持したⅢＡ段階と、そこから外れて道路位置が変わるⅢＢ段階があり、このⅢＢ期に一時的に居住域の利用があると捉えた。一方、石川条里遺跡は最初に SD192 があり、後に幅８ｍの SD191 に造り替えられる居館跡が現れているとみられる。最後にこの両遺跡の関係と年代を出土遺物から検討したい。

今回の調査で得られた中世土器は内耳鍋とカワラケがほとんどで、陶磁器の出土は僅かである。この様相は長野県内北部では通有の様相だが、年代を決める資料としては出土量も多く形態変化が追いやすい内耳鍋が有効である。

これまでの検討（小林秀夫 1982、野村一寿 1990）で、内耳鍋の口縁形態は外反（Ａ）から内湾（Ｂ）、直立へ形態変化し、直立傾向のなかで口縁部の伸長と、内面に凹凸を顕著に残す傾向と認められる。長谷鶴前遺跡群では内湾と直立の中間の形態内面に凹凸を顕著に残すものがあり、これを（Ｃ）としておく。また、外反形態に少量瓦質のものが存在するが、酸化炎焼成に先行するもので存続時期は短いとみられる。

長谷鶴前遺跡群から出土した内耳鍋の口縁形態を並べると第 54 図のようになる。このなかで長谷鶴前遺跡群Ⅰ段階の遺構からは水田域内で内耳鍋片が出土したものの、SD59 や屋敷地、SC20 内では内耳鍋の出土がなく、Ⅱ段階以後に内耳鍋が出土したとみられる。瓦質内耳鍋とＡ（外反形態）の可能性がある破片を出土したのが SD50、Ａ（外反形態）を出土した遺構は SD34・40・45・48・49、SK164・250 で、SD40 からは外反形態のみ出土した。Ｂ（内湾形態）を出土したのが SD29・32・36、SK244、Ｃ（直立形態に近く若干内湾し、内面に凹凸が顕著）を出土したのが SD24、SH05、SK137 である。SD50 は２区南部の道路を改修したⅢＡ段階とみたが、同時期と捉えられる SD32 は内湾内耳鍋を出土しているので混入の可能性がある。同様に、SD49 は居館堀跡 SD40 廃絶以後のⅢ段階の可能性があるので、混入の可能性がある。

各遺構出土内耳鍋の数は少量で確実に伴うと断言できる例はなく、近世・近代遺構へも１～２片の混入は認められ、新しい遺構に古い土器が混入する場合もありうる。従って、１～２片の出土で各遺構時期を捉えるのは限界もあるが、概ね上記変遷と内耳鍋の形態別出土傾向をまとめると、Ⅰ段階の遺構は内耳鍋がなく、Ⅱ段階に外反形態の内耳鍋、ⅢＡ段階以後に内湾内耳鍋、ⅢＢ段階以後に直立気味の内耳鍋が出土する傾向とみられる。一方、石川条里遺跡では出土遺物が僅かで、上層の幅広い SD191 からは、カワラケ３片、内耳鍋体部３片、SD192 から内湾形態の内耳鍋１片、底部片７片、カワラケ１片、志野丸皿１片がある。出土量が僅かで、確認できるのは内湾形態の内耳鍋のみである。１片から断定するのは躊躇されるが、石川条里遺跡の居館跡は、長谷鶴前遺跡群２区南部の道路跡が改修された形態がみられるⅢＡ段階以後とみられる。そうであるならば、長谷鶴前遺跡群の居館跡廃絶以後に居館跡が石川条里遺跡へ移転し、道路が改修を伴って北側へ延長されたとも考えられる。また、石川条里遺跡の SD191 では志野丸皿小片が出土し、近世初期まで堀跡は開口していた可能性があるが、居館跡としての存続時期はわからな

い。

先にみた長谷鶴前遺跡群の内耳鍋の年代は、周辺遺跡である程度年代がわかる陶磁器との共伴が認められた事例でみてみる。内耳鍋の古い形態とみられる瓦質内耳鍋と少量の外反内耳鍋が出土しているのが長野市栗田城跡で、出土陶磁器は古瀬戸Ⅰ～Ⅳ（古）までのものが知られている（市教委 2014）。次に堀内は外反形態の内耳鍋で占められる石川条里遺跡高速道地点の居館跡堀跡では古瀬戸後Ⅳ（新）までのものがあり、大窯製品は出土していない（埋文センター 1997）。内湾形態のものは一部直立傾向のものを含むが、松原遺跡ⅢのSD１・２出土土器が該当し大窯１式のⅢが伴う（市教委 1993）。このことから、Ⅰ段階は 15 世紀中頃以前としかわからないが、Ⅱ段階は 15 世紀後半、ⅢA段階は 16 世紀前半、ⅢB段階はあまり時間を隔ない 16 世紀前半でも中葉に近い頃とみられる。

（３）長谷鶴前遺跡群の居館跡の位置

今回の調査結果を踏まえ、長谷鶴前遺跡群の居館跡について当地域内の位置づけを探ってみる。今回の調査で注目されたのは４面の水田内の屋敷地から３面の整地と堀を伴う方形居館への変化が捉えられたことである。本遺跡では４面から３面への転換が山からの土砂堆積が契機ともみられ、必ずしも社会背景と無関係な変化かもしれない。今回の居館跡出現時期は外反形態の内耳鍋が出現・普及する時期に重なると捉えたが、周辺地域の石川条里遺跡高速道地点の居館跡や千曲市屋代遺跡群内のいくつかの居館跡等も、同様に外反形態の内耳鍋を伴う時期のものである。従って、本遺跡を含む周辺の 50m四方規模前後の方形居館跡が 15 世紀後半の類似時期に各地に出現したとみられ、やはり何等かの共通する社会背景があった可能性がある。その具体的な背景の様相はわからないが、内耳鍋の出現と普及、さらにこの時期に石鉢や石臼の出現等（栗田（４）2014）、広域流通品ではない狭い流通圏の地域内生産物が増加する時期に重なる点は注意される。石製品は石材確保から生産地が限られるとみられるが、重量があって広域に大量に持ち運ぶには適していない。従って、各地に複数生産地が存在するとみられる。また、内耳鍋は胎土分析から、一つの地域内に複数生産地が存在することも知られている（野村 1990）。一方で、長野県北半では広域流通焼物が鎌倉時代に比べて極めて少なくなる状況も知られており、旧国範囲を超えるような広域物流交流減少と地域内生産物の増加は関係があるとみられる。つまり、生産や流通が狭い地域経済圏のようなまとまりが顕著になってくる状況があり、そのなかに狭い地域支配の拠点としての居館跡の出現があるかもしれない。また、長野市域で古い１辺 100mクラスの居館跡として栗田城跡があるが、栗田城跡では瓦質内耳鍋と外反形態の内耳鍋が少量出土し、外反形態の内耳鍋はあまり出土していないので、50m四方の居館跡が増加してくる時期に途絶えている可能性がある。この栗田城跡は陶磁器の出土量の多く、あまり出土例が多くない口径 14～16㎝の特大カワラケを使用していることから、守護所の可能性もある。現況では守護所と断定しきれないが、守護所の消滅と、地域内の中小土豪や国人領主等の支配ブロックが顕在化する様相とも符合する。

長野市や千曲市周辺では、こうした 50m四方の居館跡の多くで大窯製品や内湾形態の内耳鍋を出土せず、16 世紀以前に廃絶するものが多いとみられる。しかし、長谷鶴前遺跡群では移転して存続した可能性が知られた。居館跡背後の山頂には山城である赤澤城跡があるが、それと関連するのだろうか。この点は石川条里遺跡の居館跡の存続時期を明確にしえず、詳細はわからない。

２　長谷窯

（１）記録に残る長谷窯と松代焼について

長谷窯は塩崎村（現長野市篠ノ井塩崎）の宮崎清右衛門〈1826（文政９）～1893（明治 26）年〉が、共

同出資者である更級郡赤田村（現長野市信更町赤田）の小林彦八郎とともに、1867（慶応３）年８月、宮崎清右衛門の敷地内に開業したものである。清右衛門は職人を多治見（岐阜県多治見市）から呼んで製品を作らせ、自らは作ることはなかったとされる。1875（明治８）年には清右衛門一人の所有となり、長男である七重〈1848（嘉永元）～1924（大正 13）年〉が跡を継ぐが、七重が目を悪くし、妻のふさが死去した 1896（明治 29）年頃に窯を閉じている。窯の廃業後は、土地を宅地や農地へと転用していることが、長野地方法務局に残された旧土地台帳から判明している。

窯と工場は宮崎家の南側の敷地に築かれ、窯は山の斜面を利用した東西方向に延びる五連房の登窯であったとされる。間口は二間五尺五寸（約 5.3m）との記録がある。閉窯後も窯は壊されず、明治の末頃までは残っていたという。一方、作業場は窯に隣接して建てられていたようで、間口９間（約 16.3m）、奥行２間３尺（約 4.5m）を測り、職人とその家族が住めるようにもなっていた。窯焚きは年に２回で、製造していた品物は大小の甕を主体として、擂鉢・紅鉢・片口鉢・徳利・土瓶などの日用雑器であったとの記載があり、役場の文書には製造数と売上代金の記録も残っており、生産数が増加している状況が読み取れる。

焼物の原料となる土については、布施五明村（現長野市篠ノ井柳沢周辺）と桑原村（現千曲市稲荷山桑原周辺）の白土を用いていたようだが、岡田（長野市篠ノ井岡田）や小市（長野市安茂里小市）の土を使ったとの言い伝えもある。土の配分などについての詳細は不明であるが、轆轤による成形後は天日で乾燥させ、１日かけて素焼きを行い、施釉後に約２日間の本焼きをしていたとされる。燃料には松薪が使用されていたようだが、仕入先などの詳細は分かっていない。

なお、塩崎村史の補記には、長谷窯へ岡田窯（長野市篠ノ井）の米山通太郎らが手伝いに行っていたとの聞き取り記録が収められている。岡田大門窯は、もともと松代横町窯（長野市松代町）から岡田の地に移り住んだ米山直治が、1873（明治６）年頃に操業を開始した窯であり、長谷窯の閉窯後の 1926（大正 15）年頃まで続いていたとされる。岡田大門窯の職人、および直治の長男である通太郎が長谷に手伝いに行っていた時期は、長谷窯の晩年頃であるとみられ、岡田焼を通じて長谷焼も松代焼との接点があったと考えられる。

長谷窯では白濁した藁灰釉に銅緑釉流し掛けや鉄釉を掛けた壺・甕・鉢・徳利等の日常雑器を生産していたが、その焼成器種や釉薬は松代焼に類似する。松代焼自体の定義は明確ではないが、一般的には長野市松代地区で近世末～近代にかけて焼かれた焼物を指す。それと類似した松代周辺の諸窯製品は松代焼系、松代焼手と括られる場合があり、長谷焼もここに含まれる。松代焼は当初から様式的に完成したものではなく、また窯ごとに製品に若干差異があるとされる。唐木田は初期の松代焼の天王山窯は薄い鉄釉を多用した焼き締めに近い製品ながら、名雲窯を継承した松代荒神町窯の製品は名雲窯にない化粧土の使用、藁灰釉の多用、銅緑釉、暗灰色灰釉の使用等がみられ、荒神町窯で松代焼の釉薬等の技術が確立したとする（唐木田 1993）。また、小松は銅緑釉の流し掛けは松代代官町窯に多いとしている（小松 2002）。ちなみに、これらの北信地域の松代焼や松代焼系各窯の経営者たちが雇った職人たちは、京都、信楽、常滑、瀬戸、美濃、これ以外に渡りの職人として瀬戸、京都、越後の窯や益子等出身者もいたとされ、多様な生産地の職人が関わっている。その一方で北信地域の諸窯では松代焼と全く区別できない製品もあるとされている。さまざまな産地出身の職人が関わりながらも松代焼系の窯間の職人の移動や手伝い、売れ筋の製品模倣等を通して製品が類似する傾向になったのだろうか。

なお、松代地区の近世窯業は、古くは唐津で修行した嘉平治が寛政の頃開いた窯があったとされ、1816（文化 13）年に松代藩が殖産興業の一環として嘉平治の窯を買い取った名雲窯と新設した天王山窯から本

格的にはじまる。名雲窯が移転して荒神町窯となり、それが民営化されると共に、天保以後から幕末にかけては松代の楽焼として始まり瀬戸出身の職人が引き継いだ代官町窯、長野市周辺の豪農や商人、職人等により千曲市森窯・桑原窯、長野市寺尾山根窯・岡田南町窯・岡田新田窯・岡田大門窯・石川窯、飯綱町赤塩窯、須坂市須坂窯等の数多くの窯が開かれた。長谷焼もこの時期に始まり、明治以後でも長野市岡田払沢窯・五明窯・吉窯、千曲市雨宮窯が開かれている。明治期では鉄道で運ばれる小物が多い瀬戸物と競業しないように、これらの窯では大型雑器を中心に生産していたが、瀬戸製品に価格で太刀打ちできずに廃窯したと考えられる。

（２）工房跡について

今回の発掘調査では、ロクロの台石が据えられた状態で確認できたことから、調査区内に長谷焼の陶器製作工房跡（工場）が存在していたことが考古学的調査によって明らかとなった。工房跡に関しては、前述のように文献では規模が間口９間（約 16.3m）、奥行２間３尺（約 4.5m）とあるが、間口を東西、南北のどちらにとっていたかは記載がない。長谷焼と同様に、ロクロの台石が据えられた状態で見つかっている松山窯跡（石川県加賀市）は、東西方向に並ぶロクロ台石と同じ方向に建物の間口がとられており、ロクロ台石は壁に沿っている。松山窯跡の例と本遺跡のロクロ台石の出土状況から、本遺跡も工房跡の間口はロクロ台石と同じ東西方向にとられていたと考えらえる。また、ロクロ台石が北壁に沿っていると工房全体が山際に近い位置になり、窮屈な印象を受ける。一方、ロクロ台石が南壁に沿っていたとすると山際まで余裕があり、ちょうど石で囲まれた範囲に収まるため、この辺りに工房跡があったとみて問題ないと考えられる（柴田 2020）。

ちなみに、松代焼系の窯について研究された唐木田の著書には、昭和まで継続していた窯業関係者の聞き取りによる作業場の見取図が掲載されている。それによると以下の施設があったようである。

登り窯：７～10 室の連房で、覆屋が伴う。昭和ではトタン屋根だが、江戸時代末期の荒神町窯では礎石立の瓦葺で、唐木田は出費記録から窯と上屋小屋の築造費用はほぼ同額と推測している。
素焼窯：本焼前の素焼を行う窯で、登り窯とは別に存在する２～３室の窯である。唐木田の岡田新田窯での聞き取りでは２室の素焼窯で十回焼成すると本焼１回分が揃ったという。
細工場：ロクロを設置する製陶施設で、代官町窯で３間×６間、岡田新田窯は住居兼用で４間半×９間半、岡田大門窯は 4.5 間×８間、桑原窯の土練り場を兼ねた６間× 14 間等の長大なものが多く、２間×３間と２間２尺×４間２階建ての２棟に分かれていた赤塩焼例もある。細工場が長大な理由は、職人の住居を兼用するものもあるが、焼物素地を乾燥させる倉庫機能も兼ねたのだろうか。ロクロは蹴ロクロ・手ロクロの２～３基土間に置かれる例があるが、代官町窯では蹴ロクロはなく大物を作る回転台と小物を作る手ロクロだったという。
土置場・土小屋・水簸場：粘土塊を唐臼で砕く唐臼小屋、粘土を置いて寝かせる土置場が１間半×３間の２棟に分かれる岡田新田窯例、３間×４間の土小屋としてまとめられる代官町窯例がある。また、粘土細砕に水車を利用する場合もあったようだ。水簸場は明治時代に一時磁器焼成が試みられた代官町窯にみられ、２坪ほどの規模とされるが、他の多くの窯では水簸場の文献記載がない。唐木田の岡田新田窯関係者の聞き取りでは、乾燥した粘土を粉砕した後、斜めに設置した篩（万石）の上端から流して粒子をふるい分けたという。
置場・組場：岡田新田窯では釉掛け後の本焼前に窯詰用に窯道具で組んで仮置きする小屋があり、細工場・土置場・唐臼小屋・素焼窯から少し離れた登り窯近くに４間×８間の置場・組場が設けられている。

他窯では見取図に同施設の記載はなく、細工場と兼用されていたか、仮設、あるいは窯の覆屋下で行ったであろうか。また、そこには素焼製品や出荷前の本焼製品を置く場合もあったであろうか。

庭：唐木田の「松代焼」に掲載されている昭和 10 年信濃教育会撮影の岡田新田窯の写真では、庭に素焼の甕を並べ、まとめて釉掛け作業を行っている。大型品の釉掛け作業には広い場所が必要とみられる。これ以外に瀬戸では、製陶に大量の水を使用するため小溜池を備えていたとされる。これについては松代焼系の各窯で池と記載されている例があるが、詳細は不明である。

上記が製陶に必要な施設とすれば、今回調査で明確に捉えられたのは細工場と庭のみである。長谷焼では素焼き窯の記録はないが、同じ窯で素焼きと本焼きを行ったとも読める。出土遺物の土人形や低温で溶ける軟質施釉陶も焼成しているとすれば、別に小規模な窯があった可能性も否定できない。また、窯焼きの際に職人が寝泊まりできる小屋は調査区外に存在したとみられる。他窯の例から想定される施設は今回の調査では捉えられなかった。なお、粘土が多く分布していた ST01 東側の地点は工房の一角に設置された土置き場か、陶土を使う釉薬の調合作業が行われていたのかもしれない。

（３）窯について

窯については調査内で確認することはできず、周辺の踏査をしても状況が不明であったため、その位置や構造に関しては推定となるが、まずは文献にある記録からその場所について考えてみたい。記録として確認できるのは、山の斜面を利用した東西方向の登窯であり、作業場に隣接していたという２点である。東西方向の斜面に造られた登窯ということは、山の裾は南北方向に伸びている場所であると解釈できる。３区に隣接する湯ノ崎山は、調査区を囲むように千曲川に向かって突き出ているため、裾が南北方向に伸びているのは３区の西側となる。ここで問題となるのは、工房跡と窯の位置関係である。塩崎村史には「窯と工場は宮崎家の南側の敷地に築かれ、（中略）、作業場は窯の北側に建てられていたようで」と記載がある。裏を返せば「作業場の南側に窯があった」ことになるが、先に想定した工房跡の南側は、山の裾が東西方向に伸びているため、山の斜面を利用した東西方向の窯を築くことは難しい。村史の記載が誤りなのかは定かでないが、発掘調査の成果と周辺地形から見ると、東西棟の工房が山際に建てられ、それと直列するように東西方向の窯が西側の斜面に築かれ、その北側に創業家である宮崎家があったと考えるほうが自然であると思われる。

次に築造された窯の構造についてであるが、「五連房の登窯」であり、間口が二間五尺五寸（約 5.3m）という記録から、いわゆる「連房式登窯」とよばれるものであったと理解できる。長谷に呼ばれた工人が多治見の人であったという記録から、窯の構造も瀬戸・美濃地域で稼働していた窯と同じであった可能性が高いものと推定した。そこで、瀬戸・美濃地域で現存する連房式登窯がないか調査したところ、愛知県瀬戸市で昭和前半に稼働していた「一里塚本業窯」が瀬戸市有形文化財として登録されていることが分かった。この一里塚本業窯は陶器専用の窯で、焚口が３つ、「間」と呼ばれる焼成室が４つある。一番手前の燃焼室は幅約７ｍ前後で長谷焼の記録よりかなり大きい。

瀬戸・美濃の本業焼連房窯は、江戸初期に唐津から持ち込まれ、伝統的な大窯の技術を融合させて成立したという（瀬戸市史 1993・金子 2006）。瀬戸・美濃の本業焼連房の房間の燃焼ガスの通路を縦狭間とし、近世末では新たに磁器生産のために肥前から伝えられた横狭間の丸窯が加わる。

長野県内で調査された窯跡をみると、須坂窯（須坂市）・相道寺窯（須坂市）が横狭間の復元図のみで詳細不明とされ、常滑の影響を受けた下郷焼（上田市）が無段半地下式で、福島窯（木曽福島町）、赤羽窯（辰野町）・大久保尻窯（辰野町）、洗馬和兵衛窯（塩尻市）・東馬窯（上田市）、藤沢窯（高山村）は有段縦狭

間である。県内では基本的に瀬戸・美濃の窯がモデルとされる（小松 2006）。松代焼の天王山窯は当初信楽の職人を入れているので、異なる形態の可能性がある。金子によると瀬戸では時代が下ると連房上方の房が広くなる扇形となり、各焼成室は方形に近い肥前窯と異なって横幅を広げる傾向で変化し、奥行きも 19 世紀前葉には最上段の部屋の奥行きが最も長いという。長谷焼の年代に近い 19 世紀前半の湧右衛門窯（愛知県瀬戸市）で燃焼室幅は不明ながら、10～14 室で奥行 1.60～2.28m×幅 7.82～8.06m、19 世紀後葉の赤重窯（４次）（愛知県瀬戸市）で燃焼室は奥行 0.9m×幅 5.0m で１～４房は奥行 0.8～1.70m×幅 4.70～6.60m という。長谷焼の明治の調書にある「間口」がどこを指すか不明だが、燃焼室とすれば 19 世紀後葉の赤重窯（４次）に近い数値ではあり、当時の窯の構造・規模で造られた可能性がある。ただし、唐木田の聞き取りでは松代系初窯では蹴ロクロ・手ロクロが併存し、代官町窯は蹴ロクロの記述がない。瀬戸・美濃は手ロクロ中心で、大型品は紐を掛けて手繰る方法という（瀬戸市史編纂員会編 1993）。瀬戸市史では蹴ロクロは西日本と北陸に多いとしており、これからすると窯以外の製陶技術は多様な技術が複合していた可能性もある。

（４）長谷焼の製品について

焼物種：今回の調査では長谷焼で生産されたとみられる焼物には、素焼後に施釉焼成される陶器の長谷焼、人形等の素焼製品やその型、低温度で溶ける釉を施した土釜の軟質施釉陶器の３種の焼物が確認できた。すべて同じ窯で焼成されたものか、焼成された時期が異なるかは明らかにできなかったが、焼成温度が低い人形等の素焼き製品や軟質施釉陶器は出土量自体が少なく、普遍的な生産品ではないようだ。

長谷焼：

器種：松代焼系の窯では窯ごとに生産器種が異なる傾向も指摘されているが、今回出土した長谷焼製品には概ね擂鉢・徳利・鉢類等の松代焼系窯と共通する器種を含む。ただし、他の窯にみられる冬場に飯をこたつで保温するかぶと鉢や碗・皿・大皿・燗徳利・香炉等はみられない。長谷焼では甕と擂鉢、植木鉢、火入、蓋付の灯明具が特徴的に認められ、近年調査された長野市松代城下町跡にある代官町窯（市教委 2022）の製品と比較すると、片口・鉢・擂鉢等は長谷焼と共通し、椀・皿・燗徳利・油壺・鍋等の長谷焼にあまりない器種も生産している。一方、長谷焼は植木鉢・甕・火入・蓋付灯明具等多く認められる。特に蓋付灯明具は長谷焼で一定量生産された特徴的な器種とみられる。別にモデルが存在するのか、長谷焼独自のものなのかは判明していない。このように発掘調査例の比較から、松代焼系窯は釜ごとに生産器種が若干異なる傾向がみられる。生産器種の差異は、上田藩に陶器を納めた岡田南町窯等のような理由もあるが、時代ごとの変化も追え、古い窯では碗・皿等の多様な器種があり、時代が下ると台所で使う大型雑器が多くなる傾向が指摘されている（唐木田 1993）。長谷焼の器種は台所で使う大型製品を中心に生産した時にあたるとみられる。また、明治では赤塩焼（飯綱町）のように鉄道建設で使うレンガ製作や、代官町窯のように製糸用糸取り鍋等を焼成した窯もあるようだが、長谷焼では確認できない。長谷焼を含む松代焼系窯では、時代変化に加え、地域ごとの需要や、需要が多い器種以外では競合を避ける選択があったと思われ、窯の経営者が生産器種や焼成量を独自に判断して製品を商店に卸すのではなく、販売する問屋や商店等の介在によって生産器種の選択があったものと推測される。

素焼き製品：素焼き製品には土人形やその型があり、少量ながら土管、火鉢がある。人形類の亀（22）は陶器だが、その土型が８で、土型（６）は七福神の恵比寿で、製品（16）は大黒である。七福神のセットとすると、人形は長谷窯産と考えられる。26 は軟質施釉陶器で、24 も低温度で溶ける銅緑釉の試し焼き

と思われる釉薬が付着する。素焼きの人形も出土しているが、軟質施釉陶器や長谷焼同様に陶器として焼成されたものかもしれない。なお、21 のみは胎土が灰白色の粉っぽい土で、長谷焼製か不明である。素焼きで他にコンロ・涼炉等の火鉢類も出土し、胎土や焼成は長谷焼の素焼と同じながら、コンロ類は内面に使用痕の煤が付着しているため職人らの自家用かもしれない。土管も出土量が少なく自家用の可能性がある。

軟質施釉陶器：羽釜と蓋がある。融点が低い鉛釉ともみられる薄い釉薬を掛けているが、長谷焼の陶器と同様の焼成温度では釉は流れるので、低温の別窯か陶器とは別に焼成された可能性がある。色見（焼成中に釉薬の溶け具合を確認する品）とみられる小型の羽釜も出土し、長谷焼で焼成していたことは間違いないといえる。

釉薬：長谷焼は他の松代焼同様に藁灰釉に銅緑釉を流し掛けするものと、茶褐色の釉を多用する点を特徴とする。出土陶器の釉には、黄緑色透明の灰釉、白濁した藁灰釉、黒・茶褐色の鉄釉、緑色の銅緑釉、錆釉があり、他に軟質施釉陶器の薄い透明釉や一部に化粧掛けとみられる薄い白色の釉がある。松代焼に顕著なのが白濁した藁灰釉に銅緑釉流し掛けするもので、県内では高遠焼にもみられる。松代焼の釉については代官町窯の浦野駒吉が明治 12 年に県に提出した「陶器焼製法調」に赤薬・白薬・青薬が挙げられ、唐木田の岡田新田窯での聞き取りでは、以下の５種類の釉薬が記載されている（唐木田 1993）。

赤ぐすり：信更ゴンド山の赤土＋わかみ（中尾山の白土の流砂層―唐木田註）＋木灰＋大麦灰
白ぐすり：小市の白土＋藁灰＋木灰
立石のしらい：白ぐすりの下掛けで松代立石の石を粉砕したもの
黒ぐすり：赤くすりにベンガラを混ぜたもの
青かけぐすり：白ぐすりに銅粉を混ぜたもの

これを今回の出土品の釉に対比すると、「赤ぐすり」は色の名称から茶褐色の鉄釉、「白ぐすり」は藁灰釉、「立石のしらい」が化粧掛け釉、「黒ぐすり」が流し掛けされる黒い鉄釉、青かけぐすり（青薬）が「銅緑釉」に対応するとみられる。灰釉をベースとした「赤ぐすり」と「白ぐすり」が基調で、それにベンガラ、銅粉を混ぜてバリエーションをつくっている。釉は薬品で合成されるものではなく自然にあるものを利用しているが、磁器生産が試みられた代官町窯では明治の記録に「コパル」（コバルトか）の記載があり、薬品による釉薬の調合もあったようだ。

（５）窯道具について

窯道具の名称は産地ごとに異なるところがあるが、基本的に長野県内の諸窯に影響を与えたとみられる瀬戸・美濃の名称に従えば、窯内に焼物を設置する製品を入れる匣鉢や棚組の棚板、重ね焼きで融着と変形を防ぐトチン・ピン・焼台（ヘダテ含む）等が確認された。製品の具体的な窯詰方法は詳細を検討できなかったが、出土品に残る痕跡から擂鉢は団子トチを用いた重ね焼き、鉢は円錐ピンを用いた重ね焼きであることが確認された。また、焼台とした円筒形の窯道具は、深身の鉢類を直接重ねると口縁が接してしまうため、トチン・ピンと共に製品間に差し込んだヘダテ、筒トチかもしれない。

これらの窯道具について、瀬戸・美濃の生産をまとめた金子の論考や瀬戸市史を参照すれば、長谷焼で出土した窯道具は瀬戸・美濃でみられるものと同様で、窯の構造を含めて瀬戸・美濃の焼成技術が基調とみられる。そのなかで注目されるのは匣鉢と棚板である。匣鉢は瀬戸では外側に飛び出た丸底のものが主体、美濃は平底主体とされる（金子 2006）ので、長谷焼は美濃系の窯道具を用いたといえる。また、円筒

形の筒トチの使用が美濃では多いとされる点も同じだろう。ちなみに、代官町窯では平底以外に丸底の匣鉢が出土し、瀬戸系の窯道具が用いられている（市教委 2022）。先の唐木田による聞き取り調査では代官町窯では蹴ロクロがなかったというが、これは瀬戸・美濃の傾向と同じで、窯道具にみられる瀬戸系、美濃系に加え、製陶技術ではそれ以外の技術も松代焼系窯で複雑に混合している様相が推測される。

次に、陶板だが、支柱となる長い筒状のツクと断定できるものはないが、棚板は出土していて、棚組で窯詰していたことが推測される。金子によると棚板は３種前後規格があるようで、ツクは中空・柱実に加え、手づくね・ロクロ等多様な種類があり、明治期の瀬戸赤重窯ではロクロ整形による 11㎝前後と 21.6㎝のものがあって前者は全長の１/２が中空、後者は中空という（金子 2006）。この棚組について金子や瀬戸市史の『日本近代窯業史』の紹介によると、瀬戸・美濃では製品を入れた匣鉢を重ねて窯詰する方法が伝統であったが、天保２（1831）年加藤重吉が陶器の本業焼で行われていた匣鉢蓋を用いたエブタ組から棚組を考案し、最初に磁器焼成の丸窯で採用されていたものを本業焼でも用いたという。

本業焼での採用年代は不明だが、長野県内では文化４年・天保９年の墨書が確認されている佐久の川越石焼では多量の匣鉢が出土し、木曽の福島窯では匣鉢出土が少ないながら棚板・ツクが出土している。飯田市の伊賀良焼で棚板の可能性がある無釉の長方形・正方形の陶板が出土している。小松は福島窯の匣鉢出土が少ない点について棚組主体の窯詰と推定し、伊賀良焼は棚板とすれば出土陶器年代のずれがあることを指摘している。長谷焼でも採用されている棚組がいつから採用されたかは不明だが、小松も注目しているように、匣鉢主体の川越石焼と、後出の棚組主体の福島窯の差異をみると県内窯の成立年代を知る手がかりになる可能性がある。また、長谷焼では匣鉢と棚組が併用されており、匣鉢にも孔ありとなしがあるが、その窯詰の選択が何によるかは捉え切れなかった。また、参考に唐木田の著作に掲載されている岡田新田窯の昭和 10 年の窯詰写真では、上下端が幅広い断面「Ｉ」形の陶板を縦壁とし、その上に平坦な棚板を横に置いて類似した棚を並べて組み、そこに鉢類を重ねて収め、棚板の上には重ねた擂鉢を置いて焼成していて、匣鉢の使用は不明である。

今回、長谷焼の製作工房跡を発見した。窯道具や製品の詳細な調査までには至らなかったが、長野県内の窯や製品についての希少な検討資料を供しえたと考える。

第３節　石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群の変遷

長野市篠ノ井塩崎地区での坂城更埴バイパス改築工事に伴う発掘調査は、長野盆地南部に位置し千曲川左岸の自然堤防に立地する塩崎遺跡群、後背低地の石川条里遺跡、篠山山麓扇状地・崖錐地形の長谷鶴前遺跡群の連続して分布する３遺跡を貫くように実施した。このうち長谷鶴前遺跡群は平安時代以前に石川条里遺跡と地形的にも連続した水田遺跡と判明し、今回石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群を併せて報告することとした。ここでその石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群の変遷をまとめ、併せて隣接する集落遺跡である塩崎遺跡群との関連についても触れたい。

塩崎地区は、現在広大な水田地帯となるが、近世には洪水と干害に悩まされた地域と知られる。干害は水源となる中小河川に恵まれず、千曲川の攻撃面に位置して千曲川取水もままならない環境によるもので、現在の水田景観は近世末の塩崎用水開鑿で実現したとされる（塩崎村史編集委員 1971）。

今回の調査では、平安時代前期の条里型水田に関連する遺構が広範囲で検出された。またそれ以前にも弥生時代中期後半の水田跡は最も低い２区より西側に広がり、弥生時代後期・古墳前期末・奈良時代等の水田遺構は調査区西側中心に検出されている。近世より前の水田は調査区西側の扇状地端部側に偏る傾向が見受けられる。これは調査区西側は篠山山麓の沢水や扇状地端部の湧水等の水源が確保しやすく、調査区東側は千曲川の粒径の粗い洪水堆積物が多い土質で保水性が悪い乾燥傾向の場所であることが関連しよう。特に中世には塩崎遺跡群に接する１区で居住遺構が検出されたことから、時代を追って千曲川の洪水土埋積で地表面が上昇して乾燥傾向は強まったものと推測される。石川条里遺跡南部域では塩崎用水開鑿以前から水源の問題が重要だったと思われる。

調査区西側の水源とみられる沢部分には現在、近世に造成された篠山山中の猪平池から流れる用水があり、石川条里遺跡 10 区南側で調査区を横断する。さらに用水に近接する石川条里遺跡９区では、弥生時代中期後半水田層の下層で沢跡とみられる窪地が確認されている。９区、11 区で流水を要因とする山砂堆積もみられ、用水に先行して類似場所にかつて沢が流れていたものと捉えられる。

以下に時代順の概要をまとめる。

弥生時代水田以前の環境

確認された最古の水田跡はⅧ層弥生時代中期後半に帰属し、その下部は自然堆積層（Ⅸ層）となる。水田化以前にあたるⅨ層は長谷鶴前遺跡群や石川条里遺跡 4b 区周辺までは薄い粘土・泥炭層互層に堆積し、調査区西側は水田以前から湿地環境であったことが捉えられた。一方、調査区東側は泥炭層が発達せず腐植土層となる傾向で、地形的に低い場所ながら地下水位が低い乾燥傾向の環境であったと推測される。

Ⅸ層の出土遺物は９区の沢跡の窪地上面で時期不明の土器小片が数片出土したのみである。Ⅷ層以上で 3b・4a 区で縄文時代と思われる定角式石斧が１点、１区で弥生時代中期前半以前と思われる環状石斧未成品と思われる石器が１点採取された。環状石斧未成品は隣接する塩崎遺跡群との関連が考えられるが、定角式石斧は単独出土であり、出土背景は明らかにできなかった。また、隣接する塩崎遺跡群では弥生時代前期末の土器が出土しているが、調査区内で弥生時代前期末～中期前半の土器や水田遺構は確認されなかった。

弥生時代中期後半

本章第１節２に記述したので詳細は省くが、最も古い水田層である弥生時代中期後半Ⅷ層は、上下２層に細分できる。上層（Ⅷ-1 層）は泥炭層に被覆されていて、栗林２式新～３式の時期と思われる水田跡が検出された。下層（Ⅷ-2 層）は栗林１式の時期に遡る可能性があり、Ⅷ-2 層は 3b・4a 区～９区周辺にみられ、プラント・オパール分析から水田の可能性が捉えられたが、水田面を被覆する砂層や泥炭層はなく水田範囲や水田構造は明らかにしえなかった。Ⅷ-1 層水田は泥炭層に被覆された水田面が２区以西で確認され、3b・4a 区、７区で小区画水田、５区～11 区で大畦畔のみ検出されていて、大畦畔区画内を小区画に分割する構造とみられる。長谷鶴前遺跡群でも同様の泥炭層で被覆される粘土層が分布することから、水田域は広がる可能性があるが、長谷鶴前遺跡群ではプラント・オパール分析を実施していないため、科学分析による裏付けはできていない。これまで県内でみつかった弥生時代中期後半の水田跡例に比較して、水田域が広域に及ぶ点がⅧ-1 層水田跡の特徴で、これは同様に広域水田となる、石川条里遺跡高速道地点の弥生時代後期水田跡に継承されると推測される。なお、弥生時代中期後半の水田跡が放棄されて泥炭層に覆われていく背景は明らかにできなかった。

弥生時代後期

弥生時代後期初頭頃、地形的に低い東側の調査区１区～3b・4a 区を中心に洪水土Ⅵ層が堆積して平坦化する。Ⅵ層堆積以後、弥生時代後期の水田遺構は１区～7a 区では確認されず、Ⅵ層がみられない 7b・８区のⅤ層最下部で畦畔基部が確認された。他に出土土器から弥生時代中期後半とした 11 区の SC089 は畦畔芯材の放射性炭素年代測定値や曲柄二又鍬出土から当該期の水田に伴う遺構の可能性がある。水田遺構は調査区西側で断片的に捉えられている。当該期の土器は９区等の西側調査区の他、１区で少量出土したが、１区は微高地端部の塩崎遺跡群に接する集落周辺に関連する可能性がある。水田遺構と出土土器の分布から、水田域は弥生時代中期後半期より狭まる。隣接する塩崎遺跡群では当該期の居住遺構が多く確認されたが、調査区内の水田域はその集落規模と見合った面積がないとも思われる。集落域周辺に水田域が分散して存在したか、もしくは未確認の集落に伴う水田の可能性も考えられる。

古墳時代前期末

石川条里遺跡の調査区内で、弥生時代後期の次に確認された水田跡は古墳時代前期末のⅤ層水田である。遺構は 3b・4a 区と９区で大畦畔、3b・4a 区で断片的ながら大畦畔区画内を細分する畦畔等、わずかな水田遺構が調査区中央～西側に散在して認められたのみだが、当該期の土器は全域で出土している。西端に続く長谷鶴前遺跡群でもⅤ層と同じ土層があり、水田域は石川条里遺跡３区以西から長谷鶴前遺跡群まで広がる可能性がある。一方、調査区東端の１・２区が水田化されていたかは不明で、１区の砂層埋土とする SD100 は微高地側から低地側へ続くが、隣接する塩崎遺跡群３区自然堤防際では当該期の用水跡は確認されていない。そのため微高地側からも、西側扇状地側からの用水と思われる溝跡もないため、１・２区まで水田域とは断定できなかった。

大畦畔のなかで、９区の SC106・107 は狭い間隔で２条平行し、大畦畔の区画としてはやや異質である。両者が同時存在したとは断定でないが、西側から湧水等を引き込んだ流路脇に設定された畦畔ともみられる。なお、SC106 に重なって、複数個体の小型丸底土器と管玉を出土した落ち込み SX002 は祭祀関連遺構と考えられる。

古墳時代前～中期頃の水田に関連する祭祀遺構には、川田条里遺跡（埋文センター 2000）で畦畔や周辺内から完形土器、ミニチュア土器、管玉や勾玉、珠文鏡が出土した例がある。また、石川条里遺跡高速道

地点（埋文センター 1997）では水田面から鳥形木製品、大畦畔脇や畦畔内から壺・甕を中心とした完形品出土例がある。鳥形木製品以外の大畦畔自体を祭祀対象とした大畦畔周辺で行われた祭祀の痕跡とみられる。それには、土器や宝器類を畦畔内に埋める場合と、耕作期間中に畦畔上面や脇で土器を用いた祭祀があったと思われる。

前者は畦畔の維持等の長期的な呪術的効果を期待した祭祀ともみられるが、土器は１個体が散在して出土した例もあり、埋納ではなく畦畔脇や水田で行われた祭祀後の片付けの可能性もある。SC038 脇から完形に近い土器が出土した例は大畦畔脇の完形土器出土例に含まれよう。後者は耕作期間中での短期的な呪術的効果を期待したものかもしれない。これらと比較すると SX002 は前者に近いが畦畔芯材より下部に位置し、畦畔構築以前、つまり水田化以前の先行祭祀とみられる可能性もある。

他に水田関連で考えられる祭祀として水源祭祀がある。水源祭祀は水源に近い立地場所での大量土器出土や祭祀遺物の出土からの推定による。県内の事例には長野市駒沢新町遺跡（笹澤 1982）、塩尻市竜神平遺跡（埋文センター 1988）、中野市新井大ロフ遺跡（金井 1982）、飯田市鼎町天伯Ｂ遺跡（今村他 1975）がある。駒沢新町遺跡と新井大ロフ遺跡は本遺跡と類似した扇状地端部の湧水地近くにある。また、古墳時代中期とやや時代は下るが千曲市屋代遺跡群では導水に係る祭祀跡と捉えられた例がある（埋文センター 1997）。屋代遺跡群や竜神平遺跡を除くと大量の土器出土があり、駒沢新町遺跡や竜神平遺跡では土坑内に炭化物を混じる礫を充填した土坑が検出されている。本遺跡 SX002 では礫や炭化物の出土は認められていないが、土坑を伴う点は似ている。本遺跡以外では出土土器の種類は高坏、甕、壺、坏類と多岐にわたるが、SX002 では小型丸底土器が専ら用いられた点は異なる。祭祀は何等かの祈願に際し、神等へ大事なものを供し、その見返りとしての呪術的効果を期待する行為であるが、用いる器材や祭式が決まっていたとも言い切れず、上記の差異点をもって水田祭祀や水源祭祀と特定できない。詳細は後考を待ちたい。

なお、隣接する塩崎遺跡群ではⅤ層水田と同時期の集落跡は不明瞭であるが、その直前にあたる古墳時代前期後半の竪穴建物跡や、更にその前段階の弥生時代後期後半～古墳時代前期の竪穴建物跡は数多くみつかっていて、塩崎遺跡群の集落跡と水田跡には年代的ずれがある。この理由として、今回の調査地点と異なる場所に弥生時代後期後半～古墳時代前期の水田が存在したか、水田は塩崎遺跡群とは別の集落跡に伴うものか、未発見の古墳時代前期末の集落跡が塩崎遺跡群内に存在するかが考えられる。いずれにしても現時点では不明で、これも課題として残される。

なお、断片的な残存ながらⅤ-3 層に残存する砂ブロック、断定できないがⅤ-1 層は洪水土の可能性があり、千曲川沿岸の洪水の歴史を知る上で新たな知見を加えられたと考える。類似時期の洪水砂層は周辺遺跡では捉えられておらず、現時点では本遺跡のみである。

古墳時代末～奈良時代

古墳時代のⅤ層上層にあるⅣ層は腐植土基調の土質で、古墳時代末～平安時代の土器が出土した。古墳時代後期の土器は認められず、古墳時代後期頃に草が繁茂してⅣ層が形成され、古墳時代末頃からⅣ層での人間の活動が始まると推測される。平安時代洪水砂層Ⅲ層の被覆がない地区ではⅤ層上面を第２検出面としてⅣ層起源埋土の遺構を検出し、そこでは条里型地割と同方位の遺構と、異方位の遺構を検出した。異方位の遺構は出土土器から条里型地割施工前の奈良時代頃と捉えられた。

奈良時代頃とみられる遺構は１区、3a 区～９区の溝跡があり、他に長谷鶴前遺跡群１区では平安時代条里型地割施工地内に非耕作地として条里型地割施工前とみられる大畦が残された区画が確認された。これらの遺構は断片的な遺存だが、石川条里遺跡 3a 区～９区の溝跡は用水とみられ、長谷鶴前遺跡群の畦畔を含めて調査区西側中心に水田域となっていたと推測される。これらの遺構は遺構間の重複もみられ、

水田には数度の改変が推測される。出土土器では７世紀代の土器が自然堤防端部の１区周辺でみられたが、その一帯での水田耕作の様相は不明である。続く８世紀代の土器は１区、２区周辺や調査区西側の溝跡から出土し、なかでも SD066、SD170・169 は８世紀後半頃と思われる土器が含まれていた。また、7b・８区で検出された複数の平行する溝跡は条里の規格には合わないが、ある程度の規格性による可能性はある。出土土器がわずかなので遺構時期の詳細は捉えられていないが、８世紀後半とみられる水田遺構とすれば長野盆地内では少ない条里型地割施工前の様相を知る事例の一つとみられる。

なお、隣接する塩崎遺跡群では７～８世紀前半頃の集落跡がみつかったが、８世紀中頃には遺構が減少している。一方で高速道地点の篠山山麓にある鶴前遺跡では松本平編年３期（８世紀中頃）の短期集落がみつかった（埋文センター 1994）。本遺跡の水田域が狭い可能性は８世紀中頃～後半にかけての単発小集落による小規模な水田経営だったとも推察される。

平安時代前期

平安時代前期には長谷鶴前遺跡群から石川条里遺跡 10 区にかけて９世紀末頃の洪水砂層で被覆された条里型水田、それ以外の洪水被覆がない場所では条里型水田坪境に一致する溝跡や大畦畔痕跡が捉えられた。水田を被覆する洪水砂層は出土土器から同様の条里型水田が確認された石川条里遺跡高速道地点、千曲市屋代遺跡群・更埴条里遺跡の水田被覆砂層と同一と捉えられた。今回の調査で特筆される点は、石川条里遺跡南部域も高速道地点と同一規格の条里坪区画が施工されていたことと、坪区画内は非耕作地や条里区画と少しずれた水田・条里型地割と異なる水田等の水田が混在することが捉えられた点にある。多様な形態の水田が混在する背景には、坪区画は広域に施工されたが、その内部の耕作状況がさまざまで、調査地点では耕作に適さない湿地傾向なので局地的、断続的に耕作され、恒常的な耕作はないためと考えた。また、隣接する塩崎遺跡群では微高地端部に用水と思われる溝跡が検出され、石川条里遺跡１区、２区でも用水とみられる砂層埋土の溝跡があり、複数水源による灌漑施設が整備されたと推測された。

この条里型水田の施工時期は、条里坪境にあたる SD064 と重複する条里と異なる方位の SD066 出土土器から、８世紀後半～９世紀前半頃の間と捉えられるが、屋代遺跡群・更埴条里遺跡で指摘される松本平編年（更埴・屋代編年）５期（８世紀末～９世紀初頭）頃に遡るかは明確にしえなかった。

平安時代後期

１区～4b 区のⅣ層から平安時代後期の土師器が少量採取され、平安時代後期にも耕作等に利用されていた可能性が窺えた。石川条里遺跡高速道地点でも条里坪境ではない場所に平安時代後期に用水が出現し、再開発が捉えられている。調査で採取された土器もこれと類似時期とみられる。また、屋代遺跡群・更埴条里遺跡では更埴・屋代編年 11・12 期（10 世紀後半頃）に現用水と類似場所に用水が出現し、それが 13 期（10 世紀末～11 世紀初頭）には途絶し、以後の集落は水田域から離れて自然堤防の高い場所への移動が認められ、畑作への転換の可能性が捉えられている。

石川条里遺跡高速道地点や屋代遺跡群・更埴条里遺跡例と同様に、今回の調査で採取された土器も、平安時代後期の再開発に関連すると考えられる。ただし、本遺跡や石川条里遺跡高速道地点では松本平編年（更埴・屋代編年）の 13 期～15 期（10 世紀末～11 世紀後半）頃と推定され、屋代遺跡群・更埴条里遺跡の再開発開始時期と異なる。近似年代ながら場所により再開発・耕作時期に年代的ずれがあったか、調査地点では屋代遺跡群と同様の畑作の可能性も考えられる。

中世前期

中世前期の 12 世紀～13 世紀前半までは検出遺構もなく遺跡の様相は明らかでない。13 世紀後半以後では、石川条里遺跡１区で居住遺構、4b 区、4c 区周辺で浅い素掘の井戸跡がみつかり、中世後期は石川条里遺跡 12 区・長谷鶴前遺跡群で居館跡、長谷鶴前遺跡群周辺のみで水田遺構が検出された。出土焼物は 12 世紀から僅かにあるが、この１区の居住遺構にあたる中世前期（13 世紀後半～14 世紀）と、長谷鶴前遺跡群で遺構が確認された中世後期（15 世紀後半～16 世紀）の２時期の焼物が広範囲に認められた。

中世前期には、用水とみられる溝跡の検出はなく、調査域の大部分が水田域ではなかったと思われるが、長谷鶴前遺跡群では中世後期の水田が捉えられ、中世前期でも西側の山際や扇状地端部には水田が存在した可能性は残されている。一方、石川条里遺跡高速道地点を含む聖川沿いの石川条里遺跡北部では、中世前期の水田跡が部分的に捉えられており、条里坪境を現地表面まで比較的継承されている点からみても平安時代以後も水田耕作が継続していたとみられる。中世期に水田域が減少した理由として、洪水土の埋積で低地部の地表面が上昇し、地下水位が低下して乾燥傾向となった環境の変化と、平安時代のような複数水源を効率的に広域で回せられる社会状況ではなくなったためと思われる。

中世前期の１区居住域では、複数の類似した掘立柱建物跡の存在から居住者が複数いたこと、大型掘立柱建物跡 ST001 の具体的な居住者像は明らかにしえなかったが、当初から存在せず、この建物跡居住者を中核とした居住構成ではないと捉えられる。この１区の居住遺構は自然堤防端部の比較的低い場所に立地するが、自然堤防上では明確な居住遺構は検出されていない。これは自然堤防上が畑地で、その耕作者の居住場所であったか、調査区外に存在した水田と畑地に立脚した中間域での居住、あるいは鉄滓の出土からも農業以外の生業も行っていたとも推察される。

なお、調査区内の土地区画は、調査区西側（7a 区、11 区、12 区）で条里坪境に重なって現道路が位置しており、西側では条里坪境が中近世にも踏襲されたことと推測される。東側（3a 区～５区）の近世溝跡は条里大畦畔区画を踏襲しないものの方位はほぼ一致し、方位のみ踏襲していたようだ。東端（１区、２区）の中世区画溝跡 SD009 の走行方位は条里区画と異なった自然堤防上の現道路に近い方位とみられる。近世の SD023 が中世の SD009 に平行することから、東端では中世以後は自然堤防上と同じ区画が継承されているとみられる。こうした東側ほど条里地割が継承されずに自然堤防上の区画に近い方位に変化する状況は、この一帯で水田耕作が継続していないことと関連するのかもしれない。

中世後期

中世後期土器は少量ながら調査域広域で出土したが、遺構は長谷鶴前遺跡群周辺に限られる。その遺構変遷は本章第２節１に記述したので省略するが、当該期の水田跡と居館跡が捉えられたことが特筆される。水田跡は水源に近い山手に限られるとみられ、近接する居館跡の出現は先述した社会背景に加え、水田耕作に関わるものと思われる。石川条里遺跡高速道地点では水田内の微高地に長谷鶴前遺跡群と同時期の居館跡が単独で検出されたが、立地場所は聖川からの用水が灌水しうる範囲の端にあたる（宮脇 1996・埋文センター 1997）。このことから、当時、限られた水源に頼る水田耕作地が分散し、それを管理するための居館域が存在したと考える。また、これは在地領主の地域一帯支配ではなく、耕作地毎に所有者が異なる錯綜した支配関係下で生じた現象と考えられ、石川条里遺跡高速道地点の居館跡が廃絶するのは、耕作地支配から地域社会のまとまりが強くなる変化のなかで淘汰されたためと思われる。長谷鶴前遺跡群の遺構立地も石川条里遺跡高速道地点と同じ背景によると考えられるが、居館跡が移転しながらも継続していて、地域社会との関係性を維持していたのかもしれない。

なお、長谷鶴前遺跡群の居館跡背後の山頂には、山城の赤沢城跡（塩崎新城）があるが、居館跡と山城

の関係は明確にしえなかった。長谷鶴前遺跡群調査第４面から、山からの土砂供給が増加していることは、居館跡以前の溝区画の屋敷地出現時期であり、山城の構築というよりは周辺開発に関係があると思われる。

近世

近世の遺構は 11 区と１区～7a 区の溝跡と 3b・4a 区の墓跡がある。溝跡はほぼ用水とみられ、１区～7a 区を中心とした溝跡変遷は本章第１節５に記述したので詳細は省略するが、遺構の時期は明暦用水（1656（明暦２）年開鑿）と塩崎用水（1826（文政９）年開通）の２時期に関連する可能性が捉えられた。11 区の溝跡は遺跡背後の篠山山中に 1680（延宝８）年に構築された猪平池関連用水とみられる。用水構築以前の 17 世紀初頭のため池や用水開鑿以前の様相は遺構がなく不明ながら、近世前期以後は千曲川取水用水により、水田の拡大が図られたことが捉えられた。また、塩崎村史で記述されているように明暦用水は 18 世紀に一旦途絶しており、今回の調査ではこの途絶時期と思われる時期前後に水源不明ながら、小規模な用水跡数条と墓跡が構築された可能性が捉えられた。そして、塩崎用水の開鑿により１区まで枝用水が及び、再度水田耕作が拡大していると捉えられた。

まとめ

今回の発掘調査を通して、石川条里遺跡一帯は水田適地にみえるが、遺跡南部では水源が限られ、西側を中心に狭い範囲で水田が断続的に営まれたと捉えられた。こうした山手の小規模河川を水源とする水田が崖錐地形や扇状地端部に散在する様相は、高速道地点の後背低地に広がる水田とは様相がかなり異なる。しかも、遺跡南部では耕作が断続的であることは、水源の水量が不安定であったことを示しているのだろうか。また、堆積土の埋積と地下水位の下降により時代の経過と共に乾燥傾向となるが、平安時代前期には複数水源を効率的に用いて水田域は広がったものの、中世には水田域がかなり狭まる。近世には千曲川取水用水の開鑿で再び水田域が広がった歴史が垣間見えた。

水田耕作に関わる人間の居住地は、弥生～平安時代までは隣接する塩崎遺跡群が最も有力な候補であるが、現時点で判明している塩崎遺跡群の居住遺構時期や遺構数と水田跡の時期が必ずしも対応していないところもある。井上智博氏は弥生時代の水田についての研究で、集落を中心に数キロ離れた場所でも水田を営み、拠点集落を移動せず耕作条件が悪くなれば耕作地を少し離れた場所でも移転している状況を想定している（井上 2020）。当該調査地の水田耕作が断続的で、隣接集落域と年代が一致しないことも環境変化に合わせ、水源の確保できる場所で水田耕作していた場合や、居住地を移転する場合もあったのではないかと思われる。ただ、この見解は今後の周辺調査で訂正されるものでもあり、現時点の推測として提示しておきたい。

最後に、発掘調査に御協力いただいた関係者の皆さま、発掘作業から報告書作成までに貴重なご教示をいただいた多くの皆さま、この場を借りて感謝申し上げます。

引用・参考文献

青木和明 1984「箱清水式土器の編年的予察―千曲川流域弥生土器における高坏形土器を中心として」『長野県考古学会誌』48 号

青木一男 1999「長野盆地南部の後期土器編年」『99 シンポジウム　長野県の弥生土器編年』長野県考古学会

石川日出志 2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100 号　長野県考古学会

伊藤友久 1999「第Ⅴ章　第４節建築部材」『榎田遺跡』第２分冊　長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 37

井上智博 2002「第Ⅳ章　１弥生時代における水田開発・経営の動態」『池島・福万寺遺跡』２　（財）大阪府文化財センター

井上智博 2020「第九章弥生時代の水田経営と降水量変動」『気候変動から読みなおす日本史３　先史・古代の気候と社会変化』臨川書店

今村善興他 1975『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―下伊那郡鼎町その２』

臼居直之 1997「第２章木製品の解説」『石川条里遺跡』第３分冊　（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 26

臼居直之 2002「弥生・古墳時代における善光寺平の水田開発」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 96 集

遠藤英子 2012「縄文晩期末の土器棺に残された雑穀」『長野県考古学会誌』140 号　長野県考古学会

大庭重信 2013「近畿地方における弥生時代の水利関係と水田構成の変遷」『待兼山論叢』47 号史学篇　大阪大学大学院文学研究科・文学部

大橋康二 1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー　ニューサイエンス社

河西克造 2000「第２章　第２節水田跡の変遷」『川田条里遺跡』長野県埋蔵文化財センター

金井汲次 1982「新井大ロフ遺跡」『長野県史　考古資料編主要遺跡（北・東信)』長野県史刊行会

金子健一 2006「生産①瀬戸・美濃　江戸時代瀬戸・美濃の生産技術」『江戸時代のやきもの―生産と流通―』シンポジウム資料集（財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター

金田彰裕 1985「序章三　条里プランの研究史と問題点」『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂

唐木田又三 1993『松代焼』信毎書籍

桐原　健 1957「弥生文化」『信濃史料』一巻下

小平和夫 1990「第３章　第５節古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４　松本市内その１　総論編』

小林秀夫 1982「第Ⅴ章　御社宮司遺跡の諸問題　第４節中世の遺物」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―茅野市その５―』長野県教育委員会

小松隆史 2002「近世信濃の窯業史研究」『金沢大学紀要』26

斎藤孝正 1994「３施釉陶器」『律令的土器様式の東西３』古代の土器研究会

佐久市教育委員会 2010『野馬窪遺跡群　野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 170

笹澤　浩 1970「箱清水式土器発生に関する一試論」『信濃』22-11

笹澤　浩 1976「第１編　第３章弥生時代」『上水内郡誌　歴史編』

笹澤　浩・原田勝美 1977「長野県下の須恵器（上)・(下)」『信濃』26-9、26-11

笹澤　浩 1982「駒沢新町遺跡」『長野県史　考古資料編　主要遺跡（北・東信)』長野県史刊行会

笹澤　浩 1988「Ⅱ時代と編年　４古代の土器」『長野県史　考古資料編（４）遺構・遺物』長野県史刊行会

笹澤正史 2013「新潟県吹上遺跡における土器様相の推移に関する一考察」『弥生土器研究の可能性を探る』弥生土器研究フォーラム

澤谷昌英 1998「第３章　第５節　４更埴条里遺跡・屋代遺跡群の土器―古代の食膳具を中心に―」『更埴市内　更埴条里遺跡・屋代遺跡群３』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 32

塩崎村史編集委員編 1971『塩崎村史』塩崎村史刊行会

設楽博己・守屋亮・佐々木由香・百原新・那須浩郎 2019「第４章日本列島における栽培植物の起源を求めて―レプリカ法による土器圧痕調査報告」『農耕文化複合（上)』雄山閣出版

設楽博己・守屋亮・佐々木由香 2019「総論　縄文時代後期―弥生時代の植物利用と土器組成」『農耕文化複合（下)』雄山閣出版

柴田洋孝 2020「長谷のかめやき―長谷焼調査の覚書―」『長野県埋蔵文化財センター年報』36
城ケ谷和広 2015「第４章　第５節編年論　須恵器」『愛知県史　別編　窯業１　古代　猿投系』
白石太一郎 2006「須恵器の暦年代」『年代のものさし―陶邑の須恵器―』大阪府立近つ飛鳥博物館
杉山浩平 2010「第１章東日本における大陸系磨製石器の展開」『東日本弥生社会の石器研究』六一書房
鈴木正博 2014「奥東京湾方面の「栗林式縁辺文化」に学ぶ」『古代』133　早稲田大学考古学会
瀬戸市史編纂委員会 1993『瀬戸市史　陶磁史編　五瀬戸の本業焼』愛知県瀬戸市
瀬戸市埋蔵文化財センター 2003「江戸時代美濃窯の変遷」『江戸時代の美濃窯』
滝沢　誠　1999「日本型農耕社会の形成―古墳時代における水田開発」『現代の考古学３』朝倉書房
田口昭二 1982「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』211
千曲市教育委員会 2012『屋代遺跡群地之目遺跡２・古道遺跡２』
千野　浩 1989「千曲川水系における後期弥生土器の変遷」『信濃』41-4
千野　浩 1993「第５章　３本村東沖遺跡における古墳時代中期以降の土器編年について」『本村東沖遺跡』長野市教育委員会
千野　浩 2001「第４章考察」『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』長野市教育委員会
鶴木航介 2023「第Ⅰ部　第１章木材加工の基礎研究」『木材がつなぐ弥生社会』京都大学学術出版会
寺島孝典 1993「第Ⅳ章　第３節弥生時代中期後半の土器様相」『松原遺跡Ⅲ』長野市教育委員会
寺島孝典 1999「長野盆地南部の様相」『99 シンポジウム　長野県の弥生土器編年』長野県考古学会
鳥羽英継 1998「第５章　第３節古墳時代の土器編年」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群　弥生・古墳時代編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 29
鳥羽英継 1999「第５章　第１節土器」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群　古代その１』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 42
鳥羽英継 1999「第８章　第１節屋代遺跡群における古代の土器」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群　古代その１』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 42
富元久美子 1999『飯能の遺跡（27）飯能焼原窯跡　第１・２次調査』飯能市教育委員会
中澤　武 2020「先史・古代における気候変動の概観」『気候変動から読みなおす日本史（３）』臨川書店
中沢道彦 2014「栽培植物利用の多様性と展開」『季刊　考古学　別冊』21　雄山閣出版
中島英子 1997「第９章調査の成果と課題　第３節高丘丘陵古窯址群の須恵器生産について」『小布施町内・中野市内その１・その２』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 24
長野県埋蔵文化財センター 1988『塩尻市内その１』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書２
長野県埋蔵文化財センター 1990『松本市内その１　総集編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書４
長野県埋蔵文化財センター 1994『更埴市内・長野市内その１：鳥林遺跡・小坂西遺跡・鶴萩七尋岩陰遺跡・赤沢城跡・塩崎城見山砦遺跡・地之目遺跡・一丁田遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 16
長野県埋蔵文化財センター 1994『鶴前遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 17
長野県埋蔵文化財センター 1994『栗林遺跡・七瀬遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 19
長野県埋蔵文化財センター 1997『篠ノ井遺跡群』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 22
長野県埋蔵文化財センター 1997『石川条里遺跡』第１分冊　長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 26
長野県埋蔵文化財センター 1998『屋代遺跡群　更埴条里遺跡　弥生・古墳編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 29
長野県埋蔵文化財センター 1998『篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡・築地遺跡・於下遺跡・今里遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 33
長野県埋蔵文化財センター 1999『小滝遺跡・北之脇遺跡・前山田遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 43
長野県埋蔵文化財センター 2000『松原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36
長野県埋蔵文化財センター 2000『川田条里遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 47

長野県埋蔵文化財センター 2000『更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）古代２・中世・近世編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 50

長野県埋蔵文化財センター 2013『川久保・宮沖遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 99

長野県埋蔵文化財センター 2012『柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100

中野市歴史民俗資料館 2003『新井大ロフ　高岡丘陵古窯址群』

長野市教育委員会 1983『浅川扇状地遺跡群迎田遺跡　川田条里的遺構・石川条里的遺構』長野市の埋蔵文化財 13

長野市教育委員会 1984『石川条里的遺構　上駒沢遺跡』長野市の埋蔵文化財 14

長野市教育委員会 1993『松原遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財 58

長野市教育委員会 2014『栗田城跡（４）』長野市の埋蔵文化財 133

長野市教育委員会 2022『松代城下町跡（４）・代官町窯跡』長野市の埋蔵文化財 165

贄田　明 1999「第Ⅴ章　第３節木製品」『榎田遺跡』第２分冊　長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 37

贄田　明 2000「第１章壺形土器の文様帯構造と変遷」『松原遺跡　弥生総論７　弥生時代・考察　検索』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36

西山克己 1997「第３章　第１節篠ノ井遺跡群での土器分類と時期区分　４古代の土器と時期区分」『篠ノ井遺跡群』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 22

野上建紀 2000「磁器の編年（色絵以外）１．碗・小坏・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』

野村一寿 1990「第３章　第４節中・近世の掘立柱建物址」『松本市内その１　総論編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書４

野村一寿 1990「第３章　第６節中世土器・陶磁器」『松本市内その１　総論編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書４

箱崎和久 2001「第一章　第三節文献にみる近世信濃の民家」『奈良国立文化財研究所シンポジウム報告　埋もれた中近世の住まい』同成社

服部実喜 2001「第一章　第一節南関東地域における中近世建物遺構の変遷」『奈良国立文化財研究所シンポジウム報告　埋もれた中近世の住まい』同成社

馬場伸一郎 2008「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 145 集　国立歴史民俗博物館

馬場伸一郎・遠藤英子 2017「弥生時代中期の栗林式土器分布圏における栽培植物」『明治大学黒耀石研究センター紀要』№７　明治大学黒耀石研究センター

馬場伸一郎 2020「弥生時代後期の較正年代」『長野県埋蔵文化財センター年報』37

原　明芳 1989「第７章　第２節吉田川西遺跡における食器の変容」『吉田川西遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書３

廣田和穂 1999「Ⅴ章　第１節　３古墳時代中～後期」『榎田遺跡』第２分冊　長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 37

広島県教育委員会 1995『吉川元春館跡』

広瀬和夫 1988「堰と水路」『弥生時代の研究』２　雄山閣出版

藤沢良祐 1982「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁第８号』東洋陶磁学会

藤沢良祐 1986「瀬戸大釜発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館

藤沢良祐 1987「本業焼の研究（１）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』瀬戸市歴史民俗資料館

藤沢良祐 1988「本業焼の研究（２）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅶ』瀬戸市歴史民俗資料館

藤沢良祐 1989「本業焼の研究（３）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅷ』瀬戸市歴史民俗資料館

藤沢良祐 1991「瀬戸古窯址群Ⅱ―古瀬戸後期様式の編年―」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』瀬戸市歴史民俗資料館

藤沢良祐 1993「第４章瀬戸・美濃大釜の編年」『瀬戸市史　陶磁史篇四』瀬戸市史編纂委員会

町田勝則 1992「信濃における弥生時代石器文化の終焉」『第 31 回埋蔵文化財研究集会　弥生時代の石器―その始まりと終わり』埋

蔵文化財研究会・関西世話人会
町田勝則 1993「信濃に於ける米作りと採取」『長野県考古学会誌』68 号　長野県考古学会
町田勝則 1994「信濃に於ける米作りと栽培」『長野県考古学会誌』73 号　長野県考古学会
松本市教育委員会 2002『新村遺跡』松本市文化財調査報告書 156
宮原晋一 1988「２石斧・鉄斧のどちらで加工したか」『弥生文化の研究』10　雄山閣出版
宮脇正美 1996「四宮荘北条における居館と用水」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター
盛　峰雄 2000「陶器の編年１．碗・皿」『九州陶磁の編年』
森嶋　稔・米山一政 1978「古代・中世」『更級埴科地方誌』第２巻
吉岡康暢 1994「珠洲陶器の編年的研究」『中世須恵器の研究』吉川弘文館

付表１　石川条里遺跡　掘立柱建物跡一覧

ST番号	位置		調査面	主軸方位	柱間数	規模(m)		構造柱配列	柱間寸法 (m)		遺物	重複関係	時期	図版番号
	地区	グリッド				桁行長	梁行長		桁行	梁行		△旧 ▼新 (不)不明		
001	1	ⅢV22・23、ⅨB02・03	1	N-82° -W	7間×3間	13.51	5.53	総柱	1.62～2.01	1.73～1.96	土器、磁器、鉄製品、焼成粘土塊	▼SD019	中世	38・49・51・52・53
002	1	ⅨB01・06	1	N-5° -E	3間×2間	6.30	4.04	総柱	1.55～2.52	1.81～2.03	—	△SD009 ▼SL002	中世	38・49・51・54
003	1	ⅢV23	1	N-76° -W	3間×	4.41	—	不明	1.38～1.40	—	—	▼SD019	中世	38・49・55
004	1	ⅢW16・17	1	N-78° -W	4間×1間	9.33	4.35	側柱	2.24～2.50	4.30～4.33	—	—	中世	38・48・49・55
005	1	ⅢW16・17	1	N-73° -W	3間×2間	7.33	4.30	側柱	2.30～2.52	2.11～2.20	土器		中世	38・48・49・56
006	1	ⅢV24・25	1	N-70° -W	3間×	5.60		不明	1.71～2.00			(不)SD010	中世	38・49・56

付表２　石川条里遺跡　柵列一覧

SA番号	位置		調査面	主軸方位	規模 (m)	ピット数	ピット間距離 (m)	遺物	重複関係	時期	図版番号
	地区	グリッド			長さ				△旧 ▼新		
001	1	ⅨA09・10	1	N-87° -W	4.24	5	1.10～1.42	—	△SD020	近世	38・51・57
002	1	ⅨA09・14・18・19	1	N-13° -E	19.39	19	0.51～2.80	—	△SD088	近世	38・39・51・58
003	1	ⅢW19・23・24	1	N－20° -E	8.72	24	0.50～1.21	—	△SD091	近世	38・48・57
004	1	ⅢV25・W21	3	N-72° -W	7.20	13	0.63～0.66	—	△SD100	近世か	38・49・57
005	1	ⅧU20・24・25、ⅨA04・09	1	N-11° -E	19.88	11	1.24～2.30	—	—	近世	38・51・58

付表３　石川条里遺跡　墓跡一覧

SM番号	位置		調査面	主軸方位	平面形	規模 (m)			遺物	重複関係	時期	図版番号
	地区	グリッド				長軸	短軸	深さ		△旧 ▼新		
001	3b・4a	ⅧF14・19	1	N-11° -E	長方形	0.70	0.52	0.29	人骨	—	近世	41・72
002	3b・4a	ⅧF22	1	N-7° -E	長方形	1.18	0.84	0.40	土器、人骨	—	近世	41・72
003	3b・4a	ⅧF22	1	N-2° -W	長方形	0.58	0.46	0.13	人骨	—	近世	41・73
004	3b・4a	ⅧG21	1	N-8° -W	長方形	2.10	1.30	0.70	人骨	—	近世	41・73
005	3b・4a	ⅧK14	1	N-5° -W	不整形	0.95	0.55	0.10	人骨	△SD043	近世	41・73

付表４　石川条里遺跡　天地返し跡一覧

SL番号	位置		調査面	規模 (m)			溝跡数	遺物	重複関係	時期	図版番号
	地区	グリッド		長軸	短軸	深さ			△旧 ▼新		
001	1	ⅨB05・10・15・C06・11・12	1	7.11	16.22	0.22	28条	—	△SD009a	近世以降	38・48・50
002	1	ⅨB01・02・06・07	1	9.90	12.82	0.07	33条	—	△SD009a、SK062・074・094	近世以降	38・49・50・51
003	2	ⅧE03・07・08・09・12・13・14	1	11.75	16.31	0.11	30条	—	—	近世以降	39
014	1東	ⅢW19・20・24、ⅨC04・08・09・13	1	1.91	11.34	0.08	52条	—	△SD130・131 ▼SD128	近世以降	38・48

付表５　石川条里遺跡　土坑一覧

SK番号	位置		調査面	形状		規模 (m)			遺物	重複関係	備考	時期	図版番号
	地区	グリッド		平面形	断面形	長軸	短軸	深さ		△旧 ▼新 (不)不明			
001	1	ⅨB05・10	1	楕円形	C	3.64	2.71	0.90	土器・陶器・石器・銭貨	△SC027 ▼SD002	大型長方形土坑	中世	38・49・50・70
002	1	ⅨB04・05	1	上部楕円形 下部円形	B	(4.4)	3.67	1.32	土器・陶器・磁器・石器	▼SD014・018	井戸跡	中世	38・49・50・59
003	1	ⅨC06・07	1	円形	C	1.34	1.29	1.89	土器・陶器・磁器・獣骨	—	井戸跡	中世	38・48・50・59
004	1	ⅨC06	1	円形	G	2.36	2.21	不明	石器・銭貨・獣骨	△SD003 ▼SK011	井戸跡	中世	38・48・50・59
005	1	ⅨC06	1	不整円形	B	1.20	1.19	0.82	土器・銭貨	△SD008	井戸跡	中世	38・48・50・59
006	1	ⅨC07	1	円形	D	0.92	0.90	0.78	土器・石器	—	井戸跡	中世	38・48・50・60
007	1	ⅨC07	1	円形	C	0.98	0.92	1.61	土器	—	井戸跡	中世	38・48・50・60
009	1	ⅢV25	1	円形	B	1.52	1.29	1.39	土器・鉄滓	△SD010	井戸跡	中世	38・49・60
010	1	ⅨB05・C01	1	円形	D	1.05	0.99	1.43	土器	△SD002	井戸跡	中世	38・49・60
011	1	ⅨC06	1	円形	G	1.43	1.14	不明	土器・磁器・銭貨	△SK004 ▼SD001	井戸跡	中世	38・48・50・59
012	1	ⅢV19・24	1	不整長方形	B	4.52	2.88	0.63	土器・陶器・石器・鉄製品	△SK337・SC029	大型長方形土坑	中世	38・49・70
013	1	ⅨB04	1	円形	C	1.50	1.31	1.70	土器	—	井戸跡	中世	38・49・50・60
014	1	ⅨB09	1	円形	B	1.81	1.74	1.10	土器	△SD010	井戸跡	中世	38・50・60
015	1	ⅨB04・09	1	円形	B	1.28	1.15	1.73	—	—	井戸跡	中世	38・49・50・61
016	1	ⅨB09	1	円形	B	1.73	1.56	1.30	土器	△SD009b	井戸跡	中世	38・50・61
017	1	ⅨC06・07	1	円形	B	1.76	1.68	1.03	土器・磁器・石器・鉄製品	△SD016	井戸跡	中世	38・48・50・61
020	1	ⅨB04	1	円形	C	2.01	1.90	1.52	土器・陶器	—	井戸跡	中世	38・49・50・61
021	1	ⅨB10	1	隅丸方形	D	1.33	1.32	0.70	土器	△SD009a	井戸跡	中世	38・50・61
023	1	ⅨB09	1	円形	B	1.59	1.52	1.36	—	△SD009a	井戸跡	中世	38・50・61
026	1	ⅨB03	1	円形	B	0.17	0.14	0.21	土器	—		中世	49・50
041	1	ⅢV16	1	隅丸長方形	D	1.05	0.78	0.36	土器・陶器・石器・銭貨	—		中世	49・51・71
042	1	ⅢV21	1	隅丸長方形	B	0.27	0.20	0.45	鉄製品	—		中世	49・51
055	1	ⅨB10	1	円形	B	0.23	0.18	0.39	銭貨	—		中世	50
062	1	ⅨB01	1	隅丸長方形	A	2.69	1.78	0.14	土器・陶器・磁器・土製品	△SK074 ▼SL002	井戸跡	中世	38・49・51・62
074	1	ⅨB01	1	円形	B	1.89	1.58	1.27	獣骨	▼SK062・SL002	井戸跡	中世	38・49・51・62
079	1	ⅢU25	1	隅丸長方形	A	0.34	0.25	0.06	土器	—		中世	51
080	1	ⅨA05	1	下部円形	G	3.85	3.29	不明	土器・陶器	▼SD020	井戸跡	中世	38・49・51・62
091	1	ⅨA10	1	円形	B	0.27	0.25	0.10	土器	▼SD023	柱穴か	中世	51
093	1	ⅨB01	1	楕円形	E	0.54	0.42	0.34	土器	—	柱穴か	中世	49
094	1	ⅨB06	1	隅丸方形	C	2.10	1.99	0.47	土器・陶器・磁器・石器・獣骨	▼SL002	井戸跡	中世	38・51
107	1	ⅢV23	1	楕円形	A	0.34	0.22	0.12	土器	—	柱穴か	中世	49
119	1	ⅨB02	1	円形	B	0.28	0.26	0.18	土器	—	柱穴か	中世	49
155	1	ⅢV21	1	楕円形	E	0.49	0.34	0.40	土器・陶器	—	柱穴か	中世	49・51
156	1	ⅢV21	1	円形	B	0.16	0.13	0.09	鉄製品	—		中世	49・51
163	1	ⅢV22	1	円形	B	0.19	0.18	0.14	土器	—	柱穴か	中世	49
175	1	ⅢV22	1	円形	B	0.30	0.24	0.16	土器	—	柱穴か	中世	49
176	1	ⅢV21	1	楕円形	B	0.48	0.22	0.32	陶器	—	柱穴か	中世	49
177	1	ⅢV22	1	不整円形	B	0.41	0.28	0.27	土器・陶器	△SK178	柱穴か	中世	49・51
178	1	ⅢV22	1	円形	B	(0.21)	0.35	0.11	土器・陶器	▼SK177		中世	49・51
179	1	ⅢV23	1	不整円形	B	(0.33)	0.30	0.43	石器			中世	49
187	1	ⅢV23	1	円形	B	0.26	0.24	0.30	土器	—	柱穴か	中世	49
188	1	ⅢV16	1	円形	B	0.19	0.18	0.20	土器・磁器	—	柱穴か	中世	49・51
191	1	ⅨA10	1	円形	B	1.46	1.39	1.59	—	▼SD020・SD023	井戸跡	中世	38・51
196	1	ⅨC11	1	円形	C	1.79	1.75	1.84	土器・陶器・磁器・鉄鏃	—	井戸跡	中世	38・50
197	1	ⅨB15・C11	1	円形	B	2.58	2.27	1.11	—	—	井戸跡	中世	38・50
198	1	ⅨC16	1	円形	C	1.10	1.07	0.68	—	△SD074	井戸跡	中世	38・50・64
200	1	ⅨB11・12	1	円形	G	2.30	2.27	1.93	獣骨	△SD083	井戸跡	中世	38・50・51・64
242	1	ⅨC16・17	1	楕円形	B	0.40	0.26	0.46	土器	—	柱穴か	中世	50
243	1	ⅨC16	1	円形	B	0.42	0.36	0.26	土器	—	柱穴か	中世	50
246	1	ⅨC11	1	不整円形	E	0.51	0.43	0.40	土器・陶器・磁器	—	柱穴か	中世	38・50
249	1	ⅨB20	1	円形	B	0.20	0.19	0.21	土器・磁器	—	柱穴か	中世	50
256	1	ⅨC11	1	円形	A	0.91	0.76	0.31	石器	▼SD023・SL001		中世	50
257	1	ⅨC16	1	不整円形	B	1.74	1.45	0.55	土器	—	井戸跡	中世	38・50・64
269	1	ⅢW22	1	円形	B	0.29	0.27	0.17	銭貨	—		中世	48
270	1	ⅨB08	1	円形	D	0.94	0.84	1.24	土器・陶器	△SD009	井戸跡	中世	38・50・64

SK番号	位置		調査面	形状		規模 (m)			遺物	重複関係	備考	時期	図版番号
	地区	グリッド		平面形	断面形	長軸	短軸	深さ		△旧 ▼新 (不)不明			
273	1	ⅢW22	1	円形	B	0.18	0.16	0.20	土器・陶器・銭貨	—	柱穴か	中世	48
276	1	ⅢW22・ⅨC02	1	円形	B	1.20	1.13	0.68	土器・陶器	△SK331	井戸跡	中世	38・48・65
277	1	ⅢW23	1	円形	B	(0.78)	1.03	1.40	—	▼SD087	井戸跡	中世	38・48・65
278	1	ⅢW16	1	円形	D	1.17	1.11	2.40	土器	—	井戸跡	中世	38・49・65
279	1	ⅢW23	1	円形	B	1.20	0.91	1.67	土器・木製品	▼SD085・SD086	井戸跡	中世	38・48・65
296	1	ⅢW16	1	楕円形	B	0.32	0.24	0.44	土器	—	柱穴か	中世	48
324	1	ⅨC03	1	円形	B	0.23	0.23	0.14	土器	—	柱穴か	中世	48
331	1	ⅨC02	1	円形	B	0.37	0.34	0.20	土器	▼SK276	柱穴か	中世	48
337	1	ⅢV19・24	1	楕円形	C	1.65	(1.16)	0.41	土器・陶器	▼SK012・SK343		中世	49・71
343	1	ⅢV19	1	円形	F	1.40	1.33	0.24	土器	△SK337		中世	49・71
356	1	ⅢW17・22	1	不整形	E	3.20	(2.18)	0.10	土器・土製品・石製品・獣骨	▼SD087、SC029		平安	22・35
369	1	ⅨA13	1	隅丸長方形	D	0.77	0.57	0.27	—	—		中世	39・51・71
370	1	ⅨA04	1	隅丸長方形	D	(0.66)	0.73	0.10	—	△SD009a		中世	39・51・71
507	4b	ⅦO07	1	円形	B	0.78	0.64	0.51	—	—	井戸跡	中世	41・66
508	4b	ⅦO12	1	楕円形	C	1.34	0.99	0.79	土器・種子	—	井戸跡	中世	41・66
509	4b	ⅦO12	1	楕円形	D	1.14	1.01	0.64	土器	—	井戸跡	中世	41・66
510	4b	ⅦO18	1	隅丸長方形	F	1.62	1.25	0.72	土器	△SD064	井戸跡	中世	41・66
515	4b	ⅦO22	1	円形	A	0.39	0.37	0.07	石器	—		中世	41
518	4b	ⅦO11	1	円形	D	0.81	0.57	0.28	—	△SK521	井戸跡	中世	41・66
519	4b	ⅦO16	1	円形	D	0.87	0.75	0.30	—	—	井戸跡	中世	41・66
520	4b	ⅦO17	1	楕円形	D	1.29	1.01	0.36	—	△SK533	井戸跡	中世	41・66
521	4b	ⅦO11	1	円形	C	0.80	(0.52)	0.37	—	▼SK518	井戸跡	中世	41・66
522	4b	ⅦO16	1	楕円形	C	0.86	0.84	0.41	—	—	井戸跡	中世	41・66
523	4b	ⅦO16・21	1	円形	C	0.79	0.71	0.44	—	—	井戸跡	中世	41・66
525	4b	ⅦO21	1	円形	F	0.96	0.95	0.51	—	—	井戸跡	中世	41・67
533	4b	ⅦO17	1	隅丸長方形	B	1.80	1.20	0.62	土器	▼SK520	井戸跡	中世	41・66
535	4b	ⅦO07・08	1	円形	C	0.92	0.71	0.55	—	△SD064 ▼SK536		中世	41・67
536	4b・4c	ⅦO08	1	隅丸方形	C	1.22	1.21	0.48	—	△SK535・SK542	井戸跡	中世	41・67
538	4b	ⅦO13	1	隅丸方形	D	1.01	0.91	0.79	—		井戸跡	中世	41・67
540	3b・4a	ⅧK09・14	1	円形	B	0.75	0.67	0.44	—	△SC012	井戸跡	中世	42・67
541	3b・4a	ⅧK14	1	楕円形	C	1.47	1.06	0.69	—	△SC012	井戸跡	中世	42・67
542	4b・4c	ⅦO08	1	隅丸方形	C	1.65	1.23	0.66	石器・種子	▼SK536	井戸跡	中世	41・67
547	3b・4a	ⅧF18・23	1	—	—	—	—	—	土器	—		古墳	15・17
548	4b	ⅦO17	1	円形	D	0.95	0.81	0.41	—	—	井戸跡	中世	41・67
549	3b・4a	ⅧK02	1	楕円形	B	0.71	0.56	0.77	土器	—		中世	15・17
552	4c	ⅦO03	1	円形	A	0.99	0.90	0.23	—	—	井戸跡	中世	41・68
553	4c	ⅦJ22・23・O02・03	1	円形	C	1.28	(0.87)	0.38	—	—	井戸跡	中世	41・68
554	4c	ⅦO02	1	円形	C	0.79	0.68	0.37	—	—	井戸跡	中世	41・68
556	4c	ⅦJ22	1	円形	C	0.70	0.70	0.43	—	—	井戸跡	中世	41・68
557	4c	ⅦJ21・ⅦO01	1	円形	C	0.63	0.60	0.34	—	—	井戸跡	中世	41・68
558	4c	ⅦJ16	1	方形	C	2.11	2.11	0.37	—	—	井戸跡	中世	41・68
560	4c	ⅦO01	1	楕円形	D	0.86	0.67	0.19	—	—	井戸跡	中世	41・68
561	4c	ⅦJ16	1	円形	A	0.51	0.50	0.16	—	—	井戸跡	中世	41・68
565	3b・4a	ⅧF23	1	円形	B	0.54	0.46	0.20	土器	—		古墳	15・17
604	6	ⅦN23	1	隅丸長方形	C	1.51	0.86	0.46	—	—	井戸跡	中世	44・71
701	7a	ⅦW10	1	円形	C	0.52	0.51	0.20	土器・磁器	—		近世	44
702	7a	ⅦW10	1	円形	C	0.52	0.49	0.16	土器	—		近世	44
721	7a	ⅦR24・25	1	円形	D	1.33	1.20	0.57	—	—	井戸跡	中世	44・69
901	9	ⅫJ19	1	楕円形	A	1.04	0.79	0.21	—	—	井戸跡	中世	45・69
902	9	ⅫJ19	1	隅丸長方形	B	1.89	1.44	0.45	土器	—	井戸跡	中世	45・69
903	9	ⅫJ13・14	1	楕円形	A	1.31	0.91	0.20	—	—	井戸跡	中世	45・69
904	9	ⅫJ14・15	1	円形	B	2.70	1.22	0.31	—	—	井戸跡	中世	45・69
905	9	ⅫJ09	1	隅丸長方形	C	1.54	1.26	0.35	—	△SD187	井戸跡	中世	45・69
906	9	ⅫJ09	1	円形	C	0.80	0.64	0.15	—	—	井戸跡	中世	45・69
907	9	ⅫJ09	1	円形	A	1.18	1.01	0.16	—	—	井戸跡	中世	45・69
908	9	ⅩⅢF02	1	円形	D	0.74	0.70	0.42	—	—	井戸跡	中世	45・69
1103	11C	ⅩVB04	1	円形	B	0.88	0.70	0.65	土器	—		中世	46

付表６　石川条里遺跡　溝跡一覧

SD番号	位置		調査面	傾斜方向	形状		規模 (m)			遺物	重複関係	備考	時期	図版番号
	地区	グリッド			平面形	断面形	長さ	最大幅	深さ		△（旧）▼（新）（不）不明			
001	1	ⅢV19・20・24・25・W21・22、ⅨB10・C01・02・06	1	南東→北西 北東→南西	ゆるく屈曲	B	(42.16)	1.49	0.48	土器・陶器・磁器・土製品・石器・鉄製品	△SC029、SD010、SK011 ▼SD015・086、ST005 (不)SD002・008	区画溝跡	中世	38・49・50・74
002	1	ⅨB05・C01	1	北東→南西	湾曲	B	10.12	1.68	0.17	土器・陶器・磁器・土製品・鉄製品・鉄滓	△SK001 ▼SK010 (不)SD001	区画溝跡	中世	38・49・50・74
003	1	ⅨC01・06	1	北東→南西	直線	A	5.35	0.55	0.07	土器	▼SK004		中世	38・48・50・74
004	1	ⅨC01・06	1	北東→南西	直線	A	3.95	0.31	0.04	鉄製品	—		近世	38・49・50・74
005	1	ⅨC01・06	1	北東→南西	直線	A	3.91	0.33	0.04	—	—		近世	38・49・50・74
006	1	ⅢV25・ⅨB05	1	北東→南西	直線	E	3.82	0.29	0.03	—	△SC027		近世	38・49・74
007	1	ⅨB10	1	北東→南西	直線	E	3.09	0.29	0.18	土器	△SC027、SK001 (不)SD009a		中世	38・50・74
008	1	ⅨC06	1	北西→南東	直線	B	1.47	0.22	0.11	—	▼SK005 (不)SD001		中世	38・50・74
009a	1	ⅨA03・04・05・10・B01・06・07・08・09・10・C06・07・11・12	1	北西→南東	直線	C	(72.51)	1.19	0.30	土器・陶器・磁器・石器・鉄製品・銅製品・獣骨・	△SD016、SK116・270 ▼SD009ｂ・017・126・019・020、SK021・023・370、SL001・002、SA005、ST002　(不)SD007・015	区画溝跡	中世	38・39・48・49・50・51・74
009b	1	ⅨB09・10	1	北西→南東	直線	C	9.21	0.89	0.52	銭貨	△SD009a・010 ▼SD017、SK016	区画溝跡	中世	38・50
010	1・1北	ⅢV15・20	1	北北東→南南西	ほぼ直線	A	(5.8)	0.53	0.13	—	△SC029 ▼SD001・009・085・086・087・092、SK009・014 (不)ST006	区画溝跡	中世	38・49・74
011	1	ⅨB05	1	北東→南西	直線	E	2.50	0.33	0.04	—	△SC027・028		近世	38・49・74
012	1	ⅢV24、ⅨB04・B09	1	北西→南東	ほぼ直線	A	(9.01)	0.69	0.06	—	▼SD013		奈良	22・35
013	1	ⅢV23・24、ⅨB03・B04	1	北東→南西	ほぼ直線	A	5.54	0.73	0.08	—	△SD012		近世	38・49・74
014	1	ⅨB04	1	北西→南東	やや湾曲	A	(5.27)	0.39	0.07	土器	(不) SK002		奈良	22・35
015	1	ⅨB10	1	北東→南西	直線	B	2.73	0.31	0.27	—	△SD001 (不)SD009a		中世	38・50・74
016	1	ⅨC06・07	1	北東→南西	直線	E	(5.82)	0.90	0.11	土器	▼SD009a、SK017		近世	38・48・50・74
017	1・1西	ⅨB10・C06・07・12	1	西北西→東南東	直線	B	(22.41)	0.54	0.32	不明銅製品	△SD009a・009b・016 ▼SL001	区画溝跡	中世	38・48・50・74
018	1	ⅨB04	1	北東→南西 北西→南東	湾曲	A	1.84	0.61	0.31	—	△SK002		近世	38・49・74
019	1	ⅢV23・ⅨB02・03・07	1	北東→南西	直線	C	(21.08)	0.69	0.31	土器・陶器・石器・獣骨	△SD009a、ST001・ST003		近世	38・49・50・74
020	1	ⅢU25・ⅢV16・21、ⅨA05・10	1	北東→南西	直線	A	(23.91)	0.76	0.10	土器・陶器	△SK080・191、SD009a ▼SA001、SD023		近世	38・49・51・74
021	2	ⅧD13・14・15・19・20・E11・16	1	西北西→東南東	ほぼ直線	C	(16.1)	0.45	0.24	土器	▼SD22	用水跡	近世	39・74
022	2	ⅧD13・14・15・19・20・E16	1	西北西→東南東	直線	C	(19.2)	0.65	0.40	土器・陶器	△SD21	用水跡	近世	39・74
023	1・1西・2	ⅧE09・10、ⅨA06・07・09・10・B06・07・08・09・12・13・14・15・C11・12	1	北東→南西 北西→南東	L字に屈曲	B	(113.7)	1.70	0.34	土器・陶器・磁器・石器・石製品・瓦・獣骨	△SC001、SD020・046・127、SK091・191・256、SL001・002・003、ST002 ▼SD024・025・088・126、SK091	用水跡	近世	38・39・50・51・74
024	2	ⅧE04・05・09・10・14、ⅨA06・07	1	西北西→東南東 南西→北東	L字に屈曲	B	(47.64)	0.81	0.21	土器・陶器・磁器・石器	△SC001、SD023・025・046・125 (不)SD046	用水跡	近世	39・74
025	1西・2	ⅧE04・05・08・09・10・A06・07・08	1	西北西→東南東	直線	A	(33.63)	0.55	0.14	土器	△SC001、SD046 ▼SD023・024	用水跡	近世	39・74
026	3b・4a	ⅧH11・12	1	西南西→東北東	直線	A	(8.17)	0.92	0.12	土器	△SD032	用水跡	近世	40・74

SD番号	位置		調査面	傾斜方向	形状		規模 (m)			遺物	重複関係	備考	時期	図版番号
	地区	グリッド			平面形	断面形	長さ	最大幅	深さ		△（旧） ▼（新） （不）不明			
027	3b・4a	ⅧG03・04・05・08・09・10・H01・02	1	西南西→東北東	L字に屈曲	A	(27.65)	0.87	0.10	—	△SD028 ▼SD033・037・038・039		近世	40・74
028	3b・4a	ⅧH01・06・11	1	北北西→南南東	直線	A	(16.79)	0.70	0.11	土器	△SD104 ▼SD027・029・030・031		平安	23・35
029	3b・4a	ⅧH01・06・11	1	西北西→東南東	直線	A	(7.16)	0.28	0.04	—	△SD028	用水跡	近世	40・74
030	3b・4a	ⅧG04・05・H01	1	西北西→東南東	直線	C	(16.93)	0.57	0.19	—	△SD028	用水跡	近世	40・74
031	3b・4a	ⅧG05・H01	1	西→東	直線	C	(9.44)	0.78	0.22	—	△SD028	用水跡	近世	40・74
032	3b・4a	ⅧH11・16	1	北北西→南南東	直線	A	(9.8)	1.45	0.20	土器	△SD104 ▼SD026	用水跡	平安	23・35
033	3b・4a	ⅧG03・04・08・09・13・14・19	1	北北東→南南西	ほぼ直線	B	(23.55)	0.36	0.20	土器・陶器	△SD027・037・065	用水跡	近世	40・75
034	3a	ⅧC19・24・H04・09・14	1	北北西→南南東	ほぼ直線	C	(29.21)	1.26	0.53	土器・陶器・磁器・鉄製品	△SD048		近世	40・75
035	3a	ⅧC18・19・23・24・H04・09・14	1	北北西→南南東	ほぼ直線	C	(29.29)	0.98	0.24	—	△SD048		近世	40・75
036	3a	ⅧC18・23・H03・04・09・14	1	北北西→南南東	ほぼ直線	B	(29.43)	0.87	0.20	土器・陶器	△SD048		近世	40・75
037	3b・4a	ⅧG03・04・08・09・13・14・19	1	北北東→南南西	ほぼ直線	B	(24.5)	0.71	0.16	土器・陶器・鉄滓	△SD027・065・105 ▼SD033	用水跡	近世	40・75
038	3b・4a	ⅧG03・08・13	1	北北東→南南西	ほぼ直線	B	(16.38)	0.33	0.11	土器	△SD027	用水跡	近世	40・75
039	3b・4a	ⅧG03・08・13・19・23	1	北北東→南南西	ほぼ直線	C	(28.17)	0.71	0.14	鉄・骨	△SD027・065	用水跡	近世	40・75
040	3b・4a	ⅧG06・11・16	1	北北西→南南東	ほぼ直線	C	(15.42)	0.57	0.15	土器・木製品	△SC009・041	用水跡	近世	40・41・75
041	3b・4a	ⅧG06・11・16	1	北北西→南南東	ほぼ直線	C	(18.74)	0.99	0.37	土器・陶器・木製品	▼SD040	用水跡	近世	40・41・75
042	3a	ⅧC19・24・H04・09・14	1	北北西→南南東	ほぼ直線	C	(13.62)	0.34	0.16	—	△SD048		近世	40・75
043	3b・4a	ⅧF19・24・K04・09・14	1	東北東→西南西 北北東→	ほぼ直線	C	(36.85)	0.69	0.24	土器・陶器・キセル・鉄滓・石器	▼SM005	用水跡	近世	41・42・75
044	3b・4a	ⅧF18・19	1	東北東→西南西	ほぼ直線	A	(6.03)	0.42	0.10	—	—	用水跡	近世	41・75
046	3b・4a	ⅧE04・09・14	2	北北西→南南東	直線	B	(9.71)	0.57	0.03	—	△SC001 ▼SD023・024・025	大畦畔に伴う用水跡か	平安	22・35
047	2	ⅧC23・H03・08	1	北北東→南南西	ほぼ直線	B	(15.16)	0.43	0.08	—	▼SD048		近世	40・75
048	3a	ⅧH03・04	1	北東→南西	やや湾曲	C	(14.26)	0.76	0.18	—	△SC002、SD047 ▼SD034・035・036・042		奈良	23・35
049	3	ⅧK11・12・13	1	西→東	ほぼ直線	A	(12.8)	1.62	0.04	—	△SC011		近世	41・42・75
050	3b・4a	ⅧK11・12・13	1	西北西→東南東	直線	D	(11.57)	0.87	0.45	—	△SC011、SD055		近世	41・42・75
051	3b・4a	ⅧK01・02	1	西南西→東北東	ほぼ直線	E	(19.0)	1.12	0.14	—	△SC011 ▼SD052・060		近世	41・42・75
052	3b・4a	ⅧK01・02	1	西北西→東南東	ほぼ直線	A	9.61	2.06	0.06	—	△SC011、SD051・055		近世	41・42・75
053	3b・4a	ⅧF23・K03	1	北北東→南南西	ほぼ直線	C	(7.44)	0.42	0.09	—	△SD061		近世	41・75
055	3b・4a	ⅧF23・K03・08・13	1	北北東→南南西	ほぼ直線	A	(28.02)	2.06	0.40	土器	▼SD050・052		近世	41・42・75
056a	3b・4a	ⅧF19・24・25	1	西北西→東南東	ほぼ直線	C	(17.01)	0.99	0.16	土器・陶器・磁器	△SC010	用水跡	近世	41・42・75
056b	3b・4a	ⅧF19・24・25	1	—	直線	C	—	—	—	—	—	用水跡	近世	40・41
057	3b・4a	ⅧF24・25・G21	1	西→東	直線	B	16.16	1.06	0.27	土器・陶器・磁器	△SC010 ▼SD063ab	用水跡	近世	41・42・75
058a	3b・4a	ⅧG16・17・21・22・23・24・L04	1	北北西→南南東 西北西→東南東	L字に屈曲	C	(29.8)	1.12	0.43	土器・陶器・磁器・石器	△SC008・015、SD058bc・063・065・098	用水跡	近世	40・75
058b	3b・4a	ⅧG21・22・23・24	1	西北西→東南東	直線	B	(17.75)	不明	0.38	土器・石器	▼SD058a	用水跡	近世	40・75
058c	3b・4a	ⅧG21・22・23・24	1	—	直線	—	—	—	—	—	▼SD058a	用水跡	近世	40
059	3b・4a	ⅧG21・L01・06	1	北北東→南南西	直線	A	(16.48)	0.64	0.12	木製品	—	用水跡	近世	40・41・42・75
060	3b・4a	ⅦO05・10、ⅧK01	1	北北東→南南西	ほぼ直線	C	(3.55)	0.60	0.21	獣骨	△SD051		近世	41・76

付表6

SD番号	位置		調査面	傾斜方向	形状		規模 (m)			遺物	重複関係	備考	時期	図版番号
	地区	グリッド			平面形	断面形	長さ	最大幅	深さ		△（旧） ▼（新） （不）不明			
061	3b・4a	ⅧF23・K03・08・13・23・24	1	北北東→南南西	L字に屈曲	D	(31.94)	1.67	0.62	土器・石器・人骨・獣骨・	▼SD053	用水跡	近世	41・42・76
063a	3b・4a	ⅧG21・L01	1	北→南	直線	B	(18.6)	1.32	0.36	土器・陶器・石器・鉄滓	△SD057・063b ▼SK534	用水跡	近世	40・41・42・76
063b	3b・4a	ⅧG21・L01・06	1	北→南	直線	C	8.2	1.32	0.32	土器・陶器	△SD057 ▼SD063a	用水跡	近世	40・41・76
064	3b・4a	ⅦJ22・O02・07・08・12・13・18・23・T03	1	北北西→南南東	直線	C	(42.57)	1.29	0.30	土器	△SD066、SC044 ▼SK510・535	大畦畔に伴う用水跡か	平安	23・24・35・35
065	4b・4c	ⅧG18・19・20・23・L03	1	北北西→南南東 西南西→東北東	L字に屈曲	C	(37.91)	1.47	0.56	土器・鉄製品・石製品・獣骨	▼SD033・037・039・058a・098	用水跡	近世	40・42・76
066	3b・4a	ⅦO03・08・13・17・22・T01・02	1	北東→南西	直線	A	(40.86)	1.92	0.20	土器・石器	△SC044 ▼SD064・068		奈良	23・24・35・35
067	4b・4c	ⅦO09	1	北東→南西	ほぼ直線	E	(1.81)	0.46	0.12	—	—		近世	41・76
068	4b	ⅦO03・08・13	1	北北西→南南東	ほぼ直線	A	(15.64)	0.84	0.06	—	△SD066		近世	41・76
069	4b・4c	ⅦO18・19	1	西北西→東南東	不明	A	(3.0)	不明	0.06	—	—		近世	41・76
070	4b	ⅧK16・17・18	1	西北西→東南東	直線	E	(11.08)	1.29	0.04	—	△SC011		近世	41・42・76
071	3b・4a	ⅦO22・023・T03	2	北西→南東	不整形	A	(9.83)	1.96	0.09	—			奈良	23・24・35・35
072	4b	ⅧK13	3	南南西→北北東	ほぼ直線	E	(3.54)	0.48	0.07	—	—		近世	41・42・76
073	2	ⅧD14	3	北東→南西	直線	A	(4.51)	0.64	0.06	—	—		古墳	14
074	1	ⅨB14・20・C16	1	北西→南東	直線	C	(19.89)	0.43	0.07	—	▼SD077、SK198	区画溝跡	中世	38・50・76
075	1	ⅨB14・19	1	北北東→南南西	ほぼ直線	B	(9.98)	0.82	0.16	—	—		中世	38・50・76
076	1	ⅨB19	1	北北西→南南東	ほぼ直線	C	(3.14)	0.52	0.18	—	—		近世	38・50・76
077	1	ⅨB14・19	1	北東→南西	ほぼ直線	A	(6.63)	0.85	0.04	—	△SD074		近世	38・50・76
078	1	ⅨB20	1	西北西→東南東	ほぼ直線	C	1.52	0.38	0.08	—	—		中世	38・50・76
080	1	ⅨA15・B06・11	1	北北西→南南東 北東→南西	ほぼ直線	B	(10.13)	0.80	0.31	土器・釘・銭貨・獣骨	△SD081・083 ▼SD023、SL002	区画溝跡	中世	38・51・76
081	1	ⅨA20・B06・11・16	1	北北東→南南西	ほぼ直線	C	(17.37)	0.49	0.10	獣骨	▼SD080		中世	38・51・76
082	1	ⅨA15・20	1	北東→南西	ほぼ直線	A	(9.61)	0.69	0.09	—	—		近世	38・51・76
083	1	ⅨB11・12・17	1	北西→南東	直線	E	(18.75)	1.05	0.12	—	▼SK200、SD080、SL002		奈良	22・35
084	1	ⅨC12・17	1	北東→南西	直線	A	(3.53)	0.50	0.09	釘	▼SL001・（SD023）		近世	38・50・76
085	1	ⅢV20・W16・21・22・23	1	北西→南東	直線	B	(33.47)	2.50	0.40	土器・磁器　陶器	△SC021、SD010・086・087・092、SK279	塩崎用水支線用水跡	近代	38・48・49・76
086	1	ⅢV20・W16・21・22・23	1	北西→南東	不明	D	(33.83)	不明	0.72	土器・陶器・磁器・土製品・銭貨	△SC021・029、SD001・010・092、SK279 ▼SD085	塩崎用水支線用水跡	近世～近代	38・48・49・76
087	1	ⅢV20・W16・17・21・22・23	1	北西→南東	直線	B	(27.58)	不明	0.40	銭貨	△SC022・026、SD010・096、SK277・356 ▼SD085		近世～近代	38・48・49・76
088	1	ⅨA14・15	1	北北東→南南西 西→東	L字に屈曲	C	(25.76)	1.08	0.24	鉄製品・土製品	△SD023・127 ▼SD125、SA002	区画溝跡	中世	38・39・51・77
089a	1・1西	ⅨA23・24・25・B21	1	東北東→西南西	直線	A	(22.22)	1.19	0.20	獣骨	△SD089ｂ・090		近世	38・39・51・77
089b	1	ⅨA23・24・25・B21	1	東北東→西南西	直線	A	(22..44)	不明	0.08	獣骨	△SD090 ▼SD089a、SL013		近世	38・39・51・77
090	1	ⅨA24・25	1	北北西→南南東	ほぼ直線	E	(8.49)	0.43	0.02	—	▼SD089ab		近世	38・39・51・77
091	1	ⅢW14・19・24	1	北東→南西	ほぼ直線	A	(8.21)	不明	0.10	—	△SC021 ▼SA003		近世	38・48・77
092	1	ⅢV19・20・25・W21・22・23	1	北西→南東	直線	—	(33.54)	0.67	0.40	土器・磁器	△SC021 ▼SD085・086		近世～近代	38・49

SD番号	位置		調査面	傾斜方向	形状		規模 (m)			遺物	重複関係	備考	時期	図版番号
	地区	グリッド			平面形	断面形	長さ	最大幅	深さ		△（旧） ▼（新） （不）不明			
093	1	ⅧE05・10	5	南東→北西	ほぼ直線	—	(8.28)	1.05	0.11	—	—		弥生	2
094	2	ⅧD15・D20・E11	4	北東→南西	ほぼ直線	—	(8.01)	1.16	0.05	—	—		弥生	2
095	2	ⅢW22、ⅨC02・07	2	南南東→北北西	ほぼ直線	A	(12.59)	0.46	0.06	—	▼SD085・086・087・092	大畦畔に伴う用水跡か	平安	22・35
096	1	ⅢV20・W16	2	北東→南西	不整形	—	(5.46)	3.58	0.14	—	▼SD087		奈良	22
097	1	ⅧG25	1	東南東→西北西	直線	C	(7.12)	0.49	0.13	—	—		近世	40・77
098	3b・4a	ⅧL03・04	1	西南西→東北東	ほぼ直線	B	7.92	0.54	0.30	土器	△SC015、SD065・058a	用水跡	近世	40・42・77
100	3b・4a	ⅢV25・W21	3	南東→北西	不整形	A	(7.8)	3.18	0.39	土器・管玉・勾玉・石器	▼SA004		古墳	14
101	1	ⅧE08・09	4	南東→北西	不整形	—	(4.04)	1.06	0.04	—	—		弥生	2
102	2	ⅧE08・09	4	南東→北西	ほぼ直線	—	(4.17)	0.66	0.05	—	—		弥生	2
103	2	ⅧE11・E12	4	北北西→南南東	不整形	—	(5.88)	2.83	0.06	—	—		弥生	2
104	2	ⅧH01・06・11・16	2	北北西→南南東	ほぼ直線	B	(25.94)	1.29	0.23	土器	△SD105 ▼SD028・032	大畦畔に伴う用水跡か	平安	23・35
105	3b・4a	ⅧG14・15・H06・11	2	南西→北東	やや蛇行	A	(24.48)	1.09	0.12	—	▼SD028・037・104		奈良	23・36
106	3b・4a	ⅧF17・18	3	北西→南東	ほぼ直線	A	(7.36)	0.81	0.11	—	—		奈良	23・36
107	3b・4a	ⅧF23・K02・03・07・12	3	北東→南西	ほぼ直線	E	(28.14)	0.86	0.10	—	△SC043		奈良	23・36
108	3b・4a	ⅧF19	3	北西→南東	ほぼ直線	A	5.77	0.30	0.05	—	—		奈良	23・36
109	3b・4a	ⅦO04・09	1	北北西→南南東	ほぼ直線	A	(5.45)	0.82	0.05	—	—		近世	41・77
110	4c	ⅦO04・09	1	北北西→南南東	ほぼ直線	A	(7.25)	0.78	0.16	—	—		近世	41・77
111	4c	ⅦO04	1	北北西→南南東	ほぼ直線	E	(1.91)	0.49	0.10	—	—		近世	41・77
112	4c	ⅧF14・15	4	北西→南東	ほぼ直線	E	(3.99)	0.31	0.14	—	—		弥生	2・5
113	3b・4a	ⅧK23	4	南南東→北北西	ほぼ直線	A	(2.72)	1.97	0.18	—	—		弥生	2・5
114	4ｄ	ⅦO05・10	1	北東→南西	やや湾曲	E	5.1	0.27	0.05	—	△SD120・121		近世	41・77
115	4d東	ⅦO09・10	1	北東→南西	やや蛇行	A	4.8	0.40	0.08	—	△SD119		近世	41・77
117	4d東	ⅦO19・24	1	北北西→南南東	ほぼ直線	A	(12.64)	1.06	0.10	—	—		近世	41・43・77
118	4d東	ⅦO19・20	1	西→東	ほぼ直線	E	(4.18)	0.93	0.12	—	▼SD124		近世	41・77
119	4d東	ⅦO09・10	1	西北西→東南東 北西→南東	湾曲	C	(5.48)	0.38	0.08	—	▼SD115		近世	41・77
120	4d東	ⅦO10	1	西南西→東北東	直線	C	2.73	0.20	0.10	—	▼SD114		近世	41・77
121	4d東	ⅦO04・05	1	西北西→東南東	直線	A	(6.37)	1.19	0.04	—	▼SD114		近世	41・77
122	4d東	ⅦO05	1	北北西→南南東	直線	A	(3.23)	1.16	0.05	—	—		近世	41・77
123	4d東	ⅦO19・24	1	北→南	ほぼ直線	A	(8.72)	0.40	0.05	—	△SD124		近世	41・77
124	4d東	ⅦO14・19・24	1	北→南	やや蛇行	A	(20.76)	0.78	0.07	—	△SD118 ▼SD123		近世	41・77
125	4d東	ⅨA03・07・08	1	西南西→東北東 北北東→南南西	L字に屈曲	C	(13.73)	0.50	0.33	土器・陶器・磁器・鉄製品	△SD088・126・135 ▼SD024		近世	38・39・51・77
126	1西	ⅨA03・08	1	北北東→南南西	直線	C	(5.3)	2.20	0.56	土器・キセル・石器	△SD009a・088 ▼SD125		中世	39・51・77
127	1西	ⅨA04・08・13・12・17	2	北東→南西	ほぼ直線	B	(26.70)	0.99	0.40	土器	▼SD023・088		奈良	22・36

付表6

SD番号	位置		調査面	傾斜方向	形状		規模 (m)			遺物	重複関係	備考	時期	図版番号
	地区	グリッド			平面形	断面形	長さ	最大幅	深さ		△（旧） ▼（新） （不）不明			
128	1西	ⅢW24、ⅨC04・08・09・13	1	北東→南西	ほぼ直線	A	(20.31)	0.41	0.08	—	△SL014		近代以降	38・48・77
129	1東	ⅢW24、ⅨC03・04・08・13	1	北東→南西	直線	B	(18.75)	0.87	0.40	土器・陶器・石製品	—		近世	38・48・78
130	1東	ⅨC04・08・09・13・14	1	北東→南西	直線	A	(14.75)	0.82	0.08	土器	△SD131 ▼SL014		中世	38・48・78
131	1東	ⅨC04・09・13・14	1	北東→南西	直線	E	(11.39)	不明	0.20	土器	▼SD130、SL014		中世	38・48・78
132	1東	ⅢV14・19	1	北東→南西	ほぼ直線	B	(2.72)	0.70	0.15	—	—		近世	38・49・78
133	1北	ⅢV19	1	北東→南西	直線	A	(2.79)	0.30	0.04	—	▼SD134		近世	38・49・78
134	1北	ⅢV19	1	北西→南東	直線	D	(4.64)	1.11	0.44	—	△SD133		近世	38・49・78
135	1北	ⅨA07・08	1	北北東→南南西	直線	C	(5.60)	不明	0.50	—	▼SD125		近世	39・77
136	1西	ⅧL24	1	東→西	ほぼ直線	A	5.65	0.62	0.10	—	—		近世	42・78
137	4d東	ⅧQ09	1	北北西→南南東	直線	B	(2.12)	0.75	0.20	—	—		近世	42・78
138	5東	ⅦW07・08・12・13・17	1	北北東→南南西	直線	B	(14.76)	2.19	0.60	土器	—	用水跡	近世	44・138
139	7a	ⅦW13・17・18	1	北北東→南南西	直線	C	(10.16)	1.07	0.15	—	—	用水跡	近世	44・138
140	7a	ⅦW13・18	1	北北東→南南西	直線	A	(6.69)	1.59	0.16	—	—	用水跡	近世	44・138
141	7a	ⅦX06	1	西北西→東南東	直線	A	(2.6)	0.46	0.12	土器	—	用水跡	近世	43・44・78
142	7a	ⅦS17・18・21・22・23・R25・W03・04・05	1	北東→南西	ほぼ直線	E	(39.15)	1.77	0.11	土器	—		奈良	24・36
144	7a	ⅦS18	1	西北西→東南東	ほぼ直線	A	(1.62)	0.34	0.05	—	—		近世	43・44・78
145	7a	ⅦR23・W03	1	南西→北東	ほぼ直線	A	4.46	0.28	0.07	—	—		近世	44・78
146	7a	ⅦY22・23	1	西北西→東南東	直線	A	(7.34)	不明	0.08	土器・陶器・鉄滓	▼SD147 (不)SD149	用水跡	近世	43・78
147	5b	ⅦY22・23	1	西北西→東南東	直線	B	(7.43)	1.01	0.40	土器・陶器・磁器・石器・炭化物	△SD146・148	用水跡	近世	43・78
148	5b	ⅦY22・23	1	西南西→東北東	直線	B	(5.01)	不明	0.60	土器・磁器	▼SD147	用水跡	近世	43・78
149	5b	ⅦY17・22・23	1	西南西→東北東	直線	A	(7.17)	0.43	0.05	—	(不)SD146	用水跡	近世	43・78
150	5b	ⅦY06・07	1	西南西→東北東	直線	B	(4.35)	0.48	0.14	—	—		近世	43・78
151	5b	ⅫS11・16・21・X01	1	北東→南西	ほぼ直線	E	(25.79)	1.10	0.24	土器	△SC056		近世	46・78
152	11a	ⅫW08・09・10	1	南西→北東	直線	E	(17.13)	1.42	0.18	土器	—		近世	46・78
153	11b	ⅫW12・13・18・23	1	北北西→南南東	直線	C	(14.8)	1.39	0.21	—	△SD163・0166		近世	46・78
154	11b	ⅦY11・12・13	1	北北西→南南東 西北西→東南東	L字に屈曲	B	(15.21)	1.02	0.10	土器・石器	—		近世	46・78
155	5b	ⅦY07・08	1	東北東→西南西	直線	C	(4.51)	0.60	0.25	土器	△SD167・168	用水跡	近世	46・78
156	5b	ⅫR18・23・W03・08	1	北北東→南南西	直線	A	(19.11)	0.93	0.05	—	—		近世	46・78
157	11b	ⅫR18・23・W03・08	1	北東→南西	直線	A	(19.57)	0.51	0.03	—	—		近世	46・79
158	11b	ⅫR18・23・W03・08	1	北東→南西	直線	A	(20.57)	0.47	0.03	—	—		近世	46・79
159	11b	ⅫR23・W02・03	1	北北東→南南西	ほぼ直線	A	(10.77)	1.35	0.05	—	—		近世	46・79
160	11b	ⅫW07・08・12・13	1	西→東 北北西→南南東	ほぼ直線	E	(11.10)	1.23	0.06	—	—		近世	46・79
161	11b	ⅫW03・07・08	1	北北東→南南西 北西→南東	ほぼ直線	E	8.5	0.74	0.07	—	—		近世	46・79

SD番号	位置		調査面	傾斜方向	形状		規模 (m)			遺物	重複関係	備考	時期	図版番号
	地区	グリッド			平面形	断面形	長さ	最大幅	深さ		△（旧） ▼（新） （不）不明			
162	11b	XIIW13	1	北北東→南南西	直線	A	(5.19)	0.65	0.02	—	—		近世	46・79
163	11b	XIIW12・13	1	北東→南西	ほぼ直線	E	(5.00)	0.45	0.08	—	▼SD153		近世	46・79
164	11b	XIIW12・17	1	北東→南西	ほぼ直線	A	(6.81)	0.44	0.04	—	—		近世	46・79
165	11b	XIIW12・17	1	北東→南西	ほぼ直線	E	(6.05)	不明	0.10	—	—		近世	46・79
166	11b	XIIW18・23	1	北北西→南南東	直線	E	(6.96)	0.60	0.12	—	▼SD153		近世	46・79
167	11b	VIIY03・08	1	北→南	直線	C	(10.38)	1.10	0.30	土器・陶器・石器	▼SD155	用水跡	近世	43・79
168	5b	VIIY03・08	1	北北西→南南東	直線	C	(10.24)	0.42	0.10		▼SD155	用水跡	近世	43・79
169	5b	VIIV13・14・18・22・23、XIII A15・20・24・25・B01・02・03・06・07・11・16	1	北東→南西	直線	E	(74.2)	3.25	0.24	土器・種子	(不)SD170・171		奈良	24・36
170	7b・8、9	VIIV09・14・18・19・22・23・XIII A20・25・B01・02・03・06・07・11・16	1	北東→南西	ほぼ直線	A	(74.7)	1.83	0.12	土器	(不)SD169・171・172・173		奈良	24・36
171	7b・8	XIIA25	1	北西→南東	直線	B	(2.48)	0.71	0.20	—	(不)SD169・170		奈良	24・36
172	7b・8	XIIV24・B04・07・08・11・12・16	1	北東→南西	やや湾曲	A	(20.28)	0.72	0.03	—	▼SD173		奈良	24・36
173	7b・8	XIIB06・07・12	1	北西→南東	直線	A	(6.84)	0.32	0.92	—	△SD172		奈良	24・36
174	7b・8	XIIV15・19・20	1	北東→南西	ほぼ直線	A	(21.06)	1.13	0.04	—	▼SD175・176		奈良	24・36
175	7b・8	XIIV14・15・20	1	北西→南東	直線	B	(10.28)	0.95	0.15	土器	△SD174		奈良	24・36
176	7b・8	XIIV14・15	1	北西→南東	直線	C	(10.04)	1.47	0.15	土器	△SD174		奈良	24・36
177	7b・8	XIIA09・10	1	北西→南東	ほぼ直線	A	9.31	0.51	0.02	—	—		奈良	24・36
178	7b・8	XIIV17・22	1	北北東→南南西	直線	A	(5.31)	0.66	0.05	—	—		平安	24・36
179	7b・8	XIIV05・W01	1	北西→南東	直線	A	(3.65)	1.27	0.09	—	—		奈良	24・36
183	7b・8	XIIN25・O21	1	北東→南西	ほぼ直線	E	(7.11)	1.70	0.21	—	—		近世	45・79
184	10	XIIN15・O06・11	1	北東→南西	ほぼ直線	A	13.66	0.72	0.04	—	—		近世	45・79
185	10	XIIIF07・08	1	北東→南西	ほぼ直線	C	(12.85)	0.69	0.12	土器	—		近世	45・79
187	9	XIIE25・J05・09・10・13・14、XIII A21・F01	2	南西→北東	湾曲	A	(25.62)	1.02	0.11	土器・種子	▼SK905		弥生	3
188	9	XVF13・18	1	北北西→南南東	直線	C	(5.0)	(3.88)	1.32	土器・陶器・磁器・瓦・土製品・石器・銭貨	△SD189・190・191	塩崎用水跡	近世	82
189	12c北	XVF13・18	1	北北西→南南東	直線	C	(5.0)	1.90	0.40	土器	△SD190・191 ▼SD188	塩崎用水跡	近世	46・81・82
190	12c北	XVF13・18	1	北北西→南南東	直線	C	(5.0)	不明	0.32	土器・陶磁器・瓦・鉄製品・石製品・石器	△SD191 ▼SD188・189	塩崎用水跡	近世	46・81・82
191	12c北	XVF13・18	1	北北西→南南東	直線	B	(5.65)	不明	0.80	土器・陶器・石・兜立物	△SD192 ▼SD188・189・190	居館堀跡	中世	80・82・83
192	12c北	XVF13・18	1	北北西→南南東	直線	B	(5.73)	1.16	0.24	土器	▼SD191	居館堀跡	中世	80・82

付表７　石川条里遺跡　弥生時代～古代土器一覧 ※含長谷鶴前遺跡群 古代土器（報告書掲載分）　［図版84～90］

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
1	—	SQ001-2	5b	SQ001	埋土	1T No.3	弥生中期後半	弥生土器	甕	体~底部	底4/8	—	<6.3>	(6.6)	—	138	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR6/2 灰黄褐	1mm前後白・赤・黒色粒砂多量。石英少量。	やや不良	ミガキ 底部:ミガキか	ミガキ	外面底部:酸化鉄付着 全体的に摩滅
2	PL27	SQ001-1	5b	SQ001	埋土	1T No.1、2	弥生中期後半	弥生土器	甕	体~底部	底8/8	—	7.2	(18.2)	<21.2>	539	7.5YR6/6 橙	7.5YR8/2 灰白	1~2mm大白・赤・黒色粒砂多量。石英少量。	やや不良	ハケのち羽状文 下半:ケズリに近いハケ ナデ	ハケのちミガキ	全体的に摩滅
3	PL27	SQ001-3	5b	SQ001	埋土	—	弥生中期後半	弥生土器	甕	頸~底部	底8/8	—	8.0	(22.4)	<19.2>	1497	10YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	1~2mm大白・黒・赤色粒砂多量。石英少量。粗	良	ミガキか 櫛描簾状文 ハケのち羽状文 ハケのちナデ ナデ	ミガキ ハケのちミガキ	底部酸化鉄付着 全体的に摩滅
4	—	SC063-2	7b・8	SC063	埋土	211、SC063・064	弥生中期後半	弥生土器	壺	口縁~頸部	口1/8	<16.0>	—	(5.0)	—	64	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	白・赤色・石英微細粒・超微細粒多量。粗	良	ヨコナデ ハケのちナデか 沈線 縄文	ナデ	内外面摩滅著しい
5	PL27	SC063-3	7b・8	SC063	埋土	211、213、214	弥生中期後半	弥生土器	壺	口縁~体部	口2/8	<12.1>	—	(11.6)	—	1034	5YR8/3 淡橙	5YR8/3 淡橙	白・赤色・石英超微細粒多量。粗	良	ナデ 沈線 沈線 ナデ	ナデ	内外面摩滅著しい
6	PL27	SC063-1	7b・8	SC063	埋土	212、SC063・064	弥生中期後半	弥生土器	甕	口縁~体部	口2/8	<20.0>	—	(5.7)	—	490(石膏込み)	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR4/1 褐灰	石英超微細粒多量。緻密	良	ナデ 櫛描波状(7本) 畿内型か 縄文沈線	ミガキ	内外面僅かに摩滅
7	—	SC063・064-1	7b・8	SC063・064	盛土	—	弥生中期後半	弥生土器	甕	体部	—	—	—	—	—	81	10YR5/2 灰黄褐	10YR7/2 にぶい黄橙	石英超微細粒非常に多量。密	良	羽状文	ミガキ	内外面摩滅
8	—	SC063・064-2	7b・8	SC063・064	盛土	—	弥生中期後半	弥生土器	甕	体部	—	—	—	—	—	18	10YR5/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	白色・石英超微細粒多量。密	良	羽状文	ミガキ	内外面摩滅著しい
9	—	SC063・064-3	7b・8	SC063・064	盛土	—	弥生中期後半	弥生土器	甕	頸部	—	—	—	—	—	69	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR7/4 にぶい橙	石英超微細粒非常に多量。密	良	ナデ 羽状文	ナデ	内外面摩滅
10	PL27	SC089-2	11a	SC089	埋土	1	弥生中期後半か	弥生土器	壺形鉢	体~底部	底8/8	—	3.4	(5.0)	<10.2>	55	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	白色微細粒・超微細粒多量。石英超微細粒少量。密	良	ミガキ(赤彩) ナデ(赤彩)	ミガキ(赤彩)	外面摩滅
11	PL27	SC089-1	11a	SC089	埋土	2~5	弥生中期後半か	弥生土器	有孔鉢	口縁~底部	口3/8 底8/8	—	4.0	(10.1)	<10.2>	175	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	白色・石英微細粒や1~2mm大粒非常に多量。粗	良	ハケ→ミガキ ケズリ→ミガキ	ミガキ ナデ ハケ	内外面摩滅
12	—	SC101-1	11c	SC101	埋土	18、19	弥生中期後半か	弥生土器	甕	体~底部	底2/8	—	<5.4>	(2.7)	—	31	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	白色超微細粒多量。密	良	ミガキか	ミガキか	内外面摩滅著しい
13	PL27	9区2検 1T 8b層-1	9	SC115	埋土	1~6	弥生中期後半	弥生土器	甕	体~底部	底3/8	—	<7.2>	—	<20.0>	171	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	石英微細粒・超微細粒非常に多量。白色微細粒少量。密	良	ヨコ羽状文 ミガキか	ハケ→雑なミガキ ミガキ	内外面摩滅
14	—	7a区2検-1	7a	第3水田	埋土	1~14	弥生中期後半	弥生土器	甕	体部	—	—	—	—	—	39	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	白・赤色・石英超微細粒多量。粗	良	ナデ 櫛描波状文	ナデ	僅かに摩滅
15	—	4a区4検-1	3b・4a	—	4面	1	弥生後期前半	弥生土器	甕	口縁~頸部	口1/8未満	<17.8>	—	(3.5)	—	11	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR8/3 浅黄橙	赤・石英微細粒や超微細粒多量。密	良	ナデ 櫛描簾状文(4本) 櫛描波状文	ナデ	内外面摩滅著しい

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
16	—	5b区拡張13層-1	5b	—	13層	—	弥生後期	弥生土器	鉢または高坏	口縁部	口1/8未満	<15.5>	—	(2.8)	—	7	2.5YR4/6赤褐	2.5YR5/6明赤褐	白・黒色・石英微細粒多量。粗	良	ミガキ(赤彩)	ミガキ(赤彩)	内外面摩滅
17	PL27	5b区1T14層-1	5b	—	14層	—	弥生	弥生土器	壺	口縁部	口1/8未満	<13.8>	—	(4.1)	—	18	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR6/4にぶい橙	白・赤・黒・石英微細粒や超微細粒多量。粗	良	口縁折り返しの跡 ミガキ	ミガキ	内外面摩滅著しい
18	PL27	5b区拡張12b層-2	5b	—	12b層	—	弥生中期後半	弥生土器	甕	口縁~頸部	口1/8未満	<12.0>	—	(3.4)	—	8	10YR5/2灰黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	白色・石英超微細粒非常に多量。やや粗	良	ナデ 櫛描簾状文 櫛描波状	ミガキ	内外面摩滅著しい
19	PL27	5b区拡張12b層-1	5b	—	12b層	—	弥生中期後半	弥生土器	甕	口縁~体部	口1/8未満	<19.0>	—	(8.2)	—	40	7.5YR8/2灰白	7.5YR8/3浅黄橙	赤・黒微細粒非常に多量。白色微細粒少量。非常に粗。	良	ナデ 櫛描簾状文 タテ羽状文	ミガキ	内外面摩滅著しい
20	PL27	5b区拡張11層-1	5b	—	11層	—	弥生中期後半	弥生土器	甕	口縁~体部	口1/8	<16.4>	—	(7.8)	—	39	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	赤色微細粒・超微細粒多量。白色・石英超微細粒微量。密	良	縄文 櫛描簾状文 ハケのち羽状文	ミガキ ハケ 弱いミガキ	内外面摩滅
21	—	5b区4T7b層-1	5b	—	7b層	—	弥生中期後半	弥生土器	壺	体部	—	—	—	—	—	29	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	白色・石英超微細粒多量。やや粗	良	沈線 縄文	ナデか	内外面摩滅
22	PL27	2区4検-1	2	—	4面北壁	—	弥生後期前半	弥生土器	壺	体部	—	—	—	(12.1)	—	545	7.5YR5/6明褐	7.5YR8/2灰白	白・赤色・石英微細粒や2~3mm大粒非常に多量。非常に粗	やや不良	鋸歯文	—	吉田 内外面摩滅
23	PL27	SD187-1	9	SD187	埋土	—	弥生後期	弥生土器	甕	頸~体部	—	—	—	(5.0)	—	14	10YR2/1黒	10YR7/2にぶい黄橙	石英微細粒・1~2mm大石英粒多量。やや粗	良	櫛描簾状文(8本) 櫛描波状文	ミガキ	内外面摩滅
24	—	SC061-2	7b・8	SC061	埋土	210	弥生後期	弥生土器 土師器	壺	腰部	—	—	—	—	—	9	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR8/4浅黄橙	白・赤・黒色・石英微細粒多量。非常に粗	良	—	剥落	内外面摩滅著しい
25	—	SC061-1	7b・8	SC061	埋土	203、205、207、208	弥生後期	弥生土器	甕	頸~体部	—	—	—	(7.3)	—	170	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	白色・石英微細粒多量。やや粗	良	ナデ 櫛描波状文	ミガキ	内外面摩滅
26	—	SC065-1	7b・8	SC065	埋土	—	弥生後期	弥生土器	甕	頸部	—	—	—	—	—	23	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	白色・石英微細粒・超微細粒非常に多量。粗	良	櫛描簾状文 剥離不明	ミガキ ハケ ミガキ	内外面摩滅著しい
27	PL27	SX002底面-2	9	SX002	埋土	—	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	口1/8	<23.6>	—	(4.7)	—	94	5YR7/4にぶい橙	5YR8/3淡橙	1~5mm大白・赤色・石英細粒や微細粒非常に多量。非常に粗	良	—	—	赤彩か 内外面摩滅著しい
28	PL27	SX002底面-1	9	SX002	埋土	—	弥生後期	弥生土器	甕	口縁~頸部	口1/8	<31.7>	—	(7.6)	—	68	10YR6/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	白色・石英微細粒非常に多量。粗	良	ナデ ハケのち櫛描波状文 櫛描簾状文	ミガキ	赤彩か 内外面摩滅著しい
29	—	SX002-1	9	SX002	埋土	226	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	口1/8	—	—	—	—	51	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	白色・石英微細粒や白色超微細粒多量。密	良	櫛描波状文	ハケのちヨコミガキ	内外面摩滅著しい
30	PL27	SD086-1	1	SD086	埋土	—	弥生後期	弥生土器	高坏	坏底~脚部	底1/8	—	<9.8>	(9.9)	—	134	赤彩:10R4/8赤 7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR7/6橙	1mm前後白色粒多量。やや粗	良	ミガキ(赤彩)	ナデ	
31	PL27	1a区3検-1	1	—	3面	—	弥生後期	弥生土器	高坏	接合部	—	—	—	(2.2)	—	71	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR4/6赤褐	1mm以下白色粒多量。1mm程度の石英少量。粗	良	ミガキ(赤彩)	ミガキ(赤彩) 剥離	内外面摩滅

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
32	PL27	1a区2検-1	1	—	2面	—	弥生後期	弥生土器	高坏	接合~脚部	—	—	—	(6.7)	—	133	2.5YR4/6赤褐	2.5YR5/6明赤褐 2.5YR2/1赤黒	1mm以下・2~5mm程度の白色粒・黒色粒・赤色粒多量。1mm以下石英微量。	良	ミガキ(赤彩)	ミガキ(赤彩) ミガキ(黒色化)	内外面摩滅
33	—	1区5検-1	1	—	5面	—	弥生後期	弥生土器	高坏	脚部	底1/8未満	<18.6>	—	(9.0)	—	50	7.5YR5/1褐灰	7.5YR7/4にぶい橙	1mm以下白色粒多量。赤色粒・石英粒中量。非常に粗	良	ナデ	ナデ	内外面摩滅著しい
34	PL27	1区西Z-1	1西	Z	—	—	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁~体部	口1/8	<15.7>	—	(4.8)	<16.0>	20	5YR7/8橙	5YR4/8赤褐	白・赤色石英微細粒非常に多量。非常に粗	良	ミガキ	ミガキ(赤彩)	内外面摩滅著しい
35	—	9区2検2T拡張-1	9	2トレンチ	2面	—	弥生後期	弥生土器	甕	頸部	—	—	—	—	—	5	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	石英微細粒・超微細粒多量。密	良	櫛描波状文 櫛描簾状文	ミガキ	内外面摩滅
36	—	1a区4検-1	1	—	4面	—	弥生~古墳か	弥生土器・土師器	壺	底部	底3/8	—	<8.0>	(2.6)	—	110	10YR7/2にぶい黄橙	10YR8/2灰白	1mm以下白色粒・赤色粒多量。粗	良	ナデ	ナデ	内外面摩滅
37	—	5b区1~2T 7b層-1	5b	—	7b層	—	弥生~古墳か	弥生土器・土師器	壺	底部	底2/8	—	<10.0>	(2.9)	—	125	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR5/6明褐	赤色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。3~5mm大石英粒少量。非常に粗	良	ナデか	ハケ ナデか(剥離)	内外面摩滅 弥生後期前半か
38	PL28	1d区5検-1	1	—	5面	—	弥生~古墳か	弥生土器・土師器	高坏	接合~脚部	—	—	—	(6.8)	—	73	5YR6/6橙	5YR7/6橙	1mm以下の白色粒・赤色粒・石英多量。2~4mm白色粒・石英少量	良	ミガキ	ミガキ ナデか(剥離)	内外面摩滅著しい 赤彩か
39	—	3b区3検-3	3b・4a	SC038	3面	4~9、11、13	古墳前期	土師器	甕	口縁~底部	口3/8底8/8	<13..0>	5.6	22.0	<22.4>	895	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR5/2灰褐	白・赤・黒色・石英の微細粒や超微細粒非常に多量。密	良	ナデ ミガキ ナデ	ナデか 輪積痕	内外面摩滅
40	—	3b区3検-1	3b・4a	SC038	3面	1	古墳前期	土師器	甕	口縁~頸部	口2/8	<17.6>	—	(5.8)	—	343	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	白・赤色・石英微細粒非常に多量。粗	良	回転ナデ	回転ナデ	内外面摩滅著しい
41	PL28	3b区3検-2	3b・4a	SC038	3面	2、3、12、15	古墳前期	土師器	甕	体~底部	底8/8	—	2.8	(7.1)	—	138	7.5YR4/2灰褐	7.5YR4/2灰褐	白・黒色・石英微細粒非常に多量。石英超微細粒混。非常に粗	良	ケズリのちミガキ	ミガキ	内外面摩滅著しい
42	PL28	SK547-1	3b・4a	SK547	埋土	1	古墳前期	土師器	小型壺	口縁~体部	口3/8	<9.1>	—	(12.4)	<12.8>	151	10YR5/3にぶい黄	10YR5/1褐灰	1mm以下白色粒多量。粗	良	(ハケ→ナデ) ヘラケズリ	ハケ→ナデ 下半:ナデ	外面摩滅
43	PL28	SK549-1	3b・4a	SK549	埋土	—	古墳前期	土師器	高坏	脚部	—	—	—	(7.2)	—	112	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	1mm以下白色粒多量。密	良	ミガキ	ナデ	内外面摩滅
44	—	SK565-2	3b・4a	SK565	埋土	—	古墳前期	土師器	甕	口縁部	口1/8未満	<13.0>	—	(2.7)	—	12	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	1mm以下赤色粒多量・白色粒少量・1mm前後石英少量。粗	やや不良	ナデ	ナデ	内外面摩滅
45	—	3b・4a区1検-1	3b・4a	—	1面	—	古墳前期	土師器	甕	口縁~頸部	口3/8	<14.6>	—	(5.1)	—	146	7.5YR5/6明褐	7.5YR7/4にぶい橙	白色微細粒非常に多量。石英微細粒微量。粗	良	回転ナデ	回転ナデ	内外面摩滅著しい
46	PL28	4a区2検-1	3b・4a	—	2面	1	古墳前期	土師器	小型丸底	頸~底部	底8/8	—	—	(6.9)	9.0	140	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	白・赤・黒色・石英微細粒や超微細粒多	良	ミガキ	ナデおよびオサエ 輪積痕	内外面摩滅
47	—	4a区3検-2	3b・4a	—	3面	No.A	古墳前期	土師器	高坏	脚~裾部	底1/8	—	<12.0>	—	—	85	2.5YR6/8橙	2.5YR6/8橙	白・黒色微細粒微量。密	良	—	ナデ 輪積痕	図面合成 内外面摩滅著しい
48	—	4a区3検-1	3b・4a	—	3面	—	古墳前期	土師器	小型丸底	口縁~頸部	口1/8	<12.0>	—	(4.4)	—	18	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR5/6明褐	白色・石英微細粒や超微細粒多量。密	良	—	ミガキ	内外面摩滅 外面著しい

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
49	—	8区1検-1	7b・8	—	1面	—	古墳前期	土師器	小型壺	口縁部	口7/8	9.2	—	—	—	288	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	白・赤色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。粗	良	ミガキ	輪積痕 ミガキ ナデ	内外面摩滅著しい 8区1検-2と同一
49	—	8区1検-2	7b・8	—	1面南東	—	古墳前期	土師器	小型壺	体部	—	—	—	—	—	125	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	白・赤色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。粗	良	ミガキ	輪積痕 ミガキ ナデ	内外面摩滅著しい 8区1検-1と同一
50	PL28	9区1検-3	9	—	1面	9	古墳前期	土師器	小型丸底	体~底部	底8/8	—	—	(5.2)	(8.2)	115(石膏込み)	5YR5/6明赤褐	5YR4/1褐灰	白色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。非常に粗	良	ミガキ	ナデ(剥離) 輪積痕	内外面摩滅著しい
51	—	9区1検7a層-4	9	—	1面7a層北東	—	古墳前期	土師器	小型丸底	口縁~体部	口2/8	<8.9>	—	(5.0)	<9.0>	15	10YR6/2灰黄褐	10YR5/1褐灰	2~3mm大白色粒・微細粒非常に多量。石英微細粒少量。非常に粗	良	ミガキ	ナデ	内外面摩滅著しい
52	—	9区1検7a層-3	9	—	1面7a層北東	—	古墳前期	土師器	小型丸底	口縁~体部	—	—	—	(7.4)	—	69	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	白・赤色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。非常に粗	良	ミガキ	ナデ 輪積痕	内外面摩滅著しい
53	—	9区1検7a層-2	9	—	1面7a層	6	古墳前期	土師器	高坏	接合~脚部	—	—	—	(4.1)	—	66.0	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	白色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。非常に粗	良	—	脚:しぼり痕 輪積痕 ナデ	内外面摩滅著しい
54	—	9区1検-1	9	—	1面	12	古墳前期	土師器	壺	口縁部	口2/8	<15.7>	—	(4.2)	—	223	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	白色2~3mm大粒・微細粒・超微細粒や石英超微細粒非常に多量。非常に粗	良	ミガキ 口縁折り返しの跡	—	内外面摩滅著しい
55	—	9区1検7a層-1	9	—	1面7a層北東	—	古墳前期	土師器	甕	口縁~体部	口1/8	<16.6>	—	(5.8)	—	24	10YR6/3にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	白色・石英超微細粒非常に多量。赤色超微細粒微量。非常に粗	良	ナデ ミガキ	ナデ	内外面摩滅著しい
56	PL28	SX002-16	9	SX002	埋土	229	古墳前期	土師器	高坏	脚部	—	—	—	(4.3)	—	48	5YR8/3淡橙	5YR2/1黒褐	白・赤色・石英微細粒や3mm大白色粒非常に多量。非常に粗	良	ミガキ	輪積痕 しぼり痕	内外面摩滅著しい
57	PL28	SX002-17	9	SX002	埋土	248	古墳前期	土師器	高坏	脚部	—	—	—	(8.5)	—	151	10YR7/3にぶい黄	10YR6/3にぶい黄	白・黒色・石英超微細粒非常に多量。密	良	ミガキ	しぼり痕 ナデ	外面磨耗著しい
58	—	SX002-7	9	SX002	埋土	201	古墳前期	土師器	高坏	脚部	底1/8	—	<14.0>	(6.3)	—	31	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	白・赤色超微細粒多量。石英超微細粒少量。やや粗	良	ミガキ	しぼり痕 ミガキ	内外面摩滅著しい
59	PL28	SX002-2	9	SX002	埋土	202	古墳前期	土師器	小型丸底	体~底部	底8/8	—	—	(3.5)	<8.2>	50	2.5Y2/1黒	7.5Y3/1黒褐	白色微細粒・超微細粒や石英微細粒・細粒多量。非常に粗	良	ミガキか	ナデ 輪積痕	内外面摩滅著しい
60	PL28	SX002-14	9	SX002	埋土	242	古墳前期	土師器	小型丸底	頸~底部	底8/8	—	—	(6.3)	(9.2)	139	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR4/1褐灰	白・赤・黒色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。粗	良	ミガキ	ナデ 輪積痕	内外面摩滅著しい
61	—	SX002-3	9	SX002	埋土	207	古墳前期	土師器	小型丸底	頸~底部	底8/8	—	—	(6.8)	9.0	105	10YR7/4にぶい黄	10YR5/3にぶい黄	白色・石英超微細粒多量。密	良	ハケか 下半:ケズリか	ナデ 輪積痕	内外面摩滅著しい
62	PL28	SX002-15	9	SX002	埋土	249	古墳前期	土師器	小型丸底	頸~底部	底8/8	—	—	(7.2)	(9.8)	181	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR2/1黒	白・赤・黒色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。粗	良	ミガキ ハケのちミガキ	ナデ 輪積痕	外面摩滅著しい
63	—	SX002-4	9	SX002	埋土	209	古墳前期	土師器	小型丸底	口縁~体部	口1/8	<8.2>	—	(5.8)	—	73	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR4/1褐灰	白色・石英超微細粒多量。密	良	ミガキ	ナデ	内外面摩滅著しい
64	—	SX002-5	9	SX002	埋土	212、223	古墳前期	土師器	小型丸底	口縁~体部	口2/8	<7.8>	—	(9.0)	<9.8>	83	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	白・赤・黒色・石英微細粒や超微細粒多	良	ナデ ハケ	ナデ 輪積痕	内外面摩滅著しい

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
65	PL28	SX002-9	9	SX002	埋土	204、207、212、213、215、220、底面	古墳前期	土師器	小型壺	頸~体部	—	—	—	(11.1)	<16.2>	168	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	白・赤・黒色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。粗	良	ミガキ	ナデ 輪積痕	内外面摩滅著しい
66	—	SX002-8	9	SX002	埋土	205、211~213、232、233、底面	古墳前期	土師器	小型壺	口縁~体・底部	口6/8	12.7	—	(15.4)	<14.4>	312	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	白・赤・黒色・石英微細粒や超微細粒多量。やや粗	良	ナデ ハケ→ミガキ 手持ヘラケズリ→ミガキ	ナナメミガキ→弧状ミガキ ナデ 輪積痕	内外面摩滅著しい
67	PL28	SX002-6	9	SX002	埋土	208、243、245、250	古墳前期	土師器	小型壺	口縁~頸部	口7/8	12.8	—	(5.1)	—	93	5YR7/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	白色・石英超微細粒混。密	良	ミガキ	ミガキ	内外面わずか摩滅
68	PL28	SX002-10	9	SX002	埋土	206、210、230、底面	古墳前期	土師器	甕	体~底部	底8/8	—	5.4	(4.5)	—	162	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR4/1褐灰	白色微細粒・超微細粒や石英超微細粒多量。赤・黒色微細粒少量。やや粗	良	ミガキ	ハケ ナデ	内外面摩滅著しい
69	PL28	SX002-11	9	SX002	埋土	213~219、221、222、241、251、底面	古墳前期	土師器	甕	体部	—	—	—	(17.1)	<25.6>	764	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR3/2黒褐	白色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。密	良	ナナメハケ 下半:ナナメハケ→タテハケ	ハケのちナデ 輪積痕	内外面摩滅 外面2次焼成 煤多く付着
70	—	SX002-13	9	SX002	埋土	208	古墳前期	土師器	壺	頸~体部	—	—	—	(8.1)	—	162	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR2/1黒	白・赤・黒色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。粗	良	ナナメミガキ	ナナメミガキ→ヨコミガキ	内外面摩滅 外面炭化物付着
71	—	SX002-12	9	SX002	埋土	203	古墳前期	土師器	壺	体部	—	—	—	(9.8)	—	103	10YR2/1黒	10YR4/1褐灰	白・赤色・石英超微細粒多量。密	良	ミガキ	ナデ ハケ	外面2次焼成残る
72	—	5b区1~4T 7b層-2	5b	1~4トレンチ	7b層	—	古墳前期	土師器	高坏	体~接合部	—	—	—	(3.2)	—	36	5YR6/6橙	5YR6/6橙	白色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。赤色超微細粒少量。やや粗	良	—	ミガキ	内外面摩滅著しい
73	PL28	5b区2検-1	5b	—	2面	—	古墳前期	土師器	高坏	脚部	—	—	—	(6.1)	—	96	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	白・黒色・石英微細粒非常に多量。3~5mm大白・黒色・石英粒少量。非常に粗	良	ミガキ	脚:ナデ(しぼり痕) 輪積痕 ナデ	内外面摩滅著しい 穿孔
74	—	5b区1~4T 7b層-1	5b	1~4トレンチ	7b層	—	古墳前期	土師器	高坏	脚部	—	—	—	(7.3)	—	120	5YR7/6橙	5YR6/6橙	赤色微細粒・超微細粒非常に多量。白色・石英微細粒や超微細粒多量。密	良	ミガキ	しぼり痕 ナデ 輪積痕	内外面摩滅
75	—	5b区1~2T 7b層-4	5b	1~2トレンチ	7b層	—	古墳前期	土師器	高坏	脚部	—	—	—	(9.6)	—	188	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR7/3にぶい橙	白・赤・黒色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。粗	良	ミガキ	しぼり痕 ナデ 輪積痕	内外面摩滅
76	—	5b区1~4T 7b層-3	5b	1~4トレンチ	7b層	—	古墳前期	土師器	鉢か	底部	底8/8	—	5.6	(2.4)	—	77	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	白色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。非常に粗	良	ミガキか ナデか	ナデ	内外面摩滅著しい
77	—	5b区1~2T 7b層-3	5b	1~2トレンチ	7b層	—	古墳前期	土師器	壺	口縁部	口1/8	<12.2>	—	(2.4)	—	19	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR8/4浅黄橙	白・赤・黒色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。非常に粗	良	ナデ ミガキか	ナデか	内外面摩滅著しい
78	—	5b区1~2T 7b層-2	5b	1~2トレンチ	7b層	—	古墳前期	土師器	壺	口縁~頸部	口1/8	<27.8>	—	(6.0)	—	97	5YR6/6橙	5YR2/1黒褐	白・黒色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。3mm大石英粒混。非常に粗	良	ミガキか	ミガキか	内外面摩滅著しい

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
79	—	1区5検-2	1	—	5面	—	古墳前期	土師器	高坏	接合部	—	—	—	(1.4)	—	11	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	1mm以下赤色粒多量。白色粒少量。雲母・石英粒微量。少々粗	良	ナデ	ナデ	内外面摩滅著しい
80	—	1a区3検-2	1	—	3面	—	古墳前期	土師器	高坏	口縁~体部	口1/8未満	<14.8>	—	(3.9)	—	29	7.5YR7/2明褐灰	7.5YR8/2灰白	1mm以下白色粒・石英少量。密	やや不良	ナナメミガキ	—	内底煤付着 内面摩滅
81	—	1a区2検-2	1	—	2面	—	古墳前期	土師器	甕	口縁~頸部	口1/8	<17.6>	—	(5.8)	—	178	7.5YR6/6橙	7.5YR5/8明褐	1mm以下白色粒・黒色粒・赤色粒多量。石英微量。非常に粗	やや不良	—	—	内外面摩滅
82	—	1d区5検-2	1	—	5面	—	古墳前期	土師器	甕	口縁~体部	口1/8未満	<19.6>	—	(6.4)	—	163	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	白色粒超微細・微細粒多量。1mm以下石英少量。密	良	ナデ ハケメ	ミガキ ケズリ ナナメハケ→雑ミガキ	内外面摩滅
83	—	2区3検-1	2	—	3面	—	古墳前期	土師器	高坏	脚~裾部	裾2/8	—	<12.0>	(2.4)	—	35	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	黒色・赤色超微細粒多量。白色・石英超微細粒少量。密	良	ミガキ	ナデ	内外面摩滅
84	—	2区3検-2	2	—	3面	1	古墳前期	土師器	器台	口縁~接合部	口2/8	<8.4>	—	(3.4)	—	79	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	白色・赤色・黒色・石英超微細粒混	良	ナデか	ミガキ	内外面摩滅
85	—	3a区3検-1	3a	—	3面	—	古墳前期	土師器	壺	底部	底1/8	—	<5.6>	(2.8)	—	56	7.5YR7/6橙	7.5YR8/3浅黄橙	白・赤・黒色微細粒非常に多量。石英微細粒少量。非常に粗	良	ハケのちナデか 底不明	ナデ	内外面摩滅著しい
86	—	3a区2検-1	3a	—	2面	—	古墳前期	土師器	甕	口縁~頸部	口2/8	<11.7>	—	(3.2)	—	49	7.5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	白・赤・黒色微細粒や2mm大粒非常に多量。粗	良	ナデ タテハケ	ナデ	内外面摩滅著しい
87	—	4b区1検-1	4b	—	1面	—	古墳前期	土師器	小型壺	口縁~体部	口1/8	<11.6>	—	—	<14.2>	116	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR8/3浅黄橙	白・赤色・石英微細粒非常に多量。粗	良	ミガキ	ミガキ 輪積痕	内外面摩滅著しい
88	—	SC058-1	11b	SC058	埋土	115	古墳前期	土師器	壺	頸~体部	—	—	—	(4.1)	—	51	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	赤色微細粒多量。白色・石英微細粒少量。密	良	ナデ 剥離	回転ナデ	内外面摩滅
89	PL28	SC090-1	11c	SC090	埋土	—	古墳前期	土師器	小型丸底	頸~底部	—	—	—	(5.0)	8.5	55	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	白・赤色・石英超微細粒多量。3mm大白色粒混。密	良	ミガキか	ナデ	内外面摩滅著しい
90	—	SD100(5検)-3	1	SD100	埋土	—	古墳前期末	土師器	坏か	口縁~体部	口1/8未満	<11.6>	—	(3.1)	<11.8>	5	2.5YR6/8橙	2.5YR6/3にぶい橙	1mm以下白色粒多量。粗	良	ミガキ	ミガキ	内外面摩滅
91	PL29	SD100(5検)-4	1	SD100	埋土	—	古墳前期末	黒色土器	坏	口縁~底部	口2/8底2/8	<17.0>	<7.0>	9.0	<17.4>	184	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR2/1黒	1mm以下白色粒多量。少々粗	やや不良	ミガキ 丸底	ミガキ(黒色処理)	外面摩滅
92	PL29	SD100(3検)-1	1	SD100	埋土	—	古墳前期末	土師器	高坏	接合~脚部	—	—	—	(6.8)	—	151	2.5YR6/6橙	2.5YR8/6橙	1mm以下白色粒多量。密	良	ハケ→ミガキ	ナデ 輪積痕	内外面摩滅著しい
93	—	SD100(5検)-2	1	SD100	埋土	—	古墳前期末	土師器	小型壺	体部	—	—	—	(8.0)	<13.3>	50	5YR7/4にぶい橙	5YR7/6橙	1mm以下白色粒微量。緻密	良	ミガキ	ナデ	
94	—	SD100(5検)-1	1	SD100	埋土	—	古墳前期末	土師器	壺	口縁~頸部	口1/8	<12.4>	—	(4.7)	—	41	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	1mm前後白色粒・1mm以下赤色粒多量。石英粒少量。少々粗	良	ナデ ミガキ	ミガキ	内外面摩滅
95	—	SD100(3検)-3	1	SD100	埋土	—	古墳中・後期～奈良	須恵器	甕	体部	—	—	—	—	—	30	7.5Y6/1灰	N-6灰	1mm以下白色粒少量。緻密	良	タタキ目 自然釉	—	非常に硬質
96	—	1区西SD025-1	1西	SD025	埋土	—	飛鳥	須恵器	蓋坏蓋	体部	—	—	—	(1.8)	—	3	N-5灰	N-7灰	1mm以下白色粒多量。密	良	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	外面摩滅
97	PL29	SD085-1	1	SD085	埋土	—	飛鳥	須恵器	壺	口縁~頸部	口1/8未満	—	—	(6.1)	—	39	7.5Y4/3暗ｵﾘｰﾌﾞ	7.5Y5/1灰	1mm以下白色粒多量。密	良	ロクロナデ ルリ釉(自然釉)	ロクロナデ	

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
98	—	SD127-1	1西	SD127	埋土	—	飛鳥・奈良	黒色土器	坏	口縁~体部	口1/8未満	<12.5>	—	(3.5)	<12.7>	12	7.5YR6/6橙	7.5YR2/1黒	1mm以下雲母多量。少々粗	良	ナデ	ミガキ(黒色処理)	
99	—	4b区東Z-1	4b東	Z	—	—	飛鳥・奈良	黒色土器	高坏	脚~裾部	底1/8未満	—	<11.4>	(7.2)	—	117	5YR7/6橙	5YR2/1黒褐	白色・石英微細粒多量。密	良	ミガキ	坏:ミガキ(黒色処理) 脚:ナデ ヨコミガキ	内面摩滅
100	PL29	SD009(SD017)-1	1	SD017	埋土	—	飛鳥・奈良	須恵器	高坏	脚部	底2/8	—	<18.0>	(7.1)	—	67	5YR4/1褐灰	5YR5/1褐灰	1mm以下砂少量・白色粒多量。密	良・やや酸化炎焼成	ロクロナデ スカシ 沈線	ロクロナデ	
101	—	SD066-2	4c	SD066	埋土北	2	平安前期か	須恵器	坏A	体~底部	底2/8	—	<6.0>	(3.4)	—	19	N-8灰白	N-8灰白	1mm以下白色粒中量。少々粗	やや不良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	内外面摩滅
102	PL29	SD066-1	4c	SD066	埋土	1-1~1-4	奈良	須恵器	坏A	口縁~底部	口4/8底8/8	13.5	8.8	3.9	13.7	155	N-7灰白	N-7灰白	1mm以下白色粒。密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	内面に重ね焼きの痕跡 外面に重ね焼きの火襷痕
103	—	SD142-1	7a	SD142	埋土	—	奈良・平安	須恵器	坏A	口縁~体部	口1/8	<12.8>	—	(2.9)	<13.2>	13	N-6灰	N-6灰	1mm以下白色粒中量。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
104	PL29	SD142-2	7a	SD142	埋土	—	奈良または平安後期か	土師器	坏	口縁~底部	口1/8底2/8	<12.6>	<5.8>	(5.8)	<12.8>	57	2.5YR6/8橙	2.5YR6/8橙	1mm以下白色粒・赤色粒多量。石英微量。非常に粗	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	内外面摩滅 被熱で歪む
105	PL29	SD169-4	7b・8,9	SD169	埋土	—	奈良	須恵器	蓋	つまみ~口縁部	口2/8	<16.4>	—	2.9	<16.6>	169	N-5灰	N-6灰	1mm以下白色粒多量。密	良	ロクロナデ ケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	
106	—	SD169-2	7b・8,9	SD169	埋土	—	奈良	須恵器	坏A	体~底部	底1/8	—	<6.8>	(1.9)	—	20	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙	2mm以下白色粒中量。密	良	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	内外面赤焼
107	—	SD169-1	7b・8,9	SD169	埋土	—	奈良	須恵器	坏A	体~底部	底1/8未満	—	<12.0>	(1.1)	—	14	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	1mm以下白色粒中量。密	良	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	外面赤焼
108	—	SD169-7	7b・8,9	SD169	埋土上層	—	奈良	須恵器	坏B	体~底部	底1/8	—	<10.0>	(1.6)	—	21	N-7灰白	N-7灰白	1mm前後白色粒多量。密	良	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	
109	—	SD169-3	7b・8,9	SD169	埋土	—	奈良	黒色土器	坏	口縁・体~底部	口1/8未満底1/8未満	<12.4>	<3.0>	(3.7)	<12.7>	30	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR2/1黒	1mm以下白色粒・雲母多量。1mm以下と5mm程度赤色粒微量。粗	良	非ロクロ	ミガキ(黒色処理)	
110	PL29	SD169-6	7b・8,9	SD169	埋土	—	奈良	黒色土器	坏A	口縁~底部	口3/8底8/8	<14.5>	7.0	5.5	<14.8>	119	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR2/1黒	1mm以下赤色粒多量。密	良	ロクロナデ 底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	内外面摩滅
111	PL29	SD169-5	7b・8,9	SD169	埋土	—	奈良	須恵器	盤	口縁~底部	口1/8底3/8	<18.5>	<10.8>	3.1	<18.8>	85	10YR5/1褐灰	10YR7/4にぶい黄橙	1mm前後黄(茶)白色系粒多量。1mm以下白色粒微量。密	良	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	
112	PL29	SD169-8	7b・8,9	SD169	埋土上層	—	奈良・平安	須恵器	甕	底部か	—	—	—	—	—	602	N-5灰	N-5灰	1mm以下白色粒多量。密	良	—	—	蓋融着
113	PL29	SD170-4	7b・8	SD170	埋土	—	奈良	須恵器	坏A	口縁~底部	口4/8底5/8	12.8	7.8	4.3	13.2	120	2.5YR6/6橙	2.5YR6/8橙	1mm以下白色粒少量。密	良	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ 漆付着	内外面赤焼
114	—	SD170-2	7b・8	SD170	埋土	—	奈良	須恵器	坏B	口縁~体部	口2/8	<14.0>	—	(2.7)	<14.2>	14	7.5YR5/1褐灰	7.5YR6/3にぶい褐	1mm以下白色粒中量。1mm程度赤色粒微量。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面赤焼
115	—	SD170-1	7b・8	SD170	埋土	—	飛鳥・奈良	黒色土器	坏	口縁~体部	口1/8	<12.7>	—	(3.0)	<13.0>	11	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR2/1黒	1mm以下白色粒・赤色粒多量。少々粗	良	ナデ	ミガキ(黒色処理) 剥離	内外面摩滅
116	—	SD170-3	7b・8	SD170	埋土	—	奈良	須恵器	長頸壺	口縁~頸部	口2/8	<11.5>	—	(6.8)	—	127	N-6灰	N-6灰	1mm以下白色粒多量。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
117	—	SD045-1	2	SC001	埋土	—	奈良	須恵器	坏Bか	口縁~体部	口1/8未満	<17.2>	—	(3.2)	<17.2>	16	5YR5/3にぶい赤	5YR5/4にぶい赤	1mm以下白色粒少量。緻密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
118	PL29	SC058-2	11b	SC058	埋土	102	奈良	須恵器	坏A	口縁~底部	口7/8底8/8	13.2	6.5	4.6	13.4	209(石膏込み)	N-7灰白	N-7灰白	白色微細粒多量。石英微細粒微量。緻密	良	ロクロナデ ヘラ切りか→板状圧痕→ナデ	ロクロナデ	内外面摩滅
119	—	1区北1検-1	1北	—	1面	—	奈良・平安	須恵器	壺	体~底部	底1/8	—	<12.6>	(4.1)	—	89	2.5YR5/2灰赤	2.5YR6/4にぶい橙	白・黒微細粒混。密	良	ロクロナデ 回転ヘラケズリナデ	ロクロナデ	内外面摩滅
120	—	1a区Z-1	1	Z	—	—	奈良・平安	須恵器	坏A	体~底部	底2/8	—	<7.4>	(1.9)	—	40	5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	1mm以下~2mm程度の白色粒多量。密	良	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	内外面摩滅
121	—	5b区1~4T 7b層-5	5b	1~4トレンチ	7b層	—	奈良	須恵器	坏A	口縁~体部	口1/8未満	<13.7>	—	(3.2)	<14.0>	9	N-7灰白	N-7灰白	白色微細粒・超微細粒少量。緻密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
122	—	5b区1~4T 7b層-4	5b	1~4トレンチ	7b層	—	奈良	須恵器	皿	体~底部	底1/8	—	<14.0>	(2.1)	—	20	5Y6/1灰	5Y6/1灰	白色微細粒・超微細粒多量。やや粗	良	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
123	—	7区1検南西-1	7a	—	1面南西	—	奈良	須恵器	甕E	口縁~体部	口1/8	<18.6>	—	(4.8)	<19.0>	42	N-7灰白	N-5灰	白色微細粒・2mm大白色粒微量。非常に密	良	平行タタキ	ロクロナデ	
124	PL29	7b・8区北壁-1	7b・8	—	北壁	1	奈良	須恵器	蓋	体~口縁部	口1/8	口縁<19.2>	—	(2.4)	<19.4>	44	N-6灰	N-6灰	白色微細粒・2~5mm大粒(礫)混。やや粗	良	ロクロナデ(時計回り) 回転ヘラケズリ(左回り)	ロクロナデ	
125	—	7b・8区北壁-2	7b・8	—	北壁	2	奈良	須恵器	坏B	口縁~体部	口1/8未満	<16.8>	—	(5.3)	<17.0>	18	N-5灰	N-5灰	白色微細粒多量。やや粗	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
126	PL29	9区1検-2	9	—	1面北東、北	—	奈良	須恵器	坏A	口縁~底部	口1/8底2/8	<13.2>	<8.2>	4.0	<13.3>	65	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	白・赤色微細粒・超微細粒多量。非常に密	やや不良	ロクロナデ ヘラ切り(ヘラオコシ)	ロクロナデ	(ロクロ反時計回り) 内外面赤焼
127	PL29	9区1検6層-1	9	—	1面6層	5、7	奈良	須恵器	甕E	口縁~体部	口1/8未	<25.9>	—	(21.2)	<29.5>	602	5YR4/2灰褐	5YR4/1褐灰	1~2mm大白・黒色粒砂や3~5mm大白色粒小礫少量	良	①タタキ(平行)正位(右→左、下→上)(タテ列多)②ロクロナデ③逆位タタキ	ロクロナデ ナデ	
128	—	11b区1検6層-1	11b	—	1面6層上面	—	奈良	須恵器	坏A	体~底部	底1/8未満	—	<6.6>	(0.7)	—	8	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	白色超微細粒少量。5mm以上白・黒色礫混。粗	良	ロクロナデ 回転糸切のちナデ	剥離不明	内外面摩滅
129	PL30	9区南壁-1	9	—	南壁	1	平安前期	須恵器	坏A	口縁~底部	口6/8底8/8	13.5	5.8	3.9	13.8	143(石膏込み)	N-7灰白	N-7灰白	白色微細粒・超微細粒多量。緻密	良	ロクロナデ 回転糸切(ロクロ反時計回り)	ロクロナデ 平滑	内外面摩滅
130	—	11c区平安砂層-1	11c	—	5c-2層	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~体部	口1/8未満	<12.6>	—	(3.4)	<12.8>	6	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	白色微細粒・超微細粒多量。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面摩滅
131	—	SD152-1	11b	SD152	埋土	—	平安前期	黒色土器	坏A	口縁部・底部	口1/8底4/8	<15.0>	<5.0>	(5.6)	<15.4>	43	2.5Y8/2灰白	2.5Y2/1黒	1mm以下赤色粒多量	良	—	ミガキ	内外面摩滅
132	—	SD152-2	11b	SD152	埋土	—	平安前期	黒色土器	坏A	口縁~体部体~底部	口1/8底8/8	<13.4>	4.7	(4.8)	<13.8>	43	7.5YR7/6橙	7.5YR8/3浅黄橙	1mm以下赤色粒多量。密	良	回転糸切か	(黒色処理か)	内外面摩滅
133	—	10区1検6層-1	10	—	1面6層	—	奈良・平安	須恵器	坏B	口縁~底部	口1/8底1/8	<13.2>	<8.2>	3.4	<13.4>	13	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR6/3にぶい褐	白色微細粒多量。緻密	良	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	内外面摩滅

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
134	—	10区1検6層-2	10	—	1面6層	—	平安前期	土師器・黒色土器	埦	底部	底1/8未満	—	<6.6>	(1.9)	—	18	5YR7/6橙	5YR7/6橙	白・赤色・石英微細粒や超微細粒非常に多量。非常に粗	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面摩滅
135	—	11b区1検6層-2	11b	—	1面6層	—	平安前期	黒色土器	坏A	口縁~体部	口1/8	<11.9>	—	(3.0)	<12.0>	14	10YR2/1黒	10YR5/1褐灰	白色微細粒や白色・石英超微細粒非常に多量。粗	良	ロクロナデ(剥離)	ロクロナデ	内外面摩滅 外面黒色付着物(黒色処理か)
136	—	11b区1検北壁-1	11b	—	1面北壁6層	6	平安前期	黒色土器	坏A	体~底部	底3/8	—	<6.2>	(2.9)	—	33	10YR6/1褐灰	10YR2/1黒	白色微細粒非常に多量。石英超微細粒微量。非常に粗	良	回転糸切 剥離	剥離(黒色)	内外面摩滅
137	—	12a区北1検水田-1	12a北	—	1面水田層	1	平安前期	黒色土器	坏・埦	口縁~体部	口1/8	<15.4>	—	(2.7)	—	12	10YR8/3浅黄橙	10YR2/1黒	白・赤色微細粒少量。石英微細粒微量。3mm大石英?礫混。やや粗	良	ロクロナデ	ミガキ(黒色)	内外面摩滅
138	PL30	古・中－1	長谷1	—	5面	3	平安前期	黒色土器	片口鉢	口縁~底部	口4/8底8/8	<23.2>	8.0	16.0	—	1260.0(石膏込み)	10YR3/1黒褐	10YR3/1黒褐	黄白色粒多量。赤褐色粒・角閃石少量。礫φ3~5mm	良	回転ナデ→下半部ヘラケズリ 指頭圧痕	回転ナデ	内面摩滅
139	PL30	古・中－2	長谷2	—	5面	1	平安前期	須恵器	坏A	口縁~底部	口8/8底8/8	12.4	5.4	4.6	—	134.8	10YR7/1灰白	10YR7/1灰白	白・黄白色粒・礫φ5~7mm少量。石英・ガラス質鉱物微量	不良	回転ナデ 底部回転糸切	回転ナデ	墨書(不明)
140	—	SC079-1	12a北	SC079	埋土北	—	平安前期	須恵器	蓋	体~口縁部	口1/8	<13.5>	—	(1.4)	<14.0>	7	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	白色超微細粒微量。緻密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
141	—	SC081-1	12a北	SC081	埋土北	1	奈良・平安	須恵器	坏B	体~底部	底1/8	—	<10.0>	(1.9)	—	21	5Y5/1灰	5Y5/1灰	白色微細粒・超微細粒多量。石英超微細粒少量。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
142	—	SC090-2	11c	SC090	埋土	—	奈良・平安	須恵器	蓋	つまみ	つまみ8/8	つまみ3.0	—	(1.7)	—	13	5YR6/1灰	5YR6/1灰	白・黒色微細粒や超微細粒多量。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
143	—	SC093-1	11c	SC093	埋土	1	平安前期	須恵器	坏A	口縁~底部	口2/8底1/8未満	<13.4>	<6.6>	3.9	<13.8>	39	N-6灰	N-5灰	白色微細粒・超微細粒多量。密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	墨書「万(富)」
144	—	SC099-1	11c	SC099	埋土	1	平安前期	黒色土器	坏A	口縁~底部	口2/8底3/8	<15.3>	<6.6>	3.5	<15.4>	62	10YR8/2灰白	10YR2/1黒	白色超微細粒や黒・赤色微細粒少量。密	良	回転ナデか 回転糸切か	ミガキ(黒色)	内外面摩滅 外面著しい
145	PL30	古・中－3	長谷1	SC11	埋土	3、4、5	平安前期	須恵器	坏B	底部	底4/8	—	11.4	(2.4)	—	145.6(石膏込み)	N-5灰	N-5灰	黄白色粒中量。赤褐色粒・ガラス質鉱物少量。礫φ3mm	良	底部全面回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
146	PL30	古・中－4	長谷1	SC11	埋土	1、2	平安前期	須恵器	壺	体部	—	—	—	(12.0)	—	274.4	N-4灰	N-4灰	白色粒多量。黄白色粒少量。石英・ガラス質鉱物微量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	把手付か
147	—	SK356-4	1	SK356	埋土	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~体部	口2/8	<13.4>	—	(3.3)	<13.6>	26	N-7灰白	N-7灰白	1mm以下白色粒・黒色粒多量。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
148	—	SK356-3	1	SK356	埋土	—	平安前期	須恵器	坏A	体~底部	底3/8	—	<5.6>	(2.1)	—	19	N-8灰白	N-7灰白	1mm以下白色粒・黒色多量。石英微量。少々粗	やや不良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	
149	—	SK356-5	1	SK356	埋土	—	平安前期	黒色土器	坏A	体~底部	底4/8	—	6.8	(1.5)	—	47	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR2/1黒	1mm以下白色粒多量。赤色粒微量。密	良	回転ヘラケズリ	ミガキ(黒色処理)	内外面やや摩滅
150	—	SK356-2	1	SK356	埋土	—	奈良・平安	須恵器	壺	体~底部	底3/8	—	<9.0>	(3.1)	—	78	10YR3/1黒褐	10YR7/1灰白	1mm以下黒色粒・白色粒多量。少々粗	良	ロクロナデ ケズリ 鉄釉	ロクロナデ 鉄釉	
151	—	SK356-1	1	SK356	埋土	—	奈良・平安	須恵器	甕	頸~体部	—	—	—	—	—	106	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	1mm以下白色粒多量。少々粗	良	ナデ 平行タタキ	ナデ	

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
152	—	SD028-1	3b・4a	SD028	埋土	—	平安前期	土師器・黒色土器	埦	体~底部	底8/8	—	5.8	(1.7)	—	40	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR8/3浅黄橙	1mm程度風化粒・石英・黒色粒。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面摩滅
153	PL30	SD032-2	3b・4a	SD032	埋土	—	平安前期	須恵器	坏A	体~底部	底1/8未満	—	—	—	—	7	N-8灰白	N-8灰白	1mm以下砂粒。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	墨書 外面やや摩滅
154	PL30	SD032-3	3b・4a	SD032	埋土	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~体部	口1/8未満	<12.4>	—	(3.6)	<12.8>	9	N-8灰白	N-8灰白	1mm以下白色粒・黒色粒。密	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ	墨書
155	—	SD032-1	3b・4a	SD032	埋土	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~体部	口1/8未満	<15.1>	—	(4.4)	<15.2>	10	N-5灰	N-6灰	1mm以下白色粒・黒色粒少量。緻密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
156	—	SD104-1	3b・4a	SD104	埋土	—	平安前期	須恵器	坏A	体~底部	底7/8	—	5.6	(1.2)	—	31	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	1mm前後白色粒多量。少々粗	良	ロクロナデ 回転糸切り	ロクロナデ	内外面一部赤焼
157	—	SD104-2	3b・4a	SD104	埋土	—	平安前期	黒色土器	坏A	口縁~体部・体~底部	口1/8底2/8	<13.0>	<5.6>	(4.5)	<13.2>	65	5Y8/1灰白	5Y3/1ｵﾘｰﾌﾞ黒	1mm以下白色粒・雲母多量。密	やや不良	ロクロナデか 回転糸切	ミガキ(剥離・黒色処理か)	内外面摩滅著しい
158	—	SD064-1	4c	SD064	埋土	1	平安前期	土師器・黒色土器	坏A	体~底部	底1/8	—	<5.8>	(1.9)	—	23	7.5YR7/6橙	7.5YR6/6橙	1mm以下白色粒・風化粒・凝灰岩片多量。所々1m程度砂少量。密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	摩滅
159	—	SD064-8	4b、4c	SD064	埋土	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~体部	口1/8	<12.0>	—	(3.2)	<12.2>	16	N-7灰白	N-7灰白	1mm以下白色粒・黒色粒少量。緻密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
160	—	SD064-3	4b、4c	SD064	埋土北	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~体部	口1/8	<12.0>	—	(2.9)	<12.2>	13	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/3にぶい褐	1mm以下白色粒少量。緻密	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ	
161	—	SD064-7	4b、4c	SD064	埋土	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~体部	口1/8未満	<14.1>	—	(2.4)	<14.4>	10	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	1mm以下白色粒・黒色粒・風化粒少量。緻密	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ	皿か
162	—	SD064-9	4b、4c	SD064	埋土	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~体部	口1/8	<13.4>	—	(2.9)	<13.6>	8	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	1mm以下白色粒・風化粒・黒色粒少量。緻密	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ	
163	—	SD064-6	4b、4c	SD064	埋土	—	平安前期	須恵器	坏A	体~底部	底4/8	—	5.8	(1.8)	—	28	N-7灰白	N-7灰白	1mm以下白色粒微量。緻密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	
164	—	SD064-2	4b、4c	SD064	埋土北	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~底部	口1/8底1/8未満	<13.4>	<6.6>	3.8	<13.6>	20	10YR8/2灰白	10YR7/3にぶい黄橙	1mm以下白色粒・風化粒・石英等少量。密	やや不良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	
165	PL30	SD064-4	4b、4c	SD064	埋土南	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~底部	口1/8底2/8	<13.2>	<5.4>	3.7	<13.4>	37	N-7灰白	N-6灰	1mm程度白色粒・2~3mm凝灰岩片微量。緻密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	底部歪みあり
166	—	SD064-5	4b、4c	SD064	埋土北	—	平安前期	須恵器	長頸壺	口縁~頸部	口3/8	<8.6>	—	(1.2)	—	11	N-6灰	N-6灰	1mm以下白色粒・風化粒少量。緻密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
167	—	SD009a-1	1	SD009	埋土	—	奈良・平安	須恵器	蓋	つまみ~体部	—	つまみ2.8	—	(1.7)	—	37	N-7灰白	N-6灰	1mm以下白色粒・黒色粒多量。密	良	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
168	—	SD009(SD017)-2	1	SD017	埋土	—	平安前期	黒色土器	坏A	体~底部	底1/8未満	—	<5.6>	(1.5)	—	13	5YR7/6橙	5YR2/1黒褐	1mm程度風化粒・白色粒多量。密	良	ロクロナデ ヘラケズリ 底部:回転ヘラケズリか(詳細不	ミガキ(黒色)	外面摩滅
169	—	SD085-2	1	SD085	埋土	—	奈良・平安	須恵器	坏B	体~底部	底3/8	—	<9.0>	(1.4)	—	68	N-7灰白	N-7灰白	1mm以下白色粒中量。密	良	ロクロナデ 回転糸切→回転ケズリ	ロクロナデ	内面摩滅 平滑
170	—	SK079-1	1	SK079	埋土	—	平安前期	須恵器	坏B	体~底部	底2/8	—	<8.4>	(1.3)	—	81	N-5灰	N-6灰	1mm以下白色粒多量・黒色粒少量。密	良	ロクロナデ 回転糸切→ケズリ 高台:ロクロナデ	ロクロナデ	内面転用硯か

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
171	—	SD130-1	1東	SD130	埋土	—	平安前期	黒色土器	皿	口縁~体部	口1/8未満	<12.6>	—	(2.1)	<13.0>	8	10YR2/1黒	10YR2/1黒	1mm以下雲母多量。密	良	ロクロナデ→ミガキ(黒色)	ロクロナデ→ミガキ(黒色)	
172	—	SD131-1	1東	SD131	埋土	—	平安前期	須恵器	坏A	体~底部	底7/8	—	5.8	(1.1)	—	42	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	1mm以下白色粒微量。密	やや不良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	内外面摩滅 内面底部平滑
173	—	SL014-1	1東	SL014	埋土	—	平安前期	黒色土器	坏A	体~底部	底1/8	—	<7.0>	(3.1)	—	26	10YR8/2灰白	10YR2/1黒	1mm以下赤色粒中量。密	良	ロクロナデ ヘラケズリか	ロクロナデ(黒色処理)	内外面やや摩滅
174	—	2区SD023-1	2	SD023	埋土	—	平安前期	須恵器	坏B	体~底部	底2/8	—	<9.3>	(1.4)	—	52	N-7灰白	N-7灰白	1mm以下白色粒(凝灰岩片)・黒色粒少量。密	良・還元焼成	ロクロナデ 回転糸切→回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	
175	—	SD109-1	4c	SD109	埋土	—	平安前期	須恵器	坏A	体~底部	底4/8	—	<5.8>	(1.5)	—	31	N-7灰白	N-7灰白	1mm以下白色粒多量・黒色粒少量。密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	
176	—	SD185-1	9	SD185	埋土	—	平安前期	黒色土器	坏・埦	口縁~体部	口1/8	<10.2>	—	(2.3)	<10.4>	8	7.5YR2/1黒	7.5YR2/1黒	白・赤色・石英微細粒非常に多量。非常に粗	良	ロクロナデ	ミガキ(黒色)	内外面摩滅著しい
177	—	1b区1検-1	1	—	1面	—	平安前期	須恵器	坏A	体~底部	底3/8	—	<5.6>	(1.2)	—	24	7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	1mm以下白色粒・1~4mm砂粒多量。緻密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	
178	—	1区東1検-1	1東	—	1面	—	平安前期	須恵器	坏A	体~底部	底8/8	—	5.6	(2.0)	—	80	5Y6/1灰	5Y6/1灰	白色微細粒非常に多量。1~2mm大粒少量。緻密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	内外面摩滅
179	—	1b区1検-2	1	—	1面	—	平安前期	須恵器	蓋	体~口縁部	口2/8	口径<14.8>	—	(2.6)	<15.0>	38	N-7灰白	N-7灰白	1mm以下白色粒・黒色粒少量。4mm程度白色粒混。緻密	良	ロクロナデ 回転ケズリ	ロクロナデ	内外面摩滅
180	—	1区東 東壁-1	1東	—	東壁	—	奈良・平安	須恵器	坏B	口縁~体部	口1/8未満	<15.7>	—	(5.0)	<15.9>	15	N-5灰	N-5灰	白色微細粒多量。緻密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
181	—	1a区Z-3	1	Z	—	—	平安前期	須恵器	坏B	底部	底1/8	—	<9.0>	(1.4)	—	18	7.5Y7/1灰白	7.5Y6/1灰	1mm以下・2mm程度白色粒多量。緻密	良	ロクロナデ ケズリ出し高台→ロクロナデ	ロクロナデ	内外面摩滅
182	—	1a区2検-3	1	—	2面	—	平安前期	黒色土器	坏A	体~底部	底8/8	—	5.6	(2.0)	—	74	2.5Y8/3淡黄	2.5Y2/1黒	1mm以下白色粒・石英多量。密	良	ナデ 回転糸切	ミガキ(黒色処理)	内面摩滅
183	—	1区東壁5層-1	1	—	5層	—	平安前期	黒色土器	坏A	体~底部	底8/8	—	6.6	(1.3)	—	72	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR2/1黒	1mm以下白色粒・赤色粒少量。密	良	回転ナデ 回転糸切	ミガキ (黒色処理)	内外面摩滅
184	—	1a区Ⅲ層上面-1	1	—	Ⅲ層	1	平安前期	土師器・黒色土器	埦	底部	底2/8	—	<7.4>	(2.1)	—	69	7.5YR6/8橙	7.5YR5/6明褐	1mm以下白色粒多量。1mm以下赤色粒・石英少量。非常に粗	やや不良	ロクロナデ ケズリのちナデ	ロクロナデ	内外面摩滅
185	PL30	1区北1検-2	1北	—	1面11層	—	平安前期	灰釉陶器	椀	口縁~体部	口1/8	<13.8>	—	(3.0)	<14.0>	12	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	白色超微細粒微量。緻密	良	ロクロナデ 灰釉ハケ塗	ロクロナデ 灰釉ハケ塗	
186	PL30	1b区1検-3	1	—	1面Ⅲ層	6、7	平安前期	灰釉陶器	皿	口縁~底部	口1/8未満 底2/8	<13.8>	<7.6>	2.6	<14.6>	58	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	1mm以下白色粒少量。緻密	良	ロクロナデ ケズリ出し高台 灰釉ハケ塗	ロクロナデ 灰釉ハケ塗	重ね焼き痕あり
187	—	1a区Z-2	1	Z	—	—	平安前期	須恵器	甕	体~底部	底1/8未満	—	<18.0>	(6.9)	—	255	N-6灰	N-5灰	1mm以下の白色粒少量。密	良	タタキ ナデ ケズリ	ナデ	
188	PL30	2区2検-1	2	—	2面	2	奈良・平安	須恵器	坏B	体~底部	底4/8	—	<9.2>	(2.1)	—	70	N-7灰白	N-7灰白	1mm以下白色粒・黒色粒混。密	良	ロクロナデ ケズリ出し高台→ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	内外面摩滅 内面平滑

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
189	—	3b南区2検-1	3b・4a	—	2面	—	平安前期	黒色土器	坏A	体~底部	底3/8	—	<6.6>	(2.5)	—	48	10YR8/2灰白	10YR2/1黒	白・赤色微細粒少量。石英微細粒微量。緻密	良	回転ナデ 回転糸切	ミガキ(黒色処理)	内外面摩滅著しい
190	—	3b・4a区2検-1	3b・4a	—	2面	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~底部	口1/8 底1/8 未満	<13.2>	<6.0>	3.8	<13.4>	27	N-7灰白	N-7灰白	白色微細粒非常に多量。緻密	良	ロクロナデ 回転糸切か	ロクロナデ	口縁部煤付着
191	—	4b区1検北東-1	4b	—	1面	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~体部	口1/8 未満	<13.8>	—	(2.8)	<14.0>	9	N-5灰	N-7灰白	白色微細粒少量。緻密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
192	PL30	4b区表土-1	4b	—	表土	—	平安前期	灰釉陶器	椀	口縁~底部	口1/8 未満 底1/8	<18.2>	<8.0>	(6.5)	<18.8>	51	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	白色微細粒少量。緻密	良	ロクロナデ ケズリ 体部下半回転ヘラケズリ	ロクロナデ	内外面摩滅著しい
193	—	4b区東1検-1	4b東	—	1面	—	平安前期	須恵器	長頸壺	口縁~頸部	口1/8	<8.8>	—	(2.0)	—	7	N-7灰白	N-6灰	白色微細粒非常に多量。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
194	PL30	5区南壁-1	5a	—	南壁	—	平安前期	灰釉陶器	瓶	底部	底1/8	—	<18.8>	(3.2)	—	65	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	非常に緻密	良	回転ヘラケズリ ロクロナデ 灰釉	ロクロナデ 灰釉	
195	—	6区1検-2	6	—	1面	1	平安前期	黒色土器	坏A	体~底部	底3/8	—	<4.4>	(1.1)	—	12	10YR7/6明黄褐	10YR8/2灰白	赤色微細粒・2mm大赤色粒多量。密	良	ナデか 回転糸切	回転ナデか 黒色化	内外面摩滅著しい
196	—	6区1検-1	6	—	1面	1	平安前期	須恵器	坏A	口縁~体部	口1/8 未満	<12.8>	—	(2.5)	<13.0>	6	5Y6/1灰	5Y7/1灰白	白色微細粒・超微細粒非常に多量。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
197	—	7区1検南西-2	7	—	1面南西	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~体部	口1/8	<12.8>	—	(2.5)	<13.0>	6	N-6灰	N-6灰	白色微細粒・超微細粒混。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
198	PL30	7区1検北西-1	7	—	1面北西	—	平安前期	須恵器	坏A	口縁~体部	口1/8	<12.0>	—	(3.0)	<12.2>	9	2.5YR8/2灰白	2.5YR8/1灰白	白色超微細粒・2mm大白色粒混。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	墨書
199	—	Z-1	—	Z	—	—	平安前期	須恵器	坏A	体~底部	底1/8	—	<6.0>	(1.9)	—	24	2.5Y7/2灰黄	2.5YR7/2灰黄	白色超微細粒微量。密	良	ロクロナデ 回転糸切(ロクロ時計回り)	ロクロナデ	内外面摩滅著しい
200	—	SL009-1	3b・4a	SL009	埋土	—	平安後期	土師器	坏A	口縁~底部	口1/8 未満 底2/8	<10.3>	<5.0>	2.0	<10.4>	18	7.5YR7/6橙	7.5YR6/6橙	1mm以下・3mm程度白色粒中量。1mm以下赤色粒少量。雲母超微細粒多量。密	良	ロクロナデ 回転糸切り	ナデ	内外面摩滅
201	PL30	SL010-1	3b・4a	SL010	埋土	1	平安後期	土師器	坏A	口縁~底部	口2/8 底8/8	<10.7>	4.1	3.7	<10.9>	55	7.5YR7/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	1mm以下・2mm程度白色粒多量。石英粒少量。粗	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	内外面摩滅著しい
202	PL30	2区7T1検-1	2	7トレンチ	1面	—	平安後期	土師器	小型坏	口縁~底部	口1/8 未満 底3/8	<9.0>	<5.0>	1.8	<9.2>	17	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR7/6橙	1mm以下赤色粒多量。1mm以下・2mm程度白色粒・石英少量。密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	内外面摩滅
203	—	4a区1検-1	3b・4a	—	1面	—	平安後期	土師器	坏A	口縁~体部	口2/8	<11.1>	—	(2.8)	<11.4>	22	7.5YR7/6橙	7.5YR8/3浅黄橙	白・赤色微細粒非常に多量。粗	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面摩滅著しい
204	PL30	5区南壁-2	5a	—	南壁	—	平安後期	土師器	小型坏	口縁~底部	口2/8 底3/8	<10.0>	<5.2>	2.1	<10.2>	25	5YR6/6橙	5YR6/6橙	黒色・石英超微細粒非常に多量。密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	
205	—	5区東-11検-1	5東-1	—	1面	—	平安後期	土師器	小型坏	口縁~体部	口1/8	<9.8>	—	(1.5)	<10.0>	2	5YR7/6橙	5YR8/4淡橙	赤色微細粒・2mm大赤色粒非常に多量。	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面摩滅著しい
206	—	6区1検-3	6	—	1面	1	平安後期	土師器	小型坏	口縁~体部	口1/8	<9.4>	—	(1.8)	<9.6>	8	7.5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	白・赤色・石英微細粒非常に多量。非常に粗	良	—	—	内外面摩滅著しい

付表８　石川条里遺跡　中世～近世土器・陶器・磁器一覧（報告書掲載分）　［図版91～93］

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	産地	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置								口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
207	PL31	ST001-1	1	ST001	Pit2	—	中世	磁器	龍泉窯系青磁	碗	体部	—	—	—	—	—	15	7.5YR6/2 灰ｵﾘｰﾌﾞ	7.5YR6/2 灰ｵﾘｰﾌﾞ	1mm程度砂粒微量。青灰白色緻密	良	ロクロナデ 蓮弁文ケズリ出し 青磁釉施釉	ロクロナデ 青磁釉施釉	
208	PL31	ST005-1	1	ST005	Pit5	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	体部	—	—	—	—	—	47	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	1mm以下砂粒多量。密	良・硬質	ナデ	回転台ナデ 卸目	
209	PL31	SK001-2	1	SK001	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	口縁~体部	口1/8未満	—	—	—	—	23	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	1mm以下・3~5mm白色粒多量。粗	やや不良	(剥離)	回転台ナデ	
210	PL31	SK001-1	1	SK001	埋土北西	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	体~底部	底1/8未満	—	—	—	—	75	5Y6/1 灰	5Y5/1 灰	粗い砂(白色粒・黒色粒多量)。粗	良・還元焼成	ハケ→ナデ 砂底	(剥落)	内面摩耗
211	—	SK002-1	1	SK002	埋土2層	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	口縁~体部	口1/8未満	—	—	—	—	18	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	1mm前後黒色粒少量。密	良	回転台ナデ	回転台ナデ	
212	PL31	SK003-1	1	SK003	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	口縁部	口1/8未満	—	—	—	—	16	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/1 灰白	1mm以下白色粒少量。粗	やや不良	ナデ	ナデ	
213	—	SK010-1	1	SK010	埋土	—	中世	土器	在地	カワラケ	口縁~体部	口1/8未満	<8.7>	—	(2.1)	<9.0>	5	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	1mm以下白色粒中量・5mm大微量。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
214	PL31	SK012-2	1	SK012	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	口縁部	口1/8未満	—	—	—	—	51	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	1mm以下白色粒少量。密	良	ナデ	回転台ナデ	
215	PL31	SK012-3	1	SK012	埋土	—	中世	陶器	東濃山茶碗	碗	口縁~体部	口1/8未満	<14.3>	—	(1.9)	<14.6>	4	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/1 灰白	緻密	良	ロクロナデ 口唇部沈線	ロクロナデ	
216	PL31	SK012-1	1	SK012	埋土	3	中世	陶器	珠洲	壺	体部	—	—	—	—	—	192	N-5 灰	N-6 灰	1mm前後白色粒多量。密	良	平行タタキ	石による圧痕	
217	PL31	SK017-1	1	SK017	埋土2層	—	中世	磁器	龍泉窯系青磁	碗	体部	—	—	—	(3.7)	—	23	5GY6/1 ｵﾘｰﾌﾞ灰	5GY6/1 ｵﾘｰﾌﾞ灰	1mm以下砂粒少量。緻密	良	ロクロナデ 蓮弁文ケズリ出し 青磁釉施釉	ロクロナデ 青磁釉施釉	
218	PL31	SK020-1	1	SK020	埋土	—	中世	陶器	山茶碗系	捏鉢	口縁~体部	口1/8未満	—	—	—	—	19	5Y8/1 灰白	5Y7/1 灰白	1mm以下黒色粒多量。密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
219	—	SK026-1	1	SK026	埋土	—	中世	土器	在地	カワラケ	体~底部	底1/8	—	<6.0>	(0.7)	—	4	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	1mm以下白色粒少量。密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	
220	PL31	SK041-1	1	SK041	埋土	3	中世	陶器	珠洲	擂鉢	体~底部	底2/8	—	<14.0>	(6.3)	—	200	N-4 灰	N-7 灰白	1mm以下白色粒(海綿骨針か)黒色粒。1mm程度岩片	良	ロクロナデ 静止糸切	卸目	珠州Ⅱ~Ⅳ期前 内面摩耗
221	—	SK056-2	1	SK080	埋土	—	中世	土器	在地	カワラケ	口縁~体部	口1/8	<7.2>	—	(1.3)	<7.4>	3	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	1mm以下赤色粒少量。少々粗	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
222	PL31	SK056-1	1	SK080	埋土	—	中世	陶器	中津川	壺	頸~体部	—	—	—	—	—	86	7.5YR4/4 褐	7.5YR６/4にぶい橙	1mm以下黒色粒多量。灰白色緻密	良	ナデ (自然釉)	ナデ 輪積痕	
223	PL31	SK062-3	1	SK062	埋土	—	中世	磁器	同安窯系青磁	碗	口縁~体部	口1/8未満	<16.0>	—	(2.8)	<16.2>	11	5Y6/3 ｵﾘｰﾌﾞ黄	5Y6/3 ｵﾘｰﾌﾞ黄	灰色緻密	良	ロクロナデ クシ歯文	ロクロナデ クシ歯文	
224	PL31	SK062-2	1	SK062	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	口縁~体部	口1/8未満	—	—	—	—	27	N-6 灰	N-6 灰	1mm以下白色粒多量。少々粗	良・還元焼成	回転台ナデ タテハケ→ナデ	回転台ナデ	
225	PL31	SK062-1	1	SK062	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	体部	—	—	—	—	—	95	N-7 灰白	N-7 灰白	1mm以下白色粒多量。少々粗	良・還元焼成	ナデ	卸目	

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	産地	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置								口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
226	—	SK075-1	1	SA005	Pit6	—	中世	土器	在地	カワラケ	口縁~底部	口1/8未満底1/8未満	<8.1>	<6.6>	1.5	<8.4>	5	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	1mm以下赤色粒微量。密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ 内底ヨコナデ	
227	PL31	SK091-1	1	SK091	埋土1層	—	中世	土器	在地	カワラケ	口縁~底部	口4/8底8/8	7.5	5.7	1.7	7.7	34	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	1mm以下白色赤色粒少量。少々粗	良	ロクロナデ 回転糸切 板状圧痕	ロクロナデ	
228	PL31	SK094-2	1	SK094	埋土	1	中世	土器	在地	カワラケ	口縁~底部	口8/8底8/8	11.0	7.4	2.8	11.4	114	10YR8/3浅黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	5mm程度少礫微量。密	良	ロクロナデ 回転糸切 板状圧痕	内底オサエヨコナデ ロクロナデ	
229	PL31	SK094-1	1	SK094	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	体部	—	—	—	—	—	120	N-7灰白	N-7灰白	1mm以下黒色多量・白色粒中量。粗	良	ナデ	卸目(８本)	
230	PL31	SK155-1	1	SK155	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	口縁~体部	口1/8未満	—	—	—	—	27	2.5Y7/2灰黄	2.5Y6/1黄灰	1mm以下黒色粒多量・風化粒少量。粗	良	口縁回転台ナデ 体部ナデ	回転台ナデ 卸目	
231	PL31	SK177-1	1	SK177	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	口縁~体部	口1/8未満	—	—	—	—	37	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/1灰白	1mm以下黒色粒・1~2mm程度風化粒多量。粗	良・還元焼成	回転台ナデ	回転台ナデ	
232	—	SK178-1	1	SK178	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	口縁~体部	口1/8未満	—	—	—	—	16	2.5Y7/2灰黄	2.5Y8/2灰白	1mm以下黒色粒微量。1mm程度白色粒・黒色粒風化粒多量。粗	良・還元焼成	回転台ナデ	回転台ナデ	
233	PL31	SK188-1	1	SK188	埋土	—	中世	磁器	龍泉窯系青磁	碗	口縁~体部	口1/8未満	<11.7>	—	(4.2)	<12.0>	14	10GY8/1明緑灰	10GY8/1明緑灰	1mm以下白色粒・黒色粒微量。灰色緻密	良	ロクロナデ 蓮弁文ケズリ出し 青磁釉施釉	ロクロナデ 青磁釉施釉	
234	PL31	SK196-1	1	SK196	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	体部	—	—	—	—	—	71	2.5Y4/1黄灰	2.5Y3/1黒褐	1mm以下白色粒・石英多量。粗	良	ナデ	回転台ナデ 卸目	
235	PL31	SK246-1	1	SK246	埋土	—	中世	磁器	龍泉窯系青磁	碗	体~底部	底3/8	—	<5.4>	(1.8)	—	53	7.5Y5/2灰ｵﾘｰﾌﾞ	7.5Y6/2灰ｵﾘｰﾌﾞ	1mm以下茶色系粒微量。灰色緻密	良	ロクロナデ ケズリ出し高台外底無釉	ロクロナデ 画花文	
236	PL31	SK249-1	1	SK249	埋土	—	中世	磁器	龍泉窯系青磁	碗	口縁~体部	口1/8未満	—	—	—	—	7	2.5GY7/1明ｵﾘｰﾌﾞ灰	2.5GY7/1明ｵﾘｰﾌﾞ灰	灰色緻密	良	ロクロナデ 蓮弁文ケズリ出し 青磁釉施釉	ロクロナデ 青磁釉施釉	
237	PL31	SK270-1	1	SK270	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	底部	底2/8	—	<12.0>	(1.9)	—	93	5Y6/1灰	5Y5/1灰	1mm以下白色粒多量。1mm程度黒色粒・白色粒・風化粒か。粗	良・還元焼成	ナデ 砂底	卸目	内面摩耗
238	—	SK276-1	1	SK276	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	体~底部	底2/8	—	<12.0>	(3.4)	—	124	2.5Y8/2灰白	2.5Y7/1灰白	1mm以下白色粒・3mm程度風化粒・黒色粒多量。少々粗	良	ナデ 砂底	卸目	内面摩耗
239	PL31	SK1103-1	11c	SK1103	埋土3層	—	中世	土器	在地	カワラケ	体~底部	底1/8未満	—	<8.0>	(2.6)	—	9	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	緻密	やや不良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	内外面摩滅著しい

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	産地	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置								口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
240	PL31	SD001-6	1	SD001	埋土東	—	中世	土器	在地	カワラケ	口縁~体部	口1/8	<9.0>	—	(2.1)	<9.3>	6	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR7/4 にぶい橙	1mm以下風化粒微量。密	やや不良	ナデ 指オサエ	ナデ	手づくね
241	PL31	SD001-4	1	SD001	埋土東	—	中世	土器	在地	カワラケ	口縁~底部	口2/8 底2/8	<12.7>	<9.2>	3.1	<13.2>	38	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	1mm以下風化粒・黒色粒・白色粒(凝灰岩片?)少量。密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ 内底ヨコナデ 輪積痕	
242	—	SD001-5	1	SD001	埋土	—	中世	土器	在地	カワラケ	体~底部	底3/8	—	<7.6>	(2.2)	—	28	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白	砂少量。密	やや不良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	やや軟質
243	PL31	SD001-3	1	SD001	埋土東	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	口縁~体部	口1/8 未満	—	—	—	—	42	N-6 灰	N-6 灰	1~2mm白色粒・黒色粒多	良・還元焼成	ハケのちナデ 口縁回転ナデ	回転台ナデ	
244	PL31	SD001-2	1	SD001	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	体~底部	底2/8	—	<13.6>	(4.4)	—	131	N-7 灰白	N-7 灰白	1mm前後白色粒・黒色粒・砂多量。密	良・還元焼成	ハケのちナデ 砂底	卸目	
245	PL31	SD001-1	1	SD001	埋土東	—	中世	陶器	珠洲	甕	体~底部	底1/8 未満	—	—	—	—	90	N-5 灰	N-5 灰	1~2mm風化砂岩粒・白色粒多量。密	良	平行タタキ 底部:ナデ	ナデ	
246	PL31	SD002-2	1	SD002	埋土西	—	中世	磁器	龍泉窯系青磁	碗	口縁~体部	口1/8 未満	—	—	—	—	4	5Y6/3 ｵﾘｰﾌﾞ黄	5Y6/3 ｵﾘｰﾌﾞ黄	砂粒混流なし。緻密	良・還元焼成	ロクロナデ 蓮弁文ケズリ出し 青磁釉施釉	青磁釉施釉	
247	PL31	SD002-1	1	SD002	埋土西	—	中世	陶器	古瀬戸	卸皿	底部	底1/8 未満	—	<8.6>	(1.0)	—	33	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	1mm以下砂粒少量。緻密	良	ロクロナデ 回転糸切	卸目(自然釉付着)	古瀬戸前期様式
248	—	SD009-4	1	SD009	埋土西	—	中世	土器	在地	カワラケ	体~底部	底2/8	—	<8.4>	(1.6)	—	36	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	1mm以下白色粒・黒色粒・石英少量。密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ 内底ヨコナデ	内面煤付着 灯明皿として使用
249	PL31	SD009(SD017)-3	1	SD009	埋土	—	中世	磁器	龍泉窯系青磁	碗	体部	—	—	—	(1.6)	—	20	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	1mm以下砂少量。密	良	ロクロナデ 青磁釉施釉	ロクロナデ 青磁釉施釉	
250	PL31	SD009-1	1	SD009	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	口縁~体部	口1/8 未満	<28.0>	—	(3.8)	<29.4>	57	5Y7/1 灰白	5Y8/1 灰白	1mm前後黒色粒・白色粒(凝灰岩片)多量。密	やや不良	ハケのちナデ 口縁回転台ナデ	回転台ナデ	
251	PL31	SD009-2	1	SD009	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	口縁~体部	口1/8 未満	<31.0>	—	(4.0)	<32.1>	35	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	1mm前後黒色粒・白色粒(凝灰岩片か)砂粒多量。密	やや不良	指ナデ 口縁回転台ナデ	回転台ナデ 卸目(5条以上)	
252	PL31	SD009-3	1	SD009	埋土	—	中世	陶器	珠洲	擂鉢	体~底部	底1/8 未満	—	<13.0>	(5.2)	—	91	N-7 灰白	N-7 灰白	1mm以下砂・海面骨針?少量。密	良	ロクロナデ 静止糸切	ロクロナデ 卸目(7条)	珠洲Ⅱ・Ⅲ期
253	PL31	SD191-1	12c北	SD191	埋土	—	中世	土器	在地	カワラケ	口縁~底部	口1/8 底1/8 未満	<7.7>	<5.0>	2.2	<7.8>	6	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	1mm以下白・赤・黒色粒砂少量。緻密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	
254	PL31	SD192-1	12c北	SD192	埋土北	1	中世	土器	在地	内耳鍋	体部	—	—	—	—	—	45	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR6/4 にぶい橙	1mm以下白・赤・黒色粒砂多量。密	良	ナデ 口縁回転台ナデ	回転台ナデ	体外面煤付着
255	PL32	SD192-2	12c北	SD192	埋土北	3	中世	土器	在地	内耳鍋	口縁~体部	口1/8 未満	<29.8>	—	(12.1)	<30.2>	146	10YR2/1 黒	10YR4/2 灰黄褐	1mm以下白・赤色・石英粒砂多量	良	ナデ 口縁回転台ナデ	回転台ナデ	体外面煤付着 内面炭化物付着
256	PL32	SD020-1	1	SD020	埋土	—	中世	須恵質	在地	擂鉢	口縁~体部	口1/8 未満	—	—	—	—	52	N-7 灰白	N-7 灰白	1mm程度白色粒・黒色粒多	良・還元焼成	ナデ 口縁回転台ナデ	回転台ナデ	破片側縁研磨
257	PL32	2区 SD023-2	2	SD023	埋土	—	中世	陶器	大窯製品	丸皿	口縁~底部	口1/8 未満 底1/8	<9.8>	<6.2>	1.8	<10.0>	12	5Y7/3 浅黄	5Y7/3 浅黄	1mm以下灰色粒微量。密	良	ロクロナデ 灰釉全面施釉	ロクロナデ 灰釉全面施釉	大窯3段階

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	産地	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置								口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
258	PL32	SD023-7	1、1西	SD023	埋土	—	中世	陶器	古瀬戸	鉢	体~底部	底1/8未満	—	<24.0>	(2.1)	—	15	5Y6/3 ｵﾘｰﾌﾞ黄	5Y6/3 ｵﾘｰﾌﾞ黄	細砂粒少量。緻密	良	回転ヘラケズリ 灰釉浸掛 灰釉ハケ塗	回転ヘラケズリ 灰釉浸掛 釉ハケ塗	古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期か
259	PL32	SD023-3	1、1西	SD023	埋土	—	中世	土器	在地	内耳鍋	底部	底1/8未満	—	<26.0>	(2.0)	—	106	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい褐	1mm以下砂・白色粒・風化粒。密	良	回転台ナデ 砂底	回転台ナデ	内面体部煤付着
260	PL32	SD023 下層-4	1、1西	SD023	埋土	—	中世	土器	在地	内耳鍋	口縁部	口1/8未満	—	—	—	—	124	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	砂多量。密	良	回転台ナデ	回転台ナデ 耳貼付	
261	PL32	SD023-6	1、1西	SD023	埋土	—	中世	陶器	古瀬戸	四耳壺	口縁部	口1/8未満	<11.6>	—	(2.1)	—	10	2.5YR7/1 灰白	2.5YR6/2 灰黄	細砂粒少量。緻密	良	ロクロナデ 釉剥落	ロクロナデ 灰釉単味ハケ塗か	古瀬戸前期様式
262	PL32	SD023-13	1西	SD023	埋土	—	中世	陶器	珠洲	擂鉢	体部	—	—	—	—	—	36	N-7 灰白	N-6 灰	1mm以下石英・白色粒多	良	ロクロナデ	ロクロナデ	焼歪み
263	PL32	SD023-2	1、1西	SD023	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	口縁~体部(片口付近)	口1/8未満	—	—	—	—	50	N-7 灰白	N-7 灰白	1mm程度白色粒・黒色粒・風化粒多量。密	良・還元焼成	ハケ→ナデ 口縁回転台ナデ	回転台ナデ 卸目	
264	PL32	SD023-1	1、1西	SD023	埋土	—	中世	陶器	在地産須恵質	擂鉢	体~底部	底1/8未満	—	<16.0>	(5.4)	—	94	N-5 灰	N-7 灰白	1mm程度白色粒・黒色粒多量。密	良	ナデ 砂底	回転台ナデ 卸目	
265	PL32	SD023-5	1、1西	SD023	埋土	—	中世	陶器	中津川	甕(壺)	頸部	—	—	—	(5.1)	—	112	7.5YR7/1 灰白	7.5YR7/1 灰白	砂粒少量。 緻密	良	ヨコナデ(自然釉)	ヨコナデ(自然釉)	
266	PL32	SD023-4	1、1西	SD023	埋土	—	中世	土器	在地	火鉢	体~底部	底1/8未満	—	<28.2>	(3.6)	—	74	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	1~2mm白色粒・風化粒多	良	回転台ナデ 底部棒状圧痕	回転台ナデ	
267	PL32	SD033-1	3b・4a	SD033	埋土	—	中世	土器	在地	香炉	底~脚部	底1/8	—	—	(2.8)	—	46	10YR4/2 灰黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	1mm以下砂粒多量(内耳と同じ) 所々1mm程度風化粒・粘土塊。密	やや不良	ロクロナデ 砂底 ユビオサエ	ロクロナデ	内面煤付着か
268	PL32	SD056-2	3b・4a	SD056	埋土	—	中世	青磁	中国	皿	口縁~体部	口1/8未満	<9.6>	—	(2.1)	<9.8>	4	7.5Y5/3 灰ｵﾘｰﾌﾞ	7.5Y6/2 灰ｵﾘｰﾌﾞ	砂粒含まず。緻密	良	ロクロナデ 下半:回転ヘラケズリ 青磁釉施釉	ロクロナデ 青磁釉施釉	
269	PL31	SD065-2	3b・4a	SD065	埋土	—	中世	土器	在地	カワラケ	口縁~底部	口2/8底2/8	<7.4>	<5.4>	1.8	<7.6>	17	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	1mm以下赤色粒多量。密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	内外面摩滅
270	PL31	SD065-4	3b・4a	SD065	埋土2層	—	中世	土器	在地	カワラケ	口縁~底部	口1/8未満底2/8	<7.8>	<4.2>	2.4	<8.0>	14	10YR7/1 灰白	10YR8/1 灰白	1mm以下赤色粒微量。密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	内外面摩滅
271	PL31	SD065-3	3b・4a	SD065	埋土2層	—	中世	土器	在地	カワラケ	口縁~底部	口1/8未満	<11.6>	<6.8>	2.6	<11.8>	17	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	緻密	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	内外面摩滅 内面煤付着
272	PL32	SD065-1	3b・4a	SD065	埋土2層	—	中世	土器	在地	内耳鍋	底部	底1/8未満	—	<18.0>	(1.5)	—	38	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR6/4 にぶい橙	1mm以下白色粒・石英多量。粗(あえて混合)	良	回転台ナデ 砂底	回転台ナデ	
273	—	SD080-1	1	SD080	埋土	—	中世	土器	在地	カワラケ	口縁~底部	口1/8底1/8未満	<10.7>	<8.6>	2.7	<11.0>	12	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	1mm前後白色粒。粗	良	ロクロナデ 回転糸切	ロクロナデ	
274	PL32	SD125-1	1西	SD125	埋土	—	中世	陶器	在地須恵質	擂鉢	口縁~体部	口1/8未満	—	—	—	—	45	N-7 灰白	N-6 灰	1~2mm白色粒・黒色粒多量。焼き締る。緻密	良・還元焼成	回転台ナデ タテハケ→ナデ	回転台ナデ	

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	産地	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置								口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
275	PL32	SD125-2	1西	SD125	埋土	—	中世	陶器	山茶碗系	捏鉢	口縁~体部	口1/8未満	—	—	—	—	41	5YR6/6橙	5YR8/1灰白	1mm以下白色粒少量。緻密	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ	焼き締る
276	PL32	SD126-1	1西	SD126	埋土	—	中世	土器	在地	擂鉢	体部	—	—	—	—	—	71	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	1mm程度砂多量。2mm程度砂少量。風化粒・石英・黒色粒・白色粒(内耳に似る)	良・酸化炎焼成	ナデ	卸目	
277	PL32	1区東1検-2	1東	—	1面	—	中世	陶器	珠洲	擂鉢	体~底部	底1/8未満	—	<10.0>	(4.8)	—	142	2.5Y5/1黄灰	2.5Y6/1黄灰	白色微細粒・2mm大粒少量。(1~2mm泥岩片混)密	良	ロクロナデ 静止糸切	ロクロナデ 卸目	珠洲Ⅲ・Ⅳ期 内面摩耗 平滑
278	PL32	1区Z-1	1	Z	—	—	中世	磁器	龍泉窯系青磁	碗	口縁~体部	口1/8未満	—	—	—	—	8	5Y5/2灰ｵﾘｰﾌﾞ	5Y5/2灰ｵﾘｰﾌﾞ	砂粒含まず。灰白色緻密	良	ロクロナデ 蓮弁文ケズリ出し 青磁釉施釉	ロクロナデ 青磁釉施釉	
279	—	3b・4a区Z-1	3b・4a	Z	—	—	中世	磁器	華南白磁	碗	口縁~体部	口1/8未満	—	—	—	—	8	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	灰白色砂粒微量。非常に緻密	良	ロクロナデ 透明釉施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	
280	—	2区SD023-5	2	SD023	埋土	—	近代	磁器	瀬戸美濃連房	小碗	口縁~底部	口2/8底2/8	<8.0>	<3.0>	4.4	<8.1>	23	N-8灰色	N-8灰色	灰白色・光沢あり。緻密	良	ロクロナデ 削出高台 染付 畳付以外透明釉全面施釉	ロクロナデ 透明釉	
281	PL32	SD023-8	1、1西	SD023	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	碗	体~底部	底8/8	—	4.9	(2.0)	—	70	10YR8/1灰白	10YR3/3暗褐	1mm以下風化粒・青灰色岩片少量	良	ロクロナデ 回転ヘラケズリ 削出高台→ロクロナデ	ロクロナデ 鉄釉施釉・灰釉流し掛か	連房Ⅱ期か
282	PL32	SD023-9	1、1西	SD023	埋土	—	近世	陶器	唐津	呉器手碗	体~底部	底4/8	—	<5.4>	(2.2)	—	29	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	砂粒微量。緻密	良	ロクロナデ 畳付以外透明釉全面施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	肥前陶磁Ⅲ・Ⅳ期
283	PL32	SD023下層-2	1、1西	SD023	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	丸碗	口縁~体部	口2/8	<10.2>	—	(5.6)	<10.6>	52	7.5YR4/3褐	7.5YR4/3褐 7.5YR2/1黒	1mm以下暗灰色少量。密	良	ロクロナデ 回転ヘラケズリ 体上部鉄釉浸掛	ロクロナデ 鉄釉に灰釉流し掛	連房Ⅱ期
284	PL32	2区SD023-4	2	SD023	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	丸碗	体~底部	底4/8	—	<5.4>	(1.9)	—	42	2.5GY7/1明ｵﾘｰﾌﾞ灰	2.5GY7/1明ｵﾘｰﾌﾞ灰	1mm程度白色粒・黒色粒。密	良	ロクロナデ 削出高台→ロクロナデ 畳付以外全面灰(御深井)釉施釉 高台釉拭き取り	ロクロナデ 灰(御深井)釉施釉	連房Ⅳ期か
285	PL32	2区SD023-3	2	SD023	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	丸碗	体~底部	底4/8	—	<4.4>	(2.1)	—	34	2.5GY7/1明ｵﾘｰﾌﾞ灰	2.5GY7/1明ｵﾘｰﾌﾞ灰	白色粒少量。密。発泡空洞あり	良	ロクロナデ 削出高台→ロクロナデ 灰釉施釉 高台釉拭き取り	ロクロナデ 灰釉浸掛	連房Ⅳ期か
286	PL32	SD023-11	1、1西	SD023	埋土	—	近世	磁器	伊万里	皿	体~底部	底1/8未満	—	<7.3>	(1.9)	—	24	N-8灰色	N-8灰色	白色。緻密	良	ロクロナデ 削出高台 畳付以外透明釉全面施釉	ロクロナデ 染付・透明釉施釉	肥前陶磁Ⅱ期か

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	産地	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置								口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
287	PL32	SD023 下層-3	1、1西	SD023	埋土	—	近世	陶器	唐津	皿	体~底部	底4/8	—	4.9	(1.7)	—	51	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/3 褐	1mm前後砂粒多量	良	ロクロナデ 削出高台 砂目積 鉄釉浸掛	ロクロナデ 砂目積 鉄釉施釉	肥前陶磁Ⅰb期
288	PL32	SD023-10	1、1西	SD023	埋土	—	近世	陶器	唐津	溝縁皿	口縁~体部	口1/8	<13.8>	—	(2.2)	<14.0>	15	5Y2/2 ｵﾘｰﾌﾞ黒	5Y3/2 ｵﾘｰﾌﾞ黒	灰色粒少量。緻密	良	ロクロナデ 回転ヘラケズリ 体上部まで鉄釉浸掛	ロクロナデ 鉄釉浸掛	肥前陶磁Ⅱ期
289	PL32	SD023 下層-1	1、1西	SD023	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	擂鉢	体~底部	底3/8	—	<8.4>	(3.3)	—	96	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/1 褐灰	1mm程度黄橙色粒少量と白色粒・黒色粒。密	良	ロクロナデ 体部下半回転ヘラケズリ 底部回転糸切 錆釉 体下半～底部ふき取り	ロクロナデ 卸目(10本) 錆釉施釉	連房Ⅱ・Ⅲ期か
290	—	SD023-12	1、1西	SD023	埋土	—	近代	瓦	在地	瓦	—	瓦当	—	—	—	—	53	N-4 灰	N-4 灰	1mm以下石英・白色粒少	良(燻焼)	ナデ	型押	
291	PL32	1区西 SD024-4	1西	SD024	埋土	—	近世	磁器	伊万里	皿	体~底部	底1/8	—	<5.0>	(1.9)	—	22	10GY8/1 明緑灰	10GY8/1 明緑灰	1mm以下砂少量。緻密	良	ロクロナデ・削出高台 畳付以外透明釉全面施釉	ロクロナデ 染付・透明釉全面施釉	肥前陶磁Ⅱ期
292	PL32	1区西 SD024-5	1西	SD024	埋土	—	近世	磁器	伊万里	皿	体~底部	底4/8	—	<4.8>	(2.9)	—	64	釉:N-8 灰白 5Y8/1 灰白	釉:N-8 灰白 5Y8/1 灰白	砂粒目立たず。灰白色緻密	良	ロクロナデ 回転ヘラケズリ 削出高台→ロクロナデ 体部上半透明釉施釉(体部下半～底部露胎)	ロクロナデ 内底輪状釉剥ぎ	肥前陶磁Ⅲ期
293	PL33	1区西 SD024-3	1西	SD024	埋土	—	近世	磁器	伊万里	皿	口縁~底部	口2/8 底4/8	<8.9>	4.0	2.0	<9.1>	42	N-8 灰色	N-8 灰色	1mm以下黒色粒少量。灰白色緻密	良	ロクロナデ 削出高台 畳付砂付着 畳付以外透明釉施釉	ロクロナデ 染付・透明釉施釉	肥前陶磁Ⅱ期
294	PL32	SD024-1	2	SD024	埋土	—	近世末~近代	磁器	瀬戸美濃連房	碗	口縁~体部	口2/8	<10.0>	—	(4.0)	<10.1>	15	N-8 灰色	N-8 灰色	灰白色・光沢あり。緻密	良	ロクロナデ 染付・透明釉施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	連房Ⅴ期
295	—	1区西 SD024-6	1西	SD024	埋土	—	近代	磁器	瀬戸美濃連房	碗	口縁~底部	口1/8 底3/8	<11.5>	<4.4>	(4.9)	<11.6>	60	N-8 灰白	N-8 灰白	1mm以下砂微量。白色緻密光沢あり	良	ロクロナデ 削出高台 型紙摺	ロクロナデ	
296	PL32	1区西 SD024-2	1西	SD024	埋土	—	近世	陶器	唐津	擂鉢	体~底部	底1/8 未満	—	<11.4>	(6.2)	—	75	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR5/2 灰褐	1mm以下砂粒多量	良	ロクロナデ 回転糸切 無釉	ロクロナデ 卸目(密) 無釉	肥前陶磁Ⅲ期
297	PL32	1区西 SD024-1	1西	SD024	埋土	—	近世	土器	在地	火鉢	口縁~体部	口1/8 未満	—	—	—	—	67	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	1mm以下白色粒・黒色粒・石英等多量。密。	良・酸化炎焼成	タタラ作りかヨコナデ	タタラ作りかヨコナデ	平面方形 中世の可能性あり
298	PL32	SD033-2	3b・4a	SD033	埋土南	—	近世	陶器	唐津	擂鉢	体~底部	底1/8	—	<10.0>	(5.6)	—	113	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/6 橙	1mm以下砂粒。焼きしまる	良	ロクロナデ 底部摩滅不明 無釉	ロクロナデ 卸目(密) 無釉	肥前陶磁Ⅲ期
299	PL32	SD034-2	3a	SD034	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	丸碗	体~底部	底8/8	—	5.0	(1.6)	—	45	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	1mm以下砂粒微量。やや空瞹あり。灰白色密	良	ロクロナデ 削出高台→ロクロナデ 畳付以外灰(御深井)釉全面施釉	ロクロナデ 灰(御深井)釉施釉	連房Ⅳ期

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	産地	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置								口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
300	PL32	SD034-1	3a	SD034	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	碗	体~底部	底7/8	—	4.4	(2.1)	—	42	7.5YR4/4 褐	7.5YR4/4 褐	1mm以下灰色粒少量	良	ロクロナデ 削出高台→ロクロナデ 鉄釉全面施釉 畳付釉拭き取り	ロクロナデ 鉄釉施釉	蛇目高台 連房Ⅳ期
301	PL32	SD037-1	3b・4a	SD037	埋土	—	近世	陶器	唐津	碗	体~底部	底8/8	—	5.0	(1.6)	—	56	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y2/1 黒	砂粒微量。(締っている) 緻密	良	ロクロナデ 削出高台→ロクロナデ 下半畳付以外薄い灰釉か 体上部鉄釉施釉	ロクロナデ 鉄釉施釉	連房Ⅳ期
302	PL32	SD037-2	3b・4a	SD037	埋土	—	近世	陶器	唐津	呉器手碗	体~底部	底8/8	—	4.7	(2.3)	—	59	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/4 淡黄	砂粒微量。浅黄色緻密	やや不良	ロクロナデ 削出高台 畳付以外透明釉全面施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	肥前陶磁Ⅲ期
303	—	4区 SD043-1	3b・4a	SD043	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	香炉	口縁~体部	口1/8 未満	<7.8>	—	(2.6)	—	6	5Y8/2 灰白	5Y8/2 灰白	1mm以下砂微量。灰白色緻密	良	ロクロナデ 灰釉施釉	ロクロナデ 灰釉施釉	連房Ⅲ期
304	PL33	SD056-1	3b・4a	SD056	埋土	1	近世	陶器	唐津	碗	口縁~底部	口2/8 底8/8	<13.0>	5.0	6.1	<13.4>	161	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	1mm以下白色粒・黒色粒少量。緻密	不良	ロクロナデ 削出高台 体中央所々削 体下半まで灰釉浸掛 高台内無釉	ロクロナデ 灰釉施釉	肥前陶磁Ⅱ期
305	—	SD057-3	3b・4a	SD057	埋土	—	近世	磁器	伊万里	蓋	つまみ~体部	つまみ 2/8	つまみ <4.4>	—	(2.0)	—	18	N-8 灰白	N-8 灰白	緻密	良	ロクロナデ つまみ削出 透明釉全面施釉	ロクロナデ 染付・透明釉施釉	肥前陶磁Ⅴ期
306	PL33	SD057-1	3b・4a	SD057	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	丸碗	体~底部	底3/8	—	<5.9>	(1.9)	—	26	2.5GY7/1 明ｵﾘｰﾌﾞ灰	2.5GY7/1 明ｵﾘｰﾌﾞ灰	1mm以下黒色粒・白色粒少量。灰白色緻密	良	ロクロナデ 削出高台→ロクロナデ 体部上半~高台脇まで灰(御深井)釉浸掛 高台内無釉	ロクロナデ 灰(御深井)釉施釉	連房Ⅲ期
307	PL33	SD057-2	3b・4a	SD057	埋土	—	近世	陶器	唐津	呉器手碗	体~底部	底7/8	—	4.6	(2.7)	—	74	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	1mm以下砂粒微量。緻密	良	ロクロナデ ケズリ出し高台 畳付以外透明釉全面施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	肥前陶磁Ⅲ期
308	PL33	SD058a-4	3b・4a	SD058a	埋土1層	3	近世	陶器	瀬戸美濃連房	小碗	口縁~底部	口6/8 底8/8	7.8	3.4	3.4	8.1	53	5Y6/3 ｵﾘｰﾌﾞ黄	5Y7/2 灰白	1mm以下砂粒微量。緻密	良	ロクロナデ 削出高台→ロクロナデ 体下半まで灰釉浸掛 高台内無釉	ロクロナデ 灰釉施釉	連房Ⅲ期か
309	PL33	SD058a-3	3b・4a	SD058a	埋土	4	近世	陶器	瀬戸美濃連房	碗	底部	底8/8	—	5.2	(1.4)	—	40	10YR3/4 暗褐	10YR4/6 褐	1mm以下黒色粒・白色粒・淡黄灰白色粒少量。密	良	ロクロナデ 付高台か ロクロナデ 畳付以外鉄釉全面施釉	ロクロナデ 鉄釉施釉	連房Ⅳ期か

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	産地	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置								口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
310	PL33	SD058a-6	3b・4a	SD058a	埋土	1	近世	磁器	伊万里	碗	体~底部	底8/8	—	4.2	(3.8)	—	77	N-8 灰白	N-8 灰白	砂粒含まず。白色緻密	良	ロクロナデ 削出高台 染付・畳付以外透明釉全面施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	肥前陶磁Ⅳ期
311	PL33	SD058a-2	3b・4a	SD058a	埋土3層	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	碗	体~底部	底4/8	—	<4.4>	(3.9)	—	51	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	1mm以下黒色粒・白色粒少量。緻密	良	ロクロナデ 削出高台 畳付以外灰(御深井)釉全面施釉	ロクロナデ 灰(御深井)釉施釉	連房Ⅳ期か
312	PL33	SD058a-5	3b・4a	SD058a	埋土	2	近世	陶器	唐津	皿	口縁~底部	口1/8未満 底2/8	<11.2>	<4.0>	3.3	<11.4>	26	7.5Y7/1 灰白	7.5Y4/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ	1mm以下砂微量。緻密	良	ロクロナデ 削出高台→ロクロナデ 口縁透明釉浸掛 体下半～高台無釉	ロクロナデ ルリ釉施釉 内底面釉輪剥	肥前陶磁Ⅲ・Ⅳ前期
313	PL33	SD058a-1	3b・4a	SD058a	埋土	—	近世	陶器	京焼系	上絵付合子	口縁~底部	口2/8 底8/8	<9.6>	4.8	4.2	<9.8>	78	2.5GY7/1 明ｵﾘｰﾌﾞ灰	2.5GY7/1 明ｵﾘｰﾌﾞ灰	砂含まず。緻密	良	ロクロナデ 底部碁笥底 体下半まで灰(御深井)釉施釉・上絵付(釉剥落) 口唇部釉ふき取り	ロクロナデ 灰釉施釉	19C以降
314	—	4区 SD063a-1	3b・4a	SD063a	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	小碗	体~底部	底8/8	—	3.0	(1.3)	—	16	5Y8/1 灰白	5Y7/2 灰白	1mm以下砂粒微量。緻密	良	ロクロナデ 削出高台→ロクロナデ 体部下半まで灰(御深井)釉浸掛(体部下半～高台内無釉)	ロクロナデ 灰(御深井)釉浸掛	連房Ⅲ・Ⅳ期か
315	PL33	4区 SD063a-2	3b・4a	SD063a	埋土	—	近世	陶器	唐津	呉器手碗	体~底部	底8/8 (高台3/8)	—	<4.4>	(3.0)	—	73	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	1mm以下砂粒少量。密	良	ロクロナデ 削出高台畳付 畳付以外透明釉全面施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	肥前陶磁Ⅲ・Ⅳ期
316	PL33	3区 SD063a-1	3b・4a	SD063a	埋土	1	近世	陶器	瀬戸美濃連房	摺絵皿	口縁~底部	口2/8 底3/8	<12.2>	<7.4>	2.7	<12.5>	56	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	1mm以下砂粒少量。緻密	良	ロクロナデ 付高台か 畳付以外 灰釉全面施釉	ロクロナデ 型紙摺絵(呉須)	口縁内側に煤付着 連房Ⅲ期
317	PL33	SD085-3	1	SD085	埋土	—	近世	磁器	伊万里(波佐見か)	碗	体~底部	底7/8	—	4.2	(3.2)	—	49	N-8 灰白	N-8 灰白	砂粒含まず。灰色緻密	良	ロクロナデ 削出高台 染付・畳付以外透明釉全面施釉	ロクロナデ染付・透明釉施釉	肥前陶磁Ⅴ期
318	PL33	SD086-2	1	SD086	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	碗	体~底部	底8/8	—	4.5	(2.7)	—	79	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	1mm以下砂粒微量。緻密	良	ロクロナデ 削出高台 畳付以外灰(御深井)釉全面施釉 上絵付	ロクロナデ 灰(御深井)釉施釉	連房Ⅳ期か
319	PL33	SD086-3	1	SD086	埋土	—	近世	陶器	波佐見(・平戸)	仏飯具	体~脚部	底2/8	—	<4.4>	(4.6)	—	50	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	1mm以下砂粒少量。緻密	やや不良	ロクロナデ 脚底内削込 脚底以外は透明釉全面施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	肥前陶磁Ⅴ期

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	産地	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置								口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
320	PL33	SD092-1	1	SD092	埋土	—	近世	磁器	伊万里	皿	体~底部	底5/8	—	<3.2>	(1.1)	—	23	N-8 灰白	N-8 灰白	砂粒含まず。緻密	良	ロクロナデ 削出高台 畳付砂付着 畳付以外透明釉全面施釉	ロクロナデ 染付・透明釉施釉	肥前陶磁Ⅱ期か
321	PL33	SD125-4	1西	SD125	埋土	—	近世・近代	土器	在地	火鉢	口縁~体部	口1/8未満	—	—	—	—	34	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	1mm以下白色粒・風化粒等混。密	不良(若干酸化炎焼成)	タテハケ→ナデ 口縁回転台ナデ	ナデ 口縁回転台ナデ	時期詳細不明
322	—	SD125-3	1西	SD125	埋土	—	近世	陶器	唐津	呉器手碗	体~底部	底3/8	—	<5.3>	(2.5)	—	39	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	1mm以下淡黄白色粒少量。緻密精胎	良	ロクロナデ 削出高台 畳付以外透明釉全面施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	肥前陶磁Ⅲ・Ⅳ期
323	PL33	SD129-1	1東	SD129	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	碗	口縁~底部	口1/8未満 底8/8	<12.4>	4.9	6.9	<12.8>	102	2.5Y8/1 灰白	2.5Y3/2 黒褐	1mm以下砂粒少量。密	良	ロクロナデ 回転ヘラケズリ削出高台→ロクロナデ 鉄釉体部上半施釉	ロクロナデ 鉄釉施釉	連房Ⅲ期
324	PL33	SD148-1	5b	SD148	埋土	—	近世	磁器	伊万里	碗	体~底部	底8/8	—	4.0	(5.0)	—	108	N-8 灰白	N-8 灰白	灰白色緻密。砂粒含まず	良	ロクロナデ 下半:回転ヘラケズリ 削出高台 染付・透明釉体部下半施釉(高台無釉)	ロクロナデ 透明釉施釉	肥前陶磁Ⅱ期
325	PL33	SD167-1	5b	SD167	埋土	—	近世	陶器	唐津	呉器手碗	口縁~体部	口1/8未満	<11.4>	—	(4.0)	<11.6>	10	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	1mm以下砂粒微量。淡黄色緻密精胎	良	ロクロナデ 透明釉・銅緑釉流し掛け	ロクロナデ 透明釉	肥前陶磁Ⅲ期
326	PL33	SD188-3	12c北	SD188	埋土北	1	近世末	磁器	瀬戸美濃連房	小碗	口縁~底部	口3/8 底3/8	<6.2>	<4.0>	4.4	<6.5>	52	7.5GY3/1 明緑灰	7.5GY3/1 明緑灰	黒色微細粒微量。砂粒含まず。光沢あり。緻密	良	ロクロナデ・削出高台 染付・透明釉全面施釉	ロクロナデ 透明釉	連房Ⅴ期
327	PL33	SD188-2	12c北	SD188	埋土26層北	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	丸皿	口縁~底部	口1/8 底1/8	<11.2>	<6.5>	2.9	<11.4>	18	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	1mm以下砂粒少量	良	ロクロナデ・削り出し高台 長石釉全面施釉	ロクロナデ 鉄絵・長石釉施釉	志野織部 連房Ⅰ期
328	PL33	SD188-1	12c北	SD188	埋土23層北	—	近世末	陶器(炻器質)	瀬戸美濃連房	染付皿	口縁~底部	口1/8未満 底4/8	<12.7>	<8.4>	3.8	<13.0>	104	10Y7/1 灰白	10Y7/1 灰白	1mm以下白・黒色粒砂少量。空隙多	やや不良	ロクロナデ・削出高台(蛇目凹高台)染付・透明釉全面施釉 高台内輪状有拭き取り	ロクロナデ 透明釉	連房Ⅳ・Ⅴ期
329	—	SM005-1	3b・4a	SM005	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	小碗	口縁~体部	口1/8未満	<10.0>	—	(2.4)	<10.2>	4	7.5YR2/1 黒	7.5YR2/1 黒	1mm以下砂粒。緻密	良	ロクロナデ 鉄釉施釉	ロクロナデ 鉄釉施釉	時期詳細不明
330	PL33	SL001-1	1	SL001	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	鬢水入れ	口縁~底部	口1/8 底1/8	<4.2>	<4.0>	3.7	<4.2>	10	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	1mm程度砂粒。緻密	良	タタラ作り 灰釉浸掛 外底無釉	タタラ作り 灰釉浸掛	連房Ⅲ期
331	PL33	SL008-1	3b・4a	SL008	埋土	1	近世	磁器	伊万里	小碗	体~脚部	—	—	—	(1.7)	—	28	N-8 灰白	N-8 灰白	灰白色緻密。砂粒含まず	良	ロクロナデ 削出高台 染付・透明釉全面施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	肥前陶磁Ⅳ・Ⅴ期

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	産地	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置								口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
332	PL33	SD193-1	12c南	1トレンチ	埋土南(SD191と同一)	—	近世	陶器	唐津か	碗	口縁~体部	口1/8	<13.0>	—	(4.0)	<13.4>	16	2.5YR8/2灰白	2.5YR8/2灰白	白色微細粒少量。緻密	良	ロクロナデ 呉須絵・透明釉施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	肥前陶磁Ⅱ・Ⅲ期か
333	PL33	1区西カク乱-1	1西	かく乱	北東	—	近世	磁器	伊万里	小碗(土製円盤)	底部	—	2.8	—	(1.4)	4.1×3.4	20	2.5GY7/1明ｵﾘｰﾌﾞ灰	2.5GY7/1明ｵﾘｰﾌﾞ灰	非常に緻密	良	ロクロナデ 削出高台 染付・畳付以外透明釉全面施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	肥前陶磁Ⅳ・Ⅴ期 周囲打欠き土製円盤
334	PL33	2区1検-1	2	—	1面	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	掛分皿	体~底部	底1/8	—	<3.8>	(1.4)	—	16	鉄釉 7.5YR4/3褐	鉄釉 7.5YR4/3褐	1mm以下砂粒少量。灰白色緻密	良	ロクロナデ 付高台 鉄釉 灰釉掛け分け	ロクロナデ 鉄釉 灰釉掛け分け	連房Ⅲ期
335	—	3b区1検-1	3b・4a	—	1面	—	近世	陶器	唐津	小碗	口縁～体部	口1/8未満	<7.8>	—	(3.7)	<8.0>	9	釉:5Y2/2ｵﾘｰﾌﾞ黒 10YR5/3	釉:5Y2/2ｵﾘｰﾌﾞ黒	白色粒他細砂多量。しまる。赤褐色。緻密	良	ロクロナデ 鉄釉浸掛	ロクロナデ 鉄釉浸掛	肥前陶磁Ⅱ期か
336	—	5b区2~3T 7b層-1	5b	2~3トレンチ	7b層	—	近世	陶器	瀬戸美濃連房	丸碗	口縁~体部	口2/8	<11.6>	—	(5.2)	<12.2>	29	5Y7/2灰白	5Y7/2灰白	微細砂粒少量。密	良	ロクロナデ 灰(御深井)釉施釉	ロクロナデ 灰(御深井)釉施釉	連房Ⅳ期か
337	PL33	12c区北13・14(7)層-	12c北	—	1面	—	近世	陶器	唐津	碗	口縁~体部	口1/8	<11.5>	—	(3.6)	<11.8>	12	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	白・黒色微細粒砂多。粗胎緻密。	良	ロクロナデ 透明釉施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	肥前陶磁Ⅱ・Ⅲ期
338	PL33	12c区北9(3)層-2	12c北	—	1面	—	近世	磁器	伊万里	碗	口縁~体部	口1/8	<13.4>	—	(4.9)	<13.6>	22	7.5GY3/1明緑灰	7.5GY3/1明緑灰	緻密砂粒微量。(黒色微細粒少量)	良	ロクロナデ 染付・透明釉施釉	ロクロナデ 透明釉施釉	肥前陶磁Ⅲ期か
339	PL33	12c区北9(3)層-1	12c北	—	1面	—	近世	陶器	唐津	擂鉢	口縁~体部	口1/8未満	<33.2>	—	(3.3)	<34.0>	44	2.5YR3/2明赤褐	2.5YR5/4にぶい赤褐	白・黒色微細粒少量	良	ロクロナデ 口縁鉄釉・体部無釉	ロクロナデ 卸目 口縁鉄釉	肥前陶磁Ⅲ期

付表９　石川条里遺跡　土製品一覧

［図版94］

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	器種	法量				外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
			地区名	遺構名・地点	層位・位置			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)					
1	PL34	土製品6	1	SK062	埋土	－	土錘	4.8	1.7	1.7	11	10YR3/1 黒褐	－	1mm以下細砂多量(白・黒・赤色粒)	やや不良	棒に粘土巻き付けナデ
2	PL34	土製品3	1	SK177	埋土	1	土錘	4.6	2.0	2.0	16	10YR6/2 灰黄褐	－	1mm前後砂多量(白・黒色粒多、赤色粒・石英少)	やや不良	棒に粘土巻き付けナデ
3	PL34	土製品1	1	SD001	埋土	3	土錘	(2.9)	(1.4)	(1.3)	4	7.5YR7/2 明褐灰	－	1mm以下微細砂多量	やや不良	棒に粘土巻き付けナデ
4	PL34	土製品8	1	SD001	埋土	－	土錘	<4.8>	1.9	(1.9)	13	7.5YR6/4～5/3 にぶい橙～にぶい褐	－	1mm以下細砂多量(白・黒・赤色粒多、微細石英少量)	良 2次焼成か	棒に粘土巻き付けナデ
5	PL34	土製品2	1	SD002	埋土	1	土錘	4.6	1.3	1.2	5	5YR3/2 暗赤褐	－	1mm以下微細砂多量(白・黒色粒・石英等)	良 2次焼成か	棒に粘土巻き付けナデ
6	PL34	土製品7	1	SD088	埋土	－	土錘	(4.3)	1.9	2.0	14	5YR4/4 にぶい赤褐	－	1mm以下細砂多量(白・黒・赤色粒多、石英少量)	良 2次焼成か	棒に粘土巻き付けナデ
7	PL34	土製品4	1	－	北壁	－	土錘	5.9	2.6	2.3	27	10YR7/3 にぶい黄橙	－	1mm前後砂少量(白・黒・赤色粒多、石英少)	やや不良	棒に粘土巻き付けナデ 酸化鉄付着
8	PL34	土製品5	1	Z	－	－	土錘	5.0	2.1	1.9	15	2.5YR6/4 にぶい橙	－	1mm以下細砂多量(白・黒・赤色粒)	良 2次焼成か	棒に粘土巻き付けナデ
9	PL34	土製品9	1	SK356	埋土	1	土錘	5.8	2.9	2.6	45	10YR6/2 灰黄褐	－	1～2mm粗砂少量(白・黒・赤色粒多量)	やや不良	棒に粘土巻き付けナデ(板状平坦面押しあてナデ)
10	PL34	土製品10	1	SK356	埋土	2	土錘	6.8	3.1	3.0	63	7.5YR5/8 明褐	－	1mm以下細砂少量。1～2mm砂少量(白・赤色粒多、黒色粒少量)	良	棒に粘土巻き付け外面指圧痕、ナデ
11	PL34	土製品11	1	SK356	埋土	3	土錘	6.7	2.7	2.7	50	10YR7/3 にぶい黄橙	－	1mm以下細砂少量(白・黒・赤色粒)	良	棒に粘土巻き付け指圧痕、ナデ
12	PL34	土製品12	9	SX002	埋土	252	ミニチュア土器	口径3.0	底径2.0	器高2.6	18	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR3/1 黒褐	1mm前後砂多量(白・黒・赤色粒多、石英少量)	やや不良	
13	PL34	土製品15	1	SD086	埋土	－	土製円盤	3.5	1.70	0.90	7	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/2 灰褐	1mm以下細砂多量。1~2mm砂少量(白・黒・赤色粒・微細石英少量)	良	周囲研磨
14	PL34	土製品16	12c北	SD188	埋土 北 23層	－	土製円盤	3.8	3.5	1.8	25	N-3 暗灰	N-3 暗灰	1mm以下細砂微量(白色粒・石英)	良 燻焼	周囲打ち欠き

付表10　石川条里遺跡　玉類一覧

［図版94］

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	器種	材質	法量				孔径(mm)		穿孔方法	欠損
			地区名	遺構・地点	層位・位置				全長(mm)	幅・直径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	上(mm)	下(mm)		
1	PL34	玉2	1	SD100	埋土	2	勾玉	メノウ	24.5	15.0 頭部長9.8	7.0	3.0	1.4	1.4	片側	
2	PL34	玉14	9	－	1面7層	4	勾玉	不明(滑石か)	20.2	12.8 頭部長8.1	5.5	1.5	2.0	2.0	片側	裏欠損部有
3	PL34	玉1	1	SD100	5面	1	管玉	緑色凝灰岩	44.5	(11.0)	－	3.9	4.0	2.0	両側	半分欠損
4	PL34	玉3	1	－	2面	5	管玉	緑色凝灰岩(やや灰色)	26.5	9.3	－	3.0	3.8	4.5	両側	完形
5	PL34	玉4	4b	－	南東部最終検出面	1	管玉	緑色凝灰岩	16.9	4.3	－	0.6	2.2	1.8	両側	下部欠損
6	PL34	玉11	9	－	1面	1	管玉	緑色凝灰岩	22.2	7.5	－	1.6	3.0	2.5	両側	微
7	PL34	玉12	9	－	1面	2	管玉	緑色凝灰岩か	16.0	4.3	－	0.3	2.5	2.1	両側	微
8	PL34	玉13	9	－	1面7a層	3	管玉	緑色凝灰岩	(15.2)	4.3	－	0.3	2.2	2.2	両側	下端欠損 玉16と接合
8	PL34	玉16	9	－	1面7a層	16	管玉	緑色凝灰岩	(12.2)	4.5	－	0.2	2.0	2.0	両側か	上端欠損 玉13と接合
9	PL34	玉10	5b	－	北側検出面	－	小玉	ガラス(紺色)	－	長径7.5 短径6.8	4.5	0.2	1.7	1.7	－	完形
10	PL34	玉15	9	1トレンチ	2面	15	小玉	滑石か	9.3	6.0	6.4	0.4	2.8	2.8	片側か	完形
11	PL34	玉5	4c	SM005	埋土	－	数珠玉	水晶	－	7.8	4.6	0.2	1.2	1.2	片側	微
12	PL34	玉6	4c	SM005	埋土	12	数珠玉	水晶	－	7.2	4.1	0.2	1.2	1.2	片側	微
13	PL34	玉7	4c	SM005	埋土	13	数珠玉	水晶	－	7.2	4.5	0.2	1.0	1.0	片側か	1/8欠損
14	PL34	玉8	4c	SM005	埋土	14	数珠玉	水晶	－	5.8	3.8	0.1	1.2	1.2	片側	完形
15	PL34	玉9	4c	SM005	埋土	15	数珠玉	水晶	－	6.9	3.8	0.1	1.3	1.3	片側	微

付表11　石川条里遺跡　石器・石製品一覧　［図版95～99］

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	石材	器種	法量				備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
1	PL35	打製石鏃1	1	－	5面	－	黒曜石	打製石鏃	2.3	(1.4)	0.4	0.7	先端角60° 開き角140° Ⅱb※
2	PL35	削器1	1	－	5面	－	黒曜石	削器	3.6 刃部長2.4	2.3	0.6 刃角73°	5.8	
3	PL35	打製石斧1	1	SD023	埋土上層	－	安山岩	打製石斧	(10.3)	8.2	3.1	389.3	
4	PL35	打製石斧2	11c	SC101	埋土	25	安山岩	打製石斧	(11.9)	7.2	2.6	363.0	
5	PL35	打製石斧3	9	SX002	埋土底面	－	安山岩	打製石斧	11.4	6.8	2.6	229.8	
6	PL35	刃器3	1	SD126	埋土	－	緑色凝灰岩	打製大型刃器	(6.6) 刃部長1.1	6.5 刃部幅5.5	1.9 刃角32°	82.5	
7	PL35	刃器7	9	SX002	埋土	224	珪質泥岩	打製大型刃器	9.8 刃部長0.8	7.1 刃部幅5.0	1.6 刃角32°	104.7	完存
8	PL35	刃器1	1	－	2面	－	頁岩	打製大型刃器	(8.1) 刃部長1.0	6.2 刃部幅6.5	1.5 刃角55°	64.7	
9	PL35	刃器2	1	－	5面	－	砂岩	打製大型刃器	(5.7)	5.1 刃部幅3.2	0.7 刃角20°	25.6	
10	PL35	刃器4	3b･4a	－	4面	2	珪質泥岩	打製大型刃器	(6.4) 刃部長1.3	5.1 刃部幅4.4	0.8 刃角25°	20.9	
11	PL35	刃器5	3b･4a	－	4面	－	頁岩	打製大型刃器	12.6 刃部長3.3	8.8 刃部幅7.5	2.4 刃角30°	191.8	完存
12	PL35	刃器6	7b･8	－	1面	－	珪質泥岩	打製大型刃器	(5.1)	5.3 刃部幅4.7	1 刃角40°	26.3	
13	PL35	太型蛤刃石斧1	1	－	2面	－	緑色岩	太型蛤刃石斧	13.6 刃部長1.4	5.7 刃部幅5.5	3.8 刃角70°	520.5	頭部1-ｂ両刃※ 完存
14	PL35	定角式磨製石斧1	3b･4a	SD043	埋土	1	蛇紋岩	磨製定角式石斧	10.3	5.0	1.7	127.3	
15	PL35	環状石斧(未成品)1	1	SD100	埋土	－	玄武岩質岩石	環状石斧未成品	13.6	(6.9)	2.7 刃角60° か	379.7	
16	PL35	未成石器1	1	SD023	埋土下層	－	珪質泥岩	石器未成品	8.4	4.4	1.3	77.3	
17	PL36	凹石3	1	SK017	埋土	－	多孔質安山岩	凹石	(6.2) 凹範囲 (表)(3.5)	10.1 凹範囲 (表)5.9	6.5 凹範囲 (表)3.8深	275.9	凹面(円形) 研磨
18	PL36	凹石1	1	SD009	埋土	－	安山岩	凹石	9.6 凹範囲 (表)4.9	9.0 凹範囲 (表)5.2	5.5 凹範囲 (表)0.6深	589.7	凹面円形 研磨
19	PL36	敲石1	1	SD001	埋土	－	安山岩	敲石	11.3 打痕範囲 (1)2.4 (2)2.5	4.3 打痕範囲 (1)2.4 (2)1.8	3.9	288.8	円礫
20	PL36	敲石2	3b･4a	SD061	埋土	－	流紋岩	敲石	13.4 打痕範囲 4.0	8.5 打痕範囲 1.5	3.3	576.4	
21	PL36	凹石2	3b･4a	SD061	埋土南	－	安山岩	凹石	10.5 凹範囲 (表)3.1	7.3 凹範囲 (表)2.6	3.4 凹範囲 (表)0.1深	327.0	凹面不整形 敲石か
22	PL36	敲石4	5b	SD154	埋土	－	淡緑色硬砂岩	敲石	12.0 打痕範囲 (1)1.4 (2)2.1	5.1 打痕範囲 (1)1.1 (2)1.0	3.4	291.2	
23	PL36	凹石5	10	SC105	埋土	9	安山岩	凹石	12.9 凹範囲 (表)3.2 2.7 (裏)3.6 3.6 1.8	9.6 凹範囲 (表)2.3 2.4 (裏)2.4 1.8 1.3	5.4 凹範囲 (表)0.6深 0.5深 (裏)0.5深 0.3深 0.2深	785.0	凹面不整形 敲石か
24	PL36	敲石6	9	1トレ	2面7c層	－	安山岩	敲石	12.8 打痕範囲 (1)5.6 (2)4.3	7.9 打痕範囲 (1)2.7 (2)2.5	5.6	823.6	
25	PL36	台石3	4c	SC044	1面北	1	安山岩	台石か	(19.0) 研磨範囲 16.0	(16.5) 研磨範囲 13.5	(6.0)	2905.0	
26	PL36	台石1	1	SK001	埋土	－	安山岩	台石	(13.2) 研磨範囲 12.1 12.2	(14.9) 研磨範囲 9.5 8.9	6.4	1636.0	

付表 11

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	石材	器種	法量				備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
27	PL37	磨り石10	3b・4a	SD061	埋土2層	－	多孔質安山岩	磨石か	8.6 研磨範囲 (表)7.4 (裏)6.4 (側1)6.4 (側2)5.1	5.9 研磨範囲 (表)4.1 (裏)4.8 (側1)2.9 (側2)0.9	3.9	212.1	
28	PL37	砥石13	10	SC105	埋土	1	砂岩	石皿	(14.3) 凹範囲 (表)2.9 2.8 2.2 (裏)3.2	(11.6) 凹範囲 (表)2.2 2.5 2.4 (裏)2.8	3.6 凹範囲 (表)0.3深 1.0深 0.5深 (裏)0.7深	854.0	砥石兼凹石 亜角礫
29	PL37	砥石3	1	SK001	埋土北東	－	凝灰岩	砥石	(4.7)	3.5	1.2	31.6	広面2面・側面2面研磨
30	PL37	砥石4	1	SK002	埋土	－	砂岩	砥石	(6.2)	6.2	2.5	132.3	断面長方形 4面研磨
31	PL37	砥石11	5b	SD147	埋土2層	－	砂岩	砥石	(8.3)	6.7	3.2	203.8	広面凹面
32	PL37	砥石7	1	－	1面	－	泥岩	砥石	(4.4)	(4.0)	0.5	8.6	広面2面研磨 線条痕あり
33	PL37	砥石8	1	－	1面	－	やや砂岩質の泥岩	砥石	(8.4)	4.0	1.9	73.5	カツオ節型 全面研磨
34	PL37	砥石18	12c北	SD190	埋土 北 3層	－	砂岩	砥石	(10.2)	5.5	3.3	238.4	
35	PL37	石臼・つき臼4	1東	SD129	埋土東	－	多孔質安山岩	石擂鉢	口径<31.8> 最大径 <32.4>	幅17.0 厚6.0	器高 (11.6)	819.3	
36	PL37	石臼・つき臼5	12c北	SD190	埋土3層	－	安山岩	石臼	口径<31.8> 底径<31.2> 最大径 <32.0>	幅23.2 厚10.0	器高 11.9	2689.0	
37	PL37	石錘1	1	SK356	埋土	4	安山岩	石錘	9.4	(7.7)	3.3	352.4	割れ
38	PL37	碁石1	4b	－	1面	－	不明(貝か)	碁石	2.1	2.1	0.6	2.9	白
－	－	凹石4	2	－	4面	－	安山岩	凹石	(7.9) 凹範囲 (表)2.1	7.1 凹範囲 (表)1.9	4.7 凹範囲 (表)0.3深	401.6	凹面不整形 敲石か
－	－	敲石3	1	－	埋土	－	安山岩	敲石	6.8 打痕範囲 3.1	5.7 打痕範囲 3.0	4.3	250.5	
－	－	敲石5	11b	SC058	埋土	112	安山岩	敲石	18.0 打痕範囲 3.9	7.0 打痕範囲 2.7	6.4	1157.3	
－	－	台石2	1	SK094	埋土	－	安山岩	台石	7.0 研磨範囲 4.0	5.9 研磨範囲 1.5	2.3	118.6	
－	－	磨り石1	1	SD023	埋土上層	－	安山岩	磨石	8.1 研磨範囲 (表)4.9 (裏)3.7	7.5 研磨範囲 (表)3.3 (裏)4.0	5.0	361.6	
－	－	磨り石2	1	SD023	埋土下層	－	安山岩	磨石	(5.8) 研磨範囲 (表)(5.5) (裏)(4.1)	7.1 研磨範囲 (表)5.8 (裏)5.4	5.2	344.6	
－	－	磨り石3	1	SD023	埋土西	－	安山岩	磨石	8.6 研磨範囲 (表)6.4 (裏)6.5	8.4 研磨範囲 (表)6.0 (裏)5.4	4.3	392.4	研磨やや不明瞭
－	－	磨り石4	1	SD023	埋土西	－	多孔質安山岩	磨石	5.8	5.8	4.3	135.3	研磨やや不明瞭
－	－	磨り石5	2	SD024	埋土	－	安山岩	磨石	8.5 研磨範囲 (表)7.3 (裏)6.7 タタキ範囲 (広)1.6 (側)5.2 1.4	8.3 研磨範囲 (表)7.3 (裏)6.2 タタキ範囲 (広)3.1 (側)1.2 1.3	2.7	256.7	広面と側面タタキ
－	－	磨り石6	3b・4a	SD058a	埋土3層	－	安山岩	磨石	(8.0) 研磨範囲 (表)(6.8) (裏)(4.9)	10.1 研磨範囲 (表)5.8 (裏)5.4	4.6	390.9	

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	石材	器種	法量				備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
－	－	磨り石7	3b・4a	SD058b	埋土	－	安山岩	磨石	(9.5) 研磨範囲 (表)(4.5) (裏)(7.3)	(6.7) 研磨範囲 (表)(3.2) (裏)(6.0)	3.0	256.0	研磨やや不明瞭
－	－	磨り石8	3b・4a	SD061	埋土1層	－	多孔質安山岩	磨石	(6.6) 研磨範囲 (表)(4.3) (裏)(5.6)	(6.6) 研磨範囲 (表)(4.3) (裏)(5.4)	2.8	109.7	
－	－	磨り石9	3b・4a	SD061	埋土1層	－	安山岩	磨石	9.0 研磨範囲 (表)7.0 (裏)6.9	7.6 研磨範囲 (表)5.9 (裏)6.0	4.1	438.1	
－	－	磨り石11	4b、4c	SD066	埋土	－	安山岩	磨石	5 研磨範囲 (表)3.7 (裏)3.6	3.6 研磨範囲 (表)2.2 (裏)2.5	2.8	72.6	
－	－	磨り石12	1	SK006	埋土	－	斑レイ岩か	磨石	10.0 研磨範囲 (表)7.6 (裏)7.6	8.7 研磨範囲 (表)5.6 (裏)6.0	4.0	420.3	研磨不明瞭
－	－	磨り石13	1	SK006	埋土	－	砂岩	磨石	7.2 研磨範囲 (表)6.0 (裏)6.4	5.0 研磨範囲 (表)4.2 (裏)4.3	2.0	120.5	
－	－	磨り石14	1	SK012	埋土	－	安山岩	磨石	11.5 研磨範囲 (表)9.0 (裏)7.2	8.0 研磨範囲 (表)6.6 (裏)(4.0)	4.9	607.8	
－	－	磨り石15	1	SK012	埋土	－	安山岩	磨石	11.4	7.8	5.2	573.0	
－	－	磨り石16	1	SK041	埋土	－	安山岩	磨石	9.8 研磨範囲 (裏)6.7	8.4 研磨範囲 (裏)5.8	6.4	616.5	1面研磨不明
－	－	磨り石17	1	SK179	埋土	－	安山岩	磨石	10.7 研磨範囲 (表)5.8 (裏)6.9	8.5 研磨範囲 (表)4.8 (裏)5.0	5.3	647.8	
－	－	磨り石18	1	SK256	埋土	－	安山岩	磨石	9.7 研磨範囲 (裏)6.5	6.8 研磨範囲 (裏)3.9	4.8	400.0	1面研磨不明
－	－	磨り石19	1	SK256	埋土	－	多孔質安山岩	磨石	10.7 研磨範囲 (表)7.0	7.3 研磨範囲 (表)5.2	3.9	238.3	1面研磨不明
－	－	磨り石20	4b・4c	SK542	埋土	－	安山岩	磨石	7.0	5.8	2.0	129.2	研磨やや不明瞭
－	－	磨り石21	1	－	Ⅲ層上面	－	安山岩	磨石	4.4 研磨範囲 (裏)2.6	4.0 研磨範囲 (裏)2.4	3.9	93.2	
－	－	磨り石22	1西	SD023	埋土	－	安山岩	磨石	8.4 研磨範囲 (裏)4.9 (側1)4.6 (側2)5.7 (側3)3.4	7.4 研磨範囲 (裏)3.9 (側1)3.8 (側2)3.6 (側3)4.0	7.1	615.7	
－	－	磨り石23	1西	SD023	埋土	－	安山岩	磨石	10.7 研磨範囲 (表)7.8 (裏)8.0	6.1 研磨範囲 (表)4.2 (裏)4.0	4.5	464.6	
－	－	磨り石24	1西	SD023	埋土	－	安山岩	磨石	6.6 研磨範囲 (表)4.9 (裏)5.4	6.1 研磨範囲 (表)4.1 (裏)4.4	2.6	149.9	
－	－	磨り石25	1東	－	1面	－	多孔質安山岩	磨石	6.6 研磨範囲 (表)5.2 (裏)4.2	5.7 研磨範囲 (表)3.9 (裏)3.9	4.5	112.6	
－	－	磨り石26	7b・8	SC063	埋土	219	流紋岩	磨石	8.5 研磨範囲 (表)5.9 (裏)5.2	8.0 研磨範囲 (表)5.8 (裏)5.6	4.5	420.5	

付表 11

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	石材	器種	法量				備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
－	－	磨り石27	12c北	SD188	埋土23層	－	砂岩	磨石	(5.4) 研磨範囲(裏)(5.0)	(4.8) 研磨範囲(裏)(4.1)	1.8	65.5	
－	－	砥石1	3b・4a	SD058a	埋土	－	凝灰岩	砥石	7.9	2.9	2.1	76.3	広面2面研磨 ノコギリ切断痕あり
－	－	砥石2	3b・4a	SD061	埋土	－	凝灰岩	砥石	4.4	2.5	2.1	14.2	断面三角 2面のみ研磨
－	－	砥石5	1	SK002	埋土	－	安山岩	砥石	(9.7)	14.0	3.5	831.4	1広面2ヶ所(直交)研磨 線条痕あり
－	－	砥石6	1	－	東壁	－	頁岩	砥石	3.3	3.3	0.7	10.3	全面剥落 側面1面のみ研磨 砥石か
－	－	砥石9	2	7トレンチ	1面	－	泥岩	砥石	3.7	3.1	0.3	4.7	全面剥落 側面1面のみ研磨
－	－	砥石10	1西	SD024	埋土	－	凝灰岩	砥石	4.4	2.7	1.4	25.0	
－	－	砥石12	12a南	－	平安砂層	－	泥岩	砥石	3.9	2.1	0.8	9.1	広面1面のみ残 砥石か
－	－	砥石14	9	－	北西	－	頁岩	砥石	2.9	2.1	0.4	2.8	砥石か
－	－	砥石15	1	SD009・017	埋土	－	泥岩	砥石	3.3	2.0	0.3	2.7	全面剥落 広面1面のみ残
－	－	砥石16	5b	SD167	埋土	－	泥岩	砥石	3.0	2.4	0.6	6.3	広面1面と側面のみ残
－	－	砥石17	4b・4c	SK542	埋土	－	泥岩	砥石	3.2	2.3	0.4	3.8	全面剥落 砥石か
－	－	石臼・つき臼1	1	SD023	埋土下層	－	多孔質安山岩	ツキ臼か	幅8.3	厚3.9	器高6.9	139.3	
－	－	石臼・つき臼2	3b・4a	SD065	埋土	－	多孔質安山岩	ツキ臼か	幅6.9	厚3.7	器高10.0	145.9	
－	－	石臼・つき臼3	1	－	検出面	－	多孔質安山岩	ツキ臼	幅5.8	厚2.5	器高3.9	30.7	
－	－	石核1	1	SD019	埋土	－	玉髄	石核	8.6	6.8	4.7	204.3	
－	－	石核2	3b・4a	SD063a	埋土	－	チャート	石核	3.1	2.5	1.9	11.6	
－	－	石核3	1	SK004	埋土	－	チャート	石核	2.1	1.7	1.3	3.7	
－	－	石核4	12c北	－	9(3)層	－	チャート	石核	4.4	3.6	1.0	16.5	
－	－	石核5	12c北	－	9(3)層	－	鉄石英	石核	1.9	3	1.3	6.3	
－	－	石核6	12c中	－	9(3)層	－	玉髄	火打ち石	2.3	4.6	1.6	14.8	側辺に細かい敲打痕あり
－	－	UF1	1	－	3面	－	黒曜石	UF	4.6	3.6	0.9	6.3	
－	－	UF2	4b	－	1面南東	－	黒曜石	UF	2.0	2.8	0.5	2.4	
－	－	RF1	3b・4a	9トレンチ	北壁	－	黒曜石	RF	1.9	1.6	1.2	3.1	
－	－	RF2	4b	Z	－	－	黒曜石	RF	3.0	2.8	1.6	12.9	
－	－	磨製石庖丁(成品)1	1	SD002	北側埋土	－	頁岩	磨製石庖丁(成品)	(2.0)	4.0	0.3	3.0	石包丁か
－	－	磨製石庖丁(成品)2	4b	5トレンチ	5層東	－	珪質泥岩	磨製石庖丁(成品)	(3.3)	(3.0)	0.6	6.0	
－	－	石英1	3b・4a	SD061	埋土1層	－	石英	火打石	2.0	1.8	1.4	7.6	水晶結晶状(白濁 角摩耗)
－	－	石英2	1	－	埋土	－	石英	火打石	1.5	4.0	4.0	0.3	石核状(角摩耗)
－	－	石英3	3b・4a	－	2面	－	石英	火打石か	2.9	1.9	1.6	13.8	石英六角柱状結晶の側片(小片)
－	－	軽石1	3b・4a	SD061	埋土1層	－	軽石	不明	6.2	3.0	2.1	13.1	削、研磨(溝状) 欠損片
－	－	軽石2	3b・4a	SD061	埋土1層	－	軽石	小円礫状	3.5	3.4	2.0	7.4	研磨痕不明瞭 自然円礫の可能性あり
－	－	軽石3	3b・4a	SD061	埋土1層	－	軽石	小円礫	3.2	2.4	1.9	5.0	自然円礫
－	－	軽石4	3b・4a	SD061	埋土南側	－	軽石	三角錐状	5.7	3.5	3.0	11.3	研磨
－	－	軽石5	4b	SK515	埋土	－	軽石	小円礫状	5.3	2.6	2.0	5.4	研磨? 半分以上欠損
－	－	軽石6	4b	SK515	埋土	－	軽石	不明	2.6	1.9	1.3	1.5	一部研磨 小片
－	－	軽石7	4b	トレンチ	上面	－	軽石	円礫	10.5	8.7	4.7	144.4	自然円礫
－	－	軽石8	3b・4a	SC043	埋土	－	軽石	不明	3.3	3.2	1.6	4.8	研磨 欠損小片
－	－	軽石9	3b・4a	微高地	－	－	軽石	不明	3.3	2.6	1.1	2.9	研磨? 欠損小片
－	－	軽石10	7b・8	SC063・064	埋土	－	軽石	小円礫状	4.6	4.2	2.8	13.8	研磨
－	－	軽石11	5b	SQ001	埋土	6	軽石	小円礫状	4.0	3.2	1.4	5.7	研磨
－	－	軽石12	5b	－	1面7層	－	軽石	小円礫状	34	21	2.2	4.6	研磨
－	－	軽石13	5b	－	1面7層	－	軽石	不明	2.4	1.3	8.0	1.1	欠損小片
－	－	軽石14	5b	－	1面7層	－	軽石	円礫	3.7	2.5	2.3	6.7	自然円礫
－	－	軽石15	5b	1トレンチ	下層	－	軽石	不明	3.4	3.3	1.6	3.2	削? 欠損小片
－	－	軽石16	5b	－	12a層	－	軽石	不明	2.8	2.3	1.1	1.8	欠損小片

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	石材	器種	法量				備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
—	—	軽石17	5b	1トレンチ	14層	—	軽石	小円礫	4.1	3.2	2.4	7.8	自然円礫
—	—	軽石18	5b	1トレンチ	14層	—	軽石	小円礫	3.6	2.5	1.3	2.7	自然円礫小片
—	—	軽石19	5b	4トレンチ	灰色シルト	—	軽石	小円礫	4.1	2.5	2.5	5.9	自然円礫
—	—	軽石20	5b	4トレンチ	灰色シルト	—	軽石	円礫状?	3.9	2.9	2.4	6.9	研磨 1/4ほどの破片
—	—	軽石21	5b	ⅦY12	灰色シルト	—	軽石	小円礫	2.2	1.8	1.1	1.2	自然円礫
—	—	軽石22	5b	ⅦY12	灰色シルト	—	軽石	不明	4.2	3.5	2.6	10.1	研磨(浅い溝状) 欠損小片
—	—	軽石23	5b	ⅦY12	灰色シルト	—	軽石	小	2.6	2.5	1.1	1.9	
—	—	軽石24	7a	—	1面7層	—	軽石	小円礫	3.2	3.0	1.2	4.0	自然円礫
—	—	軽石25	7a	—	1面北西	—	軽石	小円礫	5.1	5.0	2.2	15.0	自然円礫
—	—	軽石26	11b	—	1面上層	—	軽石	小円礫	2.7	2.0	1.3	2.1	自然円礫
—	—	軽石27	11b	—	1面上層	—	軽石	小円礫	2.3	1.7	1.2	1.0	自然円礫
—	—	軽石28	3b・4a	SD039	金属(No.28011)内	—	—	—	5.5	4.2	3.9	21.0	加工痕なし
—	—	軽石29	—	5トレンチ	5層	—	軽石	円礫	5.9	4.3	2.5	23.7	

※町田勝則1999『松原遺跡　弥生中期・石器本文』掲載の各器種の属性項目を参照のこと

付表12　石川条里遺跡　金属製品一覧　［図版100～102］

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	材質	遺物名称	法量				備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	
1	PL38	28033	1	ST001	Pit4	—	鉄か	釘	3.30	0.60	4.0	1.2	
2	PL38	28021	1	SK007	埋土	—	鉄	釘	3.20	0.50	4.0	0.7	
3	PL38	28023	1	SK012	埋土	2	鉄	釘	5.40	0.45	3.0	1.3	
4	PL38	28024	1	SK012	埋土1・2層西半部	—	鉄	釘か	3.30	0.55	3.5	1.3	
5	PL38	28039	1	SK012	埋土1層	—	鉄	釘	4.30	0.60	4.0	1.6	
6	PL38	28028	1	SK042	埋土	1	鉄	釘	4.50	0.35	3.0	2.0	
7	PL38	28001	1	SD001	埋土南側	1	鉄	釘	2.30	0.60	4.0	0.6	
8	PL38	28006	1	SD016	埋土	1	鉄	釘	3.50	0.40	4.0	0.9	
9	PL38	28041	3a	SD034	埋土	—	鉄	釘	2.60	0.65	6.0	1.6	
10	PL38	28016	1	SD080	埋土	4	鉄か	釘	7.40	0.60	4.0	1.9	
11	PL38	28017	1	SD084	埋土	—	鉄か	釘	2.10	0.65	6.0	1.4	小片
12	PL38	28035	1	—	北壁Ⅱ層中(ST003北側)	—	鉄	釘か	4.50	0.65	4.5	1.6	
13	PL38	28036	4b	—	1面	—	鉄	釘	3.55	0.60	3.5	1.4	板状の鉄
14	PL38	28019	1	SK002	埋土2層	—	鉄か	締金具	3.50	0.60	1.5	0.5	
15	PL38	28008	1	SD009	埋土	—	鉄	締金具	4.40	0.45	7.0	1.6	
16	PL38	28030	1	SK196	埋土	1	鉄	鉄鏃か	11.75	0.70	6.5	5.7	
17	PL38	28004	1	SD002	埋土	2	鉄	鉄鏃	6.50	0.70	7.0	1.2	
18	PL38	28018	1	SD088	埋土	—	鉄か	鉄鏃	7.10	0.45	4.0	1.0	
19	PL38	29001	1西	SD125	埋土	—	鉄	鉄鏃	5.60	7.80	6.0	3.5	
20	PL38	28040	1	Z	—	—	鉄	鉄鏃か	2.20	0.30	3.0	0.3	
21	PL38	28029	1	SK156	埋土	—	鉄	鍋	7.00	4.50	10.0	24.1	板状 鋳物か
22	PL38	28027	1	SK017	埋土	—	鉄	刀子	6.30	1.40	2.0	2.0	
23	PL38	28002	1	SD001	埋土	2	鉄	刀子	6.40	1.05	30.0	2.0	
24	PL38	28003	1	SD001	埋土南東スミ	3	鉄	刀物	4.75	2.65	1.0	2.0	
25	PL38	28015	3b・4a	SD065	埋土	—	鉄	刀子	3.95	0.90	5.0	2.4	2片(1片接合せず)

付表 12

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	材質	遺物名称	法量				備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	
26	PL38	03001	12c北	SD191	埋土９層	1	銅	鏃形	21.79(外) 22.44(内)	9.20(外) 9.80(内)	1.00(外) 1.20(内)	64.7(外) 69.0(内)	
27	—	30001	7a	SD138	埋土	—	銅	飾り金具	5.10	1.62	4.6	7.0	
28	—	28007	1	SD017	埋土	2	銅(青銅)	不明銅製品	2.90	0.45	2.2	0.5	2片接合 幅5mmで直線的な板状製品
29	PL38	03002	12c北	SC111	西 江戸面(2)掘り下げ	—	青銅	刀子か 小柄の鞘	2.90	1.60	1.0	2.6	
30	PL39	28049	1	SK001	埋土	1	銅	銭貨	銭径2.12	内径0.59	1.1	2.4	祥符元宝(寶)北宋1009
31	PL39	28048	1	SK004	埋土3層	4	銅	銭貨	銭径2.21	内径0.58	0.7	2.5	元豊通宝(寶)(篆書)北宋1078
32	PL39	28050	1	SK005	埋土中央ベルト内上層1層目	—	銅	銭貨	銭径2.41	内径0.65	0.6	2.5	元祐通宝(寶)北宋1086
33	PL39	28052	1	SK041	埋土	1	銅	銭貨	銭径2.43	内径0.66	0.8	3.0	元祐通宝(寶)(篆書)北宋1086
34	PL39	28053	1	SK041	埋土	2	銅	銭貨	銭径2.42	内径0.71	0.8	2.8	元祐通宝(寶)(行書)北宋1086
35	PL39	28054	1	SK055	埋土	1	銅	銭貨	銭径2.22	内径0.60	0.8	1.7	咸平元宝(寶)北宋998
36	PL39	28057	1	SK269	埋土	1	銅	銭貨	銭径2.41	内径0.59	1.1	3.0	元豊通寶(篆書)北宋1078
37	PL39	28058	1	SK273	埋土	—	銅	銭貨	銭径2.14	内径0.75	1.0	1.8	皇宋通寶(真書)北宋1038
38	PL39	28045	1	SD009	埋土	3	銅	銭貨	銭径2.49	内径0.63	1.0	3.6	天禧通宝(寶)北宋1017
39	PL39	28046	1	SD080	埋土	2	銅	銭貨	銭径2.48	内径0.58	0.7	2.3	祥符元寶 北宋1009
40	PL39	28061	3b･4a	SM005	埋土	16	銅	銭貨	—	—	1.2	1.0	天聖元寶(真書)北宋1023
41	PL39	28060	1	Z	—	—	銅	銭貨	銭径2.37	内径0.65	0.9	2.4	聖宋元寶(篆書)北宋1101
42	PL39	28047	1	SD086	埋土	1	銅	銭貨	タテ4.87 幅3.18	内径0.61	2.0	18.4	天保通宝(寶)
43	PL39	28055	1	SD087	埋土	—	銅	銭貨	銭径2.11	内径0.68	0.4	1.4	寛永通寶か
44	PL39	03004	12c北	SD188	埋土上層	—	銅	銭貨	銭径2.41	内径0.55	1.1	3.6	寛永通寶
45	PL39	03005	12c	—	表採	—	銅	銭貨	銭径2.76	内径0.66	1.1	4.8	寛永通寶
46	PL39	03006	12c	—	表採	—	銅	銭貨	銭径2.23	内径0.63	0.7	1.6	寛永通寶
47	PL39	28059	4b	Z	—	—	銅	銭貨	銭径2.31	内径0.58	1.2	3.4	寛永通寶
48	PL39	28051	1	SK011	埋土	1	銅	銭貨	銭径2.23	—	1.2	1.6	不明(腐食で不読)
49	PL39	28056	1	SL013	埋土	1	銅	銭貨	—	—	0.6	0.5	不明(摩耗で不読)
—	—	28005	1	SD002	埋土	—	鉄	鉄滓	2.07 1.91	1.96 1.41	14.5 13.6	13.7 (2点合計)	2点
—	—	28009	3b･4a	SD037	埋土	—	鉄	不明	2.71	1.67	11.6	3.2	断面丸形の先端湾曲棒状製品
—	—	28012	3b･4a	SD043	埋土	—	銅	キセル(吸口)	2.67	0.94	7.4	1.0	
—	—	28013	3b･4a	SD043	埋土	—	鉄	鉄滓	6.62	5.48	30.2	96.9	
—	—	28014	3b･4a	SD063a	埋土1層	—	鉄	鉄滓	7.16 3.55 1.57	5.24 2.79 1.53	26.5 23.6 10.9	124.8 (3点合計)	3点
—	—	28020	1	SK007	埋土	—	鉄	鉄滓	3.03	2.75	19.0	13.1	
—	—	28022	1	SK009	埋土1層	—	鉄	鉄滓	12.80 8.65 2.44 2.05 1.34	11.10 4.55 2.67 1.87 1.08	71.0 27.0 14.5 9.0 9.6	1361 (5点合計)	5点
—	—	28025	1	SK012	埋土	—	鉄	刀子	4.00 3.10	2.85 2.96	19.0 15.4	18.1 (2点合計)	2点 板状の鉄
—	—	28026	1	SK017	埋土	1	鉄	鉄滓	—	—	—	54.6 (小片合計)	小片多数
—	—	28031	1	SL001	埋土	1	鉄	板状鉄製品	(最大片)2.63	(最大片)2.02	(最大片)12.2	22.4 (小片合計)	小片多数
—	—	28032	1	SL001	埋土	2	鉄	板状鉄製品	2.96	2.26	9.0	4.3	板状の鉄 腐食顕著 刀子か 28025に類似
—	—	28034	1	ST001	Pit11	—	鉄	不明	2.25	2.36	11.0	4.2	
—	—	28037	3b･4a	—	1面	—	鉄	鉄滓	4.86	4.73	21.8	59.3	
—	—	28038	3b･4a	—	1面	—	鉄	鉄滓	7.38	5.28	33.0	97.3	
—	—	28042	3b･4a	—	—	—	鉄	鉄滓	8.30	6.80	47.0	130.4	
—	—	28043	1	SD001	埋土東	—	鉄	刀子か	2.69	2.39	9.9	6.9	
—	—	28044	1	SL001	埋土	—	鉄	刀子か	3.26	2.74	10.5	8.6	
—	—	29002	1西	SD126	埋土	—	銅	キセル(吸口)	6.59	径1.07	—	7.0	
—	—	29003	1西	—	北東隅	—	銅	キセル(雁首)	4.36	1.41	13.3	13.5	

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	材質	遺物名称	法量				備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	
—	—	29004	3b・4a	—	2面	—	鉄	鉄滓	3.07 2.16	1.52 1.69	9.5 6.7	4.6 (2点合計)	2点
—	—	29005	3b・4a	—	2面	—	鉄	鉄滓	3.04	2.65	14.0	6.7	
—	—	29006	3b・4a	—	2面	—	鉄	鉄滓	2.62	2.35	10.8	10.1	
—	—	30002	5b	SD146	埋土	—	鉄	鉄滓	2.22	1.91	14.5	8.3	
—	—	03003	12c北	SD190	埋土 2・3層	—	鉄	鉄鍋	3.08	2.34	4.7	5.9	

※下線文字は保存処理前の法量

付表13　石川条里遺跡　木製品一覧 ※含長谷鶴前遺跡群 古代木製品（報告書掲載分）　［図版103～132］

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	器種	樹種	木取(手法)	法量			備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径・高さ(cm)	
1	PL40	BIKB 300117	7b・8	SC063	埋土	84	曲柄鍬か	クリ	柾目	22.3	8.5	2.0	
2	PL40	BIKB 310019	11a	SC089	埋土	—	曲柄二又鍬	コナラ属クヌギ節	柾目	37.8	7.8	2.0	ナスビ型か
3	PL40	BIKB 310021	11a	SC089	埋土	—	板材	モミ属	板目	34.9	7.5	1.9	
4	PL40	BIKB 310020	11a	SC089	埋土	—	建築部材	コナラ属コナラ節	板目	63.9	9.2	3.7	
5	PL40	BIKB 310039	11c	SC101	埋土	26	建築部材か	サワラ	板目	43.0	8.9	3.5	
6	PL40	BIKB 300079	7b・8	SC061・062	埋土	38	杭	ヤマグワ	追柾	24.5	5.7	3.4	
7	PL40	BIKB 300081	7b・8	SC061・062	埋土	40	杭	コナラ属クヌギ節	削出丸木	43.4	6.0	4.7	転用材
8	PL40	BIKB 300088	7b・8	SC061	埋土	68	杭	モミ属	削出丸木	48.1	2.9	2.8	転用材
9	PL40	BIKB 300087	7b・8	SC061	埋土	67	杭	クリ	分割角材	59.0	4.6	4.2	
10	PL41	BIKB 300077	7b・8	SC069	埋土	35	杭	クリ	芯持丸木	64.4	—	4.7	
11	PL41	BIKB 300103	7b・8	SC062	埋土	34	杭	クリ	分割角材	63.8	6.6	4.7	
12	PL41	BIKB 300104	7b・8	SC062	埋土	119	杭	コナラ属クヌギ節	削出丸木	20.1	4	3.8	転用材
13	PL41	BIKB 300105	7b・8	SC062	埋土	121	杭	クリ	ミカン割	53.1	8.5	6.5	
14	PL41	BIKB 300099	7b・8	SC062・065交点	埋土	4	杭	クリ	ミカン割	79.0	9.2	5.8	
15	PL41	BIKB 300045	7b・8	SC063	埋土	85	杭	コナラ属クヌギ節	ミカン割	29.5	4.1	5.0	
16	PL41	BIKB 300044	7b・8	SC063	埋土	83	杭	コナラ属クヌギ節	ミカン割	51.3	7.0	3.9	
17	PL41	BIKB 300100	7b・8	SC065	埋土	31	杭	コナラ属クヌギ節	削出丸木	44.6	6.0	5.5	転用材
18	PL41	BIKB 300074	7b・8	SC067	埋土	29	杭	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	36.9	5.0	5.3	
19	PL41	BIKB 300070	7b・8	SC067	埋土	15	杭	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	45.1	—	5.0	
20	PL42	BIKB 310064	9	SX002(1トレンチ)	2面	104	直柄横鍬	コナラ属クヌギ節	柾目	31.7	24.9	3.7	
21	PL42	BIKB 310073	9	SX002(1トレンチ)	2面	113	曲柄二又鍬	コナラ属クヌギ節	柾目	27.2	7.6	1.1	
22	PL42	BIKB 310062	9	SX002(1トレンチ)	2面	102	建築部材	モミ属	板目	142.8	17.5	5.4	
23	PL42	BIKB 310067	9	SX002(1トレンチ)	2面	107	建築部材(柱または小屋束)	カヤ	芯持丸木	69.1	12.6	11.7	
24	PL42	BIKB 310071	9	SX002(1トレンチ)	2面	111	建築部材	カエデ属	柾目	85.8	10.2	3.7	
25	PL43	BIKB 310120	9	1トレンチ	2面	47	杭	コナラ属コナラ節	芯持丸木	13.0	5.4	5.3	

付表 13

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	器種	樹種	木取(手法)	法量			備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径・高さ(cm)	
26	PL43	BIKB 310114	9	1 トレンチ	2面	41	杭	ヤマグワ	芯持丸木	26.5	7.8	6.1	
27	PL43	BIKB 310116	9	1 トレンチ	2面	43	杭	モミ属	分割角材	30.1	5.4	3.7	
28	PL43	BIKB 310084	9	1 トレンチ	2面	11	杭	モミ属	芯持丸木	32.6	4.3	3.5	
29	PL43	BIKB 310171	9	1 トレンチ	2面	301	杭	ヤマグワ	ミカン割	43.2	6.2	4.2	建築部材転用か
30	PL43	BIKB 310210	9	SC107	埋土	3	杭	クリ	削出	44.8	5.5	3.0	
31	PL43	BIKB 310186	9	1 トレンチ	2面	317	杭	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	50.9	—	6.7	
32	PL43	BIKB 310077	9	1 トレンチ	2面	4	杭	コナラ属コナラ節	半裁状	49.3	6.0	5.9	転用材か
33	PL43	BIKB 310228	9	—	—	3	杭	サワラ	板目	40.7	3.2	2.0	
34	PL43	BIKB 310078	9	1 トレンチ	2面	5	杭	クリ	分割材	57.0	5.9	5.9	
35	PL43	BIKB 310166	9	1 トレンチ	2面	95	杭	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	56.1	—	5.6	
36	PL43	BIKB 310134	9	1 トレンチ	2面	63	杭	コナラ属クヌギ節	ミカン割	56.5	4.4	4.2	
37	PL44	BIKB 310113	9	1 トレンチ	2面	40	杭	モミ属	芯持丸木	58.4	7.2	7.1	
38	PL44	BIKB 310211	9	SC107	埋土	4	杭	クリ	ミカン割	58.9	9.3	6.4	
39	PL44	BIKB 310217	9	SC107	埋土	10	杭	モミ属	芯持丸木	64.6	—	8.5	
40	PL44	BIKB 310101	9	1 トレンチ	2面	28	杭	コナラ属コナラ節	ミカン割	67.4	5.4	6.9	木屑転用か
41	PL44	BIKB 310085	9	1 トレンチ	2面	12	杭	コナラ属コナラ節	分割角材	67.4	10.5	5.8	
42	PL44	BIKB 310151	9	1 トレンチ	2面	80	杭	カツラ	芯持丸木	69.0	11.0	9.5	
43	PL44	BIKB 310215	9	SC107	埋土	8	杭	モミ属	芯持丸木	69.6	—	6.0	
44	PL44	BIKB 310216	9	SC107	埋土	9	杭	カヤ	ミカン割状	72.2	11.7	7.0	
45	PL45	BIKB 310063	9	1 トレンチ	2面	103	杭	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	73.1	—	6.8	垂木の転用か
46	PL45	BIKB 310209	9	SC107	埋土	2	杭	コナラ属コナラ節	ミカン割	73.6	9.8	6.4	
47	PL45	BIKB 310156	9	1 トレンチ	2面	85	杭	コナラ属コナラ節	ミカン割	65.0	9.0	5.8	横架材か建築部材等の転用か
48	PL45	BIKB 310076	9	1 トレンチ	2面	3	杭	モミ属	芯持丸木	74.0	—	10.2	
49	PL45	BIKB 310080	9	1 トレンチ	2面	7	杭か	コナラ属コナラ節	割材	74.3	10.2	6.4	断面蒲鉾型 建築部材転用か
50	PL45	BIKB 310208	9	SC107	埋土	1	杭	モミ属	芯持丸木	77.0	—	8.6	
51	PL45	BIKB 310212	9	SC107	埋土	5	杭	カヤ	半裁角材	79.3	10.0	6.8	
52	PL45	BIKB 310121	9	1 トレンチ	2面	48	杭	ケンポナシ属	ミカン割	84.0	12.4	8.3	
53	PL46	BIKB 310221	9	SC106	埋土	7	杭	カヤ	ミカン割	92.0	8.2	5.6	建築部材等の転用か
54	PL46	BIKB 310219	9	SC106	埋土	4	杭	カヤ	ミカン割	91.8	9.6	7.2	木屑利用
55	PL46	BIKB 310115	9	1 トレンチ	2面	42	杭	モミ属	芯持丸木	89.0	—	6.8	
56	PL46	BIKB 310102	9	1 トレンチ	2面	29	杭	クリ	半裁	92.4	10.8	4.0	
57	PL46	BIKB 310094	9	1 トレンチ	2面	21	杭	クリ	芯持丸木	93.5	—	5.6	
58	PL46	BIKB 310155	9	1 トレンチ	2面	84	杭	コナラ属コナラ節	柾目	97.6	6.8	4.9	
59	PL46	BIKB 310222	9	SC106	埋土	8	杭か	カヤ	ミカン割	102.3	11.4	8.4	横架材か 建築部材等の転用か

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	器種	樹種	木取(手法)	法量			備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径・高さ(cm)	
60	PL46	BIKB 310092	9	1トレンチ	2面	19	杭	クリ	半裁状	104.0	12.6	6.6	
61	PL47	BIKB 310214	9	SC107	埋土	7	杭	モミ属	芯持丸木	106.0	—	8.5	
62	PL47	BIKB 310091	9	1トレンチ	2面	18	杭	クリ	ミカン割	108.0	10.6	5.6	
63	PL47	BIKB 310097	9	1トレンチ	2面	24	杭	クリ	ミカン割	108.8	8.2	5.6	木屑転用か
64	PL47	BIKB 310128	9	1トレンチ	2面	56	杭	モミ属	芯持丸木	110.3	—	7.8	建築部材等の転用か
65	PL47	BIKB 310069	9	1トレンチ	2面	109	杭	コナラ属コナラ節	芯持丸木	117.5	6.4	5.8	建築部材等の転用か
66	PL48	BIKB 310226	9	—	1面6層	1	杭	クリ	板目	119.4	10.2	7.1	
67	PL48	BIKB 310220	9	SC106	埋土	5	杭	カヤ	ミカン割	127.6	8.6	5.2	木屑利用 柱材か
68	PL48	BIKB 310127	9	1トレンチ	2面	55	杭	カヤ	ミカン割	137.0	11.5	8.3	柱材か
69	PL48	BIKB 310230	9	SC106	埋土	1	杭	クリ	ミカン割	138.6	16.2	10.4	
70	PL49	BIKB 310232	9	SC106	埋土	9	杭	クリ	ミカン割	144.3	16.5	7.5	
71	PL49	BIKB 310231	9	SC106	埋土	3	杭	コナラ属コナラ節	芯持丸木	158.6	11.8	12.1	柱材か
72	PL51	BIKB 300038	11b	SC058	埋土	7	田下駄	サワラ	柾目	23.5	7.4	1.5	
73	PL51	BIKB 300009	11b	SC058	埋土	23	田下駄	サワラ	柾目	34.7	7.7	1.4	
74	PL51	BIKB 300036	11b	SC058	埋土	32	田下駄	サワラ	柾目	35.6	9.3	1.6	
75	PL51	BIKB 300022	11b	SC058	埋土	34	田下駄	サワラ	柾目	37.3	11.2	1.5	
76	PL51	BIKB 300002	11b	SC058	埋土	31	田下駄	サワラ	柾目	40.5	8.1	1.3	
77	PL51	BIKB 300037	11b	SC058	埋土	43	田下駄	モミ属	板目	37.8	10.3	1.4	
78	PL51	BIKB 300033	11b	SC058	埋土	35	田下駄	サワラ	柾目	40.9	8.8	1.5	
79	PL51	BIKB 300003	11b	SC058	埋土	26	田下駄	モミ属	柾目	42.2	7.4	1.3	
80	PL52	BIKB 300020	11b	SC058	埋土	33	田下駄	サワラ	板目	42.0	10.9	1.7	
81	PL52	BIKB 300004	11b	SC058	埋土	19	田下駄	サワラ	柾目	45.4	10.2	2.0	
82	PL52	BIKB 300023	11b	SC058	埋土	6	田下駄	サワラ	柾目	47.6	10.5	1.9	推定幅は14cm
83	PL52	BIKB 300021	11b	SC058	埋土	4	田下駄	モミ属	板目	55.0	12.2	2.6	建築部材の転用か
84	PL52	BIKB 300029	11b	SC058	埋土	8	田下駄	モミ属	板目	58.5	11.6	2.4	紐掛け有
85	PL53	BIKB 310013	12a北	SC081	埋土	14	田下駄	サワラ	柾目	18.4	7.6	1.6	
86	PL53	BIKB 310006	12a北	SC081	埋土	3	田下駄	サワラ	柾目	26.2	13.7	1.7	
87	PL53	BIKB 310012	12a北	SC081	埋土	13	田下駄	サワラ	柾目	39.7	11.1	1.9	
88	PL53	BIKB 310001	12a南	SC086	埋土	3	田下駄	サワラ	板目	40.0	10.0	1.7	
89	PL53	BIKB 310029	11c	SC092	埋土	6	田下駄	モミ属	板目	31.2	9.5	1.8	
90	PL53	BIKB 310028	11c	SC092	埋土	5	田下駄	サワラ	柾目	35.3	10.0	1.2	
91	PL54	BIKB 310027	11c	SC092	埋土	4	田下駄	サワラ	柾目	44.7	10.0	1.4	
92	PL54	BIKB 310024	11c	SC092	埋土	1	田下駄	サワラ	柾目	48.0	10.8	2.1	
93	PL54	BIKB 310026	11c	SC092	埋土	3	田下駄	サワラ	板目	50.3	11.4	2.3	建築部材の転用か

付表 13

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	器種	樹種	木取(手法)	法量			備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径・高さ(cm)	
94	PL54	BIKB 300028	11b	—	北側6層	3	田下駄	サワラ	柾目	49.0	11.7	1.9	紐掛け有
95	PL54	BHT 300045	長谷1	SC04	埋土	30	田下駄	サワラ	柾目	40.2	9.8	2.2	
96	PL54	BHT 300066	長谷1	SC04	埋土	51	田下駄	サワラ	柾目	35.8	9.6	1.5	
97	PL55	BHT 300035	長谷1	SC04	埋土	20	田下駄	サワラ	柾目	43.7	9.7	2.8	転用材か
98	PL55	BHT 300064	長谷1	SC04	埋土	49	田下駄	サワラ	柾目	45.8	10.6	3.2	転用材か
99	PL55	BHT 300032	長谷1	SC04	埋土	17	田下駄	モミ属	板目	49.4	10.4	2.3	
100	PL55	BHT 300031	長谷1	SC04	埋土	16	田下駄	サワラ	柾目	49.5	13.7	2.6	
101	PL55	BHT 300081	長谷1	SC11	埋土	10	田下駄	サワラ	柾目	46.9	13.2	1.2	抉り有 曲物底板→俎板→田下駄に転用か
102	PL55	BHT 300080	長谷1	SC11	埋土	9	田下駄	サワラ	追柾	48.9	13.3	1.3	曲物底板等の転用か
103	PL56	BHT 300075	長谷1	SC11	埋土	4	田下駄	サワラ	柾目	28.5	11.7	1.1	
104	PL56	BHT 300096	長谷1	SC11	埋土	25	田下駄	サワラ	板目	40.4	12.4	3.5（高さ7.1）	樋状製品の転用か
105	PL56	BHT 300014	長谷1	SC15	埋土	1	田下駄	サワラ	板目	45.0	8.7	1.5	
106	PL56	BHT 300010	長谷1	—	6面	8	田下駄	サワラ	追柾	36.2	9.6	1.6	
107	PL56	BHT 300007	長谷1	—	6面	2	田下駄	サワラ	柾目	38.7	13.6	2.8	
108	PL56	BIKB 300008	11b	SC058	埋土	25	田下駄か	サワラ	柾目	31.2	8.3	1.0	
109	PL56	BIKB 300007	11b	SC058	埋土	30	田下駄か	サワラ	柾目	40.1	4.4	1.4	
110	PL56	BIKB 310014	12a北	SC081	埋土	15	田下駄か	サワラ	柾目	18.7	5.1	1.3	
111	PL56	BIKB 310003	12a南	SC086	埋土	9	田下駄か	サワラ	板目	31.9	6.2	2.2	
112	PL57	BIKB 300034	11b	SC058	埋土	39	建築部材か	サワラ	板目	49.1	3.3	1.4	
113	PL57	BIKB 300030	11b	SC058	埋土	12	建築部材か	コナラ属クヌギ節	ミカン割	75.7	7.1	3.4	
114	PL57	BIKB 300024	11b	—	東端 1面	—	建築部材か	サワラ	柾目	62.0	4.4	2.4	
115	PL57	BIKB 300026	11b	—	東端	—	建築部材か	サワラ	分割角材	57.1	3.9	3.3	
116	PL57	BIKB 300025	11b	—	東側	—	建築部材	カヤ	板目	58.6	7.4	3.5	建築部材か
117	PL58	BIKB 310007	12a北	SC081	埋土	4	建築部材か	サワラ	柾目	38.4	7.0	1.0	
118	PL58	BIKB 310011	12a北	SC081	埋土	12	建築部材	サワラ	柾目	72.8	14.1	3.5	建築部材か
119	PL58	BIKB 310025	11c	SC092	埋土	2	建築部材	モミ属	柾目	66.0	13.5	3.1	
120	PL58	BIKB 300027	11b	—	北側6層	5	建築部材	サワラ	板目	62.4	19.9	3.2	
121	PL59	BIKB 300121	11b	SC058	埋土	17	建築部材か	サワラ	柾目	139.6	9.0	4.0	
122	PL59	BIKB 300119	11b	SC058	埋土	9	建築部材か	サワラ	板目	156.0	7.9	4.1	
123	PL59	BIKB 300120	11b	SC058	埋土	16	建築部材か	コナラ属コナラ節	半裁	158.8	12.4	6.0	
124	PL59	BIKB 310009	12a北	SC081	埋土	9	建築部材か	モミ属	板目	101.8	9.7	3.3	
125	PL59	BIKB 310005	12a北	SC081	埋土	2	建築部材か(柱材か)	サワラ	柾目	165.8	9.7	5.9	木屑か
126	PL59	BIKB 310223	11c	SC092	埋土	7	建築部材か	モミ属	柾目	102.9	18.1	3.2	板状木製品か
127	PL59	BIKB 310030	11c	SC092	埋土	9	建築部材	モミ属	板目	103.5	12.2	5.6	横架材か

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	器種	樹種	木取(手法)	法量			備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径・高さ(cm)	
128	PL60	BIKB 310234	11c	SC092	埋土	8	建築部材か	サワラ	柾目	243.2	14.0	4.0	
129	PL60	BIKB 310235	11c	SC093	埋土	2	建築部材か	カヤ	柾目	170.5	8.5	6.1	
130	PL60	BHT 300016	長谷1	SC04	埋土	1	建築部材	クリ	板目	202.5	20.5	14.0	
131	PL61	BHT 300052	長谷1	SC04	埋土	37	建築部材か	サワラ	柾目	134.0	23.0	3.0	
132	PL61	BHT 300084	長谷1	SC11	埋土	13	建築部材	モミ属	柾目	166.5	26.5	8.5	横架材か
133	PL62	BHT 300076	長谷1	SC11	埋土	5	建築部材(板状)	モミ属	板目	258.5	37.5	7.5	
134	PL63	BHT 300077	長谷1	SC11	埋土	6	建築部材か(板状)	モミ属	板目	266.0	26.5	4.0	
135	PL64	BIKB 300005	11b	SC058	埋土	22	建築部材か	サワラ	柾目	78.5	9.0	1.9	
136	PL64	BIKB 300011	11b	SC058	埋土	42	建築部材か	サワラ	柾目	63.7	9.5	1.4	
137	PL64	BIKB 300012	11b	SC058	埋土西	—	建築部材か	サワラ	柾目	62.9	7.1	2.7	
138	PL64	BIKB 300035	11b	SC058	埋土	36	建築部材か	ヒノキ科	柾目	36.7	5.7	1.0	
139	PL64	BIKB 310010	12a北	SC081	埋土	11	建築部材か	モミ属	板目	56.5	10.3	1.8	
140	PL64	BIKB 310008	12a北	SC081	埋土	7	建築部材か	サワラ	柾目	59.7	9.8	1.9	
141	—	BIKB 300006	11b	SC058	埋土	40	不明木製品	クリ	柾目	14.4	7.4	1.2	
142	PL64	BIKB 300019	11b	SC058	埋土	20	不明木製品	サワラ	柾目	14.5	9.0	1.6	
143	PL64	BIKB 310004	12a南	SC086	埋土	—	芯材(杭)	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	59.0	—	3.0	
144	PL64	BIKB 310227	11c	SC100	埋土	2	杭	サワラ	柾目	22.7	2.4	1.4	転用材か
145	PL64	BHT 300024	長谷1	SC04	埋土	9	丸木杭	エノキ属	芯持丸木	50.6	—	3.0	
146	PL65	BHT 300043	長谷1	SC04	埋土	28	丸木杭(転用)	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	162.75	6.5	6.0	壁木舞か
147	PL65	BIKB 300122	11b	SC058	埋土	18	杭	サワラ	ミカン割	129.3	4.7	5.4	壁木舞か
148	PL65	BIKB 300010	11b	SC058	埋土	14	丸太杭	モミ属	芯持丸木	111.2	—	9.2	
149	PL65	BHT 300034	長谷1	SC04	埋土	19	曲物	サワラ	板目	32.2	11.4	1.1	底板か 抉り有 俎板に転用か
150	PL65	BHT 300094	長谷1	SC11	埋土	23	曲物	サワラ	板目	44.3	16.3	1.5	底板か 俎板に転用か
151	PL66	BHT 300078	長谷1	SC11	埋土	7	曲物	サワラ	柾目	15.4	9.5	0.6	底板 蓋か
152	PL66	BHT 300112	長谷1	—	6面	—	曲物	サワラ	板目	39.7	39.6	1.2	底板 俎板、蓋に転用か
153	PL66	BIKB 280001	1	SK279	埋土	—	曲物	上-サワラ 下-ヒノキ科 内-サワラ	上-板目 下-板目 内-板目	22.7	22.0	13.1	側板 内-黒色物
154	PL66	BIKB 280006	1	SK279	埋土	—	曲物	サワラ	柾目	8.5	8.5	1.0	底板
155	PL66	BIKBR 30002	12c北	SD189	埋土	—	漆器椀	ブナ属	横木柾目	10	9.5	3.9	内面:赤漆 外面:黒漆に赤漆模様(一部を残し剥落)
156	PL66	BIKBR 30001	12c北	SD189	埋土	—	曲物	スギ	板目	11.2	7.5	1.1	底板
—	PL40-157	BIKB 310018	11a	SC089	埋土	—	角材(面取りあり)	クリ	板目	65.0	12.0	4.7	木屑か
—	PL41-158	BIKB 300052	7b・8	SC063	埋土	95	杭	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	41.4	5.0	3.8	
—	PL42-159	BIKB 310061	9	1トレンチ	2面	101	エブリ	エノキ属	柾目	—	—	—	
—	PL50-160	BIKB 310122	9	1トレンチ	2面	49	杭	クリ	ミカン割	27.2	5.0	5.3	

付表 13

掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	器種	樹種	木取(手法)	法量			備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径・高さ(cm)	
—	PL50-161	BIKB 310103	9	1トレンチ	2面	30	杭	モミ属	柾目	46.8	7.3	3.0	
—	PL50-162	BIKB 310079	9	1トレンチ	2面	6	杭	コナラ属コナラ節	ミカン割	58.2	9.2	5.3	
—	PL50-163	BIKB 310202	9	1トレンチ	2面	334	杭	エノキ属	芯持丸木	63.5	6.1	3.0	
—	PL50-164	BIKB 310096	9	1トレンチ	2面	23	杭	サワラ	柾目	65.5	4.2	2.8	
—	PL50-165	BIKB 310070	9	1トレンチ	2面	110	杭	カヤ	ミカン割	87.0	—	9.5	
—	PL50-166	BIKB 310181	9	1トレンチ	2面	312	杭	カヤ	ミカン割	106.5	5.0	5.4	
—	PL50-167	BIKB 310233	9	—	1面7層	1	杭	カヤ	芯持丸木	206.0	—	10.6	
—	PL57-168	BIKB 300018	11b	SC058	埋土	3	角材(杭)	サワラ	柾目	40.5	4.7	3.2	
—	PL66-169	BIKB 280002	1	SK279	埋土	—	杭か	コナラ属クヌギ節	半裁	65.4	12.0	5.0	

付表14　長谷鶴前遺跡群　土坑一覧（報告書掲載分）

遺構番号	位置		調査面	形状		規模 (m)			遺物	重複関係	備考	時期	図版番号
	地区	グリッド		平面形	断面形	長軸	短軸	深さ		△旧 ▼新			
SH05	2	XIVW14	3	円形	D	1.27	1.24	0.60	土器	—	井戸跡	中世後期	141・153
SK017	2	XIVX16・17	2	円形	A	0.32	0.32	0.10	陶器	—	土坑	近世末～近代	157
SK020	2	XIVX17	2	楕円形	B	0.78	0.46	0.22	土器	—	土坑	近世末～近代	157
SK021	2	XIVX17	2	楕円形	B	0.56	0.43	0.34	陶器	—	土坑	近世末～近代	157
SK022	2	XIVX17	2	円形	B	0.30	0.30	0.20	土器	—	土坑	近世末～近代	157
SK024	2	XIVX18	2	円形	B	0.35	0.34	0.11	陶器	—	土坑	近世末～近代	157
SK025	2	XIVX-18	2	円形	B	0.46	0.45	1.00	陶器	—	土坑	近世末～近代	157
SK026	2	XIVX-18	2	円形	A	0.21	0.20	0.04	陶器	—	土坑	近世末～近代	157
SK029	2	XIVX-18	2	楕円形	A	0.59	0.38	0.10	陶器	—	土坑	近世末～近代	157
SK031	2	XIVX18	2	円形	A	0.60	0.46	0.14	陶器・石器	—		近代	157
SK041	2	XIVX21	2	円形	C	0.43	(0.35)	0.22	小物・型	—		近世末～近代	157
SK042	2	XIVX-22	2	楕円形	B	0.62	0.42	0.18	土器	—	土坑	近世末～近代	157
SK043	2	XIVX18	2	楕円形	F	1.09	0.67	0.30	石器	—		近代	157
SK046	2	XIVX18	2	不整円形	A	0.77	0.64	0.14	土器	—	土坑	近世末～近代	157
SK047	2	XIVX19	2	不整円形	F	0.67	0.53	0.18	土器	—	土坑	近世末～近代	157
SK051	2	XIVX19	2	円形	A	0.95	0.92	0.14	土器	—	土坑	近世末～近代	157
SK055	2	XIVX18・19	2	円形	C	0.94	0.79	0.34	陶器・石器	—		近代	157
SK058	2	XIVX16・17	2	帯状	A	4.84	0.96	0.16	陶器・小物・型・瓦・石器・鉄製品	—		近代	157
SK059	2	XIVX23	2	不整楕円形	C	1.14	0.77	0.60	石器	△SD26		近代	157
SK064	2	XIVX23	2	不整楕円形	A	1.46	1.00	0.14	土器	△SD26		近代	157
SK065	2	XIVX21	2	円形	B	0.40	0.40	0.30	土器、陶器	—	土坑	近世末～近代	157
SK073	2	XIVX13	2	楕円形	B	0.94	0.67	0.36	土器	—	土坑	近世末～近代	157
SK074	2	XIVX13	2	円形	A	0.35	0.30	0.06	石器	—		近代	
SK075	2	XIVX13	2	円形	B	0.39	0.36	0.20	土器	—	土坑	近世末～近代	157
SK084	3	XIVW14	2	円形	—	0.69	0.65	—	土器・陶器・石器	—		近代	155
SK091	3	XIVW13	1	楕円形	—	0.56	0.42	—	土器	—	土坑	近世末～近代	155
SK107	2	XIVS17	2	円形	A	0.83	0.77	0.12	石器	—		中世後期～近世	156
SK109	3	XIVW25	1	円形	C	1.14	1.11	0.52	陶器	—		近世末～近代	155・158
SK111	3	XIVW25	2	不整円形	B	0.99	0.99	0.87	陶器・磁器・小物・型・ｶﾞﾗｽ器	—	埋甕	近代	158・162
SK112	3	XIVW24・25	3	円形	C	0.74	0.73	0.60	陶器・瓦	—	埋甕	近代	158・162
SK114	3	XIVW18	4	円形	C	0.59	0.51	0.33	磁器・瓦	—	埋甕	近代	158・162
SK115	3	XIVW18	5	不整円形	A	1.34	0.97	0.34	—	—	ST01出入口施設	近代	158・162
SK120	2	XIVX08	3	円形	B	0.27	0.25	0.20	土器	SC01		中世後期～近世	142・143
SK136	2	XIVX02	3	円形	B	0.32	0.20	0.10	土器	—	土坑	中世～近世	142
SK137	2	XIVS22	3	円形	B	0.43	0.38	0.90	土器	—	土坑	中世～近世	142
SK139	2	XIVS22	3	楕円形	A	0.82	0.49	0.08	土器	—	土坑	中世～近世	142
SK157	2	XIVX12	3	円形	B	0.34	0.29	0.38	土器	—	土坑	中世～近世	143
SK164	2	XIVX13	3	円形	B	0.28	0.23	0.50	土器	—	土坑	中世～近世	143
SK170	2	XIVX18	3	不整円形	C	1.50	1.42	0.68	—	△SC01、SD32ab	井戸跡	中世後期	143・152
SK171	3	XIVW14	3	円形	C	1.52	(1.13)	0.88	土器	—	井戸跡	中世後期	141・152
SK202	2	XIVX07・12	3	円形	B	1.98	0.35	0.14	小物・型	—		中世	143
SK214	2	XIVX23	4	不整楕円形	C	(1.44)	1.18	0.62	—	△SD34	井戸跡	中世後期	143・152
SK215	2	XIVS24	5	円形	C	1.25	1.19	0.50	土器・木製品	—	井戸跡	中世後期	142・152
SK226	2	XIVX07	3	不整方形	D	0.73	0.70	0.63	石器	△SD49		中世後期～近世	143
SK244	2 (市道下)	XIVX10・11	3	不整楕円形	D	1.43	1.22	1.03	土器	—	井戸跡	中世後期	141・152
SK245	2 (市道下)	XIVX06	3	円形	—	0.46	0.36	—	土器	—	土坑	中世	141・143
SK247	2 (市道下)	XIVX11	3	円形	D	1.03	95.00	1.06	土器	△SC20	井戸跡	中世後期	141・152
SK250	2 (市道下)	XIVX06	3	円形	A	0.89	0.73	0.25	土器・石器	△SC20		中世後期～近世	141
SK254	2	XIVX10	3	円形	C	0.96	0.96	0.34	—	△SH06	井戸跡	中世後期	141・153

付表15　長谷鶴前遺跡群　溝跡一覧

SD番号	位置		調査面	傾斜方向	形状		規模 (m)			遺物	重複関係	備考	時期	図版番号
	地区	グリッド			平面形	断面形	長さ	最大幅	深さ		△旧 ▼新 (不)不明			
01	2	XIVX17・18・23	2	西北西→東南東	ほぼ直線	C	14.14	0.45	0.19	土器、土製品	—	暗渠	近代	163
02	2	XIVX22・23	2	西→東	ほぼ直線	—	8.16	0.59	—	土器	—		近代以降	157
06	2	XIVS13・17・18	2	西→東	直線	—	12.36	0.28	—	土器	—		近代以降	156
09	2	XIVX21	2	西→東	ほぼ直線	—	2.31	0.49	—	—	—		近代以降	155・157
11	2	XIVX07	3	西→東北北西→南南東	L字に屈曲	B	6.87	0.60	0.37	土器	△SC01、SD49	SC01廃絶後の道路側溝跡	中世後期～近世	143・149・151
12	2	XIVS17・22	3	南→北	ほぼ直線	C	12.35	0.38	0.19	土器・石器・石製品	△SD24・40・63	SC01廃絶後の道路側溝跡	中世後期～近世	142・148・151
13	2	XIVS22、X02	3	南→北	ほぼ直線	A	1.72	0.24	0.06	—		SC01廃絶後の道路側溝跡	中世後期～近世	142・143・148・151
14	2	XIVX02	3	南→北	ほぼ直線	A	1.83	0.36	0.07	土器	△SD33	SC01廃絶後の道路側溝跡	中世後期～近世	142・151
17	2	XIVX02・03・07・	2	西→東	ほぼ直線	—	11.93	1.13	—	土器	—		近代以降	143・156・157
21	2	XIVX08	3	北→南	ほぼ直線	A	2.46	0.49	0.08	—	—	SC01廃絶後の道路側溝跡	中世後期～近世	142・143・151
22	3	XIVW20	1	東→西	直線	—	1.50	0.54	0.18	土器	—		近代以降	155・158
23	3	XIVW15	1	西→東	直線	—	5.45	0.63	0.18	土器	—		近代以降	155
24	2	XIVS17・22・23、X02・03	3	南→北	L字に屈曲	A	19.86	1.56	0.19	土器・石器・石製品	△SD63、SH04 ▼SD12	SD40埋立後の道路側溝跡	中世後期	142・144・147・148
25a	2	XIVX07・12・17	3	南→北	直線	C	9.22	0.91	0.49	—	△SD25b	SC01の側溝跡	中世後期	143・147
25b	2	XIVX07・12・17	3	南→北	直線	C	9.07	0.84	0.33	—	▼SD25a	SC01の側溝跡	中世後期	143・147
26	2	XIVX22・23	2	西→東	直線	E	9.70	0.92	0.09	土器		暗渠	近世～近代	157・163
27	2	XIVX12・13	3	南→北	ほぼ直線	C	5.54	0.33	0.09	—	—	SC01廃絶後の道路側溝跡	中世後期～近世	143・151
28	2	XIVX13	3	南→北	ほぼ直線	A	3.33	0.32	0.06	—	—	SC01廃絶後の道路側溝跡	中世後期～近世	143・151
29	2	XIVX16・17・18	3	西南西→東北東	ほぼ直線	A	17.68	2.60	0.16	土器・石器	△SD32ab・38	SC01の排水溝跡	中世後期	143・147・150
30a	2	XIVX17・18・22・23XVID03	3	南南東→北北西	直線	C	11.65	0.94	0.27	—	△SD30b・41b	SC01の側溝跡	中世後期	143・147・149
30b	2	XIVX17・18・22・23XVID03	3	南南東→北北西	直線	C	11.89	1.36	0.63	—	▼SD30a ・41a (不)SD41b	SC01の側溝跡	中世後期	143・147・149
31	2	XIVX02・03	2	西→東	ほぼ直線	—	11.85	1.70	—	土器	—		近代以降	156
32a	2	XIVX13・18・23 XVID03	3	南南東→北北西	ほぼ直線	B	26.72	1.37	0.51	土器	△SD29・32b・41b ▼SD32a・41a、SK170	SC01の側溝跡	中世後期	143・147・149
32b	2	XIVX13・18・23 XVID03	3	南→北	ほぼ直線	B	33.00	1.44	0.50	—	△SD29・41b ▼SD32a・41a、SK170	SC01の側溝跡	中世後期	143・147・149
33	2	XIVS22	3	南→北	直線	A	4.86	0.75	0.14	土器・石器	△SD36 ▼SD14	SD40埋立後の道路側溝跡	中世後期	142・147・148
34	2	XIVX18・23 XVID03	3	南南東→北北西	直線	C	12.16	1.06	0.27	土器・石器	▼SK214 (不)SD41	SC01の側溝跡	中世後期	143・147・149
36	2	XIVS17・22、X02	3	南→北	直線	C	16.72	0.89	0.24	土器	△SD40 ▼SD33	SD40埋立後の道路側溝跡	中世後期	142・147・148
38	3	XIVW16・17・20・21・25	3	西南西→東北東	ほぼ直線	C	14.16	1.07	0.32	—	▼SD29	SC01の排水溝跡	中世後期	141・143・147
38a	3	XIVW20・24・25	3	西南西→東北東	ほぼ直線	C	4.60	0.58	0.19	—	△SD38b	SC01の排水溝跡	中世後期	141・147・150
38b	3	XIVW20・25	3	西→東	ほぼ直線	C	2.80	0.54	0.25	—	▼SD38a	SC01の排水溝跡	中世後期	141・147・150
39	3	XIVW05・09・10	3	南西→北東	ほぼ直線	A	5.27	0.92	0.18	土器	△SD45	道路側溝跡	中世後期	141・144・147・150

SD番号	位置		調査面	傾斜方向	形状		規模 (m)			遺物	重複関係	備考	時期	図版番号
	地区	グリッド			平面形	断面形	長さ	最大幅	深さ		△旧 ▼新 (不)不明			
40	2	XIVS12・13・17・22、X02	4	南→北	L字に屈曲	B	37.59	4.40	0.98	土器・木製品・三方・石器・石製品・ウマ骨	△SD59 ▼SD24・36・63・64	改修後の居館堀跡	中世後期	135・141・142・144・145・146・147・148
41a	2	XIVX17・18・19	3	西→東	ほぼ直線	A	12.36	1.46	0.25	土器・漆器	△SD29・32ab・41b	SC01の排水溝跡	中世後期	143・147・150
41b	2	XIVX17・18・19	3	西→東	ほぼ直線	A	13.65	2.33	0.41		▼SD29・32ab・41a	SC01の排水溝跡	中世後期	143・147・150
42	3	XIVW13・14・19	4	南東→北西	蛇行、湾曲	B	11.79	1.68	0.12			道路側溝跡か	中世後期	134・139
43	3	XIVW14・19・20	2	南東→北西	ほぼ直線	C	14.70	0.65	0.24	土器・陶器			中世後期～近代	163
44	3	XIVW09・14・15・	2	南南東→北北西	ほぼ直線	B	15.07	0.76	0.19	土器・陶器			中世後期～近代	163
45	2（土道下）	XIVW05・09・10、X01	3	西南西→東北東	やや湾曲	C	13.68	1.12	0.20	土器・石器・種実	▼SD39・65	道路側溝跡	中世後期	141・144・147・150
46	2	XIVX12	3	西北西→東南東	やや湾曲	B	3.93	0.37	0.15			SC01廃絶後の道路側溝跡	中世後期～近世	143・151
47	2	XIVS25	5	南→北	直線	C	4.41	0.87	0.39	土器		用水跡	中世後期	135・139
48	2	XIVX02・07	3	南→北	L字に屈曲	C	12.72	0.69	0.28	土器	△SD49	SC01廃絶後の道路側溝跡	中世後期	142・143・147・150
49	2	XIVX02・07	3	南→北	直線	C	7.92	0.61	0.17	土器	▼SD11・48・SK226	SC01の側溝跡	中世後期	142・143・147・150
50	2	XIVX03・08・09	3	東→西 南→北	T字に屈曲	C	11.03	1.59	0.34	土器・石器	△SD51 ▼SD52	SC01の側溝跡	中世後期	142・143・147・150
51	2	XIVX08	3	南→北	直線	B	4.63	0.68	0.21		▼SD50	SC01の側溝跡	中世後期	142・143・147・150
52	2	XIVX08・09	3	東→西	直線	C	10.23	0.82	0.27		△SD50 (不)SL01	SC01の側溝跡	中世後期以降	142・143・147・150
55	2	XIVX04・09	4	西北西→東南東 北北西→南南東	湾曲	A	5.82	1.13	0.16			用水跡	中世後期	135・136・139
57	2（土道下）	XIVW05	3	南→北	桝形に屈曲	C	7.86	0.76	0.19	土器・種実		道路側溝跡	中世後期	141・147・150
59	2（土道下）	XIVW05・10、X01・06	4	南→北	直線	D	9.52	2.55	1.15	土器・木製品・シカ骨・種実	▼SD40	改修前の居館堀跡	中世後期	134・137
60	2（土道下）	XIVW10	3	南→北	ほぼ直線	A	3.69	0.38	0.07	土器		道路側溝跡	中世後期	141・147・150
63	2	XIVS17・22・X02	3	南→北 西→東	L字に屈曲	C	18.32	1.46	0.46		△SD40 ▼SD12・24	SD40埋立後の道路側溝跡	中世後期	142・147・148
64	2	XIVS17・22	3	南→北	ほぼ直線	C	7.60	0.83	0.42		△SD40	SD40埋立後の道路側溝跡	中世後期	142・147・148
65	2（土道下）	XIVW05・10	3	東南東→西北西	やや湾曲	A	2.26	0.75	0.08		△SD45	道路側溝跡	中世後期	141・147・150

付表16　長谷鶴前遺跡群　掘立柱建物跡一覧

ST番号	位置		調査面	主軸方位	柱間数	規模(m)		構造柱配列	柱間寸法 (m)		遺物	重複関係	時期	図版番号
	地区	グリッド				桁行長	梁行長		桁行	梁行		△旧 ▼新 (不)不明		
03	2	XIVX12	3	N-90°-E	3間×	6.97	—	—	2.01～2.27	—	—	△SD25ab、SC01	中世	140・143・153

付表17　長谷鶴前遺跡群　畝状遺構一覧

SL番号	位置		調査面	規模 (m)			溝跡数	遺物	重複関係	時期	図版番号
	地区	グリッド		長軸	短軸	深さ			△旧 ▼新 (不)不明		
01	2	XIVX08・09・13・14	3	11.40	5.60	0.13	7条	土器	(不) SD052	中世後期～近世	140・142・143

付表18　長谷鶴前遺跡群　中世土器・土製品一覧（報告書掲載分）　［図版164］

掲載番号	写真番号	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	産地	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置								口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
1	PL74	古・中-7	2(市道下)、3	SD45	埋土	—	中世	土器	在地	かわらけ	口縁～底部	口2/8 底2/8	<8.2>	<6.0>	2.0	—	12.7	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	黒色粒微量	良	ロクロナデ 底部回転糸切	ロクロナデ	
2	PL74	古・中-8	2 (市道下)	SD59	埋土	—	中世	土器	在地	かわらけ	口縁～底部	口1/8 以下 底4/8	<8.6>	<6.0>	2.4	—	27.8	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/2 灰褐	黒色粒少量。黄白色粒・ガラス質鉱物微量	良	ロクロナデ 底部回転糸切	ロクロナデ	
3	PL74	カ-9	3	XIV W25	1面	—	中世	土器	在地	かわらけ	底部	底8/8	—	5.0	(1.5)	—	39.0	2.5Y7/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	ガラス質鉱物多量。黄白色粒少量	やや不良	ロクロナデ 底部回転糸切り	ロクロナデ	
4	—	古・中-21	2	SD40	埋土	—	中世	土器	在地	かわらけ	体～底部	底8/8	—	5.0	(1.5)	—	27.4	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	赤色粒多量。白色粒中量。精胎	良	ロクロナデ 底部回転糸切	ロクロナデ 中央部指ナデ	内面灯明痕あり
5	PL74	古・中-14	2	4 トレンチ	—	—	中世	土器	在地	かわらけ	口縁～底部	口2/8 底2/8	<10.4>	<8.0>	2.8	—	19.5	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	黄白色粒少量	良	ロクロナデ 底部回転糸切	ロクロナデ	
6	—	古・中-24	2	SK120	埋土	—	中世	土器	在地	かわらけ	口縁～底部	口1/8 底1/8	<9.8>	<6.9>	2.3	—	9.9	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	赤色粒多量。黄色粒中量。白色粒少量。石英微量	良	ロクロナデ 底部回転糸切	ロクロナデ 半裁竹管状刺突による文様あり	
7	—	古・中-25	2 (市道下)	SK247	埋土	—	中世	土器	在地	かわらけ	口縁～体部	口1/8	<8.0>	—	(1.7)	—	2.6	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	精胎。砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
8	—	古・中-26	2	XIVX18	2面	—	中世	土器	在地	かわらけ	体～底部	底1/8	—	<9.0>	(2.0)	—	10.8	10YR5/1 褐灰	10YR5/1 褐灰	精胎。黄・赤色粒少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	特大かわらけ やや軟質
9	PL74	古・中-16	2	SD40	埋土	—	中世	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	口縁～体部	口1/8	<12.2>	—	—	—	27.0	10YR 1.7/1黒 口縁 7.5YR3/3 暗褐	10YR 1.7/1黒 口縁 7.5YR3/3 暗褐	密 N8/灰白	良	ロクロナデ 鉄釉施釉	ロクロナデ 鉄釉施釉	古瀬戸後期様式Ⅰ・Ⅱ期
10	—	古・中-17	2	SC01	埋土	—	中世	土器	在地	火鉢か	口縁部	口1/8 以下	—	—	(4.0)	—	22.4	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	白・黄・赤色粒多量。石英中量。雲母・角閃石微量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内耳鍋と同じ胎土
11	PL74	古・中-15	2	SH04	埋土	—	中世	土器	在地	香炉	口縁部	口1/8	<7.7>	—	(3.4)	—	11.6	2.5Y8/2 灰白	10YR8/2 灰白	赤褐色粒微量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
12	—	古・中-22	2	SD50	埋土	—	中世	土器 (瓦質)	在地	内耳鍋	口縁部 (耳)	口1/8 以下	—	—	(6.2)	—	49.4	N-2 黒	N-2 黒	白・黄色粒中量。赤褐・黒色粒・雲母少量。	やや不良・還元焼成	回転台ナデ	回転台ナデ	
13	PL74	古・中-5	2	SD40	埋土	7	中世	土器	在地	内耳鍋	口縁～体部	口2/8	<28.2>	—	(13.9)	—	512.1	N-1.5 黒	7.5YR4/3 褐	黄白色粒多量。白・赤褐色粒少量。雲母・ガラス質鉱物微量	良・酸化炎焼成	回転台ナデ	回転台ナデ 口縁部に指ナデ 胴部に工具跡あり	外面にス ス付着
14	PL74	古・中-9	3	SH05	埋土	—	中世	土器	在地	内耳鍋	口縁～体部	口1/8 以下	<28.6>	—	(12.0)	—	159.3	7.5YR2/1 黒	7.5YR4/4 褐	黄白色粒子多量。赤褐色・雲母・角閃石微量	良・酸化炎焼成	回転台ナデ	回転台ナデ	外面にス ス付着

掲載番号	写真番号	管理番号	出土地点			取上番号	時期	焼物種	産地	器種	部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整・成形・施釉・絵付け手法	内面調整・成形・施釉・絵付け手法	備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置								口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	重量(g)							
15	PL74	古・中-11	2	SD36	埋土	—	中世	土器	在地	内耳鍋	口縁部	口1/8以下	<22.0>	—	(9.2)	—	105.6	N-1.5 黒	7.5YR5/4 にぶい褐	雲母多量。黄白色粒中量。黒・赤褐色粒少量	良・酸化炎焼成	回転台ナデ	回転台ナデ	外面にス ス付着
16	PL74	古・中-13	2	SD32a	埋土	—	中世	土器	在地	内耳鍋	口縁部	口1/8以下	<29.8>	—	(4.8)	—	42.3	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR7/4 にぶい黄橙	黄白色粒中量。白・赤褐色粒少量。雲母微量	良・酸化炎焼成	回転台ナデ	回転台ナデ	
17	PL74	古・中-10	2	SD34	埋土	—	中世	土器	在地	内耳鍋	口縁部	口1/8以下	<31.6>	—	(5.1)	—	49.5	N-1.5 黒	7.5YR3/2 黒褐	黄白色粒中量。白・黒色粒少量。雲母・角閃石微量	良・酸化炎焼成	回転台ナデ	回転台ナデ	外面にス ス付着
18	PL74	古・中-6	2	XIVX17	2面	—	中世	土器	在地	内耳鍋	体～底部	底3/8	—	<24.0>	(11.4)	<31.0>	425.9 (石膏含む)	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR5/6 明褐	赤褐色粒・石英・雲母多量。白・黄白色粒中量	良・酸化炎焼成	回転台ナデ	回転台ナデ	外面にス ス付着
19	PL74	古・中-12	2	SD24	埋土	—	中世	土器	在地	内耳鍋	口縁部	口1/8以下	<34.0>	—	(5.3)	—	60.3	7.5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	黒色粒多量。雲母中量。赤褐色竜少量。黄白色粒微量	良・酸化炎焼成	回転台ナデ	回転台ナデ	
20	—	古・中-18	2	SD29	埋土	—	中世	土器	在地	内耳鍋	口縁～体部	口1/8	<25.9>	—	(10.8)	—	226.5	7.5YR2/1 黒	7.5YR4/4 褐	白・黄・赤色粒・ガラス質鉱物多量。雲母・石英少量	やや不良・酸化炎焼成	回転台ナデ	回転台ナデ	
21	—	古・中-19	2	SD36	埋土	—	中世	土器	在地	内耳鍋	口縁～体部	口1/8	<30.0>	—	(6.6)	—	77.0	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/4 にぶい褐	白・赤色粒多量。黄色粒・石英中量	良・酸化炎焼成	回転台ナデ	回転台ナデ	
22	—	古・中-20	2	SD40	埋土	—	中世	土器	在地	内耳鍋	口縁～体部	口1/8	<31.6>	—	(9.3)	—	78.8	N-2 黒	10YR5/2 灰黄褐	黄色粒・石英多量。白色粒中量。赤色粒少量。3~5㎜礫混	やや不良・酸化炎焼成	回転台ナデ	回転台ナデ	
23	—	古・中-23	2	SK64	埋土	—	中世	土器	在地	内耳鍋	口縁～体部	口1/8	<29.4>	—	(5.3)	—	34.5	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/2 灰褐	白・黄色粒・石英多量。赤色粒・雲母中量	良・酸化炎焼成	回転台ナデ	回転台ナデ	
24	—	古・中-27	2(市道下)、3	SD45	埋土	—	中世	土器	在地	内耳鍋	口縁～体部	口1/8	<30.0>	—	(5.7)	—	41.5	10YR4/3 にぶい黄褐	10YR4/1 褐灰	黄色粒・石英多量。白・赤・黒色粒少量	良・酸化炎焼成	回転台ナデ 口縁部面取り	回転台ナデ	
25	PL74	小物・型－37	2	SK202	埋土	—	中世	土製品	鋳型	—	—	—	長さ (7.4)	幅 (13.4)	厚さ (4.9)	—	318.5	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	黄白色粒・ガラス質鉱物少量。赤褐色粒・石英・雲母微量	—	—	—	鋳型の注ぎ口部分断片

付表19　長谷鶴前遺跡群　石器・石製品一覧

［図版165、196］

掲載番号	写真番号	管理番号	出土地点			取上番号	石材	器種	法量				備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
1	PL74	石・ガラス－8	3	—	—	—	安山岩	凹石	10.3	8.4	5.8	458.7	
2	PL74	石・ガラス－9	2	SD50	埋土	—	軽石	凹石	6.9	(5.3)	4.4	63.5	
3	PL74	石・ガラス－10	2	SD24	埋土	—	軽石	凹石	(5.0)	5.1	3.1	45.1	
4	PL74	石・ガラス－17	2	Z	—	—	黒色多孔質安山岩	凹石	23.3	(16.8)	17.0	3406.0	タガネ状工具による点状敲打 ノミ状工具によるケズリ 凹み深さ
5	PL74	石・ガラス－18	2	SD40	埋土	—	安山岩	凹石	20.0	20.5	20.0	4500.0	ノミ状工具によるケズリ 凹み深さ3.9cm
6	PL74	石・ガラス－19	2	SD40	埋土	—	黒色多孔質安山岩	五輪塔未成品	18.0	17.6	14.8	3080.0	ノミ状工具によるケズリ「水」もしくは「風」の
7	PL74	石・ガラス－20	2	—	3面	—	流紋岩	加工石	20.6	22.3	16.9	10570.0	6面に敲打による側面調整 炭化物付着
8	PL74	石・ガラス－21	2	SD40	埋土	—	流紋岩	加工石	16.2	18.2	9.1	3030.0	剥片の背面側に剥離加工痕
9	—	石・ガラス－22	2	SD40	埋土	—	流紋岩	加工石	17.7	20.0	16.4	7600.0	上面・側面を中心に剥離加工
10	PL88	石・ガラス－1	3	—	—	—	凝灰岩	硯	(5.0)	6.1	2.4	56.1	
11	—	石・ガラス－2	2	SK43	埋土	—	凝灰岩	砥石	(6.2)	3.1	2.7	86.7	砥石面3面
12	PL88	石・ガラス－3	2	SK226	埋土	—	凝灰岩	砥石	(7.8)	3.6	3.3	111.5	砥石面2面 左右面・下面に工具成形痕跡
13	PL88	石・ガラス－4	2	SD34	埋土	—	凝灰岩	砥石	(7.2)	3.6	2.8	128.0	砥石面4面 下面に工具成形痕跡
14	—	石・ガラス－5	3	XIVW20	1面Ⅱ層	—	凝灰岩	砥石	(6.2)	2.9	2.9	89.7	砥石面4面
15	—	石・ガラス－6	3	XIVW15	かく乱	—	凝灰岩	砥石	(4.5)	2.9	3.4	82.1	砥石面4面
16	PL88	石・ガラス－7	3	XIVW20	1面Ⅰ層	—	安山岩	砥石	(7.2)	5.4	(3.0)	161.2	砥石面4面
—	PL88-19	石・ガラス－23	2	—	2面	—	黒曜石	打製石鏃	1.2	0.8	0.2	0.1	先端部
—	PL88-20	石・ガラス－24	3	XIVW18	1面Ⅱ層	—	黒曜石	打製石鏃	1.8	1.1	0.5	0.8	先端部
—	PL88-21	石・ガラス－25	3	XIVW19	1面Ⅰ層	—	黒曜石	打製石鏃	2.2	1.4	0.3	0.9	凹基鏃
—	PL88-22	石・ガラス－26	3	XIVW19	1面	—	頁岩	打製石鏃	2.2	1.3	0.3	1.0	凹基鏃
—	PL88-23	石・ガラス－27	3	SD08	かく乱	—	チャート	打製石鏃	2.3	1.7	0.3	1.2	凹基鏃
—	PL88-24	石・ガラス－28	3	XIVW19	1面Ⅱ層	—	チャート	打製石鏃	2.5	1.3	0.4	1.9	先端部
—	PL88-25	石・ガラス－29	2	—	1面	—	頁岩	二次加工剥片	4.8	4.4	1.7	39.4	
—	PL88-26	石・ガラス－30	2	XIVX18	2面Ⅲ層	—	砂岩	敲石	8.7	7.3	3.9	386.9	
—	—	Ⅲ層-1	2	—	2面Ⅲ層	—	チャート	砕片	2.7	2.2	1.3	5.8	火打石片か
—	—	SC01-1	2	SC01	埋土	—	チャート	剥片	2.2	1.5	0.6	2.4	火打石か
—	—	SD12-1	2	SD12	埋土	—	鉄石英か	砕片	2.0	1.1	0.6	1.7	火打石か
—	—	SD33-1	2	SD33	埋土	—	蛇紋岩	砕片	2.7	0.9	0.6	1.6	
—	—	SD24-1	2	SD24	埋土	—	チャート	砕片	2.5	3.4	1.4	12.2	火打石か
—	—	SD24-2	2	SD24	埋土	—	頁岩	おはじきか	1.8	2.1	0.7	3.9	研磨
—	—	SD29-1	2	SD29	埋土	—	安山岩	敲石か	(9.7)	4.4	3.3	217.6	端部に敲打痕か
—	—	SD40-1	2	SD40	埋土	—	玄武岩か	敲石か	14.1	5.1	2.3	286.1	端部に敲打痕か
—	—	SD45-1	2 (市道下)	SD45	埋土	—	不明	すり石か	6.3	4.5	1.8	61.7	
—	—	SK31-1	2	SK31	埋土	—	鉄石英か	砕片	2.7	1.3	1.1	2.8	火打石か
—	—	SK55-1	2	SK55	埋土	—	閃緑岩	不明	6.6	6.4	1.9	85.5	
—	—	SK59-1	2	SK59	埋土	—	チャート	剥片	1.8	2.4	0.7	2.7	火打石か
—	—	SK58-1	2	SK58	埋土	—	チャート	不明	3.8	2.3	1.4	15.6	小円礫
—	—	SK74-1	2	SK74	埋土	—	珪質泥岩か	石核	3.0	2.2	1.8	11.6	
—	—	SK107-1	2	SK107	埋土	—	チャート	剥片	1.5	0.8	0.7	0.7	火打石片か
—	—	SK250-1	2 (市道下)	SK250	埋土	—	凝灰岩	砥石	(7.7)	3.5	3.4	104.7	
—	—	X12-1	2	XIVX12	2面	—	石英	石核	4.5	3.8	3.0	49.5	火打石か
—	—	X24-1	2	XIVX24	かく乱	—	流紋岩か	砕片か	1.9	1.8	1.4	6.2	
—	—	検-1	2	—	2面	—	チャート	砕片	2.3	2.1	1.6	5.9	火打石か
—	—	検-2	2	—	2面	—	閃緑岩	不明	5.3	5.3	4.8	181.8	球状 研磨痕なし

掲載番号	写真番号	管理番号	出土地点			取上番号	石材	器種	法量				備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
		検-3	2		1面		チャート	砕片	0.7	1.1	0.3	0.2	
		検-4	2		1面		チャート	砕片	2.9	1.8	0.9	3.2	火打石か
		検-5	2		2面		軽石	不明	5.2	3.1	2.2	6.3	研磨痕あり
		検-6	2(市道下)		3面		不明	不明石製品	4.8	4.8	2.2	53.5	窯関連製品か
		Z-1	2	Z			チャート	砕片	1.8	1.4	0.7	2.9	火打石か
		Z-2	2	Z			チャート	砕片	3.2	3.9	1.5	18.5	火打石か
		1T南-1	3	1トレンチ	1面南Ⅰ層		頁岩	石板	6.0 5.4	2.7 3.1	0.4 0.3	19.5 (2片合計)	2片:石板隅
		Ⅰ層-1	3		1面Ⅰ層		頁岩	石板	3.6	2.7	0.4	5.7	
		SD03-1	3	SD03	埋土		チャート	砕片	2.1	2.8	1.6	9.5	火打石か
		SD03-2	3	SD03	埋土		玉髄	砕片	1.1	1.9	1.2	2.0	火打石か
		SD03-3	3	SD03	埋土		頁岩	石板	4.3 1.5	4.8 1.7	0.3 0.3	9.7 (2片合計)	2片
		SK84-1	3	SK84	埋土		泥岩	砥石	4.7	2.7	1.1	18.0	
		W09-1	3	XⅣW09	1面Ⅱ層		頁岩	石板	2.4	1.6	0.2	1.5	
		W09-2	3	XⅣW09	1面Ⅱ層		泥岩か	砥石(剥片)	4.0	2.1	0.5	4.3	
		W09-3	3	XⅣW09	1面Ⅱ層		軽石	不明	7.1	5.4	4.4	72.7	削りあり
		W09-4	3	XⅣW09	1面		凝灰岩	砥石	3.2	4.2	1.3	22.2	
		W10-1	3	XⅣW10	1面Ⅱ層		石英	砕片	2.5	2.1	0.8	4.2	火打石か
		W10-2	3	XⅣW10	1面Ⅱ層		頁岩	石板	5.2	3.0	0.4	8.2	
		W13-1	3	XⅣW13	1面Ⅰ層		黒曜石	砕片	1.3	1.3	0.3	0.3	
		W13-2	3	XⅣW13	1面Ⅱ層		滑石	石製	1.9	0.5	0.5	0.9	
		W13-3	3	XⅣW13	1面Ⅱ層		頁岩	おはじき	1.6	1.8	0.3	1.6	石板転用
		W13-4	3	XⅣW13	1面Ⅱ層		石英	砕片	2.8	1.6	1.4	6.5	火打石か
		W14-1	3	XⅣW14	かく乱		チャート	石核	2.5	3.0	1.9	16.1	火打石か
		W14-2	3	XⅣW14	かく乱		チャート	石核	3.6	2.1	1.7	11.6	火打石か
		W14-3	3	XⅣW14	1面Ⅱ層		流紋岩か	剥片	1.9	1.5	0.6	1.6	火打石か
		W15-1	3	XIVW15	1面Ⅱ層		チャート	砕片	1.6	0.7	0.4	0.4	火打石片か
		W15-2	3	XⅣW15	1面Ⅱ層		多孔質安山岩	不明	4.4	3.3	2.9	26.8	小円礫
		W19-1	3	XⅣW19 A トレンチ			凝灰岩	砥石	4.8	2.3	0.8	7.3	
		W19-2	3	XⅣW19	1面Ⅱ層		チャート	砕片	2.2	2.4	1.1	5.5	火打石片か
		W19-3	3	XⅣW19	1面Ⅱ層		鉄石英	石核	3.5	3.3	2.2	23.4	火打石か
		W19-4	3	XⅣW19	1面Ⅱ層		石英	剥片	2.4	2.5	0.4	3.0	火打石か
		W19-5	3	XⅣW19	1面Ⅱ層		凝灰岩	砥石	6.8	3.1	2.3	92.2	
		W19-6	3	XⅣW19	1面Ⅱ層		玉髄	砕片	1.7	1.9	1.2	3.9	火打石か
		W24-1	3	XⅣW24 A トレンチ			不明	不明	1.9 1.0 0.8	1.4 0.7 0.6	1.2 0.4 0.4	3.7 (3片合計)	酸化鉄集積か3片
		W24-2	3	XⅣW24 A トレンチ			(やや)珪質頁岩	砕片	3.0	3.2	1.8	17.4	
		W24-3	3	XⅣW24	1面Ⅱ層		玉髄か	砕片	2.5	2.8	1.6	10.6	火打石か
		W24-4	3	XⅣW24	1面Ⅱ層		頁岩	石板	10.1	4.2	0.4	27.5	
		W25-1	3	XⅣW25	1面Ⅰ層		頁岩	石板	3.2 1.2 1.1 0.6	3.4 2.4 0.6 1.0	0.3 0.1 0.1 0.1	4.5 (4片合計)	4片
		W25-2	3	XⅣW25	1面Ⅰ層		頁岩	剥片	3.5	2.2	0.6	4.1	
		W25-3	3	XⅣW25	1面Ⅰ層		頁岩	石板	10.6	3.6	0.4	24.8	
		検 中-1	3	中	1面		頁岩か	砕片か	3.6	2.1	1.0	3.7	
		検 北-1	3	北	1面		チャート	砕片	1.9	2.1	1.0	4.8	火打石か
		検 北-2	3	北	1面		頁岩	石板	3.0	3.9	0.4	6.2	
		Z-1	3	Z			泥岩円礫	おはじきか	3.6	2.9	0.7	10.6	周囲研磨
		Z-2	3	Z			チャート	石核	2.4	2.0	1.5	12.5	火打石か

付表20　長谷鶴前遺跡群　金属製品一覧　［図版197］

掲載番号	写真番号	管理番号	出土地点			取上番号	材質	遺物名称	法量(保存処理前)				備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	
1	PL88	30001	3	XⅣW20	1面Ⅰ層	—	錫合金	煙管	8.10	最大径1.12	口元径6.0 小口径9.0	11.1	吸口
2	PL88	30003	3	XⅣW09	1面Ⅱ層	—	銅	煙管	5.50	最大径1.40	口元径8.5 小口径10.0	9.2	吸口
3	PL88	30004	3	XⅣW19	1面Ⅱ層	—	銅	煙管	6.15	1.38	小口径11.5	16.4	雁首 木質吸口あり(長さ48.8mm、最大径9.0mm、口元幅6.4mm、小口径8.6mm、重量1.3g)
4	—	29048	3	XⅣW09	1面Ⅱ層	—	鉄	楔	8.20	1.90	8.0	42.1	
5	—	29030	3	XⅣW09	1面Ⅱ層	—	鉄	釘	(8.60)	2.40	18.0	112.9	
6	—	29032	3	XⅣW10	1面Ⅱ層	—	鉄	釘	(10.8)	2.50	20.0	94.1	
7	—	29035	3	—	—	—	鉄	釘	9.80	2.40	21.0	67.2	
8	PL88	29001	3	XⅣW15	1面	2	銅	銭貨	2.80	内径0.61	1.3	4.8	寛永通寶
9	—	29008	3	XⅣW09	1面Ⅱ層	1	銅	銭貨	2.13	内径0.59	1.0	1.7	寛永通寶
10	PL88	29016	2	—	1面	9	銅	銭貨	2.66	内径0.74	1.2	3.2	文久永寶
11	PL88	29017	2	XⅣX02	2面Ⅳ層	—	銅	銭貨	2.31	内径0.63	1.0	2.3	寛永通寶
12	—	29018	2	—	(北) 2面	—	銅	銭貨	2.40	内径0.61	1.1	3.2	皇栄通寶
13	—	29020	2	—	(北) 3面	—	銅	銭貨	2.05	内径0.54	2.3	3.6	洪武通寶
14	PL88	29003	3	XⅣW09	1面Ⅰ層	—	銅	銭貨	2.78	—	1.6	6.9	一銭銅貨
15	PL88	29004	3	—	(北) 1面	—	銅	銭貨	2.18	—	1.2	3.4	半銭銅貨
16	PL88	29005	3	XⅣW15	1面Ⅰ層	—	銀	銭貨	1.74	—	1.1	2.1	十銭銀貨
17	PL88	29010	3	XⅣW10	1面Ⅱ層	5	銅	銭貨	1.55	—	0.7	0.8	一厘銅貨
—	—	29002	3	SD08	埋土	—	銅	銭貨	2.20	—	1.7	3.0	半銭
—	—	29006	3	XⅣW20	1面Ⅱ層	—	銅	銭貨	(2.40)	—	1.3	1.1	寛□□寶
—	—	29007	3	XⅣW20	1面Ⅱ層	—	銅	銭貨	2.30	内径0.60	1.2	2.0	寛永通寶
—	—	29009	3	XⅣW20	1面Ⅱ層	—	銅	銭貨	2.50	内径0.60	1.7	3.4	寛永通寶
—	—	29011	3	XⅣW18	1面Ⅱ層	—	銅	銭貨	2.30	内径0.60	1.8	1.8	寛永通寶
—	—	29012	3	XⅣW25	1面Ⅱ層	—	銅	銭貨	3.20	—	3.0	13.7	二銭
—	—	29013	3	XⅣW20	1面Ⅱ層	—	銅	銭貨	2.20	内径0.60	1.3	2.8	寛永通寶
—	—	29014	2	—	1面	—	銅	銭貨	2.30	内径0.60	1.3	1.9	熙□□寶
—	—	29015	2	—	1面	—	銅	銭貨	2.30	内径0.70	1.3	2	寛永通寶
—	—	29019	1	—	道路表採(東)	—	銅	銭貨	2.40	内径0.60	1.8	2.9	寛永通寶
—	—	29021	2	XⅣX18	2面	7	鉄	不明鉄製品	5.00	1.30	13.0	26.3	小片あり
—	—	29022	2	SK58	埋土	—	鉄	不明鉄製品	5.70	1.40	8.0	15.7	
—	—	29023	2	SK58	埋土	—	鉄	不明鉄製品	7.50	1.00	14.0	15	
—	—	29024	3	—	(南)1面	—	鉄	不明鉄製品	12.00	6.30	10.0	52.1	
—	—	29025	3	西壁トレンチ	—	—	鉄	不明鉄製品	12.30	1.50	20.0	59.6	小片あり
—	—	29026	3	XⅣW04	1面Ⅱ層	—	鉄	不明鉄製品	12.70	6.50	9.0	111.7	
—	—	29027	3	XⅣW05	1面Ⅱ層	—	鉄	不明鉄製品	7.2	1.8	8	16.2	刃物か
—	—	29028	3	XⅣW09	1面Ⅰ層	—	鉄	不明鉄製品	8.10	3.70	14.0	32.6	
—	—	29029	3	XⅣW09	1面Ⅰ層	—	鉄	不明鉄製品	11.40	大径2.10 小径1.00	—	59	
—	—	29031	3	XⅣW10	1面Ⅱ層	—	鉄	不明鉄製品	4.00	6.40	5.0	25.5	
—	—	29033	3	XⅣW13	1面Ⅱ層	—	鉄	不明鉄製品	8.50	4.00	31.0	52.0	
—	—	29034	3	XⅣW13	1面Ⅱ層	—	鉄	不明鉄製品	8.00	2.30	19.0	81.7	小片あり
—	—	29036	3	XⅣW15	1面Ⅰ層	—	鉄	不明鉄製品	8.00	1.50	13.0	68	
—	—	29037	3	XⅣW19	1面Ⅰ層	—	鉄	不明鉄製品	19.00	2.20	19.0	237.2	小片多数
—	—	29038	3	XⅣW25	1面Ⅰ層	—	鉄	不明鉄製品	11.80	4.20	16.0	107.1	小片多数
—	—	29039	3	XⅣW25	1面 Ⅰ~Ⅱ層	—	鉄	不明鉄製品	21.50	1.00	10.0	79.4	
—	—	29040	3	XⅣW25	1面Ⅲ層	—	鉄	不明鉄製品	11.00	4.00	10.0	34.5	
—	—	29041	3	SD03	埋土	—	鉄	不明鉄製品	(5.80)	4.00	34.0	216.2	
—	—	29042	3	SD03	埋土	—	鉄	不明鉄製品	9.70	4.40	27.0	160.9	
—	—	29043	3	XⅣW18	1面Ⅱ層	—	鉄	不明鉄製品	3.70 2.90	1.50 1.20	15.0 10.0	9.7	2点
—	—	29044	3	XⅣW19	1面Ⅱ層	—	鉄	不明鉄製品	3.10	1.60	13.0	6.9	
—	—	29045	3	XⅣW09	1面Ⅱ層	—	銅	不明銅製品	3.50 3.60	1.20 1.00	6.0 6.0	3.2	2点
—	—	29046	3	XⅣW24	1面Ⅱ層	—	鉄	不明鉄製品	2.10	2.20	6.0	2.4	
—	—	29049	3	XⅣW09	1面Ⅱ層	—	銅	不明銅製品	1.60	0.90	1.0	1	
—	—	29050	3	SD08	埋土	—	鉄	不明鉄製品	7.84	1.73	8.3	16.1	楔か
—	—	29051	3	SD08	埋土	—	鉄	不明鉄製品	7.38	1.26	11.3	12.5	釘か
—	—	29052	3	SD08	埋土	—	鉄	不明鉄製品	3.80	0.92	8.4	4.8	釘か
—	—	29053	3	XⅣW05	1面Ⅱ層	—	鉄	不明鉄製品	11.50	5.30	11.0	36.1	

掲載番号	写真番号	管理番号	出土地点			取上番号	材質	遺物名称	法量(保存処理前)				備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	
—	—	29054	3	XIVW05	1面Ⅱ層	—	鉄	不明鉄製品	5.40 3.80 2.60	1.50 1.00 0.95	14.5 9.5 11.2	18.1	3片
—	—	29055	3	XIVW13	1面Ⅱ層	—	鉄	不明鉄製品	19.00	2.50	6.0	27.2	
—	—	29056	3	XIVW25	1面 Ⅰ～Ⅱ層	—	鉄	不明鉄製品	3.50	1.55	14.8	45.3	小片多数
—	—	30002	3	XIVW20	1面	1	銅	不明銅製品	2.00	径2.20	—	6.2	玩具か

付表21　長谷鶴前遺跡群　中世木製品一覧（報告書掲載分）

［図版166～169］

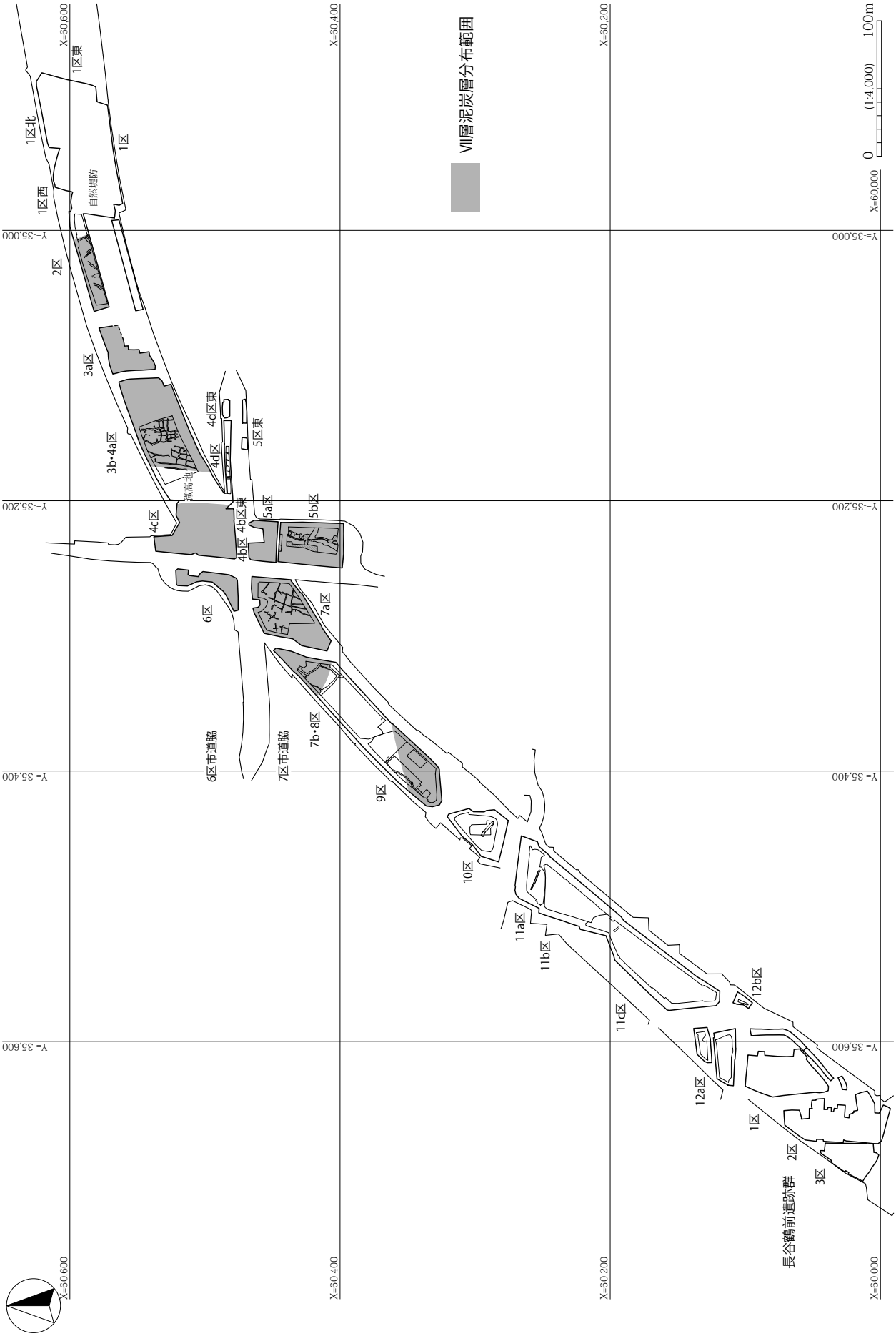
掲載番号	写真図版	管理番号	出土地点			取上番号	器種	樹種	木取(手法)	法量			備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径・高さ(cm)	
1-1～4	PL75、76	BHT 290027	2	SD40	埋土	—	箱状製品(三方)	サワラ	柾目	高さ23.6	26.0	奥行18.8	
2	PL76	BHT 300107	2 (市道下)	SD59	埋土	2	田下駄	サワラ	板目	41.7	6.9	1.4	
3	—	BHT 290018	2	SD40	埋土	—	連歯下駄	クリ	板目	10.4	3.7	3.4	
4	PL76	BHT 290016	2	SD40	埋土	—	柄杓または曲物底板	サワラ	柾目	8.5	—	1.3	
5	PL76	BHT 290025	2	SK215	埋土	3	柄杓または曲物底板	サワラ	柾目	10.3	6.9	0.7	
6	PL76	BHT 300111	2 (市道下)	SD40	埋土	—	曲物底板	サワラ	追柾	23.6	4.8	1.6	
7	PL76	BHT 300109-2	2 (市道下)	SD59	埋土	—	蓋	サワラ	板目	18.7	8.5	1.4	俎板に転用か
8	—	BHT 300108	2 (市道下)	SD59	埋土	3	板材	サワラ	追柾	15.0	5.4	1.7	板の長さ調整
9	PL77	BHT 300109-3	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	サワラ	柾目	21.8	3.2	0.4	曲物側板か折敷片
10	PL77	BHT 300109-4	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	サワラ	柾目	14.6	2.5	0.3	曲物側板か折敷片
11	PL77	BHT 300109-5	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	スギ	柾目	8.1	1.8	0.2	曲物側板か折敷片
12	PL77	BHT 300109-6	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	ヒノキ	板目	11.4	2.1	0.6	俎板の破片か
13	PL77	BHT 300109-7	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	ヒノキ	柾目	6.2	1.8	0.2	曲物側板か折敷片
14	PL77	BHT 300109-8	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	スギ	柾目	12	1.0	1.0	角材
15	PL77	BHT 300109-1	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	スギ	柾目	13.8	2.9	1.3	棒材
16	PL77	BHT 300110	2 (市道下)	SD40	埋土	—	不明木製品	サワラ	板目	39.9	6.0	8.5	俎板に使用
17	—	BHT 290026	2	SK215	埋土	—	籠状製品	1:タケ亜科 2:広葉樹	分割	22.4	17.2	0.1	2:収縮が激しく同定不能
—	PL77-18	BHT 290021	2	SD41a	埋土	—	漆器	漆塗膜	—	—	—	—	木地残存せず

石川条里遺跡

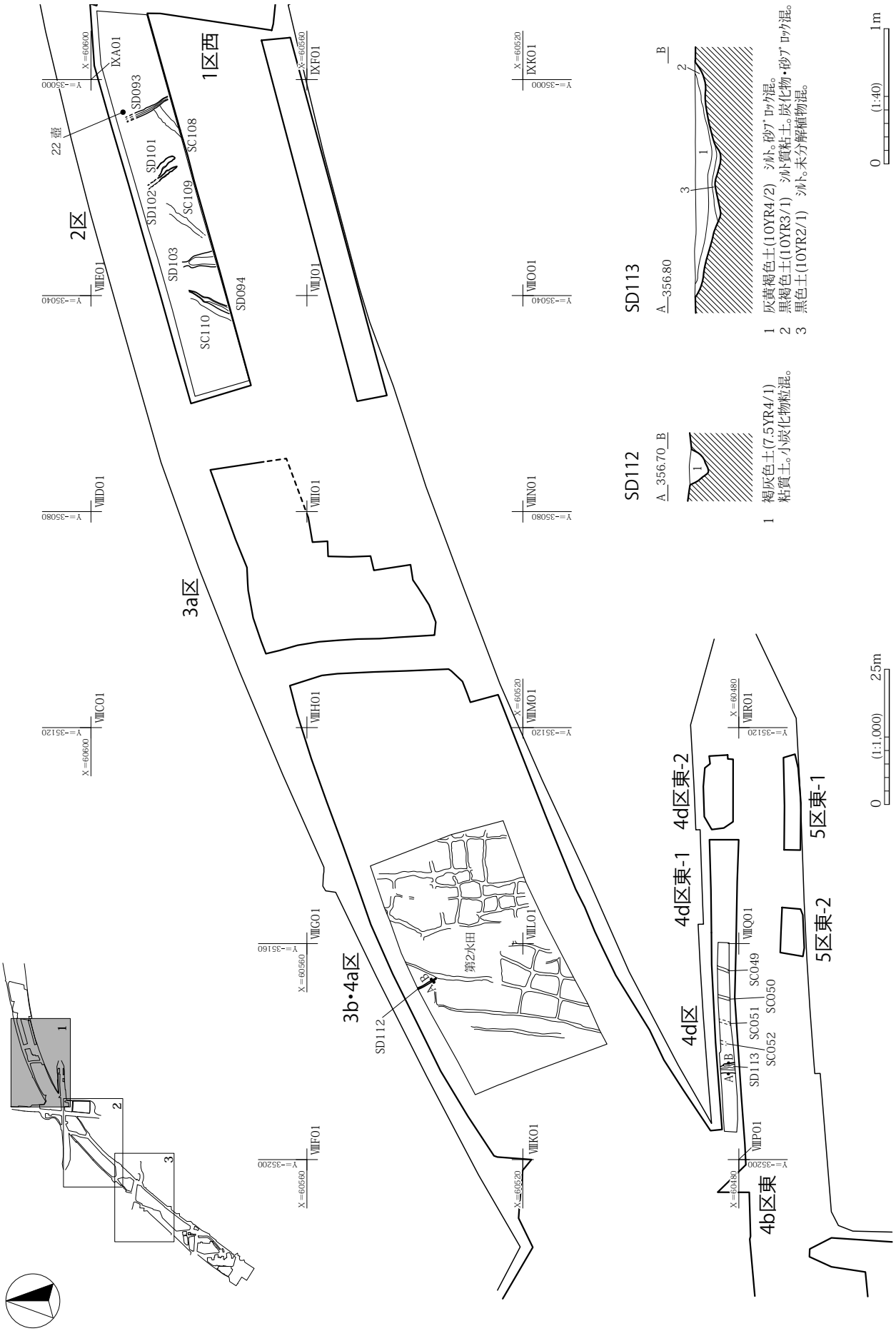
遺構図版

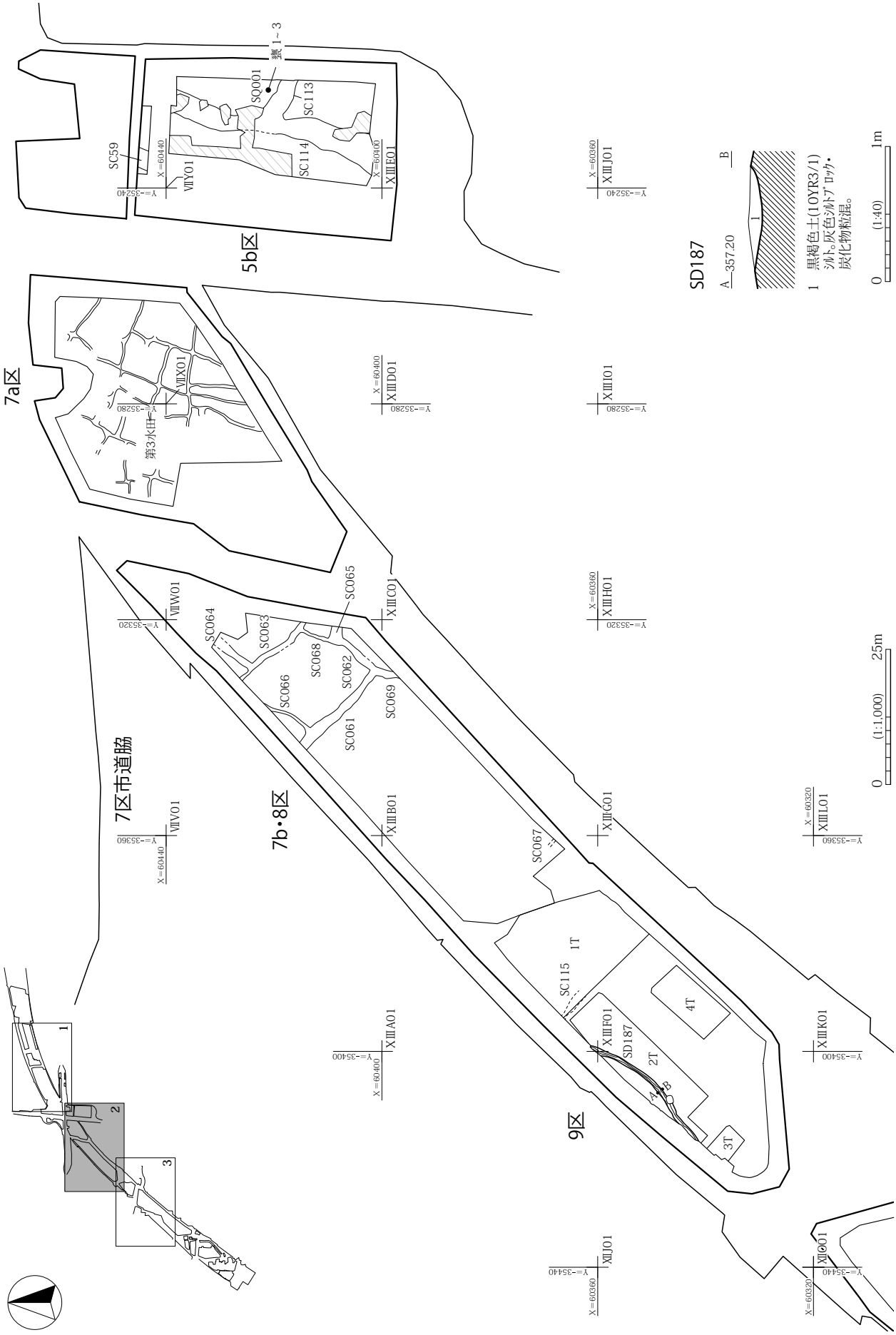
遺物図版

弥生時代の遺構配置図　図版１



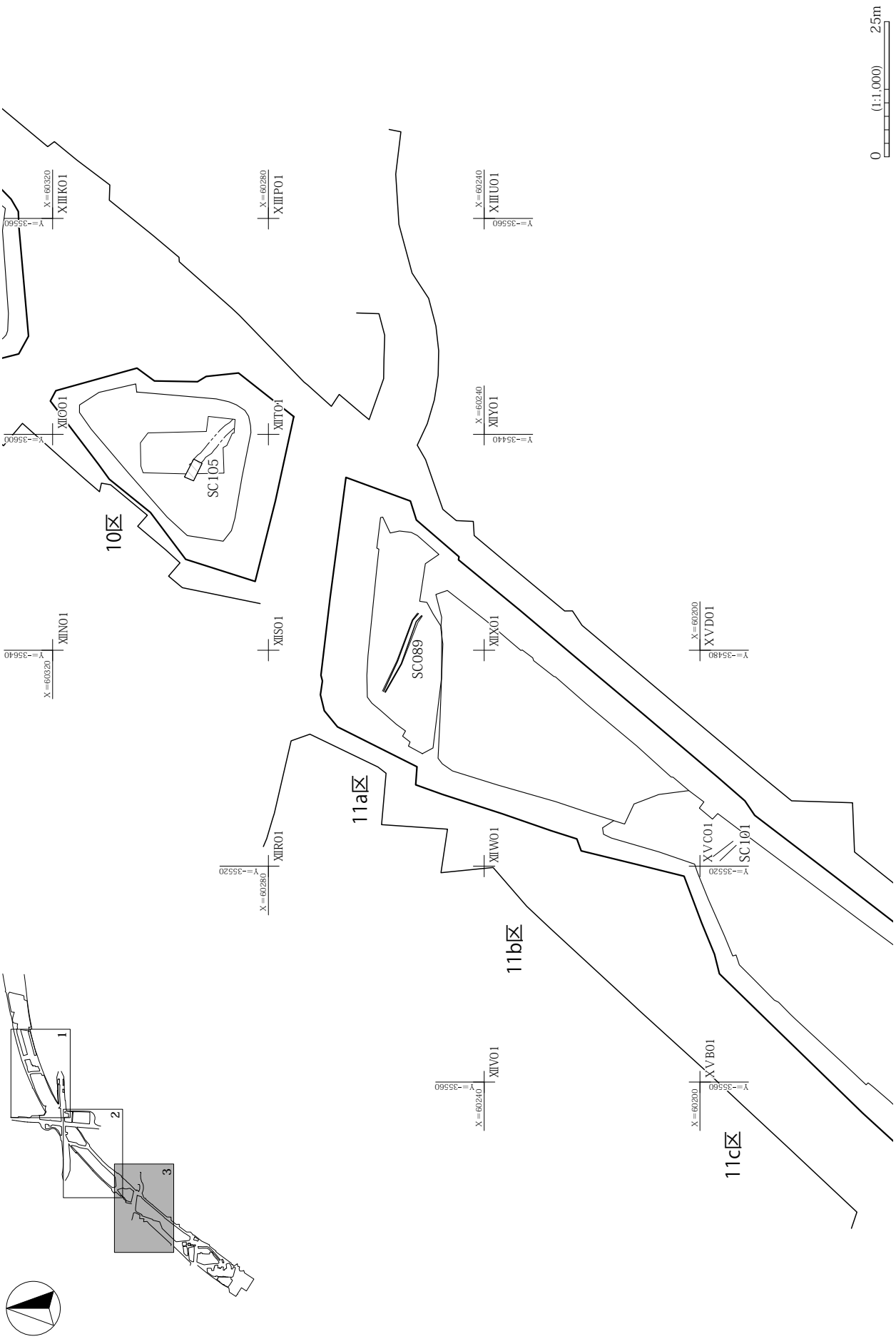
図版２　弥生時代の遺構分布図１

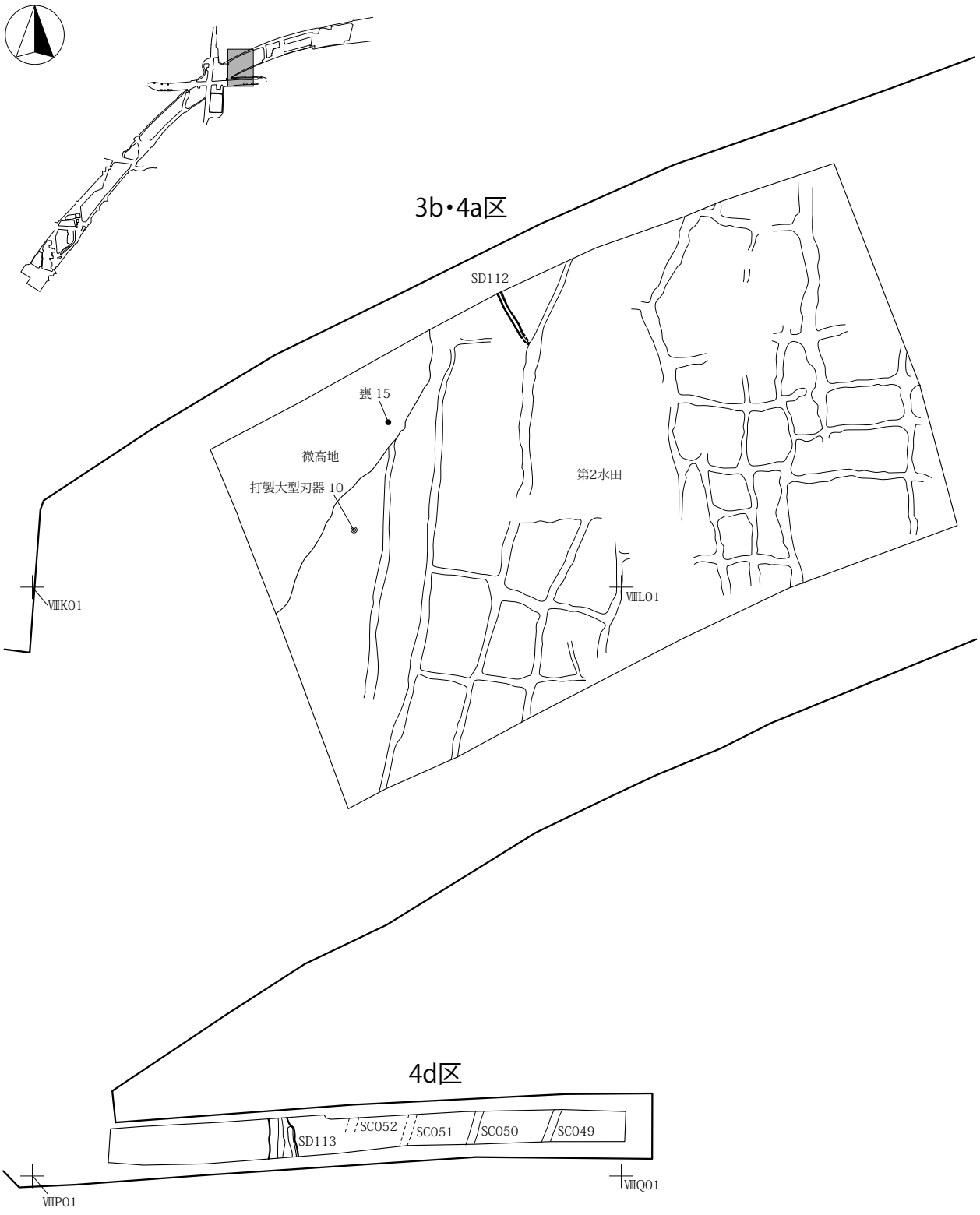




7a区
5b区
7区市道脇
7b・8区
9区
第3水田
SD187
SQ001
SC113
SC114
SC59
SC065
SC064
SC063
SC068
SC062
SC066
SC069
SC061
SC067
SC115
1T
2T
3T
4T
SD187
A 357.20
B
1 黒褐色土(10YR3/1)
シルト。灰色シルトブロック・
炭化物粒混。
0 (1:40) 1m
0 (1:1,000) 25m

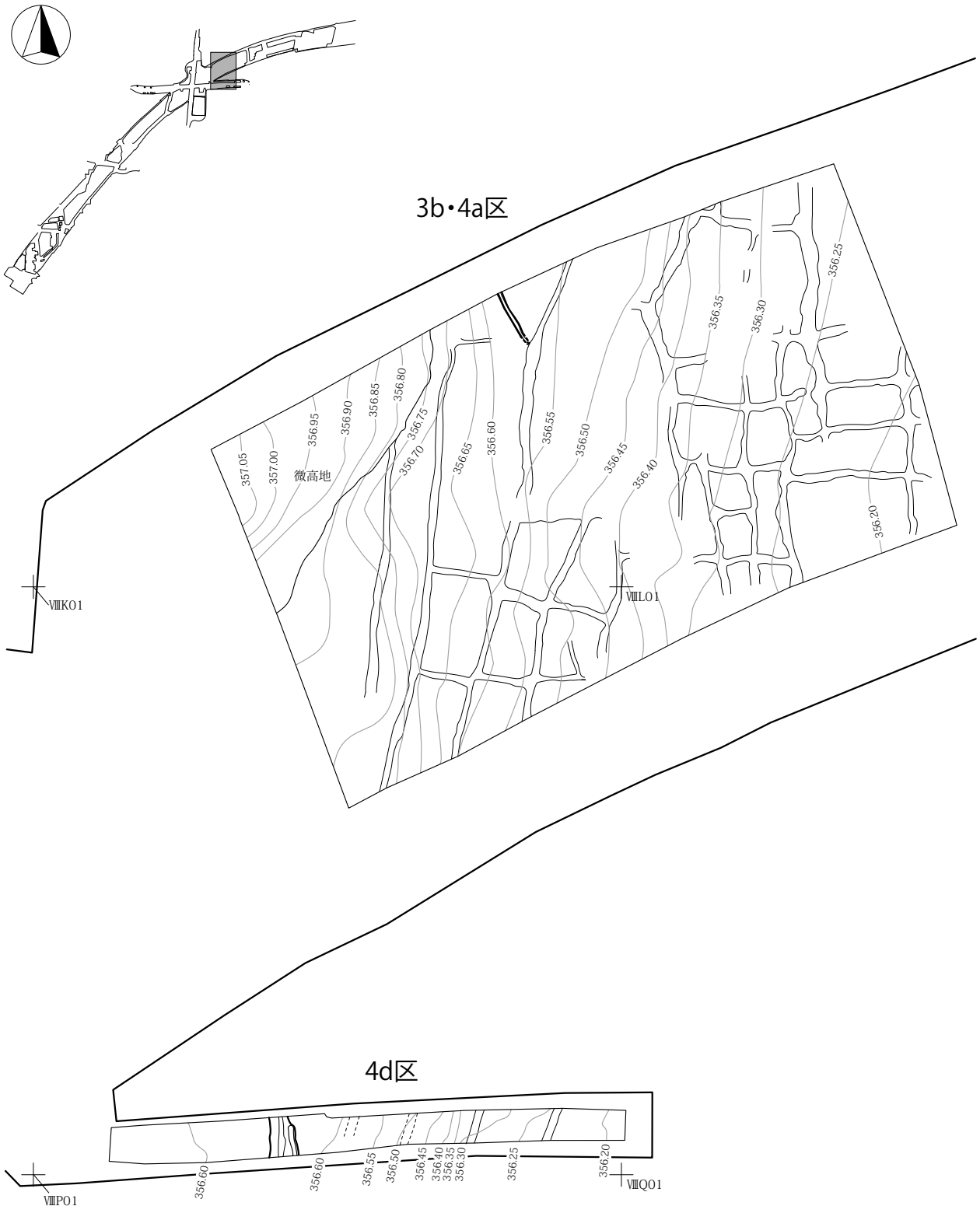
図版４　弥生時代の遺構分布図３

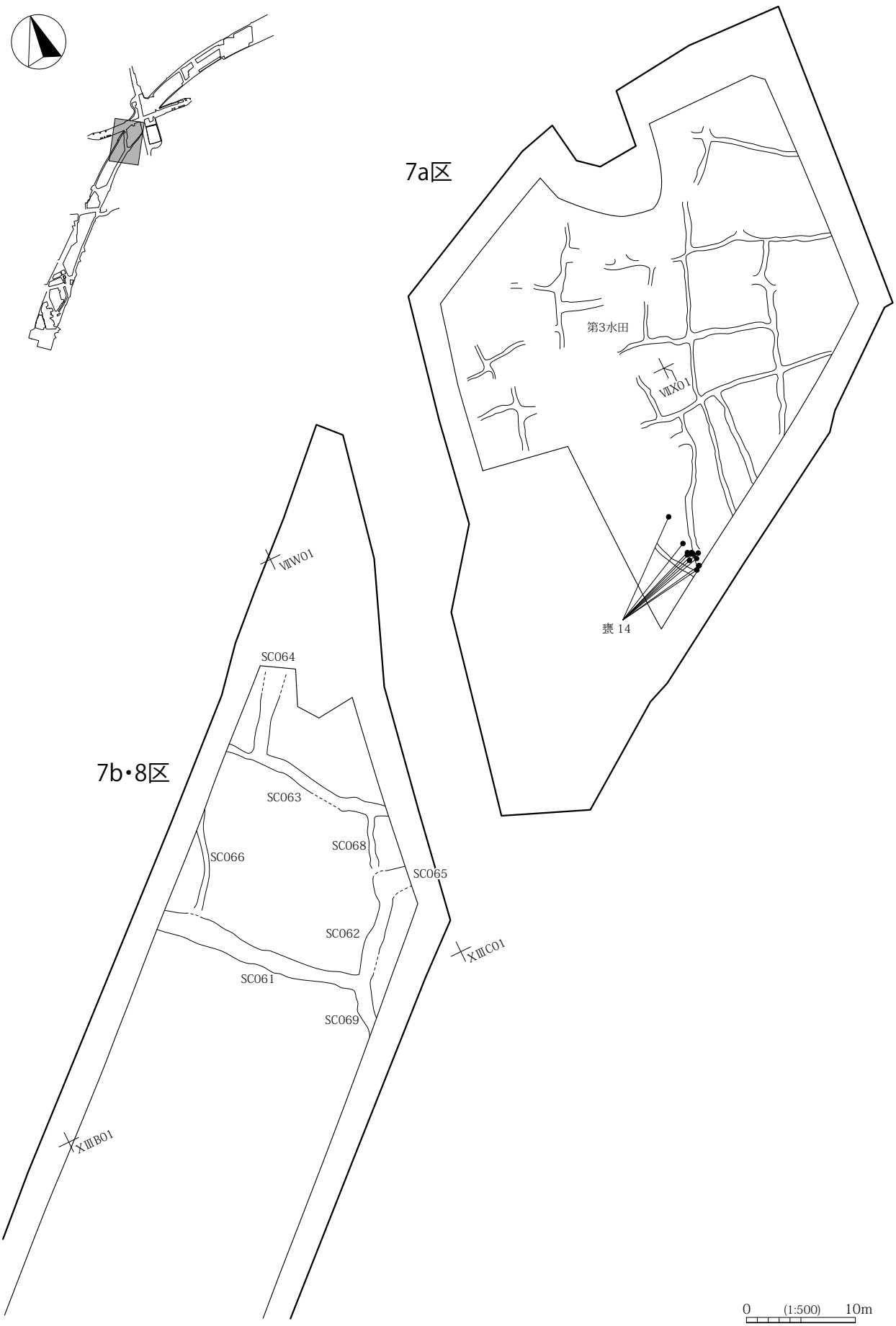



3b･4a区
SD112
褽 15
微高地
打製大型刃器 10
第2水田
Ⅷ KO1
Ⅷ LO1
4d区
SD113
SC052
SC051
SC050
SC049
Ⅷ PO1
Ⅷ QO1

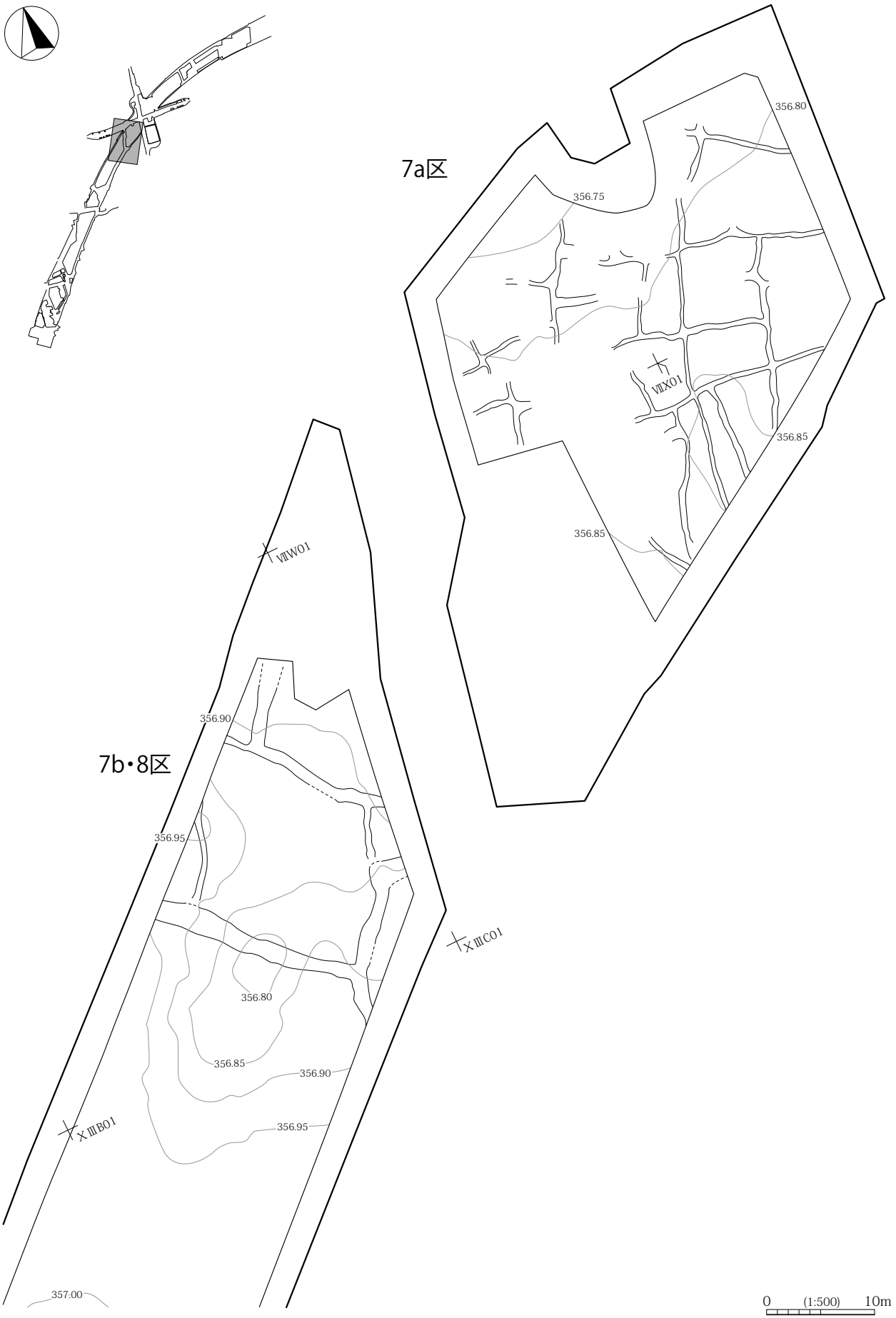
0 (1:400) 10m

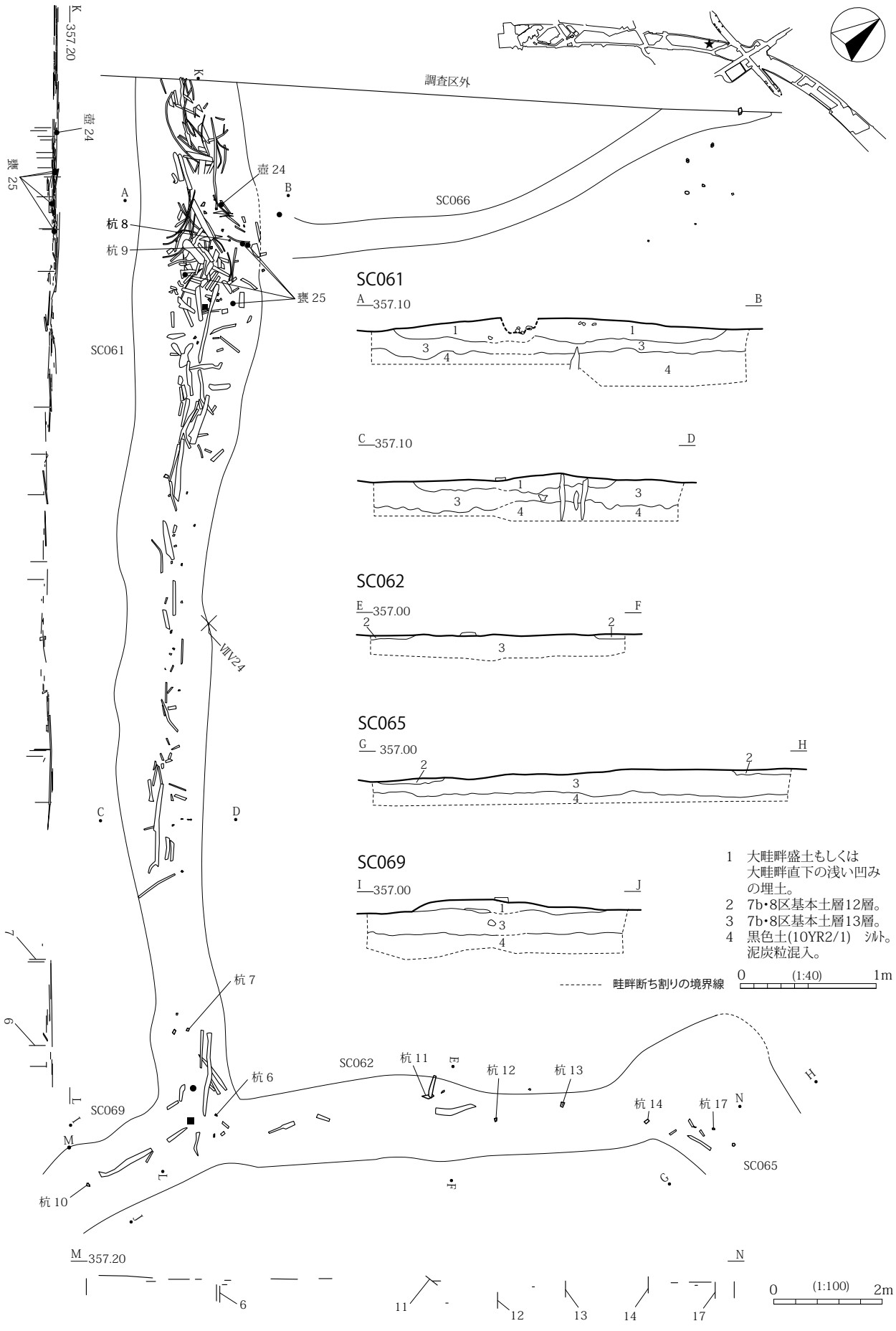
図版６　3b・4a 区第２水田等高線図



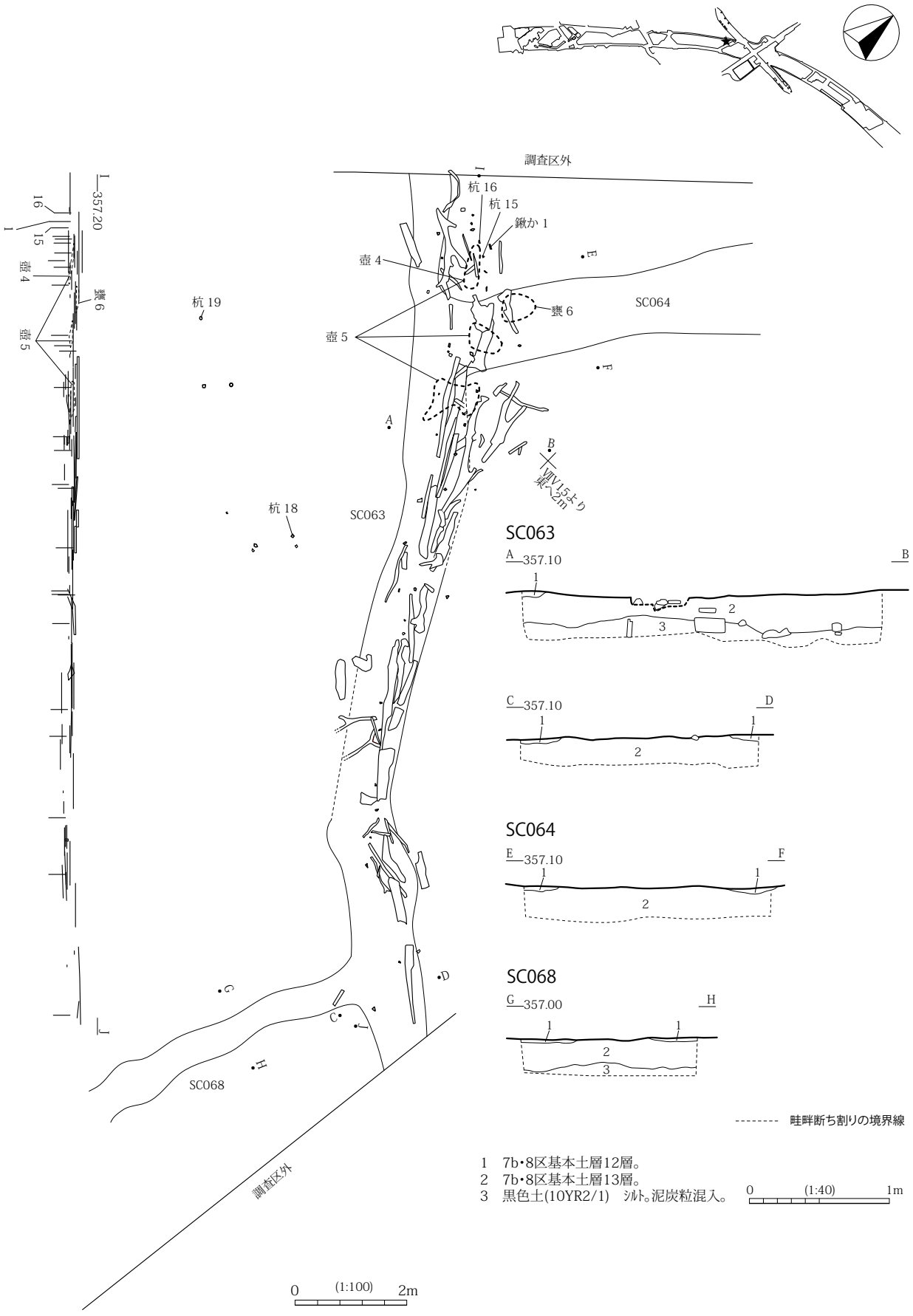

7a区
第3水田
Ⅶ-X01
甕 14
7b･8区
Ⅶ-W01
SC064
SC063
SC066
SC068
SC065
SC062
SC061
SC069
XIII-C01
XIII-B01
0　(1:500)　10m

図版８　7a 区第３水田、7b・８区水田跡等高線図

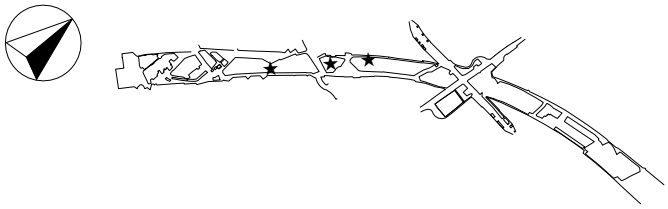



K 357.20
K
調査区外
壺 24
甕 25
A
B
杭 8
杭 9
SC066
甕 25
SC061
SC061
A 357.10
B
C 357.10
D
SC062
E 357.00
F
VIV24
SC065
G 357.00
H
C
D
SC069
I 357.00
J
1 大畦畔盛土もしくは
大畦畔直下の浅い凹み
の埋土。
2 7b・8区基本土層12層。
3 7b・8区基本土層13層。
4 黒色土(10YR2/1) シルト。
泥炭粒混入。
畦畔断ち割りの境界線
0 (1:40) 1m
杭 7
杭 6
SC062
杭 11
杭 12
杭 13
杭 14
杭 17
SC069
SC065
杭 10
M 357.20
N
0 (1:100) 2m

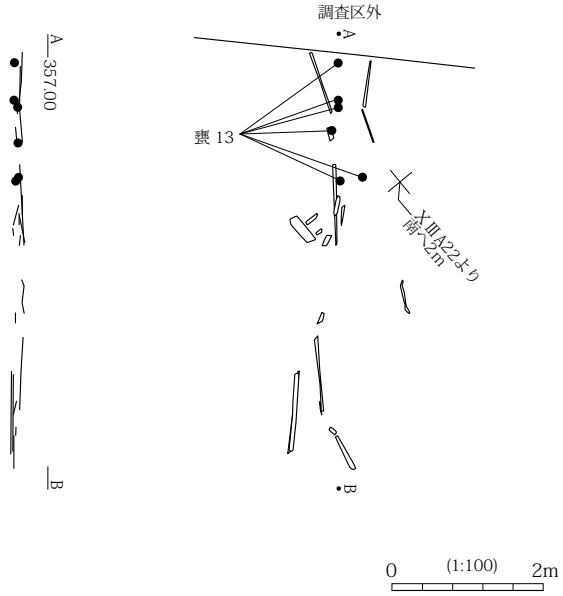
図版 10　7b・8区 SC063　芯材出土状況



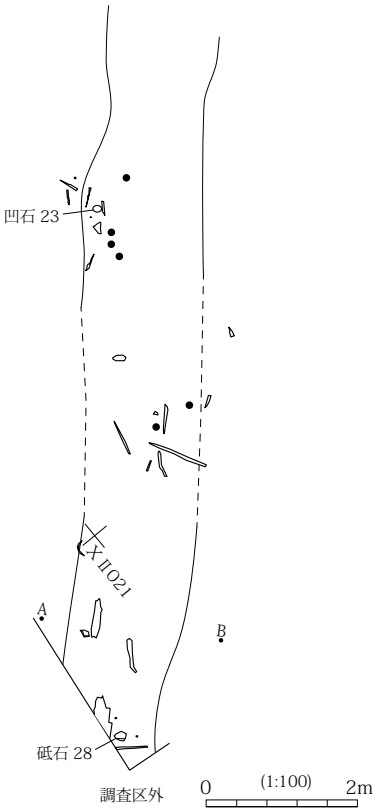
9区 SC115、10 区 SC105、11c 区 SC101　芯材出土状況　図版 11



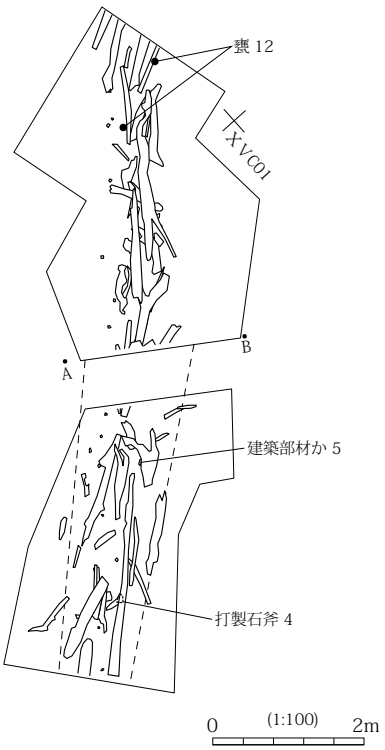
9区SC115

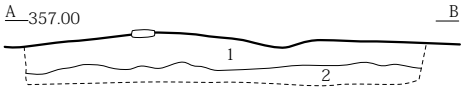


10区SC105



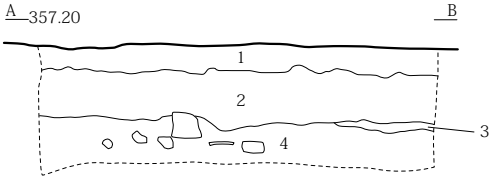
11c区SC101





1　黒褐色土(10YR3/1)　ｼﾙﾄ。黒色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
2　黒色土(10YR1.7/1)　ｼﾙﾄ。泥炭層。未分解植物質多混。
　白色ｼﾙﾄ層堆積。

0 (1:40) 1m

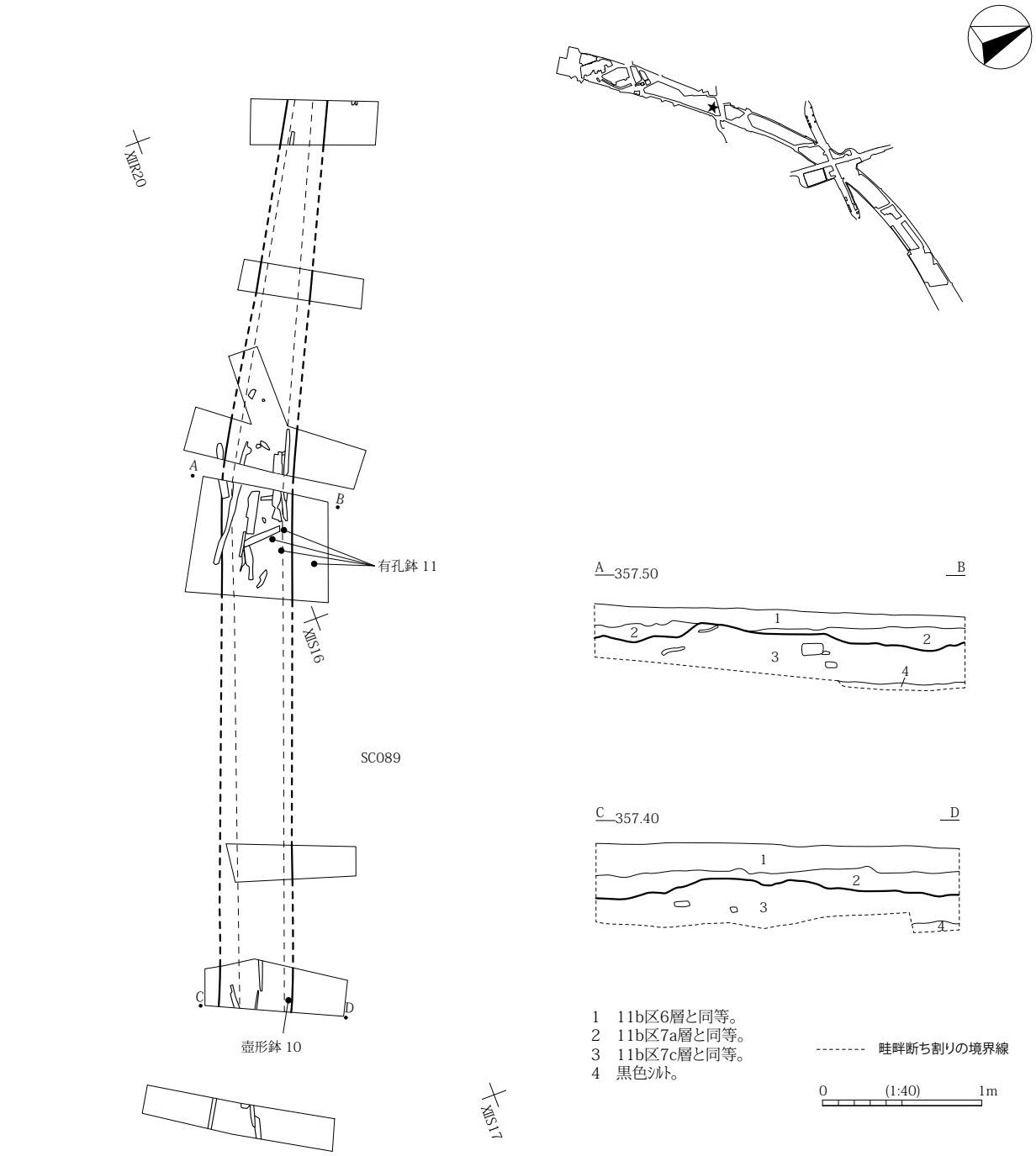


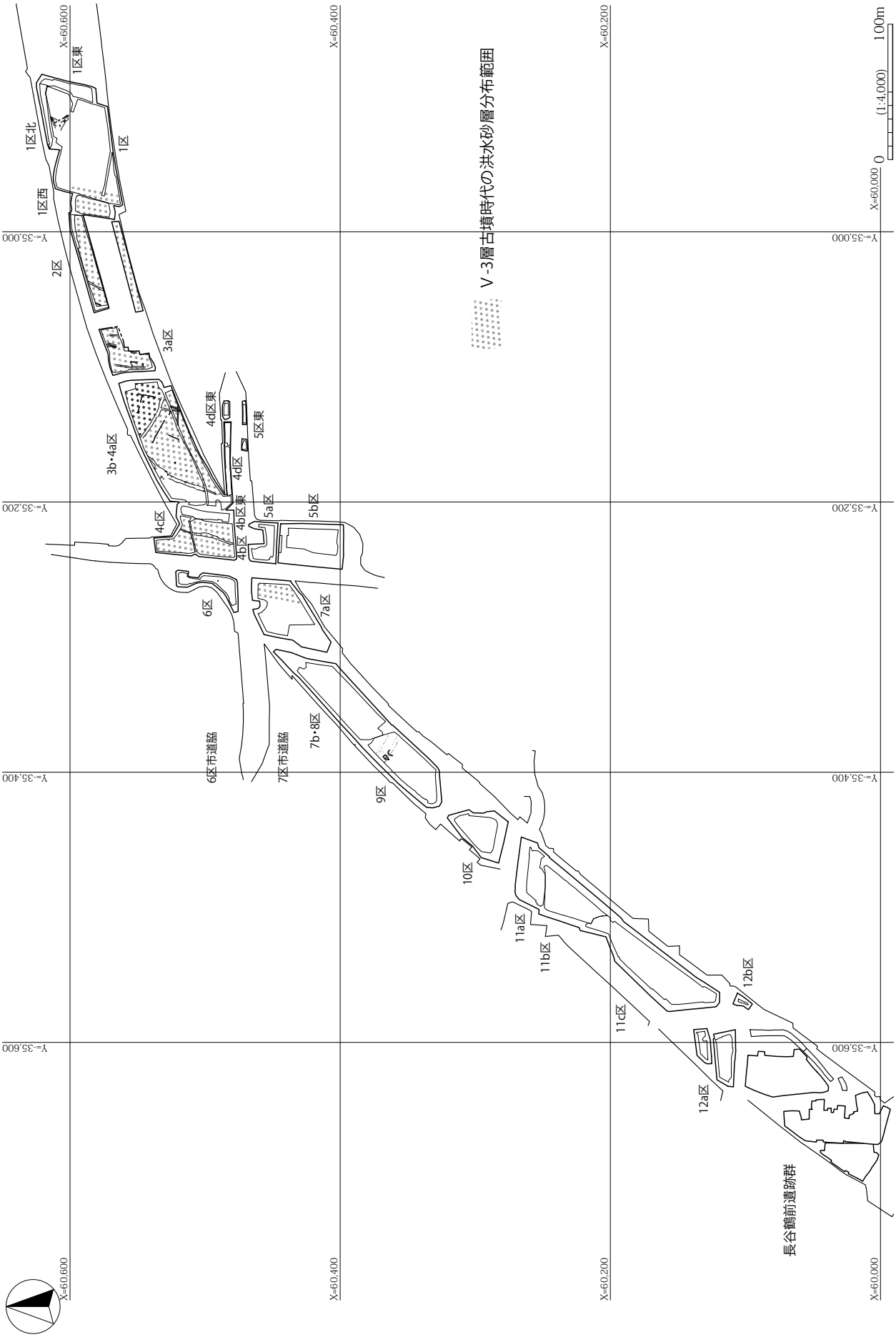
1　11c区基本土層6層。
2　11c区基本土層7a層。
3　11c区基本土層7b層。
4　11c区基本土層7c層。

0 (1:40) 1m

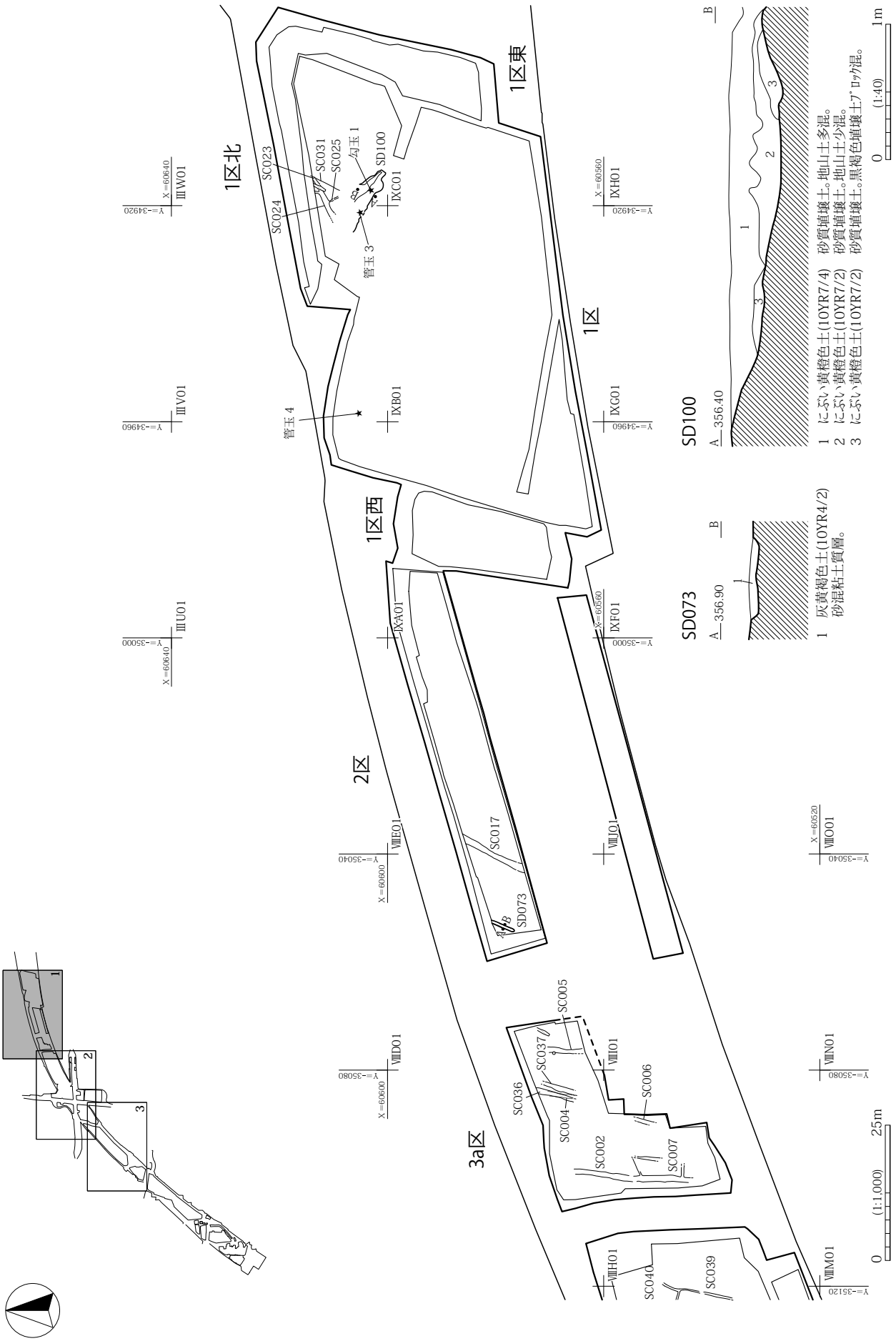
-------- 畦畔断ち割りの境界線

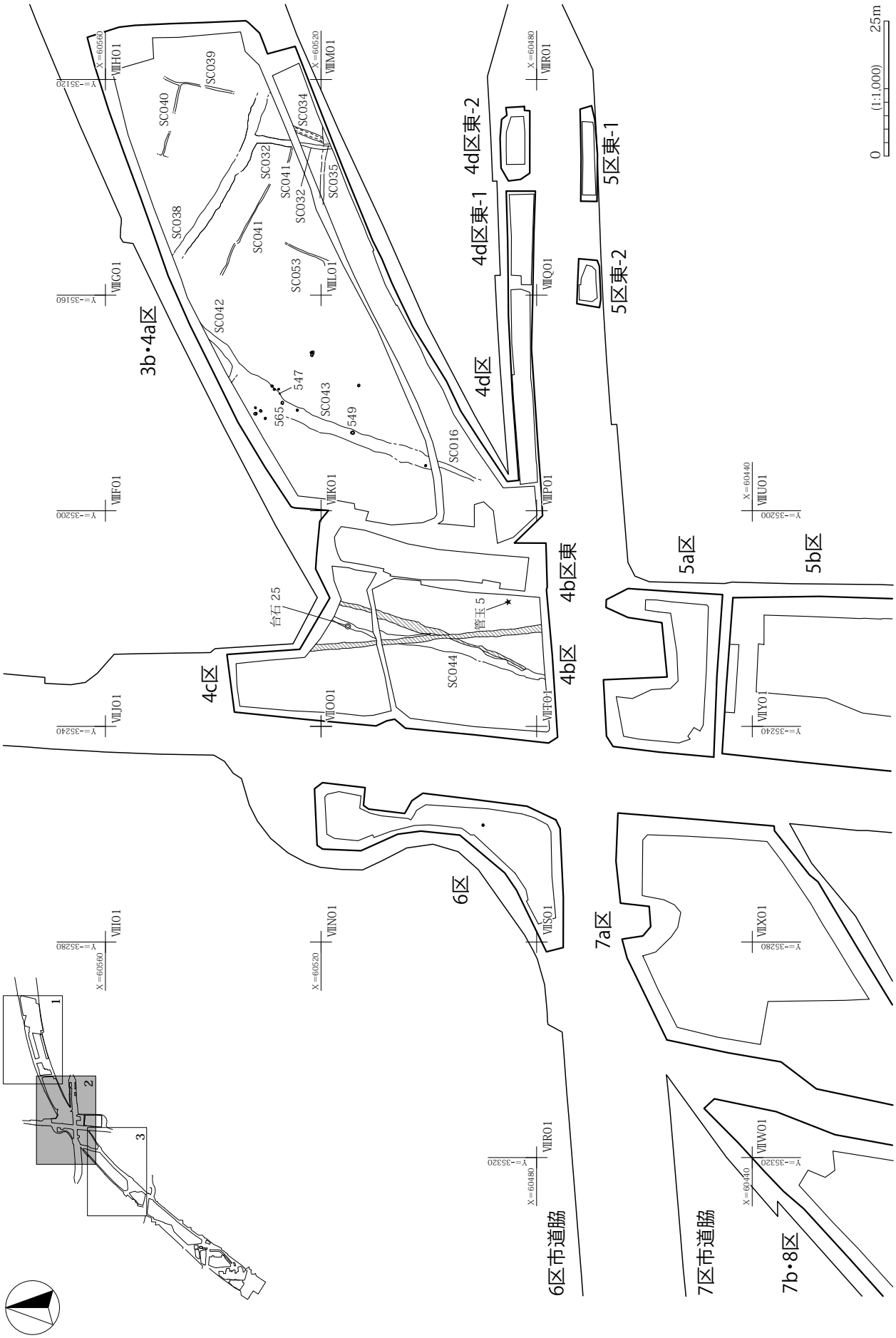
図版 12　11a 区 SC089　芯材出土状況



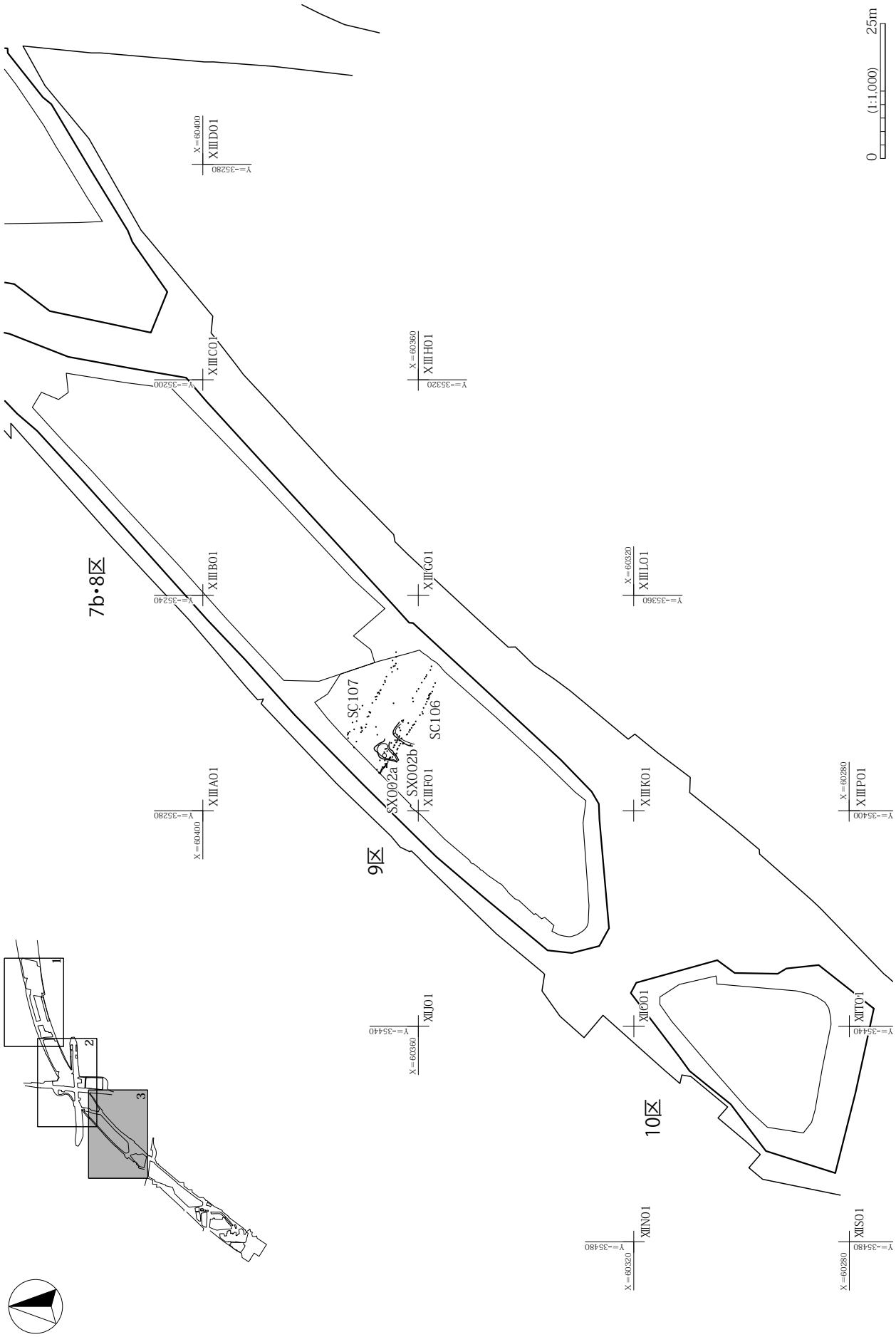

Ⅴ-3層古墳時代の洪水砂層分布範囲
0
(1:4,000)
100m
X=60,600
X=60,400
X=60,200
X=60,000
Y=-35,000
Y=-35,200
Y=-35,400
Y=-35,600
1区東
1区北
1区西
1区
2区
3a区
3b・4a区
4d区東
5区東
4d区
4b区東
4b区
5a区
5b区
4c区
6区
7a区
6区市道脇
7区市道脇
7b・8区
9区
10区
11a区
11b区
11c区
12b区
12a区
長谷鶴前遺跡群

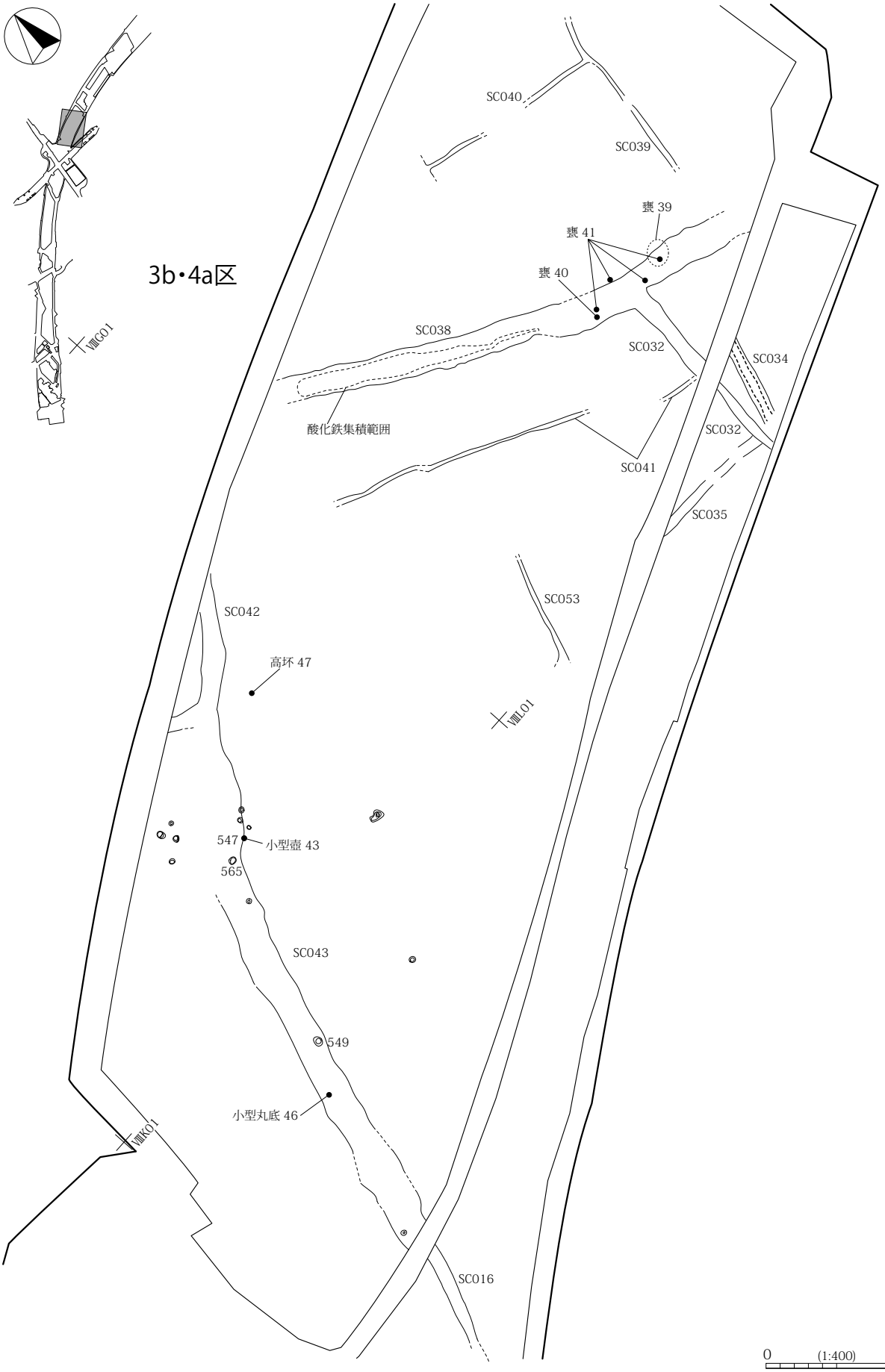
図版 14　古墳時代の遺構分布図 1




3b・4a区
4c区
4b区
4b区東
4d区
4d区東-1
4d区東-2
5区東-1
5区東-2
5a区
5b区
6区
7a区
6区市道脇
7区市道脇
7b・8区
SC016
SC032
SC034
SC035
SC038
SC039
SC040
SC041
SC042
SC043
SC044
SC053
547
565
549
台石 25
菅玉 5
0 (1:1,000) 25m

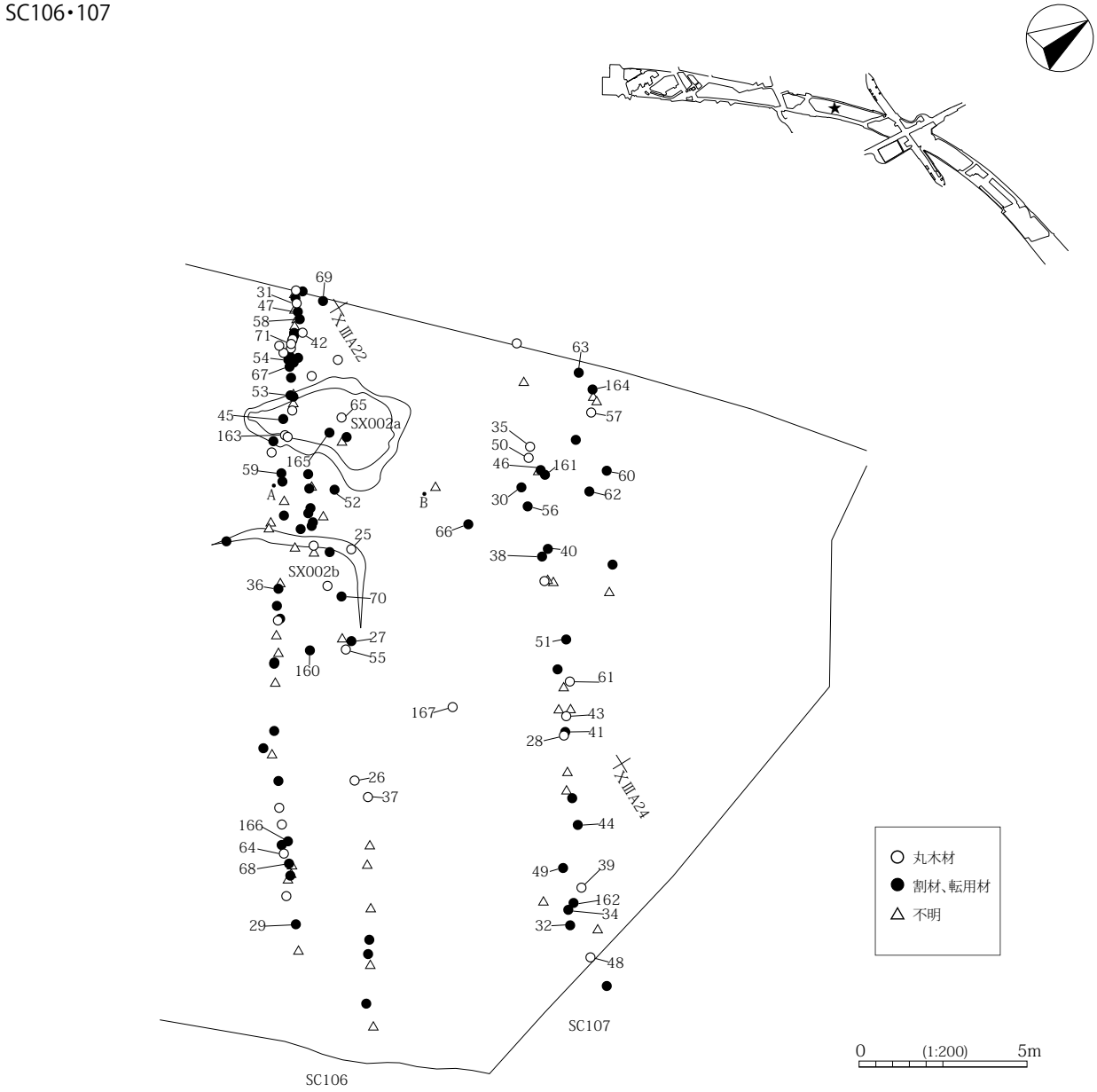
図版 16　古墳時代の遺構分布図３

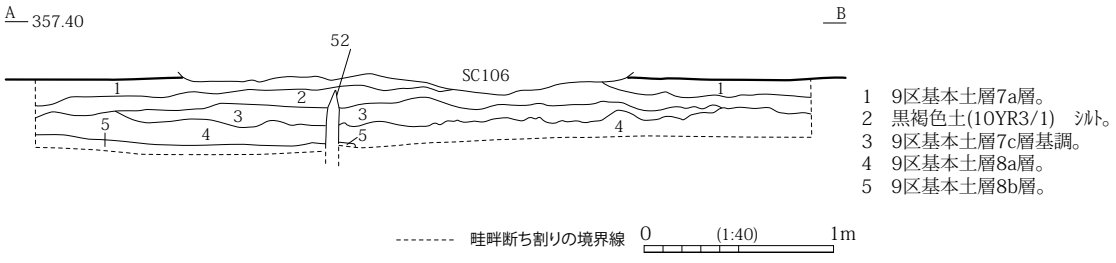



3b･4a区
SC040
SC039
褒 39
褒 41
褒 40
SC038
SC032
SC034
SC032
酸化鉄集積範囲
SC041
SC035
SC053
SC042
高坏 47
547
小型壺 43
565
SC043
549
小型丸底 46
SC016
0
(1:400)
10m

図版 18　9区 SC106・107　杭列

SC106・107

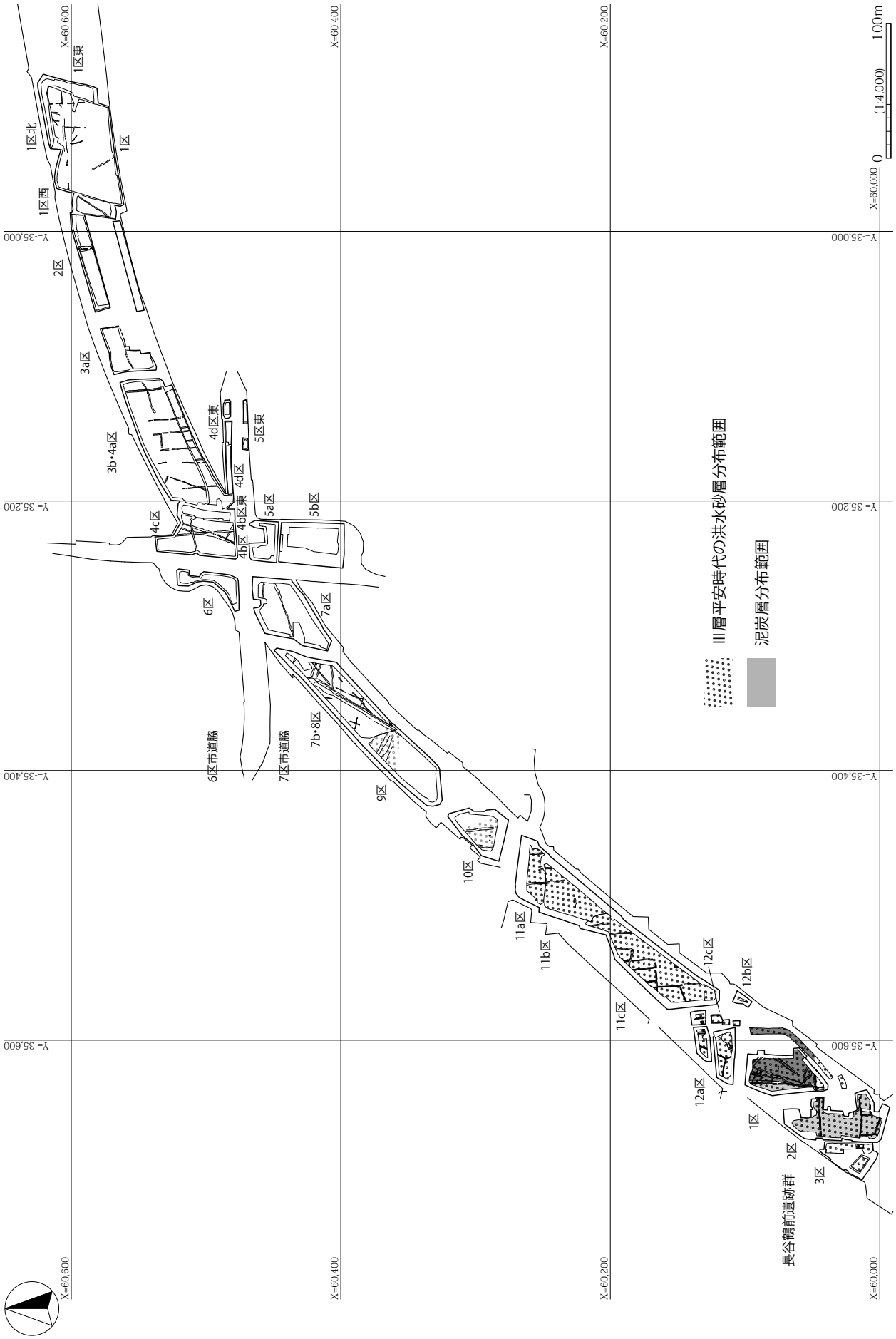




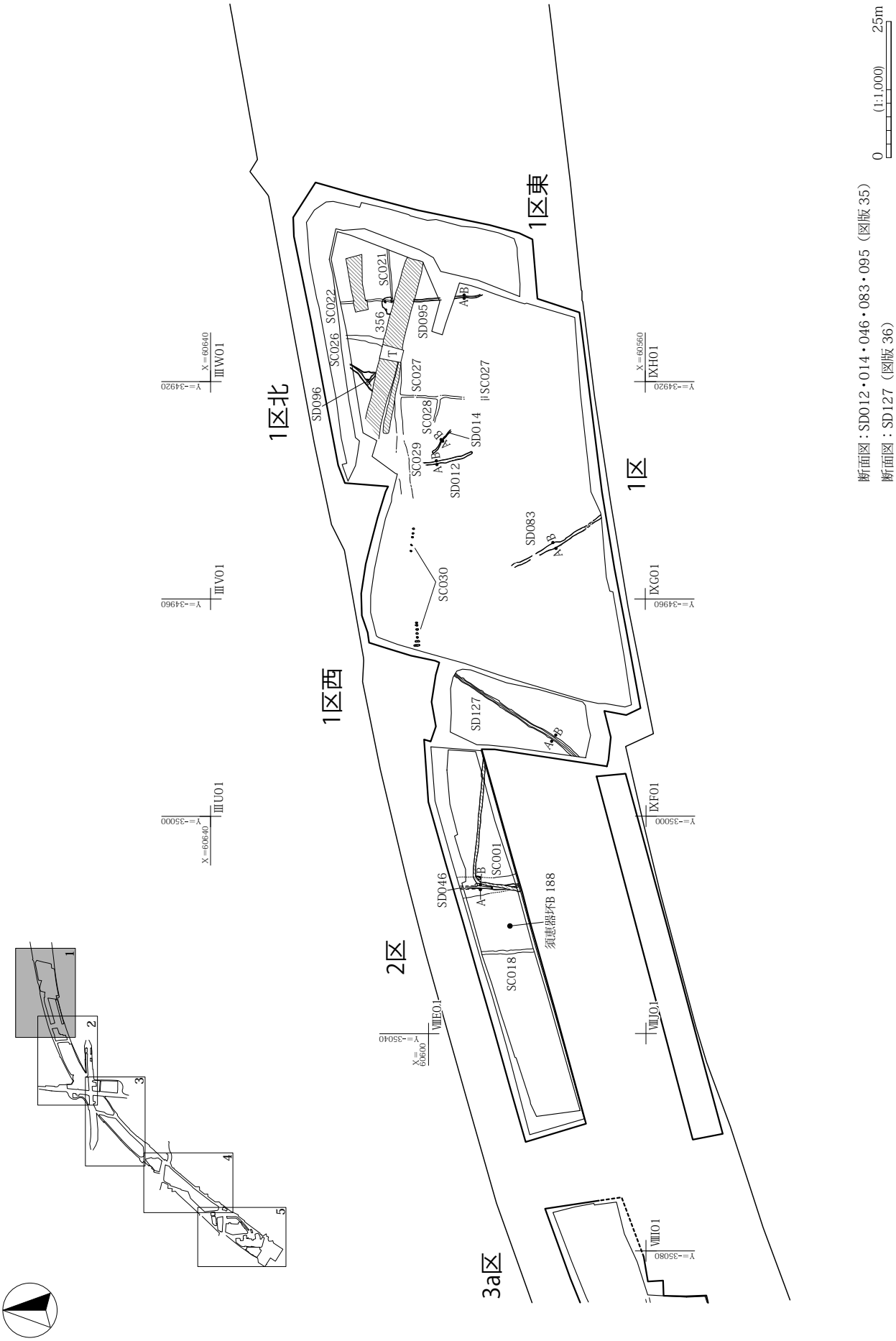
1　9区基本土層7a層。
2　黒褐色土(10YR3/1)　ｼﾙﾄ。
3　9区基本土層7c層基調。
4　9区基本土層8a層。
5　9区基本土層8b層。

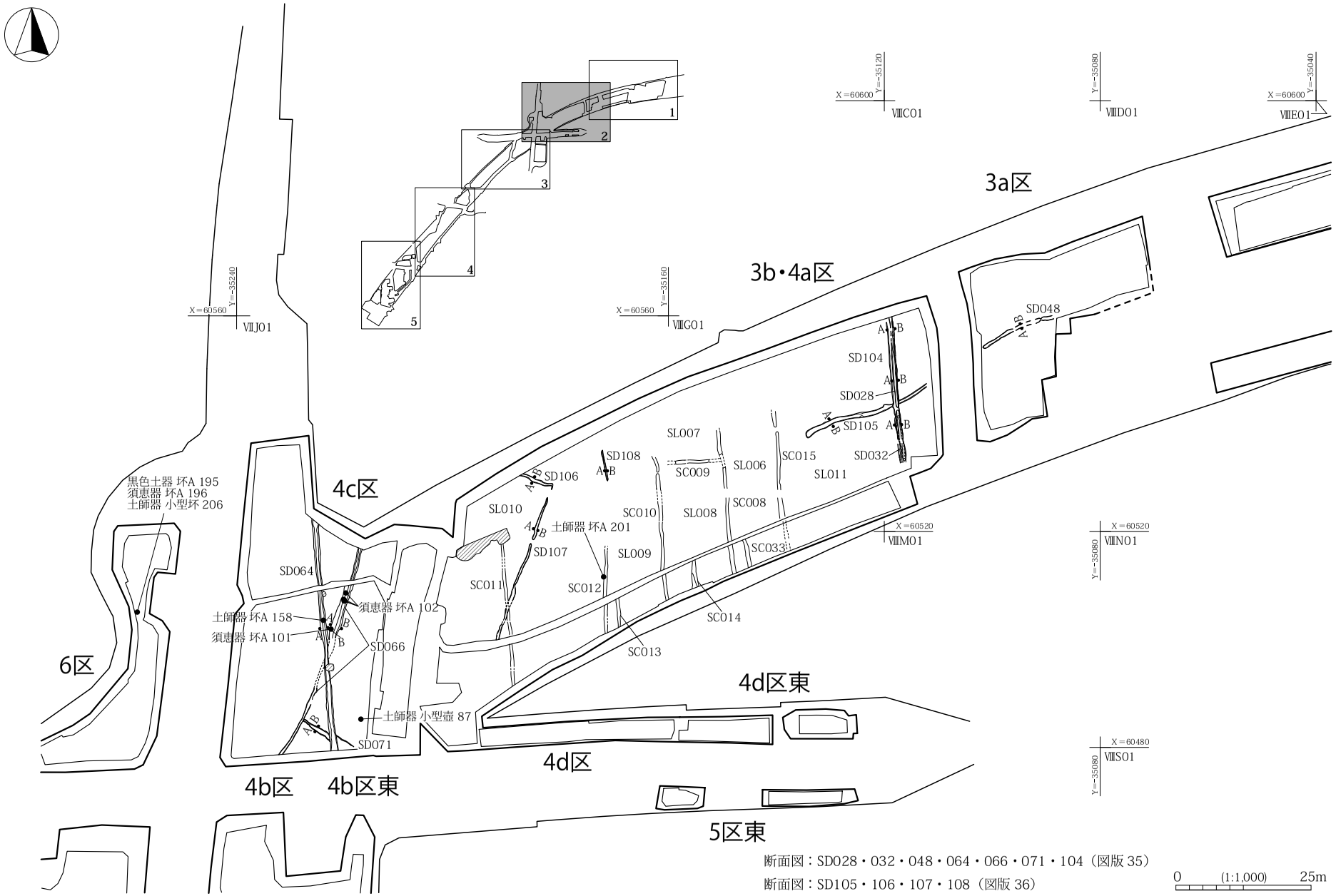
A
357.40
SC106
調査区外
SC107
杭 31
杭 69
杭 47
杭 58
杭 42
杭 71
管玉 8
杭 54
壺 54
杭 67
杭 53
小型丸底 50
管玉 7
杭 63
杭 57
杭 35
杭 50
杭 46
杭 60
高坏 53
杭 30
杭 62
杭 56
杭 66
杭 40
杭 38
杭か 59
杭 52
SX002a
杭 25
勾玉 2
杭 36
SX002b
杭 70
杭 27
杭 55
杭 51
杭 61
杭 43
杭 41
杭 28
杭 26
杭 37
杭 44
杭 64
杭 68
杭か 49
杭 39
杭 34
杭 32
杭 29
杭 48
B
0
(1:100)
2m

図版 20　SX002　遺物出土状況


X=60,600
X=60,400
X=60,200
X=60,000
Y=-35,000
Y=-35,200
Y=-35,400
Y=-35,600
0
(1:4,000)
100m
1区北
1区西
1区東
1区
2区
3a区
3b・4a区
4c区
4d区東
5区東
4d区
4b区東
4b区
5a区
5b区
6区
7a区
6区市道脇
7区市道脇
7b・8区
9区
10区
11a区
11b区
11c区
12a区
12c区
12b区
1区
2区
3区
長谷鶴前遺跡群
III層平安時代の洪水砂層分布範囲
泥炭層分布範囲

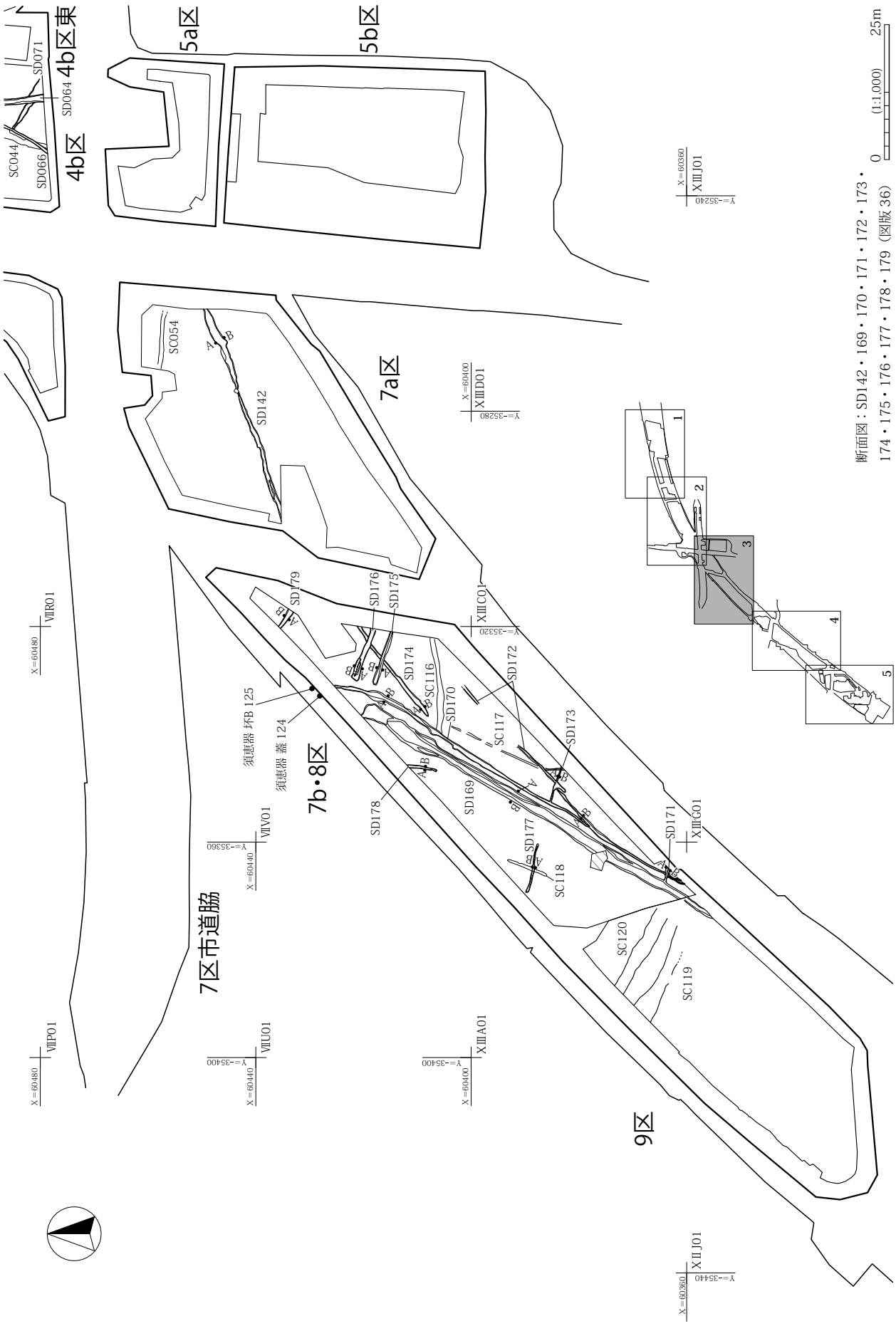
図版 22　古代の遺構分布図 1

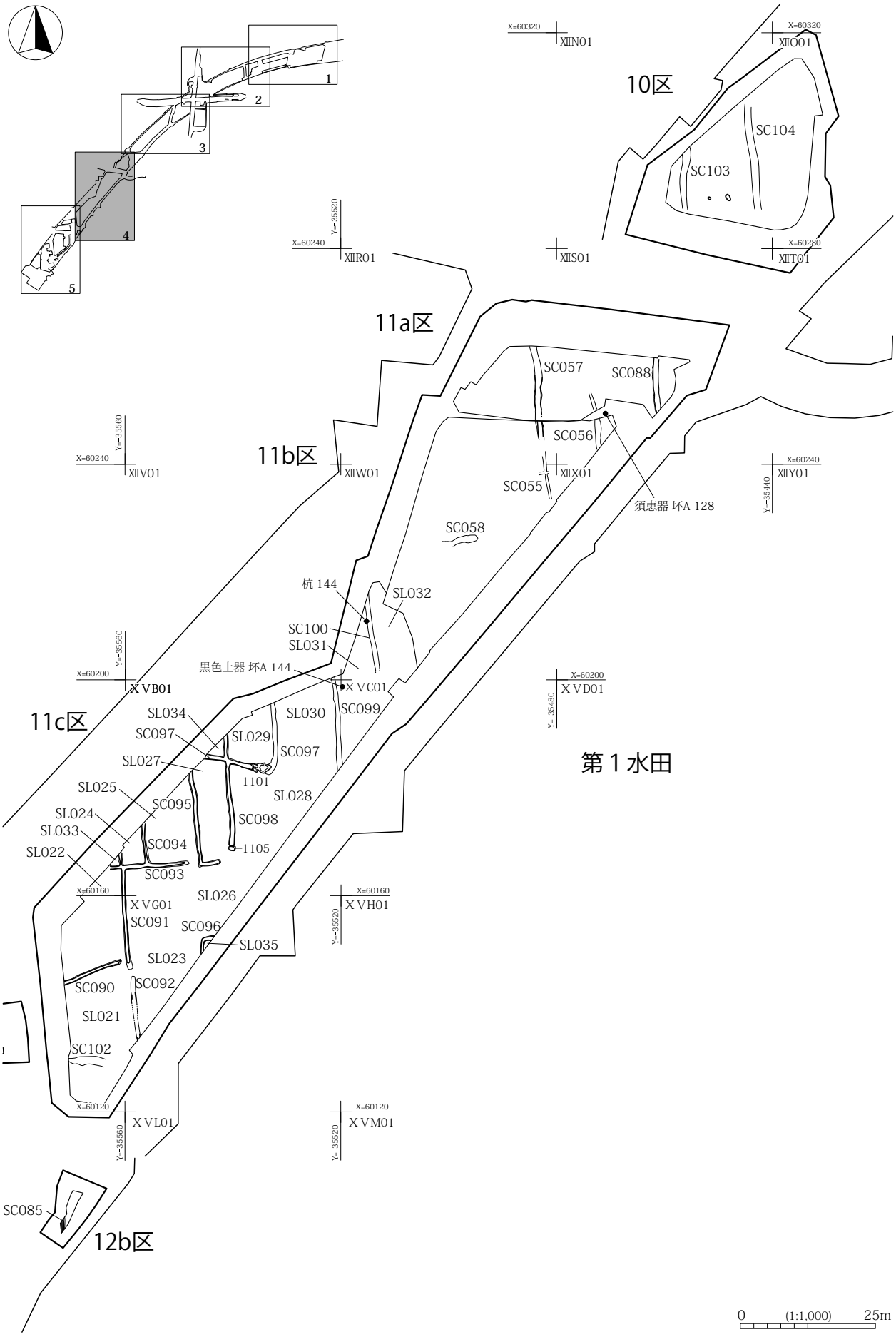




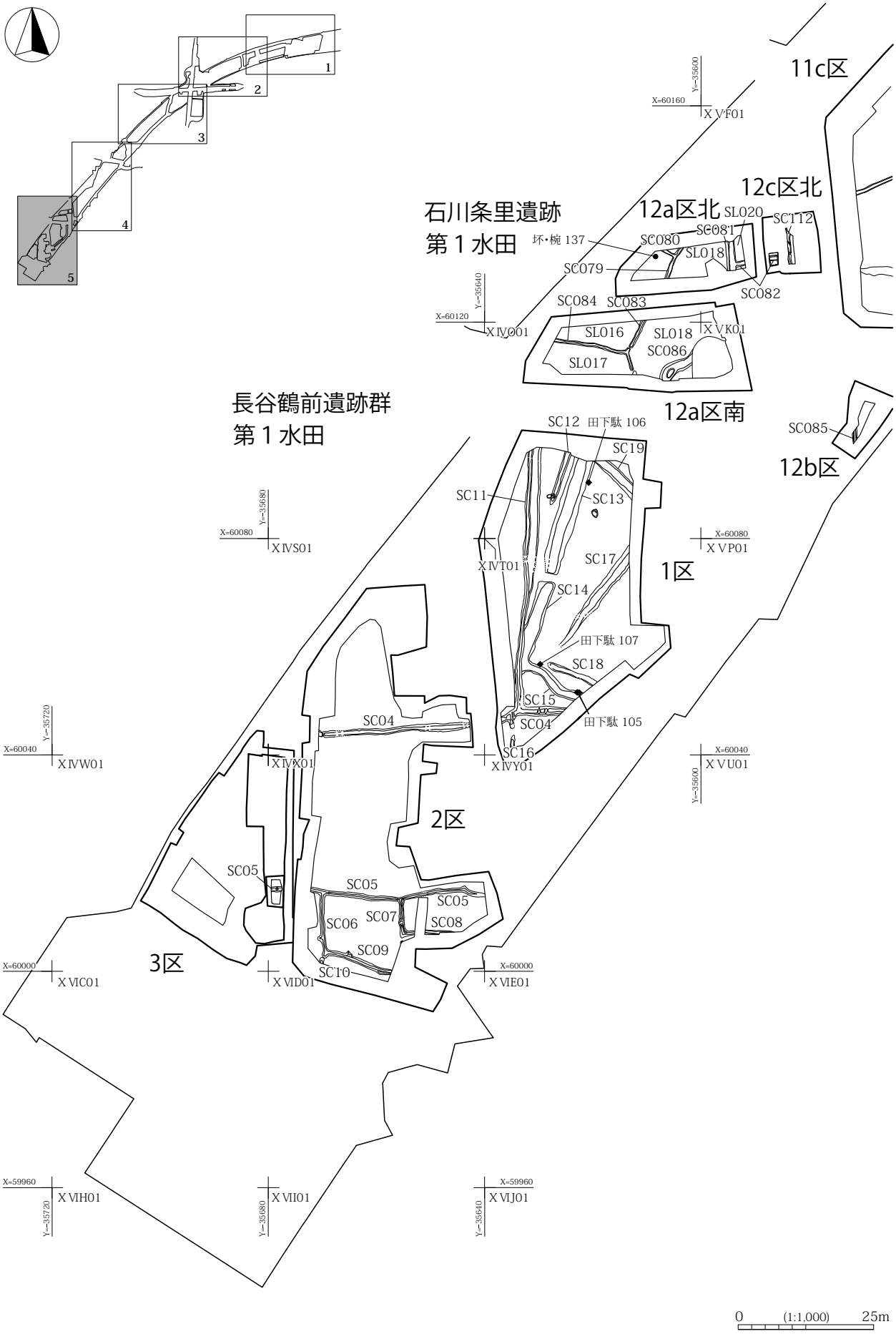
断面図：SD028・032・048・064・066・071・104（図版 35）
断面図：SD105・106・107・108（図版 36）

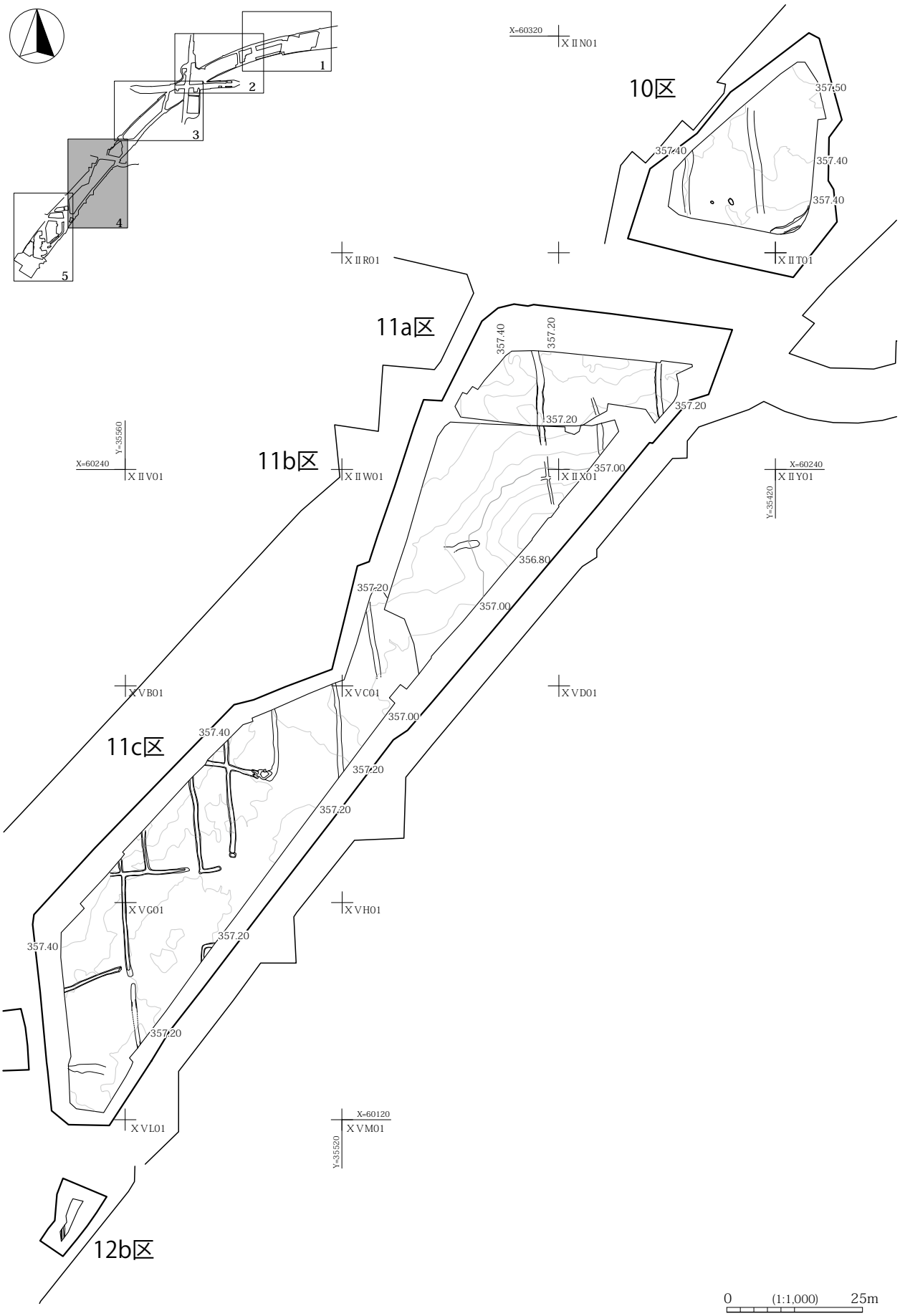
図版 24　古代の遺構分布図３



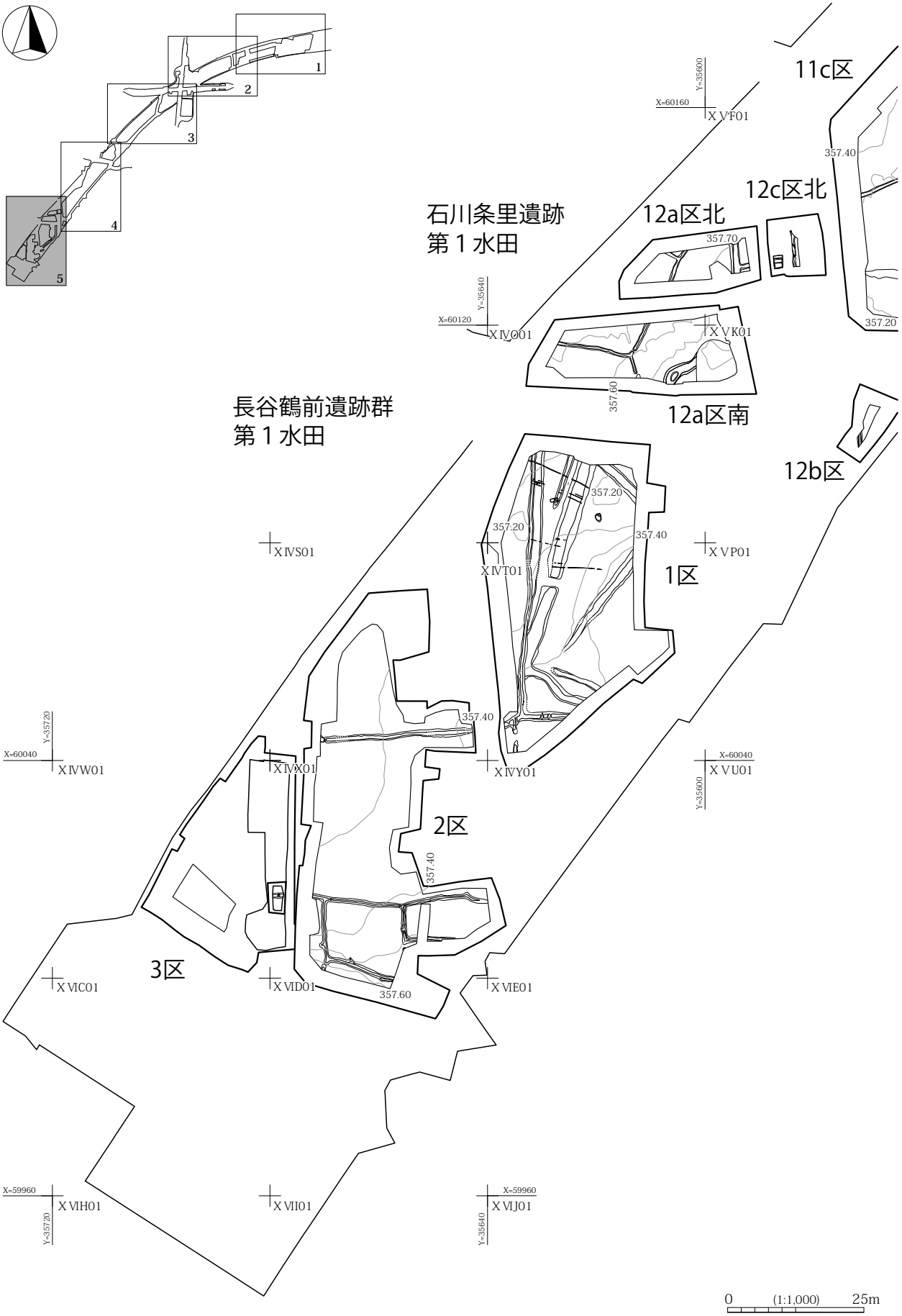

1
2
3
4
5
X=60320
XIIN01
X=60320
XIIO01
10区
SC104
SC103
X=60240
Y=35520
XIIR01
XIIS01
X=60280
XIIT01
11a区
SC057
SC088
SC056
X=60240
Y=35560
XIIV01
11b区
XIIW01
XIIX01
SC055
X=60240
XIIY01
Y=35440
須恵器 坏A 128
SC058
杭 144
SL032
SC100
SL031
X=60200
Y=35560
XVB01
黒色土器 坏A 144
XVC01
X=60200
XVD01
Y=35480
11c区
SL034
SC097
SL029
SL030
SC099
SC097
SL027
1101
SL028
第１水田
SL025
SC095
SL024
SC098
SL033
SC094
SL022
1105
SC093
X=60160
XVG01
SL026
X=60160
XVH01
Y=35520
SC091
SC096
SL035
SL023
SC090
SC092
SL021
SC102
X=60120
XVL01
Y=35560
X=60120
XVM01
Y=35520
SC085
12b区
0
(1:1,000)
25m

図版 26　古代の遺構分布図５



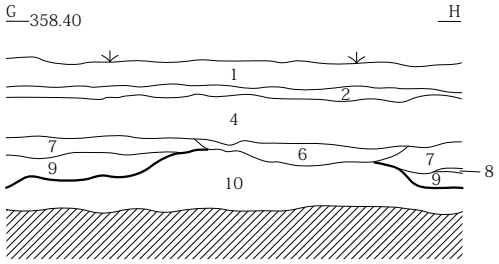

1
2
3
4
5
X=60320
XⅡN01
10区
357.50
357.40
357.40
357.40
XⅡR01
XⅡT01
11a区
357.40
357.20
357.20
357.20
Y=35560
X=60240
XⅡV01
11b区
XⅡW01
XⅡX01
357.00
X=60240
XⅡY01
Y=35420
356.80
357.20
357.00
XVB01
XVC01
XVD01
357.00
11c区
357.40
357.20
357.20
XVG01
XVH01
357.40
357.20
357.20
XVL01
X=60120
XVM01
Y=35520
12b区
0
(1:1,000)
25m

図版 28　12 区第 1 水田・長谷鶴前遺跡群第 1 水田等高線図

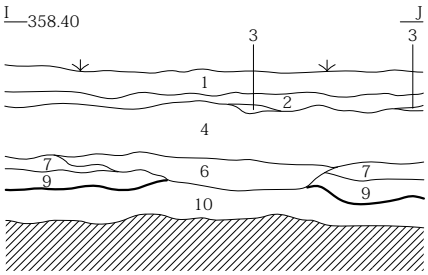


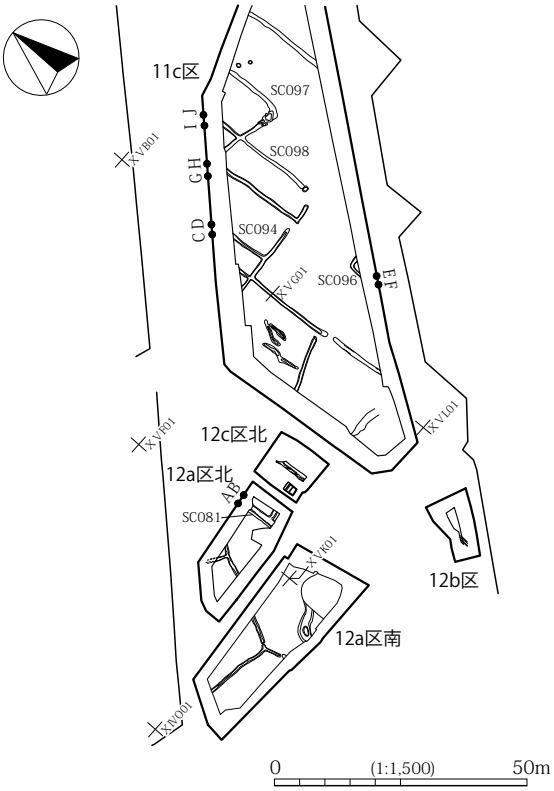
11区

SC097

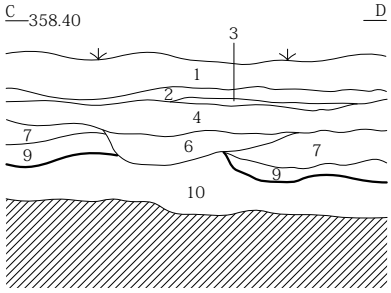


SC098

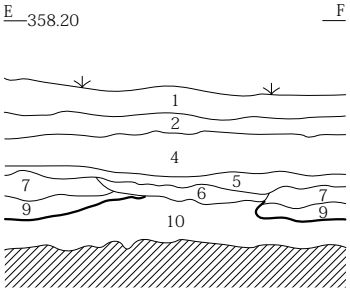




SC094



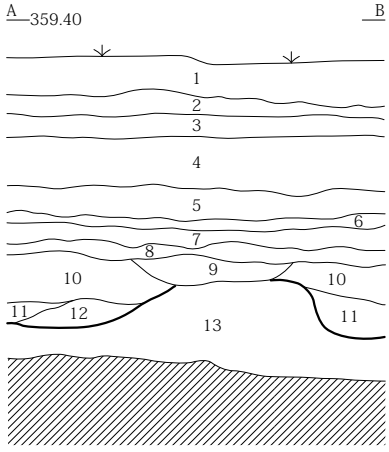
SC096



1　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。
2　褐色土(10YR4/4)　ｼﾙﾄ。
3　山砂層。
4　黒褐色土(10YR3/1)　ｼﾙﾄ。
5　黒褐色土(10YR3/1)　ｼﾙﾄ。
6　黒褐色ｼﾙﾄ。
7　11c区基本土層5c-1層。
8　11c区基本土層5c-2層。
9　11c区基本土層5c-3層。
10　11c区基本土層6層。

12区

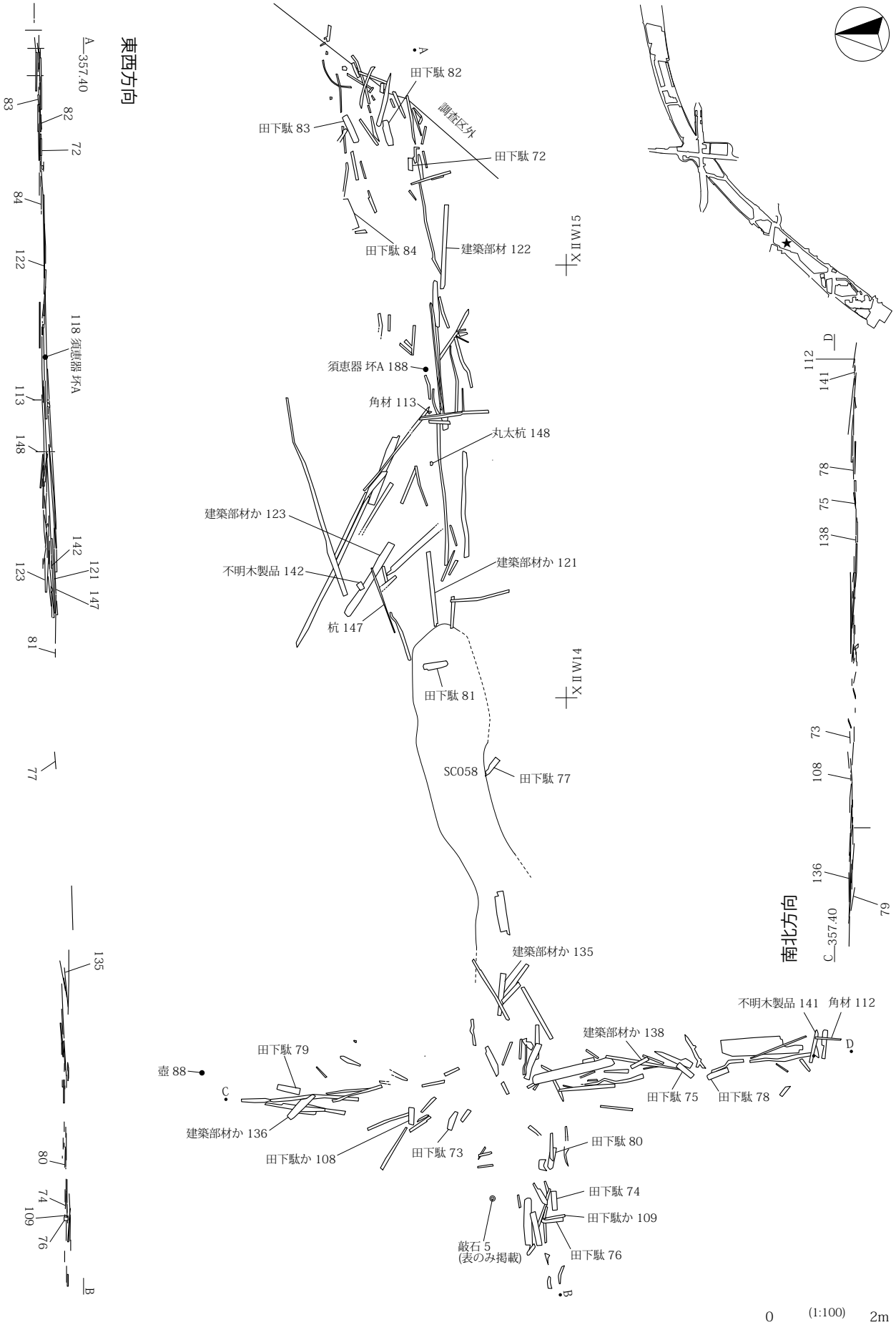
SC081

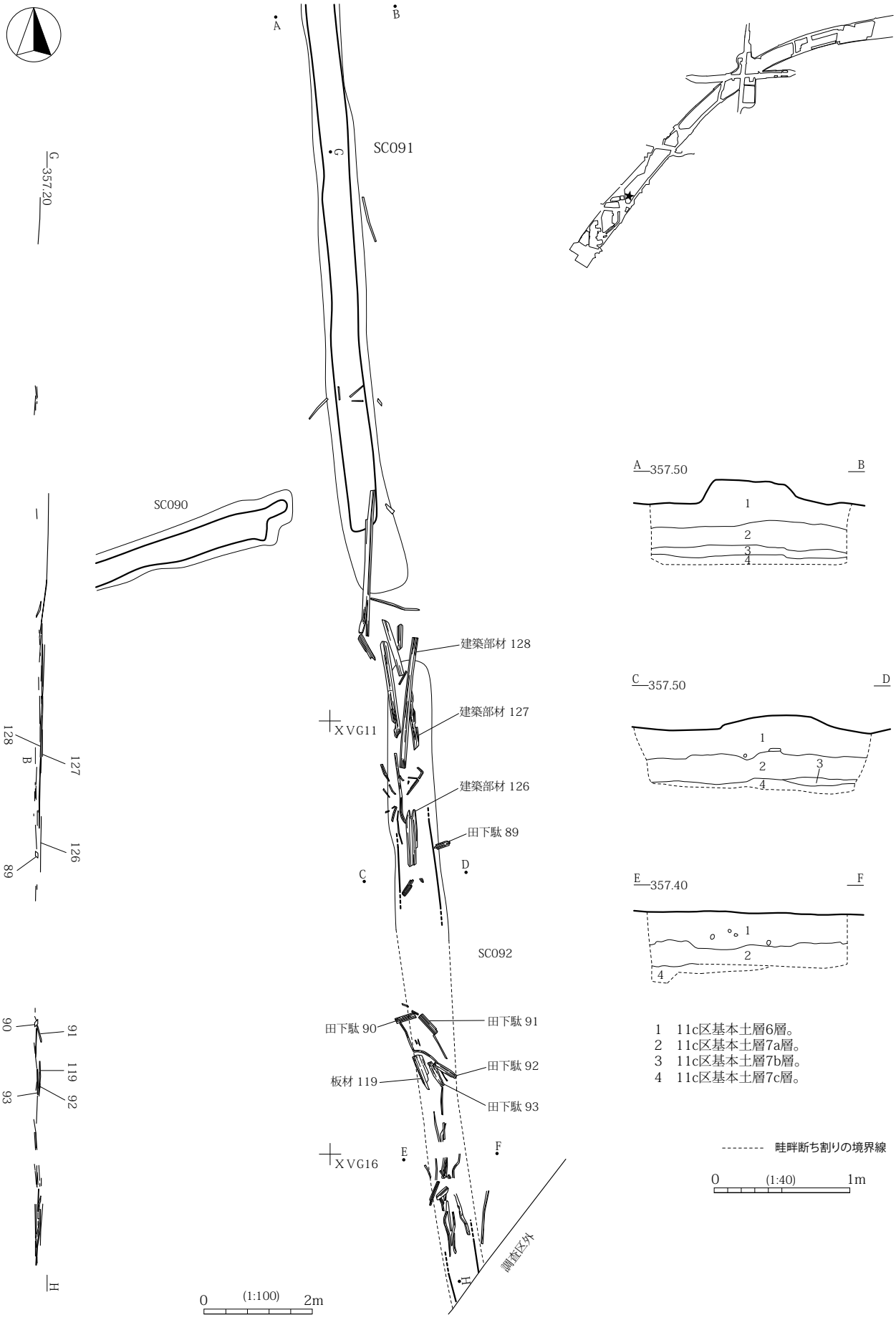


1　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。
2　暗褐色土(10YR3/3)。粗砂多混。
3　褐色土(10YR4/4)　砂質ｼﾙﾄ。還元。粗砂多混。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ。灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
5　灰黄褐色(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。粗砂多混。
6　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。 還元。
7　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。
8　12a区基本土層8層。
9　黒褐色ｼﾙﾄ。
10　12a区基本土層10a層。
11　12a区基本土層10b層。
12　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ混砂。ﾌﾞﾛｯｸ状。
13　12a区基本土層11層。

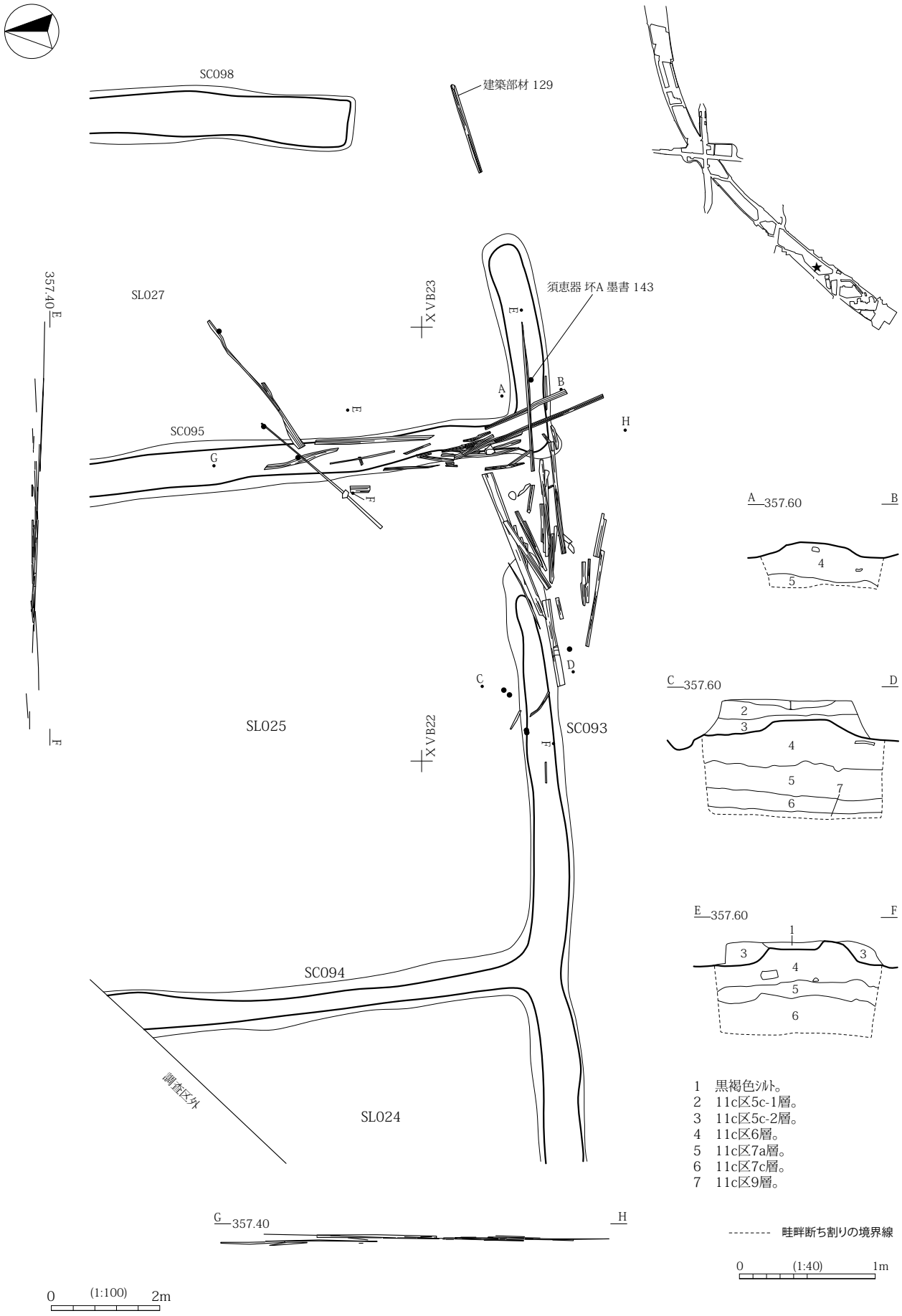
0　(1:40)　1m

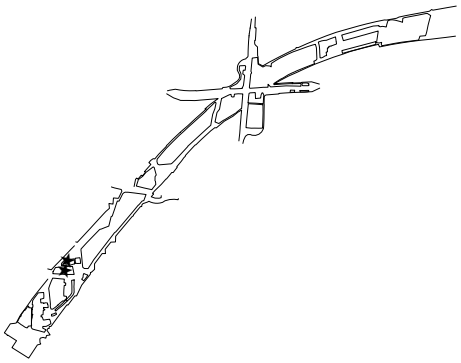
図版 30　11b 区 SC058　芯材出土状況



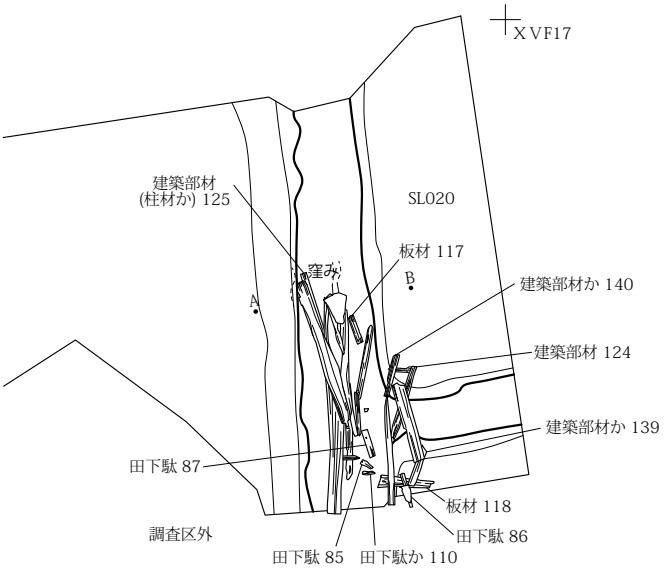

A
B
C
D
E
F
G
H
SC091
SC090
SC092
G 357.20
A 357.50 B
C 357.50 D
E 357.40 F
建築部材 128
建築部材 127
建築部材 126
田下駄 89
田下駄 90
田下駄 91
田下駄 92
田下駄 93
板材 119
XVG11
XVG16
調査区外
1 11c区基本土層6層。
2 11c区基本土層7a層。
3 11c区基本土層7b層。
4 11c区基本土層7c層。
畦畔断ち割りの境界線
0 (1:40) 1m
0 (1:100) 2m

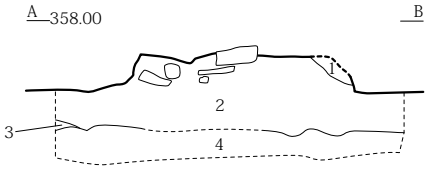
図版 32　11c 区 SC093・095　芯材出土状況





SC081



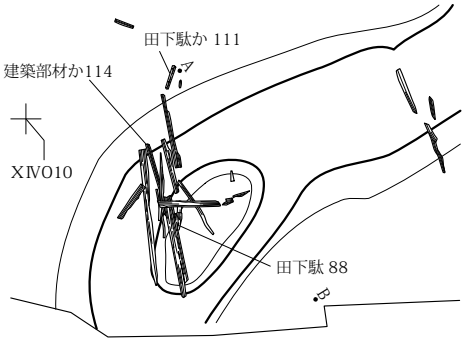


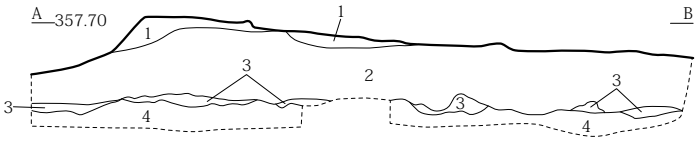
1　12a区10b層。
2　12a区11層。
3　12a区12層。
4　12a区13層。

-------　畦畔断ち割りの境界線

0　(1:40)　1m

SC086



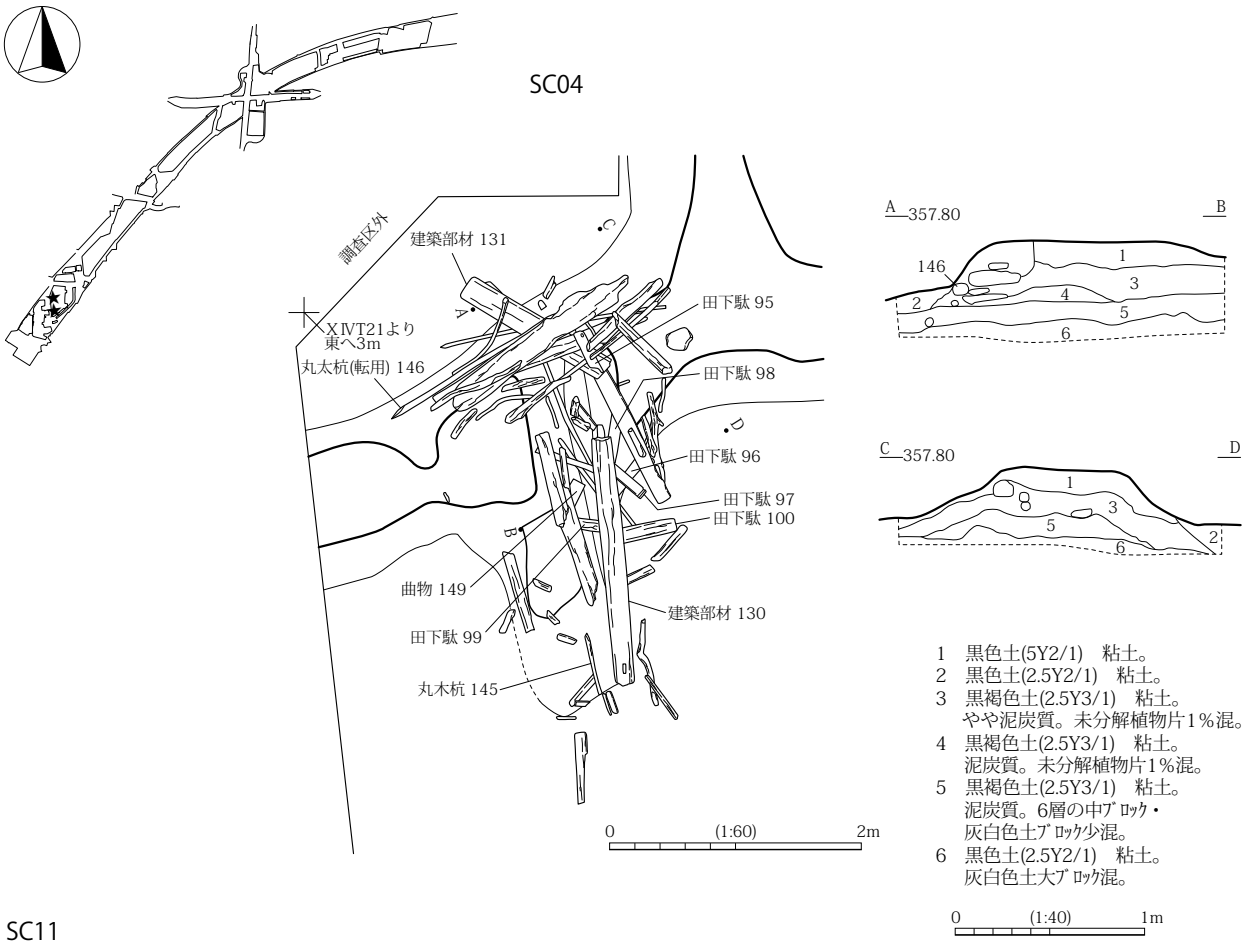


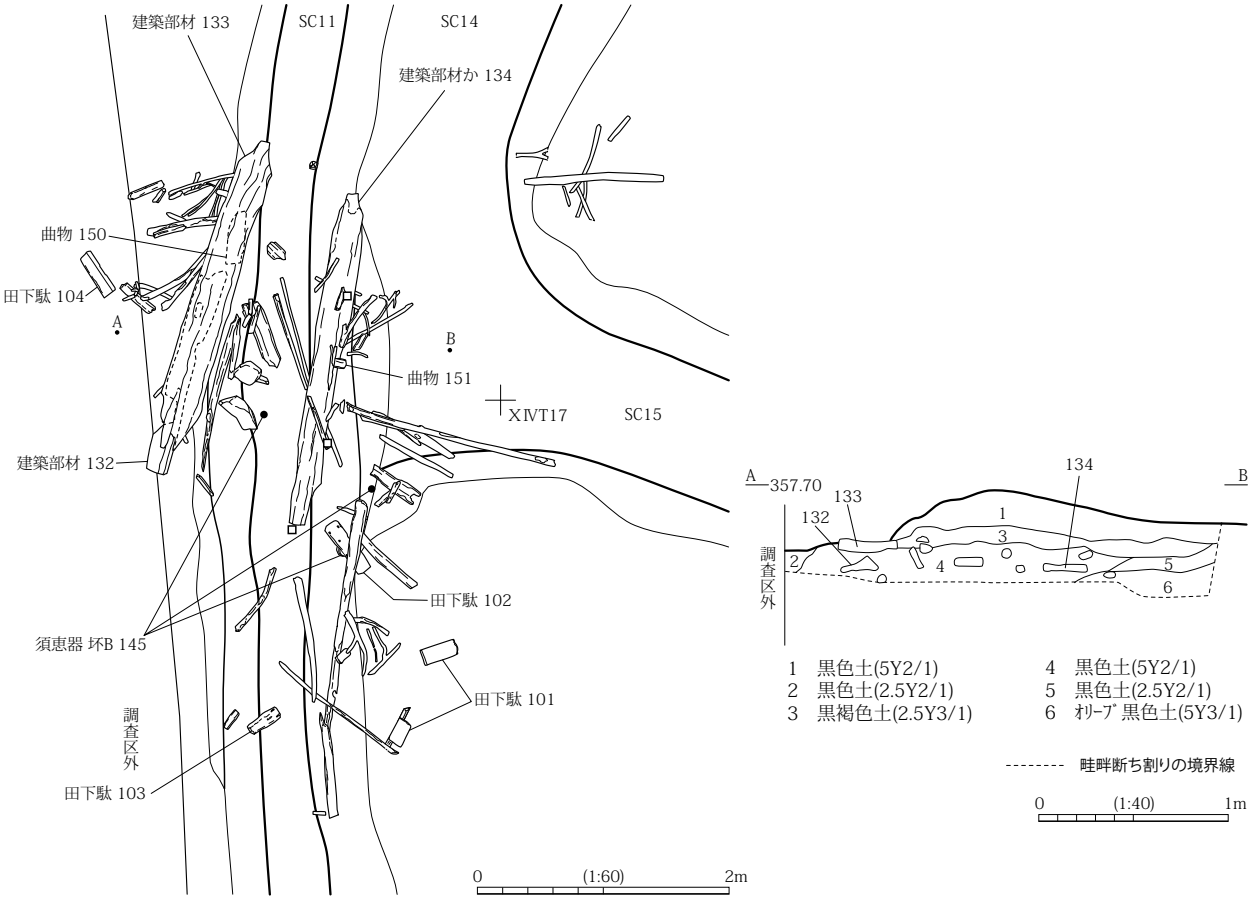
1　12a区10b層。
2　12a区11層。
3　12a区12層。
4　12a区13層。

-------　畦畔断ち割りの境界線

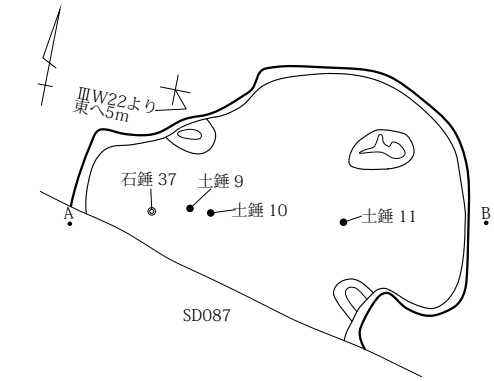
0　(1:40)　1m

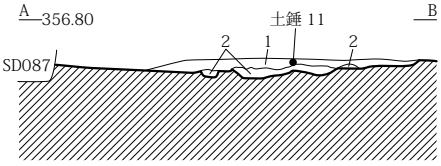
図版 34　長谷鶴前遺跡群 1 区 SC04・SC11　芯材出土状況





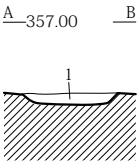
SK356





1　黄灰色土(2.5Y6/1)　ｼﾙﾄ。細砂混。
2　褐灰色土(10YR6/1)　細砂質ｼﾙﾄ。還元。

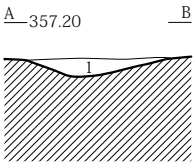
SD012



1　黒褐色土(10YR3/2)
　砂質ｼﾙﾄ。

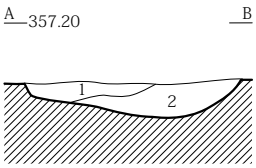
SD014

SD028



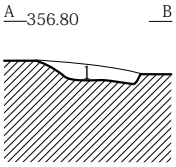
1　灰黄褐色土(10YR5/2)
　褐色土粒少混。

SD032



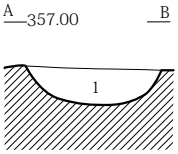
1　灰黄褐色土(10YR5/2)
　褐色土粒混。
2　灰黄褐色土(10YR5/2)
　褐色土粒混。暗褐色土
　ﾌﾞﾛｯｸ少混。

SD046



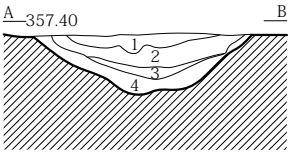
1　褐灰色土(10YR5/1)
　細砂。

SD048



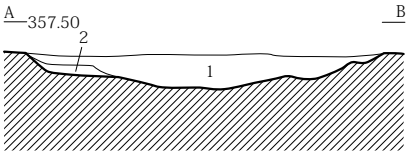
1　灰黄褐色土(10YR4/2)
　ｼﾙﾄ質埴壌土。
　地山土混。

SD064



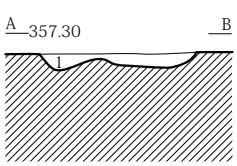
1　褐灰色土(10YR4/1)　砂混。
2　褐灰色土(10YR6/1)
3　灰黄色土(2.5Y6/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
4　褐灰色土(10YR5/1)　還元。

SD066



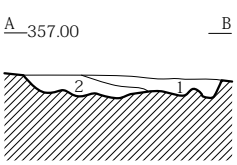
1　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
2　灰白色土(10YR7/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。地山土混。

SD071



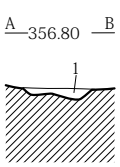
1　褐灰色土(10YR6/1)
　黄褐色土混。

SD083



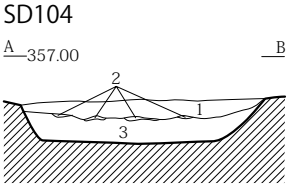
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質
　埴壌土。褐灰色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
2　黄灰色土(2.5Y5/1)　ｼﾙﾄ質埴
　壌土。灰黄色・黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ
　多混。

SD095

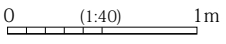


1　褐灰色土(10YR4/1)
　地山土多混。

SD104

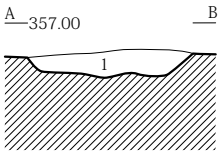


1　褐灰色土(10YR4/1)　粘土。
2　褐灰色土(10YR5/1)　砂。
3　褐灰色土(10YR5/1)　砂質粘土。



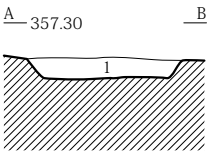
図版 36　古代の溝跡２

SD105



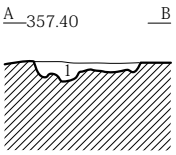
1　褐灰色土(7.5YR5/1)
粘土。

SD106



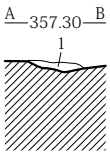
1　褐灰色土(10YR4/1)
粘土。にぶい黄橙色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。埋め土。

SD107



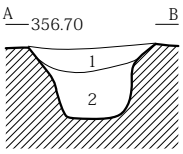
1　褐灰色土(7.5YR4/1)
粘土。

SD108



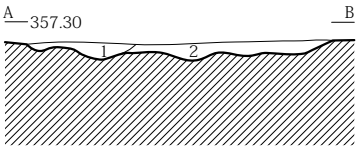
1　褐灰色土
(7.5YR4/1)
ｼﾙﾄ質埴壌土。
小細砂ﾌﾞﾛｯｸ混。

SD127



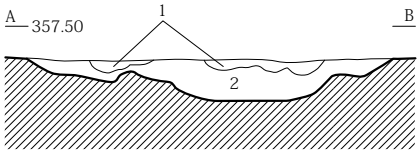
1　黄灰色土(2.5Y4/1)
ｼﾙﾄ質埴壌土。灰色粒砂混。還元。
2　褐灰色土(10YR4/1)
褐色細粒砂混。還元。

SD142



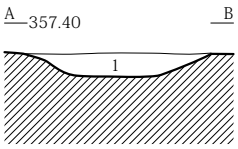
1　褐灰色土(10YR4/1)　砂質ｼﾙﾄ。黄褐色土・黒褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
2　褐色土(10YR4/6)　粗砂。黄褐色砂多混。灰色砂・黒褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SD169



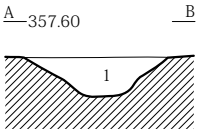
1　粗砂。
2　黒褐色土　ｼﾙﾄ。

SD170



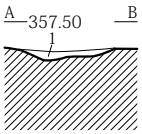
1　黒褐色土(10YR3/2)
ｼﾙﾄ質埴壌土。

SD171



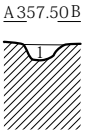
1　黒褐色土(10YR3/2)
ｼﾙﾄ質埴壌土。

SD172



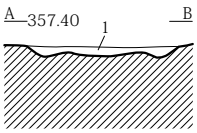
1　黒褐色土(10YR3/2)
ｼﾙﾄ質埴壌土。

SD173



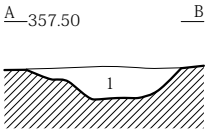
1　黒褐色土
(10YR3/2)
ｼﾙﾄ質埴壌土。

SD174



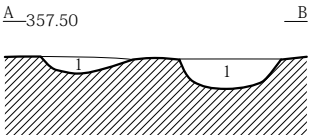
1　黒褐色土(10YR3/2)
ｼﾙﾄ質埴壌土。

SD175



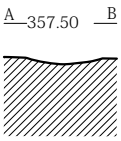
1　黒褐色土(10YR3/2)
ｼﾙﾄ質埴壌土。

SD176

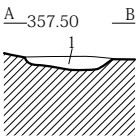


1　黒褐色土(10YR3/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。

SD177

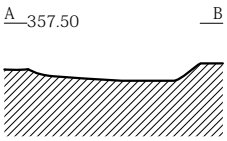


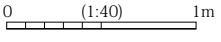
SD178

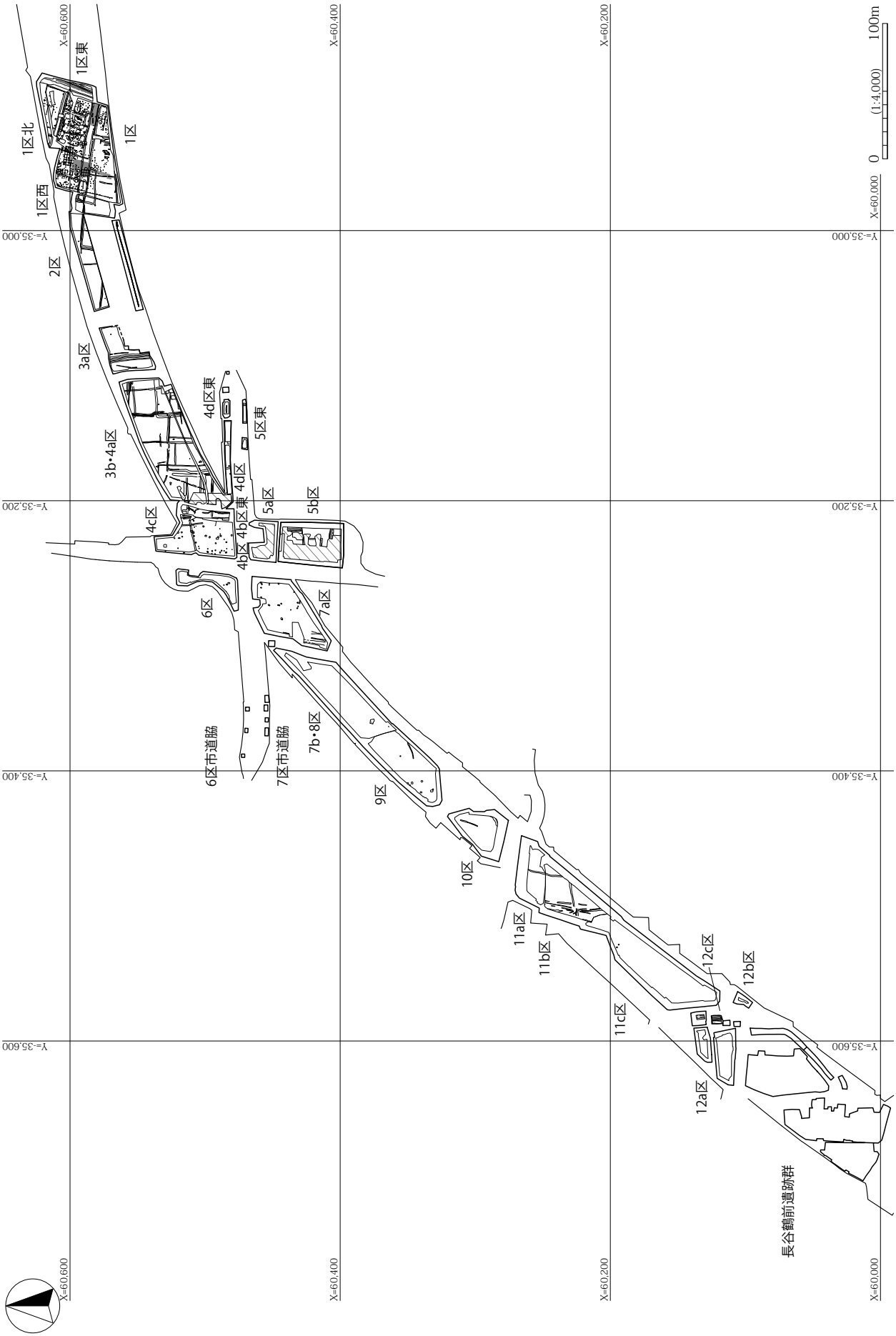


1　黒褐色土(10YR3/2)
ｼﾙﾄ質埴壌土。

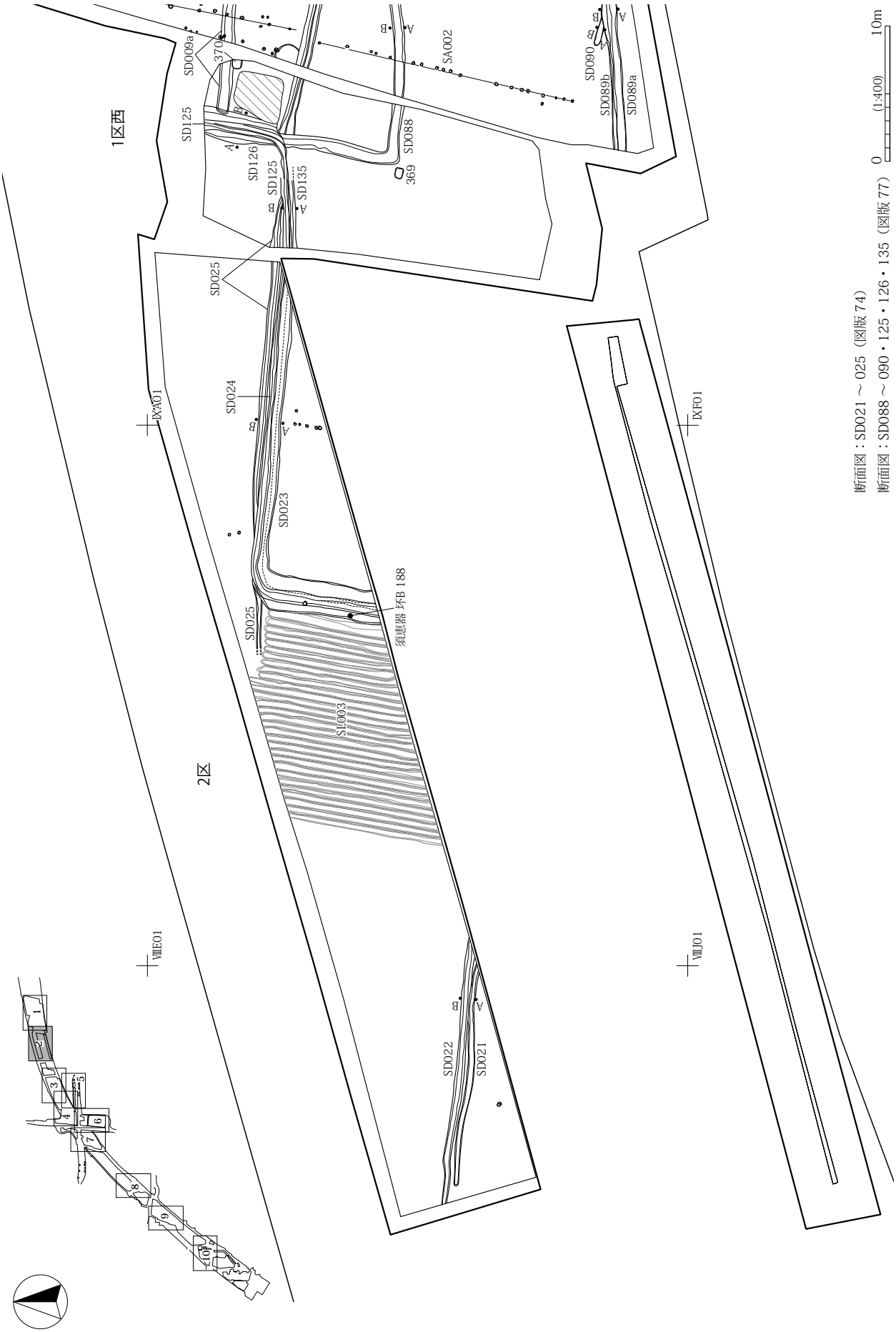
SD179



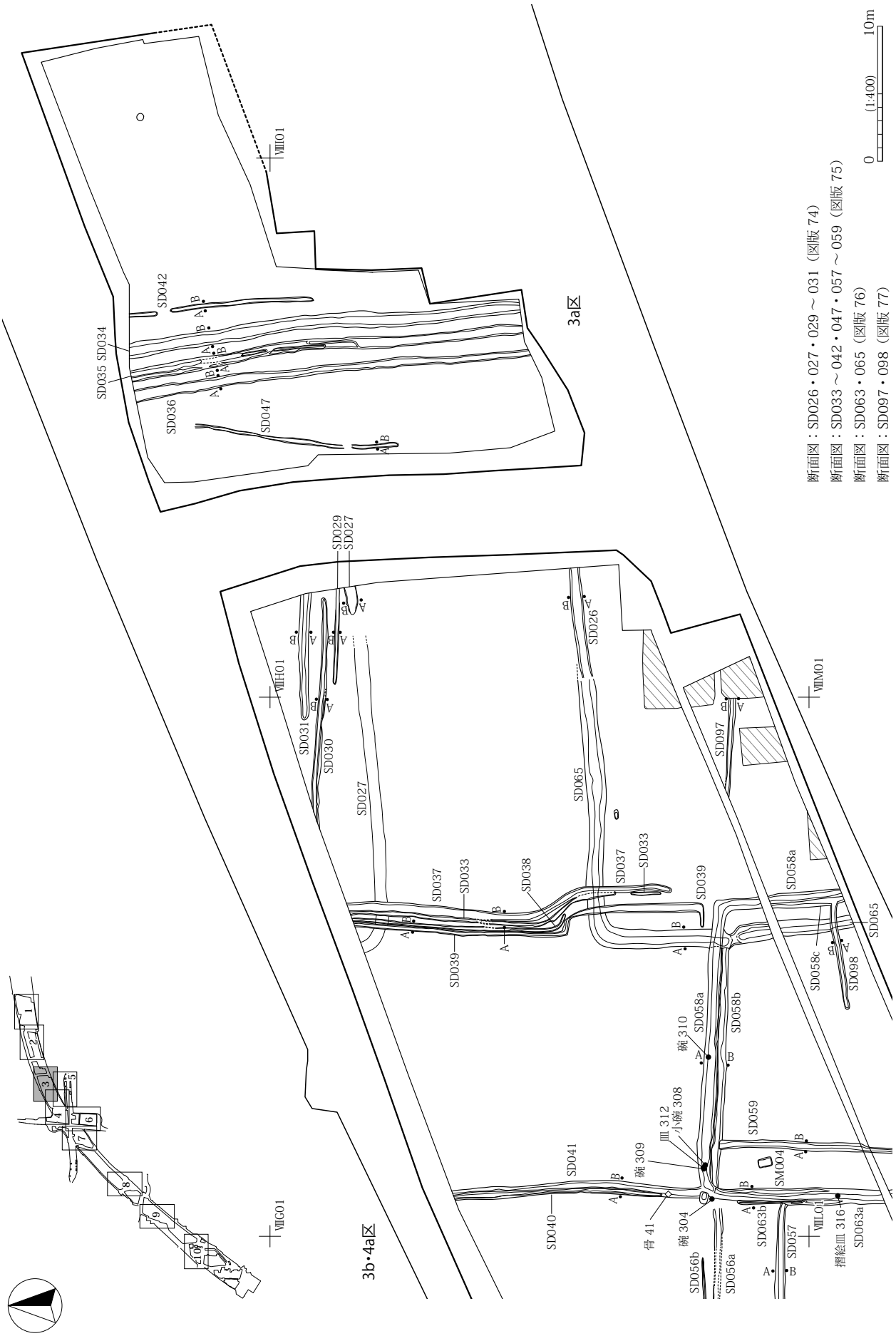


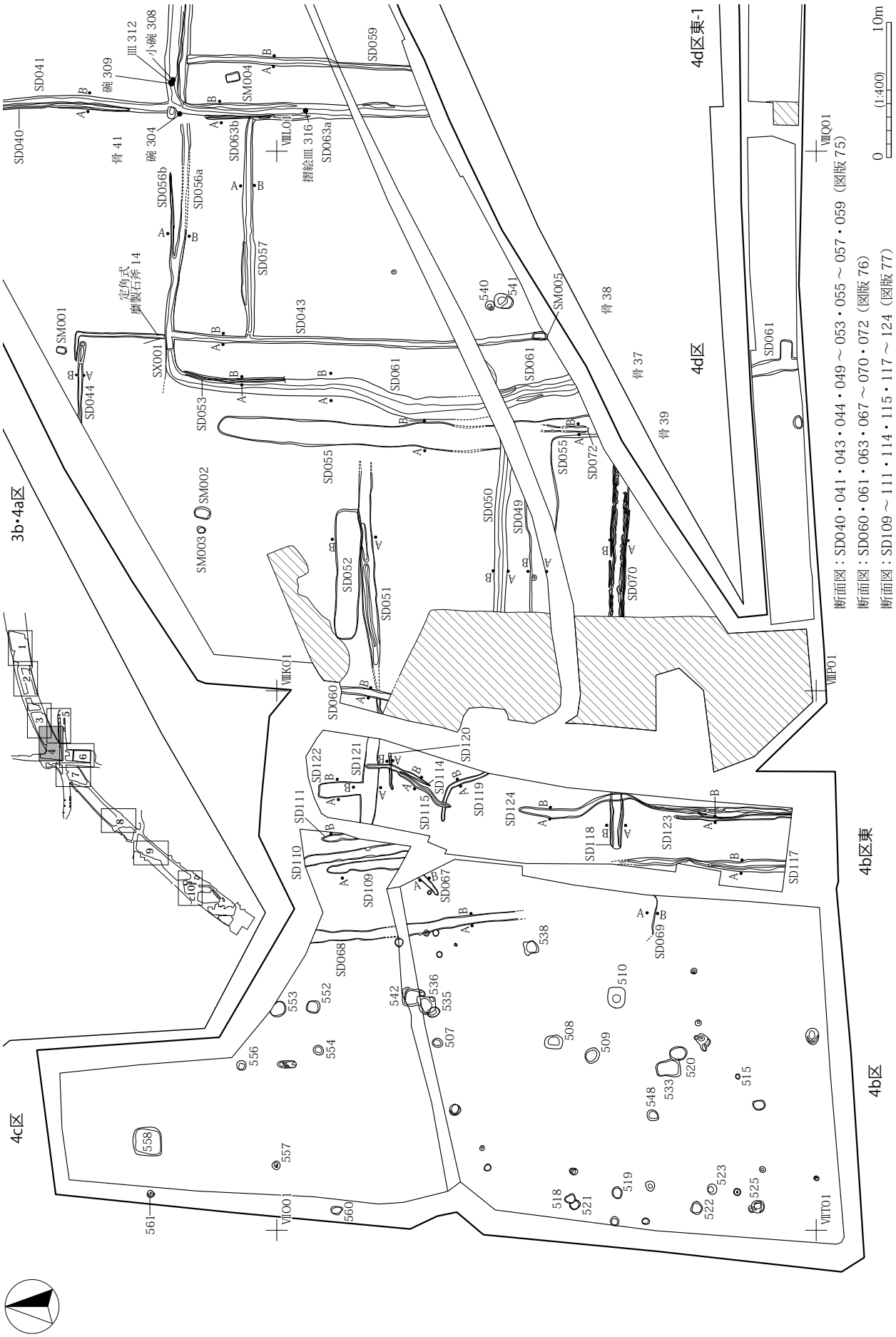

X=60,600
X=60,400
X=60,200
X=60,000
Y=-35,000
Y=-35,200
Y=-35,400
Y=-35,600
0
(1:4,000)
100m
1区北
1区西
1区東
1区
2区
3a区
3b・4a区
4c区
4d区東
5区東
4d区
4b区東
4b区
5a区
5b区
6区
7a区
6区市道脇
7区市道脇
7b・8区
9区
10区
11a区
11b区
11c区
12c区
12b区
12a区
長谷鶴前遺跡群

図版 38　中近世の遺構分布図 1

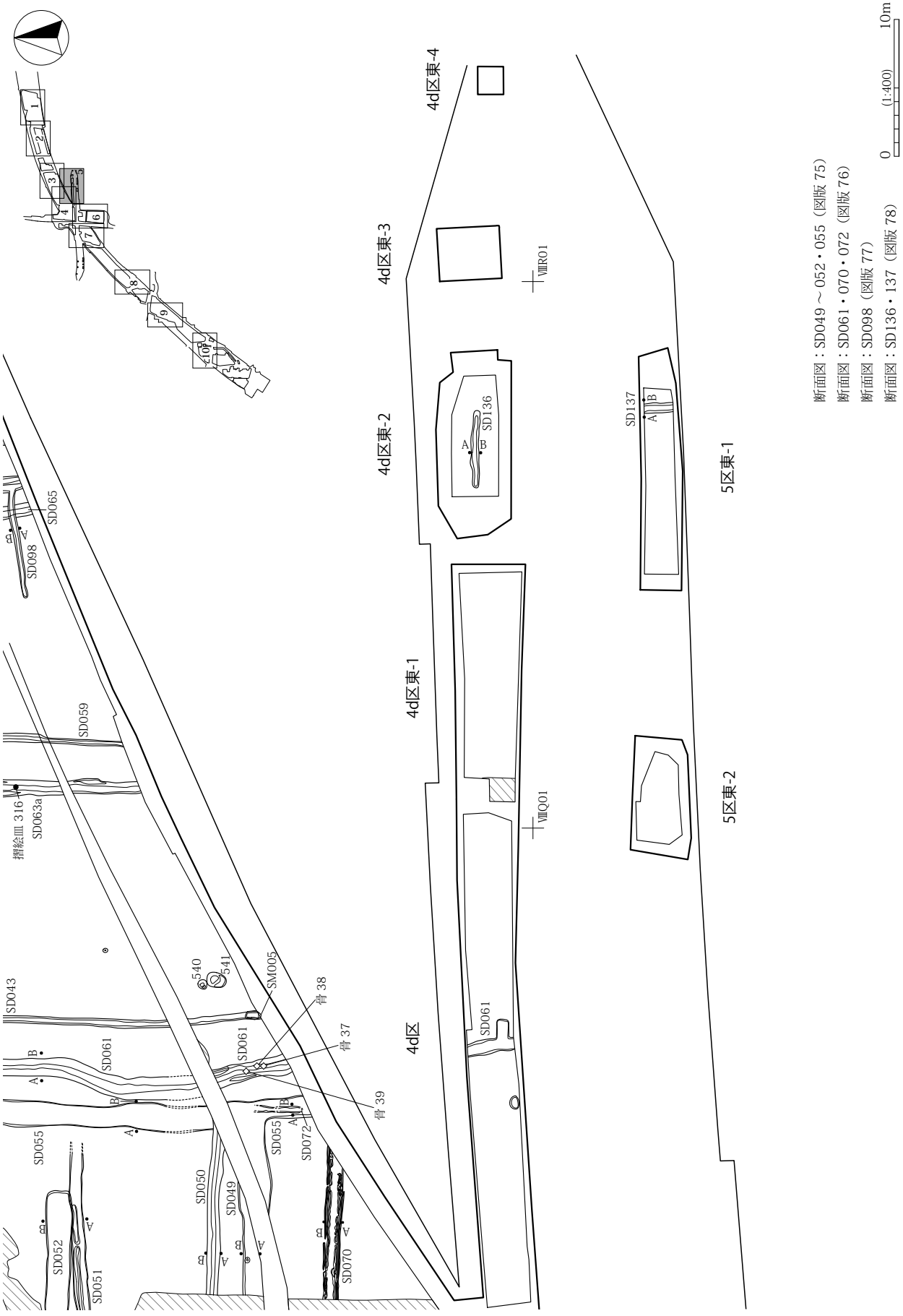

1区西
2区
SD09a
370
SD125
SD126
SD125
SD135
SD088
369
SA002
SD090
SD089b
SD089a
SD025
SD024
SD023
SD025
須恵器 坏B 188
SL003
SD022
SD021
IXA01
VIIIE01
IXF01
VIIIJ01
断面図：SD021 ～ 025（図版 74）
断面図：SD088 ～ 090・125・126・135（図版 77）
0
(1:400)
10m

図版 40　中近世の遺構分布図３

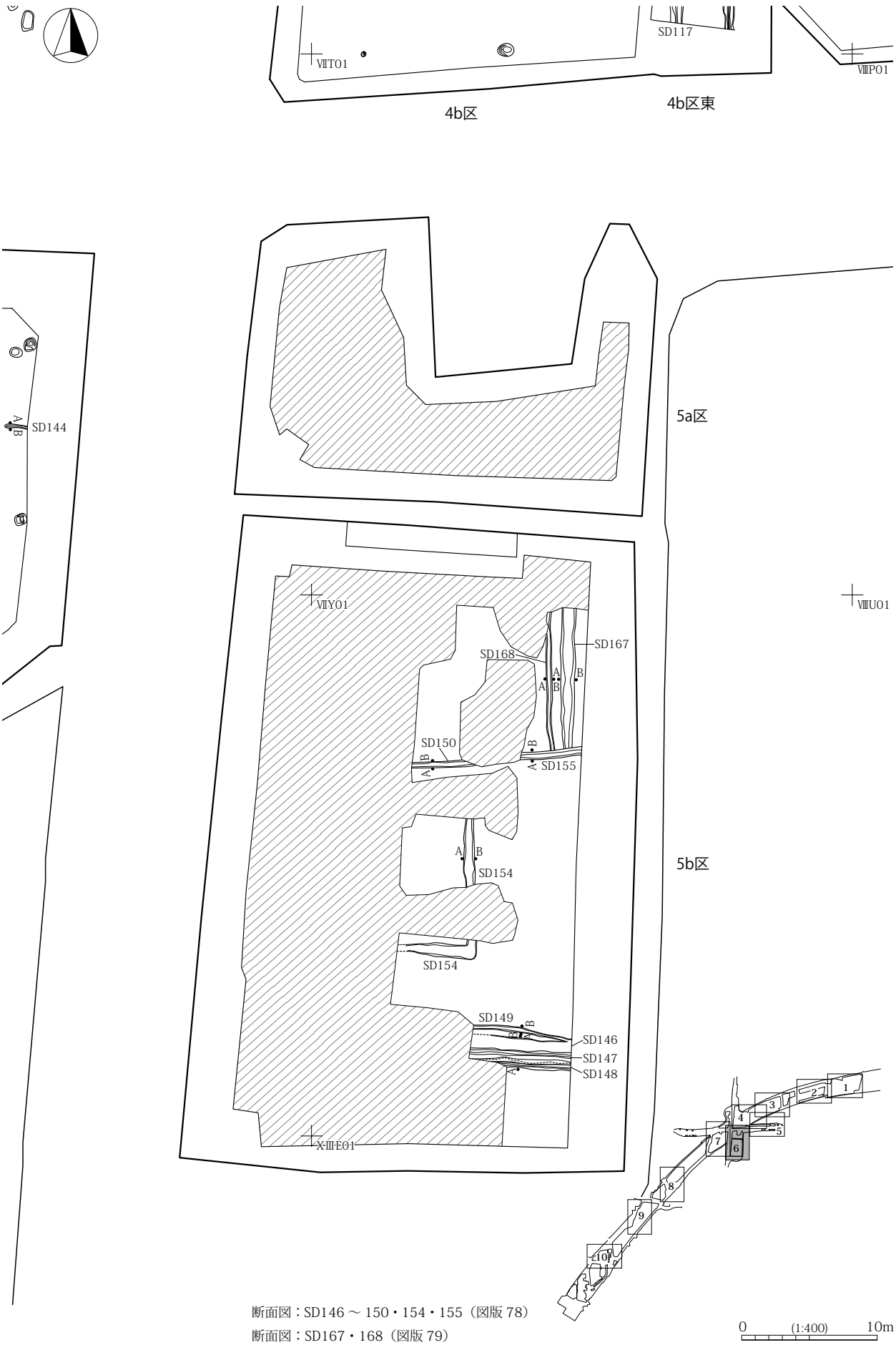



4d区東-1
4d区
4b区東
4b区
4c区
3b･4a区
0 (1:400) 10m
断面図：SD040・041・043・044・049 ～ 053・055 ～ 057・059（図版 75）
断面図：SD060・061・063・067 ～ 070・072（図版 76）
断面図：SD109 ～ 111・114・115・117 ～ 124（図版 77）

図版 42　中近世の遺構分布図５

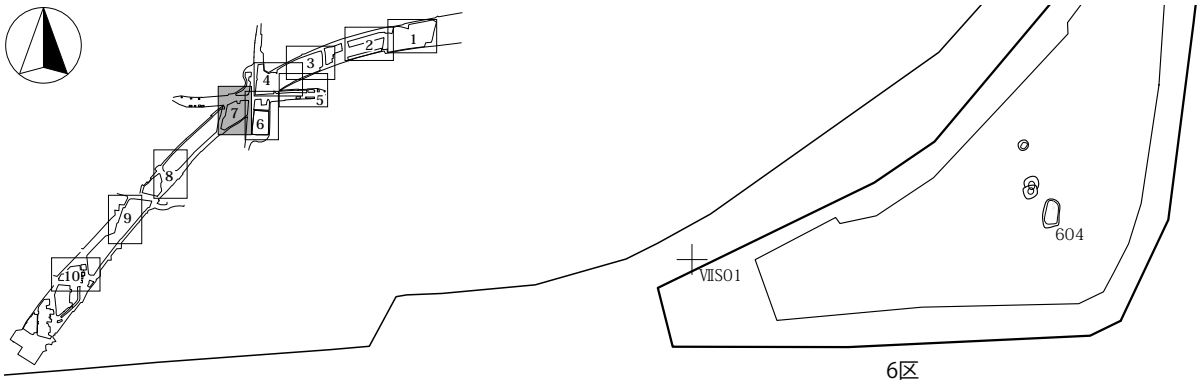


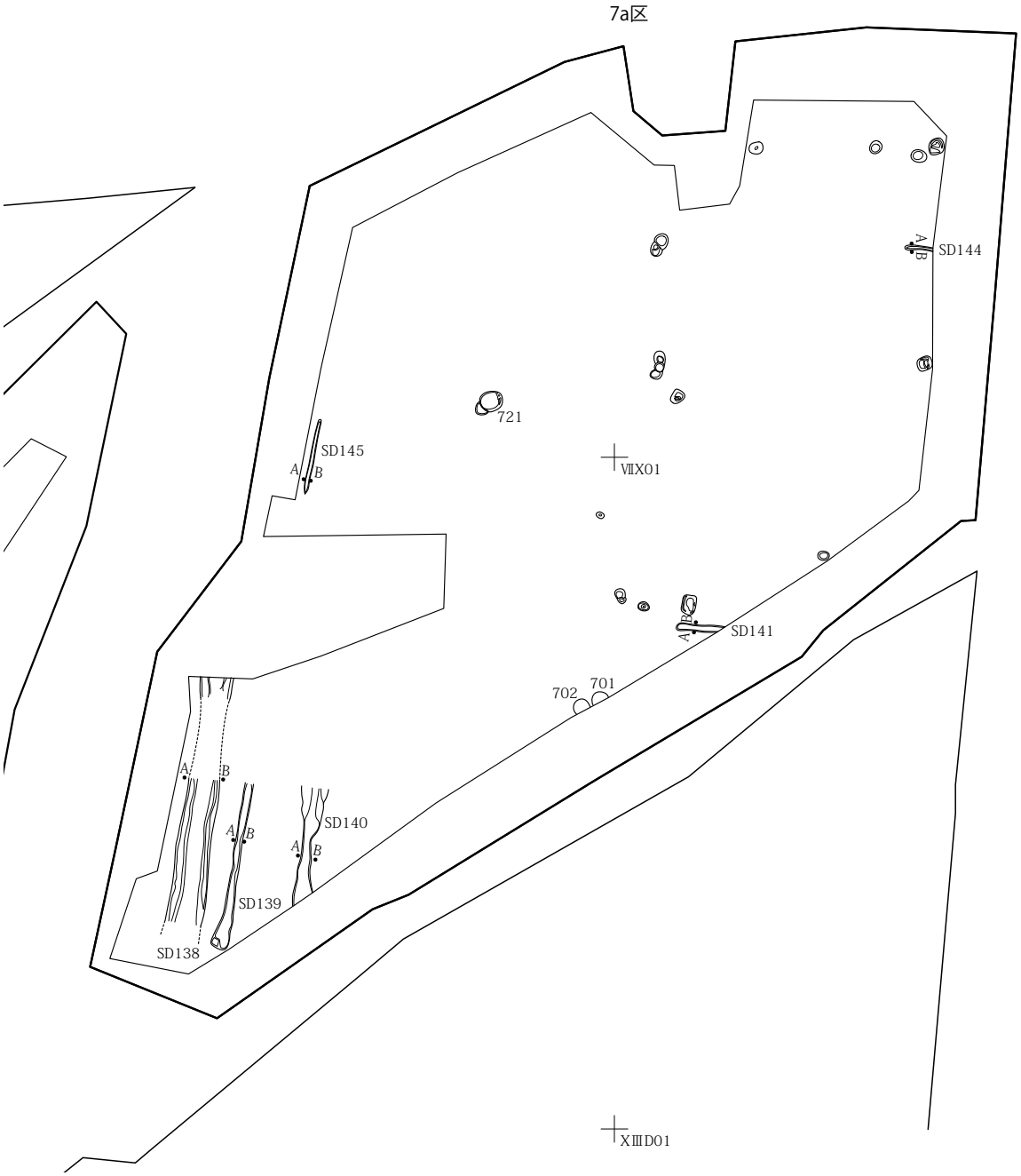
断面図：SD049 ～ 052・055（図版 75）
断面図：SD061・070・072（図版 76）
断面図：SD098（図版 77）
断面図：SD136・137（図版 78）



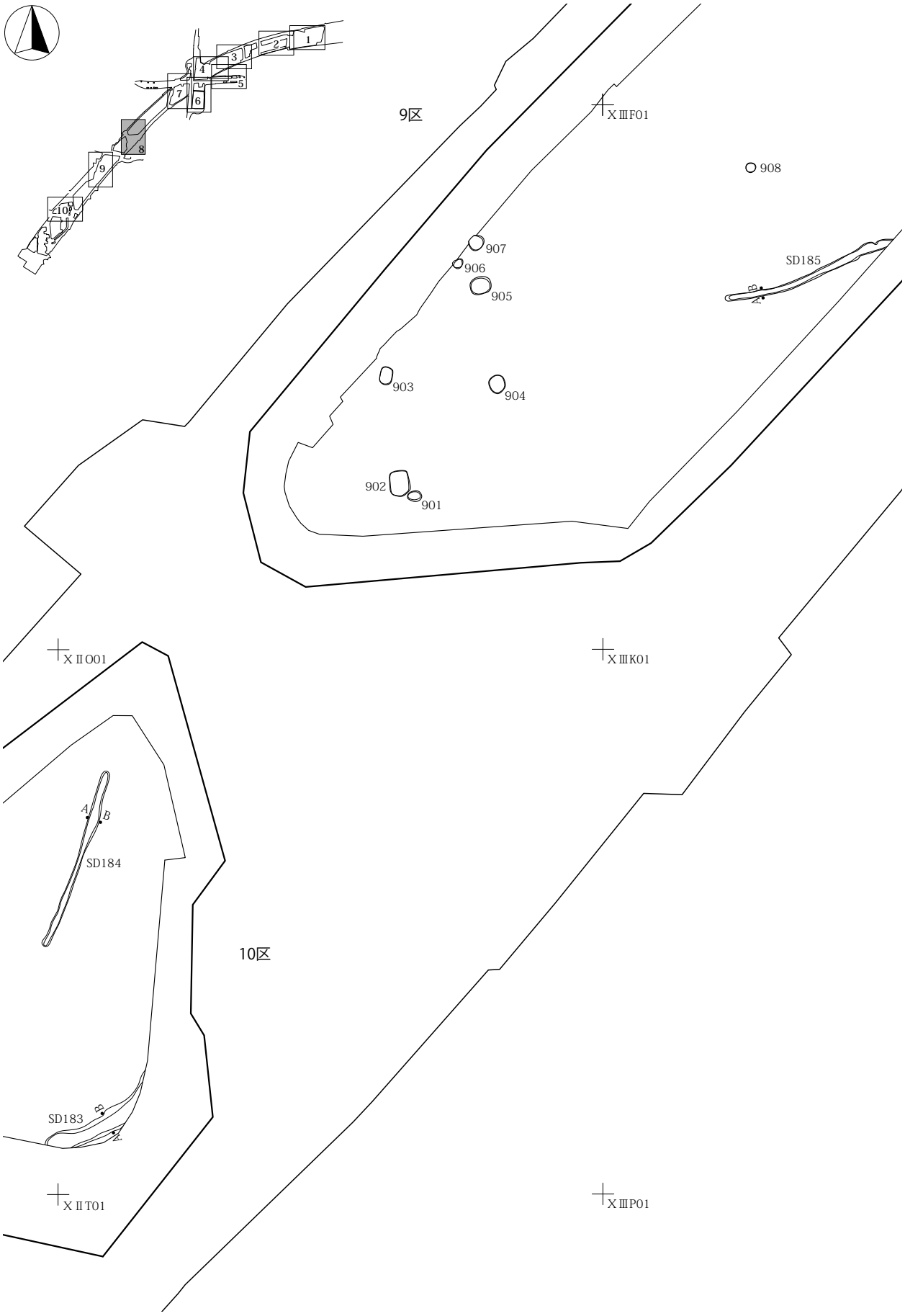
断面図：SD146 ～ 150・154・155（図版 78）
断面図：SD167・168（図版 79）

図版 44　中近世の遺構分布図 7



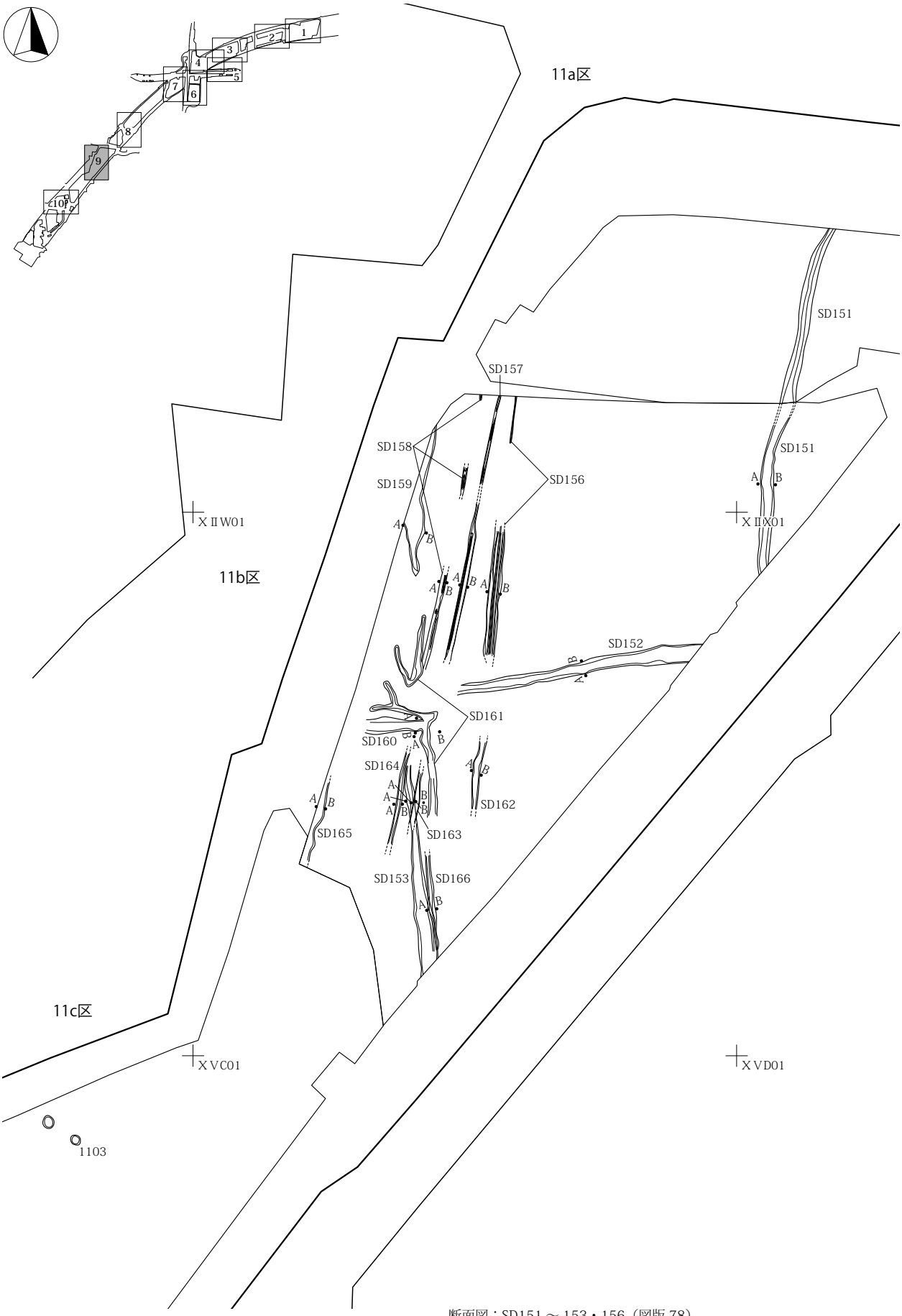


断面図：SD138 ～ 141・144・145（図版 78）　0　(1:400)　10m

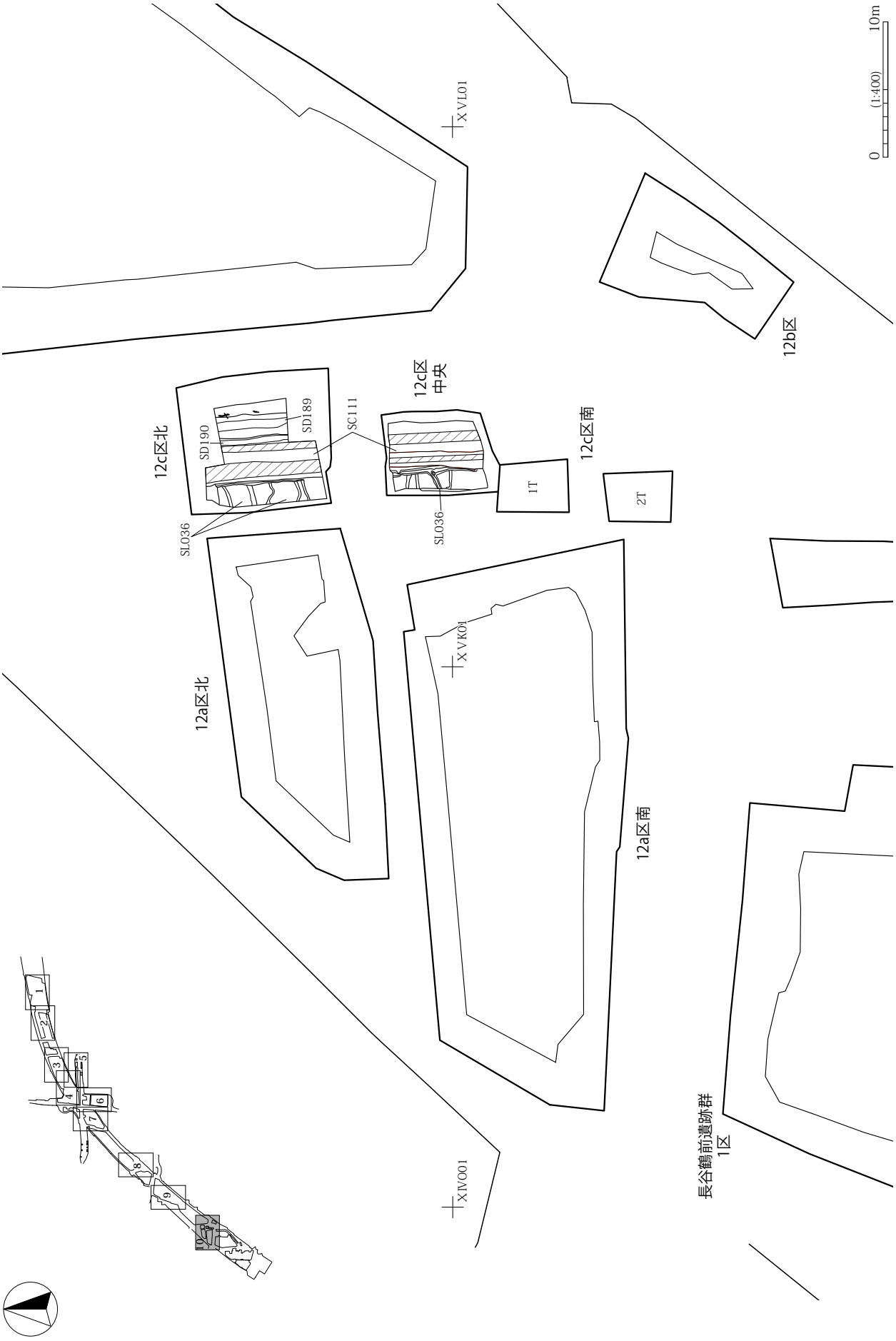


断面図：SD183・184・185（図版 79）

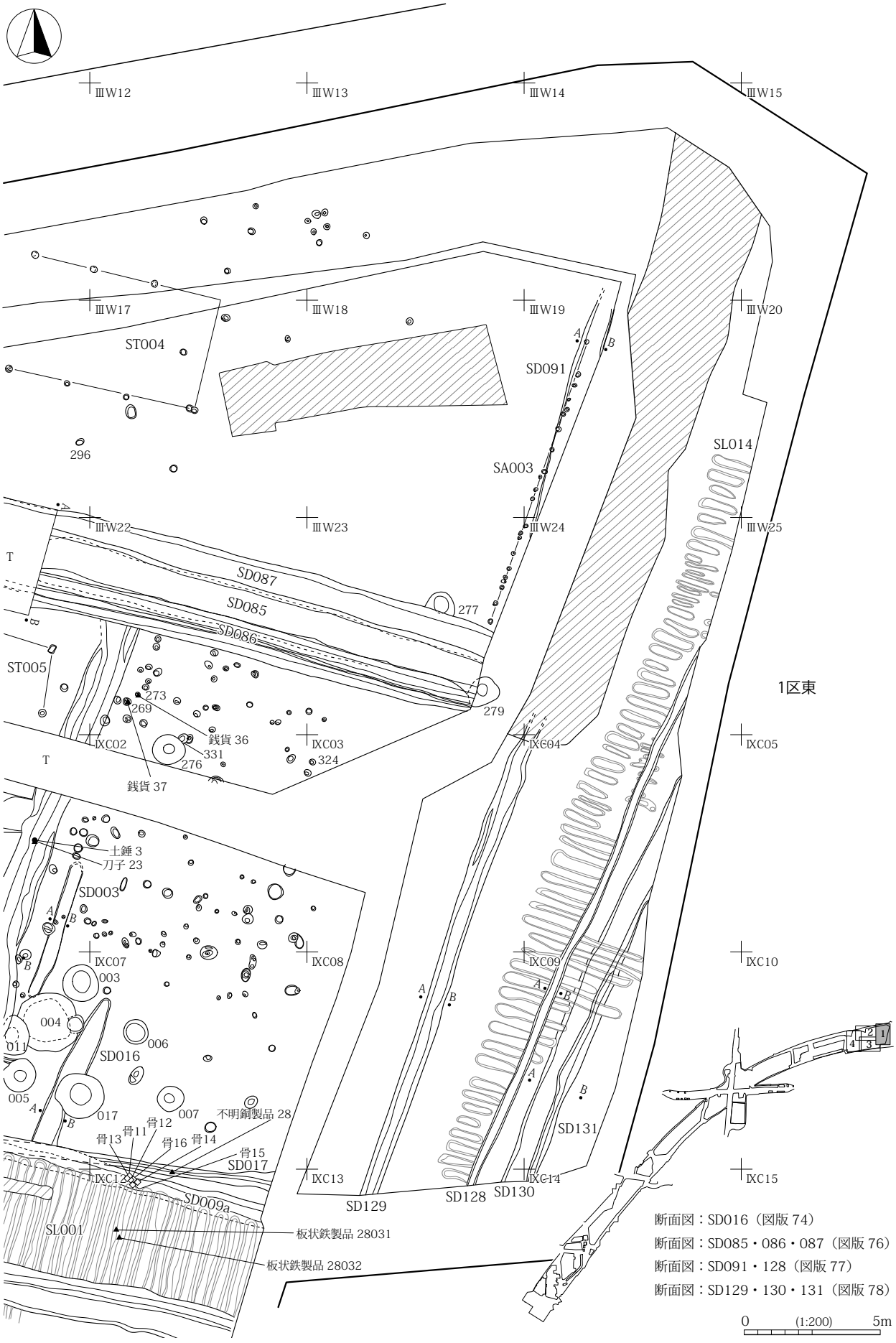
図版 46　中近世の遺構分布図９



断面図：SD151 ～ 153・156（図版 78）
断面図：SD157 ～ 166（図版 79）


XVL01
XVK01
XIV001
12c区北
12c区
中央
12c区南
12b区
12a区北
12a区南
SD190
SD189
SC111
SL036
SL036
1T
2T
長谷鶴前遺跡群
1区
0
(1:400)
10m

図版 48　1 区中近世の遺構分布図 1



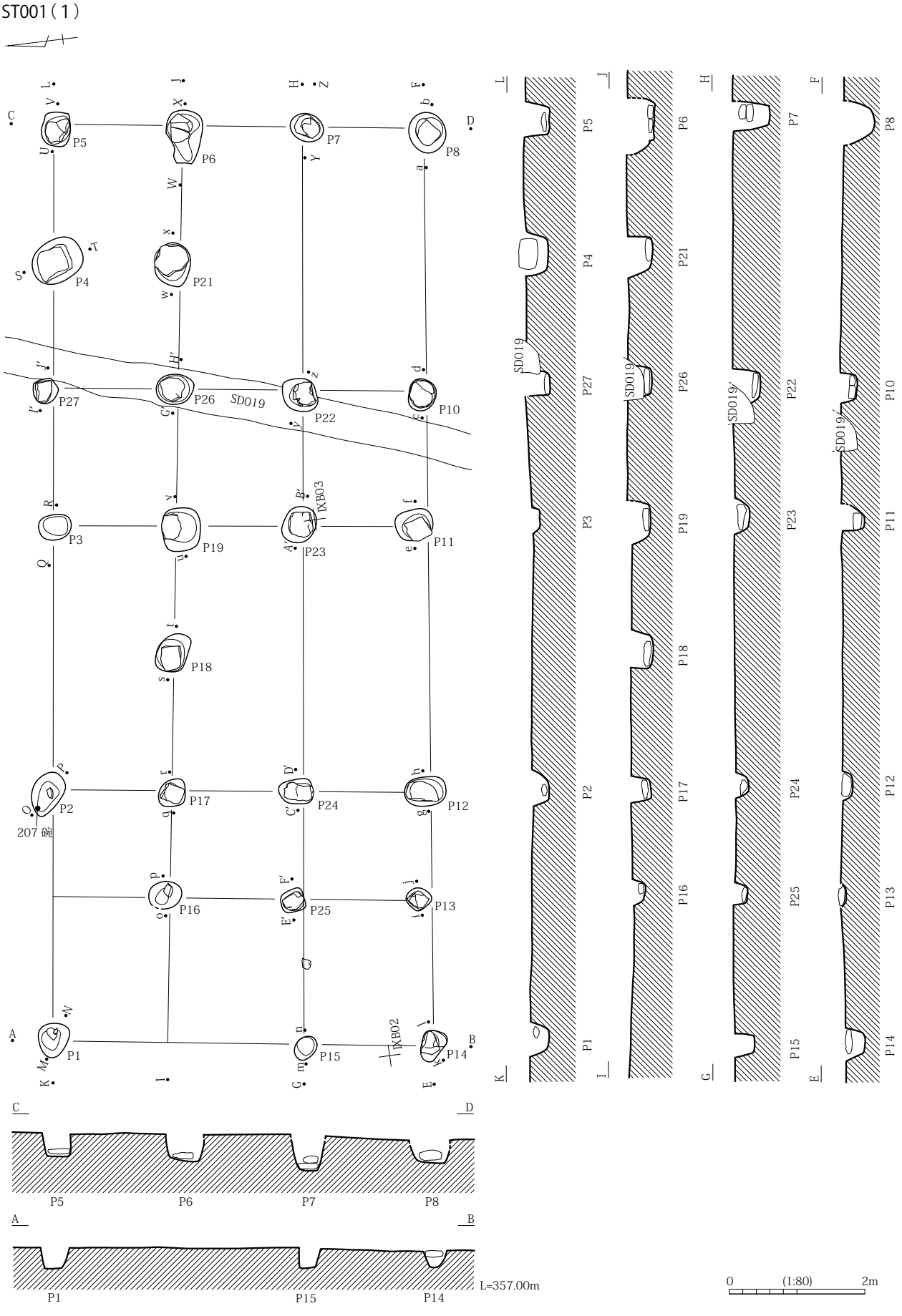
断面図：SD016（図版 74）
断面図：SD085・086・087（図版 76）
断面図：SD091・128（図版 77）
断面図：SD129・130・131（図版 78）

断面図：SD001・002・004～006・010・011・013・018・020（図版 74）
断面図：SD132・133・134（図版 78）

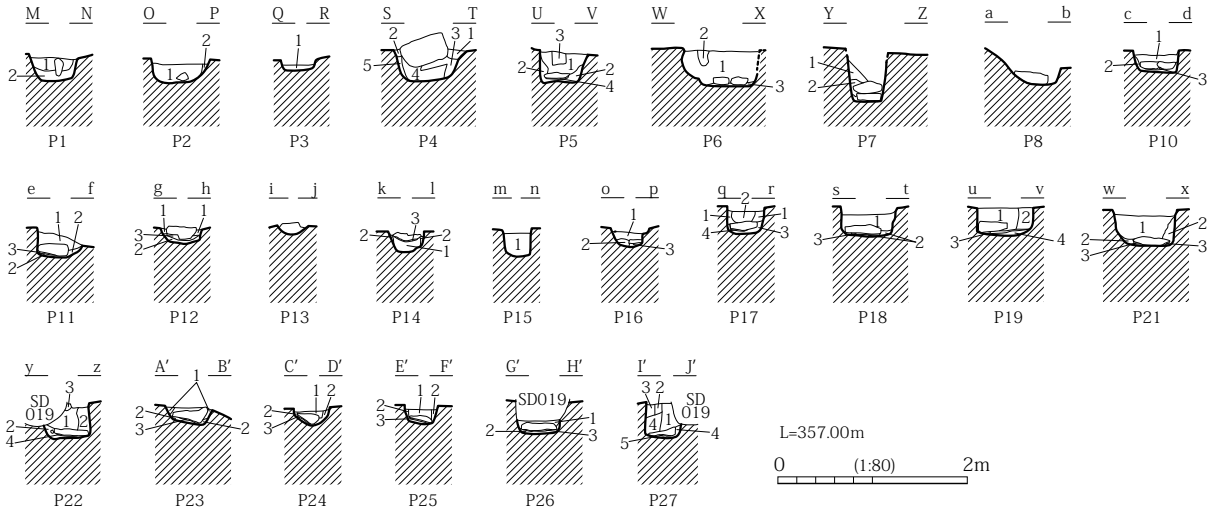
図版 50　1区中近世の遺構分布図3

断面図：SD020（図版 74）
断面図：SD080 ～ 082（図版 76）
断面図：SD088 ～ 090・126（図版 77）

図版 52　ST001（1） 掘立柱建物跡



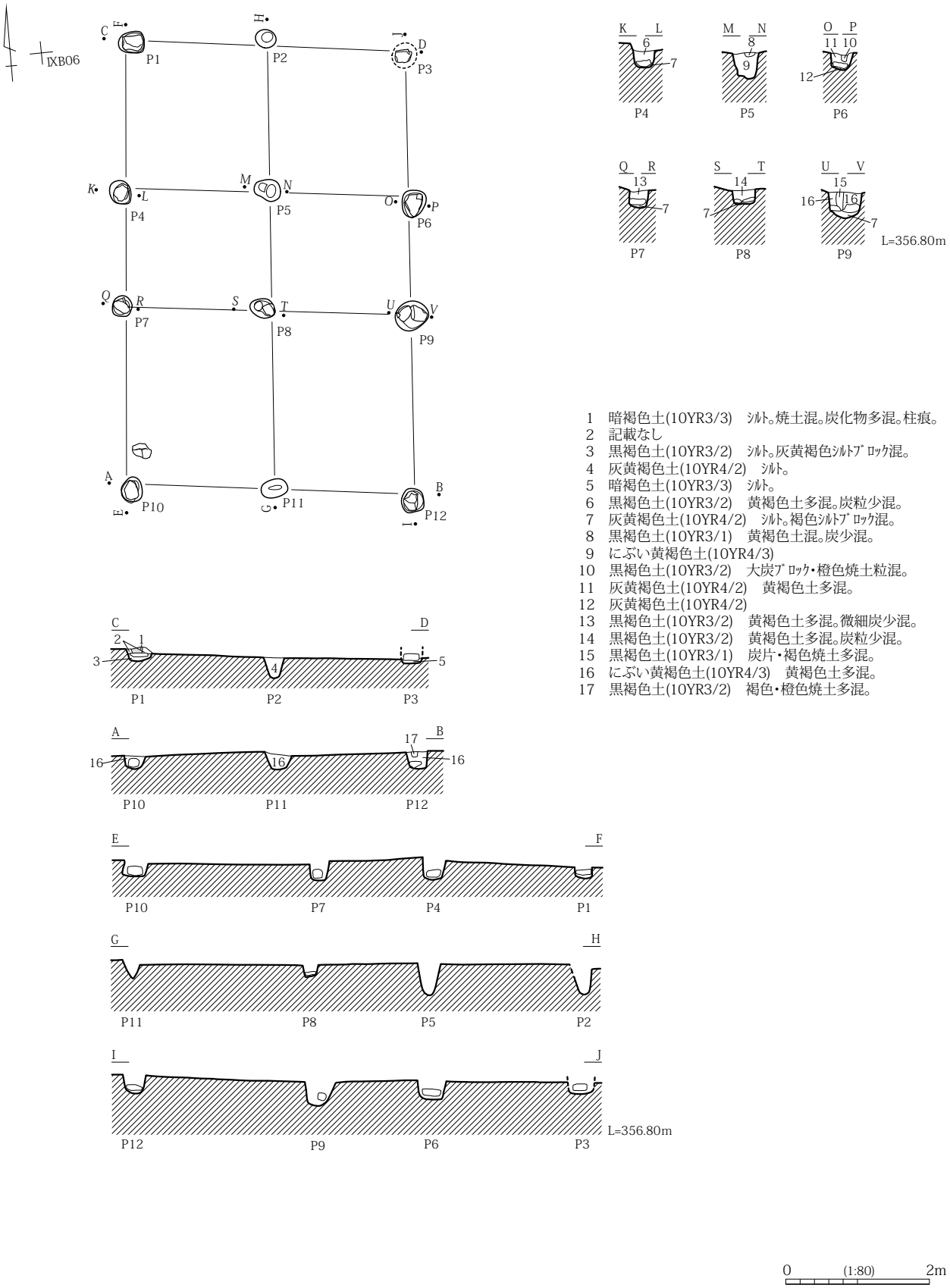
ST001（2）



P1
1　黒褐色土(10YR3/1)　黄褐色土混。中炭片多混。
2　褐色土(10YR4/4)　ｼﾙﾄ。
P2
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　大黄褐色粘質土ﾌﾞﾛｯｸ混。中炭片少混。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ｼﾙﾄ。
P3
1　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ｼﾙﾄ。
P4
1　黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色土混。大焼土粒・炭粒多混。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)
3　灰黄褐色土(10YR6/2)　粘質土。
4　褐灰色土(10YR4/1)　灰白粘質土粒混。焼土粒少混。
P5
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　中焼土粒少混。大炭粒混。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/3)
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　砂質ｼﾙﾄ。
4　褐灰色土(10YR4/1)
P6
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　黄褐色土粒混。中焼土粒混。小炭片混。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　大炭ﾌﾞﾛｯｸ混。
3　灰黄褐色土(10YR5/2)
P7
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　黄褐色粘質土混。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘質土。
P10
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　極大黄褐色粘質土粒混。中焼土粒少混。小炭片混。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘質土。
3　褐灰色土(10YR4/1)
P11
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　黄褐色砂質土ﾌﾞﾛｯｸ混。大焼土粒・炭粒多混。
2　褐灰色土(10YR5/1)　粘質土。黄褐色土混。
3　褐灰色土(10YR4/1)
P12
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　黄褐色土・黄褐色砂質土ﾌﾞﾛｯｸ混。大焼土粒・炭多混。
2　褐灰色土(10YR5/1)　粘質土。黄褐色土混。
3　褐灰色土(10YR4/1)
P14
1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)
2　褐灰色土(10YR5/1)　黄褐色土混。
3　褐灰色土(10YR4/1)
P15
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　砂質ｼﾙﾄ。黄褐色砂質ﾌﾞﾛｯｸ混。大焼土粒・炭多混。
P16
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　黄褐色土・黄褐色砂質土ﾌﾞﾛｯｸ混。大焼土粒・炭多混。
2　褐灰色土(10YR5/1)　粘質土。黄褐色土混。
3　褐灰色土(10YR4/1)
P17
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　黄褐色土・黄褐色砂質土ﾌﾞﾛｯｸ混。大焼土粒・炭多混。
2　黒褐色土(10YR3/2)　炭片多混。
3　褐灰色土(10YR5/1)　粘質土。黄褐色土混。
4　褐灰色土(10YR4/1)
P18
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　中焼土粒少混。
2　黄褐色土(10YR5/6)　粘質土。
3　褐灰色土(10YR4/1)
P19
1　黒褐色土(10YR3/2)　小明黄褐色焼土ﾌﾞﾛｯｸ多混。大炭片混。黄褐色土粒少混。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　黄褐色土粒少混。
3　褐灰色土(10YR4/1)
4　黄褐色土(10YR5/6)
P21
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　中焼土粒・中黄褐色土少混。小炭片混。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘質土。
3　褐灰色土(10YR4/1)
P22
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　大焼土粒・炭少混。褐色土・黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　砂質ｼﾙﾄ。
3　明黄褐色土(10YR6/6)　ｼﾙﾄ。
4　褐灰色土(10YR4/1)
P23
1　灰黄褐色土(10YR4/2)
2　明黄褐色土(10YR6/6)
3　褐灰色土(10YR5/1)
P24
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　黄褐色土・黄褐色砂質土ﾌﾞﾛｯｸ混。大焼土粒・炭多混。
2　褐灰色土(10YR5/1)　粘質土。黄褐色土混。
3　褐灰色土(10YR4/1)　炭片少混。
P25
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　黄褐色土・黄褐色砂質土ﾌﾞﾛｯｸ混。大焼土粒・炭多混。
2　褐灰色土(10YR5/1)　粘質土。粘性強。黄褐色土混。
3　褐灰色土(10YR4/1)
P26
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　中焼土粒少混。小炭片混。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘質土。しまりあり。
3　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘質土。
P27
1　黒褐色土(10YR3/2)　褐灰粘質土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
2　にぶい灰黄褐色土(10YR5/3)　砂質。焼土粒・炭粒少混。
3　黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色土少混。
4　黒褐色土(10YR3/2)　ｼﾙﾄ。
5　褐灰色土(10YR4/1)

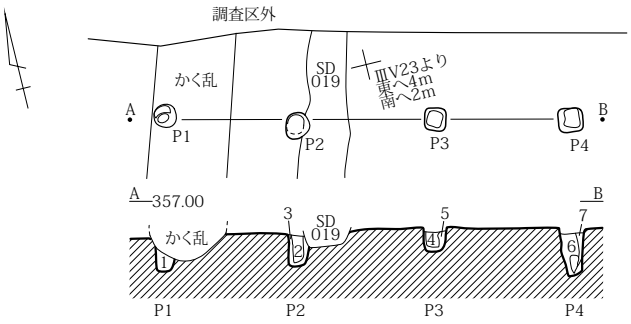
図版 54　ST002　掘立柱建物跡

ST002



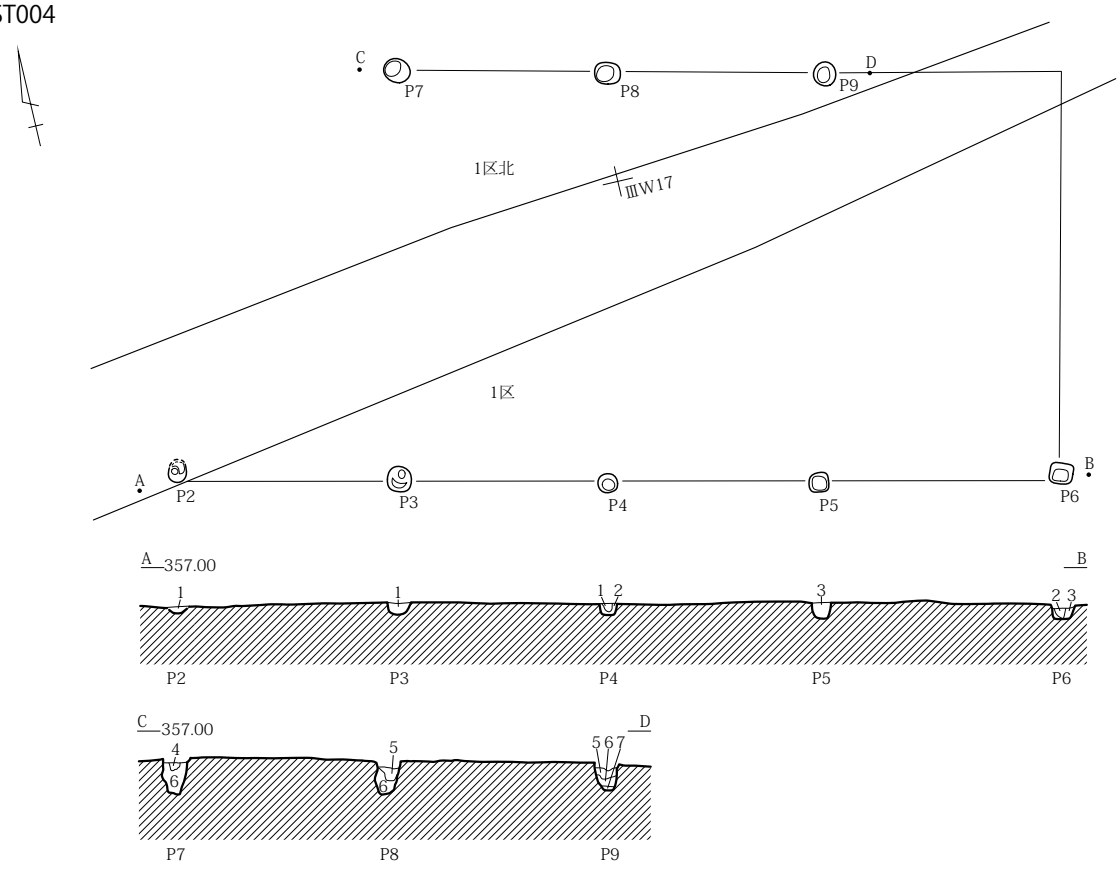
1　暗褐色土(10YR3/3)　ｼﾙﾄ。焼土混。炭化物多混。柱痕。
2　記載なし
3　黒褐色土(10YR3/2)　ｼﾙﾄ。灰黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。
5　暗褐色土(10YR3/3)　ｼﾙﾄ。
6　黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色土多混。炭粒少混。
7　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
8　黒褐色土(10YR3/1)　黄褐色土混。炭少混。
9　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
10　黒褐色土(10YR3/2)　大炭ﾌﾞﾛｯｸ・橙色焼土粒混。
11　灰黄褐色土(10YR4/2)　黄褐色土多混。
12　灰黄褐色土(10YR4/2)
13　黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色土多混。微細炭少混。
14　黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色土多混。炭粒少混。
15　黒褐色土(10YR3/1)　炭片・褐色焼土多混。
16　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　黄褐色土多混。
17　黒褐色土(10YR3/2)　褐色・橙色焼土多混。

ST003



1　褐灰色土(10YR4/1)　黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
2　黒褐色土(10YR3/1)　焼土粒少混。
3　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　炭片多混。
5　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭粒少混。黄褐色土混。
6　記載なし
7　黒褐色土(10YR3/1)　黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

ST004

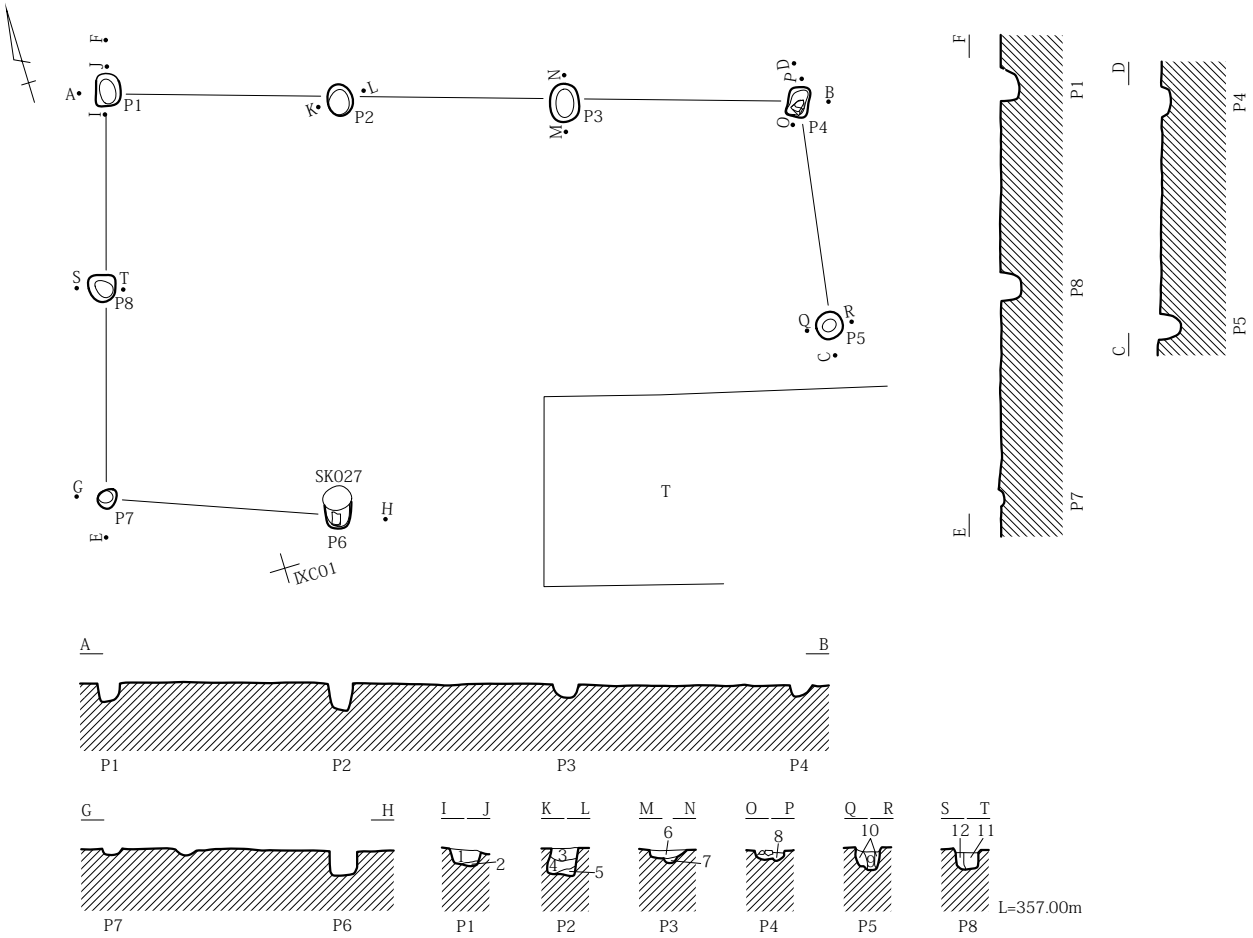


1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ質埴壌土。小褐灰色・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ質埴壌土。小褐灰色・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大褐灰色・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ。灰色・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
5　褐灰色土(10YR4/1)　灰色・褐色・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
6　黒褐色土(10YR3/2)　褐灰色・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
7　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色・黒褐色ｼﾙﾄ混。

0　(1:80)　2m

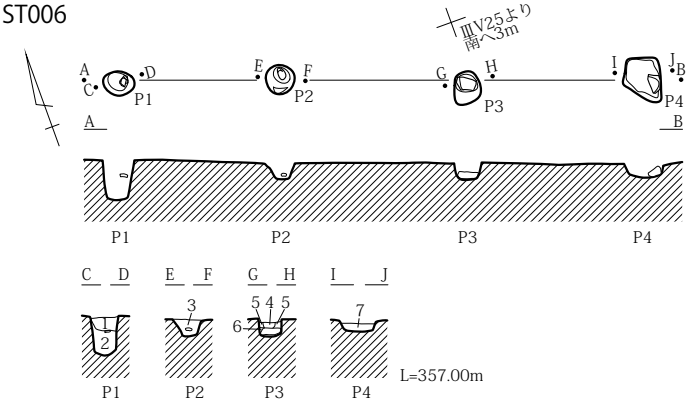
図版 56　ST005・006　掘立柱建物跡

ST005



1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大褐灰色・黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
2　褐灰色土(10YR6/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大褐灰色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。小褐灰色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
4　灰黄褐色土(10YR5/2)　大褐灰色・黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
5　灰黄褐色土(10YR5/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。褐灰色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
6　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。褐灰色・黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
7　灰黄褐色土(10YR5/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大褐灰色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
8　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大褐灰色・黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
9　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。粘性あり。しまり弱。大褐灰色・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
10　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。粘性あり。かたくしまる。大褐灰色・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
11　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。中褐灰色・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少混。
12　黄褐色土(10YR5/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大褐灰色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。

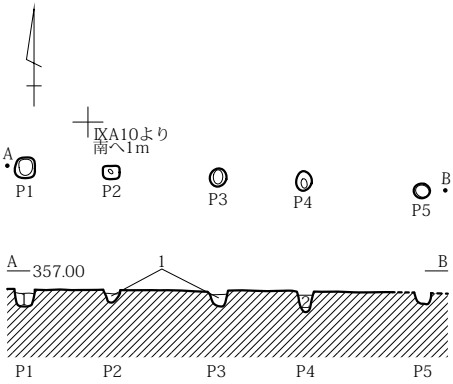
ST006



1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　黄褐色土混。
2　褐灰色土(10YR5/1)
3　黒褐色土(10YR3/1)　大褐灰色土粒混。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大褐灰色・黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。焼土粒・炭粒少混。
5　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大褐灰色・黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
6　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大褐灰色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
7　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大褐灰色・黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。

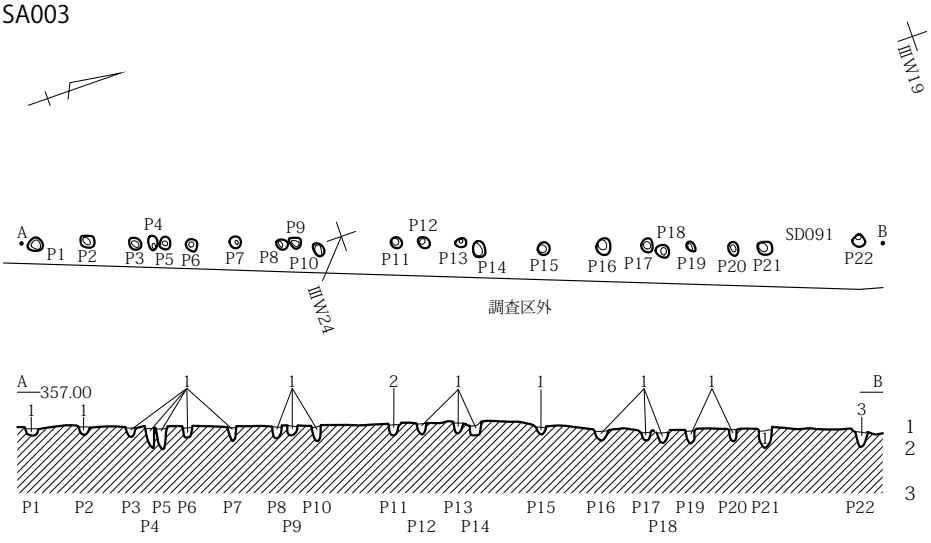
0　(1:80)　2m

SA001



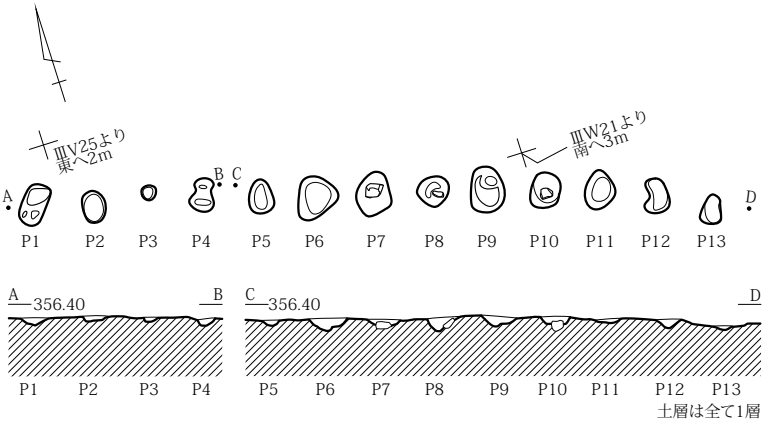
1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　灰黄褐色粘質土混。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　黄褐色砂質土多混。

SA003



1　灰黄褐色土(10YR4/2)　砂質土。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　黄褐色土混。
3　黄褐色土(10YR5/6)　砂質土。

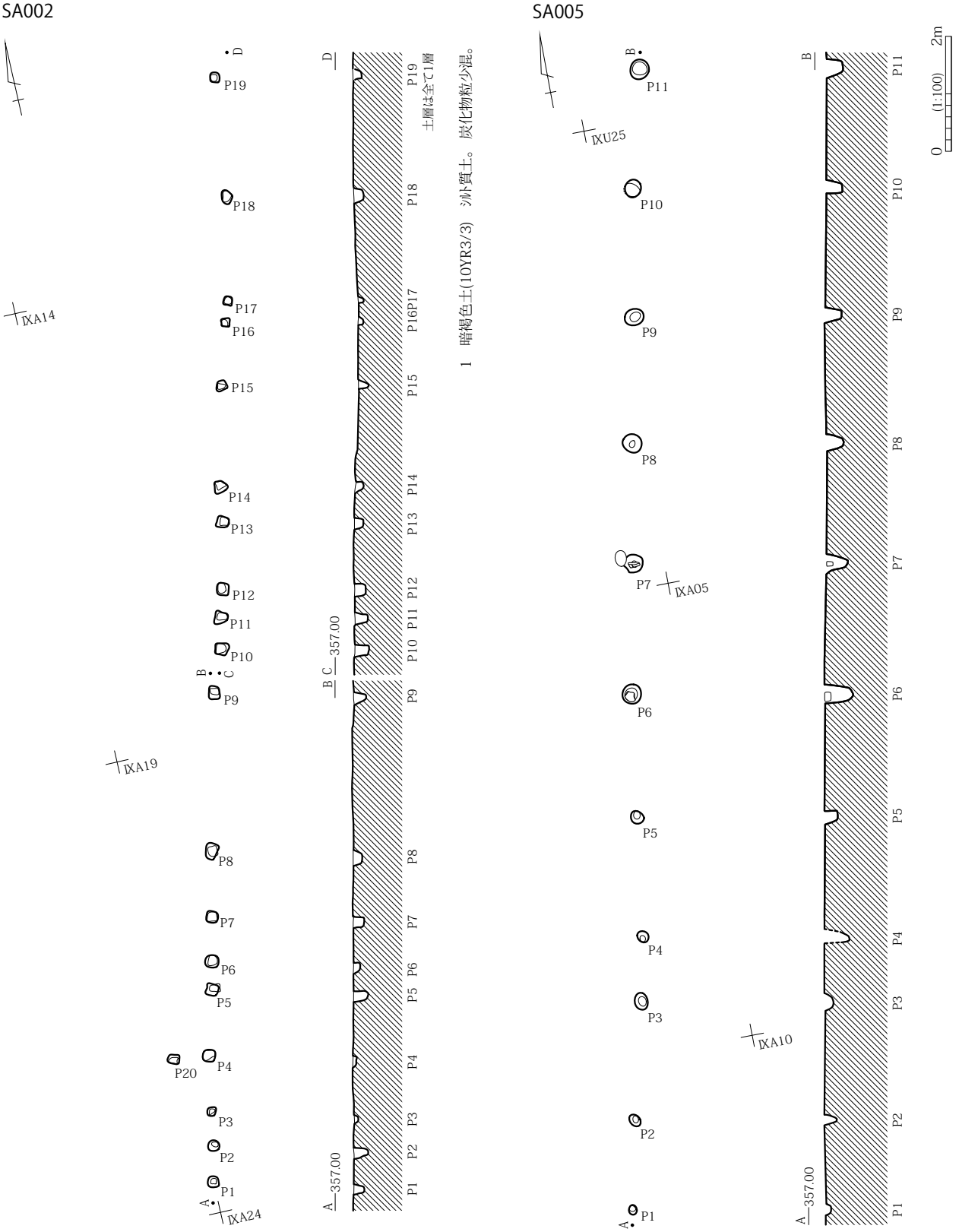
SA004



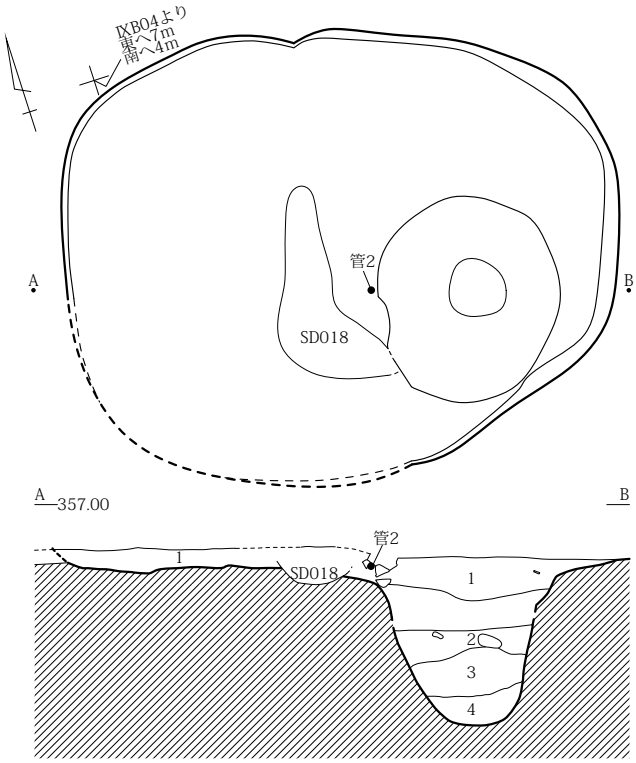
1　灰白色土(10YR7/1)　細砂。褐灰色粘質土ﾌﾞﾛｯｸ混。

0　(1:80)　2m

図版 58　SA002・005　柵列

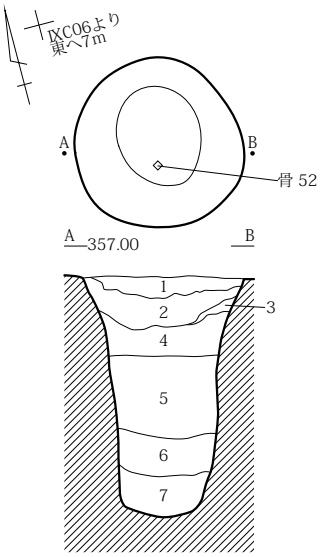


SK002



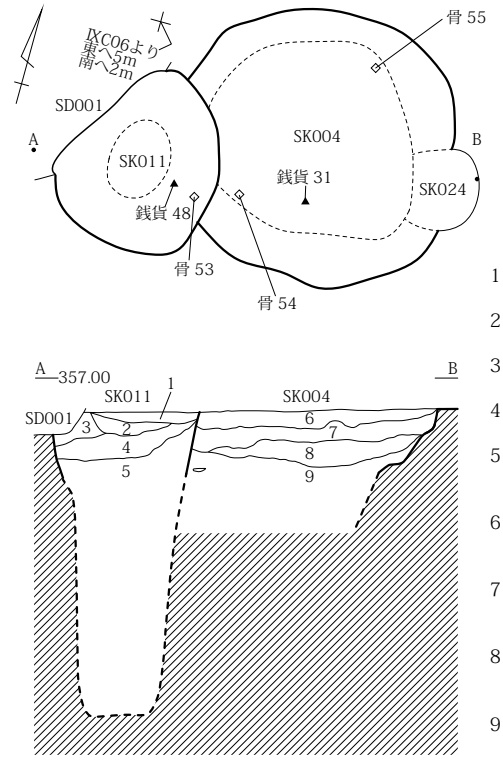
1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　ｼﾙﾄ。黄褐色土・小児頭～拳大円礫混。炭少混。
2　灰黄褐色土(10YR5/2)　大灰黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ・炭粒少混。埋め土。
3　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。還元。埋め土。
4　灰色土(5Y4/1)　粘質埴土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。還元。 埋め土。

SK003



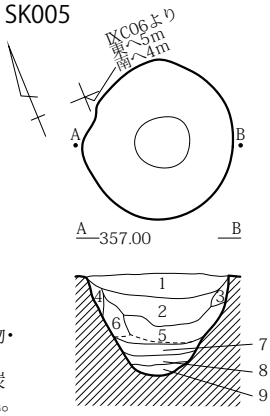
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　褐色土粒・礫混。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭化物・大灰黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ微混。褐色土粒混。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色土粒混。小灰黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物微混。褐色土粒・中灰黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・礫混。
5　灰色土(5Y6/1)　粘質埴壌土。大褐灰色・にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
6　灰色土(10Y5/1)　粘質埴壌土。
7　暗緑灰色土(10G3/1)　砂質埴壌土。未分解植物片・砂混。

SK004・SK011



1　灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物・焼土粒微混。褐色土粒混。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭化物・焼土粒微混。褐色土粒混。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　褐色土粒・小Ⅲ層ﾌﾞﾛｯｸ混。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物・焼土粒・極小焼土ﾌﾞﾛｯｸ微混。
5　灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物・焼土粒微混。褐色土粒・小褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
6　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭化物少混。褐色土粒混。極小褐色土ﾌﾞﾛｯｸ微混。
7　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭化物少混。褐色土粒多混。極小褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
8　褐色土(10YR4/4)　小Ⅲ層ﾌﾞﾛｯｸ少混。褐色土粒・小褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
9　灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物微混。褐色土粒混。

SK005

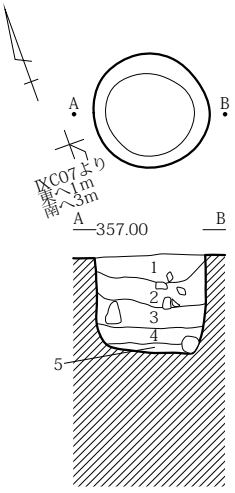


1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭化物少混。焼土粒微混。褐色土粒混。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色土粒混。炭化物微混。小Ⅲ層ﾌﾞﾛｯｸ・小Ⅳ層ﾌﾞﾛｯｸ少混。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色土粒混。極小Ⅲ層ﾌﾞﾛｯｸ少混。極小Ⅳ層ﾌﾞﾛｯｸ微混。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　褐色土粒・小Ⅲ層ﾌﾞﾛｯｸ混。
5　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色土粒混。小Ⅳ層ﾌﾞﾛｯｸ少混。
6　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色土粒混。極小Ⅳ層ﾌﾞﾛｯｸ微混。
7　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
8　黄灰色土(2.5Y6/1)ｼﾙﾄ質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
9　灰黄色土(2.5Y6/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。

0　(1:60)　1m

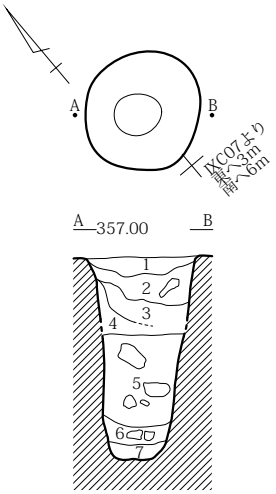
図版 60　中近世の井戸跡２

SK006



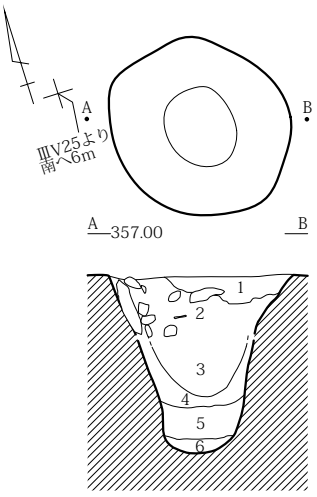
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭化物微混。褐色土粒・礫混。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物微混。褐色土粒混。礫多混。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　中Ⅳ層ﾌﾞﾛｯｸ少混。礫混。
4　灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(5Y5/2)　粘質埴壌土。大緑灰色粘土・青灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
5　黄灰色土(2.5Y5/1)　砂質埴壌土。砂多混。還元。

SK007



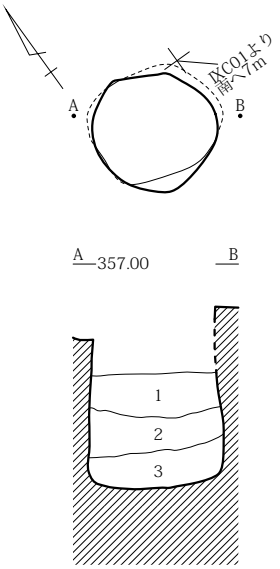
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭化物微混。褐色粒混。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物・焼土粒・極小にぶい黄褐色土層ﾌﾞﾛｯｸ微混。褐色土粒混。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭化物微混。褐色土粒混。小にぶい黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　褐色土粒・小にぶい黄褐色土層ﾌﾞﾛｯｸ混。
5～7　記載なし

SK009



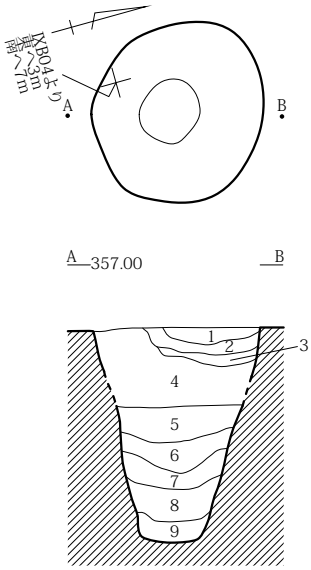
1　黒褐色土(10YR3/2)　砂質ｼﾙﾄ。炭化物少混。
2　黒褐色土(10YR3/2)　砂質ｼﾙﾄ。にぶい黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ・人頭大礫混。
3　灰黄褐色土(10YR5/2)　粘質埴壌土。小にぶい黄橙色ｼﾙﾄ・にぶい黄褐色ｼﾙﾄ質埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ混。
4　褐灰土(10YR6/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
5　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘質埴壌土。小にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
6　灰色土(10Y5/1)　粘質埴壌土。砂混。

SK010



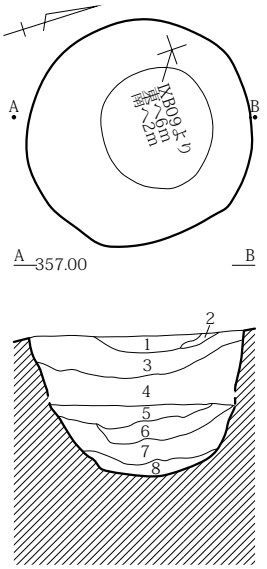
1　褐灰色土(10YR6/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
2　灰色土(5Y6/1)　粘質埴壌土。
3　粘質埴壌土　粘土主体。還元。

SK013



1　褐灰色土(10YR5/1)　粘質埴壌土。
2　明褐色土(7.5YR5/6)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ小混。
3　暗褐色土(7.5YR3/4)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
4　灰黄褐色土(10YR5/2)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
5　黄灰色土(2.5Y6/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。小灰白色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ・大灰白色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
6　黄灰色土(2.5Y5/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大灰黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
7　浅黄色土(2.5Y7/3)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
8　青灰色土(10BG6/1)　緑灰色粘質埴壌土。大緑灰色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
9　暗青灰色土(10BG4/1)　粘質埴壌土。

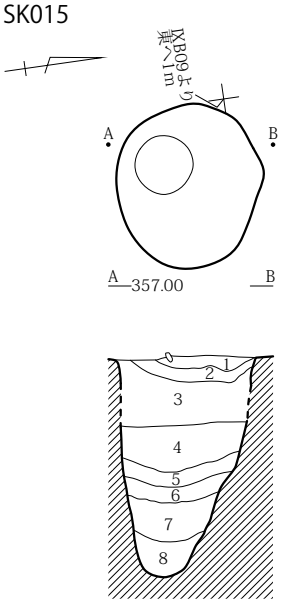
SK014



1　灰黄褐色土(10YR6/2)　粘質埴壌土。小にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少混。
2　灰黄褐色土(10YR6/2)　炭化物多混。
3　褐灰色土(10YR6/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄褐色粘土・にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
4　褐灰色土(10YR5/1)　埴壌土。大にぶい黄褐色・にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
5　黄灰色土(2.5Y6/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。小にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ・炭粒少混。
6　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大黒褐色ｼﾙﾄ多混。
7　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘質埴壌土。大青灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。黒褐色ｼﾙﾄ混。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ・炭粒少混。還元。
8　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。

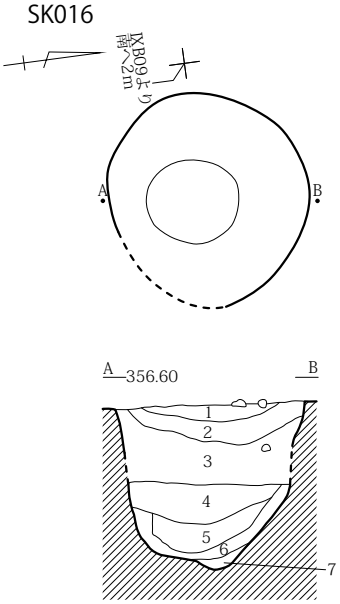
0　(1:60)　1m

SK015



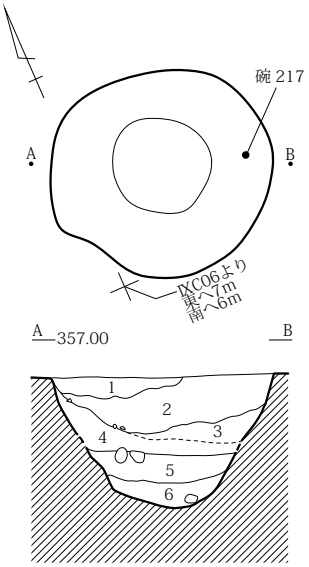
1　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘質埴壌土。
2　明褐色土(7.5YR5/6)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
3　灰黄褐色土(10YR5/2)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
4　褐灰色土(10YR6/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
5　灰色土(10Y5/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
6　褐灰色土(10YR5/1)　粘性埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
7　灰色土(5Y6/1)　粘質埴壌土。
8　暗青灰色土(10BG4/1)

SK016



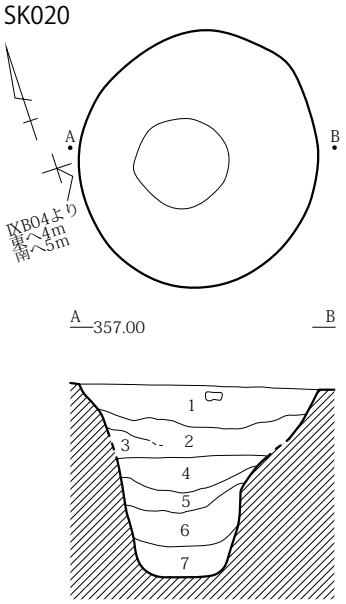
1　黒褐色土(10YR3/2)　ｼﾙﾄ。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ。
3　黒褐色土(10YR3/2)　ｼﾙﾄ。褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。埋め土か。
4　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘質埴壌土。大灰黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
5　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘質埴壌土。大灰黄褐色・にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
6　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
7　黒褐色土(2.5Y3/2)　粘質埴壌土。

SK017



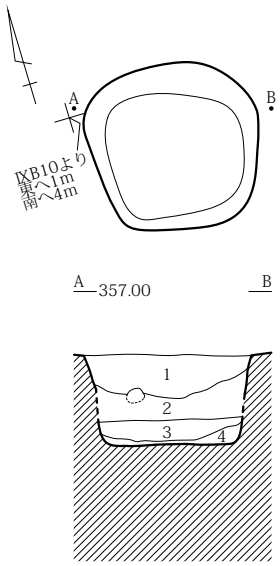
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物微混。褐色土粒混。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物微混。褐色土粒・小褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色土粒混。小灰白色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少混。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　褐色土粒多混。炭化物・極小褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
5　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘質埴壌土。大灰黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
6　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘質埴壌土。大灰黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。

SK020



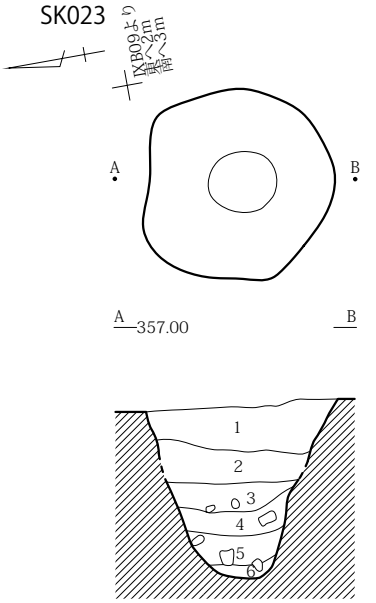
1　褐灰色土(10YR5/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少混。
2　明褐色土(7.5YR5/6)　粘質埴壌土。大褐色粘土ﾌﾞﾛｯｸ・にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
3　褐灰色土(10YR5/1)　粘質埴壌土。大褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ・にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
4　黄灰色土(2.5Y6/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。埋め土。
5　灰色土(10Y5/1)　粘質ｼﾙﾄ質。細砂混。
6　灰色土(5Y6/1)　粘質ｼﾙﾄ質埴壌土。
7　灰色土(10Y5/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。砂混。

SK021



1　灰黄褐色土(10YR5/2)　粘質埴壌土。小灰黄褐色粘質埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
2　褐灰色土(10YR4/1)　粘質埴壌土。にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ・灰黄褐色粘質埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ混。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大灰黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少混。埋め土。
4　褐灰色土(10YR5/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。埋め土。

SK023

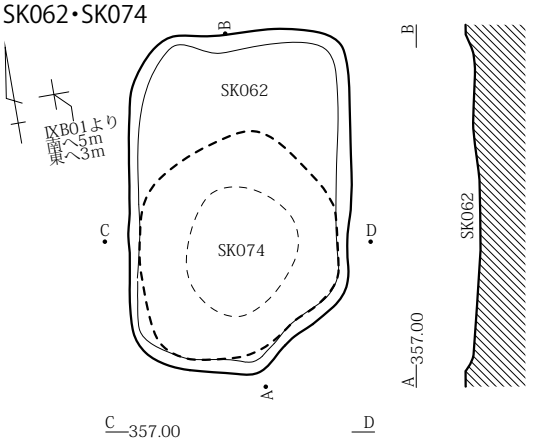


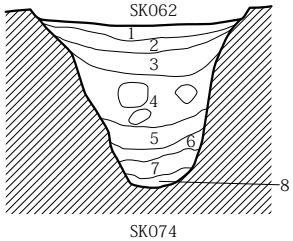
1　灰黄褐色土(10YR4/2)
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性強。
3　灰黄褐色土(10YR5/2)　粘質土。灰黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
4　褐灰土(10YR5/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
5　褐灰色土(10YR5/1)　粘質埴壌土。大青灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
6　緑灰色土(10G6/1)　粘質土。

0　(1:60)　1m

図版 62　中近世の井戸跡 4

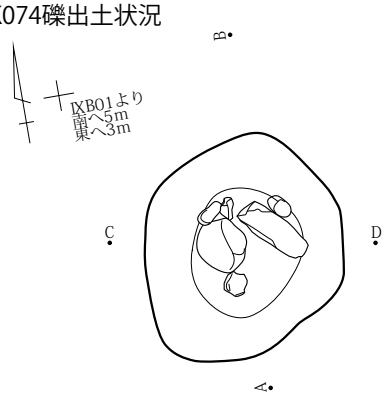
SK062・SK074



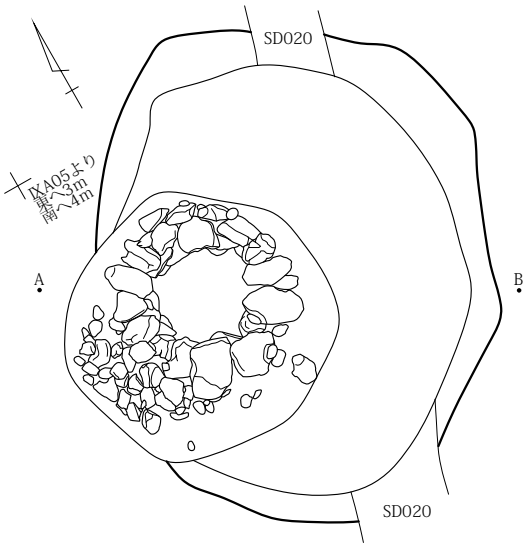


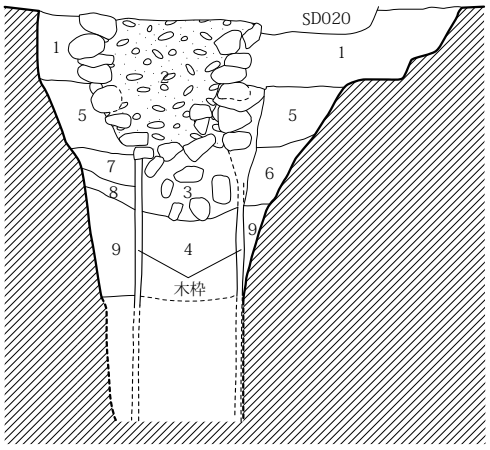
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。
2　暗褐色土(10YR3/4)　ｼﾙﾄ。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土質。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘質ｼﾙﾄ。大礫・大褐色・黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
5　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘質ｼﾙﾄ。大褐色ｼﾙﾄ・黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
6　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘質埴壌土。大黄褐色ｼﾙﾄ混。
7　黄褐色土(2.5Y5/3)　大黄褐色ｼﾙﾄ・緑灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
8　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘質埴壌土。

SK074礫出土状況



SK080

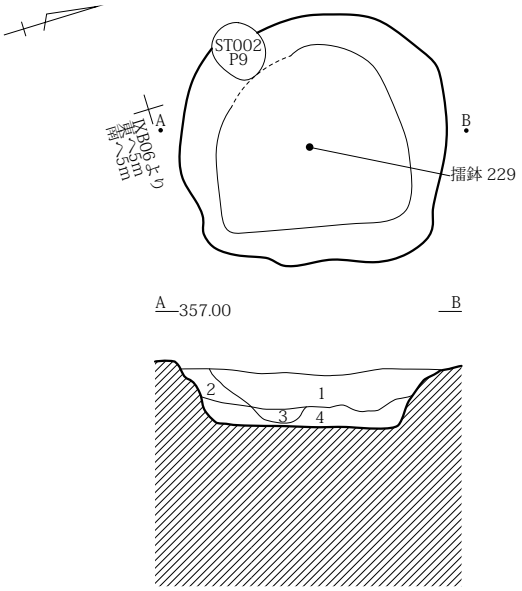




1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。ﾌﾞﾛｯｸで構成。埋め土。
2　角礫。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大礫混。
4　暗青灰色土(5BG4/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
5　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘土・にぶい黄橙色粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
6　にぶい黄橙色土(10YR7/4)　粘質埴壌土。大褐灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
7　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘質埴壌土。灰白色・灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
8　灰黄褐色土(10YR5/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
9　黄灰色土(2.5Y4/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。礫多混。埋め土。

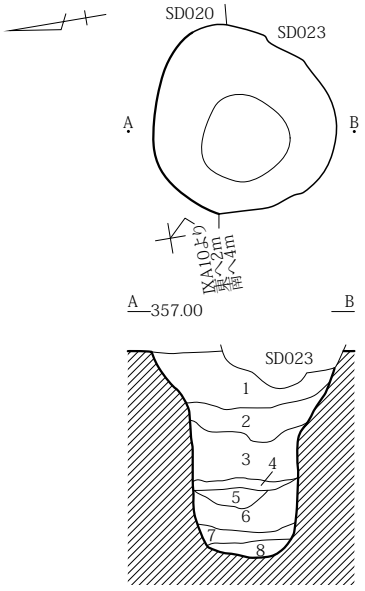
0　(1:60)　1m

SK094



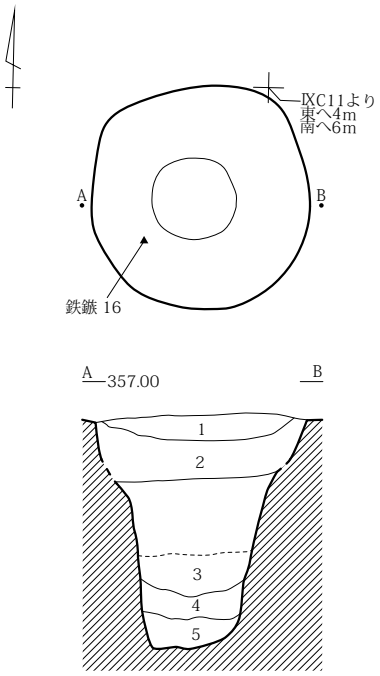
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。大焼土粒・炭化物多混。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。暗灰黄色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
3　黒褐色土　粘土質ｼﾙﾄ。
4　灰黄褐色土　粘土質ｼﾙﾄ。

SK191



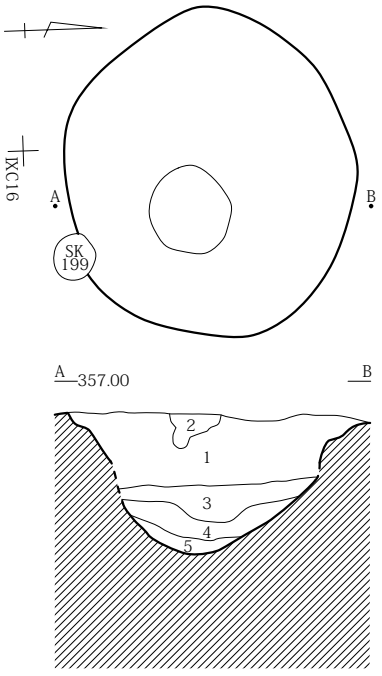
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ・青灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
2　褐灰色土(10YR5/1)　粘質埴壌土。大炭化物混。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
3　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
4　灰白色土(10YR7/1)　炭化物層。泥炭質。
5　灰色土(7.5Y5/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大炭化物少混。
6　灰色土(7.5Y6/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大緑灰色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
7　灰色土(7.5Y4/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土少混。やや腐食。
8　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(7.5Y3/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。未分解植物片混。

SK196



1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂質。黄褐色土少混。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　鉄分少混。
3　にぶい黄褐色土(10YR5/3)
4　灰色土(7.5Y6/1)
5　暗青灰色土(5BG4/1)

SK197

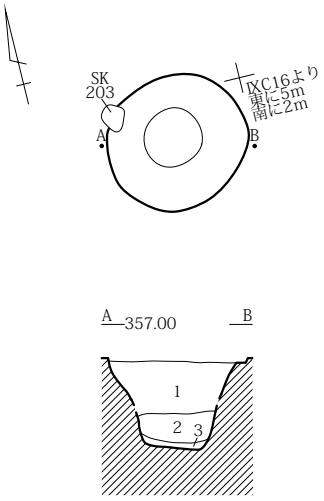


1　灰黄褐色土(10YR4/2)　灰白色土少混。
2　灰黄褐色土(10YR6/2)　砂質土。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。砂混。大灰黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
4　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘質埴壌土。細砂多混。小にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少混。還元。
5　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘質土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。

0　(1:60)　1m

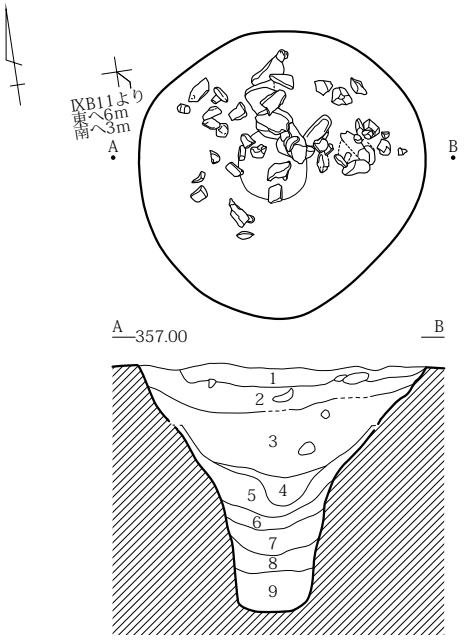
図版 64　中近世の井戸跡６

SK198



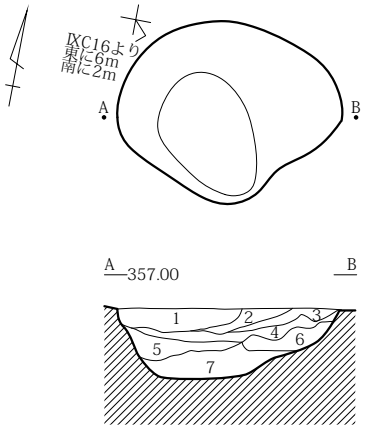
1　灰黄褐色土(10YR4/2)
2　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘質埴壌土。
　大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
3　ｵﾘｰﾌﾞ灰色土(2.5GY6/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
　にぶい黄橙色ｼﾙﾄ縞状に混。

SK200



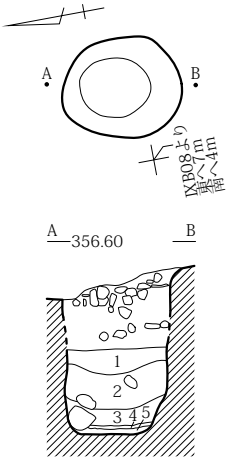
1　暗灰黄褐色土(2.5Y5/2)　ｼﾙﾄ質植壌土。大黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
2　灰黄褐色土(10YR5/2)　ｼﾙﾄ質植壌土。大褐灰色・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質植壌土。大褐灰色・黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
4　灰色土(N5/1)　粘土。大灰白色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
5　にぶい黄橙色土(10YR7/2)　粘土。
6　黄灰色土(2.5Y4/1)と粘土縞状に混。
7　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘土。
8　灰色(N4)粘土とｵﾘｰﾌﾞ灰色(2.5GY5/1)ｼﾙﾄ縞状に混。
9　暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色土(5GY4/1)　ｼﾙﾄ質植壌土。還元。

SK257



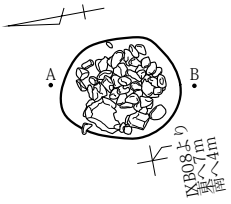
1　にぶい黄褐色土(10YR5/4)
2　灰黄褐色土(10YR6/2)　灰白色粘質土多混。黄橙色土混。
　炭片少混。
3　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　黄橙色土・浅黄橙色土混。
4　明黄褐色土(10YR6/6)　明黄橙土・橙色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
5　にぶい黄橙色土(10YR6/3)
6　にぶい黄橙色土(10YR7/2)
7　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　灰色粘質土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SK270



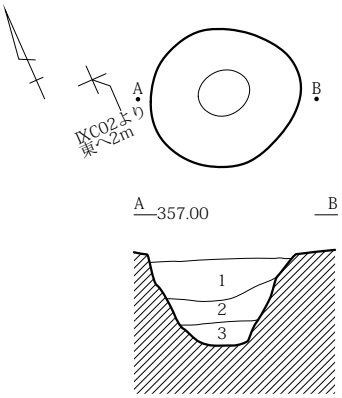
1　褐灰色土(10YR5/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大灰黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
　褐灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
2　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘質埴壌土。大灰黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。灰色
　粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
3　暗緑灰色土(5G4/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
4　にぶい黄色土(2.5Y6/3)　ｼﾙﾄ。
5　暗緑灰色土(5G4/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。

SK270上層礫出土状況



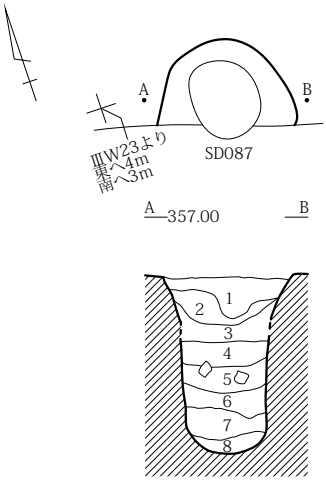
0　(1:60)　1m

SK276



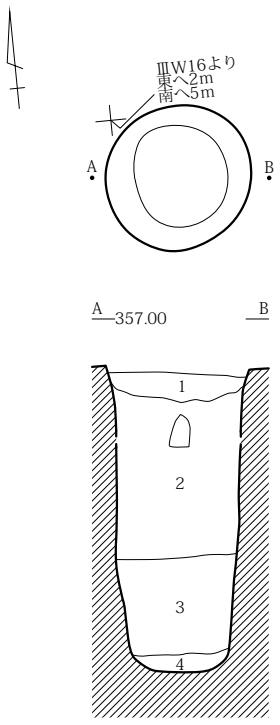
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大黒褐色・黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
2　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土(2.5Y4/3)　ｼﾙﾄ質。
3　黄灰色土(2.5Y4/1)　ｼﾙﾄ。

SK277



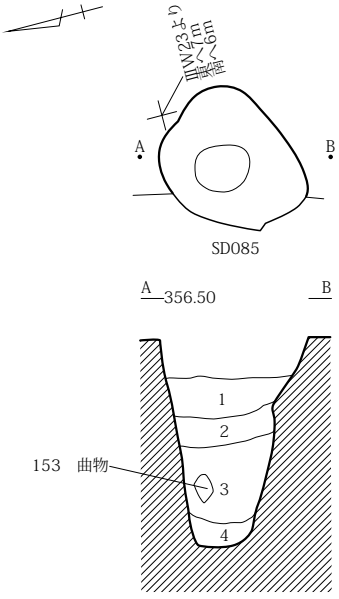
1　灰黄褐色土(10YR5/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大黒褐色・褐灰色・黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
2　灰黄褐色土(10YR6/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大黒褐色・褐灰色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘質埴壌土。
5　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘質埴壌土。
6　青灰色土(10BG5/1)　粘土。
7　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘質埴壌土。
8　青灰色土(10BG5/1)　粘質ｼﾙﾄ。砂多混。

SK278



1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。小黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
2　暗褐色土(10YR3/4)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
3　灰色土(7.5Y4/1)　粘質埴壌土。砂混。大礫多混。環元。
4　灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(5Y5/2)　砂質埴壌土。砂多混。未分解植物片少混。

SK279

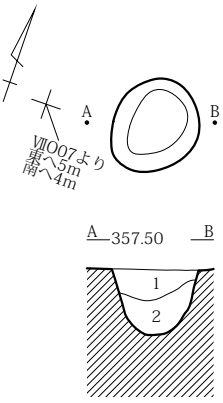


1　灰黄褐色土(10YR5/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大褐灰色・にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
2　灰色土(5Y5/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大褐灰色・灰黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
3　暗青灰色土(10BG4/1)　粘質埴壌土。未分解植物片混。
4　緑灰色土(5G5/1)　細砂質埴壌土。細砂多混。

0　(1:60)　1m

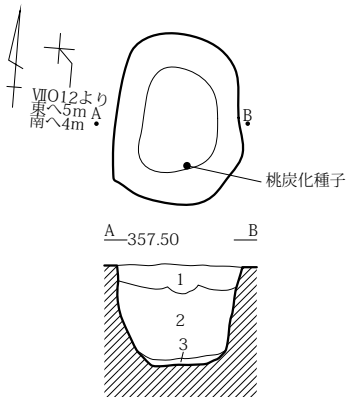
図版 66　中近世の井戸跡８

SK507



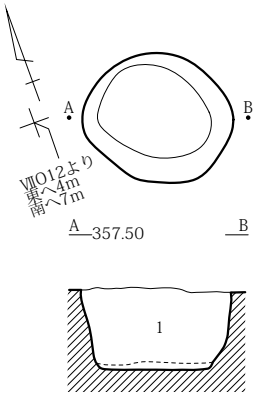
1　褐灰色土(10YR5/1)　砂質ｼﾙﾄ。黄褐色砂質土ﾌﾞﾛｯｸ状に混。
2　褐灰色土(10YR5/1)　粘質土。黄褐色・灰黄褐色粘質土ﾌﾞﾛｯｸ多混。埋め土。

SK508



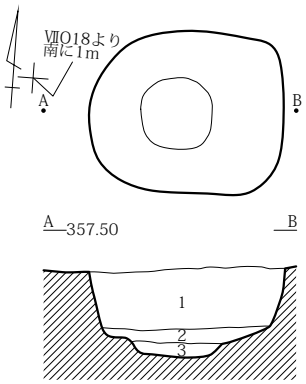
1　褐灰色土(10YR6/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大明褐色ｼﾙﾄ・褐色ｼﾙﾄ質埴壌土・褐灰色埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ混。
2　褐灰色土(10YR6/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大明褐色ｼﾙﾄ・褐色ｼﾙﾄ質埴壌土・褐灰色埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
3　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘土。大褐灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SK509



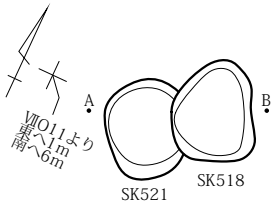
1　褐灰色土(10YR6/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大褐灰色埴壌土・にぶい黄色ｼﾙﾄ質埴壌土・明褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。

SK510



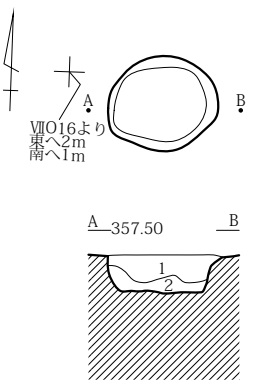
1　褐灰色土(10YR5/1)　粘質埴壌土。大明褐色ｼﾙﾄ・褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
2　灰黄色土(2.5Y6/2)　粘土。大黄褐色ｼﾙﾄ質壌土・黒色壌土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
3　黒色土(2.5Y2/1)　粘土。大黄灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ・泥炭混。

SK518・SK521



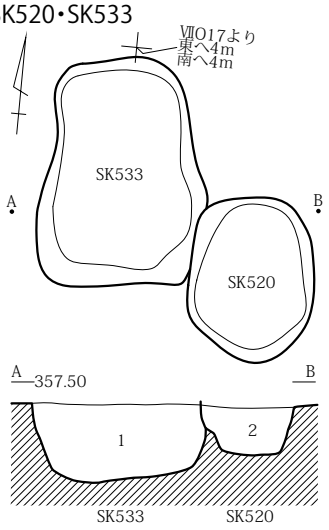
1　褐灰色土(10YR5/1)　砂質土。黄褐色土混。
2　褐灰色土(10YR5/1)　明黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。

SK519



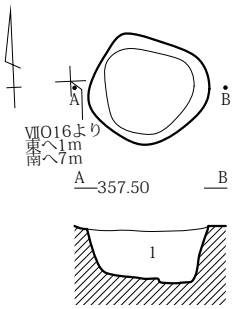
1　褐灰色土(10YR5/1)　黄褐色土褐灰粘質土少混。
2　褐灰色土(10YR5/1)　黄褐色土少混。

SK520・SK533



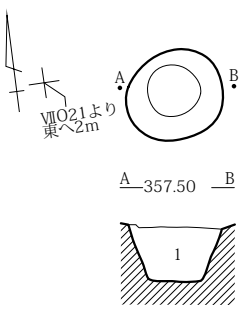
1　褐灰色土(10YR5/1)　黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
2　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂質。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。

SK522



1　褐灰色土(10YR5/1)　明黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

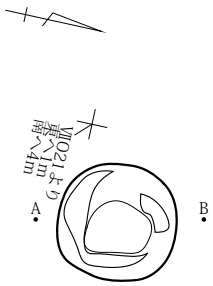
SK523

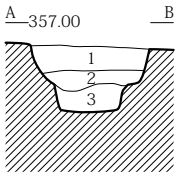


1　褐灰色土(10YR5/1)　明黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

0　(1:60)　1m

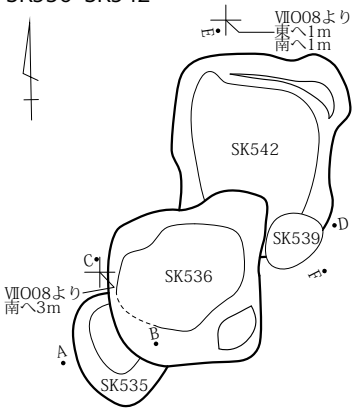
SK525



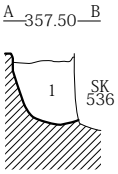


1　褐灰色土(10YR4/1)　明黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
2　褐灰色土(10YR4/1)　粘質土。
3　褐灰色土(10YR4/1)　黄褐色土混。

SK535・SK536・SK542

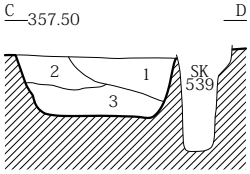


SK535



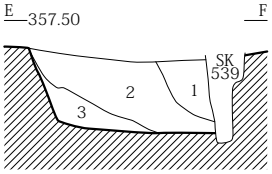
1　褐灰色土(10YR5/1)　ｼﾙﾄ。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。

SK536



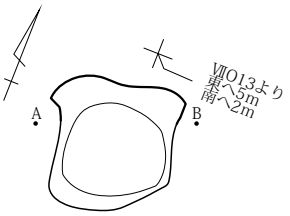
1　灰黄褐色土(10YR6/2)　砂質ｼﾙﾄ。黄褐色土混。大暗褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
2　にぶい黄橙色(10YR6/4)　灰白粘質土ﾌﾞﾛｯｸ混。
3　褐灰色土(10YR6/1)　粘質土。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。

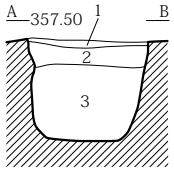
SK542



1　灰黄褐色土(10YR6/2)　黄褐色土混。
2　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　褐灰粘質土混。
3　褐灰土(10YR5/1)　粘質土。明黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。

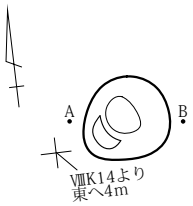
SK538

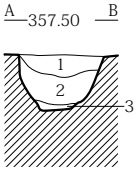




1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)
2　灰黄褐色土(10YR5/2)　ｼﾙﾄ。
3　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　褐灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ・大暗褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・明黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

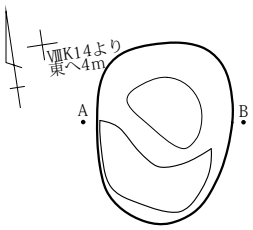
SK540

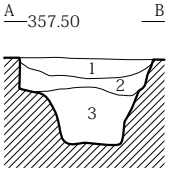




1　灰黄褐色土 (10YR6/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。黄褐色ｼﾙﾄ質埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ混。
2　灰黄褐色土(10YR5/1)　粘質土。大明黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。黒褐色埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
3　褐灰色土(10YR4/1)　粘土。

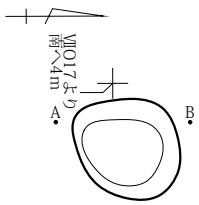
SK541

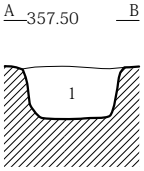




1　灰黄褐色土(10YR6/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大明黄褐色ｼﾙﾄ質埴壌土・灰白色軽埴土ﾌﾞﾛｯｸ混。
2　褐灰色土(10YR4/1)　粘土。大灰白色・明黄褐色埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
3　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。大明黄褐色埴壌土・灰白色軽埴土ﾌﾞﾛｯｸ多混。

SK548



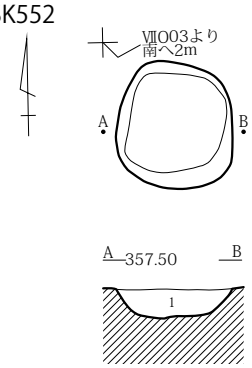


1　灰黄褐色土(10YR6/2)　粘質土。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

0　(1:60)　1m

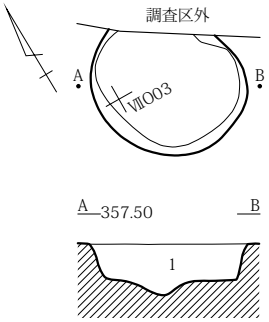
図版 68　中近世の井戸跡 10

SK552



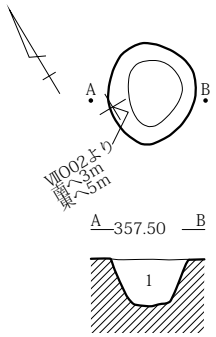
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ。
大ｵﾘｰﾌﾞ褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SK553



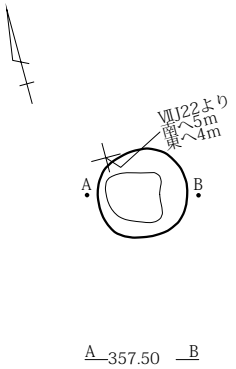
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ。
大ｵﾘｰﾌﾞ褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SK554



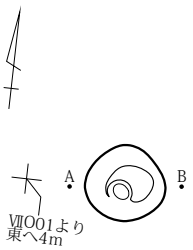
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ。
大ｵﾘｰﾌﾞ褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SK556



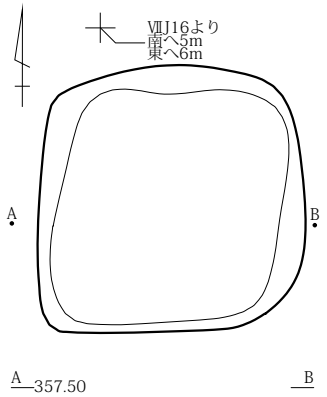
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ。
大ｵﾘｰﾌﾞ褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SK557



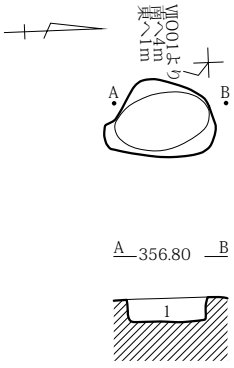
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ。
大ｵﾘｰﾌﾞ褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。

SK558



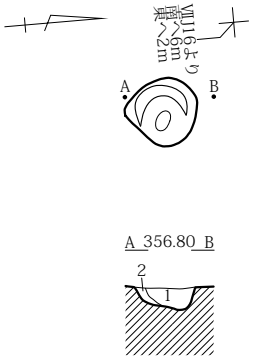
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ。大ｵﾘｰﾌﾞ褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。埋め土。

SK560



1　黄灰色土(2.5Y4/1)　ｼﾙﾄ。
大ｵﾘｰﾌﾞ褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

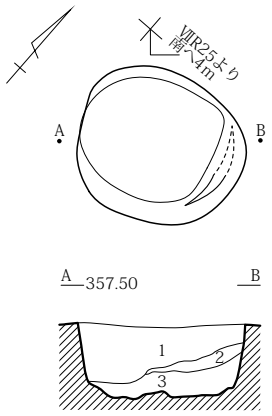
SK561



1　黄灰色土(2.5Y4/1)　ｼﾙﾄ。
大ｵﾘｰﾌﾞ褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
2　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ。
小ｵﾘｰﾌﾞ褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

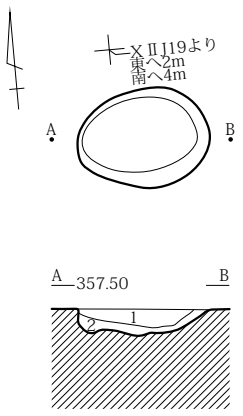
0　(1:60)　1m

SK721



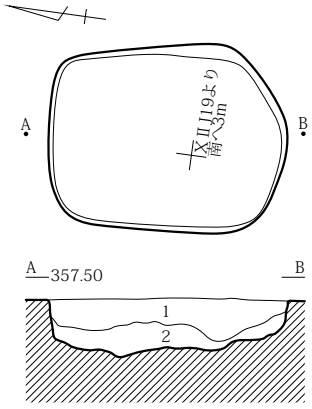
1　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。
2　褐色土(10YR4/4)　ｼﾙﾄ。黒褐色ｼﾙﾄ・灰色ｼﾙﾄ混。
3　黒褐色土(10YR3/1)　ｼﾙﾄ。黒褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。黄褐色土ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少混。

SK901



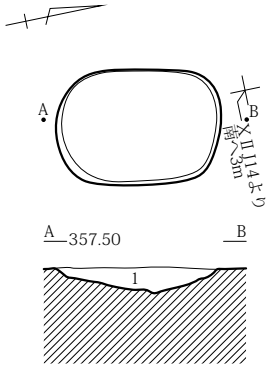
1　7a層粘土。
2　灰色・8層ﾌﾞﾛｯｸ微混。

SK902



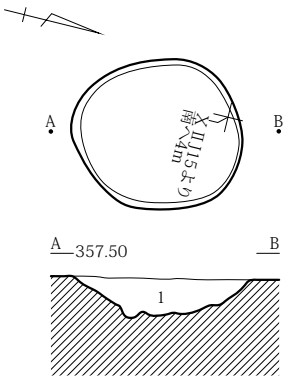
1　7a層粘土　大8層ﾌﾞﾛｯｸ少混。
2　7c層粘土　大8層ﾌﾞﾛｯｸ混。

SK903



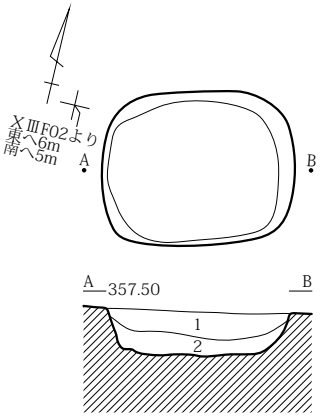
1　7a層粘土。

SK904



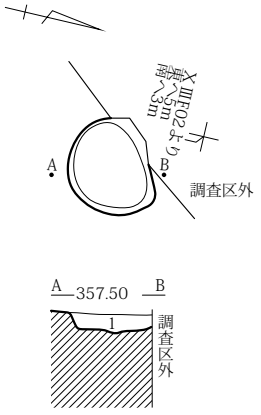
1　7a層粘土　大8層ﾌﾞﾛｯｸ混。

SK905



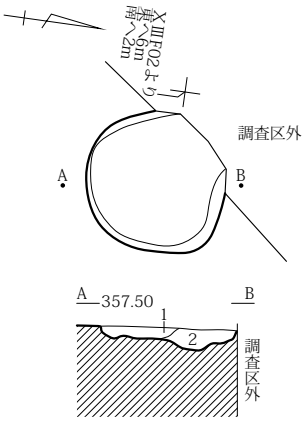
1　7層粘土ﾌﾞﾛｯｸ　大8層ﾌﾞﾛｯｸ多混。
2　大9層ﾌﾞﾛｯｸ・7層ﾌﾞﾛｯｸ多混。

SK906



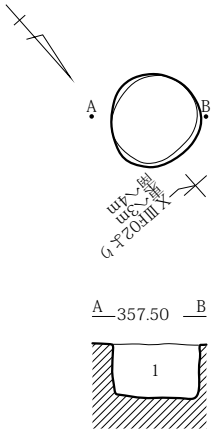
1　7a層粘土　8層少混。

SK907



1　7a層粘土　8層少混。
2　大8層ﾌﾞﾛｯｸ・7層ﾌﾞﾛｯｸ混。

SK908

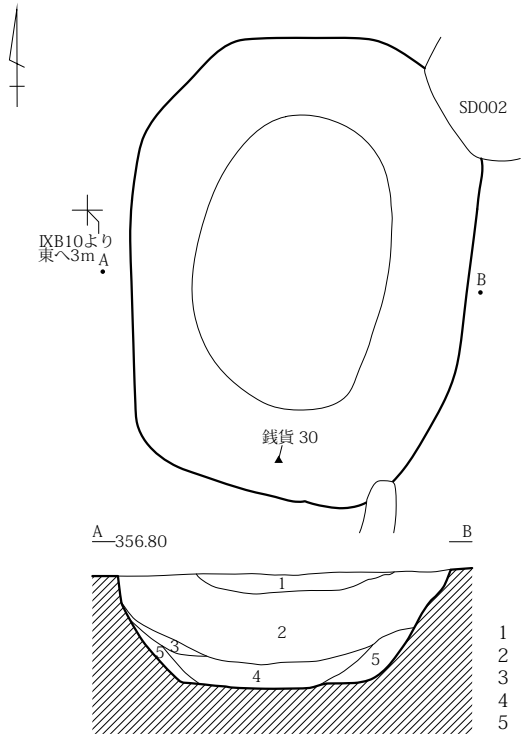


1　7c層粘土　大8層ﾌﾞﾛｯｸ多混。

0　(1:60)　1m

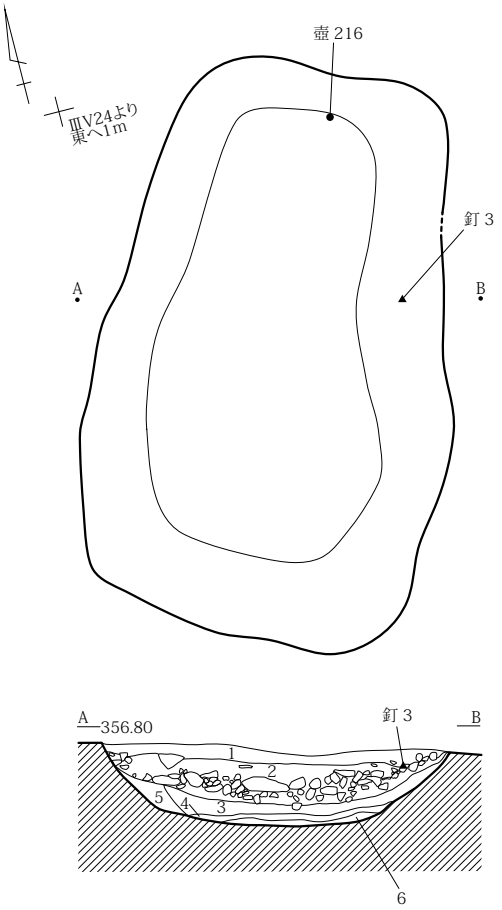
図版 70　中近世の土坑 1

SK001



1　黒褐色土(10YR3/1)
2　灰黄褐色土(10YR5/2)　埴壌土。小にぶい黄橙色ｼﾙﾄ・にぶい黄褐色ｼﾙﾄ質埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ混。
3　褐灰色土(10YR6/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
4　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘質埴壌土。小にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
5　灰色土(10Y5/1)　粘質埴壌土。

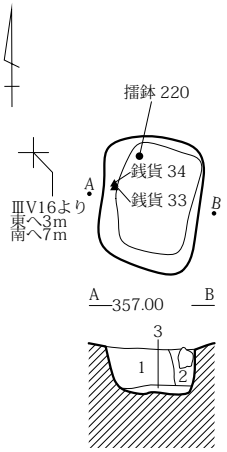
SK012



1　暗褐色土(10YR3/3)　ｼﾙﾄ。褐灰色粘土混。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　焼土ﾌﾞﾛｯｸ・大炭片・礫多混。
3　明黄褐色土(10YR6/6)　明黄褐色土多混。
4　褐灰色土(10YR5/1)　粘質土。
5　灰黄褐色土(10YR5/2)
6　褐灰色土(10YR5/1)　粘質土。鉄分混。

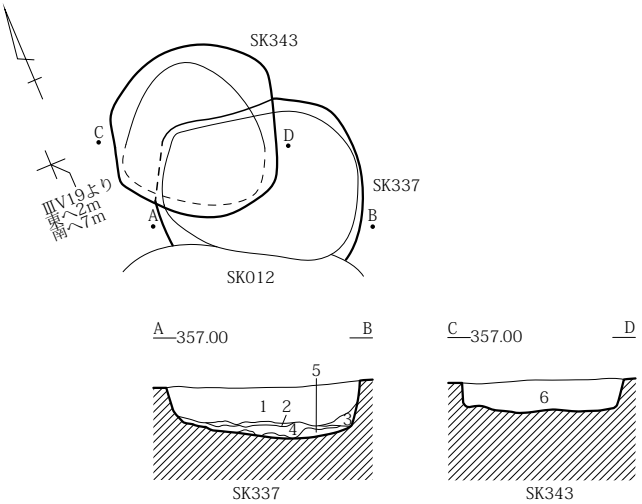
0　(1:60)　1m

SK041



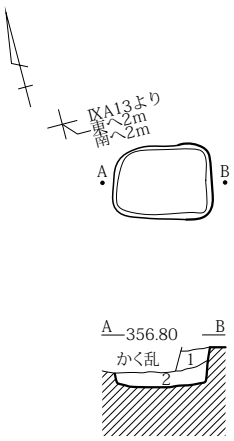
1　暗褐色土(10YR3/3)
　黄褐色土多混。焼土粒少混。
2　黒褐色土(10YR3/2)
3　にぶい黄褐色土(10YR5/4)
　粘質。焼土粒・炭少混。

SK337・SK343



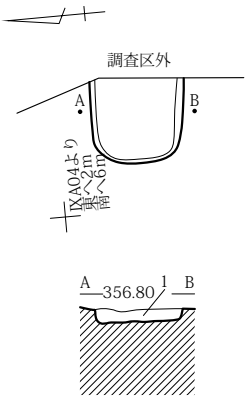
1　灰黄褐色土(10YR5/2)　灰白～明黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
2　橙色土(7.5YR6/8)
3　灰白色土(10YR7/1)
4　灰白色土(10YR7/1)　粘質土。
5　にぶい黄橙色土(10YR7/2)　砂質土。
6　粘質土ﾌﾞﾛｯｸで構成。木片・黄褐色土混。

SK369



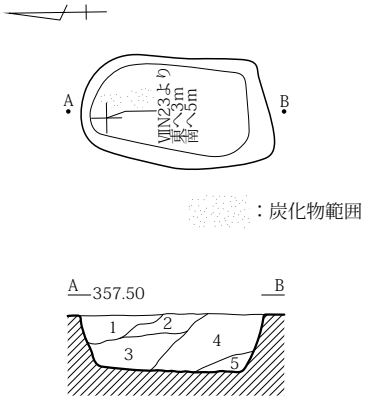
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。
　褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・砂混。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　ｼﾙﾄ。褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・灰色土粒混。
　砂微混。

SK370



1　暗褐色土(10YR3/3)
　ｼﾙﾄ。灰色土・褐色土
　ﾌﾞﾛｯｸ・細粒砂混。

SK604

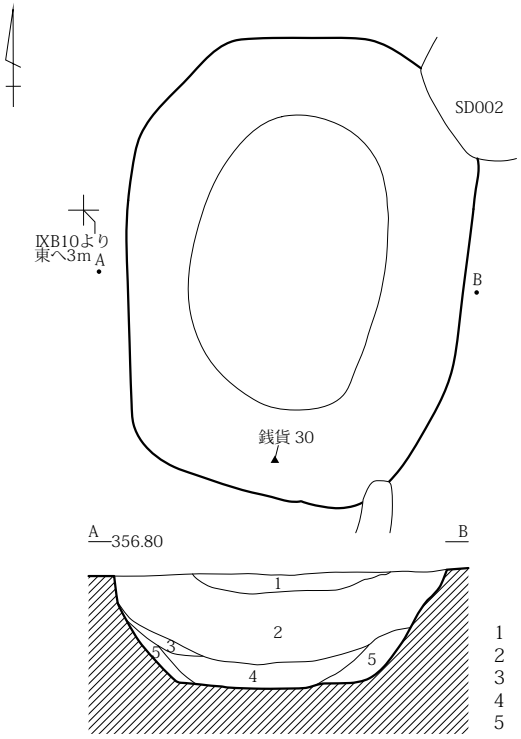


1　褐灰色土(10YR4/1)　大にぶい黄褐色土
　ﾌﾞﾛｯｸ混。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂質。褐灰
　色土混。
3　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂質。大褐
　灰色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
4　褐灰色土(10YR4/1)大にぶい黄褐色土ﾌﾞ
　ﾛｯｸ混。
　炭化物少混。
5　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ｼﾙﾄ質。炭
　化物ﾌﾞﾛｯｸ混。

0　(1:60)　1m

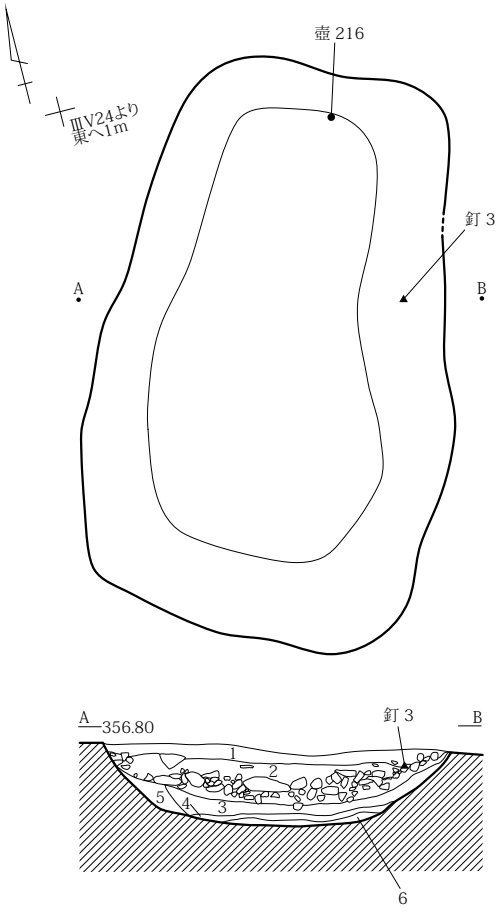
図版 72　SM001・002　墓跡

SK001



1　黒褐色土(10YR3/1)
2　灰黄褐色土(10YR5/2)　埴壌土。小にぶい黄橙色ｼﾙﾄ・にぶい黄褐色ｼﾙﾄ質埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ混。
3　褐灰色土(10YR6/1)　粘質埴壌土。大にぶい黄橙色・黒褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
4　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘質埴壌土。小にぶい黄橙色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。
5　灰色土(10Y5/1)　粘質埴壌土。

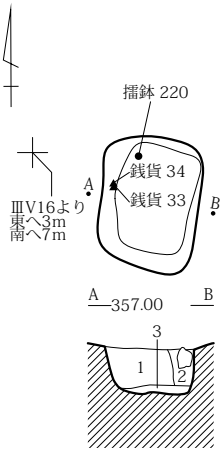
SK012



1　暗褐色土(10YR3/3)　ｼﾙﾄ。褐灰色粘土混。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　焼土ﾌﾞﾛｯｸ・大炭片・礫多混。
3　明黄褐色土(10YR6/6)　明黄褐色土多混。
4　褐灰色土(10YR5/1)　粘質土。
5　灰黄褐色土(10YR5/2)
6　褐灰色土(10YR5/1)　粘質土。鉄分混。

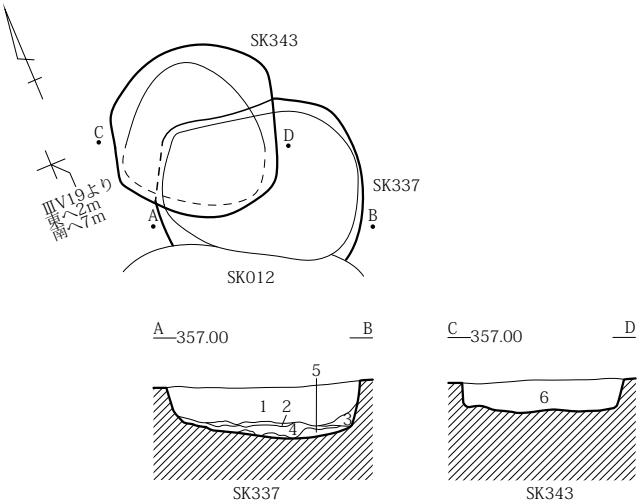
0　(1:60)　1m

SK041



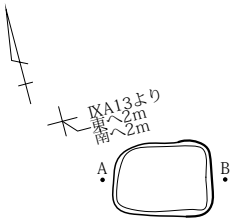
1　暗褐色土(10YR3/3)
　黄褐色土多混。焼土粒少混。
2　黒褐色土(10YR3/2)
3　にぶい黄褐色土(10YR5/4)
　粘質。焼土粒・炭少混。

SK337・SK343



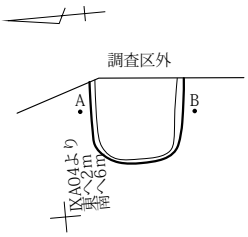
1　灰黄褐色土(10YR5/2)　灰白～明黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
2　橙色土(7.5YR6/8)
3　灰白色土(10YR7/1)
4　灰白色土(10YR7/1)　粘質土。
5　にぶい黄橙色土(10YR7/2)　砂質土。
6　粘質土ﾌﾞﾛｯｸで構成。木片・黄褐色土混。

SK369



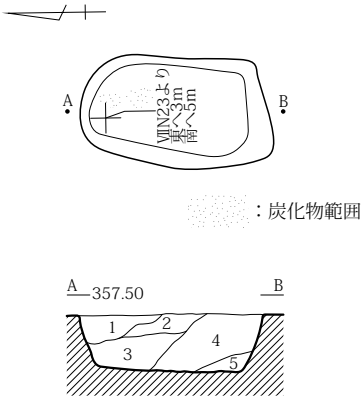
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。
　褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・砂混。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　ｼﾙﾄ。褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・灰色土粒混。
　砂微混。

SK370



1　暗褐色土(10YR3/3)
　ｼﾙﾄ。灰色土・褐色土
　ﾌﾞﾛｯｸ・細粒砂混。

SK604

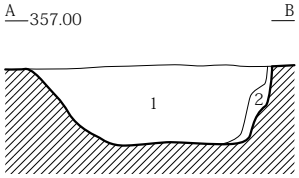


1　褐灰色土(10YR4/1)　大にぶい黄褐色土
　ﾌﾞﾛｯｸ混。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂質。褐灰
　色土混。
3　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂質。大褐
　灰色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
4　褐灰色土(10YR4/1)大にぶい黄褐色土ﾌﾞ
　ﾛｯｸ混。
　炭化物少混。
5　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ｼﾙﾄ質。炭
　化物ﾌﾞﾛｯｸ混。

0　(1:60)　1m

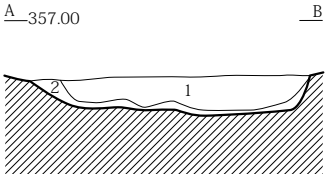
図版 74　中近世の溝跡 1

SD001



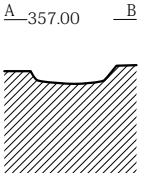
1　黒褐色土(10YR3/2)
2　灰黄褐色土(10YR5/2)　粘質土。明黄褐色土多混。

SD002

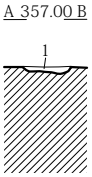


1　黒褐色土(10YR3/2)
2　にぶい黄橙色土(10YR6/3)

SD003

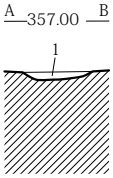


SD004



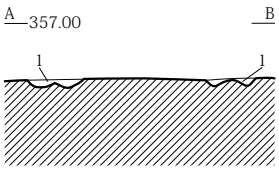
1　灰黄褐色土(10YR5/2)　明褐色土混。

SD005



1　灰黄褐色土(10YR5/2)　明褐色土混。

SD006・SD011



1　灰黄褐色土(10YR5/2)　明褐色土混。

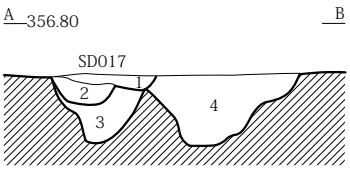
SD007

1　黒褐色土(10YR3/1)　焼土粒・極小炭少混。
2　灰黄褐色土(10YR5/2)　黄褐色土多混。

SD008

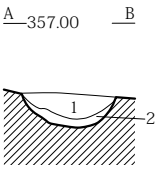
1　灰黄褐色土(10YR6/2)　褐灰色ｼﾙﾄ・黄褐色土多混。

SD009・SD017



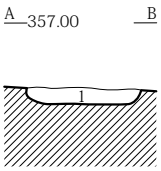
1　黒褐色土(10YR3/2)　焼土 (5YR6/8)　小粒多混。
2　黒褐色土(10YR3/2)
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　黄褐色土混。
4　黒褐色土(10YR3/2)　やや粘質。炭若干混。

SD010



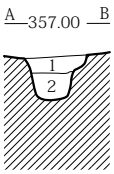
1　黒褐色土(10YR3/2)　粘性弱。
2　褐色土(10YR4/4)　ｼﾙﾄ。黒褐色土混。

SD013



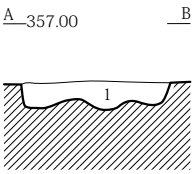
1　黒褐色土(10YR3/2)　砂質ｼﾙﾄ。

SD015



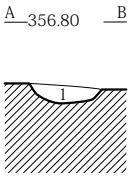
1　黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色土混。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　黄褐色粘質土混。

SD016



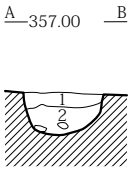
1　灰黄褐色土(10YR6/2)　褐灰色ｼﾙﾄ・黄褐色土多混。

SD018



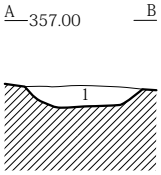
1　黒褐色(10YR3/2)　ｼﾙﾄ。

SD019



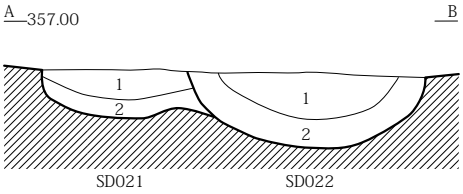
1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　ｼﾙﾄ。小灰黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。　礫混。

SD020



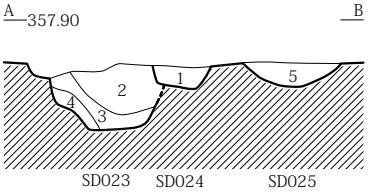
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。

SD021・SD022



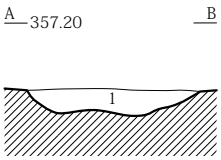
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。
2　灰黄褐色土(10YR5/2)　ｼﾙﾄ。

SD023・SD024・SD025



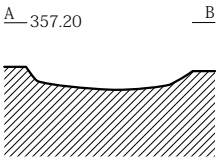
1　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。粘性強。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。粘性弱。中炭化物微混。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。暗灰黄色粘質土混。
5　灰黄褐色土(10YR6/2)　ｼﾙﾄ。

SD026

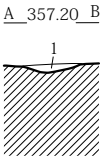


1　褐灰色土(10YR4/1)　褐色土粒多混。小灰白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ微混。

SD027

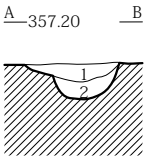


SD029



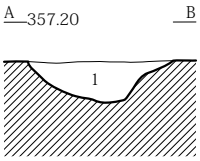
1　灰黄褐色土(10YR5/2)　褐色土粒・地山土ﾌﾞﾛｯｸ少混。

SD030

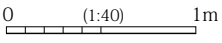


1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　褐色土粒多混。暗褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　褐色土粒混。褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。

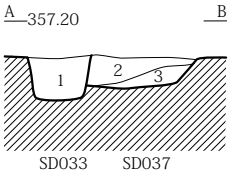
SD031



1　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色土粒混。

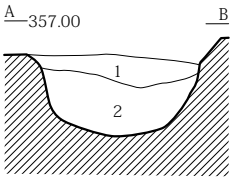


SD033・SD037



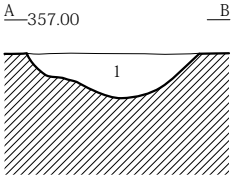
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色・暗褐色土粒混。炭化物・白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
2　灰黄褐色土(10YR5/2)　褐色粒混。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色粒多混。細砂混。

SD034



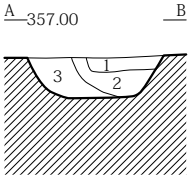
1　褐灰土(10YR6/1)
2　灰黄褐色土(10YR6/2)　地山土ﾌﾞﾛｯｸ多混。褐色ｼﾙﾄ質埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SD035



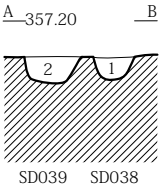
1　褐灰土(10YR6/1)　粘土。褐色ｼﾙﾄ質埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SD036



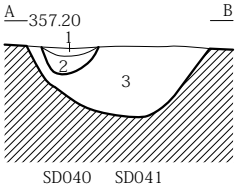
1　灰黄褐色土(10YR6/2)　粘土。黄褐色ｼﾙﾄ質埴壌土混。
2　褐灰色土(10YR6/1)　粘土。
3　灰黄褐色土(10YR6/2)　粘土。褐色ｼﾙﾄ質埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SD038・SD039



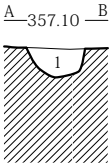
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色土粒多混。灰白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色土粒混。灰白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。

SD040・SD041



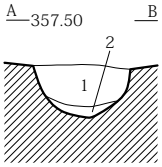
1　褐灰色土(10YR4/1)　粘土。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ。褐灰色粘土混。
3　褐灰色土(10YR6/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。灰黄褐色ｼﾙﾄ粒混。

SD042



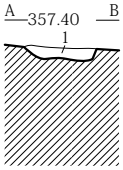
1　灰黄褐色土(10YR6/2)　ｼﾙﾄ 質埴壌土。地山土ﾌﾞﾛｯｸ多混。

SD043



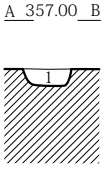
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
2　褐灰色土(10YR5/1)　粘土。

SD044



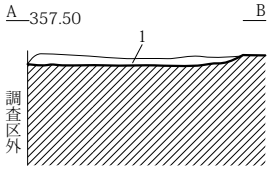
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色土粒混。褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。

SD047



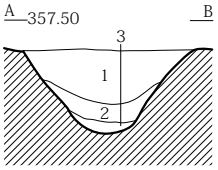
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　黒褐色土粒多混。

SD049



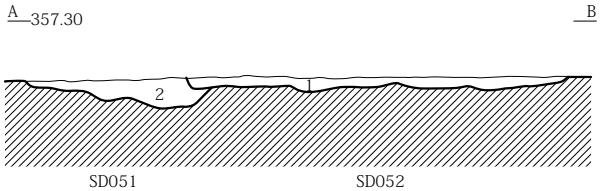
1　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　ｼﾙﾄ質埴壌土。

SD050



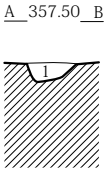
1　灰黄褐色土(10YR6/2)　地山土粒・灰白色ｼﾙﾄ質埴壌土混。
2　褐灰土(10YR6/1) 灰白色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ多混。
3　灰白色土(10YR7/1　　ｼﾙﾄ質埴壌土。

SD051・SD052



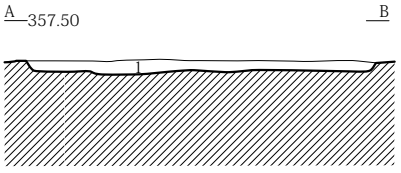
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。褐灰色軽埴土ﾌﾞﾛｯｸ少混。

SD053



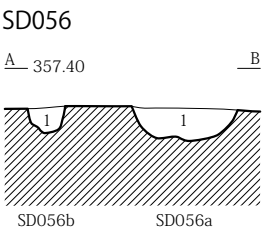
1　黒褐色土(10YR3/2)　粘土。

SD055



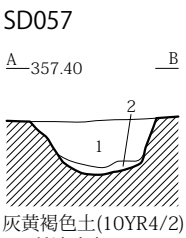
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。

SD056



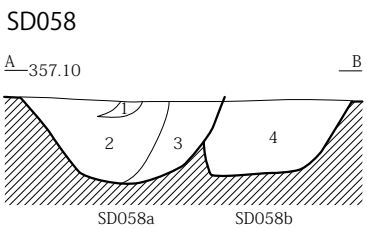
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。

SD057



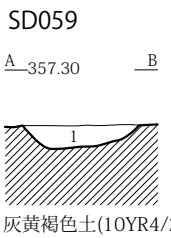
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。
2　褐灰色土(10YR5/1)　粘土。

SD058



1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。炭化物多混。
2　灰白色土(10YR7/1)　粘土。
3　褐灰色土(10YR5/1)　灰黄褐色ｼﾙﾄ質埴壌土多混。
4　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SD059

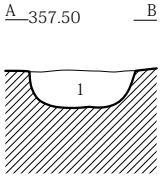


1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ質埴壌土。

0　(1:40)　1m

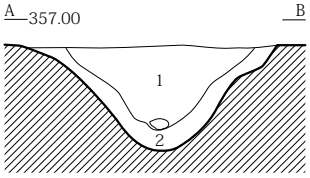
図版 76　中近世の溝跡３

SD060



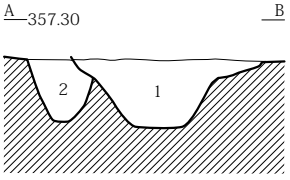
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト質埴壌土。

SD061



1　褐灰色土(10YR4/1)　シルト質埴壌土。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト質埴壌土。

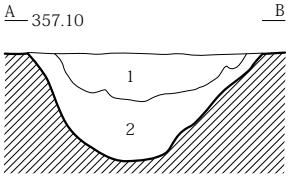
SD063



SD63b　SD63a

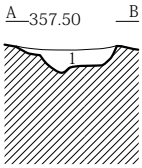
1　褐灰色土(10YR4/1)　粘土。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土。

SD065



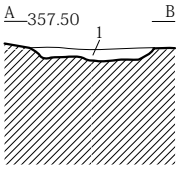
1　褐灰色土(10YR4/1)　シルト質埴壌土。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト質埴壌土。

SD067



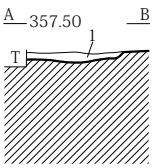
1　褐灰色土 (10YR5/1)　シルト質埴壌土。褐灰色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SD068



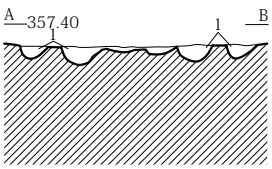
1　褐灰色土(10YR5/1)　シルト質埴壌土。褐灰色土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SD069



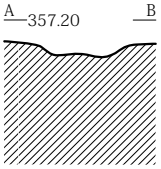
1　褐灰色土(10YR5/1)　シルト質埴壌土。

SD070

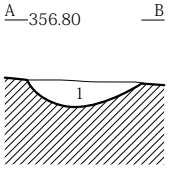


1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　シルト質埴壌土。灰黄褐色シルト質埴壌土・黒褐色シルト質埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SD072

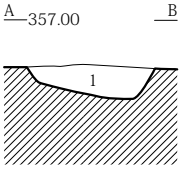


SD074



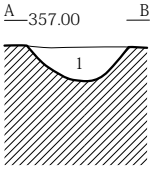
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　地山土混。赤褐色土少混。

SD075



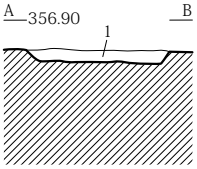
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　地山土粒混。赤褐色土少混。

SD076



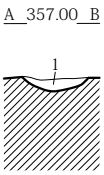
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　灰白色土粒混。

SD077



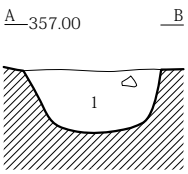
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　灰白色土粒混。

SD078



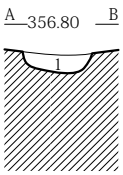
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　灰白色土粒混。炭化物少混。

SD080



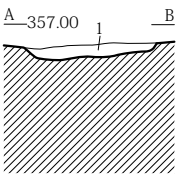
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト質埴壌土。地山土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SD081



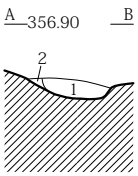
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　褐灰色埴壌土粒少混。

SD082



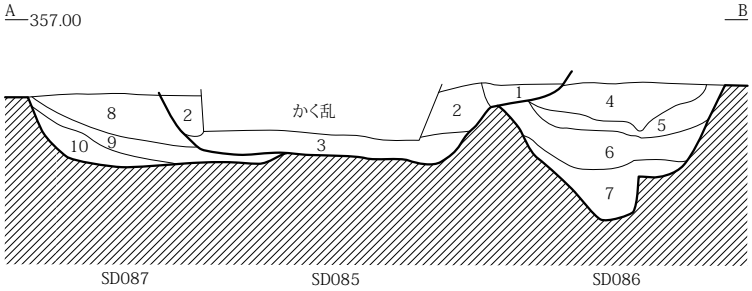
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト質埴壌土。黄褐色シルト質埴壌土・褐灰色シルト質埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SD084



1　灰黄褐色(10YR4/2)　地山土・細砂混。
2　黄褐色土(10YR5/6)　地山土多混。

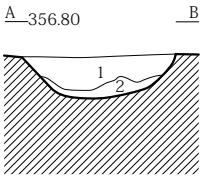
SD085・SD086・SD087



1　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト質埴壌土。灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
2　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
3　黄灰色土(2.5Y5/1)　灰黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
4　灰黄褐色土(10YR5/2)　シルト質埴壌土。灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
5　灰黄褐色土(10YR5/2)　にぶい黄褐色シルト質埴壌土ﾌﾞﾛｯｸ混。
6　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト質埴壌土。褐灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ・砂混。
7　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト質埴壌土。砂多混。黒褐色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
8　灰黄褐色土(10YR5/2)　シルト質埴壌土。灰黄褐色シルトﾌﾞﾛｯｸ・青灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
9　褐灰土(10YR5/1)
10　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　黒褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・褐灰色シルトﾌﾞﾛｯｸ混。

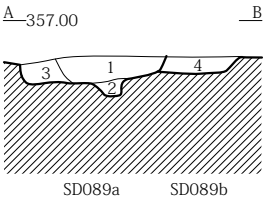
0　(1:40)　1m

SD088



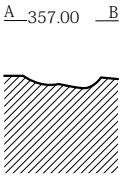
1　灰黄褐色土(10YR4/2)
シルト質埴壌土。褐灰色シルトブロック混。
2　暗褐色土(10YR3/4)
褐灰色シルト質埴壌土・黒褐色シルトブロック混。

SD089

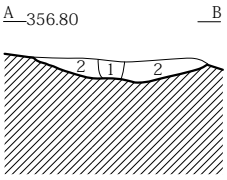


1　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト質埴壌土。
2　褐灰色土(10YR4/1)　灰白色シルトブロック多混。
3　褐灰色土(10YR4/1)　灰白色シルトブロック混。
4　褐灰色土(10YR4/1)　にぶい黄橙色シルトブロック混。

SD090

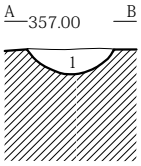


SD091



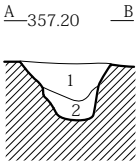
1　黄褐色土(10YR5/6)
砂質埴壌土。
2　にぶい黄橙色土(10YR6/4)
地山土混。

SD097



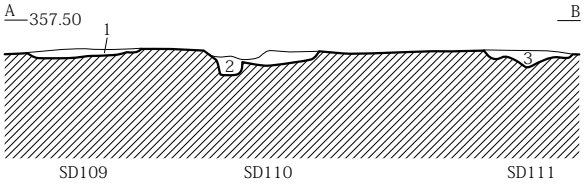
1　灰黄褐色土
(10YR4/2)
シルト質埴壌土。
褐灰軽埴土
ブロック混。

SD098



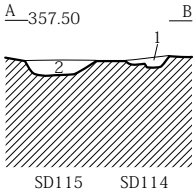
1　灰黄褐色土(10YR4/2)
シルト質埴壌土。
2　褐灰色土(10YR4/1)
粘土。

SD109・SD110・SD111



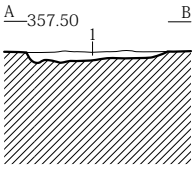
1　明黄褐色土(10YR7/6)　褐灰色シルトブロック少混。
2　黄褐色土　大褐灰色シルトブロック多混。
3　黄褐色土　褐灰色シルトブロック混。

SD114・SD115



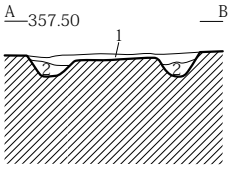
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土。黒褐色粘土ブロック混。黄灰色砂混。
2　褐灰色土(10YR4/1)
粘土。黒褐色・黄褐色粘土混。

SD117



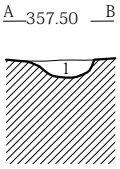
1　灰黄褐色土(10YR4/2)
粘土。黒褐色粘土ブロック混。

SD118



1　暗褐色土(10YR3/3)　粘土。黒褐色・灰色粘土ブロック混。
2　褐灰色土(10YR5/1)　粘土。褐灰色粘土・黄褐色土粒混。

SD119

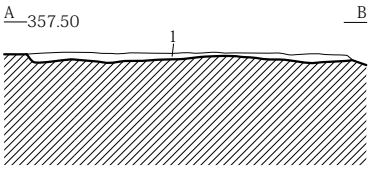


1　にぶい黄褐色土
(10YR4/3)
黒褐色・灰色粘
土混。

SD120

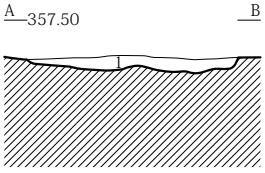
1　黒褐色土
(10YR2/2)
粘土。灰色粘
土ブロック混。

SD121



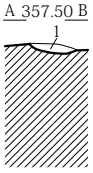
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘土。黒褐色・灰色粘土混。

SD122



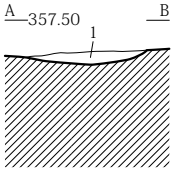
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
粘土。黒褐色・灰色粘土混。

SD123



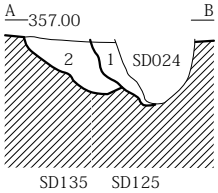
1　灰黄褐色土
(10YR4/2)
粘土。黒褐色
粘土ブロック混。

SD124



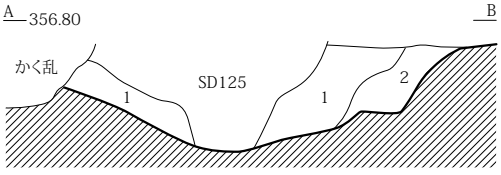
1　灰黄褐色土(10YR4/2)
粘土。黒褐色粘土ブロック混。

SD125・SD135



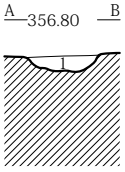
1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト質埴壌土。褐色細粒砂混。暗灰色シルト多混。
2　黒褐色土(10YR3/2)　シルト質埴壌土。灰色・褐色ブロック混。

SD126

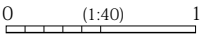


1　褐灰色土(10YR4/1)　シルト質埴壌土。黄褐色細粒砂・大礫混。還元。
2　黒褐色土(10YR3/2)　シルト質埴壌土。砂多混。暗灰色シルト混。

SD128

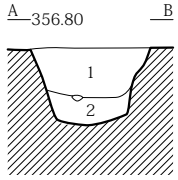


1　褐灰色土(10YR4/1)



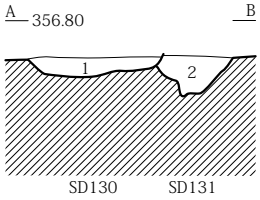
図版 78　中近世の溝跡５

SD129



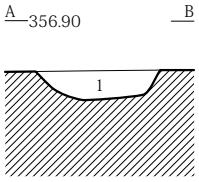
1　褐灰色土(10YR6/1)
シルト。拳～人頭大礫混。
2　極暗褐色土(7.5YR2/3)
シルト。灰白色土シルト混。

SD130・SD131



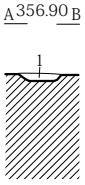
1　黄灰色土(2.5Y5/1)　砂質土。
2　にぶい黄色土(2.5Y6/4)　小
灰白色シルトブロック混。

SD132



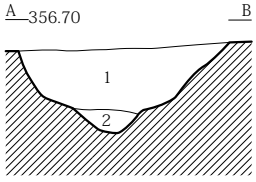
1　黒褐色土。

SD133



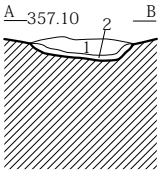
1　黒褐色土。

SD134



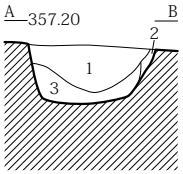
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト。
2　黒褐色土(10YR3/1)　粘質
シルト。褐色土ブロック混。還元。

SD136



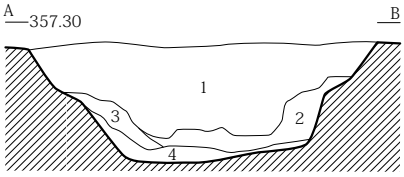
1　褐色土　シルト。暗灰色
シルトブロック混。
2　明褐色土(7.5YR5/6)
シルト質埴壌土。

SD137



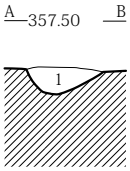
1　褐灰色土(10YR5/1)　シルト。
褐色細粒砂混。還元。
2　暗褐色土(10YR3/4)　シルト。
暗灰色・黒褐色シルト混。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
シルト。暗褐色シルトブロック混。還元。

SD138



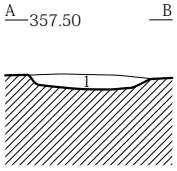
1　褐灰色土(10YR4/1)　粘質シルト。白色土・黒色土粒混。還元。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　シルト。白色粗粒砂混。
3　褐灰色土(10YR4/1)　白色土・黄褐色土粗砂多混。黒褐色シルトブロック混。
4　黒色土(10YR1.7/1)　粘土。黒褐色粘土・暗灰色粘土ブロック混。白色シルト混。

SD139



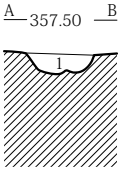
1　黒褐色土(10YR3/1)
シルト。灰色・黄褐色・黒
色シルトブロック混。

SD140



1　黒褐色土(10YR3/1)
シルト。灰色・黄褐色・黒
色シルトブロック 混。

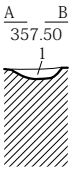
SD141



1　黒褐色土(10YR3/1)
シルト灰色・黄褐色・黒
色シルトブロック混。

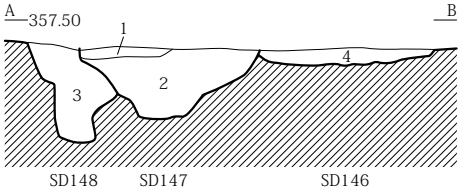
SD144

SD145



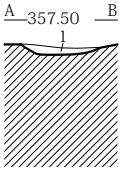
1　黒褐色土
(10YR3/1)
シルト。灰色・
黄褐色・黒
色シルトブロッ
ク混。

SD146・SD147・SD148



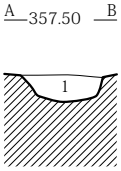
1　黄褐色土
2　褐灰色土　シルト。
3　褐灰色土　シルト。
4　褐灰色土　シルト。

SD149



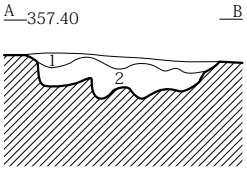
1　記載なし

SD150



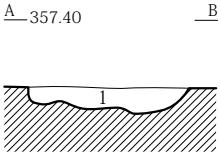
1　記載なし

SD151



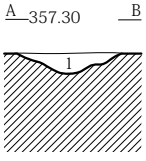
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
山砂。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
山砂。褐灰色土(10YR4/1)・
黒色土(10YR2/1)ブロック少
混。

SD152



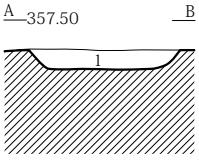
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
山砂。

SD153



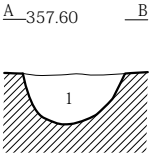
1　にぶい黄褐色土
(10YR4/3)
山砂。

SD154



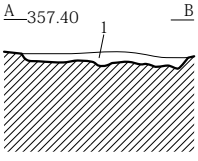
1　記載なし

SD155



1　記載なし

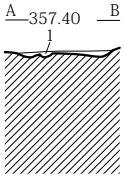
SD156



1　にぶい黄褐色土
(10YR5/3)　細砂。

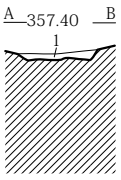
0　(1:40)　1m

SD157



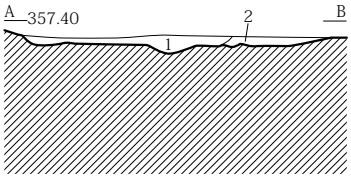
1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂層。

SD158



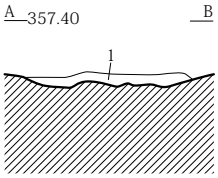
1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂層。

SD159



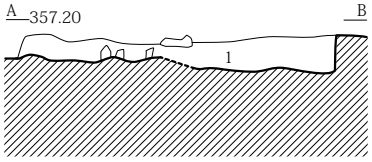
1　褐色土　粗砂。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂層。

SD160



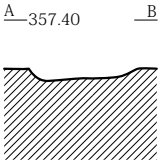
1　灰色土　粘土ﾌﾞﾛｯｸ。砂混。

SD161

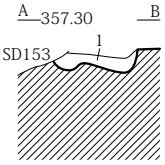


1　黒色土(10YR2/1)　ｼﾙﾄ質埴壌土。

SD162

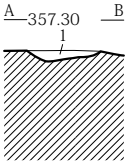


SD163



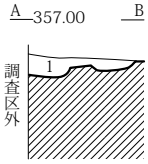
1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　細砂。

SD164



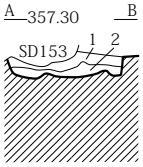
1　細砂。

SD165



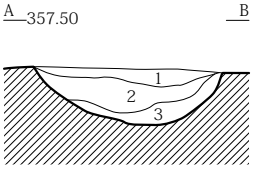
1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　細砂。

SD166



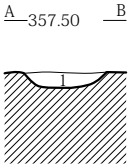
1　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ。粘土ﾌﾞﾛｯｸににぶい黄褐色土細砂多混。
2　にぶい黄褐色土が堆積。

SD167



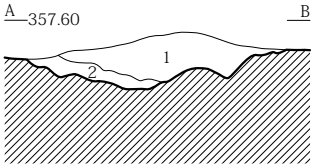
1～3　記載なし

SD168



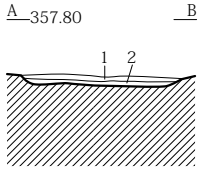
1　記載なし

SD183



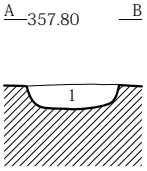
1　褐色土(10YR4/6)　粗砂。白色土粒多混。暗褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少混。
2　暗灰色土(N3)　粘土。褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。白色土粒少混。

SD184

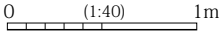


1　褐色土(10YR4/6)　ｼﾙﾄ。地山ﾌﾞﾛｯｸ少混。
2　にぶい黄橙色土(10YR 6/3)　極細砂。

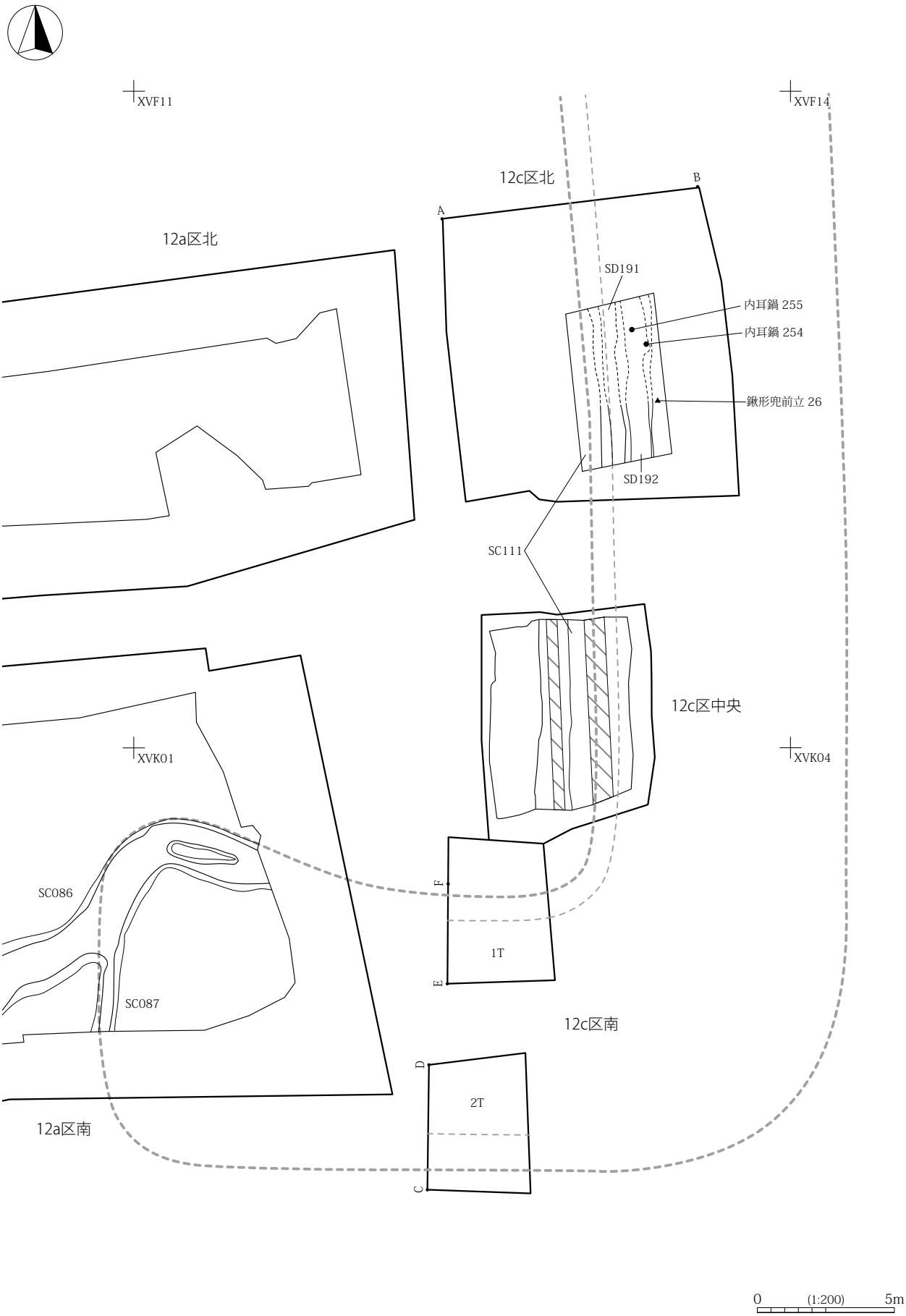
SD185

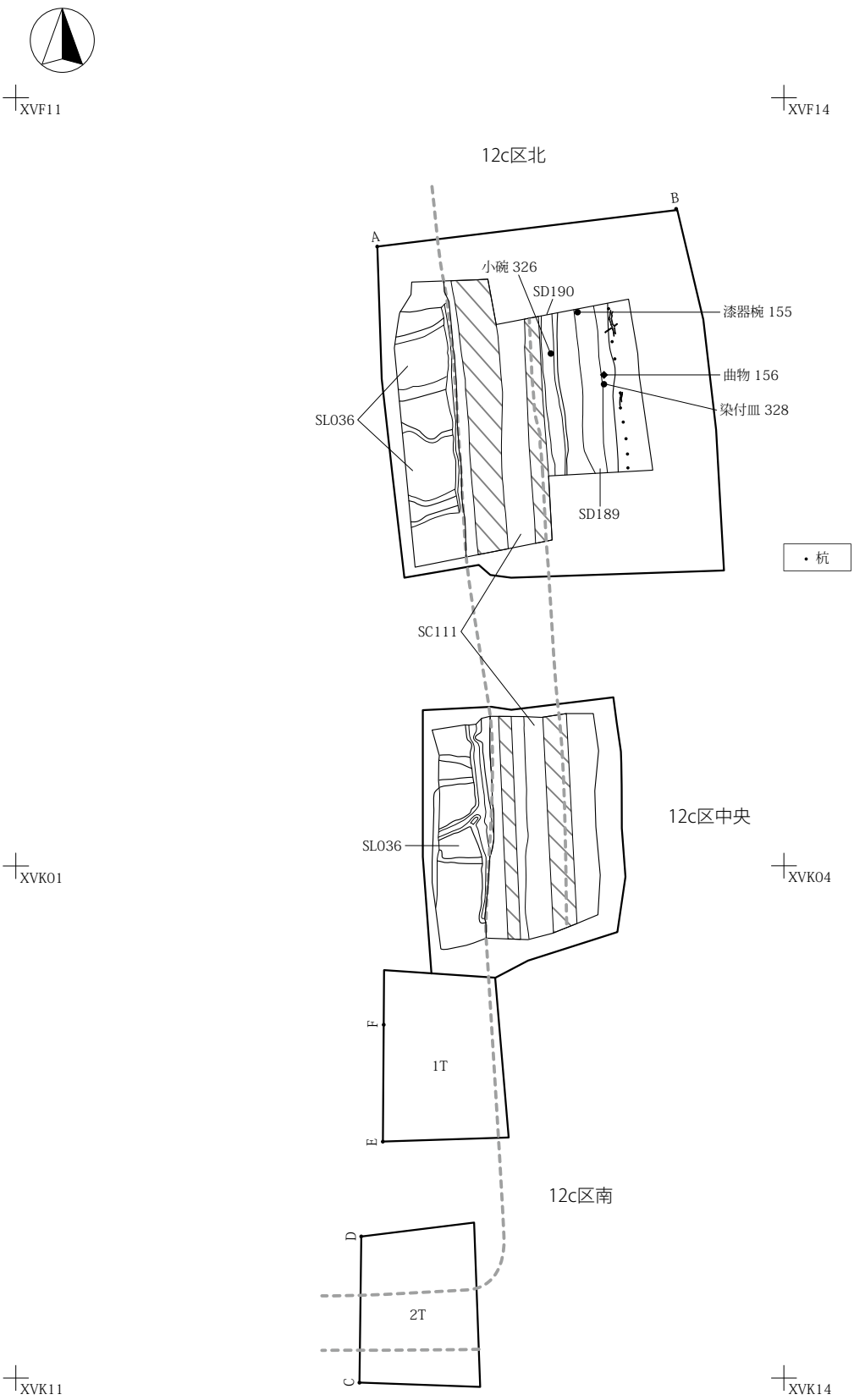


1　山砂。

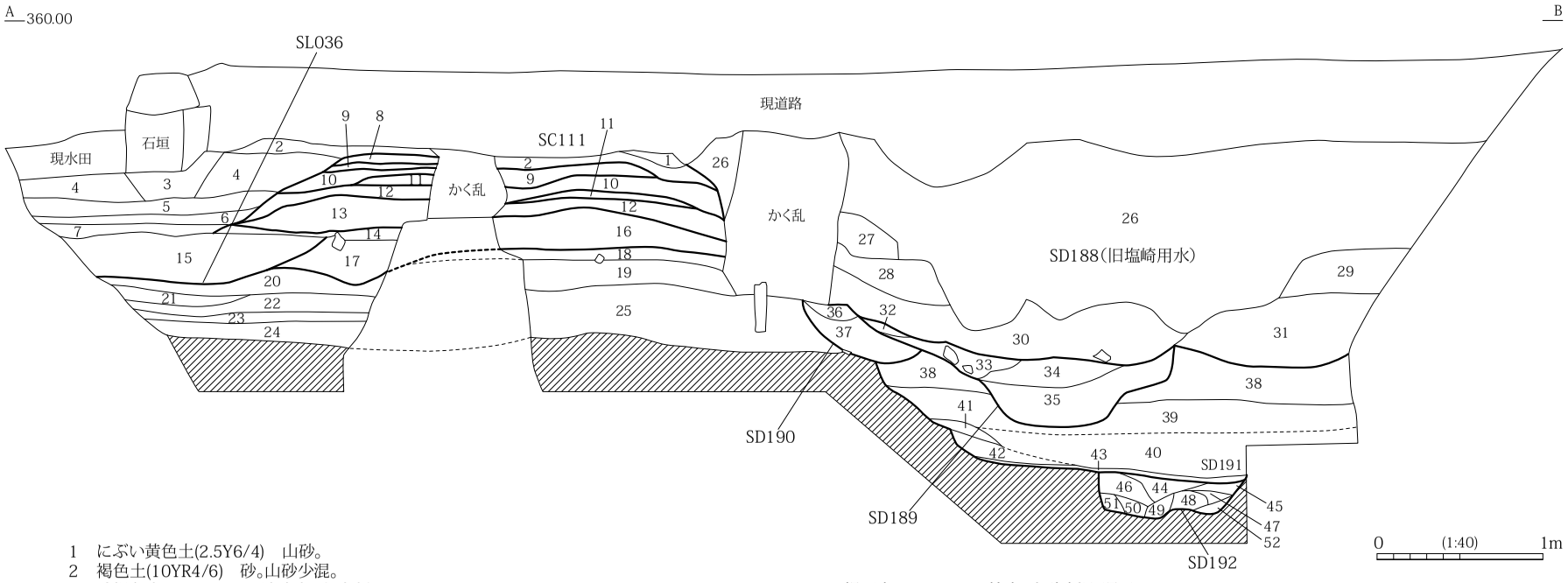


図版 80　12c 区　SD191　居館堀跡

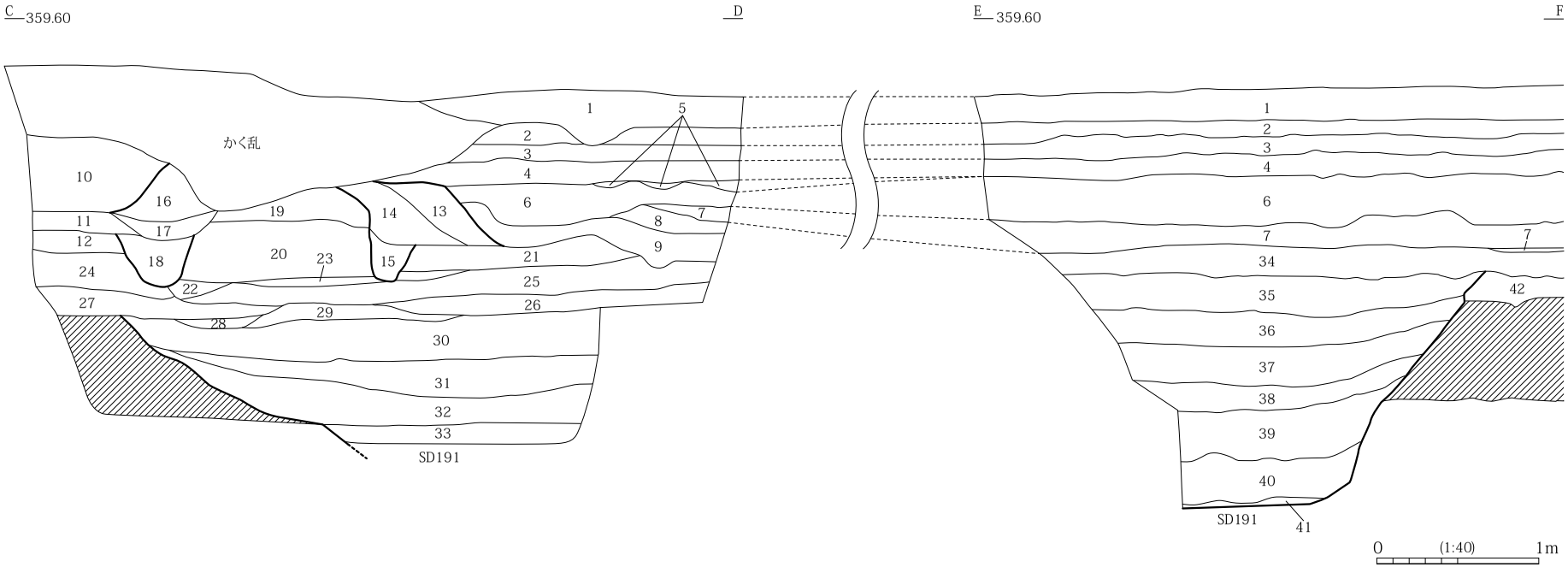



XVF11
XVF14
12c区北
A
B
小碗 326
SD190
漆器椀 155
曲物 156
染付皿 328
SL036
SD189
・杭
SC111
12c区中央
SL036
XVK01
XVK04
F
1T
E
12c区南
D
2T
C
XVK11
XVK14
0
(1:200)
5m

堀跡断面①

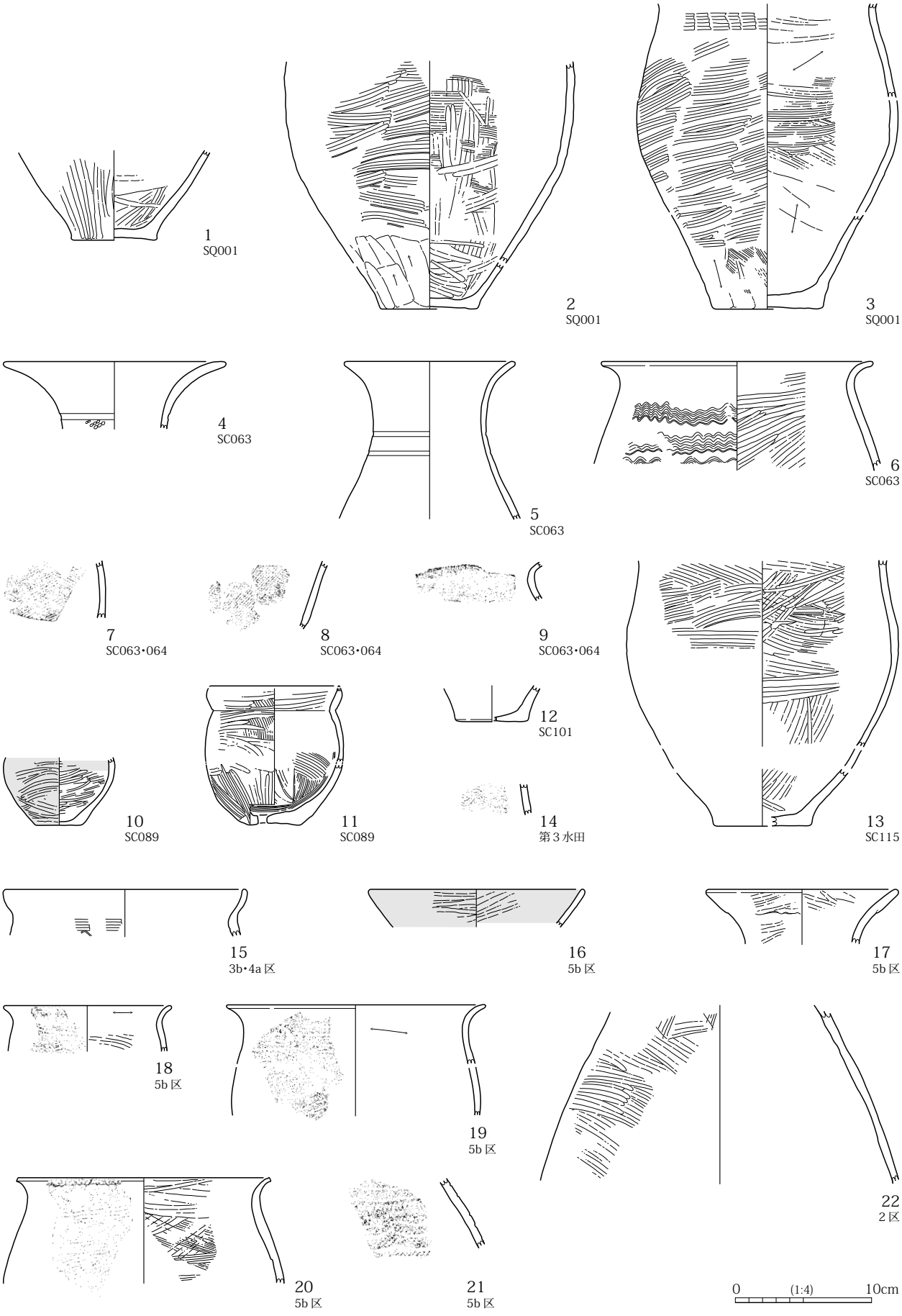


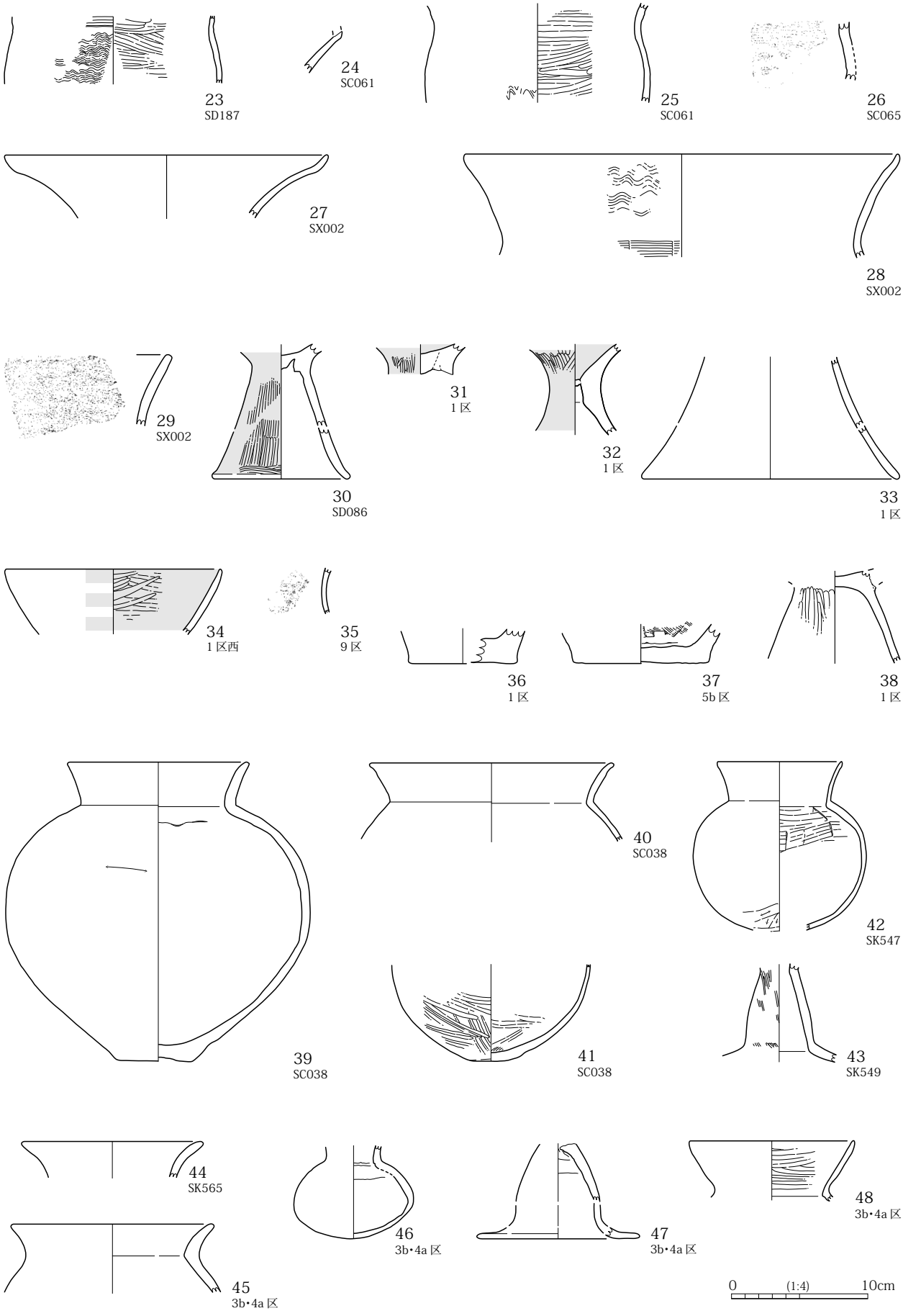
1　にぶい黄色土(2.5Y6/4)　山砂。
2　褐色土(10YR4/6)　砂。山砂少混。
3　暗褐色土(7.5YR3/4)　埴壌土。山砂少混。
4　明赤褐色土(5YR5/6)　ｼﾙﾄ混砂。山砂混。
5　黄灰色土(2.5Y5/1)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂少混。還元。
6　黄灰色土(2.5Y5/2)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂少混。
7　黒色土(10YR3/1)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂少混。
8　褐灰色土(10RY4/1)　埴壌土。山砂少混。腐植土混。
9　黒色土(10YR2/1)　埴壌土。山砂多混。
10　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂多混。
11　にぶい黄橙色土(10YR6/4)　埴壌土。山砂混。
12　灰黄褐色土(10YR5/2)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂多混。
13　黄灰色土(2.5Y5/1)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂ﾌﾞﾛｯｸ・粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。埋め戻し土。
14　灰色土(7.5Y5/1)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂少混。大粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
15　黄褐色土(10YR4/2)　ｼﾙﾄ混粘土。小粘土ﾌﾞﾛｯｸ・山砂ﾌﾞﾛｯｸ多混。埋め戻し土。
16　褐灰色土(10YR4/1)　山砂多混。造成土。
17　褐灰色土(10YR4/1)　山砂ﾌﾞﾛｯｸで構成。大粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。やや還元。
18　灰色土(10Y6/1)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂混。還元。
19　黄灰色土(2.5Y5/1)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂少混。
20　褐灰色土(10YR5/1)　山砂多混。還元。
21　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂少混。
22　青灰色(10BG6/1)　粘土。山砂少混。還元。
23　青灰色土(10BG5/1)　ｼﾙﾄ混粘土。ｼﾙﾄ多混。還元。
24　暗青灰色土(10BG4/1)　粘土。山砂少混。還元。中世の盛土。
25　黄灰色土(2.5Y6/1)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂少混。ｼﾙﾄ混。
SD188 26　黄灰色土(2.5Y5/1)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂混。還元。埋め戻し土。(SD188)
27　黒色土(10YR2/1)　ｼﾙﾄ混粘土。大褐灰色土ﾌﾞﾛｯｸ・灰黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。(SD188)
28　褐灰土(10YR5/1)　粘土。山砂少混。還元。
29　黒褐色土(2.5Y3/2)　粘土。山砂少混。還元。
30　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘土。山砂・炭化物少混。
31　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘土。山砂少混。還元。
SD189 32　にぶ黄色土(2.5Y6/4)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂多混。
33　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂主体。
34　黄灰色土(2.5Y4/1)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂少混。大黄灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。やや腐食。
35　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(10Y3/1)　粘土。山砂・黄灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。還元。
SD190 36　にぶ黄色土(2.5Y6/4)　山砂。大黄灰色ｼﾙﾄ混粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
37　黒褐色土(2.5Y3/1)　ｼﾙﾄ混粘土。山砂少混。
SD191 38　灰色土(10Y4/1)　粘土。山砂少混。還元。
39　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(7.5Y3/1)　粘土。黄灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。還元。
40　黒褐色土(2.5Y3/1)　埴壌土。
41　暗青灰色土(10BG4/1)　細砂。還元。
42　灰色土(10YR6/1)　粘土。黒色粘土ﾌﾞﾛｯｸ・灰色細砂少混。還元。
43　灰色土(10Y5/1)　細砂。
SD192 44　黒色土(10YR2/1)　粘土。灰色細砂少混。還元。
45　黒褐色土(10YR3/1)　ｼﾙﾄ混粘土。黒色粘土ﾌﾞﾛｯｸ・灰白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ・灰色ﾌﾞﾛｯｸ少混。還元
。
46　褐灰色土(10YR4/1)　粘土。黒色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。灰白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。還元。
47　灰色土(7.5Y4/1)　ｼﾙﾄ混粘土。細砂混。還元。
48　黒褐色土(10YR3/1)　粘土。黒色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。灰色細砂帯状に少混。還元。
49　黒褐色土(10YR3/1)　ｼﾙﾄ混粘土。細砂混。還元。
50　褐灰色土(10YR4/1)　粘土。黒色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。還元。
51　褐灰色土(10YR4/1)　ｼﾙﾄ混粘土。黒色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。細砂混。還元。
52　褐灰色土(10YR4/1)　粘土。灰白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。還元。



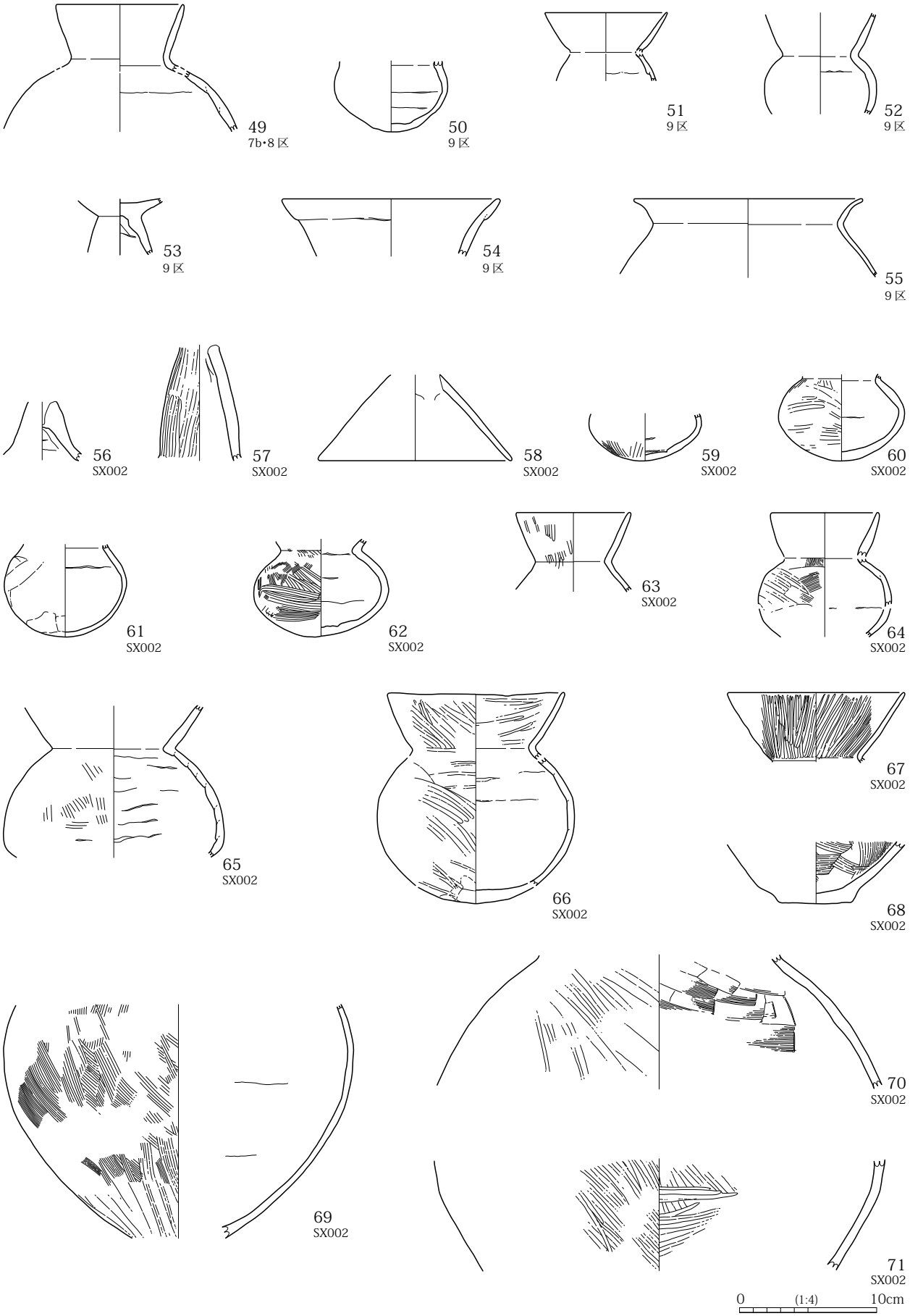
1 黄灰色土(2.5Y5/1) 埴壌土。山砂少混。
2 明黄褐色土(10YR7/6) 粘土。山砂少混。
3 灰黄褐色土(10YR5/2) 埴壌土。山砂混。
4 灰白色土(2.5Y7/1) ｼﾙﾄ混粘土。山砂混。
5 灰白色土(5Y7/1) 粘土。山砂混。還元。
6 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 埴壌土。山砂多混。大灰白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。埋め戻し土。
7 灰白色土(2.5Y7/1) ｼﾙﾄ混粘土。山砂混。還元。
8 黄灰色土(2.5Y6/1) ｼﾙﾄ混粘土。還元。山砂混。還元。
9 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘土。山砂混。
10 にぶ黄色土(2.5Y6/3) 山砂。大ｼﾙﾄ混粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
11 黄褐色土(2.5Y5/3) ｼﾙﾄ混粘土。山砂混
12 黄灰色土(2.5Y6/1) ｼﾙﾄ混粘土。山砂混。
13 ｵﾘｰﾌﾞ黄色土(5Y6/3) 山砂。道路盛土。
14 灰色土(5Y6/1) 埴壌土。山砂多混。道路盛土。
15 灰色土(7.5Y6/1) ｼﾙﾄ混粘土。山砂多混。道路側溝跡。
16 黄灰色土(2.5Y6/1) ｼﾙﾄ混粘土。山砂多混。道路盛土。
17 灰白色土(5Y7/2) 粘土。道路盛土。
18 灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(7.5Y6/2) ｼﾙﾄ混粘土。山砂多混。道路側溝跡。
19 黄灰色土(2.5Y4/1) ｼﾙﾄ混粘土。山砂・細砂混。
20 灰色土(7.5Y6/1) ｼﾙﾄ混粘土。山砂混。還元。
21 灰色土(7.5Y5/1) ｼﾙﾄ混粘土。山砂多混。還元。
22 灰色土(7.5Y6/1) ｼﾙﾄ混粘土。山砂多混。還元。
23 灰色土(7.5Y6/1) ｼﾙﾄ混粘土。山砂多混。還元。
24 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。山砂少混。還元。やや腐食。
25 褐灰土(10YR6/1) 粘土。山砂少混。
26 灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(7.5Y6/2) 粘土。山砂少混。
27 灰色土(7.5Y5/1) 粘土。山砂少混。大山砂ﾌﾞﾛｯｸ混。
28 灰色土(7.5Y6/1) 山砂。
29 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。山砂少混。やや腐食。
SD191 30 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘土。山砂・炭粒少混。
31 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。大黒褐色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
32 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。細砂・小炭粒少混。やや腐食。
33 黄灰色土(2.5Y4/1) ｼﾙﾄ。細砂・炭粒多混。未分解植物片少混。
34 灰色土(5Y4/1) 粘土。山砂・炭粒少混。
35 灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(5Y5/2) 粘土。山砂混。炭粒少混。
36 灰色土(5Y4/1) 粘土。炭粒少混。
37 灰色土(5Y5/1) 粘土。大黒色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
38 黄灰色土(2.5Y6/1) ｼﾙﾄ質埴壌土。未分解植物片少混。
39 黄灰色土(2.5Y6/1) 細砂。未分解植物片・大黒色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
40 黄灰色土(2.5Y4/1) 細砂。大黒色重埴土・灰黄色重埴土ﾌﾞﾛｯｸ多混。未分解植物片少混。
41 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 細砂。
42 灰色土(5Y4/1) 粘土。還元。

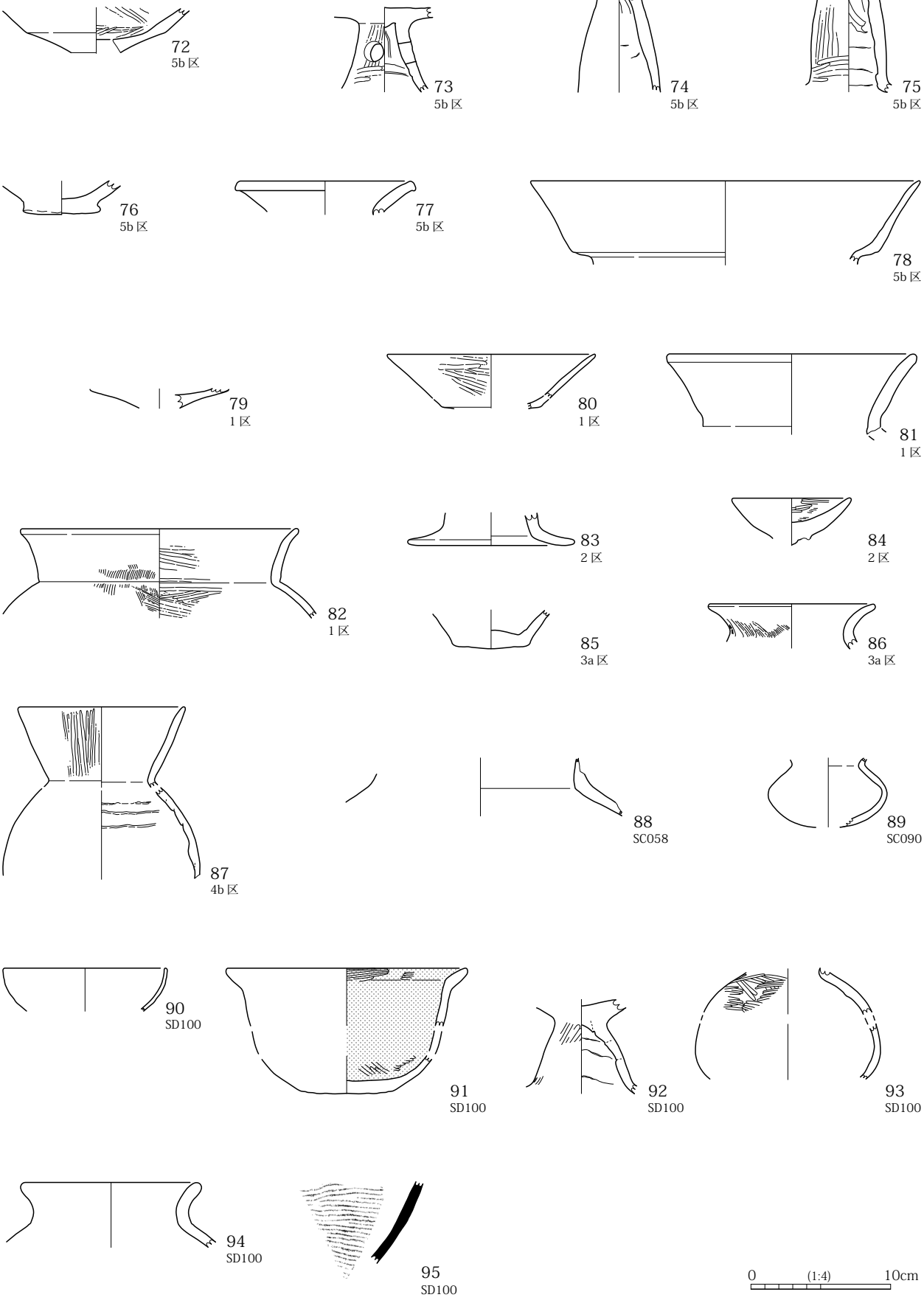
図版 84　弥生時代の土器 1



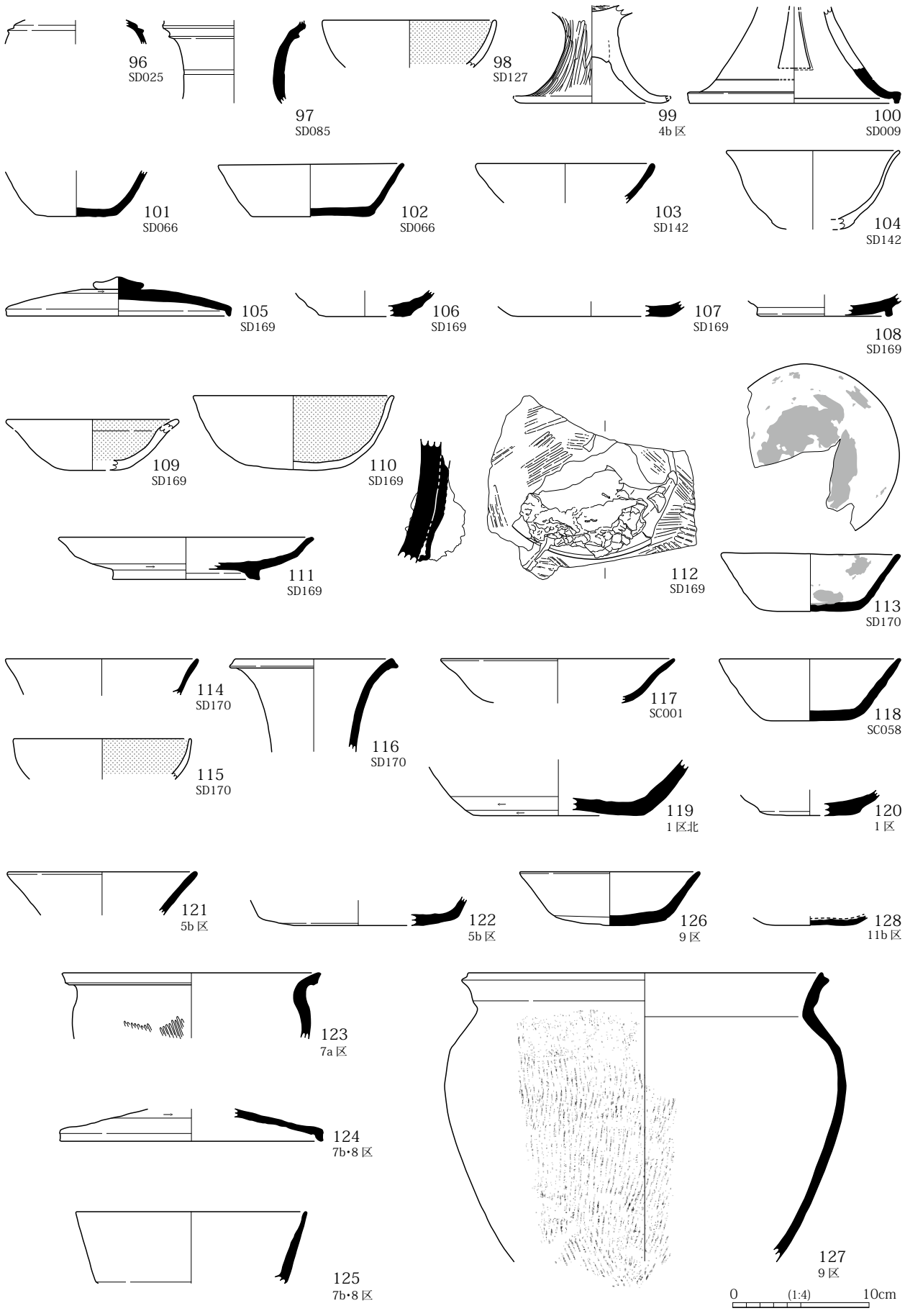

23
SD187
24
SC061
25
SC061
26
SC065
27
SX002
28
SX002
29
SX002
30
SD086
31
1 区
32
1 区
33
1 区
34
1 区西
35
9 区
36
1 区
37
5b 区
38
1 区
39
SC038
40
SC038
41
SC038
42
SK547
43
SK549
44
SK565
45
3b･4a 区
46
3b･4a 区
47
3b･4a 区
48
3b･4a 区
0
(1:4)
10cm

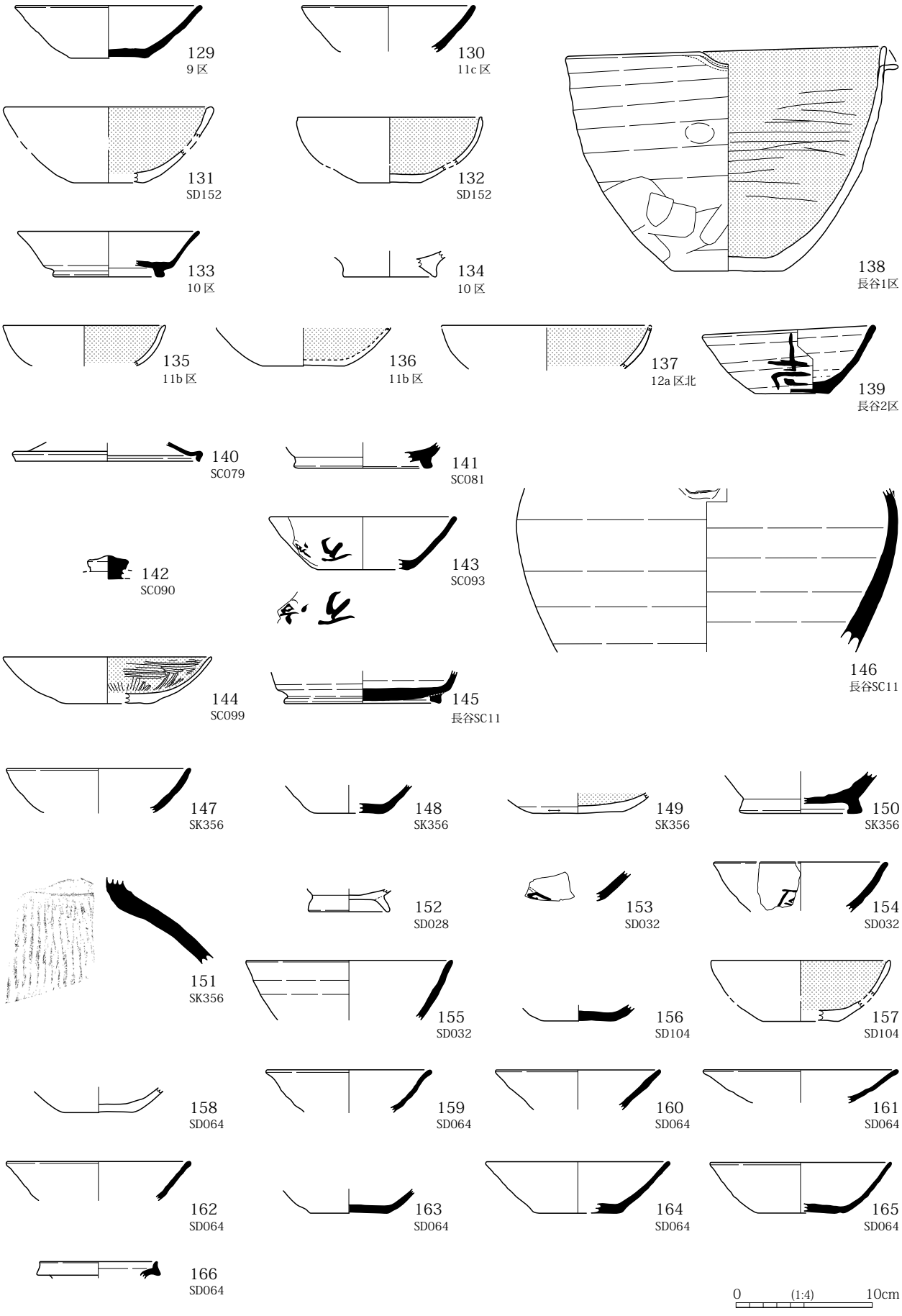
図版 86　古墳時代の土器 2



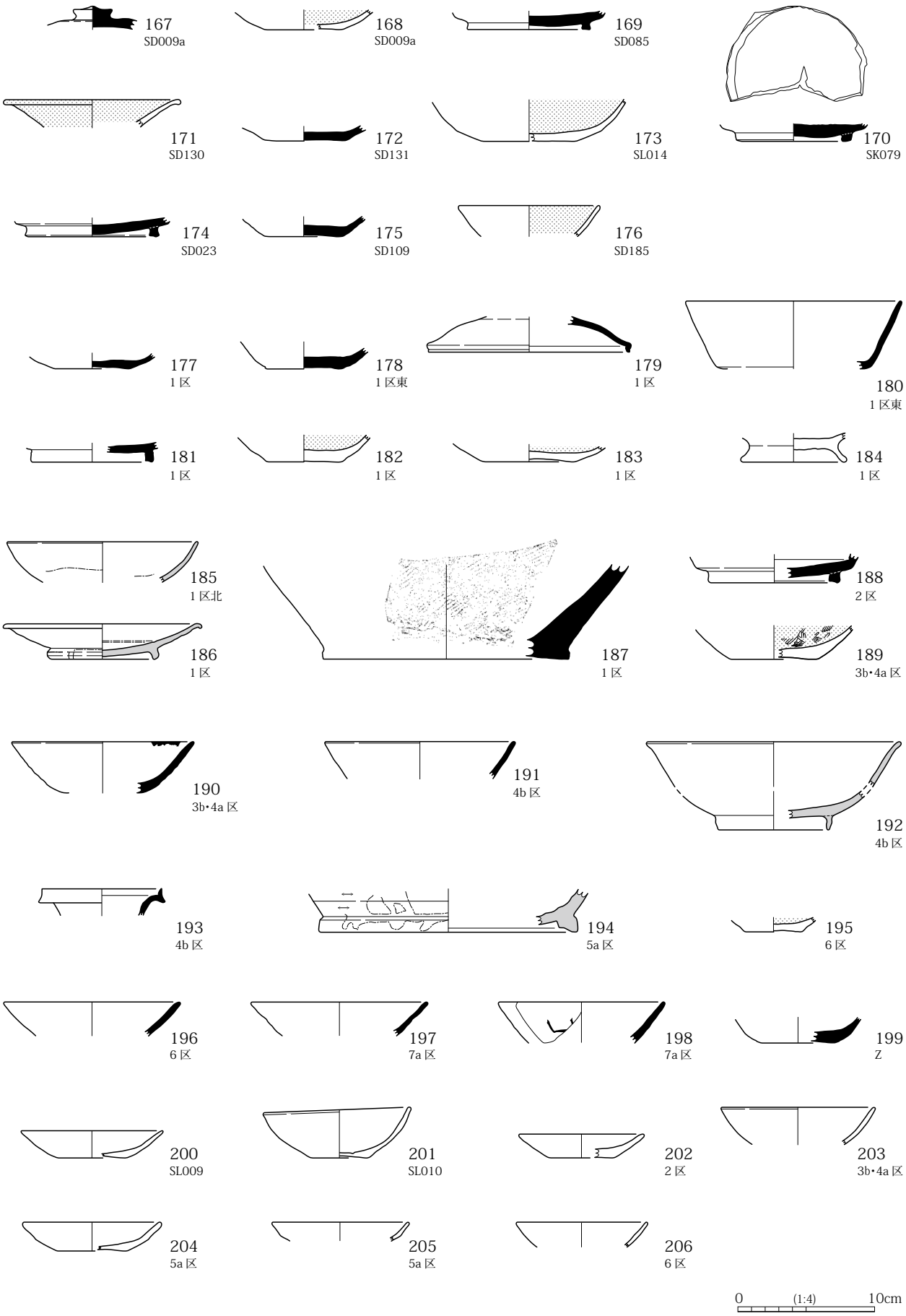

72
5b 区
73
5b 区
74
5b 区
75
5b 区
76
5b 区
77
5b 区
78
5b 区
79
1 区
80
1 区
81
1 区
82
1 区
83
2 区
84
2 区
85
3a 区
86
3a 区
87
4b 区
88
SC058
89
SC090
90
SD100
91
SD100
92
SD100
93
SD100
94
SD100
95
SD100
0
(1:4)
10cm

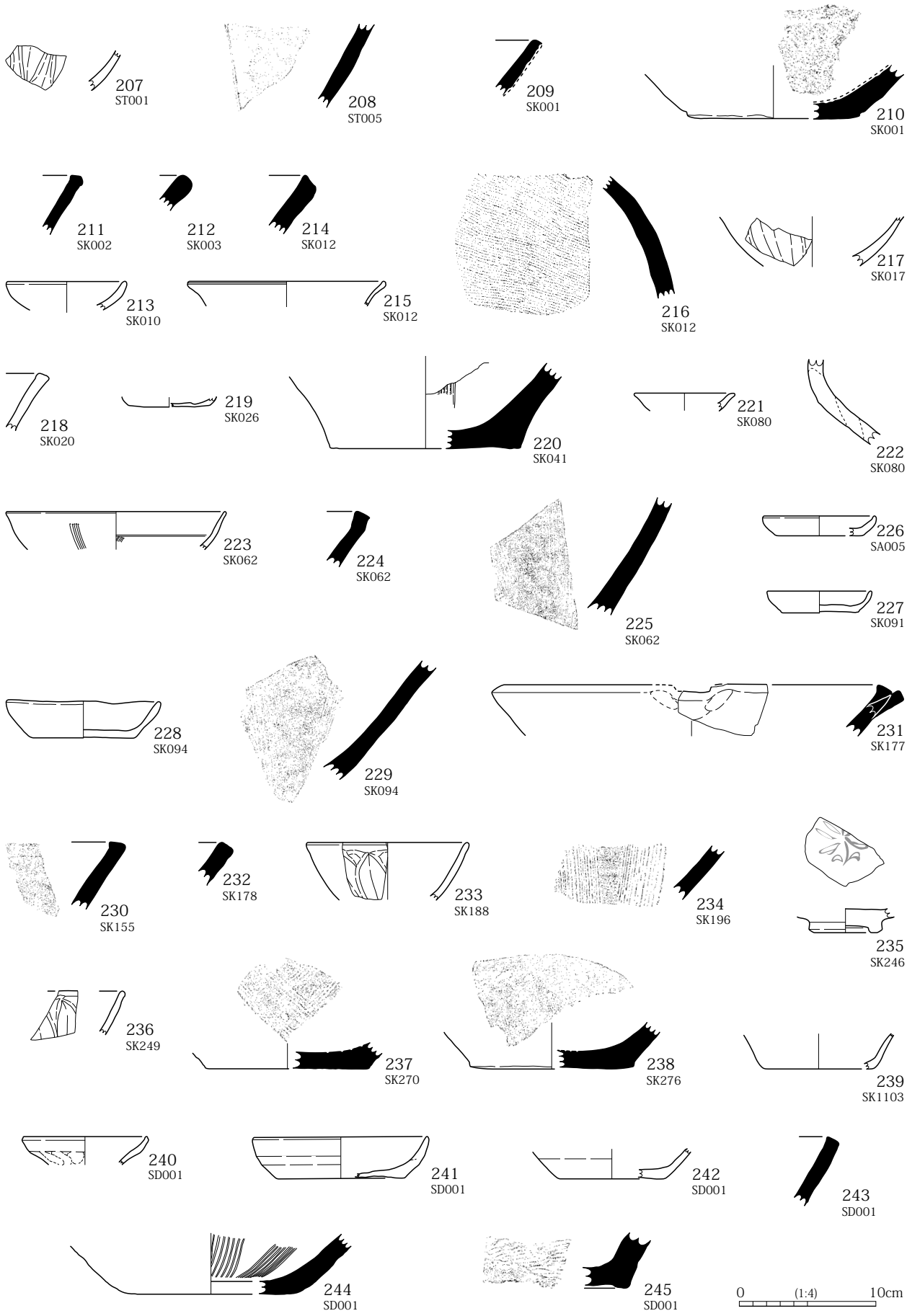
図版 88　古代の土器 1


96
SD025
97
SD085
98
SD127
99
4b 区
100
SD009
101
SD066
102
SD066
103
SD142
104
SD142
105
SD169
106
SD169
107
SD169
108
SD169
109
SD169
110
SD169
111
SD169
112
SD169
113
SD170
114
SD170
115
SD170
116
SD170
117
SC001
118
SC058
119
1 区北
120
1 区
121
5b 区
122
5b 区
126
9 区
128
11b 区
123
7a 区
124
7b･8 区
125
7b･8 区
127
9 区
0
(1:4)
10cm

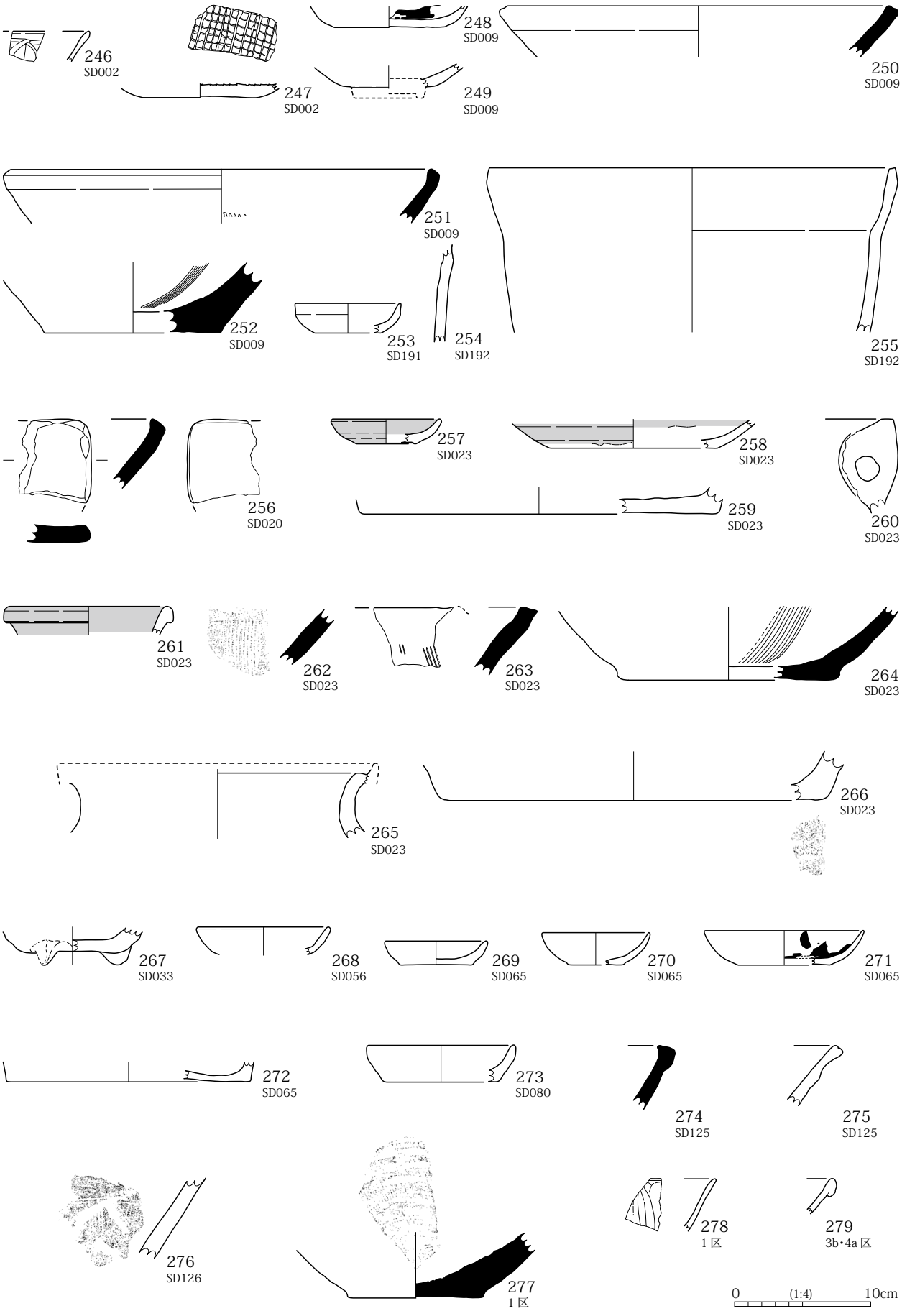

129
9 区
130
11c 区
131
SD152
132
SD152
133
10 区
134
10 区
138
長谷1区
135
11b 区
136
11b 区
137
12a 区北
139
長谷2区
140
SC079
141
SC081
142
SC090
143
SC093
146
長谷SC11
144
SC099
145
長谷SC11
147
SK356
148
SK356
149
SK356
150
SK356
151
SK356
152
SD028
153
SD032
154
SD032
155
SD032
156
SD104
157
SD104
158
SD064
159
SD064
160
SD064
161
SD064
162
SD064
163
SD064
164
SD064
165
SD064
166
SD064
0
(1:4)
10cm

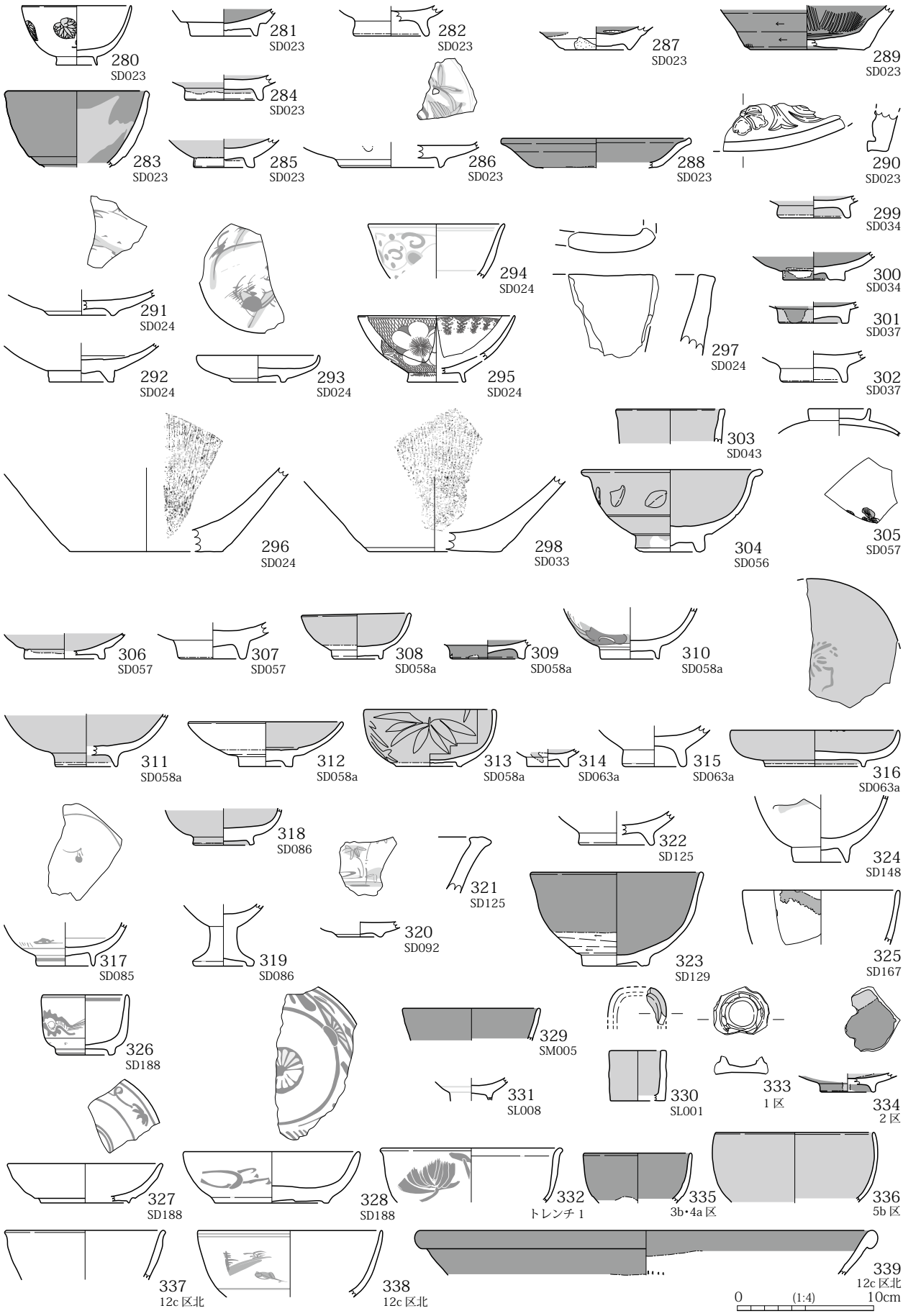
図版 90　古代の土器 3


167
SD009a
168
SD009a
169
SD085
171
SD130
172
SD131
173
SL014
170
SK079
174
SD023
175
SD109
176
SD185
177
1 区
178
1 区東
179
1 区
180
1 区東
181
1 区
182
1 区
183
1 区
184
1 区
185
1 区北
186
1 区
187
1 区
188
2 区
189
3b・4a 区
190
3b・4a 区
191
4b 区
192
4b 区
193
4b 区
194
5a 区
195
6 区
196
6 区
197
7a 区
198
7a 区
199
Z
200
SL009
201
SL010
202
2 区
203
3b・4a 区
204
5a 区
205
5a 区
206
6 区
0
(1:4)
10cm


207
ST001
208
ST005
209
SK001
210
SK001
211
SK002
212
SK003
214
SK012
213
SK010
215
SK012
216
SK012
217
SK017
218
SK020
219
SK026
220
SK041
221
SK080
222
SK080
223
SK062
224
SK062
225
SK062
226
SA005
227
SK091
228
SK094
229
SK094
231
SK177
230
SK155
232
SK178
233
SK188
234
SK196
235
SK246
236
SK249
237
SK270
238
SK276
239
SK1103
240
SD001
241
SD001
242
SD001
243
SD001
244
SD001
245
SD001
0
(1:4)
10cm

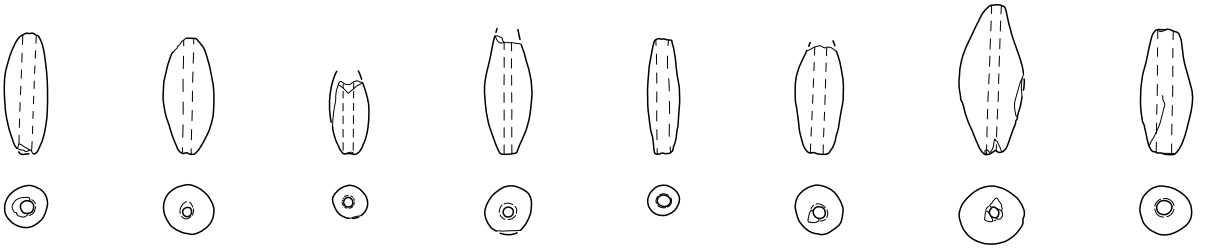
図版 92　中近世の土器・陶器・磁器２



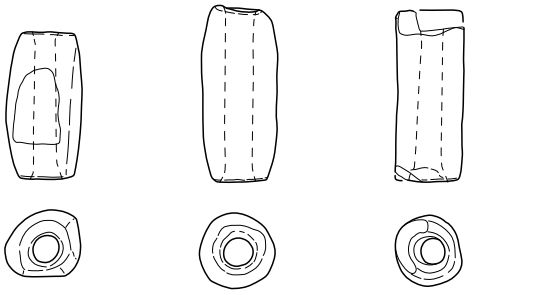

280 SD023
281 SD023
282 SD023
287 SD023
289 SD023
284 SD023
283 SD023
285 SD023
286 SD023
288 SD023
290 SD023
299 SD034
294 SD024
300 SD034
291 SD024
301 SD037
297 SD024
292 SD024
293 SD024
295 SD024
302 SD037
303 SD043
296 SD024
298 SD033
304 SD056
305 SD057
306 SD057
307 SD057
308 SD058a
309 SD058a
310 SD058a
311 SD058a
312 SD058a
313 SD058a
314 SD063a
315 SD063a
316 SD063a
318 SD086
322 SD125
324 SD148
321 SD125
320 SD092
317 SD085
319 SD086
323 SD129
325 SD167
326 SD188
329 SM005
331 SL008
330 SL001
333 1 区
334 2 区
327 SD188
328 SD188
332 トレンチ 1
335 3b・4a 区
336 5b 区
337 12c 区北
338 12c 区北
339 12c 区北
0 (1:4) 10cm

図版 94　土製品・玉類

土錘



1 SK062　2 SK177　3 SD001　4 SD001　5 SD002　6 SD088　7 1区　8 1区

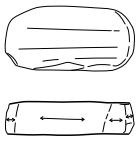


9 SK356　10 SK356　11 SK356

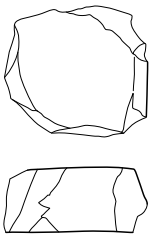
ミニチュア土器

12 SX002

土製円盤



13 SD086

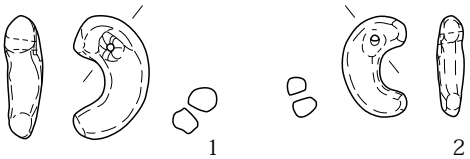


14 SD188

0 (1:3) 10cm
（1～11）

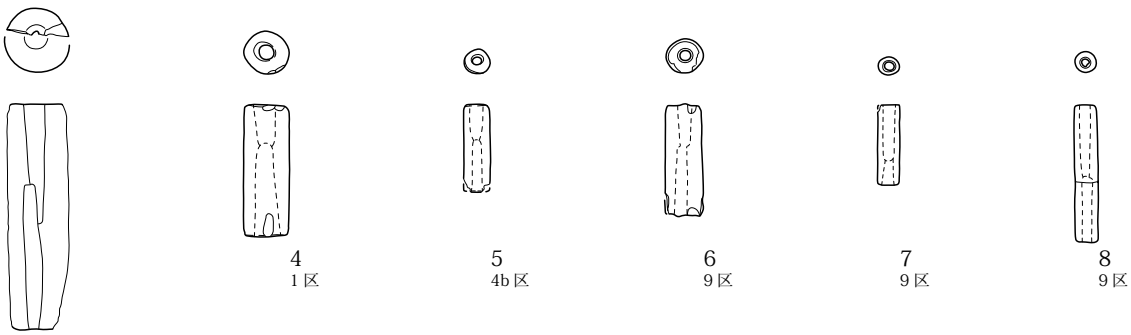
0 (1:2) 5cm
（12～14）

勾玉



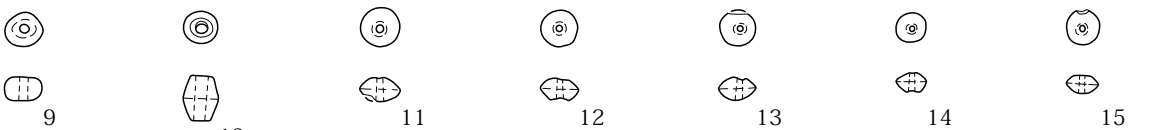
1 SD100　2 9区

管玉



3 SD100　4 1区　5 4b区　6 9区　7 9区　8 9区

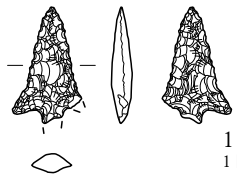
小玉　　数珠玉



9 5b区　10 9区　11 SM005　12 SM005　13 SM005　14 SM005　15 SM005

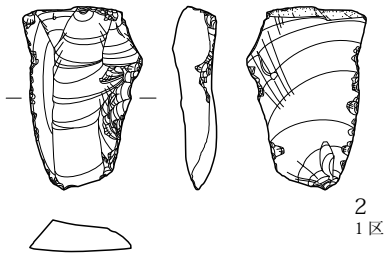
0 (2:3) 5cm

打製石鏃



1
1区

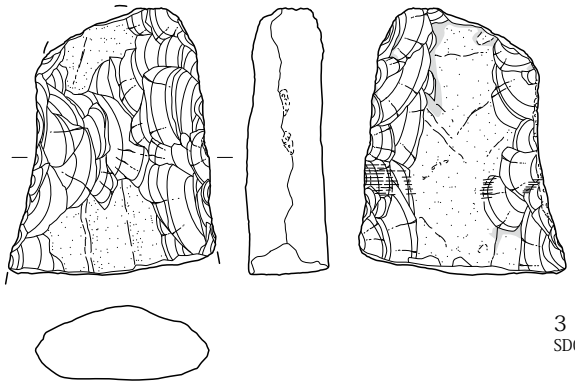
削器



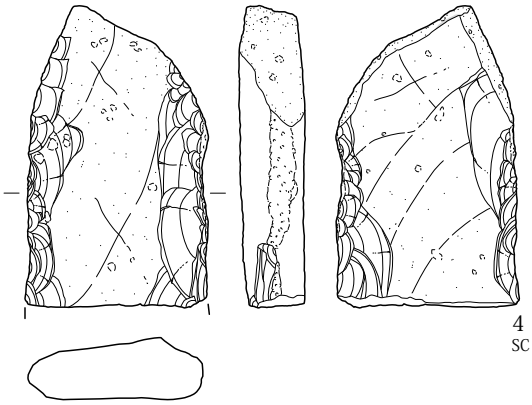
2
1区

0　(2:3)　5cm

打製石斧

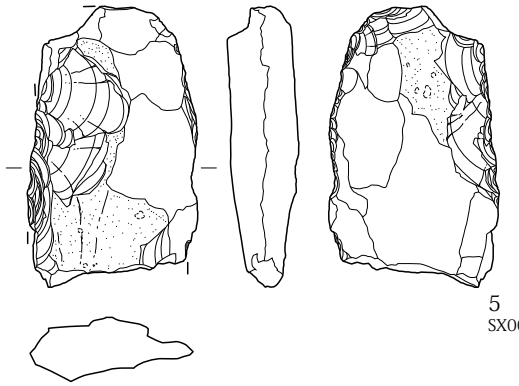


3
SD023

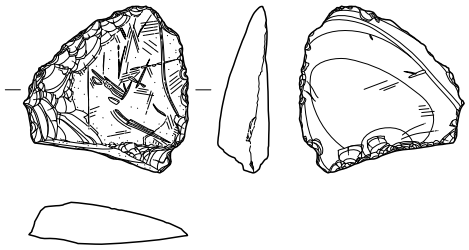


4
SC101

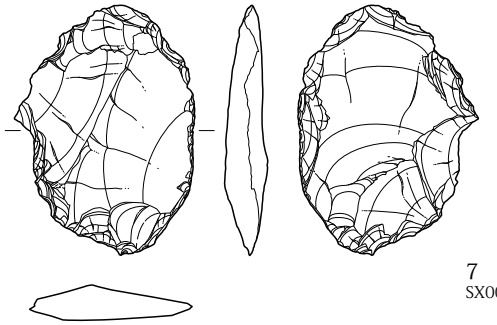
打製大型刃器



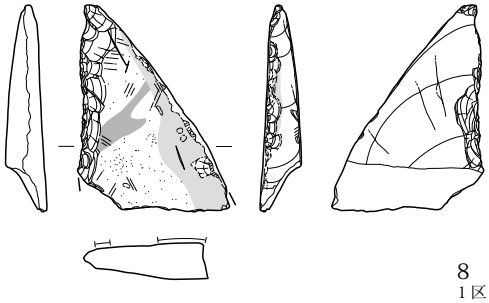
5
SX002



6
SD126



7
SX002

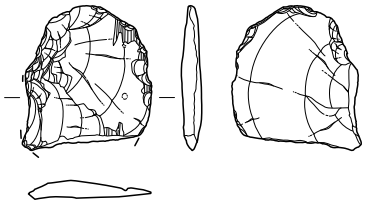


8
1区

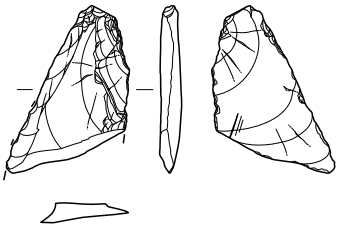
0　(1:3)　10cm

図版 96　石器 2

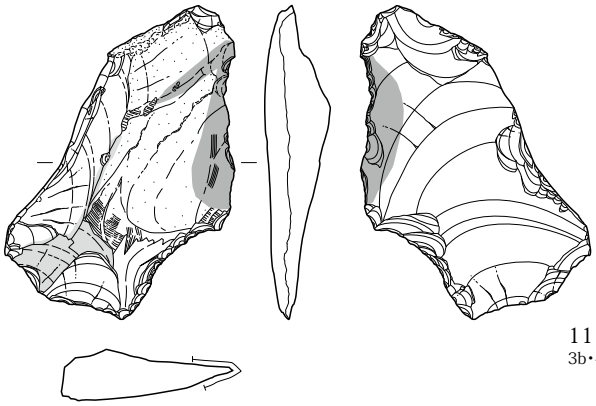
打製大型刃器



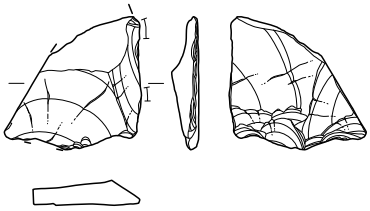
9
1 区



10
3b･4a 区

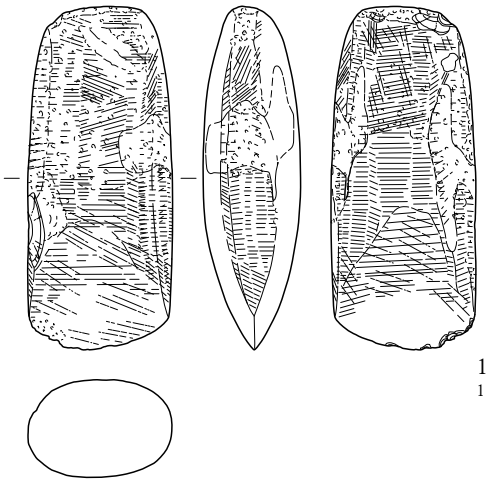


11
3b･4a 区



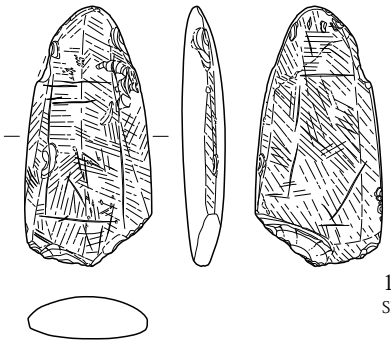
12
7b･8 区

太型蛤刃石斧



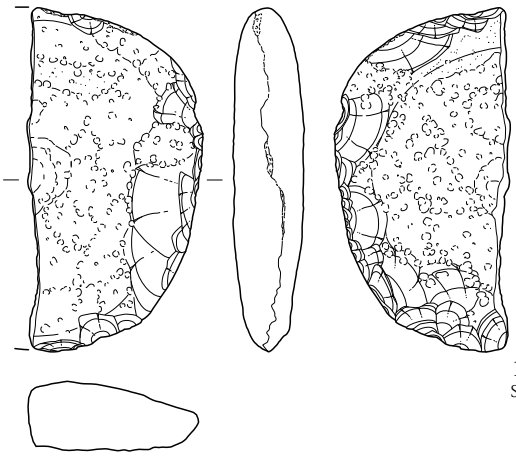
13
1 区

磨製定角式石斧



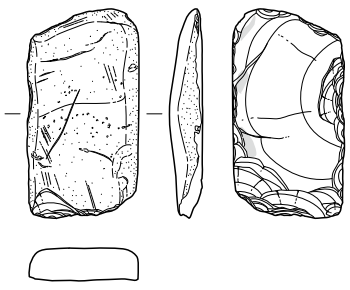
14
SD043

環状石斧未成品



15
SD100

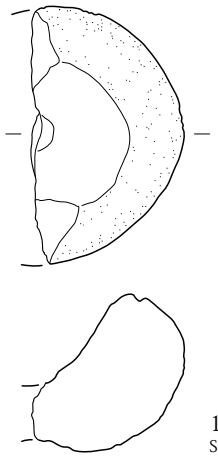
石器未成品



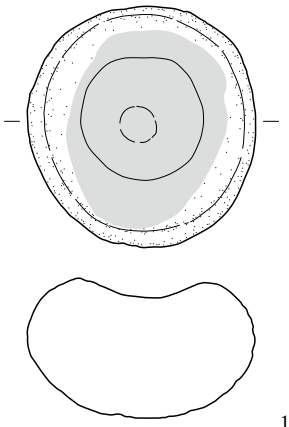
16
SD023

0　(1:3)　10cm

凹石

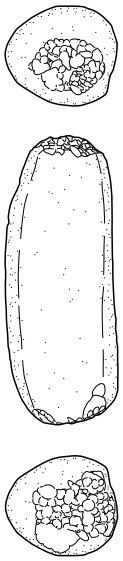


17
SK017

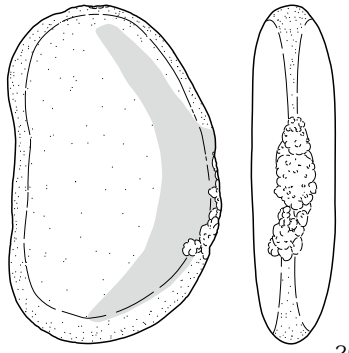


18
SD009

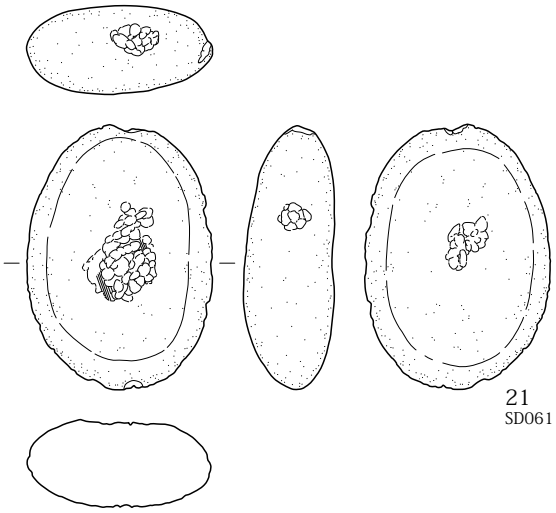
敲石



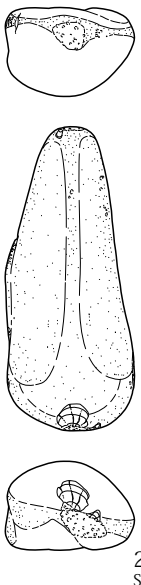
19
SD001



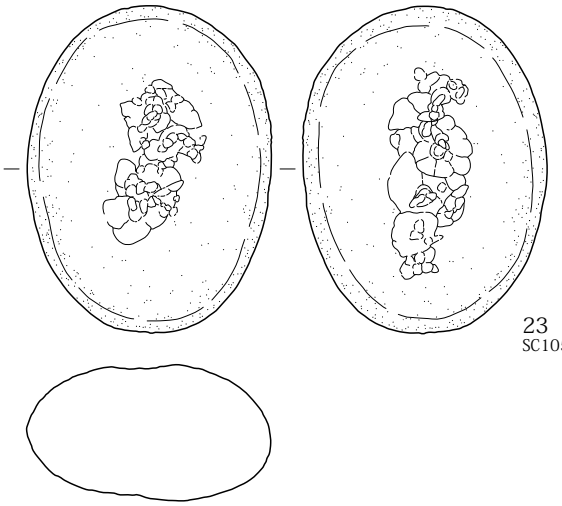
20
SD061



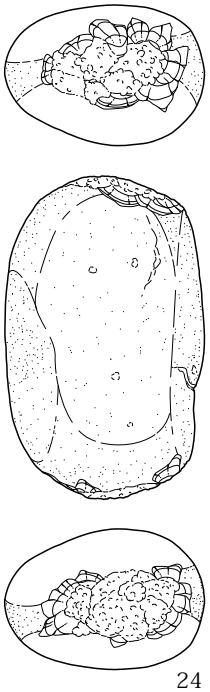
21
SD061



22
SD154



23
SC105

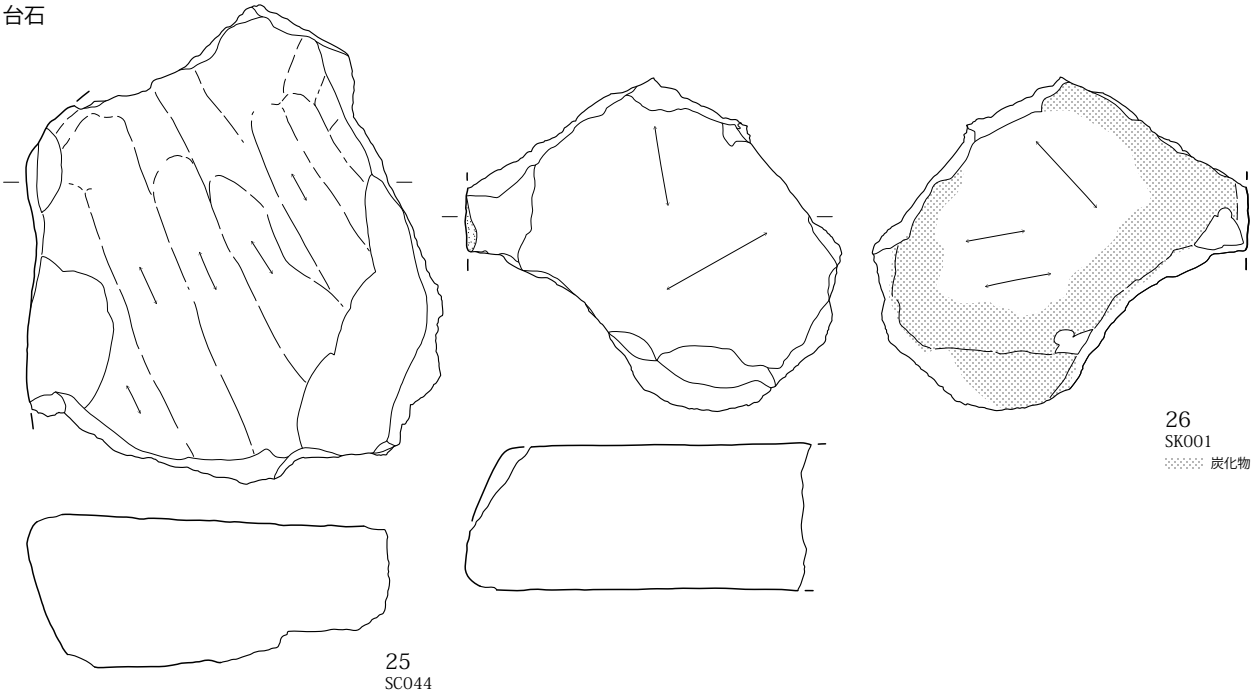


24
9 区

0　(1:3)　10cm

図版 98　石器 4

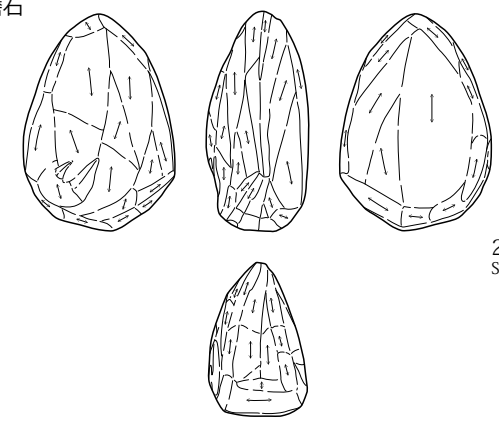
台石



25
SC044

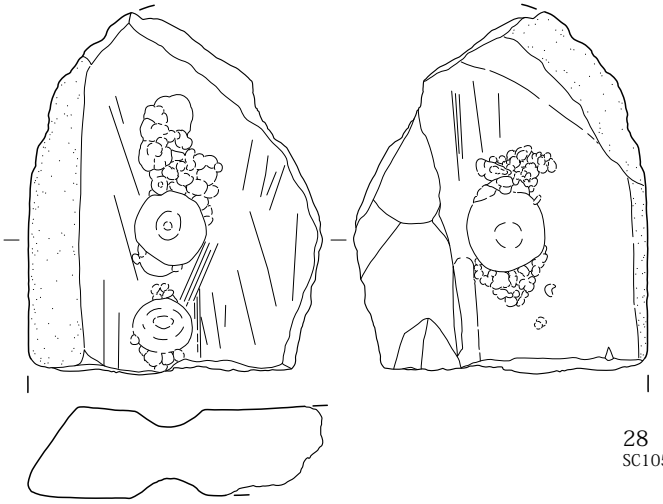
26
SK001
炭化物

磨石



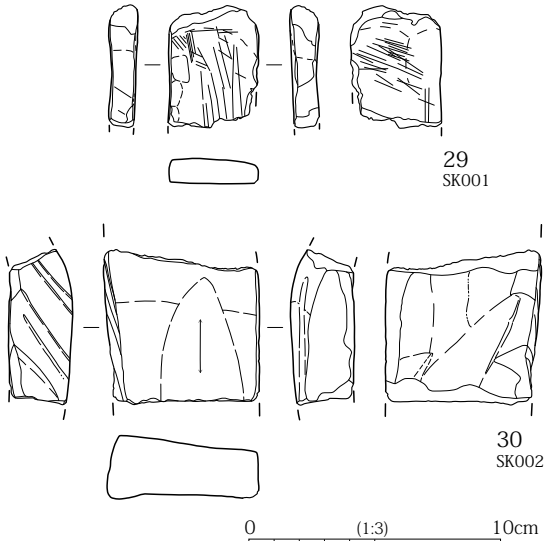
27
SD061

石皿



28
SC105

砥石

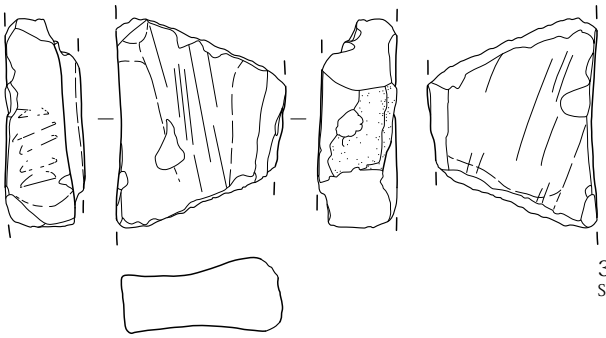


29
SK001

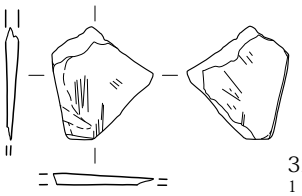
30
SK002

0　(1:3)　10cm

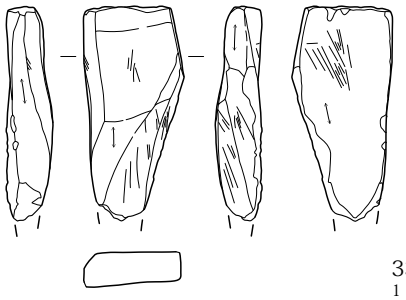
砥石



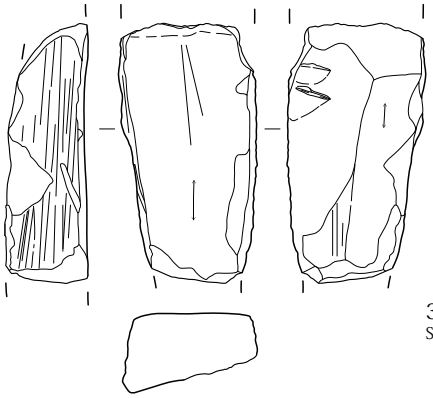
31
SD147



32
1 区

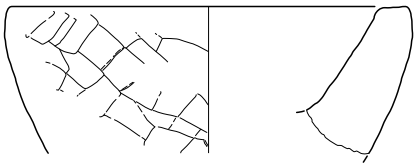


33
1 区

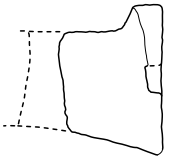


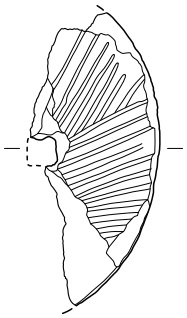
34
SD190

石臼・つき臼



35
SD129

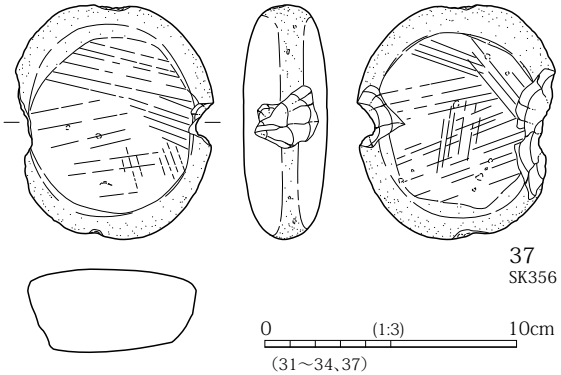




36
SD190

0　(1:6)　20cm
(35、36)

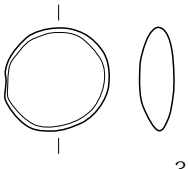
石錘



37
SK356

0　(1:3)　10cm
(31～34、37)

碁石

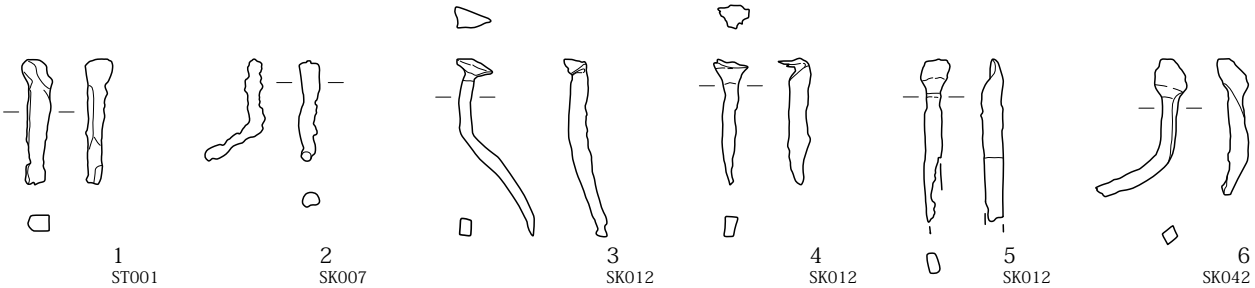


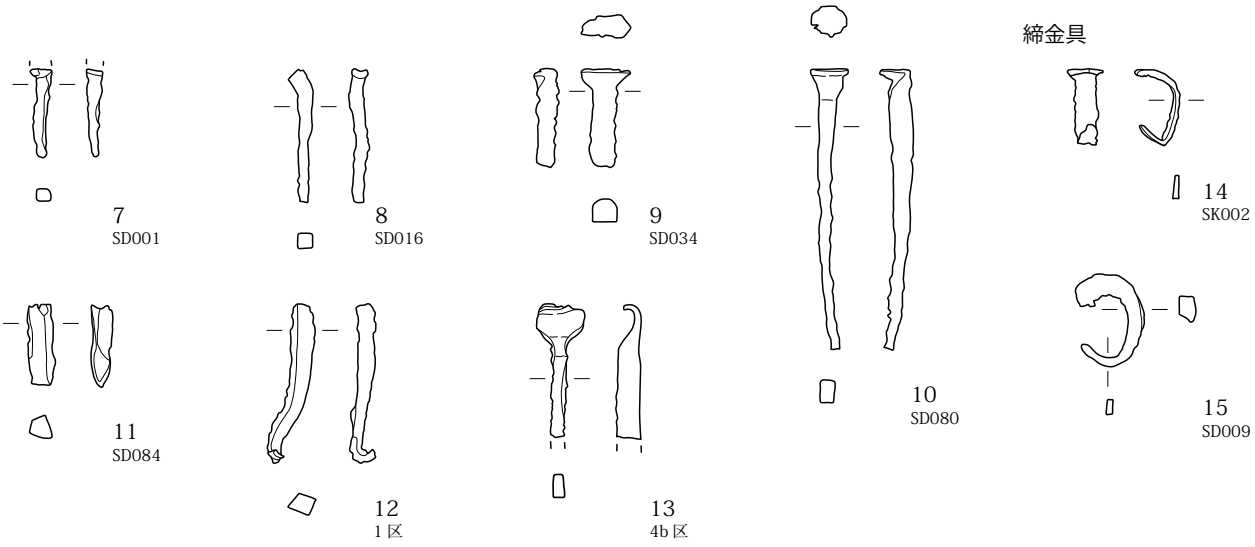
38
4b 区

0　(2:3)　5cm
(38)

図版 100　金属製品 1　鉄製品

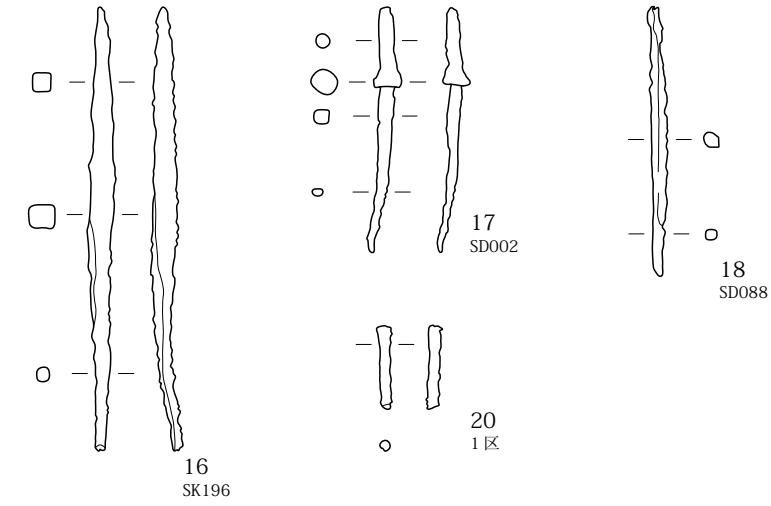
釘



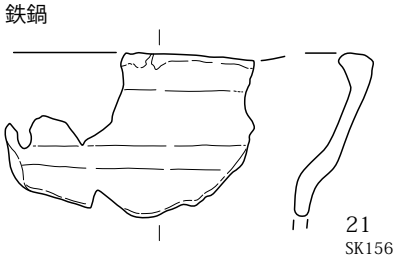


締金具

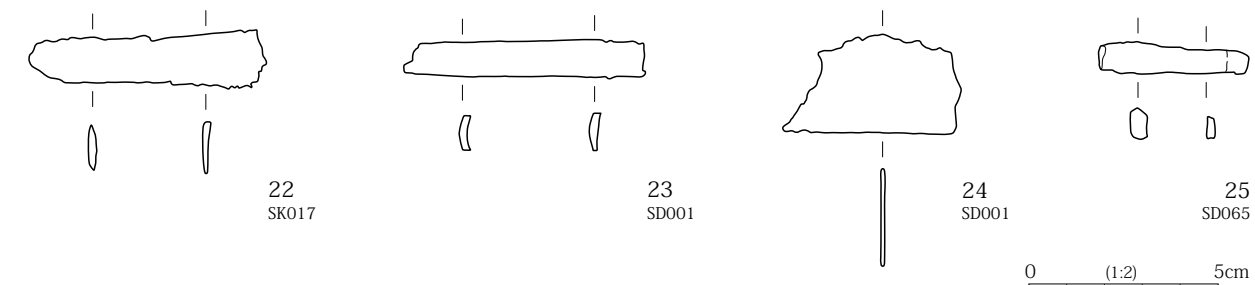
鉄鏃



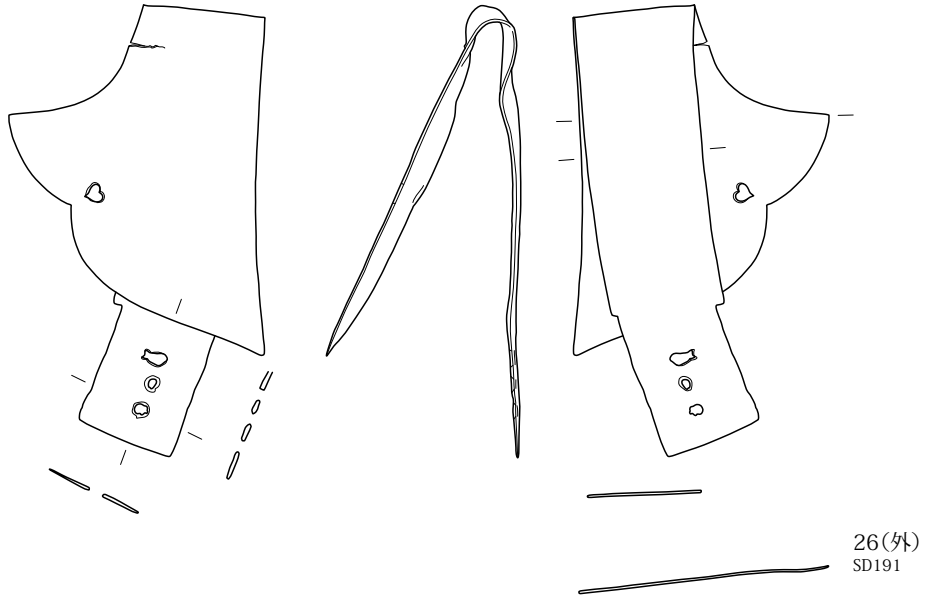
鉄鍋



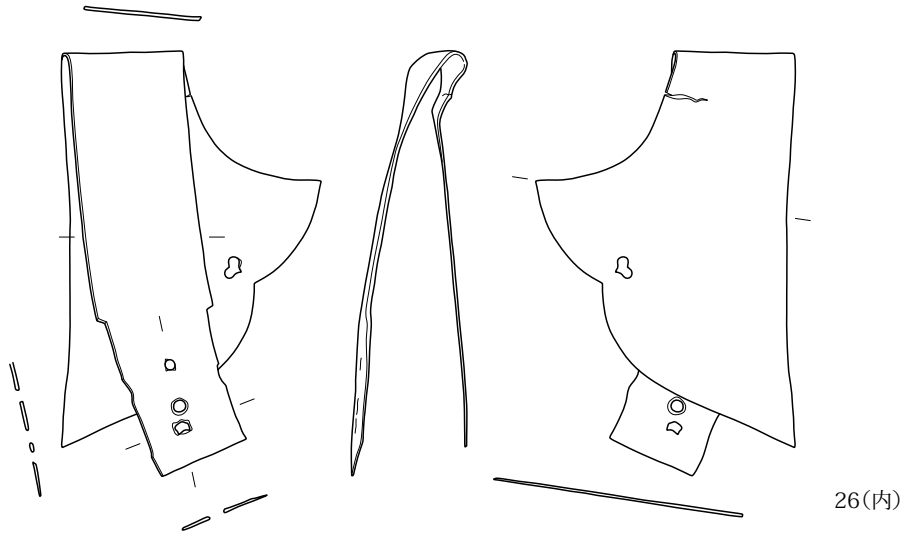
刀子・刃物



鍬形兜前立



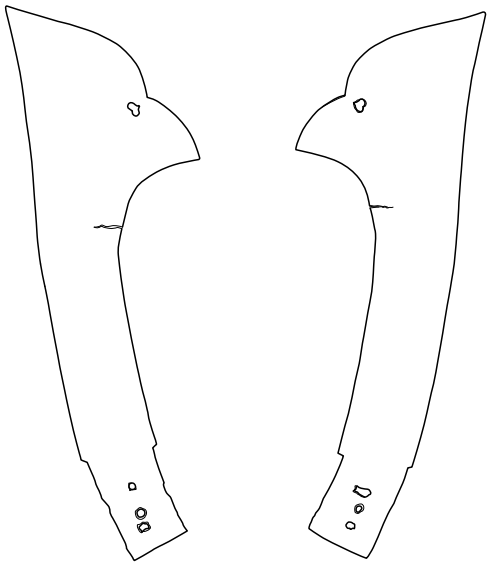
26（外）
SD191



26（内）

0 (1:2) 5cm

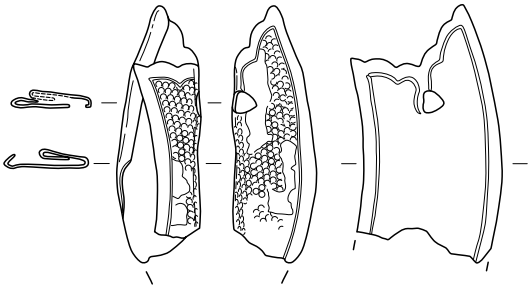
鍬形兜前立復元図



0 (1:3) 10cm

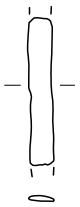
図版 102　金属製品３　銅製品

飾り金具

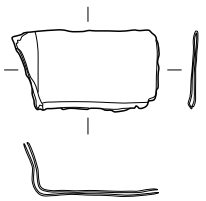


27
復元模式図　SD138

不明銅製品



28
SD017

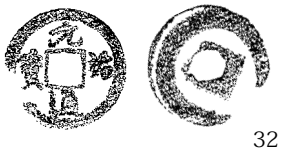


29
SC111

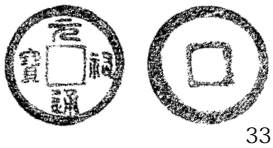
銭貨

30
SK001

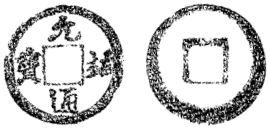
31
SK004



32
SK005

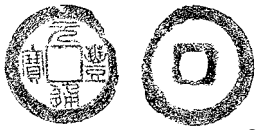


33
SK041

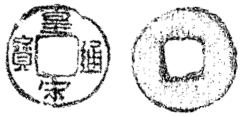


34
SK041

35
SK055



36
SK269



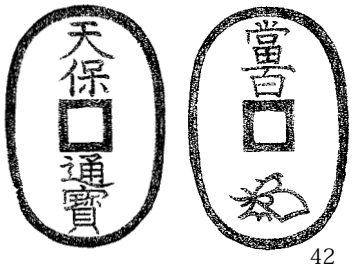
37
SK273

38
SD009

39
SD080

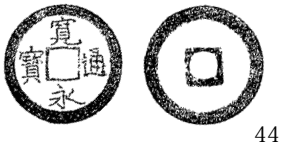
40
SM005

41
1区

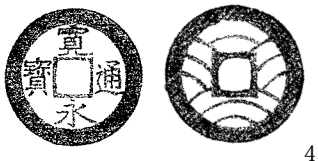


42
SD086

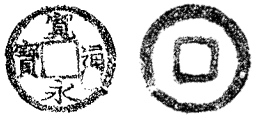
43
SD087



44
SD188



45
12c区



46
12c区

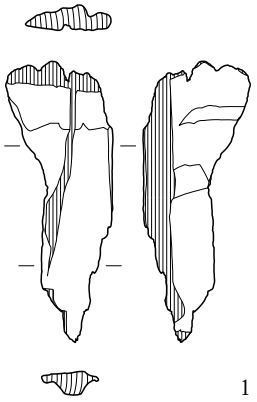
47
4b区

48
SK011

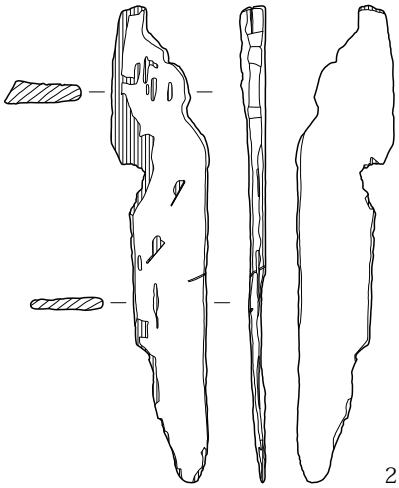
49
SL013

0　(2:3)　5cm

農具

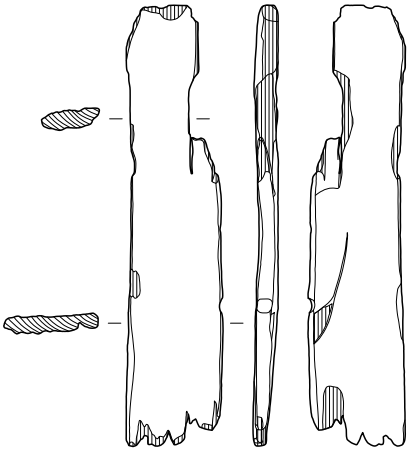


1
SC063



2
SC089

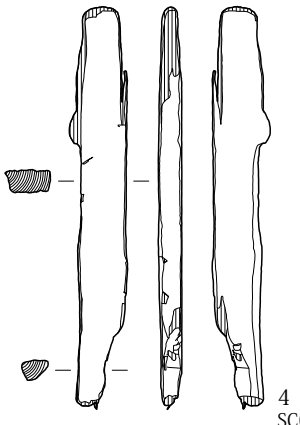
板材



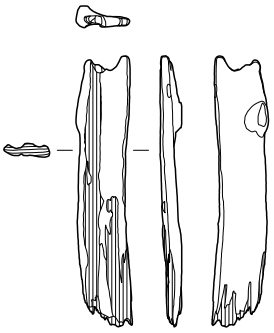
3
SC089

0　(1:6)　20cm
(1～3)

建築部材



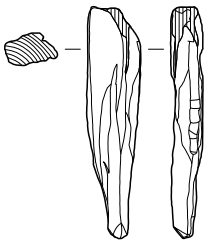
4
SC089



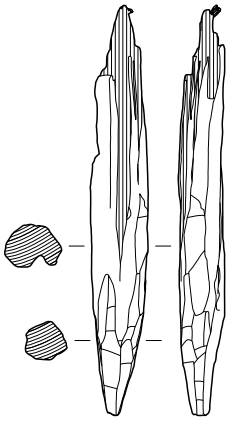
5
SC101

0　(1:12)　40cm
(4,5)

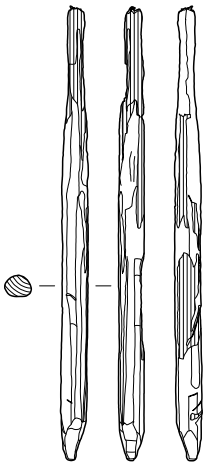
杭



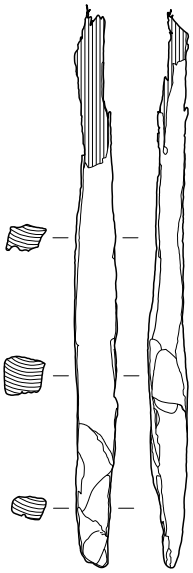
6
SC061・
062



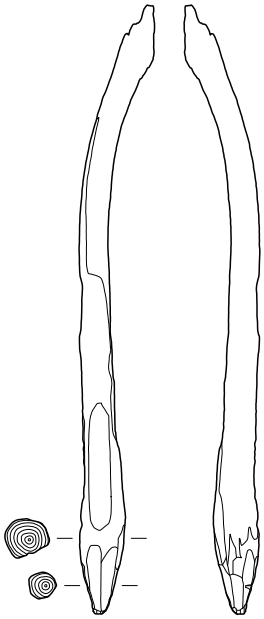
7
SC061・
062



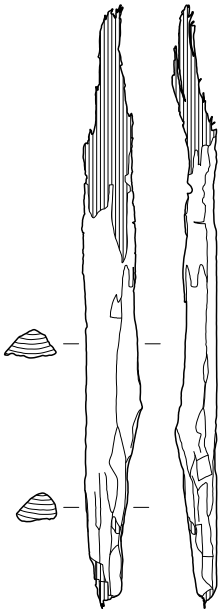
8
SC061



9
SC061



10
SC069

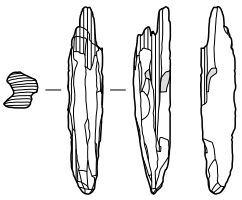


11
SC062

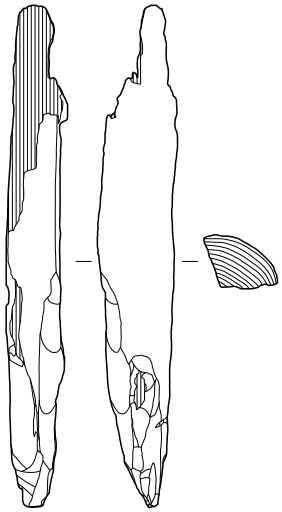
0　(1:8)　20cm
(6～11)

図版 104　弥生時代の木製品２

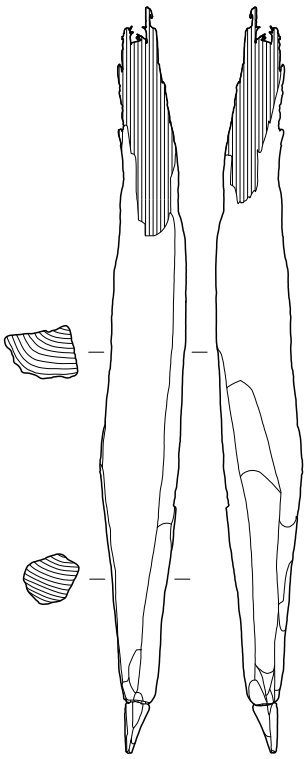
杭



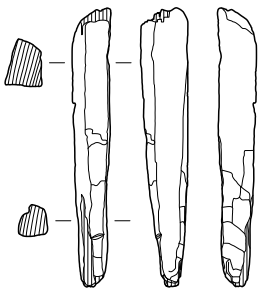
12
SC062



13
SC062

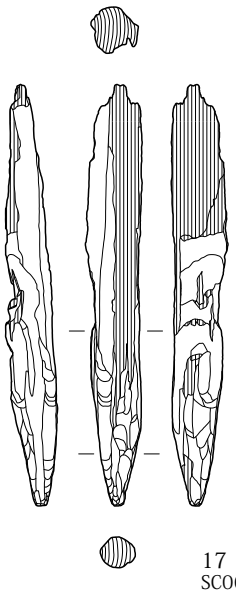


14
SC062・065

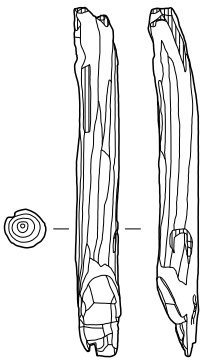


15
SC063

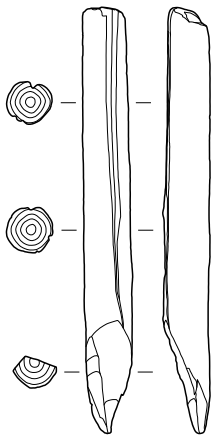
16
SC063



17
SC065



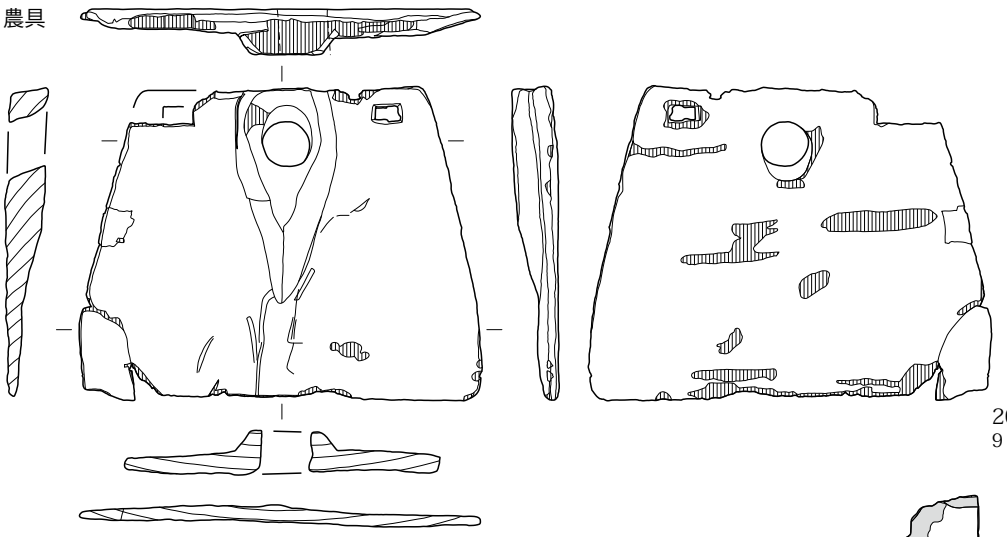
18
SC067



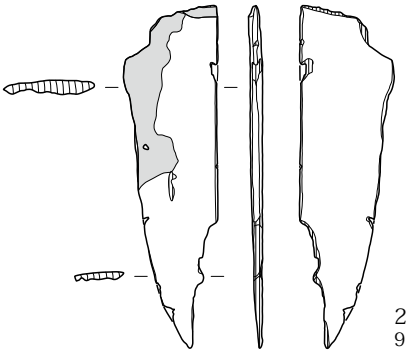
19
SC067

0　(1:8)　20cm

農具



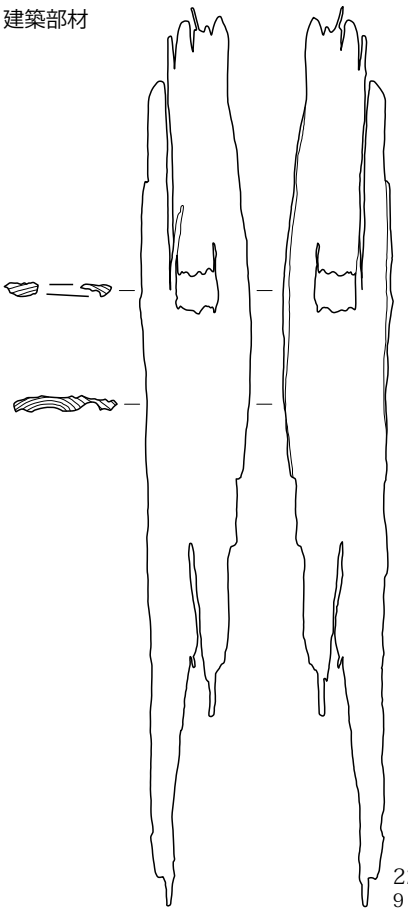
20
9 区 SX002



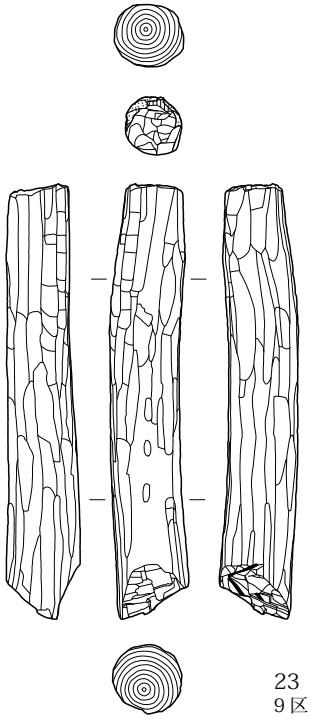
21
9 区 SX002

0　(1:6)　20cm
（20、21）

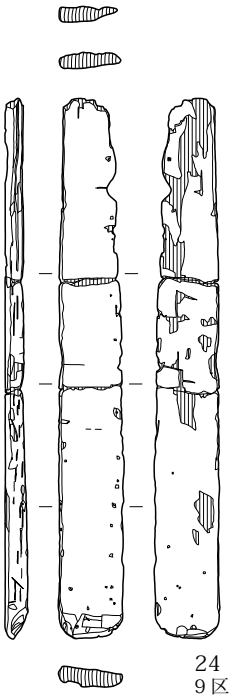
建築部材



22
9 区 SX002



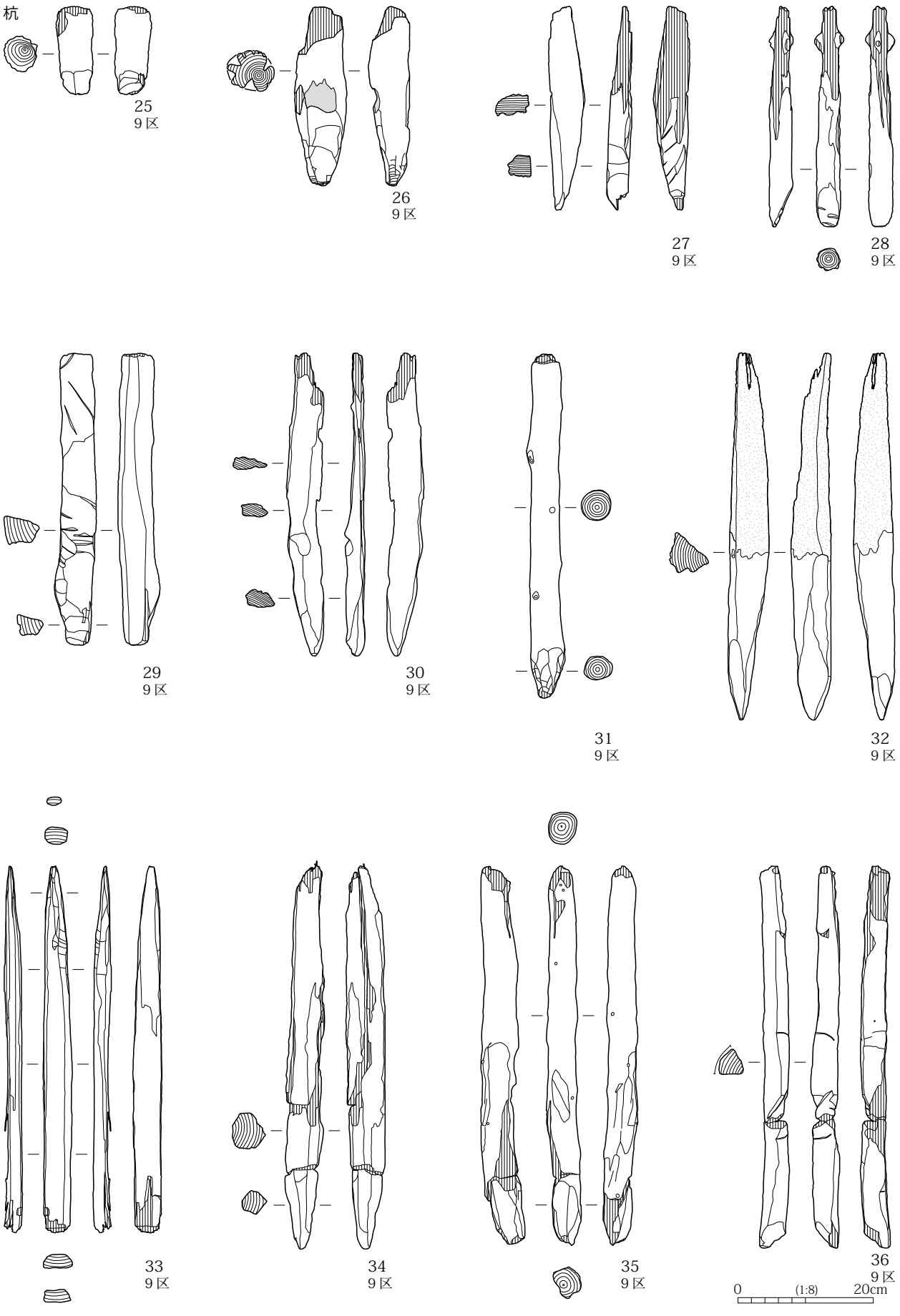
23
9 区 SX002
■ 虫の跡か



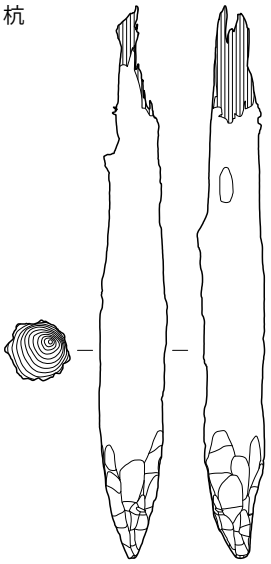
24
9 区 SX002

0　(1:12)　40cm
（22～24）

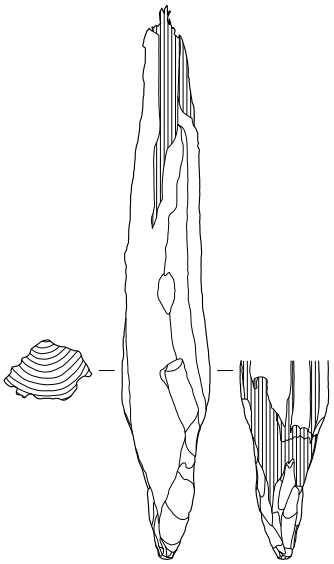
図版 106　古墳時代の木製品２



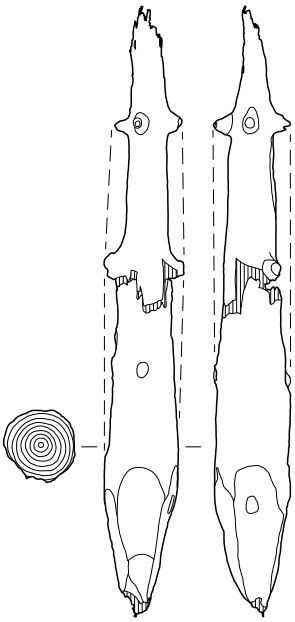
杭



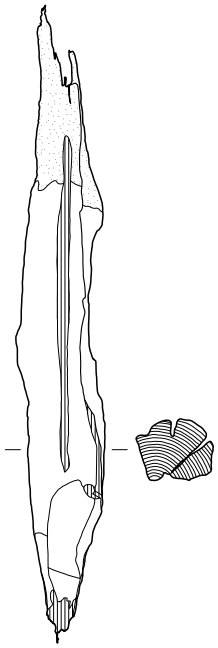
37
9 区



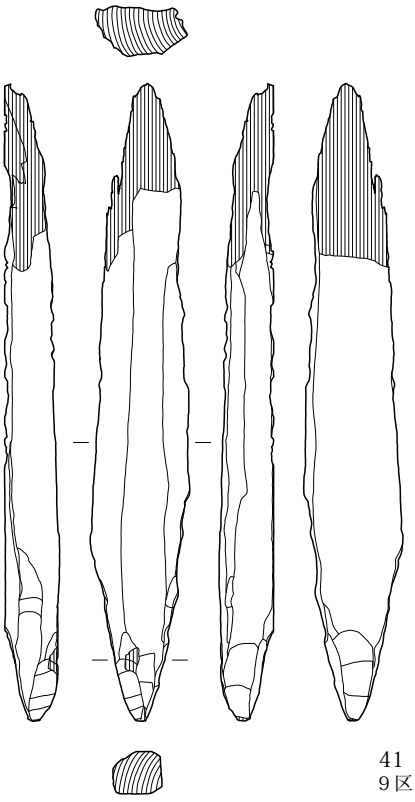
38
9 区



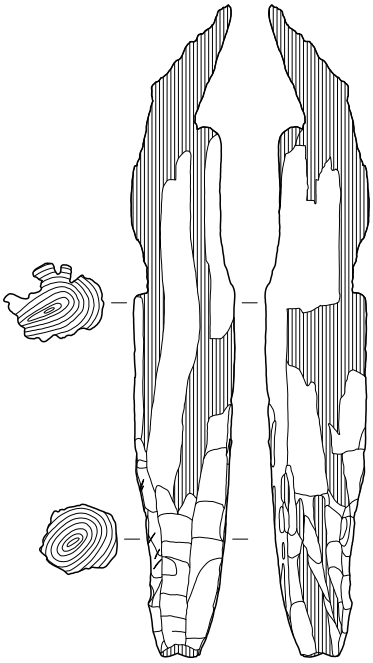
39
9 区



40
9 区



41
9 区

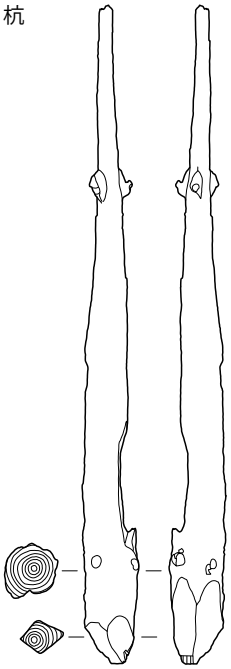


42
9 区

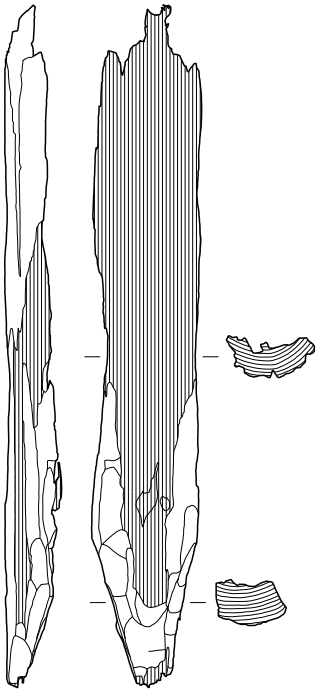
0 (1:8) 20cm

図版 108　古墳時代の木製品４

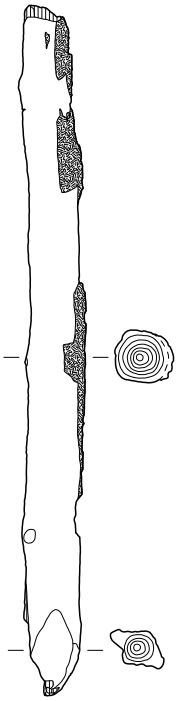
杭



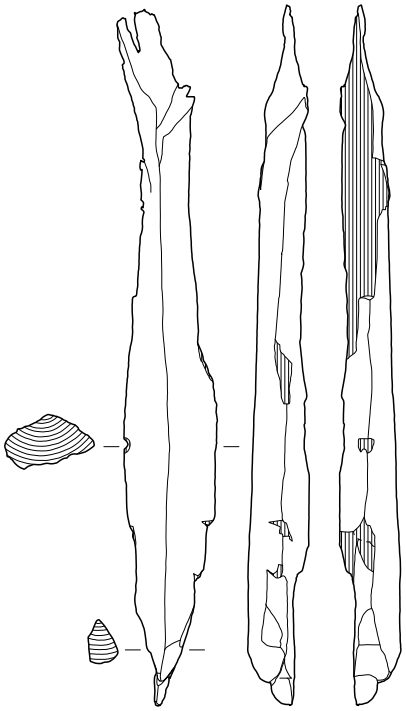
43
9 区



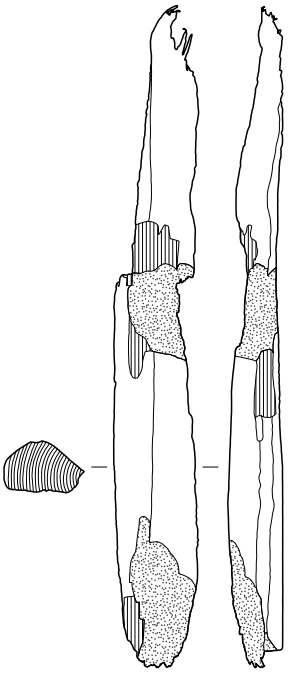
44
9 区



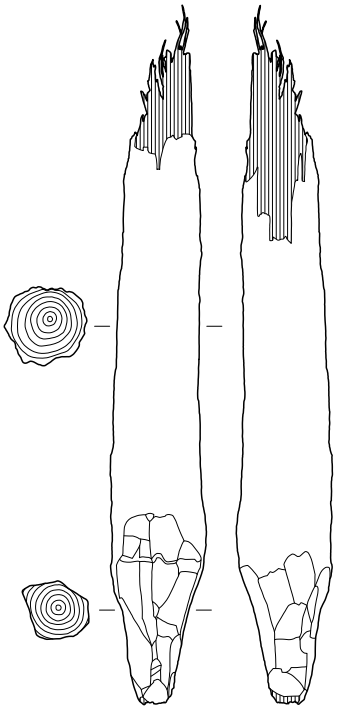
45
9 区



46
9 区



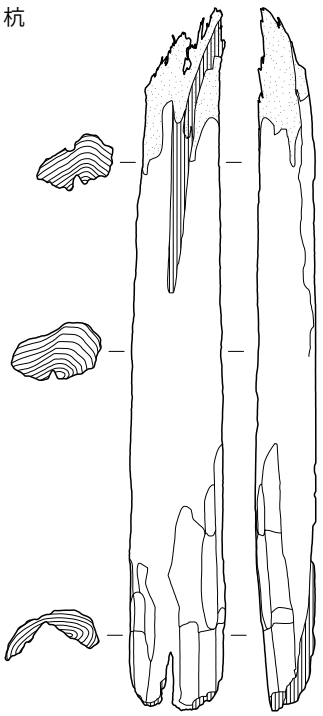
47
9 区



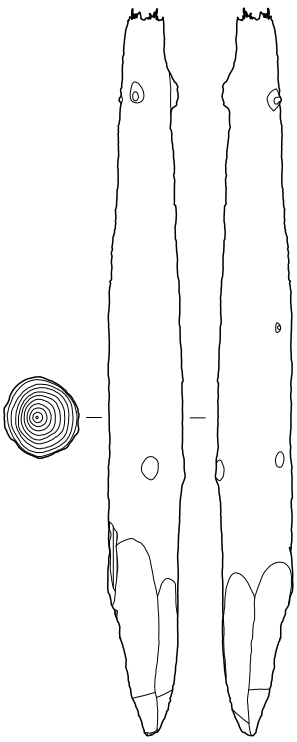
48
9 区

0　(1:8)　20cm

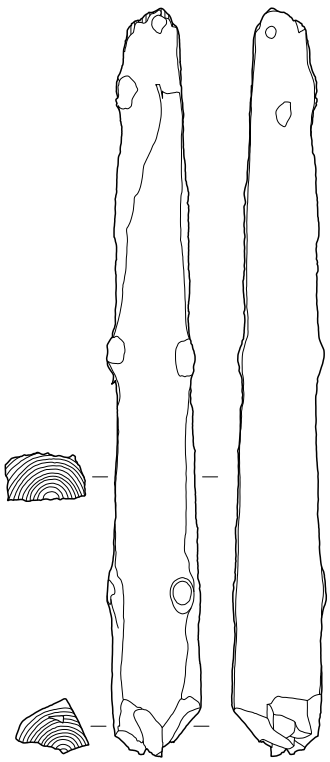
杭



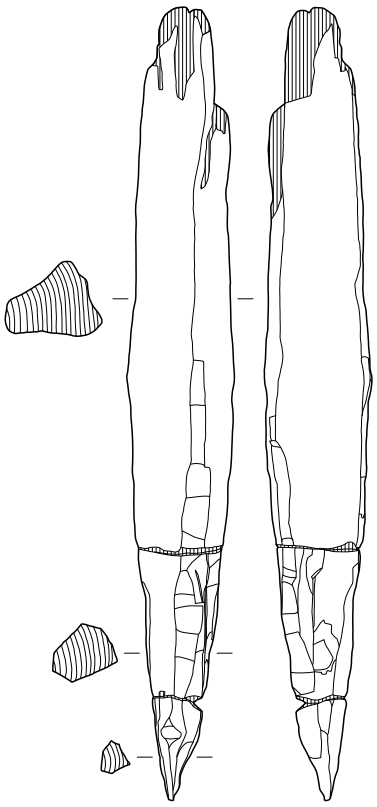
49
9区



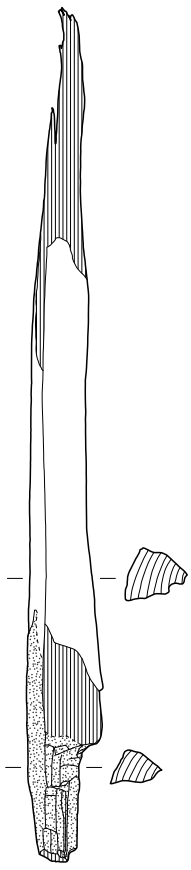
50
9区



51
9区



52
9区

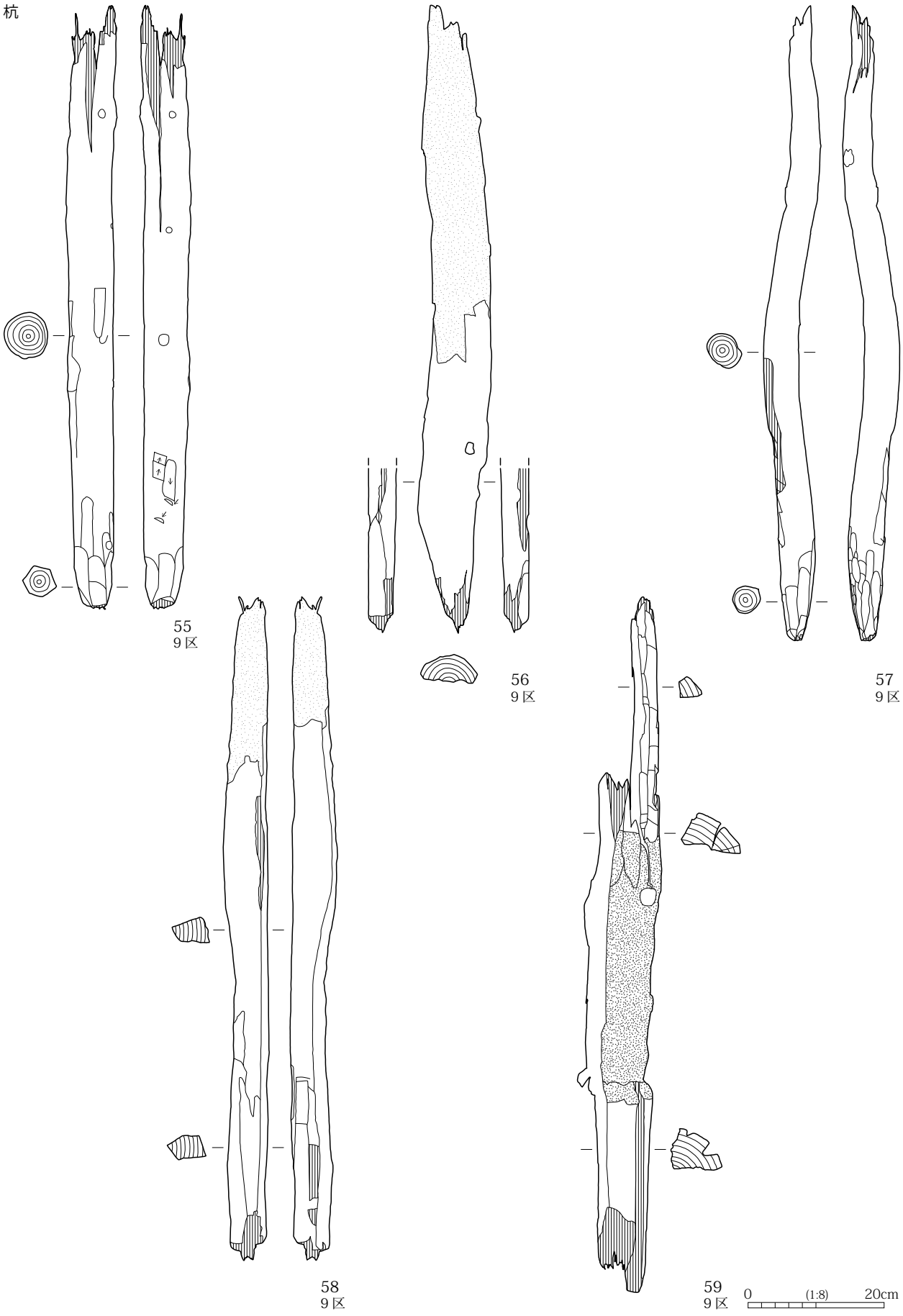


53
9区

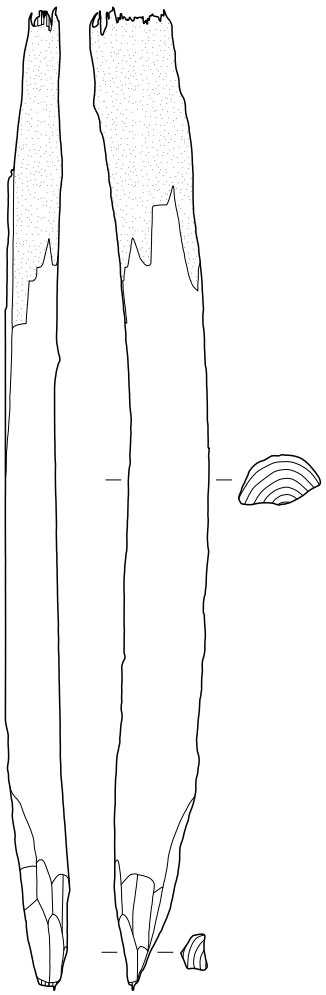
54
9区

0　(1:8)　20cm

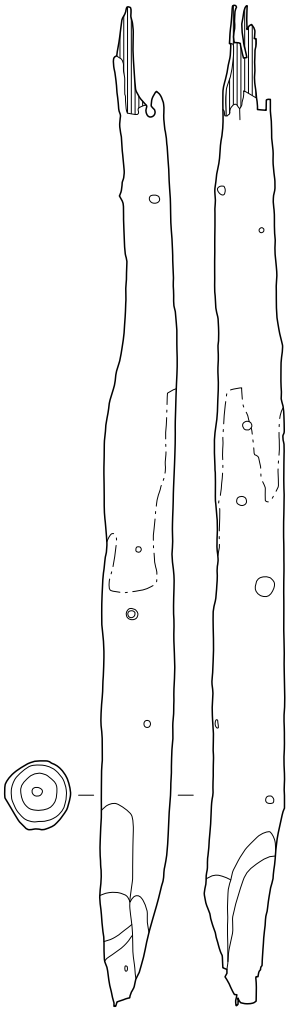
図版 110　古墳時代の木製品６



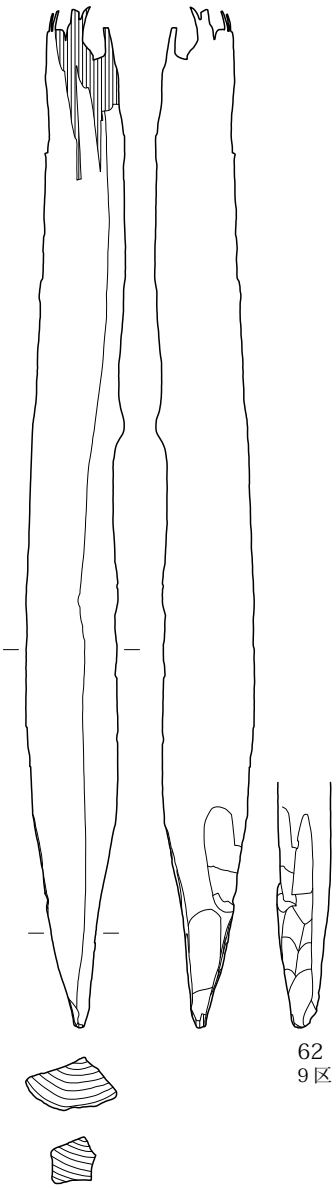
杭



60
9 区



61
9 区

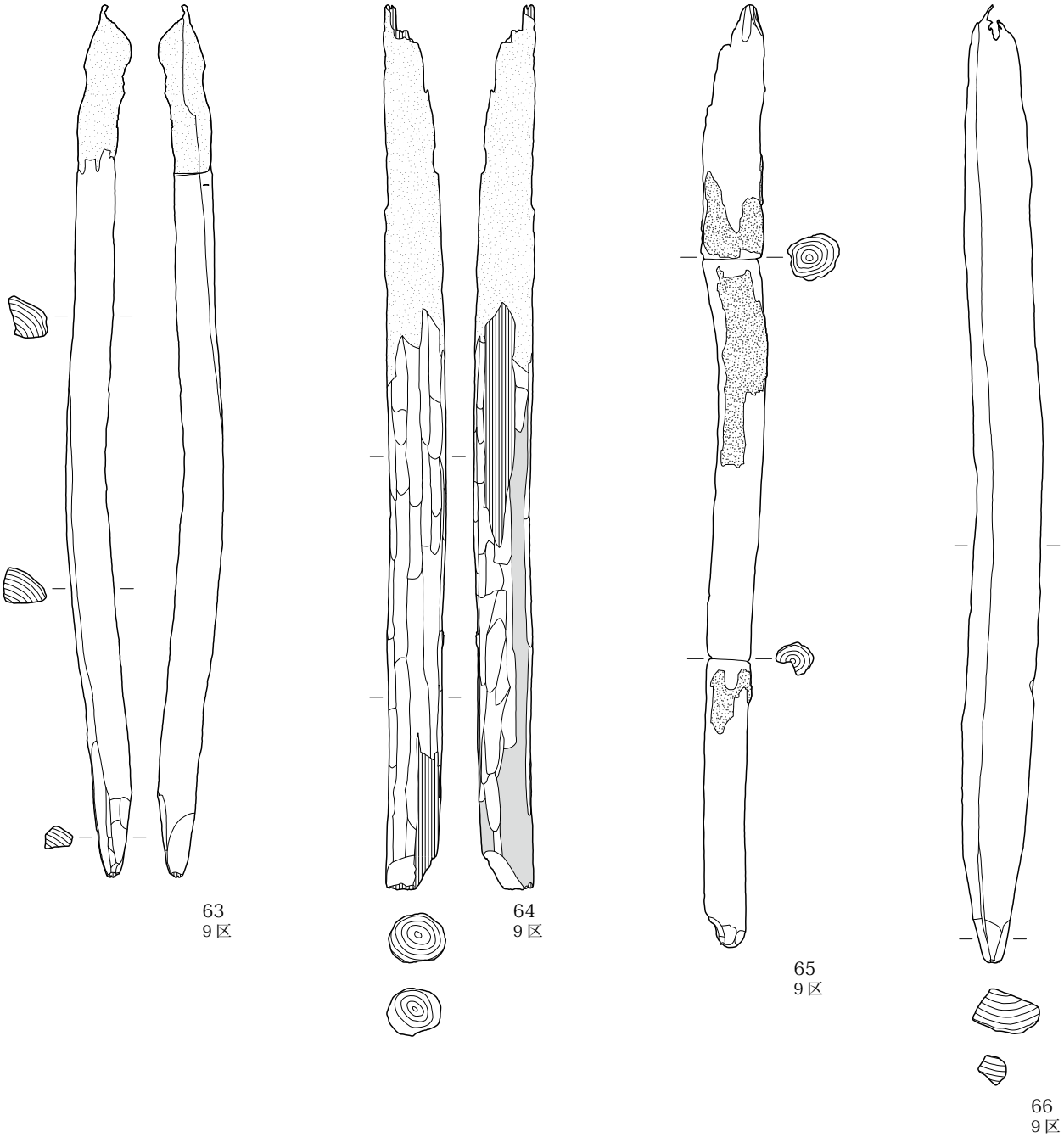


62
9 区

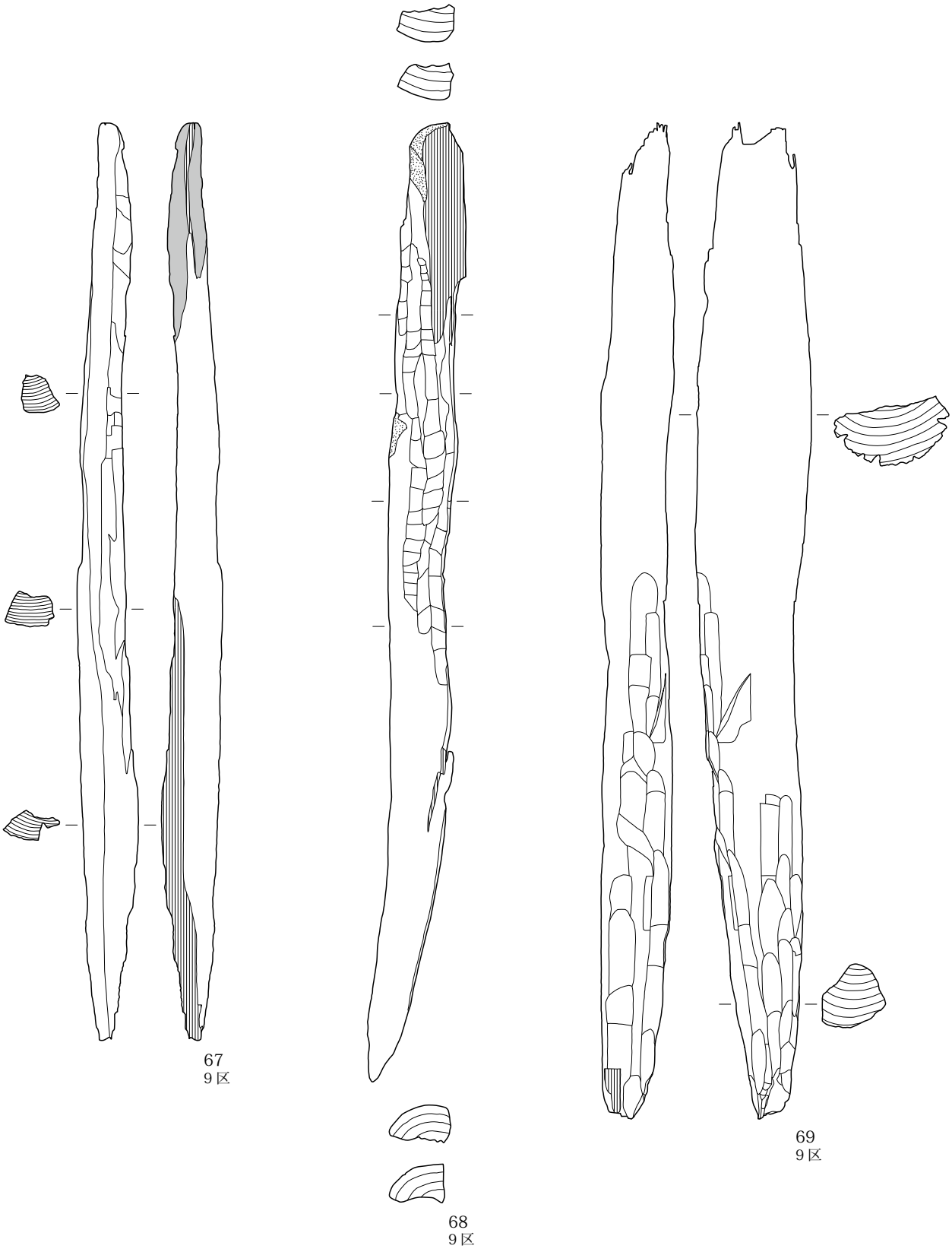
0　(1:8)　20cm

図版 112　古墳時代の木製品８

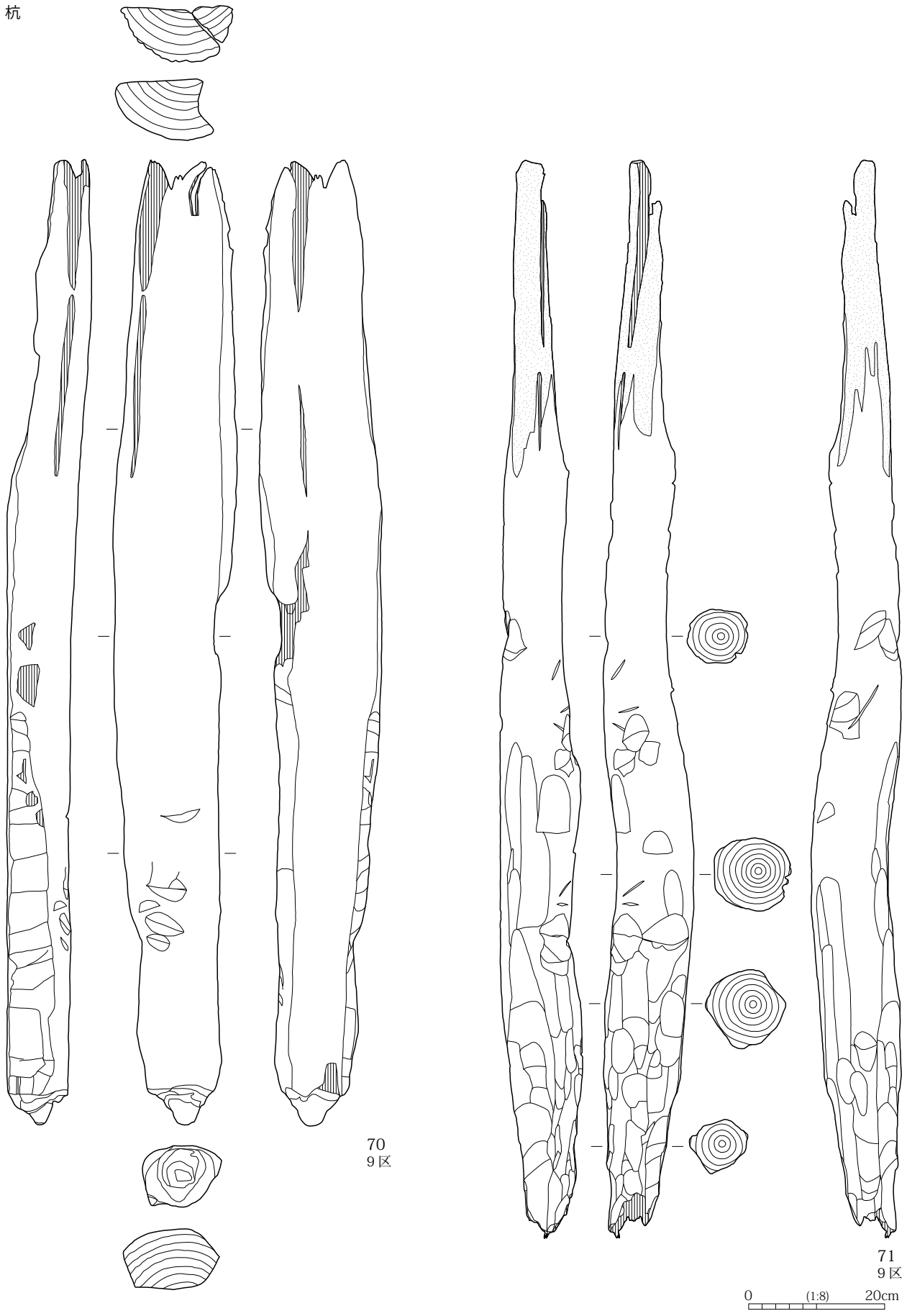
杭



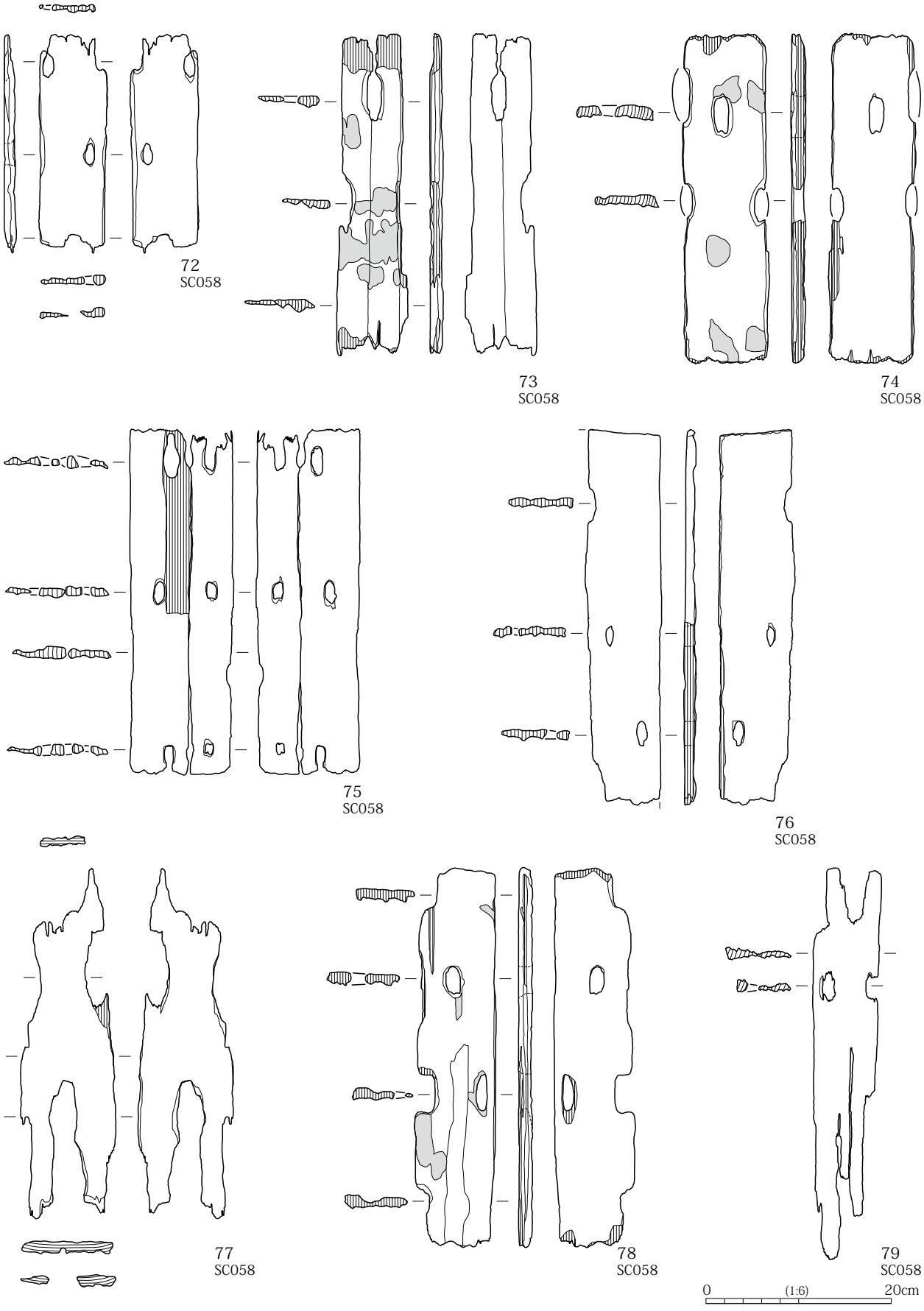
杭



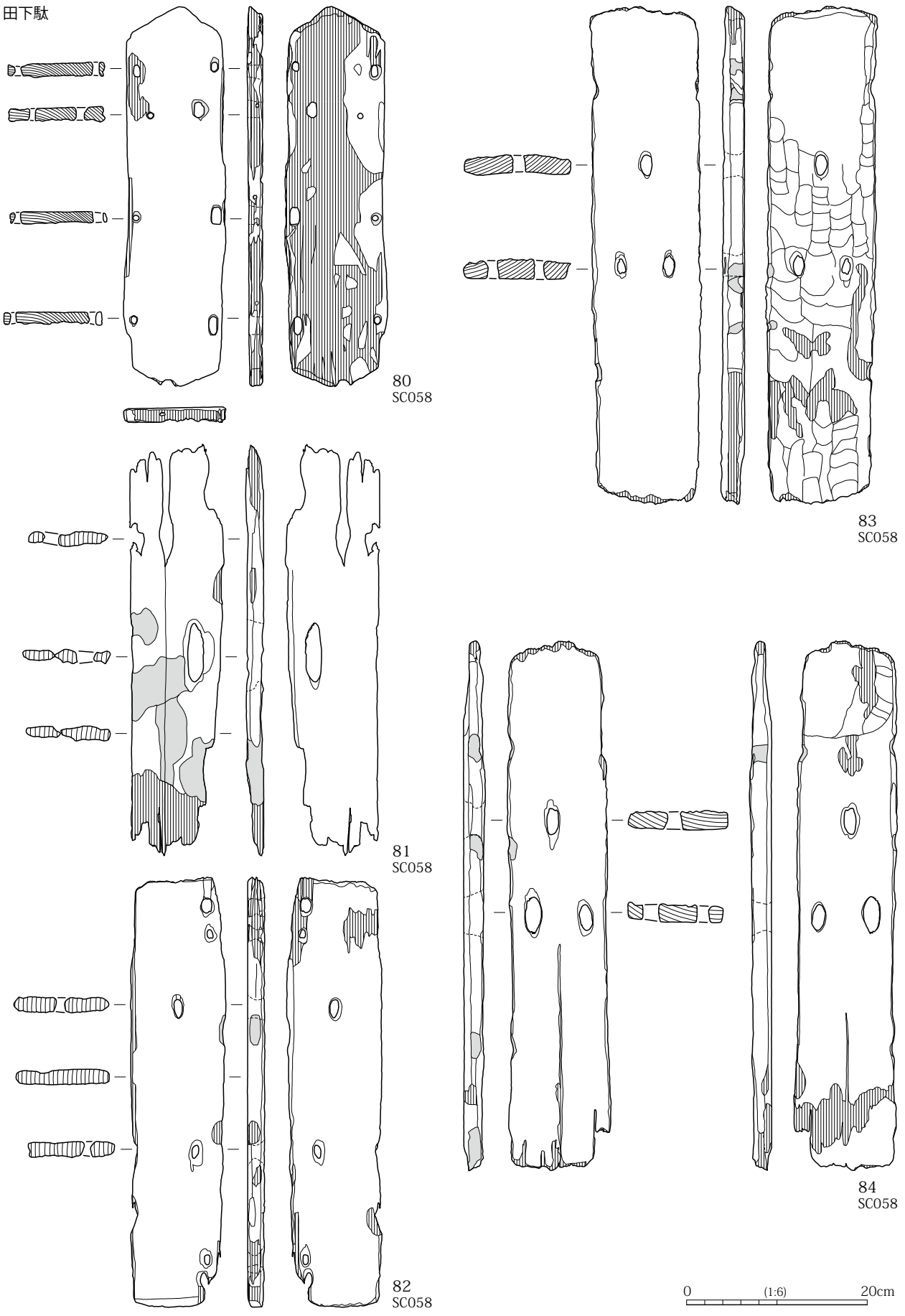
図版 114　古墳時代の木製品 10



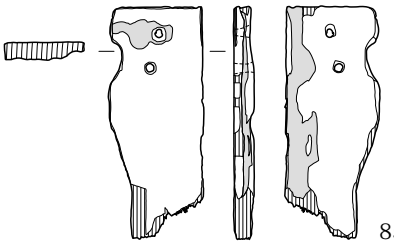
田下駄


72
SC058
73
SC058
74
SC058
75
SC058
76
SC058
77
SC058
78
SC058
79
SC058
0
(1:6)
20cm

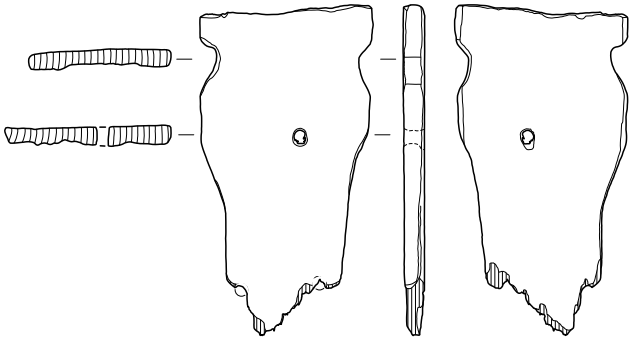
図版 116　平安時代の木製品２



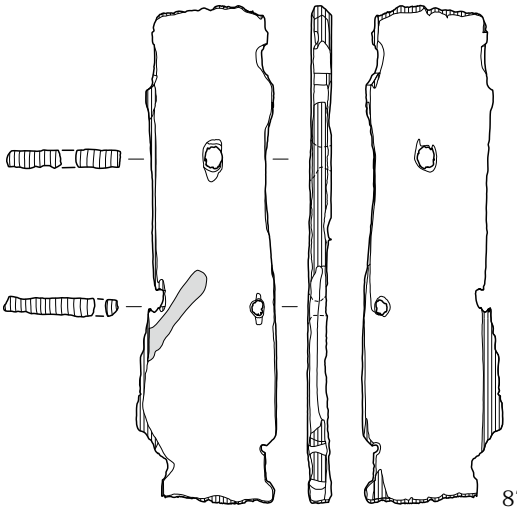
田下駄



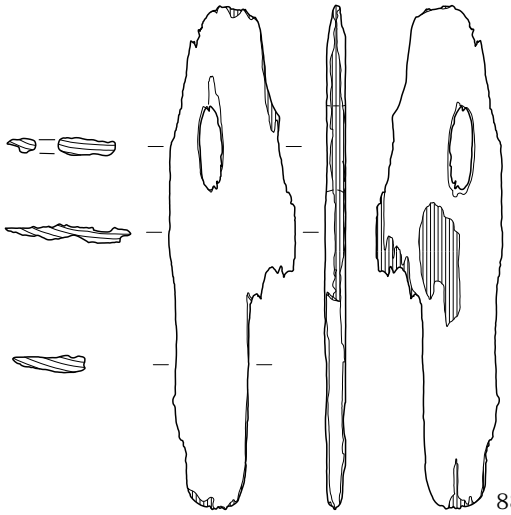
85
SC081



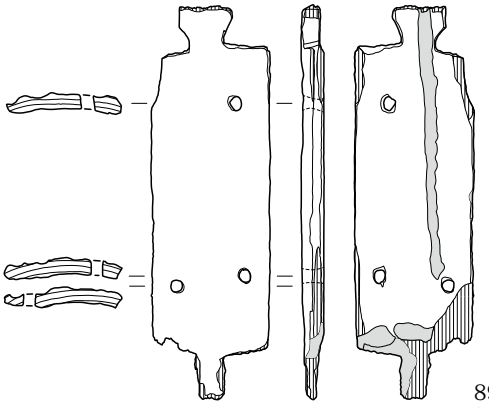
86
SC081



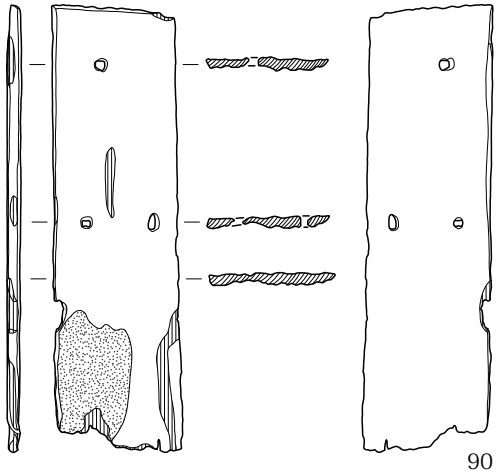
87
SC081



88
SC086



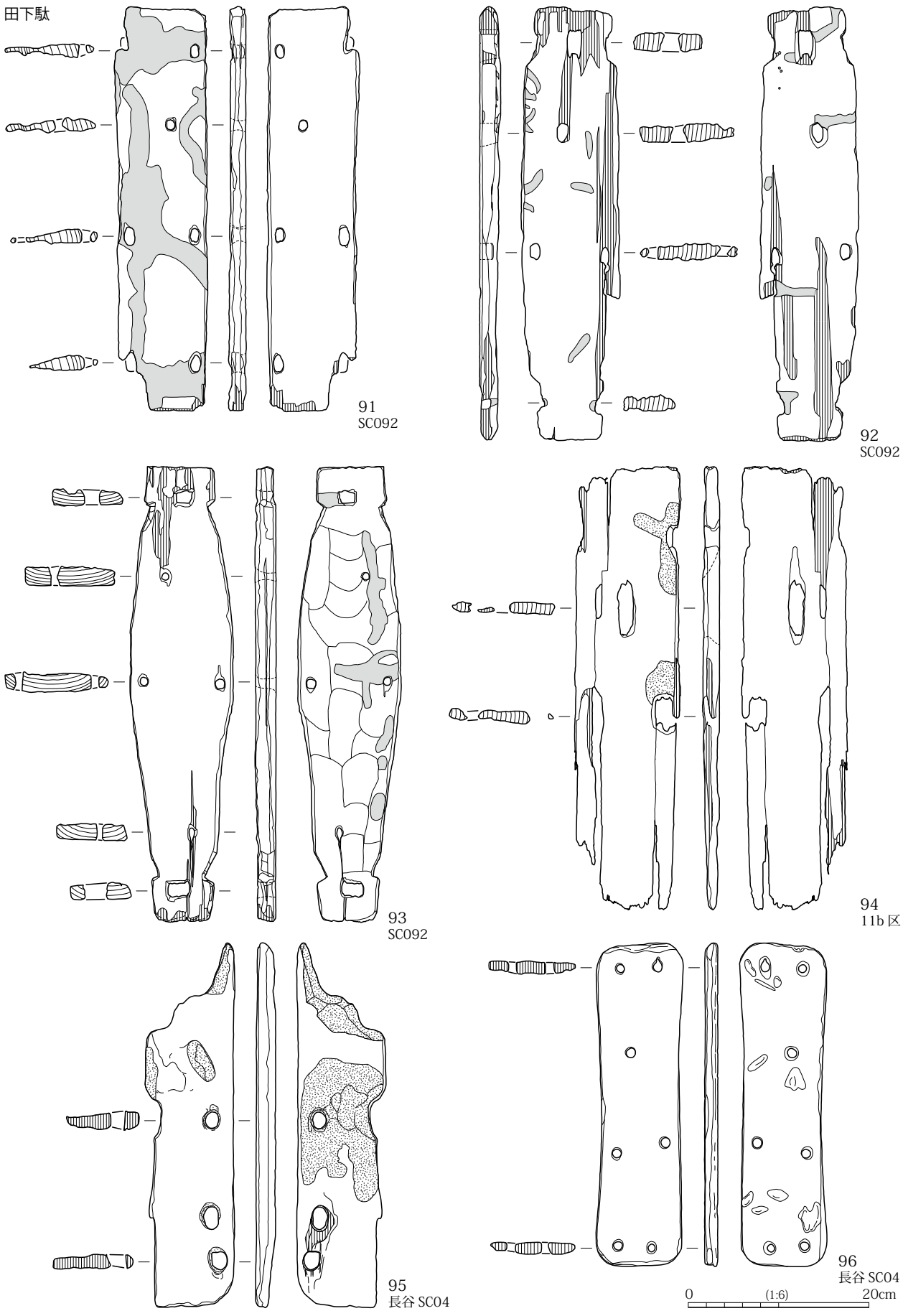
89
SC092



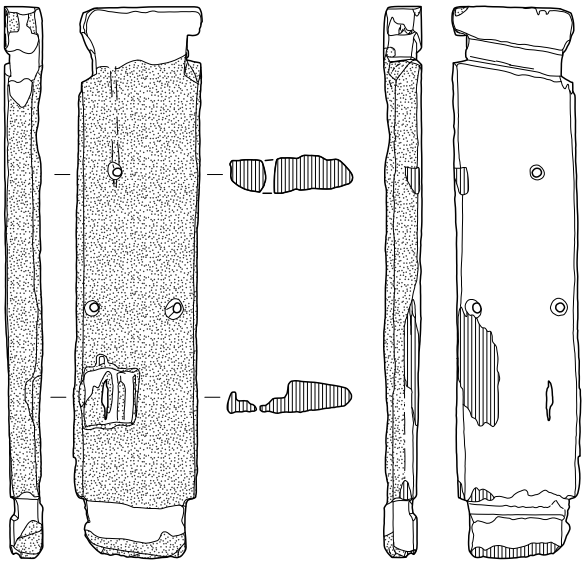
90
SC092

0　(1:6)　20cm

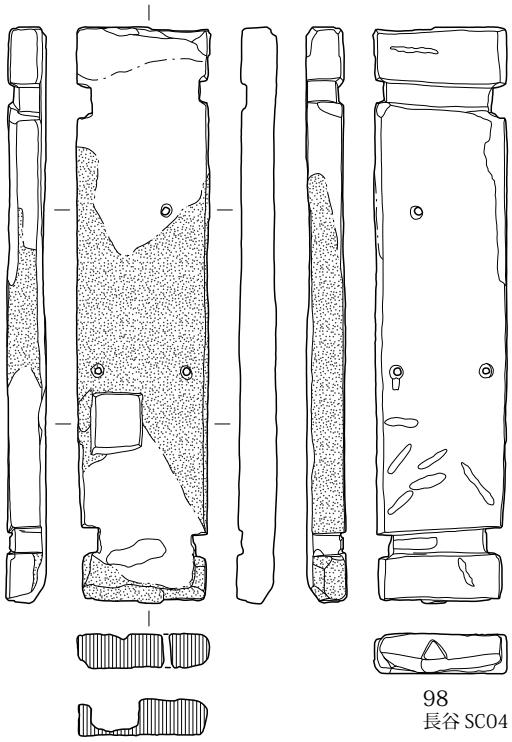
図版 118　平安時代の木製品４



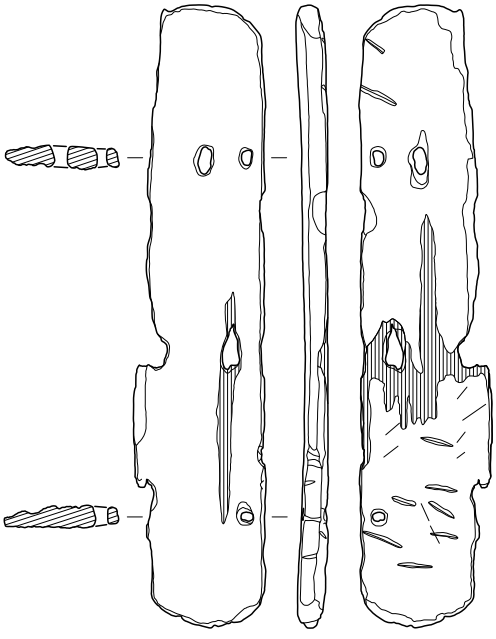
田下駄



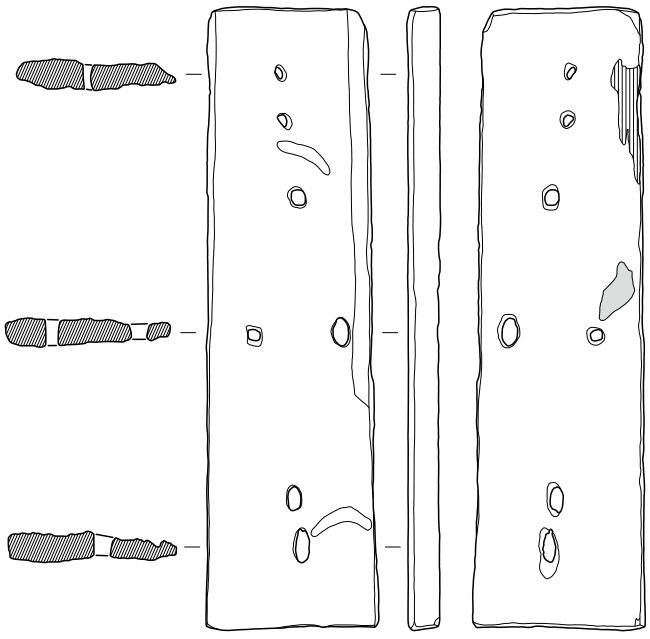
97
長谷 SC04



98
長谷 SC04



99
長谷 SC04

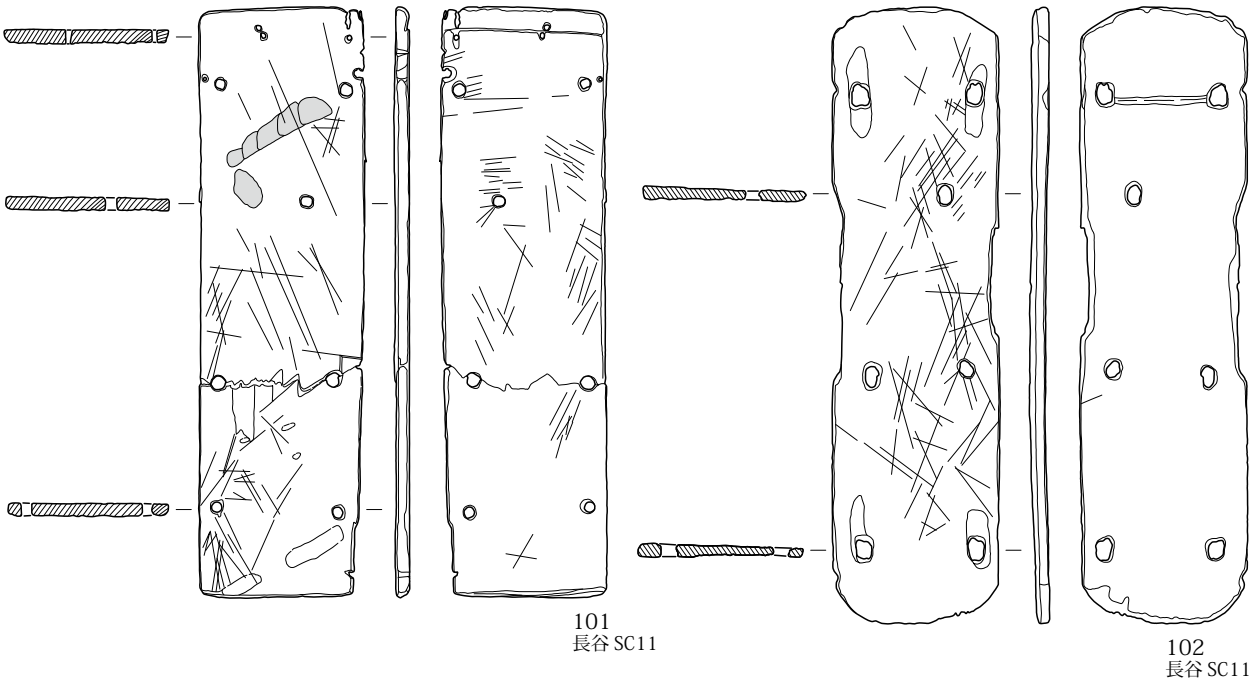


100
長谷 SC04

0　(1:6)　20cm

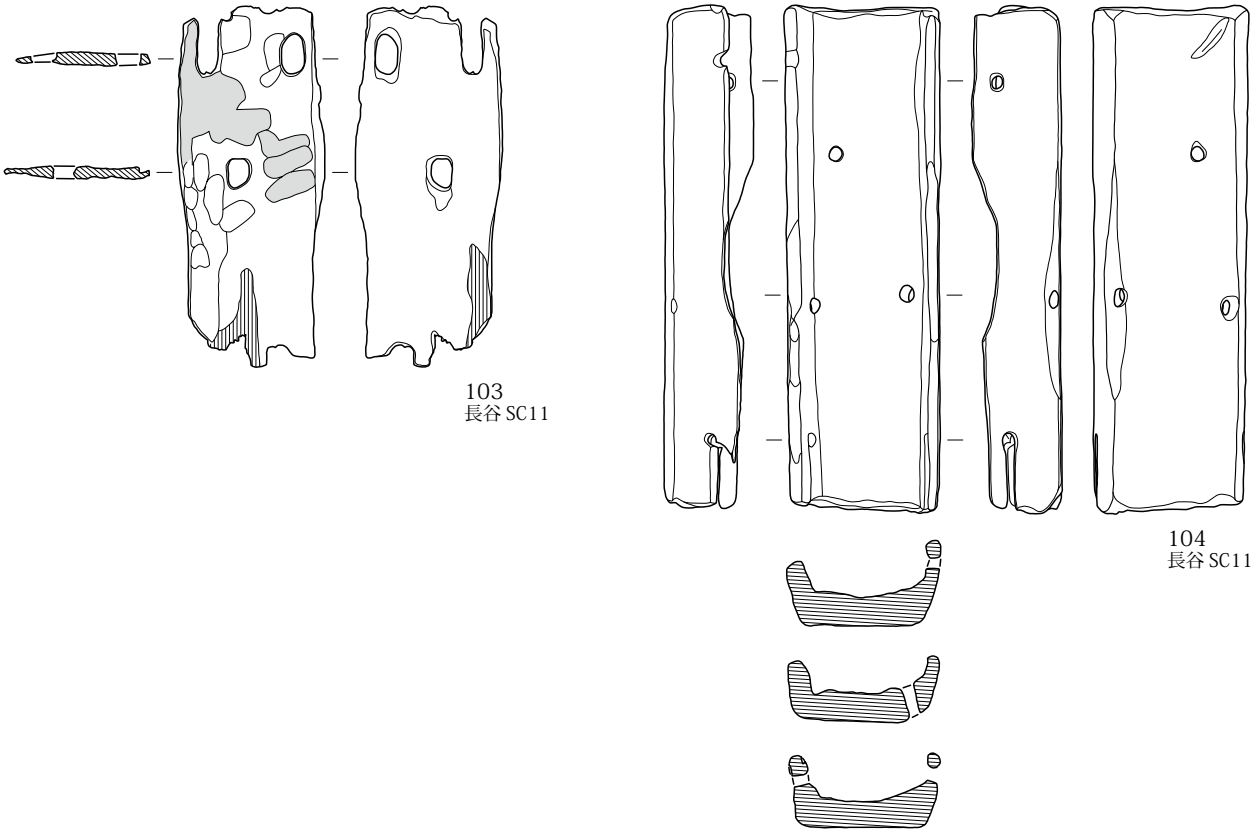
図版 120　平安時代の木製品６

田下駄



101
長谷 SC11

102
長谷 SC11

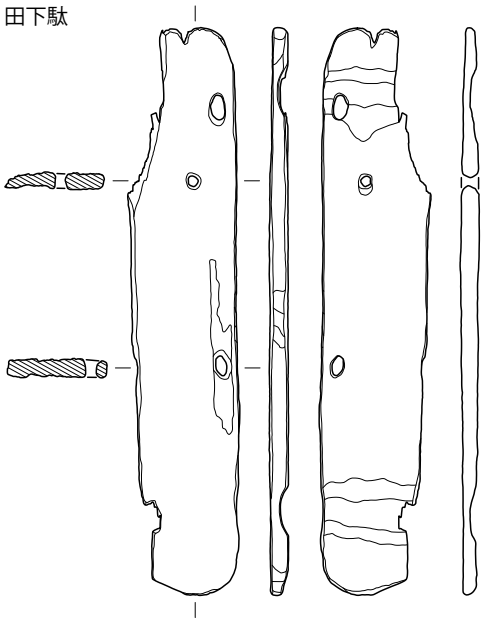


103
長谷 SC11

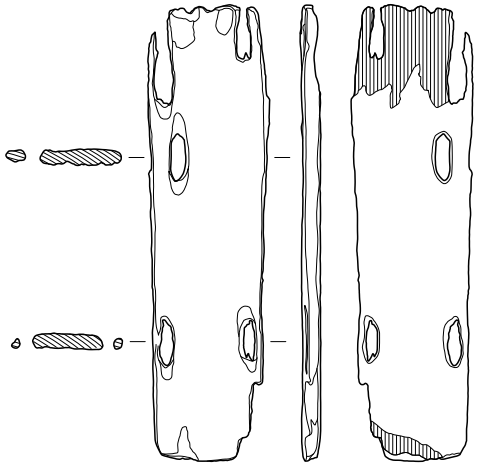
104
長谷 SC11

0　(1:6)　20cm

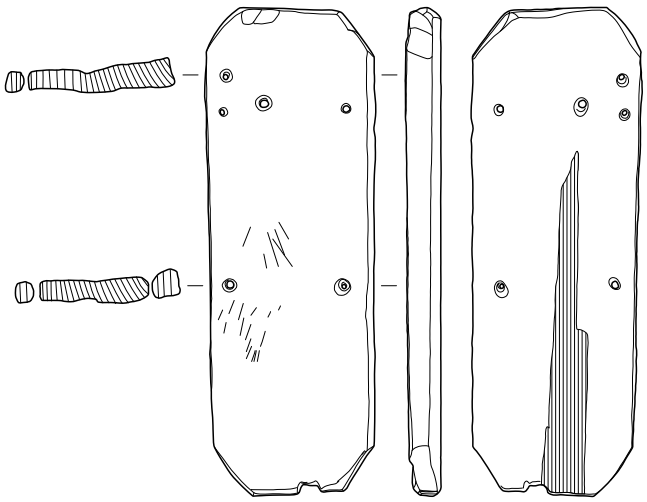
田下駄



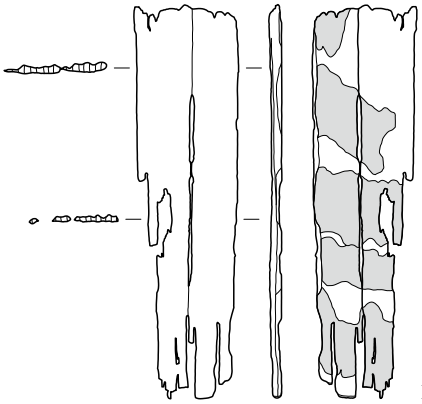
105
長谷 SC15



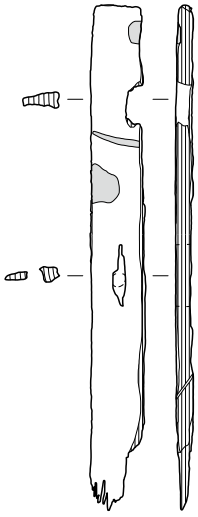
106
長谷1区



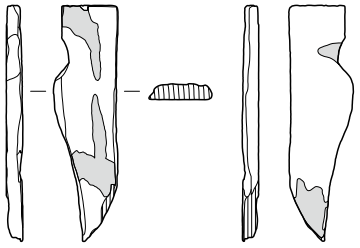
107
長谷1区



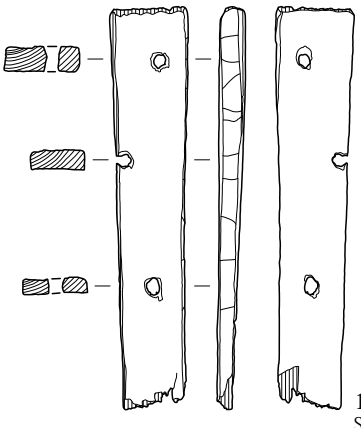
108
SC058



109
SC058



110
SC081

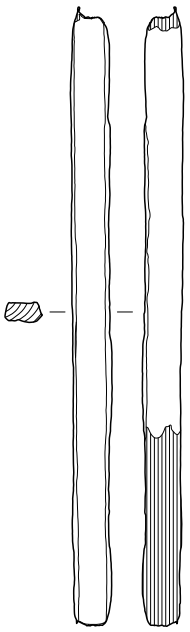


111
SC086

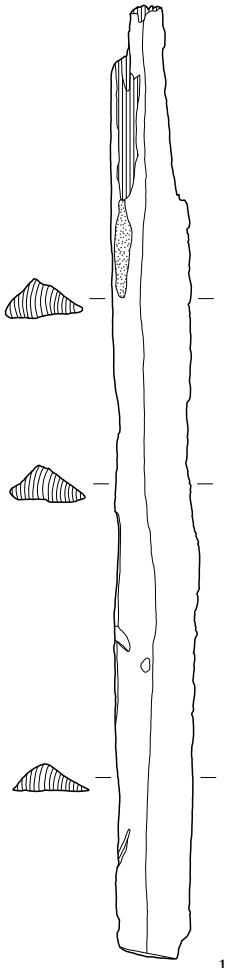
0　(1:6)　20cm

図版 122　平安時代の木製品８

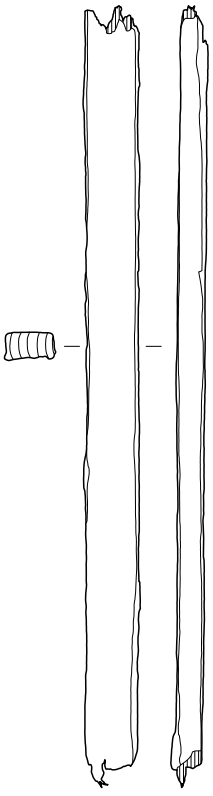
建築部材その他



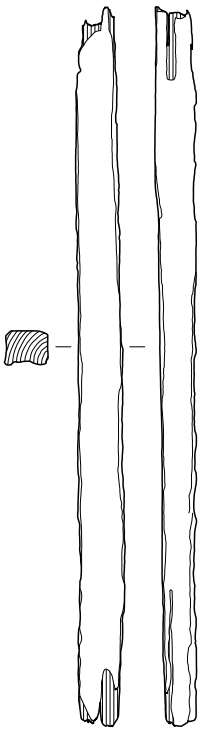
112
SC058



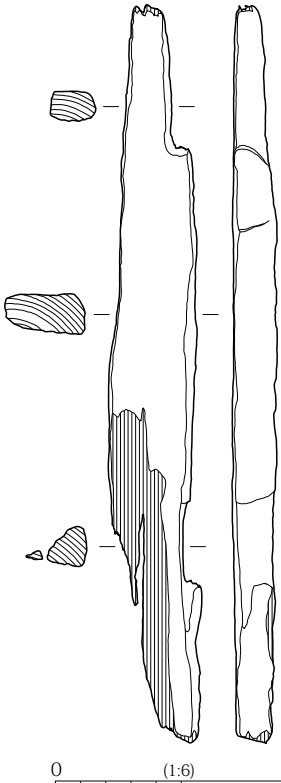
113
SC058



114
11b 区



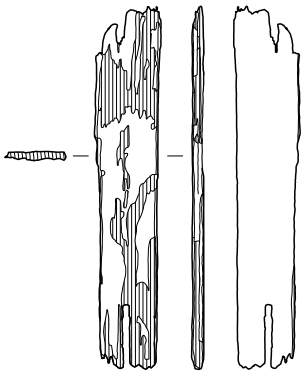
115
11b 区



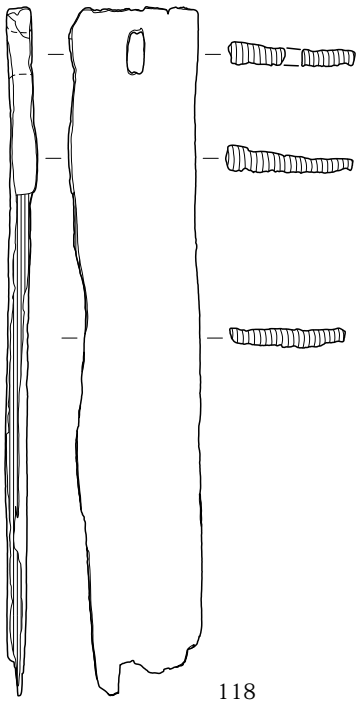
116
11b 区

0　(1:6)　20cm

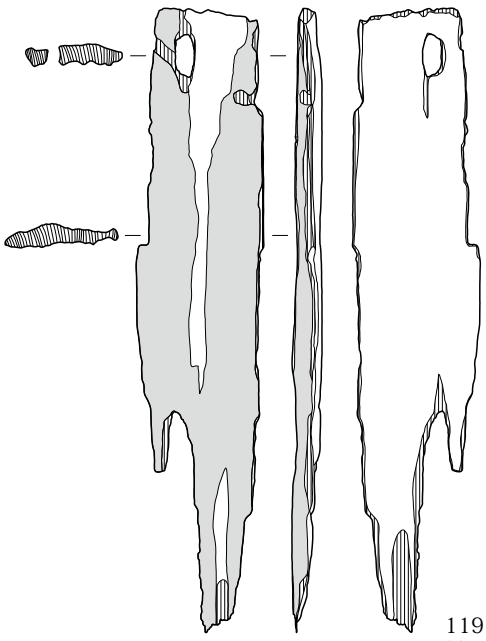
建築部材その他



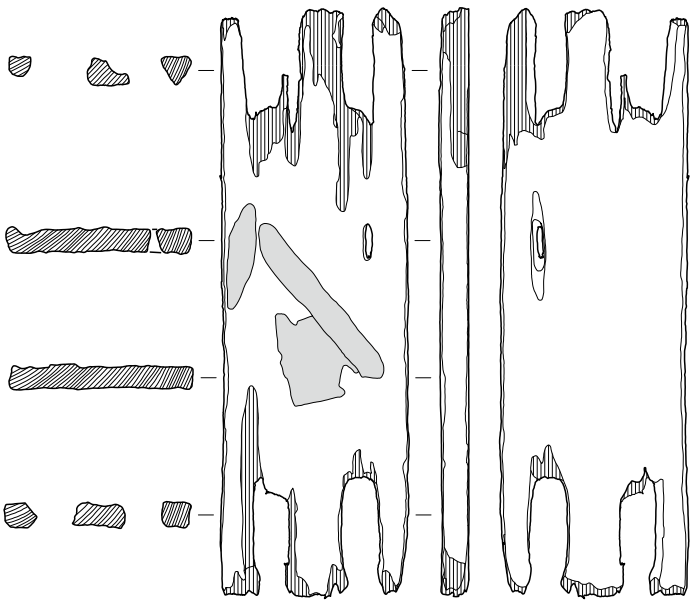
117
SC081



118
SC081



119
SC092

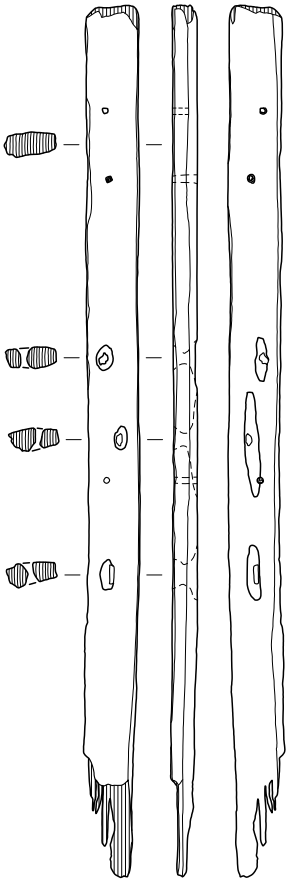


120
11b 区

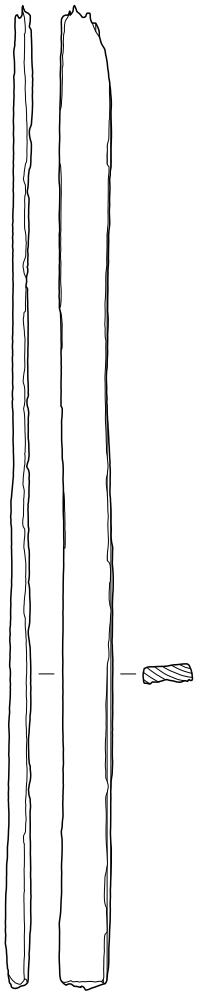
0　(1:8)　20cm

図版 124　平安時代の木製品 10

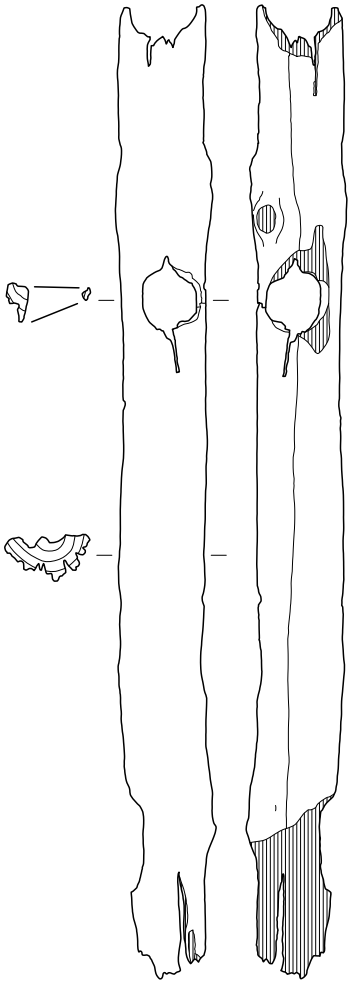
建築部材その他



121
SC058



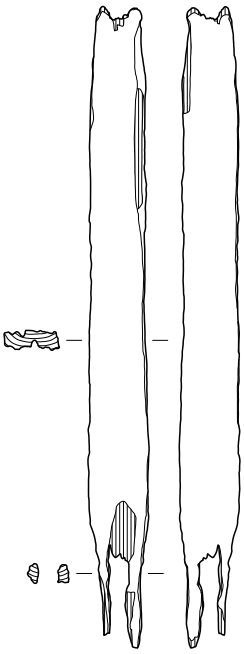
122
SC058



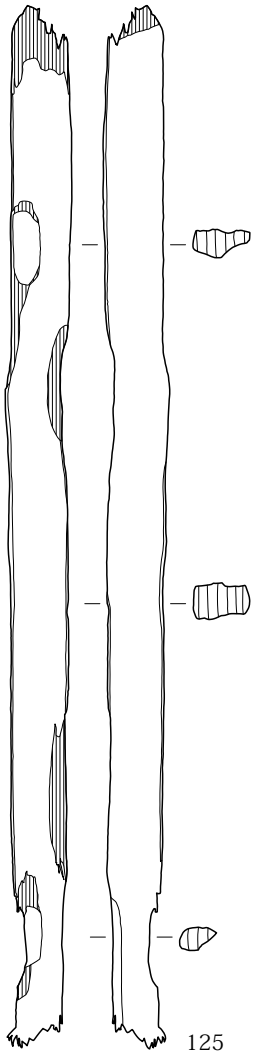
123
SC058

0　(1:12)　40cm

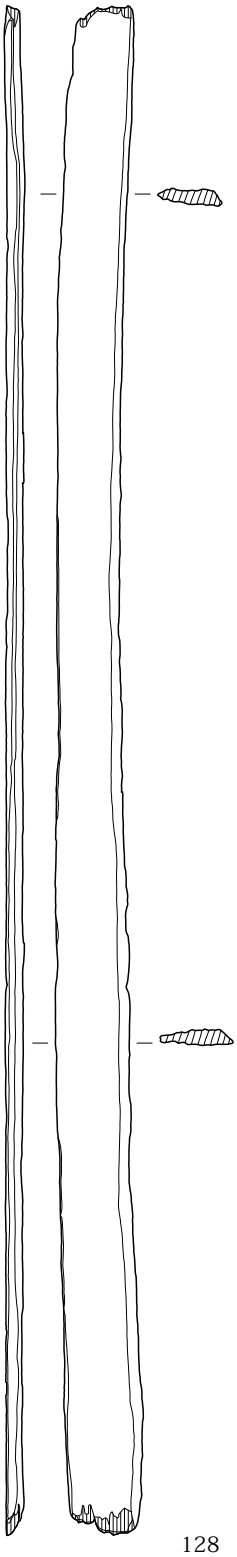
建築部材その他



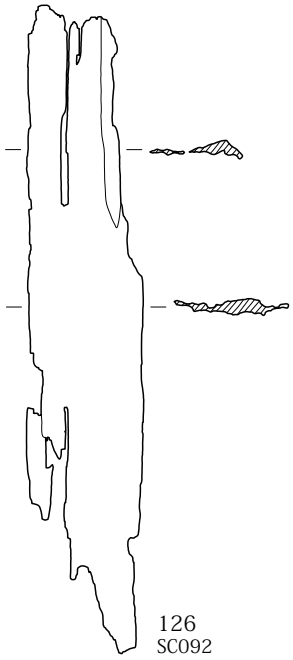
124
SC081



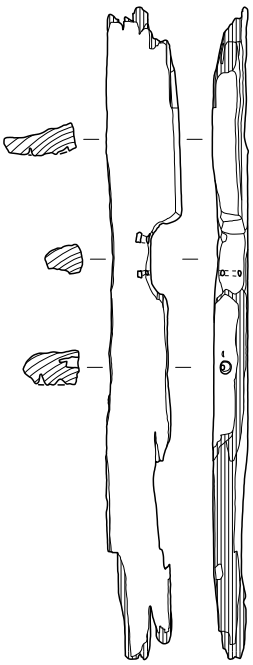
125
SC081



128
SC092



126
SC092

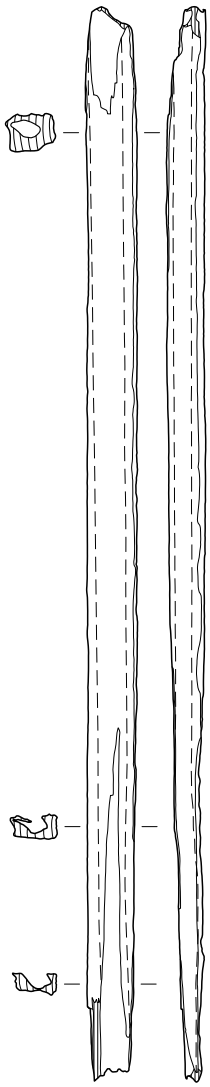


127
SC092

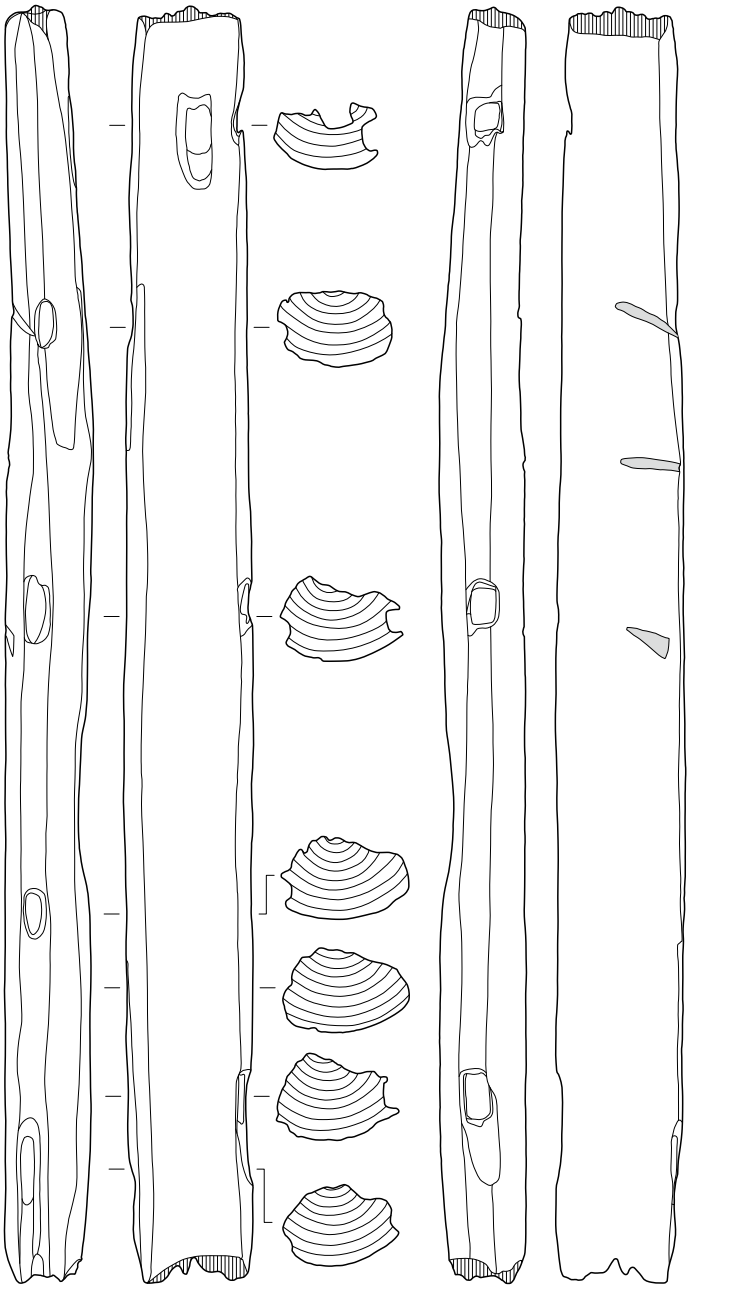
0　(1:12)　40cm

図版 126　平安時代の木製品 12

建築部材その他



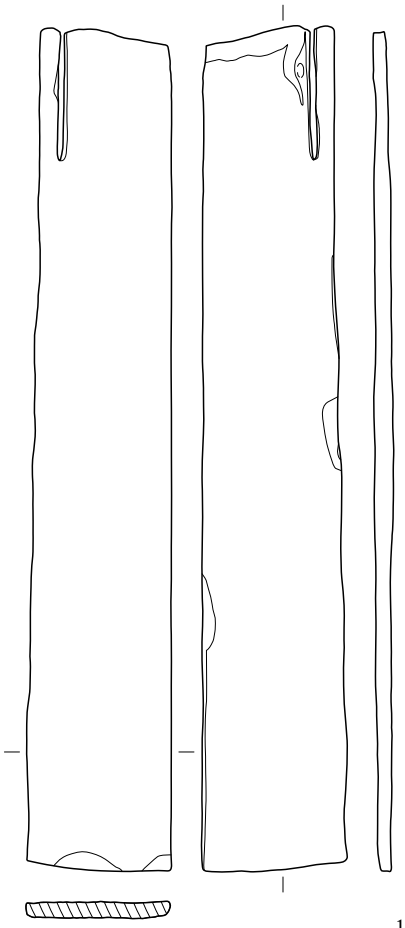
129
SC093



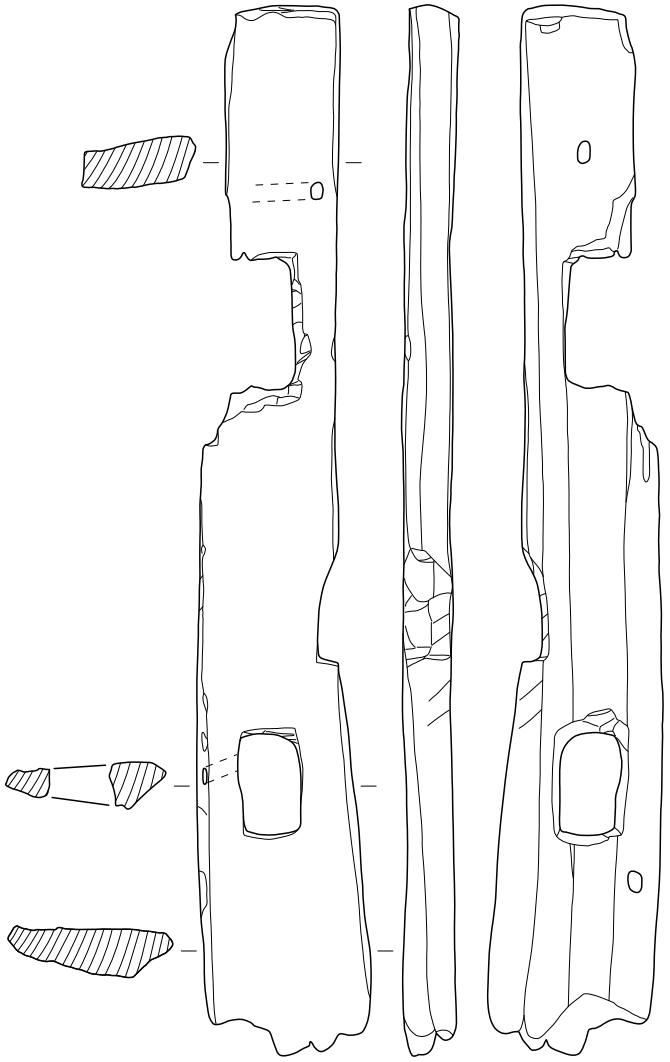
130
長谷 SC04

0　(1:12)　40cm

建築部材その他



131
長谷 SC04



132
長谷 SC11

0　(1:12)　40cm

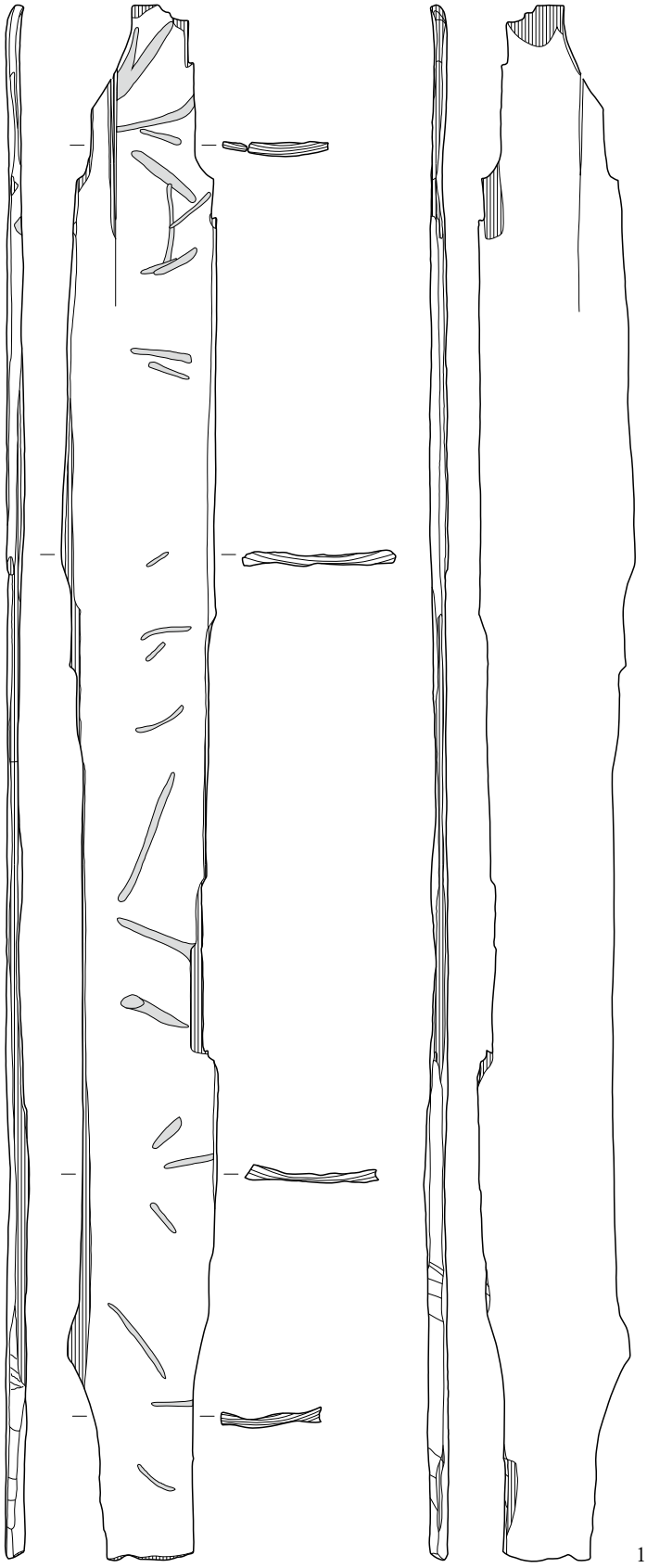
図版 128　平安時代の木製品 14

建築部材その他

133
長谷 SC11

0　(1:12)　40cm

建築部材その他

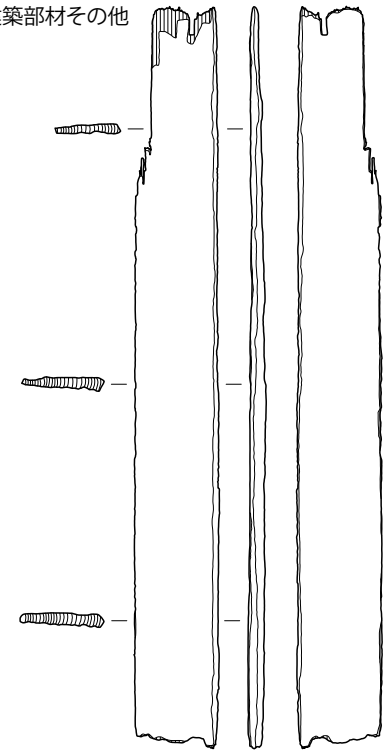


134
長谷 SC11

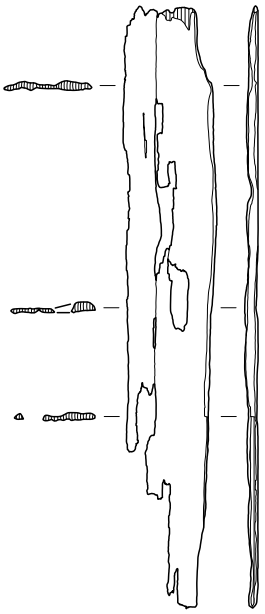
0　(1:12)　40cm

図版 130　平安時代の木製品 16

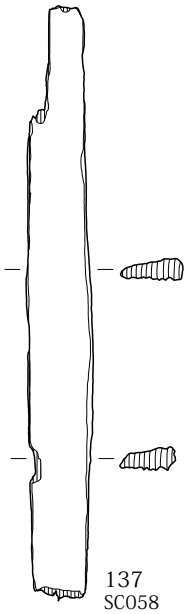
建築部材その他



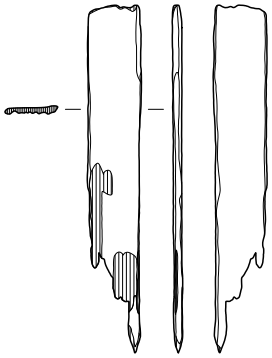
135
SC058



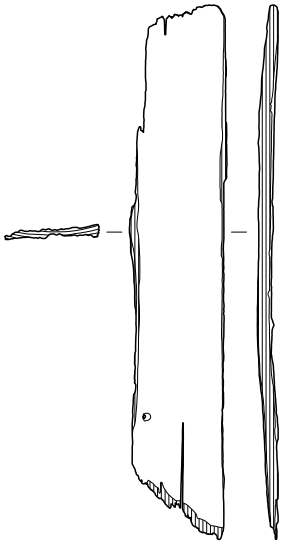
136
SC058



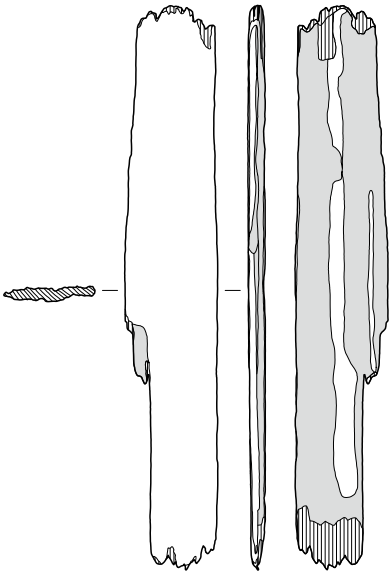
137
SC058



138
SC058

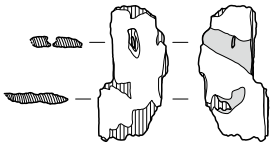


139
SC081

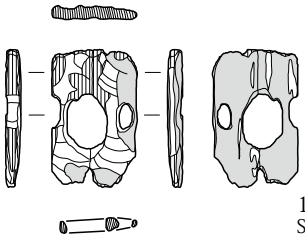


140
SC081

不明木製品

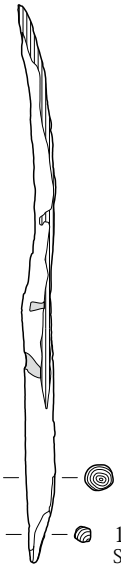


141
SC058

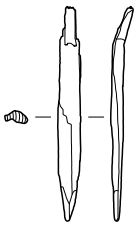


142
SC058

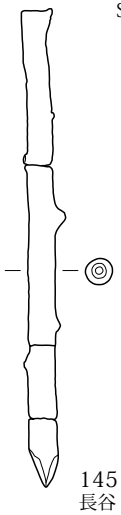
杭



143
SC086



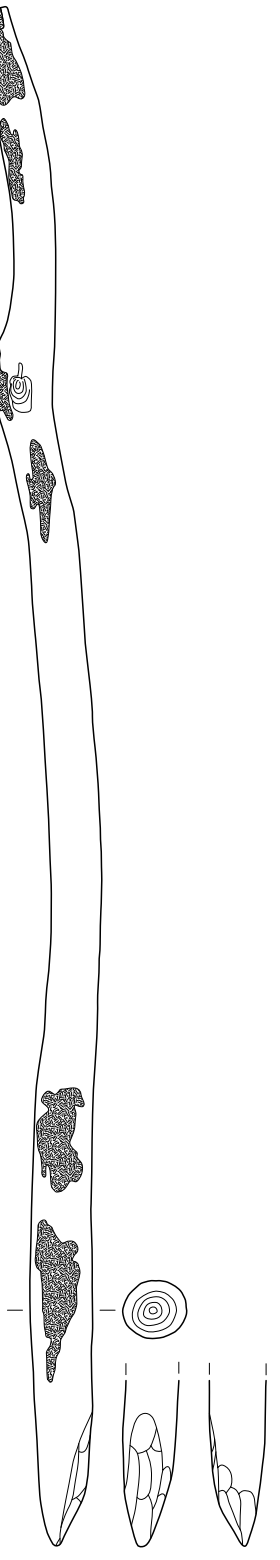
144
SC100



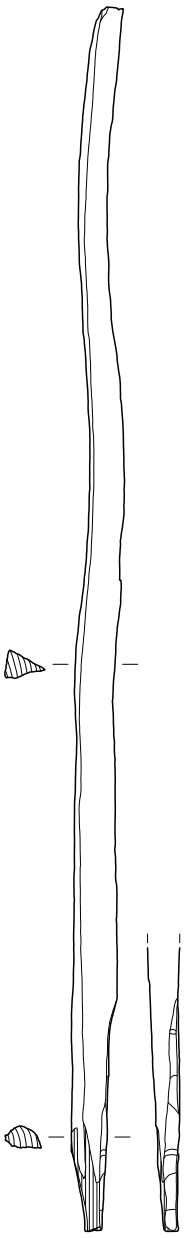
145
長谷 SC04

0　(1:8)　20cm

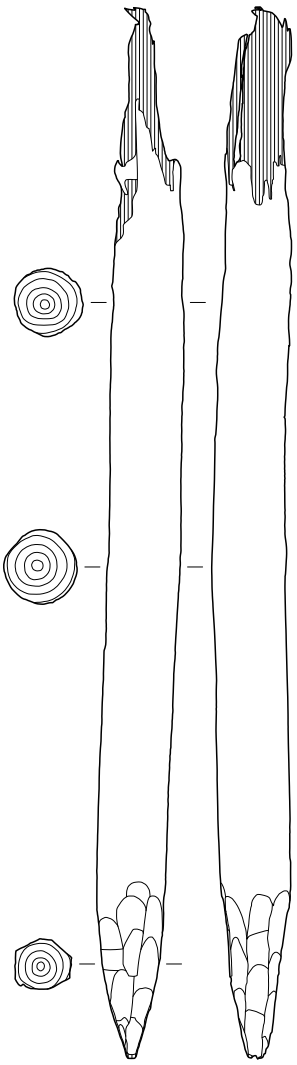
杭



146
長谷 SC04

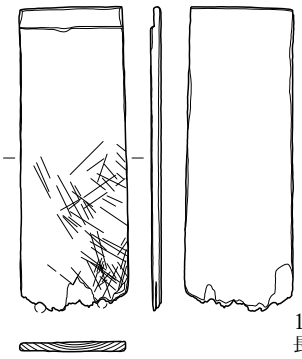


147
SC058

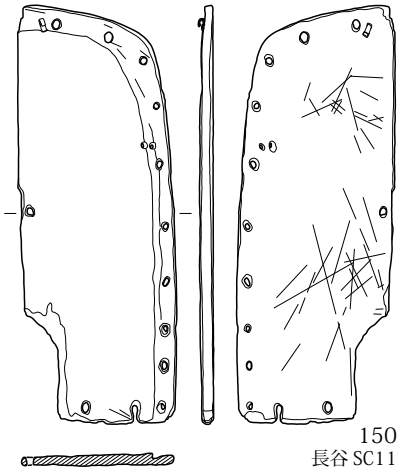


148
SC058

曲物



149
長谷 SC04

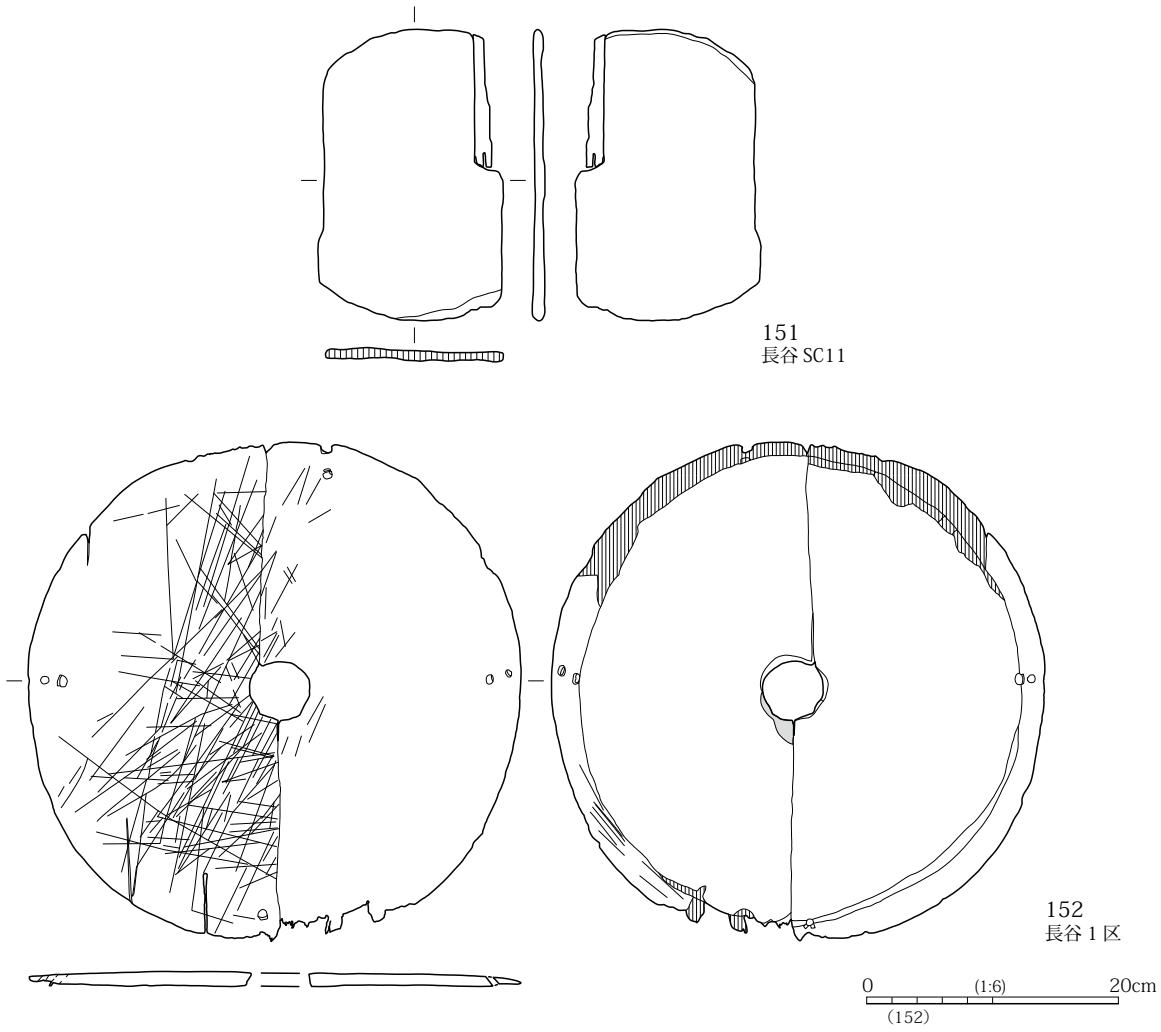


150
長谷 SC11

0　(1:8)　20cm

図版 132　平安時代の木製品 18・中近世の木製品

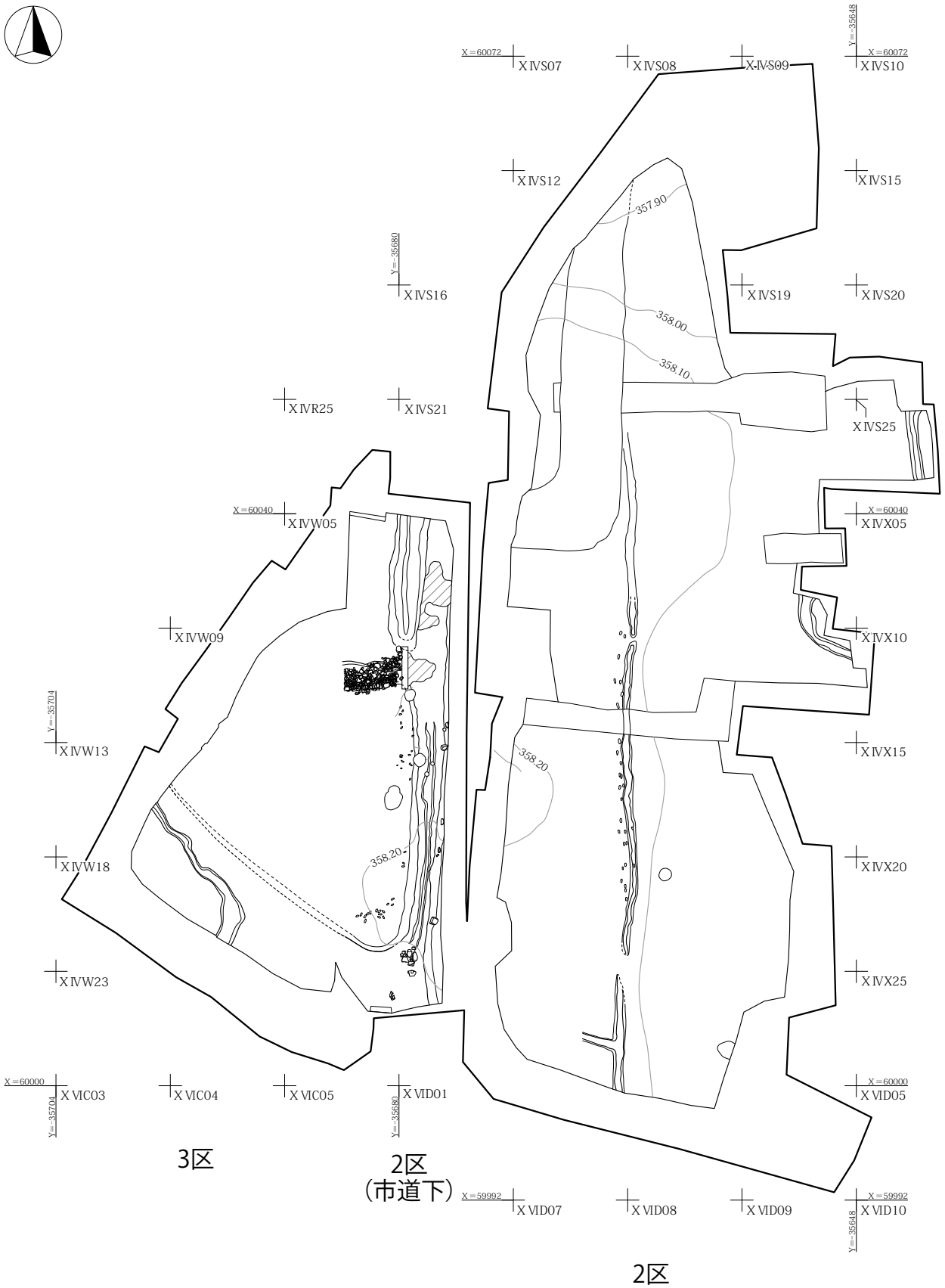
曲物



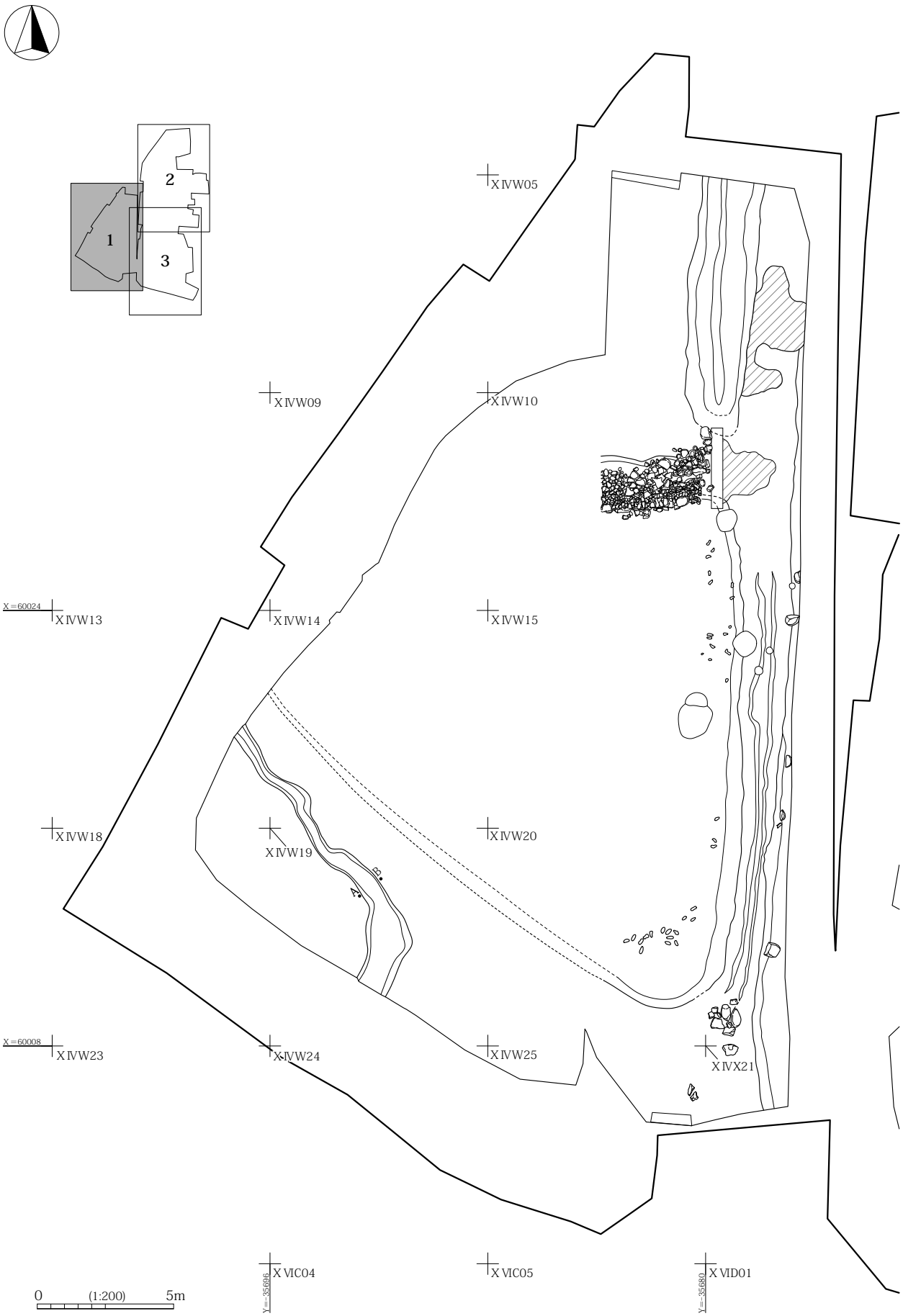
長谷鶴前遺跡群

遺構図版

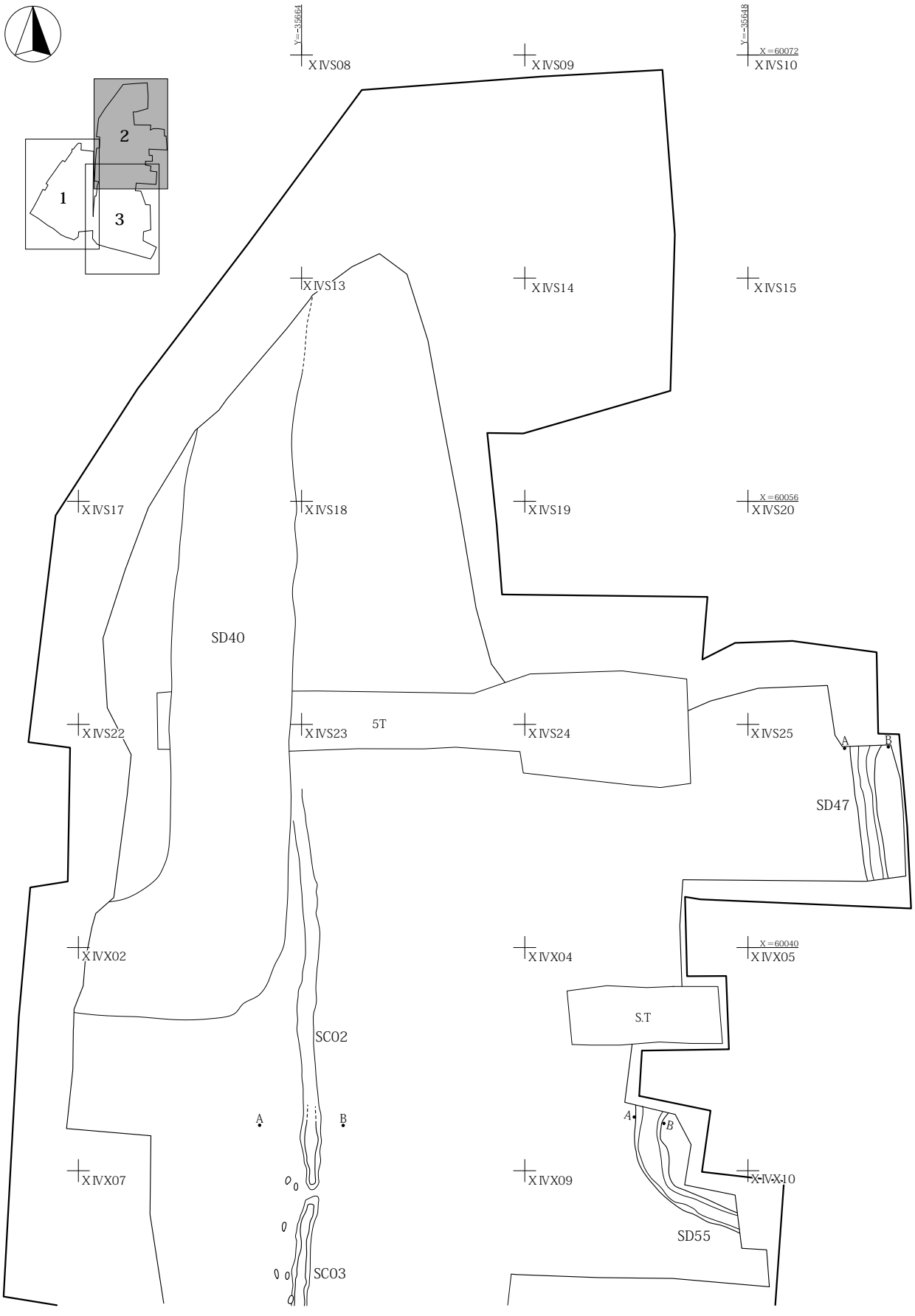
遺物図版


X=60072
XIVS07
XIVS08
XIVS09
Y=-35648
X=60072
XIVS10
XIVS12
XIVS15
357.90
Y=-35680
XIVS16
XIVS19
XIVS20
358.00
358.10
XIVR25
XIVS21
XIVS25
X=60040
XIVW05
X=60040
XIVX05
XIVW09
XIVX10
Y=-35704
XIVW13
XIVX15
358.20
XIVW18
358.20
XIVX20
XIVW23
XIVX25
X=60000
XVIC03
Y=-35704
XVIC04
XVIC05
XVID01
Y=-35680
X=60000
XVID05
3区
2区
（市道下）
X=59992
XVID07
XVID08
XVID09
X=59992
XVID10
Y=-35648
2区
0
(1:400)
10m

図版 134　第４調査面　遺構分布図１

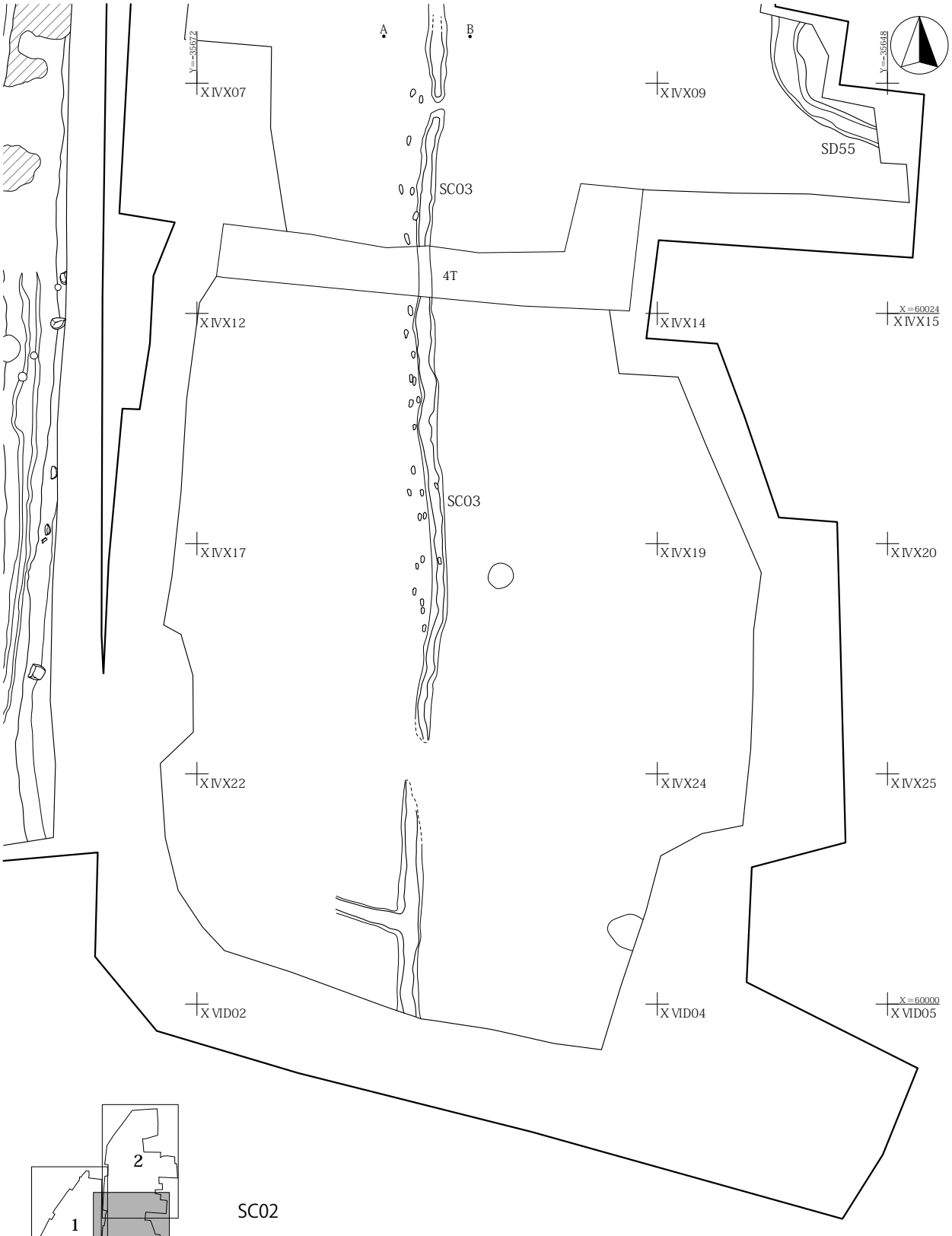


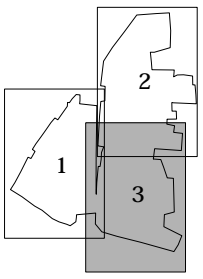
断面図：SD42（図版 139）



断面図：SD47・55（図版 139）

図版 136　第４調査面　遺構分布図３



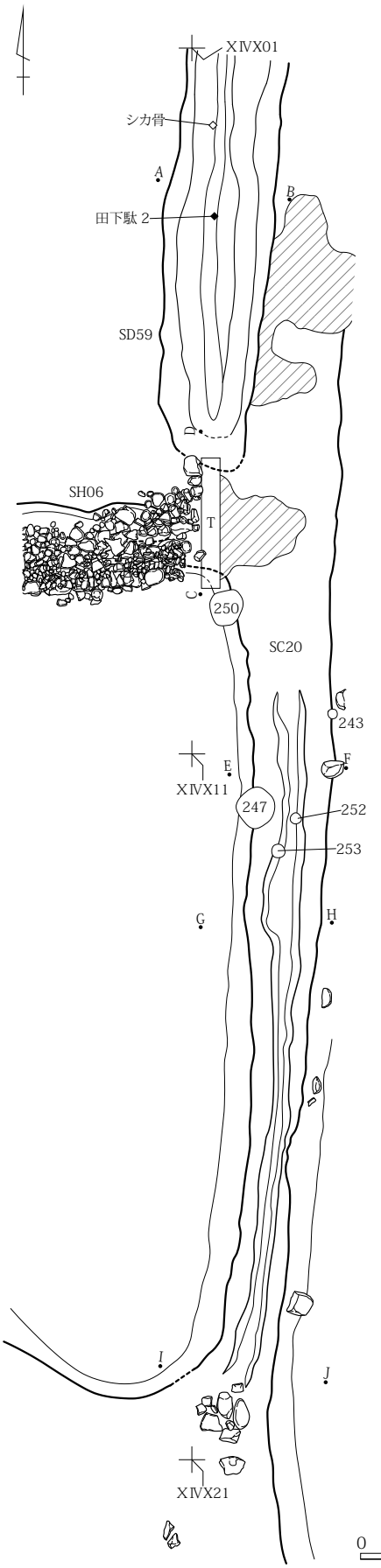


SC02

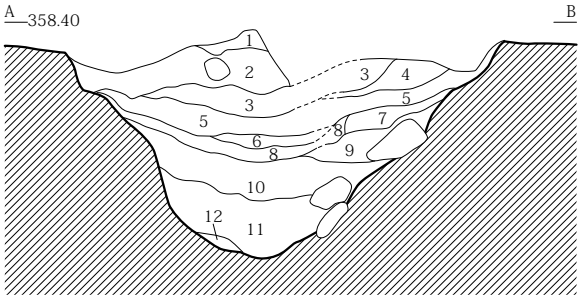
1　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘土。還元。
2　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。炭粒少混。還元。

-------- 畦畔断ち割りの境界線

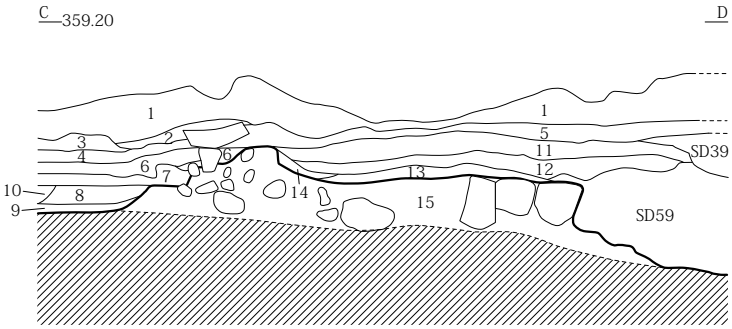
0　(1:40)　1m



SD59



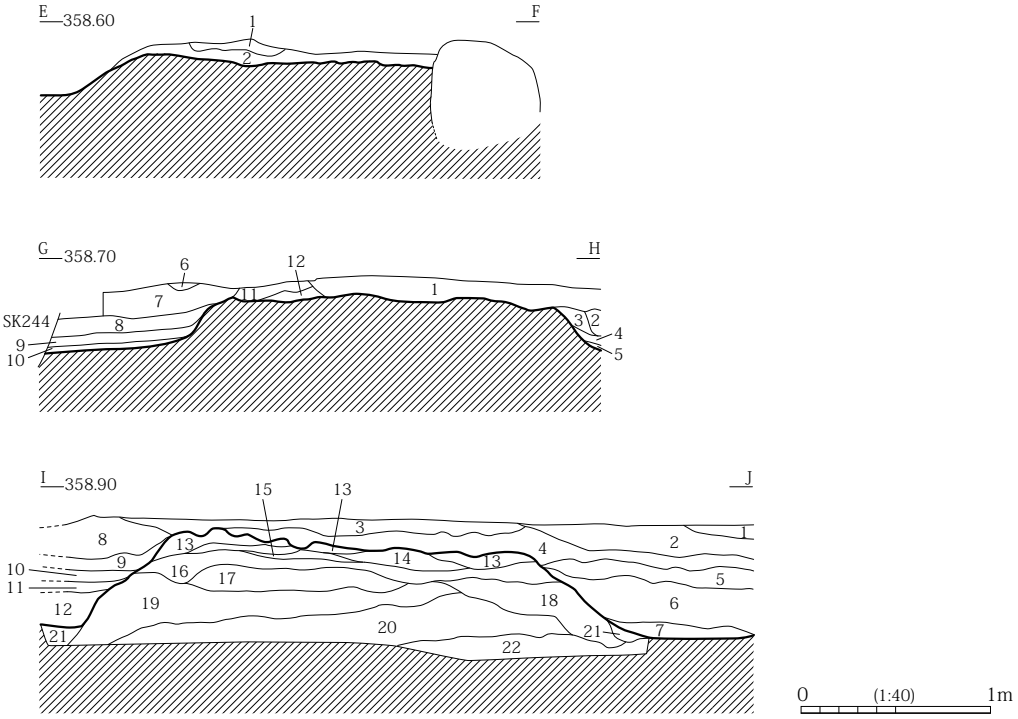
1　ｵﾘｰﾌﾞ色土(5Y4/2)　山砂・炭化物微混。
2　黒褐色土(2.5Y3/2)　山砂混。炭化物少混。
3　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘質土。大黒色土ﾌﾞﾛｯｸ・砂ﾌﾞﾛｯｸ混。
　大灰白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
4　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土(2.5Y4/3)　山砂。
5　灰色土(5Y4/1)　粘質土。山砂少混。炭化物微混。
6　灰色土(5Y4/1)　粘質土。山砂混。黒褐色土斑状に混。
7　黒褐色土(10YR3/2)　粘質土。炭化物微混。灰白色粘土少混。
8　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘質土。黒褐粘土斑状に少混。
9　黒褐色土(10YR3/1)　粘質土。山砂少混。
10　黒色土(10YR1.7/1)　泥炭。木片少混。ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘質土混。
12　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(7.5Y3/1)　平安砂多混。



1　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　山砂。
2　黄灰色土(2.5Y4/1)　山砂・中灰色土少混。
3　灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(5Y5/3)　ｼﾙﾄ質。全体的に酸化。
4　灰黄色土(2.5Y6/2)　ｼﾙﾄ質。炭化物微混。還元。
5　灰黄色土(2.5Y6/2)　粘質土。山砂微混。
6　灰色土(7.5Y6/1)　粘質土。炭化物微混。還元。
7　灰色土(7.5Y5/1)　粘質土。山砂・小黄灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ微混。還元。
8　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　山砂。造成土。
9　暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色土(2.5GY4/1)と灰色土(5Y5/1)の混合層。
10　灰色土(7.5Y4/1)　山砂。還元。
11　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　山砂。炭化物微混。
12　黄灰色土(2.5Y4/1)　山砂。炭化物微混。
13　灰色土(5Y4/1)　粘質土。山砂少混。
14　黒褐色(2.5Y3/2)　山砂少混。炭化物微混。
15　灰色土(5Y5/1)　粘質土。

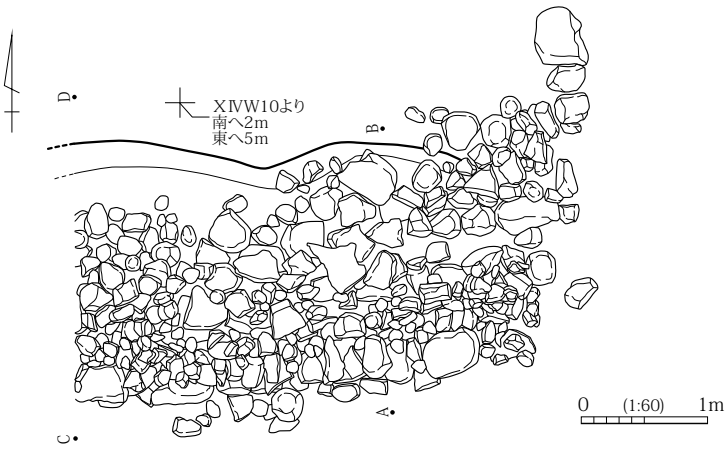
0　(1:40)　1m

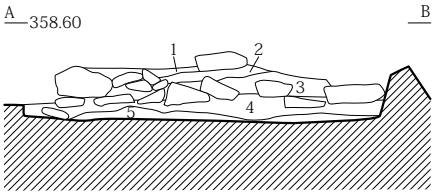
図版 138　SC20　道路跡２



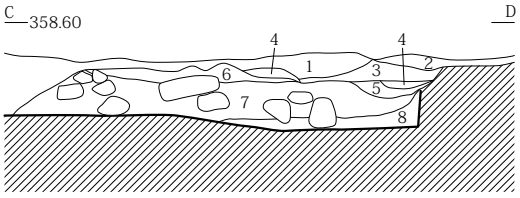
E-F・G-H
1　灰色土(7.5Y4/1)　山砂。造成土。
2　灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(5Y5/2)　山砂。造成土。
3　灰色土(10Y4/1)　山砂。上部は粘質土。
4　灰色土(7.5Y6/1)　山砂。
5　灰色土(5YR5/1)　粘質土。
6　黒褐色土(10YR3/1)　山砂。
7　灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(5Y5/3)　山砂。造成土。
8　灰色土(7.5Y5/1)　山砂。造成土か。
9　灰色土(7.5Y5/1)　ｼﾙﾄ。
10　灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(7.5Y5/2)　粘質土。
11　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　山砂。灰白色粘質土混。
12　黒褐色土(2.5Y3/2)　山砂。
13　黒褐色土(2.5Y3/1)　砂微混。
I-J上面
1　灰色土(5Y5/1)　山砂。
2　黄灰色土(2.5Y4/1)　山砂。
3　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　山砂。造成土か。
4　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　山砂。小灰黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。造成土か。
5　灰黄色土(2.5Y6/2)　山砂。造成土か。
6　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　山砂。中灰黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。造成土か。
7　黄灰色土(2.5Y4/1)　山砂。
8　黄灰色土(2.5Y5/1)　山砂。
9　灰色土(5Y4/1)　山砂。中灰黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ微混。
10　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　山砂。極小灰黄色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
11　灰色土(7.5Y4/1)　山砂。
12　灰色土(7.5Y5/1)　山砂。
13　灰黄褐色土(10YR4/2)　山砂。かたくしまる。
14　黒褐色土(2.5Y3/2)　山砂。かたくしまる。
15　暗褐色土(10YR3/3)　山砂。かたくしまる。
16　黒褐色土(10YR3/1)　山砂。
17　黒褐色土(2.5Y3/1)　山砂。炭化物微混。
18　黒褐色土(10YR3/1)　粘質土。山砂少混。
19　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘質土。山砂少混。
20　黒褐色土(10YR3/1)　粘質土。山砂少混。
21　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘質土。砂・未分解植物微混。水田耕土。
22　灰黄色土(2.5Y4/1)　粘質土。砂・未分解植物微混。

SH06





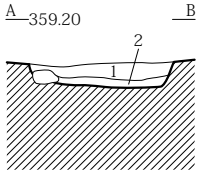
1　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘土。山砂少混。
2　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘土。山砂少混。還元。
3　黒褐色土(2.5Y5/1)　粘土。大灰黄色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少混。
4　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘土。大明ｵﾘｰﾌﾞ灰色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少混。
5　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。大粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。山砂混。やや泥炭質。



1　浅黄色土(5Y7/3)　山砂。
2　明ｵﾘｰﾌﾞ灰色土(5GY7/1)　ｼﾙﾄ。淘汰良し。
3　黒褐色土(2.5Y3/2)　粘土。山砂多混。淘汰やや悪い。
4　灰白色土(5Y7/2)　山砂。ややｼﾙﾄ質。
5　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘土。山砂多混。
6　黒褐色土(2.5Y3/2)　粘土。山砂少混。淘汰悪い。
7　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘土。大明ｵﾘｰﾌﾞ灰色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少混。
8　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。大粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。山砂混。やや泥炭質。

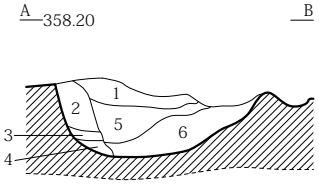
0 (1:40) 1m

SD42



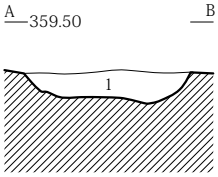
1　黒褐色土(10YR3/1)　砂。大ｼﾙﾄ粒多混。
2　黒色土(10YR2/1)　ｼﾙﾄ粒状砂。

SD47



1　灰色土(5Y4/1)　粘土。未分解植物片混。
2　灰色土(5Y4/1)　山砂多混。未分解植物片混。
3　灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(5Y6/2)　細砂。均一。
4　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘土。細砂・未分解植物片少混。
5　灰色土(5Y5/1)　粘土。灰白色粘土縞状に混。
6　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/1)　粘土。未分解植物片混。

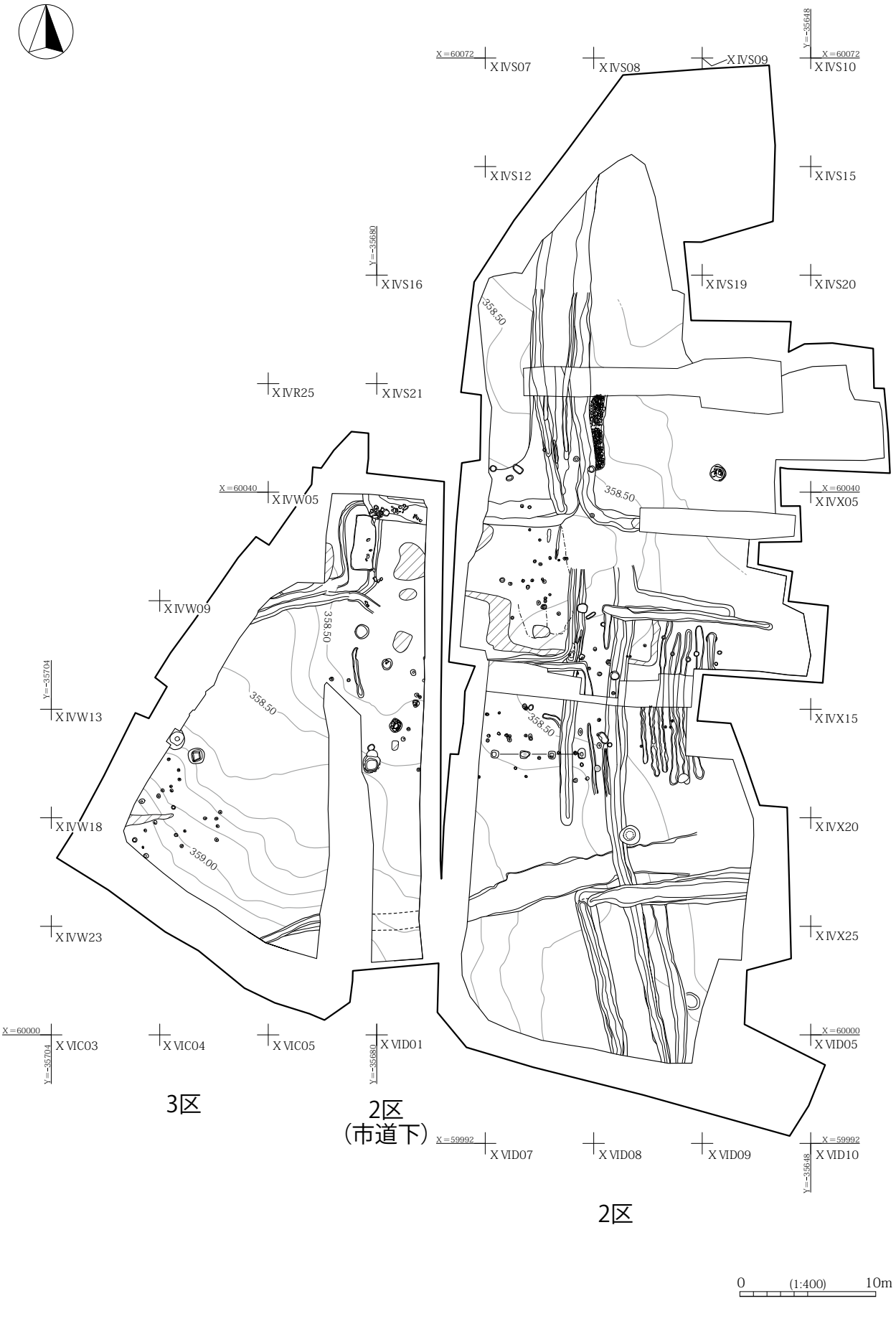
SD55

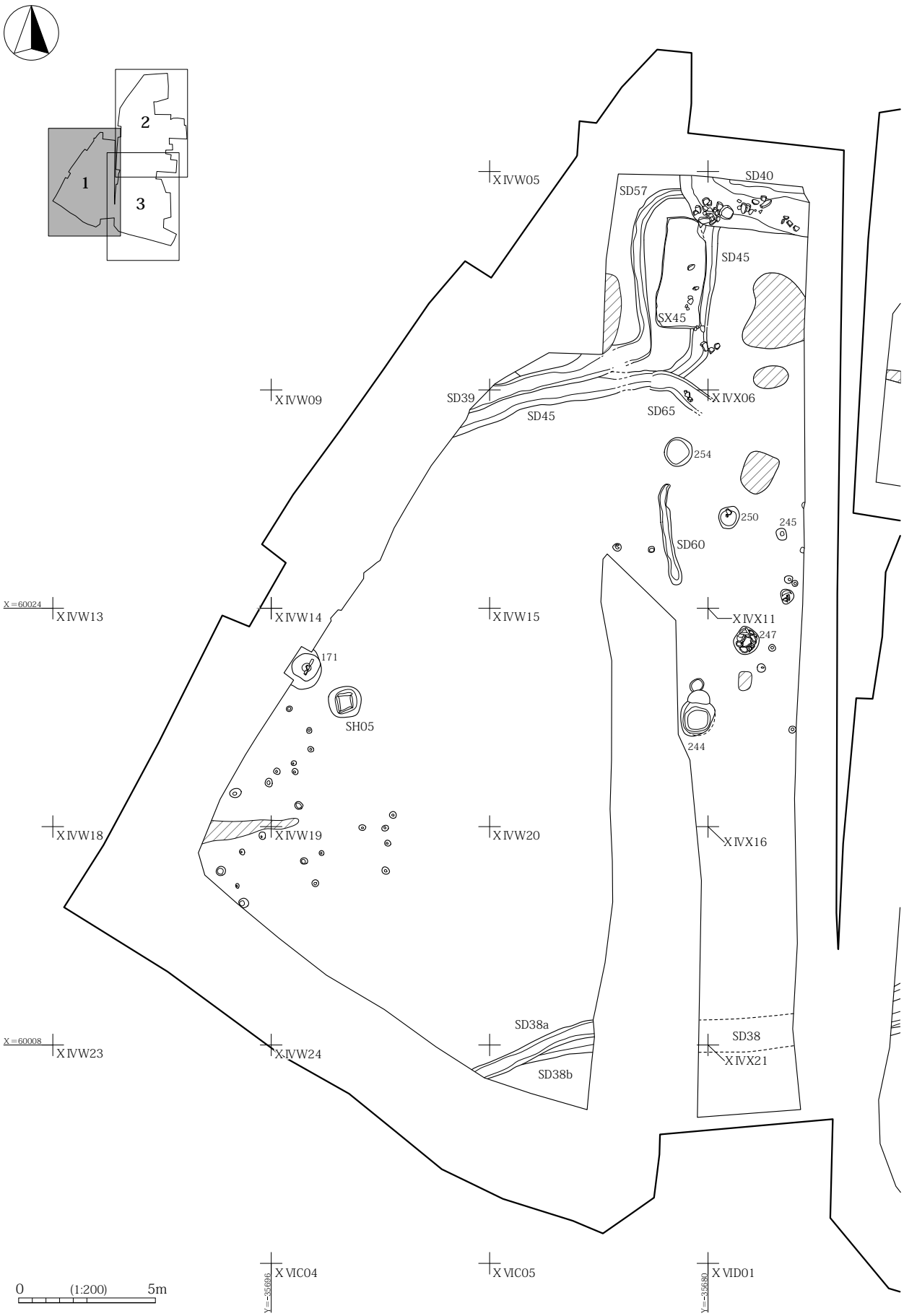


1　灰黄色土(2.5Y6/2)　粘土。炭粒少混。やや腐食。

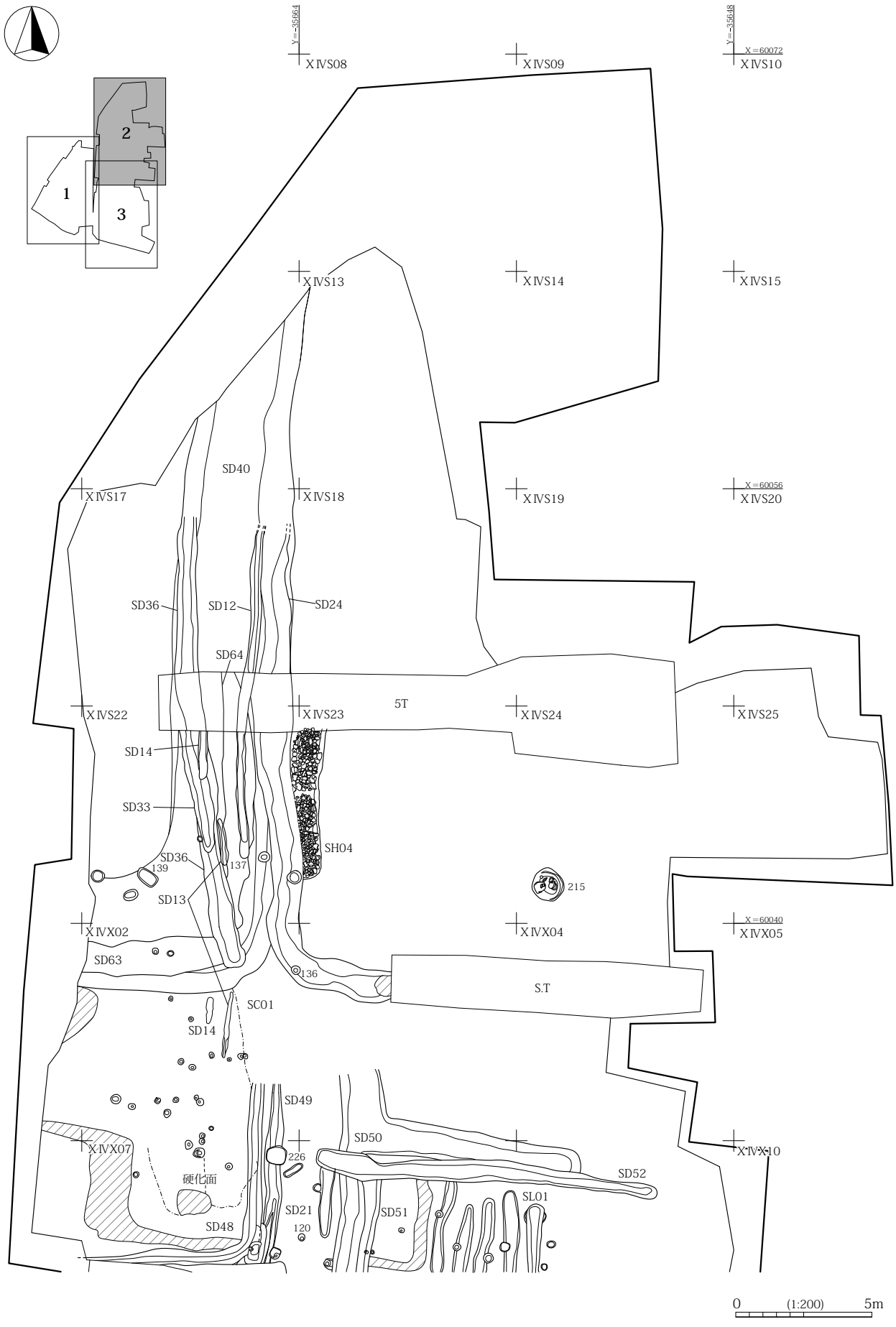
0 (1:40) 1m

図版 140　第３調査面　遺構配置図

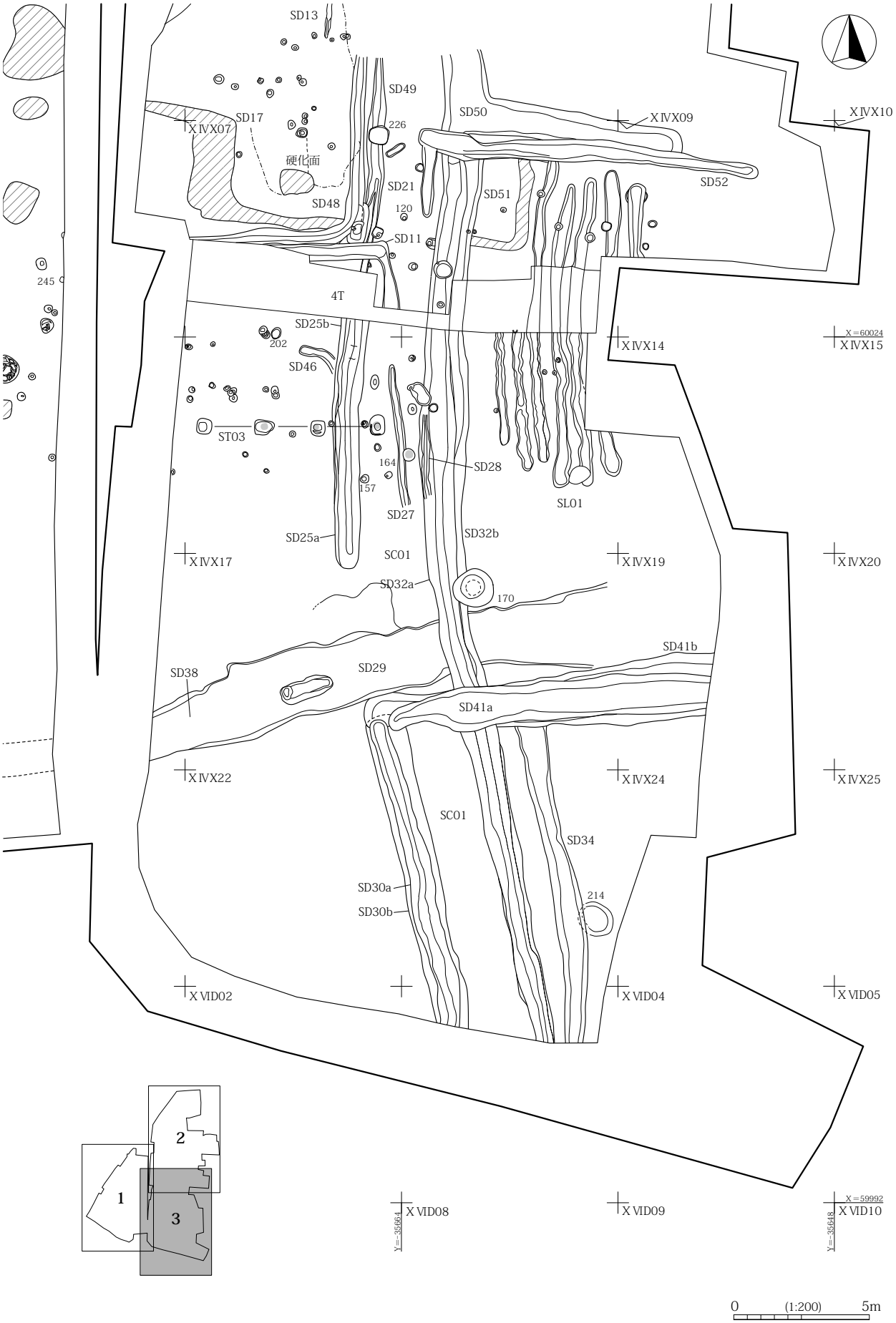



1
2
3
XIVW05
SD40
SD57
SD45
SX45
XIVW09
SD39
SD45
SD65
XIVX06
254
250
245
SD60
X=60024
XIVW13
XIVW14
XIVW15
XIVX11
247
171
SH05
244
XIVW18
XIVW19
XIVW20
XIVX16
SD38a
SD38
X=60008
XIVW23
XIVW24
SD38b
XIVX21
XVIC04
XVIC05
XVID01
Y=-35696
Y=-35680
0
(1:200)
5m

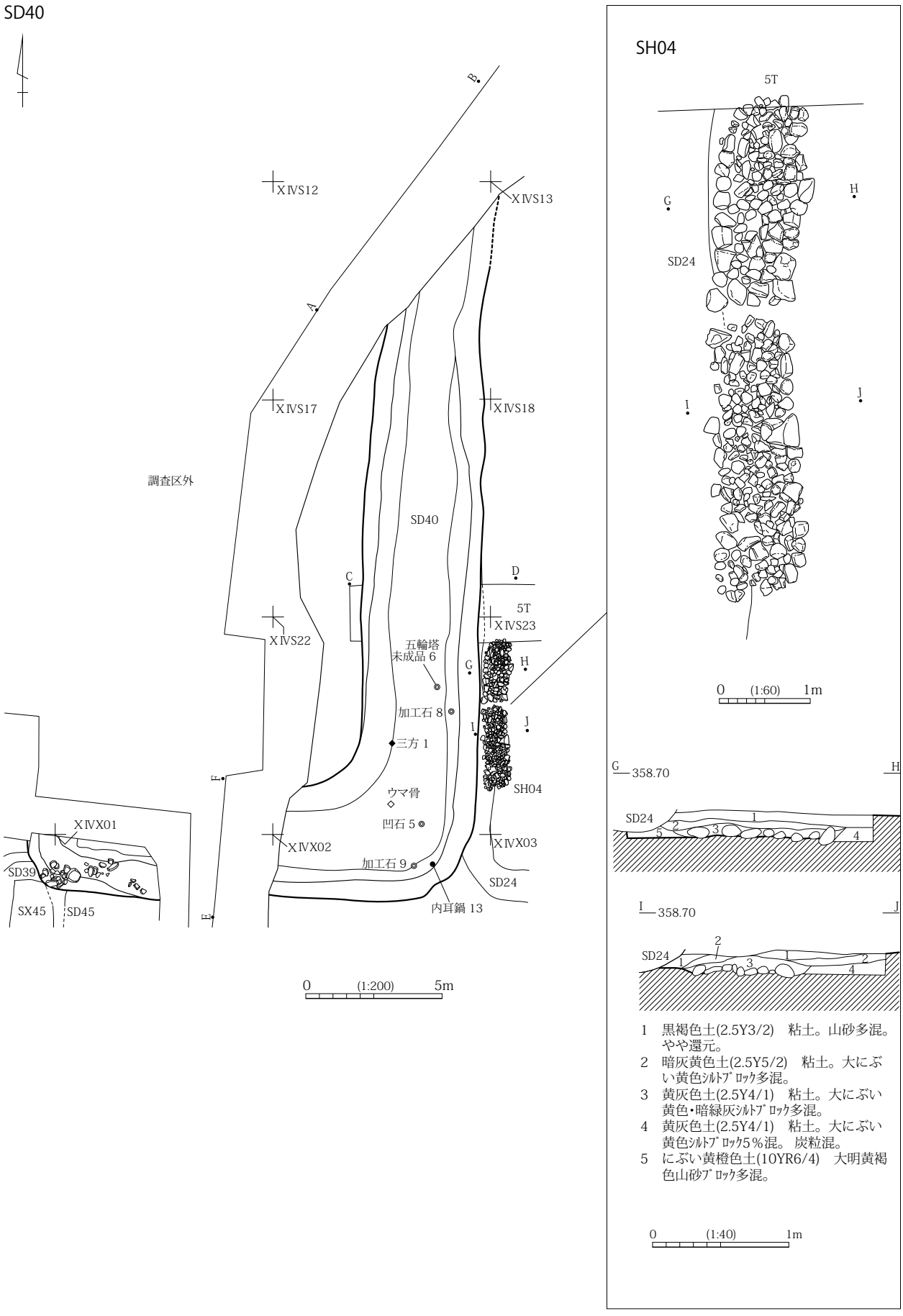
図版 142　第３調査面　遺構分布図２



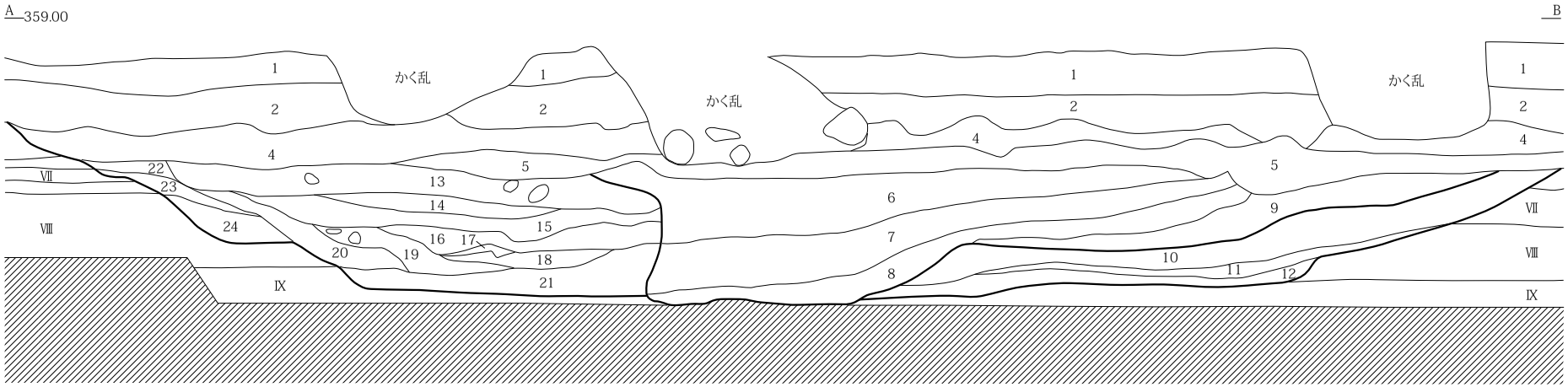
第３調査面　遺構分布図３　図版 143



図版 144　SD40　居館堀跡１、SH04　集石遺構



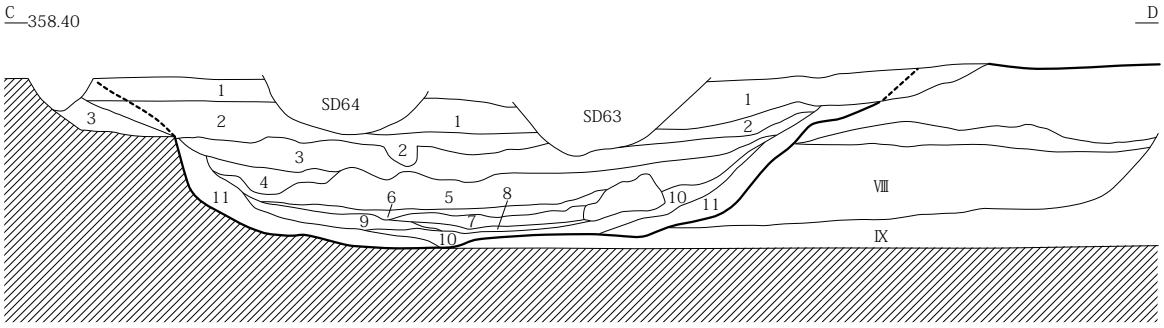
SD40



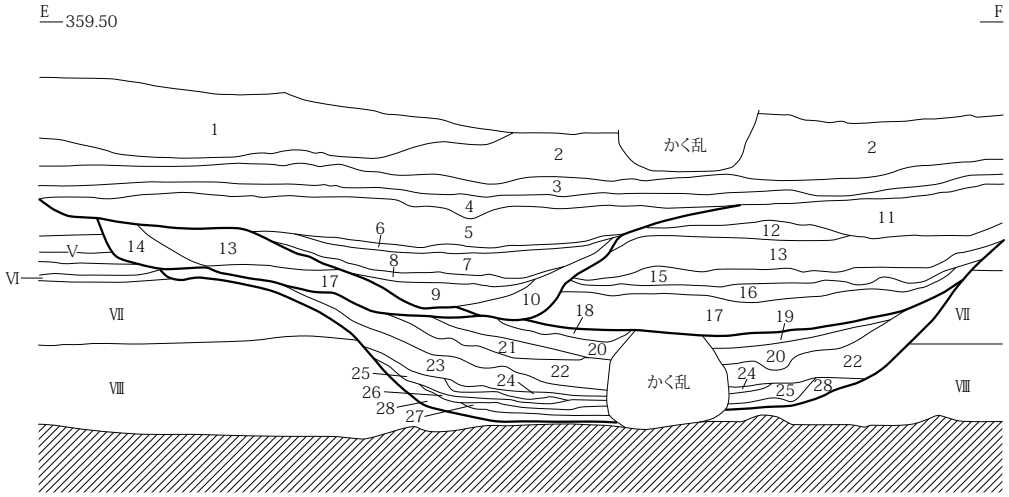
1　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘土。大黒褐色粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
2　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘土。山砂全体的に多混。大明緑灰色粘土・にぶ黄色山砂ﾌﾞﾛｯｸ多混。
3　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘土。腐食。
4　緑灰色土(5G5/1)　粘土。山砂少混。酸化すると褐灰色にみえる。
5　にぶ黄色土(2.5Y6/3)　山砂層。極小岩片多混。全体的に細砂に近い。
6　にぶ黄色土(2.5Y6/3)　山砂層。極小礫片多混。
7　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘土。山砂多混。若干腐食。
8　にぶ黄色土(2.5Y6/3)　山砂。極小粗砂礫全体的に多混。
9　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。還元。
10　黒褐色土(2.5Y3/1)　ｼﾙﾄ質土。細砂多混。未分解植物片混。腐植土。
11　黄灰色土(2.5Y4/1)　ｼﾙﾄ質土。細砂多混。未分解植物片少混。
12　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。山砂混。極小岩片少混。
13　灰色土(10Y5/1)　粘土。細砂少混。
14　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘土。細砂少混。未分解植物片多混。やや炭質木片混。
15　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。未分解植物片少混。若干泥炭質。
16　灰黄色土(2.5Y7/2)　粘土。若干波うつ。
17　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘土。未分解植物片少混。
18　黒褐色土(2.5Y3/1)　ｼﾙﾄ質土。未分解植物片多混。泥炭質強い。若干細砂に近い。
19　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。細砂多混。未分解植物片少混。
20　灰色土(5Y4/1)　粘土。。細砂少混。未分解植物片少混。
21　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。緑灰色土主体大ﾌﾞﾛｯｸ多混。炭粒混。やや12層に近い。
22　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘土。山砂少混。
23　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。細砂全体的に少混。やや泥炭質。

図版 146　SD40　居館堀跡３

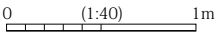
SD40

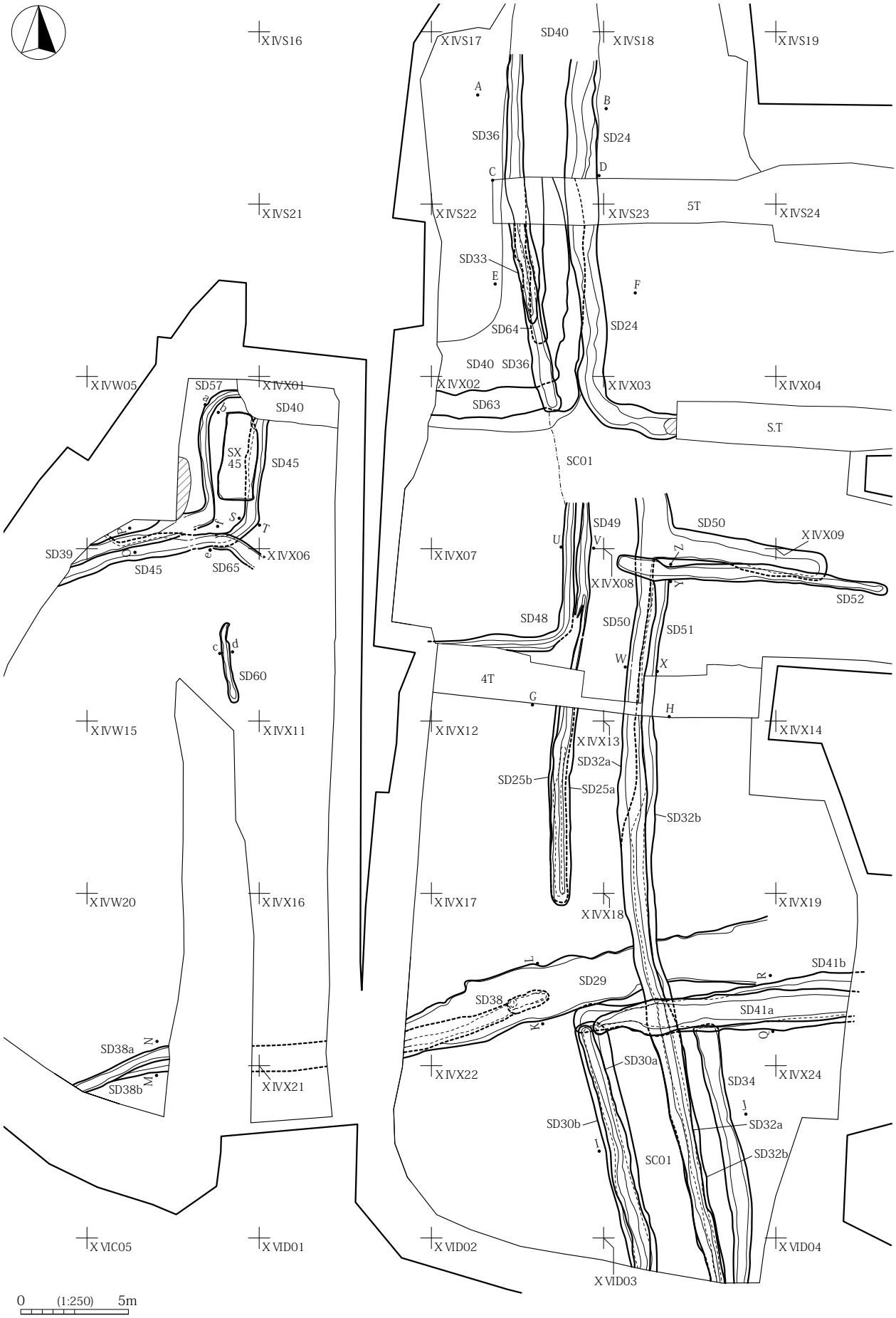


1　ｵﾘｰﾌﾞ黄色土(5Y6/4)　粘土。山砂少混。大粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
2　黄灰色(2.5Y6/1)　粘土。
3　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘土。炭粒・未分解植物片混。
4　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘土。中灰黄色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
5　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　粘土。中灰黄色土粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
6　灰黄色土(2.5Y6/2)　粘土。
7　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。炭粒混。
8　灰黄色土(2.5Y6/2)　6層と同質。
9　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。炭粒混。
10　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　粘土。細砂・未分解植物片少混。
11　黄灰色土(2.5Y4/1)　山砂多混。



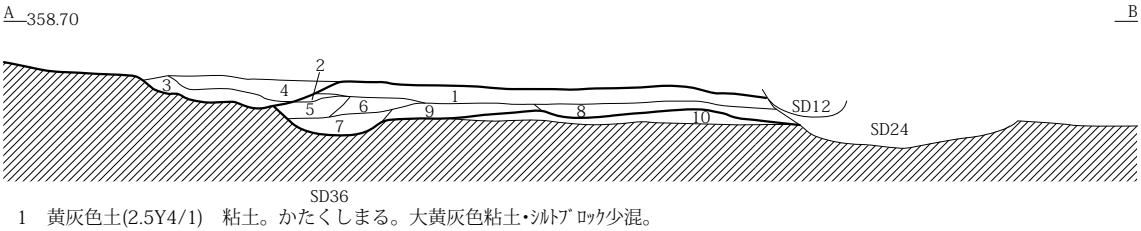
1　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。山砂多混。
2　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘土。山砂多混。中灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ・にぶ黄色山砂ﾌﾞﾛｯｸ多混。
3　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　粘土。未分解植物混。還元。
4　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘土。
5　灰黄色土(2.5Y6/2)　粘土。山砂多混。
6　灰黄色土(2.5Y7/2)　粘土。
7　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　ｼﾙﾄ質土。細砂混。炭粒混。
8　灰黄色土(2.5Y7/2)　粘土。明青灰色粘土混。
9　浅黄色土(2.5Y7/3)　粘土。
10　にぶ黄色土(2.5Y6/4)　山砂多混。大青灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。埋め土か。
11　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘土。山砂少混。
12　記載なし
13　にぶ黄色土(2.5Y6/4)　山砂多混。
14　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘土。山砂混。
15　浅黄色土(2.5Y7/4)　粘土。山砂多混。
16　灰オリーブ色土(5Y5/3)　山砂層。
17　浅黄色土(2.5Y7/4)　粘土。
18　明黄褐色土(2.5Y7/6)　粘土。
19　にぶ黄色土(2.5Y6/3)　粘土。炭粒混。
20　浅黄色土(2.5Y7/4)　粘土。大浅黄色粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
21　黒色土(2.5Y2/1)　粘土。大浅黄色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
22　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘土。
23　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。
24　浅黄色土(2.5Y7/4)　粘土。
25　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。
26　浅黄色土(2.5Y7/4)　粘土。
27　浅黄色土(2.5Y7/3)　粘土。
28　記載なし




XIVS16
XIVS17
SD40
XIVS18
XIVS19
A
B
SD36
SD24
C
D
XIVS21
XIVS22
XIVS23
5T
XIVS24
SD33
E
F
SD64
SD24
SD40 SD36
XIVW05
SD57
XIVX01
XIVX02
XIVX03
XIVX04
SD40
SD63
S.T
SX 45
SD45
SC01
SD49
SD50
XIVX09
XIVX07
U
V
XIVX08
SD52
SD39
SD45
SD65
XIVX06
SD48
SD50
SD51
W
X
4T
G
H
SD60
XIVW15
XIVX11
XIVX12
XIVX13
XIVX14
SD32a
SD25b
SD25a
SD32b
XIVW20
XIVX16
XIVX17
XIVX18
XIVX19
SD29
SD41b
SD38
SD41a
SD38a
SD38b
XIVX21
XIVX22
SD30a
SD34
XIVX24
SD30b
SD32a
SC01
SD32b
XVIC05
XVID01
XVID02
XVID03
XVID04
0
(1:250)
5m

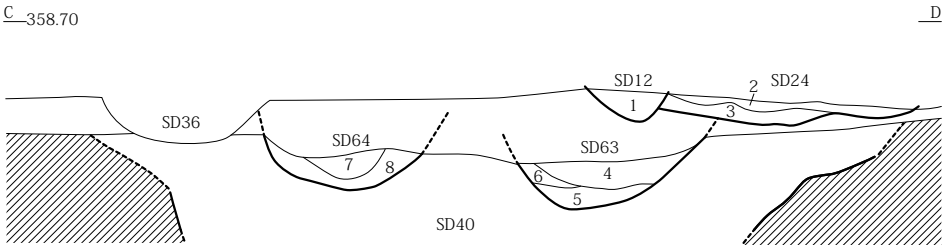
図版 148　SC01　道路跡２、道路跡関連の溝跡２

SC01



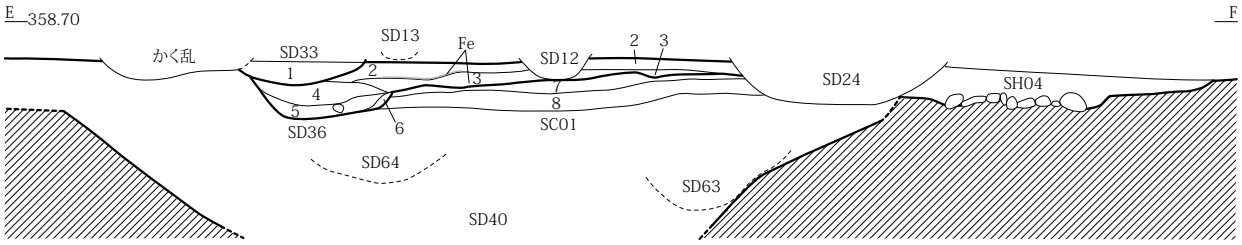
1　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。かたくしまる。大黄灰色粘土・ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少混。
2　にぶ黄色土(2.5Y6/3)　粘土。かたくしまる。山砂混。
3　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。やや泥炭。大黄灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
4　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。山砂混。大にぶい黄色ｼﾙﾄ・黒褐色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
5　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘土。山砂・大黄灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
6　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　粘土。山砂混。
7　黄褐色土(2.5Y5/3)　粘土。大オリーブ灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。炭粒少混。
8　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘土。山砂混。大黄灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
9　明黄褐色土(10YR6/6)　粘土。山砂多混。
10　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘土。かたくしまる。山砂少混。還元。

SD12・24・63・64



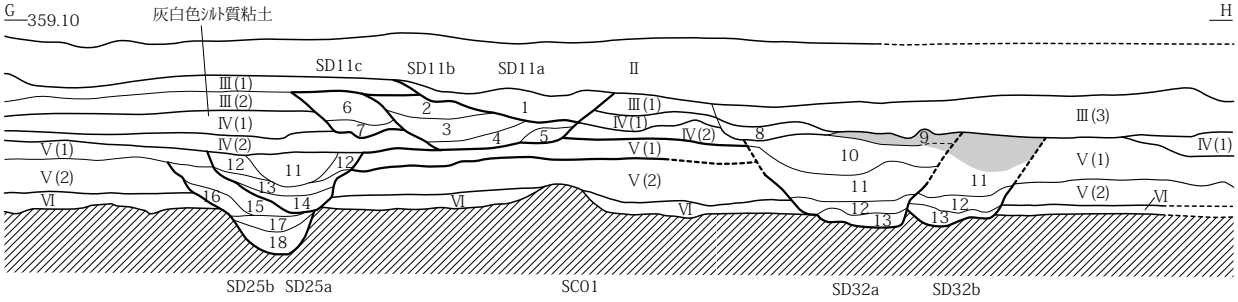
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土。山砂・大褐灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
2　黒褐色土(10YR3/1)　粘土。山砂多混。
3　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　大黄灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
4　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。大黒褐色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
5　にぶ黄色土(2.5Y6/3)　ｼﾙﾄ質土。砂少混。
6　記載なし
7　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。炭粒少混。
8　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘土。大黄灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SC01、SD33・36



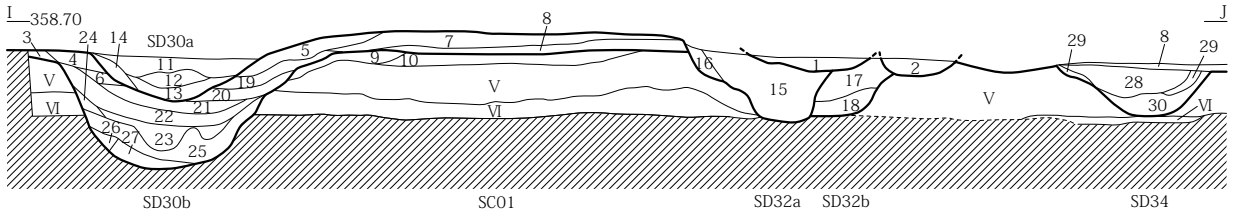
1　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘土。山砂少混。
2　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘土。かたくしまる。山砂少混。還元。
3　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘土。
4　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘土。山砂多混。
5　灰色土(10Y4/1)　粘土。山砂少混。
6　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。山砂少混。
7　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘土。かたくしまる。山砂少混。
8　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘土。かたくしまる。山砂多混。下層の黒褐色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。

0　(1:40)　1m



1　褐灰色土(10YR4/1)　山砂多混。SD11a埋土。
2　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　山砂多混。大褐灰色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。SD11b埋土。
3　黄灰色土(2.5Y5/1)　大褐灰色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。SD11b埋土。
4　黄灰色土(2.5Y4/1)　山砂多混。大黄灰色土ﾌﾞﾛｯｸ混。SD11b埋土。
5　明黄褐色土(10YR7/6)　大明黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ主体。黄灰色土混。SD11b埋土。
6　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　山砂多混。大黄灰色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。SD11c埋土。
7　黄灰色土(2.5Y5/1)　山砂多混。大にぶい黄橙色山砂ﾌﾞﾛｯｸ混。SD11c埋土。
8　褐灰色土(10YR4/1)　腐植土。山砂多混。還元。
9　にぶい黄橙色土(10YR7/4)　山砂多混。
10　記載なし
11　灰黄褐色土(10YR5/2)　粗砂。硬くしまる。
12　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂質粘土。
13　褐灰土(10YR5/1)　砂質粘土。粗砂混。
14　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂。粘土質。
15　褐灰土(10YR5/1)　砂質粘土質土。
16　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂質粘土質土。粗砂混。
17　褐灰土(10YR5/1)　粘土砂。
18　黒褐色土(10YR3/1)　粘土。未分解植物混。

SC01、SD30・32・34

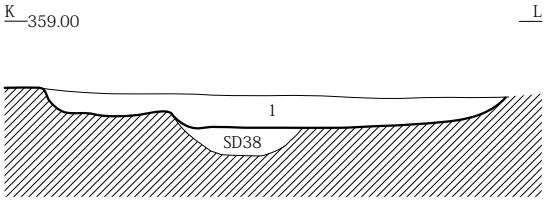


1　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂礫少混。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂礫・白色ｼﾙﾄ少混。極小白色土ﾌﾞﾛｯｸ微混。
3　褐色土(10YR4/4)　砂礫・極小黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
4　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　砂礫少混。極小黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ微混。
5　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　下部ややｼﾙﾄ質。砂礫少混。酸化した砂礫微混。
6　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土(2.5Y4/3)　砂礫少混。極小黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・褐色土微混。
7　褐色土(10YR4/4)　しまり強。砂礫少混。
8　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土(2.5Y4/3)　しまり強。砂礫少混。
9　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり強。砂礫・Ⅴ層ﾌﾞﾛｯｸ少混。
10　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土(2.5Y4/3)　部分的にｼﾙﾄ質土。しまり強。砂礫少混。暗灰黄色粘土混。
11　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘質土。細砂微混。
12　褐色土(10YR4/4)　山砂。地山層上部ににぶい黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ微混。
13　灰黄褐色土(10YR5/2)
14　灰黄褐色土(10YR5/2)　山砂。粘土混。
15　灰色土(5Y4/1)　粘質土と細砂の互層。
16　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土(2.5Y4/3)　極小灰色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。小炭化物微混。
17　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　山砂。
18　灰色土(5Y5/1)　粘質土。小Ⅴ層ﾌﾞﾛｯｸ少混。細砂微混。
19　黄褐色土(10YR5/6)　砂礫と細砂の互層。大褐灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。酸化。
20　褐色土(10YR4/4)　山砂。極小灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ微混。立ち上がり付近酸化。
21　褐色土(10YR4/4)　山砂。
22　灰色土(5Y5/1)　山砂。最下部灰ｵﾘｰﾌﾞ色ｼﾙﾄ混 。還元。
23　灰色土(5Y4/1)　細砂。礫少混。還元。
24　灰色土(5Y4/1)　ｼﾙﾄ。還元。
25　灰色土(5Y5/1)　ｼﾙﾄ。還元。
26　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/1)　山砂。還元。
27　灰色土(5Y4/1)　粘質土。淘汰良し。
28　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/1)　粗砂。山砂混。炭化物粒少混。
29　灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(5Y4/2)　粗砂。炭化物粒少混。
30　黒色土(5Y2/1)　粘土。砂ﾌﾞﾛｯｸ混。

0　(1:40)　1m

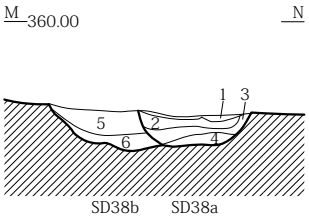
図版 150　道路跡関連の溝跡４

SD29



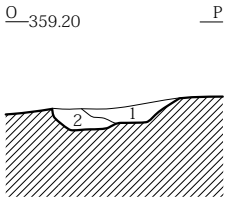
1　にぶい黄橙色土(10YR7/4)　砂。大褐灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SD38a・b



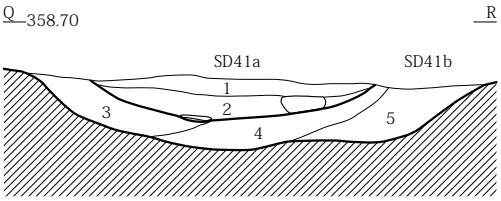
1　褐灰色土(10YR5/1)　山砂。
2　褐灰色土(10YR5/1)　山砂。
3　褐灰色土(10YR5/1)　粘土。
4　灰黄褐色土(10YR5/2)　黄褐色・暗褐色砂質ﾌﾞﾛｯｸ層。
5　記載なし
6　記載なし

SD39



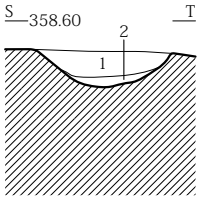
1　にぶい黄橙色土(10YR6/4)　山砂。
2　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　砂質ｼﾙﾄ。

SD41a・b



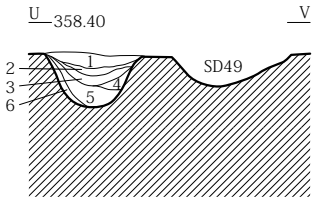
1　褐灰色土(10YR5/1)　山砂。中風化礫少混。
2　褐灰色土(10YR5/1)　山砂。小風化礫少混。
3　褐灰色土(10YR6/1)　砂質ｼﾙﾄ。
4　褐灰色土(10YR6/1)　山砂。
5　褐灰色(7.5Y5/1)　山砂。

SD45



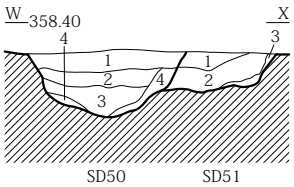
1　褐灰色土(10YR5/1)　粘土。埋め土か。
2　ｵﾘｰﾌﾞ灰色土(5GY6/1)　山砂多混。

SD48・SD49



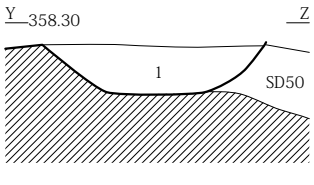
1　にぶい黄色土(2.5Y6/4)　細砂。
2　灰褐色土(5YR6/2)　ｼﾙﾄ。淘汰良し。
3　褐灰色土(5YR5/1)　粘土。淘汰良し。
4　灰色土(5Y5/1)　ｼﾙﾄ質土。大山砂ﾌﾞﾛｯｸ少混。
5　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘土。大山砂ﾌﾞﾛｯｸ少混。
6　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘土。大山砂ﾌﾞﾛｯｸ 混。

SD50・SD51



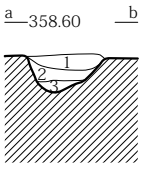
1　にぶい黄橙色土(10YR6/4)　山砂。
2　褐灰色土(10YR5/1)　粘土。
3　灰ｼﾙﾄ色土(N4/0)　褐灰色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
4　黒褐色土(10YR3/1)　大砂ﾌﾞﾛｯｸ少混。

SD52



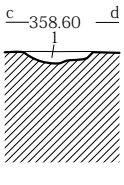
1　灰(N4/0)　埴壌土。粗粒砂。

SD57



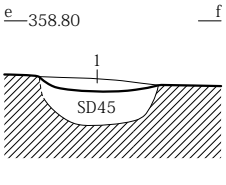
1　記載なし
2　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘土。浅黄色粘土ﾌﾞﾛｯｸ・黒褐色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
3　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘土。大浅黄色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。

SD60



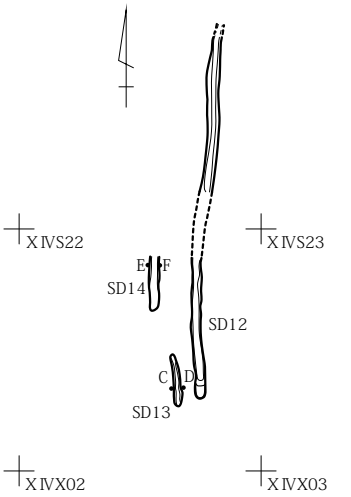
1　黄灰色土(10YR5/1)　粘土。山砂少混。還元。

SD65

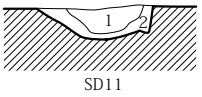


1　明黄褐色土(10YR6/6)　山砂層。

0　(1:40)　1m



A 359.80 B



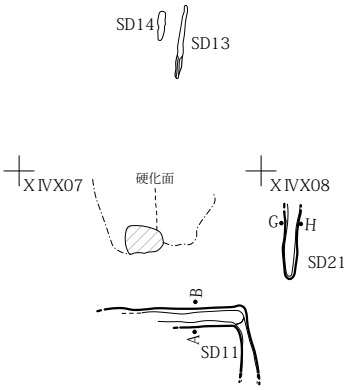
1 明黄褐色土(10YR7/6) 山砂。
2 褐灰色土(10YR4/1) 山砂多混。炭粒少混。やや還元。

C D 358.80

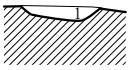
1 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土。山砂多混。大褐灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。

E F 358.80

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土。山砂多混。大褐灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。

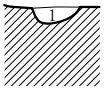


G 358.80 H



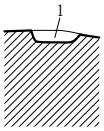
1 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 山砂多混。還元。

I 358.80 J



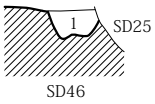
1 暗褐色土(10YR3/3) 粘土質砂。極小炭化物粒少混。

K 358.80 L



1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂。

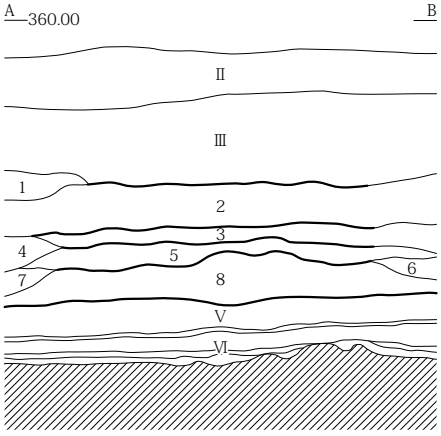
M 358.50 N



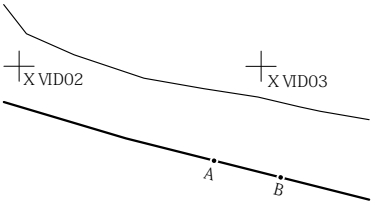
1 褐灰色土(10YR4/1) ｼﾙﾄ。粗砂ﾌﾞﾛｯｸ多混。大明黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。

2区南壁道路跡

A 360.00 B



1～8層＝Ⅳ層
1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 山砂。小黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
2 灰黄褐色土(10YR4/2) 山砂。ﾌﾞﾛｯｸ混。やや還元。
3 灰黄褐色土(10YR4/2) 山砂。小にぶい黄橙色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
4 褐灰色土(10YR4/1) 粘土。山砂少混。
5 褐灰色土(10YR4/1) しまりやや強。粘土ﾌﾞﾛｯｸ・黄褐色砂質土・小炭化物ﾌﾞﾛｯｸ少混。
6 褐灰色土(10YR4/1) 還元。
7 記載なし
8 褐灰色土(10YR5/1) 粘土。しまりやや強。

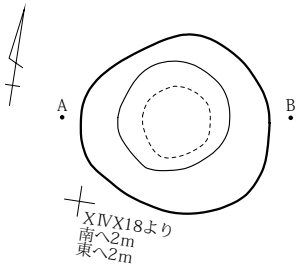


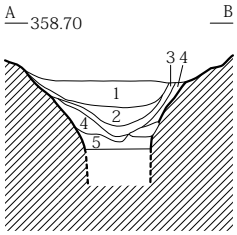
0 (1:250) 5m

0 (1:40) 1m

図版 152　中世の井戸跡 1

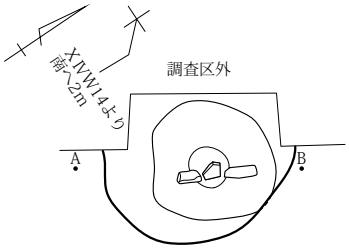
SK170

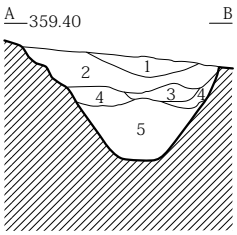




1　暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色土(N4/1)　粗砂。
2　暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色土(N4/1)　粘土。
3　灰色土(N4/0)　砂質粘土。山砂少混。極小炭化物粒・未分解植物片混。
4　暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色土(N3/1)　砂。小炭化物粒混。未分解植物片少混。
5　黒色土(N2/1)　ｼﾙﾄ質砂。

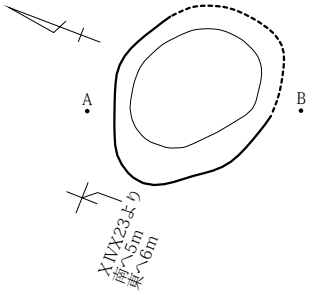
SK171

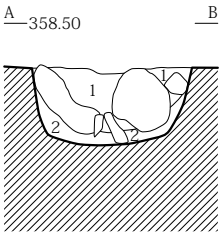




1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　山砂混。
2　褐灰色土(10YR4/1)　炭化物少混。
3　褐灰色土(10YR5/1)
4　褐灰色土(10YR5/1)　暗褐色土ﾌﾞﾛｯｸ、褐灰色土ﾌﾞﾛｯｸ混。炭化物少混。
5　記載なし

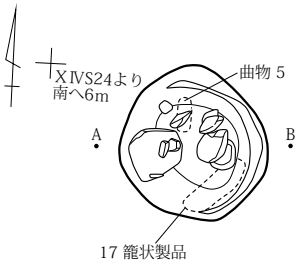
SK214

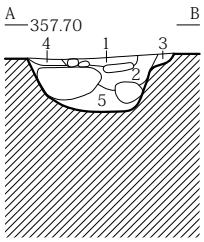




1　褐灰色土(10YR4/1)　ｵﾘｰﾌﾞ色礫混。山砂多混。
2　褐灰色土(10YR4/1)　砂質粘土。中茶色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。

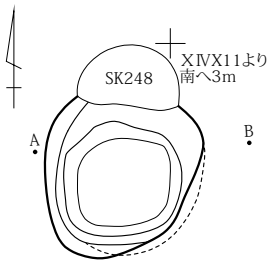
SK215

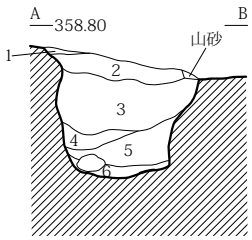




1　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘土。山砂多混。
2　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘土。未分解植物片少混。
3　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘土。大黒色粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。細砂少混。
4　黄灰色土(2.5Y6/1)　粘土。大黒色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
5　黄灰色土(2.5Y5/1)　粘土。細砂少混。未分解植物片少混。還元。

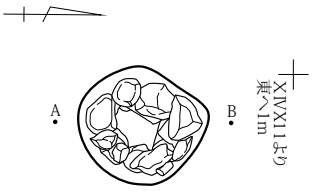
SK244

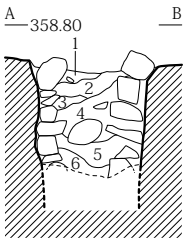




1　黒褐色土(2.5Y3/2)　山砂混。炭化物少混。
2　黄灰色土(2.5Y4/1)　山砂混。炭化物少混。
3　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/1)　山砂混。炭化物少混。
4　灰色土(5Y4/1)　山砂・大暗褐色土粒混。
5　灰色土(5Y4/1)　山砂。炭化物少混。
6　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/1)　ｼﾙﾄ。

SK247

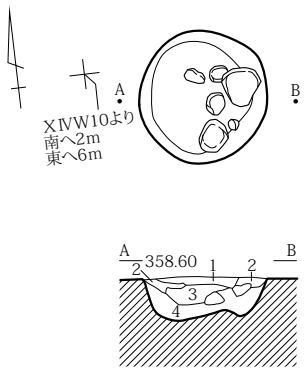




1　灰色土(5Y4/1)　粘質土。山砂少混。
2　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/1)　粘質土。細砂少混。
3　灰色土(5Y4/1)　ｼﾙﾄ。
4　灰色土(5Y4/1)　山砂。
5　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/1)　極小黒色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
6　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/1)　山砂。黒色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。

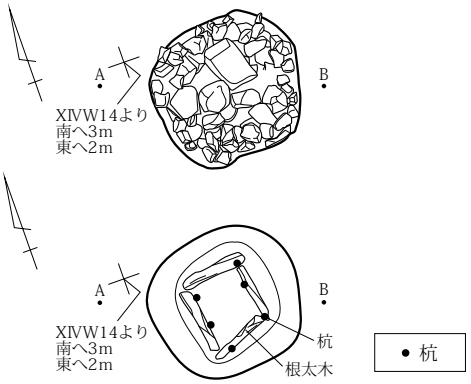
0　(1:60)　2m

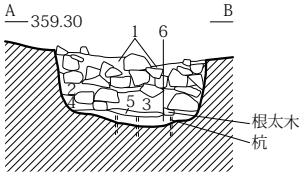
SK254



1　灰色土(5Y6/1)　粘土。淘汰良し。
2　黄褐色土(2.5Y 5/3)　粘土。山砂多混。
3　灰色土(5Y5/1)　粘土。大黄灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。還元。淘汰悪い。
4　灰色土(7.5Y5/1)　粘土。山砂多混。大灰色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少混。還元。淘汰悪い。

SH05

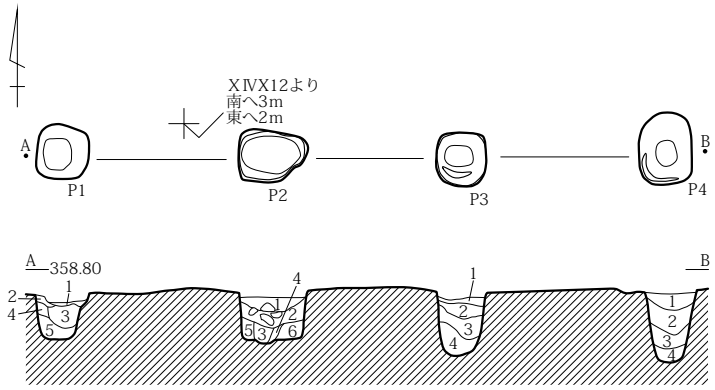




1　灰黄褐色土(10YR4/2)　山砂少混。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/3)
3　赤灰色土(2.5YR5/1)　粗い砂。
4　赤灰色土(2.5YR5/1)　砂質。
5　褐灰色土(10YR5/1)　粘土。
6　褐灰色土(10YR4/1)　砂。

0　(1:60)　2m

ST03



P1
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　山砂混。極小灰色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘質土。細砂・極小黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
3　灰褐色土(10YR4/1)　細砂混。中灰色粘質土ﾌﾞﾛｯｸ少混。極小黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ微混。
4　灰褐色土(10YR4/1)　細砂・大灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。大黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ微混。
5　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/2)　細砂・大灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。

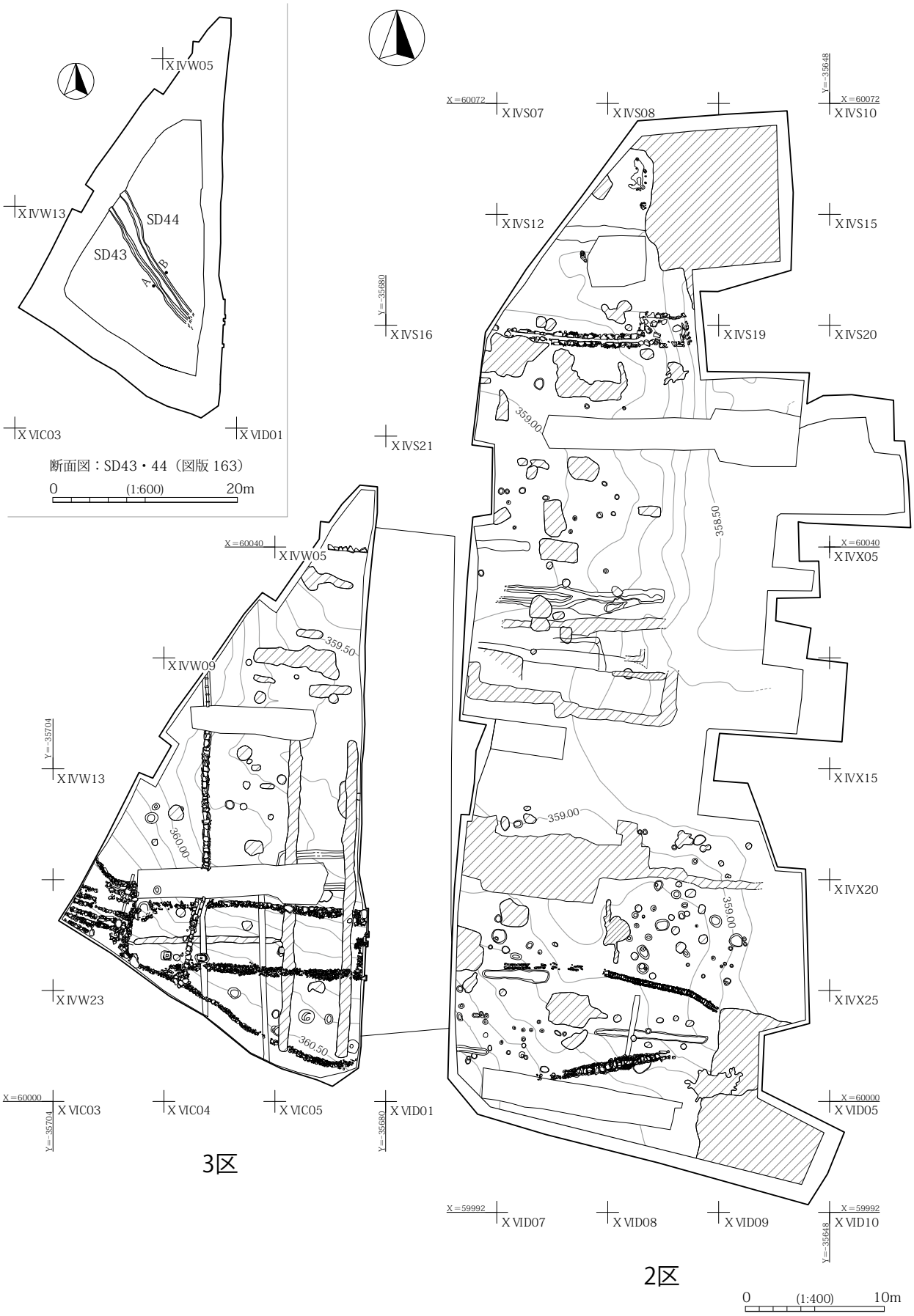
P2
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　細砂多混。大黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・Fe粒少混。
2　灰褐色土(10YR4/1)　細砂混。小灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
3　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/1)　細砂・ﾌﾞﾛｯｸ混。
4　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/2)　細砂・黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
5　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/2)　細砂混。大黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
6　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/1)　細砂混。

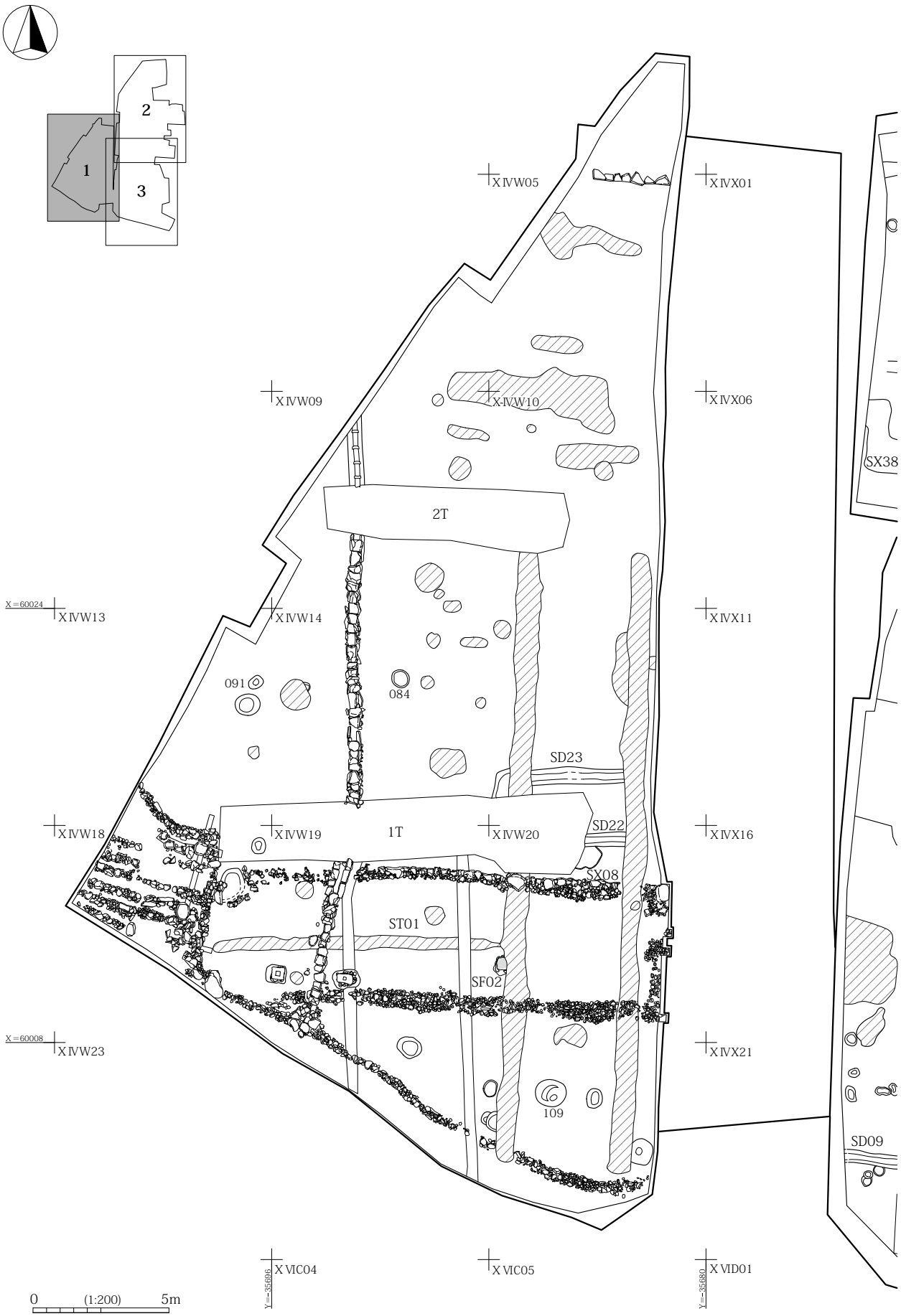
P3
1　P2の1層に類似。
2　灰褐色土(10YR4/1)　細砂混。中灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
3　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/1)　細砂・大灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
4　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/2)　細砂混。中灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。

P4
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　細砂少混。大暗褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・小黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・Fe粒少混。
2　灰褐色土(10YR4/1)　細砂混。中灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
3　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/2)　細砂混。中灰白色粘土微混。中灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
4　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(5Y3/1)　細砂多混。中灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。

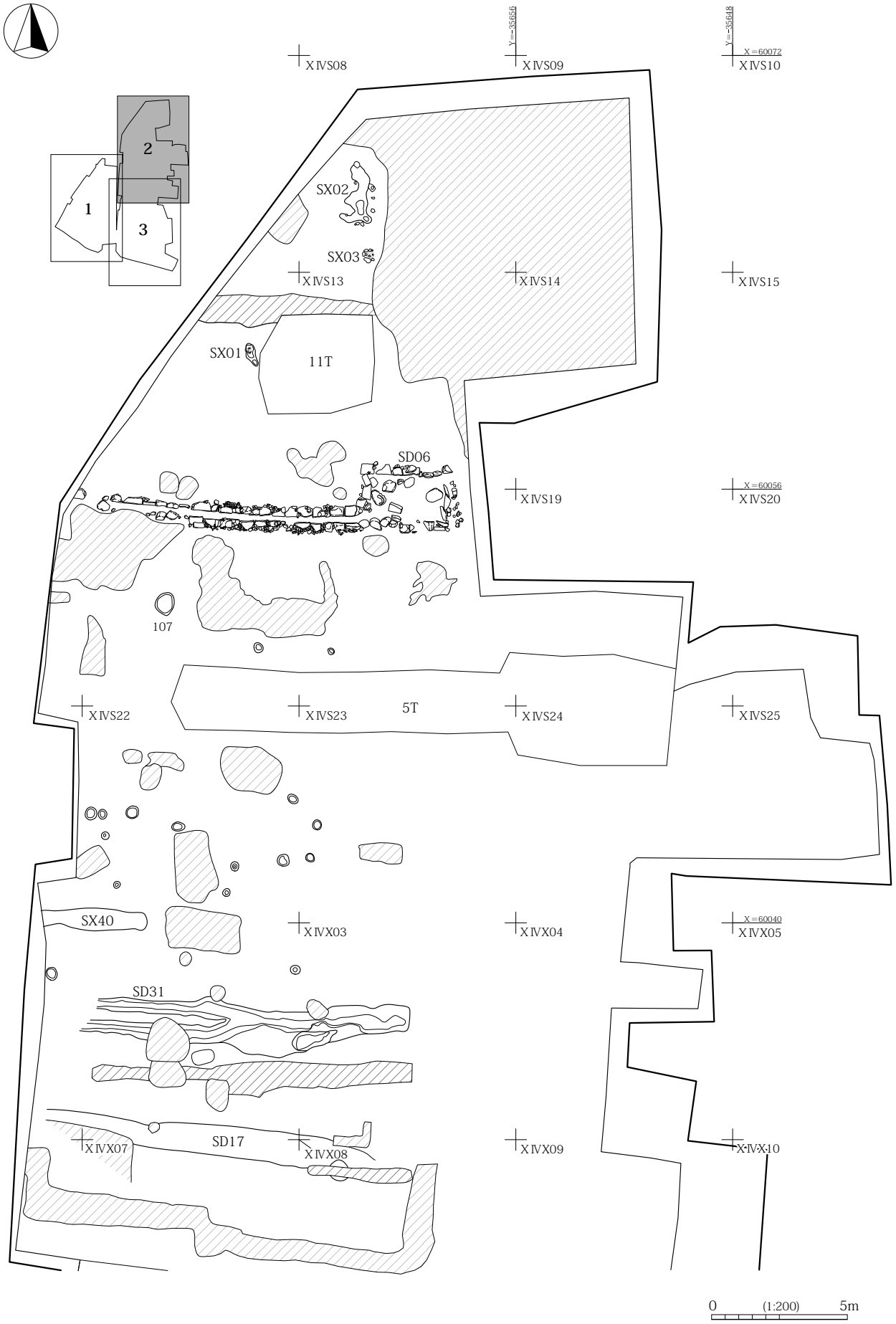
0　(1:80)　2m

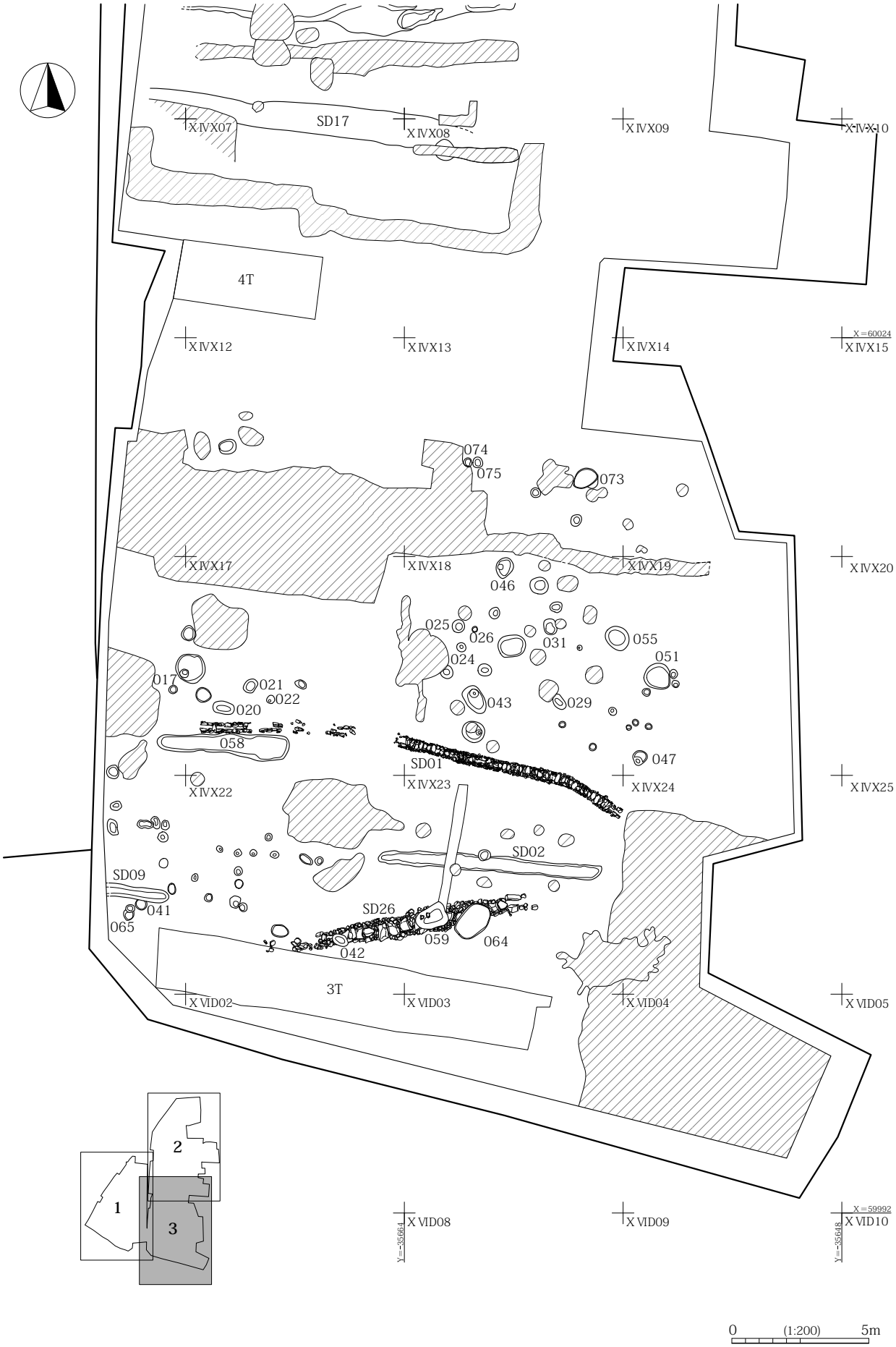
図版 154　第１調査面・第２調査面　遺構配置図




1
2
3
XIVW05
XIVX01
XIVW09
XIVW10
XIVX06
SX38
2T
X=60024
XIVW13
XIVW14
XIVX11
091
084
SD23
XIVW18
XIVW19
1T
XIVW20
SD22
XIVX16
SX08
ST01
SF02
X=60008
XIVW23
XIVX21
109
SD09
XVIC04
XVIC05
XVID01
Y=-35696
Y=-35680
0
(1:200)
5m

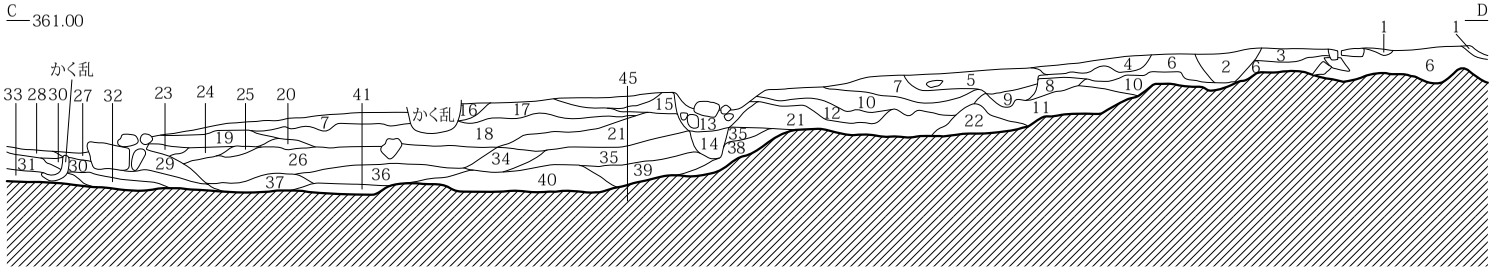
図版 156　第１調査面・第２調査面　遺構分布図２




XIVX07
SD17
XIVX08
XIVX09
XIVX10
4T
XIVX12
XIVX13
XIVX14
X=60024
XIVX15
074
075
073
XIVX17
XIVX18
XIVX19
XIVX20
046
025
026
031
055
051
024
017
021
022
020
043
029
058
SD01
047
XIVX22
XIVX23
XIVX24
XIVX25
SD02
SD09
041
065
SD26
059
064
042
3T
XVID02
XVID03
XVID04
XVID05
2
1
3
XVID08
XVID09
X=59992
XVID10
Y=-35664
Y=-35648
0
(1:200)
5m

図版 158　ST01　長谷窯工房跡 1

ST01

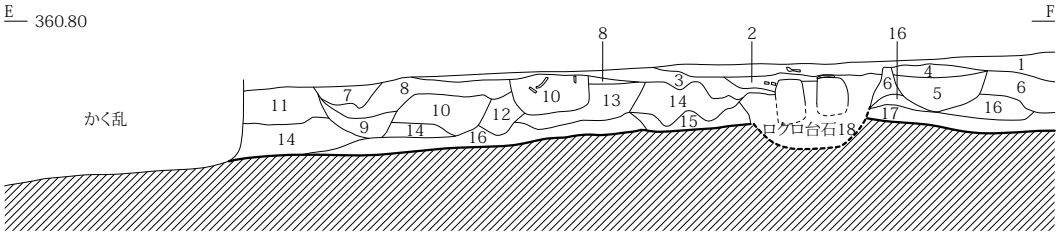


1　明黄褐色土(10YR6/6)
2　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　大白色粘土多混。大炭化物・大黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
3　記載なし
4　記載なし
5　灰黄褐色土(10YR5/2)　極大白色粘土粒・陶器片多混。
6　記載なし
7　記載なし
8　記載なし
9　褐灰色土(10YR4/1)　極小白色粘土小粒子混。還元。
10　灰黄褐色土(10YR5/2)　山砂少混。
11　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　大砂ﾌﾞﾛｯｸ混。中灰褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・中黒褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。造成土。
12　記載なし
13　灰黄褐色土(10YR5/2)　大暗褐色土・黒褐色土ブロック多混。
14　灰黄褐色土(10YR4/2)　暗褐色土混。
15　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　極大炭化物少混。山砂微混。石英粒混。
16　記載なし
17　灰黄褐色土(10YR5/2)　大白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。酸化鉄ﾌﾞﾛｯｸ混。陶器片多混。造成土。
18　記載なし
19　記載なし
20　記載なし
21　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　山砂・中薄い黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ微混。
22　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　黄褐色砂質ﾌﾞﾛｯｸ・黒褐色土・褐色土混。
23　記載なし
24　灰黄褐色土(10YR5/2)　陶器片少混。淘汰良し。
25　灰黄褐色土(10YR5/2)　灰黄褐色土・小黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ主体。砂混。
26　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　大灰褐色土・黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ主体。大亜角礫微混。
27　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　山砂少混。小灰黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
28　灰黄褐色土(10YR5/2)　灰黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・酸化鉄集積ﾌﾞﾛｯｸ混。
29　灰黄褐色土(10YR5/2)　中炭化物微混。小褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
30　褐灰色土(10YR5/1)　灰黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ主体。小暗褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
31　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　炭化物粒少混。黄褐色砂質ﾌﾞﾛｯｸ多混。
32　灰黄褐色土(10YR5/2)　灰黄褐色土・暗褐色土ﾌﾞﾛｯｸ主体。砂混。
33　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　黄褐色土粒混。
34　灰黄褐色土(10YR4/2)　大暗褐色粘質土ﾌﾞﾛｯｸ多混。大灰褐色・黄褐色砂質ﾌﾞﾛｯｸ混。
35　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　砂質土。淘汰良し。
36　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　大黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・灰黄褐色砂質ﾌﾞﾛｯｸ主体。
37　褐灰色土(10YR5/1)　砂質土。中黄褐色粘質土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
38　灰黄褐色土(10YR5/2)　大暗褐色粘質土ﾌﾞﾛｯｸ混。
39　礫か。
40　褐灰色土(10YR4/1)　小砂質ﾌﾞﾛｯｸ・大灰褐色土ﾌﾞﾛｯｸ微混。
41　褐灰色土(10YR4/1)　大灰褐色・黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ主体。

0　(1:60)　2m

図版 160　ST01　長谷窯工房跡３

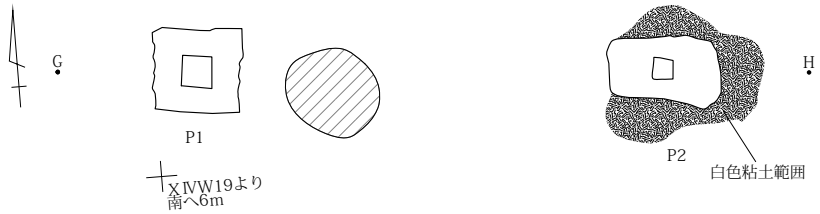
ST01



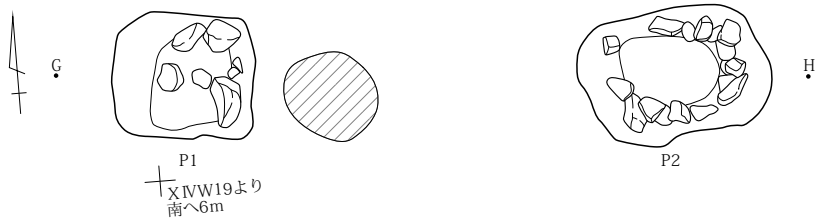
1　灰黄褐色土(10YR 5/2)　大白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。陶器片多混。造成土。
2　褐灰色土(10YR4/1)　山砂･陶器片少混。やや還元。
3　褐灰色土(10YR5/1)　大白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
4　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　ﾌﾞﾛｯｸ主体。大白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
5　灰黄褐色土(10YR 6/2)　礫･陶器片混。
6　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂質土。山砂少混。淘汰良し。
7　灰黄褐色土(10YR 5/2)　山砂少混。
8　灰黄褐色土(10YR 5/2)　大灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸ･陶器片多混。中白色粘土粒･中炭化物粒少混。
9　褐灰色土(10YR5/1)　山砂･陶器片少混。やや還元。
10　灰黄褐色土(10YR 5/2)　大褐灰色土ﾌﾞﾛｯｸ混。山砂少混。
11　灰黄褐色土(10YR 5/2)　山砂･陶器片少混。やや還元。
12　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　中炭化物粒少混。
13　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　山砂･大炭化物粒少混。淘汰良し。
14　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　中炭化物粒少混。山砂･陶器片混。
15　黒褐色土(10YR 3/1)　淘汰良し。
16　灰黄褐色土(10YR 5/2)　大暗褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。
17　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　砂質土。淘汰良し。

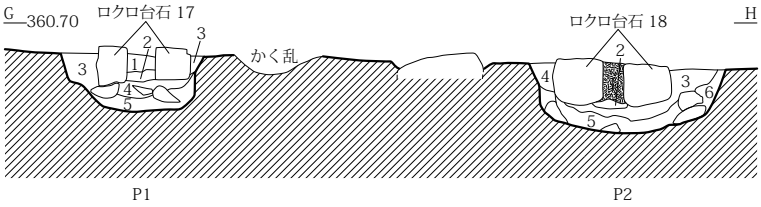
P1･P2

検出



掘方





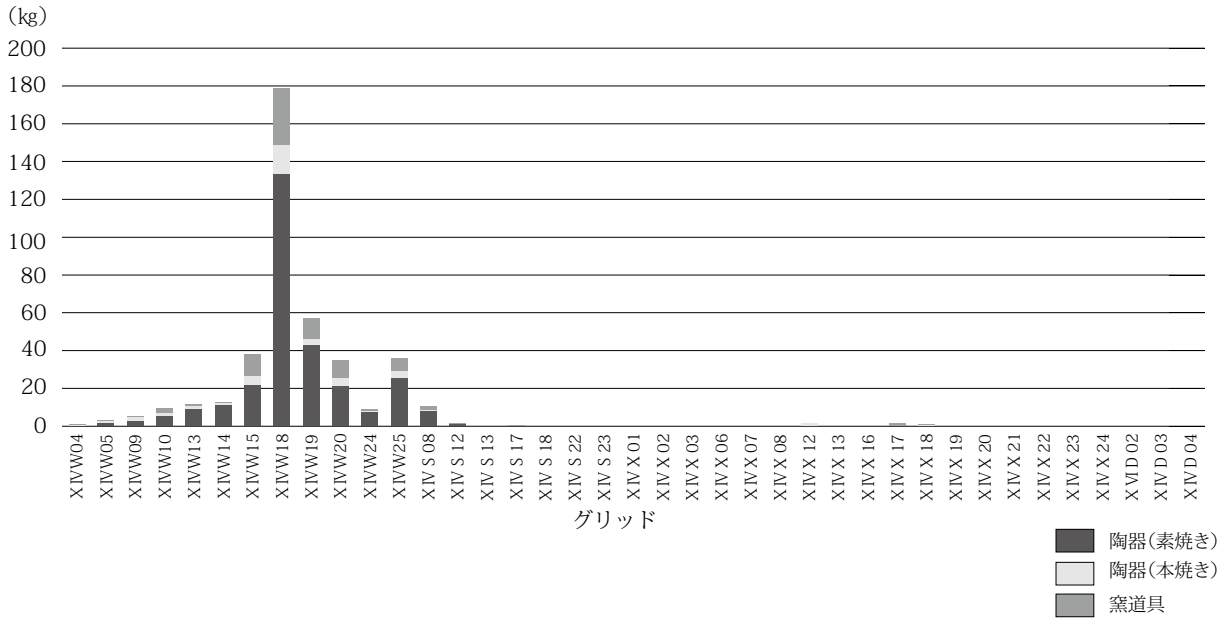
P1
1　褐灰色土(10YR 5/1)　中白～黄橙色粘土少混。
2　黒褐色土(10YR 3/1)　大粘土ブロック多混。陶器片少混。
3　褐灰色土(10YR 5/1)　山砂多混。中白～黄橙色粘土粒少混。
4　にぶい黄褐色土(10YR 5/3)　灰黄褐色粘土ﾌﾞﾛｯｸ混。
5　にぶい黄褐色土(10YR 7/3)　山砂多混。

P2
1　にぶい黄橙色土(10YR 6/4)　粘土。山砂少混。
2　褐灰色土(10YR 6/1)　大黄橙色粘土ﾌﾞﾛｯｸ少混。
3　褐灰色土(10YR 4/1)　山砂多混。
4　灰黄褐色土(10YR 4/2)　中黄橙色粘土ﾌﾞﾛｯｸ･陶器片少混。
5　褐灰色土(10YR 5/1)　粘土。
6　褐灰色土(10YR 5/1)　小明黄褐色粘土少混。

0　(1:40)　1m

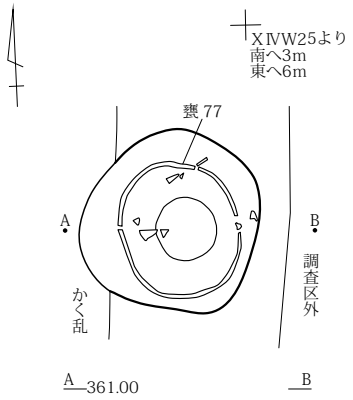
長谷窯関連遺物出土状況

工房関連遺物のグリッド別出土量



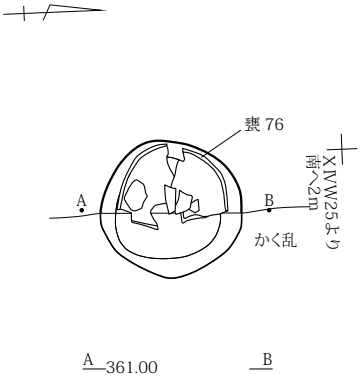
図版 162　近代の土坑

SK111



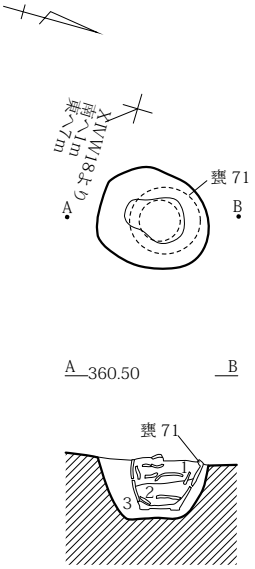
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　砂。
2　明黄褐色土(10YR6/6)　砂。
3　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　砂。

SK112



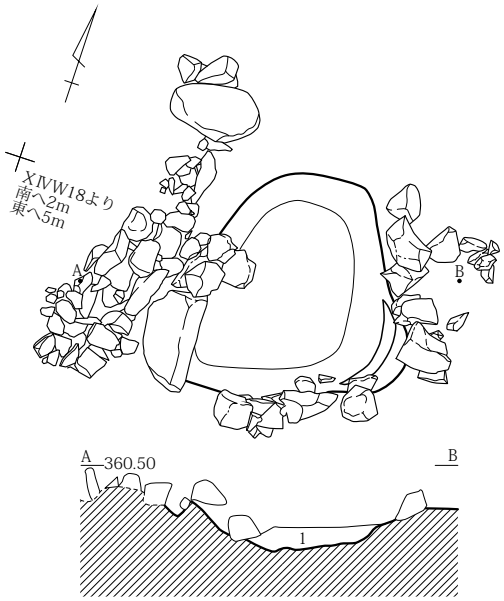
1　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂。
2　明黄褐色土(10YR6/6)　砂。瓦･ｶﾞﾗｽ片混。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　硬い。にぶい黄褐色礫ﾌﾞﾛｯｸ混。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘土と砂の互層。
5　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂質土。大石英多混。

SK114



1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂。
3　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂質土。粘炭化物粒混。

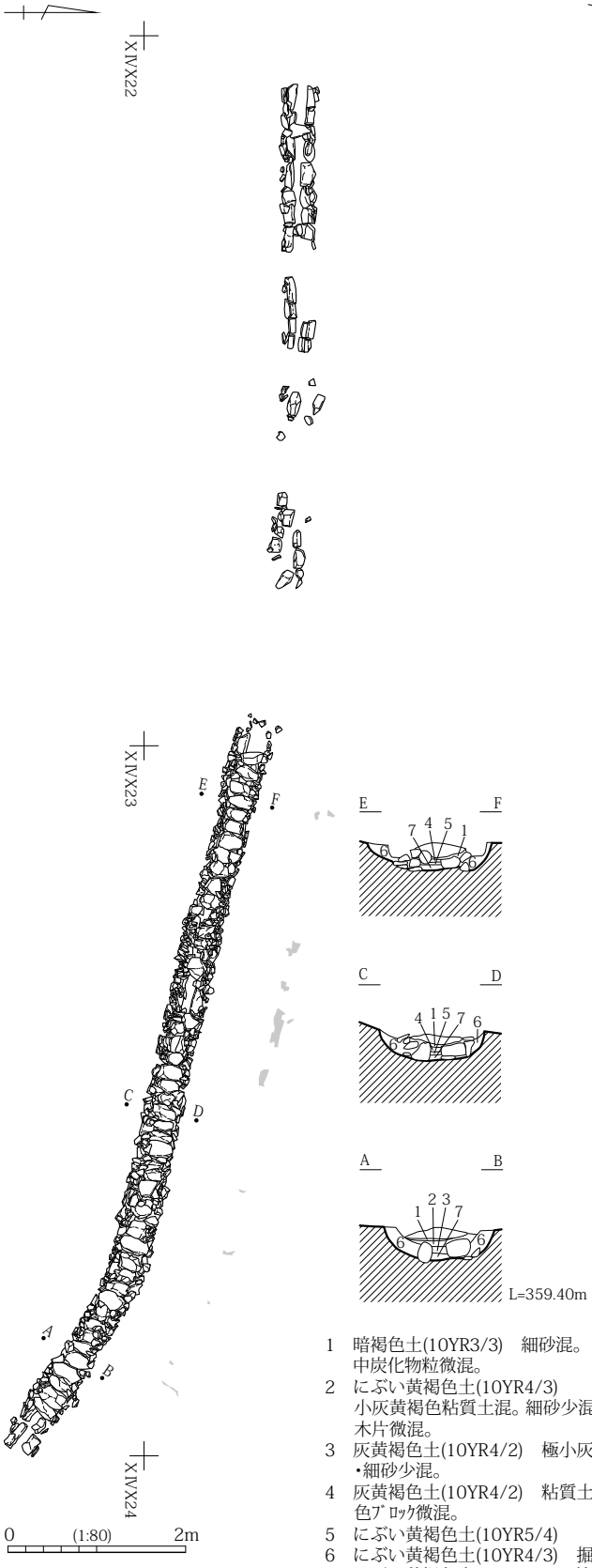
SK115



1　褐灰色土(10YR4/1)　山砂混。大褐灰色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。

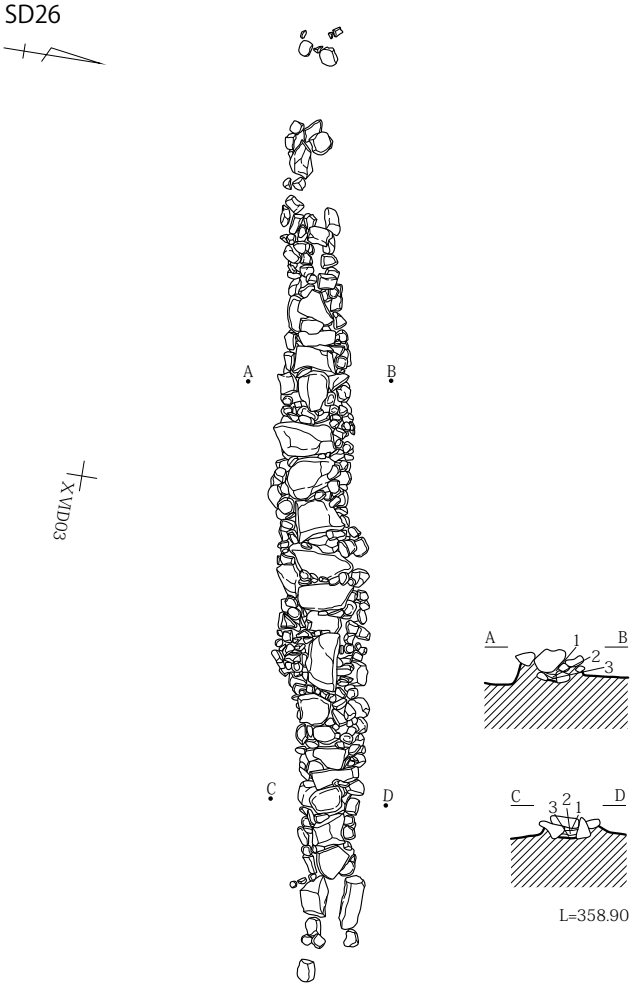
0　(1:40)　1m

SD01



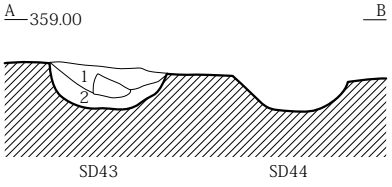
1　暗褐色土(10YR3/3)　細砂混。
　中炭化物粒微混。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　小灰黄褐色粘質土混。細砂少混。
　木片微混。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　極小灰色土
　・細砂少混。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘質土。褐
　色ﾌﾞﾛｯｸ微混。
5　にぶい黄褐色土(10YR5/4)
6　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　掘方。
7　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘細砂混。

SD26



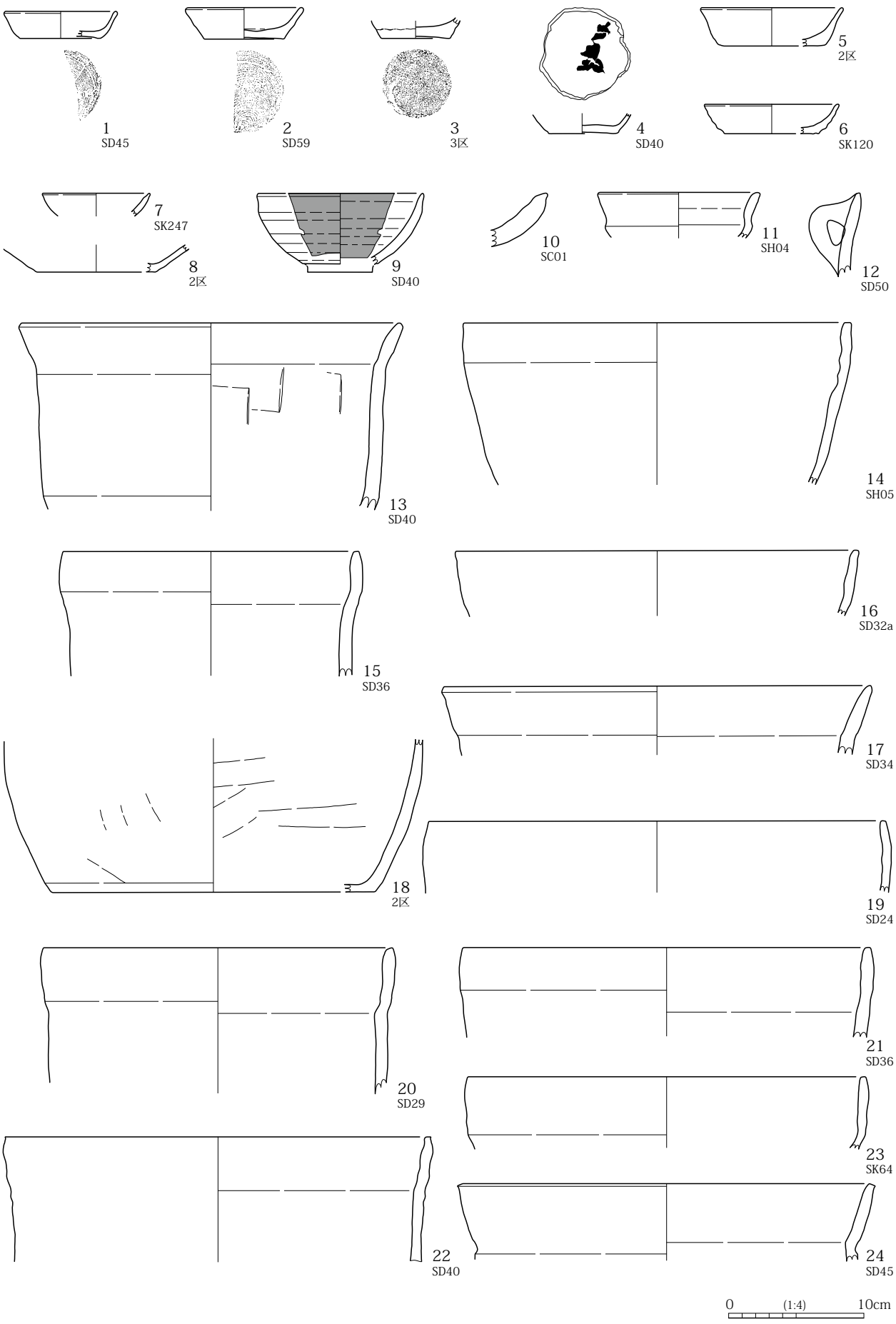
1　暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　小炭化物粒微混。
2　暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　小砂少混。
3　暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　小砂少混。

SD43・SD44

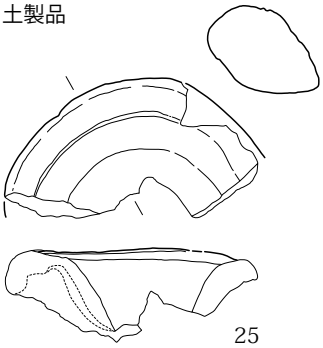


1　黄褐色土(10YR5/6)　ｼﾙﾄ。
2　灰色土(7.5Y5/1)　ｼﾙﾄ。砂多混。

図版 164　中世の土器

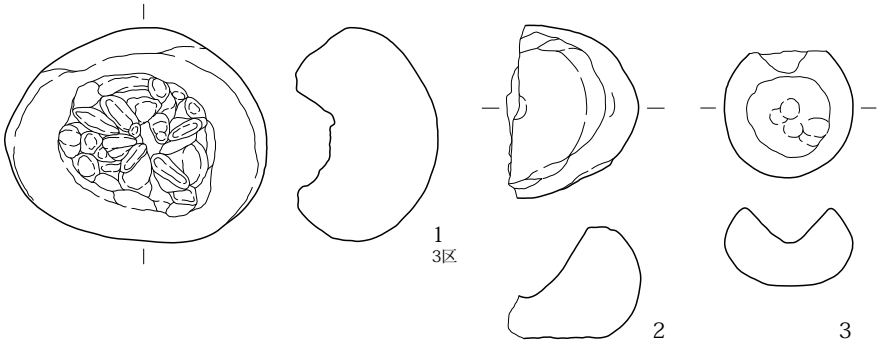

1
SD45
2
SD59
3
3区
4
SD40
5
2区
6
SK120
7
SK247
8
2区
9
SD40
10
SC01
11
SH04
12
SD50
13
SD40
14
SH05
15
SD36
16
SD32a
17
SD34
18
2区
19
SD24
20
SD29
21
SD36
22
SD40
23
SK64
24
SD45
0
(1:4)
10cm

土製品



25
SK202

凹石



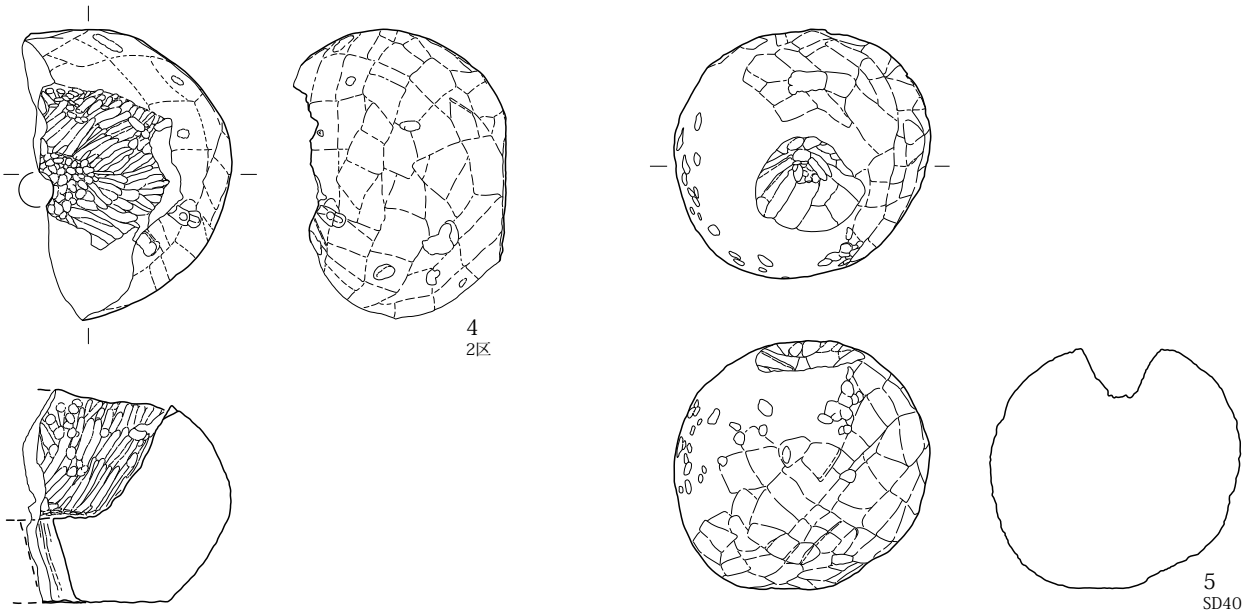
1
3区

2
SD50

3
SD24

0 (1:4) 10cm
(25)

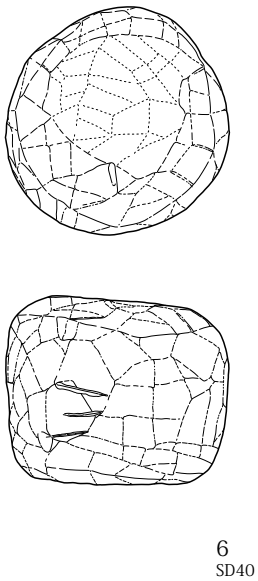
0 (1:3) 10cm
(1～3)



4
2区

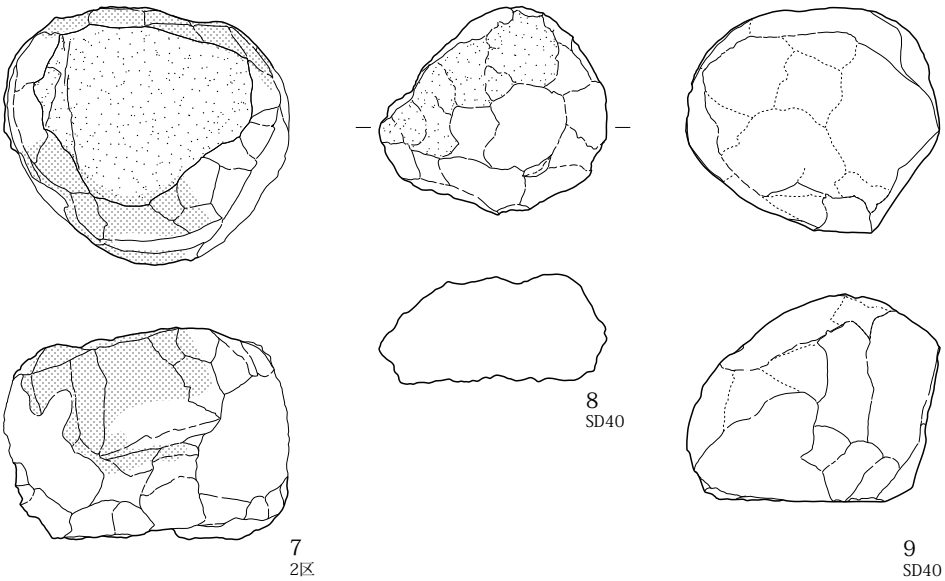
5
SD40

五輪塔未成品



6
SD40

加工石



7
2区
こげ

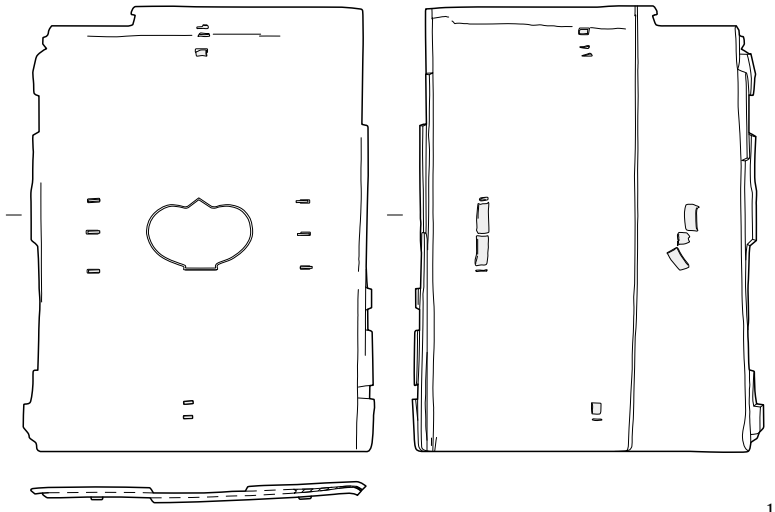
8
SD40

9
SD40

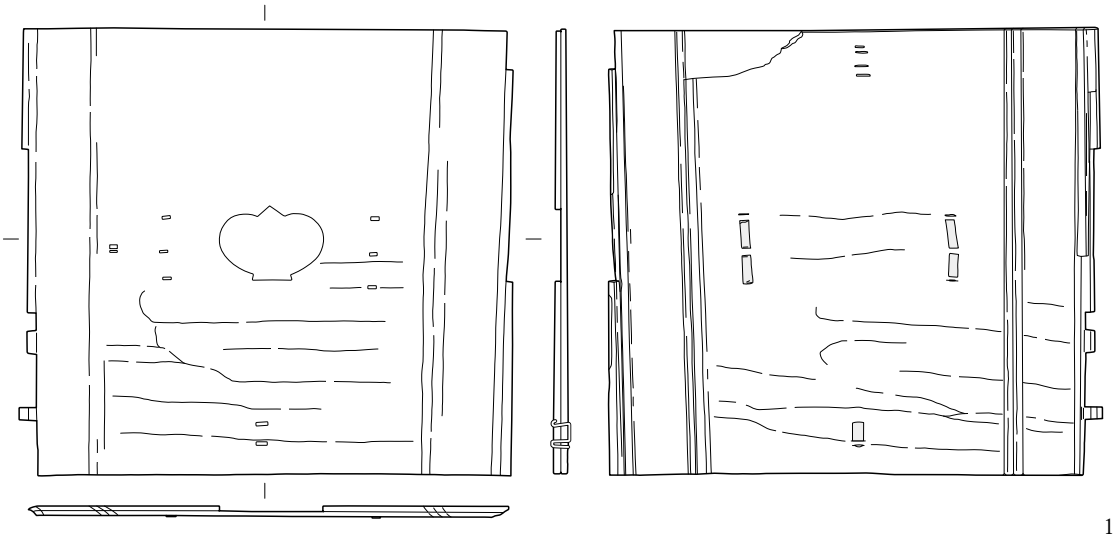
0 (1:6) 20cm
(4～9)

図版 166　中世の木製品 1

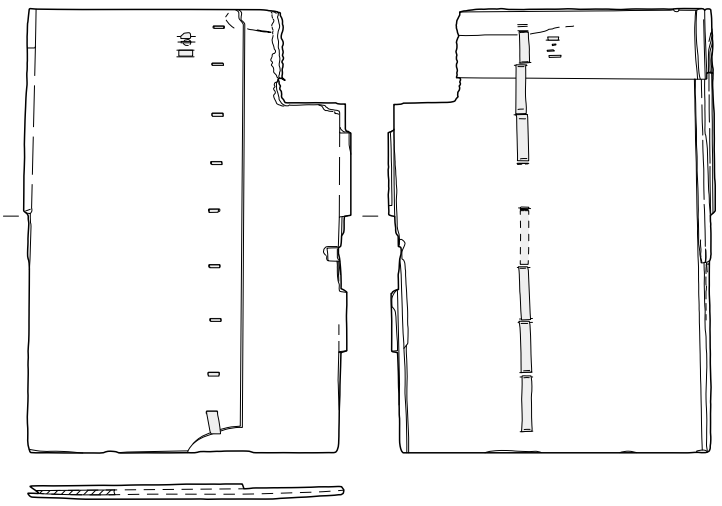
三方



1-1
SD40



1-2

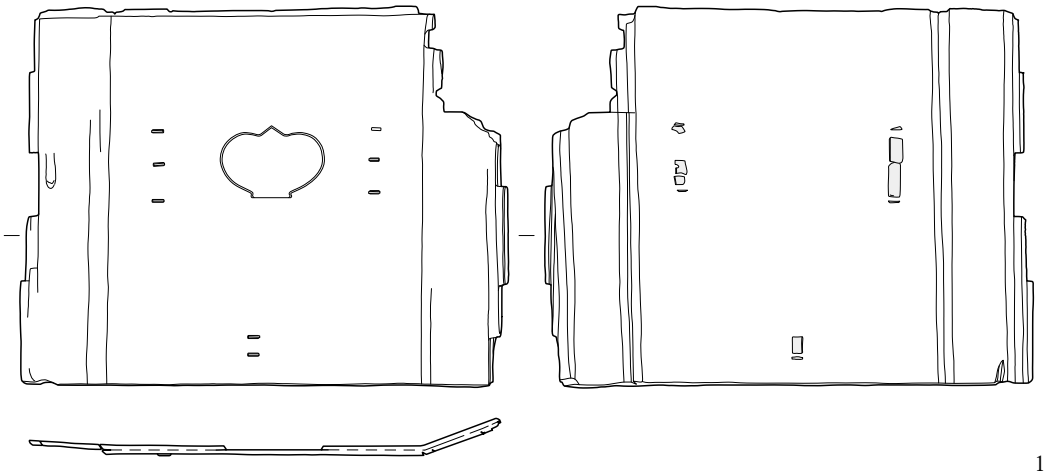


1-3

帯幅

0　(1:4)　10cm

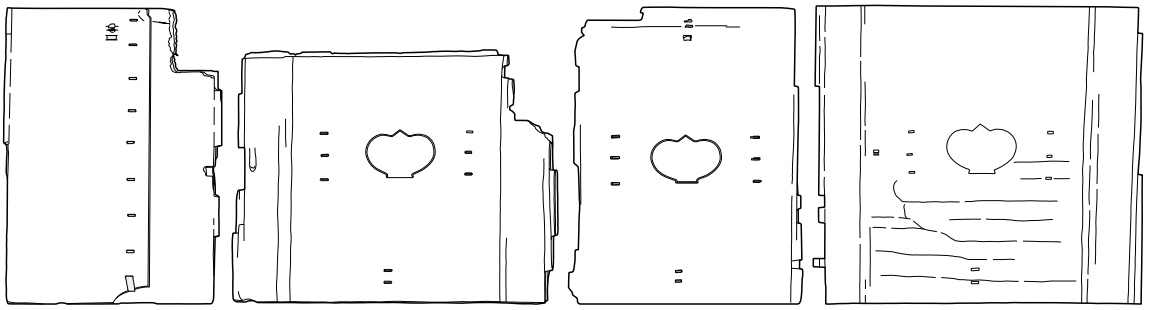
三方



1-4

帯幅

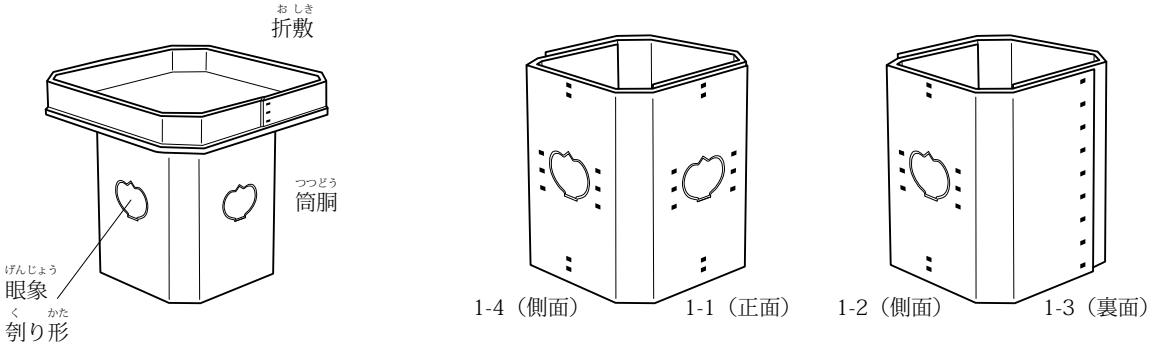
0　(1:4)　10cm



1-3（裏面）　1-4（側面）　1-1（正面）　1-2（側面）

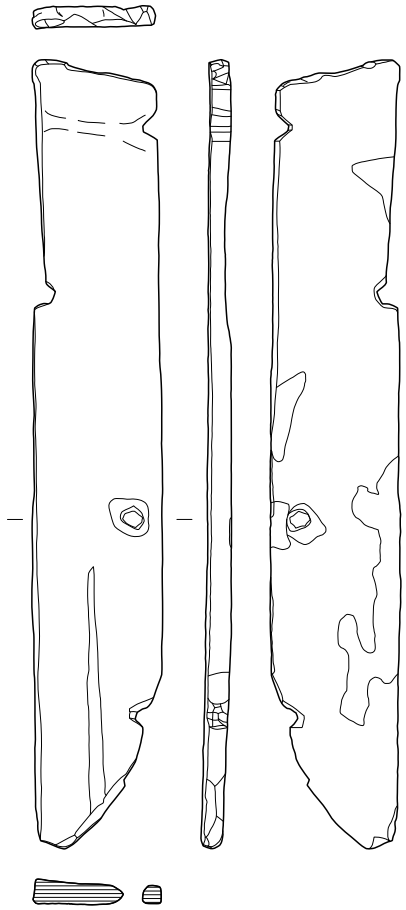
0　(1:6)　20cm

三方復元図



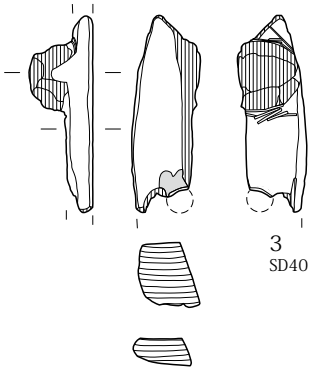
図版 168　中世の木製品３

田下駄



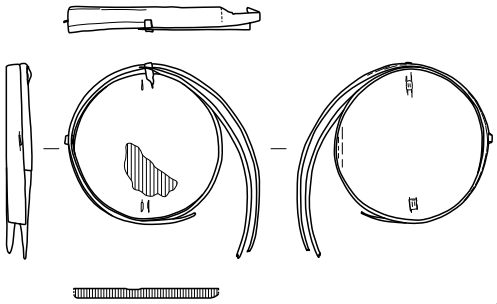
2
SD59

連歯下駄

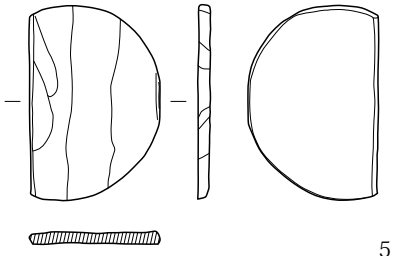


3
SD40

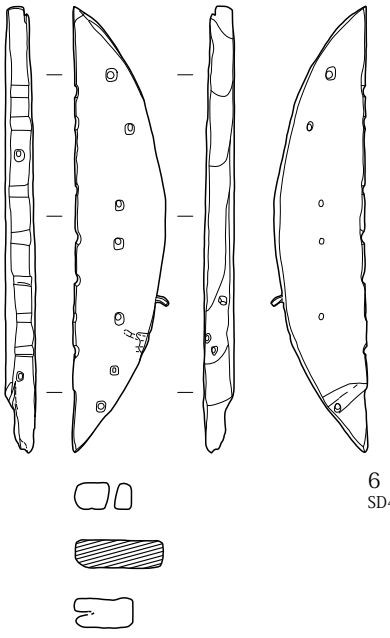
曲物



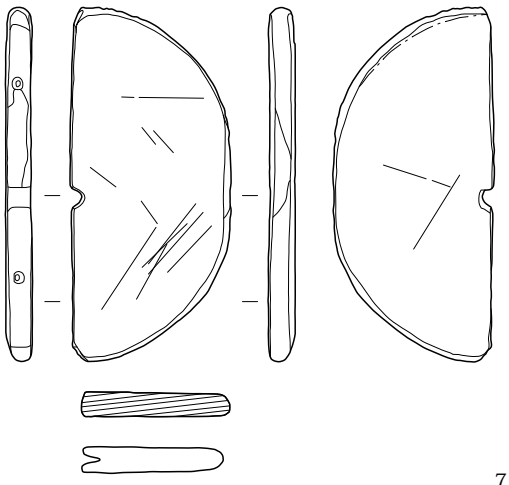
4
SD40



5
SK215



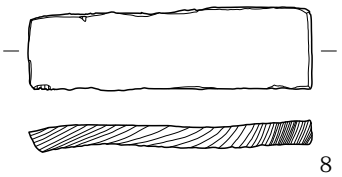
6
SD40



7
SD59

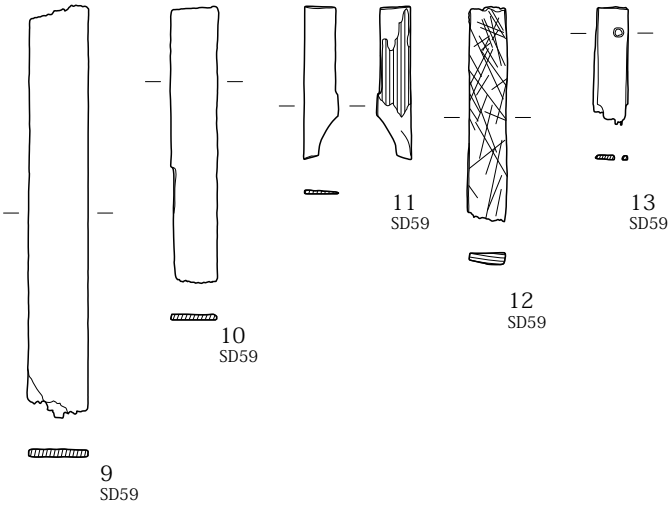
0　(1:4)　10cm

板材



8
SD59

不明木製品



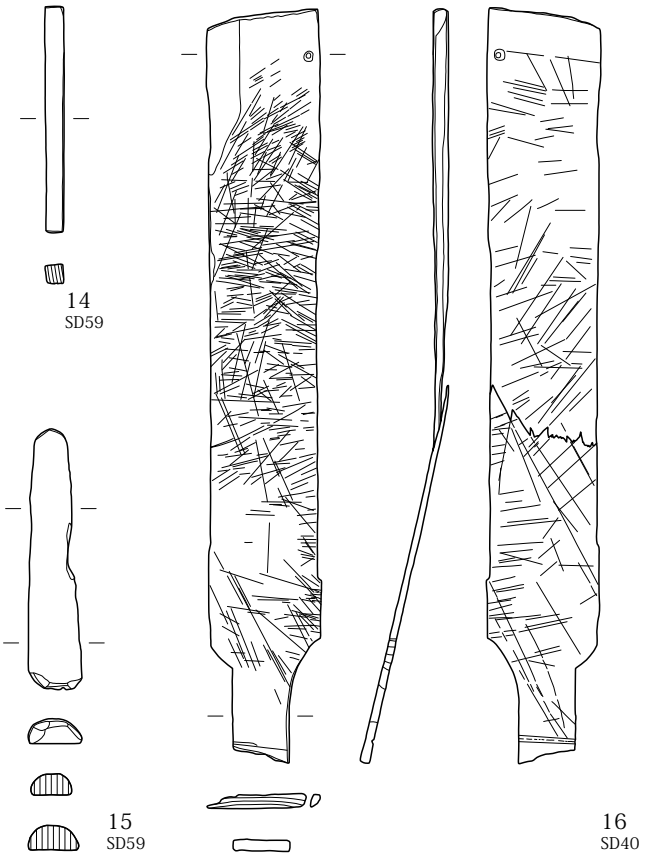
9
SD59

10
SD59

11
SD59

12
SD59

13
SD59

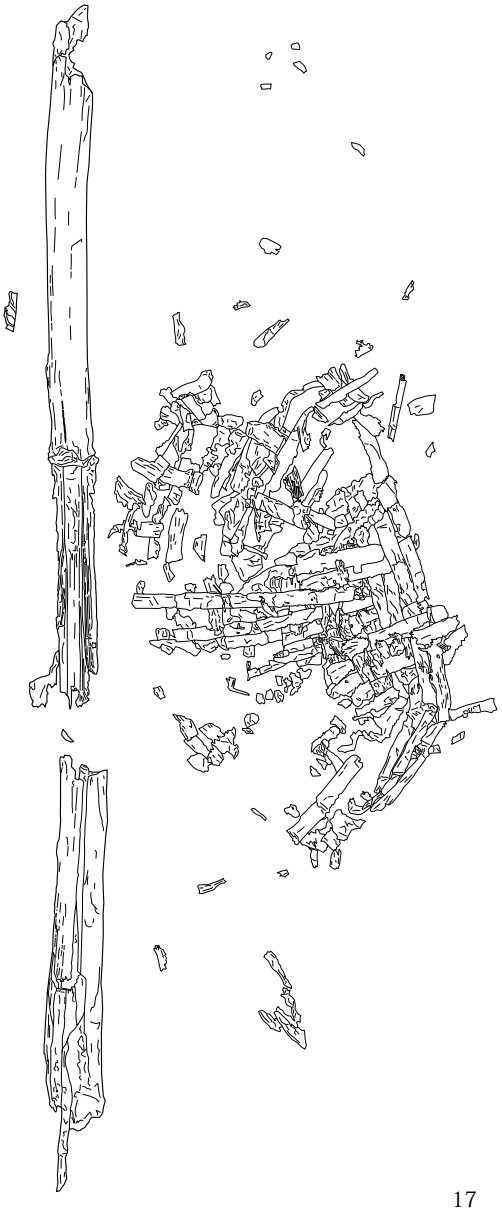


14
SD59

15
SD59

16
SD40

籠状製品



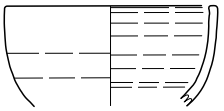
17
SK215

0　(1:4)　10cm

図版 170　長谷窯関連遺物 1　陶器

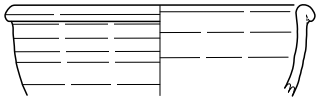
素焼き

碗



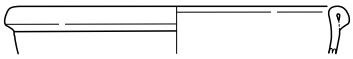
25
3区

(小型)

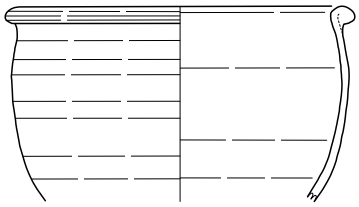


29
3区

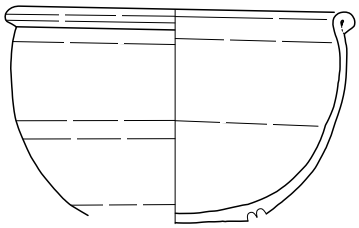
(中型)



30
3区



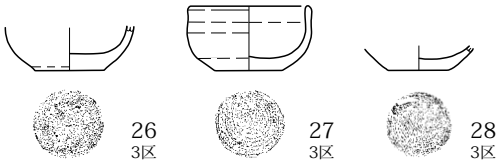
31
3区



32
3区

鉢

(丸型)

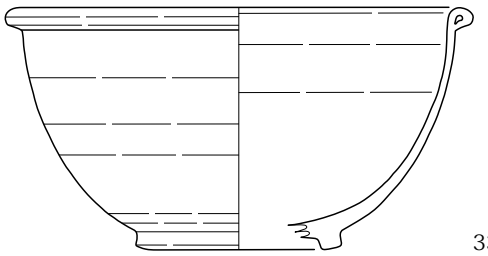


26
3区

27
3区

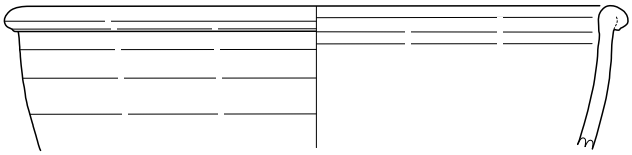
28
3区

(大型)

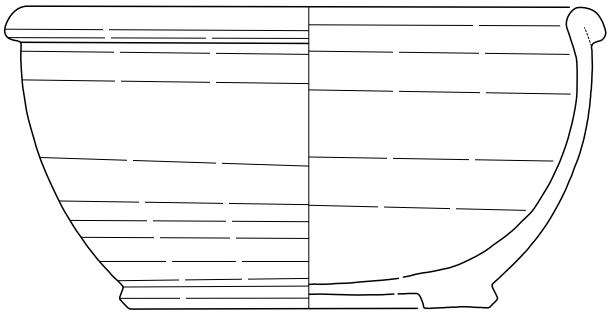


33
3区

(特大型)



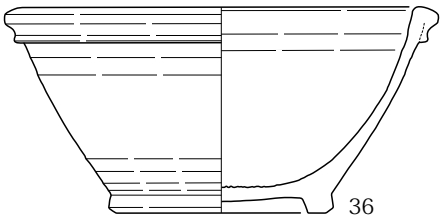
34
3区



35
3区

擂鉢

(小型)

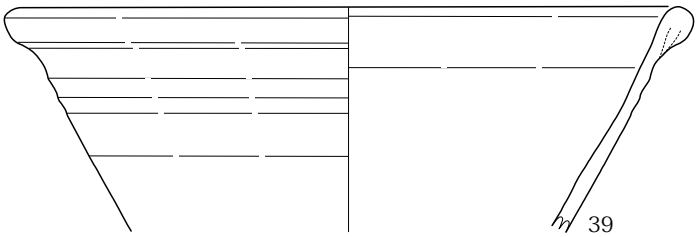


36
3区

(大型)

37
3区

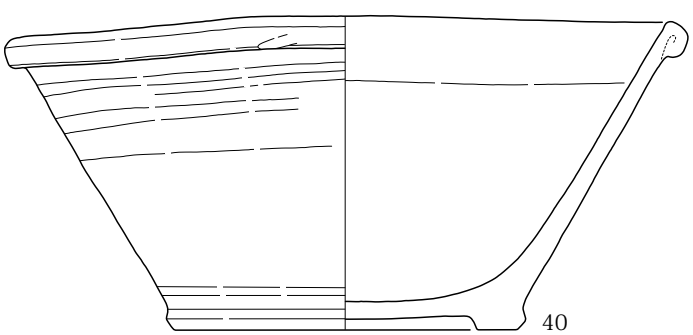
38
3区



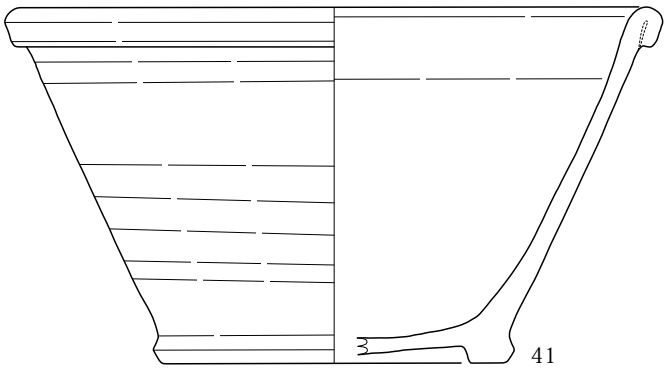
39
3区

0　(1:4)　10cm

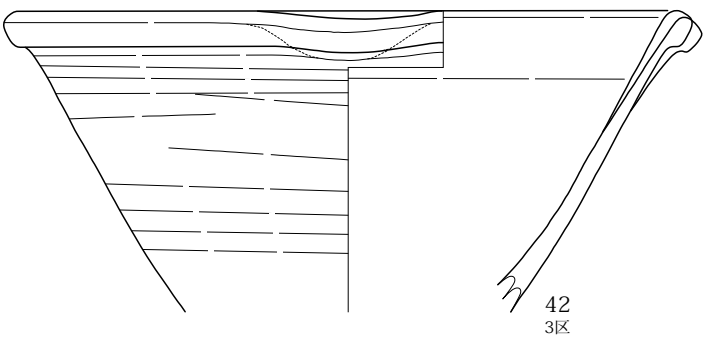
擂鉢
（大型）



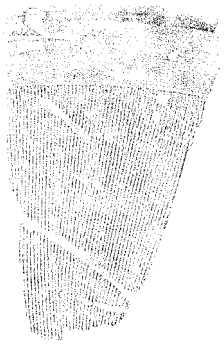
40
3区



41
3区



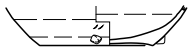
42
3区



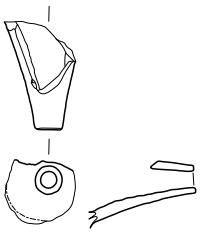
0　(1:4)　10cm

図版 172　長谷窯関連遺物３　陶器

土瓶

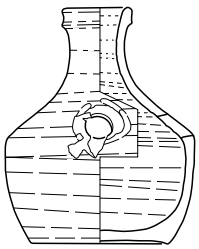


43
3区



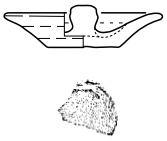
44
3区

小水注

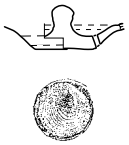


45
3区

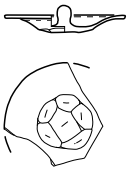
急須蓋



46
3区



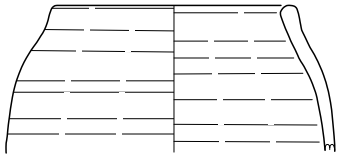
47
3区



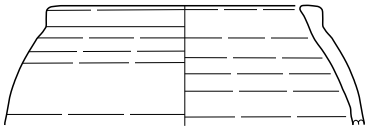
48
3区

49
3区

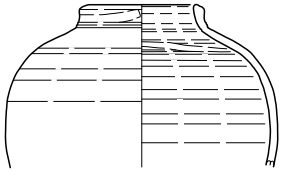
壺



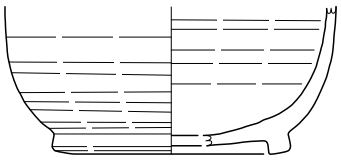
50
3区



51
3区

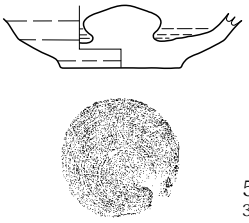


52
3区



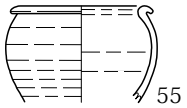
53
3区

壺蓋

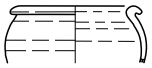


54
3区

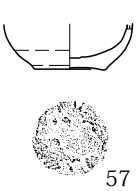
甕
(小型)



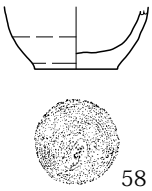
55
3区



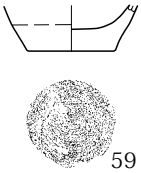
56
3区



57
3区

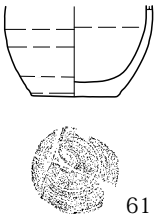


58
3区



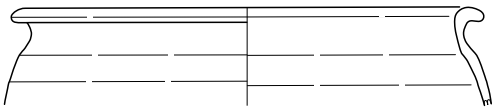
59
3区

60
3区

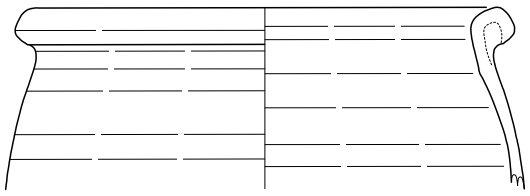


61
3区

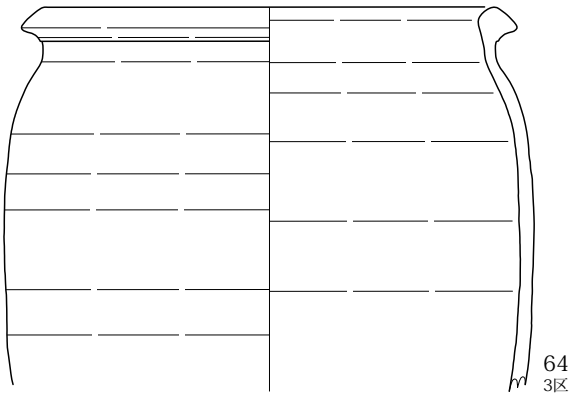
(中型)



62
3区



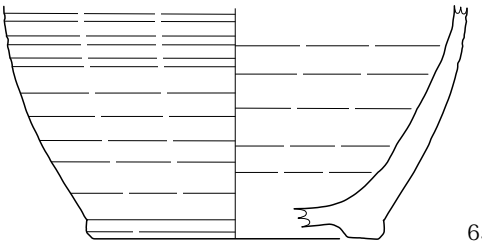
63
3区



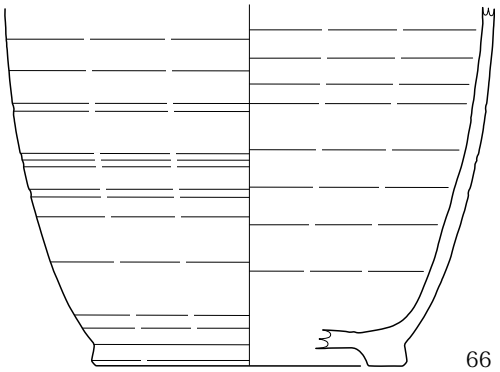
64
3区

0　(1:4)　10cm

甕
(中型)

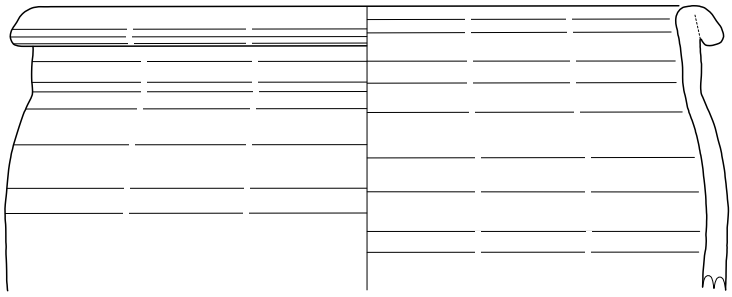


65
3区

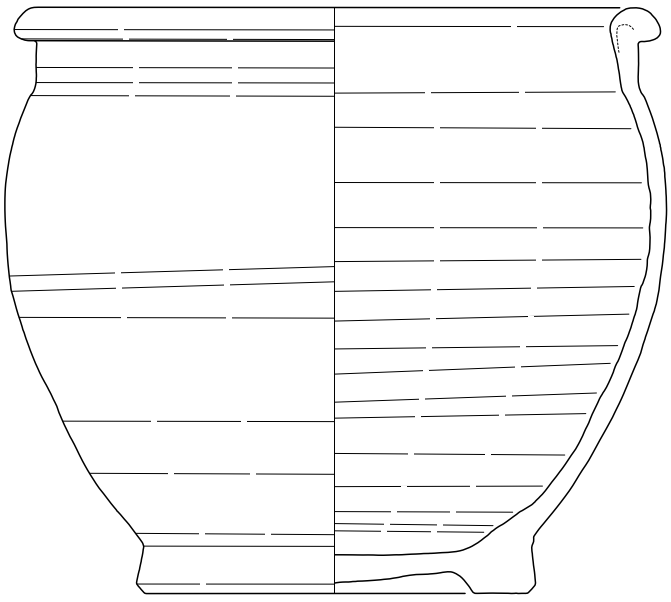


66
3区

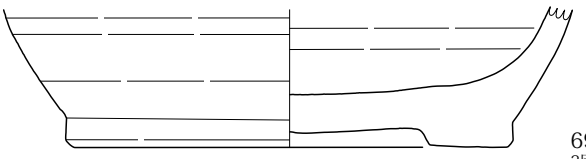
(大型)



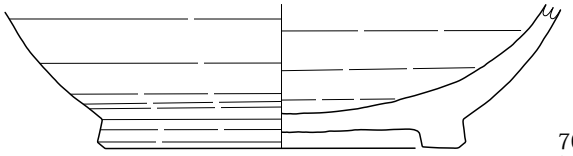
67
3区



68
3区



69
3区

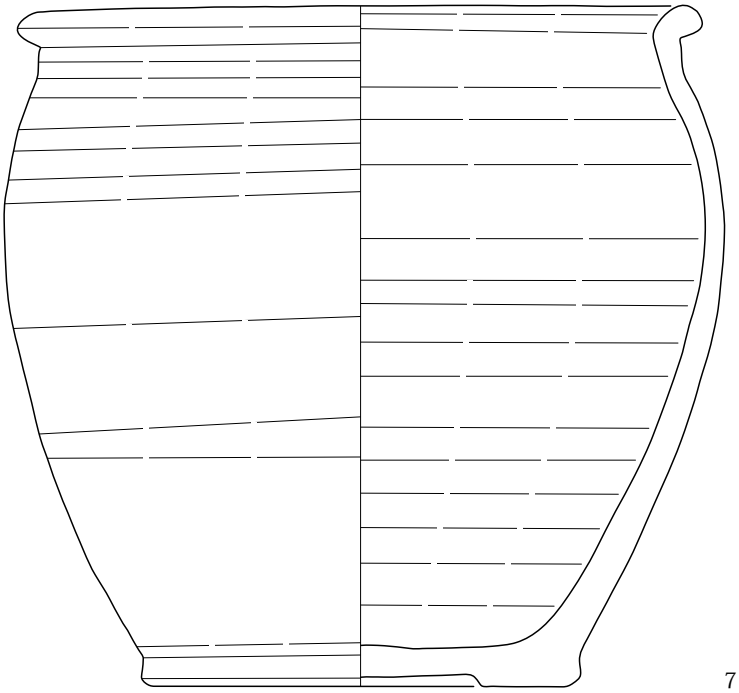


70
SX02

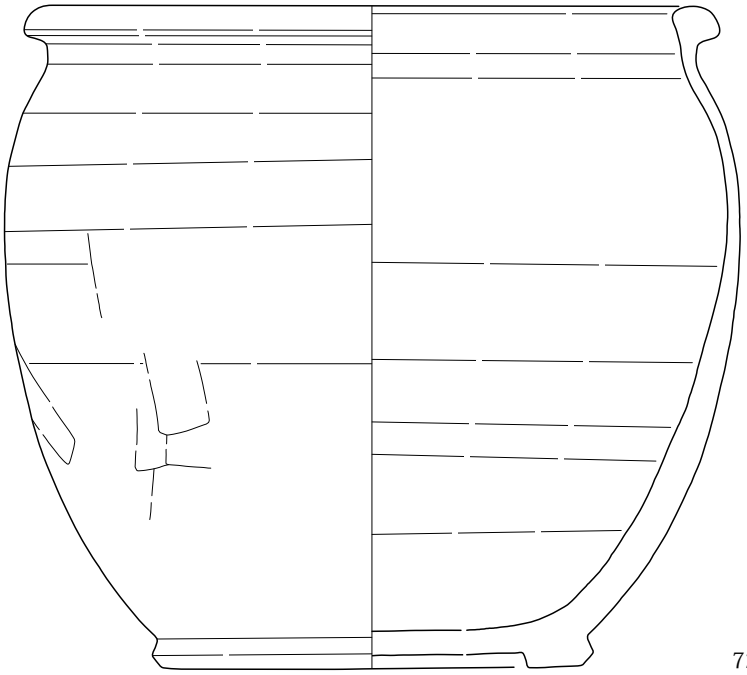
0 (1:4) 10cm

図版 174　長谷窯関連遺物５　陶器

甕
(大型)



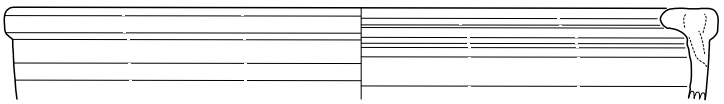
71
SK114



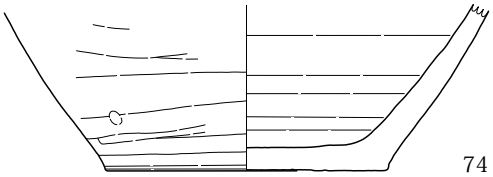
72
3区

0　(1:4)　10cm

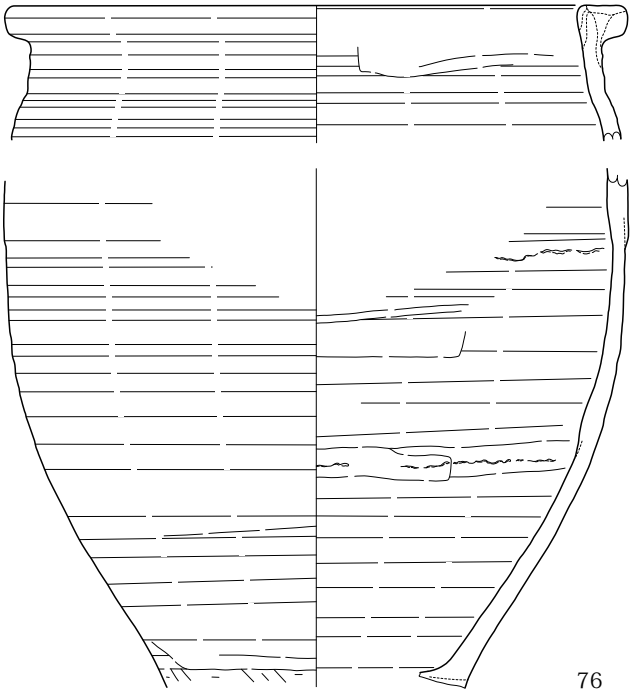
甕
(特大型)



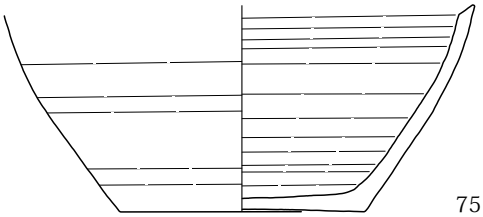
73
3区



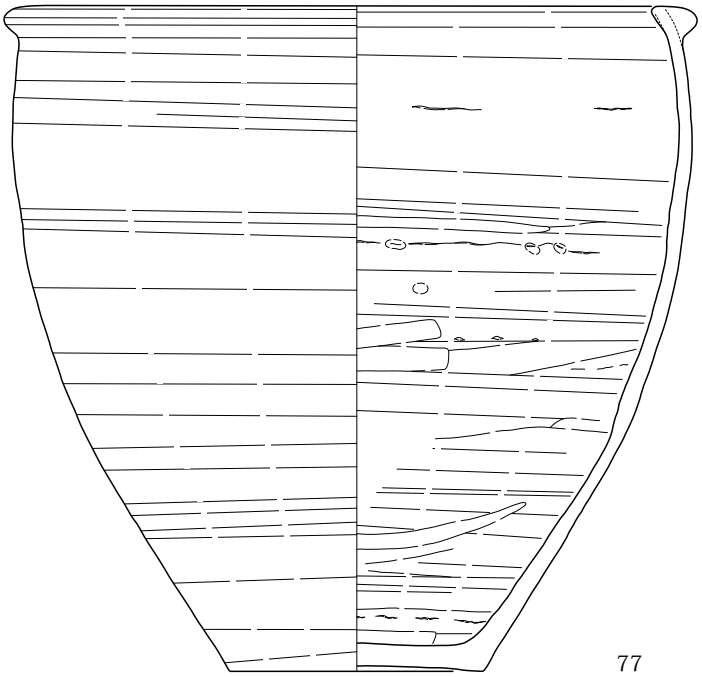
74
3区



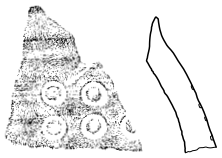
76
SK112・3区



75
3区



77
SK111



78
3区

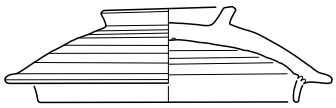
79
3区

0　(1:4)　10cm
(78、79)

0　(1:8)　20cm
(73～77)

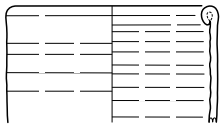
図版 176　長谷窯関連遺物７　陶器

鍋蓋

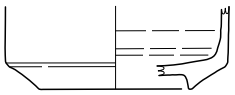


80
2区

火入れ

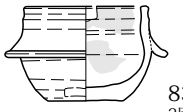


81
3区

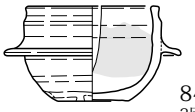


82
3区

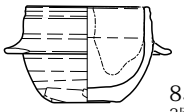
羽釜
(小型)



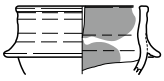
83
3区



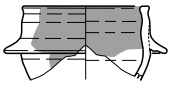
84
3区



85
3区



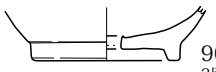
86
3区



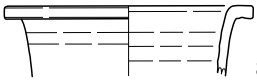
87
3区

植木鉢

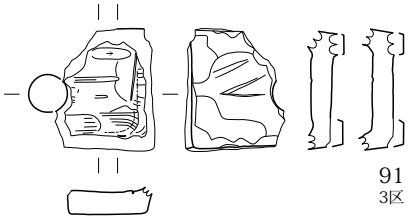
88
3区



90
3区



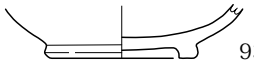
89
3区



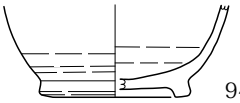
91
3区

その他の器類

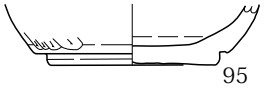
92
3区



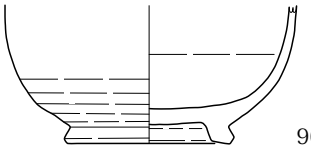
93
3区



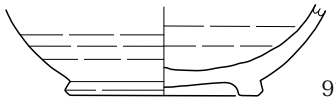
94
3区



95
3区

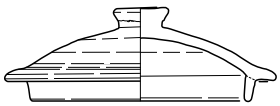


96
3区

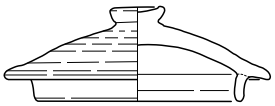


97
3区

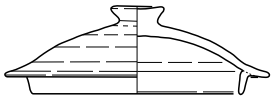
その他の蓋



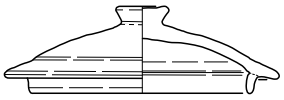
98
3区



99
3区

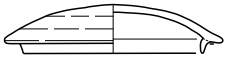


100
3区

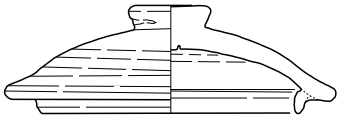


101
3区

102
3区



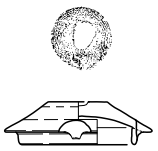
103
3区

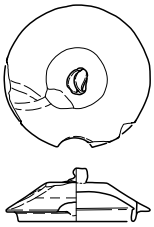


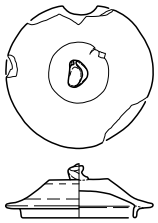
104
3区

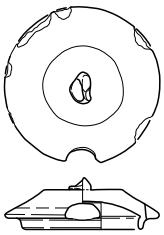
0　(1:4)　10cm

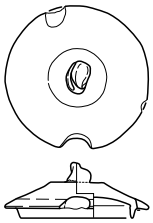
灯明皿蓋

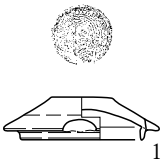

105
3区

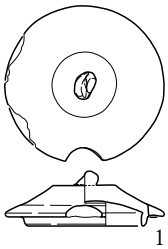

106
3区

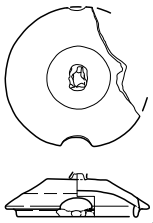

107
3区

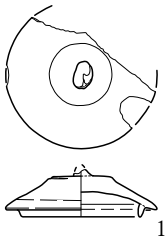

108
3区


109
3区

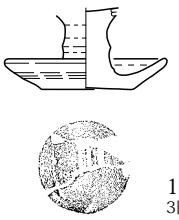

110
3区

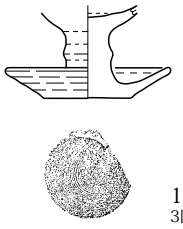

111
3区

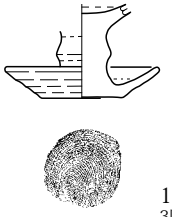

112
3区

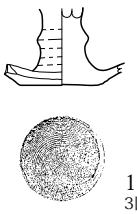

113
3区

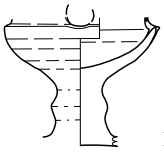
灯明皿


114
3区


115
3区

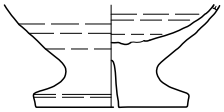

116
3区


117
3区


118
SX02

秉燭

（大型）

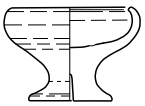


119
3区

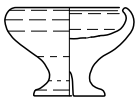
（坏部の深い小型）

120
3区

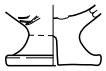
（坏部の浅い小型）

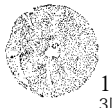


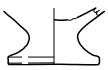
121
3区



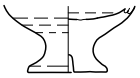
122
3区




123
3区



124
3区



125
3区

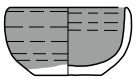
0　(1:4)　10cm

図版 178　長谷窯関連遺物９　陶器

本焼き

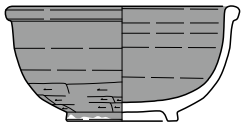
鉢

（丸型）

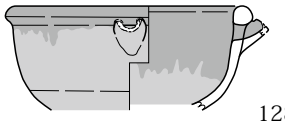


126
3区

（小型）



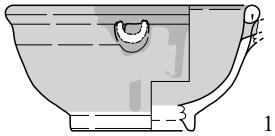
127
SK109



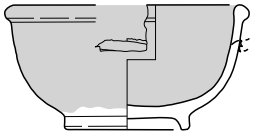
128
3区

（中型）

131
3区

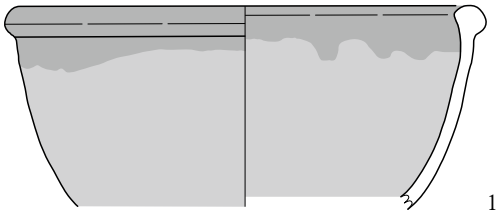


129
SK109

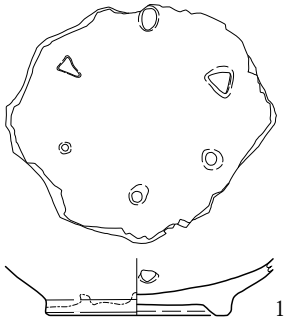


130
SK109

（大型）

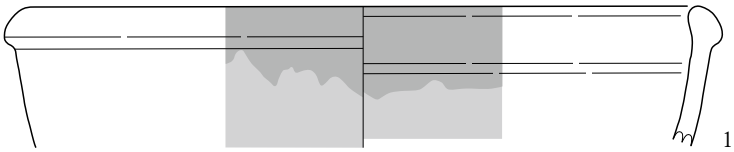


132
3区

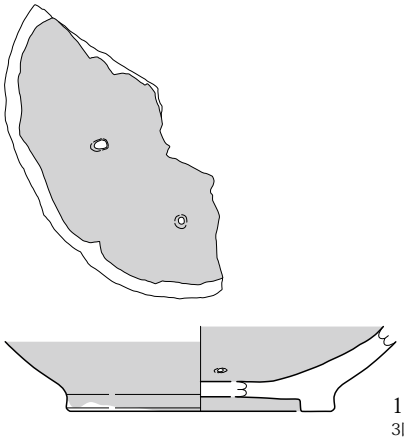


133
3区

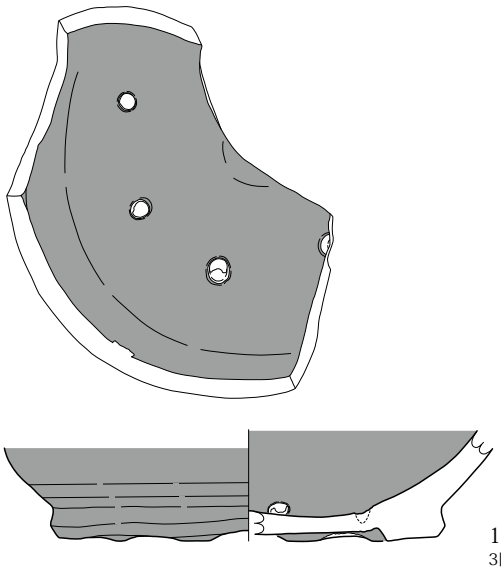
（特大型）



134
3区



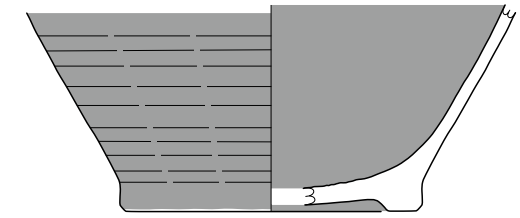
135
3区



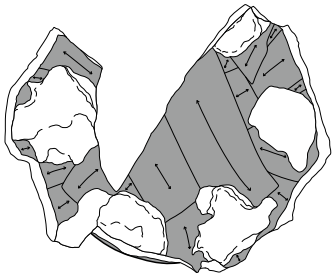
136
3区

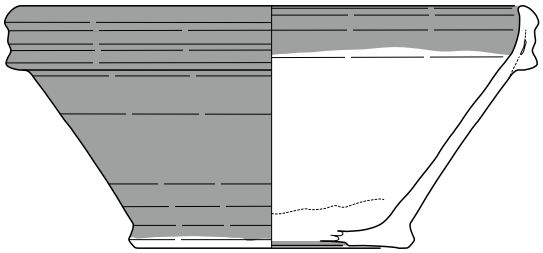
0　(1:4)　10cm

擂鉢
(小型)

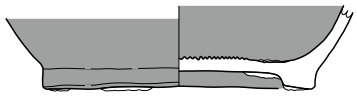


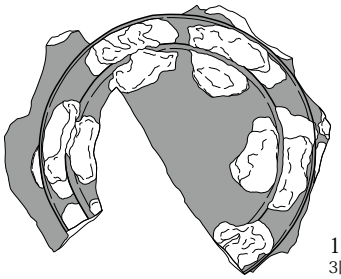
137
3区



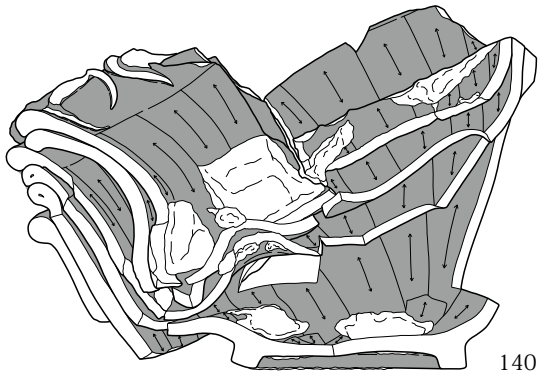


138
3区



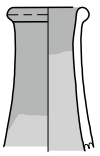


139
3区



140
3区

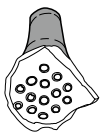
徳利

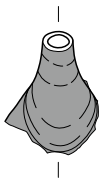


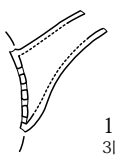
141
3区

142
3区

土瓶





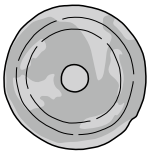


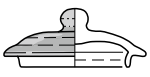
143
3区

急須

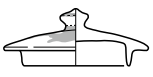
144
3区

土瓶蓋



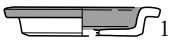


145
3区

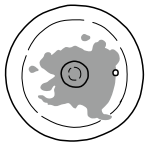


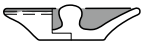
146
3区

急須蓋



147
SK114





148
3区

149
SD23

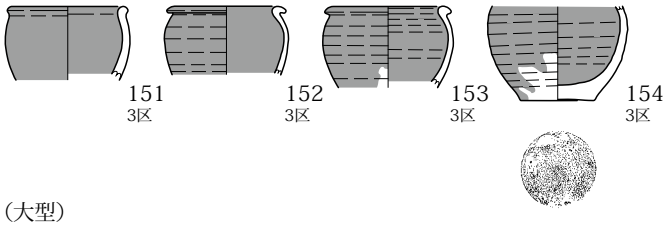
150
3区

0　(1:4)　10cm

図版 180　長谷窯関連遺物 11　陶器

甕

(小型)



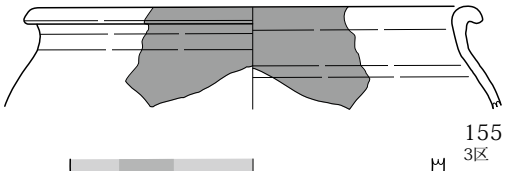
151
3区

152
3区

153
3区

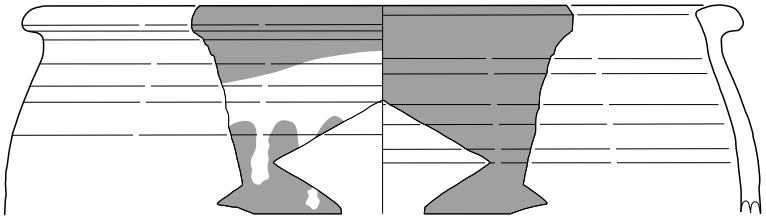
154
3区

(中型)

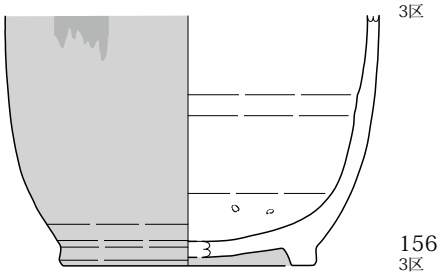


155
3区

(大型)

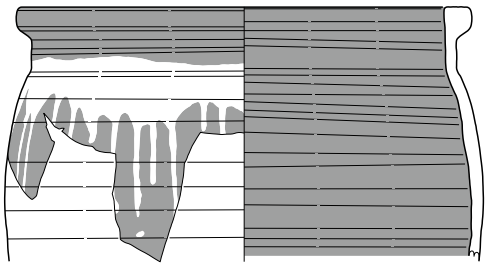


157
3区

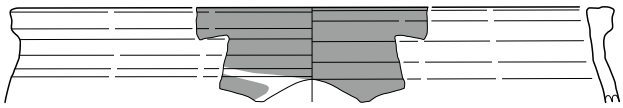


156
3区

(特大型)



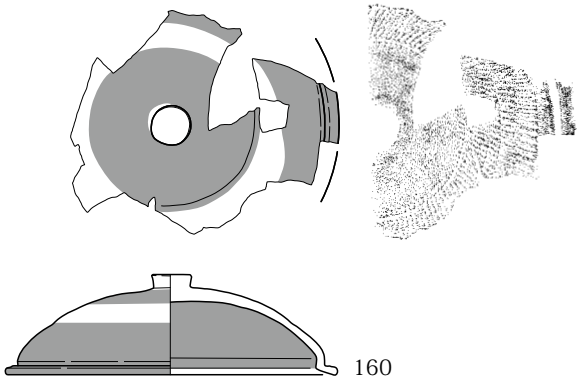
158
3区



159
SF02

0　(1:8)　20cm
(158、159)

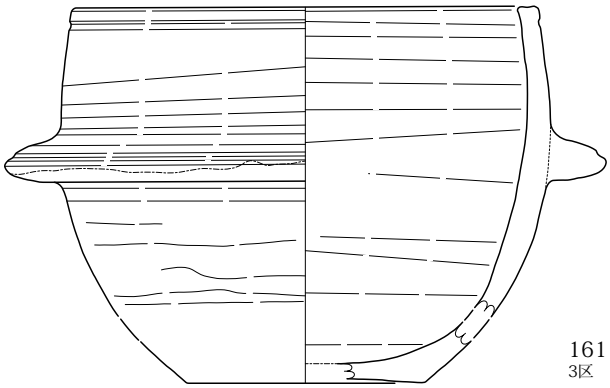
鍋蓋



160
3区

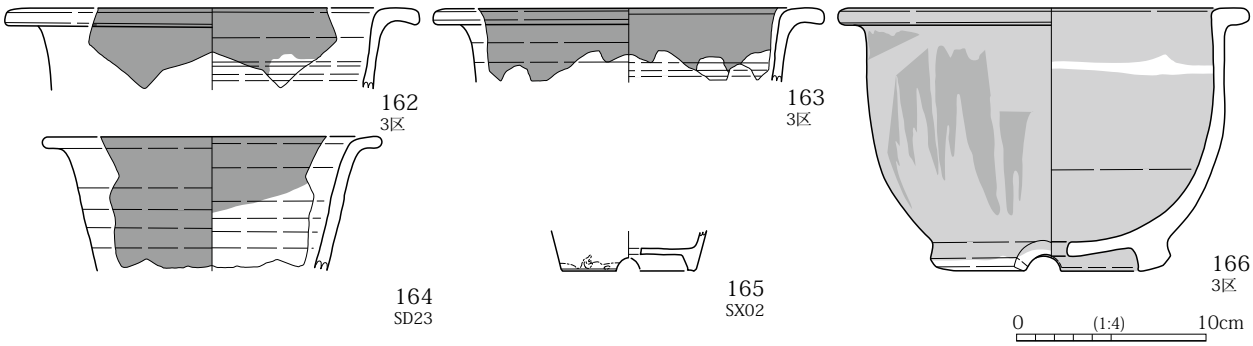
羽釜

(大型)



161
3区

植木鉢



162
3区

163
3区

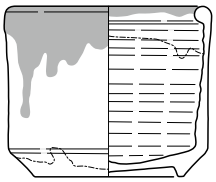
164
SD23

165
SX02

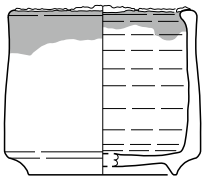
166
3区

0　(1:4)　10cm

火入れ



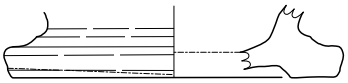
167
SX08



168
3区

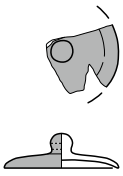
169
SK58

火鉢

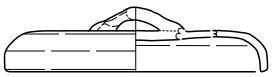


170
3区

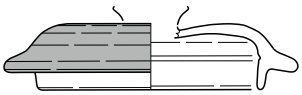
その他の蓋



171
3区

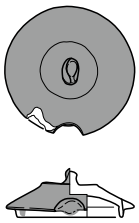


172
3区

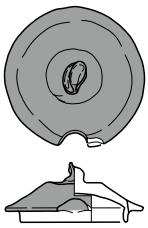


173
3区

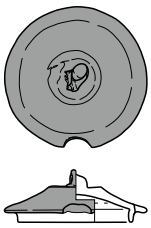
灯明皿蓋



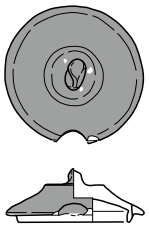
174
3区



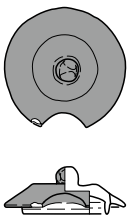
175
3区



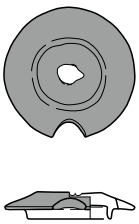
176
3区



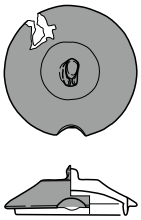
177
3区



178
SX27

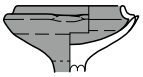


179
3区



180
3区

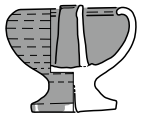
灯明皿



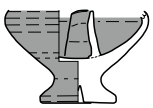
181
3区

秉燭

（坏部の深い小型）

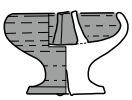


182
3区



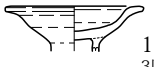
183
3区

（坏部の浅い小型）

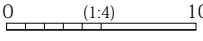


184
3区

器類不明

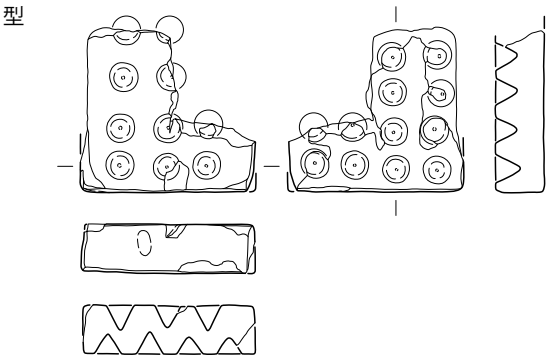


185
3区

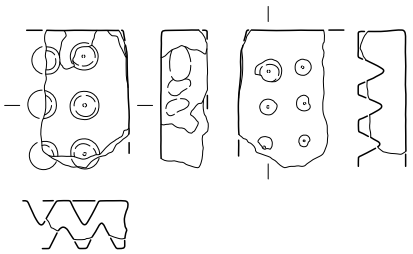


図版 182　長谷窯関連遺物 13　素焼き製品

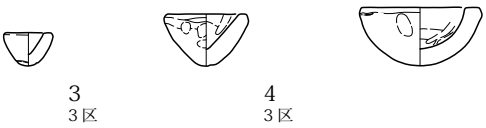
型



1
SK41



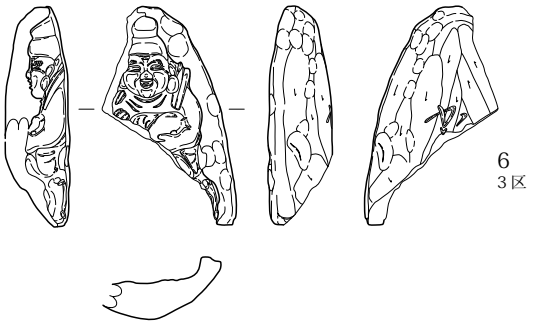
2
3 区



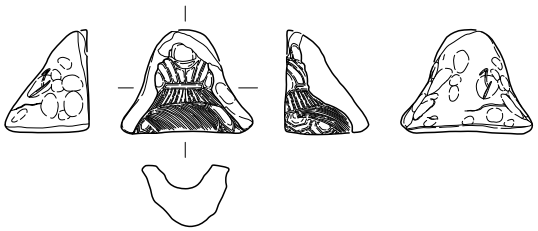
3
3 区

4
3 区

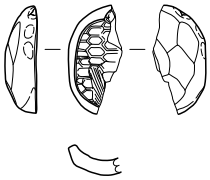
5
3 区



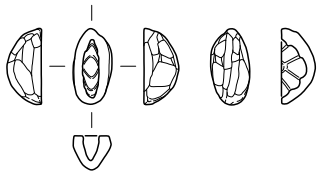
6
3 区



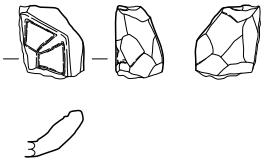
7
3 区



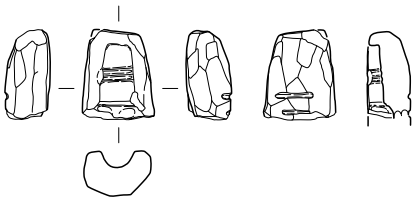
8
3 区



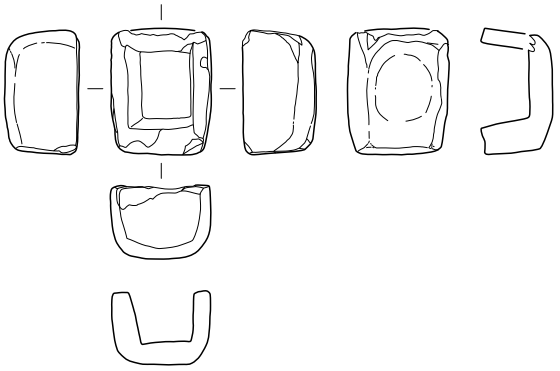
9
3 区



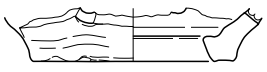
10
3 区



11
3 区



12
3 区

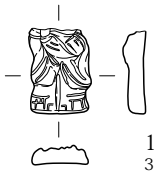


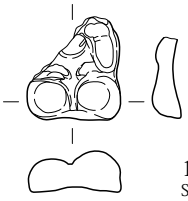
13
3 区

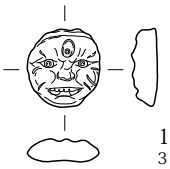
14
3 区

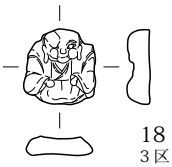
0　(1:4)　10cm

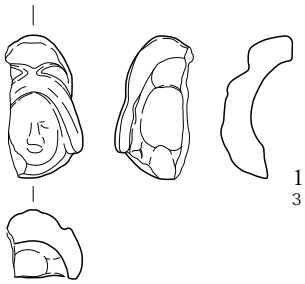
小物

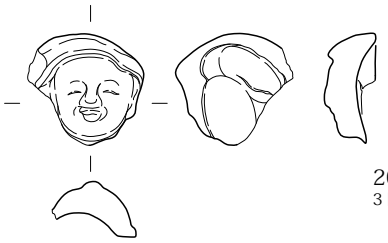

15
3区

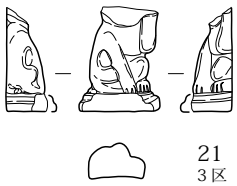

16
SK41

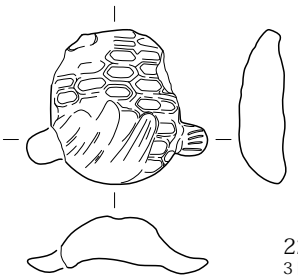

17
3区

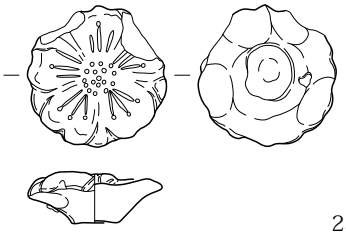

18
3区

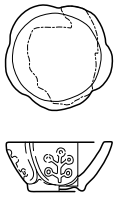

19
3区

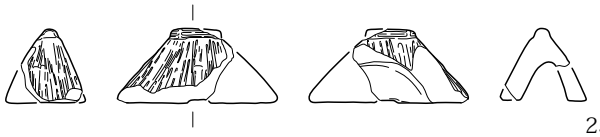

20
3区

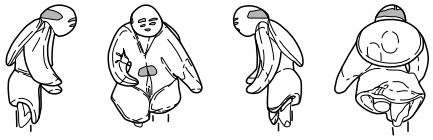

21
3区


22
3区

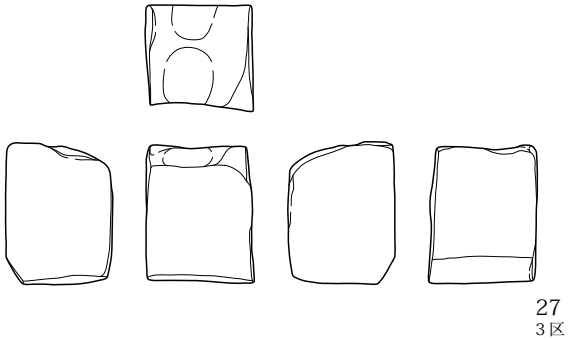

23
3区

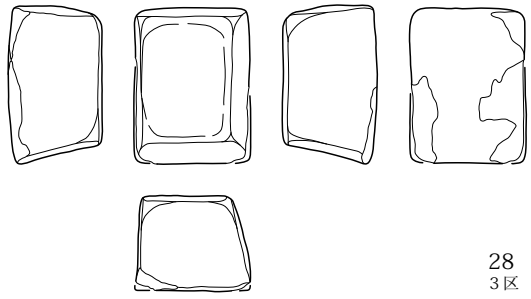

24
SK111

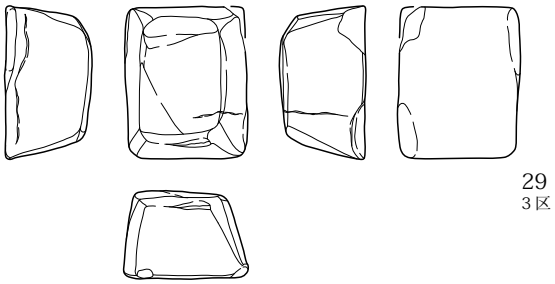

25
3区

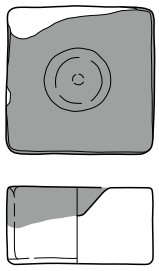


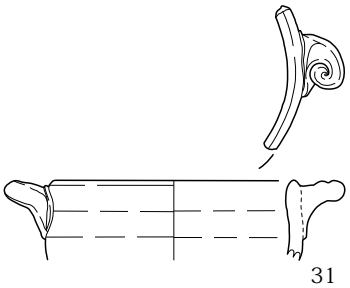
26
3区


27
3区

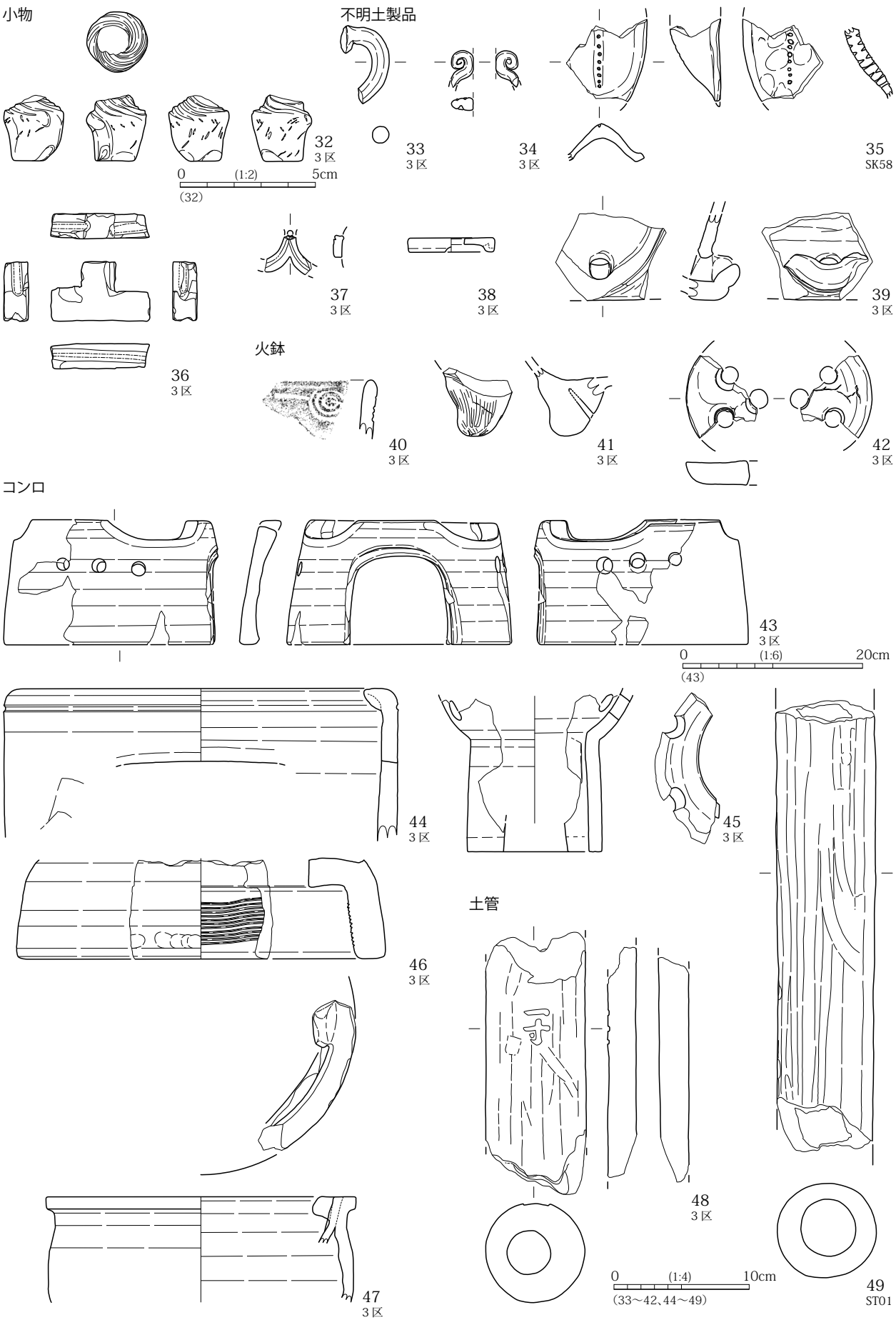

28
3区


29
3区

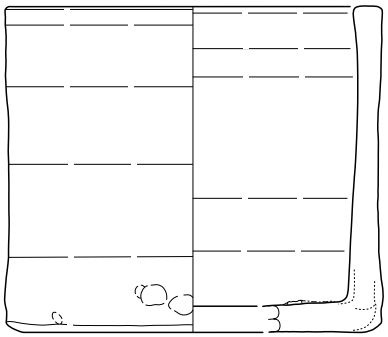

30
3区

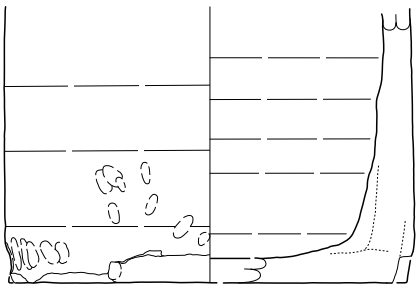

31
3区

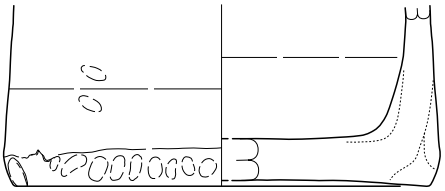
図版 184　長谷窯関連遺物 15　素焼き製品

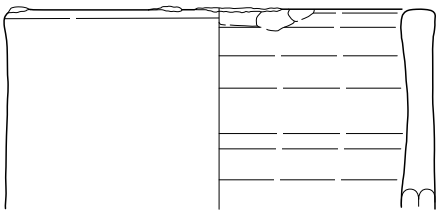


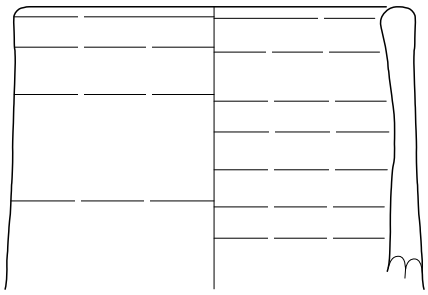
匣鉢

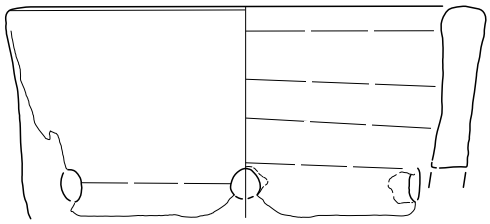

1
SD09


2
3区


3
3区

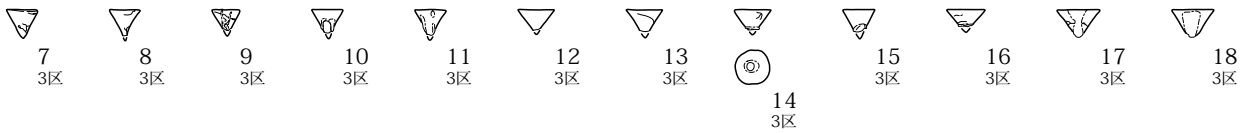

4
3区

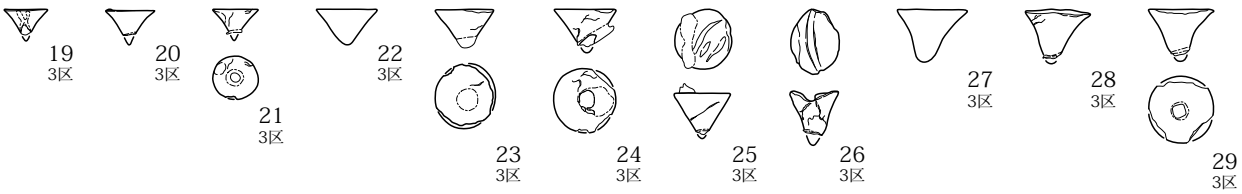

5
3区

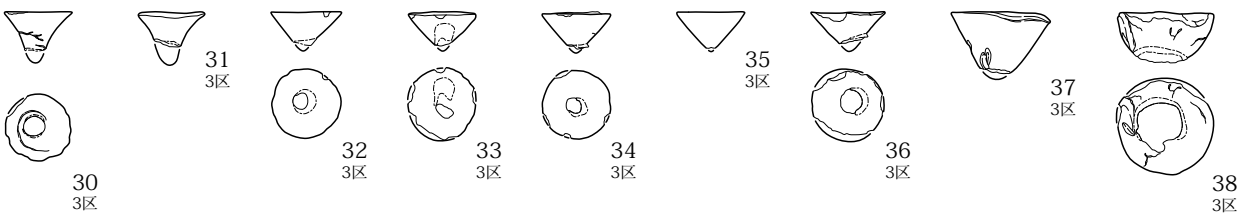

6
3区

0 (1:4) 10cm

円錐ピン


7 3区　8 3区　9 3区　10 3区　11 3区　12 3区　13 3区　14 3区　15 3区　16 3区　17 3区　18 3区

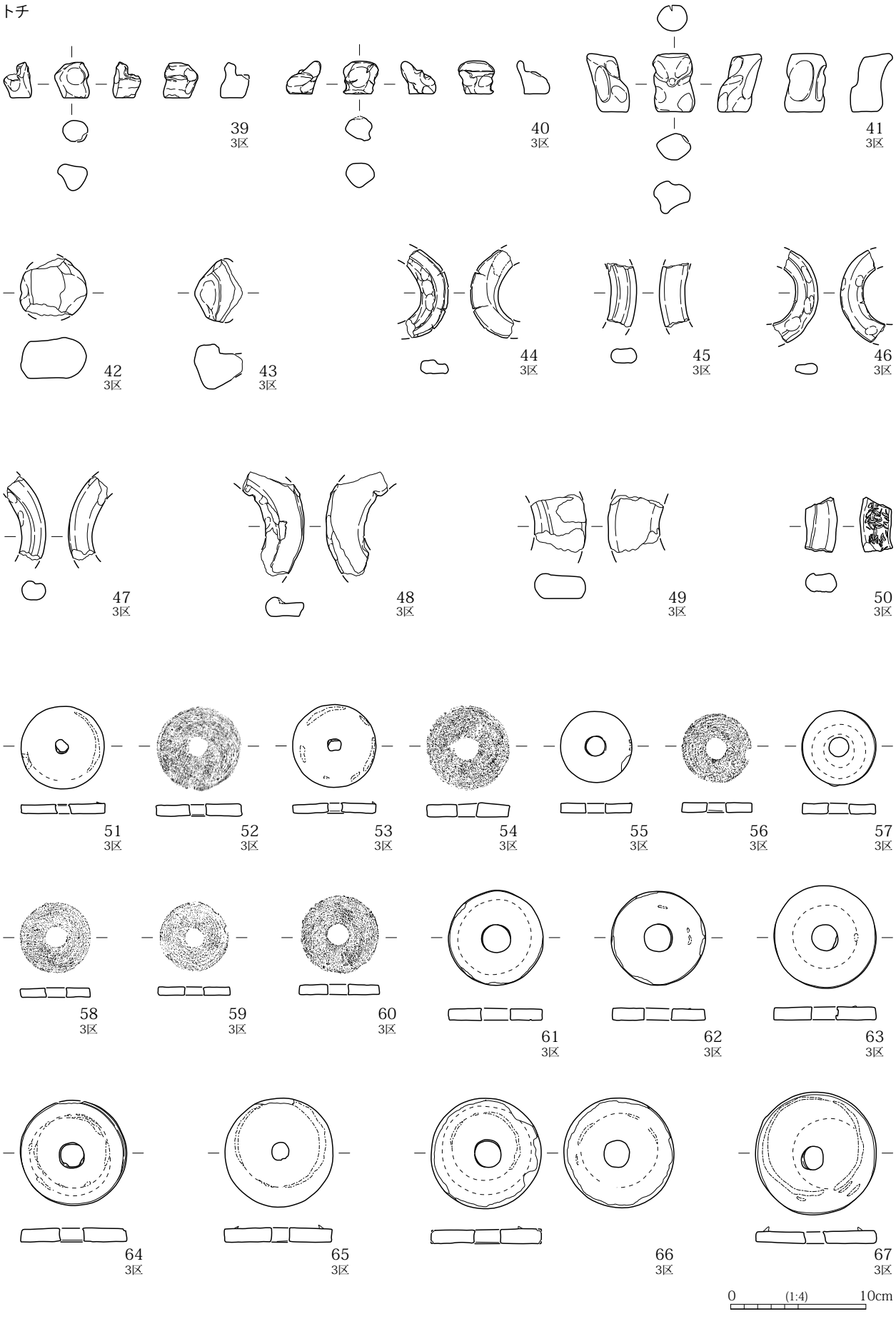

19 3区　20 3区　21 3区　22 3区　23 3区　24 3区　25 3区　26 3区　27 3区　28 3区　29 3区


30 3区　31 3区　32 3区　33 3区　34 3区　35 3区　36 3区　37 3区　38 3区

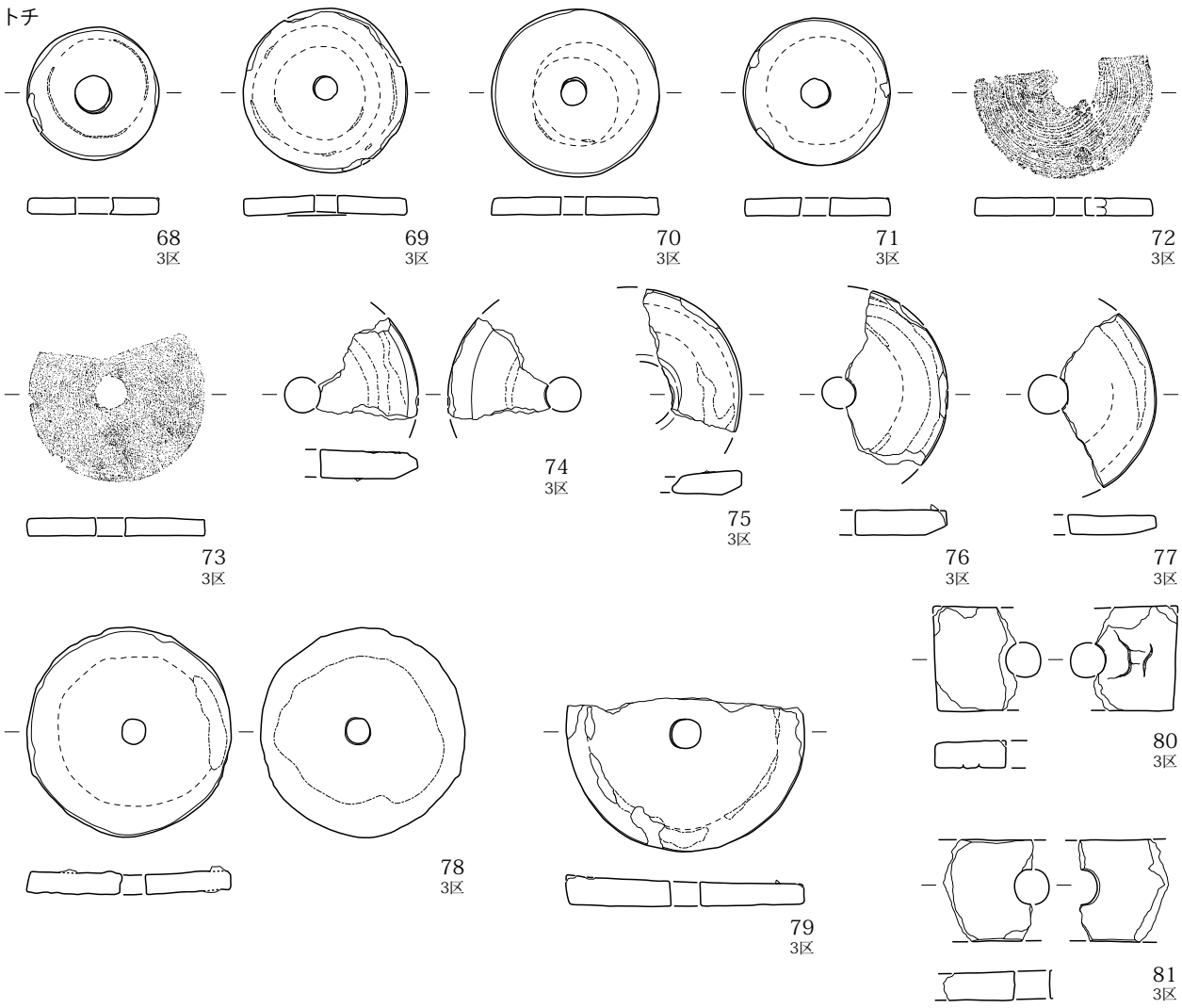
0 (1:3) 10cm

図版 186　長谷窯関連遺物 17　窯道具

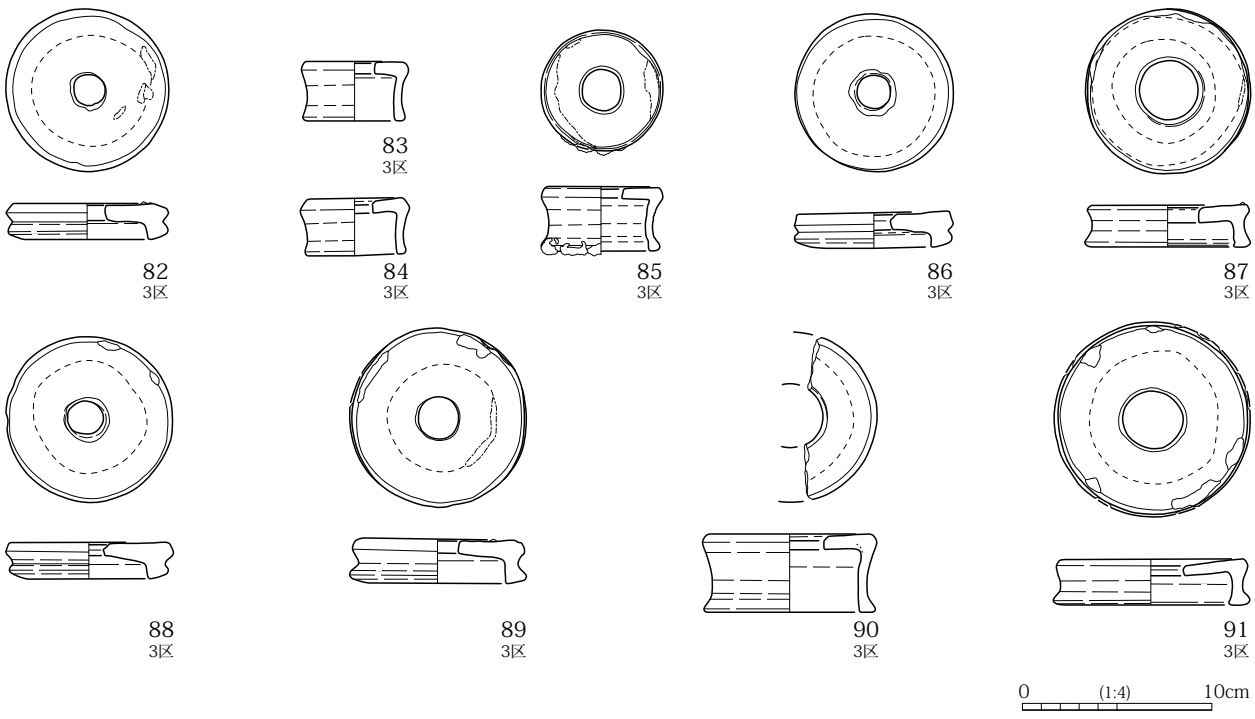
トチ



トチ

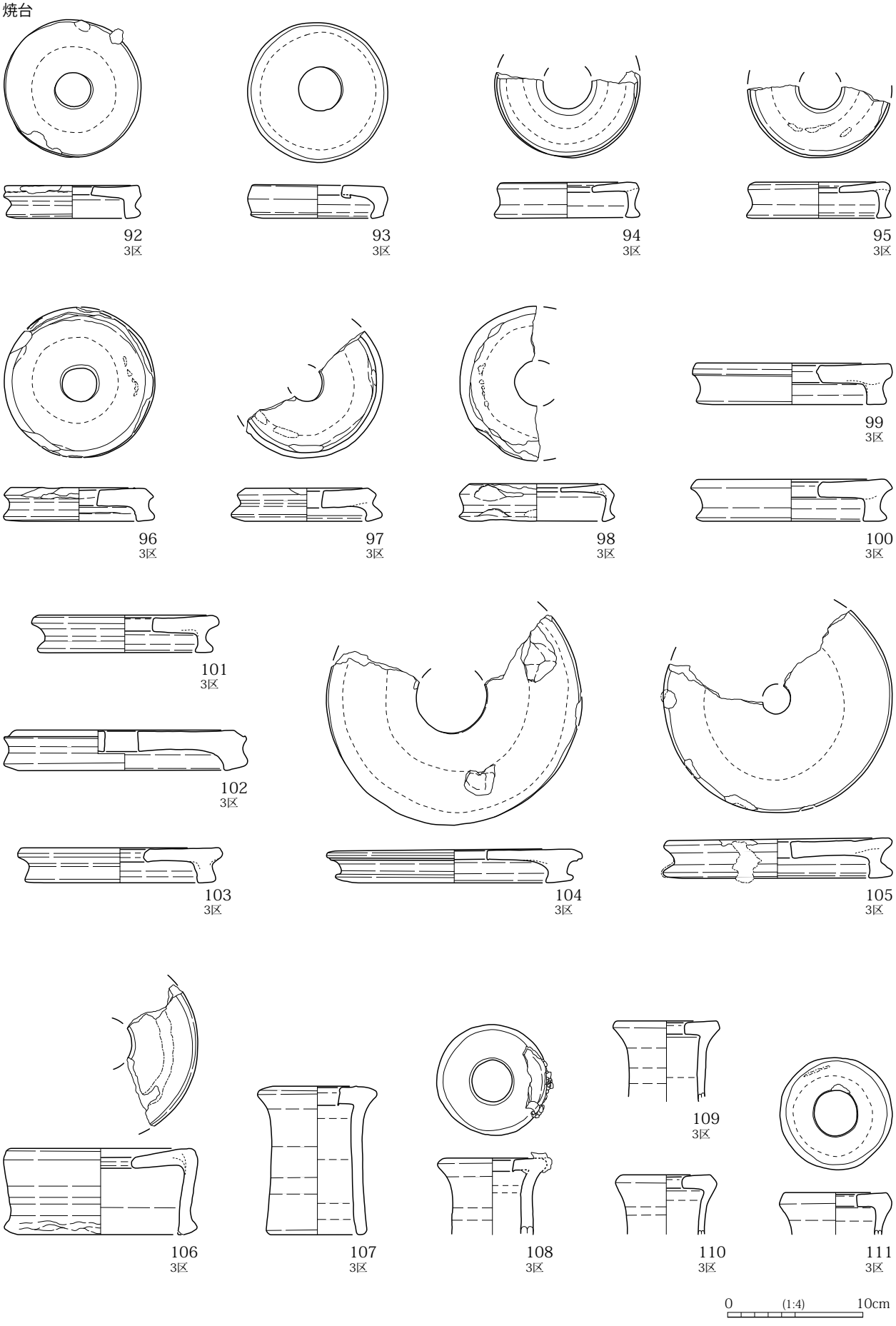

68
3区
69
3区
70
3区
71
3区
72
3区
73
3区
74
3区
75
3区
76
3区
77
3区
78
3区
79
3区
80
3区
81
3区

焼台

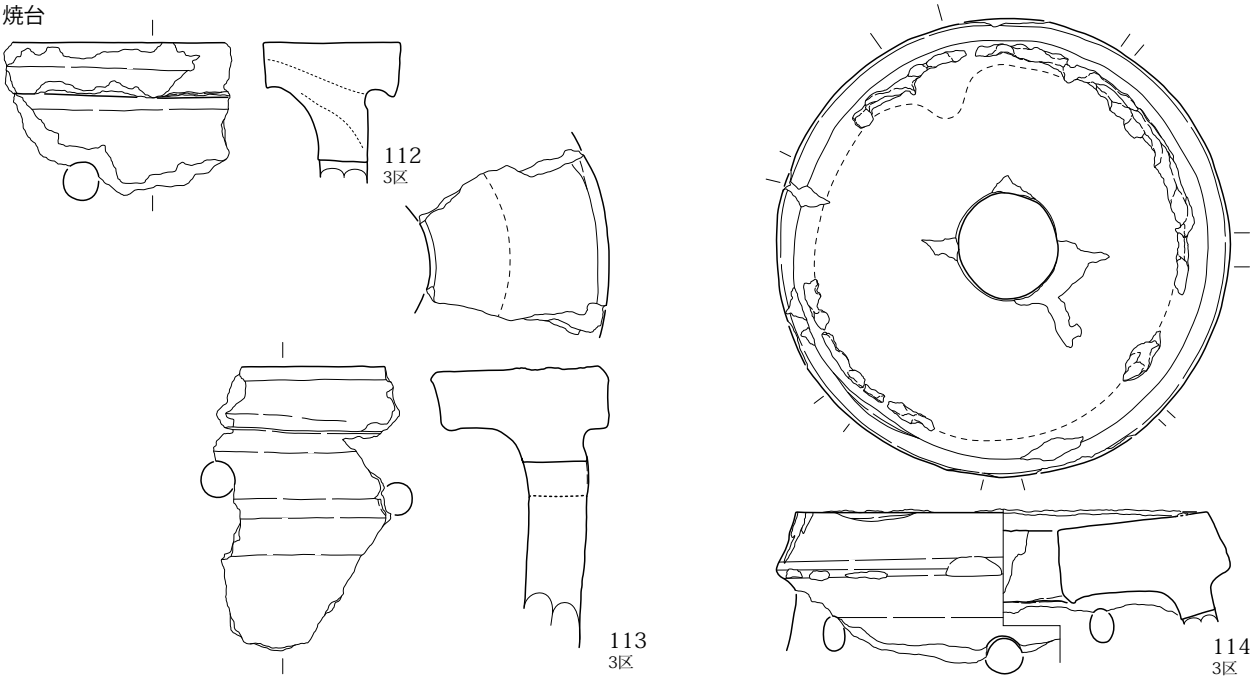

82
3区
83
3区
84
3区
85
3区
86
3区
87
3区
88
3区
89
3区
90
3区
91
3区
0
(1:4)
10cm

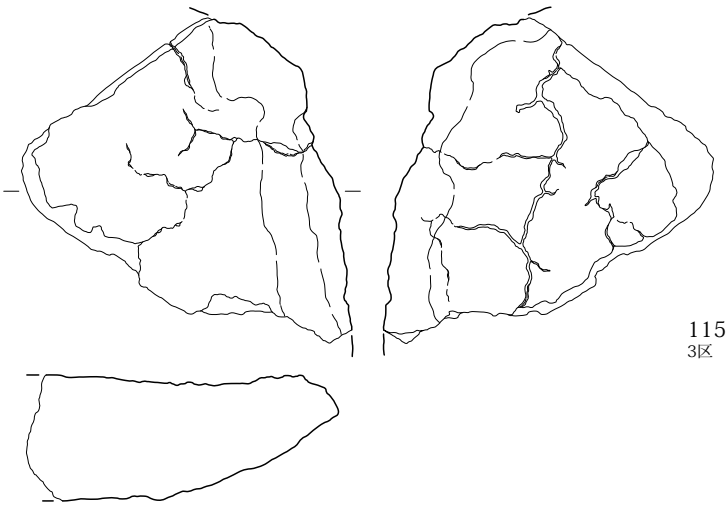
図版 188　長谷窯関連遺物 19　窯道具

焼台

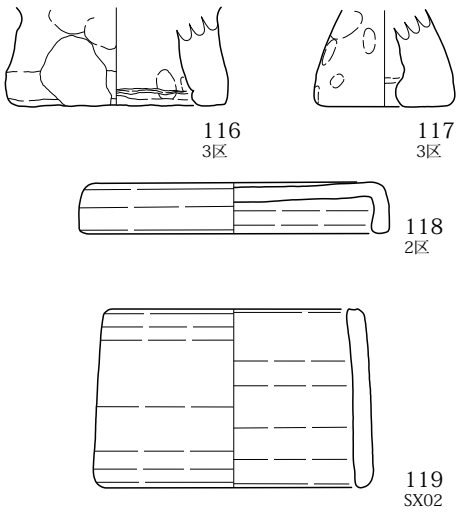


焼台

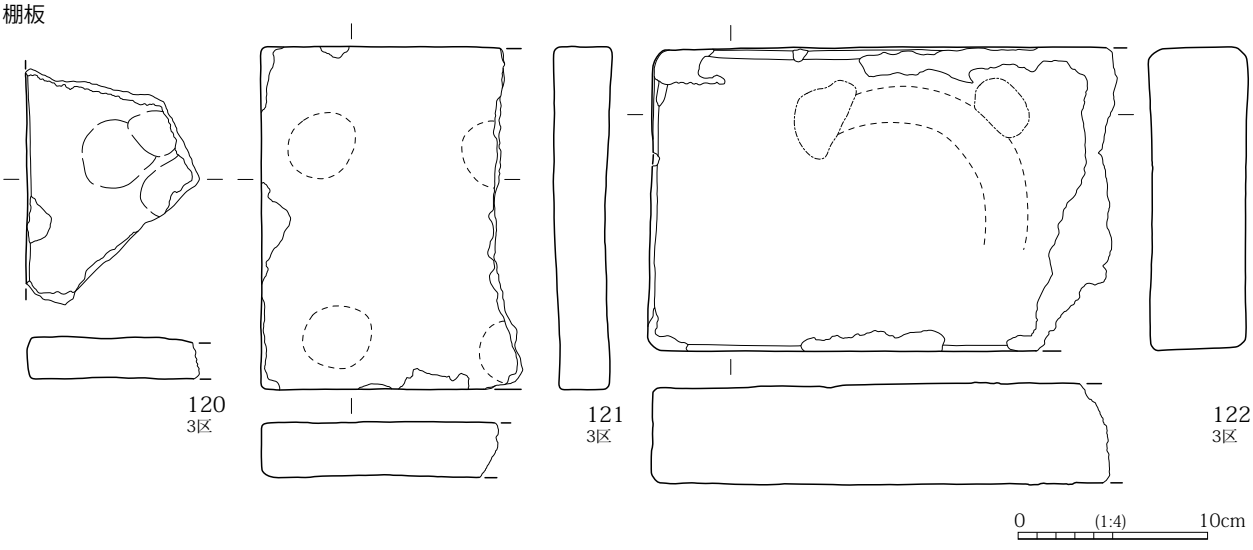

112
3区
113
3区
114
3区


115
3区

不明窯道具

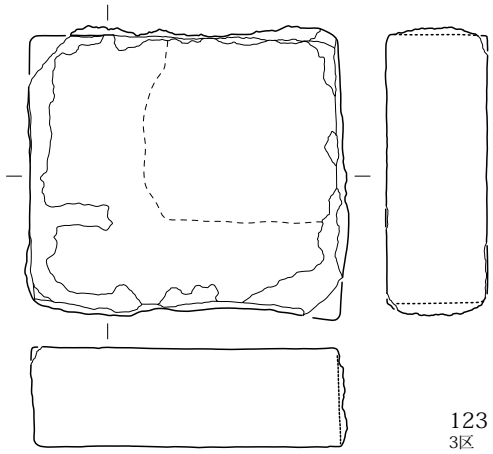

116
3区
117
3区
118
2区
119
SX02

棚板

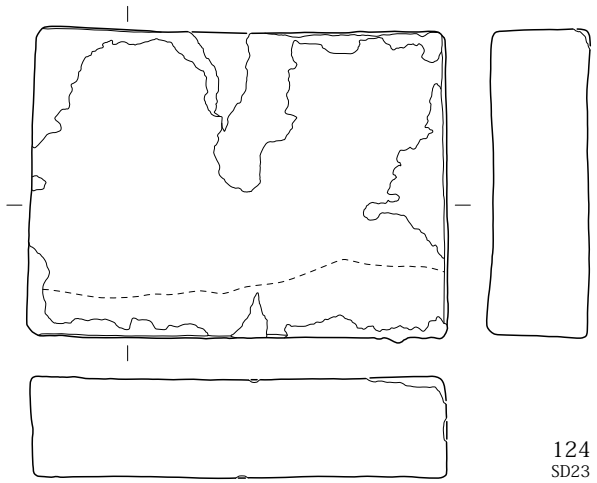

120
3区
121
3区
122
3区
0
(1:4)
10cm

図版 190　長谷窯関連遺物 21　窯道具

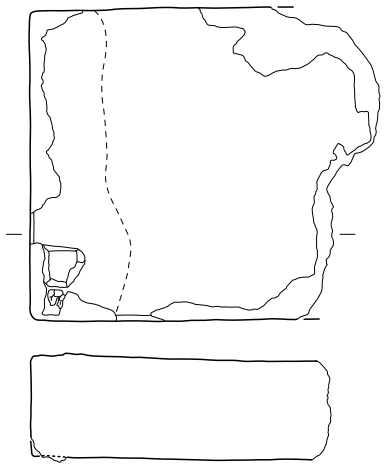
燻瓦



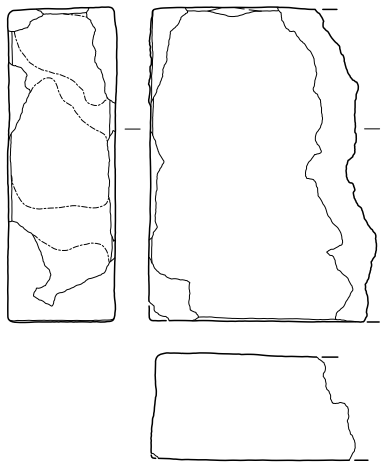
123
3区



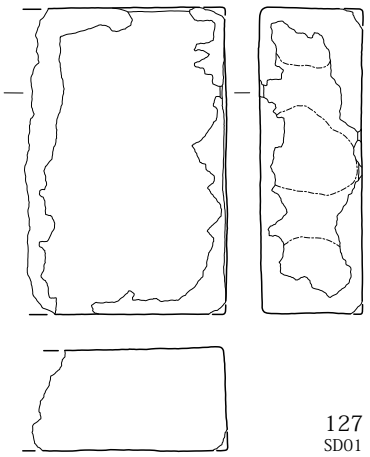
124
SD23



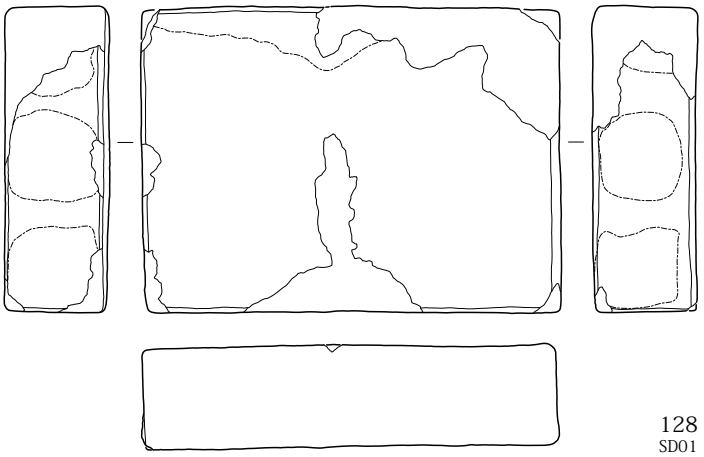
125
3区



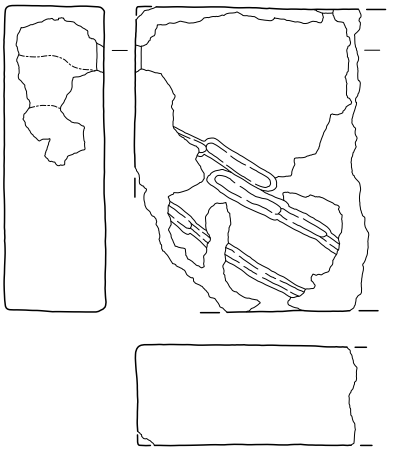
126
SD01



127
SD01

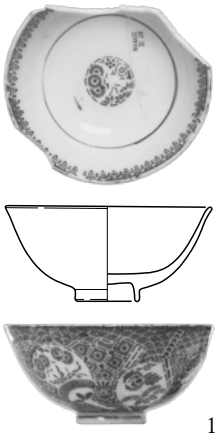


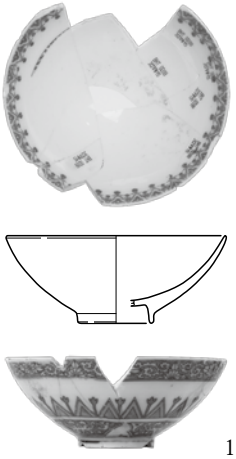
128
SD01

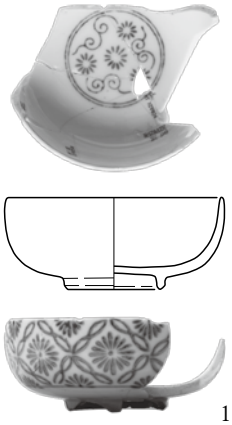


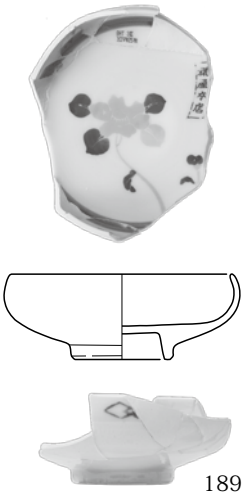
129
SD01

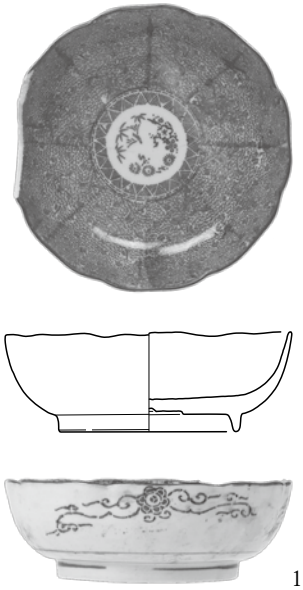
0　(1:4)　10cm

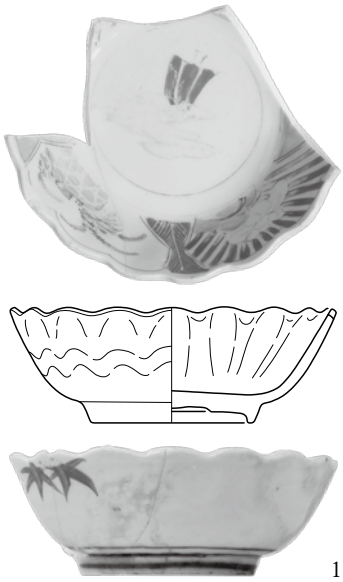

186
3区

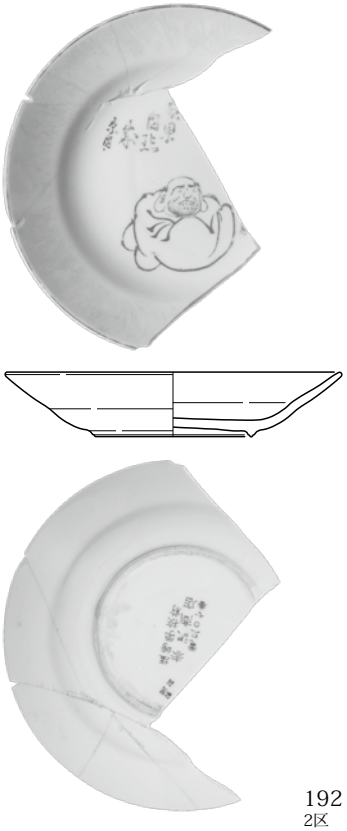

187
3区


188
3区

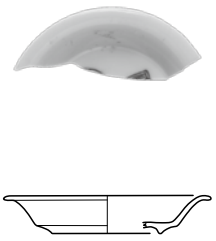

189
3区

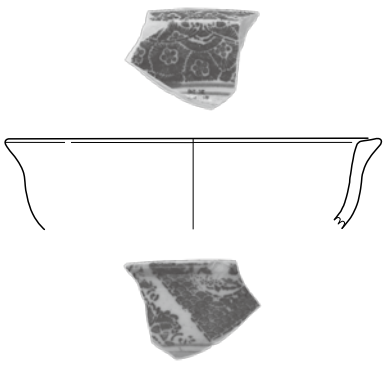

190
3区


191
2区


192
2区

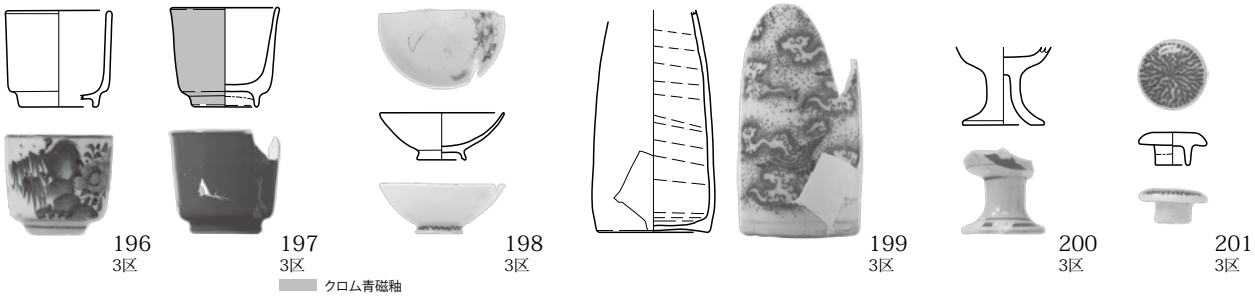
193
3区

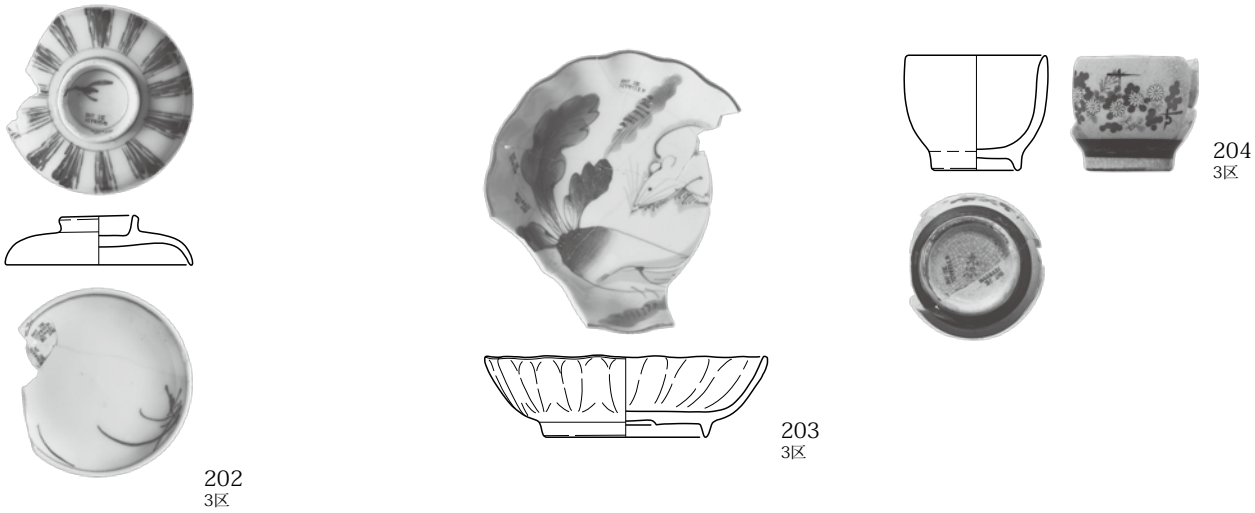

194
3区

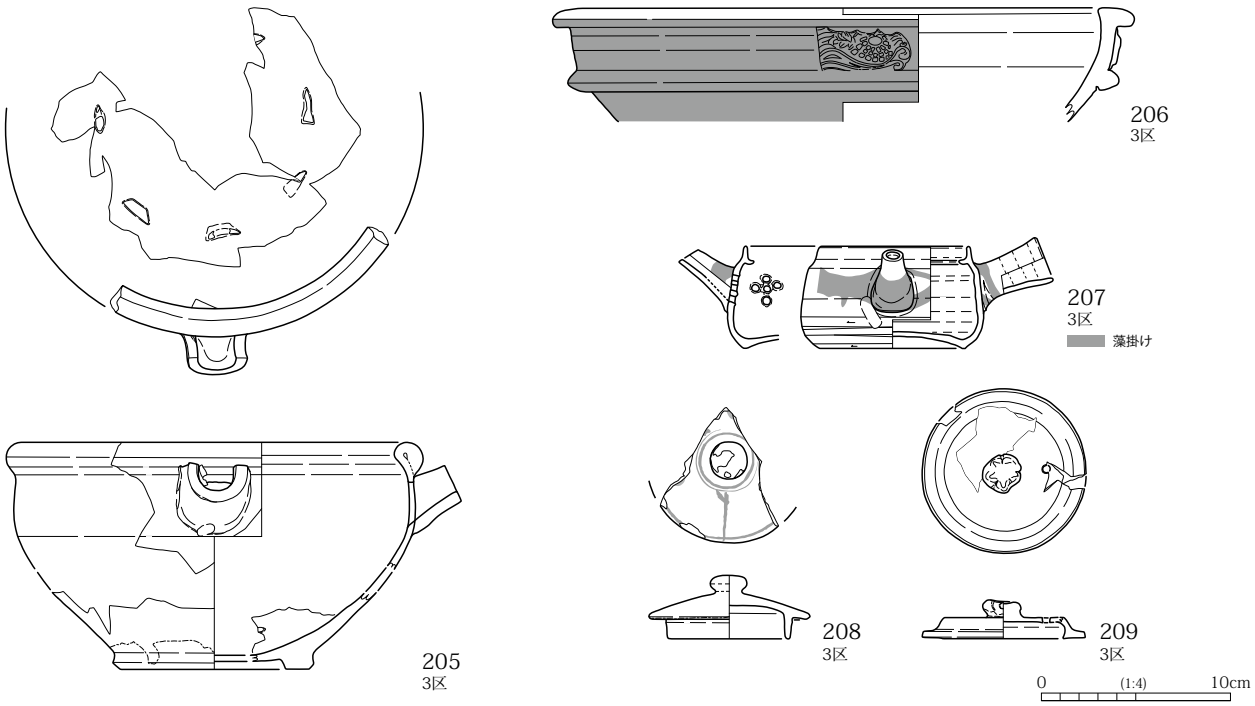

195
3区

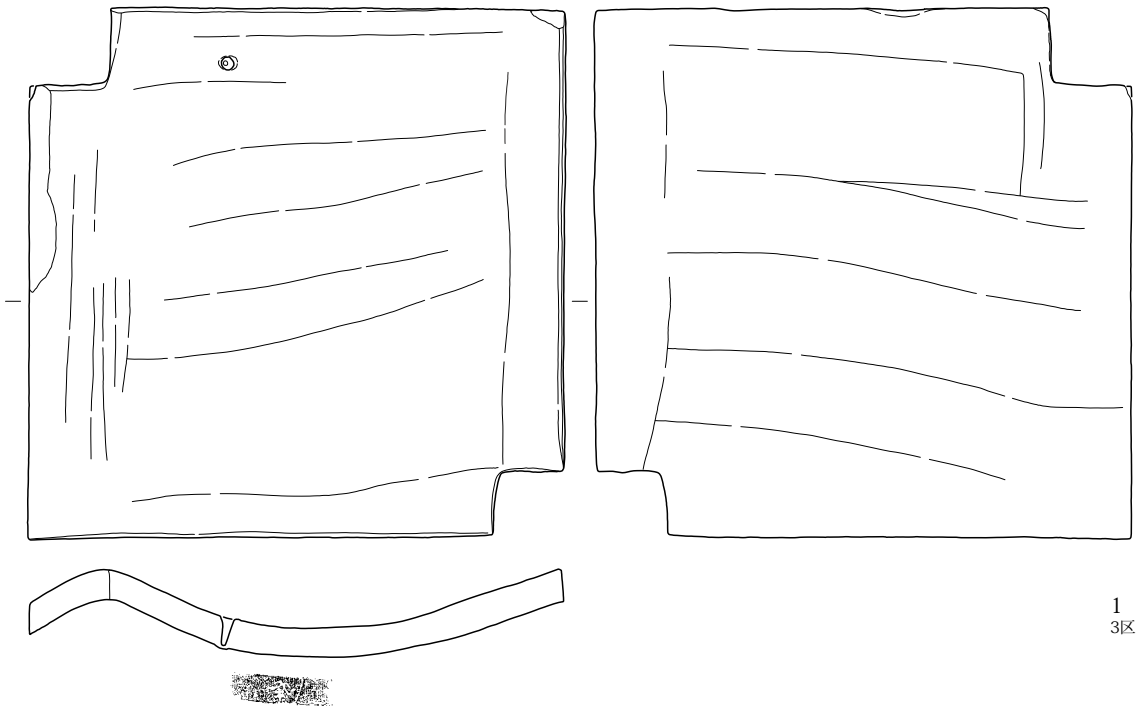
0　(1:4)　10cm

図版 192　近代の磁器２、陶器

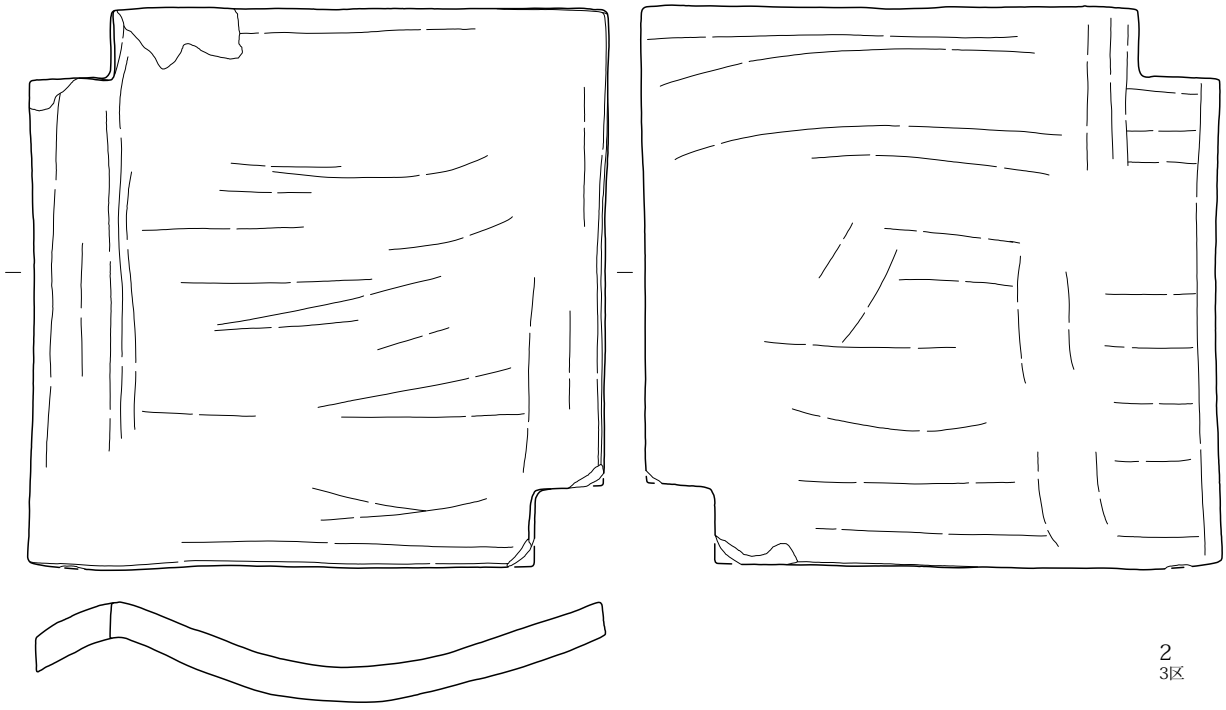








1
3区

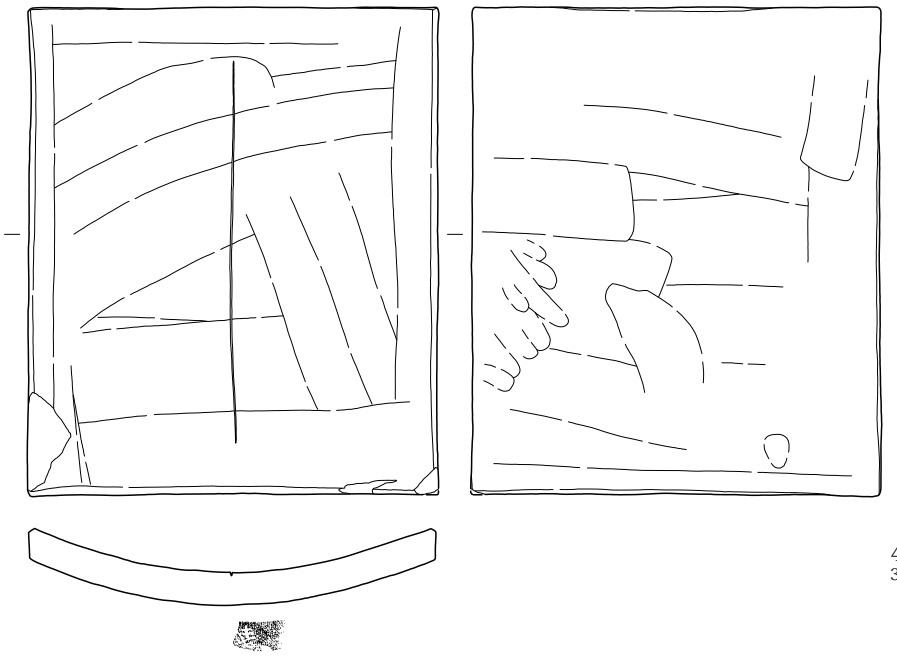


2
3区

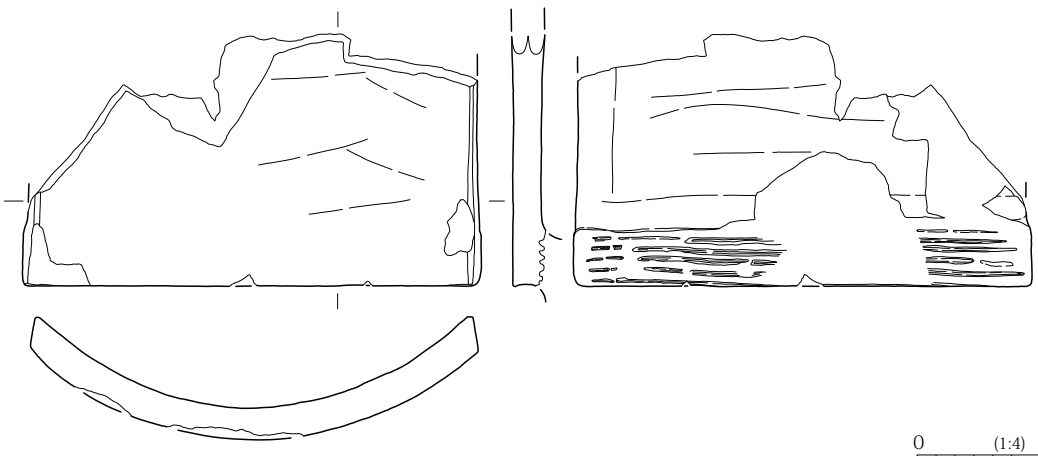
0　(1:4)　10cm

図版 194　近代の瓦２

3
3区

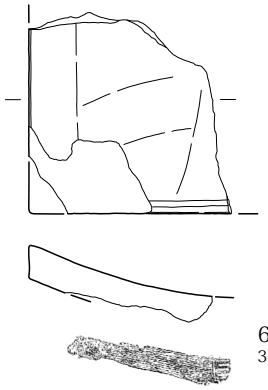


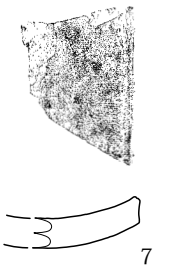
4
3区

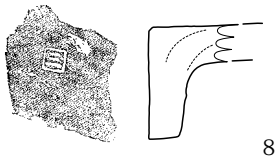


5
3区

0　(1:4)　10cm

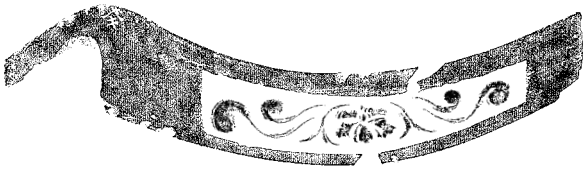

6
3区

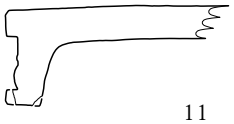

7
3区

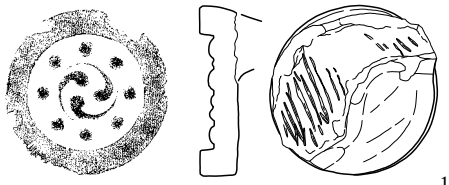

8
3区

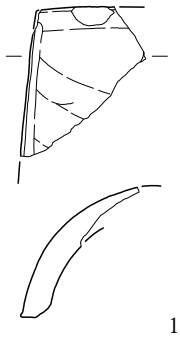
9
3区

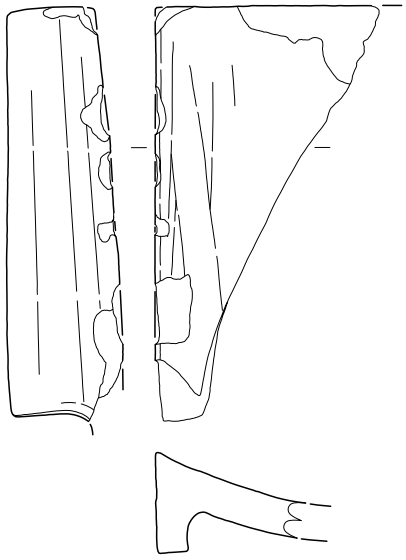
10
3区

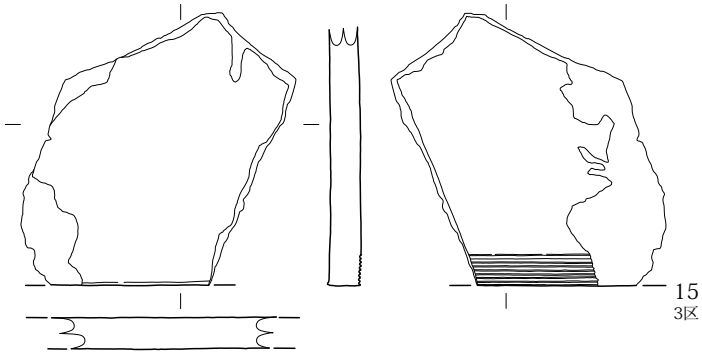



11
SK112


12
3区


13
3区

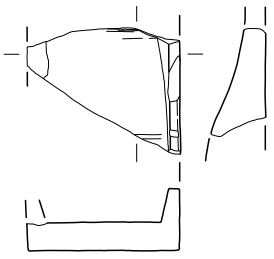

14
3区


15
3区

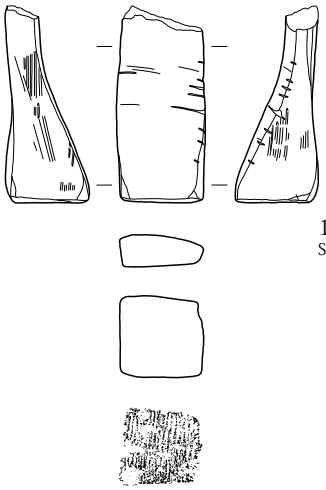
0　(1:4)　10cm

図版 196　近代の石器・石製品

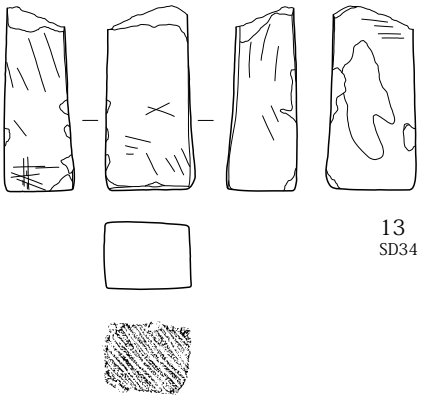
硯



10
3区

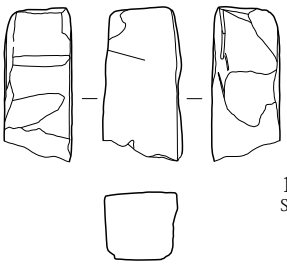


12
SK226

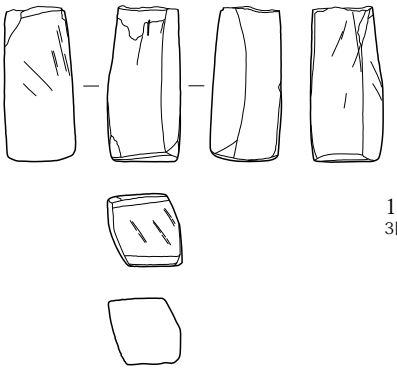


13
SD34

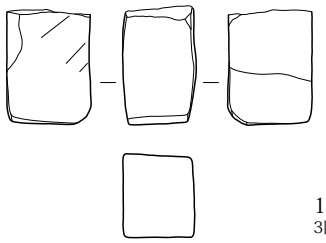
砥石



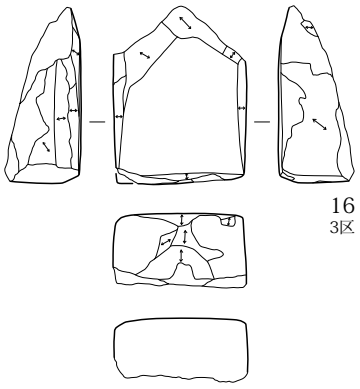
11
SK43



14
3区



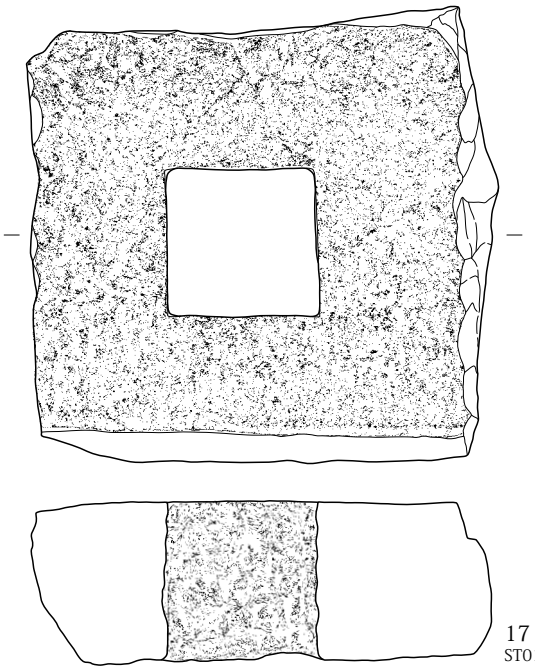
15
3区



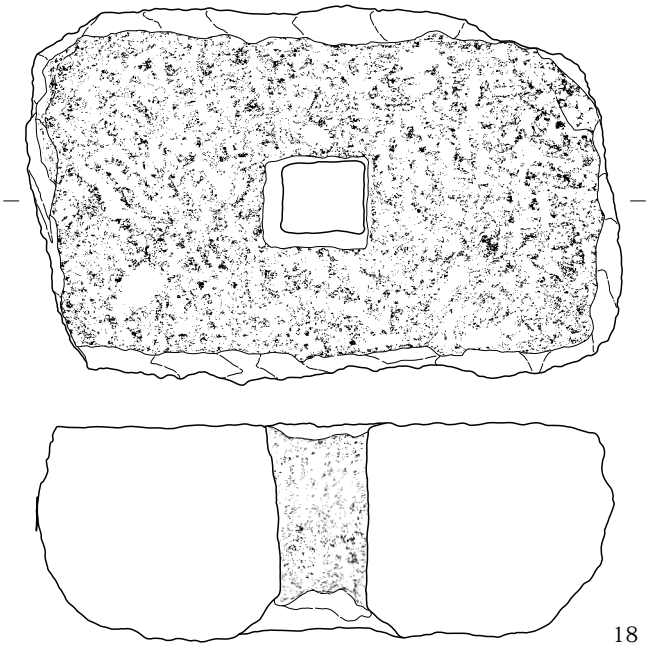
16
3区

0　(1:3)　10cm

ロクロ台石



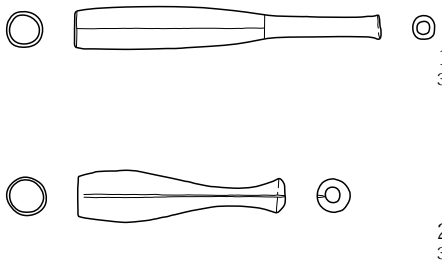
17
ST01



18
ST01

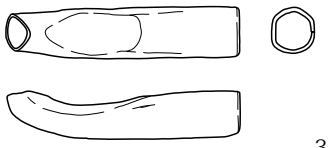
0　(1:8)　20cm

煙管



1
3区

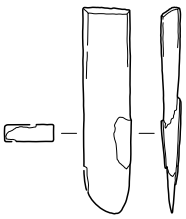
2
3区



3
3区

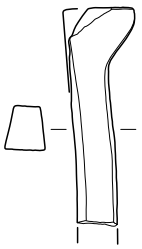
0 (1:2) 5cm

楔

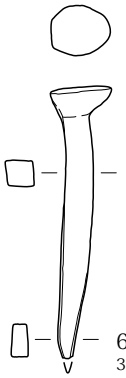


4
3区

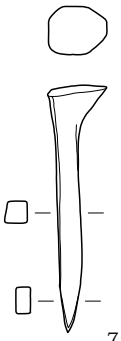
釘



5
3区



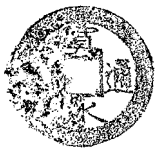
6
3区



7
3区

0 (1:3) 10cm

銭貨



8
3区

9
3区

10
2区

11
2区

12
2区

13
2区

14
3区

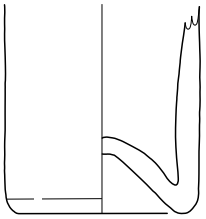
15
3区

16
3区

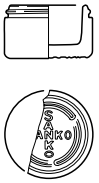
17
3区

0 (2:3) 5cm

ガラス製品

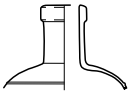


18
3区



19
3区

20
3区



21
3区

0 (1:3) 10cm

写 真 図 版

2 区第 4 調査面（東から）

3b・4a区微高地（南から）

3b・4a区第２水田検出状況（北が上）

5b区北壁（SC059）断面（南から）

7a区第３水田検出状況（南西から）

PL 2　石川条里遺跡　弥生時代の遺構２（水田跡・溝跡・土器集中）

7b・８区弥生時代の畦畔検出状況（南から）

SC061 芯材出土状況（南東から）

SC063 土器・芯材出土状況（南東から）

SC089 芯材出土状況（南から）

SC101 芯材出土状況（東から）

SC105 芯材出土状況（南東から）

SD187（西から）

SQ001 土器（１～３）出土状況（北から）

3b・4a区畦畔検出状況（東から）

SC038 土器（41・42）出土状況（南から）

SC043 検出状況（北から）

3b・4a区土器（47）出土状況（北から）

9 区杭列出土状況（南東から）

SX002 遺物出土状況（南から）

SX002 遺物出土状況アップ（南西から）

SD100 完掘状況（東から）

PL 4　石川条里遺跡　古代の遺構１（水田跡）

11c区第１水田検出状況（南西から）

SC058 芯材出土状況（東から）

SC058 土器（118）出土状況（東から）

SC093 検出状況（東から）

SC093 断面（東から）

SC093・095 芯材出土状況（南から）

SC094 検出状況（南から）

SC094 復旧痕跡断面（南東から）

SC095 断面（南から）

SC096 検出状況（北から）

SC097・098 検出状況（南から）

SC097 復旧痕跡断面（南東から）

SL030 ウシ足跡検出状況（東から）

PL 6　石川条里遺跡　古代の遺構３（水田跡）

12a区北・南　第１水田検出状況（北上方から）

SC081 芯材出土状況（西から）

SC081 復旧痕跡断面（南から）

SC086 芯材出土状況（東から）

SL016 足跡完掘状況（南から）

長谷鶴前遺跡群 1 区第 5 調査面（南西から）

長谷鶴前遺跡群 2 区第 5 調査面（北東から）

SC04 芯材出土状況（北から）

SC04 断面（南西から）

SC04 田下駄(98）出土状況（北から）

SC04 建築部材(130）出土状況（南から）

SC11・14 芯材出土状況（北から）

長谷 1 区 SC17・18・19 検出状況（北から）

PL 8　石川条里遺跡　古代の遺構５（土坑・溝跡）

SK356 検出状況（東から）

SD046 完掘状況（南から）

SD048 完掘状況（西から）

SD064 完掘状況（南から）

SD064・066 完掘状況（南西から）

SD071 全景（南東から）

SD083 完掘状況（北から）

SD095 完掘状況（北から）

SD096 完掘状況（南から）

SD104 完掘状況（南から）

SD105 完掘状況（東から）

SD127 全景（南から）

SD169・170・171・172 完掘状況（南西から）

SD174・175・176 完掘状況（東から）

SD177 完掘状況（北西から）

SD178 完掘状況（北東から）

PL 10　石川条里遺跡　中近世の遺構１（調査区・掘立柱建物跡）

１区第１調査面全景（北が上）

ST001 完掘状況（北が上）

ST001P4 礎板石出土状況（南から）

ST001P12 礎板石出土状況（南から）

ST001P18 礎板石出土状況（南から）

ST001P24 礎板石出土状況（南から）

ST002 完掘状況（上から）

ST004 完掘状況（東から）

ST005 完掘状況（東から）

ST006 完掘状況（東から）

PL 12　石川条里遺跡　中近世の遺構３（柵列・井戸跡）

SA001 完掘状況（西から）

SA002 完掘状況（北から）

SA003 完掘状況（北から）

SA004 完掘状況（東から）

SK002 断面（南から）

SK003 断面（南から）

SK004 上部掘下げ（西から）

SK005 断面（南から）

SK006 断面（南から）

SK007 断面（南西から）

SK009 断面（南から）

SK010 断面（南西から）

SK011 上部掘下げ（西から）

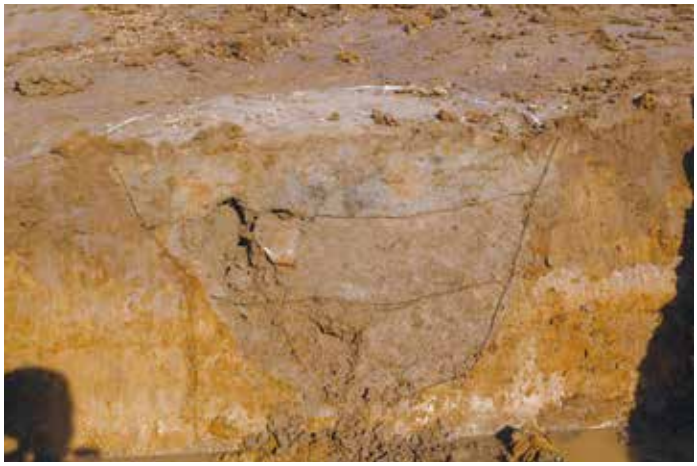
SK013 断面（東から）

SK014 断面（東から）

SK015 断面（東から）

PL 14　石川条里遺跡　中近世の遺構５（井戸跡）

SK016 上部掘下げ（東から）



SK017 断面（南から）

SK020 断面（南から）

SK021 断面（南から）

SK023 断面（西から）

SK062 完掘状況（北から）

SK074 断面（南から）

SK080 上部掘下げ（南から）

SK080 断面（南から）

SK094 完掘状況（東から）

SK191 断面（西から）

SK196 断面（南から）

SK197 上部掘下げ（南から）

SK198 断面（南から）

SK200 断面（南から）

SK257 完掘状況（南から）

PL 16　石川条里遺跡　中近世の遺構 7（井戸跡）

SK270 礫出土状況（西から）

SK276 断面（南から）

SK277 断面（南から）

SK278 断面（南から）

SK279 断面（西から）

SK507 完掘状況（南から）

SK508 断面（南から）

SK509 完掘状況（西から）

SK510 完掘状況（南から）

SK521 断面・518 完掘状況（南から）

SK519 断面（南から）

SK520・533 完掘状況（北から）

SK522 完掘状況（南から）

SK523 断面（南から）

SK525 断面（東から）

SK535・536・542 完掘状況（南から）

PL 18　石川条里遺跡　中近世の遺構 9（井戸跡）

SK552 断面（南から）

SK553 完掘状況（南西から）

SK554 断面（南西から）

SK556 完掘状況（南から）

SK558 完掘状況（南から）

SK560 完掘状況（東から）

SK561 完掘状況（東から）

SK721 上部掘下げ（南東から）

SK901 断面（南東から）

SK902 断面（西から）

SK903 断面（東から）

SK904 断面（東から）

SK905 断面（南から）

SK906 断面（東から）

SK907 断面（東から）

SK908 断面（北東から）

PL 20　石川条里遺跡　中近世の遺構11（土坑）

SK001 完掘状況（南から）

SK012 断面（南から）

SK041 断面（南から）

SK337・343 断面（南から）

SK337・343 完掘状況（南から）

SK369 断面（南から）

SK370 完掘状況（西から）

SK604 完掘状況（西から）

SM001 人骨出土状況（南から）

SM002 断面（東から）

SM002 人骨出土状況（南から）

SM003 歯出土状況（南東から）

SM003 完掘状況（南から）

SM004 人骨出土状況（南から）

SM005 検出状況（北から）

SM005 数珠玉（11～15）出土状況（西から）

PL 22　石川条里遺跡　中近世の遺構13（溝跡）

SD001～008・011・015 完掘状況（南から）

SD006・010・011・014 完掘状況（南から）

SD009 ウマ骨出土状況（東から）

SD009 完掘状況（東から）

SD012・013 完掘状況（南から）

SD016 礫検出状況（南から）

SD019 礫検出状況（東から）

SD020 完掘状況（南から）

SD021・022 完掘状況（西から）

SD023 完掘状況（東から）

SD023・024・025 完掘状況（東から）

SD026・028・032 完掘状況（南から）

SD033・037・038・039 完掘状況（北から）

SD034・035・036・042 完掘状況（北から）

SD050 完掘状況（東から）

SD057・058 完掘状況（北西から）

PL 24　石川条里遺跡　中近世の遺構15（溝跡）

SD057・058・061・063 完掘状況（西から）

SD061 完掘状況（南から）

SD068 完掘状況（南から）

SD070 完掘状況（西から）

SD080・088 完掘状況（東から）

SD081 完掘状況（南から）

SD085・087 完掘状況（東から）

SD089・090 完掘状況（西から）

SD125・126・135 完掘状況（西から）

SD128・129 完掘状況（南から）

SD137 完掘状況（南から）

SD138 完掘状況（北から）

SD139・140 完掘状況（南から）

SD146・147・148 完掘状況（東から）

SD151 完掘状況（南東から）

SD152 完掘状況（東から）

PL 26　石川条里遺跡　中近世の遺構17（溝跡）

SD153 完掘状況（南から）

SD154 完掘状況（南から）

SD167・168 完掘状況（南から）

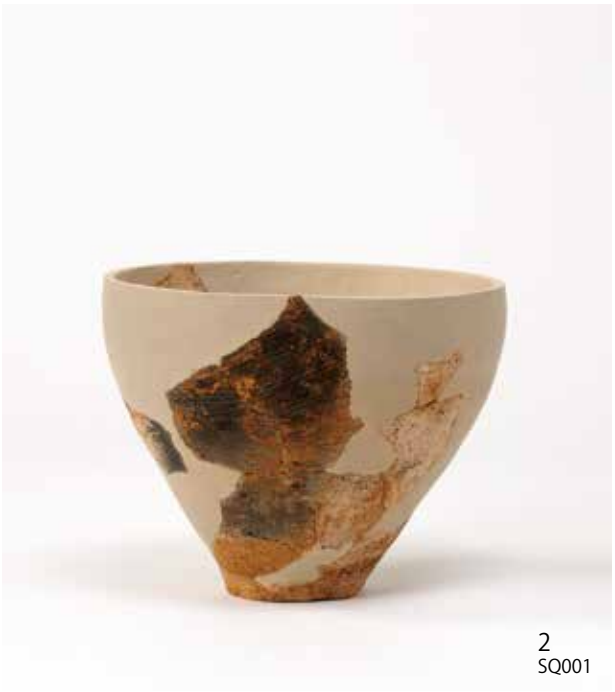
SD183 完掘状況（北東から）

SD188・189 完掘状況（南から）

SD191・192 完掘状況（南から）

SD191 鍬形兜前立出土状況（西から）

SD191 断面（東から）


2
SQ001

3
SQ001

5
SC063

11
SC089

10
SC089

6
SC063

13
SC115
17
5b区
18
5b区
19
5b区
20
5b区
22
2区
23
SD187

27
SX002
28
SX002
34
1区西

30
SD086

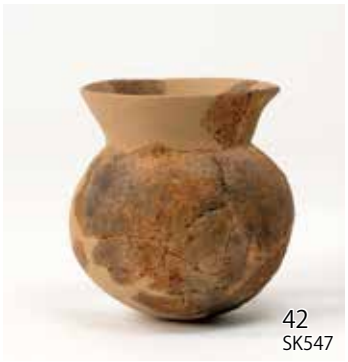
31
1区

32
1区

PL 28　石川条里遺跡　古墳時代の土器

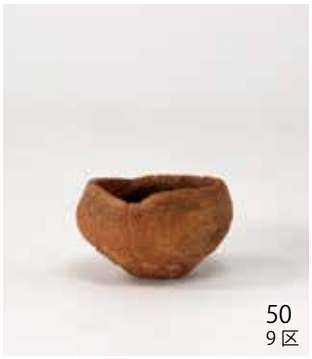
38
1区

41
SC038


42
SK547

43
SK549

46
3b・4a区


50
9 区

56
SX002

57
SX002

59
SX002

60
SX002

62
SX002

65
SX002

67
SX002

68
SX002

73
5b区

89
SC090

41
SC038

69
SX002

91
SD100

92
SD100

100
SD009

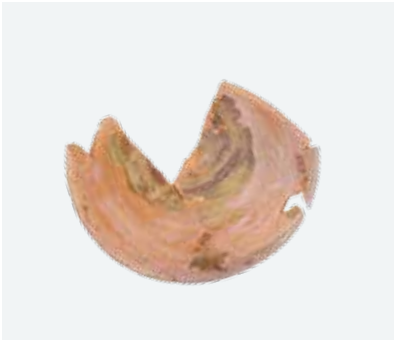
102
SD066

104
SD142

105
SD169

110
SD169

111
SD169


113
SD170

118
SC058

126
9区

127
9区

97
SD085

112
SD169

124
7b・8区

PL 30　石川条里遺跡　古代の土器２

129
9区

139
長谷2区

138
長谷1区

145
長谷SC11

165
SD064

186
1区

201
SL010

202
2区

204
5a区

146
長谷SC11

153
SD032

154
SD032

185
1区北

188
2区

192
4b区

194
5a区

198
7a区

227
SK091

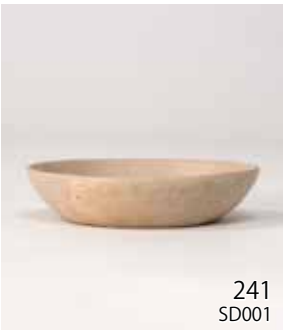
228
SK094

239
SK1103

269
SD065

270
SD065

271
SD065


241
SD001

207
ST001

208
ST005

209
SK001

210
SK001

212
SK003

214
SK012

215
SK012

216
SK012

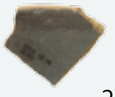
217
SK017

218
SK020

220
SK041

222
SK080

223
SK062


224
SK062

225
SK062

229
SK094

230
SK155

231
SK177

233
SK188

234
SK196

235
SK246

236
SK249

237
SK270

240
SD001

243
SD001

244
SD001

245
SD001

246
SD002

247
SD002

249
SD009

250
SD009

251
SD009

252
SD009

253
SD191

254
SD192

255
SD192
256
SD020
257
SD023
258
SD023
259
SD023
260
SD023
261
SD023
262
SD023
263
SD023
264
SD023
265
SD023
266
SD023
267
SD033
268
SD056
272
SD065
274
SD125
275
SD125
276
SD126
277
1区
278
1区
281
SD023
282
SD023
283
SD023
284
SD023
285
SD023
286
SD023
287
SD023
288
SD023
289
SD023
291
SD024
292
SD024
294
SD024
296
SD024
297
SD024
298
SD033
299
SD034
300
SD034
301
SD037
302
SD037

306
SD057
307
SD057
309
SD058a
310
SD058a
312
SD058a
315
SD063a
317
SD085
318
SD086
320
SD092
321
SD125
325
SD167
330
SL001
331
SL008
332
SD193
333
1区西
334
2区
337
12c区北
338
12c区北
339
12c区北

304
SD056
308
SD058a
311
SD058a
313
SD058a

319
SD086
323
SD129
324
SD148
326
SD188

293
SD024
316
SD063a
327
SD188
328
SD188

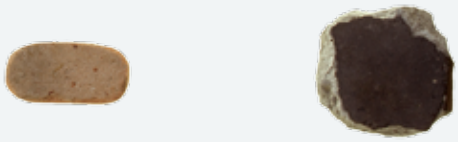
PL 34　石川条里遺跡　土製品、玉類

土錘

1 SK062　2 SK177　3 SD001　4 SD001　5 SD002　6 SD088

7 1区　8 1区　9 SK356　10 SK356　11 SK356

土製円盤

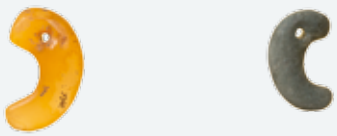


13 SD086　14 SD188

ミニチュア土器

12 SX002

勾玉



1 SD100　2 9区

管玉

3 SD100　4 1区　5 4b区　6 9区　7 9区　8 9区

小玉
数珠玉

9 5b区　10 9区　11 SM005　12 SM005　13 SM005　14 SM005　15 SM005

打製石鏃
打製石斧

1
1区

削器

2
1区

3
SD023

4
SC101

5
SX002

打製大型刃器

6
SD126

7
SX002

8
1区

9
1区

10
3b･4a区

11
3b･4a区

12
7b･8 区

磨製太型蛤刃石斧
磨製定角式石斧
環状石斧未成品
未成石器

13
1区

14
SD043

15
SD100

16
SD023

PL 36　石川条里遺跡　石器 2

凹石
敲石

17
SK017

18
SD009

19
SD001

20
SD061

21
SD061

22
SD154

23
SC105

24
9区

台石

25
SC044

26
SK001

石皿
砥石

28
SC105

29
SK001

30
SK002

31
SD147

32
1区

33
1区

34
SD190

石擂鉢
石臼

35
SD129

36
SD190

磨石
石錘
碁石

27
SD061

37
SK356

38
4b区

PL 38　石川条里遺跡　金属製品 1

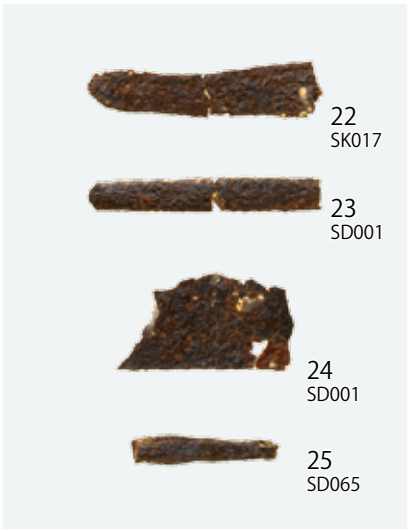
釘

締金具

鉄鏃

刀子

刃物



鉄鍋

鍬形兜前立

不明銅製品

銭貨

30
SK001

31
SK004

32
SK005

33
SK041

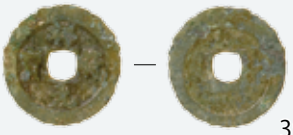
34
SK041

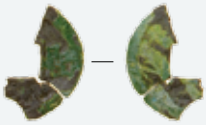
35
SK055

36
SK269

37
SK273

38
SD009


39
SD080


40
SM005

41
1区

42
SD086

43
SD087

44
SD188

45
12c区

46
12c区

47
4b区

48
SK011

49
SL013

PL 40　石川条里遺跡　弥生時代の木製品 1

農具
板材

1
SC063

2
SC089

3
SC089

建築部材
角材

4
SC089

5
SC101

157
SC089

杭

6
SC061・062

7
SC061・062

8
SC061

9
SC061

杭

10
SC069
11
SC062
12
SC062
13
SC062
14
SC062・065
15
SC063
16
SC063
17
SC065
18
SC067
19
SC067
158
SC063

PL 42　石川条里遺跡　古墳時代の木製品 1

農具

20
9区SX002

21
9区SX002

159
9区

建築部材

22
9区SX002

23
9区SX002

24
9区SX002

杭

25
9区

26
9区

27
9区

28
9区

29
9区

30
9区

31
9区

32
9区

33
9区

34
9区

35
9区

36
9区

PL 44　石川条里遺跡　古墳時代の木製品３

杭

37
9区

38
9区

39
9区

40
9区

41
9区

42
9区

43
9区

44
9区

杭

45
9区

46
9区

47
9区

48
9区

49
9区

50
9区

51
9区

52
9区

PL 46　石川条里遺跡　古墳時代の木製品５

杭

53
9区

54
9区

55
9区

56
9区

57
9区

58
9区

59
9区

60
9区

杭

61
9区

62
9区

63
9区

64
9区

65
9区

PL 48　石川条里遺跡　古墳時代の木製品 7

杭

66
9区

67
9区

68
9区

69
9区

杭

70
9区

71
9区

PL 50　石川条里遺跡　古墳時代の木製品 9

杭

160
9区

161
9区

162
9区

163
9区

164
9区

165
9区

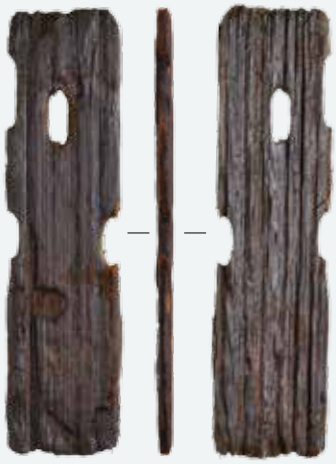
166
9区

167
9区

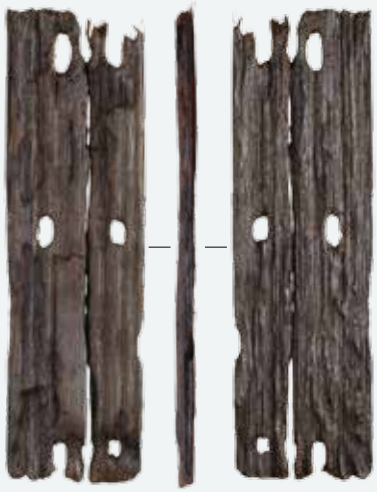
田下駄

72
SC058

73
SC058



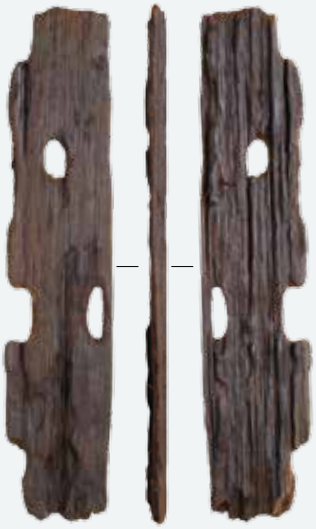
74
SC058



75
SC058

76
SC058

77
SC058

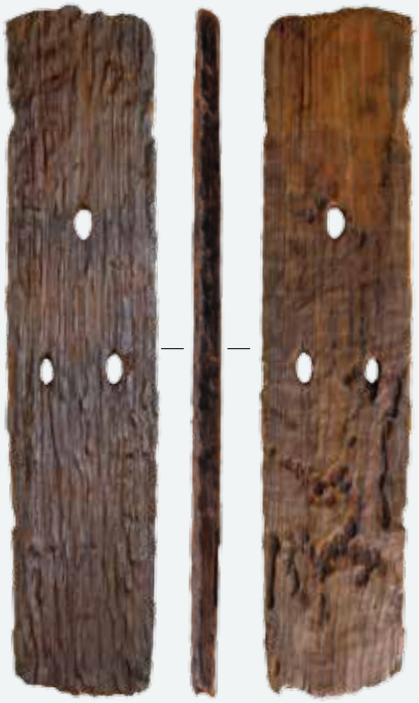


78
SC058

79
SC058

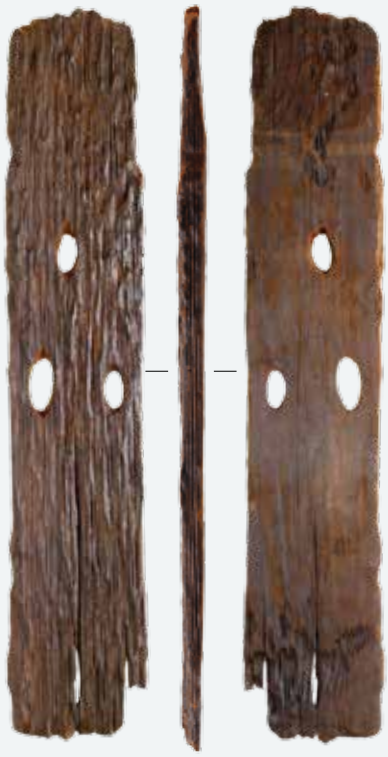
田下駄

80
SC058



83
SC058

81
SC058



84
SC058

82
SC058

田下駄

85
SC081

86
SC081

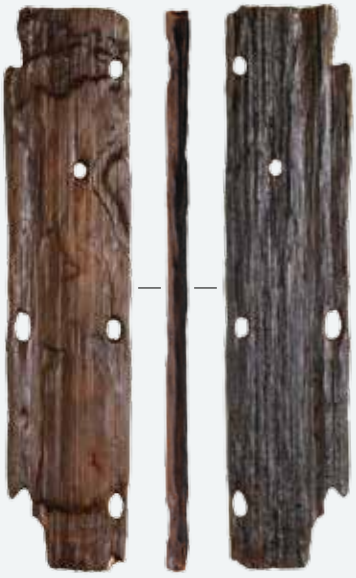
87
SC081

88
SC086

89
SC092

90
SC092

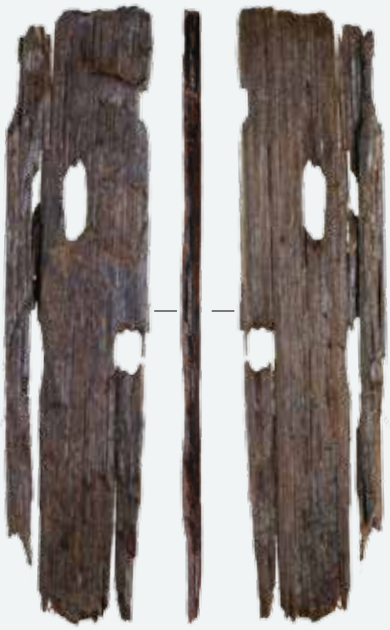
田下駄



91
SC092

92
SC092

93
SC092



94
11b区

95
長谷SC04

96
長谷SC04

田下駄

97
長谷SC04

98
長谷SC04

99
長谷SC04

100
長谷SC04

101
長谷SC11

102
長谷SC11

田下駄

103
長谷SC11

104
長谷SC11

105
長谷SC15

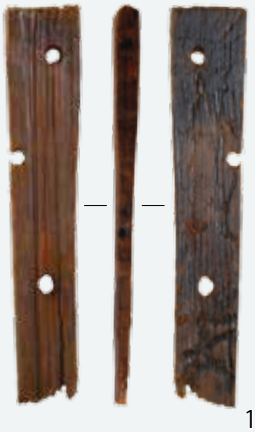
106
長谷1区

109
SC058

110
SC081

107
長谷1区

108
SC058



111
SC086

建築部材
その他

112
SC058

113
SC058

114
11b区

115
11b区

116
11b区

168
SC058

117
SC081

118
SC081

119
SC092

120
11b区

建築部材
その他

121
SC058

122
SC058

123
SC058

124
SC081

125
SC081

126
SC092

127
SC092

建築部材
その他

128
SC092

129
SC093

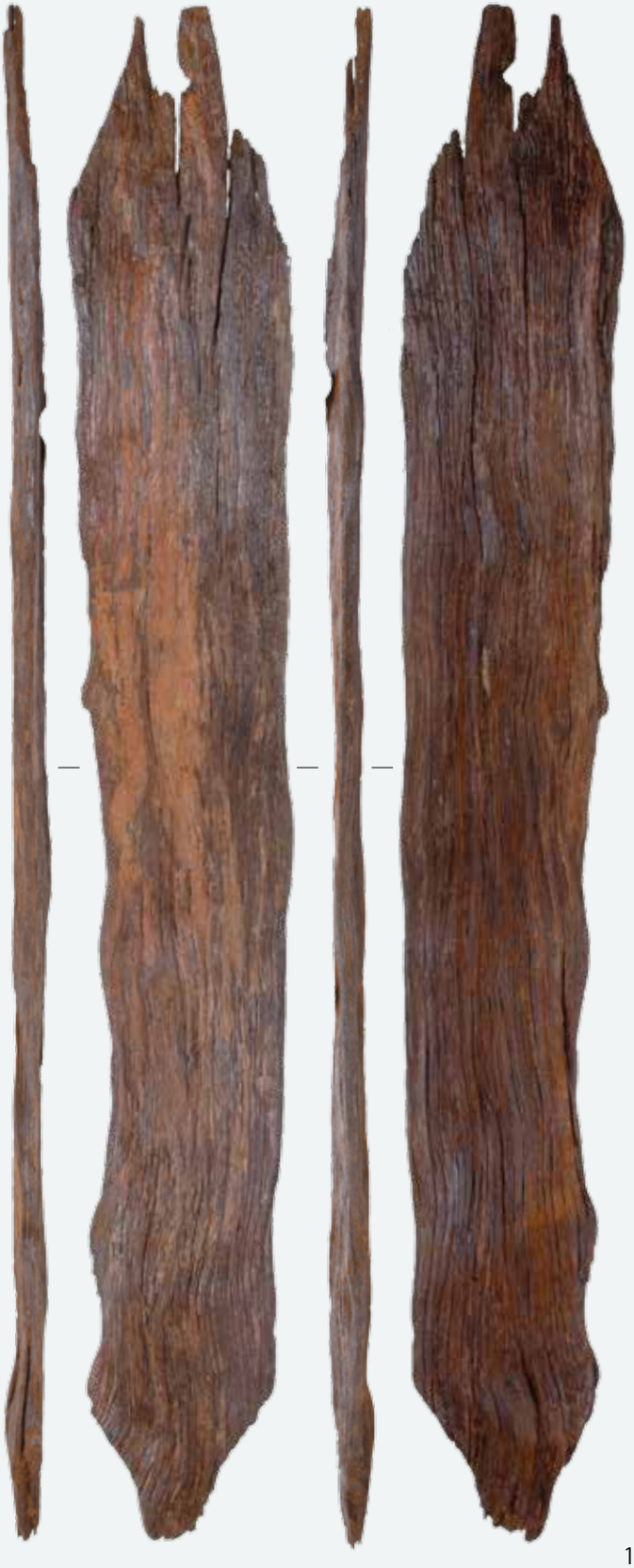
130
長谷SC04

建築部材
その他

131
長谷SC04

132
長谷SC11

建築部材
その他



133
長谷SC11

建築部材
その他

134
長谷SC11

PL 64　石川条里遺跡　平安時代の木製品14

建築部材
その他

135
SC058

136
SC058

137
SC058

138
SC058

139
SC081

140
SC081

不明木製品
杭

142
SC058

143
SC086

144
SC100

145
長谷SC04

杭
曲物

146
長谷SC04

147
SC058

148
SC058

149
長谷SC04

150
長谷SC11

曲物

151
長谷SC11

152
長谷1区

154
SK279

156
SD189

漆器椀
杭

153
SK279

155
SD189

169
SK279

SC03 検出状況（南から）

SC03 足跡検出状況（南西から）

SC20 全景（南から）

SD59 完掘（南から）

SH06 検出状況（南西から）

SD42 完掘状況（西から）

SD47 完掘状況（南から）

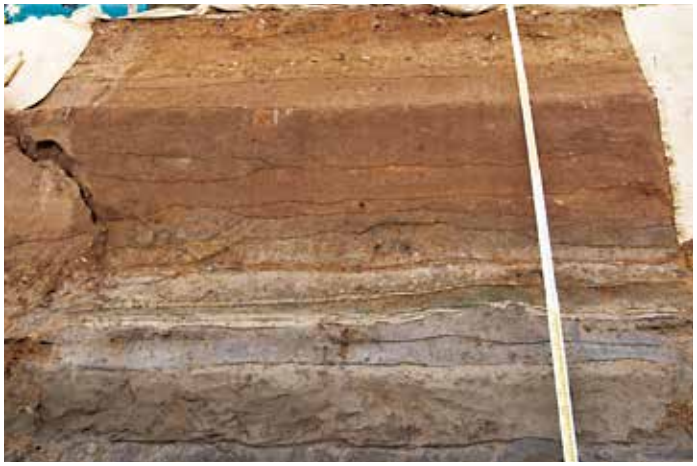
SD55 完掘状況（北から）

PL 68　長谷鶴前遺跡群　第３調査面の遺構１（居館掘跡・道路跡）

SD40 完掘状況（南から）

SC01 全景（南から）

SC01 断面（南から）



2 区南壁道路跡断面（北から）

SD11 完掘状況（北から）

SD12・13・14 完掘状況（南から）

SD24 完掘状況（南から）

SD25ab・32ab 完掘状況（北から）

SD29 完掘状況（西から）

SD30ab・32ab・34 完掘状況（南から）

PL 70　長谷鶴前遺跡群　第３調査面の遺構３（溝跡・掘立柱建物跡・井戸跡）

SD33・36 完掘状況（南から）

SD41ab 調査状況（東から）

SD45・57 完掘状況（北から）

SD48・49 完掘状況（北から）

SD50・51・52 完掘状況（北から）

ST03 検出状況（南から）

SK170 上部掘下げ状況（西から）

SK171 上部断面（西から）

SK214 完掘状況（西から）

SK215 曲物（５）・籠状製品（17）出土状況（南東から）

SK244 完掘状況（南から）

SK247 礫検出状況（南から）

SK254 掘下げ状況（南から）

SH05 礫検出状況（南から）

SH05 底面根太木出土状況（西から）

SH04 検出状況（南から）

PL 72　長谷鶴前遺跡群　第１・２調査面の遺構１（調査区・工房跡）

2 区第 2 調査面・3 区第 1 調査面全景（西が上）

ST01 工房跡（北から）

ST01P1 ロクロ台石（17）掘下げ状況（南から）

ST01P2 ロクロ台石（18）掘下げ状況（南から）

SK111 甕（77）出土状況（南から）

SK112 甕（76）出土状況（南から）

SK114 甕（71）出土状況（東から）

SD01 調査状況（南東から）

SD26 検出状況（西から）

SD43・44 完掘状況（東から）

PL 74　長谷鶴前遺跡群　中世の土器、土製品、石器・石製品

土器、土製品

1
SD45

2
SD59

3
3区

25
SK202

5
2区

9
SD40

11
SH04

13
SD40

14
SH05

15
SD36

16
SD32a

17
SD34

18
2区

19
SD24

凹石

1
3区

2
SD50

3
SD24

凹石
五輪塔未成品
加工石

4
2区

5
SD40

7
2区

6
SD40

8
SD40

三方

1-1
SD40

1-2

1-3

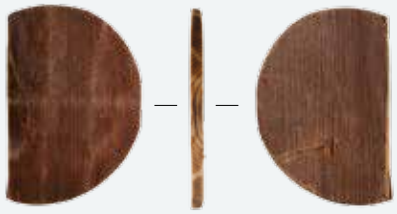
三方

1-4

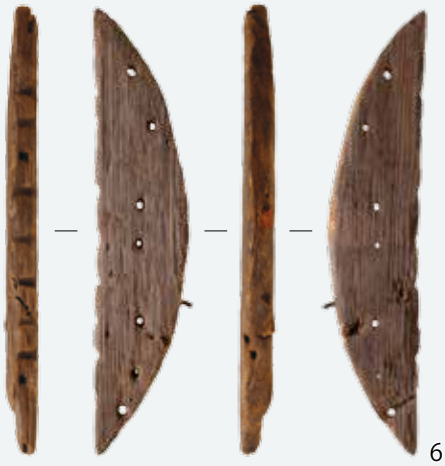
田下駄
曲物

2
SD59

4
SD40



5
SK215



6
SD40

7
SD59

不明木製品

9
SD59
10
SD59
11
SD59
12
SD59
13
SD59
14
SD59
15
SD59
16
SD40

漆器

18
SD41a
S=1/1

PL 78　長谷鶴前遺跡群　長谷窯関連遺物 1

陶器（素焼き）

25
3区

27
3区

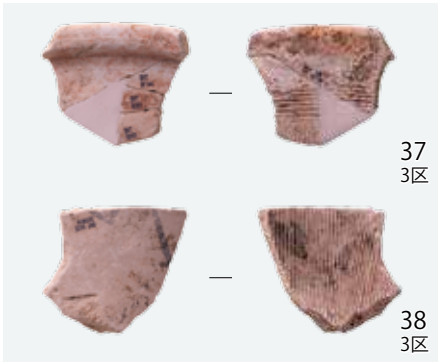
29
3区

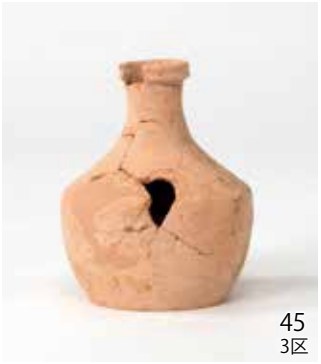
32
3区

43
3区

44
3区

33
3区


37
3区
38
3区


45
3区

35
3区

36
3区

46
3区
S=1/2

40
3区

47
3区
S=1/2

48
3区
S=1/2

50
3区

41
3区

54
3区

陶器（素焼き）

55
3区

73
3区
S=1/8

78
3区

79
3区

64
3区

69
3区

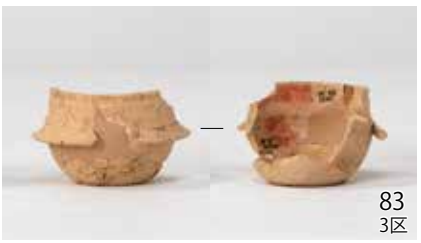
75
3区

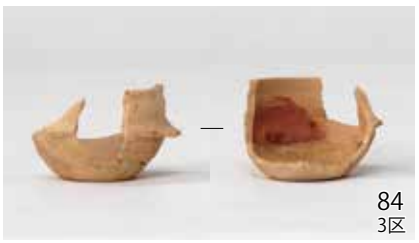
71
SK114

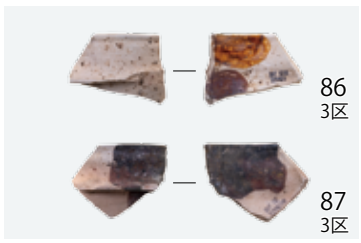
61
3区

81
3区

82
3区


83
3区


84
3区


86
3区

87
3区

PL 80　長谷鶴前遺跡群　長谷窯関連遺物３

陶器（素焼き）

72
3区

77
SK111

80
2区

99
3区

104
3区

103
3区

91
3区

94
3区

114
3区

115
3区

118
SX02

119
3区

121
3区

124
3区

108
3区

109
3区

110
3区

陶器（本焼き）

126
3区

127
SK109

133
3区

131
3区

134
3区

128
3区

135
3区

132
3区

136
3区

137
3区

重ね焼き融着品

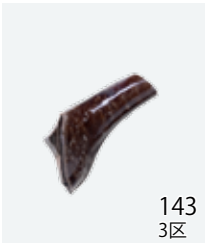
138
3区

139
3区

140
3区

141
3区

142
3区


143
3区

145
3区

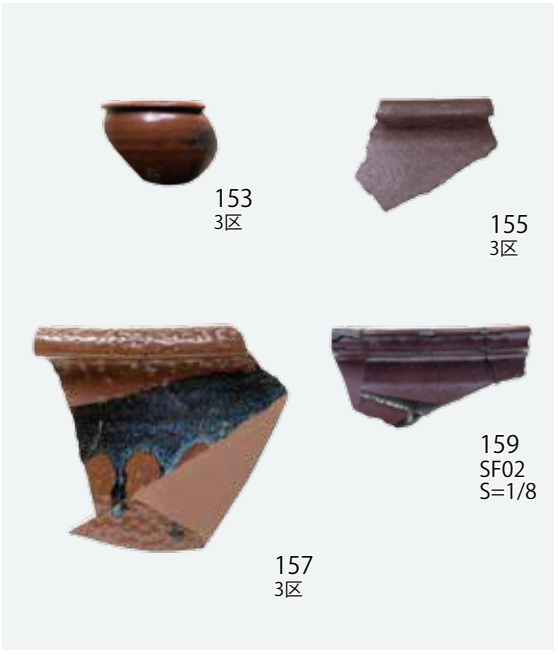
146
3区

147
SK114

148
3区

149
SD23

154
3区


153
3区

155
3区

159
SF02
S=1/8

157
3区

PL 82　長谷鶴前遺跡群　長谷窯関連遺物５

陶器（本焼き）

158
3区

161
3区

160
3区

165
SX02

163
3区

164
SD23

166
3区

167
SX08

168
3区

169
SK58

171
3区

170
3区

173
3区

175
3区

178
SX27

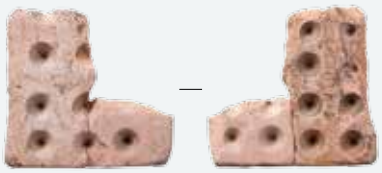
181
3区

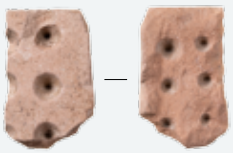
182
3区

183
3区

184
3区

素焼き製品
型


1
SK41


2
3区

3
3区

4
3区

5
3区

6
3区

7
3区

8
3区

9
3区

10
3区

11
3区

12
3区

13
3区

14
3区

小物

15
3区

16
SK41

17
3区

18
3区

19
3区

20
3区

21
3区

22
3区

23
3区

24
SK111

25
3区

26
3区

PL 84　長谷鶴前遺跡群　長谷窯関連遺物 7

素焼き製品
小物

28
3区

29
3区

30
3区

不明土製品

31
3区

32
3区

33
3区

34
3区

35
SK58

火鉢
コンロ

40
3区

42
3区

44
3区

土管

45
3区

47
3区

48
3区

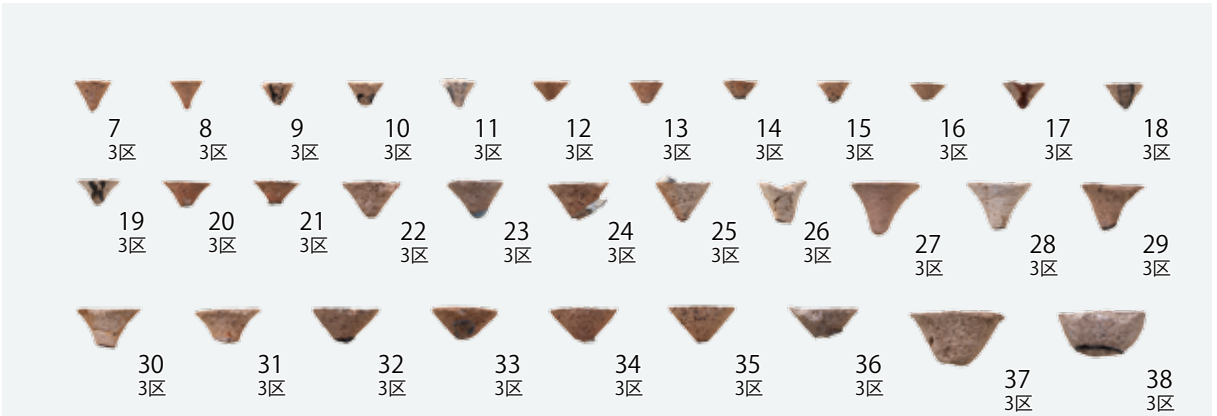
49
ST01

コンロ

43
3区

窯道具
匣鉢

円錐ピン



トチ

PL 86　長谷鶴前遺跡群　長谷窯関連遺物 9

窯道具
焼台

不明窯道具

棚板
煉瓦

ロクロ台石

17
ST01

18
ST01

瓦

1
3区

3
3区

1拡大

3拡大

8
3区

9
3区

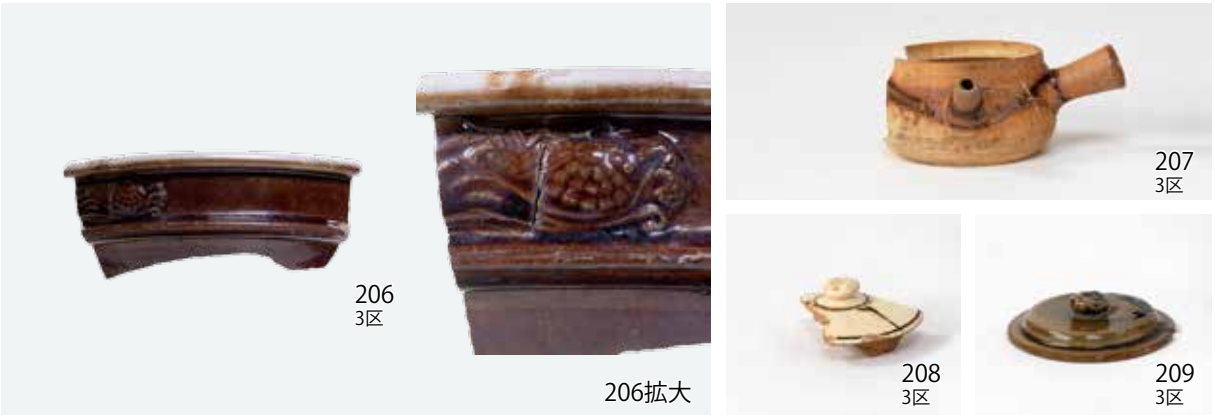
10
3区

12
3区

14
3区

11
SK112

PL 88　長谷鶴前遺跡群　石器・石製品、近代の陶器、金属製品



報告書抄録

ふりがな	いしかわじょうりいせき　はせつるさきいせきぐん
書名	石川条里遺跡　長谷鶴前遺跡群
副書名	一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4　―長野市内 1―
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	134
著作者名	市川隆之、西香子、馬場伸一郎、柴田洋孝、風間真起子
編集機関	一般財団法人　長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒 388-8007　長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4　TEL 026-293-5926
発行年月日	2024 年 3 月 15 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いしかわじょうりいせき 石川条里遺跡	ながのけん 長野県 ながのし 長野市 しののいしおざき 篠ノ井塩崎 2248 他	20201	Ｅ－１	36° 32′ 40″ （世界測地系）	138° 06′ 23″ （世界測地系）	20160401～20171222 20170401～20171208 20180401～20181226 20190401～20191129 20210401～20210608	16,000 5,500 13,500 12,100 400 合計 47,500	一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）改築工事に伴う事前調査
はせつるさきいせきぐん 長谷鶴前遺跡群	ながのけん 長野県 ながのし 長野市 しののいしおざき 篠ノ井塩崎 26 他	20201	Ｅ－３	36° 32′ 27″ （世界測地系）	138° 06′ 05″ （世界測地系）	20170401～20210608 20180401～20181214	7,200 1,300 合計　8,500	

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石川条里遺跡	生産遺跡	弥生 ～平安	水田跡（水田３、畦畔 114）、 溝跡 40、土坑 23、遺物集中２	弥生土器、土師器、須恵器、 黒色土器、灰釉陶器、土製品、 石器、石製品、玉類、木製品	畦畔の芯材として木製品が多数出土。
	集落跡	中世 ～近世	掘立柱建物跡６、柵列５、 畦畔１、居館堀跡１、溝跡 145、 土坑 454、墓跡５	土器、陶器、磁器、石製品、 鉄製品、銅製品、木製品	中世の堀跡から、鍬形兜前立が出土。
要約	本遺跡は千曲川下流域の長野盆地南端に広がる後背湿地に立地する。弥生時代中期後半の水田跡に始まり、洪水砂に被覆された平安時代前期の条里型水田跡等、近世に至るまでの重層的な水田跡を検出した。中世前期の居住遺構と後期の館跡、近世の用水跡等を確認し、遺跡の変遷が明らかとなった。				
長谷鶴前遺跡群	生産遺跡	平安	水田跡（水田１、畦畔 16）	土器、木製品	畦畔の芯材として木製品が多数出土。
	集落跡	中世 ～近世	道路跡２、畦畔２、居館堀跡２、 溝跡 40、土坑 282、集石遺構２	土器、陶器、磁器、土製品、 石器、石製品、木製品	中世の堀跡から、三方が出土。
	生産遺跡	近世末 ～近代	工房跡１、暗渠２、溝跡９、 土坑 107	陶器（原窯生産品）、窯道具、 陶器（他窯）、磁器、瓦、 ガラス製品、銭貨、金属製品	地元窯の長谷焼と窯道具が多数出土。
要約	本遺跡は石川条里遺跡西側に接する山麓の崖錐地形に立地する。石川条里遺跡から続く平安時代前期の水田跡、中世後期の館跡、中世～近世の道路跡、近代窯業工房跡等の多様な遺構を確認した。				

令和６（2024）年３月 15 日発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　134

石川条里遺跡　長谷鶴前遺跡群

一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４

―長野市内１―

発行者　国土交通省　関東地方整備局
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007　長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
Tel 026-293-5926　Fax 026-293-8157
E-Mail　maibun@naganobunka.or.jp
印刷者　信毎書籍印刷株式会社
〒381-0037　長野県長野市西和田 1-30-3
Tel 026-243-2105　Fax 026-243-3494